

【完結】 IS—Destiny—  
運命の翼を持つ少年

バイル77

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

女性にしか扱うことのできない兵器「インフィニット・ストラトス」。

既存兵器を圧倒する力を持つISが持つ特性から、女尊男卑の風潮が広まってしまった。

——そんな世界を生き抜く、紅い瞳を持つ少年がいた。

この小説のシンは高山版+ガンダム無双2+スパロボシリーズのシンを足して10で割った感じになってます。(ナツテイルトイイナ1)

オリジナルMS及びISが登場しますので、その点をご留意ください。

逆襲のシン・アスカスレに影響を受けているため、似てるなーと思うような設定があつたりなかつたりしますのでご注意ください。

また、ご都合主義なんかもあつたりしますので、ご了承ください。

#### 追記①

過去編の掲載位置を変更しました。

ご注意ください。

#### 追記②

本編は【逆襲のシン・アスカ①】より開始します。

#### 追記③

設定資料を追加しました、物語の進行度で更新して行きます。

#### 追記④

この作品はP i x i vにも投稿しています。

# 目次

## 設定資料

主人公設定

ヒロイン設定

キャラ設定①

キャラ設定②

キャラ設定③

## 過去編

過去編① 拒絶

過去編② 出会い

過去編③ それぞれの思惑

過去編④ ネオ・ザフト

過去編⑤ 蘇る翼

96 81 59 46 37 31 23 18 13 1

過去編⑥ 最後の力

過去編⑦ 失敗作VS成功作

過去編⑧ 友として

過去編⑨ 戦女神VS大天使

過去編⑩ C・E

183 168 152 137 117

## 本編

PROLOGUE 逆襲のシン・アス

カ① 209

PROLOGUE 逆襲のシン・アス

カ② 226

PROLOGUE 逆襲のシン・アス

カ③ 238

PROLOGUE 逆襲のシン・アス

PHASE 6	IS 学園	335	PHASE 15	歩くような速さで	499
322	INTERMISSION	家族	PHASE 14	見えた真実	478
PHASE 5	空に奔る衝撃	308	On		457
PHASE 4	日出と共に	297	PHASE 13	Life Goes	436
282	PHASE 3	2人目の搭乗者	PHASE 12	中国からの使者	
266	PHASE 2	変わり行く日常	PHASE 11	憧れと決着	426
PHASE 1	飛鳥真	257	PHASE 10	和解と暗躍	414
			ルー・テイアーズ		387
252	INTERMISSION	再会	PHASE 9	インパルス VS	ブ
			PHASE 8	更識 簪	367
			PHASE 7	怒れる瞳	349



PHASE 34	ヴェステイージ		PHASE 41	運命の子の導き	
902			theor		1073
PHASE 33	落はいぼく翼	876	PHASE 40	ミーティア	Me
PHASE 32	襲来、歌姫の騎士団	860	PHASE 39	救世主	1055
PHASE 31	タッグ結成	843	PHASE 38	暁の空へ	1034
デート			PHASE 37	宇宙へ	1019
INTERMISSION	初めての		の贈り物		1003
830			INTERMISSION②	空から	
PHASE 30	運命の鼓動(後編)	807	わつて:		981
PHASE 29	運命の鼓動(前編)	784	INTERMISSION	戦い終	960
			PHASE 36	歌姫の怒り	933
			PHASE 35	蒼き雫	925
			vestige		

E p i l o g u e	未来	1224
E p i l o g u e	日常	1207
g		1191
P H A S E 4 7	d e b r i e f i n	1180
P H A S E 4 6	掴む未来	1167
P H A S E 4 5	交差する想い	1153
N V O K E		1153
P H A S E 4 4	インヴォーク	I
1137		
P H A S E 4 3	乗り越える定め	1110
P H A S E 4 2	白式・雪羅	
1090		

をくれた人②		1359
A N O T H E R	P H A S E	私に光
をくれた人①		1341
A N O T H E R	P H A S E	私に光
女③		1319
P H A S E 3	運命 V S	霧纏の淑
女②		1286
P H A S E 2	運命 V S	霧纏の淑
女①		1263
P H A S E 1	運命 V S	霧纏の淑
EXTRA	P H A S E	
		1243
FINAL	P H A S E	愛に溢れて



EXTRA PHASE II エクスカリ

バー  
篇

PHASE I 波乱再び | | | 1393

PHASE 2 集う戦士達 | | | 1411

PHASE 3 逆る雫 | | | 1432

PHASE 4 歌姫の残滓 | | | 1464

PHASE 5 かつての虚影 | | | 1489

PHASE 6 ぶつかり合う想い | | | 1519

PHASE 7 二人で | | | 1558

PHASE 8 妄執の果て | | | 1583

PHASE 9 聖剣が折れる刻 | | | 1623

Epilogue 家族になる日

1650

INTERMISSION①

INTERMISSION 年末の二

人 | | | 1680

Episode of Lakhina

【本当に救いたかった人】

PHASE I 彼女との再会 | | | 1710

PHASE 2 黒 | | | 1733

PHASE 3 怨念を抱く者 | | | 1754

PHASE 4 因縁の鎖 | | | 1774

PHASE 5 Xの傷跡 | | | 1793

PHASE 6 悪夢は再び | | | 1819



FINAL STAGE 運命の翼を持つ少年

つ少年

PHASE 1 降り注ぐ流星

PHASE 2 人の証

PHASE 3 最後の出撃

ANOTHER PHASE 勇敢なる者の輝き

PHASE 4 乙女達の戦い

PHASE 5 全能なる調停者

2584 PHASE 6 掴み取る自由

PHASE 7 王の理

PHASE 8 蒼の旋律

268626642623

25502507

246224422421

PHASE 9 運命の翼を持つ少年

2711

Epilogue 断ち切られた因縁

2753

Epilogue

PHASE 1 運命VS白き王①

2783

PHASE 2 運命VS白き王②

2808

LAST PHASE それからの

日々 2852



## 設定資料

### 主人公設定

■飛鳥真 (Shinn Asuka)

身長：175cm (本編でなお成長中)

体重：61kg (本編でなお成長中)

年齢：15歳 (前世を含めると38歳だが肉体に引つ張られている為特に問題はない)

人種：日本人 (ナチュラル)

髪：黒

瞳：紅

趣味：読書、トレーニング、仮面ライダー鑑賞

家族：大胡 (父)、玲奈 (母)、真由 (妹)

恋人：なし↓更識簪

嫌いな食べ物：貝類、ナス、酸っぱいもの全般、きのこ類

テーマソング：Life Goes On、Ignited | イグナイトッド |

「vestige | ヴェステイージュ |

## 備考

主人公。

前世はザフト軍のスーパーエース「シン・アスカ」である。

C・Eでの最後の戦い【ネオ・ザフト戦役】にて歌姫の騎士団を薙ぎ払い、地球を狙うジェネシスを停止するため自爆、自身も死亡した。

だが死亡した彼の魂は親友【レイ・ザ・バレル】の導きによりIS世界に送られ日本人として転生した。

親友である織斑一夏がISを起動した後に行われた適性試験にて、IS適性が判明し再び戦いの運命に巻き込まれていく。

前世の記憶と経験があるため、前世よりかなり落ち着いているが根は変わっていない。

C・Eでの敗戦の経験、その後の傭兵の経験を通して【今ある花を散らせない為に戦う】と言う確固たる信念を持つに至っている。

IS操作技術はMS操作技術を応用することで、代表候補生と互角かそれ以上の実力を持っている。

また前世と同じように【S・E・E・D】能力を持っているが発動は任意には行えない。

ISに搭乗／操作できる理由は現時点では不明、初搭乗時はS・E・E・Dが発動しているが……？

ルームメイトの更識簪からの想いには気づいており、本人も簪には異性としての好意を持っている。

しかし普通の恋愛を経験したことがない、ルナマリアの想いを拒絶してしまった過去から判断に迷っていた。

だが特別な事情や状況もなく、ただ戦うことしかできない自身に心からの笑顔を見せてくれた彼女は彼の中でも特別なものになっていた。

父である大胡からの助言から「自分の気持ちに正直になる」事を決めた真は「花と共に彼女の笑顔を守る」事を決めた。

専用機は「インパルスガンダム」↓「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」

■インパルスガンダム

所属：日出工業（日本）

分類：汎用戦闘型IS

世代：第3世代型IS

武装：フォールディングレイザー対装甲ナイフ

：高エネルギービームライフル

：対IS用実体シールド

日出工業で開発された最新の第3世代型IS。

【飛鳥真】の専用機として調整されており、開発責任者は【ジェーン・ヌル・ドウズ】。所属は【日出工業】であり、日本所属のISでもある。

C・Eで開発されたMS【ZGMF-X56S インパルス】をモデルとしており、カラーリングもインパルスと同じくトリコロールカラーを採用しているが、非VPS装甲である。

MSインパルスと同じく当機体には【シルエットシステム】が採用されており、搭乗者の思念及び音声認識で背部コネクタ部分にシルエットを展開し装備することが可能。

当機体の拡張領域はシルエットシステムの搭載により圧迫されており、ほとんど余裕がない状態となっている。

シルエットは【フォース】、【ソード】、【ブラスト】、【デステイニー】、【バルゴラ】が用意されており各シルエット毎に機体特性を切り替えることが可能。

また【インストレーションウエポンコール】という特殊コードが搭載されており、各



シルエットの装備を別シルエットで使用することが可能。

※デメリットについては下記を参照。

■フォースインパルスガンダム

フォースインパルスは中距離高機動戦闘を想定した機動力強化用のシルエットの「フォースシルエット」を装備した形態である。

フォースシルエットがもたらす大推力のスラスターと複数のバーニアスラスター、放熱板をかねた4枚の翼を備え、高い機動力を発揮する。

高い機動力とスタンダードな武装、高い汎用性を備えており、真はまずこの形態で戦うことが多い。

【シルエット固有武装】

・ヴァジュラビームサーベル

・インストレーションウエポンコールシステム

フォースインパルスに搭載された特殊コードであり、音声認識により別シルエットの装備を10秒程度フォースインパルス状態で展開することができるシステムである。

だがデメリットとして下記の仕様が存在している。

①高機動仕様に調整されたフォースインパルス形態で近接格闘武装や遠距離射撃武

装を扱うため、戦闘機動の難易度が激増する点。

② 音声認識であるため、どの装備を使うか判断されてしまう点。

③ 展開時間も極めて短く10秒程度である点。

④ システム使用中は、機体稼動部に大幅な負荷を駆け続けシールドエネルギーが大き  
く減り続ける点。

⑤ システム停止後、インパルスの全面的なオーバーホールが必要になる点。

#### ■ ソードインパルスガンダム

ソードインパルスは近接格闘戦に特化したシルエット「ソードシルエット」を装備し  
た形態である。

当形態のインパルスは装甲の色が赤に変わる。

近接格闘に特化した形態であり、近接戦闘では無類の力を発揮するが中距離戦闘も  
ビームライフルを展開することで補える。

#### 【シルエット固有武装】

- ・ エクスカリバー 大型ビーム実体剣×2
- ・ フラッシュエッジビームブローラン×2

### ■ブラストインパルスガンダム

ブラストインパルスは遠距離射撃戦に特化したシルエット【ブラストシルエット】を装備した形態である。

当形態のインパルスは装甲の色が緑に変わる。

遠距離射撃戦を想定している形態であり、距離を取った射撃戦では無類の力を発揮するが、ビームジャベリンを展開することで近接戦闘も可能である。

またMSとは違い大出力ビーム砲「ケルベロス」に付属していたミサイルユニットは肩部に移動しており、別々に使用することで瞬間的な火力を増大している。

### 【シルエット固有武装】

- ・ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲×2
- ・動体誘導型ミサイル搭載コンテナ×2
- ・デファイアントビームジャベリン

### ■デステイニーインパルスガンダム

デステイニーインパルスは、フォース、ソード、ブラストの全シルエットの特徴を統合した万能型シルエット【デステイニーシルエット】を装備した形態である。

当形態のインパルスは装甲の色が青に変わる、これは真のかつての恩人である【コー

トニー・ヒエロニムス」が搭乗していたMS「デステイニーインパルス3号機」をリスペクトしたものである。

デステイニーインパルスの最大の特徴は背部に展開される非固定浮遊部位の翼「ヴォワチュール・リュミエールユニット」である。

このV.L.ユニットによりフォースインパルスを超える、超高機動戦闘が可能でありそのスピードは瞬時加速を用いずとも瞬時に視界から消える程の速度である。

ソード、ブラストの武装を改良したものを搭載されており全体的に性能が大きくなっていてる。

しかしエネルギー消費については劣悪であり、何もせず待機しているだけでシールドエネルギーが減っていくと言う欠点が存在している。

また、デステイニーシルエツトを装備した後一定時間はソード、ブラスト両シルエツトへの換装は不可能となる仕様が存在している。

【シルエツト固有武装】

- ・ エクスカリバー 大型ビーム実体剣×2
- ・ フラッシュエツジビームブーメラン×2
- ・ テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔×2
- ・ ヴォワチュール・リュミエールユニット搭載機動翼

・実体シールド

・ミラーージュコロイド

元となったのはMS【「デステイニー」に搭載されていた残像を投影する機能であり、I Sのハイパーセンサーを誤認させることで質量のある残像を生み出すことができる。その分エネルギー消費が激しい欠点がある。

■バルゴラインパルスガンダム（本編未登場）

バルゴラインパルスは、複合武装試験用シルエットであり主にデータ取得用に用いる形態である。

その特徴は「ガナリー・カーバー」と呼ばれる砲塔型全領域対応複合汎用武装であり、戦闘能力の全てをガナリー・カーバーに依存している。

当形態のインパルスは装甲の色が濃紺に変わる。開発主任は小原節子と言う名前の女性開発者である。

また機体駆動部の構造をより柔軟にするよう調整されており、運動性能はどのシルエットよりも高く、

フォースシルエットには劣るが全身に配置されたスラストにより機動力も確保している。

## 【シルエット固有武装】

- ・砲塔型全領域対応複合汎用武装 ガナリー・カーバー

射撃にも格闘にも柔軟に対応することがコンセプトの武装であるが、反面この武器が故障あるいは破壊されてしまうと大幅に弱体化、別シルエットへの換装が必須の状況に追い込まれてしまう欠点がある。

## ■デステイニーガンダム・ヴェステイージ

所属：日出工業（日本）

分類：超高機動戦闘型IS

世代：第3・5世代型IS

単一仕様能力：未発現

## 固有武装

- ・ヴォワチユール・リュミエールユニット搭載大型機動翼
- ・ミラージュコロイド
- ・アロンダイト 大型ビーム実体剣
- ・掌部ビーム砲 クラレント×2
- ・フラッシュエッジII ビームブーメラン×2

- ・テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔×2

- ・ヴァジユラビームサーベル×2

### 後付武装

- ・バルムンク 大型ビーム実体剣

飛鳥真専用機である「インパルスガンダム」が第二形態移行を果たし進化した機体。進化の際に搭乗者である真の「シン・アスカ」としての記憶の中から愛機であるMS「デステイニー」と「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」の情報を取りつたため、両機体の特徴を持っている。

表面装甲はインパルスやデステイニーとは異なり「黒」を基調としており、腕部装甲や脚部装甲の一部は「紅」で彩られている。

なお、表面装甲のカラーリングが変化したが、当機体にはPS装甲及びVPS装甲は搭載されていない。

IS「デステイニーインパルス」と比較して1回りほど巨大になった「Vルユニット」によりデステイニーインパルスを凌駕するほどの戦闘機動を行うことが可能となった。

また本機体に搭載されているVルユニットはMS「デステイニー」や兄妹機関係にあるIS「飛燕」に搭載されている「光圧推進スラストー」とは異なり真正正銘の「ヴォワチュール・リュミエール」であるため、エネルギー干渉機能等多彩な機能を持つ。

またデステイニーシルエツトは装備しているだけでシールドエネルギーを消費、VL使用時の消費エネルギーも劣悪であったが、進化後のVLは最適化、効率化されており通常時に消費するエネルギーはなくなり、VL最大稼働時に使用するエネルギーも以前を100とするのならば現在は10程度と破格のエネルギー効率となっている。

クラレントを筆頭に高出力のビーム兵器、超高機動による機動性、S・E・E・Dを発動させた真の操縦に追従する運動性と非常に高いポテンシャルを秘めている。

余談であるが、日出はこの機体をISEXVSFBの追加機体として配信する用意をしている。

またインパルスガンダムの拡張領域はシルエツトシステム搭載により空きが全くなかったが、進化後は十分な空き容量が発生している。そのため後付武装をインストールして状況に合わせた活動が可能になっている。これは進化により各種シルエツトがデステイニーシルエツトを基に統合され、結果的にシルエツトシステムが消失したことで領域が拡張されたことに起因している。

なお第二形態移行後に発現する可能性があるといわれる【ワンオフアペリテイ単一仕様能力】については未発現である。



## ヒロイン設定

■更識 簪 (Kanzashi Sarashiki)

身長：154cm (ISABにて判明)

体重：閲覧不可。

年齢：15歳

人種：日本人 (ナチュラル)

スリーサイズ：閲覧不可。

髪：水色

瞳：紅

趣味：ヒーローアニメ視聴、特撮視聴／座談、TVゲーム

好きなウルトラマン：ゾフィー、ティガ、ダイナ、ガイアetc

好きなライダー：Black、RX、クウガetc

恋人：なし↓飛鳥真

嫌いな食べ物：特になし

テーマソング：Life Goes On、「君は僕に似ている」、「Wings of

備考

ヒロイン。

IS学園1年4組の生徒。

生徒会長であり、対暗部用暗部【更識家】当主【更識楯無】の妹。

日本代表候補生である専用機持ち。

飛鳥真のルームメイトであり、彼と同じく特撮作品が好きである為、話が合いよく会話をしていた。

当初は【白式】開発優先の為自身の専用機開発が中止されてしまった為、寝る間を惜しんでISの製作を進めていた。

無理をし過ぎたため体調を崩した際に、かつての自分と境遇を重ねた真によつて楯無の気持ちと真相を知る事となった。

その後、所属を倉持技研から日出工業に移籍。

【打鉄式】は【飛燕】へと生まれ変わる事となる。

クラス対抗戦の無人機襲撃を経て、真に対する気持ちに気づく。

また真も彼女の気持ちに気づき、自身の気持ちに正直になれた為、飛燕の完成後正式に交際を始める。

I S 操作技術については日本代表候補生であるため高い操作技術を持つ。

また独学でI S 製作を行うことができる技術力／整備能力、飛燕の武装を自身で考案する発想能力、O S を一人で整備できる情報解析、演算能力とスペックは非常に高い。

歌姫の騎士団襲撃後、真から「C・E世界」と「シン・アスカ」について聞いており、彼を拒絶せずに受け入れている。

専用機は【打鉄式式】↓【飛燕】

#### ■飛燕

所属：倉持技研↓日出工業（日本）

分類：高機動戦闘型I S

世代：第2世代↓第3世代型I S

固有武装

- ・ 光圧推進スラスタ搭載大型機動翼
- ・ バルムンク 大型ビーム実体剣×2
- ・ リボルビング・ステーク 回転弾倉式杭打機
- ・ フラッシュエッジ ビームブローメラン×2

- ・マルチロックオンシステム搭載ミサイルコンテナ×4
- ・同上マイクロミサイル×40（各コンテナに10発ずつ搭載）

倉持技研から日出工業に移籍した更識簀の専用機。

長らく未完成であったが、搭乗者である簀と彼女と趣味嗜好が共通している日出工業の技術者達により短期間で完成している。

また「白式」を優先し、納期などを全て無視した倉持技研は、彼女と機体の移籍については特に口を出してはいない。

当機体は第2世代型であったが、VＬユニットの搭載と大幅な改修を受けたため明確に第3世代型とされている。

最大の特徴は背部の非固定浮遊部位の大型機動翼「光圧推進スラスタ」である。

当初は搭載の予定はなかったが、搭乗者である簀の強い要望とVＬユニットの量産化を計る目的で搭載されている。

VＬユニットとしては、「ステイニーインパルス」や「ステイニーガンダム・ヴェステイジ」とは異なりエネルギー干渉機能はオミットされ加速機能しか持たない「近似種」である。

だが、コストや整備性では優れており、機動性もほぼ変わらないため量産向きの仕様

となっている。

当機体の名称は搭乗者である簪が決定し、それを採用した形となっている。

彼女曰く、「飛ぶ鳥に追いつく名前」である。

武装については「インパルスガンダム」及び「ガイアガンダム」からのフィードバックがあるため信頼性・整備性共に優れた物となっている。

またバルムンクについては彼女の強い要望と複合武装の有用性から作成された経緯がある。

## キヤラ設定①

■カナード・パルス（Canard Pals）

身長：183cm

体重：68kg

年齢：19歳

人種：日系人（ナチュラル）

髪：黒

瞳：紫

趣味：トレーニング、機械弄り、ハッキング

家族：ラキーナ（妹）

恋人：なし

嫌いな食べ物：束とラキーナの料理（アレンジを加えたものは特に）

テーマソング：「Meteor - ミーティア」、「Zips」

備考

妹：ラキーナと共に篠ノ之束を支える3人目の男性搭乗者。

前世は失敗作のスーパーコーディネーターであり、宿命を乗り越えた戦士「カナード・パルス」である。

シン・アスカと共に「ネオ・ザフト戦役」にネオ・ザフト側で参加。その際シンとは死に別れている。

その後、再び傭兵の身に戻って力なき人々の為に戦い続けた。

スーパーコーディネーターの遺伝子を残してはならないとして生涯にわたり独身を貫き、70歳で老衰により亡くなった。

だが何の因果か、彼の魂は記憶を持ったままIS世界に転生した。

ごく普通の家庭に生まれたが、6歳の離れた妹であるラキーナが1歳になったときに両親が事故で死亡。

その後はラキーナと共に施設に預けられるが、施設では特に不自由なく暮らしていた。

施設で世話になったピステイス先生には頭が上がりません。

前世での傭兵の経験を活かしてSPなどの職に就く事を考えていた折、傷ついた篠ノ之束を保護。

その際、ラクス・クラインの存在を知ると同時にIS適性が判明し、「家族」を守るた

めに自ら戦いの運命に飛び込んでいく。

前世ではプレアとの邂逅の後もたまに激昂し暴走することがあったが、現在は激昂自体極力しない程に落ち着いている。

IS操作技術は真と同じようにMS操作技術を応用することで、並の代表候補生を寄せ付けない程の実力を持っている。

またIS操作技術については束からのレクチャーを受けている。

ISに搭乗／操作できる理由は、真と同じく現時点では不明であり、開発者である束はカナードをサンプルに調査を行っている（本人了承済）。

束陣営の中では唯一の男性であり、色々と苦勞をしている。

専用機は「ドレッドノートH」。

カナードは当機体をガンダムと呼称している。

■ドレッドノートH（イータ）

所属：なし

分類：試作型IS

世代：第3・5世代型IS

武装：ビームサブマシンガンRFW-99ステイグマト



：高エネルギービームライフル

：イータユニット（高出力ビームソード、高出力ビーム砲、グレネードランチャーの複合武装）

：モノフェーズ光波防御シールド【アルミューレ・リユミエール・ハンディ】×2

篠ノ之東が開発した試作型3.5世代IS。

【カナード・パルス】専用として調整されている。

C・Eでの無二の友、プレア・レヴェリーから受け継いだ【Xアストレイ】の改修機である【YMF-X000A/H ドレッドノートイータ】をモデルとした機体である。

カラーリングも同等だが非PS装甲機。

当機体の最大の特徴はモノフェーズ光波防御シールド【アルミューレ・リユミエール・ハンディ】と背部に存在する【イータユニット】である。

マニピュレータ部分に装備された発生装置から発生させる【AL】はかつての愛機であるハイペリオングラムの様に球状に展開可能。

また発生率を調整して、ビームランスやサーベル状に変化可能。

東がカナードから話を聞いて、彼と共に開発した武装でありエネルギー消費率は高いがカナードはこの武装への信頼度が高いからか頻繁に使用している。

イータユニットは高出力ビームソード、高出力ビーム砲、グレネードランチャーの複合武装であり、ユニットを回転させることで砲戦形態の「バスターモード」と格闘形態の「ソードモード」に切り替える事が可能。

また大出力スラスタも内蔵されており、機動力も並の高機動機を凌駕している。

## キャラ設定②

■ラキーナ・パルス（L a k h i n a P a r s）

身長：153cm

体重：42kg

年齢：13歳

人種：日系人（ナチュラル）

髪：黒

瞳：紫

趣味：ハツキング、IS整備

家族：カナード（兄）

恋人：なし

嫌いな食べ物：苦い食べ物（コーヒーは大丈夫）

テーマソング：「Meteor—ミーティア」、「Zips」、「君は僕に似ている」

備考

兄：カナードと共に篠ノ之束を支える女性のIS搭乗者。

前世は成功作のスーパークーデイナーであり、歌姫の騎士団、自由の剣であった【キラ・ヤマト】である。

ラクス・クラインの指示によつて世界中に火種を蒔いてしまったが、当時の本人には自覚がなかった。

【ネオ・ザフト戦役】時にザフト側で参加。その際シン・アスカによつて乗機を撃墜され、死亡した。

だが何の因果か、彼の魂は記憶を持ったままI S世界に送られ、同じくスーパークーデイナーであったカナード・パルスの妹として転生した。

ごく普通の家庭に生まれたがラキーナが1歳になったときに両親が事故で死亡し、その後はカナードと共に施設に預けられる。

前世での自身の行動を深く後悔しており、7歳になったときに当時13歳のカナードに前世の事を相談。

その時にカナードから当時の行動を批判されるが、同時に彼に言われたことで自身の戦う理由を再度考え直した結果【今ある世界と花を守る】という信念を得るにいたった。

その後、カナードと共に傷ついた篠ノ之束を保護。

その際、ラクス・クラインの存在を知ると同時に、【贖罪】の為にカナードと共に戦いの運命に飛び込んでいく。

カナードと瓜二つな顔であるが、彼程髪は長くなくセミロングである。身体付きについても鍛えられたカナードとは違い細身であり胸は絶壁。だがヒップラインにかけては自信を持っている。

I S操作技術は真やカナードと同じようにM S操作技術を応用することで、並の代表候補生を寄せ付けない程の実力を持っている。

またI S操作技術については束からのレクチャーを受けている。

また前世と同じように「S・E・E・D」能力を持っているかは現時点では不明。

まだ13歳であり、身体能力は未発達である。そのためパワーアシスト込みでも接近戦で力負けする可能性がある。

彼女はそれを理解しているためI Sでは手数を求め、かつての愛機であった「ストライク」をモデルとしたI Sの開発を束に依頼している。

専用機は「ストライクガンダム」。

■ ストライクガンダム

所属：なし

分類：試作型I S

世代：第3・5世代型IS

武装：対装甲コンバットナイフ・アーマーシユナイダー×2

：高エネルギービームライフル

：対IS用実体シールド

篠ノ之東が開発した試作型3・5世代IS。

〔ラキーナ・パルス〕専用として調整されている。

C・Eで開発されたMS〔GAT-X105 ストライク〕をモデルとしており、カラーリングも同等だが非PS装甲機。

当機体は開発者である東がインパルスの開発データをハッキングして流用している。

彼女いわく「開発者は自分ほどじゃないが優秀」。

MSストライクと同じく当機体には「ストライカーパックシステム」が採用されており、搭乗者の思念及び音声認識で背部コネクタ部分にストライカーを展開し装備することが可能。

当機体の拡張領域はインパルスとは異なりストライカーパックシステムの搭載により圧迫されていても、かなりの容量が残っている。

ストライカーは「エール」、「ソード」、「ランチャー」、「I・W・S・P」が用意されており各ストライカー毎に機体特性を切り替えることが可能。

インパルスのシルエットシステムとは互換性を持たせているため、両機体でシルエットとストライカーを交換することが可能。

また束により日出の案にはない新しいストライカーパックが開発中である。

#### ■エールストライクガンダム

エールストライカーは中距離高機動戦闘を想定した高機動戦闘用ストライカーパック「エールストライカー」を装備した形態である。

エールストライカーがもたらす大推力のスラスタと複数のバーニアスラスタ、ラジエータープレート兼用の大型可変翼を備え高い機動力を発揮する。

MSエールストライカーは本来宇宙間戦闘を想定していた装備であり、大気圏内では飛翔できるが飛行はできなかった。しかしISは標準で飛行が可能であるため、このデメリットはISエールストライクガンダムには適用されていない。

余談だがジェットストライカーと呼ばれる大気圏内での完全な飛行能力を持つストライカーが開発された後は需要は全くなかったが、対MS戦では小回りが利くため有効ではある。

## 【シルエット固有武装】

- ・ビームサーベル×2

## ■ソードストライクガンダム

ソードストライクガンダムは近接格闘戦に特化したストライカーパック「ソードストライカー」を装備した形態である。近接格闘に特化した形態であり、近接戦闘では無類の力を発揮する。

だがインパルスとは異なりビームライフルを展開する事はできない。

そのため主にラキーナはこの形態をカナードや僚機がいる場合にしか使用しない。

## 【シルエット固有武装】

- ・シユベルトゲベル   ビーム大型実体剣
- ・ビームブーメラン   マイダスメッサー
- ・ロケットアンカー   パンツァーアイゼン

## ■ランチャーストライクガンダム（本編未登場）



ランチャーストライクガンダムは遠距離射撃戦に特化したストライカーパック【ランチャーストライカー】を装備した形態である。

遠距離射撃戦を想定している形態であり、距離を取った射撃戦では無類の力を発揮し、アグニは特筆する威力を持っているが、インパルスとは異なり近接格闘用武装を搭載していないため、近接格闘戦闘は不得手である。

だがラキーナがアーマーシユナイダーを展開することで最低限の近接格闘能力を得ている。

ソードストライカーと同じく、ラキーナはこの形態をカナードや僚機がいる場合にしか使用しない。

#### 【シルエット固有武装】

- ・ 超高インパルス砲 アグニ
- ・ 対IS用肩部バルカン砲
- ・ ガンランチャー

#### ■ ストライクガンダム I・W・S・P

エールストライカーの機動性、ソードストライカーの格闘能力、ランチャーストライ

カーの火力を1つのストライカーパックに統合する目的で束がラキーナとカナードの知識を元に「I・W・S・P」パックを再現、装備した形態である。

ちなみに本来、装備されている近接格闘武装は実体剣であるが、インパルスのシルエット開発データにあった「ノワールシルエット」のデータを参考に武装を変更し、フラガラツハ大型ビームブレイドを装備している。

MS版のI・W・S・Pでは構造の複雑化や消費エネルギーの増加等問題点が多数存在していたが、束の手により問題点を解決しているため、純粋に3形態の長所をあわせた形となっており、同じコンセプトのデステイニーシルエットと比較し燃費は良好である。

ラキーナにとっては現時点での切り札となるストライカーパックである。

#### 【シルエット固有武装】

- ・ I S用レールガン×2
- ・ I S用大型単装砲×2
- ・ フラガラツハ大型ビームブレイド×2
- ・ コンバインドシールド（6銃身ガトリング砲とビームブーメランの複合武装）

## キャラ設定③

■応武 優菜 (Yuna Otake)

身長：185cm

体重：56kg

年齢：27歳

人種：日本人 (ナチュラル)

髪：淡い紫

瞳：黒

趣味：読書、甘味処巡り、チエス

家族：父、母

恋人：なし

嫌いな食べ物：焼き鳥

テーマソング：「暁の車」

備考

若干27歳で日出工業を率いる敏腕女社長。

前世はシン・アスカの故郷、オーブ首長国連邦の氏族【セイラン家】の若き政治家、【ユナ・ロマ・セイラン】である。

前世では男性であり、未熟かつ理想主義に走りがちなオーブ代表【カガリ・ユラ・アスハ】を嗜めるなど有能な政治家であったが、カガリが歌姫の騎士団一派に拉致されてしまい、不在となったことでオーブの権力が自身に集中、野望を持つてしまった。

その後地球連合との癒着を進めるが、オーブのアスハ派及びそのシンパによって代行の座を追われ、同時にザフト軍の侵略によって死亡した。

記載しておくが、彼が地球連合との癒着を進めたのは全て祖国である【オーブ】の発展や今後を想つての行動である。

だが死亡した優菜の魂は記憶を持ったままIS世界に送られ女性として転生した。

工業製品を中心に受注、生産を行っていた小規模な会社【日出工業】を一代で発展させた人物である。

その発展の裏にはMS等の知識から【ISの有用性】をいち早く察知できたことと、【瀬田利香】や【ジェーン・ヌル・ドウズ】等の有能な人員を確保できた人脈等がある。

かねてより社員である飛鳥大胡の息子である【飛鳥真】の存在を確認しており、織斑一夏の発見による男性搭乗者検査の際に可能性のある人物として目をつけていた。

彼が予測の通りにIS適正を持つていたため、国際IS委員会と取引を行うことで彼

を保護した。

彼を助けた一番大きな理由としては、かつての祖国を焼いてしまった事の償いと反省からである。

優菜にとつて責任を取らず自爆したオーブ首脳陣は決して認めることのできない存在である。また彼女にとつては生まれ変わった今でも真はオーブの民であり、それを助けるのは当然だと考えている。

ISへの搭乗経験は数度あるが、素人以下の操作技術しか持ち合わせていない。彼女曰く、「運動関係は前世から苦手」との事。

日出工業の優秀な技術者達のユニークな発想・発案には頭を悩ませており、「純日本製の量産型IS」と言うブランドの奪還に向けて努力をしているが、量産に向かないアイディアばかりが通されてくるため胃痛に悩まされている。

秘書として優菜と同じく前世の記憶を持ち国家代表クラスのIS操作技術を持つ「瀬田利香」を指名しており、同じく常識的な思考と視野を持つ彼女との信頼関係はしっかりとしている。

以下は提出された【純国産量産型IS】の仕様書を2点記載する。

■ヒュッケバイン（開発コードネーム【凶鳥】）

所属：日出工業

分類：攻撃的重力操作武装搭載試作型ⅠS

世代：第3世代型ⅠS

武装：胸部バルカン砲×2

：高エネルギービームライフル

：高出力ビームサーベル

：特殊合金製十字型カッター ファンクスラッシュャー×2

：小型重力結界射出砲 グラビトンライフル

S。 日出工業に所属している男性技術者【美春覚】開発主任が構想中の試作型第3世代Ⅰ

搭乗者は【飛鳥真】及び【瀬田利香】を想定している。

当機体の最大の特徴は機体に搭載されている物理破壊力を持った重力操作システム【グラビコン・システム】である。

このシステムにより重力操作による【重力結界】を展開、攻防に使用することが可能である。

このグラフィコン・システムを最大稼働させることにより本機の最大武装である「グラフィコンライフル」の使用が可能となり、重力結界を超える「超重力結界」を発射して目標を押しつぶす。

なおグラフィコン・システムについてはハード／ソフトの開発調整が難航しており、覚はインパルスや飛燕の調整の合間を縫って開発と調整を進めている。

■ゲシユペンスト（開発コードネーム【亡霊】）

所属：日出工業

分類：高機動汎用試作型IS

世代：第2・5世代型IS

武装：胸部小型ミサイル スプリットミサイル×6

：高エネルギービームライフル

：高出力ビームサーベル

：放電打撃武装 プラズマ・ステーク 左右の手に3本ずつ搭載

日出工業に所属している女性技術者【美春真理】開発主任が構想中の試作型第2・5世代IS。

搭乗者は倉持技研より移籍した【更識簪】と【飛鳥真】を想定している。

上記のヒュッケバインとは異なり特徴的なシステムなどは搭載せずに汎用性と信頼性を重視した設計となっている。

その為現存のIS用武装の殆どを【後付武装】として搭載可能。

開発者責任者である真理の指針としては搭乗者に合わせ、長所を【極端に伸ばす】仕様としたかったが、同僚や夫である覚に説得されてしぶしぶ現在の仕様としてまとめている。



## 過去編

### 過去編① 拒絶

敗戦後、失意のシンは故郷オーブに訪れていた。  
なぜオーブにきたのかは自分でもよく分からない。

——家族が眠る土地だからであろうか。

波打ち際の崖の上に作られた慰霊碑。

そこで亡き家族に対して、自分の無力に対して、涙を流していた。

シンの隣には大戦後期にお互いの傷を舐めあうように交際するようになったルナマリアの姿もあった。

「……俺は結局何のために戦ったんだ」

「……シン」

「争いのないっ……平和な世界……。議長達とならと思ったん……。だけど……！」

涙が溢れ、嗚咽が混じる。

自分の無力さに、情けなさに。

だが運命の女神とやらはそれでもシンを貶めたりなかったらしい。背後から声があったのだ、聞きたくもない相手の声が。

「シン、ここにいたのか……探したぞ」

アスラン・ザラ

自分達を裏切り、ミネルバを落としてヨウランを殺した英雄様。

その隣にはかつての同僚、メイリン・ホーク。

「アスラン、彼が……」

「そうだ、キラ。あいつがインパルス、そしてデステイニーのパイロットだ」

アスランの背後から優しくそうに笑みを浮かべた青年が歩いてくる。

キラ・ヤマト

フリーダムのパイロット、レイを落とした男、自分に道を指し示してくれたデュラン  
ダル議長を打ち破った英雄様。

後に知ったことだが、オーブ攻防戦の際にフリーダムに乗って防衛線を民間人が避難している区画まで下げたのはコイツと一部オーブ軍の連中らしい。

そしてその隣には桃色の髪をした歌姫。

ラクス・クライン

平和の歌姫、自由と正義の使者。

はつきり言っただけがだと思っただい。

「……アンタは」

「君と話がしたくて……だめかな？」

シンの目の前にキラが立ち問いかける。

どうせ自分は負け犬だ、そう思っただけ無言を貫く。

その無言を肯定と受け取ったのか、キラが話し出す。

「これから僕達は争いのない平和な世界を目指して戦う。それに君の力を貸してほしいんだ」

キラの言っていることに間違いはないだろう、勝者が歴史を作るのは世の常なのだから。

だが認めるのは癩だ。

だから無言を貫く。

「……」

「僕達はいくら吹き飛んでも花を植え続ける。お願いだ、シン……だめかな？」

そう言つてキラは手を差し出す。

その言葉にシンは目の前が真っ暗になった。

こいつは今なんていった？　花を吹き飛ばしてもまた植える？　今、そういったのか？

キラの言葉の意味を理解して、心から激情の炎があふれ出す

——力及ばず無残にも折れた心が炎によって打ち直され、再び刃となっていく。

「ふざけるなあー！」

差し伸べられた手に応じることはなく、その手を力強く払って仇の男を睨みつける。

「え？」

握り返してくれるのを当然とでも思っていたのか、払われた手をかばい間抜けな声を出した。

「吹き飛ばされてもまた植える!? 吹き飛ばされた花は、死んでしまった命はどうでも良いって事かよ!?!」

激情が溢れ出す。

一度堰を切った感情が止められない。

「家族に代わる人間がいるものか! 目の前で……自分の目の前で殺された子に代わる人間がいるのかよ!?!また植えるなら返せよ! アンタ達が俺から奪っていた大切な人

達を返してくれよ！アンタが……アンタ達が殺した妹を……マユを！ 父さんを！  
母さんを！ ステラを！ レイを！ ヨウランを！ ハイネを！ デュランダル議長  
を！ タリア艦長を！」

目の前の奴等に、歌姫の騎士団達に奪われた、かけがえのない命達の名前を叫ぶ。

「やめないか、シン！」

裏切り者が自分の頬を張る。

その表情には怒りの感情が見える。

「憎しみに囚われて過去ばかりを見るな！ キラの言いたいことがわからないのか!？」

張られたことは大した事ではない。

裏切り者の言葉に、さらに激情の炎が強くなる。

「知るかよ、アンタ達の言うことなんて分かりたくもない。ああ、ようはこう言いたい訳だ、【俺達を恨まないでくれ、憎まないでくれ】って……ふざけるなよ……！」

「……………シンっ！」

そう言つて裏切り者達、仇達から距離を取り慰霊碑から離れる。とつさにルナマリアがシンのそばに来るがそれを右手で制した。

「ルナ……………ごめん。ここでお別れだ……………俺のそばにいちやいけない」

「そんな、シン、何で!？」

ルナの綺麗な瞳から涙が溢れている。

ああ、泣かせちゃったな……………でもダメだ、俺のそばじゃ君を不幸にする。

「シンっ、お前は……………！」

裏切り者が何か言おうとしているが、知るものか。

「俺は敗者だ、この戦争で負けた負け犬だ。この世界はアンタ達が変わっていくんだろうが、俺はアンタ達を決して認めないっ！ 【花】を見ようともせず吹き飛ばすアンタ達

を絶対に認めないっ！」

「そうだ、花を……命を植えなおすなんていう奴等に……俺の心までこいつらに渡すものか！」

そう叫びシンは走りだす。

自分を止めてくれているルナマリアの声が聞こえるが、振り返らず走る。

その後、シン・アスカはオーブを出国した。

同時にザフトを退役した。

二束三文の退職金が出たが全てをメサイア戦役復興募金に回して姿を消した。

ザフト、オーブがそろって彼の後を追った。

どうにかしていくつかの情報を得たが、その行方は分からずじまいであった。

そしてザフト主導の下「絶対的な自由と平和の為の戦い」と称した鎮圧作戦が開始された。

鎮圧作戦の混乱のため、彼の搜索は頓挫することとなる。

また、彼と交際していたルナマリア・ホークはオーブからプラントに帰国後、ザフト



を退役。

その後は民間の復興団体に所属したことが明らかになっている。

## 過去編② 出会い

August. 7. C. E 79

地球連合が解体されてから数ヶ月。

かつての連合の主要都市はザフト主導の「鎮圧作戦」により、ほとんどが占領されていた。

旧連合の主要軍事施設はザフトのMSによって破壊、または接收されていた。

また国家の集合体であった連合が解体されたことで、世界中で国家間、民族間での内乱や内紛が再発していた。

長く続く戦乱の世。

人々は混乱が続く大都市から離れ、小さい都市や集落を形成し移り住んでいた。

それに伴い、MSを使った盗賊や夜盗などが多く現れていた。

人々は盗賊たちに対抗するため、「傭兵」を雇ったり「自警団」を結成。

ついに独自のコミュニティを形成するまでにいたっていた。

とある砂漠地帯

灼熱の象徴でもある砂漠の大地はすでに夜の帳に包まれ、昼間とは真逆の低温の世界となつている。

「へっ、この街で5つ目だな……ねえ、頭」

「ああ、そうだな。おっとアンタは1つめか、レッドバード【赤鳥】？」

無精ひげと見事に飛び出たビール腹の2人がナイトビジョン付きゴーグルから顔を離して振り返る。

見るからにナチュラルの2人が背後のキャンプ地にいる人間に話しかける。

キャンプ地と言つてもかなり小さく寝袋などで数人が眠りこけている質素な物だが。

【紅と黒の2色】で彩られたパイロットスーツに「フルフェイスヘルメット」で顔を隠した人物が1人夜空を見上げていた。

「……そうだな、あんた達の依頼を受けたのは今日だからな。5つ目つて事はそれ以前に潰した事があるのか？」

【赤鳥】<sup>レッドバード</sup>と呼ばれたその人物が男達に答える。

ヘルメットのバイザーは非透明バイザーのようで顔は確認できず、くぐもった声からすると男のようだ。

「ああ、小さな集落だったがMSが2機あれば充分だったぜ」

「今じゃナチュラルでも充分にMSが使えるからな。鎮庄部隊の奴らなんてこんなところにはこねーしな、MS万々歳だぜ」

「なるほど。中々美味くて今度はあの少し大きい街って事か？」

赤鳥は男達が見ていた【街】を指差す。

都市と比較すれば小さい規模だが人口は少なくない。

また街の明かりは地上のエネルギー問題もあつてそこまで大きくはないが、小さい集落のように夜になると暗闇に包まれると言ふこともない。

「ああ。せつかく金で動く傭兵が雇えたんだ。あれくらいの街を襲つても充分黒字だろうぜ」

「へへ、じゃあ、早速いきましようぜ」

「おお、頼んだぜ、赤鳥さんよ」

「……いいだろう。こつちも飯の為には仕事はするさ、住民から奪った食料や報酬は弾めよ?」

10分後

盗賊の2人はキャンプ地の背後のトレーラーに寝かされているそれぞれのMS。

2機の「ストライクダガー」へ向かう。

赤鳥はそこから少々離れた砂山に止めた保護シートで隠してあるMS用トレーラーに向かう。

そこに寝かされているMSは「ウインダム」

かつて地球連合で生産された量産型MSであり、カラーリングは一部黒と赤に変わっている。

『じゃあ、予定通り頼むぜ、赤鳥』

『了解した。退路を確保する』

盗賊達が乗っている2機が先行して街を襲い、赤鳥は退路を確保するという作戦だ。

そこそこまでは――

『いくぜ、頭っ！』

『おうっ！』

2機のストライクダガーがスラスターを噴かせて、大地を蹴る。

残りの手下はジープなどを使って街に向かう

瞬間、【背後】からの【ビーム】によつて盗賊の頭が搭乗していた機体がコックピットを貫かれ沈黙した。

『……………え？』

突然の事態に立ち止まる手下のストライクダガー。

そこに通信が入った。

『……………騙して悪いがこつちも仕事でな、あの街の人達の為に消えてもらおう』

ゾツと底冷えした「赤鳥」の声。

それが手下が聞いた最後の言葉となった。

メインモニターには「ビームサーベル」を構えた「赤鳥のウインダム」の姿。

黒と赤のカラリングからまるで「鬼」の様に見えた。

手下は碌に抵抗もできずにコックピットをサーベルで貫かれ、蒸発した。

サーベルを引き抜きマウントさせる。

ジープやキャンプ地に残っている残党を、脚部の対人兵器でなぎ倒す。

少しして盗賊の全滅を確認した赤鳥は、通信モニターで目の前の「街」にいる「仲間」に連絡を取る。

モニターに映るのはザフトの緑服の胸部を大胆に開く形でアレンジし露出を増やした服装をしている「アビー・ウインザー」

『アビー、こちらシンだ、終わったよ』

『シン、お疲れ様です。回収に向かいますので街のほうまで来てください』

『了解、後ヴィーノにジャンクの回収を頼むって伝えてくれ』

『分かりました、それではまた』

『ああ』

傭兵赤鳥  
レッドバード

その正体である「シン・アスカ」は、傭兵として世界を回っていた。

今ある「花」を散らせない。

「奴ら」と決別し、傭兵になつてからようやく見つける事ができた自分の信念。

またシンは1人ではなかつた。

MS1機分の金が溜まるまでは傭兵部隊「サーペントテール」の世話になつていたがそこから独立した後、かつての同僚であった「アビー」や「ヴィーノ」等の元ミネルバクルーが、ジャンク屋から古ぼけた型だがMS搭載可能な船を購入し、サーペントテールを通してシンに合流したのだ。

正直シンは驚いた、自分になんてついてきてくれるのかと。

それにアビーはこう答えた。

「今のザフトにはかつて私達が志したモノは残っていませんから……それに1人では守れる【花】も少ないでしょう？」

そこからシンやアビー達は「赤鳥傭兵団」を組織、小規模ながら活動を行っていたの



だ。

立場や力が弱いモノ達からの依頼を優先し、時には大きな仕事を弾薬費にもならない金額で受けたたり、時にはこうして汚れ仕事等を請けたりしていた。

「……………ふう」

ウインダムを自動走行モードに切り替えて、M S トレーラーに着く前にドリンクと携帯食料を口に運ぶ。

食糧事情はあまりよろしくないが、そこは仕事を終えた後だから遠慮はせずに。

「……………こうしていても……………守れる花は俺達の手の届く範囲だけ……………か……………」

コックピットの中で1人シンは呟いた。

数日前

## L3 中域

傭兵部隊X乗艦　オルテユギア　ミーティングルーム

「【シン・アスカ】との接触……だと？」

「はい、カナード」

傭兵部隊Xの乗艦、オルテユギアの一室に一組の男女がいた。

男の方はまるで拘束服をボディーマーのように改造した服装をしている。

アメジスト色の瞳に、光を反射させるかのように綺麗な黒の長髪、加えて顔は美形だ。

男の名前は「カナード・パルス」

女の方は少し目つきがキツイが充分美女といえる顔つき、また眼鏡をかけ服装は解体

された旧連合のモノを着ている。

女の名前は「メリオル・ピステイス」

「【元ザフトのトップエース】……消息は不明だと聞いていたが？」

「ええ、ですが今回のクライアアント【バックワード】と呼ばれる組織ではその情報を掴んだモノかと」

「バックワード」……確か「アマルフィ」とか言う女が興して、メサイア戦役後から活動してたNPO。胡散臭いな、それに何故俺なんだ？ 叢雲劾、サーペントテールに行きそうなものだが？」

カナードは眉を擡めてメリオルから渡されたタブレットを操作している。

「クライアント側からは何も」

「……」

メリオルからの返答を聞いてカナードは少し思考の海に沈む。

(シン・アスカ。元ザフトのトップエースで前議長ギルバート・デュランダルの懐刀と呼ばれた男か。キラ・ヤマトを落とした唯一の人物で、今の世界で何をしているのか気にはなるが……存外俺もこだわっているようだな)

少しだけ笑みを浮かべて、現実に戻還する。

「いいだろう、元々奴については気になっていた」

「では依頼の方は受託、詳細を後ほどそちらに送ります。それと進路を地球へ変更します……よろしいですか？」

「頼む、それと〔ドレッドノート〕の整備に向かう、何かあれば連絡をくれ」

「分かりました、カナード」

そうして2人はミーティングルームを出て行く。

シンが盗賊を殲滅してから、数日が経った。

赤鳥傭兵団と砂漠の街との契約終了日となり、赤鳥傭兵団は街を去る準備に追われていた。

シンもさすがにパイロットスーツでうろつくわけには行かず、作業着で作業を行っていた。

「なあなあ、傭兵の兄ちゃんはもう行っちゃうのか？」

「ん、ああ。残念だけど……そういう仕事だからね、ごめんな」

自分に話しかけてきたら5歳程度の男の子だ。

コーカソイド系はこの地方では珍しい。

「んー、仕事じゃ仕方ないよな……あつ、そうだ、兄ちゃんに会いたがつてる人がいるよ」  
「俺に会いたがつてる人？」

少年の言葉に首を傾げて、彼が指差す方向を見る。

そこには仇敵と同じ顔をした男が立っていた——いや、目つきはキラ・ヤマトよりも鋭い。

「探したぞ、傭兵赤鳥……いや、シン・アスカ」

「つ、誰だアンタ！ キラなのか!？」

懐に手をしのばせ、いつでも自動拳銃を抜く用意を整える。

「俺はカナード……カナード・パルス。お前と同じく傭兵だ。仕事でな、貴様に会いに来

た」

「俺に……だと……?」

「ああ、お前を連れてこいと【依頼】だ」

カナードが不敵に笑う。

これが【心折れぬ戦士】と【宿命を超えた戦士】の最初の出会いであった。

## 過去編③ それぞれの思惑

大型陸上戦艦 レセツプス級 アンデルセン

レセツプス級大型陸上戦艦が砂漠地帯をその推進装置であるスケイルモーターで振動・液化化させつつ進行していく。

この戦艦の名は「レセツプス級 アンデルセン」、赤鳥傭兵団の地上用母艦である。これは一部の物好きなジャンク屋を通してアビーが格安で購入したものだ。

よく見ると装甲の一部分が見事に吹っ飛んでいたり、武装等が修復がされていないジャンク一歩手前のものであるからこそ購入できたがヴィーノを筆頭にした整備士の尽力により、問題なく航行が可能である。

閑話休題

「だあー、シンはもつとMSを優しく扱ってくれよつ！」

赤毛にオレンジのメッシュが特徴的なコーディネーターのMS整備士、ヴィーノ。

デュプレがスパナを片手に格納庫で吠える。

その原因は目の前のメンテナンスベッドに横たわっているMS、黒と紅のウィンダムだ。

脚部部分や関節部分の装甲が外されており、コード類が整備用機器に接続され、担当の整備士が手を動かしつつ機体のコンディションチェックを行っている。

整備用機器のモニターにはウィンダムの状態が表示されており、各部間接のコンディションは赤色で表示されていた。

「班長、やっぱり関節部分の摩耗がはやいっすね、これ後数回出撃したらガタが来ますよ」

金髪碧眼、整った顔に抜群のスタイルの少女がヴィーノに話しかける。

その容姿は明らかにコーディネーターであり、ヴィーノと同じ作業服を着ている。

彼女はシンがザフトを辞職した後に、アカデミーから入隊したヴィーノの後輩だ。

ヴィーノがザフトを辞職し、シンと合流する際にどういう訳か彼女も同行しヴィーノと共に傭兵団に所属していると言う経緯がある。

彼女の顔には整備用オイルが付着していたが、気づいていないようだ。



「だよなあー、シンのヤツ、ウインダムはPS装甲じゃないんだって何度も言ってるのに……」

ウインダムは汎用MSとしては良作ではあるのだが、あくまで量産機である。

デステイニーやインパルス等の専用機と比べるとやはり性能では大幅に下回る。

素直ではあるが機体がついてきていない、ヴィーノはシンから何度か反応速度向上の話を持ちかけられていた。

これについてはヴィーノがミネルバ時代から培ってきた整備、ハード、ソフト調整技術で何とかごまかしているが、やはりシンの高い操縦技術による負荷により、関節や装甲などが摩耗しはじめているのが現状だ。

「確かにPS装甲なら摩耗が少なくて済みますもんねえ……デステイニーみたいにフレームをPS装甲にしたら可動性もよくなるし、もっと長持ちしますし。この前回収したジャンクでとりあえずは補修できますけど、やっぱり新品買ったらどうです?」

彼女のいう事はもつともだ。

心の中で大きくうなずきつつもジト目で彼女を見つめつつ返す。

「……………うちの懐事情よくないの忘れた？」

「……………あはは、失言でした……………つとじゃあ、あれは何なんですかね？」

整備士の少女が指さす。

格納庫のMSハンガーに見慣れぬ〔Gタイプ〕のMSが存在しているからだ。

そもそも赤鳥傭兵団にはシンのウインダム以外のMSは存在していない。

記号の〔H〕<sup>イーター</sup>に見える大型のバックパックを背負ったMSであり、全身が灰色であるためPS装甲搭載機である事もわかる。

「ああ、あれは今この船に来てる傭兵のMSだよ」

「傭兵？　うちと同じの？」

「ああ、しかもちよつと込み入った感じのな……………」

ハンガーに待機しているMSである〔ドレッドノートH〕を眺めつつ、ヴィーノはそう返答した。

「どうだい」

アビーの案内で応接室の扉が開き、カナードが入室してくる。

先ほどの砂漠地帯の街でカナードと出会ったシン達は彼の話を聞く為に、母艦に案内していた。

先に入室していたシンはソファアアに座るよう目で促す。

「……」

室内をカナードが見回す。

応接室とは聞こえがいいが、内装は質素なものだ。

来客用のソファアアはどこどころカバアがほつれ始めており、壁も薄く汚れている。それを一瞥しつつ、来客用ソファアアに腰かけたカナードが口を開く。

「……地上用戦艦を持つている傭兵団にしては、お粗末だな」

「ええ、本当にどこかの誰かさんが私たちに無断で報酬の受取額を減らしたりするので、極貧の状況です」

カナードの目の前のソファアに腰かけテーブル越しににっこりと笑うアビーが告げる。

アビーの横に腰かけたシンに視線を向ける。

「アビー、目が怖いって」

「誰のせいでこんな極貧なんだか忘れてます？ 人間お腹が空くと怒りやすくなるんで

すよっ？」

「……すいませんでした」

アビーの声色が変化したことを確認したシンはとっさに視線をずらす。

「……まあ、お前たちの懐事情などどうでもいい、本題だ」

懐から小型の携帯端末を取り出してスイッチを入れる。

テーブルに置かれた端末が動きだし、備え付けられているモニターが映る。

この携帯端末はカナードが依頼を受けた際にバックワードの構成員と「依頼主」から受け取った代物だ。

彼なりに調べた結果盗聴や傍受の危険性はないと判断している。

モニターに映るのは右目に傷を負った初老に差し掛かり始めている男性。

『あー、あー、テストス……』ほん、聞こえるかな、カナード君』

「聞こえている。さっさと話せ、アンドリユー・バルトフェルド」

モニターに映る人物についてシンとアビーはもちろんよく知っていた。

ラクス・クラインの補佐官であり、現在プラントの中でも重要な地位にいる「砂漠の虎 アンドリユー・バルトフェルド」だ。

カナードにシンとの接触を依頼したのはバルトフェルドであったのだ。

「アンドリユー・バルトフェルド?!? 【砂漠の虎】が何で……?!?」

驚くシンを尻目に、観察するようにバルトフェルドが口にする。

『君がシン・アスカか……成程、以前とは違っていい目をしてるね』

「つ……奴等のお仲間が何の用だつて聞いてるんだ」

突然の人物からの通信に戸惑ったシンであつたが、すぐさま傭兵としてのスイッチを入れ気持ちを切り替える。

バルトフェルドの言葉にそう返すと、バルトフェルドも薄く笑みを浮かべつつ、告げる。

『君達に仕事の依頼をしたくてね』

「……依頼だと？」

「何故プラント大統領の補佐官ともあろう人が私たちに……？」

「……さて【君達】だと？ それは俺も含んでいるのか、アンドリユー・バルトフェルド」

『ああ、そうだよ、カナード』

シンとアビー、そしてカナードの疑問の言葉にバルトフェルドは答える。

『さつそく本題だ、【僕達】は現ザフト政権に対しての【クーデター】……つまりは【叛乱】を画策している。この叛乱に加わってほしいというのが君達への依頼だ』

あまりの内容にシンやアビー、カナードまで絶句してしまった。

現ザフト政権は、通称【歌姫の騎士団】が前議長ギルバート・デュランダルを討ち、その功績から迎え入れられたラクス・クラインが発足した政権。

しかしお世辞にも優れているとは言いが難かった。

掲げる政策はそのほとんどがコーデイナー優遇の政策であり、地上では主観的な自由と平和の為の戦いを続けているからだ。

本来では一枚岩になりえないタカ派のザラ派、理想主義のデュランダル派ですら一枚岩になってN.O.を突きつけるレベルである。

そしてラクス・クライン政権のブレインであり、事実上のNo.2から直接の依頼内容がまさかの【叛乱】を起こしてほしいというクーデターの画策、3人が絶句してしまうのも無理はない。

『もちろん、君達個人で起こせる範囲の叛乱じゃあ意味がない、プラントの規模に渡り合

うにはそれなりの組織や準備がいる』

衝撃を受けているシン達3人をしり目に、バルトフェルドは続ける。

モニターに映っていた彼の映像が消え、座標データが表示される。

『L1宙域の廃棄されたエネルギー生産コロニー「シリウス」。僕達の後援組織はそこを拠点にしている……君達にはまずここに来てもらいたい』

再びモニターはバルトフェルドを映す。

『もちろん強制はしないし別に受けてくれなくても構わないよ』

受けてくれるのならば脚の用意はするけどね、と彼が続ける。

「……何でだ……アンタにとってアイツ等は身内じゃないのか？」

バルトフェルドの言葉に衝撃を受けていたシンであったが、何とか己の心中にある疑



問を吐き出す。

シンの疑問は同席しているアビーやカナードにとつても同じものだ。

その質問を受けてバルトフェルドは苦虫をかみつぶしたような表情になる。

後悔、怒り、悲しみ——複数の感情が混ざり合ったような絶妙な表情だ。

『……確かに身内だね。だからこそ責任は取らなければならないんだ』

「責任？」

アビーの言葉にバルトフェルドが頷く。

『君達は何とも思わないかい？　ここ数年の地上の現状を』

メサイア戦役後のプラントによる地球連合への武力干渉。

それによつて連合は崩壊、連合崩壊後、世界は再びバラバラになった。

右肩上がりが増え続ける内戦や内紛、民族間の抗争は激化の一途をたどっている。

加えてプラントによる地球の国家への武力を用いた介入／鎮圧作戦。

それによつて国や街は自警団や自分達の様な傭兵を雇い、武力を得る。

そしてその武力をプラントに忌むべき力として認定され、鎮圧を受ける。傭兵となり幾度となく見てきた光景をシンやアビーは脳裏に描く。

——今の世界は火種に溢れている。

『彼等はただ無秩序に「力」を使う事しか知らない、教えられなかった』

彼の表情に後悔の感情が溢れている。

『だから彼等に「力」を与えてしまい導くことをしなかった「大人」である僕達の責任……彼らを討つてでも止める、それがけじめのつけ方さ』

そこまで告げてバルトフェルドは一息つく。

『……さて、僕からの依頼の説明については以上だ、何か質問はあるかい？』

無言、それを質問がないと受け取ったバルトフェルドは微笑む。

『依頼についての返事はなるべく早めにしてほしい、僕も色々と忙しくてね……連絡はまたこの端末を使ってくれればいい。さてとりあえずこの通信は以上だ、それじゃあよい返事を期待しているよ』

そういつて通信が切れる。

依頼の内容があまりにも想像以上だったためか、応接室には重苦しい雰囲気が流れていた。

「……」

シンは目を瞑って考えていた。

自身がどうしたいのか、その答えを出すために。

(……決まってる、俺は花を守るって決めた)

そう、少しでも今ある花を散らさないために戦うと決めた。

それだけは決して曲げない自身の信念として。

ならば答えは決まっている。

このままの状況では世界はより混乱していくだけだ、回復など奴等がいる限りありえない。

花を吹き飛ばす元凶を取り除く。

ふとかつて和解の話を持ちかけられた際、仇の男が口にしていた言葉を思い出した。

〔花を植えなおす〕か……見栄えのいい花で吹き飛んだものを覆い隠すのがアイツ等の正義なら……！〕

目を開いた彼の紅い瞳には明確な戦意が迸っていた。

その様子にアビーが気づいていた。

「……アビー、この話なんだけど……」

「……分かっていますよシン、受けたいんでしょう？」

「……ああ」

シンが頷くとアビーが肩をすくめつつも笑みを浮かべた。

「赤鳥傭兵団のトップはアナタなんですから。それに異議は唱えませんが……経費や報酬については私が交渉しますがいいですか？」

微笑みつつアビーがシンに尋ねる。

頼むと小さく伝えた。

「……ならばお前達は宇宙に上がるのか？」

今まで黙っていたカナードが口を開く。

「ああ、ジャンク屋経由で宇宙に上がるつもりだ」

「……ならば俺も同行したい、構わないだろうか？」

カナードがアビーに確認を取る。

その言葉にシンとアビーが目を見開いて驚いた。

【傭兵部隊X】はあまり他の傭兵とは組んだりしないと聞いていたからだ。出会ってまだ数時間しかたっていないが、その噂は確かだと感じていた矢先に向こうからの提案だ。

「ええ、特に問題ありませんが……」

「……アンタも受けるのか、カナード」

確認の為、シンがカナードに告げる。

「……ああ、【スーパーコーディネーター】としての責任は取らなければならないと考えてはいたからな」

「スーパー……コーディネーター？　つてまさか……!」

「ああ、俺はキラ・ヤマトと同じだ……ただ奴が【成功作】で、俺は【失敗作】だがな」  
「……通りで似てるわけだ、アイツと」

仇の男とよく似た顔——だが明らかに迸る意思の力が違う。

「……ふん、精々足を引つ張るなよ、シン・アスカ」  
「言つてろ」

互いに憎まれ口を叩きつつも、戦艦アンデルセンは進んでいく——戦士達を乗せて。

シリウスー

廃棄されたエネルギー生産コロニーであるシリウスーの内部にはエネルギー生産に必要な、「MS工場施設」や「大型艦建造ドック」が敷設されていた。

L5やL4に比べて太陽に近い公転軌道をたどるL1宙域。

そこに存在している廃棄されたコロニーという絶好の条件があり、プラントの人間でここに訪れる人間はおらず、元々ザルな監視体制もすり抜ける事が出来ている。

コロニー内のMS工場の一画で、とあるMSの建造作業が進められていた。  
メンテナンスベッドに横になっている機体。

装甲は取り付けられておらず、フレームがむき出しになっているが頭部のみほとんど完成されている状態であった。

まるで血の涙を流すかの様な紅いラインが入った頭部を持つMS。

そのMSから伸びているケーブル類が集束している端末を操作する女性がいた。

緑色の髪をショートカットにまとめ、作業着を身につけている。

作業着の上からでもよく分る程豊かな2つの果実のせいで、ファスナーが閉められず、胸部で止まっている。

年齢は中年に差し掛かっているが1児の母としては十分であり、いまだ20代後半と言えば通じるだけの魅力を兼ね備えていた。

「ロミナ主任、【ガンダム】の方はどうですか？」

【ガンダム】と呼ばれた機体のデータから目を離し、ロミナは黒髪の青年技師に視線を移す。

青年技師はロミナよりも少し身長が低く、童顔でそばかすが目立っていた——見るからにナチュラルである。

「ええ、ソフト、ハード共に順調ですよ。現行のザフトではこの機体のデータは消されていると思いましたが……バルトフェルドさんが保存していて幸いでした。ジェーンさ



んからセカンドシリーズMSのデータ提供もありましたしね」

「ですね。しかし、彼は来るのでしょうか？」

「……来ますよ、絶対に」

ロミナは再び組み上げ途中のMSに視線を移す。

「【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】……彼はきつとこれに乗ってくれるはずですよ」

かつて無限の正義に敗れた機体の名を継承した、「傷痕」の名を持つ機体。敗れはしたが、その傷を新たな力に変えてこの機体に与える。

この機体だけが現在も最強の位置にいる「ストライクフリーダム」と「インフィニッツトジャステイス」を引きずり降ろす事ができると信じている。

ロミナ——「ロミナ・アマルフイ」はその美しい顔に憎悪の混じった笑みを浮かべた。アスラン・ザラやディアッカ・エルスマンが今の彼女の見たら大層驚くであろう。彼らが知っているロミナはMS技術者とは全くの無縁であるはずだからだ。

しかし現にロミナはここ、シリウス1に秘密裏に敷設されたMS工場施設にいる。

(待っていて、ユーリ、ニコル……貴方達という「花」を吹き飛ばした毒花は私たちが吹き飛ばすから)

そのためにロミナはこの数年で様々な工作を行っていた。

手始めに音楽家からMS技術者へ転向した。

すでに中年に差し掛かった彼女が専門外の分野で一流になるには並大抵の努力では足りなかった。

しかしメサイア戦役終結から数年、彼女は一流の技術者に上り詰めていた。

それを可能にしたのは、愛する夫と息子を失った悲しみと——憎しみ。

同じ目的を持つ「アンドリユー・バルトフェルド」、「エザリア・ジュール」と共に解体された旧連合の良識派、かつてデュランダル政権下でロゴス・ブルーコスモスと戦った者達を集めた。

愛する夫、ニコトロン・ジャマー・キャセラー N J C を実用化したユーリ・アマルフィの残した有り余る遺産

を使って秘密組織「バックワード」を創立。

旧連合の技術者と協力して、廃棄されたコロニーにMS生産施設と大型艦ドックの敷設を行った。

そして現在、その準備期間も終わろうとしている。

消息不明であった、デュランダル政権下でのトップエース「シン・アスカ」が見つかったのだ。

しかも彼は傭兵として、自分達と同じ様に戦っていた。

彼には「カナード・パルス」を通じてバルトフェルドが交渉を行ってくれている。

自分達と同じ様に歌姫の騎士団に反感を持っているのならば、きつとここに来る。

バルトフェルドからも聞いているのだ、彼は歌姫の騎士団との和解を蹴ったと言う事を。

その彼に最強の剣を与えるのが今の自分の使命。

ロミナはそう信じていた。

「ガンダムの武装案について、纏めてくれましたか？」

「はい、主任。こちらです」

青年技師からタブレットを受け取ったロミナが内容に目を通す。

【超高速機動による強襲】

それがこのデステイニーのコンセプト。

青年技師がまとめた武装案はどれも一考の価値のあるものだ。

「ありがとうございます、私の方でまた検討します」

「了解しました、自分は「クラレント」の調整を継続します」

「お願いね」

ロミナが返すと、青年技師は足早に離れていく。

「……もうすぐ、もうすぐよ」

ロミナはそう呟きながら、思考の海に沈んでいった。

## 過去編④ ネオ・ザフト

太平洋上 ギガフロート

海上フロート施設が連結し合って移動可能かつ巨大な海上施設として機能しているのが、ここギガフロートである。

かつてジャンク屋ギルドが完成させた施設であり、民間用マストライバーにより宇宙へのアクセスを可能にしている。

その施設にシン達赤鳥傭兵団とカナードは訪れていた。

すでにシンのウインダムやカナードのドレッドノートHはMS搭載可能シャトルに搭載されている。

このシャトルはバルトフェルドがジャンク屋を経由してシン達に渡した宇宙までの足である。

ちなみにレセップス級アンデルセンでも海上航行は可能であるが、足をバルトフェルド側が用意した為、信頼できるジャンク屋に預けている。

「もう少しで出発か」

シャトルに乗り込んだシンはG軽減シートのベルトを締めつつ、呟く。

「ですね……まだまだ指定されたL1宙域までは遠いですが」

「まあ、そこまでの足はクライアント側が用意してくれるんだからありがたいよ」

隣のシートで出発を待っているアビーに答える。

彼女は妙に楽しそうな笑みを浮かべていた。

「それにしても廃棄されたコロニーを拠点に……まるでA. D. 時代の特撮フィクション作品みたいですね」

「特撮フィクション作品？」

「ええ、A. D. 時代の日本ではそういった作品をよく作っていたんですよ、ヒーローが地下に秘密基地を作ったりとか！」

「なるほどね、廃棄されたコロニーを秘密基地につて？」

「そうですっ！カッコいい……あつ、すいません、熱くなっちゃいました」

アビーが恥ずかしそうに視線をそらす。

苦笑しつつも全然、とシンは返す。

容姿端麗、自分が苦手としている事務仕事を全部やってくれている才女のアビーがたまに見せるこういった一面は彼女の魅力なのだろうなと思う。

そして少しだけ目を閉じて思考の海に沈む。

(ヒーローか……)

かつて裏切り者の上司に言われたことを思い出した。

戦争はヒーローごっこじゃない。

そんなことは分かっている。

力を持って、その力で何が守り、何を傷つけるのか。

誰を守り、誰を傷つけるのか。

傭兵となったシンはそれを常に考えていた。

そしてその答えはすでに出ている。

力なき、迫害される人達を、今平和に暮らしている人達という花を守る。

理不尽な力によって吹き飛ばさせないために。

（花を……今ある命を決して散らせない、それが俺の想いだ……奴等から見ればヒーローごっこのままなんだろうが……！）

目を開き、開いていた掌を握りしめる。

それと同時に、シャトルの搭乗員による出発のアナウンスが響く。

そしてシン達を乗せたシャトルは宇宙へと昇っていく。

アメノミハシラ 停船ドック 待機室

シン達を乗せたシャトルは大気圏を突破した後、オーブから独立の意思を示したアメノミハシラへと寄港していた。

なぜアメノミハシラに寄港しているかという点、ここで別のシャトルに乗り換えてL1宙域に向かうようバルトフェルドが指示をしていたからだ。

アメノミハシラは、オーブの五大氏族（サハク）が管理する軍事宇宙ステーションであり、現当主「ロンド・ミナ・サハク」が統治を行っている。



適材適所に人材を配置し、新型MSの開発も行える工場等の設備も整っている。

もはやもう1つのオーブ政府と言っても過言ではなく、ヤキンドゥー工戦役時にオーブが陥落した際は、ここに身を寄せた者は決して少なくなかった。

また現在とはある理由により難民となったオーブの民の受け入れも行っている。

「何か結構豪華な待機室だな、シン」

「ん、ああ、そうだな」

ヴィーノの言葉に生返事を返す。

ドック内に設けられた待機室で赤鳥傭兵団はシャトルの乗り換えを待っていた。

アメノミハシラにも話を通っているらしく、スタッフによって手際よく案内されていたのだ。

「お待ちせいたしました」

スタッフの声と共に待機室のドアが開く。

ドアの先には、身長190cmに迫る長身に黒い長髪の美女が立っていた。

黒のマントの様なサハク家の装束を身につけた様はまさに女傑と言える。だが胸部には豊かな果実を実らせ、容姿は下手なモデルなど比べ物にならないレベルだ。

充分に女性的な魅力も兼ね備えている。

シンはその人物をよく知っている。

元オープの住人ならばテレビでよく見かけた顔だからだ。

「[ロンド・ミナ・サハク]……っ!？」

そう、待機室に現れたのはアメノミハシラのトップ、[ロンド・ミナ・サハク]であったのだ。

「元ザフトのトップエース……[シン・アスカ]か」

ミナはシンを見定めるような視線で見た後、フツと笑みを浮かべる。

シンもこの数年で身長が180cmを超えるまでに成長していたが、それでもミナの方が大きいため見上げる形となる。

「何の用でアンタみたいなトップが……?」

「なに、極めて個人的な理由だ」

不敵に笑った後、その笑みを消し去ったミナがシンから視線を外さずに続ける。

「ヤキン戦役のオーブ侵略戦、国家の宝である国民に犠牲を強いたオーブ政府に変わり謝罪したい」

そういつてミナが頭を下げた。

その様子にシンを含め赤鳥傭兵団、そして同席しているカナードも目を見開いて驚愕の表情を浮かべる。

「えっ、いやっ、突然何を……っ!?!」

まさかいきなり頭を下げられるとは思ってもみなかったシンは取り乱しながら告げる。

「シン・アスカ、お前はオーブ侵略戦の際に両親と妹を亡くしたと聞いている……氏族としてすべき責任を放棄していた私はアスハの小娘と同じ愚者だ、故の謝罪だ」

頭を上げたミナが告げ謝罪の経緯を語る。

連合によるオーブ侵略の際、ミナは双子の弟であるロンド・ギナ・サハクと共に宇宙にいた。

当時の2人は連合に秘密裏に協力し、オーブ侵略の混乱で政敵となる輩が全ていなくなるのならば好都合とまで考えていた。

言うならばサハク家だけに固執していたのだ。

その後、最強の傭兵である叢雲劾、ジャンク屋であるロウ・ギユールと出会ったことによりギナは死亡。

ミナは自身の考えを改める機会を得たのだ。

国は領土などではなく、そこに住む民。

現在のミナはそれを信条としてアメノミハシラを統治している。

「……貴女は命の事をちゃんと考えてるんですね」

「当然だ、余はこのアメノミハシラに集うオーブの民を導き守る為にいる」  
「……元国民としてそれを聞けただけで充分です、ありがとうございます」

少しだけ笑みを浮かべたシンはそう言って軽く会釈した。

その後乗り換え先シャトルが到着し、赤鳥傭兵団の搭乗が完了後、アメノミハシラを出発した。

カナードについては傭兵部隊X母艦であるオルテュギアがアメノミハシラに到着し、そちらに乗船し同行している。

その様子をミナは私室から眺めていた。

「……カガリよ、お前は彼のような存在からいつまで目をそらし続けるのだ？」

地上の故郷を治める氏族の少女に届かない言葉を投げる。

現在のオーブはカガリ・ユラ・アスハが父であるウズミから継承したオーブの理念に基つき中立の立場をとっている。

だがその実はプラントの傀儡、プラントの保護国や領地と言ってもいい有様である。元々オーブではナチュラルとコーディネーターはある程度共存できていたのだが、こ

こ数年でオーブにもコーディネーター優遇の政策が執行されはじめており、ナチュラルの国民の流出が相次ぎ、人口比率はプラントから移り住んだコーディネーターが多くなってきている。

またモルゲンレーテにもプラントのファクトリーの手が伸びているとの噂も上がっている。

「世界は再び揺れ動く……お前は理念と民、どちらを取る？ その選択次第では……」

遠ざかっていくシャトルとオルテュギアを細目で見つつ、ミナは暗い私室で一人オーブの今後を見据えていた。

アメノミハシラからシャトルで出発して約1日後――

シリウスⅠ MS工場 アマデウス内 ミーティングルーム

シン達を乗せたシャトルはL1宙域、廃棄されたコロニーであるシリウスⅠの宇宙港に到着していた。

廃棄されたコロニーとは思えないほど宇宙港は整備が行き届いており、宇宙港からはエレカに乗せられてシン達は秘密裏に建造されたMS工場に案内されていた。

その際、隣接する形で設立されている大型艦建造施設にて建造されている大型艦を見ることができた。

かつてのデュランダル政権下のザフトでの旗艦、ミネルバに酷似した大型艦が現在施工中の様であった。

ミーティングルームの扉が開かれ、室内に入る。

ミーティングルームにはシン達他に「数人」が待機していた。

「……おいおいおい、有名人だらけじゃないか」

小声でヴィーノがシンに告げる。

彼の言葉ももつともであろう。

ミーティングルームに待機している人間は誰もがこの戦乱のC・Eでは指折りの猛者であったからだ。

南アメリカ合衆国の英雄【切り裂きエド】こと【エドワード・ハレルソン】

崩壊した旧連合のエース、【月下の狂犬】こと【モーガン・シュバリエ】

テストパイロット時代からの付き合いであり、行方不明となっていた【コートニー・ヒ

エロニムス」

最強の傭兵であり、駆け出し時代に多大に世話になった【サーペントテール】の【叢雲効】に【英雄殺し】の【イライジャ・キール】

等々——錚々たる面々だ。

コートニー、効、イライジャにはかつての恩もある為軽くシンは会釈する。

コートニーは特に反応を返してくれなかったが、効は頷き、イライジャは笑みを浮かべてくれた。

「叢雲効……奴もこの依頼を受けていたのか」

部屋を見渡したカナードが呟く。

軽いショックを受けていたシン達であったが、そんな彼等に声をかけてくる者がいた。

「シン！ シン・アスカっ！ やっぱり来てくれたんだな！」

褐色の肌に赤のタンクトップとボロボロのジーンズを身につけたボーイッシュな少



女——いやすでに一人前のレディと言える年齢だろう。

年齢は17歳くらいであろうか、適度に括れたボディラインにタンクトップを盛り上げる2つの丘。

かつて連合に占拠されたガルナハン解放作戦の際に協力してくれた現地レジスタンスの少女。

幾分か、いやかなり成長しているがシンやヴィーノは彼女に見覚えがあった。

「お前、コニールかつ!？」

「ああ、久しぶりだな、シン、ヴィーノ！」

シン達に声をかけたのはガルナハンの少女、コニール・アルメタであった。

「あつ、ああ、随分と久しぶりだな、コニール」

太陽に近いL1宙域に建設されたシリウス1はコロニー自体に対策がされているが、平均気温がL5やL4に建設されたコロニーよりも高い。

彼女が薄着でいる理由はわかるが、以前よりも成長して女性としての魅力が高くなっ

た身体に、タンクトップ姿は色々と目のやりどころに困ると言うのがシンとヴィーノの本音であったが。

「女らしくなっちゃってまあ……いつ!？」

「あ、すいません、足が思いつきり滑りました」

「あつ、足が滑るっておまえなあ……!」

ヴィーノはいつの間にか隣にいた整備士の後輩に全力で足を踏まれ悶絶する。それを苦笑しつつシンが見ているとミーティングルームの扉が開いた。

「やあやあ、皆集まったようだね」

軽薄な口調でアンドリユー・バルトフェルドが室内に入ってくる。

ザフトの白服を着た彼に続いて、同じく白服の【イザーク・ジュール】その部下【シホ・ハーネンフース】が続けて入室する。

「……………ジュール隊っ」

アビーが呟く。

その表情は決して友好的とは言えないものであった。

理由はメサイアでの決戦の際に、ジュール隊は突如としてザフトに反旗を翻したからだ。

裏切りの理由はザフト内でも諸説唱えられているが、戦後処理の関係で有耶無耶にされてしまっていた。

アビーの視線に気づいたのかバルトフェルドが苦笑しつつ告げた。

「さて、皆色々と言いたい事があるかもしれないが、まずは『バックワード』へ……いや、今からこの名前は相応しくないな」

一度ごほんと咳払いして続ける。

「歌姫の騎士団に反旗を翻す【反歌姫の騎士団連合】……【ネオ・ザフト】へようこそ、歓迎しよう」

## 過去編⑤ 蘇る翼

「さて、これから僕達は現ザフト陣営に電撃戦による強襲を仕掛ける、傭兵である君達はこの3名を討ち取ることを第一に考えて欲しい」

バルトフェルドの言葉と同時に彼の背後にいた女性士官が手に持っていたタブレットを操作する。

すると背後にあつたモニターに映像が移る。

そこに映るのはシンにとっては因縁の相手達であつた。

C・E・の聖剣伝説とも言われるMSパイロット、「キラ・ヤマト」

無限の正義の体現者であり理想の軍人とも言われる、「アスラン・ザラ」

2度の大戦を終結に導いた、現プラントのトップである平和の歌姫、「ラクス・クライン」

「キラ・ヤマト、アスラン・ザラ、ラクス・クライン……今のザフトはこの3人に支えられているといってもいい、この3人を討ち取れば僕達の勝利だ」

彼がそう告げるがシン達の表情は暗い。

その理由は――

「ちよつと待つてくれ、まずどうやってその3人を引つ張り出すんだ？」

叢雲劾の隣にいた美形のコーディネーターであり、傭兵としてのシンの先輩でもある「イライジャ・キール」がバルトフェルドに質問する。

そして劾も口を開く。

「それにその3人を引きずり出せたとして、MSや戦艦の相手はどうする？ 戦力比率は絶望的はずだ」

そう、どうやってこの3人を引つ張り出すかである。

メサイア戦役時とは異なり、今の彼らは軍のトップや重要職についている。

そして効の言うように仮に引きずり出せたとしてもザフト全軍と相對することになるのだ。

「戦力比についてだけど、ここにはコーディネーターだけではなくナチュラルの同志もいるからね、そうでしょう、モーガン氏、エドワード氏？」

バルトフェルドがそう言つて壁際に立っていた【切り裂きエド】こと【エドワード・ハレルソン】と、【月下の狂犬】こと【モーガン・シユバリエ】に問いかける。

エドの隣には【白鯨】の二つ名で知られる【ジエーン・ヒューストン】が寄り添うように立っていた。

「ああ、俺達には解体された連合へのコネがあつてな、今も反抗の機会をうかがっている連中ならいくつも知っている……そいつ等にもMSや型遅れだが戦艦がある、戦力比は互角とまでは行かないだろうがそれなりの数値にできるはずだ」

「そうそう、特にモーガンのおっさんは俺と違つてマジモンの英雄だからな、おっさんが声かければすぐに集まるつて奴等ばつかだぜ？」

「言つてくれるな、エド……それに俺たちの叛乱と合わせて地上でも同じように蜂起が

予定されている、そちらについても問題はない、話をつけてある」

フレンドリーな口調で話すエドに少し照れたような拗ねたように返すモーガン。

2人の回答に質問をした効はふむと納得したかのように頷いた。

「ザフト側のMSや戦艦についてはこの数年、予算不足が続いていてね」

世界から争いの種を取り除く鎮圧作戦、軍事支出増加に伴う増税に次ぐ増税。

しかしそれでも軍事支出を賄う事はできずにプラントの経済は冷え切り、一般労働者の賃金は日常生活にも貧窮するレベルまで低下してしまっている。

「だからOSやシステム周りのアップグレードが少々行われているだけで新型の開発などは全く進んでいない、ほぼメサイア戦役時と同等と考えてもらっていい。まあ、数機は新しいMSがロールアウトされているが、戦力の拡充については問題ない。さて、質問はどうやって彼等を引っ張りだすか、だったね？ それには1つ策があつてね」

そうやってバルトフェルドはシンに視線を合わせる。

「シン、君がこちらの陣営にいることを宣戦布告として流せばいいのさ」

「……俺を餌にして引つ張り出すって事ですな」

「そう、君には悪いがこれがベストだと僕は思っている。なぜなら君は彼等にとつても脅威になる存在だ、力でしか語れない彼等は必ずこちらの誘いに乗ってくる、しかも自身の手で直接ね」

彼の言葉から少しだけ悲しさの様なものが滲んでいたがそれは今は無視を選択する。

「……分かりました、ただ俺そういうのやったことないんですが」

「ああ、台本とか演出は全部こちらでカバーするから、君はただそのとおり演じてくれればいい」

台本や脚本はもうしばらくかかるようで、準備が出来次第シンによる演説の映像を撮るとの事だ。

「さて、他に質問はあるかな？」



バルトフェルドが室内の人間を見回す。  
そしてうむと頷く。

「作戦の詳細については後ほど伝えさせてもらう、それまで各々用意した部屋があるから待機していてほしい。まあ、数週間ほどかかるかもしれないが、それなりの施設は用意してるよ。それとシン、そして赤鳥傭兵団の皆には渡すものがあるからついてきてくれ」

バルトフェルドがそう言つてミーティングルームから出て行く。  
それに首をかしげながらもシン達は彼の後を追つていく。

シリウスⅠ MS工場 アマデウス内 第ⅠMS格納庫

バルトフェルドに案内されたシン達はMS格納庫に案内されていた。

その理由はMS格納庫に入った時点で判明した。

シン達の目の前に存在しているMS。

それはシン達にとってとてもよく知っているMSであつたからだ。

血の涙を流すような特徴的な頭部に、背部に備え付けられている紅い翼。

VPS装甲が搭載されているため灰色に染まった機体。

運命の名を冠したその機体の名前は――

「【デステイニー】……?」

そう、彼らの目の前にあるMSはかつてシンが搭乗していた「ZGMF-X42S  
デステイニー」であった。

「その名称は今のこの機体には相応しくないわね、シン・アスカ君」

シンの呟きに女性の声が返す。

MSの整備用モニターの前に緑髪の女性が立っており、その女性がシンに話しかけてきたのだ。

「貴女は……?」

「私はロミナ、【ロミナ・アマルフィ】……このMS、【ZGMF-X42NEX デステイ

ニーガンダム・ヴェステイージ」の開発責任者よ」

「アツ、アマルファイってあの、「NJC」を開発した「ユーリ・アマルファイ」のっ!？」

MS整備士であるヴィーノがロミナの名前に反応して大声を上げる。

彼の隣で後輩整備士も驚いた顔をしていた。

MS整備士の為技術的な造詣が深い彼等にとつてその名前は特別なものだ。

C・E.では「NニユートロングヤマーマーJ」によつて核動力が使用できない、だがそれを無効化して核を使用可能にできるのが「NニユートロングヤマーマーセンターC」である。

それを開発したのはロミナの夫、「ユーリ・アマルファイ」であるのだ。

「ええ、ユーリは私の最愛の夫よ」

「でも確かユーリさんは……あつ、すみません……」

「……いいのよ、それが事実だから」

ヴィーノが思い出したかのように謝罪する。

ユーリ・アマルファイはすでに故人であるからだ。

その死因は自殺、一説によればNJC搭載MSが強奪されたため精神錯乱を起こして

の自殺とも言われている。

「……もしかしてこの機体を俺に？」

「ええ、貴方しかこの機体を託せる人はいないのよ、シン君」

シンを見つめるロミナの目に負の感情が宿るのをシンは見逃さなかった。

その感情は憎悪、おそらく復讐の為にこのMSを作り上げたのだろう。

「歌姫の騎士団の二振りの剣を叩き折ることができるのは貴方しかない、このMSを使つて頂戴、シン君」

「……分かりました」

しかし受け取らない選択はない。

正直現在のの搭乗機体であるウイングダムではストライクフリーダムやインフィニットジャステイスを相手にするのは無理がある。

だがデステイニーならば勝率は跳ね上がる。

シンの返答を聞いたロミナの顔に笑みが浮かぶ。

40代とは思えないレベルで若々しいと赤鳥傭兵団の数名が内心考えたが話は進んでいく。

「それではこの機体のスペックの説明をしますね」

ロミナからこの機体、「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」の詳細スペックが説明されていく。

機体の最大の特徴はデステイニーのコンセプトであった「1機で全領域を対応する機体」から「超高速機動による強襲」に変更されている点だ。

機動力を極力損なわないために「アロндаイト」や「高エネルギービーム砲」は取り外されており、対MS戦を重視しているためか取り回しのいいビームサーベルが装備されている。

また背部の大型機動翼「Vルユニット」は光圧推進機能しか搭載されていなかったデステイニーの近似種とは異なり、エネルギー操作機能が搭載された正真正銘のVルユニットとの事だ。

「シン君、君はこの数年ウインダムで傭兵を続けていたのですか？」

スペックを確認しているとロミナがシンに尋ねてきた。

「ええ、ウインダムは素直な機体でしたよ」

「確かに連合のMSの中では良作ともいえませんが……デステイニーと同レベルの超高機動戦闘はメサイア戦役後からないという事ですね？」

「……ええ、つまりは身体を慣らせてことでするか？」

「はい、訓練の申請はバルトフェルドさんに……あら、イザーク君？」

ロミナがふと視界に移った白銀の髪にザフトの白服を纏った青年に声をかける。

「イザーク・ジュール」、ザフトでも指折りの部隊であった【ジュール隊】を率いていた人物だ。

「ロミナさん、少々彼らをお借りしたい」

「……ええ、私はいいけど……」

チラリとシン達に視線を合わせる。

「いいですよ、ちょうど話もしておきたかったですから」

シンが横目で仲間たちを見る。

アビーを筆頭に何名かが顔に怒りの感情を浮かべていた。

「感謝する、ならば着いてきてくれ」

「シン君、終わった後にガンダム慣らし、お願いしますね」

ロミナの言葉に頷いた後にイザークの後についていく。

---

シリウスⅠ MS工場 アマデウス内 レクリエーションルーム

シン達はデステイニーを受領した後、レクリエーションルームに集められていた。その理由は共に戦う人物を見極めたいためだ。

「久しいな、シン・アスカ」

「イザーク・ジュール隊長……でよかったですかね？」

白銀の髪にザフトの白服を纏った青年、「イザーク・ジュール」にシンが返す。

「……もう隊長ではないな、だが共に戦う仲間として……」

「私は信用することはできませんね」

嫌悪の感情が多分に込められた視線と共にアビーの言葉がイザークの言葉を断ち切った。

「彼等はメサイア攻防戦の際にこちらの陣営を裏切っています、今回も裏切らないとは限りません」

「アビー……」

シンもヴィーノもその他団員もそれは同じ気持ちであった。

メサイア攻防戦の折、イザーク率いるジュール隊は当時のデュランダル政権下のザフト軍を裏切って歌姫の騎士団側についている。



ジュール隊の裏切りの真相は未だに闇の中とされ、様々な噂が飛び交ったこともあったが結局は有耶無耶になっている。

「……そういわれても仕方のない事をしたのは分かってはいたが、実際に言われるとまた……きついな」

イザークが自嘲の笑みを浮かべつつ口を開く。

彼の隣で副官であるシホ・ハーネンフースの表情が曇る。

「あのとぎの裏切り……部下の為と言っても信用されようもないか」

「部下の……為？」

「……ああ、メサイア攻防戦が始まる前にクライン派、つまり歌姫の騎士団側から接触を受けてな、ザフトから寝返りこちら側につけば今後の進退は約束するとな」

当時を思い出すかのようにイザークは瞳を閉じる。

「当初は突っぱね、参戦した。議長にはかつて救ってもらった恩義があつたからな……」

だが新型フリーダムとジャスティス、歌姫の騎士団の戦力によるメサイアの陥落は目に  
見えてしまった」

瞳を開いたイザークが再度シン達を見つめる。

「多数の部下の命と進退、議長への恩義……俺は部下達、こんな情けない男についてきて  
くれた部下を選択したのだ」

語られた真相にシンやアビーの口から言葉は出なかった。

軍と傭兵、職は違うがシンやアビーも赤鳥傭兵団のトップと幹部である。

部下の今後の為、彼が相当悩んだことも理解できたからだ。

「……アビー」

「なんですか、シン?」

少々不機嫌そうにアビーはシンを見つめる。

「……俺はイザークを仲間として信用するよ」

「……裏切られない保証はないんですよ？」

「それでもだよ、俺はイザークがちゃんと周りを見れてる人間だって思う、それに万が一裏切ったら……俺が彼を落とすよ」

「……分かりました、分かりましたよ、シン」

シンがアビーに告げるとアビーも渋々と了承の意を返す。

それにニコツと笑みを浮かべるとシンはイザークに視線を移す。

「イザーク、こっちは信用するって決まったよ」

「……本人の目の前で言ってくれるじゃないか、シン・アスカ」

「……それくらいの覚悟があつてのことだろ？」

「当然だ、俺が不審だと思つたら迷わず落とせ、シン」

「分かった、よろしくな、イザーク」

シンが右手を差し出す。

それに答えてイザークも右手を差し出し、握手する。

「そういえば、エルスマンとかいう副隊長はどうしたんだ？」

その様子を見ていたヴィーノが思い出したかのように告げる。

「ヤツは……」

ヴィーノの言葉にイザークの表情が曇る。

それを察してかシホが代わりに口を開いた。

「エルスマンにはいません、彼は歌姫の騎士団側に付きました」

「あれ、でも確かジュール隊長とそのエルスマンって人は相棒だったんじゃない？」

「……ええ、そうです、ですが彼にも守るべき人がいるんですよ、それが歌姫の騎士団側だった、それだけです」

「……そっか、分かったよ」

ヴィーノがシホの言葉に頷いて答える。

「シン、そういえば受領したデステイニーの慣らしは済んでいなかったのではないか？」

「ああ、この後カナードか効さんに頼もうかと思ってた」

「……ならその慣らし、俺が手伝おう」

「え、イザークがか？」

「ああ、俺にも【新型】があつてな、俺もまだ慣らしが済んでいなかったのだ、どうだ？」

イザークの言葉に少し考えたシンであつたが頷いてから答える。

「……なら手伝ってもらうかな」

「そうか、ならば1時間後に第3区画を訓練用に申請しておこう、ビーム兵装は外して置けよ」

「分かった」

そうやってシンとイザークはMS用格納庫に向かう。

シリウスⅠ MS工場 アマデウス内 第1MS格納庫

『シン、申請が通りましたので出撃可能になりました』

通信コンソールに映るのはアビーだ。

やはり顔見知りであり信頼できる仲間である彼女がオペレートしてくれるのは安心できる。

『分かった』

返答と同時に起動のシークエンスを開始していく。

コックピット内の各種コンソールが起動して点灯していく。

システムの起動共に中央のディスプレイがポップアップして、OSが起動していく。

G u n n e r y

U n i t e d

N u c l e a r

D e u t e r i o n

A d v a n c e d

Maneuver

System

Ver. 2.52 Rev. 32

ZGMF-X42NEX DESTINY GUNDAM VESTIGE

OSの起動が確認され、デステイニーはカタパルトに向け移動が開始される。

訓練区画のカタパルトに接続されたことを確認したシンは繋がったままであったアビーにコールする。

『アビー、またこれからよろしくな』

『ええ、当然ですよ、シン……それでは発進どうぞ』

アビーの言葉と同時にコンソールに各種コンディションOKが表示され、出撃可能状態に移行した。

『シン・アスカ、デステイニーガンダム・ヴェステイジっ！ 行きますっ！』

シンのコールと共にカタパルトからデステイニーが射出される。

同時に全身のVPS装甲に通電され、デステイニーは灰色から姿を変える。

全身の装甲が黒色。

特徴的な大型Vユニットの機動翼や一部関節装甲はまるで血の色の様な紅色に。

スラスターを全開にしてデステイニーはコロニーの空を翔る。

正義の剣に叩き折られた翼はこの日——この瞬間、傷跡の名を背負って再び蘇ったのであった。



## 過去編⑥ 最後の力

——時は過ぎて

May. 30. C. E. 80

プラントの工業生産コロニー、中でも軍需工業の中核であった「アーモリー・シテイ」が謎の武装組織の決起によって占領されたというニュースが、プラント本国の首都コロニー「アプリリウス」に飛び込んできた。

プラント軍及び政府にとっては完全に寝耳に水の事態であり、事実確認が後手後手になってしまった頃、あらゆる商業帯のTV映像メディアがハッキングされ、とある映像が全世界に放送された。

『突然のゴ無礼、お許しいただきたい』

映るのは顔に大きな傷を持つ戦士、アンドリユー・バルトフェルド。

現ザフトの黒服を改造し、長い丈のマントを身につけた制服の彼が両手を掲げながら叫ぶ。

『私達は反歌姫の騎士団連合、ネオ・ザフト。つい先ほど、L4のコロニー【アーモリー・シテイ】を占拠しました』

背後のモニターには無残にも破壊されたMSの残骸、コロニー警備隊に所属しているMSであるザク・ウォーリアがガンダムタイプMSに破壊される映像に移り変わる。

ザクのコックピットにビームサーベルを突き刺したその黒と紅のMSは、プラント側の母艦でもあるナスカ級戦艦に背部の光の翼を煌めかせ、急接近。

そのままブリッジにサーベルを突き立てて敵旗艦を無力化する。

『我々は歌姫の騎士団の偽りと欺瞞に満ちた世界を変える刃であるっ』

モニターの映像が切り替わる。

映るのは母なる大地である地球。そして現在地球で行われているプラント主導の鎮圧作戦によって壊滅した街の映像に切り替わった。

『この映像はほんの一部、地球で暮らしている方々の中には実際に体験された方も多く、

これは氷山の一角にすぎません』

次々に映像は変わっていく。

砂漠地帯の集落を護衛するMS、地上のプラント軍MSによって家屋を破壊される場面、落下してきたMSのコックピットハッチをこじ開けて銃火器を乱射する男性の映像――。

『彼等は力を振りかざすことしかできないつ、そしてその力で薙ぎ払ってからこういうのだ、自由の為、平和の為だつ、この映像はその結果だつ！』

バルトフェルドが言うとおりの理性的な人間ならば、先ほどの映像を見て今の世界が平和で自由などとは口が裂けても言えないだろう。

『我等は歌姫の騎士団を決して認めない、いや人類は彼らを認めてはならないのだ』

芝居がかかったような演説であるが、バルトフェルドが込める熱気を演説を見ている市民たちは十分感じている。

『疲弊していく地球の国家やプラント、次第に困窮していく人々の生活……この混沌とした地球圏のどこが自由だ、どこが平和だというのかっ！ 故に我等は立つのだっ！ 普遍の正義と自由を奴等から取り戻す時が来たのだっ！』

背後のモニターが漆黒の宇宙空間に変わる。

そしてその漆黒を切り裂く紅い光がモニターから溢れ、次の瞬間には大きな光の翼を広げるMSが現れた。

その名は——『デステイニーガンダム・ヴェステイージ』

血の色の様に紅い光の翼を広げたその姿は、まるで神話の中の悪魔や魔王のように見えた。

『我等の元には偽りと欺瞞を切り裂く剣があるつ、決して折れない戦士は我等と共に立ち上がった！』

バルトフェルドが右手を握りしめて掲げる。

『私はこれを人類にとつての最後の戦いにしたいっ！ 全ては、人類の……命という花を守る為につ！』

『『全ては人類の真なる平和の為にっ！！』』

シュプレヒコールはネオ・ザフトが占領し、管理下においたアーモリー・シテイ全体から止め処なく溢れ続けていた。

ここ以後の歴史書に「ネオ・ザフト戦役」または「シン・アスカの逆襲」と記載される叛乱の火蓋は切つて落とされたのだった。

L5 プラント首都コロニー アプリリウス 大統領官邸 執務室

「バルトフェルドさん……どうして、こんな……」

録画された映像を見た現プラント国防軍大統領親衛隊隊長であるキラ・ヤマト中将は弱々しく呟いた。

それも致し方がないだろう、何故ならば彼にとつてバルトフェルドは身近にいる数少

ない理解者の1人であったからだ。

勤務態度にも特に気になる点は見られなかった。

つい1ヶ月前にもプライベートで会食をしたばかりであったのだ。

その際にキラの仕事に対する愚痴まで聞いてくれたのだ。

余談であるが、現在のザフト軍は国防軍としての立場にあり、明確な階級体勢がしかれている。

また大統領の立場にあるラクスは、国防軍としても最高指揮官の立場にあった。

「何故だ、何故彼等は争いを起こすんだ！ それにあのMS……あれはシンだろうっ！」

キラとは異なり、理解できないと感情を露わにしながら現オーブ軍MS部隊総隊長のアスラン・ザラ少将が告げる。

オーブとプラントは癒着ともとれるほど密接な関係になっている。

だがそのため将官でもあるアスランを守るべきオーブを離れてプラントにいても何ら問題はないという、軍組織としてはお粗末な事になってしまっているが。

「シン・アスカ……確かメサイア戦役後はザフトを退役し、行方不明になっていたと聞き

ましたが」

「噂では傭兵として戦っていたとも聞いていたが……こんな形で再会するとは思わなかったよ」

「……どうして戦うんだろう、彼等は」

「彼等は憎しみの連鎖に縛られているのでしよう、キラ」

ラクスが悩むキラに告げる。

「きっと彼等はまだデュランダルの言葉を信じているのでしよう」

「アイツはいつもそうだっ！ 過去に囚われて未来を蔑ろにする……っ！」

「ラクス、僕は戦うよ」

「……分かりましたわ」

キラの言葉を聴いて、ラクスは手元のコンソールを操作する。

壁に埋め込まれたモニターに移るのは白服に眼帯姿のザフト士官【ヒルダ・ハーケン少将】

『ヒルダさん、最高評議会議長そしてザフト国防軍最高指揮官として命じます、ザフト全軍を持って叛乱軍の鎮圧を。それとエターナルとアークエンジェルの準備を』

ラクスがエターナルとアークエンジェル、かつての3隻同盟に所属した2隻の戦艦を準備せよという指示を出すことは特別な意味を持つ。

それは現在のザフトの最高指揮官である自身、自らの出撃を意味している。

『これ以上の被害が出る前に反乱軍を討ちます』

『了解いたしました、全軍を持って叛乱軍を撃滅いたしますっ！』

敬礼したヒルダとの通信が切れる。

キラとアスランが執務室を飛び出していく。

それを確認したラクスが、ふうと息をついて呟く。

「……ふう、まさかバルトフェルドさん、貴方が私に反旗を翻すとは思いませんでしたわ」



浮かぶのは笑み。

ラクス的心中には喜びが満ちていた。

それが笑みと言う形で彼女の顔に現れているのだ。

「ああ、戦争が始まるのですね……素敵ですわ」

駒たちはすでに動き始めている——2日以内には戦闘準備が整うだろう。

「世界は私のモノ、私は世界のモノ……愚かな貴方達の命を使って、私の正しさを証明させてもらいますわ」

静かに笑みを浮かべて歌姫は戦乱の時を待っていた。

時間は少々戻り——

M a y . 2 9 .  
C . E . 8 0  
L 1  
コロニー シリウス1 第1軍港内

C・E・79にシン達、赤鳥傭兵団を含め多数の傭兵、連合の残党達を取り込んでいたネオ・ザフトだが、約1年にわたって行動を起こさず潜伏していたのは理由があった。もちろん傭兵達の連携や補給、その他もろもろの準備に時間がかかったのもある。だがその一番の理由、それは現在シン達が搭乗する戦艦の完成を待っていたのだ。かつてシン達が搭乗したミネルバの後継戦艦であり、ネオ・ザフトの旗艦。

その名前は「改ミネルバ型 ミネルバⅡ」

ミネルバにあった利点と問題点を再度分析、改良することで新たに生まれ変わった強襲戦艦だ。

かつてのミネルバとシルエットや武装はほぼ同じだがいくらかの変更点がある。

インパルスの運用を前提にしたミネルバの特殊カタパルトは撤廃されている。

また艦首部分に存在しているエッジ状の金色のパーツが装備されていた。

そのミネルバⅡの艦長室で、シンはミネルバⅡの艦長である人間と相対していた。

ザフトではなく連合の士官服を改造した白服を身に着けた男性士官は笑みを浮かべてソファに座り込む。

相対するシンにチューブ型飲料パックを手渡す。

「あいにく紅茶派でさ、いいかい？」

「ありがとうございます……美味しいですね、紅茶も」

「紅茶は深いぞ？　こんなパックでも充分な味が出せるんだから……まあ、ちゃんと淹れたものとは月とスポンだけどな」

「俺、コーヒーばかりでしたから……それに、バルトフェルドさんに付き合わされてましたし」

「はは……彼のコーヒーは当たり前外れが大きいのによくもまあ……」

苦笑を浮かべた男性士官——元連合、不沈艦と呼ばれた「アークエンジェル」の操舵主であった「アーノルド・ノイマン」だ。

「それでノイマンさん、俺を呼んだ理由って？」

「……明日にはアーモリー・シテイの占拠作戦にバルトフェルドさんから宣戦布告……決戦が始まる、その前に君に謝っておきたいことがあったからな」

「謝る……？」

「ゲステイニーへの習熟訓練やコロニーへの工作活動等を行っていたため、ノイマンと

は面識がなかったシンは突然のことに戸惑う。

「かつて、ヤキンの時のオーブ戦、俺もあの戦いには参加した」

「……アークエンジェルですよね」

「ああ」

ノイマンが当時を思い出して顔を顰めながら進める。

「あの時、アークエンジェルやフリーダムはオーブ軍に協力した、だがそのせいで連合に余計な刺激をしてしまったのは確かなんだ……開戦まで民間人の避難を完了させておかなかった当時のオーブ政府に言いたいこともあるがな」

「……」

「その混乱のせいで戦線は混乱し後退、君たちの様な民間人に被害が出てしまった……謝って済む問題ではないが、すまなかった」

ノイマンが立ち上がってシンに頭を下げる。

それを見たシンもあわてて立ち上がる。

「やつ、止めてくださいよ、俺はノイマンさんをどうにかするとか思ってもないんですよっ!？」

「いつの間にかラクスの私兵扱い、メサイア戦役でもそうだったんだぞ？」

「……それでもすよ」

「君達からすれば立派な加害者のはずだがな……だがケジメつてのは付けておきたかったんだ、ここにはいないマリユ・ラミアスやムウ・ラ・フラガに代わってね」

かつての上官である人物の名を唾棄するかのようにノイマンは言う。

「あの2人は大人としての責任を放棄してのうのうとプラントで暮らしている……本来俺達はキラやラクスに軍人としての教育をするべきだったのにな……そしてもう取り返しがつかない段階まできている。だから俺はケジメとしてアークエンジェルを落とす。君にそれを聞いて欲しかったんだ、自己満足だと笑ってくれ」

「……笑いませんよ、ノイマンさん」

ノイマンの言葉を聴いてシンが困ったような表情を浮かべる。

「……そうか、ありがとう、シン」

ノイマンがそつと右手をシンに差し出す。

それを握り返してシンは笑みを浮かべる。

ふとシンが何かを思いついてノイマンに告げる。

「そうだ、この戦いが終わったら紅茶飲ませてくださいよ、美味しいんでしよう、ちゃんと淹れた紅茶って」

「……ああ、そうだな、とびっきりのヤツを淹れてやるよ」

「アビー達にも伝えておきますね」

「ちよ、何人分淹れるんだよ、紅茶って結構高いんだぞ？」

ノイマンが本気で慌てたようにシンに告げ、それにははつとシンは笑みを浮かべた。

---

そして――

June 1. C. E. 80 L5宙域 ミネルバII 格納庫内

現在この宙域では、「反歌姫の騎士団連合」と「歌姫の騎士団」との最終決戦の火蓋が切つて落とされようとしていた。

大戦後に解体された旧地球連合の戦闘艦、そして「ミネルバII」を旗艦として構成されたネオ・ザフト艦隊。

過去の大戦で不沈艦の名を知らしめた「アークエンジェル」と歌姫の搭乗艦「エターナル」を旗艦として構成された、歌姫の騎士団改め現ザフト艦隊。

両陣営の艦隊から次々にMSが発進していく。いつ、戦闘が始まってもおかしくない状況だ。

そんな中2機のガンダムタイプのMSが出撃準備を行っていた。

そのうちの1機はデステイニーの改良機である「デステイニーガンダム・ヴェステイジ」

そしてもう1機――

かつてザフトが連合から強奪した1機、決闘の名を持つ「デュエルガンダム」に酷似したMS。

灰色の全身からP S装甲機である事がわかる。

『シン、先に出撃しているぞ』

イザークがそうデステイニーに通信を送る。

その間も機体はカタパルトへ運ばれていく。

『判った、イザーク、よろしく頼むよ』

『当然だ』

ふつと笑みを浮かべたイザークが搭乗するMSがカタパルトに接続される。

するとMSの背部にインパルスのシルエットに酷似したバックパックユニットが接続された。

ユニットには大型機動翼が4つ、それに加えて大型のスラスタが装備されている。

『出撃どうぞ』



オペレーターであるアビーの声と同時に各種コンディションOKが表示され、出撃可能状態に移行した。

『イザーク・ジュール、〔トリーズンデユエルガンダム〕、出るっ！』

イザークのコールと共にカタパルトからデユエルが射出される。

同時に全身のVPS装甲に通電され、灰色の身体は色彩を持つ。

形式番号〔ZGAT-X102-NEX TREASON DUEL GUNDA  
M〕

機体名称〔トリーズンデユエルガンダム〕

それがイザークが駆る新型MSだ。

全てのGATシリーズの基礎とも言え、イザークも搭乗経験の長かったデユエルガンダムのデータを用いられて開発されたMSである。

拡張性・運動性の高さが長所であるデユエルガンダムの対MS戦、対高機動戦闘能力を高めたのがこの機体である。

また背部の機動翼はドラグリーン機動翼であり、遠距離攻撃・オールレンジ攻撃にも対応できる万能機体だ。

だがその分操縦難度は高く、ネオ・ザフトでもこの機体を完璧に操れるのはイザークなどの一握りのエースだけだ。

オリジナルのデュエルと同じく白と青に機体は染まり、背部のバックパックから得られる爆発的な推力で宇宙を駆けていく。

『シン、聞こえていますか』

『聞こえてるよ、アビー』

デステイニーのコンソールを弄り、最終調整を完了させたシンが通信先のアビーに返す。

同時にOSが起動される。

G u n n e r y

U n i t e d

N u c l e a r

D e u t e r i o n

A d v a n c e d

M a n e u v e r

S y s t e m

V e r . 2 . 5 2 R e v . 4 5

Z G M F | X 4 2 N E X    D E S T I N Y    G U N D A M    V E S T I G E

『すでに両陣営はMSを含めて展開済みです、順次出撃をお願いします』  
『分かった、作戦通りでいいんだよな?』

シンの言う作戦とは単純な囮作戦だ。

自分自身を囮にして最高戦力の1人をおびき寄せ、相手にする作戦だ。

『はい、シンはまずアスラン・ザラを相手にしてください』

『……判ってる、あいつ等の分断はカナードとイザークの役割だったな』

『はい、彼等の部隊がキラ・ヤマトとアスラン・ザラを分断、足止め部隊がアークエンジンを押さえ、高速機動と対MS戦闘に秀でたデステイニーで各個撃破します』

彼女の言葉に頷くと、デステイニーがカタパルトへ運ばれていく。

『シン、最後の戦いにしましょう』

彼を激励する彼女の言葉、モニター越しの彼女は薄く笑みを浮かべている。

それにサムズアップで返す、同時に各種コンディションOKが表示され、出撃可能状態に移行した。

『シン・アスカ、デステイニーガンダム・ヴェステイージっ！ 行きますっ！』

シンのコールと共にカタパルトからデステイニーが射出される。

同時に全身のVPS装甲に通電され、デステイニーは灰色から姿を変える。

全身の装甲は黒色に、その翼は血の色の様な紅色に。

スラスターを全開にしてデステイニーは戦場を翔けていく。

## 過去編⑦ 失敗作VS成功作

『シンは出撃しようだな』

『ええ、そのようです』

カナードの呟きに彼の副官的な人物であるメリオルが反応する。すでにドレッドノートHは出撃しており、宙域で待機していた。

『ミネルバIIより通信。全艦増進し、第1戦速で艦隊戦に移行との事です』

『分かった、オルテュギアを頼む』

『分かりました、カナードも気を付けて』

頷いて通信を切り、ドレッドノートのスラストターを点火させて戦場に向かう。

ドレッドノートに続いて、紅い機体、二振りの対艦刀を持った〔ソードカラミティ〕と蒼い光の翼を背負った機体〔ステイニーインパルス3号機〕、そして3機のウインダ

ム、3機ともエールストライカーを装備したタイプだ。

『小隊メンバーは俺に続け』

『まさかお前と一緒に組むことになるとは思わなかったぜ、カナード』

NJによるジャミングの影響が少ないためか、分隊通信は比較的クリアに通っていた。

『エドワード・ハレルソン、頼りにしている』

『おつ、珍しいな、お前が他人を頼るなんてよ。なあ、コートニー?』

『少し口数が多いぞ、すぐに戦場だ』

『わっかんねーかなー、リラックサさせようとした俺の気持ちさがさ』

コートニーの返しにはあとため息をついたエドであったがすぐにスイッチを切り替えた。

ザフト艦隊からの一斉砲撃と同時にネオ・ザフト艦隊の砲撃が開始されたのだ。

砲撃をパルス小隊の各機は散開して回避した。

宇宙の闇を各艦の主砲から発射される高出力ビームが彩っていく。

MSも次々と戦場に到着し、各々のビーム兵器によって戦場は更なる彩りを見せていく。

『俺達の目標はストライクフリーダムの足止めと孤立だ、行くぞ』

『了解』

小隊長であるカナードの指示に小隊員全員で返答し、パルス小隊もMS戦に移行していく。

一機のザク・ウォーリアがエドのソードカラミティにビームライフルの照準を合わせる。

だがトリガーを引く瞬間、ザク・ウォーリアの両腕は飛来したビームによって消し飛ばされた。

「なっ!?!」

ザクのパイロットの驚愕の声。

飛来したビームの正体は、コートニーが駆るデステイニーインパルス3号機からの援護射撃。

デステイニーインパルスは援護射撃を行った後、すぐさま別のターゲットを攻撃目標として移動していた。

ザクのパイロットがその事に気付いた時にはすでに彼の運命は決していた。

何故ならば、ソードカラミティが一瞬で距離を詰め、二振りの対艦刀を振り上げていたからだ。

次の瞬間には、対艦刀はザクのコックピットを真正面から貫き、バックパックまで貫通していた。

刀身ビームを起動させ、そのまま振り抜いてザクを両断したソードカラミティはデステイニーインパルスと同じように別の敵機にターゲットを切り替えて爆発から離脱する。

---

「何でこの人達は……ラクスは世界の為を想っているのにつ！」



C・E・最強のMSとパイロットとして名高いキラ・ヤマトは乗機、ストライクフリーダムのコックピットで納得できない気持ちをお口にしていた。

先程からウインダムを筆頭に数十機のMSを相手にしているストライクフリーダムだがその勢いには微塵も陰りが見えない。

2丁のビームライフルの照準を接近するウインダムに合わせてトリガーを引く。

寸分違わず、照準通りに発射されたビームは5機のウインダムの四肢をもぎ取って戦闘能力を奪う。

「くっ！」

ウインダム達の戦闘能力を奪ったストライクフリーダムに上方からビームサーベルを抜いた別のウインダムが斬りかかっていた。

即座に反応した彼の操作により、抜刀からそのままウインダムの両腕を斬り伏せる。

だが両腕を斬り落としたウインダムはあろうことかストライクフリーダムに蹴りを繰り出してきた。

ストライクフリーダムはVPS装甲、ウインダムはPS装甲ではないため必然的にウインダムの方が一方的に碎かれる。

だがその衝撃はパイロットまで届いていた。

「ぐっ、なんでそこまでっ！ 貴方達はっ！」

思わぬ反撃とコックピットまで通る衝撃に一瞬固まってしまったキラであったがすぐに立て直して、サーベルでウインダムの両脚を切り落とす。

こうなつてしまえば戦闘など期待できない。

彼は未だに気づいてはいなかった。

四肢を失ったMSが宇宙空間でたどる結末など。

「っ！」

センサーに高エネルギー反応。

即座にスラストターを噴かして回避する。

回避したビームはかなりの高出力のものであり、装甲が薄いストライクフリーダムではまともに受けてしまえばただでは済まなかつただろう。

「つ、あのMS……ガンダム……？」

ストライクフリーダムを襲ったビームを放った機体。

トリコロールカラーでGタイプの頭部をもつ機体。

背部ユニットがまるで「H」の様にも見える機体。

ドレッドノートH。

『流石と言ったところか……ハレルソン、ヒエロニムス、聞こえるか』

ストライクフリーダムを狙撃したカナードは分隊通信をエドとコートニーに送っていた。

『ストライクフリーダムを引き付ける、雑魚は頼む』

『りょーかいっ』

『了解した』

エドが陽気に、コートニーは対照的に冷静に返答し、2機のMSは離れていく。

それを確認したカナードは分隊通信を切ると同時に、ドレッドノートのスラスターを噴かせる。

数瞬までドレッドノートがいた空間を、大出力のビームが薙いだ。

そして回避したドレッドノートをビームの嵐が襲う。

ストライクフリーダムからのフルバーストだ。

「その程度っ！」

フルバーストをAMBACを駆使して躲し、お返しと言わんばかりにビームサブマシンガン【ザスタバ・ステイグマト】でビームをばら撒く。

対するストライクフリーダムもAMBACでの回避に移る。

サブマシンガンから継続的に放たれる弾幕の方が厚いため、【ソリドウス・フルゴール】も併せて起動してビームを弾いている。

「この感覚……これは……っ!？」

ストライクフリーダムを操作しながらキラは困惑していた。

今まで感じたことのない感覚に襲われていたからだ。

——まるで、自分が【2人】いるような。

「君はっ、一体……っ!？」

『やはり貴様も感じているのか、【キラ・ヤマト】』

モニターに映るのは黒いパイロットスーツを身につけた青年。

その声にその顔。キラは両方とも見知っていた。

何故ならばそれは自分のモノと同じだからだ。

『俺はカナード、【カナード・パルス】、貴様と同じスーパーコーディネーター……その失敗作だ』

『僕と同じ……っ!?!』

スーパーコーディネーター。

かつて倒した怨念鬼曰く、それは人類の夢。

最高の遺伝子操作を受けた、唯一の存在。

キラはそれを誇るつもりはなかったが、無意識には驕っていた。

自分は完成された最高の存在、そんな自分が間違うはずがないと。

カナードの言葉に呆然としたのは一瞬。

迫る【光の刃】に意識を取り戻したキラは、ソリドウス・フルゴールでその光を防御する。

『君は何でっ！ 君達は何でこんな戦いを起こしたんだっ！』

ドレッドノートHとストライクフリーダムは後者の方が上回っている。

光の刃を出力差で押し切って、ビームサーベルを振りかぶる。

だがドレッドノートは回避しなかった。

光の刃——出力変更したアルミユール・リュミエールが本来の役割である【モノフェーズ光波シールド】に戻り、ビームサーベルを事もなげに防いだのだ。

『俺はシンやバルトフェルド達の様に世界を正したいとは大して思っていない。ただ俺

は自分という存在を、スーパーコーディネーターという存在にケリをつけたいだけだ。だからこの戦争に参加したっ!』

密着状態のまま背部Hユニットが操作され、ストライクフリーダムに向けられる。それに気づいたキラは即座にストライクフリーダムをドレッドノートHから離す。

しかしビームは発射されなかった。

それどころか、再度ALが刃となつてストライクフリーダムに向かつて迫つてきたのだ。

ストライクフリーダムは回避に成功した。

しかし、完全に成功したわけではなかった。

装甲が一部だけ溶けて歪んでしまっていた。

だが、戦闘行動に支障はない。

『くっ、こんな手につ!』

『この程度かっ!』

Hユニットからの砲撃と併せてサブマシンガンから弾幕を張つてカナードは後退し

ていく。

それを追いつつ、ストライクフリーダムはドラグーンを切り離す。

『君は危険だっ！　ここで……っ！』

意識を集中——キラの意識の中で「S・E・E・D」が弾けた。

ドラグーンがドレッドノートを包囲するように展開されていく。

『舐めるなよっ！』

ドラグーンとの戦い方ならばカナードも心得ている。

亡き友であるプレアとの戦いの経験。

ネオ・ザフトとしての潜伏期間に行った叢雲劾やコートニー・ヒエロニムスとの模擬戦、シミュレーションも何度も行った。

A M B A CとA Lを駆使し、ドラグーンから降り注ぐビームの雨を回避、防御してさらに後退していく。

脚部の装甲に一発だけ掠らせてしまったが、問題はない。



直後、ピピッとコンソールにミネルバⅡより簡潔な通信が入った。

その内容は、デステイニーによるインファイニットジャステイスの撃墜を確認、と言うモノであった。

後退しながらイータユニットをバスターモードに切り替える。

(シンがジャステイスを落としたか。さて、これだけ引きつければ……作戦通りだな)

すでに2機はメインの戦線から少々離れた宙域へと移動していた。

エドとコートニー、そして小隊メンバーを筆頭にして他のMSを足止め、カナードが自機を囮にしてキラの誘い出しに成功していた。

(ミネルバⅡへ通信……よし)

旗艦であるミネルバⅡへストライクフリーダムを誘い出した旨を簡潔に送信する。

イータユニットから実体弾であるグレネードが発射される。

そして数瞬遅れて、バスターモードの砲口から高出力ビームが発射され、グレネード

を貫いた。

ビームによって貫かれたグレネードは爆発を引き起こし、ドレッドノートHの姿を覆い隠す。

「爆発つ、何をつ!？」

ドレッドノートが取った行動にキラが驚愕の声を上げた。

(ミラージュコロイド起動……さて、シン、後は貴様に任せ)

カナードがドレッドノートHに外付けされたミラージュコロイド発生装置を起動させる。

ドレッドノートHの機体が宇宙空間に消えて行き、爆発によって生じた煙幕が晴れる頃には、完全に姿を消していた。

「消えた……っ!? ミラージュコロイド……っ!」

突如として消えたドレッドノートを捕捉するために、センサーを熱源探知に切り替えようとした瞬間であった。

レーダーがある機体を捉えた。

レーダーに表示されるのは、正式な型式名が不明であったため、ザフトに残っていたデータから、キラが直接マニュアルで打ち込んだ「ZGMF-X42 DESTINY」

確認した瞬間、ロックオン警告が踊る。

「くっ!?!」

『アスランは倒した！あとはアンタだけだ、キラ・ヤマト！』

宿命の戦いの火蓋は此処に再び切って落とされた。

## 過去編⑧ 友として

『テロリスト共があっ！』

1機のグフ・イグナイテッドがテンペストビームソードを構えて、Gタイプ——ガンダムタイプのMS目掛けて切りかかる。

だが、グフの斬撃は目の前のガンダム、トリーズンデュエルガンダムには届かなかった。

テンペストが命中する直前にトリーズンデュエルは自機のマニピュレータ、人間でいえば上腕でグフのマニピュレータをはじいたのだ。

当然、弾かれた斬撃は虚空を切り裂く。

『テロリストか、確かに間違っではない。だが貴様らは歌姫の言葉を絶対的に肯定して、思考を停止している。仮にもザフトを継ぐ者たちがその体たらくではなあっ！』

ビームサーベルを起動し、そのままグフを切り裂く。

切り裂いたグフから離れ、爆発が発生すると同時に機体のレーダーがこちらに向かつてくるMSを検知した。

その数はドムを中心にした15機。

だがその程度で止められるイザークではない。

「俺も甘く見られたものだな……っ！」

微笑を浮かべ、コンソールを操作する。

すると背部のウイングユニットからドラグーン機動翼が切り離され、宙域の敵MSへと群がる。

ドム達も群がるドラグーンに気づき、スクリーミング・ニンバスを展開した。

しかし、スクリーミング・ニンバスは前方を守る障壁だ。

機敏かつ精密に動くドラグーンならば、即座に無防備な背後に回ることも容易であった。

そして、漆黒の宇宙に15の爆発の華が咲いた。

『こちら、イザークだ。ミネルバII聞こえるか』

『はい、聞こえています』

ドラグーン機動翼を機体に戻し、ミネルバⅡへと通信を送る。  
通信ディスプレイに映るのはアビーであった。

『すでにインフィニットジャスティスは進路を変え、デステイニーの、シンの方に向かってようだな』

『ええ。確認しています。現在シンと交戦中です。ストライクフリーダムについてはパルス小隊と交戦しています。今のところ作戦は予定通り進行しています』

アビーが現在の戦況をイザークに伝え、彼はそれに頷く。

『了解した、こちらは引き続き戦闘を継続する』

『了解しました。ご武運を』

通信が終了すると共に、高速熱源を機体のセンサーが検知した。

「っー」

すぐさま機体を横に逸らす。

瞬間、上空から無数のビームが降り注ぎ、数瞬前までトリーズンデュエルが存在した場所を薙いだ。

そのあまりの火力に思わず冷や汗が流れた。

上方にいる機体。

それを確認したイザークは驚愕に目を見開いた。

「っ、あれはフリーダムっ!?!」

そう、こちらを砲撃してきたMS。

それは英雄がかつて搭乗していた機体であり、その活躍ぶりから最強の名をほしいままにしていたMS。

フリーダムガンダムであった。

『流石イザーク、完璧に不意打ちだったんだけどなあ』

そのフリーダムから通信が届き、通信用ディスプレイには色黒の男性が映る。彼は朗らかな笑みを浮かべていた。

『ディアツカっ、貴様かっ』

かつてのジュール隊副官、〔ディアツカ・エルスマン〕

イザークと共にヤキン・ドゥーエ、メサイア戦役を戦い抜いた人間であり、イザークにとつては数少ない心を許せる人間だった。

そしてその彼が乗っているMSの名は〔Λフリーダム〕

ストライクフリーダムの少量量産機として極力性能の低下を抑えるをコンセプトに開発されたエース用の量産MSである。

発展型V Lユニットはオミットされたが、デステイニーに搭載されていた光圧推進スラストを装備する事で機動力も原型機に近い水準であった。

それに伴いこの機体を乗りこなせるのは一部のエースのみ、ディアツカはその条件に当てはまっていた。



『△フリーダムっ！その機体に乗って出てきたということは……っ！』  
『そう言う事っ、お前等を止めなきやいけないんだよ、何としてもねっ！』

光圧推進スラスタの一部がドラグーンとして切り離され、クスフィアスを射撃位置に起こしトリガーを入れる。

フリーダム系列が伝説となった理由の1つであるフルバーストだ。

圧倒的な火力による面制圧。

それがフルバーストモードの最大の強みだ。

トリーズンデュエルはスラスタとAMBAを駆使しつつ、その火線を回避していく。

『ディアツカっ、貴様はなぜ奴らに与するっ!?!』

『そんなの決まってるでしょうよ』

トリーズンデュエルからの反撃のビームライフルを回避して、ディアツカはその答えを告げた。

『——クラインの連中に勝てるはずがないんだよ。俺たちはさ』

先程まで朗らかであったディアツカの声色は静かなものへと変化していた。

『貴様何を……っ!?!』

『メサイア戦役の時、優勢だったデュランダル議長はラクス・クラインに負けた。彼女の一声でザフトから離反する奴らは少なくなかった』

『それは……っ!』

ディアツカの言う通り、かつての戦いではラクスの言葉でザフトから離反した兵は少なくなかった。

イザークやディアツカも部下の為とは言え、その中に含まれている。

『それにただのテロ組織だったはずのあいつらがザフトの最新鋭機をも上回る性能のMSを持ってんだ、あいつらを敵に回すことはその力が自分に向けられるってことだ。俺はそれが怖い、だからあいつら側につく。ま、ミリイもいるし勝ち馬に乗るとでも言うべきかな?』

ディアツカの言い分も分かる。

一テロ組織に過ぎなかった当時の歌姫の騎士団が、ザフトや連合の最新鋭MSを超える機体を開発していた。

その圧倒的な性能を目で見たイザークは確かに恐怖も感じていた。

『貴様とて分かっているだろうっ、今の地球圏の現状をつ！それを見て見ぬふりをするというのかっ！』

『言い方を変えればそうなるな。人間だれしも自分の命が可愛いんだよ。俺はお前やシホちゃんみたいにあいつらに歯向かう気は毛頭ないんだよ』

△フリーダムドラグーンを、トリイズンデュエルがドラグーンで迎撃しつつの高機動射撃戦。

機動力だけならば、△フリーダムがトリイズンデュエルを上回っている。

だが、高機動MSとの戦い方ならばイザークも心得ている。

『……そうか、分かった。ならばディアツカ、貴様は俺の敵だっ！』

ドラグーンを射出し、ビームライフルのトリガーを引く。

放たれたビームは高速機動を続けていた△フリーダムの右脚を正確に貫いた。

右膝から下が爆発によって弾きとび、△フリーダムは大きく体勢を崩した。

『っ!?!』

追撃のビームライフルの射撃を、ディアツカは舌打ちしつつ回避していく。

並みのパイロットであるならば△フリーダムの高速機動を読みきる事は不可能だ。

だが今のイザークは違う。

ネオ・ザフトとしての潜伏期間に、仲間であるシンと幾度となく模擬戦を行った。

彼が搭乗しているデステイニーガンダム・ヴェステイジは超高速機動が可能な正式

V Lユニット搭載型MSだ。

傭兵として汎用MSを乗りこなして腕を上げていたシンと双璧を成すレベルに、イ

ザークも技量が上昇している。

ならば光圧スラスターを搭載している△フリーダムを捉える事は不可能ではなかつ

た。

だがディアツカも歴戦のMSパイロット。

ダメージによって崩された体勢をAMBACで切り戻し、クスファイアスを起動させる。

しかし、ビームサーベルを振り上げたトリーズンデュエルが既に至近距離に接近していた。

『やられるかよおっ！』

あえて、そのビームサーベルを左脚で受けるAフリーダム。

サーベルによって左脚は切り落とされてしまうが、相手の動きは止まる事になった。

互いのドラグーンはお互いを狙いつつ射撃しているが、そのうちの1基がトリーズンデュエルを捉えた。

『そらあっ！』

『ちいっ！』

スラスターを噴かせてドラグーンからのビームを避けようとしたが、反応が一瞬だけ

遅れた。

トリーズンデユエルの右脚をビームが貫いた。

幸い爆発はしなかったが、内部を焼かれたためにスラストも反応していない。

互いのドラグーンが一旦エネルギー補給の為に戻ってくる。

それを確認したイザークが叫ぶ。

『ディアツカ、貴様は俺が止めるっ、それが友としてできる最後の事だっ！』

『言ってくれるね、イザークっ！一応そっちはテロリスト側だけどねえっ！』

再度ドラグーンを射出してくる△フリーダム。

ドラグーンの数8基。

トリーズンデユエルのドラグーン4基の倍。

単純に火力もトリーズンデユエルを上回っている。

『どんな汚名もかぶる覚悟はできているっ、俺達は何としてでもあの歌姫を止めなければならぬんだっ！』

中距離、遠距離での射撃戦では△フリーダムを落とす事は困難だ。  
ならば接近し、一気に叩く。  
すでにプランは出来ていた。

『うおおおつ!!』

スラストターを全開に噴かせたトリーズンデュエル。

機体に向かって降り注ぐ緑色のビーム。

だが、それを紙一重でトリーズンデュエルは躲していく。

(チャンスは一瞬つ、意識を研ぎ澄ませっ！)

自身の持つ技術を全てつぎ込んで、トリーズンデュエルは高速で△フリーダムに向かう。

研ぎ澄まされた意識はまるで水面に落ちる一滴の水滴の様に静かであった。

迫るドラグーンはビームライフルで逐一迎撃する。

その全てが今の研ぎ澄まされたイザークの意識から逃れられずに落とされた。

そしてついに、サーベルが届く至近距離までたどり着いた。被弾は一発だけ掠ってしまったことを除いて皆無であった。だが、その動きはディアツカも捉えていた。

『甘いなっ、イザークっ！』

カウンターで振るわれた、△フリーダムのビームサーベル。

トリーズンデュエルが振り上げていた右腕をサーベルごと切り落とす。

『これで終わりだっ、イザークっ！』

ディアツカが勝利を確信した。

その瞬間、無手であるはずのトリーズンデュエルの左マニピュレータ。

正確には掌に当たる箇所から光が放たれた。

『イザ………ク………っ』



△フリーダムのコックピット横を、トリーズンデュエルのマニピュレータから伸びたビームが貫いていた。

トリーズンデュエルの両マニピュレータに装備された近接格闘用の装備。

デステイニーに装備され、現在のデステイニーガンダム・ヴェステイージュにも受け継がれた「パルマファイオキナー」の改良型。

デステイニーガンダム・ヴェステイージュに搭載されたクラレントの試作型「アガートラム」

クラレントとは異なり、ライフルモードへの使い分けはできない。

だが、その分出力だけならばクラレントのビームサーベルモードよりも高く、初見殺しとしての機能は充分にあった。

『……さらばだ、ディアッカ』

そう静かに告げたイザークの操作によってトリーズンデュエルのアガートラムは△フリーダムを一文字に切り裂いた。

切り裂かれたフリーダムから溢れた無数の火花が推進剤に引火、瞬く間に爆発が起り△フリーダムはその業火に焼かれて消えていく。

『……隊長、大丈夫ですか？』

鳳仙花のパーソナルマークが施されたグフに乗ったシホが、トリーズンデュエルのイザークに接触回線で尋ねる。

余談だが、シホが搭乗しているグフはかつてイザークが搭乗していたものを譲り受けたものである。

『……ああ、大丈夫だ。シホ、貴様は？』

『ここに来るまでに右マニピュレータを撃ち抜かれましたが、戦闘は可能です』  
『分かった。だが念のため一旦後退しろ、残りは1機でもなんとかなる』

少しだけ声が上がっているイザーク。

当然、シホはそれに気づいた。

だが彼の意思を尊重して通信に返答した。

『分かりました、隊長。お気をつけて』

グフがスラストターを吹かしてトリーズンデユエルから離れていく。シホの撤退を援護するため、トリーズンデユエルはドラグーンを展開し、迫るザク達に相對する。

イザークは無言で機体进行操作し続ける。

ヘルメットのバイザーの内側に煌く球体がいくつも浮かんでいた。

## 過去編⑨ 戦女神VS大天使

シンの駆るデステイニーガンダム・ヴェステイジーが、アスランのインフィニットジャステイスを撃墜した直後

「トリスタン、1番2番、つてえー！」

戦場を翔けるネオ・ザフト陣営の旗艦、ミネルバII。

2連装高エネルギー収束火線砲XM47〔トリスタン〕から発射されたビームは真っ直ぐ、前方に展開されたナスカ級〔ピステール〕と〔アウエイク〕の2艦を貫いた。

「続けて〔ナイトハルト〕、〔デイスパール〕っ！」

「了解ですっ！」

艦長であるノイマンの指示と共に、宙間戦闘用ミサイル〔ナイトハルト〕と迎撃用ミサイル〔デイスパール〕がミサイルハッチから射出され、迫るMSを迎撃して行く。

戦力比ではほぼ互角と見られていた戦い。

現在の勢いはシンがアスランを落としたという情報が広がりつつある状況。当然、ネオ・ザフト側に戦況は傾いている——そんな時であった。

「艦長、前方より……アークエンジェルが接近していますっ！」

チーフオペレータであるアビーがレーダーと目視による確認を終えた後、艦長席に座るノイマンに叫ぶ。

(……来たか)

かつて彼が乗り込んでいたアークエンジェルとミネルバはメサイア戦役では艦隊戦を繰り広げた。

その結果はミネルバが敗北し撃沈。

不沈艦の異名を取るかつての乗艦。

その指示を取っているのは変わらずマリュー・ラミアス。

メサイア戦役での経験を活かし、こちらを抑えるつもりなのだろう。

(……思えばあの時から、俺達は間違っていたのかもな)

ノイマンの脳裏に浮かぶのは、アークエンジェルで崩壊するヘリオポリスを脱出した際の事。

当時、階級が一番高いからという理由で艦長にはマリュー・ラミアスが選ばれた。人間的には好感を持てる人だと、ノイマンは思う。

だが彼女は技術士官でもあり、軍人としての資質には疑問の声も上がる。当時のアークエンジェル搭乗員には正規の女性士官もいた。

淡い感情を抱いていた女性。その後姿が幻影のように浮かぶ。

(あの時。もしも、バジルール中尉が艦長になっていたのなら……)

正規の軍人として軍の規律を守る亡き士官。

彼女が艦長であるのなら、自分達は力の意味を教育できたのではないのか？

キラとラクスに力の責任について、伝えられたのではないのか？

そんなI Fを想像したノイマンは一度頭を振る。

（そんなたれば、意味はないか……っ）

「ノイマン君、大丈夫か？」

艦長席とは異なるVIP用の席に座るネオ・ザフト総帥アンドリユー・バルトフェルドが彼に問う。

その言葉に少し笑みを浮かべながら、ノイマンは答える。

「……ええ。これから当艦はアークエンジェルを討ちます。よろしいでしょうか、総帥？」

「戦闘については君に一任している。あのアークエンジェルが相手だ、君以外に適任はいないよ」

バルトフェルドからの返答を聞いたノイマンは、艦長帽をぐいっと押さえ込みすぐさまに指示を飛ばす。

「トリスタン1番、2番発射後、タンホイザー起動っ、目標は前方アークエンジェルっ！」

ノイマンの指示のもと、艦橋のスタッフはコンソールを操作する。

ミネルバIIのタンホイザーが起動。機能、設置場所はミネルバと変わりなく艦前方から展開される方式だ。

そして追加の指示を、ノイマンは発した。

「タンホイザー発射後、機関全速——対アークエンジェル用シークエンス、【コールブランド】っ！」

ミネルバIIの艦橋にノイマンの指示が響く。

そのシークエンスに、艦橋スタッフ一同は身体を強張らせた。

対アークエンジェル用シークエンス【コールブランド】

それは文字通り、対アークエンジェルを想定した戦術。

アークエンジェルには直轄の防衛戦力として、ビーム兵器に圧倒的な防御性能を誇る【ヤタノカガミ】を装備したMS【アカツキ】が存在している。

そして当のアークエンジェルもビーム兵器に対して有効な防御手段となるラミネート装甲を持っている。



艦長であり、アークエンジェルにも長年搭乗していたノイマンはこの点については把握している。

それを打ち破る策をこのミネルバIIは有していた。

ミネルバIIのトリスタンが発射される。

そのうちの数発はアークエンジェルを掠るが、ラミネート装甲を貫通するほどではなかった。

お返しとばかりに、アークエンジェルのごットフリートがミネルバを襲う。

こちらも相対速度が速いためか、ミネルバIIをそれて行く。

そして、両艦が互いの最大兵器の有効距離内に入った。

「タンホイザー、つてええええー！」

チャージが完了したタンホイザーの砲口から陽電子ビームが発射され、宙域を照らす。

だが発射と同時に、その射線上にMS「アカツキ」が突っ込んできた。

ヤタノカガミと背部バックアップユニット「シラヌイ」からドラグーンが射出され、大型のビームシールドとなる。

陽電子ビームすら散らすそのビームシールドによってミネルバⅡのタンホイザーは無力化された。

代わりにアークエンジェルが備える二門のローエン格林が発射準備を整えていく。

『俺はやつぱり不可能を可能に……！』

コックピットで得意げに言うのはアカツキのパイロットであるムウ・ラ・フラガ。

タンホイザーの照射が終了し、アカツキのドラグーンは機体に戻る。

このままメサイア戦役の再現になるのか、そう思われた直後、搭乗者であるムウ毎アカツキは機体を真つ二つに引き裂かれた。

陽電子砲によって生じた爆発から現れたのは金色に光り輝く【膜】。

いや、正確には【膜】ではない。

ミネルバⅡの艦前方、タンホイザーよりも下部に存在していた金色の装甲部分が展開され、まるでビームの刃の様に巨大な剣となっているのだ。

この光の剣の名は、超大型対艦攻撃性突撃刃【コールブランド】。

攻性防御帯【スクリーミングニンバス】と【アルミューレ・リュミエール】の技術を流用した対艦格闘武装。

流線型に展開された光波防御帯によって弩級戦艦であるミネルバIIそのものが刃と  
なつて切り裂くのだ。

余談だが、この武装を知ったカナード・パルスはあまりいい表情をしなかった。

アルミューレ・リュミエールの技術を流用しているスクリーミングニンバスをさらに  
流用してるからだ。

ただ、かつて相対したゲテモノMAよりはマシと評価していることは記載しておこ  
う。

MSが戦艦の武装をもろに喰らつてしまえば当然、質量の違いから破壊されるのみだ  
ミネルバIIは残骸へとなり果てたアカツキなど路端の石のように無視して、迎撃用の  
ビームを「コールブランド」で打ち消しつつ、アークエンジェルに突貫していく。

『総員、対G姿勢っ!!』

コールブランドを用いるためにミネルバIIは推進機関を全速で稼働させており、その  
Gによつて顔が歪む。

それはノイマンだけではなくバルトフェルドや艦橋にいる者、格納庫の整備員等すべ

ての搭乗員も同じだ。

だが、この程度で目的が果たせるのならば安いものであった。

まさに流星の様に輝く一筋の光になって戦女神は大天使へと突貫していく。

『ムウーツ!?!』

アークエンジェル艦長、「マリユール・フラガ」、旧姓「マリユール・ラミアス」の悲痛な叫び声が響く。

しかしそれに返してくれる人間はもういない。

対アークエンジェル用シークエンス「コールブランド」

シークエンスは次の段階に移る。

アカツキを切り裂いたミネルバⅡがその速度を維持したまま、艦体を回転させ始めた。

コールブランドでアークエンジェルの艦橋を切り裂こうとしているためだ。

——だが物事はそううまくは進まない。

「ローエングリンのチャージはっ!?!」

復讐に燃えるマリユールの声が響く。

「チャージ完了していますっ！」

アカツキがタンホイザーを防いだ直後から、アークエンジェルの陽電子砲【ローエングリン】もチャージを開始していたのだ。そしてそのチャージはアカツキが散った直後に完了していた。

チーフオペレータの声に憎悪に顔を歪ませながら、叫ぶ。

「ローエングリン、つてえええっ！」

マリユールの指示のもと、特徴的な足にも見える構造の艦首からアークエンジェルの陽電子砲【ローエングリン】が発射された。

2門の陽電子ビームは最大戦速で突撃していくミネルバⅡへ突き進み、コールブランドとローエングリンは真つ向からぶつかり合った。

瞬間、その宙域だけがまるで地球の昼の様に明るくなり、直後にコールブランドと

ローエングリンのエネルギーから凄まじい爆発が発生した。

やがてローエングリンの照射が終わり、超エネルギー同士衝突による爆発も収まった。

「やったのっ!?!」

確かな手ごたえを感じたマリユーはそうチーフオペレータに叫ぶように尋ねた。

「おっ、おそらく。ただ今の爆発と衝撃に加えてニュートロンジャマーの影響で正確な……なっ!?!」

チーフオペレータの驚愕の声と共に、爆煙を突き破り金の剣が現れる。

コールブランドがローエングリンを突き破り、現れた。

これは当然の結果でもあった。

バッテリーMSに搭載されている大型ビームシールドで陽電子砲を散らすことができるのだ。

そもそも出力がけた違いの戦艦に装備されたアルミューレ・リュミエールならば、

陽電子砲を「切り裂く」事は十分可能と建造段階から予測されていたからだ。

つまりは絶対勝利約束された勝利の剣の「剣」——故に「コールブランド」。

最も陽電子砲を装備している弩級戦艦はネオ・ザフトでも当のミネルバⅡしか存在していなかったという、ネオ・ザフト側の懐事情などもあったため、一発勝負の形となっていましたのだが。

しかし、分の悪い賭けではなかった。

『このまま切り裂けええっ！』

ノイマンの指示に呼応するかの如く、金色の剣となったミネルバⅡはアークエンジンへ直進する。

些か艦体にダメージが見られるが、その速度は最大戦速のまま。

「かつ、回避——っ！」

マリューは咄嗟に操舵手へ指示を出すが遅かった。

ノイマンが操舵手ならばおそくはギリギリ間に合ったかもしれないが、それは叶わ

ぬ夢。

次の瞬間、アークエンジエルの艦橋をミネルバⅡのコールブランドが切り裂いた。ヤキンドウーエとメサイア戦役を通じて不沈艦とも呼ばれた伝説の戦艦アークエンジエルは、切り裂かれた艦橋から広がる爆発によって、その伝説に幕を閉じることとなった。

「……おさらばです、ラミアス艦長」

爆発によって消えていくアークエンジエルを眺めながら、ノイマンは艦長帽を脱いで敬礼を取る。

(バジルール中尉、ケジメはつけました)

そう心中で告げた彼は艦長帽を被りなおす。

「アビー君、ミネルバⅡの被害状況は？」



アークエンジェルを打倒したミネルバⅡであつたが、その被害は軽いものではなかつた。

いかにアルミューレ・リュミエールと言えど、最大戦速で陽電子砲の一撃に突っ込んだのだ。

その威力を完全防御できずに、艦の彼方此方から火の手が上がっていた。

「タンホイザーをはじめ、トリスタン1番2番、ミサイルは使用可能、メインの推進機関へのダメージも軽微です。ただ第3艦橋のダメージが深刻です、負傷者が多数。死者も出ている模様っ」

矢次に表示される艦の状態をアビーはノイマンへと報告する。

「負傷者を回収しつつダメージコントロールを急いでくれっ、一時後方に下がるっ、消火急げよっ」

ノイマンの指示を聞いた操舵手は頷いて艦を後方に下げる。

(シン、こっちは終わったぞ……お前も頑張ってくれよ。全員分の紅茶、用意しておくから)

決戦の前に出会った青年と交わした約束を思い浮かべる。

彼の戦いはまだ戦いは終わってはいない。

仲間の勝利を願いつつ、遠ざかっていく戦場を眺めた。

## 過去編⑩ C. E

ミネルバⅡ 艦橋

艦橋のリーダーはNJによつて乱されているが、それでも目視による確認は可能である。

宙域に出現したメサイアⅡのジエネシス発射口から火の手が上がり、爆破が連鎖していく。

そう時間はかからずにメサイアは沈黙するだろう。

歌姫の騎士団の剣が折れ、ネオ・ザフト陣営の勝利が確定した瞬間であった。

しかし、艦橋は重い雰囲気にもまれていた。

なぜならば、先ほどからシン・アスカが搭乗していたMS「デステイニーガンダム・ヴェステイージュ」のシグナルが途絶えていたからだ。

『シンツ、応答してください、シンツ、聞こえますか、シンツ!!』

オペレーター席に座るアビーが先程からデステイニーに通信を送り続けているが返っ

てくるのは雑音だけ。

そして再度デステイニーに向けて通信を行おうとしたとき、別の機体から通信が割り込んできた。

『こちらトリーズンデュエル、イザークだ。ミネルバⅡ間こえるか』

『……こちらミネルバⅡ、オペレーターです』

イザークからの通信にアビーが返答する。

『イザーク、こちらではNJの影響かデステイニーの反応が途絶えています。そちらで確認はできますか？』

『……デステイニーは自爆した』

イザークの返答に、アビーは目を見開いた。

『……すいません、もう一度よろしいでしょうか』

『デステイニーはジェネシスを止める為に自爆した。生体反応は……ない』

『……っ、通信を……っ、後ほどかけ直します。オペレータ、アウトっ』

震える声でアビーはそう告げ、イザークも特に何も言わずに通信が切れる。

彼女の瞳から雫が溢れ、無重力下であるためか辺りに粒として浮かんでいた。

「……アビー君、無理はしなくていい」

ミネルバⅡ艦長であるノイマンがアビーの様子を見つつ告げる。

「っ、艦長、大丈夫……です、まだ戦闘は終わってないので……オペレーターを続けます」

涙声でアビーが答える。

嗚咽が漏れそうになるのを必死で抑えているのを艦橋の誰もが感じ取っていた。

同じ頃、MS格納庫

「デステイニーが……自爆した……っ!?」

思わず手に持っていたスパナから手を放してしまった。

無重力である為そこそこな勢いがついてしまったスパナはそのまま浮かんで流れていく。

だがそんなことに意識を向けている場合ではない。

「シンは、シンは無事なのかよっ!？」

ヴィーノがその連絡を送ってきた後輩整備士の肩をつかんで聞いた。後輩整備士はその端正な顔に悲痛な表情を浮かべた。

「……シンさんはMIA、とのことですよ」

宇宙空間での戦時中行方不明——それはつまり死を意味していた。

「……なんでだよ、なんでアイツばかりこうなるんだよっ!」

ヴィーノの叫びが格納庫に響く。

その叫びを聞いた何事かと彼に視線を向けるが、察したように視線を逸らした。

「ヴィーノ班長……」

「せっかく、せっかくアイツ等倒して、後一歩だつてのにつ！ それなのに、お前がいなきや意味ないじゃねえかつ！」

普段ヴィーノが見せない感情の発露に後輩整備士はその姿を悲痛な表情で見つめる事しかできなかつた。

歌姫の騎士団の剣とその象徴が討たれた後、決着はあつさりといつた。

現ザフト陣営には戦闘を継続する士気もなく、ネオ・ザフトの首領でもあるアンドリユー・バルトフェルドの降伏勧告にあつさりと応じたのだ。

その20時間後、モーガン等旧連合一派による、地上主要軍事施設に対する叛乱も成功をおさめ、地上の主拠点の1つ、旧ヘヴンズベース等、プラントが接収していた主要施設はほぼ全てが制圧／奪還された。

ごくわずかながら抵抗を続ける歌姫の騎士団一派も存在したが、連合派の十八番である物量に押され次第にその姿は見えなくなつていった。

ネオ・ザフト戦役、その最終決戦から数日後

オーブ連合首長国　オノゴロ島

夕焼けの紅の光が照らすのは先々と、先の大戦の戦没者の為の慰霊碑。

打ち付ける波によって巻き上げられた海水の雫が、慰霊碑を囲むように植えられている花々に降りかかる。

植えられている品種は「白のカーネーション」。

海風に花びらが待っているが、海水を浴びているため近いうちに全て枯れてしまうだろう。

「……私、一人だけが……残ってしまったな」

夕焼けを少しだけ眩しそうに目を細めて眺めていたカガリは、そう眩いた。

国家元首であるカガリが何故ここにいるのか。

その理由は、すぐに判明する。

慰霊碑のある崖を覆い隠すように、突如として影が現れたのだ。

周囲の景色や夕焼けに溶け込んでいた、黒の装甲が現れる。



関節部分は雅かな金色であり、全体のフォルムは一目では「悪魔」にも見える。  
その機体の名は――

「P0……ミナカ」  
プロトゼロ

現れた機体は、ゴールドフレーム天ミナ。

そのコックピットでパイロットであるロンド・ミナ・サハクは、メインモニターに映るカガリを冷たく見下ろしていた。

ノーマルスーツを身に纏わずに普段どおりの服装である彼女は、そのまま機体の外部マイクを起動させ口を開いた。

『カガリ・ユラ・アスハよ。余は貴様に問う為にここに来た』

「やっぱりな。お前から呼び出されたときに、そう思ったよ」

少しだけ肩をすくめて自嘲気味に笑うカガリを無視して、ミナは続ける。

『カガリ・ユラ・アスハよ、貴様に問う。貴様は理念と民、どちらが国であると考えてい

る?』

メインモニターに映るカガリを鋭い視線で睨み付けながらミナが問う。

ゴールドフレームのマニピュレータがゆっくりとカガリの頭上へと動いていく。

カガリの回答次第では、ゴールドフレームのマニピュレータを彼女に叩きつけることも吝かではない。

「……そんなもの決まっている、理念だ」

マニピュレータの真下でカガリはそう告げる。

だがその直後に自嘲の笑みを浮かべて続けた。

「……と、以前の私なら言ったかもしれない。今は違う、民、そこに住む人々こそが国だ」

カガリの返答と同時、周囲は静寂が支配する。

耳に聞こえるのは、崖に打ち付ける波の音と、風が吹き抜ける音だけ。

数分が数時間にも感じる緊張感の後、ゴールドフレームのマニピュレータがゆっくり

と彼女の頭上から動かされた。

「……私もお父様も愚かだったよ、ミナ。国を焼いての理念など……あるはずがないのに」

『国とはそこに住む民たちが作り上げるモノ。国のために理念があるのであって、理念のために国があるなど滑稽も甚だしい』

「ああ。なんて愚かだったんだろうな……私は」

「貴様はそのまま屈して消えるのか？獅子の娘よ」

ゴールドフレームのコックピットが開いて、ミナがワイヤーを使い降下してくる。

「この国を立て直す、そのために余は来た」

「……私にできるのか」

「できるのではない。やるのだ、カガリよ。それこそが貴様の戦いだ」

「……っ!!」

ミナの言葉にカガリは静かに、だが力強く頷いた。

後の教科書に「ネオ・ザフト戦役」と言われる決戦から2週間後、旧連合政府大統領であった人物が、全世界に向けある宣言を放った。

その内容は旧連合に代わる「地球圏統一連邦政府」の樹立宣言であった。

連合解体によって分散した国々をまとめ上げ、なおかつプラント、コーデイナーも加えた統一連邦政府。

驚くことにこの宣言に反対する国家は皆無であった——人類は疲れすぎていたのだ。

すでに10年、プラント独立戦争から始まった戦乱の世、その終結を誰もが、ナチュラル、コーデイナー問わずに望んでいたのだ。

この地球圏統一連邦政府の樹立に、意外なことにオーブ連合首長国が積極的に支援を行った。

また国家元首であるカガリ・ユラ・アスハ代表と、有力氏族「サハク家」当主でありアメノミハシラの代表であるロンド・ミナ・サハクより、オーブの統一連邦政府への加盟とそれに伴う氏族階級の特権の否定、首長制の廃止、共和制への移行、プラント主導の下に行われていたコーデイナー優遇政策の撤回が唱えられた。

オーブ内でも高まっていたコーデイナー優遇政策による、反氏族感情はこれにより沈静化。

また軍内のアスハ派残党によるクーデターも画策されていたが、とある傭兵達の活躍

により表面化はしなかった。

地球圏統一連邦政府の樹立と共にいくつかの小さな争いもあった。

1つ例を挙げるならば、ジャンク屋組合討伐戦だ。

地球圏統一連邦政府の樹立から半年、不必要な技術拡散を続けるジャンク屋組合に対し、地球圏統一連邦政府は国家間にわたる協定の破棄や回収したジャンク品、修復品の国境を逸脱した持ち出しと利用禁止等を履行するように通告した。

しかし、ジャンク屋組合はこれに徹底して拒否の姿勢を示したため、地球圏統一連邦政府はジャンク屋組合を討伐対象として制定、討伐に乗り出したのだ。

この戦いでジャンク屋組合のロウ・ギユールは搭乗機であるアストレイレットドフレームを、叢雲効が駆るアストレイブルーフレームと、カナード・パルスが駆るドレットドノートHによって撃墜され、行方不明となっていた。

2度の大戦に比べれば非常に小規模であった。

世界にはいわゆる平和な時代が訪れていたのだった。

地球圏統一連邦政府樹立から5年

プラント アプリリウス 集団墓地 慰霊碑前

現在のプラントは、その所属を地球圏統一連邦に属する国家という形で存続してい

た。

大幅な軍縮、評議会制の廃止、共和制への移行に婚姻性の廃止等、以前とは大幅に変化しており、一時は日常生活も困難なレベルまで下がっていた一般労働者の手取賃金は、蓄えを持つ事が出来るレベルまで回復していた。

現在の気候は雨の時間帯、シトシトと小雨が降る集団墓地の慰霊碑の前に作業着姿の青年が立っていた。

その手には白い献花。

特徴的なメツシユの入った髪を雨に濡らしつつ、青年は慰霊碑の前に花を置いた。

この慰霊碑はプラント独立戦争から10年、戦乱のC・Eで亡くなった全ての人間を慰霊するものだ。

当然、その中には――

「……あれからもう5年か」

花を置いた青年が静かに呟く。

そして目を閉じ黙祷していると、不意に身体を濡らしていた雨が遮られるのを感じた。

「全く、そんなに濡れると風邪をひきますよ、ヴィーノ」

「アビー、まったく、『少将』なのに仕事はどうしたよ？」

「しばらく休暇ですから。それにあなたこそ、わざわざアプリリウスまで来てるじゃないですか。お相子ですよ」

落ち着いた緑色のブラウスを身につけたアビーがヴィーノに傘を手渡す。

身長はヴィーノの方が高いため、彼が持っていたらアビーが雨に濡れることはないだろう。

現在のヴィーノは地球圏統一連邦政府軍 プラント支部MS工場 アーモリーに勤務するMS開発兼整備士の立場だ。

またアビーは地球圏統一連邦政府中央統括部門 少将の立場になっている。

ネオ・ザフトに参加し最後まで戦い抜いた彼等は相応のポストについている。

これは叛乱と言う争いを起こした責任であり、果たすべき義務だ。

「……そういえば、そろそろじゃないですか？」

「何が？」

黙禱を終えたアビーがヴィーノに切り出す。

そしてヴィーノの返しにアビーがあり得ないという表情になった。

「信じられない、貴方の奥さんの事ですよ」

「てか別に忘れてないって、その顔はやめて」

ヴィーノは2年程前にすでに結婚していた。

その相手は赤鳥傭兵団に所属していた後輩整備士であり、彼女も同じくアーモリーに勤務していたが寿退社ならぬ寿退役していた。

「とにかくおめでとうございます」

「ありがとう。まあ、今日はその報告だったんだけどさ」

「……成程」

2人で慰霊碑を見つめる。



「……男の子なんだ」

「そうですか」

「アイツから名前貰おうかなって思ってるんだ」

「いいんじゃないですか、きつと彼は恥ずかしがると思いますが」

「はは、確かに」

2人してその姿を想像して軽く笑う。

「あつちで元気にしてるかな、シン」

「……ええ、きつと。妹さんやご家族と仲良くしてますよ」

アビーの返事の後に、ふとヴィーノが気づいた。

「雨、止んだな」

「そうですね、これから夜までは晴れの時間ですね」

傘をアビーに返してヴィーノは再び慰霊碑に視線を向ける。

「……こっちは俺らに任せて、ゆっくりしてろよ」

ヴィーノの言葉にアビーが頷く。

「さて、俺はそろそろ戻るかな」

「また会いましょうね、ヴィーノ」

「ん、今度は奥さんと息子と一緒にな」

「楽しみにしてますよ」

そう言って2人は共同墓地の入口で別れ、別々の道に歩いて行く。

アビーと別れたヴィーノだが、コロニー公社が運行しているコロニー間移動シャトルの搭乗時間までにはまだ時間がある。そのため、暇つぶしのためアーケード街を通り抜けていくことにした。

戦時中の経済の低迷によってシャッター街と化していたここも、かつての賑わいを取り戻しており外食する家族の姿もちらほら見えていた。

それを遠めで見つめつつ、ヴィーノは人ごみの中を歩いていく。

アカデミーとは異なる一般ハイスクールの制服を着た少年達が騒がしく自分の横を通り過ぎていくと、ヴィーノの顔には不思議と苦笑が浮かんでいた。

人込みの喧騒も悪くないなど、ぼりぼりと頭を掻いていると彼呼びかける声があった。

「あれ、ヴィーノじゃないか」

振り返ったカフェテラスの席に座るシックなコートを身に着けた中年の男性がいた。

人柄のじみ出た優しい笑みを浮かべるのはミネルバ元副長「アーサー・トライン」。彼と相席しているのは10歳程度だろうか、幼い金髪の少年の姿があった。

「アーサー副長じゃないですか、お久しぶりです」

「おいおい、もうザフトはやめたんだだけどなあ……つてもうザフトでもないか。あ、座ってくれ、コーヒーでもどうだい？」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

ヴィーノが空いていた席に座って、彼の分のコーヒーをアーサーが注文する。

数分たつてコーヒーがテーブルに置かれてから、ヴィーノが話を切り出す。

「話を戻しますけど、もうザフトじゃなくて連邦軍プラント支部、ですもんね」

「ああ。ザフトにいた頃には考えられないよ、ヴィーノはどうだい？」

「実は俺もつすよ」

「おいおい、連邦軍に勤めているのは君だろうに」

男二人そう言つてははつと笑いあつた後、ヴィーノは同席している少年に視線を移す。

どこか既視感を感じるが、あつたことはない。

それに気づいたアーサーが笑みを浮かべて話を切り出す。

「ああ。ジョージ、ヴィーノだ」

「……初めまして。ジョージ、『ジョージ・グラデイス』です」

「どうも、こんにちは。グラデイスつてことは……そういうことですね」

ジョージというファーストコーデイネーターと同じファーストネーム、そして「グラ

「デイス」というファミリーネーム。

それに気づかないヴィーノではなかった。

「ああ。グラデイス艦長の、な」

「副長が傭兵団に來なかつた理由つてやっぱりそう言うことだつたんですね」

「……すまない。僕のやるべきことがあつた。グラデイス艦長に託されてしまつたからな」

そう言つてアーサーは深く頭を下げる。

それに驚きながらヴィーノは手を振りながら答える。

「そんないいですよ、別に。断つたことを伝えたシンも言つてましたよ、副長が選んだのなら無理強いはできないつて」

赤鳥傭兵団設立の際、ミネルバ元副長でもあるアーサーにも当然、ヴィーノたちは話を持ちかけていた。

だが彼の返事は傭兵団には所属しないという返答だつたのだ。

詳しく事情を訊くのも憚られるため、それ以降はやり取りを取りやめていたのだ。

「……シンとは結局、敗戦した後にあつたきりだったな。もう一度会って話したかったけど……無理だしな」

「そうですね。まあ、でもアイツも向こうできつと艦長と一緒に楽しくやっていますよ」

「……そうだな。そうであつてほしい」

「……んじゃ、俺はこれで。コーヒーありがとうございました」

残っていたコーヒーを一気に飲み干したヴィーノはそう言つて立ち上がる。

「仕事かい？」

「いえ、家に女房待たせてるんですよ。今日は慰霊碑をみに来てて、アーモリーに急いで戻らないと」

「そつ、そつか」

どこかうろたえたようなアーサーの反応にヴィーノは首を傾げるが、ジョージはその様子に苦笑していた。

「んじや、また何処かで」

「あつ、ああ」

「ヴィーノさん、さようなら」

んつ、とジョージに手を振ってカフェテラスからヴィーノは離れていく。

アーケード街を通り過ぎて、アーモリーに移動移動用のシャトル搭乗手続きを進める為、コロニー公社の施設を目指して歩いていく。

ふと気づくと、いつの間にか夜の闇に包まれていた。

(……シン、こっちは平和だよ。そっちはどうだい?)

コロニーの暗くなった空を、ヴィーノは眺めながら心の中でそう問いかけた。

アビー・ウインザー

ネオ・ザフト戦役で赤鳥傭兵団が解散された後に、地球圏統一連邦軍に所属。数年後には中央統括部門 少将を拝命しその手腕を存分に振るう。

35歳で結婚、40歳で軍を退役。退役後は子育てに励みつつ自身の経験を本としてまとめ出版。

その後は小説家としていくつかの作品を書き上げ、固定のファンも数多く獲得した。ヴィーノ・デュプレ

同僚であるアビーと同じく、ネオ・ザフト戦役で赤鳥傭兵団が解散された後は地球圏統一連邦軍に所属。

プラント支部アーモリー M S工場にてM S整備士兼開発者として手腕を発揮する。

後に連邦軍の正式採用量産M Sとなる、DESTINYの簡易量産型「ガンダムシックザール」を開発。

連邦軍に所属してから数年後、傭兵団所属時から交際を続けていた後輩と結婚。

互いに第2世代コーディネーターであったが、長男シン、次男ヨウランに恵まれた。なお両方ともナチュラルである。

イザーク・ジュール

ネオ・ザフト戦役後は地球圏統一連邦軍に所属。

将官への昇進を断固として拒みM Sに搭乗して第一線で活躍し続けた。

後にシホ・ハーネンフースと正式に結婚。



シホと正式に結ばれる際、関係者に「ジュール事件」と呼ばれる下らない騒動に発展するといった伝説が残った。

シホ・ハーネンフース

ネオ・ザフト戦役後はイザークと共に地球圏統一連邦軍に所属。

イザークと共に第一線で活躍し続けるが、一向に発展しない関係にやきもきしていた。

エザリアと共謀した結果見事イザークをしとめることに成功。

第一子妊娠後に第一線から身を引き、同時に軍も辞した。

ルナマリア・ホーク

シンと別れた後に当時のザフト軍を退役。

その後は戦災ボランティアに所属し、地球各地を転々とする日々を送っていた。

ネオ・ザフトにも参加を考えたが、ボランティアを続ける道を選び参戦はしなかった。

終戦後、ヴィーノからの連絡でシンの戦死を知る。

終戦から数年後、ボランティア活動を通じて知り合ったナチュラルの男性と交際し2

年後に結婚。

ハーフコーディネーターの子供3人に恵まれ、83歳で老衰にて亡くなった。

アーノルド・ノイマン

ネオ・ザフト戦役後は地球圏統一連邦軍に所属。

連邦宇宙軍大佐の地位につき、改ミネルバ型2番艦アテナの艦長を務める。

30歳ごろにかつての同僚である、チャンドラに紹介された女性と交際し、数年後に結婚。

相手はコーデイナーターであつたが、女の子を授かり子煩悩となる。

アーサー・トライン

メサイア戦役後、かつての上司であるタリア・グラデイスの遺児であるジョージ・グラデイスを引き取る。

その世話をしていたため赤鳥傭兵団には参加せずネオ・ザフト戦役にも参戦はしてないなかつた。

ネオ・ザフト戦役終結後に、ヴィーノたちと再会しシンの戦死を知る。

ザフトを退役した後は民間の航空会社に入社し、小さいながらも輸送艦の艦長として腕を振るう。

浮いた話は聞かなかつたが、ジョージが成人する際にようやく女性との交際を開始することができた。

カガリ・ユラ・アスハ

地球圏統一連邦樹立に協力した後、共和制への意向に伴い元首を辞任。

後にNPOを設立して慈善活動に精力的に活躍した。

その際にルナマリアとは意気投合し、友人関係を築くことができた。

男勝りなその性格から結婚はルナマリアよりも遅く30代後半となったが、祝福の聲は少なくはなかった。

ロンド・ミナ・サハク

カガリと共に、地球圏統一連邦樹立に協力した後も引き続きアメノミハシラの代表を務める。

カガリがNPOを設立する際にも協力している。

その女傑っぷりからそういった話は全く聴かなかつたが、後継者を見つけることには成功している。

カナード・パルス

ネオ・ザフト戦役後も傭兵としての活動を続け、サーペントテールと双壁を成す。

その後も傭兵部隊Xを率いて、力のない者たちのために戦い続けた。

50歳ごろに傭兵を引退、孤児院を経営して身寄りのない子供達を養った。

死因は老衰、享年70歳。

失敗作とはいえずパーコーデイナーの遺伝子という人類の負の遺産を

残すわけにはいかないと生涯独身であった。

人類は疲れすぎている。

しかし人類はその業である、【闘争】から決して逃れない。

しばらくして再び過ちを繰り返す、それが人類だ。

だがそれは別の話。

すくなくともC・E・と呼ばれる暦が終わるまでは、その過ちは繰り返さなかったのだから。

過去編 END

## 本編

## PROLOGUE 逆襲のシン・アスカ①

世界全土を巻き込んだ2度の大戦があった。

【ヤキン・ドゥーエ戦役】と【メサイア戦役】、2つの大戦には大きな共通点があった。

それは、絶対的な戦力を持った英雄が大戦を終結に導いたことだ。

ヤキンドゥーエでは、憎しみに焦がれた両陣営のトップを下して。

メサイアでは、遺伝子によって世界を縛ろうとした独裁者を断罪して。

英雄達の名は【歌姫の騎士団】といった。

【自由】と【正義】の剣を持つ聖なる騎士団、彼らを信奉する者たちは絶えずそう崇めている。

世界は英雄たちを受け入れた、しかしそれに納得しない者達も少なからず存在していた。

大戦を終結させた英雄とは聞こえがいいが、実際はただのテロリスト集団だからだ。

第二次ヤキンドゥーエ戦役では、プラント及び連合の戦力に少なくない被害を出したうえ、両陣営の首領を排除して。

メサイア戦役では、当時のプラント最高評議会議長であり混乱した地球圏を一時とはいえ静定させる為の【政策】である【デステイニープラン】を発表した【ギルバート・デュランダル】を、具体的な代替案もなく一方的に非難し、実力行使で排除して。

大戦後の世界は、歌姫の騎士団の具体案もない【平和と自由】を目指す戦いによつて【火種のついた火薬庫】となった。

そしてついに火薬庫は爆発し3度目の大戦が開始されることとなる。

後のC・Eの歴史書ではこの大戦を【ネオ・ザフト戦役】または【シン・アスカの逆襲】と呼称している。

June 1. C. E. 80

L5宙域。

現在この宙域では、【反歌姫の騎士団連合】と【歌姫の騎士団】との最終決戦の火蓋が切つて落とされていた。

大戦後に解体された旧地球連合の戦闘艦や、メサイア戦役での戦没艦である【ミネルバ型】の改装艦を旗艦として構成されたネオ・ザフト艦隊。

過去の大戦で不沈艦の名を知らしめた【アークエンジェル】と歌姫の搭乗艦【エターナル】を旗艦として構成された、歌姫の騎士団改め現ザフト艦隊。

両陣営の艦隊から発射されるビームとそれに撃墜されるMS、またはMSに撃沈される戦闘艦の爆発によって宙域は一種の芸術の様に瞬いていた。

戦闘宙域の中に一際目立つ、真紅と漆黒で彩られた「GタイプのMS」が自身に襲い来る黒いMS「ドム・トルーパー」3機を両の手に持つビームサーベルで瞬く間に両断した。

そのMSの名は「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」

デュランダル政権下で制作された高性能MS「デステイニー」をネオ・ザフトが改修した機体である。

トリコロールカラーで彩られたかつての面影はすでになく、特徴であった背部の「ヴォワチユール・リュミエールユニット」は以前より一回り程大型化され、付属していた対艦刀、高エネルギー長射程ビーム砲はオミットされている。

ちなみに「ガンダム」とは本来、MSのOSの頭文字「G. U. N. D. A. M.」だが、この機体の設計者達によって正式名称にされている。

多くの改修点のあるMSだが変更されていない点が1点ある。

それはまるで「血の涙」を流すような印象を受ける頭部の意匠である。

新生したデステイニーの胸部コックピットの中で搭乗者であり、ネオ・ザフトの象徴

「シン・アスカ」はモニターに映る撃破したMSの残骸を一瞥した後、旗艦である「改ミネルバ型 ミネルバⅡ」へ通信を送る。

ザフトの赤服が着るパイロットスーツ——赤色の部分が全て黒に塗り替えられている——に似た物を身につけている。

メサイア戦役時での身長は170cmそこそこだったが現在は180cmを超えていた。

今年で23歳となったシンは、かつてのどこか幼げな雰囲気は消え、立派な青年へと成長していた。

だが特徴的な紅い瞳に宿る意思は以前と変わらず、いや以前より強く燃えている。

「オペレーター、こちらシン・アスカ、敵部隊について情報がほしい、応答願う」

通信モニターに金髪の美女が表示される。

「アビー・ウィンザー」、シンの残り少ない「同志」であり、信頼できる仲間である。

『こちらミネルバⅡ、アビーです。シン、作戦通りそちらに「インフィニットジャスティス」の反応が接近中です』

ニュートロンジャマーの影響が少ないのかアビーからの返答はクリアに聞こえる。



そして、機体のレーダーにも反応があった。

レーダーに表示される形式番号は「ZGMF-X19A」

シンにとって因縁の深い相手が乗るMSだ。

『っ！ 了解、こちらでも確認したっ！』

改修前のデステイニーはインフィニットジャスティスに手も足も出ずに撃墜されている。

トラウマにはなっていないが、それでも操縦桿を握る手には力がこもる。

惨敗の原因は、当時のシンの精神は崩壊一歩手前であったことや機体相性が最悪であったことだが。

『気を付けて……シンっ！』

『ああ、アビーもなっ！』

信頼できる仲間からの声に力強く答えて、VLユニットの稼働率を高め【光の翼】を発生させながら討つべき敵へと向かう。

目視で目標を確認できる距離に近づいた途端に、コックピット内に警告音が奔る。

「ちっ！」

すぐさま機体を回避させる。

一瞬前までデステイニーが存在した箇所をビームが奔る。

モニターにはすでにビームサーベルを連結させ、突っ込んでくる仇敵の姿。

『アスランっ!!』

『シンっ!』

即座に腰に装備されているビームサーベルを抜き、連結ビームサーベルと切り結ぶ。鏢迫り合いになり、周囲にはコロイド粒子がぶつかり合って発生する閃光が奔る。

『シンっ! 何故だ、何故こんな戦いを起こすんだっ!』

アスランはシンが戦う理由については理解していたつもりだった。

かつて短い間だがミネルバにてシンと共に戦い、彼が戦う理由がかつての自分と同じだと思っただからだ。

母をユニウス7で失った復讐——自分とシンは似ていると。

だが決定的に違う点がある。

それは——

『はっ、わからないのかよっ！ そうだろうな、花を吹き飛ばすことしかできないアンタ達は残された花の気持ちなんてわからないだろうなっ！』

「ジャステイニーは両手に握られたビームサーベルの連撃をジャステイスに叩き込む。緩急をつけ、時にはフェイントを混ぜる。」

対するジャステイスは連結ビームサーベルとビームシールドを使って連撃を捌く。

『お前はまたっ……！ 過去に囚われて、憎しみに……！』

ジャステイスのビームシールドを使ったシールドアタック。

デステイニーはビームシールドを起動して受け止めるが弾き飛ばされてしまう。だがデステイニーはすぐさま体勢を立て直し、左手のビームサーベルを腰部に戻す。

『いい加減にしろっ！ 過去に囚われるのはもうやめるんだ！』

連結ビームサーベルを解除し、両の手にビームサーベルを持ったジャステイスがスラスタを全開にして突っ込んで来る。

デステイニーはVLCユニットを起動して光の翼を発生させ後方に下がり回避する。

『ふざけるな！そんなただの言葉じゃないか！』

デステイニーの光の翼が広がる。

機体サイズより大きく巨大に、血の様に「紅い翼」が広がる。

巨大な光の翼を翻しながらデステイニーがジャステイスに向けて突っ込む。

『過去に囚われるのはやめろ？ 誰がそれを間違いだと決めたんだ!! 失ってしまった過去を想うのは間違いで、未来を守る事だけが正義なのかよ!! それを決めていいのは

アンタ達じゃない！俺達じゃないのかっ!?』

シンとアスランの決定的な違い、それは過去への思いの強さだ。

アスランは未来だけを見ている、過去を思い返すことはあっても背負って戦うことはない。

それは仕方がなかったとはいえ、自身の手で父親を殺害してしまったことによるトラウマでもあるだろう。

だがシンは自身に降りかかった全ての事を背負って戦っている。

最初から彼がそうだったわけではなく、多くの別れと出会いを繰り返したから背負うことができている。

最愛の家族との別れ、初恋の少女との別れ、親友との別れ、導いてくれた人との別れ  
――  
連合の英雄達との出会い、ジャンク屋との出会い、傭兵達との出会い、サハク家との  
出会い、野次馬との出会い、ネオ・ザフトの仲間との出会い――

彼らがいいたから、かつてと違い確固たる信念を持って戦うことができているのだ。

もちろんネオ・ザフトの仲間達もシンと同じく過去を想って戦っている。

「うおおおおおっ!!!」

「はっ、早いっ!？」

最大稼働しているVLによる既存のMSを圧倒するスピード。

これが「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」の真髄。

【圧倒的なスピードによる強襲】——そのコンセプトを極限まで追求した機体。

しかしそのスピードによりパイロットには強烈な負担を強いることになる。

だが今のシンの頭にそんなことは微塵も存在していない。

強烈なGで顔が歪むが、操縦桿を握る手は絶対に離さない。

『くっ、この馬鹿野郎っ!!』

アスランの頭の中で【種】が弾けた。

【SEED】が発動したアスランは、近接戦闘では無敵のMSパイロットである。

凄まじいスピードかつ不規則な機動で突っ込んでくるデステイニーを正確にとらえ、右脚部に装備されている「グリフォンビームブレイド」を起動し、蹴り上げてくる。

以前のデステイニーはこのビームブレイドを起動したジャスティスに敗北している。

奇しくも以前と同様のシチュエーションになっている。

完全にデステイニーはジャステイスに捉えられており、このままでは以前と同じく蹴り上げられて大破することが明白だった。

——だが

『やれるとおもふなああっ！』

シンの頭の中でも【紅い種】がはじけ飛んだ。

突如ジャステイスの右脚部が吹き飛んだ。

ジャステイスの右脚部を破壊したのは、デステイニーの両腕マニピュレータ部に装備された【パルマファイオキーナ】を改修した武装【クラレント】

パルマファイオキーナは実験要素の強い武装であり、稼働すると発光してしまうため相手には使用する事が明白となる欠点があった。

しかしパルマファイオキーナはビームライフルとしても使用が可能であり、また数秒程度とはいえハイパーデュートリオン機関を搭載しているMSのビームサーベルを受け

止めることが可能な程出力が高い。

デメリットを補うことができる可能性を秘めた武装をどうしても残したいと考えたネオ・ザフトの技術者達は、より実用性を高めるために、パルマファイオキーナの改修を行った。

稼働状態が丸見えになる欠点は、稼働状態のマニピュレータ部にミラージュコロイドを発生させる機能を追加したことで、稼働時の発光を一瞬光る程度に軽減することに成功した。

またコロイド粒子を拡散／集束させることで、ビームを拡散させる力場としての機能を持つことも判明している。

さしものアスランでも超高速機動中のデステイニーのマニピュレータ部を確認することは不可能だ。

「なっ!?!」

「はあああああっ!!!」

最大稼働のV.Lから生まれる圧倒的なスピードのまま右手に構えたビームサーベルでジャステイスに突きを繰り出す。



ビームキックが失敗したジャステイスは慣性のまま蹴りを振り切っている体勢になっっている。

回避不可能。

デステイニーのビームサーベルがジャステイスを貫いた。  
ビームサーベルはコックピット付近に突き刺さっている。

『ぐっ……シ……ン……っ！』

『終わりだ、アスラン……強かったよ、アンタ』

接触回線にてそう告げデステイニーはサーベルを横に薙ぎ、ジャステイスから離れる。

小規模の爆発が起こり、やがてそれが連鎖していく。

そして機体の推進剤に引火し——散った。

「はあ、はあ、はあ……っ！」

討ち取った仇敵——その実力を痛感している。

V Lの最大稼働稼働中のデステイニーを的確にとらえていたのだ、クラレントがなければ以前と同じになっていたかもしれない。

幸いなことに機体には特に大きなダメージはない、しかしV L最大稼働はシンの体に大きな負担を強いる。

全身の筋肉と骨が軋み、腹の内では臓器がグルグルと回っているような異物感から吐き気が込みあがってくる。

まだ仇敵は1人残っている、こんなことではネオ・ザフトの皆に示しが見つからない。そう思い、シンはミネルバIIへ通信を入れる。

「アビー、俺だ、アスランは倒した」

『シンっ！ 本当ですか!?!』

通信モニターの向こうでいつも冷静なアビーが歓喜の表情を浮かべている。

通信内容が艦橋のメンバーにも漏れたようで、歓声が上がっている。

中には「ミネルバの仇が取れた!」「やっぱりシンはスーパーエースだぜ!」等の声が上がっている。

『ああ、喜んでるところ悪いんだけど……フリーダムは?』

『つ、すいません。現在ネオ・ザフトの約6割の戦力を持って足止めをしています、しかし被害は甚大です』

そう、シンとアスランを1対1で戦わせるためにネオ・ザフトの戦力の半分以上を使って

フリーダム——【キラ・ヤマト】を足止めしていたのだ。

残りの戦力は、エターナルとアークエンジェルの撃沈または足止めの為の戦力だ。

「くそつ、戦争は数だと思っただけだな、ほんとフリーダムだ」

そう軽口を言いつつ、モニターにはミネルバⅡから送られてきた戦闘宙域のデータが表示される。

『我々の目的も後少し……シン、お願いします』

『ああ、任せてくれ』

『頼むぜ、俺らのスーパージェス！』

『分ってるよ、ヴィーノ』

通信モニターが分割し、赤毛のメツシユが入った青年の顔が表示される。

ミネルバから、いやアカデミーからの付き合いであるMS整備士の「ヴィーノ・デユプレ」である。

整備士の制服を着ているヴィーノだが、作業用の手袋は左右で異なったデザインのものをつけていた。

ヴィーノの手袋の本来の持ち主は「ヨウラン・ケント」、メサイア戦役で戦死したシンの友人だ。

『ヴィーノ、それはヨウランの……』

『……ああ、こうすればあいつが力を貸してくれる気がして……んじゃ、シン頑張れよ！』

そうやってヴェーノは通信を切る。

もう片方の通信モニターに映るアビーは、その美しい顔に悲痛な表情を浮かべていた。

『シン、これから足止め部隊には撤退してもらいフリーダムを誘い出します』

『……分かった、頼むよアビー』

『シンの方も……お願いしますね』

そう言って無理やり微笑んだアビー、直後に通信が切れレーダーには見知った形式番号が表示される。

【ZGMF-X20A】

アスランのジャスティスと共にC・Eの聖剣伝説と称えられたMS「ストライクフリーダム」だ。

レーダーに表示された目標に向け、デステイニーを向かわせる。

——全ては決着をつけるために。

## PROLOGUE 逆襲のシン・アスカ②

「くっ!？」

『アスランは倒した！あとはアンタだけだ、キラ・ヤマト！』

白と青の機械天使。

フリーダムに接近しつつ腰部にマウントしていたビームライフルで射撃する。

正確な照準であったが、フリーダムは最低限の動きでよけつつ、両手に持った2丁のビームライフルで反撃を行う。反撃に対し、シンも同様に最低限の動きで回避する。

すでに互いの【SEED】は発動している。

『シンっ、君は何でまた戦いを起こしたんだ！』

『アンタ達みたいなの無自覚に悪意をばら撒く連中がいるからだ！』

デステイニーとフリーダムは互いに旋回しつつ、ビームライフルを放つがどちらも命中せずに背後に消えていく。

メサイア戦役後、デュランダルに代わりプラントを支配した「ラクス・クライン」は地球連合に対して「絶対的な自由と平和の為の戦い」と称した鎮圧作戦を開始した。

メサイア戦役の発端となったユニウス7落下事件「ブレイク・ザ・ワールド」により多大な被害を受けていた地球連合はプラントからの攻勢に対してロクな準備も行うことができずに敗退を繰り返し、ついには地球連合は解体され、地球の国々は世界再構築戦争以前の様にバラバラになった。

主な標的は地球連合軍の軍事基地やMS開発工場などであったが、連合諸国の都市部にも鎮圧部隊は派遣された。

——作戦で生まれた被害者の数は千や万ではない。

『何が絶対的な自由と平和だ!? アンタ達は自分達の行動でどれだけの被害が、どれだけの人の生活が壊されるのか、ちゃんと理解してるのかよ!?』

『ちゃんと理解してる! 僕は戦う覚悟がある!』

『じゃあ、なんで戦争とは全く関係のなかった人々を戦いに巻き込む!? アンタ達がやるべきことは花を吹き飛ばされないようにすることだろ!?』

鎮圧作戦のせいで孤児になった女の子がいた。

当時のザフトのドムが放った流れ弾に両親を吹き飛ばされたらしい。

都市の上空から降下してくる降下カプセルから出たMSに感じる恐怖が胸を締め付けてると。

両親が目の前で吹き飛ばされ、何も言わない肉片に変わった光景が脳裏に焼き付いていると。

現在、その子はネオ・ザフトにオペレーターとして参加している。

『仕方がないんだ！ 僕達は平和の為に戦ってるのに、争いを捨てない人達がいるから……！』

自分たちの行為の意味について考えず、持つ力をただただ振るっていることに気がついていない。

自分たちの行動の責任を棚に上げて、抵抗をやめない人々に責任を押し付けている。デステイニーの持つビームライフルがフリーダムの正確な射撃によって破壊される。

だが、デステイニーもクラレントをビームライフルとして放ち、フリーダムの2つのビームライフルを破壊する。

フリーダムはウイングユニットから遠隔無線兵器〔ドラグーン〕を射出する。



ウイングユニットからはデステイニーの紅い光の翼とは違い神々しい青い光の翼が現れる。

襲い掛かるドラグーンから一度距離を取り、高速起動に移る。

しかしドラグーンから放たれたビームによって左脚部が破壊される。

『ふざけるなっ！ 戦いを広げてるのはアンタ達だってこと本当にわからないのかっ！?』

ドラグーンのビームを掻い潜り、両腕のクラレントからビームを連続発射させる。

クラレントから発射されるビームによってドラグーンの3機とフリーダムの右腕が破壊された。

『僕達が!? それこそふざけてるっ！ 僕はただ争いのない自由で平和な世界の為に……っ！』

『世界は一人で回っている訳じゃないっ！ アンタ達はその自由と平和の為に世界と話し合ったことがあるのかよっ!? いつつもアンタ達は話し合わずに力だけじゃないかっ！』

デステイニーはクラレントの射撃を繰り返しながら、腰部よりビームサーベルを取り出してフリーダムに突っ込む。対するフリーダムはドラグーンによる射撃を繰り返しながら腰部の「クスイファイアス3レール砲」を起動させデステイニーに向けて放つ。

デステイニーの装甲はPS装甲であり実弾は無効化できるが、PS装甲は衝撃までは無効化できない。

すでに仇敵との連戦の為、体力が減っているシンには、決して軽くない負荷となる。キラ・ヤマト相手にそれは致命的であるため、シンは回避を選択する。

レール砲を回避したのもつかの間、ドラグーンによって右肩部分の装甲が破壊される。

『他人の考えを理解する為にはまず話し合いから始まるのが人間じゃないのかっ!? それを相手の話も聞かずにいきなり銃を突きつけたって、理解できないのは当たり前なんだっ!』

左手に持つビームサーベルを起動したまま、投げ付ける。

簡易的なビームブレイマーランになったそれに、右手のクラレントを放つ。

すると放たれたビームはサーベルのビームと干渉し、拡散され放たれた。

予想外の攻撃に、ほとんどのドラグーンが破壊された。

残った数基のドラグーンもクラレントによる射撃によって破壊される。

『そんな、ドラグーンがつ?!』

『ドラグーンを使えるのはアンタだけじゃない! レイ、効さん、コートニーさん、モーガンさん……俺には仲間がいるっ!』

ドラグーン搭載型MSを駆り共に戦った亡き親友「レイ・ザ・バレル」

最強の傭兵でありドラグーンの適性も持つ「叢雲効」

テストパイロット時代からの付き合いである「コートニー・ヒエロニムス」

連合の英雄の1人である、月下の狂犬「モーガン・シユバリエ」

効、コートニー、モーガンには模擬戦を兼ねたドラグーン対策を。

亡き親友、レイの遺した「レジェンド」のデータを使ったシミュレーション。

この2つのドラグーン対策により、シンにとつてドラグーンを相手取るのは困難なモノではなくなっていたのだ。

だが対するキラ・ヤマトとフリーダムはC・E最強のパイロットとMSとして名高い。

ドラグーンは全て撃墜されたが、フリーダムの内蔵火器は健在だ。

フリーダムの腹部ビーム発射口が瞬き、「カリドウス複相ビーム砲」が発射される。

同時に腰部のレール砲2門も発射される。

デステイニーはカリドウスが発射される直前に、すでにVLを稼働していた。

残像が残るほどの圧倒的なスピードにより、発射されたビームとレール砲の砲撃を上方へ移動することで回避する。

そしてそのままの速度で右手にビームサーベルを構えつつ、フリーダムに向かい最大稼働状態まで加速する。

対するフリーダムも残った左手でビームサーベルを抜きつつ、カウンター気味にデステイニーに切りかかる。

数度の切り結びの結果、VL最大稼働状態にもかかわらずデステイニーの右腕はサーベルごと切り落とされる。

先程ビームブーメランとして使用したサーベルと合わせ、デステイニーは手持ちの近接武装を失った。

フリーダムは切り落とした刃を返し、腕を切り落とされて体勢を崩したデステイニー

を両断にかかる。

『終わりだよ、シンっ！』

キラは勝利を確信していた。

本来ならばシンを殺したくはなかった——彼の信条は「不殺」であるからだ。だが今は完全にシンを討つつもりでいる。

それにシンは自分と同等の腕を持つパイロットであり脅威だ。

自身とラクスを目指す平和の為にはシンを討つことは仕方のない

——と彼は考えていた。

デステイニーにフリーダムのビームサーベルが迫る。

『まだだあああああつ！』

確かにデステイニーに残された「手持ち」の近接武装はない。

だがデステイニーの左手にはあるはずのないビームの刃が作り出されていた。

「なっ!？」

デステイニーのマニピュレータ部、人間でいえば【掌】から発生しているビームサーベルがフリーダムスの左腕を切り飛ばし、そのままコックピットに迫る。

その直後、キラ・ヤマトの意識は途絶えた。

「……………これで2度と花は吹き飛ばされずに済む」

フリーダムスはコックピットを貫かれた。

パイロットの命が消えると同時に機体のウイングから溢れていた光の翼も消えた。

デステイニーはそのままサーベルで機能停止したフリーダムを縦に両断して離れる。

フリーダムの残骸は小爆発を繰り返し——消えた。

【クラレント・ビームサーベル】

それがデステイニーの左手マニピュレータ部分から発生しているビームサーベルの正体である。

稼働状態の発光を抑えることに成功した技術者達が、近接戦闘の切り札となることを想定して搭載した機能だ。【「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」の近接武装は本来はこちらであり、シンがメインで使用していたビームサーベルは後付けで装備されたモノであった。

キラもクラレントは射撃武装として使用できる可能性があるという情報を得ていたが、窮地になるまでシンがこの機能を使わなかったため知る由もなかった。いわゆる初見殺しの格好になったが、勝負はついた。

「はあっ……ぜえっ……！」

アスランとキラとの連戦による消耗、それに合わせて度重なるV.L最大稼働による負荷がシンの身体を蝕む。

呼吸は荒く、体中から汗が噴き出して止まらず、四肢はガクガクと震えている。気を抜いたら意識が落ちる。

震える右手でヘルメットのバイザーを上げ、汗を拭きとった。

「これで……後は……！」

噴き出して止まらない汗をぬぐいつつ、機体の損傷状態を確認する。デステイニーの損傷は重い——だが戦えない状態ではない。それを確認した直後、ミネルバⅡからの通信が繋がる。

『シンっ、そ……らに……ターナル……が……！』

『っ!? アビー、俺だ! どうしたんだ!?』

NJの影響が強くなったのか、通信にノイズが混じる。だが内容は聞き取れていた。

『エターナルがこつちに來てるのか!?』

『……気を……っ……て……シ……ンっ!』

さらにNJの影響が強くなり、通信がノイズまみれになって切れる。その直後、リーダー及びモニターである存在が表示される。

宇宙空間では一際目を引く桃色の戦艦。



歌姫の搭乗艦であり象徴の「エターナル」

ヤキンドウエ及びメサイアで圧倒的な力をふるった歌姫の船。

だがいくら今のデステイニーが損傷しているとはいえ、歌姫の騎士団の2振りの剣を叩き折ったMSに戦艦1隻が突っ込んできてどうなるというのか。

シンはそれが気になっていた。

だがすぐにその疑問は解消することとなる。

エターナルからデステイニーに通信が送られてきたのだ。

## PROLOGUE 逆襲のシン・アスカ③

通信モニターには桃色の髪之歌姫の姿が映し出された。

ミネルバⅡとの通信が切れるほどNJの影響が強いのだが、エターナルとデステイニーはさほど離れてはいない為か内容はクリアに聞き取れた。

『聞こえますか、デステイニーのパイロット、シン・アスカ……こちらはエターナルのラクス・クラインですわ』

『……俺に何の用だ、ラクス・クライン』

残った左手のクラレントを射撃モードで構えさせ、返答する。  
何かおかしな点があればすぐにでも撃沈できるように。

『あなたに聞きたいことがありましたので』

モニターの中でラクス・クラインは微笑んでいる。

『何故あなたは戦うのですか?』

ラクス・クラインの問いについて内心、今更かよとため息をこぼした。

『……無自覚な悪意をばら撒くアンタ達を止めるためだ』

『悪意? 私達が?』

『……アンタ達は話し合う事をしない。相手の事をまるで考えずにただ自分の意見を押し通す、そして自分達の基準でしか物事を判断できない』

メサイア戦役後、プラントはラクス・クラインを最高評議会議長として受け入れた。その後プラントの主導で行われた政策は、徹底的なコーディネーター優遇政策であった。

実質的な地球圏の支配者となっていた当時のプラントの力に地球諸国はただ従うしかなかった。

またプラント内部でも問題が発生していた——それは増税だ。

世界から争いの種を取り除く鎮圧作戦、軍事支出増加に伴う増税に次ぐ増税。プラントの経済は冷え切り、一般労働者の賃金は日常生活にも貧窮するレベルまで低下してしまっている。

『……』

ラクスは微笑みを変えずにシンの言葉を聞いていた。

通信モニターに映るその顔にシンは内心ゾツとしていた。

まるで仮面のような笑み——シンには彼女の微笑みがそう見えた。

『……あなたの様な方が私のそばにいてくれたら、このような結末にはならなかったでしょうに』

「っ?!」何を言っている、ラクス・クライン!？」

ラクスの言葉に強烈な悪寒を感じた。

それとほぼ同時にミネルバⅡから警告が送られてきた。

単語1つだけの警告文だったがそれを確認したシンに戦慄を与えさせるのには十分

であった。

——送られてきた警告文の内容は

” GENESIS ”

「なつ、ジェネシスだつて!」

シンの叫びと同時に、L5宙域にガンマ線の光が瞬いた。

突如としてL5宙域に現れたのは第二次ヤキンドゥーエとメサイアで使用された禁断の戦略兵器「ジェネシス」を内蔵した機動要塞であった。

形状はメサイア戦役時に使用された、宇宙機動要塞メサイアとほぼ同様のものである。

いや突如として現れたというより最初から宙域にミラージュコロイドによって察知されないように存在していたと考えるのが自然だ。

そしてキラがシンによって討たれた後に、ミラージュコロイドを解除して姿を現したのだ。

「ぐっ……！」

ガンマ線レーザーの光によって反射的に目を閉じていたが、すぐさま状況を確認する。

デステイニーのレーダーに先程まで反応があった味方艦隊の内約5割の反応が消えていた。

言うまでもなくジエネシスの掃射で消滅したのだ。

また味方艦隊と交戦中であつたザフト艦隊も同じく消し飛んでいた。

デステイニーのモニターに映るのはかつてのメサイアとほぼ同等の機動要塞。

『ふふっ、綺麗ですわね』

ラクスの声が繋がつたままの通信から聞こえてくる。

『ふざけるな！　今ので何人の人間が死んだと思つてる!?　それに味方まで巻き込んで！』

『私は世界のモノ、世界は私のモノ、それが摂理ですのに世界が拒むから……こうなるのですわ』

通信モニターに映るラクスはまるで玩具ではしやぐ子供の様な笑みを浮かべつつシンに告げる。

背筋に寒気が走ると同時にそれを美しいと感じてしまった。

再びミネルバⅡよりコックピットモニターに警告が送られてくる。

機動要塞（便宜上メサイアⅡと呼称）の射線が地球に向いていると。

「ジェネシスを地球に撃つだどっ!？」

『どうしますか、シン？ 私の元に来ていただけのなら、地球から射線を外すことを約束いたしますわ』

子供をあやす様な言葉を彼女は告げる。

彼女の言っている内容は降伏を迫るものだ。

だと言うのに感じるのはまるで母親に抱きしめられているかのような安心感。

ラクス・クラインの本質は【蛇】

アダムとイブを唆して知恵の実に手を付けさせた【蛇】だ。

『あなたは今迷っているはずですよ……でなければすぐに私を殺したはず』  
「……っ！」

ラクスの笑顔を美しいものだと感じたことがばれていた。

シンの心を見透かした彼女は立て続けに告げる。

『苦しまなくてもいいですよ、シン……私にすべてを委ねてくださいな』

唯一無二の強烈なカリスマ。

敵軍の兵士までを魅了する歌姫。

以前までならば、メサイア戦役の時のシンならば確実に惑わされ、下手をすれば取り込まれていただろう。

——だが今は違う。



『……なるほどな。そうやってキラ・ヤマトやアスランを取り込んだんだな』  
『……』

シンの言葉を聞いた途端、ラクスの顔から初めて笑みが消えた。  
残ったのは無表情。

何の感情もない。

彼女の顔。

今のシンが戦う理由、それは世界の人々の命を侵す毒花を刈り取ること。  
もう2度と今ある花を吹き飛ばさせないために。

初めからシンにそんな甘言が届くはずがなかったのだ。

『俺も危なかったよ。だがな、もう2度と今ある花を吹き飛ばさせないために俺は戦う  
！アンタに全部委ねることなんか、するものかあああつ！』

誘惑を振り切るように、デステイニーの光の翼が広がる。

V Lを稼働状態にするのと同時に、左手のクラレントを連続発射させる。

『……ああ、やはりあなたのような殿方がいれば……私は……』

クラレントのビームによってエターナルが火に包まれる直前、繋がったままの通信から確かにそう聞こえた。

歌姫の搭乗艦はビームによって撃ち抜かれ、静かに爆炎に飲まれていく。

同時にミネルバⅡより通信が入った。

通信には、ジェネシスの発射準備が始まっていると表示された。

「っ!? ジェネシスが!？」

モニターに映るジェネシスにデステイニーを向かわせる。

「間に合えっ、間に合えええええっ!!」

VLはすでに最大稼働状態である。

消耗などすでに無視し、デステイニーが戦場を翔る。

## PROLOGUE 逆襲のシン・アスカ④

目標はメサイアⅡの管理区画。

今のデステイニーにはビーム砲などの大出力火器が装備されていないため、管理区画を直接叩くしか止める手段はない。

当然、メサイアⅡからは迎撃の為のビームが放たれる。

まるでビームが壁になったかの様な密度だ。

「うおおおおおおおおおっ!!」

ビームシールドを構え、全速でビームの嵐に突っ込むデステイニー。

機体とパイロットが万全の状態であるならば、この嵐を無傷で掻い潜ることも可能であつただろう。

しかしジャステイスとフリーダムとの連戦による機体の損壊と、パイロットの消耗があるため全てを回避することは適わず、頭部や右肩など数箇所を被弾してしまつてい

「まだまだ、デステイニー……！俺たちはまだやらなきゃいけないことがあるんだっ！」

被弾によって頭部を吹き飛ばされ、衝撃がコックピットに伝わる。

だがシンの瞳に宿る戦意に陰りはない。

V L最大稼動状態を維持したまま、メサイアIIに取り付くことに成功した。

メサイアの構造を知っているシンはすぐさま、管理区画をロックオン。

「こんな兵器あっちゃいけないんだ、消えろおおおっ!!」

残った武装である左手のクラレントを連射し、管理区画を撃ち抜く。

しかし状況は好転しなかった。

「っ?! 核の爆発が始まるのかっ?!」

メサイアII内部に高エネルギー反応が確認された。

ジェネシスはニュートロン<sup>N</sup>ジャマー<sup>J</sup>キャンセラー<sup>C</sup>によって使用可能となった【核】を

爆発させ、発生したガンマ線をレーザー光として内部ミラーにて収束、増幅、その後発射する兵器である。

シンが管理区画を破壊すると同時に、核の起爆命令が送信されていたのだ。だが今ならジェネシスの発射口から内部に侵入して、破壊することが可能のはず。

「迷っている暇なんてっ！」

紅い光の翼を翻し、デステイニーがジェネシスの発射口に飛び込む。

発射口から侵入したデステイニーはジェネシス内部のミラー部分に到達――

だがデステイニーの武装に要塞攻略用の武装はなく残っているのはクラレントのみ。それはシンも承知の事であった。

「……コード起動、[A s h t o A s h]」

コックピット内に警告ブザーが鳴り響き、モニターにはカウントが表示された。

音声認識による「自爆コード」が起動したのだ。

ハイパーデュートリオン機関を持つデステイニーの動力を意図的に暴走させて自爆

させればジェネシスを内部から破壊できるはず。

「……まさかアスランと同じ行動をするなんてな」

先ほど倒した仇敵、アスランのヤキンドウエでの行動を知っていたため自嘲的な笑みをこぼす。

「……やれるだけやったさ。アビー、ヴィーノ、ネオ・ザフトの皆……後は頼む」

その直後、デステイニーは光に包まれた。

——デステイニーの捨て身の自爆により、メサイアⅡは沈黙した。

直後、現ザフト陣営がネオ・ザフト陣営に降伏を打診し、ネオ・ザフト側はこれを受託した。

キラ・ヤマト、ラクス・クライン、アスラン・ザラと絶対的な英雄を失ったザフトには戦線維持するだけの士気が残っていなかった。

C・E・ 80

プラント独立戦争と合わせれば10年程続いた戦乱の時代は終わった。

ザフト、ネオ・ザフトは共に解体され、世界は新たに設立された【地球圏統一連邦政府】によってようやく一つに纏まった。

長きに渡る戦乱によって人類は疲れすぎていた。

休眠とも言える平和の時代を求めたのだ。

そこにナチュラル・コーデイネーターの区別は存在しなかった。

世界はようやく平和への道を歩み始めた。

しかし、そこには【シン・アスカ】はいない。

## INTERMISSION 再会

——意識が戻る

「……………」

光のない暗闇の中をシンは漂っていた。

ジェネシスを止める為、デステイニーの自爆によって自分は死んだはずだ。

以前、月でアスランに撃墜されたときは初恋の人物「ステラ」によって似たような場所に誘われた事もあったが、どうやら違うらしい。

「…………地獄つてのは味気ないところなんだな……俺にはお似合いか」

死後、罪を犯した魂は地獄と呼ばれる場所に行く。

故郷であるオーブではそのようなことを子供に言い聞かせて、躰を行っていたことを思い出した。



ふと懐かしい気持ちになり目を瞑った。そんな時であった。

「シン、ここは地獄ではない」

背後から低い男の声が響く。

その声はシンにとつては懐かしく、もう聞くことができない【親友】のモノ。思わず振り返るとそこにはザフトの赤服を着込んだ金髪の男。親友【レイ・ザ・バレル】がいた。

「レっ、レイっ!？」

「少し見ない間にずいぶんと背が伸びたな、シン」

シンのリアクションを無視して、レイは微笑む。

「無視かよっ!」

「気にするな、俺は気にしない」

メサイア戦役以来の懐かしいやり取りが行われた。

そのやり取りが行われたことで、少し気持ちが落ち着いてしまったシンではあったのだが。

「……それでここはどこなんだよ、レイ」

「ここは確かにあの世でもあるんだが……【境界】なんだ」

「境界？」

「ああ、お前を送るための境界だ」

「俺を？ 送るってどこに？」

レイの言っている事が理解できない。

「どういうことだよ、レイ」

「……お前はずっと戦い続ける道を選んだ、それを悪いとは言わない、お前の選んだ道だ」

レイの顔に苦悶の表情が浮かぶ。

「奴らとの戦いも終わり、世界は平和への道を歩み始めている。だがそのためにお前は死んだ……あまりにも救われなさ過ぎる」

「……レイ」

「……だからお前の魂を平和な世界に送る、お前はそこで生きろ、ここからならばお前を送り出せる」

「はあ!？」

親友が突拍子のない言葉を出した途端、自分の身体が後方に流れていくのを感じる。少しずつレイの姿が遠ざかっていく。

「平和な世界って、魂って、送るって! どういうことだよ、レイ!」

「これは俺だけじゃなく、C. E. の死人の総意だ。お前はそこで幸せになれ、いいか、絶対に幸せになれよ」

「だから訳分らないんだよ、答えろよレイいい!」

身体がどんどん後方に流される。

泳ぐように抵抗してみるが、速度を少し緩めるのが精一杯だ。

「気にするな、俺は気にしない……そっちで死んだらまた会おう、シン」  
「ふっざけんなああああ!!!」

せめてもの抵抗に大声でツツコミを入れた。

その直後、意識がまた遠のく。

最後に微笑むレイの姿が見えた。

## PHASE 1 飛鳥真

20XX年

突如、日本に数千発という凄まじい量のミサイルが降り注ぐという前代未聞の事態が発生した。

自衛隊も突然の事態に困惑しつつ、迅速な迎撃行動を行ったが、数発ならばともかく千を超える量の前にはなすすべもなかった。

しかしこの事態は政府の発表では犠牲者を1人も出すことなく終息した。

【空を飛ぶ白銀の人型の機械】の活躍によって。

白銀の人型機は日本に降り注ぐミサイルの雨を、その手に持つ剣と粒子砲によって尽くを破壊した。

圧倒的なまでの力を示しつつ、犠牲者を1人も出すこともなかったこの人型機を人々は英雄と称え【白騎士】と呼んだ。

それに伴いこの事件も【白騎士事件】と呼称されるようになった。

この事件の後、政府にある人物からのメッセージが届けられた。

メッセージの送信者は当時高校生であった【篠ノ之束】と言った。

メッセージの内容は「白騎士」。

正式名称「インフィニット・ストラトス」の有用性についてだった。

「宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツ」、そしてその可能性についてが公開されていた。

そして同じメッセージを世界中に送っている旨も記載されていた。

メッセージが世界中で確認されたと同時に、篠ノ之束から開発を促すために世界へ向けてISの核となる「コア」が合計467配布された。

日本はこれに対して、政府主導の下ISの研究を行うことを決定。

また他方面への応用についての研究も同時に進められることとなった。

同様の動きが世界中で実施され、世界は変化していく。

また白騎士事件では本当に犠牲者が全くでなかったのかネットの海の中では議論をかもし出すこともあった。

しかし犠牲者の目撃情報や遺族などの言葉も出てこないため時間が経つにつれて有耶無耶となってしまうた。

そして数年が経過した。

ISの用途は本来の目的であった宇宙での活動、宇宙開発が遅々として進まないことから「軍事利用」にシフトしていた。

ISの軍事利用は「アラスカ条約」で禁止される事となったが、各国は暗黙の了解の下、ISの軍事利用を進めていた。

そして同様に世界にはある思想が広がっていく。

【女尊男卑】の思想だ。

ISは女性しか動かすことができない。

故に女性のほうが男性より上の立場であると言う思想だ。

これに過剰に反応した女性権利団体のおかげで、女尊男卑の思想はあつという間に世間に広まってしまった。

2022年

「はっ、ふっ……!」

時刻は午前4時、真冬の為まだ日も上っていない時間に住宅街を駆けていく人影がいた。

人影は赤と白2色を基調としたジャージを着ており、ジャージの上から来ている薄いベージュ色のフード付きパーカーによって顔は見えないが10代の少年のようだ。

「ふう、今日はこれくらいかな……もうすぐ母さんも起きてくるだろうし」

走るペースを緩めて、呼吸を整える為に歩き始める。

歩き始めると同時に、火照った身体を少しだけ冷やすためフードをはずす。

漆黒と言う言葉が似合う程の純粋な黒い髪、まるで炎をそのまま閉じ込めたかのような【紅い瞳】、少し幼さが残る顔つきをしているが、一般的な範囲では十分に整った顔をしている。

「……さすがに少し寒いな」

まだ季節は冬。

一時的に体温が高まっていただけなので、すぐに寒さを感じフードをかぶりなおす。そのまま少年は自宅らしき一軒家の前で止まり、玄関の戸を開け中に入っていく。その家の表札には【飛鳥家】と記載されており――

” 飛鳥 大胡 ”



” 飛鳥 玲奈

” 飛鳥 真”

” 飛鳥 真由”

と記されていた。

「ただいま」

「あら、真、おはよう」

【真】と呼ばれた少年が玄関の扉を閉め、まだ寝ているだろう家族を起こさないため小声で帰宅を告げると母親らしき女性がそこに立っていた。

彼女の名は【飛鳥玲奈】、真の母親である。

真と同じく黒髪、真の身長である170cmよりだいぶ下回る身長の女性。少し目つきがきついが、その表情には確かに母性を感じさせた。

「ああ、母さん、おはよう」

「引退したのにトレーニング？」

「まあね、高校入っても格闘技は続けるつもりだし、鈍ってたら一夏に笑われるからさ」  
そう言つて真は少し肩をすくめた。

真は幼い頃から格闘技、正確には古流柔術を学んでいる。その経験を活かして中学では空手や柔道部などの助っ人として参加し、大会等で優秀な成績を修めている。

真の回答に玲奈が微笑みつつパーカーを脱ぐ用に催促していることに気づき、パーカーを脱いで渡す。

「男の子は元気なのが一番ね、でも勉強のほうは大丈夫なの？ 明日でしょ、入学試験」

玲奈は慣れた手つきでパーカーをたたみつつ真に問うが、真はそれに苦笑しながら答える。

「藍越の模試結果とかも特に問題なかったから、少し復習するくらいで大丈夫だつて」  
「まったく……模試の結果よかつたけど本番もそうとは限らないでしょ？」

そう言つても口元は少し緩んでいることを真は見逃さなかつた。

「分かってるよ、ちゃんと過去問復習して行くから……んじや、シャワー浴びてくるよ」  
「……真由が起きる前に入るのよ、タオル出しておくわね」

真はそのままシャワーに向かい、玲奈もタオルを用意しに向かう。

「ふう、さっぱりした」

真はシャワーを浴びた後、自室に戻っていた。

シャワー直後はタンクトップとトランクスという軽装だったが、トレーニング前に脱いでいた寝巻きがあったためそれに着替えている。

「今さらハイスクールの入学試験位なら問題ないってのに……まったく心配性だよ、母さん」

ベッドに腰掛けながらそう呟く真の表情は安らかだ。

飛鳥真。

いや、シン・アスカにとって家族との何気ないやりとりほど得がたいものはなかったのだから。

シン・アスカはあの境界と呼ばれた場所からレイに送り出された後、この世界で赤ん坊として生まれ変わっていたのだ。

シンからしてみればいきなり意識が飛んだ後、自分が赤ん坊になっているのだから心底驚いたものだ。

しかし驚愕の後に過去に自分が失ったもの「家族」を得ることができたのは僥倖だった。

かつて失ってしまった家族とは別人ではある。

しかし飛鳥真として、両親は自分に惜しみない愛情を注いでくれた。妹は幼い頃から自分を慕ってくれている、最近では携帯電話を新しくして真に自慢していたりもする。

自分を愛してくれる父、母、妹。

あの日オーブで失ったもの、「日常」を得ることができている今をシンは幸せだと感じていた。

「……レイ、ありがとうな」

亡き親友に向かってそう呟く。

届いていることを願って。

「さて、朝飯まで時間あるし……学校の準備、しておくか」

そう呟いて真は机に向かう、明日が入学試験だが今日も通常通り授業がある。

試験対策で泣き付いてくるかもしれない友人たちを脳裏に思い浮かべながら、準備を進めていく。

## PHASE 2 変わり行く日常

時刻は午前7時。

リビングでは真と父親である「飛鳥大胡」が朝食をとっていた。

190cmを越える長身にがっちりとした筋肉質の体格、やや濃い茶色の髪の毛をショートレイヤーにし、少々の髭も生やしているが下品には感じず男らしさを際立てている。

これが飛鳥家の大黒柱、飛鳥大胡である。

大胡はすでに食事を終えており、コーヒーを飲みつつ、目の前でフレンチトーストを食べている真を見つつあることを聞く。

フレンチトースト、トマトが盛られたサラダ、ブラックコーヒー。

これが本日の飛鳥家の朝食なり。

「真、明日は問題ないのかい？」

「ん、問題ないよ。父さんはどうなのさ、今度社長さんと打ち合わせみたいなのがあるん

「じゃなかった？」

フレンチトーストを軽く平らげた真は、コーヒーを飲みながら大胡に問い返す。対する大胡も同じくコーヒーを飲みながら真に返答する。

「ああ、そうだね、僕のほうも問題はないさ。応武さんはよくしてくれているよ」

大胡はＩＳ等の最先端科学を応用した製品を生み出している企業【日出工業】の技術者である。

ＩＳ部門のシェアは日本の倉持技研と双璧をなしており、企業所属のＩＳ搭乗者もいるほどだ。

またＩＳ部門だけではなく、災害救助用のパウダースーツや重機などを開発している。

大胡はその企業のＩＳ技術開発部門に技術者として所属している。

「……父さんは凄いよ。ＩＳの技術者ってことはあの思想をモロに受けるのにな」

「おだてても小遣いは上げないぞ、真」

別にそんなつもりじゃと真は苦笑する。

それを見て大胡も微笑んでいた。

「あの思想の影響がないって訳じゃないさ。でもね、そんなモノに負けてたら技術者なんてやってられないよ。技術者は自分の夢を形に変える仕事だからね、他人なんか入る余地もないさ」

大胡はそう言って飲みかけのコーヒーに口をつける。

その姿に真は尊敬の念を覚えた。

「凄いよ、父さんは」

「だからおだてても小遣いは上げないよ……試験、頑張りなさい」

大胡の言葉に力強く頷く。

するとリビングに眠たそうな女の子の声が響いた。



「ふわ〜……。お父さん、お兄ちゃん、おはよー」

腰まで伸ばした綺麗な茶色の髪、真とは異なり紫の瞳、幼い雰囲気を出しつつも若干13歳でありながら出るところは出始めている身体、顔も相当の美少女である真の妹、【飛鳥真由】である。

パジャマのまま眠たそうに目をこすりながら真の隣に座り、あくびをしていた。

「おはよう、真由」

真と大胡がそろって真由に挨拶を返す。

「うくん、眠いよお……」

「また夜更かしをしていたのかい、真由？」

大胡が静かに真由に問いかける。

穏やかな口調だが少々怒気がこめられており、大胡の目は笑ってはいなかった。それを感じ取った真由は少し怯えながら答える。

「お父さん、ごめんなさい……。夜更かししました」

「はあ、全く……。何をしてたんかい？」

「えっと……。撮り溜めてた仮面ライダーを見てたの」

真由の趣味は意外にも日曜朝に放送されている特撮番組の視聴だ。

この趣味は幼い頃真と一緒に番組を視聴していたらいつの間にかはまってしまったことに起因している。

ちなみに真も特撮番組の視聴は継続しており、兄妹でどのライダーが好きかなど、たまに議論している。

年頃の少女の趣味からは若干外れていることに少々ため息をつきつつ、大胡は真由に告げた。

「……夜更かしは程々にしなさい」

「はあ、ごめんなさい」

真由は謝罪しつつ、玲奈によって目の前に出されていた朝食を食べ始める。

「そういえばお兄ちゃん、明日試験だっけ？」

「ん、ああ。まあ問題はないかな」

「さっすが、お兄ちゃん！ でも一夏さんや弾さんは大丈夫なの？ ガッコは同じでしよ？」

真由は真の友人【織斑一夏】と【五反田弾】と言う人物の名前を出した。

織斑一夏は真の幼い頃からの友人である。

曲がったことが嫌いなまっすぐな人間であり、好感が持てる。

ただ女心についての理解が全くないため、それに付き合わされる真や他の友人達はい迷惑である。

しかも一夏は俗に言うイケメンだ。

五反田弾は小学校からの友人である。

知り合ったきっかけは一夏絡みの女生徒へのアフターケアで意見が一致したためだ。

珍しい赤毛の彼は一夏と同じくイケメンではある。

しかしイケメンの前に【残念な】が付くタイプであるが。

真も女生徒から人気が高い。

しかし一夏関連のアフターケアに追われていたため、告白されることなんてなかったという悲しい事情があるのだがそれは別の話だ。

「弾も一夏も問題ないと思うよ、ちゃんと勉強させたしね……寝坊しなければ」

「あはは……さすがにしないんじゃない？」

「まあ、流石にしないか……うん、ご馳走様」

真は残っていたコーヒーを飲み干し、手を合わせる。

しかしこの時の杞憂がまさか現実になろうとは当時の真には思っても見なかったのだ。

翌日

藍越学園・IS学園合同入学試験会場と記された立て看板の前に真は立っていた。

「遅いっ。一夏はいつたい何してるんだよ」

イラつきながら何度も腕時計を確認する。

真のイラつきの原因は、試験開始までの時間は刻一刻と近づいているのに、友人である一夏が待ち合わせ場所に来ていないことだ。

「まあ、落ち着けて、真。焦るのも分かるけどよ」

そう言っただけで弾は苦笑しつつ同じく時計を見る。

試験開始までは残り30分。

受付等の受付時間終了までが残り10分程なので、実質20分程度しか残ってない。

「携帯にかけてみても通じないし……弾、家のほうはどうだ？」

「さっきから家にかけても出ないから外には出てると思うけど。今、千冬さんいないって言ってたし」

弾は先ほどから一夏の家に数回電話をかけているが、一夏は出ない。

彼女の姉であり、超が付く有名人でもある「織斑千冬」もでない。

「……もう5分待ったら中で待とうぜ、流星に俺らもやばい」

弾の提案に真は頷く。

試験会場入口を見回してみるが、やはり一夏の姿はない。

「一夏、どうしたんだよ……！」

その後5分経過したがやはり一夏は現れなかった。

仕方なく真と弾は藍越学園側の試験会場に入り、受付を済ませる。

その後無事試験は終了したが結局会場に一夏が現れることはなかった。

試験終了後の受験者があふれる会場前に2人は出てきていた。

真と弾の試験は問題なく終了し、本人たちも手ごたえを感じていた。しかしやはり友人が試験会場に来ていなかった事により彼らの表情は冴えない。

「あいつ、頑張って勉強してたのに……」

真は一夏の努力を知っていた。

藍越学園の卒業後は安定した就職が見込めるため、姉であり自分を守ってくれていた人の負担を少しでも減らせるようになりたいと言い、一夏は真や弾と共に受験勉強を続けていたのだ。

「……ちよつと電話してみるわ」

弾が携帯の電源をONにする。

試験会場内では、電源をOFFにしていたので当然だ。

「まずはあいつの携帯に……ん、何か向こう側騒がしくないか？」

「向こう側って……IS学園の入学試験会場か？」

弾がIS学園側の入試会場が騒がしいことに気づき、真もそれに気づく。確かに弾の言うとおりに、何やらIS学園側のスタッフがあわたたくしく出入りを繰り返している。

2人とも友人の事に頭が一杯になっていたため、気づくのが遅れたのだ。

「すいません、何かあったんですか？」

気になった真が目の前を通ったIS学園側のスタッフと思われる女性に話しかけた。スタッフの女性が振り向き、驚愕した表情で真の質問に答えた。

「何って、男性搭乗者が現れたのよ！」

「っ、搭乗者って……?」

「ISのよー！」

そう言って立ち止まっていたことに気づいた女性スタッフはすぐさま試験会場に入って行ってしまふ。



女性の発言は最強の兵器と言われるISの【前提】をぶち壊すものだった。

「はあ？ 男はISを操縦できないんじゃない？」

そう、ISは原因は不明だが女性にしか反応せず操縦できないもののはずである。

「おつ、おい！ これ見ろ、真！」

少々呆けていた真が弾に呼ばれて、彼の携帯の画面を見せられる。

携帯はTVを映しており、ニュースが流れていた。

ニュースキャスターの女性が驚愕の表情と共に内容を伝えている。

『驚くべき速報です。先ほどIS学園入学試験会場にて男性のIS男性搭乗者が発見されました！男性搭乗者の名前は【織斑一夏】君15歳で……』

ニュースキャスターの女性の口から出た名前はよく知る友人のモノ。

それを聞いた2人の反応は異なるモノだった。

「無事でよかったけどよあいつ、何やってんだよ……」

弾は少々呆れたように眩く。

対する真は――

「……この発見は色々与世界が動くな。まずいなこれは……」

――【シン・アスカ】として、熟練の戦士としての勘と嗅覚で世界が動くことを感じ取っていた。

同時刻

日出工業 本社 社長室

日出工業の社長室で、同じように男性搭乗者発見のニュースを見ている人物が2人い

た。

1人は真の父親の大胡、いつもは作業服なのだが今日は社長との打ち合わせがあったため、スーツ姿だ。

もう1人は女性だ。

「……大変な事になりましたね、社長」

「そうね……彼は知り合いでしょ、大胡君」

淡い紫の色のショートヘアに180cmを超える長身、物柔らかな表情を浮かべたスーツ姿。

顔やプロポーションもモデル並みに整っており10人中10人が美女と答えるだろう。

この女性が日出工業の社長である。

「ええ、息子とは幼い頃からの仲で……」

「なるほどね……息子さんの名前は……真君だったかしら？」

女社長は大胡に真の名前を聞く。

それに対し大胡は不思議そうに聞き返す。

「ええ、そうですが……真の事をご存知で？」

「まあ、以前から興味を持ってたのよ……中々に母性に来る顔をしてるのよ、彼」

「はあ……」

息子の事を褒めていると取っていいのか判断がつかない大胡が気の抜けた返事を返す。

「さて、こうしてはいられないわ、大胡君、準備を」

「えっ、準備……ですか？」

「そう、準備よ……男がISに乗れるのだから、おそらく日本各地で男性搭乗者の確認テストが行われるはず……こちらのほうで色々と根回しをしないとまずいわ」

そう言つて女社長は目線で大胡についてくるように命じ、社長室から出て行く。

大胡もそれについていく。

「…………飛鳥真…………真・飛鳥…………【シン・アスカ】…………おそらく彼ならば…………」

女社長はそう自分だけに聞こえるように呟いた。

彼女の胸にはネームプレートがあり、そこに記載されている名前は――

【応武優菜】

と記されていた。

## PHASE 3 2人目の搭乗者

男性搭乗者が発見されたという衝撃のニュースから数日後。

全国一斉の搭乗適正調査が行われる事となった。

真達の通う中学でも男子生徒が体育館に集められ、中央に鎮座している量産型IS  
【打鉄】に触り適性を見るというテストが行われている。

鎮座している姿はまるで戦国時代の武士が着るような鎧そのものだ。

ただスラスターなどがあるため純然に鎧という訳ではないが。

スタッフを見ると着ている制服が2つに分かれている。

1つは真にとっては見慣れているモノ

父親が着ている作業着にもつけられている社章、【日出工業】のスタッフだろう。

もう1つは見たことがない制服だが、ISの適性テストということはおそらく倉持技研のスタッフであろうと真は判断していた。

「なあ、真、ISに乗れたらIS学園に行けるんだよね？」

真の前に並んでいる弾がにやけながら真に話しかけてくる。

IS学園は全寮制の女子高であり、そこに通っている女生徒は美少女ばかりといわれている。

彼女ほしいと常日頃から言っている弾にとっては楽園であろう。

「……行けるんじゃないか？」

浮かれている弾をジト目で見つっ、適当に返す。

真は弾の様にこのテストを楽観視することはできなかつたのだ。

(……2人目が見つかつたとしても後ろ盾がない。人道的な処置は見込めないだろうな、最悪モルモットか)

一夏の場合は彼の姉が世界最強のブリュンヒルデであり、篠ノ之束の知り合いという強力な後ろ盾がある。

だが真には強固な後ろ盾なんてものは存在していない。

一応篠ノ之束には「あつくん」と呼ばれてはいたが、一夏程の後ろ盾ではない。前世のザフトでの経験が思い出される。

当時、エクステンデッドのステラを拘束したザフト軍はその身体データを取得するため彼女をモルモットにしようとしたのだ。

その当時はシンの独断で連合に返却した為、ステラはモルモットになることはなかった。

しかしそのためベルリンの悲劇を起こしてしまったことはシンの中に重い十字架として残っている。

（弾やクラスメイトの皆が2人目になったら……どうする？ 俺だけで何とかできるか？）

万が一の為、制服を少々改造して裏地にナイフホルダーを仕込んでいる。

一見ポケットに見えるように改造しているため、母親などにはばれていない。

軍用の大型ナイフに比べれば大きさは劣るが、アウトドア用サバイバルナイフだ。

首や胸などを突けば十分致命傷を与えることができる。



（ナイフはあるし、スタッフは見たところ素人。だけどあの「眼鏡をかけた女の人」……おそらくISを持っている）

真はスタッフの中に1人だけ雰囲気が違う者がいることに気づいていた。

戦士の嗅覚——シン・アスカとして鍛えられた感覚が自身と同じ匂いを感じ取ったのだ。

眼鏡をかけた栗色の髪をショートカットにした女性、身長は真より10cmほど下回っている。

IS専用のスーツ越しだからか、鍛えられていることが分かるが女性的な雰囲気も醸し出している体つき。

その左腕にはブレスレットの様な「黒い腕輪」がつけられていた。

【日出工業】の社章付きの上着を羽織っているの、どうやら企業所属のIS搭乗者のようだ。

（おそらくあれが彼女のIS。父さんが言ってたな、ISは待機状態だとアクセサリーみたいになるって……もし万が一の場合になったら、ISの起動前にやるしかない）

大胡から教えてもらったIS知識を思い出しながら、戦略を立てていた時だった。

「よし、俺の番だ！」

どうやら検査の順番が弾に回ってきたようだ。

確認の為一旦思考の海から這い上がり、弾の検査を見守る。

「はい、それじゃそこに手を置いてね」

「動け動けよ……どうだ！」

スタッフの指示の通りに弾がISに触れる

しかし何も反応を示さない。

「………はい、お疲れ様でした」

「ちくしよおおおおおおお!!!!」

スタッフの声と、弾の無念の叫びが体育館に木霊した。

この結果に正直真は胸を撫で下ろした。

「お疲れさん、駄目だったな」

「くそお……何で一夏だけえ……！」

結果に恨み言を漏らす弾が列から外れる。

「次は君ね……あら、もしかして大胡さんの息子さん？」

スタッフの女性が名簿を確認し、大胡の名前を出す。

予想外の事に少々驚きつつ聞き返す。

よく見たらスタッフの女性の制服には「日出工業」の社章がついている。

「父さんを知ってるんですか？」

「ええ、お世話になってるわ。彼は第3世代ISの開発責任者でもあるし……ああ、ごめんね、そこに手を置いて」

第3世代という気になる言葉が出たが、そこには触れない。

スタッフの女性の指示に従って真は「打鉄」に触れる。

その瞬間

——意識の中で【種】が弾け飛んだ。

「っ!?!」

同時に凄まじい情報の奔流が真の頭に流れ込む。

打鉄の操作方法、装備の詳細情報、ハイパーセンサーの稼働状況、パツシブ  
イナーシヤルキャンセラー<sup>C</sup>の稼働状況、シールドエネルギーの状況 e t c——気が付く  
と真は打鉄を身に纏っていた。

(今のは【S・E・E・D】か?! MSにも乗ってないのに!? 生まれ変わってから発動  
したこともなかったのに!?! というか俺、今ISを装着しているのか!?!)

予想もしていなかった状況に流石の真も混乱してしまう。

だがそれ以上に混乱しているのは弾や集められた男子生徒、またはスタッフの方で

あった。

「ふっ、2人目……!？」

「まさか本当にいるなんて……!」

「おっ、おい、真……マジかよ……!」

「2人目キター!？」

「飛鳥さんが2人目!？」

（っ！ やばい、この状況!？）

パニックになっている皆を見て、ある程度は冷静さを取り戻す。

しかし状況は真にとってかなり悪い、とりあえずは身の安全を確保しなければならぬ。  
い。

何としてもモルモットだけは回避しなければ――

（ハイパーセンサーつてのは自分の後方まで正確に把握できるのか……あるいは「S.

E. E. D」が発動してるからか？）

ハイパーセンサーで体育館全体を確認。

後方に開いている窓を確認した。

先程流れ込んできた情報からP I Cの操作を行う。

彼がイメージするのはMSをスラスターで浮遊させるイメージ、併せてそれを自分の

身体で行うイメージ。

すると身体が浮かび上がり、空中へ飛び上がる。

スラスターを全開に吹かして、先ほどハイパーセンサーで確認した体育館の開いている窓に向かって飛ぶ。

「ちよつ、飛鳥君、まつ……!?!」

真の突然の行動によってさらにスタッフ間にパニックが広がる。

しかし、その中でも冷静に行動できた人物が1人だけいた。

その人物は真の行動がおそらく実験台にされると恐れたことによる行動だとも認識していた。

「っ!？」

『おっと、逃げちゃダメだよ、真君』

全身が黒い機体。

搭乗者の両腕から両肩、両足を覆うように大きな装甲とマニピュレーター、背部にはMSのランドセルの様なスラスタユニット、肩部には実体剣が埋め込まれたシールドが2つ浮遊している。また腰部にはMSなどでよく見るサーベルの柄の様なものが2つ装備されていた。

どこかデジャヴを感じる機体が真の眼前に割り込み、脱出を拒む。

同時にプライベートチャンネルが繋がる。

『あんたはっ!？』

『あらら、忘れちゃったの？ お姉さん悲しいぞお?』

おどけた様な声色で黒い機体の搭乗者は真に顔を合わせる。

美人——だが真にとっては見覚えがない。

『誰だよアンタ!?!』

『ほんとに忘れちゃったの？ 君がザフトのテストパイロット時代は手取り足取り教えてあげたのになー?』

その言葉と彼女の態度でシンの脳裏に思い出されるのは、コーディネーターであるのに眼鏡をかけた優秀な女性パイロット。

テストパイロット時代に、コートニーと共にシンを鍛えてくれたお節焼きな年上の女性。

ネオ・ザフトには参加せず、地球に降りて復興団体に所属していた人物。

名前は【リーカ・シエダー】

『……まさか、アンタ……リーカさん!?!』

『そうそう、思い出してくれてありがとう……つとー!』

驚愕と共にわずかに真にできた隙を彼女は見逃さなかった。

突如彼女のIS腰部からワイヤーが発射され、真の打鉄の腕部に絡みついたのだ。



サーベルの様な武装はワイヤー発射装置だったのだ。

これがMSならば真は事もなげにワイヤーをサーベルやら近接武装でいなせた、または回避できたであろう。

しかしISに搭乗するのはこれが初めてであり、戦闘機動などろくに取れない。

【S. E. E. D】が発動し能力が上がっていても、経験が圧倒的に不足しているのだ。

『はいはい、拘束ー!』

『うわあっ!?!』

瞬間的な加速によりリーカが目の前から消え、ワイヤーによって後方に引っ張られる。

そしてリーカは再び加速し、そのままの速度で体育館の床に叩きつけられた。

「ぐああっ!?!」

床にたたきつけられた衝撃のせいで、打鉄が解除され真は投げ出される。

ISには【絶対防御】と呼ばれる機能がある。

機体のシールドエネルギーを消費して搭乗者を守る機能であり、ISによって死者が出ないのはこの機能のおかげでもある。

床との激突の衝撃には絶対防御が発動した、しかし投げ出されてからの衝撃には「絶対防御」は発動しない。

というか投げ出されてしまったので発動も何もないのだが。

身体に走る衝撃によって真は満足に立ち上がることもできない。

「ぐっ……くそっ……！」

何とか立ち上がろうとしたが、身体が縛られていることに気づいた。

いつの間にか先ほどのワイヤーが身体に絡みつき、簧巻きにされていたのだ。

『どう？ 私のIS【ガイア】のワイヤーは？』

「……脱出失敗か、くそ……！」

簧巻きの状態にされながら何とか状況を打破する策を考えるが何も浮かんで来ない。

リーカのI Sのマニピュレーターによつてさらに簧巻きのまま床に押さえつけられる。

『悪い様にはしないよ、そうでしょ、社長ー?』

「……ええ、ありがとう利香」

いつの間にか体育館に社長と呼ばれた女性が姿を見せていた。

淡い紫の色のショートヘア、180cmを超える長身の美女。

コツコツとヒールの音を体育館に響かせつつ簧巻きにされた真の元に女社長が歩み寄る。

「こんな形になっちゃって申し訳ないわ。初めまして2人目の男性搭乗者、飛鳥真君。私の名前は「応武優菜」。貴方のお父さん、大胡君の勤める会社【日出工業】の社長よ」

優菜と名乗る女性は倒れている真を抱えて起き上がらせる。

いつの間にかワイヤーは消え、リーカもI Sの起動状態を解除していた。

「……父さんの企業の社長さんが何で……?」

「それは君を保護するためよ。たった今から君は【日出工業】所属のIS搭乗者になったのよ」

優菜が微笑みながら真の質問に答えた。

いきなりの爆弾発言に真は啞然としてしまった。

そしてその余波は周りへと及び――

「「ええ〜?!」」

体育館に日出工業のスタッフ以外の叫びが木霊した。

## PHASE 4 日出と共に

真にIS適正があることが判明した翌日

第2の男性搭乗者が日本で発見されたと言うニュースは世界中に発信された。

日本政府は当初、彼を保護し研究施設へ送る予定だったと、優菜は語る。

また国際IS委員会でも研究施設送りが議題に出され半数が賛成の意見を出していた。

(反対したのはロシア・中国・イギリス・アメリカの4カ国のみ)

この政府及び国際IS委員会への決定に対し、日出工業は人道的な処置のため彼の保護を提案。

彼の父親が勤めている企業であるので保護する理由にもなった。

しかしこれだけでは弱かった。

なので優菜はある取引を持ちかけた。

彼を専属の搭乗者として日出工業に所属させ、彼に日出工業で開発した新型の第3世代型ISに搭乗させる。

そこで取れた男性搭乗者のデータ及び今後開発予定の新型機数体分のデータ全てを

渡すと言うものだ。

これに対して国際ＩＳ委員会は飛びついた。

一人目の男性搭乗者である織斑一夏のデータは、彼の姉であり現在の世界で知らぬ人はいない初代ブリュンヒルデ〔織斑千冬〕の手によって中々渡ってこなかったのだ。

さらには倉持技研と双壁をなすほど優れた日出工業のＩＳ関連の技術を得ることが  
できるのだ。

真の研究施設送りに賛成した国々の殆どが、優菜の案を支持。

日本政府はこれに反対したが、国際ＩＳ委員会の圧力とＩＳ保有数の増加案を提出され、優菜の案を認めた。

優菜の取引によって真は自分の知らない間に日出工業専属のＩＳ搭乗者として雇われていたのだ。

「……というわけ。把握できたかしら？」

真の現状を優菜は応接室で説明していた。

テーブルを挟んで対する真も自分の状況については説明により概ね把握していた。

「何とか……まあ、俺の知らないところで色々と動いてもらったってことですよね」  
「なあに、君の身の安全が第一よ。そうだ、紅茶とコーヒーどちらがいいかしら？」

「コーヒーで、と真が答え優菜の背後にいた利香と名乗る女性がコーヒーを入れるために部屋を出て行く。

「……色々と聞きたいことがあるんですがいいですかね？」  
「ん、どうしたのかしら？」

優菜は微笑みながら真に聞き返す。

それを確認した真は自分の心の中にある疑問をぶつける。

「アンタは何者だ」

真の語気を荒くした質問でも優菜は表情を変えず微笑んだままだ。

「それに【利香】さんとかいったよな。彼女は【リーカ・シエダー】さんだろ？ 何で彼

女がこの世界に。それに彼女のISだって……」

真の質問に対して優菜は微笑みながら回答する。

「ええ、彼女は元ザフトの〔リーカ・シエダー〕で間違いないわ。彼女のISは〔ZGM F-X88S ガイア〕をモデルに我が〔モルゲンレーテ〕が作成した第3世代IS〔ガイアガンダム〕よ」

〔モルゲンレーテ〕その言葉を聴いた瞬間、真の表情が驚愕に変わる。

前世の故郷の国の国営企業。

それがモルゲンレーテという名前だからだ。

「あんたは………いつたい………」

「………ふう。そろそろ気づいてもいいんじゃないかな？　〔僕〕の事気づいてないのかい？」

優菜の苦笑がこぼれると同時に口調が変わる。



真はその言葉を聴いても呆けたままだ。

「いいかい？ 僕の名前の読み方を変えてみてよ。【おうたけゆうな応武優菜】、一部分変えてごらん」

「おうたけゆうな……おうぶ……オーブ!？」

それはかつての故郷の名。

そしてオーブで優菜——いや【ユウナ】ということとは——

「あつ、アンタは【ユウナ・ロマ・セイラン】!？」

「おー、正解、やつと分かったみたいだね。ちなみに【日出工業】つてのも読み方をドイツ語に変えると【モルゲンレーテ】になるのさ」

優菜はそう言つて無邪気に笑う。

だがシンの記憶の中にあるユウナは——

「アンタ男じゃなかったのか!？」

そう、シンの記憶の中にある「ユウナ・ロマ・セイラン」は男のはず。だが目の前にいる優菜は明らかに女性である。

「そりゃ女として生まれたからねー。最初は苦労したさ……ははっ……」

そう言って少しだけ遠い目になった彼女は乾いた笑いを漏らす。

どうやら色々であったようだ。

「じゃあ、リーカさんは!？」

「私は老衰で死んでからこの世界で目覚めたのが最初の記憶かなー。あ、ちなみに今の私は「リーカ・シエダー」じゃなくて「瀬田利香」だからね、真君」

リーカ、いや利香が応接室に戻ってくる。

その手には淹れたてのコーヒーが3つ。

真と優菜の目の前にあるテーブルにコーヒーを並べる。

「C. E. はあの後ちゃんと1つに纏まったから安心してね、真君。元ミネルバのクルー達もちやんとそれぞれの道を歩いていったよ」

まあ、なんで私がおここにいたのかはわからないんだけどね、と利香は続ける。

利香の言葉に真は心が軽くなったことを感じていた。

生まれ変わってから十数年、心に残っていた自分が死んだ後のC. E. の事、アビーやヴィーノ、仲間達の事を知りたかったのだ。

「……なんで皆がこの世界に？」

「さあね、そこは僕等にも分からない。ま、神様がいるなら君を助けさせてくれたことには感謝してるよ」

そう言って優菜はコーヒーを飲む。

ブラックなので少し顔を顰めていた。

「……なんで俺を助けるんだ？ アンタが死ぬ原因を作ったのはオーブへのザフトの侵略行為のほす」

優菜の前世、ユウナ・ロマ・セイランの死因はザフトのMSによる圧死。

その原因はオーブにザフトが侵略したことが原因。

侵略行為にはシンも参加していた。

その言葉を聴いた優菜はコーヒートをテーブルにおいて語りだす。

「……理由は3つあるのさ」

「3つ?」

「そう3つ」

優菜は右手の指を3本立てる。

「1つ目。君の男性搭乗者としてのデータを独占したかった。まあこれは結局はおじやんになったけど」

指を1本折り、優菜は肩をすくめる。

「2つ目。わが社の技術力を示すため。男性搭乗者の新型ISなんて話題性もばっちりだろ？」

その言葉にジト目で優菜を睨む。

ふざけながら優菜が続ける。

「3つ目。個人的にはこれが本題。君がオーブの民だから」

先ほどのふざけた態度は消えうせ、優菜の真剣な表情に真は一瞬気圧された。

記憶の中のユウナ。

オーブにいた頃や侵略行為の際の彼はこれほどの表情を見せたことがあったであろうか。

「……は？ え？ 何だつて？」

思わず聞き返してしまった。

「だ〜く〜ら〜、君がオーブの民だから！　それが君を助けた理由さー！」

真の反応が予想外だったのか、優菜の表情が一気に崩れた。  
優菜の顔が照れているのか赤くなっている。

「オーブの民の命を守ることが氏族の、いや僕の役割だった。あの時は失敗しちゃったけど今回はうまくいってよかったよ……あ、君の家族についても大丈夫、保護してあるから」

赤くなっている顔を隠すため、そう言っつてコーヒーに手をつける。

真は俯いていた。

俯いたまま、コーヒーが映す自分の顔を見ていた。

「……さて、一通りの情報交換が終わったわけだけど、うちの企業の力になってくれるかい？」

ほとんど選択肢がないじゃないかと、心の中で真は呟く。

でも嫌な気分ではないと真は感じていた。

「……アンタ変わったよ」

「ん、それは自覚してるよ。んで、結論は？」

優菜が答えを催促するかのように微笑む。

「……分かった、やる。力を貸すよ、優菜さん」

そう言って真は笑みをこぼした。

## PHASE5 空に奔る衝撃

真が正式に日出工業に所属することとなった翌日。

日出工業の応接室に2人の女性が打ち合わせのために待機していた。

1人は一見子供のようにも見える緑髪の女性だが母性に溢れた2つの果実が、彼女を子供ではないと主張している。

だがスーツを着ていてもどこかおっとりした雰囲気をかもし出している。

もう1人は、緑髪の女性と比べて凛とした雰囲気が漂っている黒髪の女性だ。女性にしては身長が高く、おそらく真より少し下程度であろう。

スーツがピシッと似合っており、絵に描いたようなできる女といった感じだ。

彼女達が待機していると、応接室に優菜が入ってくる。

少し疲れているような雰囲気だが、それを顔には出していない。

「遅くなり失礼しました、なにぶん色々忙しくて……」



優菜の入室にあわせて黒髪の女性が立ち上がる。

緑髪の女性もそれに習い、立ち上がる。

「それでは自己紹介をば。日出工業の応武優菜と申します。本日はよろしくお願い致します」

「IS学園で教鞭をとらせていただいております、織斑千冬です。本日はよろしくお願い致します」

「おつ、同じくIS学園で教師を勤めております、山田真耶です。本日はよろしくお願い致します」

3人がお互いの名刺を交換して、簡易な自己紹介を行って椅子に座る。

「優菜社長自らがご対応していただけるのはこちらとしても助かります」

「世界最強のブリュンヒルデにそんな風に言ってもらえるなんて嬉しいです」

「ご謙遜を。件の彼を政府や委員会から保護した手腕は痛快かつ的確で、参考になる点が多々ありました」

「まあ、あれは個人的に許せなかったのもあったので……さて、本題のほうに参りましょ

う？」

「ええ。彼のI S学園への入学の件、ご検討いただけましたでしょうか。」

本日の打ち合わせは真の【I S学園】への入学についての調整である。

真の立場は現在【日出工業所属のI S搭乗者】となっているが、この立場が不変のものと言いつてではない。

なのでI S学園と呼ばれる日本に設置されたI S搭乗者を養成する学園に入学させて、保護させるというのがI S学園側の要望だ。

I S学園はどの国家・企業にも属さず、警護もあるためここに入学すれば真の安全はほぼ確保される。

「私の方でも彼の入学は大歓迎です。それに【1人目の彼】もI S学園に入学するのでしよう？」

「はい、織斑一夏も同じく入学します。ということは入学については問題ないとのことですよ。よろしいでしょうか？」

千冬が優菜に確認を取る。

優菜もそれについては首を縦に振り、承諾の意を示す。

「こちらとしては問題はないのですが……1つ要望があるのです」

「要望……とは？」

「彼の使用する専用機は少々特殊なモノでして。それについての定期的にスタッフを送り調整とデータの収集を行いたいと考えております。加えて政府と委員会の取引に新機と彼のデータを渡すと条件に出してしまいましたので……よろしいでしょうか？」

IS学園への部外者の立ち入りは基本的に許可されていないのが現状だ。

しかし真は得られたデータを政府と委員会に渡す契約があるため、この要望は認めてもらわなければならない。

「そうでしたね。彼の状況はもう1人と比べてかなり悪い……そう言うことならこちら側も問題ありません」

「はい。この後すぐ学園側にもこの事をお伝えいたします」

「ありがとうございます、織斑教諭、山田教諭」

その後は詳しい入学式の日程や当日のスケジュール、入学前に必読な参考書などをやり取りし打ち合わせは終了した。

千冬と真耶の2人は打ち合わせ終了後、日出工業近くのカフェで先ほどの打ち合わせについて意見のやり取りを行っていた。

「丁寧かつ迅速な対応でしたね。織斑先生」

「私とそう年齢も違わんだろうに1代で会社を倉持と双壁をなすレベルまでに拡大した人物だ。流石としか言いようがないが……」

そこまで言って千冬は黙る。

テーブルの上に置かれているコーヒーを黙って見続ける彼女を不思議に思い、真耶が話しかける。

「どうかしたんですか？」

「いや、何か隠しているような、そうでないような……ああ、これは勘だから気にしなくていい」

そう言ってコーヒーに口をつける、コーヒーの苦さと香りが気分をリフレッシュさせていくのを感じた。

日出工業本社 地下I S開発／整備区域

現在優菜は日出工業本社の地下数10mに作られた、広さ数100mの巨大な区画で真の専用機の初起動に立ち会っていた。

何故本社の地下にこんな施設があるかと言うと、ある物好きな研究者が「カッコいいからだ！」と優菜に直談判し、当の優菜はその気迫に押され許可を出してしまったと言う経緯がある。

まあ、そのおかげで色々とスムーズに開発等が進むので問題はないのだが。

「へっくし」

「あら、社長、風邪です?」

優菜のくしゃみに隣にいた白衣を着た女性研究員が気づく。

季節は冬から春へと移り変わり始める時期であり、環境の変化によつて体調を崩す場合もあるだろう。

だが優菜はそれを否定する。

「誰かが私の噂でもしてるんでしょ？ モテる女はつらいわね」

そう言つて笑うが研究員にはジト目で見られている。

「社長知ってます？ 社長にはレズ疑惑があるつて」

「ぶっ!？」

思わず嘔き出す。

周りにいた研究員達がその様子を不思議そうに見ている。

「何よそれ!？ そんなの私知らないわよ!？」

「だつて社長、すごい美人なのに男性との交際のお話とかないじゃないですか。それに仕事ばつかりみたいですし、結構有名ですよ、この噂？」

ケラケラと笑いながら女性研究員は手元のタブレットに視線を移す。

「ぐぬぬ、そういうのはまだ大丈夫だと思つてたからなあ……絶対撤回させてやる……！」

「別に撤回しなくていいのに。ああ、可愛いなあ……食べちゃいますよ？」

女性研究員の言葉に優菜は絶句し、少し彼女から距離をとる。

応武優菜27歳、初めて同性の部下に本能的な恐怖を感じた日であった。

整備区画の端はISの稼働状況を見るための訓練フィールドになっている。

そこに真と利香は立っていた。

2人はIS搭乗時に機体との連携を強める「ISスーツ」を身に纏っている。

真のスーツは日出工業特注のモノであり、前世のザフトのパイロットスーツに近く露出はない。

しかし、利香のISスーツは改造されているのか、腹部などが露出されている。

そのため、なるべく真は利香の身体を見ないようにしていた。

思春期の男子にこのスーツは色々と酷だろう。

真の目の前には「灰色の機体」が鎮座している。

脚部・腕部の装甲は利香の「ガイアガンダム」と同じであるが、ガイアほど大きなマニピュレーターではなく生身の腕が二回り大きくなった程度。

背部のランドセルも共通しているが、ランドセルには外部ユニットを装備するためのコネクト部が存在していた。

また本体とは別に少し離れた場所に、この機体の武装であろう大型ナイフが2つ置かれていた。

「これが……俺の?」

「これが君の専用機、【ZGMF-X56S インパルス】をモデルに製作した第3世代型IS【インパルスガンダム】よ」

シンにとってはデステイニーを受領する前の愛機、テストパイロットとして、リーカやコートニー達と共に作り上げた最初のMS【インパルス】

それをモデルにした機体に不思議と懐かしさを感じた。



だが1つ疑問に感じたことがある。

「【ガンダム】？」

そう【ガンダム】という名前だ。

この名前から思い出されるのはMSのOSの頭文字【G・U・N・D・A・M】であるがこれはどの【Gタイプ】のMSにも共通しているものはず。

当時は【デステイニー改修機】として認識していたが、歌姫の騎士団への反乱を起こした時の乗機の名前にも【ガンダム】と言う単語が入っていたことを思い出した。

「あー、それなんだけどね、インパルスの開発者【ジェーン・ヌル・ドウズ】って覚えてる？」

「えっと、確かザフトのセカンドステージシリーズの基礎を作った人ですよね」

シンの記憶にあるその名前は有名なものだ。

かつてのザフトを支えたセカンドステージシリーズのMS、インパルスなどが含まれる【Gタイプ】等を設計した人物だからだ。

シンは直接会ったことはなかったが、テストパイロットとして関わっていたため、名前は覚えてる。

「その人が日出にいるのよ」

「……え？」

「今ここにはいないけどね」

利香の言葉に辺りを見回していた真が照れたように見回すのをやめる。

「その人もこの世界についてことですか」

「そうね。で、そのガンダムってのはジェーンさんがつけたGタイプの愛称なのよ」

「愛称？」

「そう、彼女いわく【名前のない兵器なんて美しくもない】らしいわ。だからI.Sの名前にも【ガンダム】ってのを入れてるの。日出がここまで大きくなったのも彼女がいたからってのもあるわね」

サラッと重要機密を漏らす利香だが、ここにはそれを気にする人間はいない。

そして真は改めて「インパルス」——否「インパルスガンダム」を直視する。

「……触つていいです？」

「モチロン♪」

利香の了承を取り、装甲に触れる。

初搭乗時とは違い【S. E. E. D.】も発動せず情報も流れ込んでこなかった、しかし身体に機体が馴染んでいく様な感覚があった。

次の瞬間、真の身体はIS【インパルスガンダム】に包まれ、浮遊していた。

「……問題なく搭乗できたわね」

『インパルスなのにトリコロールカラーじゃないんですね？【初期化】フィッティングって奴ですか？』

「こそ、もう少しすれば【最適化処理】パーソナライズされるから」

パーソナライズ  
最適化処理

ISには初期形態から搭乗者の情報を読み取り、装甲やソフトウェア等を自動で最適化する機能があるのだ。

『なるほど……ん？』

腕部の表面装甲に色が付き始めると同時に「最適化処理」パーソナライズが開始される。腕部から全身へ鮮やかなトリコロールカラーが機体装甲を彩っていく。

【初期装備】プリセットとして先ほど床に置かれていたナイフが装備されている。

【フォールディングレイザー 対装甲ナイフ】。

インパルスと同じ名称でコンソール画面に表示されていた。

『ちゃんとインパルスだね、よかったよかった』

そう言つて利香は自身のIS「ガイアガンダム」を身に纏う

何故？と真が問いかけようとすると同時にオープンチャンネルで通信が入る。

『これから実戦形式でISの操縦方法を身体に叩き込んでいくからね。その機体には「シルエットシステム」が搭載されているから、動作確認ととりあえずはシルエット交換を感覚でできるようにするまでかな』

利香はガイアの肩部に浮遊してた実体剣2本を掴み取る。すると刃の部分に「ビーム」が発生した。

『はあ!?! 聞いてないですよ!?!』

『言っていないもーん。それと座学の方も叩き込んであげるから、入学までの1ヶ月……覚悟しておいてね?』

そう言って、瞬間的に加速した利香が真に突っ込み実戦形式での訓練が始まった。

後に真はこの1ヶ月をこう語る。

——地獄だったと。

## INTERMISSION 家族

インパルス初起動と同日

日出工業所有 私有地 社宅

真のIS適性発覚による彼の家族への影響を鑑みて、飛鳥家は日出工業の社宅に保護されていた。

ここならば警護の目があるし、いざとなれば利香等の日出工業のIS搭乗者が飛鳥家を護衛する事が可能だという優奈の判断であった。

日出工業所有の私有地に建てられた社宅。

高級マンションの様な外見の1室、リビングに飛鳥家の人間全員が集まっている。

目的は真の今後。

IS学園への入学等についての確認だ。

「真、身体の方は大丈夫なの？」

真の母親、玲奈の心配そうな声がリビングに響く。

テーブルには大胡、玲奈、真、真由がついている。

真の頬には、絆創膏が2つほど貼られている。

利香との実戦訓練のせいで軽度の切り傷を負っていたのだ。

「まあ、軽い傷だから。体力的には結構辛いけど、おかげで今日一日で【コイツ】をある程度は動かせる様になったよ」

真が自身の首にかかっている【ドッグタグ】を見て苦笑をこぼす。

IS【インパルスガンダム】の待機形態はこのドッグタグである。

いくら彼が古武術で身体を鍛えていても、今までまったく関係がなかったISを実戦形式で動かしたのだから疲れるのは仕方がない。

それに大胡も合わせて苦笑した。

「今日が初めての起動と訓練だったのに利香君も中々ハードだなあ」

(……リーカさんは昔からそうだったなあ)

思い出されるのは、ザフトのテストパイロット時代。

コートニーとリーカ、おまけにマーレによる模擬戦の内容だ。

コートニーは的確にこちらの行動を封じてくるいわゆる【詰将棋】の様な戦い方をするのに対し、リーカは機体の特性を十二分に發揮して、クロスレンジでの力と力の戦いを主にしていたのだ。

当時彼女が乗っていたMSはセカンドステージシリーズの中でも近接格闘戦に重きを置いた【ガイア】であったため、ソードインパルス以外では相手にし辛く、苦戦したことを覚えている。

もつとも、コートニーの詰将棋の様な戦い方にも同じレベルで苦戦していたのだが、それは余談である。

「やっぱり私は反対よ。何で真がIS学園なんてところに行かなきゃならないの……！」

それは母親にとっては当然の感情だ。

ISに搭乗できるというだけで真を取り巻く環境は大きく変わってしまった。



一時はモルモットにもされそうだったのだ。

「……IS学園への入学は決まってしまったし、定期的にデータを取得するためにはどうしてもISの操縦ができなきゃ。真はそういう契約で今ここにいられるんだよ？」

「あなた……それはそうだけど……」

いつもきつい目をしている玲奈だが、息子がISという今まで無関係だったモノにかわる為納得できていない表情をしている。

「大丈夫さ、僕だってそりゃ心配さ。だけど息子の事を信じてやらない親はいないだろう？ それに僕や、応武さん。日出の皆で真を支えるんだ、何があつたって乗り越えられるよ」

決して楽観的な考えではなく、息子を信じており、また自分たちの力に自信と誇りを持っているから。

大胡は力強く玲奈に伝えた。

「母さん、心配させてごめん。だけど俺は大丈夫だからさ」

「……わかったわ、真。私はあなたと日出の皆さんを信じるわ」

そういつて玲奈は真の隣まで歩いていく。

どうしたのさ?と聞こうとした真だが、彼女に抱きしめられてしまった。

玲奈の身長は150cmちよつとしかないが、真は座っているため問題なく抱きしめることができた。

「かつ、母さん!」

「あなたは自慢の息子よ。頑張りなさい」

抱きしめられたことは少々恥ずかしい。

だけどここのぬくもりは心地がいい。

何より家族の温かさを感じることができる。

1分程度抱きしめられ、玲奈から解放される。

「……お兄ちゃん、私もいい?」

今まで黙っていた真由が真の左手を握りながら言う。

え？と真が聞き返すのと、真由が彼に抱き着くのはほぼ同時であった。

「おっ、おい、真由!？」

「頑張つてねお兄ちゃん……!」

真由の声は震えている。

彼女も玲奈と同じく彼のモルモット化の件についてショックを受けていたのだ。

モルモット化については撤回されている。しかし場の雰囲気にあてられてしまったようだ。

「……ああ、頑張るよ」

「うええ……!」

ついには泣き出してしまった。

「おいおい、泣くなよ真由」

ポンポンとあやす様に妹の背中を軽くたたく。

「だつてお兄ちゃんがなくなつちやうんじやないかつて……!」

「俺はいなくなつたりなんてしないよ」

「うん……うん……!」

真由が泣き止むまで背中を軽くたたき続けた。

5分ほど経つて、真由は真から離れた。

同時に自分がやった行為について照れたのか顔を真っ赤にして、自室へと向かつてしまった。

「……やれやれ」

そう呟く真の胸には温かさが満ちていた。

この温かい想いがある限り、自分達はどんな困難だつて乗り越えることができる。

そう確信していた。

時は過ぎて真のIS学園入学1週間前

日出工業 本社 会議室

日出工業の会議室に優奈の姿があつた。

この会議室では「次期量産型ISの仕様決定」を議題として、技術者が議論を交わしていた。

真がインパルスを稼働させてから、インパルスの稼働データ及び男性搭乗者のデータが集まっておりそのフィードバックも兼ねている。

現在、「純日本製の量産型IS」と言うブランドは「打鉄」にシェアを握られている。それに対抗すべく、また日出工業の技術力を示すために技術者達は議論を重ねている。

ちなみに本来ならば大胡も出席する予定であつたが、彼は保護を優先するためしばらくは社宅で待機、及び社宅でも可能な作業のみにタスクを抑えている。

この会議に集められている技術者は全員優秀な人物だ。

インパルスやガイアに使用されているビーム兵器の理論構築と実物を開発した実績

がある。

だが――

「だから言ってるだろう？　我が【凶鳥】なら物理的破壊力を伴った重力操作も可能だと

！」

「ふん、ならまずは基幹となるシステムとハードを完成させるんだな……その点我等の【亡霊】は拡張性に優れているし、ガイアの稼働データを使っているから信頼性も高い  
！」

「2人ともわかっていないな……【凶鳥】、【亡霊】……確かに優れた機体だ、認めよう。だがロマンだ！ロマンが足りない！　だから【勇者】のようにロマンを持つべきだ!!」

聞いている優奈の表情はすぐれない。

いや、明らかに何かを我慢している表情だ。

優奈の背後では秘書である利香も苦笑いを浮かべていた。

(この変態<sup>バカ</sup>どもめ、くそお、胃が痛い……っ！)

彼女の胃痛の原因は、現在案として出されている「次期量産型ISの仕様」だ。そう「量産型」なのだ。

以下仕様書から抜粋。

案① 開発コードネーム【凶鳥】

インパルス素体とし、各部装甲を簡易化しカラーを青紫に指定。

【シルエットシステム】は搭載せず、【グラフィコン・システム】を搭載。

搭乗者支援の為支援AIを搭載予定。

武装の【ビームサーベル】及び【ビームライフル】はインパルスと共通。

専用武装は特殊合金製の十字手裏剣型カッターを投擲／操作する【フアング・スラツ  
シャー】

※グラフィコン・システム

シールドエネルギーの流動及びPICを応用することで、疑似的な重力制御を可能とする装置。

しかし技術的な課題が多々あり開発難航中。

案② 開発コードネーム【亡霊】

ガイアを素体とし、各部装甲を増加。

肩部のシールド埋め込み式実体剣はオミットし、スラスタを増設。

【凶鳥】と同じく支援AIを搭載予定。

武装の【ビームライフル】はガイア及びインパルスと共通。

専用武装は両腕装甲部及び両脚装甲部に装着した放電打撃武装【プラズマ・ステーク】  
また既存のIS用武装など、豊富な換装用武器を使用可能。

案③ 開発コードネーム【勇者】

インパルスを素体とし、スラスターと最低限の装甲及び対装甲ナイフを持った状態  
【ブレイブ】を基礎とする。

ブレイブ状態時に、搭乗者からの合体コールを行うことで追加パーツを展開。

追加パーツと合体することで、絶大な装甲と機動力を併せ持つ強化形態【ブレイブキ  
ング（仮）】へと変貌する。

武装は腕部装甲を飛ばす【ブレイブナックル（仮）】。

以下似たような案が5件――

案全てを確認した後、ぶちっと何かが切れたような音が優奈の頭の中で木霊した。



〔ちなみに残りの開発コードネームは【古鉄】【風神】【墮天使】【銃神】【武神】〕

「あほかあああつ!!」

机を両手でたたき、怒りのあまり立ち上がる。

議論を行っていた技術者達は何事かと優奈を注視した。

「あんた達つ！ まじめにやりなさいよつ！ 量産機つ！ 量産機についての会議なのよつ!!」 なのに案が全部専用機並じやないつ！ それに最後の【勇者】ってのは何つ!! 最初から合体してなさいよこれ、非効率でしょつ!!」

バンバンと怒りを机にたたきつけながら叫ぶ。

「だいたい量産機なんだから扱いやすくしなさいよつ！ なんで量産機なのに拳で殴りに行くのよつ!!」 なんで量産機に専用機もつけてないようなシステムを積み込むのよつ!!」 てか作れるのこれえつ!! 追加パーツうつ!! 量産できるようにコストを抑えなさいよおつ!!」

一頻り叫び終えた後、ぜえぜえと息を切らせて座り込む。

「変態的な禁止っ！ いい？ ちゃんとした量産機の仕様を決定しなさいっ！」

だがこの後結局ちゃんとしたモノは出ず、最終的にどの案が一番カッコいいのか？で議論が白熱してしまったため、会議は中止となった。

「もうやだあ……お腹痛い……」

涙目になりつつ社長室に戻っていく優奈を、

ある女性社員が恍惚な表情を浮かべながら見つめていたという。

## PHASE 6 I S 学園

【I S 学園】とは文字通り I S 操縦者の為の教育機関のことである。

正確には I S の情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止などを定めたアラスカ条約に基づき日本に設置された特殊国立高等学校である。

また操縦者に限らず I S 専門のメカニックや開発者、研究者など I S に関連する人材はほぼこの学園で育成されている。

学園の土地は本土から離れた離島にあり、あらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという規約が存在している。

真には願ったり適ったりの学園でもある。

また日本以外の国家の I S との比較や新技術の試験にも適しており、技術交流などの面で重宝されている。

「ううっ……」

IS学園 1年1組、その中で唯一の男性である【織斑一夏】は周囲からの視線に耐えている状況に置かれていた。

何故ならばIS学園は本来女子高であり、男性は自分一人しかいないのだから。

女生徒達からしてみれば一夏は美形であり、現在学園唯一の男性搭乗者でもある。

好奇の視線を送ってしまうのはしかたない状況であろう。

入学式が終わって教室に入ってからずっとその状況が続いており、そろそろ限界であつた。

そしてようやく一夏が待ち望んだ状況の変化が訪れた。

ちなみに一夏にチラチラと視線を送っていた【黒髪をポニーテールにした女生徒】がいたのだが、当の一夏はそれに気づいてはいなかった。

「全員そろつてますねー。それじゃあSHRを始めますよ」

教室のスライド扉が開き、緑髪の女性。

山田真耶が教室に入ってきた。

必然的に一夏から視線は外れ、彼女に集まる。

本日の真耶の服装はスーツではなく、薄黄色のワンピースに大きな黒縁眼鏡をかけて

いる。

「今日からこの1年1組の副担当となります【山田真耶】です、よろしくお願いしますね」

真耶はそう言って一礼する。

生徒たちも座りながら一礼を返す。

「担任の先生は少し遅れますので、その間に皆さんの自己紹介をしましょう。出席番号順でお願いしますね」

「……えっ!?!」

真耶の発言に自分だけにしか聞こえないレベルで声を出してしまった一夏であった。

この教室に男は自分だけ——必然的に注目されてしまう。

（どうするっ!?! どんな事を言うっ!?! そうだ、得意な事……家事とかは得意だな、うん  
!）

自己紹介の内容について思考の海に一夏は沈む。

(得意な事と……後は何かな……好きな食べ物とか趣味……うん、これで！)

「むら……く……織斑一夏君！」

「ふぁいつ!？」

自己紹介の内容を頭の中で組み立てていた一夏だが、真耶の声によって現実に戻された。

「おつ、大声だしてごめんなさい、びつくりしましたか？ でも自己紹介の順番が【お】なんだけど自己紹介してくれるかな？」

「あ、はい、大丈夫です」

そういつて立ち上がり、先程まで考えていた自己紹介の内容が頭からすつ飛んでいることに気付いた。

(やばい、内容忘れたー!?)

心の中で絶叫しながら、教室を見回す。

一夏にクラスメイトは何が出るか期待している眼差しを向けていた。

先程考えていた内容を思い出す時間もなく、仕方なく自己紹介を開始する。

「おつ、織斑一夏です……以上です！」

名前だけの自己紹介に一夏以外の1年1組の人間が全員ずっこけた。

そしてその内容について冷徹なツツコミも入る。

「お前はまともに自己紹介もできんのか」

「げえ、関羽っ!？」

「誰が三国志の武将か、馬鹿者」

大げさに驚いた一夏の頭に神速の何かがぶつかり鈍い音を立てる。

彼の頭にぶつかっているのは出席簿だ。

「いつつう……!」

どう聞いても主席簿で叩かれた音ではないとクラスメイト全員が思い、叩いた人物に視線を合わせた。

「織斑先生、もう会議は終わられたんですか?」

「ああ。それに件の奴も連れてこなければならなかったからな……クラスへの挨拶を押し付けてすまなかった」

「い、いえつ、大丈夫です! 副担任ですから!」

真耶の言葉に微笑み、一夏を叩いた人物。

織斑千冬が黒板の前に立って話し出す。

「このクラスの担任の織斑千冬だ。私の仕事は1年でISについて科を問わず必要最低限の基礎を叩き込むことだ。私や山田先生の言葉はよく考えて自分のモノにしろ、口答えしてもいいがあまり煩わせるなよ?」



まるで独裁者のような発言だが、その言葉に爆発したかのような黄色い声が教室中から上がった。

「キヤーっ！ 千冬様よっ！ 本物っ！ 世界最強の『ブリュンヒルデ』っ!!」

「貴方のようになりたくてここに来ましたっ!!」

「ずっとファンでしたっ!!」

「叱って下さいっ！」

年頃の女の子の言葉じゃないようなものが混ざっており、まさに教室は阿鼻叫喚の文字がびつたりの様相になっている。

その様子に心底鬱陶しそうに千冬が話し出す。

「……………毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。逆に感心させられる。それともなにか？ 誰かが私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

少々語気が荒くなっているが、それは火に油を注ぐだけだった。

「キヤーっ！ もっと叱って罵って下さいっ！」

「我が生涯に一片の悔いなしっ！」

「まだよっ、まだ終わらないわっ！」

その様子に顔に手を当てて千冬はため息をついた。

「……織斑、さっさと自己紹介を続けろ」

「えっ、千冬姉っ、まだやるのっ!？」

「当然だ馬鹿者。それと織斑先生だ」

「……はい、ちふっ……織斑先生」

身内への親しい呼び方を注意し、訂正させる。

しぶしぶ従った一夏に視線が集まりある女生徒が声をもらす。

「えっ、先生と織斑君って姉弟なの？」

「あ、確かに……苗字同じだし」

「……貴様ら、いい加減に無駄口をたたくな、さっさと自己紹介を進めろ」

千冬の鶴の一声で雑談は消え、自己紹介が再開された。

一夏は真耶に話しかけられる前に考えていた自己紹介の内容をかるうじて思い出して自己紹介を完遂した。

ちなみに自己紹介の中には女尊男卑に影響を受けている生徒が数人いたが少数派であった。

クラス全員の自己紹介が終わったことを確認した千冬が黒板の前に立つ。

「さて全員終わったな、知つてのとおりこのクラスには希少な男性搭乗者がいるんだが……実はこのクラスには【もう一人】増えることになつてな」

その言葉に教員と一夏を除く全員が息を飲む。

その視線は自然と教室の戸に注がれている。

「飛鳥、入つてこい」

「はい」

教室のドアが開かれ、一夏の見知った顔が入ってくる。

漆黒の様な黒髪に特徴的な紅い瞳、自分と同じくらいの背格好。

幼い頃からの親友である飛鳥真だ。

一夏と同じI S学園の男子生徒用制服を着ている。

「真っ!？」

「久しぶりだな一夏」

約一月振りにあつた親友同士にしてはやけに軽い挨拶を真が投げかける。

「なっ、なんでここに……!？」

自分以外の男がこの場にいることが不思議でならないようだ。

目を丸くしながら真に問いかけた。

「いやいや。お前の適性が判明したから全国一斉でテストされたじゃないか……もしかして知らなかったのか？」

「ああ、初耳だ」

おいおいと内心思いながら、真はため息をつく。

一夏はどこか世間に疎い処がある。

それをフォローしてきたのは真や弾だったが。

「……今度からニュースくらい見ようぜ」

「そつ、そうする……」

真の背後にいた千冬からの無言の圧力を受けて、早々に一夏は自席に座る。

「やれやれ。飛鳥、自己紹介を」

「はい、ちふつ……織斑先生」

千冬に返事を返し、真は教室を見渡す。

自分に向けられる好奇の視線に内心苦笑しつつ簡易な自己紹介を開始する。

「はじめまして。といっても全員知ってるだろうけど2人目の男性搭乗者の飛鳥真です。所属は日出工業で趣味は読書とトレーニング。色々と迷惑かけるかもだけどこれから1年よろしく」

軽く一礼して教室を見渡す

すると再び教室は黄色い声で溢れまるで爆発するかのように騒がしくなった。

「織斑君もカッコいいけど飛鳥君もいいっ！」

「織斑君の柔和なイケメン具合もいいし、飛鳥君の強面イケメン具合もいいっ！」

「紅い瞳……うっ、私の封印されし魔眼が……線が見えるっ!？」

「飛鳥×織斑で新刊いけるんじゃないやあつ！」

「なにそれ詳しく、3万までなら出す」

キヤーキヤーと黄色い声が響く中、真は疲れた様な呆れた様な顔をしていた。

「なんか色々聞いてちゃいけない単語が聞こえた気がする……はあ……」

横目で千冬を見ると、彼女も疲れたように顔に手を当てていた。

(お疲れ様です、千冬さん……しかし意外だな……)

心の中で千冬に手を合わせて、教室を見回す。

真はこの状況を意外に感じていたのだ

I Sは本来の用途である「宇宙開発用パスワードスーツ」よりも現在はスポーツとしても広まっているが、既存の兵器を超える「超兵器」でもある。

ただし、基本的には欠陥も抱えている発展途上のものであると。

事実彼の中では「I S」は「M S」と同様のモノだと認識している  
つまり簡単に人の「命」を奪えるモノ。

それに関わる人間を育成する教育機関なのだから、前世のザフトアカデミーのレベルまでは行かなくとも、もう少し規律がある教育機関だと思っていたのだ。

明らかに変わった実態は、そこまで普通の女子高と変わっていないかった。

(……まあ、そこまで気にするのはやめよう、初日から疲れる)

自分と一夏のカップリングがどうこう言っているクラスメイトを見て小さくため息をつく真であった。



## PHASE 7 怒れる瞳

少々時間は過ぎて、1時限目終了の休憩時間

「真、俺疲れたよ……」

「まあ、その気持ちは痛いほどわかる……後でノート貸してやるよ」

真の前の席、机に突っ伏している一夏を見て真は苦笑する。

自己紹介をかねたSHRが終了した後、1時限目の授業が始まったのだ。

その授業の際に一悶着があった。

一夏が授業内容について理解ができず、千冬からの参考書はどうしたのだという質問に対して必読である参考書を古い電話帳と間違えて捨てたと発言した。

大きく必読と書かれていたのにどうして捨てたんだよ、と真は突っ込みたい気持ちを抑えるのに必死だった。

もちろん一夏は千冬からの出席簿アタックを喰らった後、再発行後1週間で覚えろと罰を科されてしまった。

ちなみに真については座学を利香から叩き込まれており、問題なかったため同じ男子として一夏のサポート係を任命されてしまった。

「しくん、ありがとな」

「やめろよ、引つ付くな気持ち悪い」

大げさなりアクションで引つ付いてくる一夏を引き離す。

その様子を見ていたクラスメイトが「織斑×飛鳥なんてどうよ？」なんて呟いているのが聞こえたため、あとで弁明しようと心に決めた真であった。

「少しいいか？」

その声に真と一夏が振り向くと、そこには黒髪のポニーテールの少女が立っていた。少々目つきがきついのが、それを補って余りある美少女。

まさに大和撫子の言葉が当てはまるだろう美貌であり、プロポーションも抜群だ。

「久しぶりだな、一夏、真」

親しそうにその少女が2人に話しかける。

真と一夏はその少女に見覚えがあった。

かなり成長しているが一夏にとっては幼馴染、真にとっては幼い頃一夏と共に遊んだ仲。

「箒……なのか？ 久しぶりだな！」

一夏の言葉に真は幼い頃の記憶を思い出す。

当時、剣道を習っていた一夏とその道場の娘であった彼女、「篠ノ之箒」と暇をみてよく遊んだものだ。

残念ながら小学4年生の時に箒は転校してしまい、その後遊んだりすることもなかったのだ。

「2人とも本当に久しぶりだな……すまない真、一夏を借りてもいいか？」

「復習させたかったけど後でいいか、OK大丈夫」

真の返答を確認した箒は、一夏の手を取って立ち上がらせ教室から出ていく。積もる話もあるのだろう。

何故なら箒は幼い頃から一夏に想いを寄せているのだから。

真から見れば何で気づかないレベルで好意を示しているのだが、悲しいことにその想いに一夏は全然気づいていない。

まあ、それは箒の想いだけではないが。

さて当然の事だが一夏がいなくなったことで、現在このクラスにいる男性搭乗者は真のみとなった。

そのため、好奇の視線が真に飛んでくる。

早速赤紫色の髪をショートカットにした活発そうな美少女、「相川清香」が真に話しかけてきた。

「飛鳥君は織斑君と仲よさそうだね、もしかして古い仲なの？」

清香が質問すると同時にその様子を見ていたクラスメイトから「あつ、抜け駆け！」なんて呟いているのが聞こえたが無視を選択する。

「ああ、子供の頃からの付き合いさ、相川さん……だよな？」

「うんっ！ 覚えててくれたんだ……ってあれ？ でも飛鳥君、私の自己紹介の時になかった気が……？」

「内容は聞いてたけど織斑先生にクラスの皆の写真と名簿を見せられてさ、それで覚えただ」

クラスメイトの自己紹介を聞くことしかできなかつたが、名前と顔写真は千冬に見せてもらっていたのだ。

なるほどと清香が頷き、真に手を差し出す。

——握手だ。

「これからよろしくね！」

「こちらこそよろしく」

彼女からの握手に微笑みながら答える。

女尊男卑の思想が世間に広がってる中、同年代とはいえ初対面の男性と特に気兼ねなく接する姿勢の彼女には純粹に好意が持てる。

その後清香の友人「鏡ナギ」等数人と自己紹介を含めた雑談を数分交わした後、彼女達は自席へと戻っていった。

「あすあすは人気だねー、モテるねー」

「あすあす?」

ニツクネームか?と思い振り返る

袖丈が異常に長い制服を来た美少女、「布仏本音」が話しかけてきた。

「そうそう。飛鳥真君だから「あすあす」、織斑一夏君は「おりむー」なのだ」

独特なネーミングセンスだが、不思議と悪い気はしなかった。

「なるほどね。でも物珍しいのもあるんじゃないかな、布仏さん」

「本音でいいよー。後でいろいろお話してもいい?」

「ああ。大丈夫だよ、本音さん」

ポヤポヤという擬音が似合いそうな雰囲気を出しながらやった一つ、と喜びながら本音は自席へと戻る。

「……ああいう女の子達ばかりなら変に気を張る必要もないんだけどなあ」  
「ちよつとよろしくって?」

真が呟くとほぼ同時に「美しい金髪を縦ロールにした少女」が真に話しかけてきた。  
白い肌、白人特有の透き通った目に凜とした佇まい、加えてプロポーションも非常に良い。

相川も布仏もこの少女も美少女であり、弾ではないがIS学園は美少女ばかりだなと思わざるを得ないと振り返った真は考えた。

それと同時に彼女の目を見て――

(……嫌な目だな)

とも思ってしまった。

実際に彼女の目はまるで値踏みするかのような目つきであった。

「飛鳥真さんでよろしかったですわね？」

「ああ、そういうアンタは……イギリス代表候補生の【セシリア・オルコット】さんで合ってるよな？」

「ええ。流石に日出工業に所属している方はご存知でしたか」

セシリアは真の回答に満足そうにうなづく。

【代表候補生】とは国家におけるIS搭乗者の代表である【国家代表】の候補生の事であり、彼女の場合はイギリスの国家代表候補生である。

利香にISについての座学を叩き込まれており、各国の代表及び代表候補生についてもある程度の知識はある。

「で、俺に何の用です？」

「特に用という訳ではなく、あなたは先程の自己紹介の際にいらっしやらなかったのをご挨拶……といったところですよ」

「わざわざごうも」

「お気になさらず。女性との話し方については心得があるのですね」



「まあ、日出に所属してからはそういった面も教えてもらいましたからね（処世術だつての）」

これまで彼女と会話してみても感じたこと。

それは高いプライドを持っていることだった。

それは自信とも密接に結びつくが、彼女の場合は行き過ぎている様に見える。

でなければ初対面の男性を値踏みするかのような目で見ることなどできないだろう。

それを感じたからこそ、真は当たり前障りのない返答を返すことにしたのだ。

初日から問題ごとを起こすなんて気はさらさらない。

「ところでもう一人の方は？」

「あー、別件で離れてて……伝言があるなら伝えますが？」

「いえ、問題ありません……それでは失礼致します」

軽く会釈をし、セシリアが自席へと戻っていく。

会釈の際に彼女の耳についている「青いイヤークラス」が見えた。

おそらくあれが彼女のISだろう。

ただの会話なのに予想以上に労力を必要とした。

そのためセシリアが離れていくと同時に真は机に突っ伏す。

ほぼ同時に一夏と箒が教室に戻ってきた。

「ん、真、どうしたんだ？」

「いや、別に？ お嬢様の挨拶らしい」

突っ伏しながらの真の適当な返答に、自席に戻ってきた一夏は首をかしげた。

休憩時間が終わり2時限目

「そうそう、1限目に伝え忘れていたが近々行われる【クラス対抗戦】に出場する【クラス代表】を決定する必要があるんだった」

授業開始と同時に千冬の口から爆弾が落とされた。

「自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

千冬の言葉に一齐にクラスメイト達が手を挙げる。

「織斑君がいいと思います！」

「同じく織斑君で！」

「えっ、俺!？」

選ばれることはないだろうと思っていたのか、素つ頓狂な声を一夏が出す。  
この時点で真は嫌な予感を感じていたが、すぐ後にそれは実現してしまう。

「私は飛鳥君で！」

「私も飛鳥君で！ 見せてもらおうか、日出工業のIS搭乗者の実力とやらを！」

「あんた落ち着きなさいって……私も飛鳥君で！」

「やっぱりこうなるのかよ！」

一夏が他薦された段階で半ば想像していた展開だったが真は声を上げた。

ちなみに清香やその友人であるナギも手を挙げていた。

「ふむ、織斑と飛鳥か、他にいなければこの2人のどちらかが代表となるな……言っておくが拒否権はない」

「納得いきませんわ!」

パンツと机をたたき、セシリアが立ち上がる。

「このクラス唯一の代表候補生であるわたくしではなく、なぜ彼等を代表にしなければならぬのですか!？」

「自薦他薦は問わないといったはずだ。それではオルコットも含め3人か……そうだな、3人で戦って勝った者がクラス代表、でどうだ？」

千冬がクラス代表の決定方法を提示する。

その方法を聞いてセシリアは笑みを浮かべる。

「そのような勝負の結果など見えております。わたくしの実力ならば勝利という結果に

揺らぎありません！彼等など相手になりませんわ！」

「……よく言うぜ、イギリスだつて大した国じゃないくせにさ。料理なんかじゃ英国料理は世界一まずい料理何年一位だよ」

声高々に勝利を確信し暴言を吐いたセシリアに、一夏が食つて掛かる。

「あつ、あなたは私の祖国を侮辱しますのっ!？」

「先に侮辱したのはそつちだろ！ 何言つてんだよつ！」

「つ、許しません……決闘を申し込みますっ!!」

売り言葉に買い言葉。一夏も立ち上がり、ますますヒートアップしていく。

「おい、一夏、流石に落ち着け……オルコットもだ」

流石にこれ以上は見えていられない為、真が2人を制す。

「何だよ真！馬鹿にされてんのにいいのかよ!？」

「落ち着け一夏、流石にこれ以上はまずい。オルコットも、アンタは〔代表候補生〕だろ。自分の発言が国家の発言にだってなりかねないんだ。こういうことの怖さ、わかるだろ」

「うっ、それは……！」

代表候補生。つまりは国家代表の候補生、つまりそれだけの責任が候補生の肩にかかっているということだ。

下手をすれば外交問題にすら発展しかねない。

真が冷静にこの事を指摘できたのには理由がある

それは己も過去に同様の事をしてしまったことがあるからだ。

彼の脳裏に思い出されるのは、前世での出来事。

アーモリーで開発されたセカンドステージシリーズの強奪事件、その追撃の際にミネルバに乗船していたオーブ代表「カガリ・ユラ・アスハ」に対して暴言を吐いてしまったことだ。

当時は現在の様にぶれることの無い「花を散らせないために戦う」という確固たる信念は持ち合わせておらず、あわせてあまりにも状況が見えていないオーブ代表への怒りもあつた。

レイやデュランダル議長がその場にいなければ、外交問題に発展していたかもしれないのだ。

それを反面教師としていから落ち着いて物事を見ることができていた。

——そうこの時点までは。

「……ふん、自国が侮辱されたというのに随分と冷静ですね。さぞ愛国心のない【ご家庭】で生活なされていたのでしょうか。まだ織斑さんの方が愛国心に溢れているのではなくて？」

真の言葉を理解できないセシリアではない。

だが認めるのが癪であった為、捨て台詞の様に呟いたその言葉が真の心に【ひび】を入れた。

——この女ハ今なんてイッタ？

「……今、なんて言った？」

震える声でなんとかそれだけ絞り出す。

「何度でも言つてさしあげます。私とは違い、さぞ寂しい【ご家族】とお過ごしされたんでしょうね？」

真の弱いところを突いたとでも思ったのか笑みさえ浮かべて同じような台詞を繰り返す。

さらにセシリアは同じような台詞を繰り返そうとしたが、凄まじい怒気が相対している相手から放たれていることに気付いた。

特徴的な紅い瞳は怒りに溢れ、燃えているかのようなようだ。

まるで視線だけで相手を殺そうとでもしているかのようなようだ。

——父さんを、母さんを、マユを——

——父さんを、母さんを、真由を——

脳裏に浮かぶのは、原型を残さず肉塊へと成り果てた大切な父と母。



脳裏に浮かぶのは、ちぎれた腕と無残に潰れ息絶えた大切な妹。脳裏に浮かぶのは、自分の事を信じ送り出してくれた大切な父と母。脳裏に浮かぶのは、自分の事を心配して泣いてくれた大切な妹。

「……俺の家族を侮辱したな？」

かろうじて残っていた理性もすぐに「怒り」に飲まれて消える。

「決闘？ やるってんならやってやるさ、後悔するなよ」

「っ!? もっ、もちろんですっ！」

怒気にひるんでいたセシリアを睨みつけながら席に座る。

真の怒気にひるんでいたセシリアだが何とか立て直し、食って掛かる。

「……真」

一方で一夏の頭は冷えていた。

先程自分が感じていた怒りは、真の怒りによって吹き飛ばされ不思議と冷静になっていたのだ。

一夏だけではない、真の出す怒気によってクラスメイト全員が押し黙っていた。

「……やれやれ、勝負ということで話はまとまったな？　なら1週間後、第2アリーナを使用してクラス代表を決める。それでいいな？」

真の怒気に吞まれていた教室に響く千冬の言葉で、その場は何とか静まったのだった。

## PHASE 8 更識 簪

時間は過ぎて放課後

すでに夕焼けがIS学園を包んでいた。

1年1組の教室には真と一夏の姿があった。

一夏の机の上には真がISや座学について重要な点を要約したノートが置かれており、彼はそれを自分のノートに写している。

「やばいつて……ここまでついて行けないなんて」

「まあ、やるしかないさ。最低ラインが分かったんだ、後は這い上がるだけだろ」

昼休みまでには、表面上は収まっている様に見えるまで真の機嫌は持ち直していた。

実際は家族を貶された怒りは心の中で変わらず燃えているが、流石にクラスメイトの皆に悪いため表面上は隠すことにしたのだ——隠した怒りは「彼女」にぶつければいい。ちなみに昼食の際に、空気を悪くしたことについて清香や本音達には謝罪している。全員許してくれたのが救いであった。

「ノートありがとな、真」

「こんなの中学で何度もあつただろ？ 気にするなつて」

中学での中間試験や期末試験の際にも一夏にはノートを貸している。

弾や一夏やもう一人の友人の「4人」で試験対策の為図書室に籠った事を思い出した。弾については、彼の妹に頼まれた真が強制参加させたのだが。

「んで、なんで俺たちは残されてるんだろう？」

「さあな、山田先生は重要な話があるつて言つてたから何かしらあるんだろうけど」

本日の授業が終了した際に、副担任である真耶から2人は大切な話があるから教室に残つていてほしいという指示があつたのだ。

大切な話と言えば、午後の授業にて専用機の話が出た際に、一夏にも【専用機】が与えられるとの情報が出た。

倉持技研という企業が製作を担当しており、1週間後には間に合うらしい。

閑話休題。

「まあ、大体の予想はつくけど」

「え。わかるのかよ、真」

「多分、部屋割りだろ。I S学園は全寮制だし……一人部屋がいいな」

I S学園は全寮制の学園である。

敷地内には大きな学生寮があつて、そこで生活できるなんて羨ましいと弾から言われていたのだ。

「おそらくはその部屋割りについての説明で残されているのだろうと予測を立てていた。

「え？ でも俺は1週間は自宅通学って聞いてたけど……あれ？」

「あ、そうなのか？ 何かスマン」

しかし例外はすぐ身近にいたのだった。

ではなぜ一夏は残されているのだろうかと疑問に思ったところで、教室の戸が開かれ真耶と千冬が教室に入ってきた。

「お待たせしましたー。ごめんなさい、織斑君、飛鳥君」

「ちゃんと今日の授業内容を復習しているようだな、織斑」

「あつ、はい、真にノートを見せてもらってました、ちふつ……織斑先生」

一夏が千冬を見ると、彼女は段ボール箱を一つ抱えていた。

千冬が教壇の上に段ボールを置く。

「えっと、織斑先生、その段ボールは？」

「お前らに残つてもらった理由に関連するものさ、山田先生」

「はい。2人の寮での部屋割りが決定しましたので、それについての連絡です」

真耶から真と一夏は部屋の鍵をそれぞれ渡される。

「俺は1週間は自宅通学じゃ？」

「その点は保護を優先した。なのでお前も飛鳥も今日から寮生活だ。織斑、着替えなどの必需品は私が選んでおいた、その段ボールはお前のものだ」

段ボールを指さして千冬が説明する。

千冬が用意した必需品。

おそらくその中に娯楽用品は入っていないだろうなと一夏と真は同じことを考えていた。

「俺の荷物とかはあるんですか？」

「飛鳥の荷物については親御さんの方から送られていて、すでに部屋の方に運び込まれている。確か段ボール箱2つ分だ」

了解しましたと真が返事をする。

それを見計らって真耶が説明を再開した。

「それでは寮の部屋割りについてなのですが、残念なことに2人の入学は急な要件だったので空き部屋がなくて男子で相部屋という訳にもいかず……女の子との相部屋となってしまうました」

真耶の爆弾発言。

まさかの男女で同じ部屋との事だ。

「それってまずくないですか、いろいろと」

流石に部屋割りは同性との相部屋、または1人部屋だと予想していた真が冷や汗をかきながら質問する。

前世のザフトアカデミーは男女別々の部屋だったが、「そういう問題」が起きなかったわけではないのだ。

しかも今回は男女同室であるとの事だ。

「そこについては一夏、真……お前達を信用している。お前達ならそう言った問題を起さないと」

織斑や飛鳥呼びではなく、親しい者に向ける口調で千冬が言う。

「分かったよ、千冬姉」



「……流石にそういう問題は起こさないですよ、千冬さん」  
「助かる」

いきなりそういう風に言うのは卑怯だよなあ、と真は思う。

一夏と真も同じように親しい呼び方で答える。

その後就寝時間や寮則、浴場の利用方法等も説明され、真耶に案内されて学生寮に向かう。

IS学園 学生寮 自室前

「はいいな」

一夏と別れて、真耶に指定された部屋の前に真は立っていた。

他の女生徒達は入学式の2週間〜3週間前から、学生寮で生活していると先程別れた真耶から説明があった。

ちなみにクラスメイトの反応を抜粋すると――

「え、織斑君も飛鳥君も同じ寮なの!？」

「私の私服ダサくないよね!？」

「フフフ……もつと可愛い私服と下着を用意しなければ……!？」

「あれ、あんた髪の毛青かった?」

——等の反応があった。

「千冬さんの話の通りなら、もう部屋の中に荷物送られてるはずだけど」

自分の両親ならノートPCくらい入れてくれるはず、などと考えながら扉をノックする。

しかし部屋の中からの反応はない。

「あれ?」

再度ノックするが、やはり反応はない。

「いないのか。まあ、この時間帯だし夕飯かな？」

渡された鍵を使って扉のロックを外す。

「失礼します……おお」

部屋の内装をみて思わず声をもらした。

明らかに学生寮の物ではない内装。

かつて過ごしたディオキアの高級ホテル並だなど思い部屋の中に入る。

「ルームメイトの人居ますかー？」

部屋の中で声を出す、特に反応もない

シャワールームやトイレからも音がしないため、本当に誰もいないのだろう。

部屋を見回すと、部屋の隅に段ボールが2つ重ねて置いてあった。

あれが自分の荷物だろう。

「……荷物の確認でもするか」

制服の上着だけ脱いで、少し身軽になってから1つ目の段ボールを開ける。中には下着や私服などの衣類、洗面用具などが入っていた。

「服は問題ないな、もう1つは？」

2つ目の段ボールを開くと中には娯楽用品が入っている

予測の通りにノートPCや各種充電器、漫画や小説なども入っている。

「よしっ、これならオルコットのI Sの資料集めができる。ありがとう、父さん、母さん……ん？」

見慣れない包みが入っており、それを開けると中には「特徴的なバックルが付いたベルト」の様なものが入っていた。

加えてバックルの部分に「手紙」が挟まっていることに気付いた。

「いつ、これって……真由の『デンオウベルト』か!？」

包みから出てきたのは、仮面ライダーシリーズで用いられる変身アイテムを模したな  
りきり玩具であつた。

ただ真が今持っているものは「大きな友達」用の値段が高く豪華なものだが。  
何でこんなもんを?と思ひ、付属していた手紙を開く。

内容は簡単で筆跡は真由のモノだ。

——お兄ちゃんへ

寂しいと思うので真由の宝物を送ります。

たまには帰ってきてライダー見ようね。

追伸

お兄ちゃんはリュウタと声似てるから一発芸とかもできるよ!

ルームメイトの人驚かせちゃえ!

「ほんとに真由はライダー好きだよなあ……そんなに似てるかな、俺の声」

このベルトを使って変身するライダーの声の1つが、真に似ているらしく小遣いをためてこのベルトを購入していたことを思い出した。

真由が彼女なりに自分を応援してくれていることに感謝し手紙をしまう。

「……」

ふと使いたくなかったのでベルトの電源をONにして、腰に巻く。

大きな友達用なので真でも余裕をもって巻くことができる。

バックル部分についている「赤・青・黄・紫」の4色のボタンの内、紫を押すと、軽快な待機音が流れ出した。

右手に同じく包みに入っていた「定期券の様なパス」を持つ。

仮面ライダー電王はこの「ライダーパス」と「ベルト」を使って変身するライダーだ。

「変身！」

叫びと共にバックルにライダーパスをかざす。

【Gun form】と言う音声と共に軽快な変身音が流れる。

もちろん番組の様に実際に変身しているわけではない。

だが気分はすでに仮面ライダーであり、これになりきり遊びの醍醐味だ。

「お前、倒すけどいいよね？ 答えは聞いてない！」

仮面ライダー電王 ガンフォームの決め台詞をバシツと決める。

内心、凄く似てたんじゃないかと称賛していた時であった。

「……………何やってるの？」

背後から女の子の声がしてピシツと部屋の空気が凍った。

振り返るとそこには水色の髪に眼鏡をかけた女の子が、部屋の扉を開けつつこちらを見ている。

水色の綺麗な髪の毛は肩口くらいの長さで、サイドの髪の毛がふわつとカールしている。

腕輪のような装飾物などで微妙に制服が改造されており、加えて特徴的なヘッドセツ

トが目を引いた。

そして自分と同じく紅い瞳がこちらを見つめているが、困惑の色が強く浮かんでいた。

「……つかぬ事をお聞きしますが……どこあたりからご覧になっていたのでしょうか？」

冷や汗をだらだらと流しつつ、何とかそれだけを彼女に尋ねた。

「……変身音終わったあたりから見えた」

その言葉に蹲り頭を抱える真であった。

私、【更識簪】は正直言って困惑していた。

何故ならば、食事と睡眠の為に自分の部屋に戻ってきたら2人いる男性搭乗者の1人



【飛鳥真】が腰に【変身ベルト】をつけて仮面ライダー電王の変身ポーズをとっていたからだ。

しかも腰に巻いているのはプレバンの【デンオウベルト】、私は【とある理由】から購入時期を逃したので購入できなかったアイテムの1つだ。

「お前、倒すけどいいよね？ 答えは聞いてない！」

彼の声は、電王に出てくる電王ガンフォームの【リュウタロス】にそっくりだ。

ガンフォームの特徴であるダンスの様なポーズも完璧に合っている。

それに【飛鳥真】という名前も【ウルトラマンダイナ】の主人公【アスカ・シン】と読みが同じだ。

私の持っている変身アイテム【リーフラッシュャー】でポーズ取ってくれないかなと一瞬考えたが、何故彼がここにいるのか聞く必要があった。

だから完璧になりきれている彼には悪いけど質問することにした。

「……何やってるの？」

ビクンツと彼が振り返って、私の顔を見る。

彼の顔には「見られた」と書いてあるようであり、凄く焦っているように見えた。

「……つかぬ事をお聞きしますが……どこあたりからご覧になっていたのでしょうか？」

何とかそれだけを声に出せたらしい。

うん、私も同じようにポーズ取っているときに「本音」に見られたことがあるからその気持ちはよく分る。

「……変身音終わったあたりから見えた」

彼にそう告げると、蹲り頭を抱え始めた。

本音に見られた時の私と同じ反応をしていて少し面白かった。

部屋の中を見渡すと、朝にはなかった段ボール箱が2つあった。

先生から聞かされていた「ルームメイト」は彼なのか。

「もしかして……ルームメイト？」

「……みたいだな」

彼が頭を抱えるのをやめて立ち上がる。

私よりも20cmくらい身長が高いから、その顔がまだ赤くなっていることがよく分かった。

「なんか色々ごめん、1年1組の飛鳥真です、よろしく」

「1年4組の更識簪、よろしく」

お互い自己紹介を終える。

彼は「変身ベルト」を外してしまい始めた。

「飛鳥君、それ……プレバンのだよね？」

「更識さん、知ってるのかこれのこと」

「知ってる。後【更識】って呼ばないで、そう呼ばれるの嫌いだから……【簪】でいい」

家の古いしきたりもあるけど、私にとってそこまで拘束力があるものじゃないから、特に気にしない。

「あ、じゃあ、俺も【真】でいいよ。簪はこれのこと知ってるんだな」

彼の表情から照れた感じが消え、嬉しそうな顔をしている。

「私もライダー好きだから……でもちよつと忙しくてそれ買えなかった」

思い出されるのは私が今アリーナの整備室で取り組んでいることの【原因】を作った企業。

「ただ彼にはあまり関係のない話だからちよつとだけぼかして伝えた。」

「そっか。実はこれ妹の物なんだ、宝物だつてさ」

「真には妹がいるの?」

「ああ、寂しくないようにだつてさ。だからって入れるかなとは思うんだけど、やっぱり

嬉しいや」

私達とは違って、いい兄妹関係を築けているんだろう

羨ましいと思う、私と【お姉ちゃん】なら絶対こうはいかない。

「……いい妹さんなんだ」

「兄離れができてないとも言おうと思うんだけどな……つとそうだ、荷物の整理とかしな  
いと」

その後、彼の荷ほどきを手伝いシャワー等のルールを決めた。

荷ほどきと部屋の整理はそんなに時間がかからず終わり、夕食に向かった。

その時たまたま本音が食堂にいたので一緒に食事を取ることになった。

本音が彼にニツクネームをつけていることを知ったが、それについてはノーコメント  
で。

夕食の後、自然にライダーやウルトラマン等の特撮番組の話を彼とした。

その時にリーフラッシャーを貸したら、ちゃんと「ダイナアアア」と叫んでくれた。  
デンオウベルトにも触らせてもらった。

やっぱり出来がいい、欲しくなる。

異性で自分と趣味の合う人間とは初めて会った気がした

私の場合は避けていただけなのかもしれないけど。

もう1人の方がルームメイトじゃなくてよかったと思う。

【打鉄式】の件でうまく接することができなかつたと思うから。

気が付いたら消灯時間間際だったから、彼に感謝して床につく。

久しぶりに楽しいと思える時間だった。

## PHASE 9 インパルス VS ブルー・ティアーズ

そしてクラス代表決定戦当日

IS学園 第2アリーナ ピット内

校舎から2番目に近いアリーナである第2アリーナに真の姿があつた。

特注のISスーツであり便宜上、「ザフトISスーツ」と呼称されたものに身を包んでいる。

また一夏も特注のISスーツを着ている。

こちらは真のものとは違い、腹を露出しているデザインだ。

一夏はそこそこ腹筋が割れているので見た目の問題はないが。

千冬と真耶はピット内に設置されているカタパルトの点検とセシリア側の状況確認を行っている。

ちなみに対戦順は「真VSセシリア」、その後「セシリアVS一夏」、最後に「真VS一夏」となっている。

機体に大きなダメージが有った場合は、インターバルを取って最後まで行う予定だ。

「……んで1週間ずっと剣道の特訓しててISには乗ってない？」  
「……はっ」

一夏が落ち込んだような表情で俯き、真が呆れた表情で顔に手を当てたため息をついた。

この1週間、一夏は真にISについて教えてもらおうとしていた。  
だが真はそれを断っていた。

クラス代表を決める戦いであるから一夏も真にとつては敵であり、機体の情報を与えたくはなかったのだ。

加えて箒が真に頼んでいたのだ、一夏を自分で鍛えたいと。  
友人として箒の恋は応援したいし、自分の目的も達成されるから箒に一夏を任せただ。

それに彼女はあの篠ノ之束の妹である。

ISについても知識があり指導役を任せられると思っていた。

ちなみに真が行った事前準備は、日出工業に連絡し詳細な資料を取り寄せてもらい確認したことと、ネット等で公開されているセシリアのデータの収集、そして別アリーナで数回機体の確認を行った程度である。



「……箒」

「いつ、言うな真、私だってなんというか……その……熱くなってしまってたな」

「まあ、いいんだけどさ……んで、どうだったのさ？」

「なっ、何がだっ!？」

「いや、一夏は気づいたのかなって」

答えは分かりきっているが一応、応援しているので成果を聞きたかった。

「……剣の腕と試合の勘は戻ったと思うが……その……」

「あー、うん、残念、次頑張れ……な？」

赤面してモジモジとし始めた箒は放置することにした。

「ん? どうしたんだ、箒の奴?」

先ほどまでの会話は一夏には聞こえない程度の小声でしゃべっていたため、

不思議に思ったのか一夏は箒に尋ねるが、なんでもないと照れ隠しで怒鳴られてしまっていた。

「さて、飛鳥準備はいいか？」

ピットの様子を見ていた千冬が真に聞く。

『大丈夫です、行けます』

その眩きから1秒もかからずに「インパルス」が起動し真の身体に装着される。生身より二回りほど両腕／両脚が大きく見えるマニピュレーターに装甲、背部ランドセルの接続部分には何も装備されておらず、ただのスラスターである。

インパルスは初起動時にはなかった「ビームライフル」を右手で持っていた。

「これが真のISか！」

「……ずいぶんとシンプルだな、私はてっきりあの「ガイアガンダム」と言うISみたいなものをイメージしていたが」

千冬が自分の感想を呟く。  
それに対して真は答える。

『まあ、これからですよ……フォースシルエツト展開』

本来ならイメージしただけで行えるよう叩き込まれた動作だが、あえて言葉に出してシルエツトを展開する。

瞬間、インパルスの背部コネクタ部分に、「フォースシルエツト」が展開されていた。フォースシルエツトはMSインパルスと同じく中距離高機動用シルエツトだ。

外見的にはMSのフォースインパルスと同じく大推力のスラストー及び複数のバーニアを装備しているが、放熱板をかねた翼の数は4枚に減っている。

フォースシルエツトが展開されると共に、左腕に実体シールドが展開される。

これがISインパルスが第3世代に設定されている理由のシステム。

【シルエツト・システム】だ。

「ISの【形態変化】？ いや違う……背部のユニットは後付武装でもなく……そうか、  
フォームシフト

異なる【初期装備】を切り替える事で違う特性に変化するISか、面白いな」  
『初見でインパルスの特性を把握するなんて……流石、千冬さん』

インパルスの特性を一瞬で見抜いた千冬に思わず感嘆の声を上げる。

そこに真耶の準備完了の連絡が届いた。

「……さて飛鳥、カタパルトに移動しろ」

『はい』

千冬の指示にしたがって、カタパルトへとインパルスを移動させる。

射出用のカタパルトはMSの物と大して変わらず、そのままダウンサイジングされたものようだ。

「真一！」

カタパルトからの射出前に一夏に声をかけられる。

「勝てよー！」

『ああ、そのつもりさ』

インパルスのコンソールにコンディションOKが表示され、いつでも出撃できるようになった。

『飛鳥真！ フォースインパルスガンダム！ 行きます！』

かつてインパルスと共に戦場を駆けた戦士は、別世界にて再びインパルスと共に空に向かつて飛翔していく。

1年1組の専用機持ち同士がクラス代表を賭けて戦うという噂はあつという間に広がり、アリーナの見学席には多くの生徒の姿があった。

アリーナは上空制限とシールドバリアによって守られており、彼女たちに流れ弾などが飛ぶことはない。

アリーナの上空ではIS「ブルー・ティアーズ」を装備した、セシリアが真の到着を

待っていた。

『ようやくいらつしやいましたか』

『待たせたかな、お嬢様？』

『ふふ、いいえ、問題ありませんわ……むしろ貴方のほうはよろしいのですか？』

セシリアが武装である狙撃銃〔スターライトMKⅢ〕を展開しつつ、真に問う。

『私に負けた後の言い訳ですわ、お父様以外の男性はそういうのが得意なのでしょう？』

クスクスと笑いを零す彼女の目は笑ってはいなかった。

その瞳は戦意で溢れている。

『……アンタの父親のことなんて知らないさ、俺は全力でアンタを叩き潰す』

真の台詞の後、試合開始のコールがアリーナに響いた。

同時に、互いの銃口が光を放つ。

「………凄く」

アリーナの観客席で1年1組の誰かがそう呟いた。それはそこにいる1年生殆どが思っている言葉でもあった。

アリーナの上空では、2種類の光が絶えず迸っている。

1つはインパルスの持つ「ビームライフル」のビーム粒子が放つ緑色の光。

もう1つはブルー・ティアーズの持つ「スターライトMK-III」から放たれるレーザーの光。

互いにスラスターを噴かせ、自身の速度を上昇させる。

互いに放つ攻撃は両者共にスラスターを噴かせて回避。

たまに「イグニッション・ブースト瞬時加速」を織り交ぜての高速射撃戦。

回避先を予測してセシリアが射撃するがスラスターとバーニア、PICを応用した【可動肢制御による姿勢制御<sup>A</sup>】で真が攻撃を回避する。

セシリアはイギリスの代表候補生であり、ISとISの試合に慣れているのは分かる。だが真は違う。

彼は1ヶ月前まではISに触ったこともなかった一般人であったはず。

そんな彼が代表候補生と同レベルの行為を平然と行っていることが信じられない状況だ。

「……飛鳥君、凄い」

試合の様子を見ている清香が思わず声を漏らした。

少なくとも彼が行っている操作は自分ではできる気がしない。

彼女の隣にいた本音もそれに頷く。

本音の隣にはクラスが違うはずの簪がいる。

ルームメイトの彼が代表候補生と戦うという情報は4組にも来ていたので、気になっていたのだ。

そもそも【ある理由】で出場しないことになっているのだ、ここにおいても問題ない。

「あすあす凄いねー……あんなの一朝一夕で身につけられるものじゃないよー、だよね、



かんちゃん」

「……うん、相当戦闘に慣れてるみたい」

そう言っている間に、ブルー・ティアーズから放たれたレーザー攻撃を再びAMBACだけで真は回避する。

はつきり言つて異常である。

「私も候補生だから分かる。あんな風に加速を全くせずにAMBACだけで攻撃を回避するなんて相当の技量と度胸がなきゃ無理」

真の強さには理由がある、それは前世が「MSパイロット」であることだ。

【IS】と【MS】はサイズが違うが共通点

共に操作により思い描く動作を行うと言う点がある。

MSの場合は操縦桿やコンソールによる操作、OSに登録されたモーションデータをアレンジして理想の動きを実現するが、ISの場合は搭乗者自身の動作と思考を機体に反映して理想の動きを実現する。

MSより操作性で言えばISの方が動きやすく思い通りに動ける。

これが利香や真の共通認識である。

入学前の1ヶ月は、実戦を通したI Sの戦闘機動の習熟と射撃・斬撃の訓練に費やした。

そのおかげでMSで行える動作はほぼI Sで再現できるようになった。

加えて、真や利香の場合は前世が「エース」なのだ。

相手の銃口の向きから射撃位置を予測する程度は造作もないのだ。

『っ！… 何故ですかの!?! 何故回避されますの!?!』

叫びながら「スターライトMK-III」で彼を狙う。

だが彼にとってもそれは攻撃のチャンスであった。

彼のライフルが一瞬早く自分を狙っていることに気づいた。

『っ!?!』

咄嗟にスラスターを全開に噴かせて距離を取る。

だが真もスラスターを噴かせて追いつき距離をつめる。

咄嗟の行動のためセシリアの姿勢は崩れていた。

彼はライフルを格納しており、右手には展開された「ビーム」による剣、「ビームサーベル」が振り上げられていた。

『うおおおおおつ!!』

最大まで加速した状態でサーベルを叩きつけられ、ブルーティアーズのシールドエネルギーが大きく減少した。今まで両者共に被弾はしていなかったため、これがこの試合最初の被弾となった。

『っ……この私を、本気にさせましたわねっ!?!』

ブルー・ティアーズの背部スラスタが分離し、4機の遠隔無線誘導砲台が彼女の周りを浮遊している。

『……きたか、ドラグーン』

『おいきなさい! ティアーズ!』

セシリアの指令の下、4機の遠隔無線誘導兵器がインパルスに襲い掛かる。真はインパルスを後方に加速させて、一旦距離を取る。

『逃がしませんっ！』

ティアーズがレーザーを放ちながら、インパルスを穿つべく襲い掛かる。だが【こういつた兵器】には慣れている。

【無線誘導兵器】

C・Eでも同じ用途で使われる【ドラグーン】という兵器がある。その弱点は主に2つ。

1つは子機自体が小さいため推進剤を積むスペースがなく、高機動戦を得意とする手や機体の運動性能が高い相手の場合、常に相手にドラグーンを察知されて追いきれなくなる点。

もう1つはビームの出力自体はライフルより弱いか同等程度なので、強力な対ビームコーティングされた装甲ならば弾く、もしくは貫通されずに済む点。

また明確な弱点ではないが、【面】の攻撃にも弱い点が上げられる。

つまり簡単に言えば取る行動は2つに絞られる。

【避ける】か【耐える】かだ。

真が選択するのは前者。

フォースインパルスの高い推力と運動性で常に位置を把握して最小限の行動で避ける。

ティアーズ自体はC・Eのドラグーンに比べると、機動が遅く位置を常に把握する事も困難ではない。

これがドラグーンの扱いに習熟した【レイ・ザ・バレル】や【叢雲効】ならば話は変わってくるだろうが、彼らにはここにはいない。

真の背後に回ったティアーズから放たれたレーザーを、彼は確認もせずスラスターを噴かして上方に回避する。

回避した先にもティアーズ。

だが放たれたレーザーを横方向へスラスターを噴き回避。

『っ!?! そんな!?! 私のティアーズが何故!?!』

動揺が伝わったのか、一瞬だけティアーズの動きが鈍る。これを見逃す真ではなかった。

『1つ!』

即座に鈍ったティアーズをライフルで狙撃。

ティアーズは見事に撃ち抜かれ沈黙し地面へと落ちていく。

『ティアーズが!?!』

残りのティアーズも動きが鈍る。

無線誘導兵器は操作している者の精神状態が顕著に現れる。

プログラムによって機械的に動かしているのではなく、人間が動かしている場合は特に顕著だ。

また真がブルーティアーズを調べた結果、遠隔操作を行っている最中は本体であるセシリアは行動不能になることが分かっている。

操作に集中する必要があるからだ。

だからあえて狙撃して、動揺させたのだ。残りを一網打尽にするために。

『そこだあ!』

隙を逃さず、即座に3機のティアーズを狙撃する。

1つは見事に撃ちぬかれ、沈黙。

残りの2つは砲口を貫通し墜落していく。

破壊状態からこの試合ではもう使い物にならないのは目に見えていた。

『そつ、そんな……ティアーズを全機撃ち落すなんて……っ!?』

『この手の兵器には慣れてるんでな、行くぞ!』

【瞬時加速】で真が一気にセシリアに迫る。

加速を妨害するために残った「スターライトMK-III」で射撃するが動揺が出たのか当たらない。

『っ!?!』

反撃を行おうとしたが、すでに3発ほどビームが放たれており着弾してしまった。

『ぐうっ!?!』

衝撃に体勢を崩す。

この隙にインパルスはさらに変化を起こす。

背部のシルエットがパージされて、「別のシルエット」が装備されたのだ。

装着されたシルエットは「ブラストシルエット」

ブラストシルエットもMSインパルスと同じ「遠距離射撃武装特化」のシルエットだ。背部のランドセル部分に大型ビーム砲「ケルベロス」が2門展開される。

シールドについては変化せず、変化は両肩部に現れた。

大型のコンテナミサイルユニットが現れると同時に、各部装甲の【色】が変化している。  
く。

【トリコロールカラー】から【緑】を基調にしたものに変化した。



合わせて左腕に装備していた実体シールドが収縮し小型化。

左腕にバックラーとして装備される。

2門のビーム砲【ケルベロス】を武装として展開すると同時に、両肩部のミサイルユニットが開かれた。

『いつけええええ!!』

2門の強力なビームとミサイルの雨。

だが何とか体勢のリカバリーが間に合った。

ビームは回避に成功したが、ミサイルは動体誘導なのか的確にセシリアに迫る。

『つうっ!!』

【スターライトMK-III】を盾に、ミサイルの爆発に耐える。

だが全ての衝撃を吸収できずに弾き飛ばされる。

そして再度インパルスに変化が起こる。

ブラストシルエットがコネクタ部分から外れて、【別のシルエット】が装備された。

装着されたシルエットは「ソードシルエット」

ソードシルエットもMSインパルスと同じ「近接格闘武装特化」のシルエットだ。

2本の大型実体剣「エクスカリバー」がインパルスの両手に展開されると同時に、装甲の「色」が「緑」から「赤」を基調にしたものに変化していく。

『はあああつ!!』

ここまで圧倒しているインパルスだが弱点も存在している。

それはシルエット換装に多量のエネルギーを消費する点だ。

この点にはインパルスの開発主任も頭を悩めている。

加えて多くのエネルギーを消費する「瞬時加速」の多用や、最大戦速での機動、ビーム兵器を多用したことによりすでにインパルスの残存エネルギーは2割を切っている。

この連携マニューバで仕留めるつもりでエクスカリバーを2本とも上段に構えつつ、突貫する。

シルエットを換装した赤いインパルス。

「ソードインパルスガンダム」の大型実体剣2本が自身に迫る中、セシリア・オルコット

はある事に想いを馳せていた。

自身と父親についてだ。

父は女尊男卑が世間に広まる中でも、母と仲睦まじくしていたことを覚えている。

父の名は「ジョナサン・オルコット」

父は2mに迫る程の筋骨隆々とした体格の男性で、

オルコット家の婿養子であつたが、母を自分を何よりも大事にし、オルコット家を支えていた。

そんな父親がセシリアは大好きであつた。

自分でもファザコンの気質があることは認める。

いつの間にか彼以上の男性などいないと思うようになっていたのだ。

それは両親が列車事故で亡くなった後、オルコット家を立て直すために奔走したときからより顕著になっていったと思う。

父の様に堂々と――まるで大樹の様に相手を受け止めることもせず、自身に媚び諂う男性がすべてだったのだ。

だから目の前の飛鳥真やもう1人の織斑一夏も同じような男性だと思つた。

だが違った。

この1週間、飛鳥真の様子を見ていたが、媚び諂うことなどせずクラスの皆に対して

分け隔てなく接していた。

織斑一夏は確かに知識不足は否めないが、クラスメイトに助言を求めて、少しずつだが知識をつけ始めていた。

そして飛鳥真とのここまでの試合内容。

自身と同レベルの操作技術やティアーズを初見で回避し、無力化できる戦闘能力。認めざるを得ない、彼は強い。

それを認めた途端、自分の中にある気持ちが湧き上がってきた。負けたくないと。

心からこんな気持ちになったのは初めてだ。

イギリス代表候補になった時もこれほど感情が湧き上がったことなどなかった。ふとお父様が幼い頃言っていたことを思い出した。

「セシリア、君は全力でぶつかり合いたい友達はいるかい？」  
「いいいですわ、そんなおともだち」

お父様に肩車をされて、とても高い視線になって興奮したことを覚えている。

「そうか、そりやまだいないよね」

「おとうさまにはいらつしやるのですか?」

「ああ、いたよ。彼は貴族とは関係のない家系だった。学生時代はいつも事あるごとに力比べをしていたこともあつたなあ」

お父様が少し遠い目で景色を見ていたことを覚えている。

後ほど調べたところ、そのご友人の方はすでに亡くなっていたらしい。

「セシリア、同性や異性の友人で「負けたくない」と心から思える人に出会えたのなら、全力でぶつかりなさい」

「ぜんりよくで……ぶつかる?」

「そうだよ、持てる力や言葉を全部相手にぶつけるんだ。そうすればその相手と理解し合える……それはきつと君の人生にとっても大事な事になるはずさ」

初めてこんな気持ちになった。

今私が持てる力を全部出し尽くして飛鳥さんや織斑さんにぶつかりたい。

同時に先日、そんな彼等にとんでもない暴言を吐いた事に気付く

——先日のことについては後で謝罪せねばなりませんわね。

まだ武器は残っている

エネルギーは残り少ないが全てを出せない様ではお父様に合わせる顔がない。

『この様な所で……こんなところで私はあ！』

先程のミサイルとビームの連続攻撃によつて崩されていた体勢のまま、無理やりスラストを噴かせて彼に向かう。

『なっ!?!』

完全に仕留めるつもりだったのだろう、この試合で初めて聞いた彼の戸惑いの声。

——彼を抱きしめるように密着してしまいました、構いません！

『このゼロ距離ならばっ!』

残っているティアーズは2機、両方とも実弾兵器のミサイルだ。  
ゼロ距離ならばいくら彼とて避けることは不可能だ。  
直後、ミサイルが爆破し私達2人を爆炎が飲み込んだ。

『ぐうっ!?!』

爆破の衝撃で真は弾き飛ばされ、体勢を崩された。

真は先ほどのマニューバからの連撃で完全に止めを刺せると思っていた。

ティアーズと射撃武装を失った状態からまさか自爆覚悟で突っ込んでくるとは思ってもおらず、両手に持っていた大型実体剣「エクスカリバー」を衝撃で取りこぼしてしまっていた。

『インターセプター』ッ！』

爆炎の中から「ショートブレード」を構えたセシリアが飛び出して来る。

今の真は体勢を崩されており、AMBACで持ち直す隙もない、

ソードシルエットの推力は、フォースシルエット程ではないため推力に任せた回避も不可能。

フェンシングの要領でスナップを利かせた突きを避けることができずに衝撃が走る。

『つうっ!? 「フラッシュエッジ」ッ!!』

衝撃に耐えつつ真も応戦の為武器をコールして呼び出す。

本来の用途はビームブーメランであるが取り回しのきく小型ビームサーベルとしても使用が可能だ。

その間もセシリアの攻撃は止まっていなかった為、インパルスのエネルギーもレッドゾーン。

お互いに回避ができない距離ならば先に仕留めた方が勝者となる。



『うおおおっ!!』

『はあああつ!!』

残りのエネルギーを全て振り絞るような咆哮を上げ、互いの全力の突きがぶつかり合った。

——両者、エネルギー切れにより引き分け。試合時間、8分13秒——

そして結果がアリーナに響いた。

## PHASE 10 和解と暗躍

## 第2アリーナ ピット内

「すげえ……っ！」

真とセシリアの試合に目が釘付けになっていた一夏は、試合終了と共に賞賛の声を漏らした。

いつの間にか握り締めていた両の手のひらには、汗が浮かんでいた。隣にいる箒もそれには同意見だ。

「ああ。まさか真があれ程とは……」

「……やっぱり真はすげえ！ 最初はぜんぜん攻撃当たってなかったし、どんどん機体の色を変えていってさ！ 男の意地見せてくれたぜっ！」

一夏が先ほどの戦闘を思い出し興奮しながら言う。

「……一夏、お前はその後その真と、真と引き分けたオルコットとも戦うんだぞ？　大丈夫なのか？」

この1週間剣道しか一夏は行っていない。

その原因は自分にあるので、箒は負い目に感じているのだ。

「そうだった……けどやるからには全力でいくさ！」

苦笑しつつ、一夏は箒に力強く告げた。

対して教師陣も真の戦闘能力について評価を行っていた。

「飛鳥はオルコットと互角か。近接と射撃共に高レベルに纏まっているし、機体操作も問題ない」

「……凄いですね。彼がISに触れた期間はまだ1ヶ月ですよ？ たった1ヶ月で代表候補生と互角だなんて」

天才ですね、と真耶が続けるが千冬は真の能力について考えていた。

(……入学時にI S適性を見たが一夏と同じ【B】だったはずだが)

入学時に真と一夏はそのI S適正を検査されていたのだ。

結果は2人とも適性【B】の判定が出されていた。

(彼女の言うように「天才」と言うやつか。しかもまだまだ伸びしろもある様だ)

ふと一夏を横目で見る。

彼はやる気に満ちているように見える。

(……やれやれ、真には感謝をしないとな。一夏にもいい影響を与えてくれている)

真は弟である一夏の幼い頃からの友人であったため、千冬とは親しい仲である。

弟の親友が、いい影響を与えてくれていることに千冬は内心感謝していた。

次は一夏とセシリアの試合。

真耶が慌てた様子で連絡用の携帯を取り出しピットを出て行く。  
どうやら一夏の専用機が到着したようだ。

(さて一夏はオルコット相手にどれくらい持つのか……見せてみる、お前の可能性を)  
千冬もその後を追う。

それから20分後。

第2アリーナ内 第3更衣室

先ほどの試合でインパルスとブルー・ティアーズ共に破損していたが、自己修復機能とパーツの交換で問題なく稼働ができることが判明し、現在整備中である。  
そのためインターバルが設けられていた。

「……………ふう」

更衣室に備え付けられたシャワールームから上半身裸のまま真が出てくる。現在第3更衣室は男子用に指定されているため、遠慮なく脱いでいた。

「はあ、引き分けかよ。くそ……っ！」

ダンつと、ロッカーを叩く。

溢れるのは情けなさ。

大切な家族への侮辱の言葉を撤回させることができなかった。

だが決まってしまったことは仕方がない。

次で挽回するしかないと切り替えて途中だったISスーツの着替えを再開する。

「……ん？」

ふと視線を感じた。

だが、今はここは貸切のはず。

周囲を一通り見まわしてみるのが、誰もいない。

気のせいかと判断して着替えを続ける。

すると、トントンと更衣室のドアがノックされた。

「……一夏か？」

自分の次は一夏が彼女と戦う予定なので着替えに来たのか？  
だが彼はISスーツをすでに身に着けてピットにいたはず。  
すると返ってきたのは女性の声だった。

「私です、セシリアです、よろしいでしょうか？」

「っ!? 5秒待って！」

何で彼女がここに来ているか分からないが、まだISスーツを完全に着てはいなかったため慌てて着替えを再開する。

完全にISスーツを身に纏ってから、戸を開ける。

そこにはISスーツのままのセシリアが立っていた。

手にはスポーツドリンクを持っていた。

「お疲れ様です、飛鳥さん」

「……何の用だよ、オルコット」

彼女からドリンクを受け取りつつぶつきらぼうに返す。

その様子を確認したセシリアは深く頭を下げた。

「申し訳ありませんでした、飛鳥さん。先日のことは深くお詫びいたします」

「……は？」

いきなりの謝罪に素っ頓狂な声を上げてしまった。

「先日貴方のご家族の事を侮辱してしまい、大変申し訳ありませんでした！」

一度顔を上げてからまた深く下げ、謝意を示す。

誠心誠意。

その言葉がびつたりと当てはまる様子に先日から感じていた怒りの炎が、彼女の行動と態度から急速に鎮火していくのを感じる。



「……頭上げてくれよ、オルコット」

「でっ、ですが、私は酷い事を……」

「いいから、顔上げてくれ」

真の言葉にセシリアは頭を上げる。

彼の表情を見ると、苦笑をしていた。

「いきなりでびつくりしたけど……本気で謝ってくれてる事、分かったからさ」

「飛鳥さん……」

「それでさ、なんでいきなり謝ってくれたんだ？ 理由があるんだろ？」

「それは……」

彼女は自身の父親の事、試合中に感じた事全てを真に伝えた。

全力で貴方とぶつかりたい、友人になつてほしいと。

「オルコットはお父さんのこと、大好きなんだな」

「うう……っ」

真が微笑みながらセシリアに言う。

指摘されたことで顔が真っ赤になっている。

「いや、別に馬鹿にしてるわけじゃないんだ。俺も同じだよ、家族のこと大好きなんだ。それと友人だっけ……いいよ」

「よっ、よろしいのですか!？」

ガバツと真に詰め寄りつつセシリアが大声を上げる。

「えっ、うっ、うんっ……」

彼女の綺麗な顔がいきなり近づいてきたの少々距離を取ってから、真は返答する。

前世と合わせればすでに40年に近い人生を送ってきているが、一応現在は思春期なのだから仕方がない。

「あつ、ありがとうございます、飛鳥さんっ！」

「……真」

「えっ？」

「もう友達だろ。なら真でいい」

感謝して頭を下げたセシリアに向かって言う。

それに対してセシリアは微笑みを返した。

「それでしたら私もセシリアと呼んでください、真さん」

「ああ、これからよろしくな、セシリア」

そう言ってから真は手を差し出す。

その手に込められたのは、和解。

「はいー！」

その手にセシリアは笑顔で答えた。

「……青春してるわねえ」

真が再びピットに向かった無人の更衣室のロッカーから声が響いた。

真が着替えを行っていた2つ隣のロッカーが開いて、中から【水色の髪】の女生徒が出てくる。

制服の上着がベスト風に改造されており、茶色のパンティーストッキングを着用している。

IS学園は制服のリボンの色で学年を区別しており、1年は青、2年は黄、3年は赤となっている。

彼女がつけているリボンは【黄色】である。

そして出てきた女生徒が手に持った【扇子】を開くとそこには【青春爆発】と記されていた。

「んふふー、いいものも見れたしね。中々鍛えられてるじゃない」

彼女は真が更衣室を利用してたときもロッカーに隠れていたため、じつくりと観察していたのだ。

「上半身裸の写真とか需要高そうね、人気もあるみたいだし」

そのまま、おどけた様子で更衣室から出ていく。

しかし更衣室から出た後の彼女の表情は真剣そのものだった。

「しかし飛鳥真君か……まさか私の視線に気づくなんてね。少々侮っていたわ。再調査がいるわね、簪ちゃんのために」

そう呟いてから、足早にどこかに去っていった。

## PHASE 11 憧れと決着

一夏対セシリアの試合は、結果としては一夏のエネルギー切れで終わった。試合時間は10分程度であった。

しかし、その結果は上々のものだった。

なぜならば、一夏は専用機——【白式】——でセシリアに一撃入れることに成功したのだ。

単一仕様能力<<零落白夜>>が発現していた一撃であったため、飛来するレーザーを切り裂きながらブルー・ティアーズのエネルギーを約4割まで減らすことができた。

しかし、その後は一夏の背後に気づかれないように配置されて遠隔操作されたティアーズに狙い撃ちされ、玉砕覚悟で突っ込んだ途端エネルギー切れとなってしまった。

「とりあえず千冬姉の名前は守るさ……だったか、織斑？」

「やめてえっ！」

ジト目で千冬に見られ、顔を赤面させて先ほどの試合中に口走ったことを一夏は思い出す。

「勝てればよかったがな……まあ、初心者にしては上出来だ」

「……なんで俺負けちゃったんだ？」

「バリア無効化攻撃を乱用したからだ」

白式が発現した単一仕様能力である零落白夜は、自身のシールドエネルギーを攻撃力に変換することで相手のバリアを無効化し切り裂くことができる。

その結果、相手のI Sは絶対防御が発動して大きくエネルギーを削られるのだ。

だが強力すぎる能力には相応の弱点も存在する。

【燃費が極悪】なのだ。

今回の場合、一夏は初使用ということもあり長時間使用していた。

そのためすぐにエネルギーが切れてしまったのだ。

「今後は現役時代の私のデータでも見て、使い方を理解しろ……さて、次は飛鳥との試合

だな」

千冬と一夏がいるピットとは反対側のピットに真はいる。

すでにインパルスの調整は完了しており、いつでも出撃できるがカタパルトの点検が行われているため、今日行う試合が終了したセシリアにスポーツドリンクを渡していった。

「お疲れ、セシリア」

「ありがとうございますわ、真さん」

受け取ったドリンクを軽く一口セシリアは飲む。

ふうと彼女は一息ついていた。

「セシリアから見て、一夏はどうだった？」

「そうですね……やはり初心者と言わざるを得ないですわね、私の【瞬時加速】にもほとんど反応できていませんでしたし……」



少し眉間にしわを寄せてセシリアは一夏を評価する。

辛口だなと真は内心思っていた、が次の瞬間にはセシリアは微笑みを浮かべていた。

「ですが、爆発力という点では素晴らしいものを感じました、特にレーザーを無効化しつつ突貫してきたのは驚愕いたしましたわ」

「あれは確かにそうだな」

自分は過去の経験もあるので恐怖の感情はコントロールできる。

しかしつい先日まで完全な一般人であった一夏が自分に放たれてくる攻撃を無力化しつつ突貫するなんて事をしてのけたことには驚いたものだ。

「……一夏さんは私のこと、許していただけるのでしょうか」

セシリアは真に問いかける。

全力でぶつかり合いたい「友人」として真と一夏の事を考えている。

その問いかけに、真は微笑みつつ返す。

「俺にしたみたいにな気で謝れば大丈夫。きつと許してくれるさ」  
「ありがとうございます、真さん。次の試合頑張って下さいな」

セシリアは軽く頭を下げた後、真を激励する。

その言葉に真はサムズアップを取った。

---

ピットから射出された【白式】

一夏がアリーナ上空へ飛翔してくる。

アリーナ上空ではIS【インパルスガンダム】

装備しているシルエットは【ソードシルエット】、真が彼を待っていた。

『調整は終わったみたいだな』

『ああ。セシリアの時は違って、最初から赤いヤツなんだな』

ソードインパルスを観察しつつ、一夏は白式唯一の武装である近接ブレード【雪片式型】を展開する。

対する真も大型実体剣〔エクスカリバー〕2本を両手に構え、同時に刀身に〔ビーム〕が走る。

『最初から全力で来いよ、一夏!』

『わかってるさ……真、お前を倒してみせる! 今日っ! ここまでえ!』

一夏の叫びと共に試合開始のコールがアリーナに響いた。

『うおおおおおおおっ!!!』

俺は白式のスラストアーを全開に噴かして真に迫る。

「先手必勝——零落白夜を発動しているから、見る見る間に俺のエネルギーが減っていくけど、当ててさえしまえば関係ない。」

対する真は大型の2本の剣でこちらの1太刀を受け止めるつもりで待ち構えていた。

甘いぜ、真!

『チエストオオオオッ!!』

全身全霊の一撃だった

金属が破損する鈍い音が聞こえたかと思うと真が持っていた剣が2本とも砕けていた。

こちらの一撃は防がれたが、真に一撃与えることができた！  
だが俺は見逃さなかった。

あいつが計算どおりだという風に笑っていたことを。

『一瞬止められれば充分なんだよっ!』

直後、振り下ろしていた両手が弾かれて「雪片」が宙を舞う。  
続けて腹部に衝撃が走って後方にすっ飛ばされた。

吹っ飛ばされつつ不思議と状況の判断ができた。

どうやら雪片を握る両手を「蹴り」によって弾きあげて、雪片を弾きそのまま展開し

た【2本のナイフ】で連撃。

そしてスラスターの加速を上乗せした蹴りで俺を弾き飛ばしたんだ。

『ぐっ……!!』

何とか体勢を立て直そうともがく。

だがそれすらも真は許してくれない。

白式がハイパーセンサーで飛来物を検知。

穂先がビームでできた【槍】が俺めがけて飛んできていた。

『うおおっ!!』

何とか崩された体勢で弾く。

続けてロツクオン警告がコンソールに踊った。

『!?!』

ハイパーセンサーを使って確認してみると、真はすでに機体を【緑】に変えていた。そして大きな2門のビーム砲とミサイルがこちらを狙っている事に気づいたがもう遅かった。

『これで終わりだあ！一夏っ！』

発射されたビームとミサイルが俺に迫る。

避けられないっ！ ああ、くそお……っ！

真は強い。

俺なんかよりもずっと【力】を持つてるのに使い方を分かってる。

対等だと思ってた。

いや違う、俺はずっとあいつに憧れてたんだ。

悔しいと思うのと同時に負けてたまるかと思っただ。

今は勝てない。

けどいつかきつと。

目の前を走っていくあいつの背中に追いつけるように、追い越せるように今まで以上

に努力しよう。

そこまで思考して俺はビームとミサイルに飲み込まれた。

【絶対防御】が発動して白式のエネルギーギアが尽きる。

—織斑一夏、シールドエネルギー切れ、勝者 飛鳥真。試合時間、49秒—

さすがに1分持たなかったのは恥ずかしい……。

千冬姉にどやされるう……！

真がこちらに来てくれているのを確認しつつ、そんなことを考えていた。

## PHASE 12 中国からの使者

「という訳で1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定しました、1つながらで縁起がいいですね！」

クラス代表決定戦翌日のSHR、副担任の真耶が告げる。

当の一夏は訳が分からないという表情を取っていた。

決定戦の戦績は真とセシリアが共に【1勝1分】であり、自分は【0勝2敗】の内訳であつたはず。

思わず手を挙げて真耶に質問してしまった。

「あのー、俺2連敗してるんですけど……戦績なら真かセシリアが代表になるのが筋なんじゃ？」

一夏の疑問はもつともである、他のクラスメイトも疑問に思っていたからだ。その疑問に対して立ち上がったセシリアが回答する。



「その理由は、私と真さんが辞退したからですわ」

「え？ そうなのか、真？」

一夏が自分の後ろの席で眠たそうに欠伸をしていた真に問いかける。

先日【とある理由】から深夜まで起きていたため若干寝不足なのだ。

ちなみに、先日の試合の後セシリアは一夏に対して謝罪をしていた。

彼女の謝罪に対して、自分も少々言い過ぎたと一夏も謝ったことで2人は友人の関係になつていた。

「ああ、俺達は辞退した」

「何で？」

「候補の中でお前が一番負けたからだよ」

真の回答にグフツと血を吐く真似をして、一夏はヨロヨロとオーバーなりアクションを取る。

その通りだから反論もできない。

「一夏、その分成長してもらうために俺達は辞退したんだ」

実は代表戦が終わった後、担任である千冬に頼まれたのだ。

一夏にIS乗りとしての経験を積ませるために、クラス代表を辞退してほしいと。

真とセシリアについてはISに対する理解度は高い、しかし一夏の場合は違う。

このままいくと何かしらの【事故】すら起こるかもしれない。

この要望に対して、不満もなく真とセシリアは承諾したのだった。

「一夏さんの戦いには光るモノを感じました、なので私と真さん、そしてクラスの皆さんでサポートさせて頂きますわ、そして……」

そういつてセシリアがクラスの皆を見回した。

「この場を借りて謝罪させてください。先日の軽率な発言、大変申し訳ありませんでした！」

真に行ったように深く頭を下げ、クラスの皆に謝罪する。

「皆さんがよろしければ非力ながら私は全力で皆さんを……一夏さんをサポートさせて頂きたいと思います、どうかよろしくお願い致します！」

そのセシリアの発言にクラスメイトの皆は――

「オルコットさん、変わったよね、私は全然いいんだけど」

「うん、私もー、謝ってくれたしね。それになんかこう……輝いてるって感じなのかな

？」

「ぬう、すでにフラグが立っているとは……このリハクの目をしても見抜けぬとは……

!？」

「お前は目が見えぬのか……!？」

と返した。

若干数名の珍返答は無視するとして、

セシリアの謝罪は1組の皆に好意的に受け入れられたのだ。

「さて、そういうことだ。それでは授業を始めよう」

今までその経緯を見守っていた千冬が教壇につき、授業が開始された。

「クラス対抗戦、勝てば半年スイーツ食べ放題だつて！」

「たくさん食べるためにも痩せなきゃ！」

「いや、その理屈はおかしいんじゃないかしら」

1 限目の休憩時間、クラス対抗戦の賞品「スイーツ半年フリーパス」について皆が和気藹々と話し合っている。

1 限目に千冬が賞品について話したのだ。

「スイーツね。まあ、食べれるなら食べたいね」

先程じゃんけんて真とセシリアに負けた一夏が箒と放課後のアリーナ使用申請に向かったため、

眠そうに呟く真であつた。

「あれ、飛鳥君はそんなにスイーツ好きじゃない？」

「んー。甘いものは好きだけど、俺は和菓子とかの方が好きだな」

横の席に座っていた清香が真に話しかけてきて、それに返す。

清香は手で携帯を操作していた。

画面が見えたが「今季のスイーツ特集」と表示されている。

「女の子は好きだよな、甘いお菓子。相川も好きなのか？」

「うん、私も大好き。あー、これもおいしそう」

清香がそう言って真に画面を見せる。

表示された画面には「春の新作スイーツ サクライロノキセツ」と言う名前の菓子の画像が表示されていた。

たつぷりの薄紅色のクリームが、桜の花びらを象ったタルトの上に乗っている。確かにおいしそうだがカロリーも高そうだ。

「……太るよ?」

「あつ、ひつどーい!」

そう言っているが口元が笑っているのでもこまで怒ってはいないようだ。

「そういうのが食べたいなら一夏には頑張ってもらわないとな」

「飛鳥君やオルコットさんたちがサポートするから大丈夫でしょ! あ、そうそう」

思い出したように清香がポンツと手を叩く。

「今日の20時から、織斑君のクラス代表就任記念パーティーやるからね」

「はつや、今日かよ」

一夏がクラス代表になった事が知らされたのは今日の朝である。

流石に早すぎないかと思つた真だが清香がそれに回答する。

「まあ、元々誰かが代表になつたらやるつもりだつたからねー、てなわけで出席ヨロシク  
！」

「なるほどね、了解」

ありがとねーと席を離れて別の友人たちのグループへ向かつていく。  
それを見届けた真に別の人物が話しかけてきた。

「あすあすー、いまいいー？」

布仏本音だ——彼女が真の背中に抱き着いてくる。

女の子特有の柔らかい感触が背中に伝わる。

「うおわっ!?! ちょ、待って!?!」

流石に抱き着いてくるのは予想外だつたため、引き剥がして席を立つ。

その様子をクラスメイトに見られていたため、「え、布仏さんと飛鳥君まさか!」なんて声も聞こえてくる。

だが抱き着いてきた時の柔らかい感触——クラスメイトの声を無視しつつ、感触を忘れないようにしようとはひっそりと心に決めた真だった。

「ごめんねー、ちよつと眠くて……」

「眠いからって抱き着いてくるのかよ……で、何?」

眠そうな表情をしている本音に用件を聞く。

本当に眠そうに目をこすりながら彼女が返す。

「明日の放課後あいてる?」

「明日? 少しなら大丈夫かな、日出の人が来るからそんなに時間は取れないけど……」

真が先日深夜まで起きていた理由は、日出のスタッフと「インパルスガンダム」の開発主任が来訪するためだ。

「インパルスガンダム」と他国の専用機との実戦データは貴重なものである。



加えて各シルエットを実戦で使用した感触や、問題点などをレポートに纏めなければならなかったのだ。

また【新しいシルエット】が開発中との連絡を受けていたのでそれについても報告があるらしい。

ザフト時代からそうであったが、やはり書類仕事は自分に合わないと感じていた。

ちなみに先日は消灯時間を過ぎるギリギリの時刻に、ルームメイトである【簪】が戻ってきた。

なんで遅くなったのか聞いてみたが話してはくれなかった。

「いいよお、たぶん10分くらいで終わるから」

「10分なら大丈夫だな、どこにいけない？」

「生徒会室1、明日の放課後に案内してあげる」

「……俺、何かした？」

生徒会室と聞いてビクツと身体が震えた。

特に自分は何も問題を起こしていないはず——セシリアとの決闘は解決済みだがそれを問題と取られたか、と真は考えるが本音はそれを否定する。

「だいじょうぶ、あすあすが何かしたってわけじゃないからー」

「……なら何で呼び出されてるんだよ」

「うーん、私の口からは言えないんだ、とにかくよろしくねー」

ぼやぼやと自席に戻っていく本音を見つつ、自席に突っ伏す。

「なんか……嫌な予感がする……」

シン・アスカとしての——戦士としての嗅覚ではなく、本能で悪寒を感じた真であった。

---

そして同日——

IS学園 食堂

夕食後の自由時間、食堂の一角を貸し切り一夏のクラス代表パーティーが行われていた。

連結されたテーブルの上に所狭しとポテトチップス等のお菓子や、オレンジジュース等飲み物が置かれている。

いつの間に作ったのであろうか、【織斑一夏君クラス代表就任おめでとう】なんて垂れ幕も用意されている。

「こんなのいつの間にか作ったんだよ」

手にオレンジジュースが入った紙コップを持ちつつ、一夏は苦笑いしていた。

放課後、真とセシリアとの模擬戦を含めた訓練（箒は観戦のみ）を終えた一夏が夕食を終えた後、女子に半ば拉致されてこの一角に案内されて最初に感じたことを言葉に出した。

こう言ったイベントに対する女子の行動力というのは馬鹿に出来ないと言うことをつくづく感じる。

ちなみに訓練の内容については、飛行時の姿勢制御と遠距離攻撃の対応の2点主にしていた。

姿勢制御については【AMBAAC】の基礎を真から、遠距離攻撃の対応についてはセシリアから基礎を教えられていた。

A M B A C については及第点を得ることができたが、遠距離攻撃については一朝一夕とはいかずフェイントを織り交ぜたセシリアの射撃に何度も迎撃され、零落白夜を用いた攻撃も「ショートブレード」をあえて投げるといふ奇策に惑わされたところを撃ち落とされるといふ結果に終わってしまった。

一夏の機体〔白式〕には射撃武装がなく、近接ブレードオンリーなため、遠距離攻撃を主軸にされるとプラスチックインパルスと戦った時の様に一方的に潰される。

対応は急務であると真とセシリアは感じていた。

### 閑話休題

「主賓が来たぞー!」

「織斑君、乾杯のあいさつー!」

やいのやいのとクラスメイトが囲む中、パーティーの主賓として挨拶をするよう言われた一夏が口を開いた。

「かつ、かんぱーい!」

「かんぱーい!」

しかしやはり1時間も経つと、主賓を祝う雰囲気は小さくなりそれぞれ駄弁りながらお菓子を食するという雰囲気になっていた。

途中、新聞部副部長を名乗る「黛薫子」という女生徒が一夏や真、セシリアに質問を投げかけていた。

これに対して真は当たり障りのない回答を返していた。

「ふー、これ以上食べると太るわね」

「あんた食べたもの全部胸に行くくせに……ほらもつと食べ、たんと食べ、おかわりもいいぞ」

「あががが……ポリポリ」

若干数名が女子として出してはならない声を出す中、パーティーに参加していた真は席を立つ。

「あれ、あすあす？ どっかいくの？」

袖が余った制服で器用に紙コップをつかみジュースを飲んでいた本音がそれに気づく。

「ああ、腹いっぱいになったからちよつと夜風に当たりに」

そういつて真はパーティー会場から離れて夜風に当たりに行く。

学生寮から少し離れた場所で真は夜風を感じていた。

「ふう……」

季節は春でありそこまで風は冷たくない。

パーティーの雰囲気では火照った身体を落ち着けるにはちょうどいいだろう。

「……最初はどうかと思ってたけど。悪くないよな、この学校も」

ここ数カ月で自分を取り巻く環境は激変した。

下手をすれば人並みの自由すらなくなるほどに。

だがその激変した環境でも自分を支えてくれる人達、明るく付き合ってくれる友人達がいることを幸いだと感じていた。

「こつちでも色々と波乱万丈だけど……頑張ってみるよ、レイ」

目を閉じて風を感じる。

いくら春とはいえあまり長い間夜風に当たっていると風邪をひくだろう。

ほどほどにして寮に戻るか、と思つた時声が聞こえた。

「……あー、学生寮ってどこなのよ！ 事務の人ももうちよつと詳しく教えてくれたつていいじゃない！ てかこの学校広すぎんのよ！ 大学なのかつての！」

キャンキャンと怒声が聞こえる。

どこかで聞いたことのある声だったため、真はその発信源を探す。

周囲を見渡すと発信源であろう制服を着た女子がポストンバッグを持ちつつ、夜空に向かつて吠えていた。

自分より20cm程低い身長、特徴的なりボンと栗色のツインテール、なにより声に聞き覚えがあった。

「……もしかして鈴なのか？」

中学の途中で転校してしまった友人【フエン、リンイン凰鈴音】が真の目の間で夜空に向かって吠えていたのだ。

「おーい、鈴！」

「え？」

鈴に向かって真が手を振りつつ、駆け寄る。

鈴がそれに気づいて振り向き、その顔に驚愕が浮かんだ。

「あんた……真なの!？」

「ああ、久しぶりだな、鈴」

「ほんつとに久しぶりね。そういえばあんたも2人目としてIS学園に入学してたわ



ね」

「せっかく藍越受けたんだけどな……鈴は転校してきたのか？」

「ええ、こう見えても中国の代表候補生なのよ、私」

鈴がすつきりとしたラインの胸を張って真にドヤ顔を送ってくる。

その言葉に真が驚く。

「えっ、お前転校したの中2の時だろ？ たった1年で代表候補に？ 凄いな」

「えへへー、ほめるなほめるな」

照れたように手を振りつつ笑顔で鈴が返す。

そして辺りをキョロキョロと見渡し始めた。

それを察した真が鈴に告げる。

「一夏ならクラスの皆と食堂にいると思うけど……ちよつと入りにくいと思うぜ」

「ふーん……まあ、いいわ、明日会えるでしょ」

この少女。

鈴も一夏に想いを寄せる少女の一人だ。

真や弾はその想いに気付いていたが、相手はあのザ・朴念仁の一夏であった為、結局気づかずじまいだったのだが。

「ところでさ、真、学生寮ってどこ？」

「ん、ああ、案内するよ」

「ラッキー！ 助かったわ、真！ この学校広すぎるのよ……道に迷っちゃうわよ」  
「ああ、それわかるよ」

久しぶりの旧友との再会で真は忘れていた。

一夏に想いを寄せるのは一人ではないということ。

それを思い出したのは、鈴を学生寮の寮母に預けて別れた後だった。

(……あつ、箒と会わせたらやばいやつだぞ、これ)

真は2人を知っているが、箒も鈴もお互いの事は知らない。

お互い一夏への想いは強い。

会えなかった分が合わさってさらに強くなっている。

他人の事は言えないが、どちらも直情タイプ。

2人に対して付き合いが長いために、暴力は振るうなよと常々言っているが聞かない可能性もある。

おそらく明日は朝からめんどうくさいことになるだろうなと確信しつつ、自室に戻った。

この日もルームメイトの簪は消灯時間ぎりぎり部屋に戻ってきた。

一言二言言葉を交わしたが、彼女はすぐ寝てしまった。

そして彼女の表情が疲れ切っていることに真は気づいていた。

(こんな遅くまで何してるんだ? しかも顔色が悪くなってる気がする……今度本音さんに聞いてみるか、かなり親しい仲みたいだし)

朝食の席などで一緒になるからか、簪と本音は親しい仲であることに気付いている。自室の友人の体調がすぐれていないことを放置できるほど、薄情ではないつもりだ。

(……俺に何かできることがあればいいけど)

自分も床に就きつつ、そう考えていた。

## P H A S E 1 3   L i f e   G o e s   O n

一夏のクラス代表就任パーティーの翌日

「…………ふう」

小さく息を吐いて、ジャージ姿の真が自室の扉を開ける。

日課となっていたトレーニングから戻ってきたのだ。

IS学園に入学してからも、早朝のランニングと柔術の型の確認、ザフト式軍隊格闘技の訓練を真は続けている。先日は深夜まで起きていたが、もう慣れたものだ。

時刻は午前7時15分、これから着替えて朝食に向かう予定だ。

ふと、自分のベッドの隣。

簪のベッドを見るとまだ彼女は眠っていた。

普段ならば大体この時刻には起きているはずだが、珍しい。

(…………疲れてるみたいだな、昨日調子悪そうだったのも疲れてるせいなのか)

先日の様子を思い出しながら真が簪を起こしにかかる。  
彼女には悪いが、授業があるのでそのままにしておくわけにもいかない。

「簪、朝だぞ」

「……………んっ……………」

小さく声をもらして彼女が目を開ける。

ごしごしと目をこすって、小さく欠伸をしていた。

「おはよう」

「……………おはよう」

軽く挨拶をしてから、シャワーの為タオルを手に取る。

汗を軽く流してから朝食に向かいたいからだ。

顔を洗って洗面所から戻ってきた簪に、真が告げる。

「俺、軽くシャワー浴びてくるよ」

「……先に食堂に行ってる、本音と席取って置くね」

「悪いな」

「うん」

真と簪は趣味が合うので良い交友関係を築けている。

朝食は本音と取ることが多いが、どうやら簪は一夏を避けているように見える。理由は気になるが、無理に聞くのも憚られる。

「んじゃ、あとで食堂で」

「……分かった」

真はタオル片手にシャワールームへ、簪は着替えてから食堂に向かう。

(体調悪そうだったな……そのうちぶつ倒れなきやいいが……)

ベッドから起き上がった簪が一瞬ふらついていたことは見逃さなかった。

真はこの時まで気づいていなかった。  
彼女が無理をしている要因が自分にあることを。

「2組に転校生が来たんだって」

「へー、この時期に？」

「珍しいね、転校生なんて」

朝の1組では転校生の話題で持ちきりになっていた。

真はその転校生が友人である鈴だと知っているので、その話題にはあまり興味はなかった。

ちなみに鈴からは一夏を驚かせたいので、転校生が自分であることは黙っているよう頼まれていた。

「2組つてことは隣か、どんな奴なんだろ。知ってるか、真？」

目の前に座っている一夏が真に話しかけてくる。



「ん、悪い。知らないんだ」

「そっかー」

心の中で一夏に謝罪しつつ、真は手に持った携帯に送られてきたメールを読んでいた。

メールの差出人は【瀬田利香】

来訪予定のスタッフは利香であり、今日の確認点などを要約したメールを送ってきていたのだ。

利香と共に来る予定のスタッフは【ジエーン・ヌル・ドウズ】

C・E・でセカンドステージシリーズMSの基礎を作り上げた人物であり、日出の技術力の基礎を作り上げた女性。

【インパルスガンダム】も彼女の作品であるとの事だ。

ちなみに【ガイアガンダム】はジエーンに教えを請いた真の父、大胡を責任者として開発されたISらしい。

(この人の名前明らかに偽名だよな)

などと考えつつ、目の前の一夏に話しかける。

「一夏」

「ん、どした、真」

「悪いけど今日、日出の人が来るから訓練に付き合えないんだ、箒と剣道してたらどうだ？」

「そうなのか、セシリアはどうだ？」

セシリアは自席でキューブ型の立体パズルを高速で解いている最中であった。

この立体パズルだが、BT兵器に必要な「空間認識能力」と「並列思考」を鍛えるのに最適なトレーニング方法であり、その基礎中の基礎でもあった。

真と一夏の模擬戦を経て、彼女は再び基礎から自身の力を磨き上げているのだ。数秒で手に持っていた立体パズルを解き終えた彼女は、申し訳なさそうに答えた。

「申し訳ありません、私も少し本国と連絡を取らなければならぬので本日は少々都合が……」

「分かった、じゃあ、剣の訓練をしてるよ」

少し残念そうに頷く一夏だったが、すぐに笑顔を返す。

チラツと横目で箒を見ると、彼女は今の話が聞こえていたのか少々顔を赤くしていた。た。

メールを確認しているとクラスメイトの会話がまた聞こえてきた。

「転校生ってことはISの操作とか上手なのかな」

「でも織斑君は専用機持ちだし、他の専用機持ちの4組の人は休むらしいし……いけるでしょー!」

「その情報、古いよ!」

よく知った声が響き発信源を探すと教室が開かれており、【鈴】が仁王立ちで立っていた。た。

それに気づいた一夏は思わず立ち上がった。

「鈴……鈴なのか?」

「久しぶりね、一夏！」

ツインテールがまるで彼女の感情を表すかのようにゆさゆさと揺れている。  
実際嬉しいのだろう、久々に想い人に会えたのだから。

「中国から来た転校生ってお前だったのか！」

「そうよ、そして驚け！ 私は代表候補生になったんだから！」

「マジか！ セシリアと同じかよ、すげえな鈴！」

旧友同士が出会ったことで話に花が咲き始めた時だった。

底冷えした声が1組の教室に響いた。

「一夏……誰だその女は？」

箒だ——彼女も一夏を想っている1人なのだから、他の女が親しそうに  
一夏と会話していたら面白くないのは当たり前だろう。

「ほつ、箒さん？ どうなさったのですか？」

箒が普段一夏の隣で笑っている姿を見ていたセシリアが冷や汗を流しながら疑問を口にした。

それに答えたのは真だ。

「セシリア、手を出さないほうがいい」

「真さん、何故ですか？」

「……セシリアのお父さんがお母さん以外の女の人にデレデレしてたらいやだろ？ そういうことさ」

なるほど、と真剣な顔つきになったセシリアが一夏たちの動向を見守る。

内心、真は大いに焦っていた。

（やっべえ、出会っちゃった！ 朝も色々あったから完全に忘れてたあ……！）

箒の声に反応した鈴が彼女を睨む。

「……何よアンタ？ 私は一夏と話してるんだけど？」

「貴様こそ何様だ、別のクラスだろう？ さっさとクラスに戻るがいい」

まさに一触即発の状況。

無理やり割り込むしかない方法が浮かばない。

だがその状況はたやすく崩壊した。

「何をしている、貴様ら」

「え？」

鈴が背後から聞こえた声に振り返ると、1組の担任千冬が立っていた。

「ちっ、千冬さん」

「織斑先生だ。嵐、さっさと2組に戻れ、授業開始の時間だ」

「うっ、すいません……一夏後でね！」

鈴が千冬の圧力におされて、そそくさと2組に戻っていく。  
その様子に心の中で真はガッツポーズをとっていた。

(ナイス千冬さん！ナイスタイミング！)

「貴様らもさっさと席につけ、そして飛鳥、織斑先生だ」

ガンツと真の頭に出席簿が振り落とされた。

「つつう、自然に心読むのやめて下さいよっ!？」

真のその叫びに2発目が振り下ろされたのだった。

---

本日の授業が全て終了し、すでに教室に残っている人影は少ない。  
机に疲れたように突っ伏しているのは真だ。  
すでに一夏と箒の姿はない。

剣道場に向かうと言っていたので

今頃2人は剣を合わせているのだろう。

それはそれで鈴にとっては面白くないだろうが先約だから仕方ない。

「だあー……やつと終わったか……疲れたあ」

「おつかれ、あすあす」

彼の背後から本音がポンツと背中を叩いておつかれの意を示してくる。

真がここまで疲れている理由は昼休みの事だ。

昼休み、一夏達と共に食事を取るために食堂に向かったが、鈴が待っていたのだ。

その後は朝の件の再来。

睨み合いが発生したが、そこに無理やり割り込んで自己紹介を成立させた。

一夏は箒を「ファースト幼馴染」、鈴を「セカンド幼馴染」等と紹介した為2人にぶん殴られたが。

またその席で鈴が自身が2組のクラス代表になったことと、一夏は初心者であることから自分が教えると言い出した。その言葉に箒が反論しそうになったが、セシリアと真の2人が、自分たちが一夏を鍛えているからそれは必要ないことと、クラス代表戦は全力で戦う旨を伝えたので、変に拗れることもなかった。



だが、その分真（後セシリア）にかかる心労が大きかったのだ。  
閑話休題

「ありがとう、本音さん」

「いいのいいのー、そしたらいいこっか、生徒会室」

「ああ、日出の人は後1時間くらいで来るみたいだから、大丈夫」

利香から先程メールが来ていたのだ。  
ちよつと遅れるとの事だ。

「んじゃ案内よろしく」

「れっつごー」

2人は生徒会室に向かうため、教室を出ていく。

「……なあ、本音さん」

「なにー?」

生徒会室に向かうため、階段を上りつつ真は先日から気になってた事を尋ねる。

「簪の事なんだけど……」

「かんちゃんのことー?」

階段を上り終わって、彼女が足を止めた。

真が隣に来るまで待った後、少し前を歩きつつ聞き返してきた。

「ああ、彼女いつも部屋に戻ってくるのが遅いんだ、最近はさらに遅くなって消灯時間ギリギリにさ……何してるか知らないか?」

「うーん、知ってるけど……」

珍しく困惑した表情を彼女は浮かべていた。

だがすぐに微笑む。

「……あすあすならいいかなー、えっとね、かんちゃんは1人で【IS】を作ってるの」

「……は？」

予想外の回答が来て、真の思考が固まる。

真は「IS」を「MS」と同様のモノだと認識している。

ISは現在スポーツとして主に広まっており、この学園でも代表候補生等を除いた殆どがそう考えている。

だが現在世界で認識されているのは「超兵器」としての一面なのだ。

また前世の初勤務地はザフトの軍事用プラントで兵器の生産工場でもあったアーモリー。

MSがどのように工場で生産されているかを知っているため、それを1人で行うという行為は、はつきり言って常識を疑うレベルにとんでもない行為なのだ。

「1人でってなんで!? てかいくらIS学園でもそういうのはちゃんとした設備と人員がいるところで……!」

「中止になっちゃったから、かんちゃんのISの製作」

「中止って……なんでそんなことに？」

「かんちゃんのISを作ってたのは【倉持技研】ってところでね、大体5割程度は完成し

てたの。だけどおりむーが見つかって、おりむーのデータを取るための専用機の製作が始まってそっちに人員をとられちゃって。残ったのは製作が中止されたかんちゃん専用機【打鉄式】の基本フレームとパーツのみなんだ」

「……だから彼女は一夏を避けるのか」

「うん、毎日残って一人で組み立ててるの。かんちゃんの技術は凄いや、それはよく分かってる。けど限度もあるよお」

「本音さんは手伝わないのか？」

「何度も手伝わせてって言ったんだけど、かんちゃん頑固だから。それに今かんちゃん絶対焦ってる」

「焦ってる？　なんで？」

「……あすあすがせつしーと互角に戦ったから」

「……え？」

焦っている理由が自分だと彼女は言った。

「……俺のせい？」

「ごめん、あすあすが悪いわけじゃないの。ただやつぱりそれでも羨ましいと思うんだ。

自分の I S を製作するはずだった企業のライバル企業の I S があとから出てきたのに、自分は何をしてるんだらうって……」

(……だからあんなに疲れてるのか……俺の……せい……)

まさか自分がセシリアと戦った結果、彼女が焦っているだなんて考えてもみなかった。

「それにかんちゃんには【楯無様】への思いもあるから」

「【楯無】？」

聞きなれない名前に思わず聞き返した。

「うん、更識楯無様。かんちゃんのお姉さんで更識家の当主、私たち布仏家は代々更識家に仕えてるの」

「そんな家がまだあるんだな」

「うん、自分でもそう思うよー」

廊下を曲がる。

夕焼けが廊下を照らしている。

「かんちゃんが小さな頃にね、楯無様と仲が悪くなっちゃって。それが続いちゃって、それに楯無様がISを1人で組み立てちゃったから余計に意固地になっちゃってて……」

「1人でって……マジかよ」

信じられないが、そんな人間がいるようだ。

まあ、知り合いに篠ノ之束という規格外もいるためいるのだろう、そういう人間が。

「私も人に聞いただけだからわからないけど……」

「……何か、何かできることはないのかよ」

理由を聞いてしまったからには放つてはおけない、それに彼女の思いは痛いほどわかってしまう。

IFの話だが、前世で「インパルス」のテストパイロットから降ろされたり、開発が中止されてしまったり、正式パイロットになれなかったら自分はどうなっていたらう。

家族を失った無力さを糧にテストパイロットに上りつめた。

それが唐突になくなってしまったら。

自分は彼女の様に行動できていたのだろうか？

「……私はかんちゃんのことを汲みたいの。かんちゃんが自分から頼ってくれるまでは……」

「それで彼女がぶっ倒れてもか!？」

朝、一瞬彼女はふらついてた。

絶対に無理をしている。

「……それでも私は、従者として簪様のことを汲みたいの」

「……ごめん、いきなり叫んだりして」

いつになく真面目な口調で会話をする本音に怒鳴ってしまったことに謝罪する。いつの間にか、生徒会室とプレートがつけられた部屋の前に2人は立っていた。

「ここが生徒会室だよー。ごめんね、色々と聞かせちゃって」

「……教えてくれて頼んだのは俺だよ、ありがとう本音さん」

自分に何ができるのか——頼ってこない相手にこちらから何かするのは迷惑かもしれない。

だがそれでも何かをしたいと思いつつ、真は生徒会室の扉をノックする。

「失礼します」

「どうぞ」

真は入室許可が聞こえたため、扉を開けて中に入っていた。

本音はその様子を見届け、外の様子を眺める。

夕焼けがきれいだ。



「飛鳥君ならきつと簪様を助けてくれる。だってすつごく目が優しいんだもん」

初めて見たとき本当に同年代の目なのかと思った。

布仏家も更識に連なる家。

それなりに色々な人間を見てきたが、そんな中にあんな目をしている人間はいなかった。一見キツク見えるその目は一夏や他の友人たちを「優しく見つめている」のだ。

まるで「決して零れ落とさないよう包み込むように」。

彼の瞳はそう

本当の悲しみを知り、愛に溢れている——と本音は感じているのだ。

「私じゃ逆に意固地になっちゃうかもだし……他人に頼る形になっちゃって情けないけど、お願い、飛鳥君」

そう静かに呟いた。

## PHASE 14 見えた真実

執務室の様な内装に長机。

ネームプレートが置かれており「生徒会長」と記載されていた。

腕を汲み、優雅に椅子に座っている「水色の髪的女生徒」

顔も少し簪に似ており、リボンの色からして年上である。また彼女の後ろにいる「眼鏡をかけたどことなく本音に似ている三つ編みの女性徒」は最上位である3年の赤をつけている。

「初めまして、飛鳥真です」

「初めまして、生徒会長の【更識楯無】よ、楯無でいいわよ、真君。なんならたつちやんでもいいわよ♪」

「【布仏虚】です、初めまして、どうぞこちらへ」

虚に席に座るように案内されて、真は用意されていた来客用の席に座る。

楯無が自身の椅子から立ち上がり、真の目の前の席に座る。

その手には「扇子」が握られている。

「……で俺に何の用なんですか？」

「率直に聞くと、あなたは簪ちゃんにとって何？」

「……はい？」

「……お嬢様」

思わず声をこぼした真。楯無の後ろで顔を手で覆って天井を見ている虚だったが、当の楯無はあくまで真面目に真を見つめていた。

「何って……趣味の合う友人でルームメイトですけど？」

「あんなに可愛い簪ちゃんがあったのルームメイトお!? 可愛いとか手を出したいとか思ったりしないわけえ!? なめてんの!？」

先程のまでの優雅な態度やおどけた態度から一変し、急に怒り出した楯無。その手に持っていた扇子に「ブツ殺」と表示されていた。

「いつ、いきなり何なんだよ一体!？」

いきなり目の前で怒り出されて、真も混乱している。

その様子を見かねて、ため息をつきつつ虚がフオローに入る。

「お嬢様、落ち着いてください」

「落ち着けるもんですか! 可愛い簪ちゃんと同じ部屋なのに何も興味を示さないなんて……はっ、まさか真君はホモなの?」

「何を言ってるんだアンタは—!？」

若干顔を青くしつつ、真から距離を取る動作の楯無。

彼女の手に持つ扇子には「非生産」と表示されていた。

ただでさえ1組のごく少数の生徒にそんな噂を流されつつある  
至つてノーマルな真にとってはたまったものではなく思わず叫んでしまった。

その後流石に見かねた虚からのツツコミに「ひぎい」なんて声を出した後、場は落ち着いた。

その後再度自己紹介から話が再開された。

更識楯無はI S学園の生徒会長でロシアの「国家代表」でもあり、この学園最強らしい。

日本人なのになんで別の国の代表なのか気になったが、自由国籍を取得しているとの事だ。

布仏虚は彼女の従者らしい。

妹と同じですと彼女から聞いたが、本当に姉妹なのかと思うくらいしつかりしている。

そして楯無から自分がここに呼び出された理由を聞いた真は顔を顰めた。

呼び出された理由。

それは簪の現状についての確認だったからだ。

何でも今日の夜から3日ほど学園から離れるらしい

そのためにルームメイトの真に彼女の現状を確認したかったようだ。

彼女が今何をしているのか、ちゃんと食事を取っているのか、ちゃんと睡眠を取っているのか、話は合うのか、真に何かされていないか e t c e t c ……。

今朝の簪の様子を伝えつつ度が過ぎてるシスコンだな、と真は楯無がどのような人なのか理解した。

だが会話をして彼女が悪い人間じゃないことはよく分かった。

しかし気になることもあった。

「……簪ちゃんは少し無理してるのね、大体わかったわ、ありがとう真君」  
「本当にわざわざすみません」

楯無の背後で虚が軽く頭を下げる。

「……ーついいですか、楯無さん」

「おっ、何かな？ お姉さんに聞きたいこと？」

「ええ、簪との関係についてです。本音さんに聞きました、仲が悪くなってるって」

その言葉を聞いた瞬間、微笑んでいた楯無の顔が一気に暗くなって沈んでいく。

「俺も妹がいるんで不思議に思ってたんですが……喧嘩してるのに何で謝らないんです？」

「そっ、それは……！」

姉妹や兄弟ならば喧嘩をすることもあるだろう。

だが長期に渡って続くというのはそうあるものではないはず。明らかに動揺している楯無。

それを見かねた虚が代わりに真に返答する。

「お嬢様はそのことだけについてはヘタレなんです。謝ろう謝ろうとしているのに結局はそれができずにもう何年もたつてしまっただんです。本当にどうしようもないヘタレなんです」

「……今日はなんだか毒舌ね、虚ちゃん」

楯無がジト目で虚を見るが彼女はそれを無視していた。

「……謝るのが一番だと思えますよ、俺は」

「ううっ、それができれば苦労はしないわよお……!」

シクシクと涙を流しつつ楯無は真に返答する。

「……後1点いいです?」

「なによお、真君も虚ちゃんと同じく私をいじめるのお?」

本音から聞いていたイメージと全然違うな、と思った真だったがそれはぐつと押さええて聞きたかったことを聞く。

「これも本音さんに聞いたんですが、楯無さんはISを1人で組み立てたって……本当ですか?」

真の質問を聞いた楯無は流していた涙を一瞬で引つ込めて返答する。

「そんなことないわよ」

「え?」

「私のIS【霧纏ミスデリアス・レネディの淑女】の組み立ては、整備班の人や開発スタッフの皆と一緒に組み立てたわよ。1人じゃ流石に無理」

その答えを聞いて、何故本音は1人で組み立てたといったのだろうかという疑問に思った真



だったがその答えは虚から返された。

「それは、更識の名を高めるための【嘘】ですね、本音もそう聞かされてます」

「【嘘】……なんですか？」

「はい、更識家と布仏家は色々と【特殊】ですから。そういった誇張した情報と言うのも必要になるんです」

特殊の部分に含みを持たせて虚は言い切る。

「……色々とあるんですね……あつ」

ふと腕時計が目に入る。

色々と話し込んでいたせいか結構な時間が経っていた。

真が腕時計で時刻を確認した後、席から立ち上がる。

「すみません。この後、俺が所属している企業の人があるんでそろそろアリーナの方に向かわないと……」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう真君」

「お手数をお掛けしました、飛鳥君」

「失礼します」

真は一礼し、生徒会室から出ていく。

「……私の疑いすぎかしらね」

さきほどまでのおどけた態度は消え去り、真面目な表情で自分の椅子に戻る。

彼をここに呼んだのは妹の事を知るのが9割だが、残り1割は彼が自分の視線に気づいたことが気になったからなのだ。

「繰り返し調査しましたが、家庭環境などに不審な点は見当たりませんでした」

「……そうね、人当たりも良さそうよね。苦勞人っぽいけど……勘が良かっただけかしらね」

彼の友人である織斑一夏の周りにはトラブル（主に女性関係の）が絶えないと報告書

でも上がっていた。

「彼が苦勞人という点は私も同意します」

その報告書を挙げた虚は苦笑しつつ返す。

「学生らしくゆつくりしたいわあ……かんざしちやあん」

ぐでーっと机に突っ伏し妹の写真（隠し撮り）を懐から出して頼ずりを開始する。

「だめですよ。今日の夜から更識の家に向かわないと予定に間に合わないんですから」  
「あひん」

ピシヤリと楯無に告げてからこれからの予定を確認する虚であった。

---

アリーナ 整備室

すでに日は落ちて星空と月が学園を照らしている中、真はアリーナの整備室にいた。各アリーナにはそれぞれISの整備を行う整備室が設けられている。

設備についてはISの生産・整備を主に行う企業と比べても遜色ない機材が集まっている。

整備室に來た時に簪を探してみたがここにはいないようだった。

メンテナンスベッドの上に鎮座したIS「インパルスガンダム」

大小様々なコードが接続されておりシルエットは装備していない。

伸びるコードは近くの作業台に置かれたPCに接続されており、様々なデータコードが画面を走っている。

「ぬふふ、流石私の可愛い『ガンダム』ちゃんとザフトのトップエース『シン・アスカ』だね。この戦闘データから得られるものは多いよー」

【黒のスーツの上によれた白衣を来た赤髪セミロングの女性】

【ジェーン・ヌル・ドウズ】が吸い出されていくデータの羅列を確認してにやけつつ呟く。

顔は充分に美人に含まれるのだが、目の下には盛大に隈を作っており、髪も手入れされていらないのかボサボサであり台無しになっている。

たまに興奮して叫びだすところもあって、真はジト目で背後から眺めていた。

「変わった人ですね」

「ははは……まあ、あれでこっちでもC. E. でも超優秀なだけどねー。はいこれ」

苦笑しつつ、横にいた利香は真に手に持っていたタブレットを渡す。

「これは？」

「現在製作途中の新しいシルエットの情報よ」

タブレットを操作すると、確かにシルエットの情報が記載されている。

「ガイア」、「アビス」、「カオス」、「ノワール」、「ライトニング」、「ガンバレル」、「バルゴラ」とシルエット情報が表示されているがどれも未定との事だ。

だが1件製作途中と表示されているものがあつた。

「【デステイニーシルエット】？」

「そう、聞いたことあるでしょ？」

「デステイニーの前身になったシルエットですよね。コートニーさんも使ってたヤツですね、ネオ・ザフトの時も使ってましたよ」

「そうそう。まあ、フォース、ソード、ブラストのデータの流用が一番しやすいシルエットでもあるからね」

MS【インパルス】はシンに与えられたもの以外にも少数が量産されていた。

その量産されたインパルスを使ってインパルスのコンセプト【装備換装によりあらゆる戦況に対応する万能機】とは真逆のコンセプト【単機単一の装備であらゆる戦況に対応する万能機】を目指したのが「デステイニーシルエット」だ。

【フォース】、【ソード】、【ブラスト】、3つのシルエットの特徴を統合したシルエット。

デステイニーシルエットを装備したインパルスを開発陣は「デステイニーインパルス」と呼称していた。

シンの知り合いである【コートニー】は3号機に乗ってメサイア攻防戦に参加していた。またネオ・ザフト決起時と同じ機体に搭乗し、ともに戦い抜いた。

ついでに【マール】は1号機に乗って活躍したが、とある野次馬にシルエットを強奪されたとか。

その最大の特徴はシルエットの大部分を占める【翼】

「デステイニー」に装備された、「ヴォワチュール・リユミエールユニット」だ。

(デステイニーに搭載されたモノはV Lの加速能力しか持たない近似種だが)

V L稼働時はフォースインパルスを軽々凌駕するほどの超高機動戦闘が可能になる。

その分エネルギー消費は劣悪であり、デュートリオンシステムを搭載したインパルスでも10分程度が限度だった。

また、全開で稼働させた場合は機体の可動部に相当な負荷をかけることも判明していた。

「俺は使ったことないですね、これ」

「MSの方は機体のフレームに負荷をかけていたみたいだけど、こっちはシミュレーションによると問題ないレベルになってるから安心してね」

「なるほど、いつできるんです?」

その真の質問に利香は手帳を出して、スケジュールを確認している。

「そうだね……IS学園のイベントでいえば【学年別トーナメント】辺りがロールアウト時期って考えておいてね」

「結構かかるんですね」

「そりやねー、インパルスの全データは私の頭に入ってるけど、VLは調整が難しいんだよおー。ただでさえエネルギーを食う『シルエット・システム』なのに全部乗せたコレ、エネルギー馬鹿食いなんだよおー」

真と利香の会話にデータの収集を終えたのかジエーンが参加してきた。

「そんなになんですか?」

「うん、ただ浮遊しているだけでシールドエネルギーがガリガリと減るレベル。それにこれ使うとソードとブラストがしばらく使えなくなるから」

「はー?」

とんでもない欠陥をさらつとジエーンは口にした。

「デステイニーシルエットの容量が相当大きいからね。だからシルエットを使う場合はソードとブラスト用に割り当ててるシステムや領域を一旦コピーして圧縮して削除してからようやく使えるんだ、欠陥だね」



「マジですか……」

「マジの大マジ、しかもこれ製作が開始されてから判明した欠陥なんだよねー、社長も頭抱えてたし。まあ、【切り札】と思ってうまく使ってやってね♪」

ジェーンの回答に大きいため息をついた真だった。

学生寮 真の部屋

「……でさ、あいつ、私との約束を中途半端に覚えてたの」

「……アイツう」

部屋のソファの上で涙目の鈴に真は絡まれていた。

利香達と別れたあと、食事を終え自室に戻ろうとした真だったがロビーに涙目の鈴がいたのだ。

理由を聞いてみたところ、どうやら一夏絡みであるらしくそのまま部屋までついてきたのだ。

なんでも鈴が言うには、今日の訓練が終わった一夏に、過去の別れの際にした約束に

ついて聞いてみたのだという。

その内容は完全にプロポーズのそれであった。

「料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べてもらいたい……プロポーズじゃねえかよ」

正確には日本人がよく知った「毎日みそ汁を飲んでももらいたい」のアレンジなのだが意味は通じる。

だがそれを一夏は「毎日酢豚を奢ってくれる」に勘違いして覚えていたとの事だ。

「私、つい怒っちゃって思いつきりビンタしちゃってさ……どうしよう、真」

「あいつ、どう勘違いすればそうなる……!」

完全にプロポーズの文句であったのに、奢りの約束になったことは理解不能であったが、中学でも似たようなことがあったと思いだした。

一夏が告白された時の返事だ。

『ああ、付き合うよ、買い物だろ?』

その返事はすべてが壊滅っぷりだった。  
弾が血涙を流していたのを覚えている。

「鈴はどうするつもりなんだ？」

「……あいつが全部思い出すまでは無視する。クラス対抗戦もボッコボコにしてやる」

小学生かよつとツッコむがこうなると鈴も頑固であることは旧知の仲である真は知っていた。

「……それとなく伝えとく。期待すんなよ」

「ありがと真！ 聞いてもらえたら少しすつきりしたわ」

「おかげでこっちはストレスでハゲそう」

真がハゲたら面白そうね、と笑いながら鈴が部屋を出ていく。  
笑えない冗談だと思いつつ、今や遠い場所にいる赤髪の友人の顔を思い浮かべた。

「弾、今ほどお前が隣にいてほしいと思ったことがないよ……」

窓から夜空を見上げると、サムズアップしている悪友の顔が浮かんだ。

---

時刻は消灯時間まで残り10分

「……」

真はジャージに着替え、自分の机で本日渡されたシルエットの資料を読んでいた。

資料に記載されている数値だけ見ると性能は高いのだが、やはりデステイニーシルエットは燃費が劣悪のようだ。使い方を誤れば自らの首を絞める諸刃の剣——慎重に使いどころを見極める必要がある。

「最悪フォースには換装できるわけで、悪手だけどいざとなったら換装してしのぐのも……」

タブレットを操作しつつ新シルエットを含めた戦術を考えていた時だった。

「……ただいま」

ルームメイトである簪が部屋に戻ってきた。

「お疲れ」

「……起きてたんだ」

「ああ」

彼女が持っていたバッグを自分の机に置く。

資料に目を通しつつ返事をするが、今日聞いた色々な話が頭の中に浮かんでくる。

余計なお世話かもしれないが、やっぱり放ってはおけない。

そう思って声をかけようとした時だった

ドサツと何かが倒れる音が聞こえた。

「……え？」

振り返ると——簪が倒れていた。

## PHASE 15 歩くような速さで

——意識が浮かんでくる。

ぼんやりとした頭で目を開けると見慣れた天井が見えた。

なるほど、自分のベッドで寝ているのかと理解した。

そこでふと自分の腰あたりに重さを感じた。

まだぼんやりする頭で何があるか確認してみるとそこには見知った顔がいた。

「……本音？」

幼い頃からの親友であり従者でもある、布仏本音がベッドの傍に置かれた椅子に座って、私の手を握っていたのだ。

「っ！ かんちゃん！」

がばっと起き上がった彼女が私に抱き着いてきた。  
いきなりの事で頭が混乱している。

「ちよ、本音、どうしたの？」

「どうしたじゃないよお、あすあすからかんちゃん倒れたって聞いて……っ！」

え？ 倒れた？ 私が？

——そうだ、思い出した。

部屋に戻ってきた後、急に意識が遠くなつたんだ。

思い通りの結果が出ずに、無理をして……。

「……ごめん、本音」

「……うう、よかつたあ」

私を抱きしめつつ、本音は安堵からか涙声になっていた。

ベッドの近くの時計が目に入った。

時刻を見ると朝の6時過ぎだった。



「……本音、もしかしてずっといてくれたの？」

「うん、織斑先生が許してくれたの、保健室に動かすわけにもいかないから2人で見ていろ、何かあれば知らせろって」

「……そうなんだ」

ふと、ルームメイトの姿が見えない事に気付いた。

「……本音、彼は？」

「おっ、目が覚めたんだな、よかった」

本音に聞くと同時に部屋の扉が開いて彼が現れた。

私が目覚めたことに安堵している表情だ、迷惑かけたよね…。

「2日くらいはゆっくりしてろって織斑先生が言ってたよ、後で保健の先生もくるって」

「……うん」

真が部屋に備え付けられている冷蔵庫からお茶を渡してくれた。  
やっぱり倒れた原因は無理をしすぎていたせいらしい。

——でもこんなことで止まってたらいつまでたっても……

「……また一人で無理をするつもりなのかよ？」

「……っ!？」

何で真がそのことを——

「全部本音さんに聞いた、一人でIS作ってることも、無理してることも」

思わず本音を見てしまった。

彼女は居た堪れないのか表情を暗くし、うつむいていた。

「……なんで誰にも頼らないんだよ」

「……真には関係ない」

「……関係あるさ」

「っ！ 関係ないっ!! あなたに私の何が分かるのっ!？」

思わず怒鳴ってしまった

—— だけど彼に私の気持ちなんてわかるわけない!

「無力さに苛まれる辛さを分かるんだよ俺にはっ! それに目の前で……一人で泣いてる様な目をしてる奴をほっとけるかよっ!」

私の叫びに、彼が答えるように叫ぶ。

—— 泣いている? 私が?

彼は一瞬表情を歪めるが続ける。

「似てるんだよっ! 無力さに押しつぶされそうになって一人でがむしやらに進んでた  
【俺】と!」

私と同じ色の瞳。

燃えるような彼の赤い瞳と目が合う。

彼の瞳に何故か涙が浮かんでいた。

泣いてる……の？

真がはつとなつて涙をぬぐつてこちらを見ている。

「……何で……どうしてそこまで……私を助けようとしてくれるの？」

……まだ会つて間もないのに、なんでそこまで？

「……俺は【花】を散らせないために戦うつて決めた、助けられるのなら絶対に手を差し伸べるつて決めたんだ。それがヒーローごっこならそれでもいい……俺自身が決めたんだ、だから助けたいんだ」

彼がそう言つて頭を深く下げた。

「だから頼む、簪、何でもいい、できることがあるのなら俺に手伝わせてくれ！」

「私も！」

今まで黙っていた本音も立ち上がって頭を下げる。

「……本音まで」

「かんちゃん、お願い、頼ってよ…そんなに私頼りない？」

「……そんなことない」

「だったら！ かんちゃんが1人で苦しんでるの見てるだけなんてつらいよ、だからお願い！」

2人そろって頭を下げてくれている

——私は——

「……少し、考えさせて……」

その言葉に2人は顔をあげてくれた。

「うん！」

「ああ」

本音と真は笑顔で答えてくれた。

その後、彼はお姉ちゃんから聞いていたことについても話してくれた。

ISを1人で作ったのは嘘だったということについては驚いた。

そしてお姉ちゃんが私の事を何よりも大事に考えてくれていることも。

その後まだ疲れているのかすぐに睡魔が襲ってきた。

先ほどまでの彼と本音の言葉を思い出しつつ、意識を手放した。

---

簪の体調は2日ほどで完全に回復した。

そして回復した日の朝食の席――

「本音、真……ISの件だけど2人に手伝ってほしい」

その言葉に同席していた真と本音は顔を見合わせから頷く。

「うん、まかせて、かんちゃん！」

「俺もできることがあるなら何でも手伝うよ」

「2人ともありがとう、まずは現状の説明なんだけど…」

朝食を食べつつ2人は彼女から現状の説明を受けた。

現在、簪のISである「打鉄式」本体の完成度は約5割といったところであり、武装については全くの手つかずの状態であるとの事。

まずは本体の方に取り掛かりたいこと、武装については本体の完成度が8割を超えたあたりから着手する予定であるとの事だ。

なお武装には「マルチロックオン・システム」というシステムを搭載予定であり多数の目標をロックできるシステムとの事だ。

これを聞いたときに真が一瞬顔をしかめたことに簪は気づかなかったが。

「真………お願いがあるんだけどいいかな」

「お願い？」

「うん、私を日出の人に紹介してほしいの」

その言葉に真は驚くが、簪の言いたいことを理解する。

彼女は自分のＩＳの開発企業を変えたいのだ。

倉持技研から日出工業に。

日出は倉持と双壁をなす企業。

真の専用機である独自のＩＳ〔インパルスガンダム〕を開発しているため人材も技術も豊富という判断だ。

「分かった、俺から優菜さんに聞いてみる。移籍に関するゴタゴタは優菜さんなら何とかしてくれると思う。そもそもが倉持が悪いみたいだから……それに簪は代表候補生だし優菜さんもメリットがあるって考えてくれるだろうから大丈夫だと思う」

「ありがとう」

「いいさ、後は楯無さんとの事だな」

真の言葉にピクツと簪の身体が震えた。



「……少しずつなら変えていけるかも、多分」

「……大丈夫、ゆっくりでも」

歩くような速さでもいい

——きつと変えていけるから。

「……本当にありがとう、真」

微笑む彼に聞こえない程度の声で確かにそう告げた

——何故か胸が温かくなった。

その後、真が優菜へ連絡して簪の件を伝えた。

これに対し優菜も、優秀な人材の獲得と倉持の技術を解析できる為、検討を実施。

後日倉持に働きかけるよう承諾した。

優菜からの工作と取引で倉持所属の「打鉄式式」プロジェクトは買い取られることとなった。

その費用はそれなりの額になったが、倉持の技術を解析して自社のモノに出来るメ

リットは限りなく大きいため予算もかなりの額を割り当てられていたため問題はなかった。

倉持としても新規プロジェクトを優先するあまり、現存プロジェクトを断りもなしに凍結してしまった点をもらされるのを嫌ったためか、倉持はこの件については特に異議を申しこんでは来なかった。

1週間後、彼女と彼女のISの所属は日出工業に変更となった。

ちなみに日出の技術者達はIS製作を中止した倉持に対し、不満を爆発させていたとか。

真と本音に加えて正式な日出の技術者達のチームが組織され、中止となっていた「打鉄式式」の製作プロジェクトは再開されることとなった。

## PHASE 16 動き出す悪意

5月 クラス対抗戦当日

第2アリーナ 観客席

第2アリーナは多くの生徒で溢れている。

観客席に座っているのは1年生だけではなく、2年、3年生も多い。

IS学園は多くのイベントで有名であるが、その中でも最初に行われるのがクラス代表戦だ。

加えて今年度は過去例がなかった「男性搭乗者の1人」が1組のクラス代表であり、また2組の代表は「代表候補生」で専用機持ち。

期待が高まってしまふのは仕方がないであろう。

対抗戦の組み合わせは、1組対2組、3組対4組。

つまり初戦から「一夏VS鈴」である。

「早めに来て正解だったな」

「そうだね。大丈夫、本音？」

「だいじょうぶだよーかんちゃん……ぐう」

観客席に座った真の右隣に簪が、彼女の右隣に眠そうにしている本音が並んで座っていた。

「式式、間に合つてれば参加できたかもしれないのにな」

「流石にそれは無理……かな。でもこんなに早く完成度が7割超えるとは思わなかった」

専用機の開発が再開された簪であったが、さすがにクラス代表戦には間に合わなかった。

クラス代表戦については、訓練機で出ようととも考えたが別の生徒がすでに出場することとなっているし、一時は完全に出場しないつもりでいたのにそれはあまりにも無責任な行動であったため、今回は出場しないことにしたのだ。

「10分くらいなら動かせるんだよな?」

「うん、正確には9分48秒……武装はインパルスのシールドを武装として装備させて

もらってるから防御ならできるとよ」

【打鉄式式】の組み立ては予想以上のペースで進んでいた。

2週間程度で起動すらままならなかった本体は、制限時間があるもののPICによる飛行や通常動作ならば特に支障なく行える状態になっていた。

武装についてはまだ未着手ではあるものの、インパルスの武装の一部、正確には実体シールドを非固定浮遊部位に2つ装備している形となっている。

ちなみにクリスタルの指輪。

【打鉄式式】の待機形態は左手中指につけている。

「日出の人にはいろいろと教えてもらってるよー、やっぱプロは凄いねー」

「……俺は本音さんがたったの数日でインパルスを整備してくれるようになったことの方が凄いと思うけどね」

いつもばやばやしているのが真の中の彼女のイメージであり、整備の腕が高いとは知らなかったのだ。

簪の事情を教えてくれた時は非常にまじめだったが。

実際本音の整備の腕は日出の社員と遜色ない程高い。  
すでにインパルスの整備ならば問題なく可能なレベルである。

「ほめてもなにもでないよー」

えへへーと喜んでいる本音を微笑みながら見ていると、自分の前に座っていた清香とその隣に座っている黒髪のショートカットをヘアピンで両側から止めている少女。  
【鷹月静寐】がこちらを向いていてニヤニヤしていることに気付いた。

「相川に鷹月、どうしたんだよ？」

「いや、飛鳥君もすみにおけないなーって」

「うんうん、更識さんと布仏さんと。まさに両手に花だね」

「……あー、うん、そうだねー」

「フフ、さて真さんは一夏さんの試合、どう見ます？」

真のジト目かつ適当な返しに苦笑しつつ、彼の左隣に座っていたセシリアが尋ねてきた。  
た。

「……鈴はやる気十分だし、ISもかなり厄介だと思う、正直厳しいと思うな」

真とセシリアが鈴のISについて調査した結果、彼女のISには中々厄介な【武装】が装備されていることが判明したのだ。

「ですが一夏さんの近接戦闘能力は高いですし、この数週間でIS戦の基礎はおさえています。それに【アレ】も習得していますから番狂わせもありうるのでは？」

セシリアの意見に黙ってうなづく

彼女の考えと自分の考えは同一だったのだ。

「ポイントはいかにして【零落白夜】を当てるか……か」

「ええ、そこが勝負の分かれ目……ですよね、箒さん？」

「なっ、なぜそこで私に振るんだ、セシリア!？」

セシリアが自身の左隣に座っていた箒へ話題をパスする。

先ほどからどこかムスツとした表情でアリーナを眺めていたのだ。

「綺麗なお顔が台無しですよ？一夏さんの事を考えているようですが、淑女ならば常に優雅たれ……それは大和撫子も同じでは？」

少し意地悪くセシリアが笑って、箒があつという間に顔を真っ赤にしていく。

この数週間、一夏と鈴が【約束】と言うキーワードで言い争ってるのを見て嫉妬を感じていたのだ。

「それに一夏さんは貴女に応援されれば百人力だと思いませんか？」

「……当然だ！約束なんてものは知らないが、一夏を平手打ちするような奴には負けないぞー！」

IS学園で一夏に再会した筈だが、暴力はほとんど振るっていなかったのだ。

それは幼い頃一夏が、「お淑やかな女の方が好み」と言っていた事を覚えているからだ。

流石に怒鳴ったりはしていたが。



「ははは……まあ、頑張れよ、一夏」

現在試合に向けて準備をしているだろう親友に向けエールを送る。

『白式、織斑一夏いきますっ！』

白式に包まれた一夏はカタパルトから射出され、ステージへと出撃していく。

『来たわね、一夏』

すでにアリーナにはIS【甲龍（シエンロン）】に包まれた鈴が浮遊していた。

その両手には2本の青竜刀【双天牙月】が握られている。

ステージ中央へと向かうと共に、【雪片式型】を展開し右手に持つ。

『ああ、来たぜ鈴。俺が勝ったら約束の事、ちゃんと教えてくれよ』

『嫌よ、説明なんてしたくないわよ馬鹿!』

『だから言ってるんだろうが! 教えてくれりゃあ謝るって!』

『うるっさいわね! 馬鹿一夏!』

『あ、また馬鹿っていったな!? 馬鹿っていったほうが馬鹿なんだよ!』

互いにヒートアップしていく。

完全に痴話喧嘩であり、試合の前の会話ではないだろう。

『この馬鹿一夏、朴念仁!』

『誰が朴念仁だよ、貧乳!』

『貧乳といったわね!? 貧乳と言ったあああ!』

鈴の激怒の咆哮と共に試合開始のコールがアリーナに響いた。

IS【甲龍】の非固定浮遊部位の装甲部分が開き、内部に光が奔った。

同時に一夏が何かに殴られたかの様に吹っ飛ばされた。

『っ!? これが【衝撃砲】って奴かよ!』

体勢を【AMBAC】により立て直し、スラスターによって距離を取る。

IS【甲龍】の装備。

それが衝撃砲である。

この装備は空間に圧力による砲身を作成して、衝撃を砲弾として打ち出す兵器である。

真やセシリアが厄介と称したのは砲弾のみならず、【砲身】を圧力によって作成しているため【不可視】と言う点だ。

つまりは射撃位置の予測が不可能なのだ。

『あら、真やセシリアから聞いてたの？なら話は早いわ。回避不能の衝撃砲で私を貧乳って言ったこと後悔させてあげる！』

『っ！ そう簡単にいくかよお！』

スラスターを噴かして、鈴に接近しようとする一夏。

それを予測し、衝撃砲での迎撃を行う鈴。

観客が盛り上がるであろう試合に期待を膨らませていた時だった。

突如上空から【光】が降り注ぎ、強烈な衝撃がアリーナに走った。

---

強烈な衝撃がアリーナに走った。

空から降り注いだ強烈な【光】と強烈な衝撃により、アリーナはパニックとなっていた。

「っ！ 今のビームは何だよ!? 大丈夫か!?!」

とつさに簪と本音を庇っていた真が2人から離れつつ毒づいた。  
強力なビームによる攻撃。

それがアリーナを覆うシールドにぶち当たったのだろう。

「かんちゃん、大丈夫!?!」

「うっ、うん……大丈夫」

簪を押し倒してその身を守っていた本音が彼女から離れる。

一体何が、と状況を確認するとそこには「この世界には絶対に存在しないはずのモノ」が【2つ】存在していた。

1つは上空に浮遊している。

トリコロールカラーで「インパルス」のシルエットと似たようなバックパックを背部に装備した機体。

もう1つはステージに侵入している全身がマゼンタレッドの機体、両手両足にクロウが装備されトサカ状の頭部センサーを持っている。

「あれは……!?!」

どちらにも見覚えがあった、それはかつてザフトのアカデミーの教科書でみた【MS】連合が戦局の打開をかけて5機製造し、ザフトが奪取した4機のうちの1つと、唯一連合に残った1つ。

（あれはG A T—X 1 0 5 【ストライク】!?!それにG A T—X 3 0 3 【イージス】!?!）

最初期に連合で開発されたGタイプ、いやガンダムタイプのMS。  
だがISサイズまでダウンサイジングされている。

(あれはMSじゃなくてISなのか!?まさか【キラ・ヤマト】や【アスラン】!?)

優奈や利香やジェーン、そして自分自身。

C・Eにいた者たちがこの世界にも存在している

つまり【奴ら】も存在している可能性を考えなかったわけではない。  
だが信じたくなかったというのが真の本音であった。

突然の乱入者に一夏と鈴は驚愕の表情を浮かべていた。

イージスが一夏に向かって行く。

(奴らの狙いは一夏なのか……っ!?)

そこまで考えた瞬間、悪寒が奔った。

ストライクが「ビームライフル」を展開しこちらを狙っているのに真は気が付いたのだ。

---

光が進ると同時に、ものすごい衝撃がアリーナに走った。  
その瞬間、目の前が真っ暗になったことに私はパニックを起こしかけていた。

「っ！ 今のビームは何だよ!? 大丈夫か!？」

「かんちゃん、大丈夫!？」

横で庇ってくれていた本音と、本音ごと庇ってくれていたらしい真に声をかけられた。

「うっ、うん……大丈夫」

何とかパニックを起こさずにそれだけを返せた

空とステージを確認すると「全身装甲のIS」と思わしき機体が2機浮遊していた。真もそれに気づいたのか、2機を確認して驚いている。

マゼンタ色の方がステージにいる織斑君と鈴さんに向かっていく。

そして2機のうちの1機。

残ったトリコロールカラーのISがこちらに射撃武装を向けているのに気付いた。

「……えっ?」

我ながら情けない声を上げてしまったと思う

本当にそれだけしか出てこなかった、なぜならそのISは躊躇なくライフルの引き金を引いたのだから。

「っ?」

思わず目を瞑ってしまう。

だが痛みはやってこなかった、何故ならばシールドを構えてこちらを守ってくれている「インパルスガンダム」



真がいたのだ。

『無事か、簪、皆っ!!』

あのISから放たれたビームは、少し離れたところを浮遊しているインパルスのシールドで拡散され無効化されていた。

真の言葉によりやく冷静な思考が戻ってくるのを感じた。

「だっ、大丈夫……だよ。ありがとう」

何故だろう、非常事態だと言うのに顔が凄く熱い

熱でもあるのだろうか、顔も真っ赤なのかな……。

『すぐに式式を展開してくれ、シールドで皆を守ってくれ!』

真はそういつて「フォースシルエット」に換装し、インパルスを飛翔させていく。

同時に横にいるオルコットさんがISを展開していた。

『真さん、援護いたしますわ!』

『セシリアは皆や一夏を! 上空の奴の狙いはおそらく俺だっ!』

怒鳴るように真が叫び、ビームライフルを展開してトリコロールカラーを射撃している。

急機動でトリコロールカラーは射撃を避けて上昇していく。

一旦射撃を中止して、インパルスはトリコロールカラーを追いかけるように上昇していく。

おそらく彼は自身を狙っている敵を追ってアリーナから離れるつもりだろう。

『ですがっ!』

『頼むっ!』

反論しようとしたがチャンネルを切られたようでオルコットさんは顔を顰めている。

『……仕方ありませんわね、更識簪さん。でよろしかったです?』

ISを展開した彼女がこちらに視線を合わせた。

彼女の視線に先ほどから感じていた熱は静まって行くのを感じる。

「うっ、うん」

『ISを展開してくださいな。私達が皆さんをお守りいたしますわよ?』

『……分かった。避難が終わるまで守って見せる』

すでに生徒達の避難は始まっている。

稼働時間に限界はあるけど今の式式なら皆を守ることができるはず。

式式の装甲に包まれていく中で私はそう考えていた。

---

日本近海

海面しか存在しないはずの領域が歪み、歪みが収まると黒い船が現れた。

船の外見はアメリカ海軍が開発した「ズムウォルト級ミサイル駆逐艦」とほぼ同様だが、船体には【手に持ったハンマーで音符を破壊する兎】のエンブレムが刻まれていた。

そして甲板に設置されたハッチの中から2人の人間が現れた。

1人は女性、もう1人は長髪から女性に見えるがしつかりと鍛えられたその身体と顔つきから男性であることが分かる。

「カナくん、大丈夫？ 行けるかあい？ お姉さんがじつくりと大人の検査してあげようかあ？」

「問題ない」

女性はウサギ耳を模したカチューシャを付けており、胸元が開いたエプロンドレスを身に着けている。

女性の胸にある果実がその存在を雄弁に語るかのよう、ぶるんと自己主張している。

男性のほうはまるで拘束服をボディーマーのように改造した服装をしている。

アメジスト色の瞳に、海面の光を反射させるように綺麗な黒の長髪、加えて顔は美形だ。

女性のほうがおどけた様な声で長髪の青年に声をかけ、長髪の青年は少々ぶつきらばうに返し、右腕にはめた【翡翠色の腕輪】を軽く触る。

「ラキちゃんやクーちゃんと一緒に整備したから、君の要望の通りになつてはるはずだよん！」

『感謝する……ラキを頼むぞ、【篠ノ之束】』

青年の体を【IS】の装甲が包んでいく。

口より上部を完全に覆うようなツインアイタイプセンサーが装備され、巨大なランチャーのような砲塔を2門、非固定浮遊部位として浮遊させていた。

両手のマニピュレータ部——人間でいう手の甲の部分には三角錐の突起物が装備されている。

背部のランドセル部分には、大型のブースターやスラスターを装備した

高機動用パッケージの様なものを装備している。

「【アイツ等】を止める事が私の【贖罪】……！ IS学園を皆をお願い、カナくん！」

ウサギ耳の女性、IS開発者であり世界で最も有名な天災【篠ノ之束】が青年に向けて軽く頭を下げる。

その行動と言葉は彼女を昔から知っている【織斑千冬】が見ればさぞ驚いたであろう。

『……分っている、【ドレッドノートH】、ガンダム出るぞー！』

束が離れたことを確認した青年はブラスターを点火させ、空へと駆けていく。  
青年が発進したのは、【謎の2機】がアリーナを襲撃する10分程度前の事だった。

## PHASE 17 心なき人形

飛翔していくストライクを追いながら、真にチャンネルが繋がる。

繋がる先は、アリーナで避難誘導を行っているはずの教師陣。

現在の高度はすでに千メートルに迫ろうとしていた。

『こちら第2アリーナ管制室の織斑だ、飛鳥、何をしている!? 敵を追っているのか!』

『その通りです千冬さん、トリコロールの奴の狙いはどういう訳か俺みたいなんです、だからアリーナから離れて奴を追いつつリスクを分散させます!』

『勝手なことをっ!』

千冬の怒声がチャンネルを通じて真に届く。

『それは分かっています、でもだからって奴を逃がすわけにはいかないでしょう!? それに奴の狙いが俺なら皆から離れれば安全のはずだ! 捕まえても見せますよ! だからお願いします、千冬さん!』

ストライクが突如反転し、真に向かってビームを放ってきた。

それをスラストターを噴かせ、横方向に回避しつつ千冬に頼む。

正直なところ、撃墜ならともかく捕縛する自信はないがこうして彼女の通信に返答していたらいつか落とされる。

『ちっ、真、無事帰還しろ、それが条件だ！』

『了解っ！』

チャンネルを切りつつ、右手に持つライフルでストライクを射撃する。

自身と同じ様にスラストターを噴かせ回避される。

ストライクは回避しつつ、「ビームサーベル」を展開——背部スラストターが火を噴き真に向かって突っ込んでくる。

右上段から振り下ろされる一撃を同じように「ビームサーベル」を展開して防ぐ。

互いのサーベル同士が干渉し鏝迫り合いの形になる。



（今のサーベルの出し方から見るとコイツは【MS】じゃなく【IS】……い）

ストライクがビームサーベルを展開した方法はインパルスと同じ量子展開——ISの武器展開と全く同じ方法だからだ。

『なら、これはどうだ！』

左脚部のバーニアを点火、そこから得られる推力を威力に変換してストライクに蹴りを叩き込む。

その衝撃でストライクは吹き飛ばされる。

瞬間、真は「フォールディングレイザー 対装甲ナイフ」を1本展開してストライクに投げつける。

ISのパワーアシスト込みの超振動ナイフの投擲だ、並みの装甲ならば傷が付くか破壊される。

だがその投擲されたナイフを、体勢を立て直したストライクは右腕部の【装甲】だけで弾き飛ばした。

それは真にある事実を知らせることとなる。

(やっぱり【PS装甲】！)

PS装甲——正式名称【フェイズシフト装甲】。

一定の電圧の電流を流すことで相転移する特殊な金属でできた装甲である。

相転移した装甲は一定のエネルギーを消費することにより、物理的な衝撃を無効化する効果を持つ。

『インパルスもガイアもVPSじゃないってのにつ……!』

PS装甲に実弾、実体兵器は有効ではない。

正確に言えば衝撃は「完全には防げない」、「エネルギーの消費が高まる」と言うリスクもあるがそれを補うメリットだ。またISで使用できる武器にはエネルギー兵器が少ない点もメリットだろう。

当然、日出もインパルスガンダムやガイアガンダムに【VPS装甲】

PS装甲の発展型装甲を搭載しようとしたが、シールドエネルギーを多く消耗するデメリットから搭載は見送られた。

そもそもPS装甲には特殊な装甲材が必要となる、装甲材の鍛造コストや技術の不足もあり搭載ができなかったのが事実であったが。

ストライクが再び距離を取ってライフルを展開。

旋回しつつ、真に向かって放ってくる。

展開したシールドで防御し、拡散していくビームは空に溶けて行く。

それを確認したストライクは再び近接戦闘に移るべく、サーベルを抜く。

対した真も同じくサーベルを展開し、高速で切り結ぶ。

サーベルが有効でないことを確認したストライクは再び真から距離を取った。

その手にはライフルを展開してる。

勝負はほぼ拮抗状態。

だがその中で真はある違和感を感じていた。

それはストライクの挙動にあった。

『……なんだ、この違和感は何？』

先ほどからライフルでの射撃、有効でない場合はサーベルでの近接戦闘をストライクは繰り返している。

ストライクにはインパルスの「シルエット・システム」の前身でもある「ストライカー・システム」があるはずだが

ストライカーは先ほどから高機動用のモノを使用しており、変えてくる気配もない。

ストライカーについてはインパルスのようには変更できないのかもしれないが。

ストライクは全身が装甲で覆われており、搭乗者を判断できなかった。

いや、真は思い込んでいた。

この搭乗者は「キラ・ヤマト」だと――

だが戦士としての勘が告げる、こいつは違うと。

『こいつ、無人機か!?!』

キラ・ヤマトならばこんな機械的なパターンで攻撃を仕掛けては来ない。

あまりにも機械的なパターン行動。

それが無人機と判断した理由だ。

（ISで無人機なんて可能なのか……っ？いや、今はそんなことよりっ！）

インパルスの実体シールドをストライクへ投げつける。

それはあまりにも単純なシールドの投擲——当然ストライクは回避に移る。

『逃がすものかつ！』

自身が投げた実体シールドにライフルで射撃を行う。

投げたシールドには対ビームコーティングが施されており、ビームを拡散させることで無効化できる。

そう、「拡散」させるのだ。

放たれたビームは実体シールドによって拡散され、拡散されたビームがストライクの右腕を貫く。

貫かれた装甲が右腕ごと爆散し、大きく体勢を崩すストライク。

無人機と判断したとおり、吹き飛んだ右腕部分には生身が存在していなかった。

この隙を見逃す真ではなかった。

『インストレーションウエポンコール、「エクスカリバー」っ!!』

フォースインパルスの装備ではなくソードインパルスの装備である「エクスカリバー」が右手に展開された。

【ウエポンコール】

フォースインパルスに搭載された特殊コードであり、音声認識で別シルエットの装備を10秒程度フォースインパルス状態で展開することができるシステムである。

一見現在開発中のデステイニーシルエットや他のシルエットのお株を奪うような物だが、当然デメリットも存在している。

このシステムはあくまで高機動仕様に調整されたフォースシルエットで近接格闘武装や遠距離射撃武装を扱うため、きわめて扱いが難しい点。

音声認識のため、相手にどの装備を使うか判断されてしまう点。  
展開できる時間も極めて短く10秒程度である点。

加えて、別シルエット装備を展開中は、機体の稼動部に負荷をかけシールドエネルギーを大きく減少させ続け、システム停止後にはインパルスの全面的なオーバーホールが必要になる点。

——だがそれを使いこなしてこそその「スーパージェス」だ。

『うおおおおおおおおっ!!』

フォーサインパルスのスラストから生まれる爆発的な推力によって、ストライクへ突貫する。

エクスカリバーの刀身を奔るビームをコンソールで調整。

少量のエネルギーを犠牲に切っ先までビームを迸らせる。すでにインパルスのエネルギーは6割程度まで減っていた。

しかしエクスカリバーが届く前に、ストライクが体勢を立て直してライフルで射撃を敢行してきた。

だが放たれたビームは真には届かなかった。

【瞬時加速】により横方向に回避していたのだ。

そして合わせて別のスラストによって連続で行う【瞬時加速】

——通称【二重加速】ダブルイクニツヨンによってストライクに迫る。

完全に不意を突かれた形となったストライクには回避ができなかった。

『これで…終わりだああっ!!』

鈍い金属音と共にストライクの腹部

ちようどMSならばコックピット部分をエクスカリバーは貫通していた。

貫通すると同時に、エクスカリバーを振り下ろして両断する。

両断されたストライクは先ほどまで装甲を彩っていたトリコロールカラーから【灰色】に変色する。

PS装甲が落ちた証拠である。

ISならば必ず搭載されているはずの【絶対防御】が発動しなかった点は気がかりだが、

回収してから調べればいい。

『はあ、はあ……やったぞ……！』

マニニューバによって乱れた呼吸を正しつつ、完全に沈黙して落下していくストライクを回収するため真はスラスターを噴かせた。



## PHASE 18 勇敢なる者

『よし、何とか回収終わったな…』

落下していったストライクの残骸の大部分を回収し、インパルスはゆっくりと高度を下げていく。

すでにインパルスは限界に近い。

エネルギーはまだ残っているが〔ウエポンコールシステム〕の反動で駆動部が悲鳴を上げている状況だ。

だがそれでもこのまま降下していくことは可能——そのときであった。

＜＜頭頂部より超高速で接近する熱源を確認、未確認のISと判断、距離200＞＞

ハイパーセンサーで確認すると確かに熱源反応がある、しかしそのスピードが速すぎる。

自身の頭頂部から接近していた物体はあつという間に自分の横をすり抜け、凄まじい

速さで降下していく。

『なっ、何だ!?!』

【IS】だ——しかも大型のブースターユニットを装備していた。

『くそっ、まずい!』

そのISを【敵】だと判断し、限界に近いインパルスのスラスターを噴かせ、後を追う。

だが速度が出ない——インパルスのスラスター部分からも火花が上がり始めている。これ以上速度を出せば下手をすればPICの操作すら不能になるかも知れない。

『くそおっ! 間に合え、間に合ええっ!』

真の叫びが空に木霊した。

---

『こいつ、本当に人間が乗ってんのかよっ!?』

ステージ内で雪片式型を構えた一夏が吼える

相対するのはマゼンタレッドの機体——イージス。

先ほどまで【人型】だったそれは今やその【姿】を大きく変えていた。

流線型——とでもいうのだろうか、両手両脚全てを一方に向けた形態【巡航形態】に変形し、アリーナ内を旋回している。

その速度も異常の一言である、アリーナの端から端までを数秒で駆け抜ける程の爆発的な機動力だ。

『速過ぎて、衝撃砲じゃ無理！ セシリア、狙撃できないの!?!』

『くっ、先ほどから狙ってますわ!』

【スターライトMK-III】から放たれたレーザーをイージスは人型に変形を行いつつABCにより回避する。

逆に右手に展開したビームライフルでセシリアを狙ってきている。

『くっ！』

スラストターを噴かせて、ビームを回避するセシリア。

生徒達の避難がある程度完了したところで残りを簪に任せたセシリアは、アリーナのシールドが【解除】されている事を確認して戦闘に参加したのだが、まるで【見計らったかの様に】シールドが張りなおされている

——つまり【3人】は孤立しているのだ。

ビームライフルによって動きを緩慢にしたイージスに向かって、鈴は衝撃砲を放つため視線を向ける。

イージスが回避行動に移ろうとするが、すでに砲身の作成も完了していた。

『喰らいなさいっ！最大出力よっ！』

鈴の叫びと共に衝撃砲が発射されイージスが吹き飛ばされる——  
大きく体勢を崩しているが特に傷が付いているようには見えない。

『嘘っ!? 最大出力よっ!?』

『うおおおおおおおおおおっ!!!』

【瞬時加速】——セシリアや真から教わった技術——で一夏は体勢を崩した隙を狙って斬りかかる。

上段から雪片を振り下ろして、捉えたと、一夏は確信していた——がすぐにその考えは粉碎される。

イージスの脚部に装備されていた白色の「ブレード」が突如高熱を発していることをハイパーセンサーで捉えたのだ。

そして、振り下ろされる雪片をブレードキックで弾き飛ばす。

咄嗟にスラストを噴かせ一夏は距離を取った。

イージスも合わせて距離を取り再び巡航形態に変形し、旋回を開始する。

白式、甲龍、ブルー・ティアーズ——日・中・英の専用機が一箇所に集まるのは中々に壯観だ、

こんな事態でなければであるが。

『脚にも剣があるのかよっ!?!』

『何よあのIS無茶苦茶すぎるわよ!? 装甲硬い、蝟みたいに変形する、ビーム撃つてくる、両手両脚に近接ブレード付いてる…もうちよつとコンセプト少なくともいいんじゃないかしらっ!』

『敵に言つても意味がないかと…一夏さん、鈴さん、あのISですが本当に【人】が乗っているのでしょうか?』

『さつき俺も思つたぜ、あきらかに人間のできる動きじゃないだろ、変形するとき絶対骨折れるって』

一夏とセシリアの意見が一致する——明らかにあれは人の動きではない。

そこから導き出される結論は——

『…無人機って奴ね』

『ええ、おそらく間違いないかと、ISの無人機なんて聞いたことありませんが…それに先ほどから私達の攻撃に対応して反撃、ある程度反撃したら変形し離脱というパターンを繰り返していますわね』

そこまで分析して、セシリアがスラスターを切り離す——無線誘導兵器〔ブルー・ティーズ〕として  
周囲に展開させる。

『ちよつと、あのスピードにそのビットが当たるの?』

『鈴さん、逆に考えましょう? 当たらなくともいいのです、ティーズ!』

ティーズの速度はイージスの巡航速度には及ばない——だがそれでかまわない。

『ティーズを囿にいたしますわ、おそらく機械的なパターンしかとれないのであれば対応できないはず……とどめはお任せしますわ、一夏さん、鈴さん』

ティーズ操作中は行動不能になってしまうため、セシリアは動けない。

だが今ここには仲間がいる——ならば彼らに役目を譲ろう。

彼女の言葉に一夏と鈴が無言で頷き、それぞれの得物に力をこめる。

『お行きなさい!』

セシリアの指令の下4機のティアーズがイージスに向かって行く。

やはり巡航速度には追いつけないが、異なる角度からレーザーを放てばダメージを与えられるはず。

ティアーズが射撃位置に付いた――

イージスが一瞬、ガクンツと目に見えない程度に「痙攣」していた事にセシリアは気づかなかった。

瞬間、捕捉していたイージスが視界から消え、レーザーは空を切る。

『えっ?』

3人が思わず口を揃えてしまう。

正確にはハイパーセンサーで確認できていたが、確認するのはあくまで人間。

突然の事態に思考は固まってしまうモノだ。

イージスの位置は先ほどの位置から真逆の位置にいた。

イージスの取った行動――それは



『【瞬時加速】!? なんてスピード!?』

イージスが行ったのはただの【瞬時加速】——現在のイージスは移動のための最適化形態である【巡航形態】だ。その速度は人型のそれをはるかに超えていた。

イージスの両手足がまるで【華】の様に開き3人に機体の向きを合わせている——中央部に溢れるのは【光】

『まずっ!? 一夏っ!』

『くっ!? 回避がっ!』

咄嗟に鈴はすぐそばにいた一夏を弾き飛ばす。

セシリアはスラストをティアーズとして射出していたため、回避が遅れる。

次の瞬間にはセシリアと鈴が光に飲まれ、ステージに地面に叩き付けられていた。

『っ、鈴、セシリアっ!?』

弾き飛ばされた一夏が体勢を立て直す——地面に叩き付けられた彼女達は意識を失っているのかピクリとも動かない。だが【絶対防御】が発動しているのか傷はそこまでのモノではないように見えた。

『くっそおっ!』

何もできなかった無力さを噛み殺しながら、イージスに向けて視線を送る。

セシリアが先ほど分析したところ、【無人機】であるとのことだが一夏にはまるで【笑っている様】に見えた。

その時であった——

「一夏あ! 男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てずしてなんとする!」

アリーナのスピーカーから響く大声——ハウリングも大きく発生していたが慣れ親しんだ声を聞き間違えるわけではない。アリーナの中継室に【箒】がいるのだ。

おそらく想いを寄せる一夏の激励だろう——【戦闘中】にも関わらずだ。

それにイージスも気づく。

『箒!? 何を! 逃げろお!』

一夏の叫びもむなしく、イージスのビームライフルが向けられる。

ステージの外ではISを纏った箒もそれに気づいて顔を青くさせつつ、中継室に向かうが間に合わない。

『っ!? やめろおおおおおっ!!』

【二重瞬時加速】——真とセシリアから切り札として教わっていたモノだが、間に合わない。

その瞬間、ハイパーセンサーが「何か」を捕らえた。

<<<超高速で接近する熱源を確認>>>

「!？」

発射されたビームに死の予感を感じた箒は思わず目を閉じる。

だが——死は訪れなかった。

何故ならば、【光の幕】のようなモノが目の前に広がっていた。

光の幕で発射されたビームは拡散され、無効化されていたのだ。

よく確認してみるとI Sを纏った【誰か】が自分を守っていることが分かった。

口より上部を完全に覆うようなツインアイタイプのセンサーが装備され、

巨大なランチャーのような砲塔を2門、非固定浮遊部位として浮遊させていた。

【光の幕】は両手のマニピュレータ部——人間で言うところの【手の甲】から広がっている。

『篠ノ之箒……だな？ 何をしている、死にたいのか!？』

「おっ、男の声っ!？」

目の前のI Sから箒に声が届く。

『さっさと避難しろ、ここは戦場だ!』

青年は【光の幕】を展開しつつ、目の前の【イージス】に目を向ける。背後では簪が箒を保護し、中継室から連れ出していた。

『…AI操作から遠隔操作に切り替えたようだな』

武器である【IS用ビームマシンガン】を展開してかまえる。

『だがその程度で…俺と【ドレッドノート】を止められると思うなよっ!』

IS【ドレッドノートH】の搭乗者——【カナード・パルス】の咆哮が響く。

---

暗い一室——

「…あれはカナード・パルス」

【桃色の髪】を持つ女性が自身の目の前の空間に投影されている映像を見つつ呟いた。

「…フフフ、まさか彼もこの世界にいるとは思いませんでしたわ」

思わず笑みがこぼれる。

まるで新しいおもちゃを得た【少女】の様に。

「まさかハッキングして張りなおしたシールドを一方的に破られるとは思いませんでしたわ、

【アルミユール<sup>A</sup>・リュミエール<sup>L</sup>】…流石私の【半身】が作成した【IS】と言ったところでしょうかね」

空間投影ディスプレイに目を移し、操作を再開する。

「シン・アスカ、カナード・パルス、そして織斑一夏…ああ、目移りしてしまいますわね」

頬を朱色に染めた女の声が響いた。

## PHASE 19 光を切り裂いて

ドレッドノートの右腕に展開された「ビームマシンガン」から放たれた弾丸がイージスに向かって奔る。

イージスは発射の前に人型のまま「瞬時加速」によって回避を行っていた。

そしてドレッドノートの射線から外れるとビームによる反撃を行う。

だが発射されたビームはドレッドノートの手の甲から広がる「光の膜」によって弾かれる。

『無駄だ、その程度でドレッドノートは貫けん』

イージスの反撃に対し、冷酷な笑みをカナードは浮かべつつビームマシンガンによる射撃を繰り返す。

イージスは再び巡航形態に変形して、回避行動に移る。

互いに膠着している状況だ。

この状況をカナードは好機と見て、プライベートチャネルを傍で状況を見ていた一夏



につなげる。

『織斑一夏、聞こえるか』

『おつ、男っ!?!』

一夏の驚きも仕方がないだろう、男性搭乗者は自分と真を合わせても全世界で2人——だが目の前のISの搭乗者は男なのだ。

『あんた、何者だよ!?!』

『そんなことはどうでもいい、それよりもまだ動けるか?』

質問を流したカナードが逆に質問で返す。

その質問に白式の状況を確認する。

これまでの戦闘では特にダメージも受けていないし、鈴との試合は中断されており衝撃砲を1撃喰らったのみでエネルギーもそこまで減っていない。

零落白夜もまだ十分に使用可能である。

『そりやまだ行けるけど……!!』

『確実に仕留める為に力を貸せ、俺が隙を作る、貴様は奴を仕留める準備をしている』

『隙を作るって……アイツ相手にかよ!』

『俺とドレッドノートならば可能だ、黙って準備をしている!』

一方的にそう言ってカナードはチャンネルを切る。

一夏との通信中も絶えずビームマシンガンで弾幕を張っていた。

時折飛んでくる反撃も全て「アルミューレ・リュミエール」によって無効化している。

(……そろそろのはずだ、AI操作から遠隔操作に切り替わったのなら焦れてくるはず)

互いに膠着した状況を打破するにはどちらかが大きく動くほかない。

イージスが巡航形態のまま「瞬時加速」で大きく距離を取った。

そしてカナードに向かって両手足を「華」の様に開き大型ビーム砲「スキュラ」の発射準備に入る。

カナードの口元に笑みが浮かぶ。

『それを待っていたぞー!』

ドレッドノートの両手からALの光が溢れる。

そしてそのまま両手を組み合わせると、「光の幕」は両手を頂点としたドレッドノートの全身を覆う【円錐形】に変化する。

その形状はまるで【突撃槍】<sup>ランス</sup>の様に見えた。

イージスの【スキュラ】が発射され、ドレッドノートに迫る。

ドレッドノートはスラスターを全開に噴かし、ビームに突っ込む。

『うおおおおおっ!!』

スキュラとドレッドノート。

両者がぶつかり合い閃光が激しく迸りステージを照らす。

スキュラのビームは【突撃槍】によって拡散され続けていた。

【アルミューレ・リュミエール・ランス】

それは【アルミューレ・リュミエール】の発生方向と形状を変化させ、強力無比なランスとして使用する形態。

C・Eでのカナードにとってのかつての愛機〔ハイペリオンガンダム〕でも使用していた技だ。

ドレッドノートはビームを切り裂きつつ、イージスに迫る。

イージスのスキュラは発射中は動くことができない、ビームの照射を止めた時にはすでにドレッドノートは目の間に存在していた。

とつさに回避に移るが、カナードにとっては遅すぎる。

『逃さんっ！』

そのままAシランスでイージスをスキュラ発射口から貫く。

だがまだ完全な機能停止には至っていない。

『今だ、織斑一夏っ！』

カナードの叫びと共に彼の頭上から一夏が——白式が【雪片弐型】を上段に構えて急降下してきた。

零落白夜を使用しているため、刃が輝いている。

『チェストオオオ!!』

——一刀両断

イージスが真つ二つに切り裂かれ地面に向けて落下していく。  
装甲からも色が落ち灰色に変化していた。

『やった……のか?』

『……そのようだな』

イージスの残骸からはエネルギー反応は検出されない。

自爆の可能性を考えていたカナードは一息入れてから機体を反転させ上昇させていく。

『おっ、おい、どこいくんだよ!?!』

『……俺の仕事は終わった、帰還するまでだ』

一夏の質問に返答すると同時にチャンネルが繋がる。

『黙って帰すと思っているのか、貴様』

カナードが後方を確認すると、千冬がいた。

避難誘導が終わりようやく戻ってきたのだ。

彼女は量産型IS【打鉄】を身にまとっており、手には近接ブレードを握っている。カナードへの声色には脅しの色が含まれていた。

『俺のクライアントは貴様ではないし、従う義理も義務もない』

『何だと……!』

涼しい顔で千冬の脅しをカナードは躲す。

そして思い出したかの様に嫌らしい笑みを浮かべた。

元々千冬からは口元しか見えていないが。

『そうだ、東からのメッセージを預かっている、織斑千冬……【IS学園を守ってほし

い」、確かに伝えたぞ』

『束からだどっ!?! 待て、貴様っ!』

『ではな』

動揺した千冬の隙を突き、チャンネルを強制的に切断してスラストを噴かす。

凄まじい速度で高度を上げていく。

ステージのシールドは解除されているようであり、打鉄などの量産機では追い付けない速度だ。

追跡は不可能だろう。

『束の関係者なのか、奴は……!?!何が起こっているというのだっ!』

ギリつと齒ぎしりをしつつ上昇していくカナードを見えなくなるまで睨みつけていた。

---

『戻ってきたっ!?!』

インパルスはボロボロの状態でゆっくりとした速度でしか降下を続けることができなかったが、前方からISの反応を検知し停止する。

凄まじい速度で上昇してきたISは目の前で停止する。

搭乗者の顔はツインアイタイプのセンサーで見えない。

『飛鳥真……いや、シン・アスカ、久しぶりだな』

『男っ!? それにお前なんでそのことをっ!?』

『……そうか、センサーで顔が見えないか、これでどうだ?』

カシヤツとISのセンサーが両側に開き、搭乗者の顔が露わになる。

真はその顔をよく知っていた。

かつて傭兵として戦っていた自身に接触してきた男。

キラ・ヤマトと同じスーパーコーデイネーターであり、共にネオ・ザフトとして駆け  
た男。

因縁に決着をつけろと激励してくれた戦友。



『カナードおっ!?!』

『……そこまで驚くものか、貴様……それに声で気づいてもいいだろうに』

目を点にして驚き、素っ頓狂な声を出した真にカナードは顔を苦笑させる。  
やれやれとカナードがため息をついて、アリーナでの顛末を語る。

『イージスは俺と織斑一夏が倒した、被害は出ていないから安心しろ』

『なっ、なんでお前がここにっ!?!』

『そういった話はまた今度だ、さっさと帰還しなければ面倒なことになるからな』

そういつてインパルスの横を上昇していく。

反転して真が叫ぶ。

『帰還って、どこにだよっ!?!』

『篠ノ之東の所だ、俺と【もう一人】は東に協力している』

『はあっ!?! 東さんと!?!』

『ああ、そして今回の襲撃だが……この世界にいる【ラクス・クライン】の仕業だ』

『なっ!?!』

カナードの言葉に真が驚愕の表情を浮かべる。

『アイツがいるのかよっ?!? 何でっ?!?』

『さあな、だが今はそれだけしか話せん、ヤツは「束の技術と記憶」を持っているから何をしでかすかわかったもんじやない……だから自由に動ける俺達が動く。お前は2人目としての立場があるからIS学園から動けないだろう? ならばここを守れ、いいな』

『まっ、待てよ、カナードっ!』

『いずれ正式に連絡を行うよう束に伝えておく、じゃあな』

真の静止の声を無視して、ドレッドノートは高度を上昇させていき、やがて感知範囲外に出ていく。

『ラクス・クラインが……この世界にいるのかよ……!』

顔をしかめ、そう呟いた。

『……何とかついたか』

カナードと別れた真がストライクの残骸を持ったまま、ようやくアリーナまでたどり着く。

アリーナにすでに生徒たちの姿は見えない。

『色々ありすぎて混乱しそうだ……とりあえずは千冬さんに報告だな、何とかなつたし……っ!』

さらに高度を下げようとした瞬間、インパルスのスラスタが完全に停止した。

同時にPICも稼働率を低下。

どんどん落下していく。

ストライクの残骸から手を放してしまい、残骸はそのまま落下していった。

『うわああっ!?!』

このままでは地面に激突する

だが急に【柔らかい感覚】がして落下が停止した。

『大丈夫だよ、真』

落下を受け止めてくれたのは【簪】であった。

【打鉄式式】で受け止めてくれたのだ。

『お疲れ様、真』

『簪、ありがとう、助かったあ……っ!?!』

簪に助けてもらった真だったが少々体勢がまずい、彼女に抱きしめられている形になっっている。

女の子の柔らかい感覚が伝わってくる。

簪もそれに気づいたのか顔を赤くしていた。

『ちよつ、簪、この体勢はさすがにつ!』

『おつ、お願いだからちよつとじつとしてて……!』

『わつ、分かった……ごめん』

抵抗しようとしたが無駄だった。

そのため真は地面に下りるまで、簪に抱きしめられている格好だった。

「……あくあ、流石に勝てませんか」

目の前に映っていた空間投影ディスプレイを消して、桃色の髪の女性。

【ラクス・クライン】は笑みを浮かべつつ呟いた。

「失敗作とはいえ【スーパーコーデイナー】……おつと、この世界ではナチュラルでしたわね、彼も私も……となると単に経験不足ですわね、仕方ありませんか」

クスクスとテーブルに置いてあったグラスに注がれた赤い液体を口に含む。

「ふふっ、お遊びのつもりでしたのに、まさか東さんやカナードまで出てくるとは思いませんでしたわ、それにシンも相変わらずのご様子……身体が火照ってしまいましたわ」

着ていたドレスを脱ぎ捨て、生まれたままの姿となり扉に向かう。

「シャワーでも浴びませんか……ここからが楽しみですわね、まずは亡国の方々とも連絡を取りませんと、それに【軍用のIS】とやらも見てもみませんか、フフフ……！」

狂ったようなラクス笑い声が響いた。

## INTERMISSION 休息

クラス代表戦での未確認機の襲撃、及び未確認の男性搭乗者についてIS学園では箱口令が敷かれていた。

特に未確認の男性搭乗者——カナードについては徹底的な箱口令が敷かれている。カナードと会話した者については秘密を守るよう誓約書を書かされるほどであった。

また許可なく学園内でISを展開、戦闘を行った真やセシリア、簪には別に反省文の提出が罰則として科せられた。

あわせて避難誘導に従わず場を混乱させてしまった簪についても、1日の自室謹慎が科せられていた。

当初は箱口令が敷かれている中でも様々な噂が流れたが、ある程度時間が経てば適応するのが人間であり、しだいに別の話題に切り替わっていった。

そしてクラス代表戦から数日経った休日。

各々はそれぞれの休日を過ごしていた。

## 自室

「レッツ、マイトガイנטツ！」

「よっしやあつ！ ファイナル・フュージョン！」

罰則の反省文はすでに書き終え、千冬に提出した簪は

自室で撮り貯めていたアニメの再放送で休日の時間を過ごしていた。

「……今は見れないかな」

少々ため息をつけてアニメを消し、自分のベッドにダイブする。

画面の中の【勇者達】の勇ましい姿は普段ではとても心躍るモノだが、今はどうしても別のモノが浮かんでできてしまう。

『……俺は【花】を散らせないために戦うって決めた、助けられるのなら絶対に手を差し伸べるって決めたんだ。それがヒーローごっこならそれでもいい……俺自身が決めた



んだ、だから……助けたいんだ』

本気になって心配してくれた彼の顔――

『無事か、簪！』

先日の未確認機乱入の際、クラスメイトを守った時の勇ましい顔――

『ありがとう、簪』

未確認機を撃破して戻ってきた時の顔――

「あの時の真……ヒーローみたいにカッコよかった」

ボロボロになりながらも人を守るヒーロー。

幼い頃から憧れていたその姿を先日の真は体現していた。

彼の事ばかり頭に浮かんでくる。

そして胸が温かくなる。

先程からずっとこれを繰り返していた。

この気持ちの名前は知っている。

「私、やっぱり真のこと……好きなんだ……」

趣味や話も合うし、I S等の事も色々その後押しをしてもらった。

いつの間にか彼に惹かれていたのだろう、友人としてではなく、【異性】として。

そして先日襲撃の件が引き金となって自分の気持ちに気付いた。

気づいてしまった気持ちを意識すると顔が真っ赤になる程の恥ずかしさが溢れてきた。

幸いなことに今、この部屋に彼はいない

インパルスの整備の為、利香とともに日出工業に向かっているのだ。

「うう……どうしよう、今顔見れないよ」

時刻は正午を少し回ったところだ。

後数時間で彼は帰ってくるだろう。

以前の様に特撮やアニメの話をしようにしても今のままではまともに顔も見れないだろう、恥ずかしくて。

「なっ、何とかしないと……!」

悩める恋する乙女の声が部屋に響いた。

---

### 生徒会室

「見て見て、虚ちゃん! 簪ちゃんから、彼女の方から私と話をしたいってメールが!!」  
私用の携帯に簪からメールがあり、その内容を読んだ楯無は嬉し涙を流しつつ背後の虚に叫ぶ。

生暖かい目でそれを見つつ虚は返答する。

「お嬢様、これで簪お嬢様と仲直りができますね」

「ええ、後は私がちやんと謝れれば……でも……」

笑顔から一遍——表情を暗くした楯無が頭を抱える。

「あつ、ありのまま今朝確認した事を話すわ……しばらくの間家の仕事や国家代表の仕事で学園を離れていたらいつの間にか簪ちゃんのISSの問題とかが全部解決していて、簪ちゃんの方から話をしたいとメールまでくれた。それはとっても嬉しいなと思ったけど真君と親しうに話をしていた、しかも視線が熱つぽかった。頭がどうにかなりそうだわ、超スピードとか瞬時加速とかそんなチャチなもんじゃ断じてないわ、もつと恐ろしい……妹の恋の予感というものを味わっているわ……!」

グググツと扇子を広げつつ、楯無が冷や汗をダラダラと流して呆れ顔をしている虚に告げる。

「お嬢様、少し落ち着きましょう、ヒツヒツフーですよ」

呆れ顔のままラマーズ呼吸法を楯無に伝える。

「ヒツヒツフー……ありがとう虚ちゃん、落ち着いたわ」

ふう、と一息ついた楯無は扇子で顔を扇ぐ。

扇子には【感謝】と表示されている。

「……お嬢様……扇子……逆さです」

だが、先程開いた扇子は持ち手が上下逆になっていた。

「……簪ちゃん、お姉ちゃんは許さないわよお！ 真君め、今いないみたいだけど戻ってきたらコロがしてあげるんだからあ！」

長机に突っ伏してうわーんと泣く楯無であった。

## 食堂

「どうぞ、酢豚お待ちどうさま！」

ドンツとテーブルの上にたつぷりと盛られた酢豚の皿が出される。食欲を沸き立たせるたまらない香りが広がる。

「いただきますー！」

両手を合わせて、一夏が酢豚をご飯と共に食べ始める。朝からずっとトレーニングを続けていた彼は空腹だったのだ。

「いい食べっぷりね、一夏」

「ああ、サンキューな鈴、奢ってというか作ってくれてさ」

「いいのよ……自業自得みたいなものだから……はは……」

自嘲気味な乾いた笑いを鈴が浮かべる。

何故彼女が酔豚を一夏に作っているかと言うと、クラス対抗戦の後に意識を取り戻すと、

なんと一夏が【約束】について思い出したのだ。

しかも正確にプロポーズの意味に気づいて。

このことを後に真が聞いたときに目を点にして驚いていたが。

それについてももちろん喜んだ鈴だったが意識を取り戻してすぐの出来事であったため、全くと言ってもいいほど準備をしていなかったのだ。

そのため――

「なっ、何言ってるのよ！ 勘違いよ！ 奢って上げるっていったのよ！」

と照れ隠しのために言ってしまったのだ。

しかもそれに一夏は納得してしまったのだから、後の祭りである。

もちろん号泣して真の部屋に飛び込んできたのは言うまでもないだろう。

「はははは……まあ、こうして一夏の食べっぷり見れるのもいいかもね」

一夏に聞こえない程度の声量で微笑みながら鈴は呟いたのだった。

---

## 第2アリーナ

『でええええいっ！』

白式がアリーナの上空を翔る。

一夏は咆哮を上げつつ手に持つ雪片で空を裂く。

瞬時加速からの一撃、姉である千冬の現役時代の映像や、

真やセシリアから教えてもらったコツを試しつつ試行錯誤している。

『こんなんじゃないだめだ……もつと強くないと……！』

思い出されるは先日の無人機との戦い。



真はボロボロになりつつも自力で1機倒していた。

だが自分はその未確認の男性搭乗者がいなければ一撃を与える事ができなかった。それどころか筈の危機にも間に合わなかった

奴がいなければ筈は大怪我をしていたかもしれないのだ。

だからもつと強く、真やあの男よりも強く、この白式で皆を守るために。

『俺が……俺が皆を守れるようになるんだっ！』

この日、アリーナの使用時間ギリギリまで白式は空を翔けていた。

---

日出工業 応接室

応接室には真と優奈、利香の3人の姿があった。

3人ともあまり表情が優れているとは言い難い。

真の口から「ラクス・クラインがこの世界にいる」という情報をもたらされたからだ。

「その可能性を考えなかったわけじゃないけど……本当にいるとはね、嫌になるわ」  
「カナードが嘘を言う必要はないですからね、東さんと一緒にいると聞いたときは驚きました」

「あの天災とねえ、それにしてもP S装甲をよくこの世界で再現できたなあ……まさか、宇宙にいるとかはないよね？」

P S装甲の装甲材は無重力、またはそれに準ずる環境を用意し、ガンマ線レーザー等による加工施設が必要となる。

つまり作成には宇宙空間が最も適しているのだ。

この世界ではまだ人類は自らの居住空間を宇宙に移してはない。

そのため装甲材の入手はほぼ不可能であったはずなのだ。

「流石にそれは……。それとラクス・クラインは東さんの技術と記憶……を持つているとカナードは言っていました、【技術】はともかく【記憶】って言葉の意味は分からないですが」

「……何にしても情報が足りないわね、うかつに動くわけにはいかないし、こちらから動くってこともできそうにないわ」

優奈がため息をつく。

応接室の雰囲気は淀んでいく。

それだけの懸念事項なのだ、ラクス・クラインがいるということは。

「……そうだ、インパルスの整備が終わったって報告があったから、真君、受け取りに行きなよ」

利香が雰囲気を変えるために真に告げる。

「開発主任の一人の『小原』って女の人が待機状態にしたインパルスを持っているはずだから……それにデステイニールシレットの『試作型』ができたから少し試してくるといいよ」

「早いですね、もうですか!?!」

「うん、ヴォワチュール・リュミエール<sup>L</sup>、新しい、惹かれるな……とか技術スタッフの皆が目の色を変えて作業してたからね」

その言葉に優奈は頭を抱えていたが、それは無視する。

「インパルスを受け取りに行つてからテスト……ですね、分りました」

「それと打鉄式式の武装について、これ、簪ちゃんに渡してあげて、候補リストだつて」

利香が笑顔でタブレットを真に手渡す。

その笑顔は若干ひきつっている。

「………凄く嫌な予感がするんですが」

「……大丈夫、私の方で一応コストとか常識の範囲内であるかとか確認してあるから」

はははと乾いた笑いを利香は浮かべていた。

少しだけ武装を確認すると「[リボルビング・ステーク]等の杭打機が武装として候補に挙がっていた。

同じ用途の武装がI S用装備にあることは知っているし、C・Eにも「グフ・クラツシャー」というトンデモ武装を積んだMSがいたからそこまでは驚きはしなかったが。

その後、真は「小原節子」という開発主任

シルエット候補にあった「バルゴラシルエット」の提案者らしい。

彼女からインパルスを受け取り、試作型「デステイニーシルエット」のテストを行ってから利香に送られてIS学園へと戻った。

部屋でどういう訳か顔を赤くしていた簪にタブレットを手渡したら目の色を変えて喜んでいた。

ロケットパンチや合体剣はロマンに溢れてて魅力的だけど、取っ突きやドリル、合体からの一撃必殺砲もいいよねとの事だ。

その笑顔を見ると不思議と悪くないよなと思えた真だった。

「……チッ」

カナードは手に持ったタブレットを机に放り投げて、荒々しく椅子に座り込む。

投げ捨てられたタブレットには軌道エレベーターについての理論、コスト等や建設を予定している企業の情報が表示されていた。

(PS装甲の装甲材を作成できる施設など限られてくる……。疑似的な無重力ならばPICを使用すれば可能……。しかし大量に製錬するには時間も場所も必要だ、まさか宇宙……。だがこの世界では難しいはずだ)

C・E. ならば個人所有のシャトル等を用いれば、費用は掛かるだろうが、容易に地球と宇宙との行き来は可能であった。しかしこの世界ではISを用いても宇宙開発は遅々として進んでいない状況である。

その中で宇宙を拠点にしようとすれば、簡単に束の情報網に引っかかるはずだ。そのため、地上の施設に絞って調査していたが全て外れていたのだ。

「くそ……。やはり相手も束と考えるべきだな、情報も易々とは手に入らんか」

「詰まつてるみたいだね、兄さん」

女の声――

その声に振り向くと、カナードと同じ顔、同じような服装をしている女の子が手にコーヒークップを2つ持って立っていた。

カナードと瓜二つな顔だが彼程髪は長くなく、セミロングといったところだ。

輪郭は女性らしく丸く、身体付きも鍛えられたカナードとは違い細く胸は平坦。だがヒップラインにかけては中々にそのものがあるだろう。

もともとカナードにとっては「妹」であるのだから、そういった感情はないが。

「ラキか、整備は終わったのか？」

ラキと呼ばれた女の子はカナードにカップを手渡す。

「うん、東さんが手伝ってくれて終わらせてくれたよ」

「そうか、助かる」

ラキは机の上に投げ捨てられたタブレットを手取る。

「軌道エレベーター？」

「ああ、だが外れだ……その情報に関連した場所にヤツはいない」

ヤツ。

ラクス・クラインの情報を出した途端、ラキの表情が曇る。まるで何かに悔いているような表情だ。

「……ラクスの情報……以前の【僕】ならどうしてたんだらうね」

自嘲気味に笑った後、タブレットを机の上に置き空いていた椅子に座り込む。

「……今のお前は「ラキーナ・パルス」、俺の妹だ」

「……うん、ありがとう、【兄さん】」

弱々しく微笑んだ後、コーヒーを一口ラキは口に含む。

「まだ飛鳥真……いや、シン・アスカに会う覚悟はできないか？」

シンの名前を出した途端、ラキは少々震えだした。

「……私が取り返しのつかないことをしたっていうのはわかってるの………だけどやっぱ



り怖い」

「そうか」

カナードも一口コーヒーを口に含む。

「……だがいずれ、奴とは会わなければならぬだろう？」

「……うん、そうだね」

「お前は決めたはずだ、【今ある世界と花を守る】と」

「……うん」

「ならばその通り動け、ラキ、違うか？」

「……ありがとう、兄さん」

「礼はいい、コーヒーの借りだ」

再びタブレットを拾い、情報収集を開始する。

「束の贖罪とラキの贖罪か、やつかいな仕事だ、まったく」

コーヒーを飲み苦そうな顔をしている妹を、横目で見て苦笑したカナードであった。

## PHASE 20 暗雲と想い

少々時間は遡り、クラス代表戦の翌日

戦闘中に場を混乱させてしまった箒は自室——一夏と同室——で1日の謹慎を言い渡され謹慎中であつた。

「……」

自分のベッドの上で昨日の件を思い出していた。

(軽率だったかもしれないが……私は間違っていない、一夏の為を想えばこそだ)

恋は盲目。

箒は一夏に関する事では大きく視野を狭めてしまう。

それは先日の様な【試合】ではなく【戦闘】では致命的である。

しかしそれに気づけと言われても酷であろう。

彼女は篠ノ之束の妹ではあるがあくまで戦いなどとは無関係な十代の少女なのだから。

そして彼女の心にはもう一つ浮かんでいる事がある。

それは――

「……一夏の隣に立てるようになりたい……力が欲しい」

【力への渴望】が彼女の心に生まれていた。

真やセシリアや鈴、そして一夏には専用のIS――【専用機】がある。

真やセシリアが一夏を鍛えてくれている特訓に訓練機で参加したこともあるが、その差は歴然だ。

自分だけ違う。

もし自分にも専用機があれば、一夏の隣に堂々と立てるのではないのか。

姉に連絡を付ければおそらくは――。

そんな考えを浮かべながら、目を閉じた。

IS学園地下、そこには特定のクリアランスを持たなければ入れない区画がある。

IS学園は規定によって国家に属さない事となっている——その特殊性からこういった監視・解析専用の区画が必要となるのだ。

真耶と千冬はその解析専用区画にいた。

「ようやく解析が終わったか」

「はい、どうにも無人機の装甲に使われている装甲材が特殊すぎて時間がかかりました  
が解析が終わりました」

メンテナンスベッドの上に乗せられた無人機。

ストライクとイージスの残骸を睨みつけるように千冬は見ていた。

「コアなんですが……【未登録】のコアでした」

「やはりか……」

「それと、このISには【絶対防御】が搭載されていませんでした」

「何？」

「絶対防御に回すエネルギーを装甲に回している形跡が見られたんです、そしてその装

甲ですが通電する事で衝撃の相転移を発生させる特殊な合金で作られています」

「衝撃の相転移……まさか……！」

「はい、この装甲に実体弾などの物理攻撃は意味をなしません。もちろん完全ではないでしょうが。この装甲を相手にするならばエネルギー兵器が有効だと考えられます」

無人機と戦闘を行った者達を望遠モニターから撮影した映像が流れる。

鈴の衝撃砲で吹き飛ばされながらもノーダメージ、だが一夏や真、未確認の男性搭乗者によるエネルギー兵器での攻撃はダメージを与えていた。

（あの男を通じて、束は私にメッセージをよこした……束が関与していないと考えるべきか）

残骸の破片を拾い上げて観察しつつ、思考を続ける。

（だがそれは束以外にI S コアを作れる人間がいるということだ。世界のパワーバランスが崩れかねんぞ）

ISのコアを作れる人間は篠ノ之束のみ。

そしてコアの数には制限がある。

その制限がある意味での抑止力として機能しているのだ。

現在の世界はISの存在によって揺らぎながらも平和を保っている。

だがもしISコアの数が増え、充分な数が国家に行き渡った場合は――

「……下手をすれば戦争か」

それは考えられる最悪の未来、何としてでも回避する必要がある。

(やれやれ……これから山場がいくつあるのか考えるだけでも嫌になる)

だが自分はそれをやらなければならない責任がある。

ISが世界に広がる切欠――【白騎士】に関わった身として。

---

時間は戻って、クラス代表戦からしばらく経った頃。

「転校生ですか？」

「はい、今回は2名です」

放課後、一夏は教室に残されていた

真は一夏にノートを貸してくれと頼まれて付き合っていた。

なんでもまた転校生が来るとの事だ。

だが女子の転校生なら自分達にはあまり関係ないはずだが。

真耶が周りを見回し誰もいないことを確認して小声で二人に告げる。

「実は元々決まっていたんですがスケジュールの調整が遅れて……それとまだ発表してはいけないんですが、1人は男子なんです」

「ええっ、本当ですかっ!?!」

大げさに驚く一夏に思わず真耶は苦笑してしまった。

一方真は別の事を考えていた。



(……特にニュースとかにはなっていないよな、今朝のニュースも特に変わりなかったはず)

今朝、携帯で確認した内容を思い出す。

(俺の時は大々的に世界中に報道されたよな……何でだ?)

自分の時はすぐさま速報として報道された。

だが今回はそのような様子もない——机の陰に隠して携帯を見たが特にニュースなどにはなっていない。

(3人目……実際には4人目か。転校が決まってたつてことはかなり前から……俺と同時期に見つかっていた可能性もあるな。……あやしいな、この話)

C. E. ———

前世で傭兵レッドバード赤鳥として世界を回った時に【報酬全額前払】や【報酬としてのMS譲渡】等異様に好待遇な仕事を斡旋された事があった。

どれもこれもほとんどが理不尽な内容であったことの教訓から【あやしい話】を疑うような心がけている真は内心警戒を強めていた。

それに気づかずに真耶の話は進んでいく。

「相部屋の相手は織斑君になります」

「これで何の気兼ねもなくシャワーが浴びれる！」

「おいおい」

思わず素でツツコンでしまった。

どちらもルームメイトとは一定の関係を築いているが、やはり男女相部屋では気が休まらない所もあるのだ。

シャワーなどの前後は特に――。

湯上りの女の子は思春期男子には刺激が強すぎるのだ。

ちなみに一夏には女難の相でもあるのか、たびたび箒のシャワーシーンを目撃していたりする。

「いきなりのお話で申し訳ないんですが、織斑君はこの週末に引っ越しの方お願いしま

すね」

「分かりました」

その後、一夏は真からノートを借りて自室に戻っていった。

何でもI Sの座学だけではなく基本教科も勉強したいとの事だ。

最近は授業について行けないということもなく、成長スピードには驚かされている。

「……4人目か……警戒はしておくかな。ラクス・クラインの件もあるし」

この件と関連があるかは不明だが、そう決めて真も自室に戻っていった。

---

同時刻——自室

今、目の前にはずっとちゃんと見ることができなかつた人がいる。

【更識楯無】、私の姉。

だけどそれは単なる擦れ違いだと彼が教えてくれた。

だから私は少しでも前に進みたい。

「お姉ちゃん」

「なっ、何かしら簪ちゃん」

お姉ちゃんがピクツと身体を震わせながらこちらに微笑む。

私とお姉ちゃんは共に正座で向き合っている状態だ。

「ごめんなさい」

「……………え？」

私が軽く頭を下げるとお姉ちゃんが目をぼくりさせながらそんな声を出した。

「今までお姉ちゃんはずっと私の事を考えてくれていたのに……。無視してて、ごめんなさい」

「……………それだったら私の方が謝らないといけないわ。私のほうこそごめんなさい、簪ちゃん。あなたは決して無能なんかじゃないわ」

お姉ちゃんが土下座するように頭を深く下げる。

ずっと昔に言われた言葉。

ずっと心に残ってた言葉。

だけどそれが本心からの言葉じゃないとわかったのはつい最近の事だ。

「貴女は自慢の妹よ……簪ちゃあん！」

「えっ、きやあつ!？」

今まで凄い真面目な顔だったのに急に涙をポロポロと流しながらお姉ちゃんが抱き着いてきた。

「おっ、お姉ちゃん!？」

「ふへへ、簪ちゃんの匂い……はっ、ごめん、ごめんね！」

なんかよだれ垂らしてるし――。

でもこうして【刀奈お姉ちゃん】として接してくれたのは本当に久しぶりで悪い気はしない。

「……いいよ、抱き着いても」

本当っ!?!と目を輝かせてるお姉ちゃん。

本当に嬉しそうで断れそうにない。

「あら、香水?」

お姉ちゃんがクンクンと私の首筋の匂いをかぎ始めた。

「あつ、ちよつ……!」

「何でまた?」

「……別にお洒落位……するよ、お姉ちゃん」

本当は真に気付いてほしかったけど、クラスが違うし今日は昼食が一緒に取れなかったので気づいてもらえなかった。

その様子をジーとお姉ちゃんが見ていた。

「なっ、何?」

「……知ってるんだからねっ、真君の事、好きなんでしょ?」

お姉ちゃんの言葉を聞いた途端、顔が真っ赤になったのが分かる。

「なっ、なんで……!?!」

何とかそれだけを言葉に出せた。

「最近の真君を見る目ね。ここの熱が籠っていた感じがあつたのよ……で今の反応を見るに本当なのね?」

「……うん、私は真が好き」

そうはつきり言葉に出した——彼の様に強くはつきりと。

「……そう分かったわ、応援するわ、簪ちゃん」

「……ダメって言わないの？」

正直、お姉ちゃんならそういう行動をとると思った。

「……簪ちゃんの顔を見るまでは真君には腕の一本くらい覚悟してもらうつもりだったわ」

お姉ちゃんが扇子で口元を隠して笑う。

めっ、目が笑ってない。

「……でも本気で彼の事が好きって分かったから。だからそういうことはせずに応援することにしたの」

「……お姉ちゃん」

「でも彼人気高いわよ？ 強面だけど優しいとかで、2年3年でも話題に出るくらいよ？」

そうなんだ——でも——



「……大丈夫、負けないから」

はつきりとお姉ちゃんに伝える。

「……なら安心かな、じゃあまずは彼を落とす準備をしなきゃね」

「準備？」

「そう……まずは胃袋をつかむのはどうかしらっ!？」

その後、真が帰ってくるまでお姉ちゃんから男を落とす技術(?)の基礎を教わった。正直あまり役に立ちそうにない知識ばかりだったけど、その気持ちがとてもうれしかった。

---

夕食後自室――

「ほんと!? かんちゃん、たちちゃんと仲直りしたの!？」

「うん」

本音が簪の肩を掴んで驚いている。

「久しぶりにお姉ちゃんとは色々話せたよ」

「よかったよ」

「ちよつ、本音っ」

カバツと本音が簪を抱きしめた。

とつさに離そうとするが、彼女の力が予想以上だったのか引き離せなかった。そんな様子を微笑みながら真は見ていた。

「よかったな、簪」

「……うん、真のおかげだよ」

「俺の？」

「うん、真が私の背中を押してくれたの」

本音が簪を離し、簪は真の目を見つめ微笑む。

「あつ……うん。そうか、ならよかったよ」

その微笑みに真は少し恥ずかしそうにしていた。

彼女の笑顔を救えてよかった

——心から真はそう思った。

## PHASE 21 波乱の予兆

1年1組では先週真耶が伝えたように2名の転校生の自己紹介が行われていた。

1人は「金髪の美少年」、1人は「銀髪と眼帯の美少女」だ。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。日本では色々和不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

【金髪の美少年】が1年1組の皆の前で頭を下げる。

中性的な顔立ち、綺麗な金髪を背中まで伸ばして束ねている。

背は真や一夏に比べるとかなり低い。

「おっ、男……!?!」

一瞬の沈黙の後、清香が声を出した。

「はい、すでに僕と同じ境遇の方が2人いらっしやるとの事でこちらに……」

瞬間――

シャルルの言葉をさえぎるかのように1年1組が沸いた。

「きゃあああ!!」

「男子よ! 織斑君、飛鳥君に続く3人目!」

「美形よお! もしかしてかに座のB型!?!」

「優しいイケメン、強面イケメン、貴公子系イケメン! 1組本当に勝ち組だわ!」

クラスメイト達が歓喜で湧きあがる。

一夏は歓声に耳を塞ぎ、真はシャルルを観察して呆れていた。

(……どう見たって【女の子】じゃないか)

男子用の制服を着ているが明らかに女の身体つき。

中性的な顔立ちだが声は男性にしては明らかに高い。

自分や一夏と比べればよりはつきりとするだろう。

それに先日話を聞いたときからネットやニュース、所属企業である日出工業でも確認したが、自分より後に男性操縦者が現れた話など欠片も存在していなかった。

(……フランス……デユノア……つてことはもしかしてデユノア社に関連する人間なのか?)

利香に叩き込まれたIS座学の中に気になる【キーワード】がありそこから思考の海に沈む。

IS学園で使用されている訓練用ISの中に量産型IS【ラファール・リヴァイヴ】と言う機体がある。

この機体はもう1つの量産型ISである【打鉄】と同じく第2世代型ISであり、操縦者を選ばず多種多様な拡張性を併せ持つことから世界でも第3位のシェアを誇り、7カ国でライセンス生産され、12カ国で正式採用されている。

そしてそのラファール・リヴァイヴを開発したのはフランスの【デユノア社】  
シャルルのファミリーネームと同じである。

(そうだとしたら何のため……いや決まってるか)

真の中でシャルルが何のためにIS学園に来たかの予測がついた。

(一夏の詳細なデータか、俺のデータはある程度は世界中に渡されてるはずだろうし、重要度は一夏のほうが高い……だけどその方法が「ハニートラップ」かよ)

「ハニートラップ」——様は色仕掛けである。

(すでに引越しは終わってるし……一夏が気づくとも限らないし……千冬さんに相談してみるか)

何気に親友に対してひどいことを考えているが前科が色々あるので仕方がない。

それにこれはれっきとした【犯罪】だ。

友人達の身に危険が及ぶかもしれない。

学園側もこの事態を知らないわけではないだろう、こういうときは責任ある立場の大

人に頼るべきだ。

「騒ぐな」

千冬の一声で溢れていた歓声は一瞬で消える。それを確認して千冬は小さくため息をついた。

「えっと、それでは自己紹介のほうお願いしてもいいですか？」  
「……」

真耶の言葉を見無視しているのか、銀髪の美少女は無言で突っ立っている。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬の声に彼女は佇まいを直して敬礼を向ける。

その姿は訓練された【軍人】のようだ。



「ここではそう呼ぶな、私は教官ではない。それにお前もここでは軍人ではなく代表候補生、そして一介の生徒だ、私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

敬礼したまま、彼女が返答する。

敬礼をといた後、彼女は1組の皆に振り返った。

「名前はラウラ・ボーデヴィツヒ、以上だ」

そして再び口を閉じる。

彼女の様子に真耶が混乱している。

無言のままラウラはクラスを見回し、一夏に目を合わせた。

一瞬彼女の顔に怒りが浮かんだ。

そのまま、ずかずかと一夏の席の前に立つ。

当の一夏はほかんとした表情を浮かべていた。

「貴様が、織斑一夏か？」

「ああ、そうだけど」

瞬間、一夏の頬が転校生によって叩かれた。

「っ!？」

「この程度も避けられんとはな……。私は認めんぞ、貴様があの人……。教官の弟である

ことなど認めるものか！」

「いきなり何しやがるっ!？」

思わず一夏は立ち上がってラウラを睨むが、彼女は無視してあいている席に座る。

ちなみにその席は清香の後ろであり、彼女は泣きそうな顔をしていた。

「……それではHRは終わりだ。各自着替えて第2アリーナに集合しろ。今日は2組との合同のIS操縦訓練だ」

その言葉で皆、授業の準備に取り掛かり始めた。

(……軍人ね、いきなり人を叩くのはどうかと思うけど)

ザフト時代の自分も模範的な勤務態度を取っていたとは言いがたいが、あれは目に余る。

それになんとかだが個人的な感情が見えた気がした。

「つたく、何なんだよあいつ」

一夏が移動の準備をしつつ、叩いたラウラを睨みつけている。

「無視しとけよ、虫の居所が悪いんだろ？」

「……ああ、そうする」

「織斑、飛鳥、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「あ、はい、分かりました」

千冬はそう言っただけで教室を出て行く。

「君達が織斑君に飛鳥君？初めまして、僕はシャル……」

「シャルルさん、先に移動したほうがいいですよ？ それに3人がここにいらつしやると私達も着替えられませんから」

苦笑しつつセシリアがシャルル達3人に告げる。

了解とつけて足早に3人は教室を出る

「男子はアリーナの更衣室で着替えるんだ」

「そつ、そうなんだ……」

一夏は走りながらシャルルの腕を掴んでいる。

シャルルは少々頬を赤くしているが彼に引つ張られる形で走っている。  
走り方も男の様なものではなく、女性の走り方だ。

(……隠す気あるのかよ)

先ほどからずっと警戒していたが正直スパイにしてはお粗末過ぎるシャルルの仕草に、真は思わず苦笑してしまった。

---

そしてその日の放課後。

生徒会室には真と楯無の姿があった。

「お疲れ様、真君」

「わざわざありがとうございます」

「お話したいことはシャルル君のことよね？」

「……ええ、忙しいところすいません」

「いいのよ、困りごとを解決するのも生徒会長の仕事よ♪」

楯無が真に紅茶を出す。

楯無は真に対して一定の信頼を置くようになっていた。

実際、無人機襲撃の際にも真は事の終息に協力したのだ、それが楯無の信頼を得ることとなった。

楯無個人的には簪との仲が回復したことが大きいが、それは真の知るどころではない。

「ほう、ちゃんと仕事をしているようで何よりだ」

千冬が生徒会室に入ってくる。

「お疲れ様です、織斑先生」

休憩時間や昼休みに楯無や千冬には自分が感じたことについては報告していたのだ。ちなみに一夏に訓練に誘われたが千冬さんに話があると言った所素直に聞いてくれた。

楯無が千冬の方と自分の分の紅茶を用意して席に付いたのを確認して、真は話を切り出す。

「それで、何なんです、あのフランスの『女の子』は？」

応接用の椅子に腰掛けながら真は確信について話す。

その様子に楯無は苦笑しつつ答える。

「いきなり来るわねー、真君」

「気づいていたか、飛鳥」

「そりゃ、お世辞にも上手い男装とは言えないですよ……仕事だつて女の子じゃないですか。それに一夏や俺に何かあるかもしれないじゃないですか」

合同授業の着替えの際、一夏や真の着替えを見てシャルルは思いつきり動揺していた。

真はワザと大胆に上半身裸になったりしてカマをかけていたのだ。

「てか2人とも気づいてるって事は学園側もですか?」

「ああ。流石にあれだけお粗末な男装だ、教師は全員な……。それも書類についても偽装されたものだ」

「私の方で確認を取りましたけどフランスのほうでもデータが書き換えられています」

た。おそらく国家絡みですね、対応は難しいと思います」

どうやって調べたんだと真は思ったが今は無視する。

「……彼女はデュノア社の人間ですよ？ 何でこんなスパイみたいなことを？」

「彼女、デュノア社長の愛人の子らしいのよ。だからまあ無理矢理こんなことやらせれているでしょうね」

やれやれと楯無は肩をすくめてため息をつく。

「飛鳥、すまないがデュノアの事を見ておいてくれないか？」

「……対応できないから……現状維持って事ですか？」

「ああ、お前なら同じ男子ということで近くから見張ることもできるだろう？」

「こつちから何かしらの手を打つと国際問題に発展しかねないのよ。お願い、真くくん」

まさか何も対応せずに現状維持になるとは思わなかった。

それどころか監視を依頼してきている。



完全に墓穴を掘った状況だ。

(マジかあ……)

思わず天井を仰いでしまった。

「……もちろんそのままというわけではなく手も打つ。期限は1週間から2週間程度だ」

「ハニートラップとかあったらどうするんです？」

「ないでしょうね。彼女を見るにそんな事できそうにないし、それに相手一夏君だから……了解です」

自分が彼女を見ていれば危険を取り除けるのならば協力するしかない。

それに彼女の事を救えるのなら救いたいというの気持ちもあるのだ。

望まないことを強要された、「望まない戦いを強要された女の子」を知っている。

——奇しくも彼女も金髪だった。

救えなかった。

——自分の腕の中で冷たくなった「ステラ」を。

「すまん」

「……まあ、なるべく早めに何とかしてください」

努力しようと千冬は苦笑いで返した。

その後、ラウラについても千冬にお願いをしておいた。

一夏に対する態度は他者が見ているも気分がいいものではないからだ。彼女はそれに了承してくれた。

その後は軽い雑談の後解散となった。

---

夜——自室

「はあ……」

「どうしたの、真？」

ベッドの上でため息を吐いた真に簪が問いかける。

「いや、やることが多いなって……」

「……もしかして『デステイニーシルエット』が完成したからテストするの？」

「……えっ？」

完全に初耳の情報であった

——予定のロールアウトにはまだ時間があるはず。

「あれ、資料用のタブレットにメール着てたよ」

机の上においてあった共有の資料用タブレットを確認する。

利香からメールが届いていた。

2日後に持っていくとの記載もあった。

「本当だ……予定よりも相当早いじゃないか」

「日出の人達は本当に誇りを持った技術者なんだね。倉持とは大違い」

ふふつと黒い笑いを簪が浮かべているのでそれに苦笑で返す。

「しかしこんなに早くなるなんて……絶対無理しただろ、利香さんたち」

「……そのテストじゃなかったの？」

「ん、ああ、別件かな。……まあ、何とかしてみるさ」

疲れた様子でタブレットを机の上に置きなおす。

「……ねえ、真、甘いものとか食べたい？」

突然簪が真に問いかけてきた。

「甘いもの……いいな、ちよつと小腹もすいてるし。疲れたから甘いもの食べたい」

真の返答にばあつと笑顔を浮かべて簪が自分のバッグから包みを取り出してきた。

「よければ……どうぞ。食堂を借りて作ったの、カップケーキ……だよ」

チョコ味のカップケーキを2つ手渡される。

「あつ、うん……ありがとう……」

彼女の雰囲気にも飲まれ、真の顔も照れて赤くなっていく。

包みを丁寧にはがして、一口。

「……甘くておいしい」

「ほんとおつ？」

「ああ」

ぺろりと一つ食べて終えて2つ目の包みを開ける。

「ありがとうな、簪」

「えっ、あつ、うん……。喜んでもらえてよかった」

お互い顔が赤く、雰囲気もどこか変わった気がする。だが、その雰囲気はすぐに霧散することになった。

「かんちゃーん」

扉をノックする音と、本音の声が聞こえたからだ。

「!？」

2人ともビクつと身体を震わせて扉を見つめる。

「……あ、あはは、出るね」

「あつ、うん……」

お互い恥ずかしそうにして告げた。

その後、本音が漫画等の雑誌類を買ったから一緒に読もうと勧められていた簪だったが、どこかジト目で本音を見ていたのだった。

---

### ホテルの一室

「【日本】は湿気が強くていけませんわねえ……ま、密入国したんですから文句は言えないですわね」

カーテンで仕切られ照明が落とされた部屋は本来は暗いはず。

だが空間投影ディスプレイによる明かりが室内を照らしていた。

「……【篠ノ之箒さん】……東さんの妹、ふふ、東さんがどんな反応を取るか楽しみですよわ」

ディスプレイに表示されたのは私服姿の箒の姿。

【赤い腕輪】を手で弄りつつ、ディスプレイを消す。

「向こうにはキラもいると言うのに見当違いな場所ばかり……おつと今はラキーナでしたね。まあ、もう彼などどうでもいいですが」

テーブルの上に置かれたワイングラスに手を伸ばし、一口飲む。

「ふふ、やはり【ミラーージュコロイド】と【テストメントウイルス】は便利ですわね……。MSにもつけるべきでしたわ」

腕につけている【白い腕輪】を見つめて自嘲するかのようには彼女は呟いた。

「ああ、シンの表情を考えるだけで昂ぶってきますわ。でもまだだめ、シンはまだ【翼】を手に入れていない」

再び一口ワインを口に含む



「私が基礎を作った〔トレースシステム〕、それを改良した〔VTシステム〕。面白いですわね、利用しないなんてもったいないですわっ。 ああ、シン、早くあのときの様に美しい翼を持つてくださいな、お待ちしてますわ」

カーテンを少し開けて月を見る。

美しい月を眺めつつラクスはワインを飲み干した。

## PHASE 22 淡く揺れる想い

2日後――

第3アリーナ

アリーナの上空で動く2つの人影と4つの浮遊砲台。

真とセシリアが模擬戦を行っているのだ。

【ティアーズ】から奔るレーザーをシールドで受け流し、AMBACによる姿勢制御を行う。

だが背後から【別のティアーズ】が迫る。

『ちっ！』

放たれたレーザーは空を切る。

真はフォースシルエットの大推力スラスタを噴かして、推力任せの回避を選択せざるを得なかった。

そして彼が回避した先を狙う銃口。

【スターライトMK-III】を構えたセシリアだ。

『そこですっ!』

『まだだあっ!』

機体各部のバーニアを噴かせての姿勢制御から、彼女に向き返りシールドで防御。レーザーの射撃に間に合い、何とか防御に成功した。

『羨ましいほどの機体制御技術ですねっ!』

ティアーズを自身の周囲に戻し、元から浮遊させてあった2機、戻した2機の4つに自分自身を加えた5条のレーザーを真に向けて放つ。

『一斉射撃かっ!』

瞬時加速での回避。

ただの瞬時加速ではなく連続で行う二重加速で一気に距離を稼ぐ。

回避に成功したことを確認して、すぐさまビームライフルを展開しティアーズに向けて放つ。

連続で射撃を行うが、ビームに貫かれたティアーズは1機のみであった。

『ちいつ、ほんつと厄介だよ、ドラグーンはっ!』

『ティアーズです!それと人間は成長するのですっ!してみせますわっ!』

すでにセシリアはティアーズを2つ操作しつつ行動ができるようになっていた。

といつてもティアーズの操作についてはまだ「対象の背後に回って射撃」等の単純な行動をとらせる事しかできていないが、それでも彼女は大きく成長し続けている。

先程から真はフォースインパルスで彼女のティアーズとの同時攻撃に防戦一方である。

元々高い狙撃／射撃能力を持つセシリアに簡易的とはいえ攻撃を行ってくるティアーズ、多対一の形になっている。

だが多対一は逆に考えれば一網打尽にできるチャンスでもある。

セシリアはティアーズによる同時攻撃が可能となったとはいえまだまだ拙い。

牽制の為かティアーズののみが、一か所に集まって射撃を行う。  
一か所に集まったのならば「面」での攻撃に切り替える。

『そいつ、ビームコンフューズ!』

即座にビームサーベルを展開し、起動して投げ付ける。

回転してブーメラン状になったのを確認してライフルを放つ。

ビーム同士が干渉しあい拡散して、ティアーズに襲い掛かる。

残っていた3機のティアーズは拡散されたビームによって沈黙する。

『つつ!?!』

拡散されたビームはティアーズだけではなく後方にいたセシリアにも被害をもたらしていた。

シールドバリアによって弱いビームは弾かれるが反射的に目を瞑ってしまった。

即座に「ブラストシルエット」に換装。

上部装甲のカラーが瞬時に緑に変わり「ケルベロス」を展開、ロックオン。

『いつけえええっ！』

『くうっ!?!』

放たれた2門のビームを瞬時加速で回避。

しかし余波によってシールドエネルギーが減っていく。

まだエネルギーは残っている。

すぐさま体勢を立て直し射撃姿勢に移行。

しかし穂先がビームで形成された槍、「デファイアントビームジャベリン」を突きつけられていた。

ビームの発射後、体勢を崩したセシリアに瞬時加速によって詰め寄ったのだ。

『くう……っ!?!』

『……今回は俺の勝ち……だな』

穂先部分のビームの展開を解除して真が微笑む。

実際、そのまま突かれていたらエネルギー切れだったであろう。

『……そのようですわね』

悔しさをにじませつつ、ふうとセシリアは一息つき微笑む。

『これで3戦して1勝2敗……負け越してしまいましたわね』

『ドラ……ティアーズの同時操作で背後を取られたときには冷や汗をかいたよ、前より対処が難しかった。後は【面】攻撃に対する対処方法だな』

『【偏向射撃】<sup>フレキシブル</sup>が可能ならば先程の様な単純操作はしなくてもいいのですが……まだまだですわね。でも次は私が勝ちますわ』

『そつ、そうか、今後はレーザーが曲がってくるかもしれないのか。本当に厄介だな……！』

『ふふ、そのうちお見せできるように努力いたしますわ……おや、あれは簪さん？』

模擬戦後の反省会を空中で開いているとセシリアがAピット内を指さす。

ハイパーセンサーで確認してみるとそこには【打鉄式式】をピット内で簡易整備している簪の姿があった。

彼女はISスーツ姿であり、そばには本音の姿も確認できた。

『各部スラスタアの調整と稼働試験だな』

『彼女のISの完成度は現在どのような段階なんですか？』

『90%、あとは細かい調整と武装を組み込む段階だな、まあ、武装はしばらくはインパルスと共有のモノを使ってもらっただけだな』

『開発企業が同じだとそういう利点もありますね……それと1点、お聞きしても？』

そういつてセシリアは先程までオープンチャンネルで会話していたのにわざわざプライベートチャンネルに切り替えた。

『何だよ？』

『真さんは簪さんの事をどう想っていらっしやるのかな……と』

ニヤニヤとセシリアが笑いつつ真に質問を投げかけた

貴族といつても女の子、【そういう話】には興味があるのだ。

しかも学園内では中々に噂になっているのだ。



真と簪は実は付き合っているのではないのか——と。

『……どうなんだろうな、俺は』

少し寂しいような表情を浮かべて真は自嘲気味に微笑む。

『どう……とは？』

『いや、彼女が好意を示してくれてるのはわかってるつもりなんだ』

『気づいていたのですね。ふふ、一夏さんとは違いますね』

『流石にな』

結構ひどいことをお互いに考えていたのか互いに苦笑しつつ、真は想い返す。

1 つ目は救えなかったステラへの想い

——境遇を亡き妹と重ねた。そして彼女を悲劇から救えなかった。

2 つ目は自ら拒絶したルナマリアへの想い

——彼女の妹を殺した、殺させてしまった【傷】から発展したが彼女の事は大切だつ

た。だが自分は戦い続けるために彼女を遠ざけた。

『……簪にはI Sとかの知識については凄く世話になってるし、趣味も話も合うし、一緒にいると楽しいと思うんだ。彼女の笑顔を見れたときに本当に嬉しいと思えたんだ。これが【好き】って事なのか？』

思い出した2つとは違う3つ目。

C・E・より平和な【この世界】で生まれた簪への想い。

特別な事情や状況もなく自分から誰かを【好き】になるなんてしたことがなかったから、うまく受け取ることができていないのが現状だ。

『そうだと思います』

『……俺は誰かを好きになっていいのか』

ルナマリアの想いを拒絶してしまった自分が簪の想いを受け入れてもいいのか。

それにこの世界には【ラクス・クライン】がいる。

奴がいるのに誰かを愛してもいいのだろうか

——戦うためには簪も拒絶しないといけないのではないのか？

——だがそれでも考えている自分もいるのだ。

戦士として進み続けていた彼は、自ら惹かれてしまったことで判断がつかなくなっていたのだ。

『……真さんの過去に何があつたかは存じません。ですが人を愛することに理由はいらないと思います。私のお母様は貴族であろうが、どのような事情があろうがお父様を愛した。それはお互いを想い合つたからだと思うのです。愛の前に理由なんて些細な事だと、私は思っています』

悩む真に向かって、強い口調でセシリアが告げる。

『……もう一度、よく考えてみるよ。ありがとう、セシリア』

隣で浮遊している彼女の瞳をまっすぐ見て頷く。

『それがよろしいでしょう。友人として、その答えが良いモノであることを祈りますわ』

微笑みつつ、セシリアはそう返した。

Bピット内

「凄いだね、真って」

ISスーツ姿のシャルルが先程まで行われていた模擬戦の内容を思い出し呟いた。

隣には同じくISスーツ姿の一夏と鈴がドリンクを飲みつつ、模擬戦を眺めていたのだ。

真とセシリアの模擬戦の前に、一夏と鈴の模擬戦も行われていたのだ。

結果は3戦して1勝2敗——初戦は鈴相手に【二重加速】による零落白夜を当てて一夏は1勝していたのだ。

その後の2戦は戦法を切り替えた鈴の衝撃砲によって加速を遮られ、自力の差によって負けてしまったが。

「アンタやあいつ、まだISに触って数カ月でしょ？　それで代表候補生に勝てるのか

「どんだけよ、ったく」

鈴がジト目で一夏に視線を送ると彼はそれに気づかず、険しい顔で真を見ていた。

「姿勢制御や機体制御はやっぱり真が上か……でも加速してからの攻撃なら俺の方が

……」

「一夏？」

「ん、あつ、どうした？」

先程の険しい顔から一変していつもの一夏に戻る。

「どうしたの？」

「いつ、いや、何でもないんだ、やっぱり2人はすげーなつてさ」

シャルルの質問に慌てた様に取り繕う。

「……アンタならわかるでしょ、シャルル？」

「え？」

ぽかんと鈴に聞き返すシャルルに鈴は苦笑を浮かべた。

「女には分からない……【男の意地】ってやつよ、たぶん」

鈴は一夏の表情を見つめて悪くないわね、と呟いた。

模擬戦終了後 アリーナ内 整備室

模擬戦が終了した後、日出工業の人間——【瀬田利香】が真に件の品を届けに訪問してきたのだ。

現在メンテナンスベッドに鎮座している【インパルスガンダム】に【デステイニーシ  
ルエット】のデータと実物をインストールしている。

「後30分くらいかな、ごめんね、疲れてるだろうに」

「いえ、別に大丈夫です」

「私も大丈夫です」

制服に着替えた真と簪が利香に返答する。

その答えを聞いて再びごめんねと利香は頭を下げた。

「それと簪ちゃん、式式の方はどう?」

「後は私に合わせて調整して……完成です」

「よかった、調整の方は真君や本音ちゃんとやる予定なの?」

「はい」

「調整が終わった後でいいから、調整後の機体データを送ってくれるかな。以前選んでくれた【武装】にフィードバック予定だから」

「分かりました」

「そう言えば聞いてなかったけど、どんな武装を選んだのさ?」

真が以前確認した資料の中にはキワモノというか独創的な武装が多く見られた。

装甲を分離させての合体剣や合体砲、非固定浮遊部位をシールドとして、そこにクレイモアを仕込んだ「シールドクレイモア」etc……

簪がそこからどんなものを選んだかが気になったのだ。

「……秘密、でも近いうちに教えるよ」

少し顔を赤くして簪が微笑む。

それに照れたようにああ、と返す真であった。

「……なら、式式の正式名称も考えないとね。【打鉄式式】って【ペットネーム】みたいなものでしょ？」

青春青春と聞こえない程度の音量で呟きつつ、簪に尋ねる。

ペットネーム、それは戦闘機などに与えられる愛称のことだ。

【打鉄式式】という名前は打鉄の後継機であるため便宜上与えられた名前なのだ。

「あつ、それは私の方で考えても大丈夫ですか？」

「もちろん、簪ちゃん以外が決めたら意味ないからね。どんなのを考えてるの？」

その利香の質問に赤い顔のまま簪は真をチラッと見る。



当の真はインパルスにインストールされていくデータの羅列を眺めている。

「候補はいくつかあるんですが……もう少し考えたくて」

「……うん、こういうのは大事だからね、ちゃんと考えなくちゃ。決めたら連絡してね！」

利香がグツとサムズアップを取った。

その後、デステイニーシルエツトは無事インストールされたが、アリーナの使用時間が残り少なくなっていたためテストは翌日に持ち越されることとなった。

---

## 夜 自室

利香と別れた2人は夕食をとり、自室で休息をとっていた。

真はベッドに転がって小説をよみ、簪はクッションに座りつつTVゲームをプレイしている。

機体各所の様々なパーツを組み替え、自分好みの機体を作れる事で大ヒットを飛ばしたロボットゲームの続編だ。

結構な音量でプレイしているが、真はすでに慣れていた。

「これくらいの音量でいい？」

「大丈夫、それくらいなら慣れたからさ」

ゲームを一時中断して簪がジュースを冷蔵庫から取り出す。

それに小説から目を離さずに答える。

自分も飲み物でも飲もうかと考えていた時だった。

ドンドンツと部屋の扉が叩かれたのだ。

「本音？」

簪がゲームを再び一時中断して疑問の声を上げる。

だが本音はこんなに強く扉を叩いたりはしない。

「俺が出るよ」

小説をベッドの上において、扉に向かう。  
そして扉を開けると――

「真つ！よかった、居てくれたかつ！」

なにやら焦ったような一夏の姿。

すでに訓練は終わっており私服に着替えていた。

「なにか……」

「あー、えつと……頼む、ちよつと部屋まで来てくれ！」

「えつ、あつ、おいっ!？」

何か用かという台詞も終わらないうちに、一夏に肩を掴まれて自室から引つ張り出された。

その様子を眺めていた簪は首を傾げていた。

「何なんだよ、一夏、どうしたんだ？」

手を払って先を歩く一夏に疑問を飛ばす。

だがその疑問の答えは半ば自分の中にあつた。

(まさか……彼女のこゝとか?)

内心違つてくれと懇願したが現実には残酷であつた。

「シャルルの事で相談したいことがあつてき……頼むよ」

(……やっぱりか)

いつかばれるだろうとは考えていたがまさかこんなに早くとは思わなかつた。

シャルル——彼女がこの学園に来てからまだ2日なのだ。

「凄く重要な話なんだ、お前にしか頼めないんだ」

(……俺より先に千冬さんだろ)

こういうときに大人に頼らずにどうするんだ、と一夏に告げようとしたが半ば強制的に一夏とシャルルの部屋に連れ込まれた真であった。

## PHASE 23 明けた夜

真が一夏に部屋に連れ込まれて最初に目撃したのは、ジャージ姿のシャルルだ。だがその胸部には「女性の証」の2つの果実が自己主張するかのようにジャージの布を盛り上げている。

「シャルルは……女の子だったんだよ」

「はは……ごめんね、真。僕は君達を騙してたんだ」

その事を知っていた真はそこまで驚いてはいなかったが、無言でいたのが驚いていると2人に思われたようだ。

そしてシャルルの口から何故性別を偽ってIS学園に入学してきたのかが語られた。シャルルはデュノア社社長の愛人の子供であること。

彼女の母親が亡くなった後、デュノア社長に引き取られ、IS適正が高かったこともあり、デュノア社のISテストパイロットとして扱われていたこと。

テストパイロットといってもほとんどモルモットに近かったこと。

第3世代型ISの開発に遅れを取り、経営が傾き始めたデユノア社を立て直すために男性搭乗者である一夏のデータと、真のより詳細なデータを手に入れる事が決定されたこと。

フランス政府も秘密裏に彼女のデータを書き換えていたこと。  
そしてその目的のために男装を強要されてIS学園に入学したこと。

(……敵は【企業】と【国家】か。厄介だな、ホント)

シャルルの事情を聞いた真は素直にそう思った。

正直自分の手には余る——何とか救いたいとも思うのだが、生半可な手段では相手にできない。

首にかけていた【ドッグタグ】を握りしめ、手を離した。

「なあ、真、力を貸してくれ。俺はどうしてもシャルルを守りたいんだ！」

「……」

真の表情は暗い。

その顔を見てシャルルは顔を俯かせる。

「真、何で黙ってんだよ！」

シャルルの様子を見て一夏が真に叫んだ。

その様子に真はため息を混せて返す。

「……無理だ、一夏。【普通】にやったらどうにもならないぞ」

その言葉に一夏は真の胸倉を掴む。

一夏の表情は怒りに満ちている。

「何でだよ！ 何でそんなこと……何かできることがあるはずだろっ！」  
「ならどんな手段があるんだよ、言ってみろよ」

胸倉を掴みあげていた一夏の手を振り払う。

一夏は真を睨みつけ、次にシャルルに目線をあわせて何かを思いついたように表情を



変えた。

「そつ、そうだ、IS学園にはどんな国の干渉も受けないっていう規約があるじゃないか！ それならシャルルを守るじゃないか！」

名案を思いついたように真に視線を戻す。

背後のシャルルの表情が明るくなっていく。

一夏はその案を真に判断してもらいたいかのように視線を戻す。

確かにその案はいいかもしれない。

だがそれでは彼女を縛る【鎖】を断ち切ることはできないのだ。

「……確かに【普通の学生】ならその案で充分かもな」

「えっ？」

どういうことだ？と一夏は首をかしげた。

シャルルも表情を再び暗くさせていく。

「彼女の事情が複雑すぎるんだよ。考えてもみろよ、彼女はまず書類を【偽装】して学園に入学してるんだ……その時点で【犯罪】だ」

### 【犯罪】

その言葉が真の口から出た瞬間、一夏の顔が驚愕で歪んだ。  
おそらく考えてもいなかったのだらうなと真は内心苦笑していた。

「その規約だけど正規に入学した人間なら確かに守られるだらうな。俺やお前みたいに【特例】でもちゃんと正規に入学手続きをしてるからさ。だけど彼女は犯罪を犯してこの学園に入学した……その彼女に規約は適用されないだらうな」

「……ならどうしろってんだよ!」

やるせない怒りを振りまくかのように一夏が吼える

寮の部屋が完全防音でなければ外まで響いていただろう。

「……俺達の手には余るんだよ、彼女の件は」

「見捨てるってのかっ、見損なっちゃぞっ!」

「なら考え無しに動いて彼女の立場を悪くするってのかっ!? もつと冷静に考えろよっ！」

感情的になった一夏に釣られてしまい、つい真も叫んでしまった。

かつて守れなかった「ステラ」の姿が背後のシャルルと重なったのだ。

ステラは強化人間という境遇、シャルルと同じく自由を大きく縛られた存在だ。

真にとつても助けたいと心から思う存在だ。

故に考えなしに動いてしまった「かつての自分」と同じ行動を取ろうとしている一夏に怒りがわいたのだ。

「……悪い、叫んじゃまって。お前が優しいのは分かる、シャルルの事を助けたいと思う気持ちも分かる。なら何でもつと立場のある人に頼らないんだよ?」

「……立場のある人?」

怒りがまだ収まらないのか、一夏は真を睨んでいる。

「……千冬さんがいるだろ。あの人は初代ブリュンヒルデ。ISが普及したこの世界な

ら多大な影響力を持つ人だしこの学園の先生だ。まずは先生に頼るべきだったんじゃないのか？」

「……俺は千冬姉の付属品じゃないんだぜ？ そんなこと……」

一夏は千冬の事を身内として大事にしているが、彼女の立場を利用することには拒否感を持っている。

だが、この状況を変えるにはそれくらいの覚悟がいるのだ。

「確かに身内に頼るのは気が進まないかもしれないけど、彼女を「救いたい」のならそれくらいやる覚悟を持ってって事だよ、一夏」

「……」

一夏の表情が曇る。

それだけその行為に拒否感があるのだ。

「それにシャルル、君に聞いておきたい」

「……何？」

正体がばれただけでも大問題な彼女は、自分をかばってくれている一夏の案でも状況が好転しないため表情を暗くしている。

「君は【自由】になりたいか？」

「【自由】……そつ、そんなの当たり前じゃないかっ！」

彼女のアメジスト色の瞳から涙が溢れる。

「自由になりたいっ！ もうモルモットなんて嫌だっ！ 僕は女なんだっ！ もう一夏や皆を騙したくないっ！ 皆みたいに普通にお洒落して普通の女の子として生きたいに決まってるじゃないかっ！ だれか……助けてよお……！」

堰を切った感情は止まらず涙も溢れ続ける。

その様子を一夏は悲痛な表情で見えていたが、真は口元に笑みを浮かべて呟いた。

「……だ、そうですよ、【楯無】さん？」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！ 銀河美少女生徒会長、颯爽登場っ！」

生徒会長――

【更識楯無】が扉を吹っ飛ばす勢いで部屋に乱入してきた。

何故楯無がいるのか。

それは「待機状態」のインパルスを使って楯無にコアネットワークを介した通信を送っていたのだ――正確には【簪】を通してだが。

楯無の方にしても事情を知った一夏が頼るとしたらまずは真だろうと予測を立てていたので行動しやすかったのだ。

「えっ、生徒会長っ!？」

「ちよっ、マジかよ、一番知られちゃまずい人に!？」

「あー、大丈夫よ、とつくに知ってたから。私も真君も、それに織斑先生にも話は通ってるわ」

扇子で口元を隠しつつホホホと笑う楯無に何故喋ったという意趣をこめてジト目を

送る。

「ええっ!？」

「知ってたのかよ、真っ!？」

彼女が暴露した事情にさらに一夏とシャルルは驚く。

「……そりゃあれだけバレバレな男装してればな、事情は知らなかったけどさ」

「さて、本題に入りましょ？ シャルルちゃん、自由になりたいのよね？」

ふざけた態度から一変して真面目な顔になった楯無の顔に一夏とシャルルはたじろぐ。

「僕は……自由になりたいです！」

だがシャルルはまっすぐ楯無の顔を見て告げた。

その言葉に楯無は笑顔を浮かべた。

「なら任せなさいな！ 生徒の悩みを解決するのが生徒会長よ！」

その豊かな胸を揺らしつつ胸を張る。

だがそれに納得がいかない表情を浮かべるものがいた。

「でも、たかが生徒会ですよね……？ 彼女の問題解決できるんですか？」

一夏だ。

彼の疑問ももつともだが、楯無はそれにサムズアップで答える。

「まったくせんしやい！ 【うち】はちよーと特殊だからね、フランス政府をチョンチョンと突けばいいのよ、【裏】からね」

黒い笑顔で楯無は笑う。

（対暗部用暗部【更識家】……やっぱり楯無さんの事で間違いないか）



利香によってI Sの座学を叩き込まれた際に男性搭乗者の自分を【裏】から狙う【暗部】の存在を教えてもらっていたのだ。

楯無が持つ力はこの状況を打破するには最適なもの。  
故に真は彼女に頼ったのだ。

(簪もそうなのかな? まあ、彼女達がいい人であり味方であることには変わりないし、気にすることじゃないか)

ふと自分に好意を寄せてくれている女の子の顔が浮かび内心苦笑していた真であった。

「まあ、つまりは取引よ、【二重スパイ】って言えばいいのかしら?」

「二重……スパイ?」

聴きなれない言葉に、一夏とシャルルが聞き返す。

「そう。シャルルちゃんはこの側についてもらって、フランス政府とデュノア社の犯罪行為の【証拠】を得る。そしてその証拠を使って奴らを揺らしてやればいいのよ」

「なっ、なるほど……」

「まあ、シャルルちゃんにはもうちよつと我慢してもらうことになるかもだけどね、後悲劇のヒロインって事になるから、そこらへんは容赦してね？」

「……はい、それで自由になれるのなら僕はやります！」

強い言葉でシャルルは返した。

その後、楯無によつて話がまとめられ、シャルルはIS学園側のスパイとして【定期報告】に見せかけてデュノア社とフランス政府を揺らすための証拠を得ることとなった。

得られた証拠と楯無が——更識家が持つ証拠と合わせて、敵を揺らすのだ。

「さて、話が纏まったところでそろそろ消灯時間よ？　真君、部屋に戻りましょう？」

「あ、はい」

必要との事を楯無は伝え終え、真は部屋を出ていくために扉に手をかける。

「待って、真！」

「何だよ？」

真が振り返るとシャルルは頭を下げて涙でぬれた顔で微笑む。

「ありがとう、色々……」

「……俺は何もしてないだろ。話を通したのは楯無さんだし、助けようとしたのは一夏だ」

「それでも……色々と考えてくれたから……後……」

隣にいた一夏にも目線を合わせてから告げる。

「僕の本当の名前は『シャルロット』、シャルロット・デュノアが僕の本当の名前なんだ」

本当の名前を告げた彼女の表情は——笑顔だった。

「……頼っておいてなんですがホントに暗部の人だったとは思いませんでしたよ」

「……あら、知ってたの？」

「日出の人に教えてもらってました。まあ、だいぶ濁して教えてもらいましたけど」

一夏とシャルロットと別れ、廊下を歩きつつ真は楯無に告げた。

一瞬目を細めた楯無だったが、すぐに警戒を解いた

彼は敵ではないし、それだけの信頼はすでに彼に対してしているつもりだ。

「……女は秘密があつたほうがモテるのよ？」

「……まあ、楯無さんは美人だと思いますよ、それにあなたみたいな人好きですし」

「へっ!？」

楯無がぼかんとした表情になって立ち止まる——つい彼女を追い越してしまった真が振り向くと彼女は顔を真っ赤にしていた。

「しっ、真君は何を言ってるのかしらね、おほほほ……!?!」

手に持った扇子でパタパタと顔を扇いでいるがパニックになっているのが一目瞭然だ。

真は先ほど何気なく言った言葉を思い出してやっちまったと天井を仰いだ。

「……好きって言うのは人として事ですよ?」

「わっ、分かってるわよ、それくらい! お姉さんなんだからっ!」

(あー、この人打たれ弱いんだな……気をつけよう)

そう心に決めた真であった。

深夜――

すでにシャルロットは泣きつかれたのか早々に眠ってしまった。対して一夏はベッドの中で先ほどの事を思い出していた。

(……守るって……何なんだろう)

自分はただ彼女の事を守りたかった——だがそれは真に否定された。

(俺は……真に勝てないのかな……)

自分が直情タイプなのは理解している、中学では色々と真や弾に助けてもらった。  
【白式】という力を得た今なら守れると思っていた、全てを。

だがそんな自信は今回の件や無人機の襲撃事件で砕け散った  
シャルロットを救ったのは実質真なのだ。

(……くそ……)

真は自分にとって昔からの友人で親友だ、だから並びたい。  
なのに自分の行動は彼に追いつかない。

思考がどんどんマイナスに落ちていく。  
意識が落ちるまで、一夏は本当の守るとは何かについて考え続けていた。

## PHASE 24 蒼穹の翼

翌日 放課後 第3アリーナ

「……今、なんとおっしやいましたか？ ボーデヴィツヒさん？」

『何だ、聞こえていなかったのか？ ではもう一度聞け。 織斑一夏や飛鳥真など所詮は力の意味を知らん無能だと言ったのだ』

何故この2人が対面しているかと言うと、アリーナでセシリアがISの訓練を行っているとIS【シユヴァルツェア・レーゲン】を身に纏ったラウラが乱入してきたのだ。ラウラは一言二言挑発を放ったが、セシリアはそれを無視した。

だがその次にラウラが発した言葉は彼女にとって聞き捨てならないものだった——挑発の言葉がセシリアの心に染み込んで行く。

まるで【水滴】の様に。

そしてその水滴は彼女の心の水面に落ち、大きな【波紋】を起こす。



そして溢れるのは――

『……私の友人を侮辱いたしましたわね?』

【怒り】

静かな怒りが彼女の瞳に溢れている。

呼応するかのようにIS「ブルー・ティアーズ」が展開され、身に纏う。

いつもは優雅にゆれている彼女の髪の毛が不思議と逆立っているようにも見えた。

『フン、イギリスの候補生ともあろう人間が態々聞きなおさなければ理解できなかったのか?』

それさえも笑うかのようにラウラが答える。

『いい加減に口をお閉じになったほうがよろしいですわよ? 覚悟はよろしいですか?』

そう答えるや否や〔スターライトMK―Ⅲ〕を展開し、トリガーを引く。レーザーが放たれる直前にラウラはスラスターを起動して回避に移っていた。セシリアのライフルの銃口の向きから射線を読みきっていたのだ。

『ふん、その程度か?』

『そうやって上からモノを見れるのも今のうちですわ、ティアーズ!』

ティアーズが〔4機〕、本体であるセシリアから離脱し浮遊砲台となってラウラに迫る。

その行動に対して余裕の笑みを浮かべていたラウラの表情が初めて変わり、驚愕の表情となった。

『馬鹿な、貴様は同時制御など行えないはずっ!?!』

『人間は成長するのです! 淑女としては最低の行いですが、私怨で貴方を叩き潰させてもらいますっ!』

セシリア自身も今の自分の状態に内心驚愕していた。

同時制御はまだ2機が精一杯であったはずなのに、今は4機全てを自分の思いのとおりに動かせる。

しかもその操作を行いつつ自分は相手を精密に狙撃することもできる。

5条のレーザーがそれぞれ別角度からラウラに迫る。

『くううっ?!』

瞬時加速で何とかレーザーの包囲網から離れるが、ティアーズはなおもラウラに砲口を向けている。

『舐めるなあっ!』

ラウラは怒りと叫びと共に左目の眼帯を引きちぎる。

その下には「金色の瞳」が存在していた。

その瞳の名は「ヴォーダン・オージエ」

擬似的なハイパーセンサーであり、情報処理能力を飛躍的に高める代物だ。

彼女のそれは「ある理由」から制御不能となつてゐるものだ、彼女の処理能力を超える情報を脳に叩き込んでくるため普段は眼帯で抑えている。

だが短時間ならば利用することが可能だ。

思考が加速し、迫ってくる全てのティアーズの位置が手に取るように分かる。

同時にセシリアが何をしようとしているのか、行動の1つ1つがスローモーシヨンに見えている。

『止まれえっ！』

ラウラが吼える。

するとまるで空中に固定されるかのように迫つてゐたティアーズ4機が「停止」した。

【アクタイプ・イナーシャル・キャンセラー】

これがティアーズが空中で停止した理由であり、ラウラの第3世代IS【シユヴァルトエア・レーゲン】に搭載された武装。

この武装の機能は対象を任意で「停止」させること。

本来ならば複数相手では相性が悪いが今は【ヴォーダン・オージエ】によつてブーストされている、故にティアーズ全てを停止させることができたのだ。

『なっ!?!』

『遅いぞ、雌豚あつ!』

咄嗟にラウラに向けライフルの銃口を向けるセシリアだったが、今のラウラを捉えるには遅すぎる。

瞬時加速により距離をつめ、腕部プラズマブレードを起動し叩き付ける。

ミサイルビットの起動も間に合わないほどの速度であった。

『くうっ!?!』

瞬時加速によって加速された状態での攻撃によりセシリアは弾き飛ばされるが、一瞬で空中に静止させられた。

レーゲンから射出されたワイヤーブレードが身体を完全に拘束していたのだ。

『手こずらせてくれたな……イギリスの雌豚ごときが!』

『うぐっ……!?!』

金の瞳を宿す左目を閉じて、レーゲンの左手でセシリアの首を掴み締め上げる。

ISの機能の1つであるスキンバリアも抵抗を続けるがレーゲンの力の前には無力に等しかった。

「かつ、はっ……!」

『見せしめだ、そのまま無様な顔を見せ続けろ、そうすれば織斑一夏をおびき出す餌にもなるだろう』

シールドエネルギーが見る見る間に減っていきついにはブルーティアーズも機能を停止する。

スキンバリアが抵抗を続けているがセシリアの意識が薄れていく。

『多少は手こずったがこの程度か……2号機が奪われるなど大失態を犯す国だ、候補生もこの程度だというのも頷けるな』

ラウラが冷笑を浮かべる。

薄れ行く意識の中でそれを見てしまったセシリアは涙を零す。

悔しい。

大事な友人への侮辱の言葉を撤回することもできなかった自分への憤り、情けなさが溢れる。

その時であった。

『っ!?!』

ラウラの表情が驚愕に変わり、背後を振り返る。

『はあああああああっ!』

【翼を持った青い機体】

薄れた視界の中では誰か判別できなかつた。

その機体が手に持った2本の【大型実体剣】でラウラに切りかかったのだ。

ラウラの反応が遅れるほどの【速度】であった。

咄嗟にセシリアを掴んでいた手を離してラウラは離れた。

瞬間、自身を拘束していたレーゲンのワイヤーが切断され、身体が自由になる。

だがブルー・ティアーズは機能を停止しているため、自然と落下していくことになる。

しかしすぐに何かに身体を包まれた。

薄れた視界で一瞬だけピントが合った。

黒髪に紅い瞳を持った【少年】

「し……ん……さ……」

『大丈夫かつ、セシリアっ!?!』

【背中に持つ翼】から青い光が溢れている

——セシリアは見たこともない装備だが間違いない【インパルス】、そして【飛鳥真】であった。

『簪、セシリアを頼む!』

『うんっ!』



アリーナに張られていたシールドバリアの一部を突破して真がセシリアの下に駆けつけたのだ。

そしてシールドバリアにあいている穴の外側にいる簪も【打鉄式式】を装備している。真はセシリアの身体を揺らさないように簪に預けて振り返り、背の【ステイニーシルエツト】の【ヴォワチユール・リュミエールユニット】を広げる。

今のインパルスは【ステイニーシルエツト】に換装しており、その背部には翼型の大型スラスターを兼ねている【V Lユニット】を背部に非固定浮遊部位として展開している。

各部表面装甲はかつての恩人である【コートニー・ヒエロニムス】が搭乗していたM Sステイニーインパルス3号機を模しており、白と青で彩られている。

(き……れい……)

意識が完全に闇に落ちる前にセシリアが見たのはとても美しく広がる【青い光の翼】であった。

『飛鳥……真っ!』

体勢を立て直したラウラが真を射殺すように睨み付ける。

だがそれは真も同じだ——紅き瞳に怒りを宿し、ラウラを睨み返す。

真は簪と共にデステイニーシルエットのテストのために第3アリーナに向かっていったのだ。

アリーナでセシリアがラウラに攻撃されていると、アリーナから出てきた生徒に聞き、I Sを展開して駆けつけたのだ。

今は張りなおされているがシルドバリアはデステイニーシルエットの出力全開の状態ならば一部破損させて侵入することができた。

『セシリアの機体は機能停止していた、何であそこまで痛めつけたっ!?!』

『フン、奴には織斑一夏をおびき出す餌になってもらいたかったが……まさか貴様が先に来るとはなっ!』

右肩部のレールガンユニットから弾丸を発射する。

だが今のインパルスにはその射撃は遅すぎる。

光り輝く青い光の粒子を撒き散らしてインパルスは回避する。

すかさず右手に持つビームライフルによって反撃を行う。

だがラウラもその射撃を回避していく。

真のライフルの射線を読んでいるのだ。

『アンタ軍人だろ、何で他人をあそこまで傷つけることができるんだよっ!』  
『知ったことかつ、私の目的の邪魔をするのなら貴様も潰すっ!』

瞬時加速。

腕部プラズマブレイドをインパルスに叩き付けるために振り上げる。

だが青の残光を残してラウラの視界からインパルスが消えた。

正確にはレーゲンのハイパーセンサーがインパルスの位置を把握しているがすでに

【背後】を取られていた。

ハイパーセンサーで感知できても人の身体が追いつかないのだ。

『なっ、速いつ!?!』

『そこだあつ!』

『ぐうっ!?』

実体剣【エクスカリバー】をレーゲンの背中に叩き付ける。

装甲の一部が破壊され落下していく。

連撃でエクスカリバーを振り上げるが、2撃目はスラストターを噴かれ回避された。

『何だそのスピードはっ!?』

ラウラの顔が再度驚愕に歪む。

『……あんたは敵だって事がわかったよ、今ある【花】を散らす……俺の敵だっ!』

真は冷たい目で彼女に言い放つ。

『いくぞ、デステイニーインパルス!』

【光の翼】が開かれ、青い光がアリーナに広がる。



「なっ、何がどうなってるんだ、真とラウラが……!？」

「何で彼女と真が……!？」

セシリアが第3アリーナでラウラと戦っていると聞いた一夏とシャルロットは真に少々遅れてアリーナに到着していた。

セシリアを抱えてアリーナの出入り口に向かってきた簪と目が合う。

「簪さん、セシリアはっ!？」

『大丈夫、オルコットさんなら気を失っただけだから、保健室へっ!』

そう告げて簪は、セシリアを保健室へ連れて行くためにアリーナから飛び出している。

再び視線を2人に戻すと状況が変わっていた。

突然、ラウラが絶叫したのだ。

「【泥】……!？」

ラウラの機体から【黒い泥】の様なものが溢れていたのだ。

## PHASE 25    ignited

『何が起こったんだよ、【泥】……なのか、あれ』

変化は突然起こった。

目の前の【敵】であるラウラが絶叫したかと思うと彼女の機体のフレームが溶け出し、まるで【泥】の様な黒い粘着質な液体が溢れて、彼女を包み呑み込んだのだ。

そして【泥】の塊はゆっくりと形を整えていく。

まるで粘土を捏ねて人型を作っていくかのように。

泥の動きが止まるとそこにはISサイズの人型が存在していた。

【長髪の女性】のようにも見えるその腕には同じく泥で形成されている大型の【刀】。

人型のそれ——便宜上黒レーゲンと呼称——は手に持った刀を馴染ませるかのよう  
に数度振るう。

『……雪片っ!?!』



友人である一夏の白式の得物【雪片式型】と形状が似ている刀。だが微妙にデザインが異なっている。

黒レーゲンが素振りを完了させて、中腰で構える。

瞬間、真の眼前に黒い刃が迫っていた。

『ぐっ!?!』

咄嗟にデステイニーインパルスの左腕に装備されている実体シールドを構えるがあまりの威力の強さに受けきれず弾き飛ばされる。

『なんてパワーだよっ!?!』

黒レーゲンは雪片を上段に構えて、体勢を崩した真に向けて振り下ろす。

だが今のインパルスと真ならばその攻撃は脅威にならない。

『いれくらっ!?!』

非固定浮遊部位であるVL、【光の翼】が煌いて真は後方に加速。体勢が崩れてるのも合わさり思いっきりのけぞる形となった。

仰け反った勢いのまま、右足のスラスタを点火させて黒レーゲンの雪片を蹴り飛ばす。

すかさず雪片を蹴り飛ばした勢いをそのままに距離を取った。

弾き飛ばされた雪片は泥となって地面に落下していくが、黒レーゲンの手には新たな

【雪片】が即座に再生していた。

その様子を観察しつつ真は自機、インパルスのエネルギーを確認する。

インパルスのエネルギーを確認する。

すでにセシリアを助けるため、最大出力のVL稼動を行っている。

そしてデステイニーシルエットの【欠点】

劣悪な燃費もあいまってすでにエネルギーは6割を割っている。

長引けば不利。

短期決戦を狙うしか方法はない。

『……………厳しいな』

自嘲の様に呟いて「エクスカリバー」を握る両手に力をこめる。  
その時であった。

『ふざけんなああああああああっ!!』

先ほど真が破壊し、再生してたシールドバリアが先ほどよりも大きく「破壊」された。  
同時に突っ込んでくる「一夏」の白式。

アリーナにいる生徒の数はシャルロット等を含めても10人に満たないが、その行動は褒められたものではない。

握る「雪片式型」は零落白夜を発動しているため光り輝いている。

そのまま加速を続けて黒レーゲンに振り下ろす。

だがその一撃は黒レーゲンに当たる前に右腕を破壊されて中断された。

いくつかの「泥の雫」が零落白夜を発動している「雪片式型」によって消えていくが、黒レーゲンは構わずに居合い抜きの一撃をカウンターで叩き込んだのだ。

そしてそのまま黒レーゲンは一夏に返す刃で斬りかかる。

しかしその刃は空を切った。

『何してるんだよ、一夏っ!』

一夏が黒レーゲンに迎撃された時点で、真はVLを稼動状態にし一夏を抱えて回避していたのだ。

『離してくれ、真! あいつのあの剣……あれは千冬姉の、千冬姉だけの剣なのに!』

抱えた一夏が抵抗しつつ真に吼える。

『あれは千冬姉の真似なんだよ! だから俺がやらないと!』

『お前はこんな時に何を言ってる……まずっ!』

『うわっ!?!』

一夏の行動に毒を吐きそうになった真だったが、黒レーゲンが2人をまとめて切断するため

剣を振り上げていたため一夏を弾き飛ばし、エクスカリバー2本を交差して何とか斬撃を受け止めきる。

真に弾き飛ばされた一夏が即座に体勢を立て直して【雪片式型】を構える。

真が抑えているため黒レーゲンは動けない、今ならば奴の剣を切り裂くことができ、

と一夏が思考したとき——黒レーゲンにある【変化】が起こった。

「タ……………ス……………テ……………」

黒レーゲンの腹部から【声】がしたのだ。

インパルスと白式のハイパーセンサーは確かにそれを拾った。

『つ、ラウラかつ!?!』

VLを稼動状態にし、得られる推力をエクスカリバー2刀に加えて黒レーゲンを弾き飛ばす。

今の【声】で真の頭の中で目的が切り替わった——破壊するのではなく、中にいる【ラ

ウラ」を助け出す。

そのためには――

(泥を消滅させるためには……………零落白夜か！)

先ほどの一夏の奇襲の際に、零落白夜によつて泥が消滅していることを確認している。

ならば中にいるはずの「ラウラ」を引っ張り出して黒レーゲンの機能を停止することが可能なはずだ。

インパルスの残存エネルギーに余裕はない。

1人ではかなり厳しい状況であり、一夏の協力を得る必要がある。

『一夏っ！ 奴の中からラウラを……………っ!』

一夏に視線を合わせると、どういう訳か一夏は顔を「蒼白」にしていた。

先ほどまで迸っていたはずの怒りの感情も消えている。

ハイパーセンサーで感知すると震えているのも分かる。

『いつ、一夏っ!? いきなりどうしたんだよっ!?』

黒レーゲンからの斬撃を回避しつつ、一夏に向けて叫ぶ。

この非常時に彼に何があつたのかは分からないが、よくない事がおきたのは感じ取つていた。

真の叫びに一夏から震える声で返答があつた。

『……………俺、わかつちまつた……………俺の【守りたい】って気持ちも、そんな【泥】みたいな奴と同じ【真似】なんだって事が……………薄っぺらいつて事が……………っ』

両手に握る【雪片式型】も彼と同じように小刻みに震えていた。

---

絶対に許せるものかと思つた。これまで感じたことがない位に怒りを感じた。

真が奴を抑えてくれている、今が絶好のチャンス。

そこまで思つた瞬間、白式のハイパーセンサーは声を拾つた。

「タ……………ス……………テ……………」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

いけ好かない態度を取った転校生でいきなり頬を叩かれた。

そしてセシリアを攻撃して、今こうして憧れでもある千冬姉の剣を【真似】ている機体を持つ相手。

だけどそんな奴でも戦うことを強要されているのなら助けないと。

そこまで考えた瞬間、俺の中で何かがピタッとはまってしまった。

そのキーワードは【真似】

——ずっと考えていた【守る】ことに対する疑問が解消してしまったんだ。

【守りたい】

俺が白式を得てから感じていたこの気持ち。

幼い頃から自分を守ってくれていた【千冬姉への憧れ】

尊敬している姉を【形】だけ真似ていると言うことに気づいてしまった。

——そんな俺は目の前の敵と何が違う？



そして今相対している黒い I S との戦いに参加した、本当の理由についても理解してしまった。

【千冬姉の剣】を守る。

それは建前で本当はただ自分が【気に入らなかつた】からって事に気づいてしまった。力を求めた理由も同じだ。

【真】や【もう一人のあいつ】みたいになりたいという【憧れ】だけで戦っていた。

——【力】を得ることの意味なんて全然考えたこともなかつた事に気づいてしまった。

【薄っぺらい】

自分の行動を振り返ると本当に薄っぺらい。

先ほども感じていた怒りが消えていく。

同時にどういう訳か身体が震えだした。

怖いわけじゃなくて、ただどうしようもなく情けない気持ち溢れてくる。

『いつ、一夏っ!?! どうしたんだよっ!?!』

真の声が耳に届く。

『……………俺、わかっちゃまった……………俺の【守りたい】って気持ちも、そんな【泥】みたいな奴と同じ【真似】なんだって事が……………薄っぺらいって事が……………っ』

何とか真にそう返せた。

こんな状況でしていいことじゃないのは分かっているのに涙が出てくる。

俺は真みたいに戦えない。

——こんな薄っぺらい俺じゃきつと真の横になんて立てない。

震える手から力が抜けていく、【雪片式型】が手から零れ落ちそうになったときだった。

『一夏っ!!』

真の叫びが耳を貫いた。

『お前が何を思ってるかなんて知らない！ だけどお前は彼女を助けたいと思ったんじゃないのかっ!?!』

真が黒い I S からの攻撃を引き付けつつ叫んでくれている。

『それは決して間違いなんかじゃない！ それはお前だけが感じたもののはずだ！ 誰かの真似なんかじゃなく!』

攻撃を盾で防ぎながら真が俺に言葉を投げかけてくれる。

——助けたいと確かに思った……だけど、俺は……俺にできるのはただ格好を真似るだけ……

『【助けたい】と感じたことは決して薄っぺらなんかじゃないっ!! 俺も同じなんだよ！俺は今ある命を、【花】を散らせないために戦ってるっ!それは俺が助けたいと思ったからだ！俺自身が決めただ！だからお前も決めろよ、一夏あっ!!』

——そうだ、守りたいと憧れたことは真似だけど、助けたいとそう感じたのは俺自身だ。

——俺の戦う理由、やつと少し分かった気がする。

——ありがとう、真。

真が一夏に向かつて叫ぶと同時に、黒レーゲンが手に持った雪片を投擲してきた。

泥の塊の見える腕から想像できないほどの力で放たれた雪片を真は実体シールドで弾き飛ばす——

一瞬その投擲に意識を持っていかれてしまったため、黒レーゲンが放ってきた蹴りに対して行動が遅れた。

『ぐうっ!?!』

何とか右腕を使つて防御が成功するが、防御を抜いてきた衝撃に固まる。

即座に黒レーゲンは雪片を再生。

その刃で真を切り捨てんと斬りかかる。

だが、その刃は「白い刃」によって弾かれ、泥が光に消えていく。

零落白夜を発動した【雪片式型】——一夏が黒レーゲンの刃を受け止めていたのだ。

『……誰かを助けるために戦う、それが俺自身の心が出した俺の戦う理由だあ!』

返す刃で黒レーゲンの左手を切り落とす

本体であるラウラは黒レーゲンの腹部にいるため左手を切り落としても問題はない。

黒レーゲンは一夏と真から離れる。

すると泥が少しずつ動き、切断された左手に集まっていく。

『再生するのかよ』

『みたいだな……で、もう大丈夫か、一夏?』

真が横に浮遊している一夏にたずねる。

それに苦笑しつつ一夏は答える。

『……ごめん、いきなり割り込んで、いきなりパニくって混乱させちゃってさ』

『……いいさ、友達だろ』

『……ああ』

真は右手、一夏は左手。

コツンと機体の拳をあわせて、互いの得物に力を込める。

『あいつの泥は俺の零落白夜で払える』

『ああ、その隙は俺が作ってやる』

『頼りにしてるよ、真』

『ああ、任せてくれ、彼女はお前が助けるよ』

『ああ、任された』

【光の翼】が広がり、真は黒レーゲンに向かって加速する。

すでにインパルスのエネルギーは3割程度しかない。

この接触がラストチャンス。

だが、失敗の予感を真と一夏は毛ほどに感じていなかった。

全力で信頼できる【相棒】がいるからだ。

『アステイニーインパルスならこういう戦い方ができるはずだっ！』

高速移動を続けつつビームライフルを展開し、トリガーを引く。

狙いは両腕と両脚——4発のビームがレーゲンに放たれる。

だが直前に腕を再生させた黒レーゲンは瞬間的な加速で、発射されたビームを横方向に避ける。

『次はコイツだっ！』

ビームライフルを格納し、両手にビームブーメラン【フラッシュエッジ】を展開し投擲。

ビームによって光輪となったフラッシュエッジを黒レーゲンは手に持った【雪片】で弾き飛ばす。

その行動は真にとっては計算通り。

雪片で迎撃すると同時にエクスカリバーを構えて光の翼を広げる。

『叩き切ってやるっ!!』

V Lユニットから得られる推進力によって残像を残すようなスピードで突貫する。しかしそれにも黒レーゲンは反応を示した。

突如雪片が黒レーゲンの「両手」に生成された——その2刀で突貫してくる真を両断した。

だが、切断したはずの「真」の姿がぶれて消えていく。

そして逆に黒レーゲンの両手が雪片ごと切断され宙を舞っていた。

切断されたはずの「真」は光の翼を煌かせつつ、黒レーゲンの背後を取っていた。

【ミラーージュコロイド】

V Lとは別にステイニーインパルスに搭載されている機能。

元となったのはM S【ステイニー】に搭載されていた残像を投影する機能

ミラーージュコロイドによって「偽りの真」を投影して、囷に使ったのだ。

この機能はI Sの持つハイパーセンサーですら誤認させる事が可能だが、その分エネルギー消費が激しい。

燃費が劣悪なV Lユニットと相まって残存していたエネルギーは【E m p t y】を示



していた。

——だが今度こそ黒レーゲンの動きが止まった。

『今だ一夏あつ!!』

『うおおおおおおおつ!!』

真の叫びと共に零落白夜を発動させた雪片式型を構えた一夏が黒レーゲンに突っ込む。

今の一夏に迷いはない。

自身の出せる最高速度で黒レーゲンの懐に潜り込んだ。

そしてそのまま、雪片式型の刃は立てずに優しくソフトに黒レーゲンの腹部に押し当ててる。

瞬間、泥が光となって消え、泥の中から「ラウラ」が現れた。

ラウラを泥の中から引っ張り出し離脱する——同時に今まで活動を行っていた泥が沈黙し、落下していく。

落下した泥は動きを止めて、次第にぼろぼろになった

ラウラのIS「シユヴァルツエア・レーゲン」へと姿を変えていく。

『……終わったみたいだな』

エネルギー切れでゆっくりと下降を続けていた真が呟く。

『ああ、ラウラは無事だ……本当に良かった』

救出したラウラが息をしている事を確認し、一夏が真に答えた。

「ああ、シンっ、それに一夏……っ！」

恍惚とした表情でラクスは呟く。

先ほどもまでの戦闘をVTシステムを通じてラクスは見ていたのだ。何も表示していない空間投影ディスプレイを消して部屋のベッドに倒れこむ。

「一夏の迷いのなくなった表情……それにシンに翼がつ、ああ、たまりません、たまりませんわぁ……っ！」

熱い吐息を漏らしつつ、ラクスは笑う。

「でもまだだめ……あの翼はシンの【本当の翼】ではないし、一夏もまだまだ光るはず……ああ、でもたまらないですわぁっ！」

しばらくの間、暗い一室では狂喜の媚声が響いていた。

## PHASE 26 自分というもの

「……………」

ぼやける視界——数度のまばたきではつきりとした視界を確保する。

意識を回復したラウラが回復した視界で辺りを確認し、自分がどうやら保健室にいるということを理解した。

カーテンに仕切られているベッドに寝かされている様で、少し薄暗い。自分の身体を確認してみるといくつか包帯が巻かれていた。

「ぐうつ……………」

起き上がろうとしたところ、全身の筋肉が悲鳴を上げ苦痛が走った。

だがそれでも無理やり上半身だけ起こすとカーテンの仕切りから憧れの人物が現れた。

「起きたか、ラウラ」

「教官……私は……」

「全身打撲に筋肉疲労。いくらお前でもしばらくは安静にしている」

そつとラウラの肩に手を当てて、千冬は彼女を寝かせる。

「教官……」

「【VTシステム】は知っているか？」

「……はい。過去のモンド・クロツソのヴァルキリー、部門受賞者の動きを模倣するシステムで、現在の国際条約によつていかなる場合も使用が禁止されているモノだと認識しています」

「そうだ、それがお前のISに搭載されていた」

「……っ」

「ドイツに確認したところ秘密裏に搭載されていたようだ。お前のISの開発者陣もその事は知らなかったようだし、責任者はすでに【雲隠れ】して責任の所在も有耶無耶だ。それにどうやら【外部】からシステムが強制起動した痕跡があった……暴走の責任はお前に行かないよう努力するつもりだ」

やれやれと言った表情で千冬がため息をつく。

俯きつつ、ラウラはベッドのシーツをきつく握り締めている。

「……何もできなかった。あの声の前には私は何もできなかったのか……」

「……ラウラ？」

「……私には力しかない。ですが今回のような暴走事件を引き起こしてしまいました、これでは私の存在する意味など……」

ポタリポタリ、とシーツに彼女の涙が零れ落ちていく。

遺伝子強化素体として生を受け、ただただ力を求めた。

一度は左目の影響で地に落ちたが、千冬のおかげで持ち直しより強くなることができた、しかしVTシステムには抗えずに飲まれてしまった。

強くなることしか知らなかった彼女にとって、それは自分の存在意義をなくす事と等

し――

「ラウラ・ボーデヴィツヒツ！」

黒い思考に囚われていたラウラの意識が、千冬の大声で現実に戻される。

「お前にあるのは力だけではない。でなければ織斑と飛鳥はお前を助けようとはしなかったはずだ。遺伝子強化素体？ そんなことは関係ない。あの2人はお前の事をただの女の子だと考えて助けたのだ」

「私が……女の子？」

ラウラにとってその言葉は今までの価値観に大きなヒビを入れた。

まともな生を受けなかった彼女にとってそのように認識される事などなかったのだ。

だが今になって思い返せば黒ウサギ隊の皆もそのように自分を考えていたのかもしれない。

自分はそれを受け取らずに拒絶してしまっていたが。

「直接あの2人に聞いたからな、それは確かだ」

「……ですが私はあの2人に……」

「関係を修復するにはまず【謝罪】だ。それにこれからはこの学園に3年間は在籍するの

だ。その間に力だけの価値観からお前だけの……ラウラ・ボーデヴィツヒだけの、価値を見つければいいんだ、ラウラ」

優しくラウラの頬を撫でた千冬はそう言って再びカーテンの仕切りを開く。

「周りに頼ることは何も悪いことではない。今のお前ならきつと皆も助けてくれるはずだ……今はゆっくりと休め」

そう言って千冬は離れていく。

(価値……私だけの価値か)

今千冬の言った通り、皆に頼る事ができるのならば空っぽだった自分の中身を満たしていけるのでは。

心が軽い。

今までこのような事はなかった。

そこまで考えて再び睡魔が襲ってきた。



千冬と助けてくれた2人に感謝してラウラは意識を手放した。

同時刻 自室

「……っあー」

机の上に乗せられた反省文の山。

真や一夏は今回の事件を収めたがISを使った私闘であることには変わりなく大量の反省文が罰として科せられていた。

すでに半分程度は終わっている。

だが戦闘で疲れた体でたっぷりと千冬に絞られた後なのだ、ペースが目に見えて落ちていく。

グリグリと右腕を肩から回してストレッチを始める。

その様子を簪は苦笑しつつ眺めていた。

彼女自身もセシリアを医務室に連れて行くのにISを無断使用したが、真よりは少ない反省文で済んだのですすでに提出も終わっている。

セシリアの容態は全治1週間の怪我であり、IS学園の保健室で安静にしている。

怪我自体は大したことはないが念のための処置との事だ。

なおイギリスの候補生が暴走したドイツの候補生に負けたという情報は、すでにイギリス本国に届いている。

しかし同時制御を行いつつ行動できるセシリアの成長についても報告がされており、セシリアについては立場が変わることはなく依然として代表候補生として活動できる事となっている。

ブルーティアーズについてはほとんど欠損した部分がないためパーツの交換程度で済んでいる。

ドイツについては今回の暴走事件はまさに寝耳に水であった。

国際法上禁止されているVTシステムが代表候補生のISに搭載されていた。

加えてイギリス代表候補生をその候補生が傷つけたと言う大問題であるからだ。

イギリスとドイツの国家間の友好にもヒビが入るかと思われたが、ドイツ上層部はAIC技術の無償提供を決定。イギリスはドイツから無償提供されたAIC技術によって今回の事件について和解する方針を固めた。

ラウラについては1ヶ月間の謹慎処分及び階級の大幅な降格処分が決定された。だが代表候補生の立場や専用機「シユヴァルツエア・レーゲン」については剥奪されることはなかった。

これについてはラウラの能力を惜しんだことと、千冬による交渉の影響が高いのだが。

余談となるがヴォーダン・オージェやVTシステム等の研究をしていた研究部門は物理的に潰されていたとの事だ。現在ドイツ本国ではその件について調査中であるとの事だ。

—— 閑話休題

「真、お疲れ様」

簪が真に冷蔵庫から出したジュースを手渡す。

ありがとうと真は受け取って蓋を開け、一気に飲み干す。

炭酸飲料の刺激が心地いい。

「後半分か。明日までに出さなきゃいけないからさっさと書かないと……よし、やるか」

時刻はすでに21時を回っている。

消灯時間まで後1時間程度しかないため、ペースを速める必要が合った。

「……ねえ、真、デステイニーシルエットはどうだった？」

「武装もV.L.ユニットも問題なく思ったとおりに動いてくれたかな。今回はビーム砲塔は使えなかったけど……」

今回使用したデステイニーインパルスの武装の中で、ブラスト装備に該当する

【テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔】2門は使用していない。

このビーム砲塔は手持ちで使用するケルベロスとは違い、背部から砲塔が伸縮する形式を取っており手で保持する必要がないため使いやすいものだ。

「気になるのか？」

「えっ、うん。全部乗せてってロマンあるから……ちよつとね」

少し照れたような表情を浮かべる簪に、真は微笑みつつそうかと返す。  
そして再び反省文を書き始めるが、今回の件で気になった事が頭に浮かんでくる。

(……ラウラの暴走……まさかラクス・クラインなのか?)

千冬が言うには、彼女の機体にはVTシステムという条約で禁止されているモノが搭載されており、それが外部からの干渉で発動したとの事だ。

心当たりとして有力なのはラクス・クライン。

以前カナードが真に伝えていた。

彼女は東の技術と記憶を持っていると。

(……カナードと連絡が取ればなあ……)

彼と連絡が取れば色々と状況が見えてくるはず。

だが依然として彼からの連絡もない。

(あいつ、今何してるのかな……東さんと一緒って事は苦勞してそうだけど)



場面が再び切り替わり、今度はMSのコックピットに場面が変わる。

敵MSを仕留めたと男の声が響く。

すると身体がまるで風船の様に膨れ上がっていく。

それと同時に全身に激痛が奔る。

ボンツと気色悪い音と共にMS毎爆発する。

——やめて、やめて！

場面がまた切り替わり、コロニーの残骸が地球に向けて落下していく光景に変わる。

大型の戦艦から発射されたビームにより残骸が破壊されるが、全てを破壊しきれず破

片は地球に落下していく。

落下した破片は津波を引き起こし、都市部を飲み込む。

破片が都市部に直接落下して甚大な被害を引き起こす。

——もうやめてえ！

場面が切り替わり、雪の中で蹲る自分——篠ノ之束——に変わる。絶望した。

——夢の中の世界では人類は宇宙に生活の場を広げていた。なのに世界は今と何も変わらず——いやさらに酷くなつて行く。

「…………私の夢が…………そんな…………宇宙に出ても人間は何も変わらないの…………つ!？」

絶望して涙が溢れてくる。

そんな時であった。

「大丈夫ですわ、束さん」

そんな声が聞こえて振り返る。

そこには桃色の髪を持ったドレス姿の女性が立っていた。

年齢は自分とそう変わらないだろう。

「あの世界…………C. E. とこの世界は違いますわ、だって貴女と私がここにいます」



もの」

篠ノ之東は一部の人間しか認識しないとされている。

だがドレス姿の彼女は不思議と認識できていた。

微笑みながらその女性は東に手を伸ばす。

「何も怖がることはないですわ、お友達になりましょう、東さん？」

ああ、彼女と一緒に変えられる。

そう思って東は彼女、ラクス・クラインの手をとってしまった。

——やめてえええ！

……ね……ばね……東！

「東っ！」

目を開けるとそこには見知った顔。

カナード・パルスの顔があつた。

いつも仏頂面の彼だが、焦りの表情を浮かべていた。

「カナ……君……」

目の前の完成直前の I S、【紅椿】の調整中に寝落ちしていたようだ。

「……またその夢を見ていたのか？」

「……うん」

カナ君が私を抱きかかえてくれる。

俗に言うお姫様抱っこの形で。

「ちよっ、カナ君!？」

「……じつとしていろ、それにクロエも心配している」

カナ君が視線を後ろに向けると。

クーちゃん、「クローエ・クロニクル」が心配そうな顔でこちらを見ていた。

「束様。あまり無理はしないでください」

「クーちゃん、ごめんね……それにカナ君も」

「いい、ラキに病人食でも作らせるからそれができるまでは休んでいろ」

「うん……ありがとう」

そうやって彼に任せてベッドまで連れて行ってもらおう。

「……それとドイツの施設は潰しておいた」

「……うん、ありがとう」

「奴がVTシステムの基礎を作ったと言うのは本当らしいな。しかも日本でVTシステムが発動したらしい」

「分かってるよ、あいつが基礎を作ったVTシステムだから外部干渉ができたと思う。それにあいつは私以上に目的に執着する。きつと目的の近くに居たがるはず………だか

らあいつは日本にいる……!」

現に有力な地上施設はあらかた調べ終えた後であるからだ。

なんとしても止めなければならぬ。

私があいつの中にあつた私の技術と記憶を目覚めさせてしまったのだから。

「……それと……篠ノ之箒の護衛だったな。お前を休ませた後に向かうからクロエ、準備を頼む」

「分かりました、カナード様」

付いてきてくれていたクーちゃんが力強く頷く。

「まずは休めよ、束」

「うん、ありがとう、カナ君」

カナ君に微笑むと照れ隠しかそつぽを向いた

少しかわいいと思っちゃった。

## ANOTHER PHASE① 接触

V Tシステム暴走事件が発生した週末。

I S学園では先日の事件を訓練中の事故として隠蔽し、一部の生徒のみしか情報を開示していない。

また週明けまで全アリーナの使用は禁止されることとなった。

この決定は熱心に訓練に励んでいる生徒達からは不満が溢れたが決定を決めたのが千冬であると情報が伝わってからは不満が溢れることはなかった。

そして訓練が無くなると同時に暇を持って余らせた生徒達は、外出許可を取り

I S学園近辺のショッピングモール レゾナンスでの買い物などで休日を満喫している。

そしてここにも暇を持って余らせた生徒が1人。

「……はあ、一夏め、何故外出を……いや、別にそれは構わないが私を誘ってくれても……！」

長い黒髪のポニーテールをワナワナと振るわせつつ、箒は一人ショッピングモールの人混みの中を歩いていった。

特に買いたいモノがあるわけではない、だが寮や剣道場で一人過ごすのも味気ないので

気分転換の為に彼女はこのショッピングモールで暇つぶしをしていたのだ。

ちなみに真や簪は所属企業に呼ばれており不在。

セシリアについては週明けまでは保健室で安静にするとの事であり、シャルルについても生徒会長と話があるとの事だ。

清香達も箒が出発する時点ですでに外出していた。

決して彼女に友人が少ないという訳ではないが、暇なのだ。

「鈴め……まさか抜け駆けするとは……！」

想い人である一夏は現在、訓練ができなくなった為、せつかくだからと中学での仲間や後輩に会いに行く事となった。

それには中学を共に過ごした鈴も参加しており、昨夜鈴がニヤけていた事を彼女のルームメイトが報告している。

「しかし一夏の友人達に縁もない私が参加しても……ああ、だが鈴に一夏があ……！」

ガクツと肩を落とした悩める乙女はため息をついた、その時であった。

ふと少し強い風が吹き抜けた。

同時に目の前にふわりと白い帽子が風に舞って落ちてきた。

それを箒は反射的に受け止め、辺りを見回す。

すると黒髪に白いワンピースを着て手提げバッグを持った女性が箒に笑顔で手を振っている。

その女性は箒の元まで駆け寄り、一礼する。

同性なのにとても綺麗だと、箒はいつの間にか見惚れていた。

「申し訳ありません、それ私の帽子なのですが……」

「……どうぞで」

少しだけ頭を振ってから帽子を渡すと、彼女は笑顔で帽子をかぶりなおす。

「それでは」

「あつ、お待ちになつてください、お礼をさせてはいただけませんか？」

黒髪の女性が笑顔で箒の手を取る。

本来ならば同性でも見ず知らずの女性にいきなり手を取られれば困惑するだろうが、不思議と嫌な感じはせず逆に落ち着いてくるようだ。

「……帽子を拾っただけですよ？」

少々大げさすぎないだろうか、と箒は女性に尋ねる。

「これは母の形見のモノでして……私にはそれだけの価値があるのです。さき、あそこのカフェテラスなんかがよく似合いですわね」

そう女性に連れられて近くのカフェテラスに向かう。

笑顔の女性を見ていると不思議と断る気がなくなっていくのであった。



数分後――

黒髪の女性と箒はカフェテラスの1席で向かい合うように座る形となっていた。

「自己紹介がまだでしたね、私はミーア・キャンベル。気軽にミーアと呼んでくださいな」

「……篠ノ之箒です」

席についてすぐに注文したコーヒーに口をつける。

ミーアも同じく頼んでいた紅茶に口をつけた。

なぜ帽子を拾っただけでこんなことになっているのだろうと箒は自問自答するが、どうにもミーアと名乗った彼女の雰囲気飲まれて合席してしまったため、付き合うことに決めた。

「篠ノ之……もしかして東さんのご家族の方ですか？」

ミーアは箒の姉である、天災【篠ノ之東】の名前を口にした。

しかもとても親しそうな口調で。

「……あまり姉は好きではないですが……ミーアさんは姉をご存じなのですか？」  
「ええ、数年前からとつてもお世話になっておりますわ」

そう満面の笑みでミーアは答えた。

その返答に箒は心底驚いた。

何故ならば姉である束は、彼女に親しい特定の人物しか認識しないのだ。

両親ですらその範囲に含まれておらず、自身を含めた数名しか束は認識していない事を知っているからだ。

そんな姉に認識される彼女は一体何者なのか。

当然疑問に思った。

「ミーアさんは、姉とはどのような関係で……？」

「そうですね、同じ夢を持った者同士とでもいいかもしれませんか、お仕事上でもよくさせていただきましたし……。私的な面でも交流をさせていただいておりますわ。それと一点謝らなければならぬ点がございますわ」

「謝る事？」

「ええ、帽子を拾っていただいたというのは建前でして……本当は貴女に会いに来ましたの、箒さん」

そういつてミアアは頭を下げた。

何故か彼女の姿を見たくないと箒は感じてしまった。

「頭を上げてください、ミアアさん。それで……私に会いに来た目的とは？」

「ありがとうございます。束さんからこれを、貴女にお渡ししてほしいと」

彼女が持っていた手提げバッグから、「赤色のブレスレット」を取り出してテーブルの上置く。

置かれたブレスレットを見た途端、衝撃が走った。

テーブルに置かれたソレは普段よく見ているモノと同じだと判断したからだ。

「これはまさか……ISSっ!？」

そう【待機形態】のISだ。

「はい、東さんが貴女専用で作成したIS、名前は【朱百合（あかゆり）】と言いますわ」  
「私……専用の……！」

思わず箒の声に歓喜の感情が混じった。

一夏の周りには専用機を持つ人間が多い。

自分だけの機体、【力】を渴望していた箒に取ってはまさに天啓にも等しいのだ。  
姉が開発してくれた専用機。

今自分が望んでいたのはまさにこの力なのだ。

少し震える手でテーブルの上に置かれたプレスレットに手を伸ばす。

その時であつた。

『手を伸ばすな、篠ノ之箒っ!!』

突如叫び声が響き、それに驚いた箒は手を引つ込める。

男の声が頭上から響いた後、続いて銃声が連続で響いた。

箒の頭頂部から降り注いだ光の雨。

ビームの雨は全て目の前のミーンに降り注いでいた。

しかし声が響くと同時にミーンの背には「IS」が部分展開されていた。

部分展開されたのはまるで「翼」の様な非固定浮遊部位であり、翼からは「淡い紫の光」が溢れている。

降り注ぐビームの雨はミーンにとっては完全な不意を突かれたものだった。

しかし降り注ぐビームは全て背に展開している翼の光の中に吸収されていく。

『あら、カナードではありませんか』

『チツ、VLユニットか……!』

カフェテラスの上空10mに浮遊する「ドレッドノート」から搭乗者である「カナード・パルス」の口惜しそうな声が漏れる。

ツインアイセンサーは外しており、素顔が見える形となっている。

「おつ、お前はあの時の……!」

無人機襲撃事件の時、自分を救った男性搭乗者。

顔を見るのは初めてだが声や機体の特徴を覚えていたため判断できた。

『まさかすでにラクス・クラインと接触済みだったとは……ならばっ!』

「えっ、うわあっ!?!」

カナードが急加速により一気に箒に接近し、箒を抱え上げる。

荷物を抱えるかのように箒を抱えた後に一気に上昇を始める。

『ふふ、もっとゆっくりとなさっていけばよろしいのに……』

ISを展開しつつ、去っていくカナードを微笑みながら見つめているミア——いや、ラクス・クラインはふう、とため息をついた。

彼女が身にまとっているISはまるで白いドレスの様に曲線が多いデザインであり、装甲は必要最低限しかついていないように見える。

だが背部の翼はインパルスのデステイニーシルエットの翼より一回り大きく、絶えず【淡い紫の粒子】を放出している。

まるで抜け落ち舞う羽の様に。

ラクス顔から笑みが消える。

同時にプライベートチャネルを繋げる。

彼女がつけた相手は――

『……アスラン、聞こえていますか？』

『ああ、ラクス、聞こえている』

かつて、歌姫の騎士団で無限の正義と名付けられたMSを駆っていた男――アスラン・ザラ。

『今から座標を転送致しますわ、カナードの追撃と箒さんの保護をお願い致しますわ』  
『分かった、座標を頼む』

コンソールを少し操作して、アスランに座標情報を送る。

『……受け取った、任せてくれラクス』

『お願い致しますわ、アスラン。私達の目的のために』

『ああ、ISを無くして世界から争いを無くす……そのためになら喜んで力を貸すよ、ラクス』

『……ええ、お願い致しますわ』

そうやってラクスはチャンネルを切って浮遊していく。

そしてだんだんと姿が消えていく。

『……本当につまらない駒、C・E・時代から少しも変わらないですわね』

そう呟いてラクスの姿は完全に消える。

【ミラージュコロイド】によって姿を消したのだ。

同時に、カナードの不意打ちによって破壊されたカフェテラスが一気に騒がしくなった。

まるでこれまでのやりとりを【意識】できていなかったかのように。



# ANOTHER PHASE② あんなにも一緒だったのに

ドレッドノートはシヨップینگモールからすでに大幅に離れた上空を飛んでいた。目指しているのはIS学園。

本来のドレッドノートの速度ならばすでに到着していてもいいのだが現在は箒を抱えているため、速度を大幅に落としている。

コンソールを操作して、カナードはプライベートチャネルをある相手につなげる。

『ラキ、聞こえるか』

『うん、聞こえるよ、兄さん』

相手はラキーナだ。

『ラキ、今はどこにいる？』

『ブレイク号はIS学園近海にいるよ』

ブレイク号。

東が拠点としている「ズムウォルト級ミサイル駆逐艦」の事である。

そもそのステルス性能と合わせて、東の改造によりミラーージュコロイド技術が搭載されているため姿を消すことが可能だ。

ちなみに名前の由来は、歌姫をぶつ潰すんだからブレイク号でいい、とのことだ。

『了解した、今、篠ノ之箒を保護してIS学園に向かっている。この速度なら後5分程度で到着できるはずだが、追撃の可能性もある。篠ノ之箒の保護を頼みたい』

『分かったよ、私も「ストライク」でそっちに向かうね』

『頼む』

チャンネルを切って視線を抱えている箒に移す。

「くっ、離せっ！」

右脇に抱える形になっている箒がジタバタと抵抗する。

それにため息をつきつつ、カナードは彼女を落とさないように手に力をこめる。

『……黙っている。それに今離せば貴様は落下するだけだぞ』

実際、ドレッドノートが飛んでいる高度は上空数百mであり、専用機を持っていない筈にとつては死ぬしかない高度だ。

「ぐっ……」

『……さて篠ノ之箒、貴様、ラクス・クラインから何か受け取ったりはしていないだろうな？』

「ラクス？ ミーアさんの事か？」

『ああ、で、どうなんだ、答えろ』

有無を言わさない口調でカナードが箒に尋ねる。

それに少し気圧されつつ箒は答える。

「姉さんが作ったISだと言うモノを渡された……貴様が乱入してきて受け取れなかつ

たが」

その返答にカナードは内心安堵した。

『……そうか、1つ訂正がある』

「訂正？」

『ああ、貴様が渡されそうになったI Sは奴が造つたものだ。東が造つたものではない』  
「違うのかっ!? でもあの人は姉さんの知り合いだと……!」

驚いた筈が目を見開いてカナードに問いかける。

『確かに知り合いだ、敵としてだがな』

「……敵？」

『ああ、世界を、何も知らない人間を自分の欲のために動かそうとしている奴だ。それに俺がお前をこうして護衛しているのは東の頼みだからだ、奴からお前を守ってほしいとな』

「……訳が分からない。それに今さら姉さんがそんな……家族がばらばらになったのは

姉さんのせいなのに……!」

東がI Sを作成したため、箒達の家族は政府が行った重要人物保護プログラムにより日本各地を転々とさせられたのだ。

そして東が失踪してからは姉の分の監視や聴取を繰り返された。

それによつて箒が東に向ける感情はマイナス部分が多い。

それはカナードも知っている。

東に聞いたからだ。

数年前までの東ならば、彼女の自業自得と切り捨てられただろう。

だが現在の東は変わってきている。

『少し前までの東なら俺も見捨てていた。だがな、今のアイツは自分の罪を償おうとしている』

「……罪?」

『そうだ、世界を一気に変えてしまった事と、目覚めさせてはならない奴の技術を目覚めさせてしまったことだ。それに東は常々言っている、お前に謝りたいとな』

「……あの姉さんが?」

『ああ、だからお前も一度は話を聞いてやってほし……っ、追撃がきたかつ！』

ドレッドノートのパワーセンサーが後方から高速で接近してくる反応を検知した。カナードは速度を少し上げつつ後方を確認する。

追手は【IS】

機体各部の装甲はマゼンタレッドに染まっており、背部には大型のリアクターが装備されている。

頭部には鶏冠型のセンサーがあり、脚部にはイージスと同じようなブレードが装備されている。

そしてその搭乗者は――

『【アスラン・ザラ】か！』

カナードが振り返りつつ、空いている左手に展開した【ビームマシンガン】を放つ。

だが相手もその射線を読んでいるため、スラスターを噴かされ回避された。

アスラン・ザラ。

歌姫の騎士団の正義の剣――

インフイニットジャステイス

【無限の正義】を駆っていた男。

世界を混乱に陥れた英雄。

シン・アスカによって討たれた英雄。

『キラっ?! いや、違う……なるほどお前が「カナード・パルス」か』

アスランにとってカナードの顔と声は親友である「キラ・ヤマト」と瓜二つだ。だがその目つきだけは彼とは異なる。より鋭いことを理解したのだ。

『貴様等は何のために篠ノ之箒を狙う?』

カナードがアスランに向けて質問を飛ばす。

その意図は時間稼ぎ。

ブレイク号とラキーナが来る時間を稼ぐためだ。

流石のカナードでも箒を抱えたままでは碌な戦闘機動など取れない。

『彼女は篠ノ之束の妹だ。篠ノ之束は天災で何をしでかすか分からない……実際にラク

スが彼女に接触しているからな。だから保護する為に行動を起こしたんだ』  
『……………ふん、その対象にISを与えることが保護……………か……………』

ククツと笑いを噛み殺した表情をカナードは浮かべる。

それを見たアスランは顔をしかめているが、警戒は怠ってはいない。

『何がおかしいっ……………！ 俺達はラクスの目指すISのない平和な世界の為に戦っているっ！』

『では聞くが、ISが無くなれば本当に世界は平和になるのか？』

『なんだとっ……………!?!』

ため息をついてカナードは口を開く。

ハイパーセンサーはまだラキーナの反応を捉えていない。

『確かにISの登場によって世界が大きく乱れたのは確かだ。世界の軍事的なパワーバランスはISに支えられていると言ってもいい。だが貴様らが力づくでISを無くしたところで以前の様な世界には決して戻らんだろう、むしろより多くの混乱を生むだけだ。世界の軍事的パワーバランスの混乱、女性利権団体の失脚による混乱、貶められて



いた男達による社会的地位の復権による混乱、これらに動じた諸問題。貴様はある程度は落ち着いている今の世界を、混乱に落とすと云ったと同義なんだぞ?』

『確かにI Sを無くすことにも問題はあるつ……だが俺やラクスは戦う! その覚悟はあるつ! 争いを行う連中を無くさなければ人類はいつかまたC・E.のような戦争を行うかもしれないだつ!』

アスランが反論するがそれを冷たい表情でカナードは見ていた。

本来ならばまだ時間稼ぎをしなければならぬが、目の前の男にガラでもなく怒りがわいたのだ。

『自分達以外の力を持つものを全て敵とみなして叩き潰す。この世界でも貴様は歌姫の人形ということか、英雄が聞いて呆れる』

『何だどつ!』

『自分で事を考えない奴を人形と呼んで悪いのか?』

『俺達は自分の意思で戦っている! I Sを無くして世界を平和にさせるためにつ!

その邪魔をするのなら……俺はこの【インフィニットジャステイス】で貴様を討つツ  
!』

そうやってアスランは左手にビームサーベル、右手にビームライフルを展開させる。  
まだラキーナの反応は捉えられていない。

(チツ、俺も甘いな……篠ノ之箒がいなければどうともなるが……！)

空いている左手に展開していたビームマシンガンを格納すると同時に左手の手の甲から「AL」が△型の盾として展開される。

IS「ドレットノートH」のALは、かつてのカナードの愛機であるMS「ハイペリオンガンダム」の様に球体型に展開して360°。全てを防御することが可能だがそれは両手を使える状態での話。

今は箒を抱えてしまっているため球体状に展開することができない状況だ。

だが、ただのビーム程度でALを抜くことなど不可能である。

インフィニットジャステイスが放ったビームをALは何の負荷もなく弾き飛ばす。

「きゃあつ!？」

『そのシールドはアルテミスの傘かっ!』

ビームライフルが無効化されることを理解したアスランはライフルを格納し、両手にビームサーベルを構えた。

同時に両脚部のブレードも起動して、接近戦の構えを取る。

『うおおおおおっ！』

背部リアクターのスラスタを全開に噴かせた加速により一瞬で距離をつめる。

そして息をつく暇もない連撃を繰り出し始める。

並のIS乗りであればこの時点で撃墜されている。

それだけアスランの接近戦技術は高いのだ、それこそヴァルキリークラスと言ってもいい。

また脚部ブレードが曲者である。

通常のサーベルと軌道が異なる点や脚部に装備されているため蹴りの要領でシールド越しの攻撃も行えるからだ。

だがカナードも並のIS乗りではない。

繰り出されるサーベルの軌道やビームキックの軌道全てを予測してALシールドを

構えていた。

そしてALシールドにサーベルが触れた瞬間、ALシールドをまるで受け流す様に動かすことで衝撃と威力全てを受け流していた。

『その程度で俺とドレッドノートを攻略できると思うなあっ!!』  
『ならばあっ!!』

アスランの咆哮と共に、彼の意識の中で【種】が弾けた。

瞬間、攻撃の速度が大幅に上がった。

『ぐっ、【S・E・E・D】かっ!?!』

より高速化された連撃に受け流しが間に合わずシールドごと吹き飛ばされ、大きく体勢が崩れてしまった。

『ぐっうっ!?!』

「きゃああつ!!」

箒を落とすまいと右手に力を込めた為に、より体勢を崩してしまった——アスラン相手にこれは致命的である。

A M B A Cも間に合わない。

『終わりだ、カナード・パルスっ!』

上段から振り下ろされるビームサーベル。

カナードの頭部を狙っており、高出力のビームサーベルならば絶対防御を抜いてくる可能性もある。

『まだだあつ!!』

瞬時に全身のバーニアを操作し最低限の姿勢制御。

同時に背部スラスターを全開に噴かした突進を繰り出す。

S・E・E・Dを発動しているアスランの攻撃にカウンターをぶち当てたのだ。

アスランも完全に捉えたと思った攻撃であったため、回避が間に合わずに弾き飛ばされる。

『ぐうっ!?!』

カナードは瞬時に左手のALの収束率を変更。

ALをサーベル状に変更して体勢を崩したアスランに斬りかかる。

『終わるのは貴様だっ、アスラン・ザラっ!!』

『この程度おっ!』

キツクの要領で脚部ブレードを使いALブレードを弾く。

そしてアスランは距離を取る。

互いに距離を取ってにらみ合いの格好になる。

『ちっ、流石にやるなっ……!』

『くっ、まさかカナード・パルス……お前がこれほどの力を持っているなんて……!』

互いに次の手を思案する。

その時両者のハイパーセンサーがある存在を捉えた。

それはかなりのスピードで向かってくる。

黒髪の女の子が搭乗するISであり、カナードがよく知っている存在。

『ラキかつ!』

『間に合ったつ! 兄さん、大丈夫つ!?!』

ラキーナ・パルスがISを身に纏って駆けつけたのだ。

彼女が纏っているISは、飛鳥真専用機である「インパルスガンダム」に類似した特徴を持っていた。

生身より二回りほど両腕／両脚が大きく見えるマニピュレーターに装甲、装甲はトリコロールカラーで彩られている。

背部ランドセルのコネクト部分にはインパルスガンダムの「フォースシルエット」に類似した「エールストライカー」が装備されている。

これが彼女のIS。

【GAT-X105 ストライクガンダム】をモデルにしたIS——【ストライクガンダム】だ。

突然の乱入者を睨みつけたアスランであつたが、すぐに驚愕の表情を浮かべる。

『ラキ……だと……!? それにその顔はまさか……!』

『……久しぶりだね、アスラン、【僕】だよ』

まるで旧友と話すかのように、ラキーナの口調が変わる。

『キラなのかつ!!』

『……うん、久しぶりだね、アスラン』

ラキーナ・パルス。

【キラ・ヤマト】は展開したビームライフルを構えつつアスランに答えた。

かつてC・Eで駆けた二人が今ここに出会ってしまった。



## ANOTHER PHASE③ 和解

ラキーナに突きつけられたビームライフルを見て、アスランは表情を驚愕に変える。

『キラっ!? 何故俺に銃を向けるんだっ!?』

アスランの反応を見てラキーナも表情を変える。

それは苦渋に満ちた表情だ。

『……アスラン、君は僕やカナード……東さんの敵なんだよ、それを分かってるの?』

『敵っ!? 俺達は共に戦う仲間のはずだっ!』

『いや、君達は敵だ、今ある世界の【花】を散らそうとする。ただ一人の欲の為に無関係な人達を混乱に陥れようとしているのが分からないの?』

『俺やラクスは世界の為に戦っているんだ! ISを無くさなければ世界はいずれC・E.のように戦乱の世界に……だから俺達は何度でも花を植えるんだろうっ!』

身体を駆け巡る感情をアスランは身振り手振りでラキーナに伝える。分かってくれるはずだと。

だがラキーナは先程の苦渋に満ちた表情から一変し、アスランの様子を冷たい目で見ていた。

そしてビームライフルの照準を正確に合わせる。

インファイニットジャステイスがロックオン警告を発する。

『……警告はしたよ、アスラン』

『キラっ!?!』

ビームが放たれる瞬間、インファイニットジャステイスはビームシールドを展開していた。

そのため、放たれたビームはシールドのビームと干渉し、拡散されてしまう。

だがラキーナのこの行動によるアスランへの心理的なダメージは相当なものだ。

彼にとっては無二の親友であり、自分と共に世界の為に戦っていた戦友。

それはこの世界でも同じだと思っていた。

なのにキラは自分を撃った。

何故なのか、アスランには理解できない。

そんな彼を冷たい目で見つっ、ラキーナはライフルの引き金を引き続ける。

そのたびに放たれるビームは、ビームシールドによって拡散されるが、ビームシールドの消費エネルギーによって確実に相手のシールドエネルギーを削り取っていく。

それに合わせてキラの攻撃からは迷いを一切感じない。

アスランを落とすという意思。

殺気が込められた攻撃であり、アスランは防戦一方の形となっている。

『やめろ、やめるんだっ、キラアツ！』

『聞く耳などもたんっ！』

ストライクの射撃に合わせて、カナードのドレッドノートも行動をとっていた。

箒を抱えているため、満足な戦闘機動は行えない。

ならば動かなければいい。

ドレッドノートの背部非固定浮遊部位【イータユニット】がまるで【砲台】の様に展開されていく。

IS【ドレッドノートH】に装備されているイータユニットは背部の1対のデバイス

を前方に展開した砲撃戦形態〔バスターモード〕に切り替わったのだ。

1対の砲口から高出力のビームとグレネードが発射され、インフィニットジャスティスに降り注ぐ。

『ぐううっ!?!』

インフィニットジャスティスは両手に装備されているビームシールドを展開し、ビームの嵐に耐える。

スラストターを噴かして吹き飛ばされまいと耐えているが、あまりの量に後退していく。

『コール、ソードストライカーッ!』

鈴の音の様に高いラキーナの声が響き、ストライクの背部に装備されている〔エールストライカー〕がパージされる。

同時に、背部には大型の実体剣を装備したストライカーが展開され接続される。

ストライカーが接続されると同時に、左腕部分にロケット推進式のアンカーが展開さ

れ、左肩装甲部にもインパルスの「フラッシュエッジ」に酷似した武装がマウントされている。

『はあああああつ!!!』

大型実体剣「シユベルトゲベール」を両手で振り上げ、スラストを全開にしてアスランに斬りかかる。

モデルとなったMS用「シユベルトゲベール」と同じく取り回しが難しい武装であるが、刀身に発生した高出力ビームと大型実体剣故の質量が合わさり、近接格闘戦ではビームサーベルを超える威力を持っている。

アスランは展開したままのビームシールドで受け止めるが、ラキーナはそれを待つていた。

ビームシールドは確かに強力なシールドであるが、「耐ビームコーティングされた実体剣」ならば「すり抜ける」ことが可能である。

ちなみにこれは「すり抜ける」ことが可能である。「AL」にも同じことが言える。

「シユベルトゲベール」に展開されていた、刀身ビームが消える。

そして実体剣部分がシールドをすり抜けた。同時に再度ビームを展開、斬撃は速度を

保ったままシールドバリアを貫き、インフィニットジャスティスの右腕部分装甲が破壊される。

その衝撃によってアスランとラキーナの距離が離れてしまった。

すかさずラキーナは左腕のロケットアンカー〔パンツァーアイゼン〕を飛ばすが、それは脚部のブレードで弾き飛ばす。

『なっ、何故だ、キラ、何故俺とお前が戦う必要があるんだっ!?!』

ラキーナに叫びつつ、アスランは残りのエネルギーを確認する。

今の一撃で大幅にインフィニットジャスティスのシールドエネルギーが削られてしまった。

すでにエネルギーは6割程度まで落ちている。

このままラキーナとカナードの2人を相手取るには心もとない量である。

『……ここで仕留める、援護するぞ、ラキッ!』

『……うん、わかったよ、兄さんっ!』

カナードが援護の為にビームをばら撒き、ラキーナが再び「シユベルトゲベール」を上段に構えて突っ込んでくる。

だが――

『くそっ、ここにやられるわけには……っ！』

突如、目の前にいたインフイニットジャステイスの左腕から球状の物体が放たれ、破裂すると同時に「強烈な光」が放たれた。

『くうっ!?!』

『ぐっ!?!』

ラキーナとカナードはとっさに閃光防御の姿勢を取ってしまった。

そして閃光と視界が回復した時にはすでに目の前にアスランの姿はなかった。

「ミラージュコロイド」によって姿を消したのだ。

『ちっ、姿を消したかっ！』

カナードはハイパーセンサーを「ミラーージュコロイドデテクター」に切り替える。

反応を捉えたが既にデテクターの探知範囲ぎりぎりの距離であり、すぐに反応が消えてしまった。

『……逃げられたか』

『インフイニットジャステイスにあんな武装があるなんて……』

『MSと全てが同様という訳ではないと言う事か、やれやれ』

ミラーージュコロイドデテクターからハイパーセンサーに切り替えたカナードがため息をつきつつ答える。

『奴はここで落とすか捕えるかして情報を得たかったが……仕方ない、帰投するぞ、ラキ』

『うん……つて兄さん、箒さん大丈夫なのっ!?!』

『あっ』



カナードには珍しく素っ頓狂な声を上げてしまった。  
抱えている箒に視線を移すと――

「きゆう……」

と青い顔で気絶していた。

アスランとの戦闘中、そこまで激しい戦闘機動は取っていなかったが最後の閃光について箒はほとんど無防備のまま浴びてしまい気絶してしまっていたのだ。

『……すまん』

『……まあ、気絶してるだけみたいだから命に別状があるわけじゃないと思うけど、あとで箒さんに謝った方がいいと思うよ?』

『そうするか。束にも小言を言われそうだな』

『……それについてはご愁傷様で』

珍しい兄のミスに苦笑しつつ、ラキーナが答えた。

## I S 学園 保健室

「……うっ」

ベッドに寝かされていた箒が目を覚ます。

辺りを見回すとどうやら I S 学園の保健室で寝かされていたようだ。

窓の外は暗く、すでに日が落ちている。

先程の戦闘からかなり時間が経っているのだろうと考えた。

すると――

「あつ、目が覚めましたか？」

黒髪をセミロングにした自分より年下に見える女の子がこちらを心配そうに見ていた。

ラキーナが箒の様子を見に来ていたのだ。

「お前は……たしかラキーナとか……」

先程気絶する前の戦闘で自分を抱えていたカナードとかいう男性搭乗者に彼女がそう言われていたことを思い出す。

「はい、ラキーナ・パルスと言います、兄のカナードがすいませんでした」

ラキーナはそう言つて軽く頭を下げた。

「……それは別にいいが、さつきまでのあの戦いはなんだったのだ？ それにあの赤い機体に乗っていたのも男だったが……」

「それについては……」

「それについては私から教えるよ、箒ちゃん」

保健室の戸を開け、ウサギ耳を模したカチューシャに胸元が開いたエプロンドレスを身に着けた女性。

箒の姉、篠ノ之束が現れたのだ。

「姉さん、何でここにっ……!?!」

東の登場に箒の顔に驚愕が浮かぶ。

それにニコツと微笑んだ東が箒が寝ているベッドに歩み寄る。

「箒ちゃん、気分は大丈夫?」

「えっ、あ、……大丈夫……です」

「よかったよ……あ、カナ君は絞めておいたから、安心してね」

東がニタアと笑い、その言葉に背後にいたラキーナが苦笑をしていた。

だがそんなことは箒にとってはどうでもよかった。

なぜならば明らかに姉の雰囲気が違う。

箒はまずそう思った。

傍若無人、唯我独尊。

その文字が服を着て歩いているような人物が自分の姉であったはず。

なのにもまるで「普通の姉妹」の様に自分に語りかけてくる彼女に心底驚いたのだ。

「むう、驚きすぎだよ、箒ちゃん」

プクウと頬を膨らませた束。

だがすぐに真面目な表情に変わった。

「……ま、仕方ないよね、私はそれだけの事をしてたんだもん。私が戦っている理由を話す前に、まずは謝らせてね」

一息ついて束は箒の目をまっすぐと見て続ける。

「……箒ちゃんやお父さんやお母さんにも迷惑かけて……ごめんね」

最後の方は少し涙声になっていた。

束が頭を深く下げる。

姉の謝罪に箒の心は大きく揺れていた。

気づけば束に向けていたマイナスの感情が薄らいでいくほどに。

「……姉さん、顔を上げてくれ……私は怒っていない」

「……本当？」

「……正直姉さんが変わったことに驚いてる。けど私や家族の事を見てくれている今の姉さんを私は責める気はない」

微笑む箒のその言葉を聞いた東は大粒の涙を流していた。

「箒ちゃん、ごめんなさい、ごめんねっ！」

「ちよっ、姉さんっ!？」

こらえきれなくなったのか、東は箒にしがみ付いて涙を流し始める。

驚いた箒だったが少し苦笑しつつ東の背を撫で始めた。

東の謝罪の様子を、空気を読んで保健室から出ていたラキーナが聞き耳を立てていた。

「……どうやらその様子では束からの説明はしばらく無理のようだな」  
「兄さん」

ラキーナが振り返ると、すぐ側の壁にカナードがもたれ掛つていた。頬には大きな湿布が張られている。箒を気絶させてしまったので、頬に大きな紅葉が付いているのだ。

「……シン達は？」

「すでに織斑千冬と共に別室で待機してもらっている、これから向かうところだ」  
「……うん、私もいくよ」

ラキーナの返事に少しだけ目を見開いたカナードがたずねる。

「……覚悟ができたんだな」

「……うん、やっとな」

「そうか、では行くぞ」

「うん」

カナードとラキーナは千冬と真が待機している生徒指導室に向かう。

カナードがふとラキーナの顔を見た。

彼女の顔にもう迷いの感情は見えなかった。



## PHASE 27 花の意味

生徒指導室

束達が突然 I S 学園に来訪した事は教員にも話が通っているが、生徒達には極秘としている。

生徒が校舎に少ない休日であることが幸いし、無関係な生徒達には束達が来訪している事は知られていない。

箒が目覚める十分程前に真と千冬はカナードに頼まれ、室内で待機していた。

「……本当に毎回アイツは厄介事を私に運んでくるな」

疲れたような表情で千冬が零す。

彼女は日頃から多忙の身であり、休日のオフの時間を何よりも大事にしている。

それが潰されたのだ、愚痴も零したくなるのも仕方ないであろう。

もつとも親友の妹の一大事、彼女にとっては教え子の一大事であるのだからすぐさま状況を整えたのだが。

その様子を真は苦笑して見ていた。

(……カナード達が来たって事は色々状況が知れるって事か)

真からしてみれば願ってもない機会である。

【花】を散らさないために戦うには、ラクス・クラインがやろうとしている事を知る必要があるのだ。

それに共に駆けた戦友との再会も少なからず嬉しいと感じている。

「待たせたな」

生徒指導室の戸が開かれ、件の男、カナードが入ってくる。

そしてラキーナも同じく生徒指導室に入る。

カナードとは面識がある真であるが、ラキーナに関しては面識がない。

彼と瓜二つな顔、嫌な予感を真は感じて内心身構えていた。

「彼女は？」

「ラキーナ、俺の妹だ」

「初めまして、織斑千冬さん、そして真、久しぶりだね」

ラキーナのまるで真を知っているかの様な言葉を聞いた途端、ある存在が脳裏に浮かんだ。

声は女性のそれであったがはつきりと。

かつての慰霊碑で会った、花を何度でも植えなおすと自分に言った。

【仇】の顔。

瞬間、室内に【強烈な殺気】が溢れた。

真の隣にいた千冬が驚愕の表情に変わると同時に、懐からナイフを取り出し駆ける。

狙いは現れた【仇敵】の首。

完全に虚をついた行動であったためか、ラキーナは動けなかった。

真がナイフを突き出す。

だが、そのナイフはラキーナの首には届かなかった。

彼が動き出すと同時に真とラキーナの間に割り込んだ者がいたからだ。

金属と金属が擦れあう甲高い音が室内に響いた。

「カナードっ！」

そう、真とラキーナの間に割り込んだのは、真と同じくナイフを構えたカナードであつた。

「真、待て。こいつは敵じゃない」

「っ……………」

カナードのその言葉に彼との鏝迫り合いを止めて一歩下がる。だが、ナイフはその手に構えたままだ。

「キラ・ヤマトなのか!?! 答えろっ!!」

真の咆哮が木霊し、ラキーナがビクツと震える。

真の隣の千冬さえ戦慄するほどの殺気。

自分より年下の人間がこれほどの殺気を発している事に驚愕し、気づいた。

真の殺気に吞まれて動けずにいる自分を。

「……うん、そうだよ、真」

「何のために俺に会いに来たっ!? それになんでカナードと一緒にいるっ!?」

「……君に会いに来たのは……ずっと君に謝りたかったから。カナード、兄さんと一緒にいるのは、私がそう望んだから……」

「謝る……だと……っ!?」

予想外の言葉に一瞬呆けたような表情を真は見せる。

「謝っても許されない事だつて言うのは分かっているし、これが私の自己満足であることも分かっている。だけど君にはしっかりと聞いてほしいんだ……本当にごめん」

ラキーナはそう言って深く頭を下げた。

その姿に真は、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

感情の整理がつかないのだ。

だが気づいたことがあった。

「……許すわけないだろ」

ナイフを握る右手が震え、何とかラキーナに向かって言葉を放つ。

「……それにアンタが謝つてもC・E・であんた達に吹き飛ばされた【花】は戻ってこないんだぞ、それともまた植えなおすのか？」

かつて彼女に言われた言葉を投げ返す。

皮肉を多分に込めているが、彼女の様子を見る限り自分の知っているキラ・ヤマトとはまるで違う。

彼女の意思を確認するの為にあって同じ言葉を使ったのだ。

「……【命】を……植えなおすなんてできない。今の私は【花】を散らせないために戦うつて決めた……ラクスに言われたからじゃなく、私自身で決めたの」

かつての彼とは決定的に違う彼女の言葉を聞いて、ナイフを懐にしまう。

「……俺は絶対に許さない。アンタ達がやったことは決して……だけど今のラキーナつてアンタが花を、命を大事にしてるのは分かったよ」

「……うん」

今はこれでいい。

真はそう考えてカナードに視線を移す。

「……真……お前はいつたい……」

室内の殺気が霧散したことで、吞まれていた千冬が言葉を発する。

それとほぼ同時だった。

「さっすが、ザフトのスーパーエース「シン・アスカ」だねー。東さん、身震いしちゃったよ」

生徒指導室の戸が開かれ、篠ノ之東が入室してきたのだ。

「束さん……箒さんはいいの？」

「後で箒ちゃんには話すよ。それに箒ちゃんにも許してもらったしだいよぶ……ラキちゃん、少し顔明るくなった？」

「……ええ、まあ」

少しだけ笑顔を浮かばせたラキーナを見つつ、束も微笑む。

「……いいかげんに話せ、束。お前達が戦っている理由……それはなんだ？ それに真、お前の先ほどの殺気は……！」

千冬の指摘に真はカナード、束、ラキーナに視線を合わせる。  
そして自身が長い間秘密にしていた事を話すことにしたのだ。

「……千冬さんは【前世】って信じます？」

「……【前世】だと？ ふざけているのか？」



いきなりなじみのないオカルト要素の混じった言葉が出たのだ、この反応は仕方ないだろう。

だが、千冬は真の目を見て考えを改めた。

真つ直ぐに自分を見てくる彼の瞳に嘘の色は浮かんでいない。

IS搭乗者の第一人者として世界を回ったこともある彼女はそう判断した。

「事実だ、前世……正確には別の世界、【C・E】コスミックインフラと言う世界の記憶を俺やラキ、真、そして束も持っている」

千冬の様子を確認してカナードが話を続けていく。

ヤキン・ドゥーエ戦役、メサイア戦役、ネオ・ザフト戦役と言った。

戦乱に満ちたC・Eの歴史について。

その戦争の発端となったナチュラルとコーディネーターの深い溝の事について。

MSやコロニー等の宇宙に進出できるようになった科学技術の事について。

真がその世界で軍人として、「シン・アスカ」としてMSに乗って戦っていた事について。

そして戦乱の歌姫——ラクス・クラインの事について。

「私がラクスに会ったのは5年前……ちょうどC・E. についての記憶を思い出した時だったの」

カナードに変わり今度は束が話を続ける。

「ずっと昔からぼんやりとした【記憶】があつて……小さい頃から何度も宇宙を翔るMSの記憶を見ていたんだ」

懐かしい思いを振り返りつつ束は続ける。

「今思えば、【IS】を作ったのはMSみたく空を、宇宙を飛ぶ為だった。それに当時は世界はつまらなくて汚くて、きつと宇宙に出れば世界は変わると思ってた、子供だよね」

自嘲を混ぜた笑みを浮かべる。

「そして自分の中にあつたC・E. の記憶をはっきりと思い出して……絶望した。この

世界より遥かに進んだ人類も結局は変わらないことに」

そして出会ったの、と東は続ける。

「ラクスに会って、心が救われた気がしたの。そして彼女の中にもどういふ訳か……【私の技術】、正確にはISの技術の記憶があつて……初めて理解者に会えたと思つたの」「なんで東さんの技術が奴に……？」

「さあね、天災の私でもそこはわからない、アカシックレコード？ まあ、【破綻者】つて共通点はあるよね」

ま、そこは置いておいてと東は続ける。

「ラクスと出会ってからはずつと世界を変える為にISやコロニーとかの研究に取り組んだの。それがアイツの罠だと気付かずにね」

「罠？」

「そう、罠……アイツには別の記憶があつたの。【C. E. の兵器の記憶】、こつちも正確には技術だね、それをISで確立するために私に近づいたの」

「……ミラージュコロイドとかですか？」

「そうだね、後はV.Lとかビームシールド技術とか。とにかくアイツはその技術を確立してから、私を消しにかかった。亡国の連中を手先に、あのアスランとかいう男を差し向けてね」

アスラン、その言葉が出た瞬間、真の表情は驚愕に変わる。

「……やっぱりいるのかよ、アスラン」

「……うん」

ラキーナが真の言葉を肯定する。

真にとつてはラキーナ——キラがこの世界にいる時点で半ば予想していた事であったが。

つくづく自分にはヤツ等との【因縁】があるらしい。

「信じてたんだ、ラクスの事……でボロボロになりながらも何とか逃げ切って、とある欧州の小さな街で力尽きて……そしてカナ君達に匿ってもらって今の私がいるの」

「……あの時は酷かったな、色々と」

「だね。その後はアイツを止める為に戦うって決めて今に至るかな。カナ君達に協力してもらってクーちゃん助けたりもしたしね」

今この場にはいない【家族】であるクロエの名前を出す。

彼女は今、無人となっているブレイク号の留守を任されている。

「それで……そのラクスとかいう女の目的は何なんだ？」

黙って話を聞いていた千冬が口を開く。

それにカナードが少々言い淀みつつ返す。

「世界を自分の思うがままに操る……事だと見ている」

「……えらく不確かじゃないか」

「ヤツの思考程読みにくいモノはない。元々ラキや多数のコーディネーター達を言葉巧みに操っていた人間だからな」

カナードが吐き捨てるように言う。

「だが、今の奴には束の……I Sの全知識が備わっている。はつきり言おう、どんな兵器よりもタチが悪い……だから俺達が止める」

「アイツの、ラクスに力を与えてしまった私達が止めなきやならない」

「……ここまでが俺達が戦う理由だ。信じてもらえるだろうか、織斑千冬」

「……分かった、信じよう」

カナードからの問いに納得したからなと続ける千冬。

その様子に少し拍子抜けした束が質問を投げる。

「ずいぶんあっさりと信じてくれるね、ちーちゃん」

「お前の変化に合点が行ったのだ。それに一夏と変わらない年齢の真がどこか大人びていた理由がようやく分かったからな」

「あー、成程、それは私もかなー。私が記憶をはつきり思い出したのは5年位前だけど……小さい頃からあつくくんはどこか大人びてたもんね」

「ああ、まさか中身が40に近いとは思わなんだ」

千冬と東の両者がニヤニヤと笑いつつ、真を見つめる。その視線にげんなりしつつ、真が答える。

「……やめて下さいよ。人の事、おっさんみたく言うの」  
「でも事実だろう？」

「今の俺は15歳です」

それ以上の茶々を拒絶するように、真は語気を強める。そして話を切り替えるために東に質問を投げた。

「それで、東さん達はこれからどうするんです？」

「ん、しばらくはISS学園の近海でお世話になるつもりだよ」

「……勝手に決めるな、東。それに何故だ？」

東の回答にもものすごく嫌な表情となった千冬が理由を問いただす。彼女がISS学園の近くにいます。

つまりは必然的に千冬の仕事が増える可能性があるのだ。

「だって、ラクスの使うI Sの【単一仕様能力】を防ぐ手立てを考えなきゃならないし……とりあえずはここにある全I Sのコアを確認しないとね」

さらつとんでもないことを口走る束だがこれをやってのけるから天災なのだ。

「【単一仕様能力】？」

「そう、たぶん【強制干渉】だと思う。VLユニットから出る光の粒子でI Sや機械のコントロールを剥奪できるんだ、しかもエネルギーまでね。以前、私が作ってたゴーレムって無人機のコントロールをドンドン取られたのには驚いたね……」

まあ、同じ手は喰わないけどねと束は続ける。

「それに俺達がI S学園の近くにいればここを守る戦力にもなる。奴はI S学園を実験場としても見ているだろう……生徒達を守るためには自由に動かせるコマは多く持つておいたほうがいいだろう？」



「……お前は傭兵だったな、カナード・パルス」

先ほどのC・E。世界の話を思い出して、カナードに目線をあわす。

「ああ、有事の際は協力する。だがラクス・クラインについての調査で俺ははずすことも多い……がその際はラキがいる」

「はい、私も微力ですがお手伝いします」

「……はあ、分かった、いいだろう」

その後、学園内のIS全機体について束によるメンテナンスが決定した。

カナードとラキーナについては、IS学園近海に停泊し姿を消している【ブレイク号】にて滞在する事となった。

「……カナード……お前、本当に落ち着いたよな」

「……どういう意味だ？」

ジロリと真を睨むカナードに肩をすくめる。

「ネオ・ザフトで戦ってた頃はこう……何にでも噛みつく感じだったじゃないか、こうギラギラって感じでさ」

真のシン・アスカとしての記憶の中の彼は、もっと威圧的であったと感じている。それでもそれ以前よりは落ち着いていると叢雲効から聞いた時は驚いたものだ。

「……あれから俺は数十年、70歳までC.E.で生きたんだ。それだけ経てば人も変わるだろう」

「70つ……そりゃそれだけ経てば落ち着くかあ……お爺ちゃんってわけか」  
「……人を年寄り扱いするな」

真の言葉にカナードは思わず苦笑を漏らしてしまった。

真とカナードの会話の後に、カナードとラキーナの扱いについてもこの場で決定される事になった。

ラキーナは女性であるため、IS学園内では特には目立たないであろうがカナードに

については別だった。

カナードの学園内での扱いについては、保護した3人目の男性搭乗者であり、雑務担当の非常勤講師という扱いになった。

これについてはカナードの年齢が19歳であり、彼自身、ラクス・クラインについては調査があるためこのような形となったのだ。

カナードの年齢が自分より4つも年上であることを知った真が大層驚いたのは別の話である。

また、懐に隠し持っていたナイフについては千冬に見られてしまったため没収され、反省文の提出を言いつけられてしまったのであった。

## PHASE 28 「私はあなたが好き」

IS学園では新たに見つかった4人目、（正確には3人目だが）の男性搭乗者であり、非常勤講師となったカナードの噂でもちきりとなっていた。

特に真とは前世の関係もあり、親しそうに話しているのを見られてしまい黄色い声が溢れていた。

当のカナードとしては、この現状に異議を唱えていたが千冬に却下されてしまい状況に甘んじるしかなくなってしまうていた。

またVTシステムによって暴走してしまいセシリアを負傷させたラウラについては謹慎中ではあるが学生の身分であることを理由に授業に出ることを許されていた。

その際、ラウラからの先日までの態度及びセシリアへの暴言と暴力についての謝罪があった。

以前とは打って変わった彼女の姿に少し驚いたものの、セシリアは謝罪を快諾、クラスメイトも受け入れた。

なおその際に彼女を助けた一夏に対しては突如彼の唇を奪った後、

「お前は私の嫁にするっ！」

と言つてクラスを騒然とさせる一幕があつた。

箒やシャルロット、別クラスからも鈴が現れ一悶着あつたが。

なお、真については彼女曰く戦友との事だ。

ちなみにISへの搭乗については依然として謹慎中であるため実技などは見学、またはアドバイスを徹している。

### 閑話休題

それから数日後の放課後

第3アリーナ Aピット内

現在第3アリーナとはある理由により貸し切りの状態とされている。

その理由は日本代表候補生である【更識簪】の専用機【打鉄式式】が完成した事による【飛鳥真】との模擬戦。

所謂デモンストレーションが行われるからであった。

観客席には打鉄式式の開発に関わった日出のスタッフである利香やジェーン、数人の開発チームの主任や社長である優奈の姿もある。

加えて一夏達や、少し離れた場所ではラキーナの姿も見られた。

ちなみにこの模擬戦については簪の姉である楯無にも話が行っていたのだが、どうしても外せない家の事情があるらしく欠席している。

どうやらシャルル——シャルロットについての事であり、楯無は血の涙を流していたか。

ピット内ではIS【打鉄式式】を纏った簪が本音と最終確認を行っていた。

『PIC稼働率正常、シールドバリア正常に稼働中、マニピュレータ正常……』

「各装甲問題なし、武装コンディションも問題なし！行けるよ、頑張つて、かんちゃーんっ！」

目まぐるしく変わる空中投影ディスプレイを確認し、本音が問題なしの意図を込めたサムズアップを取る。

『うん、ありがとう、本音……行ける……大丈夫……!』

カタパルトに移動しつつ、深呼吸。

ふうと息を付くと同時に、射出タイミングが譲渡される。

『……打鉄式式改め【飛燕】、更識簪、行きますっ!』

【飛燕】

それは彼女が決めた打鉄式式の正式名称であり、【空を飛ぶ鳥】に追いつくための名前でもある。

カタパルトから打ち出された飛燕は、スラスターを噴かせつつ、背部に非固定浮遊部位を展開して【翼】の様に広げる。

同時にその翼から青い粒子を溢れさせ【光の翼】を展開してアリーナの空に向かう。

『VLユニットおっ!?!』

デステイニーインパルスを纏う真が、模擬戦相手である簪の機体から広がる光の翼を見て驚愕の声を上げた。

飛燕と言う正式名称は簪から教えてもらっていたが、結局模擬戦が始まるまでは武装について教えてもらっていなかったのだ。

デステイニーインパルスと同じ色の光の翼を広げて、簪が目の前で静止する。

『……驚いた?』

少しだけ得意げに笑う簪に苦笑しつつ返す。

『……ああ、なるほどな。利香さんが今回の模擬戦はデステイニーシルエットのみで指定していた理由が分かったよ。同じ装備でつてことか』

『飛燕のVLユニットは少し簡易化してるから加速にしか使えないけど……これで追いつけるよ、真』



飛燕に搭載されているV Lユニットは、デステイニーシルエットに搭載されているモノとは正確には異なっている。

飛燕のモノは「ビーム操作」等のエネルギー干渉機能がオミットされた簡易型であるからだ。

つまりはMS「デステイニー」に搭載されていた、V Lの近似種、光圧推進スラスターに近い。

『……そういえば簪と模擬戦するのは初めてだったな』

『うん。だから全力で来て、真、私も全力で行くからっ！』

そういつて簪は右手にインパルスと同型の「ビームライフル」を展開。

同時に空いている左手には「パイルバンカー」が展開される。

展開されたパイルバンカーはまるでリボルバー式拳銃のような弾倉が付属している。弾倉には炸薬が装填されているのが確認できた。

『……パイルバンカーかっ！』

『ステーク、アクティブ！ 行くよ、真っ！』

撃鉄がセットされると同時に、V Lユニットとスラストターを噴かせた飛燕が突っ込んでくる。

同時にビームライフルのトリガーを引きインパルスに向けてビームを放つ。

発射される直前に銃口の向きから射線を予測——青い光の残光を残してインパルスは回避していた。

インパルスは回避と同時にビームライフルを展開しており、反撃が飛燕に銃口が向けられるが、瞬間的な加速により回避を行う。

『V Lユニット相手だと狙い辛いっ！』

『それはお互い様っ！』

簪の狙いとしては、ビームライフルで攪乱した後にパイルバンカーでの一撃を与えたかったが、真相手ではどうやら無理のようだ。

もつともそれは真の技量を知っている簪には想定済みだ。

互いに瞬時加速やフェイントを織り交ぜながら射撃を繰り返すが、有効打には至って

いない。

膠着した状況を打破するべくビームライフルを格納したインパルスは両手に大型実  
体剣エクスカリバーを展開、刀身のビームを起動しつつ光の翼による圧倒的なスピード  
で斬りかかる。

『っ、ならっ！』

対する簪もビームライフルとパイルバンカーを格納、エクスカリバーに似たデザイン  
の実体剣を展開した。

エクスカリバーの刀身よりも長く、飛燕の機体全長と等しいくらいの大規模の実体剣  
だ。

彼女が展開した実体剣の名前は「バルムンク」

——簪が温めていたアイディアを日出の技術者と共に形にした武装だ。

エクスカリバーは片刃にビームを展開するタイプであるが、バルムンクは両刃に刀身  
ビームが奔っている。

金属音がアリーナに響き渡り、鏢迫り合いの形になる。

両機体の光の翼が最大稼働状態となり青い粒子が溢れていく。

だがすぐに状況が動いた。

『はあっ！』

『あうっ!?!』

鏢迫り合いの状態から、インパルスが飛燕に向かって脚部スラストーから得られた速度を乗せた蹴りを叩き込んだのだ。

同時にエクスカリバーを格納、代わりにフラッシュエッジを展開し、投擲。たまらずに蹴り飛ばされた簪にフラッシュエッジが迫る。

併せて再度エクスカリバーを展開してインパルスが斬りかかってくる。

『まだっ！』

即座にA M B A Cによる姿勢制御と反撃に移る。

バルムンクの刀身が真ん中から2つに割れ、砲口が顔を覗かせた。

そして砲口部に粒子が集束し、青白いビームとなつて放たれた。

投擲していたフラッシュエッジはビームに飲まれ破壊されてしまった。

簪が温めていたアイディア——それは遠距離と近距離の複合、つまりは「遠近複合武装」である。

大型実体剣〔バルムンク〕には斬撃モードと砲撃モードの2種類が存在しており、斬撃モードではエクスカリバーを越える質量による近接格闘、砲撃モードでは高出力のビームを放つことができる。

また突き刺してから砲撃モードに移る事で強力な一撃を叩き込むことすらできる。

ちなみにこの武装は簪がとある深夜アニメを見て思いついた武装であり、開発に協力した日出のスタッフもそれを見ていたため開発がスムーズに進んだ経緯がある。

『ぐうっ!?!』

ビームの発射寸前に反撃動作に気付いた真はかろうじてシールドでビームを防ぐ。

だが、かなりの高出力ビームであったため、反動によりシールドごと弾き飛ばされてしまった。

その隙を簪は見逃さなかった、即座にバルムンクの刀身を斬撃モードに変更し、VL最大稼働状態に移行。

体勢を崩した真に迫る。

『これでえっ!』

バルムンクでインパルスを横薙ぎに斬りつける。

だが斬りつけたインパルスはノイズを残して姿を消してしまった。

『残像っ!? センサーでは質量もあつたのにつ!?!』

この機能を簪は知っている、デステイニーインパルスに搭載されたミラージュコロイドによる残像だ。

即座にハイパーセンサーで周囲を確認、すると頭上数十mに真がいた。

あの一瞬で姿勢制御を行い、囷を残して距離を取る。

舌を巻くほどの操作技術だ。

『遠近複合武装か……テストで使ったシルエットのガナリーカーバーって武装と同類か』

残りのシールドエネルギーを確認する。

残存エネルギーは約6割程度と表示されている。

デステイニーインパルスの燃費は劣悪だが、日出スタツフによるアップグレードが続けられており、以前よりはマシになって来ている。

VTシステム暴走事件以前の1秒間の消費エネルギーを10とするのなら、現在は1秒間に9消費するといった程度の微々たるものであるが。

だがそれでも以前よりは消費エネルギーは減っており、ミラージユクロイドを用いた残像を戦術に加えることが可能になったのだ。

『……やっぱりすごいね、真は』

『簪こそ、その剣には驚かされたよ。複合武装、いいと思うよ』

互いに距離を取りつつ言葉を交わす。

『ありがとう、真にそう言ってもらえると……嬉しい』

真の言葉に笑顔を簪は浮かべた。

彼女の笑顔に真は一瞬見惚れていた。だがすぐに気持ちを切り替える。

『……さて、それじゃ仕切り直しだなっ!』

『……うん、行くよっ!』

再び己の得物を構えた2機が光の翼を開く——まるで大きな翼の様に。

模擬戦終了後——自室

簪の専用機〔飛燕〕のお披露目模擬戦は無事終了した。

模擬戦の勝敗についてだが、結局はお互いのエネルギー切れによる引き分けというあっけない幕切れとなった。

簪は日出のスタッツに模擬戦のレポートを纏めて提出しに行っているため、部屋にいない。

模擬戦終了後から、真は自室のベッドの上である事を考えていた。

それは以前、セシリアに指摘された、彼女への想い。

簪から向けられる好意には気づいており、それを嬉しく感じ異性としての好意を持つ



ている自分がある。

だが、ルナマリアの想いを自分は拒絶し、戦士として進んだ。

戦士として切り捨てるべきと思っている自分がある。

セシリアに指摘されてから時間があるときは考えている。

しかしずっとこの2つの考えが頭の中でぐるぐるまわっている状況だ。

ちなみに友人に相談しようとも考えたが、一夏は朴念仁、カナードは恋愛相談などできそうにないので1人で悩んでいる。

「……仕方ないか」

上半身を起こして携帯でとある相手に電話をかける。

その相手は――

『もしもし、飛鳥ですが』

「あ、父さん？」

父親である【飛鳥大胡】であった。

『珍しいね、真が僕に電話をかけてくるなんて』

「……ちよつと相談したいことがあつてき……今、時間大丈夫？」

『ああ、丁度、今日の分の仕事は終わつて帰宅準備中。で、何だい？』

「……人を好きになるってどういうことなのかな？」

真の質問を聞いた大胡は、ふふつと嬉しそうに声を出した。

それが聞こえた真は少しげんなりとしつつ答える。

「……なんだよ、父さん」

『いや、ごめんごめん。ようやく息子にもそういうのが来たのかつて思うと嬉しくてね』

大胡の声には嬉しそうな感情が多分に込められている。

『で、人を好きになるってどういうことかか。僕の場合は母さん、玲奈の事だね。そうだね、最初は事あるごとに喧嘩したものさ、僕と彼女は』

「えっ、そうなの？」

『ああ、些細な事でね。でもそれで彼女の色々な仕草って言うのかな、彼女の色々な面が見えたから一緒にいたいと思っただ』

「……そっか」

『答えになれたかな?』

大胡からの返答に少しだけ詰まる。

「……どうなんだろう。俺さ、相手の事たぶん好きなんだ、けど……」

『けど?』

「……受け入れちゃいけないとも思ってるんだ」

『……』

真の言葉に大胡が沈黙する。

「ごめん、父さん。訳わからないよな……」

『……昔からどこか大人びていたけど、やっぱりお前は変わってるね、真』

「……」

『ただこれだけは言えるよ、自分の気持ちに正直になりなさい』  
「気持ちに……正直に？」

大胡に言われた言葉を反芻するかのように真が繰り返す。

『ああ、お前の中にある相反する気持ちがあるのは分かった。ならどちらに正直になりたいか決めなさい』

「……」

『……おっと、そろそろ出ないと……大丈夫かい、真？』

「……うん、ありがとう、父さん。なってみるよ正直に」

『ああ、それがいいよ。じゃあ、切るね』

「ありがとう、父さん」

そういつて通話が切れる。

大胡に言われた正直になるという言葉。

自分の中にある相反した気持ちに正直になる。

やはり戦士として「花」を守る為に戦うには簪の気持ちを拒絶するしかない。

それが自分の結論。

そこまで考えた時だった。

『ありがとう、真』

『真のおかげだよ』

『真が私の背中を押してくれたの』

『ありがとう、真にそう言ってもらえると……嬉しい』

彼女の——簪の心からの笑顔が浮かんだ。

特別な事情や状況もなく、ただ戦うことしかできない自身に心からの笑顔を見せてくれた異性は簪が初めてだ。

自分に向けてくれていた彼女の笑顔を曇らせたくない。

そして【花】というキーワードで気づいた。

「……そうだ、【花】なんだ。俺は彼女に自分だけの……【花】になって笑っていて欲しいんだ」

ようやく気づくことができた自分の気持ちに、ふと笑顔が浮かんだ。真は選択したのだ。

【花】と共に彼女の笑顔を守ると。

ふと、携帯を見るとメールが届いていた。

確認してみると意中の相手からだった。

「……30分後位に戻る……か、よし」

ベッドから起き上がり、少しだけ背を伸ばした。

自分の気持ちに気付いた。

後はこの気持ちを彼女に伝えるだけだ。

---

30分後――

「ただいま」

「お疲れ、レポートどうだった？」

「うん、利香さん達に渡してOKもらったよ」

利香達にレポートを渡した後は機体の微調整について意見をもらっていたとの事だ。

「飛燕、完成してよかった」

「うん、本当にありがとう。真や皆のおかげだよ」

簪は持っていたバッグを机の上においてから真に振り返る。

部屋にある置時計に視線を合わせてソワソワとしていた真が口を開く。

「……………あのさ、簪、今時間大丈夫か？」

「うん、大丈夫だけど……………どうしたの？」

少し恥ずかしそうにしている真に不思議そうに顔を首を傾げる。

「……………簪に伝えたいことがあつてさ」

「なっ、何……………？」

真の言葉に一気に彼女の顔が赤くなる。

真の雰囲気を感じてくれたのだ。

それに内心感謝の言葉を呟き、口を開く。

だが言葉が上手く出てこない。

自身の心に溢れている気持ちを伝えられるよう色々と考えていたはずだったと言うのに、いざ伝える場面になると何もでてこなくなってしまったのだ。

その様子に簪は少し首をかしげていた。

自分の態度に情けなさを感じつつも何とか言葉を紡ぐ。

「……あー、くそ、本当はムードとかちゃんとしたかったけど、やっと自分の気持ちに正直になれたんだ。だから言わせてくれ」

真も顔を赤くしつつ、真っ直ぐな瞳で簪の目を見つめつつ口を開く。

「好きだ、簪」

自分の心の中に溢れている想いを伝えた。



真の告白を聴いた簪の瞳は驚きに見開かれ、ポロポロと涙を流し始めた。

その様子に真は軽いパニック状態に陥ってしまった。

彼女が好意を向けてくれていたのには気づいていたが面と向かって告白したのだから真も緊張していたのだ。

「えっ、ちよっ、何で泣くんだっ!？」

「ごっつ、ごめんなさっ……うれしっ……くて……ごめっ……!」

そう言って簪は制服の袖で涙をぬぐい続けているが涙は止まる気配を見せない。

「ごっつ、ごめっつ、本当に嬉しくて……私なんかを……真が……好きって……!」

「……簪だから、俺は自分の気持ちに正直になれたんだ、ありがとう」

そつと簪の手を握って微笑む。

5分程そのまま簪が泣き止むのを待った。

そして彼女が深呼吸して呼吸を整える。

「私にも言わせて……もらえるかな、真」

赤い顔でそう言った簪に頷く。

涙に濡れた彼女の顔も綺麗だと思ってしまったのは心にとどめておく事に決めた。

「……私はあなたが好き……だよ、真」

「……ああ、ありがとう簪」

彼女の告白を聞いて、彼女と同じように嬉し涙が流れた。

翌日、どういうわけか真と簪が告白しあった事が学園中に噂として広まっていた。その背後にウサギ耳の天災がいたようだが、真相は不明である。

## PHASE 29 運命の鼓動（前編）

意識が浮かんでくる——とても心地よい風と花の香りが鼻腔をくすぐる。目を開けると目の前に綺麗な花が咲き誇っている。

「……………」

見渡す限りの花畑。

一面に様々な種類の花が咲き乱れ、風が吹けば花びらが舞っている。

「……………え？」

花畑の中で仰向けに寝転がっていた真が起き上がる。

「……………どいだよ、ハハハ？」

彼の困惑も仕方がない。

真の記憶では自室で簪と消灯時間まで特撮の話で盛り上がって、その後床についたところまでをはっきり覚えているのだ。

「……ああ、明晰夢って奴か、夢を夢として理解してみる云々の」

『違うよ、真♪』

「っ!？」

背後から突如女の子の声があった。

油断していたとはいえ、背後を取られるまで全く気づかなかった。

咄嗟のサイドステップで距離を取りつつ振り返る。

そこには「金髪の美少女」が立っていた。

セミロングの金髪に、白いワンピース姿。

清楚な雰囲気を漂わせており、顔はどこことなく「ステラ」に似ているが別人だ。

真の行動と表情を見て、その女の子は驚愕の表情を浮かべていた。

だがすぐに苦笑に変わる。



そして辺りが一気に暗くなる。

「なっ……!?!」

光が消えたわけではない。

上空の物体によって光が遮られて影となっているのだ。

光を遮っている物体を見上げる。

逆光で詳細には見えないが人型の機械が浮いている。

見覚えがある。

かつて共に駆けたその機体、頭部には「血の涙」を流すような紅いラインが走っている。  
る。

『まだ届かない……けど大丈夫、私はいつもここにいるよ、真』

かつての愛機から先ほどまでの少女の声が響いて、真の視界はブラックアウトした。

---

「……………?!」

視界が戻ると同時に飛び起きる。

先ほどまでの花畑ではなく見慣れた I S 学園 学生寮の自室だ。

時刻を見ると午前 3 時前。

ルームメイトであり先日恋人となつた簪の寝息が聞こえる。

（今のは……………なんだつたんだ……………?）

彼女を起こさないよう音を立てずに、再び自分のベッドに横になる。

（さっきのは……………【デステイニー】……………だよな……………?）

先ほど夢に出てきたあの機体。

戦場を共に駆け、共に散つた愛機【デステイニー】、いや【デステイニーガンダム】であつた。

何故自分があんな夢を見たのか。

直感であるが、何か意味があることだと真は思えた。

それに1つ心当たりになるキーワードをISの知識として知っている。

(<sup>セカンドソフト</sup>第二形態移行……なのか?)

【<sup>セカンドソフト</sup>第二形態移行】——ISコアや機体その物との同調が高まるとIS自体が進化を起こし、第二形態に移行する現象だ。

(……昼にカナードや束さんに聞いてみるか)

今日は祝日であり、模擬戦の予定も特にならない。

カナードや束、またはラキーナに先ほど見た夢について相談すれば何か分かるはずだ。

そこまで考えて、瞼が重い事を思い出した。

(……眠いな、朝のトレーニングまで少しだけ寝よう)



ベッドに横になって、目を瞑る。

先ほどの夢は見られず、早朝トレーニングまでは浅い眠りを取った真であった。

---

## 第2アリーナ 整備室

「夢……だと?」

「ああ、見たこともない場所と女の子の夢を見たんだ」

手にスポーツドリンクを持ったカナードが真の言葉に疑問の声を漏らす。

カナードとは連絡先を交換しているため、以前に比べれば情報の交換は容易に行えるようになってきている。

また現在の彼は「ラクス・クライン」のISの【単一仕様能力】と想定される【強制干渉】を防ぐため、学園内の訓練機のOS等に対策を施している束を手伝っているのだ。作業の手を止めた束が真の言葉に振り返りつつニタアと笑顔を浮かべる。

「あつくんてば簪ちゃんだっけ？ 恋人できたばつかなののに、他の女の子の夢見るなんて罪作りだね」

「……茶化すな」

「~~~~っつ!!」

ガシッと背後から彼女の後頭部を掴んで力を込める。

決して女性がしていい顔じゃない顔で束が悶絶している。彼女の頭から手を離れたカナードの顔が何かを考えるような表情に変わった。

「心当たりはあるんだ……でも【第二形態移行】でISの夢を見るなんてありえるのか？」

「つうく、もう、カナ君力強すぎ……って、ありえるんだよね、それが」  
「えっ、そうなんですか？」

「うん、アイツ……ラクスのISも同じように第二形態移行したからさ」

頭を抑えつつ、束が立ち上がり涙目で真に答える。

「ラクス・クラインのISもか……」

「アイツもそれには驚いてたよ、それでどうするの、あつくん？」  
「どうする……つて？」

東の言葉に首を傾げる。

「ん、第二形態移行したいんでしょ？」

「そりゃあ……あいつらに対抗するには力はあつたほうがいいと思いますけど……方法があるんですか？」

「うん、カナ君と戦えばいいんだよ♪」

彼女の口から出た模擬戦の誘いにカナードがなるほどと呟く。

「どういうことですか？」

「ISの第二形態移行の条件は稼働時間と戦闘経験が蓄積なんだ、だからカナ君と戦えば上手くいけば今日中に第二形態移行するかもね」

「なるほど……俺は大丈夫だけど、カナードは？」

「……俺も別に構わん、それに真、お前の力を見ておきたい、奴等との戦いの為の戦力となるかどうかをな」

「……全力でいくからな、カナード」

「当然だ、全力で来い、真」

不敵に笑うカナードの挑発めいた言葉にあえて乗る——真もカナードの力を見ておきたいと考えたからだ。

「よっし、ならちーちゃんに連絡しとくねー、後は……」

胸の谷間から携帯電話を取り出し、千冬へと連絡を繋げる束であった。

---

## 第2アリーナ 観客席

真とカナードの模擬戦が決まったという情報は、一部の生徒達を除いては情報規制が敷かれていた。

一部の生徒とはセシリアや鈴、シャルル、ラウラ等の各国代表候補生、及び一夏と箒、そして簪である。

この人選には束とカナード、そしてラキーナの意見が取り入れられている。

代表候補生は基本的に専用機持ちであり、技量も一般生徒よりも高い。

それ故に有事の場合には戦力にもなる。

また代表候補生は総じてプライドが一般生徒より高い傾向がある為、「男性搭乗者」同士の戦いを見せることでプライドを刺激し、より強くなつてもらおうと言う意図も含まれている。

なお、箒については束から「紅椿」と言う専用機を受け取っている。

「展開装甲」を稼動させることで、攻撃・防御・機動等あらゆる状況に対応できる他、機体性能も既存の機体を凌駕する【第4世代IS】との事だ。

これを受け取った箒は微妙な表情をしていたと、その場にいたラキーナは語っている。

【C. E. 世界】については濁されているが束から戦う理由を教えてもらっているからだ。

戦う理由を聞いた箒は自分が力を欲していた理由を思いかえして自己嫌悪に陥った。

しかし姉の自分を想う気持ちを理解し、箒自身にも彼女を支えたいという気持ちが生

まれていることに気づくことができた。

故に「力」を受け取ったのだ。

また姉との関係は以前の様にマイナスではなく、少しずつプラスに持ち直している。

「えつと……ラキーナ……だっけ？」

「はい、織斑さん」

観客席で模擬戦が開始されるのを待っていた一夏は数席隣に座っているラキーナに声をかけた。

ちなみにラキーナはIS学園でも目立たないように女子用の制服を貸し出されてお  
り、現在は私服ではなく制服を身に着けている。

「真と戦うカナード……さんって強いのか？」

カナードが自分より年上である事を思い出した一夏がとっさに敬称を付けつつ、質問する。

そんな一夏の様子に苦笑しつつ、ラキーナが返す。

「ふふっ、呼び捨てでいいと思いますよ？ 兄さんもたぶん呼び捨てでいいとか言いますから」

「あつ、そうなの？ じゃあ呼び捨てで……んでカナードって強いのか？」

一夏の質問に少し思案顔になるラキーナであつたが、数秒で答えを返す。

「多分、互角かな……と思います、それに2人の強さは異なつてると思いますから」  
「強さが異なるって何よ？」

一夏の隣で烏龍茶を飲んでいた鈴がその会話に割り込んでくる。

一夏が美少女であるラキーナと会話していることに目を光らせていたが、「そういう雰囲気」がないことを確認できたため興味から割り込んできたのだ。

「真の強さは【対応力】だと私は思ってます、もちろん技量や爆発力も高いですが……。シルエットを変えることで機体の性格を変えることができるといっても、あくまで汎用機であるインパルスで特化機やパワーのある機体と互角に戦える点からもそう思いま

す」

「確かに……僕のパイルバンカーもすぐに見切られて対応されちゃったしね」

「私との模擬戦でもそうね、衝撃砲すらすぐに対応されたし……じゃあ、カナードつてやつの強さは？」

以前真と行った模擬戦を思い出しつつ、ラキーナに問いかける。

一夏達とは放課後によくアリーナの使用申請を出して模擬戦を行っていたため、鈴やシャルルは真と数度戦ったことがあるのだ。

「えっと……兄さんの強さは【技量】なんです、国家代表かそれこそ歴代のヴァルキリーに匹敵するレベルだと思ってます」

「ヴ、ヴァルキリーって、おかしいでしょ、流石につ!？」

「兄さんの機体制御技術は恐らく歴代のヴァルキリーにも匹敵しますよ、アスラ……つつ、近接技能に特化した人とも片腕が使えないハンデありの状態で戦えますし……。それに汎用的な近接武装ないんですよ、ドレッドノートには……まあ、イータユニットつていう背中の非固定浮遊武装があるんですけど、それでも汎用性には欠けますし」

「確かにあの時の奴の機動は凄かったが……!？」



ハンデとラキーナの言葉が出た時に箒の眩きと共に表情が一瞬曇ったことはご愛嬌だ。

「え、でもあの無人機との戦いときには【光の膜】や【槍】みたいな武器使ってたけど……」

一夏が以前のイージスとの戦いを思い出す。

あの時確かに彼は光の槍の様な武装を使っていた。

だがそれをラキーナは否定する。

「あれは本来、武装ではなくて【アルミューレ・リユミエール】という【シールド】なんです、まあ、ビームでできたシールドと考えてもらえれば……それを兄さんは状況に応じて発生率を調整して【槍】や【サーベル】状にしているんです」

「……成程、お話を聞く限りですとかなりの腕前と言う訳ですわね？」

「戦友である真と互角か……軍人としては欲しい人材だな」

セシリアとラウラもラキーナの話を聞いて感想を呟く。

「はい、でも真も兄さんの事は知ってますから……多分互角の勝負になると思います」  
「……大丈夫、真は負けない」

ラキーナの言葉と共に観客席にいた簪が呟く。

その言葉にラキーナも含めた一夏達が一斉に生暖かい顔を浮かべる。

「なっ、何っ!？」

「いえ、微笑ましいなと」

「あうう……っ」

一瞬で顔を真っ赤にした簪が俯く。

その様子をセシリアは微笑んでみていた。

「……ホントに付き合ってるんだな、真と簪さん」

少し羨ましそうな表情で、一夏は簪を見ている。

そんな一夏を恋に悩める乙女である残りの4人は睨むように見つめていた。

「あはは、苦勞してるんですね、箒さん達……あつ、始まるみたいですよ？」

ラキーナが苦笑を浮かべたのと同時に、Aピットから「ソードインパルス」を身に纏った真が、Bピットから「ドレッドノートH」を身に纏ったカナードが飛び出てきた。

『ソードインパルスか』

『ああ、ドレッドノートにはコイツのほうが相性いいからな』

大型実体剣エクスカリバーを両手に構えて答える。

真は前世からカナードが使っている「アルミューレ・リュミエール」の弱点を知っている。

エクスカリバーには耐ビームコーティングが施されているため、「アルミューレ・リュ

ミエール」を貫くことが可能だ。

『確かに……ビームコーティングが施されているその実体剣ならばALを抜くことはできらるだろうな……だがその選択は正しいのか？』

左手に「ビームサブマシンガン」を展開、右手の甲より「AL」が発生し、△型の光の盾となる。

同時に模擬戦開始のコールがアリーナに響く。

幾条ものビームの光がドレッドノートのサブマシンガンから放たれるが、射線を読んでいるインパルスはスラスターを噴かせて回避を行う。

真が初撃を避けることは想定済み。

そのままトリガーを引き続けて弾幕を張り続ける。

『ぐっ、弾幕かつ！』

近接格闘形態のソードインパルスのスラスター出力は、高機動形態のフォースインプルスよりも低くなる。

そのため逃げ場がないほどの弾幕を張られると、どうしても回避が間に合わなくなるタイミングがある。

左手に装備されているバックラー状の実体シールドで受け止めるが、機動が止まってしまう。

カナードにとってはソードシルエット程度の機動力は苦もなく弾幕に捉えることができる—。

選択が正しいかと真に問うたのはそのためだ。

『どうした、真、この程度ではないだろうか？』

弾幕を張りつつ、ドレッドノートの背部非固定浮遊部位「イータユニット」が「砲台」の様に変形／展開されていく。

イータユニットが1対のデバイスを前方に展開した砲撃戦形態「バスターモード」に切り替わったのだ。

『当たり前だあつ！』

1対の砲口から高出力のビームとグレネードランチャーが発射される直前に、インパルスは多少の被弾を覚悟し、両手にフラッシュエッジを展開し投擲する。

発射された高出力ビームによって1つは融解し爆発。

だがもう1つのフラッシュエッジはドレッドノートに向かっていく。

しかしドレッドノートの右手に展開されているALによって呆気なく弾かれる。

『無駄だ……っ!?!』

フラッシュエッジを苦もなく弾いたカナードの表情が驚愕に変わる。

何故ならば自身に向かってエクスカリバーが2本、凄まじい速度で迫ってきているからだ。

『ちい、陽動かつ!』

ALの発生率を高めて大型のシールドを展開する。

現在ドレッドノートは砲撃戦態である【バスターモード】であり機体の運動性能は、通常形態と比べて鈍重と言えるレベルに落ちている。

大型のALシールドによってエクスカリバーは2本とも弾かれてしまう。

だが一連のやり取りで真の姿を見失っていた。

咄嗟にハイパーセンサーで確認。

相手の反応は自身の頭上を示している。

『上かつ!?!』

『うおおおおおっ!』

カナードがエクスカリバーに気を取られている間にインパルスが両手に持つ「フォルディングレイザー対装甲ナイフ」を上段に構えて突きに来ていた。

『舐めるなあ!』

バスターモード形態であるドレッドノート運動性能は低い。

だが防御ができないわけではない。

即座に姿勢制御を行うことで、ビーム砲塔一つを突っ込んでくるインパルスに向ける。

インパルスの「フォールディングレイザー対装甲ナイフ」は慣性のままビーム砲塔を貫き破る。

ビーム砲塔一つを犠牲にインパルスの攻撃を防いだのだ。

攻撃を防がれたインパルスは即座にナイフを手放し、瞬時加速によつて距離を取つた。

だが――

『読んでいるぞ、真っ！』

残つたビーム砲塔がインパルスの回避先を捉えていた。

インパルスが装備しているシルエットがフォース、またはデステイニーシルエットであつたのならば追撃は不可能であつただろう。

咄嗟にバックラーでビームを受け止めるが、バックラーでは完全に威力を受け止めきれず表面が融解し、弾き飛ばされた。

『ぐうっ！?』



あまりの威力に体勢が大きく崩されてしまった。

ドレッドノートに完全に背を向けている状態だ。

すぐさまスラスターとAMBCで姿勢制御を行うがすでに2射目がインパルスを捉えていた。

『もらったぞ、真っ！』

カナードが躊躇なくトリガーを引く。

（まずっ、避けきれなっ……いー）

スラスターによる回避やAMBCが間に合わず、避けきれないと真が判断した瞬間であった。

——彼の頭の中で【紅い種】が弾け飛んだ——

そしてビームはそのままインパルスに着弾、大きな爆発を起こした。

## PHASE 30 運命の鼓動（後編）

——爆発がアリーナに衝撃を奔らせる。

「真っ!!」

観客席から悲鳴に近い簪の音が響く。

簪から見ても完全に回避が行えない状況で直撃を受けていた。

ようやく想いを通じ合った相手が爆発に飲まれる様を見て、ISには絶対防御がある事すら頭から抜け落ちて取り乱してしまった。

だが、すぐさま冷静な思考を取り戻すことができた。

——何故ならば爆発の中から「蒼い光の翼」が現れたからだ。

---

蒼い光が見えた瞬間、凄まじい速度で「デステイニーシルエット」に換装したデステイニーインパルスが爆炎から飛び出してくる。

爆炎に紛れて「シルエットの残骸」が地面へと落下していくが、インパルス自体の損傷は少ない。

『ちっ、シルエットを盾に使ったかつ！』

カナードの推察は当たっていた。

真はビームの直撃を受ける直前に背部の「ソードシルエット」をパージしていたのだ。パージしたシルエットがビームの直撃を受けて爆発。

本体であるインパルスは爆発を直で受けてしまいシールドエネルギーが減ってしまったが、ビームの直撃を受けるより遥かに消費エネルギーは少なくて済む。

『うおおおおおっ!!』

V Lはすでに最大稼働状態であり、先ほどまでのソードインパルスとは比べ物にならない機動力で斬りかかる。

咄嗟にビームサブマシンガンを構えたドレッドノートであったが、すれ違った一瞬間に斬りおとされてしまう。

サブマシンガンを切り落としたインパルスは戦法をヒット&アウェイに切り替えたかのように、再び斬りかかってくる。

『ちいっ！』

スクラップと化したサブマシンガンを放り棄てて、両手のALを展開。

発生率を最大にし【球体状】に変形させる。

流石のカナードであろうともVユニットを最大稼働したデステイニーインパルスの機動を正確に把握するのは困難であり、スラスターを兼ねているイータユニットは一部損壊している。

そのため完全防御の形態をとり、超高速で動くデステイニーインパルスの攻撃をALで防御、ビームコーティングが施されたエクスカリバーがALを突き破るまでのタイミングで反撃を狙う。

背部のイータユニットをALハンデいの起動を妨げないよう展開。

近接戦形態である【ソードモード】に変形させる。

だが真の狙いはALを突き破る事ではなかった。

超高速で接近、瞬時にエクスカリバーを格納し球体状のALに組みつきそのまま加速

していく。

そして地面に押し付けて引きずり始める。

『無敵のALでもこれならあつ！』

ALの弱点、それは消費するエネルギーが多いことである。

前世のMS「ハイペリオンガンダム」に搭載されていた同シールドは消費エネルギーが多いため稼働時間に限界があり、核エンジンを搭載した「スーパーハイペリオン」に改修することで問題をクリアする必要があつたほどだ。

IS「ドレットノートH」に搭載されているALも同じように展開しているだけでシールドエネルギーを絶えず消費していく。

そしてこの状況。  
【防御せずにはいられない状況】に陥らせる事でエネルギーを消費させるのが真の狙いであつた。

もちろんこの手段を取つたインパルスにもリスクは存在している。

発生しているALをマニピュレータで無理やり押さえつけているのだ。

また今装備しているシルエットは「デステイニーシルエット」であるため、凄まじい

勢いでエネルギーが消費されていく。

「フォールディングレイザー対装甲ナイフ」を展開。

ビームコーティングされているナイフでALを突き破り、ドレッドノート胸部装甲やシールドバリアを繰り返し傷つけることでエネルギーをさらに減少させていく。

『ぐう……っ！』

ALを貫いたナイフが胸部装甲を傷つけ、衝撃が走るたびにカナードの口から苦悶の声上がる。

(真のあの動き……【S. E. E. D.】かな)

模擬戦の一部始終を見ていたラキーナが真の動きが明らかに変わったことに気付く。VL最大稼働状態を維持し続け、カナードのサブマシンガンを一瞬で破壊する事からも伺える。

（それに……この威圧感、殺気……言うならばプレッシャーかな）

離れた観客席にいるというのに真から放たれる威圧感から少しだけ嫌な汗が流れる。それはラキーナだけではなく一夏や簪達も同じであった。

少なからず恐怖を感じている者もいるだろう。

特にそれが顕著なのはシャルロットのようだ、彼女は冷や汗を大量に流している。

（……代表候補生でも生の殺気なんて感じる機会もないだろうし、仕方ないかな……）

再び視線を模擬戦に戻す。

再び状況は変化していた。

---

『舐めるなあっ！』

インパルスに組み付かれ地面に押し付けられていたドレッドノートが自らALを解除。

そのまま引きずられつつも、イータユニットからビームサーベルを展開し斬りかか

る。

だがALが消えた瞬間、すでにインパルスはドレッドノートから離れていた。

インパルスが離れると同時にイータユニットから発生していたビームサーベルは寿命が切れた蛍光灯の様に明滅した後、発生を停止する。

（機体の挙動が明らかに速くなった……〔S. E. E. D.〕か）

真に起こった変化を推測しつつ残存エネルギーを確認——残り2割までエネルギーが減らされている。

（……次の接触で最後か）

損傷しているイータユニットをパージ、そして左手に装備されているALハンディを格納。



即座に右手に展開し、装備されているハンディと組み合わせて「◇型」に形を組み替える。

そして最大出力でALを発生させる。

発生されたALはまるで「光壁」の様に厚く、通常時より激しく輝いている。

（最大出力か……さしずめハイパーALサーベルつてところか……これで勝負を決める気か、カナード）

対するインパルスも残りエネルギーは2割を切っている。

むしろこのまま膠着すれば確実に先にエネルギーが切れてしまうのは明白だ。

故に次の激突の為に準備を行う。

ビームライフルを展開し上空に向けて発射、同時にVLを起動する。

発射されたビームは全て「光の翼」の中に吸収されていき、最大稼働状態時よりも巨大な光の翼を広げる。

（エネルギー干渉機能でVLの速度を上げる気か、真）

互いに得物を構え、スラストターを噴かせる。

『うおおおおおおつ!!』

『はああああああつ!!』

互いの咆哮が轟く。

攻撃の速度はVLを限界を超えて駆動させているインパルスの方が速い。

エクスカリバーがハイパーALサーベルを切り裂き、ドレットノートの胸部装甲を切り裂く。

『はっ……おああつ!!』

凄まじい衝撃が搭乗者であるカナードには伝わっているはずだが、ダメージを負いつつも彼は残ったハイパーALサーベルでインパルスの胸部を突く。

『がっ……!』

互いの攻撃の衝撃から弾かれるように正反対に吹き飛ばされた。先程の激突で両者ともに「絶対防御」が発動していた。

—両者、エネルギー切れにより引き分け。試合時間、5分3秒—

そして模擬戦の終了コールがアリーナに響いた。

模擬戦終了後 学生寮 自室

「……勝てなかったかー、まあ、相手がカナードだしなあ」

ベッドに腰を下ろした真が呟く。

模擬戦終了後1時間ほど経過した現在、シャワーを浴びた真は簪と共に部屋に戻っていた。

模擬戦後にインパルスを束に預けたが、一向に第二形態移行を起こす兆候は見られなかった。

そしてとりあえずは保留と言う形でその場は解散となったのだ。

ちなみに破損したソードシレットについては束が修復してくれている。

「……でも、負けてなかったよ」

簪はそう言いつつ、真の隣にそつと腰を下ろす。

「でも機体の相性的に不利だったし、実質負けだよ、本当にAIは敵に回すと対処に困る」

「……そうだね」

「……怖かったか、俺？」

真の言葉にピクツと簪が反応し、少し申し訳なさそうな顔で彼を見つめる。

「……ごめん、少しだけ」

「謝る事じゃないさ、殺気なんて本来感じないモノだし」

苦笑しつつ頭を搔く。

「……昔から危険な場面とか集中力が極限まで高まると頭がクリアになってき……模擬戦の時みたいにもはやできない動きができるようになって……おかしいだろ、こんなのか」

自嘲気味に真が笑う。

だがそんな彼の手を簪が優しく握る。

「簪……」

「……確かに少し怖いと思った、けど私は大丈夫、だからそんな顔しないで」

「……ありがとう、簪」

「うん」

微笑む彼女に心が温かくなるのを感じる。

ふととあることを思いついた。

「そうだ、簪……今度の週末、どこか出かけないか？」

「……えっ？」

真の言葉を聞いた途端、簪の顔が真っ赤になる。  
同じく真も頬が赤い。

「そつ、それって……デート？」

「……ああ」

「あう……行けるよ、大丈夫、予定空いてるから」

「そつ、そつか……よかった」

顔を真っ赤にした2人はそのまま手をつなぎつつ沈黙してしまう。

しばらく後に、本音が夕食の誘いに来たが2人の様子を見てお邪魔でしたーと帰ってしまい、2人が慌てたのは別の話である。

# INTERMISSION 初めてのデート

週末 学生寮 一夏／シャルロットの部屋

「なあ、変なところないよな？」

私服姿の真が一夏とシャルロットに自分の服装について尋ねる。

今日は以前に簪と約束したデート当日である。

彼女とは部屋が一緒であるため、準備をしたいと言って先に部屋を出てプランの確認等々の為に一夏とシャルロットの部屋に来ているのだ。

「別に普通だと思うけどなー、シャルは？」

「えっ、そこで僕に振るのっ!? うん、大丈夫だと思うけど……」

グレーのインナー、黒のテーラードジャケット、薄茶色のカーゴパンツと言う組み合わせの真を見る。

特にシャルロットから見ても違和感はない。

真の私服を見るのは初めてだが充分着こなしているように見える。

待機形態のインパルスはドッグタグなのでアクセントとしてもちようど良い。

真が服装を気にしている理由は聞いている。

初めての「デート」との事だ。

デートで緊張して、助言を求めてきているのだ。

先日の模擬戦で彼のことを恐ろしいと感じてしまったがこういう普通の面があるのだから恐れる必要なんてないんだと、シャルロットは友人への認識を改めていた。

「……緊張してきた」

胸を押さえて深呼吸している真を見つつ、一夏は苦笑している。

「そこまで緊張することか?」

「……お前、そういう発言、箒や鈴の前でするなよ。ぶっ飛ばされるぞ?」

「えっ、どういうことだ?」

「一騎や総士や剣司にちゃんとデートプラン聞いてたけど……本当に上手くいくかなあ



……」

一夏の質問をスルーしつつ、真はデートプランを思い返す。

ちなみに一騎、総士、剣司とは真や一夏の1つ下の後輩である。

特に剣司は1つ下ながら彼女もちであり、真は彼にデートプラン等を相談していたのだ。

「僕は大丈夫だと思うけどね、デートって事は今日の模擬戦には参加しないんだよね？」  
「ああ、カナードとキ……ラキーナが相手の模擬戦だろ、予定があるってカナードに伝えただから」

真が簪とのデートを約束した後、カナードとラキーナと各国代表候補生（加えて一夏と箒）を対象にした模擬戦の予定が組まれたのだ。

これは戦力把握と戦力増強をかねて、束が企画したものである。

当初はせっかくの週末が潰れてしまうとほぼ全員が参加しない予定であったが、篠ノ之束による専用機メンテナンスがあると聞いた途端、手のひらを返して全員参加するようになったと言う。

この模擬戦は任意参加なので、真と簪は参加しないこととしている。

「……そろそろ時間だから、ありがとうな、一夏、シャルロット」

真が立ち上がって部屋の扉を開ける。

「おう、がんばれよ、真」

「簪さん楽しませてあげてね……って僕達もそろそろ準備しないと」

「おっと、そうだった！」

「そっちも頑張れよ、カナードとラキーナは強いぞ」

「おう」

「うん、頑張るよ」

真は一夏達と別れて、学生寮の入り口へと向かう。

待ち合わせ場所はIS学園近辺のショッピングモール レゾナンスだ。

シヨッピングモール レゾナンス内 カフェテラス

「……先に着いちまったな」

カフェテラスの日陰の空いた席に座りつつ、少し前に購入したカフェオレに口をつける。

季節は梅雨に入っているが、天気は快晴であり過ごし易い気温と湿度だ。

すでにここで待っていると簪には連絡している、待ち合わせ時間より10分先に到着してしまっただが。

(張り切りすぎだろ、俺……)

苦笑しつつ、カフェオレを飲み進める。

ふと視界の端に水色の影が映りこんだ。

視界を合わせると、簪が小走りでこちらに向かってきていた。

赤紫のワンピースに薄手の白いカーデイガン、そしてワンピースと同じ色の帽子を身につけている。

「ごっつ、ごめん、待った？」

「えっ、あつ、大丈夫。俺の方が早く来すぎただけだから……！」

彼女の私服姿を見た真は見惚れていたことに気づき、照れ隠しの為に一気にカフェオレを飲み干す。

「よっ、よし、行こうか！」

真が簪に手を差し出す。

緊張しており、すでに顔が赤くなっている。

「うっ、うん」

その手に答えて、優しく握り返す。

いわゆる恋人つなぎの状態で二人はカフェテラスを離れる。

---

ショッピングモール レゾナンス内 ゲームショップKAIBA

真が考えていたデートプラン——流れとしては買い物に食事、ショッピングモールにあるゲームセンターで遊ぶという流れだ。

現在は買いたい物の為にゲームショップに来ている。

何故ゲームショップなのかというと、彼女が近々新しいゲームが発売されると楽しみにしていたのを覚えているからだ。

「[IS EXVSFB]？」

「うん、簡単に言えばISのバトルアクションゲームだよ」

店頭ではゲームのプレイムビーが流れており、簪は嬉しそうな顔でパッケージ裏を見つめている。

ムービーでは千冬に似ているキャラクターが専用機である【暮桜】を纏い他のISと戦っているプレイムビーが流れている。

「なるほど、過去のヴァルキリーとかブリュンヒルデを模したキャラを使えるのか」

「うん、織斑先生モチーフのキャラは結構な強キャラだよ、特格からの居合いは初見じゃ絶対に避けられないと思う」

「おつ、おう……」

ゲームはそこそこやる真だが専門用語が出てくると流石に反応に困る。

するとプレイムビーが変わり、解説キャラとして主題歌を担当しているバンドのメインボーカルの人物を模したキャラが出てくる。

なぜかムービー内で解説を行っているキャラはかつての気さくな上司に声も顔も似ている。

『新キャラとしてなんとなんとついに男性キャラが登場だあ！ その名も「イチカ・オリムラ」と「シン・アスカ」！』

「はあ!?!」

紹介ムービーに自身と一夏にそっくりな男性キャラが登場し、真が思わず素っ頓狂な声を上げる。

「新キャラとして織斑君と真をモチーフにしたキャラが出てるの、織斑君の方は近接し  
かできないから難易度が高いけど」

一夏モチーフのキャラが白式を纏い、自身をモチーフとしたキャラと剣で切りあつて  
いるムービーが流れている。

「真をモチーフにしたキャラは高いポテンシャルを持った万能キャラで……ちゃんとシ  
ルエット交換も実装されてるよ、ほら、変わった」

ムービーの中で「シン・アスカ」がインパルスのシルエットを「デステイニーシルエット」  
ト」に交換し、空を翔けている。

「本当だ。つてこのキャラの声、俺の声じゃないか？」

「このゲームの開発に日出工業も協力してるからだと思う。たぶん、何処かで録音され  
てたと思うよ」

「マジかよ、優菜さん……」

もう苦笑しか出てこない真であった。

「……よし、買うか」

「え？」

「ん、前からこれ欲しかったんじゃないのか？」

財布を出しつつ、首を傾げる。

「わっ、悪いよ、ちゃんと自分のお金で……！」

「払わせてくれよ、元々そうするつもりだったんだ。大丈夫。これでも日出のテストパ  
イロットなんだ、金は有るからさ」

真は現在所属している日出工業から高校生では贅沢しても使いきれないレベルの給  
料が払われている。

その為元々簪に買ってあげるつもりだったのだ。

「うう……」



「な？」

「……ありがとう」

顔を赤くしつつ、簪が嬉しそうに頷く。  
それを見た真も微笑みを浮かべた。

---

同時刻 IS学園 生徒会室

「……尋常じゃないくらい忙しいいいいい！」

机の上で頭を抱えつつ楯無が吼える。

国家代表の仕事や家の仕事。

シャルロットの件について一段落ついたため、根回しと公表のための準備に楯無は追  
われているのだ。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

「ありがとう、虚ちゃん……でも駄目、気になって仕方ないわ！」

椅子から立ち上がった楯無を見て、虚がため息を漏らす。

その様子をお菓子を食べながら本音が眺めていた。

「たっちゃんはあすあすとかんちゃんとのデートが気になるの？」

「そうよ！ 今愛しの簪ちゃんは真君とデート中！ これに気がならないわけないわ  
！」

そのまま、生徒会室を出て行くこうとした楯無を、虚が力強くガシツと引き止める。

「……駄目ですよ、お嬢様、仕事から逃げないでください」

「ヒイツ、虚ちゃん、目が据わって……っ！」

「お嬢様がいなくなったらその分増えるんですから……逃がしません」

ハイライトの消えた目で虚が楯無を睨む。

その目に抗うことができずに楯無は机に引き戻された。

シヨッピングモール レゾナンス内 ゲームセンターYU—GI

買い物を終え、腹拵えを終えた2人はシヨッピングモール内のゲームセンターで格闘ゲームをプレイしていた。

プレイしている格闘ゲームは、かつて週間漫画雑誌に連載されていた漫画の格闘ゲームであり、世紀末バスケットも挿揄されているゲームである。

2P側の簪は白髪の病人キャラ、1P側の真は主人公で胸に七つの傷があるキャラを使っている。

「ぐあー、勝てねーっ！」

「やった、3連勝目……っ！」

どこが病弱キャラだと真が叫ぶ。

一瞬にして画面端まで到達できる速度と、発動時の当たり判定が極端に小さくなる移動技を駆使され、まともに反撃もできずにボコボコにされてしまったのだ。

「激流では勝てないよ……っ！」

少し自慢げな顔で真に笑いかける。

「くっそお、やってやる。やってやるさっ！」

100円を投入して、今度は金髪のキャラを選択する真であったが、結局勝てずに5連敗に喫すのであった。

I S 学園 学生寮 自室

デートを終え、2人は自室に戻ってきていた。

学生寮には門限があるため、少し早めに2人は帰路についていたのだ。

「今日は楽しかった、本当に楽しかったよ、真」

「ああ、俺もさ」

2人がベッドに腰を下ろす。

「…………真」

きゅつと真の右腕に簪が抱きつく。  
突然の彼女の行動に驚く。

「…………どうした？」

「ううん、こうしたくて…………駄目？」

「…………いや、大丈夫だけど」

内心ドキドキしており、互いに顔はすでに真っ赤になっている。

真より身長が小さいため、簪が少し熱っぽい視線で自分を見つめていることに気づく。

そして彼女は目を瞑る。

（ちよつ、これって…………！）

ジツと何かを待っているかのように簪はそのまま動かない。だが自身の右腕を抱きしめる身体が震えているのが分かる。彼女が内気であることは知っており、この行動は相当な勇気を出した行動であることに気づいた。

(……勇気、出してくれたのか……)

その勇気に答えるため。

——少しずつ顔を近づけて、唇を合わせた。

「……んっ……」

「……」

数十秒は互いにそのまま動かなかつた。そして真の側から離れる。

「……しちやったね」

「……だな」

先程の行動に不思議と互いに笑みが浮かんだ。

「好きだ、簪」

「……うん、私も好きだよ、真」

その後、先程買ってきたゲームソフト「IS EXVSFB」を2人でプレイしたが、やはり簪には勝てずにボコボコにされてしまう真であった。

## PHASE 3 1 タツグ結成

放課後 第3アリーナ

アリーナの上空に舞うのは白きIS【白式】

搭乗者は当然一夏である。

両手で雪片二型を構えつつ、スラスターを噴かして迫りくるビームの雨を避けていく。

だがまだ機体制御が甘いためか、何発かは貫つてしまっているが、以前から比べれば見違えるような機動だ。

ビームをばら撒いているのは【ドレッドノートH】

カナードはビームサブマシンガンで特に狙いもつけずに弾幕を張っている状態である。

一夏の動きを確認した後、弾幕を張るのを止めチャンネルを繋げる。

同時に一夏も機動を停止して、少し離れた箇所で浮遊している。



『……数日で機体制御についてはマシンになったな』

『……お蔭様でな。いきなりビームサーベルで斬りかかれた時はマジで死ぬかと思っただぜ』

顔を顰めつつカナードに答える。

真が簪とデートをした日から数日。

一夏や他の代表候補生達、加えて真はカナードやラキーナと模擬戦や訓練を続けていた。

その中で一夏はI S戦の基礎である戦闘機動。

機体制御や加速技術について徹底的にしごかれていたのだ。

『お前は身体で覚えるタイプだと真から聞いている。だから模擬戦形式でやっていくのがあつている、違うか?』

『うっ、確かにそうだけど。しーんー、ちよつと恨むぞお……!』

『……次は「零落白夜」についてだ。織斑一夏、今から弾幕だけは回避しバスターモードのビームだけは零落白夜で受け止める、いいな』

『ちよつ、難易度が高すぎじゃねっ?!』

『安心しろ、出力は下げている。絶対防御が発動するかも知れないがな。行くぞ』  
『げえっ!?!』

そんな声を上げつつ一夏は即座にスラスターに火を入れ、回避を行う。

先程まで浮遊していた場所をビームの雨が通り過ぎ、その雨はさらに勢いを増して自身に迫ってくる。

『うおあぁっ!?!』

叫び声をあげつつ追いつかれてしまった弾幕を必死で回避していく。

が、やはり避けきれず数発貫つてしまい、シールドエネルギーが減っていく。

『被弾は極力抑えるよう努力しろっ!』

背部のイータユニットがバスターモードへの移行を完了。

砲塔をビームの雨を必死で避けている一夏に向ける。

そして即座にトリガーを引く。

美しい緑色の高出力ビームが砲口から放たれ一夏に向かう。

『うおおおおおっ!!』

間一髪で零落白夜の発動が間に合い、雪片を盾にするかのように構えてビームの威力に耐える。

零落白夜の光によってまるで弾かれるかのようにドレッドノートのビームは拡散されていく。

『あつぶねえっ?! 間に合ったっ?!』

『零落白夜は白式の最大の武器であり生命線だ。いかなる状況でも適切に使用できるような感覚を掴むんだ』

一夏はこの数日、戦闘機動とは別に「零落白夜」についても教えられていた。

その理由としては、白式の戦闘力の殆どが「零落白夜」に依存しているからである。

雪片での一撃も強力であるし、白式の機動力は並の高機動機体を凌駕しているが、どちらとも一撃で相手のエネルギーを危険域まで減らすことができる零落白夜の使用を前

提においている仕様なのだ。

極論だが、白式は零落白夜を当てさえすれば勝ててしまう機体と言える。

『発動のタイミングを調整することで斬撃の瞬間だけ発動し、エネルギーの消費量を抑えることが可能はずだ。さらに言えば零落白夜の発生率を自在に操れるようになれば、適切な出力で〔盾〕の様にも使え、より無駄なく戦えるようになるだろうな』  
『なっ、なるほどー……』

汗をぬぐいつつ、一度深呼吸を行う一夏であった。

## 2時間後——生徒指導室

一夏との訓練を終えたカナードが生徒指導室の中に入る。中には東にラキーナにクロエ、千冬に真が待っていた。

「すまん、少し遅れた」

「お疲れ様です、カナード様」

「クロエ、何故ここに？」

「束様と千冬様に召集いただきましたので」

ちなみにクロエの事情についてもラキーナから真や千冬には伝えられており、プレイク号はミラーージュコロイドを発動して停泊中である。

「集まってもらった理由だが、学年別トーナメントが近づいている。そこでお前達に意見を貰いたい」

「……千冬さん、この面子って事は」

「ああ、お前達の敵……いや私達の敵【ラクス・クライン】についてだ。で、どうだ、学年別トーナメントという大きなイベントだ。奴らは何か行動を起こすと思うか？」

千冬が隣にいた真に視線を移す。

真は少し考えてから口を開く。

「……可能性はかなり高いと思ってます。最悪あの【無人機】が量産されている可能性もあると思います」

「だろっな、俺も同意見だ」

「だろっな」

「私も同じ意見です、千冬様」

4人の回答を聞いて、千冬はため息をつく。

「やはりそうなのか……」

「奴の目的は不明だ。しかし学年別トーナメントという外部の人間が多く招かれるイベントだ、100%と見ていいだろうな」

カナードの言うとおり、学年別トーナメントはIS学園でもかなりのビッグイベントである。

一般生徒のみならず参加する代表候補生達の祖国の人間や、真のような企業所属の生徒の場合は関係者が多数招かれる。

「となると警備の増強が必要か……手を貸してくれるか？」

「奴等を止めることが依頼だ、当然だ」

「ええ、もちろんです千冬さん」

カナードがぶつきらぼうに返し、ラキーナが微笑みつつ千冬に返答する。

「そうだ、ラキちゃん後で追加したい装備があるから、「ストライク」貸してくれる？」

「えっ、もしかして……できたんですか？」

「うん、「インパルス」からちよいちよいとデータを拝借……ゲフンゲフン、参考にさせてもらって【例のアレ】が完成したのさ！」

「ちよつとインパルスからデータを拝借って聞こえたんですが、どういう事ですか、束さん？」

あははーと笑って誤魔化し、ラキーナが首につけていたストライクガンダムの待機形態である【黒のチョーカー】を外して束に渡す。

少しため息をついて真が口を開く。

「千冬さん、トーナメントの日なんですけど、俺は普通に参加する形式なんですか？」

「ああ、お前は他の生徒と共に参加してくれ。有事の際は生徒達の避難を最優先してく

れ」

「……………分かりました」

奴らとの因縁に決着をつけたい気持ちもあるが、友人達や無関係な人達も大勢いる。

IS学園の警備も増強されるとの事なので納得して頷く。

「……………優菜さん達にも警備について伝えておきます。利香さんの【ガイアガンダム】なら充分戦力になってもらえます」

「すまん、真」

日出の優菜と利香、ジエーンについても千冬には事情を——前世であるC・E.を知っている存在であるということは伝えている。

「後、警備の件なんだけどーちゃんの【IS】ならある程度は手数をカバーできると思うよ。イギリスから【ビット兵器】の情報をばれない様に拝借……………ゲフンゲフン、提供してもらったからね」

「……………色々ツツコみたいところがあるがそれは事態を收拾してからだ。それと束、後



で個人的にお前に頼みたいことがある」

「おっけーおっけー、東さんはちーちゃんの頼みだったら何でも答えてあげるよん！」

東の様子に思わずはあ、と深いため息をついてしまった。

その後、細かい警備計画について5人で話し合い、後日再び調整を行うこととなり本日は解散となった。

学生寮 大浴場

「はああく……疲れがしみでるう……！」

「おっさんかよ……まあ、相手が相手だからな、お疲れさん」

風呂場のため2人の声が反響するが、現在大浴場は男子貸切となつているため問題はない。

先週まで学生寮の大浴場はボイラー等の調整のため使用することができなかつたが、ようやく調整が完了したため使用可能となつたのだ。

そして試運転もかねて男子である真と一夏に使用してもらっているのだ。

その為女子は使用できず、残念ながらもまだ男子と言われているシャルロットも使えないのだが彼女もそれには納得していた。

「……あー、最近シャワーばかりだったからなあ。やっぱり日本人は湯船につかるのが一番だ」

「確かにな、シャワーばかりだと違いがよく分かってたまんねえな……極楽ってやつだなあ」

しばらく男二人して湯船につかりつつ気の抜けたような声を出していたが、一夏が話を切り出してきた。

「そういえばさ、真、簪さんとはどうなんだよ?」

「ん、簪とか?」

「ああ、この前デート行ったんだろ? どうだったんだ?」

「……どうだったって、楽しかったけど」

流石に自室でした行為については教えられないが、デートの内容については伝えることにした。

「……デートかー、楽しそうだよなあ。興味はあるんだけどさ、よく分からないんだ」「分からないって……ああ、【恋人】と【友達】の違いとかか？」

「そう、そんな感じ。簪さんがいて真はどう感じてるんだ？」

一夏の疑問について少し考え、真が口を開く。

「……そうだな。彼女といるとどんな些細なことでも楽しく感じるようになってさ。特に笑ってる彼女を見ると本当に幸せな気持ちになる。だから彼女の笑顔を守るために頑張るって気持ちが溢れてくるんだ」

「楽しくて幸せか。あー、よくわかんねえ……」

そんな様子を見て真は笑みを浮かべていた。

普段から鈍感が服を着て歩いている一夏がまさか恋愛について自分に聞いてきて真剣に悩んでいるのを見て微笑ましかったのだ。

だがこういう感情は自分で行動して気づかなければ意味がない。自分がそうであつたように。

「なんだよ、真面目に聞いているのにさ」

「悪い悪い、まあ、一夏はもつと周りを見たほうがいいと思う。そうすればきつと変わると思うよ」

「……なんか凄く余裕を感じるんだが？」

「……まあ彼女いるし？」

「ぐぬぬ……このやろっ！」

一夏が笑みを浮かべつつ、バシヤツと真にお湯を飛ばす。モロに顔面に命中してお湯が口の中に入ってむせる。

「いっほ、げほっ!?! 一夏、おま、このっ！」

湯船からお湯を連続で飛ばして、一夏にお湯をかけ続ける。

「げほっ、真っ、ちよっ、連続攻撃は卑怯っ!？」

この後、湯船のお湯が目に見えて少なくなるまで2人の合戦は続いてしまった。

---

### 自室

『行くぞ、インパルス！ 今の俺にはみんなを守る力があるんだ！』

自室で簪が先日購入した「I S E X V S F B」をプレイしている。

使用キャラは「インパルス」つまりは「シン・アスカ」であり、専用のアーケードコントローラーを使用してガチャガチャとプレイを続けている。

(……俺、あんな台詞インパルスに乗ったときに喋ったかなあ?)

彼女である簪が自分をモチーフにしたかつての名を持つキャラを操作するのは少し複雑であった。

そんなことを考えていると画面の中でインパルスがデステイニールエットに換装して、相手であるイタリアが開発した格闘用IS「テンペスタⅡ」をエクスカリバーで戦闘不能にして決着をつけた。

「……ふう、やっぱりインパルスは使いやすいね。CPUレベルMAXのテンペスタⅡを簡単に落とせるのは凄いよ」

ゲームを止めて、集中していたのか一息ついて簪が真に振り返る。

「お疲れさん、今日はここまで？」

「うん、あんまり連続してやるのもよくないから……それに話があるって言うてたから」  
「ああ」

簪のゲームプレイを眺めていた真はロード時間に少し話があると伝えていたのだ。

「ほら、もうすぐ学年別トーナメントがあるだろ？タッグ戦だから簪とタッグが組みたいんだ」

「……うん、私は大丈夫だよ。むしろ真じやなきや……やだ」

頬を赤らめて簪が答え、その返答に真も少し頬を赤らめて答える。

「ありがとう」

「うん、頑張ろうね、真」

「ああ」

簪の笑顔に真も笑顔で答える。

(……たとえ奴等が何か行動を起こそうとも……彼女の笑顔を守ってみせる、今度こそ絶対……！)

簪の笑顔を見て真は心に決めたのだった。

## PHASE 32 襲来、歌姫の騎士団

真と簪がタッグについて話した翌日、千冬の口からタッグトーナメントについてクラスメイトに説明があった。

その連絡によってクラスメイトの皆から真と一夏にタッグの申し込みが殺到したの  
は言うまでもない。

その場で真が、自分は簪とタッグをすでに組んでいると話したため、彼に流れていた  
申し込みが全て一夏に流れてしまい、阿鼻叫喚の絵図となったが千冬の一喝でその場は  
静まった。

ちなみに真や一夏達のタッグ内訳は以下のようなになった。

真・簪ペア

一夏・箒ペア

セシリア・鈴ペア

シャルル（シャルロット）・ラウラペア

当然、セシリアと簪を除いた一夏に恋する乙女である4人は彼のペアになりたがった  
が、公平に決める為、昼食時に他クラスを含めたジャンケンを行い、激戦を勝ち抜いて



見事箒がペアの座を勝ち取った。

そのときの箒の感想を1人になったときに真は聞いてみた。

曰く

「私は上り坂なんだっ！これならばきつと一夏も振り向いてくれるはずっ！」

との事であった——閑話休題。

そして時間は流れ、学年別タッグトーナメント当日

第1アリーナ Bピット内

第1アリーナの特別席には日本政府の要人、IS学園に在学している代表候補生達の祖国の要人達が招かれて試合開始の時を待っている。

その中には著名な政治家の姿も見られる。

加えて企業に所属している生徒も存在しているため、所属企業の取締役なども招かれている。

真や簪にとって上司に当たる、利香やジェーン、優奈の姿も見られた。

そのため、数名の教員が警備の為I Sスーツ姿で後方に待機しており、クラス対抗戦と比べると警備が嚴重に強化されている。

観客席のモニターには早速I回戦第I試合の組み合わせが表示されていた。

■I回戦第I試合

飛鳥真・更識簪 VS 相川清香・鏡ナギ

「無理ー！ 勝てっこないー！」

「まさかの最初で、しかも飛鳥君・更識さんペアかー……ついてないね」

Bピットで清香が両手で頭を抱えつつ叫ぶ。

その後ろで、友人であるナギがため息をつきながら苦笑していた。

「それに相手はI S学園初のカップルだし……抽選に悪意を感じるよー！」

「飛鳥君が彼氏か。いいなあー、更識さん。そうだ、負けた後にどこまでいったか聞いてみよ」

すでに勝負を諦めているナギの興味は真と簪が【どこまでいったか】に移っていた。

「……ちよつと、もう負けるつもりなの？」

先程勝てないと叫んでいた彼女はどこに行つたのか、清香がナギに問いかける。

「いやだつて勝てないでしょ。と言うか数秒前まで勝てないって言つてたのは清香じゃない？」

「それはそうだけど……やれるだけやってやるつて気持ちになつたわっ！」

小さくガッツポーズを取りつつふんすとナギに返す。

「うわー、すつごくフラグだよ、それ」

それを苦笑しつつ眺め、傍に鎮座している搭乗予定の【ラファール・リヴァイヴ】に向かう。

## Aピット内

「相手は相川達か……」

ピット内のモニターに表示された組み合わせ表を再度確認して真が呟く。

組み合わせ表には搭乗者の機体名も表示されており、相川・鏡ペアは両名ともラファール・リヴァイヴを選択していた。

「ラファールが2機……中距離戦だね」

「ああ、俺は「フォースインパルス」で行くけど、簪はどうする?」

2人ともすでに「ISスーツ」に着替えている。

簪のISスーツも真と同じ、通称【ザフトISスーツ】に変更しているため、C・E、世界を知る人間が見ればまるでザフトのMSパイロットの様にも見えるだろう。

簪のモノは真のISスーツとは違い、長袖ではなく半袖のモノであるが。

「飛燕」の射撃武装を使うから、攪乱しつつ援護してほしい……かな」

「……【マルチロックオンシステム搭載40連ミサイル】か、相川達ビビるだろうなあ」  
少しふくれっ面になった簪がジト目で抗議を送る。

「【ロマン】は大事……だよ、真」

「いや、別にダメって訳じゃあないけどさ……あれ、楯無さん？」

「え、お姉ちゃん？」

真と簪がピットの入り口を見ると、確かに楯無がこちらを見ていた。

彼女が着ているのは制服ではなく「ISスーツ」であったが。

それ以外は普段と変わらずいつもの扇子を広げつつ、2人に向かって歩み寄ってくる。  
る。

「お二人さん、もう準備は大丈夫かしら？」

「はい、大丈夫です」

「うん、大丈夫だよ……お姉ちゃん」

「頑張つてね、簪ちゃん、お姉ちゃんは応援してるわよっ!」

扇子に「頑張れ」と言う文字が表示され、簪にエールを送る。

「うん、頑張るよ。ありがとう、お姉ちゃん」

「ああ、簪ちゃん……! あ、真君ちよつといいかしら?」

「あつ、はい」

簪からの返答で恍惚の表情を浮かべていた楯無が真と共に簪から少し離れる。

簪は不思議そうな表情をしていたが。

「……私や教員の方々は、「テロ」を警戒してアリーナ内外を巡回しているわ。簪ちゃんや生徒の皆の避難誘導は任せるわよ、もちろん私たちも手伝うけど……最優先でね?」

楯無は千冬から「ラクス・クライン」や「C. E. 世界」については濁されているが情報を渡されている——彼女がISスーツ姿なのも「テロ」を警戒し、迅速に動けるようにしているためだ。

彼女からの言葉に真は頷く。

「……分かってます。簪や皆は俺が守ってみせます」

真も学年別トーナメントでは何かが起こる可能性が高いとみているため、警戒を強めているのだ。

真の言葉に楯無が微笑む。

「……頼もしいわね。さっすが、【未来の義弟】クン」

「ぶっ!?!いきなり何をっ!?!」

楯無からのいきなりの言葉に取り乱してしまった。

「だって、いずれはそうなるじゃない?」

「いや、確かにそういう事も考えてますけど……いきなりは驚きますよ」

「ふふ、ごめんね。でも【緊張】もほぐれたんじゃない?」

確かに彼女の言うとおりに緊張はちよいどいい感じにほぐれている。

恐らく緊張と言うか警戒を強めたのが表情に出ていたのだろう。

それを見抜いてガス抜きしてくれたのだ。

「……ありがとうございます」

「どういたしました。それじゃあ……簪ちゃんの公式IS戦デビューなんだから、しっかりね?」

「はい」

真の返答に微笑みつつ、楯無がピットから出ていく。

「お姉ちゃん、何の用だったの?」

「ん、サポートしてあげてねだってさ。ほんと簪の事溺愛してるんだな、楯無さん」  
「まったくお姉ちゃんは……」

ため息をついて苦笑いをする簪に微笑みつつ、待機状態の「インパルス」を起動させ、インパルスを身にまとう。



『さて、そろそろ時間だ』

『うん』

簪も真と同じように【左手中指】に付けた指輪。

待機状態の【飛燕】を起動させた。

5分後——I S 学園近海 海上

『クロエ、こちらは異常ない、そちらはどうだ？』

『はい、カナード様、【ミラーージュコロイドデテクター】に反応ありません』

人工島であるI S 学園で最も巨大な第1アリーナは海に隣接しており、その海上でカナードの【ドレッドノートH】とクロエの【I S】が警戒にあたっていた。

クロエが身に纏う【I S】はドレッドノートと装甲や機体色に類似する点が多くみられる。

唯一異なるのが背のスラスターを兼ねたバックパック部分に接続されている【X型の

武装」である。

X字を象る砲台の様にも見えるその武装の名は「ドラグーン」  
彼女が駆る機体の名は「Xアストレイ」

本来は「ドレッドノートガンダム」の愛称の様なものであるが、カナードにとっては  
想い入れのある名前であるため、クロエが機体名に採用したのだ。

『……クロエ、身体は問題ないか？』

『特に支障はありません。【ドラグーンシステム】も問題なく稼働できます』

『そうか。その機体のドラグーンは俺やラキの監修が入っているとはいえ、試作型もい  
い所だ。俺はともかくラキのドラグーン適正が残っていればテストも行えたんだが  
……』

カナードには元々ドラグーンを満足に扱うほどの適性は存在していなかった。

それはラキーナも同様であった。前世ではドラグーン適正が存在していたのだが、生  
まれ変わった現在では失われている。

そんなドラグーンに適性を見せたのが、クロエであった。

流石に「ラウ・ル・クルーゼ」や「レイ・ザ・バレル」程の適性はなかったが、ドラ

グーの操作は問題なく行えるレベルの適性を有していたのだ。

『……カナード様は私の事を心配なさってくれているのですか?』

『……お前に何かあったら東に何をされるか分かったものではないからな。それに俺個人としても、仲間を失いたくは無いからな』

(……ありがとうございます、カナード様)

カナードの返答を聞いたクロエが笑みを浮かべる——その時であった。

ドレッドノートとXアストレイのハイパーセンサーが上空に熱源を確認した。

『やはりきたか、熱源……なんだ、これはっ!? 「IS」のサイズではないぞっ!?』

そう、熱源反応の値が大きかったのだ。

それこそまるで「巨大なIS」の様に。

雲を突き破って反応元が現れる。

C・E、世界にその名を知らしめた「不沈艦」。

その特徴的な形状から「足つき」とも呼称されていた強襲用戦艦。

C・E・世界に存在していたモノと比べるといくらかダウンサイジングされているが、それでも1000mクラスの戦艦であることには変わらない。

『アークエンジェル』……だと……っ!?』

『カナード様、IS学園側もあの戦艦についてすでに検知しているようです』

『今回は学園側も警備を厳重にしているが……堂々と乗り込んできたという訳か』  
『そのようですね』

アークエンジェルのカタパルトが開き、中からかつて戦った無人機である「ストライク」や「イージス」等の「IS」が次々と発進してくる。

その総数は「50機」は下らないだろう。

無人機達を率いるは「紫の光の翼」を持つ「純白のIS」

戦乱の歌姫「ラクス・クライン」

その後ろには「紅き正義の騎士」

「インフィニットジャスティス」を纏う「アスラン・ザラ」

心なしかアスランの瞳が「虚ろ」に見える。

『ようやくお出ましかっ!』

すでにドレッドノートの形態を「バスターモード」に切り替えていたカナードは迷わずトリガーを引く。

一対の砲口から発射されたビームは迷わずラクスとアスランを捉えていた。だがビームが発射される直前射線に割り込んだ「影」がいたのだ。

発射された高出力ビームが「光の幕」に拡散されていく。

その「光の幕」をカナードは知っていた。

『ソリドウス・フルゴール』っ!?!いや違う……「スクリーミングニンバス」かっ!?!』

『よく知ってるじゃないか、失敗作っ!』

オレンジの髪に右目に眼帯をつけた女が黒い重装甲「IS」

「ドム・トルーパー」でビームを防いだのだ。

使用した光の幕「スクリーミングニンバス」は「ソリドウス・フルゴールビームシールド」、元を返せば「アルミューレ・リュミエール」を転用した攻性防御装置だ。

その防御能力はALに匹敵し、高出力のビームでも拡散させることが可能である。ドムはその重装甲な見た目からは予想できないスピードでドレッドノートに迫る。ALを展開し、ドムが構えていたビームサーベルを受け止める。

『お前はラクス様を撃ったっ！万死に値する罪っ！ この「ヒルダ・ハーケン」が殺すっ！』

『ちっ、クロエツ、ドラグーンだっ！ラクス・クラインを落とせっ！』  
『はい、カナード様っ！』

クロエのXアストレイから「ドラグーン」が4機放たれ、ラクスに向かう。だがドラグーンの一機が撃ち落されてしまう。突然の狙撃に、クロエはドラグーンを自機に戻す。

『っ!?!』

『ラクス様はやらせないわよ、失敗作』

長身に金髪の美女。

豊かな母性の象徴を実らせた女性が両手に構えた「大型ビーム砲」でドラグーンを狙撃したのだ。

『ふふ、スコールさん、ありがとうございます』

『いえ、私にとってラクス様は全て……危害を加えるような輩に容赦はしません』

『流石ですわ……オータムさんは？』

『オータムならば織斑一夏を確保しに向かっています』

『なるほど……「バスター」の調子はどうですか？』

『「ゴールデン・ドーン」程ではないですが、しつくりきています』

『それは良かったですわ』

ラクスがスコールと呼ばれた女性に微笑む。

微笑みを返されたスコールは頬を朱に染めつつも微笑んでいた。

『ちいつ、別働隊までいるのかっ！』

『私達を舐めるんじゃないよ、失敗作風情が、落ちなっ！』

ビームサーベルを振りかぶり、ドレッドノートに向かうドム。  
だが――

『雑魚は引つ込んでいろっ!!』

シールドとして使用していた【AL】の発生率を瞬時に調整して【ランス】の様に尖らせる。

ビームサーベルはALによって拡散されてしまい、そのまま柄部分も破壊される。咄嗟にドムがサーベルを手放し、スラスターを噴かせて後退する。

『ちいつ!! ラクス様の御前でこのようになっ!!』

『ヒルダさん、落ち着いてくださいまし』

激情に顔がませるヒルダをラクスが制する。

『はっ、申し訳ありません』

『ふふ、いいですね。そしてカナード、お久しぶりですわね』



ラクスがカナードに微笑む。

だがカナードはその笑みを射殺すように睨み付ける。

『……貴様の目的はなんだっ!?!』

『目的? そうですわね……【貴方】の様な強い殿方が欲しい……では駄目でしょうか?』

ふざけているのかと、カナードが叫びかけた刹那。

ハイパーセンサーが上空から迫ってくる【IS】の反応を捉えた。

その【IS】は世界でもっとも有名な1機。

全身を覆う白い装甲【暮桜】

そしてそれに搭乗しているのは当然——

『覚悟おっ!!』

千冬の雄叫びと共に上段に構えられていた白き光の剣。

【雪片】が振るわれた。

『ラクスは……やらせないっ!』

だがインフィニットジャスティスが高出力ビームサーベルを連結、より出力を高めた状態で発振させているビームサーベルで「雪片」を受け止めた。

虚ろな目をしているアスランだが、動きには一切の淀みがなく千冬の刀を受け止めたのだ。

『なにっ!? 雪片がっ!?!』

『はあっ!!』

白式と同じ【零落白夜】ならばエネルギー兵器であるビームサーベルさえ切り裂ける筈。

一瞬呆けた千冬であったが、脚部ブレードが眼前に迫っていたため、瞬時加速で距離を取る。

『【暮桜】?』

千冬の装備しているISを見てラクスが怪訝な顔になる。

『おかしいですわね。その「IS」は私が凍結させたはずなのに?』

『やっぱりラクスだったんだね……暮桜を凍結させたのは。でも残念だったね、暮桜は私が復活させたんだよ』

オーブンチャンネルで通信が入る。

同時に「新型ストライカー」である「I. W. S. P. パック」を装備したストライク、ラキーナが上空からビームと「コンバインドシールド」と呼ばれる実体盾に装備されたガトリング砲を放っていた。

ビームと弾丸が雨の様に降り注いでいるが、即座に「スクリーミングニンバス」が展開され、バスターがラキーナに向かって反撃としてビーム砲を放つ。

だがラクスはまるで気にせず通信に答える。

通信の相手はもちろん、篠ノ之束である。

『お久しぶりですわ、束さん』

『……本当にその笑顔、最悪だね……ラクス』

『酷いですわ、親友とまで言っていただけなのに？』

微笑から一転。

冷笑に表情が変わったラクスに一瞬通信先の束が息を呑む。

『つ……カナ君、お願い、そいつを絶対に止めてっ!! じゃないとっ!!』

『分かっているっ!!』

ドレッドノートのビームサブマシンガンとXアストレイのビームライフルを構える。  
ビームが発射される直前、通信先の束にラクスはこう返した。

『楽しい楽しい【戦争】の時間ですわ♪』

そしてビームの発射と共に戦いの火蓋は切られた。

---

第1アリーナ

すでにアークエンジェルは第1アリーナ上空に静止しており、非常事態宣言が出されていた。

だが無人機の襲撃を受けた際より警備を厳重にしていたことや試合開始前であったこと、襲撃の際に混乱を防ぐマニュアルを学園側が作成していた等の好条件が重なり、非戦闘員（生徒や要人達）の避難はすでに完了しつつあった。

アリーナの出入口で【インパルス】を身に纏った真と【飛燕】を身に纏った簪も避難誘導を完了しつつあった。

『あの空中戦艦は一体何なの……？』

（くそ、堂々と襲撃かけてきたのかつ、あれはアークエンジェル……っ！）

簪がアリーナ上空で停止しているアークエンジェルに向かって怪訝な視線を送る。

アークエンジェルを見上げて舌打ちをする。

すでにカナード達によって戦闘が開始されているらしく、ビームが飛び交っている。

そしてようやく真達の避難誘導も完了し、同じく別出入口で避難活動を行っている対戦相手であった【相川・鏡】ペアにチャンネルを繋げる。

『相川、鏡、こっちは終わった。そっちはどうだ?』

『大丈夫、こっちも終わったよ』

『こっちは避難した人達の元に行くところ』

『分かった。くれぐれも気を付けてくれ』

返事を確認して、通信を切る。

そして外していた「フォースシルエット」を展開して、アリーナ上空を見つめる。

『……真つ、まさか……』

避難誘導を終えて、自分達も避難しようとした簪がシルエットを展開した真の行動に  
気付き尋ねる。

バツが悪そうに苦笑した彼が簪に言葉を返す。

『……戦いに加わるって言ったら?』

『危険だよっ! それにあればISの【試合】じゃないんだよっ!?!』

真の返答に簪が驚き声を上げる。

簪は日本の代表候補生である為、ISについての知識は深い。

つまりはISの【本質】について理解しているのだ。

【IS】はスポーツとして広まっている、事実IS学園でもそう認識している生徒が殆どである。

しかし現在のISは【マルチプラットフォームフォームスーツ】ではなく既存兵器を超える【超兵器】としての一面が最も強調されている。

そして現在上空で行われているのは、ISバトルなどのスポーツではなく、【命】のやり取りであるという事を彼女は理解しているのだ。

『ああ、あれは【試合】じゃなく【戦闘】だ』

『分かっているのならなんでっ!?!』

『俺がやらなきゃいけないんだよっ! 【因縁】をこの世界に持ち込んでしまったのは俺なんだっ! だからここで終わらせなきゃいけないんだっ!』

レイがこの世界に送り出してもらった真であったが、それが原因でかつての因縁がこ

の世界に流れてしまっているのだと真は考えている。

確固たる証拠はないが、そうに違いないと確信があるのだ——ならば自分が止めなければならぬ、【シン・アスカ】として。

『……………！』

真の剣幕に簪がおびえた表情で押し黙る。

その瞳には涙が浮かんでいた。

『なっ、なら私もっ！』

『……………駄目だ、簪。震えてるの……………分かってるから。怖いんだろう？それが普通なんだ』

『うっ……………なんで……………私は……………！』

真に指摘されたとおりに、少し簪の身体が震えているのだ。

そしてあふれ出た涙が止まらない。

それを見た真が腕の部分だけ【IS】を部分解除して彼女を抱きしめた。



『ごめん。これは俺がやらないと駄目なんだ』

『……真』

『……本当にごめん。だけど今は……何も聞かずに俺を行かせてくれ、簪には後で全部話すから』

真の言葉に簪は溢れていた涙をぬぐう。

『……絶対だよ？絶対無事に……戻ってきて……！』

『ああ、約束するよ。ありがとう、簪』

そう言ってインパルスを飛翔させる。

戦場に向かうために。

## PHASE33 落 はいぼく 翼

IS学園 第1アリーナ付近

ラクス・クライン一派【歌姫の騎士団】がIS学園を襲撃し始めてから、学園各所、特に第1アリーナ付近で戦闘が起こっていた。

教師陣や一部代表候補生が無人機を相手にしているのだ。

その為、各所に弾痕やブレード痕が残っている。

周辺の非戦闘員の避難は終わっているのが不幸中の幸いであろう。

その中でも無人機ではないISと戦っている生徒がいた。

一夏と箒である。

『くっ、こいつっ、何なんだよっ!?!』

『一夏、来るぞっ!』

白と紅

【白式】と【紅椿】を身に纏った一夏と箒が互いに得物である【雪片二型】と【雨月・空

【裂】を構えつつ、相手のＩＳを睨む。

２人と相対しているＩＳはどこかラキーナの「ストライク」に似ている。

だが装甲等はストライクより質素であり、背部ランドセル部分に「ストライカーパツク」などは装備していない。

相対しているＩＳの名は「デュエル」、決闘を意味するＩＳだ。

そしてそれに搭乗しているのは、栗色の髪的女性、目つきは女でありながらカナードと同じレベルでキツイが美人ではある。

『はっ、素人が相手になるかよお！』

ビームライフルを白式に向け、躊躇なくトリガーを引く。

発射されたビームが白式に向かう。

だが突如、【水蒸気】を上げて減退し消滅する。

その為一夏にビームが届くことはなかった。

『なっ、ビームがっ!?!』

『素人では相手にならないですか、素人ではなければご満足いただけるかしら?』

一夏の頭上から陽気な声が響く。

顔を上げるとそこには【蒼いIS】

【霧纏ミステリアス・レイデーの淑女】を身に纏ったIS学園最強の生徒会長【更識楯無】が微笑みつつ浮遊していた。

楯無がそのまま降下し、【蒼流旋】、水を螺旋状に纏ったランスを構えつつ、一夏の隣に降りる。

『織斑君、協力してアイツを倒すわよ?』

『えっ、あっ、はいっ! 分かりました!』

突如上級生であり、真経由でも数度しかあつたことがなかつた生徒会長に話しかければそんな場面ではないのに取り乱してしまう。

そんな一夏を見て楯無は微笑を浮かべていたが。

『なら、私もいたほうが良いよね?』

全身が黒い I S が箒の背後で浮遊していた。

搭乗者の両腕から両肩／両足を覆うような大型装甲とマニピュレーター、背部ランドセル部分のスラスタユニット。

肩部には実体剣が埋め込まれたシールドが2つ浮遊している日出工業所属の I S。

【ガイアガンダム】を身に纏った【瀬田利香】が微笑みつつ、箒に尋ねる。

『……ご協力お願いします』

『モチのロンってやつね、楯無ちゃんも OK?』

『ええ、お願いします。瀬田利香……日本代表候補生を辞退してなお（大地の女騎士）と呼ばれた技量を真近で見られる機会はそうないでしょうし、後学の参考にさせていただきますね』

『はは……その名前は恥ずかしいね』

苦笑しつつ、ビームサーベルを展開し発振させる。

『……はっ、上等だ、かかって来いよ、ヒーロー気取りどもがあっ！』

4対1——だというのに、オータムに滾るのは戦意のみ。  
すぐさまビームサーベルを展開し、切りかかった。

『うおおおっ!』

『ちいっ!』

雪片でインフィニットジャスティスのビームサーベルを受け止める。  
鏝迫り合いの形になり、両者がスラスターを噴かせて拮抗する。  
だが徐々に暮桜が押されていく。

『くっ、スペック差はいかんともしがたいかっ!』

『相手は最新のISだからパワー比はまずいよ、ちーちゃんっ!』

『……ならばっ!』

通信先の束の助言を聞き、あえて力を抜いてわざと押し切られる。

同時にAMBACとスラストターで姿勢制御を行うことで、後退する。

後退した先にはラキーナのストライクが背部の「I・W・S・P・パック」に装備されている「レールガン」を2基構えていた。

千冬が距離を取った理由はすでにプライベートチャンネルでラキーナから指示を付けていたからだ。

『これでえっ!!』

発射された電磁加速された弾丸が音速をはるかに超える速度でジャスティスに迫る。

——だが

『……キ……ラ……ッ!』

発生させたソリドウス・フルゴールビームシールドで弾丸を受け止め、その衝撃やエネルギーを全て背後に受け流す。

虚ろな瞳でラキーナを見つめているが、動きに一切の淀みが見られない。

『あらあら、確かにアスランの人格は私の手で消したはずなのに……そこまでキラを大切に思ってるのですか』

ラクスがその様子を見て、冷笑を浮かべる。

同時に迫る【光の槍】、【A.Lランス】を構えたドレッドノートだ。

『はあっ!!』

彼女の守っていたヒルダのドムとスコールのバスターの射撃を強引に突破し強引に、ラクスを狙っているのだ。

『ふふ。強引な攻めをされるのは嫌いではないですわよ、カナード。アナタの攻め、いいですわよ?』

ラクスは頬を紅潮させつつ、背部の【V.Lユニット】を起動。

紫の粒子が溢れ、後退する。

当然、超速度で回避されたためA.Lランスは空振りとなってしまう、舌打ちしつつす



ぐさまドレッドノートは回避に移る。

数瞬前までドレッドノートが存在していた場所をビームの十字砲火が焼く。

ドムとバスターのビームであった。

『くっ、よくもラクス様につ!』

『ヒルダ、落ち着いて、ドラグリーンが狙っているわよっ!』

2機の背後にドラグリーンが2機、浮遊して砲口を覗かせていた。

クロエが操るXアストレイのドラグリーンだ。

スコールの助言を聞いた瞬間に「スクリーミングニンバス」を起動させ、ドムとバスターは「光の幕」に守られる。

ドラグーンのビーム出力は通常携行するタイプのビームライフルと大差はないため、スクリーミングニンバスであっさりと弾かれてしまう。

『くっ、またその【光の幕】……そのような武装はカナード様だけで充分ですっ!』

『同感だね、兄さんが激昂しないのが奇跡だよ』

戦意を高揚させるための軽口を吐きつつ、ラキーナがクロエを庇うように前に出る。カナードはその言葉を無視し、ビームサブマシンガンのトリガーを引き続け弾幕を張る。

『……アスラン・ザラの【人格】を消した……だと……っ!?!』

『ええ。そのラキーナさんがキラであると分かるとアスランは説得しにいくといつて聞かなかつたんですもの。正直五月蠅くて……』

カナードの疑問の言葉にうんざりとした顔でラクスが答える。

『そんなっ?! そんな事をラクス、君はっ?!』

かつてはラクスの為に戦っていたラキーナが困惑の声を上げる。  
あまりにも非人道的な行為であるからだ。

『だって、煩わしかつたんですもの……分かりますよね、キラ? いえ、ラキーナさん?』

クスクスと笑いながらラキーナに言葉を投げる。

『それにむしろ今の彼は【完全な戦士】になってますのよ？常に【S. E. E. D.】の力を使えてますし、私に害意を示す【敵】を排除してくださいますし。優柔不断な彼にとってはある意味【救い】ではないですか？』

『ラクス、君は……っ！』

『……人の命を何だと思っているっ！』

雪片を構えた千冬の怒りの叫びが響く。

それに笑顔でラクスは答える。

『決まっていますわ、私が選定した命以外は全て【消耗品】ですわ』

『下種が……っ!』

暮桜のハイパーセンサーが自身の機体より下方に発生した高エネルギー反応を捉える。

『ラクス様っ！』

同じようにドムのセンサーがエネルギー反応を捉え、即座にヒルダが「スクリーミングニバス」を起動してラクスの前に移動し防御姿勢を取る。

同時に2本の高出力ビームが2人を機体の下方から飲み込む。続けてミサイルが昇ってくる。

『ラクス様っ！ ヒルダっ！』

バスターが両手に持つビーム砲を連結。

ミサイル群に向かって放ち掃射する。

一瞬センサーが乱れるほどのミサイルの爆発が連鎖していく。

そして爆発の中から「プラスチックシールド」から「フォースシルエット」に換装した「フォースインパルス」がビームサーベルを展開し、スラスター全開の速度で飛び出してきた。

『邪魔だあっ！』

『ぐっ!?!』

バスターのビーム砲の片方を切り落とし、そのまま返す刃でバスター本体を狙う。しかしロックオン警告が走る。

インパルスがスラストスターとバーニアを駆使して、ビームを姿勢制御のみで回避する。そしてバスターに蹴りを入れてその反発力で距離を取り、ビームを発射した相手に向き直る。

『アスランかつ!』

『……シ……ンツ!』

『千冬さん、力をつ!』

『っ、分かったつ!』

真が叫び、暮桜。

千冬が雪片に力を込めて、アスランに切りかかる。

——同時に真の意識の中で【紅い種】が弾けた。

インパルスビームライフを展開し、アスランに向けてトリガーを引く。

そのビームを回避、またはビームシールドで受け止めるインフィニットジャステイスであるが確実に動きを阻害している。

『アスランは俺と千冬さんで抑える、カナードツ、ラキーナツ、クロエツ!!』  
『分かっているっ!』

A Lランスを展開したカナード、〔I. W. S. P.〕パックからフラガラツハ大型ビームブレイドを展開したラキーナ、拡張領域からビームサーベルを展開したクロエが、ミサイルの爆煙から飛び出してきたラクス達に向かう。

だがラクスの顔には笑みが浮かんでいた。

『容赦のない奇襲っ、ああ、シンっ、やはりアナタは素敵ですわ。ふふ、そんなアナタに私の【ホワイトネス・エンプレス】から【プレゼント】がありますの』

その言葉と共に彼女の【IS】

ホワイトネス・エンプレス  
【純白の女帝】のV Lユニットから【紫の燐光】が溢れた。

暮桜がスラストを噴かして、インフィニットジャスティスに向かう。構える雪片には零落白夜の光が溢れている。

『落とすっ！』

『まだ……だ……っ！』

零落白夜を発動している雪片の刃を受け止めることはせずに、後退して距離を取る。上段から袈裟斬り気味に振るわれた刃は空を切る。

それは計算の内、すぐさま刃の向きを変え逆袈裟切りで切り上げる。

いわゆる【燕返し】

同時にスラストに火を入れていたため、後退していたアスランに刃が届く。

『ぐっ……！』

だがアスランは燕返しにも反応を示し、咄嗟に刃を仰げ反って避ける。

しかし刃は僅かながらインフィニットジャスティスの装甲を抉っていた。

そして大きくシールドエネルギーが削られる。

それを確認した真は、援護のためビームライフルを向ける。

——その時であった。

一瞬、千冬が驚愕の表情を浮かべて、痙攣したのだ。

そして千冬が【反転】して真に向かってきた。

その手には零落白夜が発動している雪片が構えられている。

咄嗟にフォースシルエットの推力を使用して、後退する。

雪片にエネルギーを削られる事はなかった。

『っ!? 千冬さん、何をっ!?』

『ちーちゃん、何してるのっ!?』

通信から東の声が漏れる。

だが千冬は耳を貸さない。

彼女の瞳は先程までの闘志に溢れている様な瞳ではなく、アスランと同じく【虚ろ】であった。

そしてアスランがこちらに向かってビームライフルを向け、ビームを放ってくる。



『どういうことだ、東さんっ!? 千冬さんに何が起こったっ!?』

『わっ、わかんないっ、ちーちゃん、止めて、こっちは味方だよっ!』

千冬の突然の凶行に東の困惑の声が漏れる。

それに答えるのは――

『ふふっ、世界最強の織斑千冬さんでも私の【ホワイトネス・エンプレス】の【生体支配】からは逃れられませんか。まあ、【条件】には当てはまってないですからね、仕方ないですわね』

通信に割り込んできたラクスが答えた。

カナード達は先程の突撃でラクスとヒルダを仕留めるつもりであったが、無人機であるストライクとイージスが乱入し取り逃がしていたのだ。

現在はスコールのバスターの弾幕とヒルダのドムの防御壁に攻めあぐねている状態であった。

『生体支配だつてっ!!?』

『ええ、それが私のISの【単一仕様能力】……まあ、【生体ナノマシン】で少しの間思いつき通りになつていただいているだけです、ご心配はなく』

ラクスは真がアスランと千冬の攻撃を捌いているのを見つめつつ、微笑む。

同時にアスランが放ったビームをシールドで受け止める。

『ぐうっ……!!』

『あつくんっ!!』

(千冬さんとアスランを同時に相手するなんて無理だっ!ラクス・クラインを直接……やるしかっ!!)

迫るアスランと千冬にシールドを投げつける。

2人が避ける隙を逃さず【フォースシルエット】から【ステイニーシルエット】へと換装を行う。

即座に【Vユニット】を最大稼動状態に移行させ、アスランと千冬を飛び越しラクスへと向かう。

『うおおおおおおおっ!!!』

『……ああ、シン、美しいですわ』

眼前に迫る【デステイニーインパルス】の【蒼い光の翼】に恍惚な笑みを浮かべる。

『ですが……そのような【偽りの翼】では私には届きませんわよ、シン?』

ラクスがその言葉を発した瞬間、インパルスの眼前に【インファイニットジャスティス】が現れる。

インファイニットジャスティスの背部リフター部分に大型ブースターが装備されていた。

それはIS用の高機動用パッケージ。

継続的な高速移動を可能にするものであり本来の用途とは異なるが、V Lユニットによる加速に追いつくことも可能である。

『…!』

『ラク……スはやら……せないっ!』

振るわれる2本のビームサーベル。

咄嗟にエクスカリバーを展開、交差して受け止め、鏢迫り合いに持ち込む。

——瞬間、真の胸をビームサーベルが切り裂いた。

『……えっ……?』

『あつくんっ!』

口の中に広がる【血】の味。

【絶対防御】が発動したのにも関わらず、貫通されているようだ。

痛みが胸から広がる。

斬り裂かれた装甲が目の前を舞っている。

一瞬空白になった頭が【何】に斬られたのかを確認する。

インフィニットジャスティスの腰部から【マニピュレーター】が伸びており、ビーム

サーベルが握られている。

『かつ、【隠し腕】……っ!?』

V Lユニットから溢れていた【光の翼】が消える。

同時に真が口から血を吐き出す。

ダメージは内臓まで届いていたのだ。

『あつくん、返事をして、あつくんっ!!』

『……シン、もう終わりなんですか?』

少し悲しそうな表情でラクスが真に問いかける。

インパルスの機能がダウンしているのか痛みと出血で意識が混濁してくる。

『ぐっ、こんな……おれ……は……っ!』

自分は帰らなければならない。

約束したのだ。

『……………か……………ぎ……………っ！』

笑顔を守ると誓った愛する少女の顔が浮かび——真の意識は途絶えた。

---

### 第1アリーナ シェルター付近

IS学園の各アリーナには生徒及び要人用のシェルターが備え付けられており、非戦闘員は全てここで待機していた。

最も警護の為に数人のIS搭乗者がいるのだが。

その中に「飛燕」、簪の姿があった。

彼女はすぐそばにいた本音と状況について確認を行っていたのだ。

「かんちゃん、大丈夫？」

『うん、本音は？』

「私は大丈夫……………だけど……………」

空を見上げる。

アリーナから少し離れた場所だがビームの光が時折見える。

『……真』

帰ってくると言ってくれた彼の言葉を信じ、ハイパーセンサーでインパルスの存在を確認しつつ、警護を行っていた。

そんな時であった。

存在を確認していた「インパルス」の反応が消えたのだ。

『……えっ?』

理解したくなかった。

自分の中で最も大切な存在になっている彼の反応が消えたのだ。

機体のセンサーの感度を最大に高めるが、反応は無い。

『……嘘、嘘だよね……っ!?!』

「かつ、かんちゃん、どうしたのっ!?!」

涙が自然と溢れてきた。

本音の言葉を無視してコンソールを操作する。

どうしても「インパルス」の反応が検出されない。

『嘘……だよ、嘘って言ってよ、真っ!!』

チャンネルを繋げる——が返信はない。

信じたくない——無事に帰ってくるって、抱きしめてくれた彼が——

『いや……いや、いやああああああああっ!!』

簪の悲鳴が木霊した。



## PHASE 34 ヴェステイージュ —vestige—

「……はっ!?!」

目を開けると目の前に綺麗な花が咲き誇っている。

とても心地よい風と花の香りが鼻腔をくすぐってくる。

見渡す限りの花畑——以前夢で見た景色と全く同じ花畑に真は立っていた。

「……は……あの夢の……っ!?!」

先程アスランに斬られた胸の傷を触る——が自分が着ているI Sスーツにも身体にも傷はない。

「傷が……ない?」

『重傷だったけど治せない傷じゃなかったからねー』

セミロングの金髪に、白いワンピース姿。

以前夢であった少女が目の前に突如現れる。

だが真は驚きはしなかった。

【彼女】が何者であるかは大体の予想がついているからだ。

「……君は……」

『ん、分かってるくせにー』

少女がケラケラと陽気に笑う。

少女が一度咳払いしてから、真に告げる。

『私はアナタのI S【インパルスガンダム】の人格だよ』

「やっぱり……インパルスだったんだな君は」

真が予想していた通り、彼女はインパルスのコアの人格らしい。

以前の様に名前の部分だけノイズを感じることもなかった。

『……やっと伝わった……よかったあ……』

「……インパルス、お前が出てきたって事は……」

『うん、シフトできるよ、第二形態移行』  
セカンドシフト

至極あっさりインパルスが真に告げる。

だが何故彼女は自分をここに呼んだかが分からない。

「インパルス、何で俺をここに呼んだんだ？ 第二形態移行ができるならそのまましてくれたって……」

『……真、アナタの言葉が聞きたかったの』

そういつて彼女の姿が消える。

そして以前と同じように目の前が薄暗くなる。

上空を見上げると光を遮る人型。

C・E・を共に駆けた【運命】の名を冠する、頭部には【血の涙】を流すような紅いラインと紅い翼を持つ【MS】

その機体が真の目の前にゆっくりと降下し、片膝をつく体勢となる。

「……【デステイニー】」

『真は……何のために戦うのか、もう一度確認させて？』

デステイニーが緑色のアイカメラを点滅させつつ、真に問いかける。

「俺が戦う理由、それは一つだ」

前世。

C・Eで得た「花を吹き飛ばさせない為に戦う」と言う信念、それ自体は今も変わらない。

だがこの世界で新たに心に決めた【戦う理由】

それをデステイニーに告げる。

戦うだけしかできなかつた自分に微笑んでくれた少女と、友と呼んでくれた親友達を守るために。

「花と彼女の笑顔を……例え傷だらけになつても俺は【彼女の笑顔と花達を吹き飛ばさ

せない為に戦う」

デステイニーを見上げつつ、力強く告げる。

一瞬デステイニーが微笑む様に首をかしげたのは気のせいではないだろう。

『……うん、その言葉が聞きたかったよ』

デステイニーの機体が紅い光に包まれる。

そしてその光が真にゆつくりと近づき、包み込む。

周りの花畑が消え、視界が白に包まれる。

だがすぐそばで安心できる愛機の声が聞こえる。

『今までとそしてこれからも……私はアナタの力だよ、真』

『ああ、頼むよ。インパルス……いや【デステイニー】』

紅い光がゆつくりと装甲を形作っていく。

『……シン、もう終わりなんですか？』

機能停止して落ちていく【インパルス】と真に落胆の感情が混ざった言葉が出る。失望した、しかしそれはすぐに誤りであったことに気づく。何故ならばインパルスが【紅い光】に包まれていくからだ。

『あれは……っ！』

『まさか、あつくんの、インパルスの第二形態移行っ!?このタイミングでっ!?』

意思を奪われた千冬を通してモニター越しにそれを見ていた束から驚きの声が漏れる。

『ああ、シン……貴方と言う殿方は……っ!!』

紅潮した頬を思わず両手で押さえて、恍惚とした表情のラクスが呟く。

——少年の握った拳は自身の無力さで砕けた。

光がゆつくりと消えていく。

進化した真のISの表面装甲の色は全身が【黒】  
手甲部分や脚部の一部には血の様な【紅】

——だが涙を流しつつも少年は願いを胸に前に進む。

背部には非固定浮遊部位として「デステイニーシルエット」の【V L ユニット】よりも1回り巨大な【紅い翼】が浮かんでいる。

——失くすばかりの幼い瞳に宿す信念ひかりは。

『……俺はあんた達から【花】……命を守ってみせる』

——命を守り、咲かせ運んで往くことが【運命】

『そしてあの子の……簪の笑顔を……守ってみせるっ!』

彼の頭の中に機体の【名】が浮かんでくる。

【傷痕】の名を持つ機体。

その名は——

『飛鳥真、【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】……行きますっ!!』

【運命】の名を冠し、【傷】についても決して折れない彼の剣が【紅い光の翼】を広げ、辺りを紅く染め上げた。



# PHASE 35 蒼き雫

真が落とされたのと同刻——

第1アリーナ シェルター付近

コンソールを必死に操作してインパルスにチャンネルを開こうとするが、応答はない。

依然インパルスの反応は消えている。

先ほどまで正確にとらえていた反応が消えた。

それが意味するのは、インパルスが撃墜されたということだ。

彼が向かったのはISの試合ではない。

命のやり取りをする——戦場だ。

その意味はよく分かっている。

『やだっ、帰ってくるって言ったのに……やだよおっ』

簪の目から涙が溢れ、流れる。

操作していた手が止まってしまふ。  
嗚咽と涙が止められずに俯いてしまふ。

同じようにシエルター入口をラファールで守っていた清香とナギはその簪の様子を、沈痛な面持ちで見ている。

どう声をかけていいのか分からないのだ。

——そんな時であつた。

「かんちゃん、ごめんっ！」

その言葉の後、パシツと頬を叩かれた。

今の簪は飛燕、つまりはISを身にまとつている。

シールドバリアにスキンバリアがあるため、生身の本音に叩かれた程度なんてことはない。

だがどういうわけか、叩かれた左頬はとても熱かつた。

『本……音……？』

「……簪様、あなたは大切な人が傷ついてしまったときに泣いているだけなんですか？」

いつもの気の抜けたような表情や仕草ではなく、凜とした表情と口調。

従者として本気になった時の本音だ。

いつもと違う本音の様子に清香とナギも驚いている。

『……え？』

「飛鳥君がもしかしたら落されたのかもしれない、ならすぐに向かつてあげるべきです。

ここは私や清香に任せて下さい。幸い敵の狙いはシエルターではないように思えます」

『でっ、でも……っ』

「大丈夫です。これでも私は布仏の人間です。誰かを守る術は心得てます、だから行ってあげてください」

『……そうだよ、更識さん。行ってあげて、飛鳥君を助けてあげなよっ！』

『うん、ここは私たちが何とかするから』

清香とナギも本音に続いて簪に告げる。

『……3人とも、ありがとう』

マニピュレータ部分をいったん解除して、涙をぬぐう。  
その様子を見た3人は頷いた。

『真を助けに行ってくるっ！』

ふわりと浮かんだ後、飛燕の特徴である光の翼を広げる。  
真のインパルスと同じ青い光の翼を広げ、飛燕は戦場に向かう。

飛燕の飛行速度ならば、戦場にはすぐ到着できる。  
残り数秒で到着できる。

その時であった。

飛燕のセンサーが見慣れない機体を捉えた。  
その様子は簪も肉眼で確認できた。

『あれは……真っ！』

全身は黒を基調にしたIS。

間接部分は血のようにも見える赤。

飛燕と同じVLユニットの翼を広げる。

デステイニーインパルスとは違い、赤い光の翼を広げるその機体に搭乗しているのは真だ。

(セカンドシフト  
第二形態移行……ううん、そんなのどうでもいい！無事でいてくれた……よかつた)

簪はすぐさま背部に「マルチロックオンシステム搭載ミサイルコンテナ」を4つ展開した。

その目的は彼の援護。

相対している機体達にロックオン。

視線でロックするシステムの為、相手を凝視し、機体の各所をロックオンする。

『行つてっ!!』

コンソールを叩くと同時に、ミサイルが真と相対している者たちに向かつていった。

『行くぞ、デステイニーっ！』

黒と紅のIS【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】のVLユニットが【紅い光の翼】を広げ、最大稼動状態に移行する。

だがデステイニーの進路を塞ぐ機体が2つ。

暮桜とインフィニットジャステイスだ。

その2機を確認したとき、真の意識の中で【紅い種】が弾けた。

暮桜が雪片を振り上げると同時に、インフィニットジャステイスはビームライフルでデステイニーの回避先を予測してビームを放ってくる。

だがデステイニーは回避を選択しなかった。

デステイニーインパルスのVLユニットと比較しても【異常】と呼べるほどの速度で暮桜に接近し、雪片を振り上げた右腕を掴み上げて千冬に組み付く。

意識を失って洗脳されているとはいえ千冬が反応できない程の速度であった。

『千冬さんっ、すみませんっ!』

組み付くと同時に、彼女の腹に【右掌】を押し付ける。

右手マニピュレータ部分、人間で言う掌部分に一瞬だけ【紅い粒子の光】が収束し、放たれる。

【掌パルマフイオキータの銚】を改良した武装であり、MS【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】に装備された【クラレント】。

同じの武装がこのISの両マニピュレータに装備されているのだ。

出力を大幅に下げている【絶対防御】を発動させ行動不能にさせるのが目的だ。

『かはっ!?!』

絶対防御が発動したが衝撃までは完全に防御できなかったのか、千冬が衝撃に苦痛の声を上げる。

だが、先程まで虚ろな目をしていた彼女の瞳に意思の光が戻る。

『ぐっ……真、私は……いったい……っ?!』

『ちーちゃん、元に戻ったんだねっ?!』

千冬の様子が元に戻ったことに通信から束の歓喜の声が漏れる。

だがいまだに戦闘は続いている。

動きを止めた千冬にインファイニットジャステイスがビームライフルを向けていた。それに気づいていたデステイニーが射線に割り込み、実体シールドで受け止める。

『千冬さん、動けますかっ?!』

『ぐっ……ああ、だが、エネルギーがもう……っ』

『っ、分かりました、援護しますから離脱してくださいっ!』

『……すまんっ』

『気にしてませんからっ!』

意識を失って真を攻撃した事を理解しているのか千冬の顔が曇る。それに笑顔とサムズアップで答えて、彼女の離脱を援護する。

アスランの射撃を防御しつつ、ビームライフルを展開。



連射と精密射撃を織り交ぜつつ、アスランの意識をこちらに向ける。数十秒そうして、千冬の離脱を確認する。

同時にライフルを格納し、エクスカリバーに酷似した大型実体剣を展開する。

『ヴェステイージなのに、これがあるのか……サービスいいなっ！』

大型ビーム実体剣【アロンダイト】

アーサー王物語に登場する騎士【ランスロット卿】が持つ血に濡れた魔剣と同じ名を持つ武装だ。

かつてのMS【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】には装備されていなかった武装であるが、武器リストを確認した所、通常のビームサーベルの他に装備されていたのだ。

VLユニットを稼働させて、アスランに突っ込む。

アスランもそれを確認した途端、ライフルを格納していた。

『うおおおおおっ!!』

『……………シンっ！』

超速度で迫るデステイニーの一撃。

何とか防御が間に合ったアスランはビームサーベルを交差させてアロンダイトを受け止めている形になっている。

鏑迫り合いになり質量の差から押し切ろうとしたが、一瞬、アスランのビームサーベルの「光」が強まりアロンダイトに走っている刀身ビームがかき消され、刀身にサーベルがめり込む。

同時に腰部に先程の隠し腕サーベルが出現した。

『っ!?!』

咄嗟にアロンダイトを放棄して、離れる。

隠し腕サーベルは空振りし、耐ビームコーティングされているはずのアロンダイトが真つ二つに切断され、落下していく。

『今のは、まさか……』

先程の斬りあいを確認した「光」には見覚えがあった。

それは親友である一夏と先程離脱した千冬の代名詞――

『嘘っ、【零落白夜】っ!? あっくん、気をつけて、あの機体のサーベル、シールドエネルギーの変換効率がかかなり悪いけど……零落白夜と同じだよっ!』

『やっぱりか……』

アスランの隠し腕サーベルで切り裂かれた時に発動したはずの絶対防御を切り裂けたのは、絶対防御を発動するエネルギーを無効化できる【零落白夜】のみ。

真の予想は当たっていたのだ。

『ふふ、単なる劣化品ですが……格闘戦ならばアスランの十八番ですからね』

ドレッドノートから発射されたビームをヒルダのドムに防御させつつ、ラクスが通信を繋げる。

それを無視しつつ、アスランに向けてビームライフルのトリガーを引く。

ビームサーベルを格納したアスランはビームシールドでビームを防ぐ。

接近戦でのアスランは強敵だ、加えて劣化品とはいえ零落白夜も持っている。  
だが今のデステイニーならば――

『デステイニーならば、こういう戦い方だつてできるはずさつ！』

V Lを最大稼動状態に移行――同時にビームライフルを連射しつつ、左マニピュレータからクラレントをビームライフルモードで放つ。

クラレントのビームは通常のビームライフルより出力が上である。

そのため、ビームシールドで防御していても衝撃は完全には防げない。  
体勢が崩れたのは一瞬、だがそれで十分。

『次はコイツだつ！』

背部に2つの巨大な砲塔が出現し、2つの砲口を構える。

デステイニーインパルス時に装備されていた「テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔」だ。

本来のMS「デステイニーガンダム・ヴェステイジ」は対MS戦闘に特化した超高

機動MSであったため大火力武装は搭載されていなかった。

だがインパルスから「第二形態移行」したIS「デスティニーガンダム・ヴェステイジー」には装備されていたのだ。

即座にビーム砲塔のトリガーを引き、2つの高出力ビームがアスランに向かう。体勢を崩しつつビームシールドでそれを受け止める。

しかし、先程のクラレントよりもさらに高出力なビームである。

いくらソリドウス・フルゴールビームシールドであろうと高出力ビームが続けざまにぶち当たれば大きく体勢を崩される。

デスティニーはビームを発射した衝撃をあえて殺さずその勢いのまま宙返りを行い、衝撃を使って加速する。宙返りしつつ体勢を立て直すと同時に、「フラッシュエッジII ビームブーメラン」を展開し、投げつける。

ビームブーメランを投擲した後、右掌のクラレントに粒子が収束。

通常のビームサーベルよりも高出力である「太いビームサーベル」が形成される。

かつてキラ・ヤマトを仕留めた「クラレント・ビームサーベル」

紅い光の翼を広げ、反逆の剣を構えてアスランに突っ込む。

『つっおおおおおおっ!!』

『ちい……っ!?』

だがアスランも人格が消されているとはいえ、歴戦の戦士。崩れた体勢を即座にAMBCで立て直す。

そして零落白夜を発動しているビームサーベルで迎撃する。

しかしデステイニーが突如、上方に飛び上がった。

同時にデステイニーの背後からフラツシユエツジが迫ってきていた。

Vユニットを最大稼動していた為、投擲したフラツシユエツジIIを追い越していたのだ。

『なっ……っ!?』

咄嗟にビームサーベルでフラツシユエツジIIを2つ、切り落とす。

しかしこの行為によってビームサーベルは振り切られてしまった。

クラレント・ビームサーベルが頭上より迫り、そのまま切り裂かれる。

表面装甲が切り裂かれ、絶対防御が発動。

苦痛の音がアスランから発せられる。

しかしまだ終わりではない。

右掌のクラレント・ビームサーベルが消失し、そのままアスランの腹部に掌底を叩き込む。

『うおおおっ!!』

ビームライフルモードに変更したクラレントから零距离のビームが発射された。

絶対防御をビームの出力で貫通。

腹部装甲が完全に破壊され、アスランが吹き飛ばされた。

『ぐあああっ!』

吹き飛ばされたインフィニットジャスティスの表面装甲から色が落ち、灰色に変わっていく。

【フェイスシフトダウン】、VPS装甲がダウンした証拠だ。

『あぐっ………シン………っ!』

フェイスシフトダウンしたインフィニットジャスティスが体勢を立て直すのが、腹部装甲はビームによって破壊され、火傷が見える。

衝撃によって内臓にダメージがあつたのか、軽く吐血していた。

『……あつ、ああ……シン、素晴らしいですわ、本当のシンの翼と力……んっ、んふっ、たまりませんわあ……！』

アスランが真に撃退された様子を紅潮した様子でラクスが眺めている。

その時であつた、彼女のIS【ホワイトネス・エンプレス】がロックオン警報を表示したのだ。

『ラクス様っ!!』

同じくロックオンされたヒルダが、【スクリーミングニンバス】を展開しラクスの盾となつて迫る【ミサイル】からの盾となる。

スコールのバスターも同じようにロックオンされていたため、十数発のミサイルを



ビーム砲で叩き落していた。

『……ミサイル？ 一体誰が……？』

カナードやラキーナ、クロエの機体にはこれほど大量にミサイルを発射する武装はなかったはず。

ISのハイパーセンサーで確認する。  
すると下方に反応があった。

ラクスにとっては【偽りの翼】

VLユニットを広げ【蒼い光の翼】を広げた機体が【ミサイルコンテナ】を放棄して真の傍に駆けつけていた。

『簪っ!?!』

割り込んできた機体はよく知る【飛燕】——簪だ。

突如、想い人である簪が割り込んできたのだ、咄嗟に彼女の傍に移動して問い詰める。ラクスのISの【単一使用能力】を警戒しているのもあるが、やはり心配なのだ。

『何で来たんだっ!?』

『戦う為に……私も戦う』

『何で簪が……っ!』

彼女に戦わせるつもりは毛頭なかった真であったが、先程戦闘への恐怖で震えていた筈の彼女の瞳に宿る意思に気づき、口をつぐんだ。

守られているだけじゃない。

その為に戦う意思が彼女から感じられたのだ。

『インパルスの反応が一瞬消えた時に何も分からなくなつて……でも本音が教えてくれた、泣いているだけなのつて……だからアナタの傍で戦わせて、真』

『……分かった、なら援護頼む、簪』

『……うん、分かったっ!』

簪に微笑むと彼女も微笑み返してくれた——それだけで先程までの戦闘やマニユアの疲労など吹き飛ばすようであった。

そして真は簪と並び立ちVユニットを起動させる。

ラクスのISの「能力」が彼の「推測」の通りならばこれで簪を守ることにも出来る。簪がバルムンクとビームライフルを展開し、真と共に光の翼を広げる——その様子をラクスは信じられないと言った表情で見つめていた。

『……は？ あの娘は一体……？ え、シンが何故あのような娘と？ 何故？ 私がいるのに……？』

ラクスの胸中では生まれて初めて困惑の感情が浮かんでいた——そしてそれは次第に別の感情に変わっていく——その感情の名は——

『……許しませんわ、私のシンを……アナタの様な小娘が、絶対に許しませんわ……っ！』

【嫉妬】

この戦闘が開始されてからずっと余裕の表情を浮かべていたラクスの顔に怒りの感情が浮かんだのだ。

## 同時刻——第1アリーナ付近

『どうした、それが1号機の実力か？』

『くう……っ！』

放たれたレーザーを回避したセシリアが苦悶の声を漏らす。

セシリアと対峙する仮面をつけた女性が駆る機体は「サイレント・ゼフィルス」

イギリスで開発されたBT兵器搭載型第3世代ISであり、「ブルー・ティアーズ」とは姉妹機に当たる。

機体もブルー・ティアーズと似通っている部分が見受けられるが、所々に【蝶】を連想させる意匠がある。

この機体は数週間前に何者かに強奪されていたはずなのであるが、突如としてここに現れたのだ。

倒れたラウラの傍には鈴とシャルル（シャルロット）が蹲っている。

3人ともISが破損しており身動きがとれない状況だ。

セシリア達4人は上空に現れた戦艦（アークエンジェル）によって出された非常事態

宣言により非戦闘員の避難誘導を行っていたのだ。

そこにサイレント・ゼフィルスが奇襲を仕掛けてきたのだ。

奇襲であったこと、軍人であったため咄嗟に動けたラウラが3人を庇ってレーザーの雨を受けて気絶、サイレント・ゼフィルスのビット兵器によつて鈴とシャルルは戦闘不能になるまでエネルギーを減らされてしまっていた。

『セシリア、ごめん……っ！』

『情けないわ、ホント……っ！』

『いいですよ、友人ではないですか、お気になさらずに……っ！』

4機のティアーズをスラストから切り離し浮遊させ、スターライトMK-IIIと共に5条のレーザーをサイレント・ゼフィルスに向ける。

その行動にサイレント・ゼフィルスの搭乗者は驚愕の声を上げた。

『っ?! 同時制御だっ?!』

瞬時加速によつて、レーザーの射線から退避し、同じ様にビットを切り離す。

『そちらも同時制御……っ！』

『ふん、貴様も同時制御が行えるとはな……情報で聞いていたよりもできるじゃないか』

2機が互いのビットを操作しつつ、手に持つ狙撃銃からレーザーを発射させる。

その射撃戦の中、サイレント・ゼフィルス側の射線が動けない鈴達に向かう。

咄嗟にビットを盾にして彼女達を庇う。

元々のビットの搭載数で劣っているブルー・ティアーズにとっては劣勢にならざるを得ない。

『くっ……まだっ……！』

『私と同等の制御技術を持つ搭乗者か……そんな奴が【足手まとい】を庇いつつ戦う必要があるのか？ 奴等を見捨てればまだ勝機があるんじゃないか？』

サイレント・ゼフィルスからの挑発の言葉。

その言葉はセシリアにとっては決して許せないモノである。

セシリアにとって【友人】は何よりも大切なモノだからだ。

自身の父親に言われた全力でぶつかり合える友人。

彼女にとつての「誇り」を貶されたと等しいのだ。

怒りによってセシリアの心に雫が落ち、「波紋」が広がる。

ティアーズから発射された「レーザー」がサイレント・ゼファイルスに向かう。

だがティアーズの射線を読んでいた相手は「シールドビット」で防御を行う。

だが発射されたレーザーはまるで「意思」を持っているかのように「湾曲」してシールドを飛び越えて来たのだ。

そして本体であるサイレント・ゼファイルスに直撃し、シールドエネルギーが大幅に減少する。

『なっ、何だどっ!?!』

『……………これが【偏向射撃】……………掴みましたわ』

ISには意思があり、搭乗者の思考や精神を読み取る機能も搭載されている。

セシリアの怒りに呼応するかのようブルー・ティアーズは稼働率を最大に引き上げたのだ。

それによって解禁された機能、【偏向射撃】<sup>フレキシブル</sup>——文字通りレーザーの軌道を搭乗者であるセシリアの意思でコントロールできるのだ。

『……アナタは私の大切な友人を……【誇り】を貶しましたわね?』

『ばっ、馬鹿な、偏向射撃だどっ!?!』

サイレント・ゼフィルスの搭乗者がはつきりと焦りの感情を声に乗せつつもビットを操作し、レーザーを照射する。

そのレーザーの射線には鈴達も含まれていた。

だがそのレーザーはティアーズから放たれた湾曲レーザーによって防がれ——相殺した。

『……凄っ』

『レーザーでレーザーを相殺……はは、国家代表クラスの操作技術だよ』

その神業に射撃戦を眺めていた鈴達からも感嘆の声が上がる。



『なっ!?!』

目の前の光景にサイレント・ゼフィルスの動きが止まる。

それにあわせてセシリアが手に持つ「スターライトMK―Ⅲ」を掲げて声を上げる。  
それは宣誓。

己を鼓舞し、誓いを立てる行為。

『我が名は「セシリア・E・オルコット」ッ！我が友、ラウラ、鈴音、シャルルの名  
誉の為にっ！我が祖国の名誉の為にっ！そして我が誇りの為にっ！』

狙撃銃を向け、テイアーズからレーザーを連続で発射。

そして偏向させることで「球体」の様にサイレント・ゼフィルスを包み込む。

同時に相手のビット兵器を撃ち抜く。シールドビットは念入りに撃ち抜き無力化さ  
せる。

『なっ、そんな……これは……っ!?!』

『この私がアナタを敗北に叩き落して差し上げますっ!!』

レーザーの【球体】がセシリアの言葉と同時に一気に中心点へ収束。それはつまりサイレント・ゼフィルスにとっては【詰み】であった。

『うわあああつ?!』

レーザーの球体によってシールドエネルギーが急激に減少。

そして表面装甲などが次々に破損していく。

ついにはエネルギーが枯渇する。

同時にレーザーの【檻】が消える。

機能停止したサイレント・ゼフィルスが強制解除され、搭乗者が落下する。

待機形態、ブルー・ティアーズと同じく【イヤーカーフス】に変わったISを回収、落下する搭乗者をセシリアが受け止め、状態を確認する。

意識を失っているが命に別状はなかった。

そして身動きが取れない2人にセシリアが機体を寄せる。

『……お時間がかかってしまい申し訳ありませんわ、お二人とも大丈夫ですか?』

『……ははっ、凄いな、セシリア』

『……なーんか、間抜けなイメージになってない、私たち？』

『ふふっ、私がシエルターまでエスコートいたしますわ……それに彼女も拘束しなければなりませんし』

セシリアの言葉に苦笑しつつ、ISを解除する。

エネルギーが尽き、機体も破損している。

戦闘継続は不可能である。

意識を失っているラウラとサイレント・ゼフィルスの搭乗者をセシリアは両脇に抱えて、ISを解除したシャルルと鈴を守りながらシエルターへ向かった。

## PHASE 36 歌姫の怒り

同時刻

第1アリーナ付近

デュエルと〔4対1〕で戦っているはずの一夏達の状況は一変していた。

〔4対1〕から〔4対5〕に状況が変わったのだ。

その理由は、突如として「黒い機体」が〔4機〕、戦場に乱入したためだ。

乱入した黒いISは以前戦った無人機。

ストライクとイージスと同じGタイプの頭部を持っており、デュエルの指示によって左腕に装備されている攻盾システム「トリケロス」から発射される3連装超高速運動体貫徹弾「ランサーダート」が次々に発射され辺りの地面を穿っている。

乱入した黒いISの名は——「ブリッツ」電撃を意味するISだ。

『くっ、何なんだよ、コイツも無人機かっ！』

『一夏後ろだっ！』

一夏の背後に突如として現れたブリッツがトリケロスよりレーザーライフルを放つ。箒の叫びによって咄嗟にスラストターを噴かして白式はレーザーを回避する。

同時にブリッツの姿が消えていく。

MSブリッツと同じく「ミラーージュコロイド」が装備されているのだ。

『姿が消える上に数でも向こうが上に……厄介ね』

【蒼流旋】でブリッツを突くが、【装甲】のみで受け止められた上に傷が見えない。

PS装甲が装備されているためよほどの威力でなければ装甲を抜くことはできないのだ。

そして別のブリッツがレーザーライフルを向けているのを察知。

ランスに纏う【水】を操作してレーザーを受け止める。

水が蒸発し、レーザーが減退。

減退したレーザーは薄い装甲でも充分に受け止める事が可能であった。

この水は【霧纏の淑女】の特殊なナノマシンで構成されているため、操作が可能なのだ。

『ははっ、どうしたよ、さっきまでの強気な表情はよおっ!』

デュエルはブリッツに指示を出しつつ、後方に下がっている。

その様子を舌打ちしつつ、楯無は戦況を分析する。

同じように隣では利香。

【ガイアガンダム】もビームサーベルを抜きつつ分析を行っていた。

『……』

(おそらく奴が後方に下がったのは黒い機体に指示を出しているときは動けないから……:だけど4機は互いにカバーしあうように姿を消したり出したりしてくる……:本当に厄介ね)

そこまで分析したとき、プライベートチャンネルが繋がる。

通信相手は利香であった。

『楯無ちゃん、私の指示通りの場所に爆発を起こすことってできる?』

突然の質問であつたがすぐに返す。

『はい、できます』

『なら、4秒後、2時の方向4mの座標に爆発よろしく』

『了解しましたっ!』

チャンネルをつなげたまま、【蒼流旋】を構えて利香の指定した座標に【クリア・バツション清き熱情】

水蒸気爆発を起こす。

するとI S 一機を余裕で包み込むほどの水蒸気爆発に何か巻き込まれた。

『なっ、何っ!?!』

オータムが、1機のブリッツが爆発に飲まれ、四肢が吹き飛び行動不能になつたことに困惑と驚愕の声を上げる。

『やっぱりブリッツは消えている最中はPS装甲じゃない。次、一夏君、箒ちゃん、君達の目の前に1機ずついるから、ぶった切ってあげて!』

『わっ、分かりましたっ!』

『分かりましたっ!』

一夏と箒とも通信をつなげていたようで、彼らにも指示を飛ばす。

そして2人が自身の得物を振り上げ、スラストーを使用した一撃を繰り出す。

鈍い金属音が響き、ブリッツ2機が両断され、崩れ落ちる。

その様子にさらにオータムの声が困惑の音が響く。

『くっそお、どうなってやがるっ! なんててめえにブリッツの動きが分かるんだっ!?!』  
『私をあまり舐めないで欲しいわね、アナタとは【経験】が……【場数】が違うのよ、テロリストさん?』

利香の前世は軍人であり【MSパイロット】である。

テロリストのオータムも命をかけた戦闘は経験しているだろうが、場数がそもそも違うのだ。



ミラーージュコロイドも万能ではない。

ハイパーセンサーの機能を熱量感知に切り替え、ブリッツの行動パターンを察知したのだ。

またブリッツの行動パターンは以前、真が撃破したストライクと全く同じ行動パターンであることも行動を見抜けた要因ではあるのだが。

『はあっ！』

ビームサーベルで姿を現し硬直していた1機を貫いて無力化。

これで再び「4対1」の状況に戻る。

ビームライフルを利香に向けるが、背後に瞬時加速で回っていた楯無に蒼流旋を突きつけられる。

『ぐっ、くそがあ……！』

『チェックメイトね、亡国機業のテロリストさん、アナタには色々と情報をはいてもらうわよ……？』

『……へへ、それはどうかなあ？』

オータムが明確に笑みを浮かべた時であった。

ハイパーセンサーが頭上から「流線型」の何かが数個突っ込んでくるのを察知した。楯無だけではなく一夏や箒、利香の頭上にも流線型の何かが突っ込んできている。

『なっ、こいつはっ!』

『あのとぎの無人機っ!』

『ちっ、イージスっ!?!』

突っ込んできたのは巡航形態に変形した「イージス」

そしてその反応には以前と明確に異なる点があった。

それは突っ込んできた機体から発せられる熱量の反応が通常より高いのだ。熱量の差に利香の頭の中で1つの答えが浮かぶ。

『やばい、自爆する気っ!?!』

咄嗟にビームサーベルと肩部に展開している非固定浮遊武装の「ビームブレイド」を

展開し、迫ってくるイージス1機をサーベルを突き刺す。

同時にビームブレイドでもう1機を両断する。

楯無も同じ様に蒼流旋と水を使ってイージスを無力化していた。

しかし――

『うわああつ!?!』

『くっ、このおっ!!』

一夏の白式、箒の紅椿にイージスが組み付いてしまう。

利香と楯無に比べるとこの2人の技量はどうしても劣ってしまった。

組み付かれるのも仕方ないであろう。

『じゃあなっ!』

イージスに組み付かれてしまった一夏と箒に浮き足立った利香と楯無を尻目にオクタムは離脱していく。

『まつ、待ちなさ……っ?!』

『楯無ちゃんっ、箒ちゃんをつ!』

ビームサーベルで白式に組み付いたイージスの脚部を両断して切り離し、ビームブレードで両断する。

利香の言葉に我に返った楯無は紅椿に組み付いたイージスを無効化に向かう。

蒼流旋と水を使って紅椿に組み付いたイージスを無力化、熱源の低下を確認した楯無が利香に通信を繋げる。

『……すみません、一瞬取り乱してしまいました』

『ん、OK OK、まだ楯無ちゃんも若いからね、次があるよん』

『……ありがとうございます、なぜか利香さんの言葉には説得力がありますね。そこまで年齢が離れているわけではないのに』

『あはは、なんでだろうね……とりあえず私は上司に連絡しなきゃ……（言えない……私、前世合わせると年齢3桁だなんて言えない!）』

真達くらいにしか話せない秘密に心の中で涙を流して、チャンネルを優菜に繋げる利

香であった。

同時刻——第1アリーナ 上空

V Lユニットから【紫の光の翼】を広げつつ、ラクスが簪を睨む。

その目にははつきりと【怒り】の感情が込められていた。

『……アナタの様な小娘……私の【ホワイトネス・エンプレス】で人形にして差し上げますわ……っ！』

先ほど千冬を操った時とは異なり【最大稼動状態】で光の翼を発生させている。

『させるかよっ！』

真のデステイニーが簪のすぐそばで【紅い光の翼】を広げる——同じく最大稼動状態でだ。

『撃つぞ、簪っ！』

『分かったっ！』

真のデステイニーが【テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔】を展開、同時に簪が【バルムンク】をラクスに向けて【砲撃モード】に切り替える。

3条の高出力ビームがラクスに向かう。

『っ!?!』

ビームの発射直前にVユニットを操作。

自身を光の翼で包み込むように操作する。

Vユニットの光の翼をビームシールド代わりに使ったのだ。

3条のビームが光の翼に直撃。

ビームを拡散することには成功するが、衝撃までは防げなかったようでラクスが吹き飛んでいく。

『ラクス様っ!!』

『行かせんっ!!』

カナードのドレッドノートに押さえつけられていたヒルダが思わず声を上げる。だがビームサブマシンガンから発射されるビームの嵐に動きを止められており、ラクスの援護に迎えない。

『ヒルダっ、なら私が……っ!!』

『行かせないっ!』

ラキーナのストライクI・W・S・Pがバスターの目の前に瞬時加速で移動。同時にフラガラツハ大型ビームブレイドを振り下ろす。間一髪で回避に成功したバスターは後退せざるを得なかった。

『くうっ!!』

おぼつかないながらもAMBACに成功してラクスが姿勢を立て直す。

『なっ、何故ですのっ!? 何故その女に私の単一仕様能力が効きませんのっ!? その女には【S. E. E. D.】の力も【C. E. の記憶】もないはずなのにつ!?』

取り乱したようにラクスが声を上げる。

それに笑みを浮かべつつ真が答える。

『アンタの単一仕様能力はおそらくVLユニットを媒介にしている。千冬さんを操った時から思ってたが当たりみたいだな』

『まっ、まさか……シン、あなたは自分のVLで私の生体ナノマシンを……っ!』

『VLにはエネルギー干渉機能がある、アンタのISの能力もそれを媒介にしてる、なら俺のVLで相殺することもできるはず……違うか?』

『くう……アナタの美しい翼を、そんな……そんな小娘の為に……っ!』

取り乱したラクスが自身の頭を掻き毟る。

美しい桃色の髪の毛は乱雑になり、虹を模したかのような髪留めが外れ、落下していく。



『何故、ですの。何故アナタは私ではなくそんな……小娘を守るのです……っ!』  
『決まってる、俺は簪を愛している。だから守る、花と共に……それだけだっ!』  
『真……っ!』

テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔をラクスに向ける。  
その時であった、ラクスの中で「何か」が壊れたのは。

『……ふっ、フッフ……あはっ、あははははっ!!』

ラクスが狂喜の笑みを浮かべつつ、高笑いを上げる。  
彼女の豹変ぶりに一瞬トリガーを握る手を止めてしまった。  
それが致命的なミスであるとも知らずに。

『ローエングリン、発射……っ!』  
『なっ!?!』

頭上のアークエンジェルの【足】部分にISと同じ様に量子展開により巨大な砲口が

2 門顕現したのだ。

そしてその砲口から I S のビーム兵器とは比べ物にならない出力のビームが発射され、I S 学園の校舎の一部を削り取って海面に着弾する。

着弾した海面では水蒸気爆発が発生し、巨大な水柱があがる。

同時にラクスの姿が消えていく、ミラージュコロイドだ。

加えてヒルダや、スコール、戦闘不能になって降下し続けていたアスランの姿も消えていく。

『ふっ、ふふ……もうこんな世界いりませんわっ、シン、アナタが私のモノにならないのなら……壊して差し上げますわ』

彼女の言葉と行動からラクスが何をしようとしているのか、理解した——【撤退】だ。

『っ、逃がすと思っっているのかっ!!』

デステイニーには「ミラージュコロイドデテクター」は装備されていないが、センサーを熱源探知に切り替える。

ミラージユコロイドを使っても熱源は発生する、故にブリッツはミラージユコロイドを使用するときはアンカーなどで極力熱源を発生させないようにしていたのだ――そして捉えた。

『そこだあつ!』

テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔のトリガーを迷いなく引き、ビームが発射される。

だが手ごたえがない。

『なんだとっ!? センサーでは反応があるのにつ!?!』

センサーでは目の前にラクスのISの反応がある。

だというのに手ごたえのなさに声を上げる。

『これは……【量子ウィルス】だとっ!?! 俺達の機体のセンサーが惑わされているっ!?!』

カナードが真に通信を繋げる。

そう、すでにデステイニーや飛燕、ドレッドノートなどの機体のセンサーはラクスが散布した【量子ウイルス】によって惑わされている。

束のラクスの機体の単一仕様能力【強制干渉】だと思っていたのはこのウイルスの力なのだ。

本来は機体の機能全てを停止させて行動不能にすることもできるが、束による【強制干渉】に対するセキュリティ強化によってセンサーのみ惑わされている状態だ。

『シン、それではごきげんよう。ああ、アークエンジルのローエングリンの次弾目標はアリーナのシェルター入口を設定しておりますので、どうぞ阻止していただいてもよろしいですわよ?』

『くっそおっ!! 束さん、どうにかならないかっ!?!』

『このウイルスっ、ごめんあっくん、今すぐには無理っ!?!』

ラクスからの通信が切断される。

おそらく離脱にかかっているのだろう。

通信から返ってくる束の声に思わず舌打ちしてしまう。

しかしそれも仕方がないであろう、あそこまで追い詰めたのにみすみす逃がすしかできないのだから。

『真つ、アークエンジェルを落とすぞっ!』

『……分かった、カナードっ!』

『私もやるっ!』

カナードと真の通信に簪も割り込む——真が領いてVLユニットを起動、同じく簪もVLユニットを起動してアークエンジェルが停止している高度まで翔け上がる。

C・E・世界のオリジナルと比べると幾分かダウンサイジングされているがそれも百m級の戦艦の姿であることは変わらない。

予想外の通信が束からつながられる。

『嘘っ、その戦艦……I S コアの反応が複数あるっ!』

『つまりは……【アークエンジェルの形をした巨大な無人機】って事ですか?』

『うん、そうなる……っ、砲口にエネルギー反応、やばい、落とすぞっ!』

東の声に焦りが混じる——アークエンジェルの足の様に見える部分にエネルギーが収束していく。

『アリーナからの避難は完了してるよ、兄さんっ！』

『了解した。ローエン格林部分を撃ち抜くぞ、真、更識、お前達は右足。俺とラキ、クローエは左足を狙えっ！』

カナードの指示の元、5機のISがそれぞれ射撃武装を展開——即座に標的に向けてトリガーを引く。

高出力ビームと実体弾が砲塔（ローエン格林）を貫通——爆発が連鎖していき、艦首までが爆発によって吹き飛ぶ。

ゆっくりとアークエンジェルが高度を下げ落下していく。

そしてアリーナに乗りかかるようにして機能停止する。

アークエンジェルが機能停止されたからか、アリーナに残っていた無人機ストライク、イージスが機能を停止して落下していく。

『……終わったか』

『……ああ、だが奴を取り逃がしてしまった。被害も相当なものだろう、ローエングリンは環境汚染が少ないタイプのものであることが不幸中の幸いか』

センサーを放射能検知に切り替えて、汚染状況を確認していたカナードが呟く。  
ラクス達が離脱したことでセンサーがある程度は正常化していたのだ。  
この程度であれば現代の除染技術ならば問題ないレベルだ。

『……あいつ、世界を壊すって言ってたけど……』

『奴の狙いは「世界の支配」なんてものではなく……【お前】だったということだ、真。そしてお前に拒絶されたことで奴の中で何かが壊れたんだろう。嫉妬で世界を狂わせるか、化物め』

カナードがラクスの狙いについて真に伝え毒を吐く。

『……奴が何をしようとしても止めて見せるさ』

『私も手伝うよ、真。兄さんも力を貸してくれるよね？』

『……ああ、そうだな。俺達がやらねばならない……この世界をC・Eの様にさせな

いために』

落下したアークエンジェルを眺めて真達が改めて止める決意を固める。

——戦闘はようやく終結したのだった。



## INTERMISSION 戦い終わって…

歌姫の騎士団の襲撃から数時間後。

アークエンジェルから発射された陽電子砲（ローエン格林）による軽度の放射能汚染はすでに除染されている。

タッグトーナメントの為に招かれていた各国の要人や企業関係者については、緊急事態のため、帰還や帰国が行われていた。

また、襲撃により学園施設にも少なくない被害が出たため1週間程度の休校となり、生徒達は帰省、または学生寮で待機している。

アリーナに到着したアークエンジェルについてはデータのサルベージが行われる予定だ。

そして襲撃による怪我人も少ないながらも出たため保健室では対応に追われており、その中には真の姿もあつた。

千冬やラウラについては現在治療も終わって保健室にはいない。

「……やっと終わったか」

IS スーツから、ジャージに着替えた真が先程のまでの検査を思い出してため息をついた。

真もこの数時間強制的に保健室で検査を受けさせられていた。

なぜならインパルスの第二形態移行の際に明らかに致命傷を負っていた真の傷が回復していたからだ。

これについてはISの開発者である束にも不可解な事象であり、調査を行っている。束としてはISコアが形態移行の際、生体維持機能に干渉して傷を治療したと、推測している。

身体に負担がかかったか不明であるためあまり無理しないようにと保険医には言われている。

「むしろ早く終わったほうだと思うがな」

「身体は大丈夫、真？」

保健室の扉を開けて、廊下に出ると真の検査が終わるまで待っていたのかカナードとラキーナが話しかける。

体調は特に問題ない。

「まあ、問題ないけど」

「そうか。なら行くぞ、今回の事を織斑一夏達にも説明しなければならぬからな」

そのカナードの言葉に真は驚きつつも納得して答える。

「……そのことなんだけどさ」

「……簪さんのこと？」

「……ああ。約束したんだ、全部話すって。だからさ、カナード達で一夏達に伝えてくれないか？事情を知ってる千冬さん達もいるわけだしさ。頼む」

2人に頭を下げ、真がラキーナの質問に答える。

それにカナードがため息をつく。

「……まあ、お前がいなくても【奴等】については俺達が伝えられるだろうが……いいだろう、分かった」

少しだけ呆れたような表情を浮かべつつ、カナードは了承の言葉を返す。

「悪い、助かる」

「俺達は生徒指導室で織斑一夏達に今回の事を説明する。何かあったら連絡しろ」

「ああ、分かったよ」

2人と別れて学生寮の自室に向かいつつ、待機形態の「デスクティニー」——「インパルス」と同じくドッグタグ——を握りチャンネルを繋げる。

『簪、聞こえるか?』

『えっ、あつ、真っ!?! 検査終わったの?』

少し驚いたような簪の返答が返ってきた、それに苦笑しつつ真が返す。

『ああ、特に問題なかったよ。それでさ、今から学生寮の部屋に来れるか?』

『……………うん、行けるよ。今生徒指導室にいるけど……………』

『ありがとう。千冬さんや東さんにはカナードとラキーナに話伝えてくれるように頼んだから、頼む』

『うん。全部話してくれるんだよね？』

『……ああ』

『……分かった、今から向かう。それじゃ後で』

『ああ。俺も向かってるから、それじゃ』

通信を切って、小走りで自室に向かう。

---

10分後——学生寮 自室

先に自室に着いた真はソファーに座りつつ、簪が戻ってくるのを待っていた。そして部屋の扉が開いた。

「来たよ、真」

「ああ」

簪が部屋に戻ってきた——そして真の隣に座り、彼を見つめる。

「……教えてくれるんだよね？あの時は【因縁】って言ってたけど……」

ラクス・クライン一派との戦闘に参加する際に発した【因縁】という言葉が簪はずつと心に引っかかっていたのだ。

「……ああ、簪はさ……【前世】って信じるか？」

「……え？」

突然の真のオカルト要素に溢れた言葉に思わず簪は戸惑いの声を出してしまった。しかし自分を見つめる、真の目は真っ直ぐとこちらを見ている。それに彼がこの状況で冗談を話すような人間じゃないのは理解している。ならばいっていることは真実なのであろう。

「……真が言うなら信じるよ」

「……ありがとう。俺には前世、【C・E】コスミック・エイブっていう世界の記憶があるんだ。俺はそこで

戦ってたんだ……【シン・アスカ】として」

そこから真は以前千冬に説明した事と同じ事を話していく。

ヤキン・ドゥーエ戦役、メサイア戦役、ネオ・ザフト戦役

戦乱に満ちたC・E.の歴史について。

その戦争の発端となったナチュラルとコーディネーターの深い溝の事について。

MSやコロニー等の宇宙に進出できるようになった科学技術の事について。

【シン・アスカ】として、軍に所属しMSに乗って戦っていた事について。

戦乱の歌姫、ラクス・クライン達との因縁について。

そして、自身が戦う理由について。

「戦争で家族を失って……何もできなかった無力さを悔やんで力を求めた。奴等と戦いに負けた後もずっと戦い続けて、やっと今ある【花】、【命】を守るって自分の信念を見つけたんだ」

「……真が、私を……【飛燕】の事で助けてくれた理由ってもしかして……」

彼女が左手中指の指輪。

待機状態の【飛燕】に触れながら言う。

「……ああ。ザフトに入隊した時の自分と同じだと思った。あのときの簪の目が俺と同じだと思ったんだ……だから助けたいって心から思ったんだ」

苦笑を浮かべつつ、簪に答える。

「……（こ）までが俺の因縁。俺の秘密だ……信じてくれるか？」

真の問いかけにコクンと簪は首を縦に振る。

「私は……真の事を信じるよ」

「……ありがとう」

簪が微笑みながら真に告げる。

彼女の言葉と微笑みで幾分か心が軽くなったことを感じる。

だが――



「……でも、真は【約束】を破ったよね？」

真の瞳を真っ直ぐ見つめつつ、簪は真に迫る。  
突然の言葉に一瞬頭が混乱してしまった。

「えっ、約束……っ!？」

「……【無事】に戻ってくるって、約束……したよね？」

「……あっ」

そう、真はラクス・クライン一派との戦闘に参加した際に彼女と約束していたのだ。  
だがその結果は傷は治ったとは言え、一時は致命傷を受けて意識を失ったのだ。  
完全に【無事】とは言いがたい。

思わず声を漏らすと同時に、簪が彼の右腕に抱きつく。  
その身体は少しだけ震えていた。

「……簪」

「……真がいなくなるんじゃないかって……怖かった……っ！」

声が涙声になっている。

戦う覚悟を決めたとはいえ、それと想い人を想う気持ちは別物だ。  
故に彼女は震えているのだ。

「……本当にごめん。それしか言えないけど……ごめん」

そっと左手で彼女の頭を撫でるが――

「……やだ」

首を横に振りつつ、彼女が答える。

その様子に苦笑しつつ、真が尋ねる。

「どうすれば……許してくれる？」

「あの人達との因縁……また真は戦うんでしょ？」

「……ああ、そのつもりだ」

「……なら……信じさせて」

「信じさせてって……んっ!？」

彼女の言葉に疑問の声を出した瞬間、物理的に口をふさがれた。

彼女からのキスで。

「んっ……はむっ……っ!」

以前、デートの際にした口づけとは違い、口内に舌を入れられて舌を絡ませる濃厚な口づけ。

それだけで心臓が早鐘を打つ。

その未知の感覚は数秒が数分に感じるほどに長かった。

そして簪の方から離れる。

彼女の口と真の口には唾液の橋が架かっていた。

「簪……っ」

「……真を感じたい。もつと感じたい。ごめんね、こんな卑怯な感じになっちゃって……でも今は真に触れていきたいの、そうすれば信じられるから」

頬を朱色に染めつつ、簪が告げる。

簪の想いを受け取って同じく答える。

「分かった。俺だってその……簪に触れたい。簪を感じたい。いいのか？」

「……うん」

「……分かった。言っとくけど俺【童貞】だからな、そういうのなかったし……」

バツの悪そうな顔で真が言う。

それに苦笑しながら簪が返す。

「……私も……初めてだから……その……優しくお願いします」

「ぜつ、善処します……っ！」

簪の言葉で理性にヒビが入った真が彼女を抱きしめた。

意識が浮かんでくる。

とても心地よい風と花の香りが鼻腔をくすぐる。

目を開けると目の前に綺麗な花が咲き誇っている。

「……あれ？」

花畑。

ここはデステイニーの空間だ。

ジャージ姿の真が立ち上がる。

自分は自室で簪と――

そこまで考えたとき、聞き覚えのある男の声が背後から響いた。

「起きたか、シン」

振り返ると【ザフトの赤服】を来た【レイ・ザ・バレル】が立っていた。

レイの隣には【白髪の老婆】

真には見覚えがない人物であった。

その横で金髪の美少女。

「ISコア」の人格「デステイニー」が苦笑いしていた。

「レッツ、レイっ!? 何でここにつっ!？」

「気にするな、俺は気にしない」

「俺が気にするってのっ! 何か前にも同じようなやり取りしたような……」

以前レイに今の世界に送り出してもらった際に同じやり取りをした事を思い出し、苦笑を浮かべる。

「死者と言うのは結構便利だと考えておけ」

「……そうかよ。出鱈目過ぎる」

懐かしいやり取りに気を取られていたが、レイの隣にいる老婆に視線が移る。

「レイ、えっとその人は……?」

「……ククツ、分からないか？」

レイが笑いを押し殺したような声を上げつつ、真に問う。  
同時に老婆が口を開く。

老婆は不満げな表情を浮かべていた。

「……本当に分からないの、シン？」

老婆の彼を知っているかのような声と共に、姿が変わる。

赤髪に【アホ毛】を立たせた【赤服】を着た美少女。

【ルナマリア・ホーク】だ。

「ルツ、ルナアツ!？」

真が驚愕の声を上げると共に、ルナマリアが真の視界から消える。  
そして顎に走る激痛。

「ふんっ！」

「うごっ!?!」

ルナマリアの跳び膝蹴りがクリーンヒットし、真は吹っ飛ばされる。

「全く久しぶりに会ったのに分からないとかサイテー」

「痛ってえ……っ！ あんな姿で分かるかよ、ルナっ！」

顎を抑えて立ち上がる。

その様子にルナマリアは笑みを浮かべた。

「……元気そうじゃない、シン」

「……ああ」

「2人は真に伝えたいことがあるんだってー」

今まで黙っていたデステイニーが真に告げる。



「伝えたいこと？」

「ああ、俺と云うかルナがな」

「ルナが？」

ルナマリアに視線を移し、尋ねる。

「シン、頑張りなさいよ」

「……へ？ それだけ？」

何を言われるか——内心身構えていた真は思わず声を零す。

「……なによ、もっと【色々】と言われたいの？」

ルナマリアのアホ毛がピクピクと痙攣している。

アカデミー時代からの付き合いの真にはよく分かる、彼女が怒っている証拠だ。

「いつ、いえ、なんでもありませんっ！」

思わずザフト式の敬礼をルナマリアに返してしまった。

そして一つ彼女に伝えるべきことが自分にあることに気づいた。

「ルナ、ごめん」

「……」

ジト目で真を睨むルナマリアを見つめつつ伝える。

「あの時……もつとちゃんとう君に伝えればよかった。あのときルナを拒絶したのは嫌いだとかそういうのじゃなくて……」

「俺と一緒にだと不幸になるからだって思ったから」

「うっ……」

自分の台詞をルナマリアに取られて思わず言葉に詰まる。

「……………めん」

「……全く、アンタは。まあ、でもようやくちゃんと振つてくれたわね」

仕方ないわねとルナマリアが苦笑を浮かべる。

「安心しなさいな。あの後私はちゃんとお婆ちゃんになるまで生きていたからね。死ぬときも孫に囲まれて死ねたのよ?」

ケラケラと笑いながら真に伝える。

「ルナ……」

「……シン、色々大変みたいだけど……あの子のこと、幸せにしてあげなさいよ?」

「……ああ」

真が力強く頷く。

「……さて、ルナ。伝えることは伝えたな?」

「ええ、ようやくゆつくりと眠れるわ」

レイとルナマリアの姿が薄れていく。

「……レイ、ルナ……」

「シン、俺からも伝えておこう……精一杯生きろよ」

「……ああ、分かっている」

真の返答にレイとルナマリアが微笑む。

「そしてデステイニー、すまないな、いきなり干渉してしまって」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それにレイさんとルナマリアさんには一度お会いしたいなーとか思ってたので……」

デステイニーがあははと笑いつつ、レイに答える。

その返答にレイが笑みを浮かべる。

「俺達はお前を見守っているぞ、シン」

「頑張りなさいよ、シン」

「ああ、見ててくれレイ、ルナ……俺は精一杯前に進んでいくよ」

2人に言葉を返すと共に視界が真っ白な光に包まれていく。

---

「……………」

ベッドの中で目が覚める。

すぐそばに寝ている簪の顔が目に入った。

【そういうこと】をした為2人とも何も身に付けていない。

そつと起こさない程度に彼女の頭を撫でる。

幸せそうな寝顔を簪は浮かべていた。

(…………ああ、彼女を幸せにしてみせるよ、だから見ててくれ)

亡き親友達からの言葉を胸に刻み込み、真は前に進む。

# INTERMISSION② 空からの贈り物

IS学園 学生寮 自室

「……………んっ」

ベッドの中で簪が目を覚ます。

自身は何も身に付けていないのは何故だっけなどと寝ぼけた頭に疑問が浮かぶ。

すぐさま先日真と行った【行為】について思い出した。

自身の記憶の中で自分から激しく求めたり、かなり変な事を口走ったことを覚えてい  
る。

当然それを真にばつちりと聞かれ、見られていたことを思い出して顔を赤くしてし  
まった。

「おはよう……………どうした?」

先に起きていた真がジャージ姿でソファアに座ってコーヒーを飲んでいた。なんでもないよと誤魔化して起き上がる。

「……おはよう。早いね、真」

「まあ、日課だからなトレーニングは……って身体は大丈夫か？」

コーヒーをテーブルに置いた真が体調について聞いて聞いてくる。

「初めてだと腰とかに違和感が出るとか聞くけど……」

「あつ、うん……たぶん大丈夫、歩くくらいなら」

「……分かった、何かあれば言ってくれよ？」

「……うん」

互いに顔を赤くして頷きあう。

真に私服を取ってもらって食堂に向かうこととなった。

20分後 学生寮 食堂



先日の襲撃事件があつたため食堂にいる生徒の数は少ない。だが見知つた顔は全員学生寮に残っている。

「あら、真に簪じゃない、おはよう」

「おつ、真、簪さん、おはよう」

一夏と鈴と一緒に朝食をとっていた。

2人とも焼き鮭、納豆、ご飯に味噌汁という和風な朝食を取っていた。

一夏と鈴の挨拶に返した後に同じような朝食のメニューを注文、受け取つた後同じテーブルに付く。

「あれ、箒やシャルルは？」

「箒は東さんに呼ばれてる、シャルルも生徒会長に朝早くから呼ばれたみたいだ」

「……まあ、昨日の今日だし何かあるのか……いただきます」

「いただきます」

真と簪がそろって手を合わせて食事に食べ始める。

「……真、カナード達から話聞いたよ」

食事を始めて数分経った後、一夏が口を開いた。

「……全部聞いたみたいだな」

一夏と鈴が首を縦に振る。

ここにいないメンバーも同じように話を聞いただろう。

つまりは「自身の前世」について——戦争に参加していたことも。

簪や千冬は納得してくれたが、ある意味純粋な一夏にとつては戦争に参加して人を殺していた自分に嫌悪を持たれても仕方ないと真は考えていた。

だがその心配は杞憂に終わる。

「ああ、けど俺思ったんだ……真は真だった」

「……はあ？」

「いや、戦ってたって聞いたけど。その戦う理由をカナードから聞かされたし……それ  
にずっと前からお前がいい奴だって俺知ってるからさ」

「……ありがとう」

一夏の真面目な表情。

本心からの言葉であると理解して、照れ隠しの為に水を飲む。

「しっかしまさかアンタが30超えてたなんてねー、まあ、納得したけど」

味噌汁を飲みつつ、鈴が告げる。

また年齢の話かとげんなりしつつ抗議の声を上げる。

「それは前の年齢あわせての事だからな？　今の俺は15歳だからな」

明らかに声が不機嫌になった真を見て、何度も弄られているのだろうと推測して鈴は  
苦笑しつつ告げる。

「わーかってるっての。まあ、アンタが中学で大人びてた理由が分かって納得してたのよ、気に障ったら謝るわ」

「……別にいいけどさ」

「そういえば……今日はどうするの、真？」

その様子を見ていた簪が話題を切り替えるために、会話を割り込んでくる。

「ああ、カナード達と今後どうするか確認してみる。今アークエンジェルからデータのサルベージしてもらってるみたいだし」

真の言葉の通り、現在到着したアークエンジェルからデータのサルベージが行われている。

真達が破壊したため、完全にはいかないがある程度のデータを入手することが可能であり、現在束の手によって解析が行われているのだ。

「なるほどねー、流石天災ってわけね」

「だな。飯食べた後にカナードに連絡してみるよ、一夏達も来るだろう？」

「ああ、色々と話を聞いたし……何かできるかもしれないしな」

完食し、お茶を飲んでいた一夏が告げる。

そして今まで真面目な顔をしていた鈴が急にニヤツと笑いつつ、口を開いた。

「……それでえ……昨日は何で大事な話の席に2人はいなかったのかしらあ?」

「つ……簪には俺が話す約束してたんだよ、だからその時はカナードや千冬さん達に任せただ」

一瞬心臓が緊張で跳ね上がりそうになったが何とか抑える。

誤魔化すために水に口をつけて横目で簪を見ると彼女も何とか誤魔化そうと平静を装っているようだ。

「ふーん……まあ、信じてあげるわ、真」

「……ああ、ありがとう」

何とか誤魔化せたかと、内心一息ついてコップをトレイに乗せる。

その様子を鈴は注意深く見つめた後口を開いた。

「……真、首筋、マークあるわよー」

「なっ!? 確認したはずっ!?」

咄嗟に右手で首筋を抑えた真と彼の首筋を確認してしまった簪。

その2人の様子を見て鈴はニタアと意地悪く笑みを浮かべる。

その笑みによって真は理解した——はめられたと。

「なるほどね〜」

「っ、鈴、お前っ、はめやがったなあ……!」

「昨日のカナード達の説明に來なかつた30代中年男性がまさか女子高生とねー。しかも学生寮でなんて……事案じゃないかしら?」

「俺は15だっ!」

ニヤニヤと笑みを浮かべる鈴に真が叫ぶが、からかう事を楽しんでいる彼女には意味をなさないうようだ。

「したって……何を？」

鈴の言葉の意味を純粋に理解できていない一夏が簪に尋ねる。

彼には他意はない。

男女の機微に疎すぎるのが一夏の悪い点であり、この場でそれがはっきりと出てしまったのだ。

「えっ、ああう……」

当然一夏の質問に答えることなどできるはずなく、簪は顔を真っ赤にして伏せてしまった。

その後、鈴に菓子等を奢ることを約束して何とかこの場を収める事に成功したのであった。

1時間後——生徒指導室

生徒指導室に集められた真達の前にはカナードや東、千冬がいた。

その表情は芳しくない。

その様子から【何か良くない事】が起こりつつある事は明白であった。

生徒指導室に集められたメンバーにはとあるレポートが渡されている。

そのレポートの名は【過去数ヶ月間の隕石落下数の統計】と記載されていた。

真にはレポートの名を見てある程度の予測がついてしまった。

「奴らの居場所が分かった」

「……このレポート。まさか、カナード……っ!？」

「ああ、奴等は宇宙そらにいる」

カナードの言葉に真は顔を顰め、残りのメンバーはぼかんとした表情を浮かべていた。

「このレポートだが……発覚したのは例の【量子ウイルス用ソフト】を東が作成し、再度世界の軍事施設などにアクセスした事で判明した。量子ウイルスで改ざんされていた



のだ、この記録は」

さらっと犯罪行為を述べるがそれは無視する。

「レポートは過去数ヶ月の地球へ落下した隕石の統計だ。今この瞬間も隕石は地球に落下しているが、大半は大気圏突入時の断熱圧縮の高熱で燃え尽きる」

「確か入射角を正確にしないと……などとは聞きますが……」

大気圏突入時の角度についてセシリアが呟き、それに頷いてカナードが続ける。

「そうだ、本来は入射角などの影響で燃え尽きる。たまに燃え尽きずに落下するものがあるがそれは数10cm程度の小さなモノだ……がレポートを見る」

「到着した隕石のどれも……10mレベルじゃないかっ!」

レポートを読み進めていたシャルルが声を上げる。

アメリカ合衆国アリゾナ州にはバリンジャー・クレーターというクレーターが存在している。

落下した隕石は直径20mから30mほどの大きさの隕石で、落下地点のクレーターは直径が1.5km程、深さは170m程のクレーターである。

10m級の隕石などが落下した場合、バリンジャー・クレーターほどではないが同規模、もしくは少し小さい程度のクレーターができるはずだ。

だがそのようなニュースなどは流れていない。

「そうだ、ここ数ヶ月で5件……しかも隕石の着地点はほぼ同地点だ」

レポートに書かれている着地点はフランス沖に集中している。

まるで狙って落下しているかのよう。

「故意に落下させている……とでも言うのか？」

ラウラがレポートを捲りつつ声を漏らす。

それに真が答える。

「そうだと思う。【隕石に偽造したカーゴ】……おそらくは【PS装甲材】をつんだカー

ゴを落としてる」

「おそらくそうだろう。そして1週間前、民間の宇宙旅行用のシャトルが1機紛失しているのが確認された」

「……奴らお得意の強奪かよ」

C. E. 世界では奴ら。

歌姫の騎士団は軍事施設からMSをも強奪してデータを消すなどという工作までやっつけている。

量子ウィルスも存在しているため、この世界でも同じことは可能であろう。

「その民間シャトルが先日、『突如』某国の『マスドライバー施設』から射出さたらしい……  
……奴等と見ていいだろうか」

「……ミラーージュコロイドか」

真の言葉にはあ、とカナードはため息をつく。

「……それでどうすればいいのだ？」

「そうだよなあ……宇宙って言ってもさ」

今まで黙っていた箒と一夏が口を開く。

そう、奴等は宇宙にいと結論が出てしまったのだ。

戦うにはどうやってそこに行くのかが問題になる。

「そこなんだよねー、一応プランはあるんだけどね」

束が口を開く。

空間投影ディスプレイには「IS」にロケットが接続されているような画像が映し出されていた。

「プランはこれ、「IS」に液体燃料ロケットを外部接続して打ち上げるって方法……大気圏を突破したら「パージ」って感じかな」

プランを話す束の表情は暗い。

「本来のISSの目的は『宇宙空間用のマルチフォーム・スーツ』でしたっけ……」  
「おつ、いっくん、勉強してるねー。まあ、こんな形になっちゃったのは複雑だけどね」  
「……しかし姉さん、そのプランには液体燃料ロケットが必要になるかと思うんですが……」

箒の言葉に一気に束の表情が暗くなる。

「それなんだよねー。全員分なんて無理だし、マストライバーもシャトルなんて用意できるとはいいしねー。時間をかければロケットなら資材から作れるけどあんまり時間をかけるのもまずいし。そもそも帰還方法もあんまり現実的じゃないんだよねえ……ねえ、ちーちゃんISS学園側で何とかならない？」

「……流石にこればかりは無理だ、すまん」

「だよねー。流石に要求ハードル高すぎだよねえ……何か代案ないかな？」

天災である「篠ノ之束」が学生である一夏達に代案を求めると、技術者達が見れば目を丸くして驚く事だろう。

だが無理なものは無理、ないものはないのだ。

しかも彼女のプラン以外に浮かぶものなど出てこない。

生徒指導室に集まった面々が押し黙る。

だが生徒指導室の扉が開かれ、状況は一変することになる。

開かれた扉から教室に入ってきた人間がいたのだ——淡い紫の髪に長身のスーツを身に着けた女性——

「失礼するよ」

「ゆっ、優菜さんっ!?! なんでここにっ!?!」

「やあ、真、ここであつてるよね? 対策を話し合つてる場所つて」

日出工業社長、応武優菜が生徒指導室の面々を見渡して尋ねた。

## PHASE 37 宇宙へ

優菜に数秒送れて、生徒指導室に楯無が入ってくる。

「ちよつと、応武さん、勝手に入られると混乱が……」

「まあまあ、せつかくあんなベストなタイミングだったからね……さてと」

彼女に振り返って優菜が軽く頭を下げつつ生徒指導室に入り、近くにあつた椅子に座って足を組む優菜。

それを見たラキーナがバツの悪そうな表情で口を開く。

「応武優菜……さん……」

「ん、ああ、君が【キラ・ヤマト】君か……いや、今は【ラキーナ・パルス】ちゃんか、初めまして」

ニコツと微笑んではいるが全く目が笑っていない。

その視線にラキーナがビクツと身体を震わせている。

優菜がラキーナにこう言った態度を取るのには仕方がないであろう。

前世での死因の遠因とも言えるのだから。

真から見てもラキーナに好意的でないのは明らかである、なので話を切り替える。

「優菜さん、何でここに来たんですか？」

「ん、ああ、ごめんね。あるんだよ、宇宙に行く方法」

優菜の言葉に真やカナード、束を含めた全員が驚く。

この世界の宇宙開発はC・Eに比べると遅々として進んでいないレベルであるからだ。

全員の様子を見て笑みを浮かべた優菜がさらに続ける。

「真やカナードは知ってるだろうけど……【アメノミハシラ】ってのは知ってるよね？」

優菜の言葉に2人が頷く。

【アメノミハシラ】



C・E. では「オーブ連合首長国」が所有する「宇宙ステーション」であり、兵器開発を行う軍事宇宙ステーションとして機能していたものだ。

本来はアメノミハシラは、地球上から宇宙への物資を送る軌道エレベーターのことであったが、大規模ファクトリーである最頂部が完成した時点で地球連合とプラントの戦争が始まったため、建造計画はストップされていた。

だが中立を是とするオーブには必要な施設であるため、宇宙ステーションとして使用され続けていたのだ。

余談だがC・E. のアメノミハシラを管理していたのは5大氏族の1つである「サハク家」の「ロンド・ミナ・サハク」

彼女はアスハ家の中立理念への執着に反旗を翻し、「ネオ・ザフト戦役」が終結するまでは独自の指針で活動を続けたのだ。

ミナについていった元オーブの民も決して少なくはなかった。

「まさか……あるのか、アメノミハシラが？」

「うん、もつともC・E. にあったオリジナルと比べると小規模だけどね、それでも1週間には余裕で滞在できる規模のものさ」

空間投影ディスプレイに宇宙に浮かぶ【宇宙ステーション】の映像が流れる。

施設の大きさはオリジナルに比べればダウンサイジングされているがかなりの巨大建造物だ。

他国の宇宙ステーションに比べれば雲泥の差だ。

そして映像が切り替わる。

海に浮かぶ島——そしてそこから伸びている多段式ロケットの段階加速用カタパルト。

【マストライバー施設】である。

「んで、その島がアメノミハシラへの玄関口である【宮島】とマストライバーさ。うちの社員は【ナイトヘール】なんて呼んだりするけど」

優菜が少し苦笑して足を組みかえる。

「しかし何でまたそんなモンがあるんだ？　だって、いくら真の所属してる企業が凄いとっててもさ……………」

その映像を見た一夏が声を漏らす。

それは真にとつても同じだ。

いくら日出の技術力や技術者がジェーンを筆頭に優れていようが、これだけのものは早々と作れはしないだろう。

それを察したのか優菜が続ける。

「実はこの『アメノミハシラ計画』ってのは日本政府からの要請なんだ。【軍事用宇宙ステーション】の開発を依頼されてね、うちにはジェーンっていうC・Eの技術を持つ人間がいるし、私自身いずれは必ず必要になるって考えて数年前から政府の援助を受けて開発を進めていたのさ」

「えー、何これー、こんな施設があるなら私が見逃すはずないんだけどなー?」

ディスプレイから視線を優菜に移した束が問う。

「ふふ、日出には【ミラージュコロイド技術】がありますし、ミス束、貴女には及びませんが優秀な技術者がいますから」

「ぬう、なんかしてやられた感じ」

「……だが希望が見えてきたな。ユウナ・ロマ・セイラン、マストドライバー施設の準備にどれほどかかる？」

宇宙へ行く手段が存在していたことに彼には珍しく安堵の声を漏らし、優菜に尋ねる。

「マストドライバーで打ち上げるシャトルの準備にあと5日……いや後4日で終わらせる予定さ」

「……4日か」

「そう、【4日】、だからその間に決めて欲しいんだ。この中の【何名】を【宇宙】に連れて行くかをさ」

「えっ、【全員】じゃないんですか？」

優菜の声に一夏が声を上げる。

その声に優菜が首を縦に振る。

「4日で用意できるシャトルは【一つ】しかないんだ。コネを使って他国の施設に呼びか

けたけど、やはり時間がない……一応アメリカのIS搭乗者「ナターシャ・ファイルス」  
シルバリオ・ゴスベルと「銀の福音」の協力と自衛隊から「打鉄」を3機借りたけどね。あまり時間をか  
 けると今のラクス・クラインは何をするかわかったものじゃない」

顔をしかめつつ、優菜が告げる。

実感がこもっているため真も苦笑いを浮かべる。

「それで……何名シャトルに乗れるんです？」

「ん、元々がデリケートな資材や少人数を宇宙にあげるための小さいものだから……」  
 「5名」って所かな、さて誰が行くかい？」

優菜が生徒指導室の面々に視線を向ける。

「俺とラキは確定だ、因縁もある」

「……私もこれには立候補します、彼女達は私達が止めなきや」

カナードとラキーナが静かに告げる。

それに咄嗟に一夏が声を上げた。

「おつ、おい、もつと話し合わなくていいのかよ?」

一夏の意見ももつともである。

手段が限られ宇宙に行ける人数も限られるため簡単に決めることはまずいだろう。だがそれをカナードは一蹴する。

「……なら聞くが、織斑一夏。お前は宇宙でまともに行動できるのか?」

「えっ?」

「宇宙ではAMBAAC……【姿勢制御】が、そしてなによりも【パニック】にならないことが重要になる。俺やラキはC・Eで経験しているがお前を含めた他はどうだ?」

一夏を含めた1年1組の皆が顔を顰める。

宇宙開発がC・Eよりも遅れているこの世界で宇宙空間を体験したものなど、宇宙飛行士やアメノミハシラの建造に携わった技術者しかいないだろう。

カナードの指摘はもつともである。

【宇宙】という空間は可能性を秘めていると共に、それだけ恐ろしい空間でもあるのだ。

「たつ、確かに……そうだけどき……」

「まあ、カナードの言うとおりさ」

たじろいだ一夏の背中を軽く叩いて微笑む。

それに少し拗ねたように一夏は返す。

「……真はどうするんだ？」

「……俺は行く、ラクス・クラインは俺に拒絶されたから宇宙に上がった。なら止めるのは俺の役目でもあるんだ」

「……俺は」

一夏自身理解しているのだ。

真やカナードに比べて、おそらくこの一同の中では最も自分が【弱い】と。

以前の戦う理由について悩んだときは違い、現在は単純な力量の差で立候補できずにいるのだ。

それを察して真が告げる。

「一夏、お前は強いよ」

「……真」

「だって自分が宇宙に行くことを不安に感じたんだろ？　自分でそういった点に気づけるのは強さだよ」

「……」

「それに何も宇宙に行くだけが戦いじゃない、そうですね、束さん」

真が束に質問を投げる。

質問の意図を察した束が答える。

「あつくんの言うとおりだよ、いつくん。ラクスが私達が追ってくることを想定していないわけがないから、高確率で妨害があると思うよ」

「……真」

「だから、俺達が宇宙に行けるように……守ってくれないか？　箒やセシリア、鈴にシャルルに、ラウラも」



一夏達1組のメンバーを見回して頭を下げる。

「……分かったよ、真、任せてくれ」

「分かった、いいだろう、真」

「分かりましたわ、真さん」

「つたく、なら全力で守ってあげようじゃないの」

「だね、僕も全力で手伝うよ」

「真は戦友だ、ならば全力で答えるのみ」

1組のメンバーが真に答え——頭を上げてから真が笑みを浮かべる。

「……本当にありがとう、皆」

真が皆に感謝の言葉を告げる。

そして次に自身にとって「最も大切な人」に視線を移す。

彼女も同じように真に視線を移していた——簪だ。

「……俺、行くから」

「……………うん、大丈夫、信じさせてもらったから。だから絶対帰ってきてね」  
「ああ、分かってる。無事に戻ってくるよ」

簪の頭をそっと撫でつつ、告げる。

その様子を残りのメンバー（カナード以外）が生暖かい視線で見ている。

「……………簪ちゃんたら周り見えてないわね」

一夏達1組メンバーはまた始まったかと言う視線を向けており、楯無が少々羨ましそうな視線で2人を見つめる。

また羨ましそうな視線で見つめているのは楯無だけではなかった。

「……………私も頭を撫でて欲しいです」

黒に金の瞳を開いてカナードをクロエは見つめていた。

だがそれを無視して、カナードは書類などを確認していた。

「……何か言ったか、クロエ？」

「……いえ、何も」

その返しにはつきりと落ち込んだ様子を見せたクロエにラキーナが苦笑しつつ告げる。

「……ごめんね、兄さん鈍くて」

「いえ、大丈夫です、ラキーナ様。大丈夫……です……」

口ではそう言っているクロエの表情は明らかに落ち込んでいる。ラキーナはただ苦笑いを作るしか出来なかった。

「ふむ、コーヒーが甘いな」

「ちーちゃん、もつと苦いコーヒーなくい？」

「残念ながらそれはブラックコーヒーだ」

「……目の前でいちやつかれるのってなんだかムカつくよね」  
「……それは同意見だ」

千冬と東が声を漏らす

もちろん、真と簪がその後皆に弄られたのは言うまでもなかった。

その後、宇宙に上がるメンバー5名が決定された。

メンバーは「真・カナード・ラキーナ・クロエ・東」の5名である。

東は「量子ウィルス」と「単一仕様能力」に対するサポートのため、クロエの「Xアストレイ」のドラグーンは宙域戦闘で最も有用活用できる事がメンバーに含まれた理由である。

また到着した「アークエンジェル」にはある「座標」のデータが残されている事が判明した。

その座標は「C・E」でよく使われていた宙域のデータであり、C・Eでは「L5宙域」と呼ばれており、プラントなどのコロニーが存在した地点である。

そこに「人工物のデータ」が残されていたのだ。

これを東は「小規模なコロニー」と仮定している。

宇宙に上がるシャトルを護衛するメンバーは一夏達と楯無、簪、千冬達 I S 学園教師陣と優菜のコネによって参加するアメリカの「ナターシャ」と利香を含めた日出工業所属のパイロット達である。

マストライバー施設がある「宮島」には2日後に出発し、2日かけて現地で I S の調整等の準備を行う事となり会議は解散となった。

## PHASE 38 暁の空へ

宮島 日出工業 宇宙開発部門施設 「アマノイワト」

真達は宇宙に向かうため、宮島に建てられた日出工業の宇宙開発部門施設「アマノイワト」にてシャトル搭乗の準備を進めていた。

アマノイワトに建てられている「マスドライバー」から射出されたシャトルは宇宙ステーション「アメノミハシラ」に到着後、推進剤等を補給、そこでとある「モノ」に「乗り換えて」L5ポイントへと向かう予定だ。

優菜曰く、サブライズとのことで乗り換え予定の「モノ」については教えてくれなかったが。

またシャトル搭乗時にはISを起動し、PICによって加速時のGを相殺することとなっており、シールドエネルギーはアメノミハシラで補給予定である。

真やカナード、ラキーナ達にとつても宇宙に上がるのは約20年ぶりとなるため、アメノミハシラに到着した後の計画については一切の漏れがないように頭に叩き込んでいた。

また打ち上げ用シャトルについては格納庫内で嚴重に警護されつつ整備されていた。

歌姫の騎士団のお家芸を警戒しての事だ。

そしてシャトル打ち上げ当日。

シャトル打ち上げまで残り1時間を切り、カナード達はすでにシャトルへ搭乗している。

そんな中、IS用格納庫に真と簪の姿があつた。

『ん、拡張領域に登録されたのを確認した』

『うん。真なら使いこなせるよ』

『ありがとう。いきなりこんなこと頼んでごめんな』

『ううん、全然大丈夫。頼られるの嬉しいから』

コンソールを消して、ISを解除した真は待機形態になったデステイニーを身に着ける。

シャトル搭乗前に真は【とある事】を簪に依頼していたのだ。

そしてその作業も完了した。後は向かうのみ。

「……よし、行ってくるよ」

『うん、私も精一杯頑張るから……信じてるからね、真』

「ああ、ありがとう、簪」

力強く頷くと共に笑顔で彼女にサムズアップを送る。

簪も笑顔で機体のマニピュレーターを使ってサムズアップを返してくれる。  
真はシャトルの搭乗に。

簪はその警護への為、空へと向かう。

宮島 マスドライバー付近

残り30分でシャトルはマスドライバーより射出される予定だ。

そんな中、警護の為に一夏達はISを展開し、空中で警護を行っていた。

『……来るのかな、アイツ等』

【白式】を展開し、得物である【雪片式型】を展開した一夏が呟く。



その眩きを近くで滞空していた「ブルー・ティアーズ」

セシリアが拾い、返答する。

『……結局この4日間に襲撃はありませんでしたがおそろく。それにあちら側はシャトルの破壊が目的でしょうし、このタイミングを逃すのは考えられませんわ。しかし捕らえた「サイレント・ゼフィルス」の「彼女」から何か聞き出せればよかったですわ……』

セシリアの言う彼女。

「サイレント・ゼフィルス」に搭乗していた少女、IS学園側で拘束されて取り調べが進められていたが結局分かったのは「マドカ」と言う名前程度であった。

一夏にとっては彼女の「顔」が姉である「千冬」の幼い頃に酷似しているのが気になったが、今はそれを考えている状況ではないと思いを切り替えたが。

『悩んでもしょうがないか。後30分で真達の打ち上げが始まるんだし……あいつらがちゃんと宇宙に上がれるように俺達は守るだけさ』

『ふふっ、そうですわね』

一夏の言葉に思わず笑みを零したセシリア。

彼女も同じ気持ちなのだ。

その様子を少し離れた場所で「紅い分割装甲を持つ機体」、【紅椿】を身に纏った箒が凝視していた。

明らかに嫉妬の感情が顔に表れている。

セシリアが一夏に【友情】以外の感情を抱いていないのは箒も知っているがこればかりは抑えきれないようだ。

その隣には「ガイアガンダム」を身に纏った利香が苦笑して箒を眺めていた。

『あはは……箒ちゃん、顔、顔、女の子がそんな顔しちや駄目だよ?』

『……すいません。元々こういう顔なので』

『……一夏君の事、そんなになるまで好きなんだね』

利香の言葉はプライベートチャンネルでやり取りしていたため周りには聞こえていないが、箒は振り返る。

彼女の顔には何故ばれたと書かれていた。

『バレバレだよ、箒ちゃん』

『いつ、一夏には絶対に喋らないでくださいよ?!』

『言わないから安心して……後、アドバイス。2歩3歩下がった後ろからついていくのが【大和撫子】だっけ？それもいいけど、やっぱり強烈にアタックしないといつまでたつてもそんな感じだと思うよ、私も苦労したし』

利香のやけに【実感】の籠もった言葉に箒ははっと表情を変える。

それと同時に利香の隣に【銀の甲冑の様なIS】が降下しつつ現れる。

アメリカとイスラエルが共同開発した軍用IS【銀の福音】だ。

そしてポンとガイアの肩部の非固定浮遊武装である【ビームブレイド】部分にマニピュレータを乗せつつ、頭部ヘルメットがカシャツと開いた。

現れたのは金髪の美女。

優菜のコネによつてマストドライバー護衛に参加している【ナターシャ・ファイルス】だ。

彼女にはラクス・クラインのことは伝えられておらず、テロリストがマストドライバー破壊を企んでいる為に護衛が必要と行うことで話が通っている。

アメリカ人である彼女にとってテロは憎むべきものであり、また友人である【瀬田利香】と【応武優菜】の頼みで護衛を引き受けてくれたのだ。

『利香、落ち込まないで、きつといい男が見つかるわよ?』

『うるっさいわね、ナターシャっ! 久々にあった友人への慰めの言葉がそれえっ!』

『ふふ、でも元気になったじゃない?』

『これは元氣じゃなくて怒りっ! ったくなんでこの世界にはコートニーがいないのよ……あの仏頂面めえ……!』

通信が繋がっているナターシャや箒に聞こえないよう音量を操作して呟く。かつての世界で共に肩を並べた男の顔を思い浮かべて顔を顰める。

『警備中なのに利香さん達はずいぶんと余裕ね』

緊張しているのか少しげっそりとしつつ、空域を【甲龍】のハイパーセンサーで探りつつ鈴が声を漏らす。

その横で束から提供され、【ラファール・リヴァイヴ・カスタムII】に装備された【ミ

ラージユコロイドデテクター」で感知しつつ、シャルルが返す。

『利香さんも元MS……パイロットだっけ？真と同じくエースパイロットだったんでしょ、場慣れしてるんだと思うよ』

『シャルルの言うとおりでな、あれだけふざけていながらも周囲への警戒は解いていない……元軍人と言うのも納得だ』

左目の眼帯を外して目を閉じ「シユヴァルツエア・レーゲン」を身に纏うラウラがシャルルに続く。

いつでも「ヴォーダン・オージエ」を発動できるようすでに眼帯を外しているのだ。完全な制御はできないため発動時間に制限はかかっているが。

またエネルギー兵器を持たない鈴達3人には日出工業より「ビームライフル」が貸与されている。

そのためPS装甲持ちの無人機であろうがダメージを容易に与えることが可能となった、

もちろん技術盗用についてはしっかりと対策済みである。

『……後30分』

【飛燕】のV Lユニットは起動せずに、各部のスラスタとP I Cで飛行を行っている  
簪が口を開く。

視線はマスドライバーに向けられており、手に握るバルムンクには静かに力が込められていた。

その様子を眺めつつ【霧纏の淑女】を身に纏った楯無が近寄り、プライベートチャネルを繋げる。

『やっぱり真君と一緒に宇宙に行きたかった？』

『ううん、私が行つてもたぶん……足を引つ張るから。それに信じてるから』

『……ホントにいい子ね、簪ちゃん。お姉ちゃんは鼻が高いわ!』

『お姉ちゃん、ちゃんと集中しようよ』

簪が呆れたような表情になると共に緩んでいた楯無の表情が引き締まる。

『ええ、分かっているわ、未来の義弟クンの為なんだから集中するわ……油断はしないようにしましろう』

『……………うん』

楯無の言葉に簪が頷く。

マストドライバーにシャトルが接続され、打ち上げ時刻まで残り10分——状況が動いた。

『センサーとミラコロデテクターに反応！』

鈴の叫び共に全員に緊張が走る。

上空より数十機の無人機が降下してきたのだ。

ミラーージュコロイドを展開していたらしく、少し姿がぶれて見える。

『おいでなすったか！』

【暮桜】を身にまとう千冬が自身に放たれた無人機からのビームを切り払いつつ、答え

る。

一瞬だけ雪片の刀身に光が溢れていたのを近くにいた一夏は見逃さなかった。

以前カナードが言っていた様に一瞬だけ零落白夜を使ってビームのエネルギーを無力化したのだ。

『行かせないぜ、後10分なんだ、あと少し……!』

『ちよっ、海の中から何かでかいのが来るわよっ!?!』

無人機のストライクと切り結んでいた一夏の声が鈴の叫びによってかき消された。

それと同時に宮島近くの海面に現れた反応を機体のハイパーセンサーが拾う。

黒い巨体。そう表現するしかなかった。

通常のISのサイズよりも二回り以上大きい機体が海中から現れたのだ。

通常のISの平均サイズ2m〜3m程度、大きい機体でも5m程度がISのサイズの常識だ。

しかし現れた機体のサイズは軽く10mを超えている。

大きさは約15m程度でISよりもむしろ「MS」に近い。

そしてその機体はゆっくりと変形していく。



円盤状の装甲が背部に移動し、5 m程のビーム砲塔を複数展開。胸部に当たる部分には搭乗者をまるで取り込む様なコックピットの様な部分が現れた。

空から出現した無人機を相手しつつ、異様なISの出現に面食らっていた一夏達の中で利香だけが現れたISの正体を理解していた。

『まさか……あれは「デストロイ」っ!?!』

『あれが……真が話してくれた……デストロイ……っ!?!』

以前、真の前世について聞かされていた簪が声を上げる。

【GFAS—X—デストロイ】

C・Eではブルーコスモスの私兵、第81独立機動群「ファントムペイン」が開発し、ベルリンを蹂躪した大型MS。

真にとっては守ると誓った相手を守れなかった傷、ラキーナにとっては直接手を下してしまった傷を想起させるトラウマに近いMAである。

『こいつでマスドライバーごとぶっ潰してやるよ、シン・アスカアッ!』

コックピットに取り込まれているように見える搭乗者。

【オータム】は複数のコードが接続されている非透明バイザーのヘルメットを装着しており、顔は見えない。

だがそれでも声からは狂気が迸っている。

その狂気の源は彼女が崇拜するラクスの気持ち裏切った真への憎悪。

憎悪を糧にビーム砲塔をマスドライバー施設に向ける。

通常のISのビーム兵器でも実弾兵器に比べると破格の威力を発揮する。

デストロイは機体に合わせて武装規格も大型化している。

出力も比例して高まっているのは想像に難くない。

ビーム砲塔とコックピット上部、MSで言えば頭部ユニットにあたる箇所を展開されたビーム砲口【スーパースキュラ】にビーム粒子が集まる。

無人機ストライクとイージスを合わせてビームブレードで両断した利香がそれに気づき声を上げる。

『やばっ、防いでっ！』

利香の叫びと共に、デストロイからビームの雨、いや嵐が放たれた。

デストロイの大型ビーム砲塔から発射されるビームは一発一発の威力が高出力のビームであるとともにそのすべてが一夏達を正確に補足していたのだ。

だが防ぎ切れないモノではない。

利香を筆頭にそれぞれの機体のシールドでビームを受け止め拡散、無効化している。ブルー・テイアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ、シュヴァルツァ・レーゲン、霧纏の淑女、飛燕、銀の福音には日出がインパルス用の対ビームシールドを貸与しており、それぞれが拡張領域に装備していたのだ。

拡張領域に余裕がない白式は「零落白夜」を発動させてビームを受け止め、暮桜も同じく零落白夜でビームを切り裂き、紅椿は装甲の一部をシールドに変形し受け止めていた。

『じゃらくせえ、ならこいつでどうだあつ！』

ビーム砲塔とは別にチャージしていた「スーパースキュラ」がマスドライバーに向けて発射される。

直前に、射線に割り込んだ機体があった。

『マストドライバーは……真はやらせねえええつ！』

その機体は雪片式型に白き光を纏った——【白式】だ。

『【零落白夜】 全開っ!!』

【零落白夜】の光が最大出力になると同時に【スーパースキュラ】が発射された。

『うおおおおおっ!!』

発射された既存のビーム兵器を大きく上回る高出力のビームが零落白夜で拡散されていく。

だが機体のサイズがそもそも違うのだ、それに伴い武装に回せるエネルギー量も白式とデストロイでは大きく異なる。

零落白夜を加減せず最大出力で起動させるという事は即ち、白式のシールドエネルギーを急速に消費していくこととなる。

最初はスーパースキュラを互角の出力で受け止めていたが、すぐに押されてしまう。

『くっ、一夏っ!』

見かねた千冬が同じく零落白夜で一夏を援護しようとするが、彼女に向かって無人機が5機、近接武装を構えて向かっていく。

オープンチャネルから千冬の舌打ちがはつきりと聞こえた。

『ぐっ、くうっ……!』

『一夏っ!』

想い人である一夏の危機に思わず箒は声を上げる。

箒の目からしても白式はデストロイのビームに力負けしている。

(一夏が……このままでは一夏が……私は何もできないのか……っ!?)

箒は以前よりも少しは状況が見れるようになっていた。

いくら第4世代の機体を操っていてもこの状況ではできることは何も無い。だが箒の心の叫びに呼応するかのように「紅椿」のコンソールが自動的に起動した。

【単一仕様能力】ワンオフ・アビリティ 《絢爛舞踏》 Starting

『っ!?!』

コンソールにそう表示されると共に紅椿から「情報」が頭に送られてきた。

その情報に従い、すぐさまスラスターを噴かしてビームを受け止めている白式に寄り添う。

『なっ、箒っ!?!』

『エネルギーなら任せろ! 【絢爛舞踏】発動っ!』

箒の叫びと共に、雪片式型から消えかかっていた【零落白夜】の光が最大出力並みに回復する。

【単一仕様能力】 <<絢爛舞踏>>

その能力は【零落白夜】とは真逆の【エネルギーの増幅】。デストロイのビームによって枯渇しかけていたエネルギーを増幅させ、零落白夜に注がせたのだ。

『っ!?! っこれならっ!!』

雪片二型を握る手に力を込める。

押されていたビームの奔流を零落白夜の光が切り裂いていく。

そして——断ち切る。

『なん……だとおおっ!?!』

デストロイのオーブンチャネルから明らかに戸惑ったオータムの声が漏れる。それと同時にだった。

轟音を響かせ、シャトルが打ち上げに入ったのだ。

これはシャトル内のカナードの指示により予定を繰り上げて打ち上げられる事となったのだ。

この状況で打ち上げを敢行するのはある意味博打であるが、これ以上ラクス・クラインを好きにさせることはできないと判断したのだ。

それに頼りになる【連中】がシャトルを護衛しているのだ。

『っ!?行かせるかよおっ!』

その巨体からは想像できないほどに早い反応でデストロイがマストライバーで加速を続けるシャトルに狙いを合わせようとビーム砲塔を向ける――が

『止まれえええっ!!』

【ヴオーダン・オージェ】を開いたラウラの叫びと共にビーム砲塔の動きが【強制的に停止】させられる。

それに合わせてシャルルの【ラファール・リヴァイヴ・カスタムII】とV.Lユニットを起動させた簪の【飛燕】が互いの【パイルバンカー】を起動させてデストロイに迫る。



『撃ちぬくっ!』

『全部持つてけえっ!』

【灰色の鱗殻】と【リボルビング・ステーク】のバンカーが炸薬によって得られた破壊的な威力を持つてビーム砲塔を撃ち砕く。

『ブルーティアーズ、一斉掃射っ!』

『そこよっ、落ちなさいっ!』

それに合わせて【甲龍】が持つビームライフルと【衝撃砲】、セシリアのブルーティアーズの一斉掃射も加わりデストロイを襲う。

『こっの、餓鬼が……しま……っ!?!』

巨体に似合わないAMBACでビームを回避、【衝撃砲】はPS装甲によって防ぐ。偏向射撃の一斉掃射はデストロイの腕部から溢れた光の【壁】で防ぐ。

だが簪達の攻撃に気を取られていたオータムがマスドライバーより「打ち上げられたシャトル」を見上げる。

すでにビームの射程距離外までシャトルは加速し上昇していた。ロケットエンジンから溢れる煙がマスドライバーを覆っていた。

『真達は宇宙に上がった……あんた達の親玉は絶対に何とかしてくれる、俺達はあんたを捕らえるだけだっ！』

【絢爛舞踏】によってエネルギーを回復した白式が雪片を構える。

『……はっ、上等だ。手前等纏めて潰した後にマスドライバー施設を占拠してラクス様の後を追えばいいんだよ、覚悟はいいだろうな、糞野郎？』

一夏の言葉に、顔は見えないがオータムは憤怒の感情を声に込めて答えた。

## PHASE 39 救世主

宮島のマスドライバーから射出されたシャトルはすでに地球の重力という名の鎖から解き放たれ、漆黒の宇宙空間を進んでいた。

進路は衛星軌道上に建設された宇宙ステーション「アメノミハシラ」であり、残り10分程度で到着予定だ。

「……皆様は大丈夫でしょうか」

加速Gの緩和の為にIS「Xアストレイ」を展開していたクロエが、なれない無重力に少しでも顔を響めつつ呟く。

身に着けているISスーツのブーツ部分には無重力空間で浮かぶことを防止するためのマグネットが仕込まれているため、フワフワと浮いているわけではないのだが。

「……皆なら大丈夫さ」

久しぶりの無重力の感覚にはすでに慣れた真がデステイニーを解除して答える。

射出時にハイパーセンサーで確認したが、相手はデストロイをモチーフにしたIS。

だが心配はいらないであろう。

自身にとってトラウマに近い機体だが、相手をしているのは頼れる仲間達であるからだ。

だが少し心配そうに束が真を見つめていた。

彼女の【記憶】——【虚憶】——でも言おうか——ではシンはあの機体絡みで精神をすり減らしていた。

彼女はそのことを知っているのだ。

「あれ、【デストロイ】だよね……あつくん、大丈夫？」

「……大丈夫です、あの機体には色々とありましたけど」

脳裏に一瞬だけ守れなかった少女。

【ステラ】の顔が浮かぶが頭を振って考えを切り替える。

「もう2度と花を吹き飛ばさせないために……今度こそステラみたいな子達を生み出さ

せないために……戦いますから」

ドツグタグを握り締めて真は呟く。

そして一行を乗せたシャトルは襲撃もなく、宇宙ステーション【アミノミハシラ】に到着したのだった。

宇宙ステーション アミノミハシラ レクリエーションルーム

かつてオーブ軍の宇宙での軍事拠点であったアミノミハシラは、些か規模が縮小されているとはいえ現在は日出工業の一大プロジェクトとして開発が進められている建造物だ。

この世界のアミノミハシラは技術者達をストレスなく数週間にわたり滞在させる事ができるように、レクリエーションルームや娯楽施設などを完備している。

シャトルから降りた真達はその一室に移動し、目の前のディスプレイに映されている【戦艦】の映像を眺めていた。

デイスプレイに映されているのはC・E・でモルゲンレーテが開発した宇宙戦艦である【イズモ級】の戦艦であり、船体塗装は黒基調に黄色のラインで彩られている。

戦艦の名前は【イズモ級1番艦 イズモ】——C・E・では【サハク家】が管理していた【イズモ級戦艦】のネームシップである。

オリジナルは全長290mであつたが、デイスプレイに映されているイズモはダウンサイジングされており、約150m程度の大きさであつた。

「……優菜さんの言つてた【サブライズ】ってこれの事なんだ」

かつてはイズモ級2番艦【クサナギ】に搭乗していたこともあつたラキーナが居心地の悪そうな顔で呟く。

優菜は未だにラキーナに対して全くの好意を示していない。

それだけ禍根が深いのだ、彼女も理解しているため甘んじてそれを受けているのだが。

妹のそんな様子を横目で見つつ、少し呆れたような顔をしてカナードが口を開く。

「イズモ級戦艦か……なるほど、これでL5ポイントに向かえということか」

「そういうことー」

レクリエーションルームの扉が開き、赤毛に白衣の女性が入室してくる。  
インパルスの開発者である「ジェーン・ヌル・ドウズ」だ。

「ジェーンさん、何でここに？」

「ん、私はインパルスの開発者兼この責任者の一人でもあるからねー。仕事でちよいとこつちに来てた時にあんな事件が起こったわけだよ。んで君達のサポート……というか「イズモ」のサポートを任せられてるのさー、ささ説明するよー」

その後、ジェーンの口からイズモについての説明が始まった。

ディスプレイに表示されている「イズモ」はC・Eで建造されたオリジナルとサイズこそ異なるがほぼ同様の運用が可能であり、アミノミハシラ計画の一部として、また世界初の宇宙用艦船としてISCコアを除いた既存技術の粋を結集して建造された戦艦であるということ。

また初期型の量子コンピュータを搭載していることにより、操舵手の負担軽減が図られていること。

量子ウイルスを警戒して、東がイズモに搭乗してサポートを行うこととなっている。なお武装については「自動バルカン砲塔システム イーゲルシュテルン」とIS用大型ビーム砲塔を改造、流用した「ゴットフリート」が装備されているとの事だ。

「……と、言うわけで東さん、イズモは貴女に預けますので真君達のサポートお任せします」

「……うん、任せて」

似たもの同士。

「インパルスガンダム」という既存のMSとは異なる発想が必要となるが兵器としての可能性を追求した「傑作機」を作り出した天才と、「IS」という宇宙開発と既存兵器を超越する可能性を両立した「マルチフォームスーツ」を作り上げた天才。

2人は頷きあい微笑みあう。

「それじゃ、イズモへの搭乗お願いねー」

ジェーンがイズモへの搭乗を促し、真達5人は彼女の後を追ひ、アメノミハシラの格



納庫へと向かう。

イズモ級1番艦 イズモブリッジ

格納庫からイズモに搭乗した真達は、イズモの発進をブリッジに備え付けられた待機用スペースで確認していた。

ブリッジの艦長席に該当する席に座りつつ、周りに展開された空間投影ディスプレイを凄まじい速度で束は眺め、時折手が残像を残しつつディスプレイに触れて値を変えていく。

「……艦内ネットワークシステム異常なし、ISコアネットワークとのリンク良好、量子コンピュータへの対ウィルス用セキュリティシステムインストール完了、各種武装出力問題なし、メインエンジン出力良好……よし、いけるね」

ディスプレイでの操作を終えた束が最後に表示されたディスプレイを軽く叩く。

イズモのエンジンが点火されると同時に、格納庫の扉が開き漆黒の宇宙が顔を覗かせる。

同時にアメノミハシラのコントロール室からジェーンのメッセージが届く。

そのメッセージは「貴艦の航海の無事を祈る」と記載されていた。

「イズモ発進、目標はL5ポイント！」

東が笑顔でイズモの発進を告げた。

アメノミハシラから出発して数時間後

イズモ パイロットルーム

すでにアメノミハシラから遠く離れたイズモはL5ポイントに向かって順調に進んでいる。

C・Eとは違いニュートロンジャマーによるレーダーへの索敵妨害はなく、クリアな視界で進めている。

束を除いた真達4人はパイロットルームで待機していた。

そんな中、ラキーナが口を開いた。

「真、兄さん、クロエちゃん、ちよつと話があるんだけど……いいかな？」

カナードと同じような黒を基調としたISスーツに身を包んだラキーナが真達3人に声をかける。

「どうかしたのですか、ラキーナ様？」

「どうした、ラキ？」

「一つ【お願い】があつて……」

「【お願い】？」

待機中であつたため、真はドリンクを口にしていた。

ラキーナは首につけているチョーカーである待機状態の【ストライクガンダム】に手を当てつつ告げる。

「……【アスラン】は私にやらせて欲しいんだ」

ラキーナの言葉に真は目を見開く。

【キラ・ヤマト】と【アスラン・ザラ】は親友同士。

そんな人物が親友を相手に戦うと言っているのだ。

「……できるのかよ？」

「……私がやらなきゃ駄目なの、真がラクスとの因縁を断ち切ろうとしているように、アスランは私が相手をしなきゃいけないんだ」

だが今の彼女は「ラキーナ・パルス」だ。

アスランは親友であり、親友が間違った道を歩いているのならば、力づくでも止めるのは自分の役割だとその目は語っていた。

【覚悟】を決めた目——かつてのキラ・ヤマトとはまるで違うその目だ。

「……勝てるのか？」

「……大丈夫、「I. W. S. P.」の他に東さんに頼んで【切り札】をインストールしてあるから」

「……なら俺やカナード、クロエと約束してくれ、【死なない】って事を」

真がバツが悪そうに視線をラキーナから外す。

すでに真の中ではラキーナは【仲間】であると認識しているのだ。かつての禍根もあるがやはりみすみす死なせる事などできやしない。真の言葉に併せてカナードも告げる。

「……できるのか、ラキ？」

「……うん、約束する、私は死なないよ」

「……そうか、分かった。ならば俺とクロエで援護しよう、いいか、クロエ？」

「はい、大丈夫です、カナード様、ラキーナ様」

「……助かる、頼りにしているぞ」

カナードの言葉に少しだけ顔を朱色に染めたクロエが頷く。

「……俺はラクス・クラインを止める」

「ああ、分かっている……援護は任せろ」

「頼むよ、カナード」

真とカナードが微笑みつつ互いの右手をコツンと合わせる。

それと同時にパイロットルームに艦内通信が響く。その声には明らかに焦燥の色が現れていた。

『皆、聞こえる？ 今からブリッジの映像をディスプレイで表示するから見てっ！』

東の声と共に空間投影ディスプレイが表示される——そこに映っていたのはL5宙域から少し地球よりのポイントの画像だ。

そこに映っているのは「メサイア戦役」・「ネオ・ザフト戦役」で使用された機動要塞「メサイアっ!」

【機動要塞メサイア】が宙域に存在しているのだ。

映されている画像から判断するに【ジェネシス】は装備されていないように見え、C.E.のオリジナルよりは例に倣ってダウンサイジングしているがkmレベルの代物だ。そしてさらに東の声が続く。

『メサイアは少しずつ地球に向かって移動してるのっ!』

東の言葉から真達の脳裏に【最悪の結末】が浮かんだ

それは――

「【落とす】というのか、メサイアをつ!」

最悪の結末――それは【コロニー落とす】だ。

C・E・世界では【ブレイク・ザ・ワールド事件】で地球の国家に致命的な打撃を与えた事が記憶に新しい。

カナードの叫びが室内に響く。

同時にカナードは走り出す。

同じく真達3人も駆け出し、カタパルトを目指す。

イズモ 格納庫

宙域にたどり着いたイズモのカタパルト内でそれぞれの【IS】を装着したパイロツ

ト達はディスプレイに映し出される「敵機」を確認しつつ、出撃準備を行っていた。

『敵は無人機が【35機】……【ジャステイス】に【ドム】や【バスター】、【ホワイトネ  
ス・エンプレス】の姿は見えないか……』

『数で負けているが問題ない。あの程度の無人機など【ドレッドノート】と【Xアストレ  
イ】で蹴散らすだけだ』

カナードが冷たい笑みを浮かべつつ、告げる。

イズモのリーダーが捉えた敵の総数は35機、単純に【数】で負けているが【質】は  
圧倒的にこちらが上だ。

戦いの原則として数で勝るほうが有利だが、カナード達にはそれは当てはまらないの  
だ。

『頼りにしてるよ、カナード』

『……ラクス・クラインは必ず討ち取れよ、真』

『ああ、分かってる』



真からの返答と同時にハッチが開かれる。  
出撃の時間だ。

『カナ君、絶対負けないでねっ!』

『……分かってる』

東の言葉に薄く笑みを浮かべつつ、カタパルトに接続されたドレッドノートのコンソールにコンディションOKの表示が現れる。

確認し、コントロールがドレッドノートに移行される。

『ドレッドノートH』、ガンダム、出るぞっ!』

カタパルトの加速を用いてドレッドノートが射出されていく。

次にカタパルトに接続されたのはクロエの「Xアストレイ」だ。

『くーちゃん、カナ君を支えてあげてね!』

『はい、東様……「Xアストレイ」、ガンダム、参りますっ!』

カタパルトの加速と特徴的な「X字」のスラスタから得られる高推力でクロエは宇宙を翔ける。

『ラキちゃん、気をつけてね……!』

『分かってます、後、このストライカーパック、ありがとうございます、東さん』

次にラキーナの「ストライクガンダム」がカタパルトに接続される。

今のストライクが装備している「ストライカーパック」は「八枚の青い翼型」の「ストライカーパック」だ。

かつてラクス・クラインより与えられた「自由の剣」

使うことを避けていた装備だが、今はその力をあえて使おう。

『そのストライカーパックは調整が全然できてなかったけど……信じてるよ、ラキちゃん』

『ありがとうございます、ラキーナ・パルス、「ストライクガンダム」……いえ「ストライクフリーダムガンダム」、行きますっ!』

【自由】の名前を背負った「ストライク」がカタパルトから射出され、宇宙に羽ばたく。自分だけの【自由】を得るため、友を止める為に。

そして最後にカタパルトに接続されたのは【黒と紅のISS】  
真の【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】だ。

『あつくん、全力でサポートするからねっ！』

『ありがとうございます』

機体のコンディションと武装のコンディションを確認——問題なし。

最後に自身の拡張領域に登録されている【愛する女性】から受け取った【剣】も問題ない事を確認する。

そしてコンソールにコンディションOKの表示が現れた。

『飛鳥真、【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】、行きますっ！』

カタパルトから射出されたデステイニーのV.Lユニットを広げ、宇宙の黒を【紅い光

の翼が切り裂いて進んで行く。

## PHASE40 ミーティア —Meteor—

イズモから出撃した真達4機と、メサイアから迎撃にでた無人機35機はすでに互いを交戦可能距離に捉えていた。

無人機であるストライクやイージス達は照準を真達に合わせて手に構えるビームライフルのトリガーを引く。

宇宙の闇をビームの光が切り裂き、彩っていく。

しかし、一部の機体のライフルからはビームが発射されることはなく構えていた腕部が爆発し、吹き飛ばされていた。

爆発によって吹き飛ばされた機体は、次の瞬間にはMSで言うコックピット部分をビームによって貫かれ、機体の余剰エネルギーが暴走しているのか爆発によって宇宙の塵と化していく。

爆発の中を縦横無尽に駆け回る「ドラグーン」がクロエの「Xアストレイ」の背部ユニットに戻り接続される。

『撃ち漏らしが……カナード様、申し訳ありません』

クロエは出撃後、すぐさまドラグーンを射出し、ビームの射撃を回避しつつ遠隔操作を行っていたのだ。

Xアストレイのドラグーンによって爆散した機体は5機。全体の七分の一であった。

『問題ない、むしろ今のXアストレイでそこまでやれば上出来だ』

無人機からのビームをAMBACだけで回避。

すぐさまビームサブマシンガンを展開し、弾幕を張りつつカナードがクロエに答える。

『それに……ラキもいる』

彼が答えた瞬間、無人機達の頭上方向から「ビーム」と「レールガン」が連続で放たれ次々に爆発に飲まれていった。

『……味方だと本当に頼もしいな』

ボソリと真が呟くと同時に、真達の機体にメツセージが届く。

イズモの束からのメツセージだ。

内容はメサイアから「エターナル」が発進したと記載されていた。

『出てきたか、援護頼む』

デステイニーでの戦域の突破を試みる。

V Lユニットから光の翼を広げ、領域を紅く染め上げる。

インパルスガンダムから進化した「デステイニーガンダム・ヴェステイジー」は武装や外見も大きく変わったが最も変化したのは「エネルギー効率」であった。

デステイニーシルエツトは装備しているだけでシールドエネルギーを消費、V L使用時の消費エネルギーも劣悪であった。しかし進化後のV Lは最適化、効率化されており通常時に消費するエネルギーはなくなり、V L最大稼働時に使用するエネルギーも、以前を100とするのならば現在は10程度と破格のエネルギー効率となっている。

『了解した』

『任せてください、真様』

デステイニーインパルスを凌駕するスピードで真は戦域を翔ける。

それを迎撃する為に無人機達も即座に武器を向けるがその全てがドラグーンとビームサブマシンガンに撃ち抜かれて沈黙していく。

エターナル ブリッジ

「ふふ、シン達が会いに来てくれるなんて……素敵ですわね」

白の装束を身に纏ったラクスが艦長席に座り、映し出されるモニターを眺めつつ呟く。

歌姫の騎士団の象徴でもある旗艦、「エターナル」をラクスはこの世界でも建造していた。

こちらは「アークエンジェル」とは異なり「イズモ」と同じくI S コアなどを使用せず、既存技術の粋を集めたモノとなっている。



エターナルの全長はオリジナルと比べてやはりダウンサイジングされており、1000m程度の大きさになっている。

また象徴でもあったモビルスーツ埋め込み式戦術強襲機「ミーティア」は取り除かれ、代わりにアークエンジェルと同規格のゴットフリートを装備していた。

「シン・アスカ、カナード・パルス……そしてラクス様の寵愛を受けながらも裏切った……キラ・ヤマトオっ……！」

モニターで無人機を撃墜していくカナード達の姿を眺めつつ、副官でもあるヒルダの顔に憎悪の感情が滲む。

その隣で金髪の美女。

スコールがヒルダの様子に少しだけため息をついて告げる。

「ヒルダ、落ちていて……所詮はラクス様のお気持ちを理解できない奴等よ。それにメサイアを地球に落下させれば私たちの勝利……ですよね、ラクス様？」

「はい」

まるで女神の様な笑顔でスコールの言葉を肯定する。

「シンが私のモノにならない世界なんてもう必要ありません。しかしジェネシスをちやんと建造しておくべきでした、そうすればスコールさんやヒルダさん、そして地球で頑張っていただいているオータムさんや亡国の方々の苦勞もなかったというに。あ、オータムさん達の回収部隊は向かわせていますのでご安心を、スコールさん」

彼女は束から技術を奪い取った後すぐさま宇宙に上がっていた。

そしてメサイア、宇宙での拠点を建造していたのだ。

メサイアはかつての世界でも使用した事のある拠点であり、スコール達亡国機業の協力もあり、建造は半年ほどで終了した。

しかしジェネシスについては、宇宙開発が遅れているこの世界では必要性を見出せず建造は行っていないかったのだ。

地球に住む人間たちにとつては不幸中の幸いとも言おうか——とにかく幸運であつたことには変わらない。

「……さて、せっかく来て頂いたのですもの。おもてなしをして差し上げないと……ア

スラン」

ラクスの背後に無表情で立っていたアスランが、彼女の声に反応しブリッジを出ていく。

「さて、私達も向かいましょう?」

艦長席から立ち上がりラクスは微笑む。

「ラクス様、「ホワイトネス・エンプレス」への「パッケージ」接続は完了しております」

「ありがとうございますわ、スコールさん」

「ありがたきお言葉です」

「貴方のお相手は「私」がして差し上げますわ、シン……私のモノにならないのなら残念ですが、あなたの翼を折って差し上げますわ」

紅潮した表情でラクスはブリッジを後にする——その後スコール達も続く。

イズモから出撃したラキーナはカナードとクロエ、そして真とは別行動を取っていた。

別行動でメサイアを目指し、現在は丁度無人機達が展開している座標の上部に当たるポイントに翔けていた。

(……アスラン)

優柔不断でいつも迷ってばかりであったが、幼い頃から孤立しがちだった自分を氣にかけてくれて、自分の無茶なアイディアに驚きつつも友情の証として「トリイ」を作って送ってくれた大切な【友達】

戦場で再会してからは互いに大いに道を誤った。

そして今の彼はラクスに自分の意識さえ奪われている。

ならば助けるのは自分しかない。

たとえそれでアスランの命を奪うことになってもだ。

それに不思議と確信があった、アスランは自分を狙ってくる。

以前の襲撃の際の反応と過去の経験からそれは間違いないと感じていたため、あえて別行動を取っているのだ。

そこまで思考した瞬間、自分の下方に当たる座標で爆発が確認できた。

ハイパーセンサーで確認すると「Xアストレイ」のドラグーンが数機の無人機を落としたことが確認できた。

しかし無人機の多くは健在である。

『……フリーダムストライカーを試してみよう』

ストライクガンダム

否、「フリーダムストライカー」を装備した今のストライクの名は「ストライクフリーダムガンダム」だ。

背にある8枚翼を広げ、翼は砲塔に変形し、肩部と腰部に接続される。

機体の状態が高機動モードである「ハイマツトモード」から砲撃戦モードの「フルバーストモード」に切り替わったのだ。

「フリーダムストライカー」

かつて自由の剣と呼ばれたMS「フリーダム」をモチーフにしたストライカーパックである。

このストライカーパック自体は最初期、束がストライクガンダムの製作を開始した当

初から並行して製作が行われていた。

だがラキーナは使用を忌避していたため、未完成のまま放置されていたのだ。

その理由はかつての行いを想起させてしまうからだ。

ラクスの言葉は全て正しいと認識し、自分では意識せずとも彼女の手駒として動いていた過去を思い出させるからだ。

だがその性能は束が作成した「I・W・S・P」すらも上回るモノであった。

そして先日の襲撃事件を経て使用を決意し、この数日間できるようやく完成したのであった。

球状の投影コンソールが表示されると同時に「マルチロックオンシステム」が起動する。

搭乗者であるラキーナの視線と連動し、敵機を次々と補足していく。

同時にコンソール状でも敵機がロックオンされていく——だが——

『っ、ロックオンにズレがっ……いくら束さんが作ったモノでもロクに調整できてなければ仕方ないかっ！』

ラキーナの言葉の通り、コンソールでロックオンされている敵機の座標と実座標に僅かにずれが生じていたのだ。

フリーダムストライカーはつい先日完成したばかりであり、調整と整備の時間が取れなかったため、この不具合も仕方がない。

だからと言って砲撃が行えないわけではないのだ。

『ならば調整して狙えばいいっ！ロックオン座標を下方コンマ3度修正、ハイパーセンサー感度調整、搭乗者の視界とリンク最適化OK、肩部バラエーナ、腰部クスイファイアス射角微調整……完了っ！』

調整用コンソールを凄まじい速度で操作しつつ、機体の調整を済ませていく。

今の彼女は普通<sup>ナチュ</sup>人間<sup>ラル</sup>であるため、この操作ができるのは純粹に彼女の「技術」だ。

『落ちてえっ！』

調整が完了したバラエーナとクスイファイアスから連続でビームと電磁加速した弾頭が発射されていく。

かつてMSのフリーダムに搭乗していた時とは異なり、急所、MSでいえばコックピット部分に直撃していく。

以前はMSの手足や武装、スラスター部分を破壊するのみにとどめていたが、容赦なく撃墜する。

もつとも相手は無人機であるのだから加減は元々必要ないのだが。

### 【不殺】

今のラキーナからしてみれば自分が行っていた行動がいかにかに薄っぺらいモノであつたかよく分かる。

しかも三隻同盟時代に、共に戦つた事のある「ジャン・キャリア」の様に徹底せず、かつて真に追い詰められた時は彼を殺そうとした事もあつた。

そして見ないようにしていた面にも気づいた。

——宇宙で自分が無力化したMSのパイロットは満足にAMBACも撤退行動もとれずにエア切れで窒息するしかないという事に。

——自分が無力化したMSをスコア稼ぎの為に利用している仲間の存在に。

フリーダムストライカーの性能から自分の罪を改めて確認したラキーナはフルバーストモードから高機動モードの「ハイマツトモード」に切り替える。



肩部と腰部に接続されていた武装は再び変形、背部に戻り翼状のスラスタールとなった。

『後は兄さんとクロエちゃんに……っ!?』

ハイパーセンサーが反応を捉えた。

同時に頭上方向からビームが連続で発射された。

『アスランっ!』

ビーム発射直前に、対ビームシールドを展開して防御態勢を取っていたラキーナは、ビームを発射した相手の名を叫びつつ、自身もビームライフルを展開し反撃に移る。

『キ……ラ……っ!』

彼女の予想通りアスラン・ザラが駆る「インフィニットジャスティス」だ。

先日の襲撃で真のデステイニーに敗北したインフィニットジャスティスの損傷箇所

の修復は終わっており、アスラン自身の傷も完治しているようだ。

ジャステイスがビームライフルを構え、トリガーを引く。

射線を読みつつ、シールドで防ぎ拡散させる。

ジャステイスが「シャイニングエッジ ビームブーメラン」を展開、デステイニーのフラッシュエッジよりもビーム刃が長大なブーメランを投擲すると同時にスラストターレットを噴かせて、距離を詰めてくる。

ビームライフルはすでに格納しており、両手には「スーパーラケルタバームサーベル」が握られている。

『っー！』

飛来してくるビームブーメランを即座にビームライフルで撃ち落とし、同じように「ラケルタバームサーベル」を展開。

ジャステイスの右袈裟切りをシールドで受け止め、左のサーベルは自身のサーベルで受け止める。

ビーム粒子の干渉によって宇宙の闇に花火の様なプラズマが飛び散った。

『フリー……ダム……っ!?』

『そうだよ、君を止める為に私はこの力を使うっ!』

ラキーナのISの姿がアスランの記憶を引き出したのか、鏝迫り合いの中アスランから声が漏れる。

それに叫ぶように答えてスラストターを噴かす。

現在のストライクフリーダムガンダムはハイマツトモード、高機動様形態だ。流石のジャステイスも推力では適わない。

『っ!?!』

『はあっ!』

推力任せのシールドバツシユ。体勢を崩したジャステイスの右手装甲をビームサーベルが切り裂く。

同時にシユペールラケルタビームサーベルの発振部分を切り裂く事で使用不能に追い込む。

『ぐっ……ウオオッ!』

だがアスランもやられているだけではなかった。

脚部のグリフォンビームブレイドを起動して、ビームキックを繰り出してきたのだ。

シールドでビームキックを防ぐが出力ではジャステイスのほうが上、しかもラキーナの身体はまだ成熟してはおらず、フィジカルの面でアスランに劣っている。

つまりはパワー負けだ。

『くうっ!』

シールドがビームブレイドに貫かれ、そのまま切り裂かれる。

シールドが貫かれた瞬間、ラキーナは「瞬時加速」によって距離を取っていた。アスランも崩れた体勢をA M B A Cで立て直し、サーベルを構えている。

(……やっぱりアスランは強い、接近戦は身体の間もあるけど不利……)

ラケルタビームサーベルを一旦格納、ビームライフルと左肩部のバラエーナを展開して戦法を近距離戦から中距離戦に切り替える。

元々、フリーダムストライカーが得意とする距離は中、遠距離の射撃戦だ。

コンソール画面でジャステイスをロックオン。

アスランの虚ろな瞳が嫌でも目に入る。

『……アスラン』

かつて戦争に巻き込まれた時と同じ気持ちだ

——長く続く戦いの中で磨耗した少女は痛みの中目を覚ました。

『待ってて、絶対に……助けるからっ！』

武装を展開していない残りの4つの翼を広げ、ラキーナが叫ぶ

同時に、彼女の頭の中で【紫の種】が弾け飛んだ。

——戦乱の歌姫に意識を消され、悪夢を見続けている親友を助けるため、少女は翼を広げる。

## PHASE 4 1 運命の子の導き

無人機をカナードとクロエに任せた真のデステイニーがエターナルを有効射程に捉えた。

しかし、エターナルから3つの熱源反応の発進をハイパーセンサーが拾う。

発進した機体をハイパーセンサーで確認——1つは見覚えがある黒のIS。

「ヒルダ・ハーケン」の「ドム・トルーパー」であったが残りの2つは初見のモノであった。

1つはまるで【撒菱】の様に三角錐がそれぞれ異なる方向に3つ接続されているような機体。

通常のISと比べると2回りほど上回る巨体をそれぞれの錐に備え付けられたスタター、アポジモーターで制御しており、三角錐の接続部分となる中心点には「スコール・ミューゼル」の搭乗している「IS」が埋め込まれるように接続されている。

『あれは……まさか「ペルグランデ」!?!』

【TSX—MA717/ZD ペルグランデ】

ラテン語で「巨大」の意を示す機体。

真はこの機体を直接見たことはなかった。

だが駆け出しの頃に世話になっていた傭兵集団【サーペントテール】の【叢雲効】から話だけは聞いていたのだ。

余談だが、元となったMAのペルグランデは3人の脳を直接つなぐ事で超空間認識能力を得るというC・E・世界でも飛びぬけて非人道的な機体である。

そして最後1つは【ラクス・クライン】の【ホワイトネス・エンプレス】  
紫の大型Vユニットを煌めかせつつこちらに向かつてきている。

しかし以前の【ホワイトネス・エンプレス】とは決定的に【異なる点】が存在していた。

それは、Vユニットの可動を妨げないように背部と脚部に接続された【大型のマニピュレータ】

そのマニピュレータはまるで【副翼】や【女性の手】の様にも見える。

マニピュレータの形状に【天使】を思い浮かべたが、すぐさまスイッチを切り替えた。

『……デカければ狙いやすいっ！』

ビームライフルとテレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔を展開。

即座にロックオン、高出力のビームが3機に向かう。

この攻撃自体は大きな効果を狙ったモノではない。

例え「スクリーミングニンバス」等で防がれてしまっても、シールドエネルギーを消耗させることができれば御の字と考えていた。

しかし、真の予想は大きく裏切られる事となる。

ビームの発射寸前に、「ホワイトネス・エンプレス」が射線に割り込んだのだ。

ラクスは微笑みを浮かべていた。

そして発射された3条のビームはまるで屈折させられたかのように「歪曲」し、宇宙の闇に消えていく。

『チツ、【ゲシユマイディツヒ・パンツァー】かよっ!?!』

逸れていった攻撃と何が起こったか理解して舌打ちしつつ、ラクス以外の2機から降り注ぐ反撃のビームをスラスターを噴かせて回避していく。



『ゲシユマイティツヒ・パンツァー』

ミラーージュコロイドの原理を応用し、磁場によってビーム粒子を歪曲させることで、自機への攻撃を防ぐ装甲。

実体弾には効果がないがビームに対してはまさに「無敵」とも言える装甲だ。

それをラクスの機体は装備しているのだ。

おそらく以前にはなかった背部・脚部ユニットに装備されているのだろう。

これで分かったのはビームによる射撃では有効なダメージを与えることは不可能であることだ。

シールドエネルギーを幾分かは削れるかもしれないが射撃に使うエネルギーとつり合っているとは言えない。

『ふふ、シン、私はこちらですわよ?』

ホワイトネス・エンプレスのVLユニットから紫の光の翼が溢れ、並みのISを超え  
るスピードでステイニーから離れていく。

まるで、誘っているかのように。

『逃がすかつー!』

追跡の為に、デステイニーのVLユニットから紅い光の翼を溢れさせる。

だが、それを決して認めない者が2人ここにはいる。

VL最大稼働に移ろうとしていたデステイニーの上方に、「大型ドラグーン」が砲口をこちらに向けて存在していた。

ペルグランデから射出されたドラグーンである。

そしてデステイニーのコンソールに踊るロックオン警告。

ビームランチャーを展開して、ドム・トルーパーがこちらに狙いをつけていたのだ。

『行かせると思ってるのかい、シン・アスカつー!』

『ラクス様の元には行かさないわよ、ここで落ちなさいっ!』

上方からまるで網の目の様にビームが降り注ぐと同時に、ビームランチャーから吐き出された悪意の塊がデステイニーに迫る。

しかしデステイニーはVLユニットを起動させたままビームの雨をすり抜け、ドムからのビームもAMABCを駆使して回避していく

『ちっ、お前らに構ってる暇なんてないんだっ!』

ドラグーン対策の基本は絶えず動き回ることと、常に位置と砲口を確認することである。

この点で言えばMSよりISのほうが対処がしやすいと思うのが真の感想だ。

それにドラグーンと同種であるBT兵器を使うセシリアとの模擬戦を繰り返した事もプラスに働いている。

しかしあまりにも攻撃の密度が濃い。

多少の被弾を覚悟して、まずはドムを落とす事を決めた瞬間であった。

ハイパーセンサーが自機の後方に高エネルギー反応を検知——ほぼ同時に高出力ドムがドムを襲った。

ヒルダの機体もエネルギーを検知していたらしく、咄嗟にスクリーミングニンバスを展開しぎりぎりだが防御が間に合っていたようだ。

『ぐうっ!?!』

しかし、咄嗟の行動で合ったためスクリーミングニンバスの展開率は通常よりも低かった。

そのため姿勢制御が追いつかずに吹き飛ばされる。

『ヒルダッ!』

叫びを上げるペルグランデのスコールを狙うかのように360°に展開されたドラグーンからビームが放たれた。

『ちいつ!?!』

ドラグーンに寸でのところで気づいたスコールは、ペルグランデを姿勢制御バーニアで精密かつ迅速に動かす。

発射された4条のビームのうち被弾したのは2条。

1つの三角錐部分のスラストアー及びドラグーンを撃ち抜かれ沈黙すると共に、シールドエネルギーが減少する。

『……無人機は全滅したみたいね』

一旦後退しつつ、スコールが呟く。

ペルグランデを狙っていたドラグーン4基は親機であるIS【Xアストレイ】の元に  
戻っていく。

高出力ビームを放ったのはドレッドノート、ドラグーンで援護してくれたのはXアス  
トレイ。

カナードとクロエだったのだ。

『……なるほど、ペルグランデか。こいつらは俺達に任せてラクス・クラインを追え、真』  
『頼むっ!』

ドレッドノートHから繋がった通信に頷いて真はラクスを追うためVLを展開。  
崩れた戦線を突破し、ラクスを追っていく。

『糞がっ、行かせ……っ!』

ようやく姿勢制御を整えたヒルダであったが、目の前に迫る【光の槍】に再度スクリーミングニンバスを展開、直撃を何とか防ぐ。

『この失敗作風情があつ!』

『……【失敗作】か。なるほど……だからどうした?』

スクリーミングニンバスにALランスを押し付けたまま、ヒルダの射殺するような視線に冷たい表情で返す。

スクリーミングニンバスとALが干渉しあうことで火花が散っている。

『……キラ・ヤマトも気に食わなかったが……貴様はそれ以上だな、失敗作つ!』

『吼えるな、耳に障る。俺に何度も同じ手が通用すると思うなよ、ヒルダ・ハーケンつ!』

カナードの返しと共に、左腕から展開しているALランスの発生率が変化。

より一層鋭く小型に変形し、少しずつだがスクリーミングニンバスを貫いていく。

そしてそのままALランスはスクリーミングニンバスを貫き、ドムの胸部装甲を破壊。

ヒルダは即座に後退していたため、大破までには持つていけなかったがエネルギーを大きく失わせることには成功した。

『なっ、なんでスクリーミングニンバスがっ!？』

『……その武装の大本はALだ。発生率を調整してのスクリーミングニンバスへの干渉……【失敗作】の俺にはできないと思っただか?』

『ちよっ、調子に乗るなああっ!!』

カナードの挑発に激昂したヒルダのドムはビームサーベルを構える。

同時に再度スクリーミングニンバスを展開して切りかかってくる。

ドレッドノートHのイータユニットが変形し、ALハンディに干渉しない近接格闘形態である【ソードモード】に切り替わる。

『貴様毎その紛い物を……破壊してやるっ!』

イータユニットから発生したビームサーベルでドムのサーベルと鏢迫り合いに持ち込み、互いの光波防御装置が再び干渉し合う。

『ちいつ……!』

『……ドラグーン同士の戦いがこれほど厄介だとは……っ!』

ドレッドノートHとドム・トルーパーが戦闘を開始した頃、ペルグランデとXアストレイは互いのドラグーンと射撃武装による射撃戦を繰り返していた。

ペルグランデのドラグーンが機体下方と背後に移動して、Xアストレイを狙う。

機体にドラグーンを戻そうとしていたクロエは咄嗟にスラスターを噴き、回避を選択する。

本体であるIS自体は回避に成功するが、機体に戻そうとしていたドラグーン4基の内3基は回収できたが1基が破壊されてしまった。

『くう……っ!?!』

ペルグランデの大型ドラグーンは先ほどの奇襲で1つ喪失しているが、残り2つは健



在。

その稼働時間と出力はXアストレイよりも長く高い。

Xアストレイに搭載されているドラグーンは調整が進んだとはいえ試作型であるため、どうしても稼働時間に限界がある。

『ふふつ、相手が貴女で助かったわ、【遺伝子強化試験体】の【試作型】さん？』  
『っ!?!』

スコールの突然の言葉に機体の機動が明確に乱れる。

ペルグランデのドラグーンから射出されたビームをシールドで何とか受け止める。

『何故……そのことをっ!?!』

『何故って……【遺伝子強化試験体】計画はラクス様が提出した草案を元にした計画だからよ……私達にもいるのよ、貴女のお仲間は』

動揺したクロエを尻目に、ドラグーンを回収したペルグランデは機体に増設されたビーム砲からビームを放つ。

『っ！』

再びシールドでビームを防ぐ。

だが限界が来たシールドはビームを防ぐが破損してしまっていた。

『貴女のその瞳……どうやら試作型の中でも【失敗作】みたいね……確か、破棄されたと聞いていたけど、まさか篠ノ之束に拾われていたなんてね』

ISに搭乗していたクロエの双眸は、黒く染まり、瞳は金の光を放っている。

ラウラと同じヴオーダン・オージエ。

彼女本来の瞳の色は朱色である。

しかし、感情が高ぶるなど不意にヴオーダン・オージエの状態に変化することがある。これは彼女の生まれに由来する。

スコールの言葉にかつての記憶が蘇る。

——こいつは、失敗作だな。

——破棄しなければ。

——失敗だ。

『…………私を…………【失敗作】と呼ぶなああ!!』

【黒に金の瞳】を開き、怒りの表情でXアストレイはビームサーベルを展開。同時に残り3基のドラグーンを展開して切りかかる。

『ふふ、単調な攻撃…………!』

ドラグーン再度射出したペルグランデであったが、ビームを受けつつもXアストレイが迫る。

『はあああつ!』

ペルグランデのドラグーンによって機体各部の装甲が破壊され、シールドエネルギーも減少する。

しかしXアストレイは止まらない。

だがその特攻もペルグランデ接続部に取り込まれるように接続されているIS【ゴルデン・ドーン】の【腕】に掴まれ受け止められてしまった。

『っ!?!』

『終わりね、貴女』

『きゃあっ!?!』

【ゴルデン・ドーン】の両肩に備わっている【炎の鞭】プロミネンスがXアストレイを貫く。

胸部装甲が破壊され、大きくエネルギーが減少、そしてその衝撃に吹き飛ばされる。

『……………さて、ヒルダの援護に……………!』

制御を接続部に接続した【ゴルデン・ドーン】からペルグランデに切り替えたスコールが呟いた。

(……………目を……………覚まして)

吹き飛ばされたクロエは衝撃によって意識を失っていた。  
しかし、自身に呼びかける声に目を覚ました。

(……誰……ですか……?)

目を開ける——遺伝子強化試験体である自身の黒に金の瞳が捉えたのは、優しい表情を浮かべた【金髪の少年】の姿であった。

『貴方は……?』

(僕はプレア、【プレア・レヴェリー】……カナードから聞いてないかな?)

『プレア様……カナード様をお救いになった盟友……っ!』

(はは、盟友だなんて大げさだよ)

少し困ったかのようにプレアと名乗る少年はクロエに返答する。

プレアの言うとおり、クロエはカナードから【彼】の事を聞いていたのだ。

【プレア・レヴェリー】

C・E・でカナードと戦いその命と心を救った人物であり、カナードにとっては唯一無二の盟友である。

ライブラリアンと言う存在として再生されたこともあつたと言うが、おそらくは目の前の彼はオリジナルのプレアであるとクロエは直感で理解していた。

『……プレア様、何故貴方は私を……？』

（君はこんな所で死んではいけない人間だ……それに君は失敗作なんかじゃない、それを伝えるためにね）

『……ですが私は……こんな普通じゃない目をしているんですよ？それこそ失敗作が私に相応しい言葉です……』

（確かに、君の身体は普通とは違うかもしれない。けど君は君だ。それに人は……温かい、想いの力で繋がってるものなんだ……君はカナードを想っている、その想いは決して偽物なんかじゃない）

プレアの優しく強い言葉がクロエの心に染み込んで来る。

その言葉は自身を心配し想ってくれている彼の温かさに満ちていた。

『……ありがとうございます、プレア様』

(……どういたしまして……それとクロエさん、カナードをよろしくね)

優しく微笑む彼にクロエは力強く頷く。

プレアがクロエの表情が変わったことを確認して、破損しているXアストレイの装甲部分に手を触れる。

(Xアストレイ……僕の声が届いているか分からないけど……どうか、彼女にもう一度【勇気】を貸してあげてくれ)

プレアの手が離れると同時にXアストレイが光に包まれていく。

腰部に新たな武装が発現している。

発現した武装はMS【Xアストレイ】の腰部に存在していた【XMI プリステイス  
ビームリーマー】に酷似していた。

それを確認したプレアの姿が薄くなっていく。

『……プレア様』

(そろそろ限界かな……あきらめないでね)

『……はいっ!』

プレアの姿が消える——同時にAMBACとスラスター、バーニアを調整して姿勢制御を行う。

『……あら、まだやる気かしら?』

ヒルダの援護に向かおうとしていたスコールが、機体のハイパーセンサーで姿勢制御を行い復活したXアストレイを確認し呟く。

『……私は、私……ですよね……プレア様、カナード様』

ドラグーン3基と新たに発現した『プリステイス』を射出、ペルグランデに向かわせつつクロエは叫ぶ。

『私は「クロエ・クロニクル」として貴女を止めますっ!』



彼女は自身の瞳を力強く開き叫んだ。

## PHASE 2 白式・雪羅

「ドム・トルーパー」と「ペルグランデ」をカナードとクロエに任せたデステイニーは、ラクスを追跡していた。

両者ともVLを搭載している機体の為、わずかな時間で戦闘宙域から大きく離れメサイアに接近していた。

そして突如としてラクスのISのVLから溢れていた光の翼が消失し、彼女は機動を停止する。

ビームライフルを構えたまま真も停止すると、ラクスは反転して真にオープンチャネルで通信をつなげてきた。

一瞬、以前の様に量子ウイルスによるクラックも考えられたが、量子ウイルスについては束によるセキュリティの強化が施されているため気にする必要はない。

『ようやく……ようやく、2人だけになりましたわね、シン』

ラクスは頬を紅潮させつつ、シンに微笑む。

だが真は彼女の言葉と表情を無視して、躊躇なくライフルのトリガーを引いた。発射されたビームはやはり「ゲシュマイデイツヒ・パンツァー」によつて歪曲し、無効化されてしまった。

『あら、いきなり積極的ですね、シン』

『……アンタは何でこんな事を……メサイアを地球に落とすだなんて事を、そんな平気な顔で実行できるんだっ!』

C・E・でのコロニー落下事件、通称「ブレイク・ザ・ワールド」

戦争と悲劇の象徴であり恒久的な安定軌道をとっていたはずのコロニー「ユニウスセブン」が過激派テロリストの手によつて地球に落下してしまった事件。

当時のデュランダル政権下のザフトも阻止作戦を取ったが失敗、地球の都市部に甚大な被害を出す結果となった。

この事件を発端として「メサイア戦役」が勃発、世界は再度戦乱に包まれていったのだ。

当然、ラクスもこの事件については知っているはず。

だというのにそれを平気な顔で実行できる彼女を真は理解できないのだ。

『貴方を私から奪った【あの小娘】のいる世界なんてもう必要ないからですわ』

浮かべていた微笑を消し、まるで氷の様に冷たい嘲笑を浮かべる。

『ふざけるなっ！そんなことの為に……メサイアほどの質量の物体が落ちたら甚大な被害だけじゃないっ、地球が寒くなつて人が住めなくなるってこと、アンタにはわかってるはずだろうにっ！』

『ええ、存じていますわ』

まるで聖母の様に微笑み、ラクスは真に返答する。

その表情に真は絶句してしまった。

真は【花】を、【命】を散らさないために戦っている。

だが彼女は【命】を何とも思っていない事を理解してしまったのだ。

その様子を確認したラクスがふと思いついたかの様に告げる。

『しかし……心残りなのは【あの小娘】をこの手で直接消すことができなかつたですわね』

……まあ、オータムさんとデストロイならば問題ないでしょうね』

【あの小娘】——ラクスの言葉が指しているのは【簪】の事であろう。

あえて簪を始末しなかったと言葉に出すことで、真の動揺を狙っているのだ。

しかしその言葉に真は欠片も動揺する様子はなく、大型ビーム実体剣【アロンダイト】を展開する。

【ゲシュマイディッヒ・パンツァー】はあくまでビームを【歪曲】させることで無効化しているだけであり、ビームサーベル等の近接格闘武装ならば影響はほぼないといっている。

『……ラクス・クライン、アンタは【勘違い】をしてる』

ラクスの言葉を鼻で笑い、アロンダイトを構える。

起動したアロンダイトの刀身にビームが奔り、デステイニーの腕部装甲の黒を紅く照らす。

『【勘違い】……この私ですか？』

少し驚いたかのようにラクスが首を傾げた。

V Lユニットを広げ、刀身ビームと同じ紅い翼を広げる。

『簪や一夏達……俺の大切な仲間達は、デストロイなんかには負けやしないってことだっ  
！』

V L最大稼動状態移行、それによって得られる莫大な推力でラクスに斬りかかる。

広がった紅い光の翼をラクスは恍惚とした表情で眺めていた。

『……シン、やはり貴方は私に相応しい殿方……っ！』

ラクスのIS【ホワイトネス・エンプレス】に接続されている背部・腰部のマニピュ  
レータがまるで【人間の腕】の様に広がる。

『貴方の全力を受け止めてから、私の【ホワイトネス・エンプレス・エンブラス】の力で  
貴方を抱きしめて差し上げますわっ！』

アロンダイトの刃が迫る中、彼女の意識の中で「水色の種子」が弾けた。

時間はシャトル打ち上げ直後まで遡る

『篠ノ之、すまない、助かった』

紅椿によって消費したエネルギーを回復した暮桜、千冬が箒から離れる。

暮桜は表面装甲が少々破損、紅椿も同様に装甲にダメージを受けているが、戦闘には支障はない。

『エネルギーの方は大丈夫ですか？』

『ああ、問題ない、しかしあの「デストロイ」とか言うIS……全身がビーム兵器だと思えるほどの重武装ISだな』

『ええ、加えて【腕】を分離して飛ばすなんて非常識な機能がある。厄介ですね』

エネルギーの補給を受けている千冬と箒は最前線から少々離れた空域で滞空している。

シャトルを無事に打ち上げることになったが、数で圧倒しているというのにデストロイに有効打を与えられずにいた。

その理由は単純、デストロイの性能の高さだ。

現在デストロイの相手をしているのは箒を含めて、一夏、千冬、セシリア、鈴、ラウラ、シャルル、楯無、簪の9人である。

利香とナターシャは、アマノイワトに残された日出社員の救出に向かっている。

アマノイワトの構造を知り尽くしている利香と、その利香をよく知るナターシャならば別働隊がいても対処できるとの判断だ。

『鈴さん、後ろですわっ!』

『分かってる………つてのおっ!』

甲龍が貸与されている対ビームシールドで自機の背後に発射されたビームを辛うじて防ぐ。

甲龍にビームを放ったのはデストロイの「両腕」、  
「シュトゥルムファウスト」と呼ば



れる装備だ。

【シユトルムファウスト】

本体から分離し、ドラグーン端末となつて操作が可能なアームユニット兼攻守システムである。

ドラグーン端末としては大型の部類にはいるがその分推力も高く、ビームの出力も高い。

オリジナルのデストロイと同じく相応の空間認識能力、つまりは【適正】が必要となるが、ISのデストロイは機体に【ISコア】を複数搭載し演算ユニットとして利用しており、搭乗者の敷居はオリジナルよりも相応に低くなつてゐる。

『そこだ、喰らえっ！』

『ティアーズフルバーストっ！』

『ロックオンはできてるっ！』

鈴が防御に成功したことで、アームユニットは無防備、ラウラ、セシリア、シャルルからの反撃が降り注ぐ。

しかし、デストロイ本体を操るオータムは笑みを浮かべていた。

『甘いんだよ、餓鬼どもおっ！』

無防備であったアームユニットから「ビームシールド」が展開され、反撃は全てビームシールドに弾かれてしまった。

「ソリドウス・フルゴールビームシールド」がアームユニットに搭載されているのだ。また本体にも同様のモノが搭載されており、水蒸気爆発や「偏向射撃」による奇襲を全て無効化されている。

余談だが、オリジナルのデストロイに装備されていたのは「陽電子リフレクター シュナイドシュツツ」と呼ばれる装備である。

シュナイドシュツツにはビームを一定の長さで発振させ続ける兵装には無力な一面が見受けられたため、ラクスの手によってより信頼できる「ソリドウス・フルゴール」に変更されたのだ。

『ビームシールドが腕にも付いているのね、クリア・パッション【清き激情】を完全に防ぎ切る防御能力……大ききさといいい本当に【規格外】のISだわ』

武装である大型ランスが一部破損している楯無が呟く。

破損により、近接戦闘及び内蔵ガトリングガンによる射撃にも支障が出ているようだ。

『ビームシールドなら織斑君や織斑先生の「零落白夜」、バルムンクでも切り払える……けど、近寄らせてくれない……っ！』

V Lユニットを広げた飛燕、簪が楯無の言葉に返す。

先ほどのセシリア達3人の攻撃を防いだデストロイ。

その全身に装備されているビーム砲塔から反撃のビームが嵐の様に発射される。

光の翼から得られる推力とA M B A Cでビームを回避した簪に通信が繋がる。

その相手は一夏だ。

一夏は零落白夜を起動し、ビームを防いでいた。

いくら以前と比べて技量が上がっているとはいえ、簪や他の代表候補生、千冬と比べるとうしても劣る。

零落白夜を盾として使用するのも致し方ないのだ。

『零落白夜の最大出力ならこのビームの嵐でも耐えられるはずだ、そうだろ、千冬姉っ!？』  
ビームを回避しつつ、箒と共に前線に復帰した千冬に叫ぶ。

『……おそらく最大出力で突っ込めば近づけるだろう、しかしあの弾幕だ、エネルギーが確実に足りなくなるし、切り払うにしても限度がある……無理だ』

千冬から返ってきた言葉は不可能と言う言葉。それに小さく無念の声が一夏の口から漏れる。

このまま膠着した状況になるのは避けたい。  
皆が何か策はないかと思いを奔らせた時だった。

『……なら【隙】を作ればいいんですね?』

簪が千冬に力強い視線を送りつつ尋ねる。

『更識……できるのか?』

『簪さんっ!?!』

『簪ちゃん、まさか貴女、【匣】にっ!?!』

楯無の言葉に簪が頷く。

そう、簪が提案するのは、自身を【匣】にするという策だ。

『私の【飛燕】にはV Lユニットがあります、機動力での攪乱ができるはずですが……それに【とっておき】がありますから私だけでもいけるかもしれません』

『……簪ちゃん』

『大丈夫。信じて、お姉ちゃん』

簪が楯無に微笑みつつ告げる。

『……分かったわ、何かあったらすぐに援護に入るからね』

『うん』

楯無の言葉を確認し、飛燕のV Lユニットを最大稼動状態に移行。

光り輝く蒼い翼が広がリデストロイに向かう。

千冬達との通信はプライベートチャンネルとしてセシリア達も共有している。

セシリア達3機がデストロイから離れ、自然とデストロイは向かつてくる飛燕に砲口を向ける形となる。

ビームライフルを展開してトリガーを引く。

放たれたビームは展開された、デストロイ本体の「ソリドウス・フルゴール」によって阻まれる。

『っ、その偽りの翼っ！お前がいなければ、ラクス様の心は傷つかなかった！ラクス様がお心の内で泣くこともなかったああっ！』

簪の姿を確認したオータムの表情が怒り狂った様な声を上げる。

同時に全身のビーム砲塔が飛燕に向けられる。

砲口の射線を読み取り、V Lから溢れる蒼の粒子を撒き散らしながら回避し、ビームを連射。

しかし、先ほどと同じようにビームシールドに弾かれる。

だがこれは簪の狙い通りだ。ビームライフルの射撃はあくまで牽制だ。

(彼と……真と同じようにっ！)

彼女のIS【飛燕】

その名は【空を飛ぶ鳥】に追いつき共に飛ぶための名だ。

機体も彼と同じようにV Lユニットを搭載している。

ならば彼の【とっておき】が自分にも使えるはずだ。

ビームライフルを格納、V Lユニットの稼動域に干渉しないように肩と腰部に【大型ミサイルコンテナ】が展開される。

【マルチロックオンシステム搭載40連ミサイル】

コンソール上でのロックオンが完了し、コンテナからミサイルが次々に射出されていく。

『ちいつ、ミサイルかつ！』

オータムは舌打ちしつつもソリドウス・フルゴールを展開し続ける。

デストロイは【PS装甲】を搭載しているが40連のミサイルで消費されるエネルギー

ギーとビームシールドを展開し続けることで消費されるエネルギーならば後者の方が少ない。

よってシールドを張り続ける事を選択したのだ。

次々とミサイルがビームシールドに着弾——爆発がデストロイを包む。

『次はこれえっ！』

肩と腰部に展開した【ミサイルコンテナ】を破棄。

同時に両マニピュレーターに【ビームブーメラン フラッシュエッジ】を展開し、投擲する。

『最後は……バルムンクツ!!』

光り輝く戦輪となったフラッシュエッジと共に、機体全長と同等の大型実体剣【バルムンク】を展開、光の翼を広げて翔ける。

コンソール上でバルムンクの刀身ビームを操作し、刃全てをビームが包み込むように調整する。



『これでええええつ!!』

バルムンクを【突き】の形で構えたまま突撃する。

これが簪のとつておき。

言うならば飛燕の武装を全て使用した彼女なりの【武装フルウェポンコンビネーション一斉攻撃】だ。

爆炎と煙がようやく晴れたデストロイの回避は間に合わない。

またアームユニットのソリドウス・フルゴールは角度の問題で展開できない。

元々バルムンクには対ビームコーデイングが施されているためソリドウス・フルゴールの貫通は可能であるが。

牽制のためのフラッシュエッジは弾かれてしまったが、バルムンクはデストロイ本体のソリドウス・フルゴールを貫き、胸部。

ちょうどオータムとI Sが接続されている接続部の付近に突き立てることが出来た。

『この餓鬼いつ!!』

『まだあつー!』

簪の叫びとともに、突き刺さったままのバルムンクの形態が変化する。

突き刺さったまま【斬撃モード】から【砲撃モード】に変形し、損傷部を押し広げつつビームが放たれた。

デストロイの巨体を高出力ビームが貫き、背部から貫通したビームが空へと消えていく。

与えたダメージは大きい、確かな感触を得た簪であったが——そのために【離脱】が遅れた。

『この程度で、私が落ちるかあぁっ!!』

本体から切り離されたアームユニットを操作して、飛燕の機体を握り締める。確かに与えたダメージは大きい、それは通常のIS相手の話である。

デストロイはその巨体からして通常のISではなく、まだ戦闘可能な状態だ。

『ぐっ……あぁっ!?!』

凄まじい勢いでシールドエネルギーが減少していく。

また通常のISよりも大型のデストロイのマニピュレータによってVLユニットが握りつぶされていく。

各部位装甲も悲鳴をあげ、次々に亀裂が生じていく。

『このまま、握りつぶしてやるよおおっ！』

オータムの狂喜の声が響く。

同時に【白い影】がオータムの目の前に現れた。

---

簪のマニキュア。

バルムンク突撃がデストロイに決まった瞬間、アームユニットが切り離された事を離れた箇所で見っていた一夏は気づいたのだ。

同じく見ていた千冬や楯無もアームユニットが切り離されたことに気づいている。

『っ！』

誰よりも早く——考える前より身体が動いた。  
全開の出力でスラストターを吹かせ、白式で翔ける。

——その時であつた。

『このままじゃまずいね』

『ああ、あの少女はこのままだと敵に捕まるな』

『っ!?!』

突然、女性の声が2つ響き、驚いた一夏は思わず振り返る。

振り返ると目の前に「白いワンピース」を着た少女と、「白い鎧」を身に纏っている女性騎士の姿があつた。

両名ともISなどを身に着けていないのに空中に浮いている。

『きつ、君達は……っ!?!』

『……今はそんな事を気にしている場合ではないだろう?』

少し呆れたような声を女性騎士のほうが出す。

女性騎士の顔は鎧のガードによって見えないがどことなく姉である千冬に似ている  
雰囲気だ。

『一夏、どうしたいの?』

ワンピースの少女が一夏に問いかける。

『どうしたいって……簪さんを助けるんだよ、当たり前だろ?!』

『……確かにこのまま突っ込めば助けることは可能かもしれない。だが相手からの反撃  
がないとも限らない。事実奴は今追い込まれている、何をするか分かったものではない  
……それでもか?』

女性騎士のほうから冷たい声が返される。

少し前までの一夏ならば彼女の言葉に返せなかっただろう。

だが——強い視線のまま女性騎士に告げる。

『それでも行くんだよっ！それに見つけたんだ……俺はやつと自分の【戦う理由】を見つけたんだ』

『……ほう、聞かせてみる』

女性騎士が続きを促す——ワンピースの少女も同じように続きを待っているようだ。

『アイツから……真から少し前に教えてもらったんだ、【簪さんと一緒にいると小さなこどもも楽しい】って』

以前、学生寮の大浴場で真から聞いた言葉を思い出す。

『それはきつと簪さんも同じなんだ……俺は皆に【笑顔】でいて欲しい。だから俺は【笑顔】を守る為に……簪さんを助ける』

力強く目の前の2人に一夏が告げる。

その言葉を聞いて、2人は頬を緩めて微笑みを浮かべる。

『……無鉄砲に【助ける】事だけ考えているかと思ったが、少しは力を持つことについて考えているようだな』

『もう……最初から【私達】は力を貸すつもりだったのに……ホント素直じゃないんだから』

ワンピースの少女が笑いながら、女性騎士に告げる。

そして少女は【白式】の胸部装甲部分に手を当てる。

同時に白式の装甲から【光】が溢れていく。

その光景を一夏は知っている。

真から聞いていたのだ。

それと共に2人の【正体】についても察しが付いた。

『……君達は……まさか』

『ん、それよりはまず彼女を助けるんでしょ、一夏？』

『振り返らず翔ける、一夏』

『……ああ、ありがとう』

一夏の眩きと共に、2人の姿が消え——【白式】の姿が変わる。

【第二形態移行】——真の【インパルスガンダム】が【デステイニーガンダム・ヴェステイジ】に進化した現象が白式にも起こったのだ。

『新しい白式……【白式・雪羅】っ!!』

左マニピュレーターに大型の【多機能武装腕 雪羅】が発現、スラスタも大型化したウイングスラスタ4基に増設されている。

4基に増設されたスラスタを用いて【二段階加速】を実行。  
以前の白式と比べ物にならない速度でデストロイに接近する。

『うおおおおおっ!!』

加速したまま【零落白夜】を最大展開。

光り輝く白き刃が簪を拘束しているアームユニットを上段から断ち切る。

アームユニットによる拘束がなくなった為、簪が生きているスラスタを使って離脱



する。

『なあっ!?!』

『このままあっ!』

返す刃でデストロイの胸部を切り裂く。

【零落白夜】の一撃であるため、デストロイのエネルギーがレッドゾーンまで減少する。零落白夜の出力が【第二形態移行】により上がっているのか、明らかに威力が以前よりも上昇していた。

『なっ、こんなっ、こんな餓鬼共に私がっ!?!』

『逃がすかよおっ!』

取り乱したオータムに左手の【多機能武装腕 雪羅】を叩き付ける。

本来ならば【エネルギー爪】を起動させることができるが、今回は起動せずにそのまま叩き付ける。

それでもこの状況では非常に強力な武器となった。

『があっ!?!』

雪羅を叩きつけられた衝撃によって、オータムの視界が歪む。

だがまだアームユニットは残っている。

目の前の一夏に気づかれないように、アームユニットを操作する——が反応がない。

『無駄な抵抗は止めろ、貴様の負けだ』

操作しようとしたアームユニットは暮桜、「雪片」に串刺しにされていたのだ。

またデストロイの機体各部のスラストターが次々に破壊されていく。

セシリアや楯無達がビームライフル等で破壊しているのだ。

もはやオータムにこの状況でなすすべはない。

——すなわち【詰み】だ。

『くそ………が………』

雪羅を叩きつけられた衝撃によって混濁していた意識の中で、最後まで悪態を付いてオータムは意識を失った。

『一夏、よくやったな』

『それよりも千冬姉、この人をつ！』

デストロイがその機能を停止していく。

搭乗者であるオータムを千冬が保護し、一夏は拘束されていた簪に通信を繋げる。

『簪さん、大丈夫か？』

『……うっ、うん。ありがとう、織斑君……それとごめん、あんなに自信満々に言ったのに心配かけちゃって』

少し申し訳なさそうに簪に告げる。

『いや、簪さんが無事でよかった……助けられて良かったよ』

『……ありがとう、織斑君』

簪が笑顔を向ける。

その笑顔に一夏も笑顔で返す。

そして空を——その先にある【宇宙】を見上げる。

(……真、こっちは何とかなったよ……そつちも踏ん張れよ……！)

宇宙に向かった親友に心の中でエールを送る。

同じく簪も宇宙を見上げる。

(真、待ってるから。)

空の向こうで戦っている最愛の人に向かって祈った。

## PHASE 4 3 乗り越える定め

2つの【光の幕】が出現し、ビームの閃光を弾き飛ばして漆黒の宇宙を染め上げる。

1つは【薄緑色】の光。

全てのビームシールドの元祖である【アルミューレ・リュミエール】を展開する【ドレッドノートH】

もう1つは【薄紅色】の光。

ALを流用した攻性防御帯【スクリーミングニンバス】を展開する【ドム・トルーパー】ドレッドノートのビームサブマシンガンから放たれるビームの雨を、スクリーミングニンバスが弾き返している。

特に負荷がかかっているわけではないが、搭乗者であるヒルダの心中は焦燥と怒りが混ざり合っていた。

その理由は簡単である。

全ての攻撃がドレッドノートに捌かれているからだ。

ほとんどの攻撃をAMBCだけで避けられ、回避が困難な場合は低出力で展開しているALでビームランチャーの砲撃を防ぐ。

またその際ビームにALが触れた瞬間、ALで受け流すかの様に逸らす事で無駄なエネルギー消費を減らしているのだ。

そして逆にドレッドノートはAMBACや回避機動のわずかな隙を狙い、スクリーミングニンバスを多用させるように反撃してくる。

ヒルダはスクリーミングニンバスを常時展開しているわけではない。

使用には相応のエネルギー消費が伴うからだ。

「ハイパーデュートリオン」や「核エンジン」の様に無尽蔵ではないため、多用してればそれだけ早く活動不能に陥る。

この状況に追い込まれた原因は、純粋な「技量と経験の差」である。

彼女は前世、C・E.ではネオ・ザフト戦役でGタイプのMSに撃墜され死亡している。

だがカナードはネオ・ザフト戦役を生き抜き、その後も傭兵として戦い続けた。

その差が如実に表れているのだ。

優秀な搭乗者であるヒルダはそれを理解できてしまったため、口から怒りの声が溢れた。

『クソが、失敗作の分際でっ！』

『……………』

その叫びを無視して、弾幕を張り続けながらカナードはハイパーセンサーで周囲を確認する。

そしてセンサーがとある物体の反応を捉えた。

その反応を確認した後に、スラスターを噴かせ一旦後退する。

『逃がすかつ！』

後退したドレッドノートを逃がさないために、ヒルダも機体のスラスターを点火させて追跡する。

追跡しつつもビームランチャーで後退していくドレッドノートを狙いトリガーを引く。

吐き出されたビームはドレッドノートに向かうが、その程度の射撃はカナードにとって有効打にはなりえない。

射線をすでに読みきっており、スラスターを僅かに噴かせた後のAMBAACで回避する。

『逃がさないわよ、失敗作っ！』

射撃は有効打にならない事を理解したヒルダは、ビームサーベルを展開し、ドレッドノートに斬りかかる。

両者の距離は数十m、ISにとっては数秒もかからずに詰めることができる距離だ。ヒルダがビームサーベルを展開すると同時にドレッドノートは背部のイータユニツトを起動していた。

1対のデバイスを前面に展開した「バスターモード」に変形したのだ。

変形した形態の性能を理解したヒルダは接近を中止し、スクリーミングニンバスを展開する。

光の膜がドム・トルーパーを覆うのを確認したカナードの口元に笑みが浮かぶ。そして1対の砲口からビームではなくグレネードのみが発射され、ドムに迫る。

スクリーミングニンバスはALと同じく鉄壁の防御力を持つ装備だ、本来ならば特に負荷をかけることもなく弾かれていただろう。

だが、弾かれるという結果は起こらなかった。

何故ならば、スクリーミングニンバスへの着弾前に突如グレネードは「爆発」したか



らだ。

グレネードが着弾前に爆発した理由、それは別の「物体」に着弾していたからに他ならない。

先に着弾した物体は、この宙域には無数に存在しているもの。

それは先ほどまで戦っていた「無人機の残骸」である。

無論、ハイパーセンサーで把握はできていたが戦闘機動に影響の出ないレベルの残骸まで意識が向かなかつたのだ。

『なっ?!』

不意の爆発に巻き込まれた事で冷静な思考は僅かの間であつたが麻痺してしまった。

それは対峙している相手への致命的な隙となつた。

爆炎を突き破ってくる「薄緑色の光の槍」が展開していたスクリーミングニンバスを貫き、ドム・トルーパーの胸部装甲が完全に破壊された。

装甲が完全に破壊されると同時に「絶対防御」が発動。

ドム・トルーパーのエネルギーが急激に減少する。

『がはっ!?!』

【試合】であればこの時点で勝負ありとみなされるが、【戦場】ではまだ終わらない。

【光の槍】であるALランスを左腕にも展開したドレットノートが続けざまに連撃を放つ。

その度にヒルダの身体に衝撃が走り、ドムのエネルギーは減少し続けていく。

そしてついには最低限の【生体維持機能】を残してドム・トルーパーの機能は停止してしまった。

ドレットノートはドムが機能停止した事を確認し、搭乗者であるヒルダを拘束する。

見るも無残に破壊された装甲、破壊された装甲によつて裂傷ができたのか、血が球体となつて彼女の周囲に浮かんでいる。

『く……それが……っ』

なんとかそれだけ悪態をつけた。

瞬間、右のALランスで袈裟斬り気味に切り裂かれ、生体維持機能が完全に停止する。

維持機能がなくなったことで宇宙の影響を生身に受ける恐怖を感じる前に左のAL

ランスで胸を貫かれ、ヒルダの意識は途絶えた。

『悪いな、止めを刺せるときに刺すのが傭兵だ』

く。  
ヒルダの生体反応が消えたことを確認して、彼女の遺体からマニピュレータを引き抜く。

衝撃で彼女の遺体はそのまま宇宙に流れていく。

宇宙では一度加速がついてしまったものは、何かの影響がない限り止めることはない。彼女の遺体は止まることなく流れていくだろう。

一瞥した後、ハイパーセンサーで周囲の状況を探る。

『…クロエの反応は…向こうか』

そして見知った反応を捉えた方向に向けてドレッドノートは翔ける。

『さつきとはまるで人が違う……っ!?!』

ペルグランデに搭乗するスコールの口から戸惑いの声が漏れる。

ペルグランデ本体の周囲に浮遊する大型ドラグーンはすでに1機になっている。

『失敗作が何故こんな……っ!?!』

『……私は失敗作なんじゃないありません、クロエ・クロニクル、1人の……人間ですっ!?!』

機体の周囲を囲む3基のドラグーンと2つの有線式ドラグーン【プリステイス ビー ムリーマー】、それを操るのはクロエのXアストレイだ。

余談であるが、新たに追加されたプリステイスはオリジナルの【Xアストレイ】に装備されている武装とは異なり、有線ケーブルが延長されておりある程度の遠距離操作も可能になっている。

『このまま……っ!?!』

合計3基のドラグーンをペルグランデ本体へ、プリステイス2基はペルグランデのドラグーンに向かう。

ペルグランデのドラグーンを捉えたプリステイスは砲口部分にビームを展開し、ビームスパイクとなりそのままドラグーンを貫いた。

『ちっ、このっ！』

プリステイスがドラグーンを破壊したのと同時にペルグランデから発射されたビームがプリステイスの有線ケーブルを切断。

コントロールを失ったプリステイスは加速がついたまま流されていく。

しかし先ほどの奇襲と併せてこれでペルグランデのドラグーンは完全に喪失した形となる。

『その機体のドラグーンはもうありません、降伏してください』

3基のドラグーンを背部ユニットに戻しエネルギーを補給する。

そして攻撃手段を失ったスコールに降伏勧告を送る。  
しかし、その勧告にスコールは笑みを浮かべる。

『……ふふ、舐めないで欲しいわね、それに忘れてるわよ?』

ペルグランデの本体からスコールが身に纏うIS【ゴールデン・ドーン】が切り離される。

ペルグランデはいわゆる【外部パッケージ】の一種であり、本体である【ゴールデン・ドーン】はエネルギーの消耗はあるものも機動自体に問題はない。

『なるほど、お話に聞いていた埋め込み式の戦術強襲機【M<sup>ミ</sup>・E<sup>イ</sup>・T<sup>テ</sup>・E<sup>ア</sup>・O<sup>ア</sup>・R】と同じと言う訳ですか』

『ふふ、そうよ、流石にエネルギーは共有してるけどね』

両肩部より【炎の鞭】<sup>プロミネンス</sup>が現れ、威嚇するかのように振り回す。

『これからが【第2ラウンド】よ』

【炎の鞭】プロミネンスを展開して戦闘態勢に切り替えたスコールの言葉にクロエの口元に笑みが浮かぶ。

『いえ、【第2ラウンド】はありません、これで終わりです』

彼女のその言葉と同時にゴールデン・ドーンのハイパーセンサーが自身に飛来する物体を捉えた。

しかし搭乗者であるスコールの反応速度よりも飛来する物体の速度のほうが速く正確であった。

突如上方、両肩部に展開している【炎の鞭】プロミネンス部分に先ほど破壊したはずの【プリステイス ビームリーマー】がビームスパイク状態で突き刺さったのだ。

奇襲の衝撃からスコールは大きく体勢を崩してしまった。

『ぐっ、馬鹿な、そのドラグーンは先ほど……っ!?!』

機体の両肩部を破壊したプリステイス ビームリーマーを見て彼女が驚愕の声を上

げる。

オリジナルと同じく新たに発現した武装であるプリステイス ビームリーマーは有線式ドラグーンであるが、運用事態は無線式でも全く問題がない武装である。

スコールは有線式である為、ケーブルが切断されれば無力化すると思いついていたのだ。

そしてその驚愕は勝敗を別けるには十分な隙を生んでいた。

Xアストレイの背部ユニットに接続された3基のドラグーンが再度射出され【△】型のフィールドを展開していた。

本来ならば4基のドラグーンで【三角錘】のフィールドを形成することが可能だが、現在は3基の為、立体状で展開することはできない。

——だがこの状態であれば充分である。

『これで……終わりですっ！』

△型のフィールドをゴールデン・ドーンに押し付ける。

このフィールドはALやビームシールドと同等の性質を持っており、直接押し付けらればその分だけ相手はエネルギーを消費していく。



フィールドをそのまま押し込み、切り離され放棄されたペルグランデの残骸に叩き付ける。

『いつ、こんな……馬鹿なことが……っ!?』

常に纏っている余裕ある雰囲気は完全に霧散し、フィールドによつて拘束されているため動きもとれず、エネルギーはすでにレッドゾーン。

第3の腕としても使える尾をフィールドに叩きつけて見せるが弾かれた。ついには生体維持機能を残してゴールドン・ドーンは機能を停止。

——もはやなす術はなかった。

『降参してください』

ビームサーベルを突きつけつつ、クロエがスコールに通信を繋げる。

『……申し訳ありません……ラクス様』

苦渋の表情を浮かべたスコールがクロエの降伏勧告に応じ、残っていた武装である  
ゴールデン・ドーンの尾をパージする。

そしてクロエが彼女に接近し、スコールはISを解除する。

クロエがXアストレイの生体維持機能でスコールを保護しているため、宇宙空間でI  
Sを解除しても問題はない。

『……拘束はさせてもらいますからね？』

「……ええ、分かっているわ、お手柔らかにね？」

『……保障はできません……それでは早速』

疑問の声をあげる前に、スコールの腹部にXアストレイのマニピュレータが触れられ  
電流が迸った。

一瞬の痛みの後、スコールの意識は刈り取られ力が抜けた身体をクロエが支える。

『暴れられると厄介ですからね、命までは奪いません』

スコールの身体を脇に抱える形となったクロエがそう呟くと、Xアストレイのセンサーが反応を示す。

その反応は彼女にとって最も愛する男性の機体——【ドレッドノートH】だ。少しして特に損傷を受けていないドレッドノートが眼前に駆けつける。

搭乗者であるカナードはクロエを見て、少々驚いたような顔をしていた。

『……どうかなさいましたか、カナード様？』

彼に見られるのは素直に嬉しいが驚愕の表情を取っているのはなぜか彼女には分からない。

そしてクロエの様子を見たカナードが笑みを浮かべつつ告げる。

『いや、すまない。よくやったな、クロエ、無事でよかった』

『いえ危ない状況でしたが……力を貸していただけましたから』

『……そうか』

カナードは視線をクロエの背後の何も無い宇宙空間に向け微笑んだ後、クロエが抱え

ているスコールに移した。

『……一旦イズモまで引くぞ、その女がいては戦えないだろう』  
『分かりました、カナード様』

ドレッドノートとXアストレイが一旦イズモに戻る為に宇宙を翔ける。

## PHASE 4 インヴォーク — INVOKE —

少しずつ地球へ向かっていく機動要塞メサイアの外殻部分にビームが着弾し、外殻を構成している岩石部分が砕け数m程の大ききとなつて浮遊している。

メサイア外壁部で戦闘を行っているのはラキーナが駆るIS「ストライクフリーダムガンダム」、対するはアスランが駆る紅の騎士「インフィニットジャスティス」だ。

アスランと戦闘を開始して数分、カナード達や束が搭乗しているイズモからも離れ、ついにはメサイア外壁部にまでたどり着いていた。

ストライクフリーダムは機体モードを砲撃／射撃形態であるバーストモードに変更、クスイファイアスとバラエーナ、合計4門を展開して迫るジャスティスに向けトリガーを引く。

放たれた高出力ビームとレールガンは精密な狙いでジャスティスに迫るが、対するアスランは機体のスラストターを噴かせて、レールガンを回避。

ソリドウス・フルゴールでビームを受け止め、スラストターを全開にして、構えていたビームサーベルでストライクフリーダムを薙いで来る。

しかしジャスティスがサーベルを振りかぶった瞬間、機体モードを高機動形態である

ハイマツトモードに変更、得られる莫大な推力で後退し回避に成功する。牽制の為、ビームライフルを展開してトリガーを引く。

『ラキちゃん、相手のISはやっぱりストライクフリーダムよりも性能が上だよ』

プライベートチャネルでつながるのは母艦イズモでサポートに回っている束。

彼女は母艦であるイズモから敵機の索敵状況やストライクフリーダムの機体のコンディションチェック、動作の確認及び最適化などサポートを行っているのだ。

また並行して真やカナード達の様子もモニタリング、必要があればサポートを行っている。

『……ですね、やっぱりアスランは強い、特に今のアスランは私が知っている彼とは比べ物にならないくらいに……っ！』

ストライクフリーダムの精密射撃を完全に読み切って接近戦に移るアスランのプレッシャーに嫌な汗が流れるのをラキーナは感じていた。

アスラン・ザラの戦闘能力はC・Eのパイロット及び軍人の中でもトップレベルに

高いものであった。

普段は本人の優柔不断気味な性格や事を一人で行おうとする考え方によって迷いが生まれ、力を発揮しきれない事が多い。

だが、一度その迷いを吹っ切った彼は壮絶な能力を発揮するのだ。

そして現在の彼には迷いや感情などはない、そのため彼が持つ戦士としての能力がフルに発揮されている状態だ。

この世界で彼もナチュラルとして生まれているとは考えられないほどだ。

しかしラキーナの顔に諦めの色は見られない——それに今の彼女にはアスランにはないモノがあるのだ。

『どうする？ イズモから援護する？』

『……！一つ策があります。なので束さん、力を貸してください』

『まっかせて！んで策つてのはなんだい？』

プライベートチャンネルで束に自身で考えた【策】を伝える。

『……りよーかい。タイミングはラキちゃん、お願いね』

『分かりましたっ！』

ビームライフルを格納し、両肩にバラエーナを展開してビームを放ち、アスランに回避と防御を強いる。

同時にスラストターを全開に噴かす。

彼女が向かうのは先程、アスランがビームを回避した結果砕けたメサイアの外殻、デブリと化した岩石だ。

無数に漂っているデブリの内、最適なモノを確認して少しでも笑みを浮かべる。

(……後はタイミング)

ラキーナはストライクフリーダムの全長よりも大きなデブリを確認して身を隠す。

『キ………ラ………っ！』

バラエーナを回避して体勢を立て直したアスランも彼女の後を追う。

デブリに接近、残り数mと言った所で、インフィニットジャスティスのハイパーセ



ンサーが自機の後方に発生した高エネルギー反応と熱源反応を捉えた。

瞬間、自機の後方を高出力ビームが通り過ぎ、そのままサイア外殻に命中して爆発を起こす。

続けて無数の熱源反応——ミサイルが自機に一発も命中することなく、自機の周囲で爆発を起した。

爆炎が周囲を覆うが、念のため展開していたソリドウス・フルゴールで問題なく防御が可能なレベルだ。

『何を……狙って……っ!?!』

ソリドウス・フルゴールで防御を続けていたアスランはある違和感に気付いた。

爆炎は防御したが、発生した【煙】によっていつまでたっても視界が回復しないのだ。

『チャフに……スモーク……っ!?!』

インフィニットジャステイスのハイパーセンサーが僅かにだが乱されている。

放たれたビームとミサイルは、ラキーナ達の母艦であるイズモからの援護射撃であつ

たのだ。

そして放たれたミサイルはチャフとスモークが搭載されている攪乱用の代物。

C・E・のニュートロンジャマーの様に、ISのハイパーセンサーを使用不可能にするほどの効力はないが、センサーを若干鈍らせることは可能だ。

そしてこの状況はラキーナにとっては大きな好機である。

この状況を作る為に、彼女は身を隠したのだ。

それを理解しているため、鈍ったハイパーセンサーよりも自身の感覚でアスランは気配を読み取る。

『……背後……っ！』

即座にビームサーベルを展開、ビームの光が強まると同時に背後から迫っていた「モノ」を切り裂いた。

劣化品とはいえ、【零落白夜】を発動することができるインフィニットジャステイスのビームサーベル。

その効力により絶対防御のエネルギーを無効化して、直接切りつけることができる。しかし、ビームサーベルに切り裂かれたのは「ストライクフリーダム」ではなかった。

迫っていたモノ、切り裂かれた「エールストライカー」が爆発しインフィニットジャステイスを爆炎が包み込む。

『っ!?!』

爆炎に包まれたアスランの口から驚愕の声が漏れた。  
時間にして1秒にも満たない僅かな時間。

『はああああっ!』

気合の咆哮と共にストライクフリーダムが爆炎の中から現れる。

右マニピュレータに握るのは「対装甲ナイフ アーマーシユナイダー」だ。

完全に虚を突いた攻撃であったが、アスランも反撃を繰り出してきた。

ソリドウス・フルゴールを展開するジェネレータ、ビームブーメラン、ワイヤーアンカーを内蔵したビームキャリーシールド外装部から「EEQ08 グラップルスティンガー」を展開。

シザークローが射出され、アーマーシユナイダーごと、ストライクフリーダムの右マ

ニピュレータを握りつぶす。

ストライクフリーダムシールドエネルギーが大きく減少し、衝撃にラキーナの表情が歪む——しかし

『まだ……まだだあああつ!!』

シザークローはマニピュレータを破壊したが完全に機能が停止したわけではない。

破壊された右腕で振りかぶり、スラストターの推力を上乗せしてインフィニットジャステイスに【拳】を叩き付ける。

『ぐうつ?!』

『はぐう……つ!』

衝撃に小さくない痛みを感じつつも続けざまに二打、三打……と続けて拳を叩き込む。インフィニットジャステイスはVPS装甲だ、しかし衝撃は完全には防げない。

ましてや彼女が拳を叩きつけているのは胸部部分だ、確実にダメージが搭乗者に届いている。

『うぐ……うおおっ!!』

しかしアスランもただ殴られ続けている訳ではなかった。

腰部から隠し腕を展開、ビームサーベルでラキーナに反撃を繰り出す。

本来ならば避けるべき攻撃であったが、ラキーナは逆の行動を取った——スラストアを噴かせ自分からビームサーベルを喰らいに行ったのだ。

あえて自分から喰らいに行ったため、ビームサーベルによつて切断されたのは腹部装甲部分。

しかしビームサーベルには零落白夜が発動しているため、発動した絶対防衛を貫通——ビームの刃はラキーナの身体付近まで届いていた。

『ぐう……っ!』

このチャンスを逃したら勝機はない。

ビームの熱に身体を焼かれる激痛に涙が溢れる。

しかしその痛みに歯を食いしばって耐え抜き、拳を振り上げて叫ぶ。

拳に込めるのは祈り。

元に戻って欲しい、止まって欲しいと祈りを込める。

『目を……覚ましてっ、アスラアアンツ!!』

インフィニットジャスティスの胸部装甲に最大出力で拳を叩き付けた。

『ぐああああっ?!』

今までで最大の衝撃にインフィニットジャスティスが吹き飛ばされる。

VPS装甲の為に表面装甲部分には傷が見えないが、内部機器にダメージがあった為か、胸部や腹部にフェイズシフトダウンが起こっている。

『あ……ぐ……っ!』

ラキーナの視界が痛みと疲労によって渗む

ストライクフリーダムのエネルギはすでにレッドゾーンに突入していた。

気力も体力もすでに限界を超えている。

発動していた【S・E・E・D】の感覚も消えてしまっている。

『ラキちゃん、まずいよ、しっかりしてっ！』

通信から束の音が聞こえてくるが、だんだんとかすれていく。

（意識が……アス……ラン……っ！）

そしてついにストライクフリーダムは最低限の生体維持機能のみを残して停止してしまっただ。

（まずい……このままじゃ……っ！）

視界が薄れる中、何とか状況を打開しようとするが身体が重く、動かない。腹部から溢れる血液が球状になって浮かんでいる。

(約束……したのに……)

頭に浮かんだのは出撃前にした約束、【兄】や【大切な戦友】と交わした約束。

(ごめん、兄さん……真……)

心の中で精一杯の謝罪の言葉を述べる——その時であった。

『……済まなかった……キラ……っ！』

親友の声が確かにラキーナの耳に届き、身体を支えられる。

同時に機能を停止したI Sに代わって、抱きかかえられた相手の機体の生体維持機能で保護されるのを感じた。

何とか目を開く。

相変わらずいつも悩んでいる様な顔をしている親友の優しい表情。

彼の目には涙が浮かんでいた。



「アス……ラン……よか……た」

『母艦の位置は把握している、大丈夫だっ！』

インフィニットジャステイスがラキーナを抱えて、センサーで確認したイズモの座標へと向かう。

「よか……た……ほ……とに……」

『……通じたよ、お前の気持ち。最後の一撃のおかげで戻ってこられた。本当に済まなかった……俺はいつもいつも間違えてばかりだ』

「……そ……だね……私達は……ずっと間違えて……ばかり……」

弱々しくラキーナが微笑む。

「償おう……一緒に……私達は……目を逸らしちゃいけないんだ」

『……ああ、分かっている、ラクスを止めよう』

アスランがそう言って頷く——彼の表情に迷いは全く見えない。

今のアスランならば自分達に力を貸してくれると確信できる。

(良かった……本当に……よか……た……)

頼りになる親友の顔を見て安堵したのか、そこでラキーナの意識は途切れた。

## PHASE 4 5 交差する想い

メサイアから少し離れた宙域で「紅い光」と「紫の光」が瞬く。

2つの光はまるで舞うが如く、宇宙の闇を照らしている。

紅い光が多数の「光」に囲まれ、光が一斉に向かうが、紅の光はそれを避け続けている。

『ぐっ……近寄れない……っ！』

紅い光——IS【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】の真は舌打ちしつつ、自身に迫ってくる「光の槍」を避ける。

光の槍の正体はドラグーンであった。

形状でいえば、親友「レイ・ザ・バレル」が駆っていた「レジェンドガンダム」のドラグーンシステムに搭載されていた「ビームスパイク」に酷似している。形状から名前を付けるのなら「スパイクドラグーン」ともいえるだろう。

彼の周囲には合計十基のドラグーンが浮遊し、意志を持つているかのように旋回、包

困っていた。

すでに真の【S・E・E・D】は発動している。

『ふふ、シン、行きますわよっ。』

ラクスの声と共に【紫の光の翼】を持つIS【ホワイトネス・エンプレス・エンブラス】の巨大マニピュレータの掌部分から高出力ビームが放たれる。

マニピュレータの、人間でいえば【指】に当たる部分が切り離されており、この指部分がドラグーンとして真を襲っているのだ。

『ぐっ！』

光の翼を瞬かせて、回避——しかし、彼の背後に一基のドラグーンが存在していた。

背後のドラグーンにはビームの発射口は存在してはおらず、そのままビームはドラグーンに命中した。

だが命中したはずのビームは次の瞬間には拡散、いや【反射】されて真に襲い掛かったのだ。

ビームを反射したドラグーンは、全体に鏡面処理「ヤタノカガミ」を施された——言うならば「リフレクターードラグーン」ともいえる存在だ。

「スパイクドラグーン」、「リフレクターードラグーン」、そして本体からの射撃と言う3つの要素を巧みに操るラクスに真は先程から回避のみを強いられている状況だ。

『く……っそおっ!!』

背後にドラグーンがあつたことを確認していた真は機体各所のスラスター操作とAMBACを駆使して、何とか反射されたビームの回避に成功し、一度後退する。

(2種のドラグーンと本体からの同時攻撃……厄介だけど……手はある！)

VLユニットから得られる破格の推力によって無理やりドラグーンの包囲網から離れる。

突破されたドラグーン十基は彼を追うように追尾していく。

ドラグーン等の無線遠隔操作端末は、確かに脅威であるが距離を取って動きをすべて把握できるこの状況ならば対処することは可能である。

『そいつー！』

展開したビームライフルと、左マニピュレータに搭載されている「クラレント」をビームライフルモードで放つ。

2条のビームがそれぞれ「スパイクドラグーン」に向かう。

しかし、スパイクドラグーンに命中する直前、射線に割り込んだ「リフレクタードラグーン」によって放たれたビームは拡散、無効化されてしまう。

だが、それが真の狙い。

防御の際にはリフレクタードラグーンは動きが止まる——ならばその瞬間に破壊すればいい。

鏡面処理装甲「ヤタノカガミ」は確かに強力だがビームサーベル等を用いた近接格闘戦では意味をなさない。

『はあああつ!!』

V.L.を瞬かせて、最大稼働状態に移行。

防御の為に動きを止めた「リフレクタードラグーン」に向かって即座に展開した「アロンダイト」を振りかぶる。

だがラクスマも真の行動の意図は読んでいた。

『させませんわっ!』

ドラグーンに迫る真に向かい、マニピュレータの砲口を向け、ビームを放つ。

だが放たれたビームを紙一重で回避し、ドラグーンに迫る。

『これでえっ!』

上段から振り下ろされた魔剣の一撃にリフレクタードラグーンは真つ二つに両断される。

即座にV.L.によって離脱——スパイクドラグーンが数瞬前まで真がいた空間をクロスで貫いた。

即座に行動を離脱から攻撃に切り替える。

体勢を切り替える際の速度の減少を最低限に抑えて、再びアロンダイトを上段に構え

ラクスに向かう。

『激しいですわねっ！情熱的ですわっ！いいっ！いいっ！いいですわっ！』

紅潮した顔を隠しもせず、ラクスが叫ぶ。

同時に迎撃の為、スパイクドラグーンを向かわせる。

迎撃を確認した真は急機動で上方に逃れる。

しかし、ラクスの狙いは真ではなかった。

突如、スパイクドラグーンが軌道を変えたのだ。

そして「アロンダイト」に2基のスパイクドラグーンが命中し、刀身を貫く。

『くっっ!?!』

アロンダイトの刀身ビームによってスパイクドラグーンも破損、真がアロンダイトを放棄すると同時に、アロンダイトを巻き込んで爆発した。

『っ…まだまだあっ！』



シールドエネルギーは減少するが、減少したエネルギーは軽微であった為無視し、ビームサーベルを2本展開。

そのままX字を書くようにラクスへ斬りかかる。

対するラクスも大型マニピュレータが「手刀」の様な形状を取ると、ビームが発生した「ビーム手刀 カラミティエンド」によってビームサーベルを受け止め、鏢迫り合いが発生する。

『ああ、シン、やはり貴方だけですわ、私にこうして刃を向ける殿方はっ!』

『いきなり何がっ!?!』

『貴方だけが私に生の感情を向けてくれるっ、貴方だけが私を一人の人間としてみてくれているっ!』

鏢迫り合いで発生する粒子の光によって照らされる彼女の表情は狂喜に満ちていた。

世界は私のモノ、私は世界のモノ。

ラクス・クラインは幼少よりそう教わっていた。

そしてそれが世界の真理だと信じていた。

クライン派の代表であるシーゲル・クラインの娘として生まれた彼女はその圧倒的なカリスマと軍事力をもってC・E・を彼女なりに「平和と自由に溢れた世界」に導こうとした。

2度の大戦を経て、1度は世界を手中に収めた。

回りの人間すべても自身を肯定し、称えた。

だがほんの一握り——自身とは違う価値観を持つ人間たちがいた。

命を、今ある花を散らせない。

自身の駒であった【自由】と【正義】の剣を叩き折り、明確に自分を否定する人間達。カナード・パルスや叢雲劔、ジェス・リブル、ロンド・ミナ・サハク、エドワード・ハレルソン、コートニー・ヒエロニムス、コニール・アルメタや旧デユランダ派、旧連合が集結した反歌姫の騎士団連合。

無条件で自分を偶像の様に肯定し崇拝する人間とは違い、1人の人間として自分を肯定する人間たち、その象徴が——「シン・アスカ」であった。

初めは愚かだと思った。

しかし、彼は敗れ続けても前に進み続けた。

そしてC・Eでの最後、彼に殺される瞬間、自分が彼を求めていたことに気付いた。彼だけが自分を1人の人間としてみている事に気づき——彼を欲した。

何の因果かこの世界に生まれ、シンもこの世界にいることを知った彼女は狂喜した。

——故に彼女は動いた、シンを手に入れるために篠ノ之束に近づき技術を手に入れ  
——シンの力を自身に相応しいレベルまで高めるために、無人機を使って行動を起  
した。

——絶対に手に入れてみせる。どんな手を使おうが彼を手に入れ、抱きしめてみせる  
と——。

言葉と同時に周囲のスパイクドラグーンがデステイニーの背後に向かう。  
狙いはデステイニーの背部V.Lと脚部スラスト。

『ちいつ！』

ハイパーセンサーとS・E・E・D. によって増幅された感覚で奇襲を検知していた真は、ラクスに蹴りを叩き込む。

その反動と併せて離脱を図るが、完全には回避できずビームサーベルは2本ともビーム手刀に破壊され、さらにはドラグーンによって左脚部装甲を破損してしまう。

そして無理やりな離脱な為、体勢も崩れていた。

A M B A Cを行う前にラクスの巨大マニピュレーターが迫る。

『シンっ！ 貴方が欲しいっ！ 私を見てくれる貴方をつ！』

ビーム手刀を発生させたマニピュレーターがまるで鋏の様に左右からデステイニーに迫る。

しかし、迫るビーム手刀をデステイニーは受け止める。

その両掌には紅い光が溢れている。

『俺の想いは全部無視かよっ！アンタの想いだけで世界が回ってるわけじゃないことく

らいわかつてるだろうにっ!』

両掌に溢れる光は「クラレント・ビームサーベル」の光。

ビーム手刀をクラレントのサーベルモードで抑え込み、拮抗状態に持ち込んでいるのだ。

いや、拮抗状態ではなくクラレントがビーム手刀を押し返している。

クラレントの出力を高めて一気に押し返す——即座に離脱し、機体状況を確認する。

コンソール画面にはシールドエネルギー7割弱、左脚部装甲損傷、そして右腕部クラレントの出力不具合警告が出ている。

(……ちっ、今ので右のクラレントに異常が出てる……っ!)

『あつくん、右クラレントのプログラムを書き換えるから……20秒頂戴っ!』

コアネットワークを通じて戦況を見ていた束からプライベートチャンネルが繋がる。それに頷いて返し、迫るドラグーンを回避しつつ叫ぶ。

『アンタはそうやって自分一人の視野でしか考えられないんだっ、だから自分のやっ  
てることが花を……命を散らしている事に気づいていないっ!』

現時点のデステイニーガンダム・ヴェステイージの残存武装はクラレント、ビームラ  
イフル、フラッシュエッジII、テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔の4種。

この中で「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」の影響を受けずにラクス本体を攻撃で  
きるのは、クラレントのサーベルモードと、フラッシュエッジIIの2種。

そしてラクスのビーム手刀に拮抗できる出力を持つのはクラレントのみ。

しかし、クラレントは不具合が生じており左腕部のみが使用可能な状況である。

使用可能な状況まで残り数十秒——戦場では永遠に思えるくらい長い時間だ。

『世界は一人で回っているわけじゃない。俺がこうやってここにいるのも簪や一夏達が  
俺を送り出してくれたからだっ!カナードやラキーナ、クロエや東さんが俺を支えてく  
れたからだっ!』

だがデステイニーの武装は残っている——それは後付武装として【最も大切な女性】  
から受け取った【剣】

『誰かの事を考え、思い合えるのが人間だっ！アンタのそれは一方通行なんだよっ！』

後付武装を展開する。

デステイニーガンダム・ヴェステイージの機体全長と同等の大型実体剣。

展開した実体剣の名前は「バルムンク」——真が簪から借り受けていた装備だ。

『1人のエゴをばら撒くような奴に……俺は負けられない、負けてたまるかあっ！』

真の叫びに呼応し、バルムンクの刀身にビームが奔る。

そしてデステイニーガンダム・ヴェステイージは紅い光の翼を限界まで広げ、バルムンクを構えた。

## PHASE 4 6 掴む未来

『っ、その剣は……っ!?』

忌々しいモノを見る目つきでラクスの顔が強張る。

彼女にとつては、自分が最も欲しいと願っている人間を奪った【女】更識替の装備。

その装備がデステイニーから展開され、真の想いを受けて起動したのを心穏やかには見れないだろう。

『うおおおおおおおつ!!』

咆哮を上げつつ、バルムンクを上段に構えてデステイニーがホワイトネス・エンプレスに向かう。

迎撃の為に、スパイクドラグーンを向かわせるが、Vレユニットによる圧倒的なスピードで前後に、上下左右に、速度に緩急を持たせながら不規則な軌道変更を行うデステイニーを追い切れない。



この急機動はドラグーンの弱点を突いたものだ。

超高機動戦を得意とするデステイニーガンダム・ヴェステイジーの機動性が最大限に発揮されているため、常にスパイクドラグーンの動きを把握できているのだ。

しかしこの不規則な機動、真にも相応のリスクが存在している。

V Lユニットの急激な加減速によって急機動を実現している為、発生するGが桁違いなのだ。

いくらI Sの生体保護／維持機能があるとはいえ限度は存在する。

強力なGによって全身が軋むような感覚と痛み、腹の中で内臓が動き回っているかのような不快感と異物感——少なくとも負荷が掛かっている。

しかし今は一切合財無視を選択する。

でなければこの刃を届かせることはできない。

そして同時にプライベートチャンネルが開いた。

『右腕部クラレント、使用できるよー!』

耳に届いたのは束の簡単な報告のみ。

真の意識はそちらには向いていなかったが、確かに声は届いた。

迫るドラグーンを躲し、ラクスの目前でバルムンクを振り上げた。その際、ラクスの口元に笑みが浮かんだのを真は見逃さなかった。

『…!』

瞬間、衝撃と痛みが真を襲い、振り上げたバルムンクを手放してしまった。

バルムンクを手放してしまった原因は、剣を掴む両マニピュレータにリフレクタードラグーンが突き刺さっていたからだ。

リフレクタードラグーンは防御用、そんな先入観がいつの間にか存在し意識から除外してしまっていたのだ。

単純な物理的な衝撃であったが、デステイニーガンダム・ヴェステイジの装甲はオリジナルとは異なり「VPS装甲」ではない。

ドラグーンがその速度を保ったまま特攻を行えば、完全破壊は不可能だが機能に不具合を発生させることは充分可能だ。

そしてさらに機体を貫く衝撃が真を襲った。

V Lユニットの速度で振り切っていたスパイクドラグーンが、両肩部、V Lユニット

に突き刺さっている。

シールドエネルギーも凄まじい勢いで減少していく。

『ぐうつ!!』

『これで、貴方は……っ?!』

勝利を確信したラクスはマニピュレータを伸ばし、真を抱きしめようとする。

しかし次の瞬間にはその言葉と笑みが途切れる。

何故ならば、目の前にデステイニーの右腕マニピュレータ部、「クラレント」が突きつけられているからだ。

刹那、爆発が起こった。

『あぐうつ?!』

予期せぬ爆発に完全に回避と防御が遅れたラクスのホワイトネス・エンプレスが吹き飛ばされる。

爆発によって、背部のマニピュレータ部分や装甲にダメージが見受けられる。

爆発の原因——それは真がクラレントを無理やり使用した為だ。

リフレクタードラグーンによってクラレントは使用不可能になっていた。

しかし、その状態でも構わずエネルギーを送り続けた結果、詰まった排水管の様にクラレントはエネルギーに耐えられず破損、その余剰エネルギーが爆発を発生させたのだ。

そのためデステイニーの右マニピュレータは、フレーム部分が辛うじて形を保っているレベルまで破壊されていた。

生身の真の腕にも少くないダメージが通っており、裂傷によって血が流れている。

『ガンダムッ!!』

手放してしまったバルムンクはすぐそばに浮いていた。

自身と機体を鼓舞するかのようにつぶやき、破損した右腕部を庇いもせず手に取って背部V.L.を起動する。

先程のドラグーンによってV.L.ユニットは破損しているが、それでも既存のISとは一線を画した加速を生み出して、バルムンクを突き破る形で構え突貫する。

『シン、貴方と言う殿方は……っ!?』

A M B A Cで体勢を立て直し終わった直後のラクスには回避が取れなかった。迫るバルムンクを咄嗟に大型マニピュレータで防ぐ。

しかし、デステイニーの突貫を止めるだけの防御力は存在していなかった。マニピュレータを貫き、そのままI S本体にも切っ先は届いていた。

『あぐっ!!』

『はああああああつ!!』

バルムンクにはモードが2つ存在している、斬撃モードと砲撃モードだ。今、バルムンクはホワイトネス・エンプレスに突き刺さっている状態だ。そのまま今出せる最大出力で機体を加速させる。

『これでええ!!』

真の咆哮と共にバルムンクは斬撃モードから砲撃モードへ形態を移行する。

突き刺さっているホワイトネス・エンプレスの装甲を無理やり斬り広げつつ、刀身から砲口が出現。

間髪いれずに高出力ビームがマイナス距離で放たれた。

『ああああっ!!』

宇宙にビームの光が瞬き、ホワイトネス・エンプレスの「絶対防御」が発動。

同時にマニピュレータ接続部分から爆発が連続し、接続が解除される。

解除された接続によってラクスは真から弾き飛ばされた形となった。

そしていつの間にか接近していたメサイアの外殻部にラクスは激突した。

『……………これで……………どうだ……………っ!』

マニニューバによる身体への負担の為に呼吸が早まる。

疲労も蓄積されており、シールドエネルギーも残り3割を切った。

しかし戦えないわけではない。

バルムンクに突き刺さったままのマニピュレータの残骸を、斬撃モードに切り替えて

切断し両手で構える。

『…………ふっ、ふふ…………やっぱりシン、貴方は素敵ですわ…………』

優雅とは程遠い姿になった「ホワイトネス・エンプレス」のスラスターが弱々しく噴き、AMBAACを行い体勢を立て直す。

間接部分から絶え間なく、火花が散っており元々の装甲が薄い機体であったためか、バルムンクでの一撃が致命傷となっているようだ。

本体であるラクスの額や腹部からは血が滴り、球になって浮いている。

『…………アンタの負けだ、すぐに…………』

『【降伏しろ】ですか？ ふふ、お断りさせていただきますわ…………こんなにも幸せなんですもの』

そう言ってラクスは生きているスラスターを使って真から距離を取る。

それを確認した真はすぐさまバルムンクを砲撃モードに切り替える。

同時にテレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔を展開して、合計3門の砲口を向け

る。

『ああ……素晴らしい一時でした……結果として貴方を手に入れることはできませんでしたが……やはり私の目は間違っていないかった……っ！』

陶醉するような顔を浮かべる彼女に真は叫ぶ。

破損した機体からスパークが連続して飛んでいる。

『何でだ……っ！ アンタはそうやってそこまで俺の事を考えることができるのならっ！』

アンタの力をもっと調和と協調の為に使えばC. E. だって……っ！』

『……世界は私のモノ……私は世界のモノ……私はそれしか知らなかった』

真の瞳を見つめつつ、ラクスが答える。

『調和や協調……私は周囲を見ることができなかった……ふふ、私も俗物でしたわね』

ホワイトネス・エンプレスの生き残ったスラスターを後方に噴かせる。



『何をつ!?!』

デステイニーの武装を解除して手を伸ばすが間に合わない。  
彼の行動にラクスは目を見開き、微笑んだ。

『ああ、最後に貴方は私を……ありがとう、シン』

その言葉と共に、ホワイトネス・エンプレスはメサイア外殻部で  
光が消える——ハイパーセンサーでは周囲に生体反応はない。

『ホント……なんでそう、一人で抱え込むやつらばっかりなんだよ……っ!』

伸ばした手を降ろして、目を閉じる。

彼女は助けて欲しかったのかもしれない——ただ周囲に助けを求める声を出すこと  
ができずに先導することしかできなかったのだ。

そこに真は哀れみを感じていた。

『……アンタの辛い旅は終わったんだ……おやすみ、ラクス……』

ハイパーセンサーで母艦イズモの座標を検知し、機体を向ける。

まだやるべきことがある。

メサイアを止めなければ——

## PHASE47 debriefing

メサイア内 医療区画 医務室

ラクスを破った真を回収したイズモは、依然地球に向かって移動しているメサイアに着艦していた。

加えてドレットノートH、インフィニットジャステイス、Xアストレイの3機によってメサイア内部の制圧作業も完了している。

カナードからの連絡によると、人の姿は見えず残存していた構成員は脱出済みだろうとの事だ。

だが各種設備は動いており、現在真が腕部に負った傷の手当の為にいる医療区画もその1つだ。

「……彼女は大丈夫なんですか？」

目の前の治療用ベッドの上に寝かせられているラキーナの姿を見つつ、真が束に尋ねる。

平坦な胸が規則正しく上下しているところを見ると、命に別状はないと思うが。

「うん……けどやっぱり腹部の火傷が酷いね、早めに治療しないとかなり大きな傷が残っちゃうかな」

アスランとの戦いで重傷を負ったラキーナは、アスランがイズモに到着してすぐ医務室に運ばれていた。

応急処置を迅速に行ったアスラン、医学にも精通している天災 束のおかげで命に別状はない状態に落ち着いている。

しかしそれでも腹部のビームによる火傷が酷いため、早急に専門施設で治療しなければならぬ事には変わらない。

「あつくん、腕は大丈夫？」

「はい、もう痛みはほとんどないです」

ラクストとの戦いの際にデステイニーで無茶をした為に、真の右腕には包帯が巻かれていた。

数度拳を開いたり握ったりした後、違和感がないことを確認して真が言う。

「よし、すぐにもメサイアを止める、ないしは破壊しないと」

「だね、カナ君達が戻ってきたらコントロールルームに行かないとね、内部の構造はカナ君から聞くけど……あつくくんも覚えてる？」

「まあ、一応は……」

もつとも真の記憶にあるメサイアと比べると、このメサイアの大きさは半分程度。

内部構造は大きく変わっている可能性がある。

真が自身の記憶から内部の構造を可能な限り掘り起こしていると、部屋の扉が開いた。

「東、制圧は完了した」

IS【ドレッドノートH】を待機形態の翡翠色の腕輪に戻して腕に付け直しているカナードが言う。

彼の背後からはクロエが続き入室してくる。

そしてその後——アスランも続く。

アスランは室内の真に視線を合わせる、その視線は申し訳なさが多分に含まれているものだ。

実はまだ2人は会っていないかったのだ、イズモに回収された真はイズモ内の医務室に運ばれており、入れ違いの形でアスランはメサイアの制圧作業に加わっていたからだ。

アスランの姿を見た真の瞳が一瞬見開かれる。

だが、アスランは正気を取り戻しているように見える——ならばラキーナが上手くやったのだろうかと判断した。

「シン……すまなかった」

開口一番、真の目の前でアスランは大きく頭を下げる。

その様子を一瞥し、真が口を開く。

「……なんですか、いきなり」

「俺はどうしようもなく愚かだった……俺は自分の目で物事を見ずに、他者に判断を任せていた……ラクスが間違えるはずがないと、考えていたんだ……本当に情けなくな

る」

「……いきなり愚痴ですか？　そこに気付けたなら他にやるべきこと、あるでしょうよ」

しかめっ面で返す真だったが、アスランの視線からは目をそむけていない。間違いに気付けたのなら行動で示して見せろ、アスランにはそう感じた。

「……強いなシン、ミネルバ時代とは大違いだ」

「俺も色々ありましたから……てかどこの誰がミネルバの空気を悪くしてたか忘れたんですか？」

「……それを言われると辛いな」

ジト目で嫌味を飛ばし、アスランは苦笑しつつ頭を下げる。

「……話は済んだな？　まだメサイアは地球に向かっている、コントロールルームで停止、または破壊するぞ」

真とアスランのやり取りが一段落したのを確認して、カナードが割り込む。

彼の意見に異議を唱える者は一人もいなかった。

メサイア コン트롤ルーム

かつての機動要塞メサイアと同じく、コン트롤ルームは扇状で前面には大型のモニターが設置されている。

唯一の違いは、かつてのメサイアはオペレート等は人間が行っていたのに対し、このメサイアではすべてが機械化、自動化されている点であった。

ラキーナの看病をクロエとアスランに任せ、真達はコン트롤ルームでメサイアを止める為の情報収集に当たっているのだ。

コンtrolルームの正面モニター付近で、束が情報の吸い上げとクラッキングを行っている。

残像がいくつも残るスピードで展開された空間投影ディスプレイを叩き、セキユリティを突破していく。

その姿に真はおちゃらけてるけどやっぱり天才なんだなどどこか納得していたが。そしてふと束の表情が変わった。

何か重要な情報を見つけたらしく、その表情は決して若い女性がしてはいけない類の



モノだ。

「おっほお、これはこれはこれはーっ！」

東が勢いよくディスプレイを叩くと、追加で数個のディスプレイが表示された。

ディスプレイに記載されている内容は全て英語で書かれているが、C・Eでの共用語も英語だったため、真やカナードには問題なく読める。

その内容は――

「【コアネットワーク内の絶対基準について】？」

真がディスプレイに表示されたレポートのタイトルを見て呟く。

「……成程、ラクス・クラインも何故ISに女しか乗れないかについては調べていたようだな」

「……みたいだね、あー、私の【仮説】と同じかー……」

先程のテンションはどこに行ったのか、徹夜明けした後の様なハイテンションから一転、ローテンションになって内容をスクロールして目を通す束に真が尋ねる。

「束さん、なんでISは女性しか乗れないか、分かったんですか？」

「まだ仮説の段階だけどね、あつくんやカナ君、いつくんが乗れる理由はこの【絶対基準】って部分が重要なんだ」

束はさらにディスプレイを追加で表示させる。

そこには見知った人物のデータが記載されていた。

記載された人物の名は【織斑千冬】

「これは千冬さんの……？」

「うん、ISに最初に……【白騎士】に乗ったのはちーちゃん……【絶対基準】ってのは、このちーちゃんを絶対的な【基準】として、全てのISコアが共通認識してるんだ」

「【基準】……？」

「つまり【織斑千冬以下の人間ではISを起動することはできない】……という事か？」

東が頷く。

「多分、ちーちゃんとおる程度共通した点、もしくは超えてる点があれば動かせるんだと思う、じゃないと世の女が動かせる理由にはならない」

「……女性しか動かせないってのはそういう事なのか」

仮説だけだね、と東が補足する。

そして当然次に浮かんでくる疑問——それは

「じゃあ、俺、カナードやアスラン、一夏は何で動かせるんですか？」

そう、織斑千冬を基準にしているのならば、性別も共通していない男性であるこの4人が動かせる理由が分からない。

それに東が答える為に口を開く。

「あつくんやアスラン・ザラが動かせる理由は2つ、1つは君達が〔S・E・E・D.〕と

「うちーちゃんを超える点を持っているから、これは多分間違いないと思うよ」

真もこの仮説には納得し頷く。

適性検査の際にI・Sに触れたとき、全くの予兆もなくS・E・E・D・が発動したからだ。

東がI本指を立てる。

「んでもう一つ、これはカナ君が動かせる理由にもなるね……【C・E・での戦争の経験】をしているから」

「戦争の経験……成程、I・Sは搭乗者の記憶を読むことができる。前世での経験を讀み取って基準を超えていると判断しているのか」

「あつくくんはザフトのスーパーエース、カナ君は凄腕の傭兵兼MSパイロット、アスラ・ザラも凄腕の軍人……C・E・よりも平和なこの世界ではまず経験できない事柄だから、これも間違いないと思う」

東が指を2本立て、下ろす。

彼女の仮説に特に異議はないし、真も納得できる内容だ。

だがまだ疑問はある。

「じゃあ、一夏は？」

そこなんだよねー、と東がしかめっ面が変わる。

「いつくんの場合だけはこうつて感じの仮説は出てこないんだ、予測としてはちーちゃん弟だからISがちーちゃんと似た存在つて認識してるんだと……思う」

「……他の仮説とは違いえらく曖昧だな」

「……私にだつて分からないことくらい……あるつ！　そう、たとえばカナ君の性癖とかっ！」

何故か決め顔でそう答えた東にカナードの手が伸び、頭をガシツ掴む。

失敗作とはいえスーパーコーデイネーターであつた時代と変わらない腕力・握力になるまで鍛えたカナードのアイアンクローに東は悶絶の声を上げる。

「あだだだ、割れる、東さん割れた柘榴になっちゃうつ!？」

「……I Sについては分かった、メサイアを止める手段は見つけたのか？」  
「見つけてるから離してーっ！」

東の言葉にカナードは手を放す。

同時に空間投影ディスプレイにメサイアの全体図と内部構造が表示された。

メサイア下部にある動力部に赤く印がつけられている。

「いたた……ごほん、メサイアを止めることもできるけど、ここの施設を残しておく地球のどこかの国家に渡る可能性があるから破壊する方がいいと思う」

東の意見に真とカナードも頷く。

イズモ等の現行技術の粋を集めたものとは異なり、メサイアに使われている技術は明らかにこの世界の技術を大きく超えたC・Eのものだ。

宇宙開発が進んでいないとはいえ、残しておくのは危険すぎる。

「この動力部を意図的に暴走させて爆破すればメサイアは爆散、破片も大気圏で燃え尽きるレベルに砕くことができるよ」

「どれくらいでできます?」

「自爆まで1時間位に設定できるよ、と言うかした」

束の返答と共にコントロールルームに動力部に異常発生と警告放送が流れ始めた。

「……脱出するぞ」

束の後頭部を全力で掴みあげ、カナードが移動を開始する。

女性がしてはいけない表情と叫び声をあげる束に苦笑しつつ、真も脱出を開始する。

安全な距離まで離れたイズモのブリッジで、真達は離れていく機動要塞メサイアを眺めていた。

動力部が暴走し、外殻部を爆発が貫き連鎖していく。

そして爆発は中枢部を貫き、主要部分を失ったメサイアは巨大な爆発に飲まれ砕けた。

爆発が予想より小さかった場合、最悪イズモのゴットフリートやミサイル、動けるド

レッドノート等のI Sで破片を砕くことを想定していたがレーダーで感知したところ、地球に落下し被害を出す大きさの破片は見当たらない。

「最悪の場合、メサイアをイズモで押すんだよっ！ とか考えてたけど良かったあ」

その豊満な胸を揺らしつつほっと言葉をもらした束を無視しつつ、真は消えたメサイアを眺めていた。

「……全部終わったんだ」

シン・アスカとしての因縁をようやく全て断ち切った。

それを自身でも確かめる為、言葉に出した。

そして浮かんだのは最後のラクスの表情。

彼女のやったことは決して許されないし、許すつもりもない。

だが、彼女の境遇を哀れに感じている自分がいる。

ならばこの世界で一人くらいは彼女の為に祈ってもいいだろう。

せめて安らかにと、真は目を閉じて祈った。



1日後 宮島

アメノミハシラに帰還した真達は、イズモを返却し大型シャトルに乗り換えて地球へ帰還していた。

行きに乗ったシャトルよりも大型で、投降したアスランや捕えたスコールを乗せても問題ない代物だ。

シャトルはアマノイワトの滑走路に着陸、地球に残留した簪や一夏達がI Sで出迎えてくれている。

シャトルから真が降りると、彼の胸に飛び込んでくる女性がいた。

「真っ!!」

飛び込んできたのは簪であった。

もはやタツクルにも近い勢いであったが、それでもしつかりと彼女を受け止める。

「ただいま、簪」

「うんっ、うんっ……おかえりっ、真……っ!」

嬉し涙を流しつつ、簪が真に微笑む。  
最愛の彼女を優しく抱きしめた。

## Epilogue 日常

歌姫の騎士団との決戦から1週間後――

歌姫の騎士団襲撃により、倒壊した設備等は依然として修復中ではあるが、休校となっていたIS学園は授業を再開していた。

それに伴い帰国していた生徒達も学園に戻ってきており、真達は平穏な生活を続けている。

生徒の中には、迫る期末テスト対策に終始している者もいるがそれは一部分のみである。

そんな中、1年1組では新たに転校生が紹介されていた。

その転校生は真達が非常によく知った【女の子】

一部ではフランスからの貴公子などと呼ばれ、3人目の男性搭乗者として真や一夏とも親しい存在であった【彼女】は、女子用制服を身に纏っている。

「改めまして……」シャルロット・デュノア」です、皆、よろしくお願ひします」

シャルロットが笑顔で頭を下げ、皆に告げる。

「シャルロットさんとはある事情により男性として入学していましたが、本日からようやく女性として入学が許可されました、皆さん、よろしくお願ひしますね」

副担任の真耶が真達に告げる。

真や一夏は真相を楯無とカナードより聞かされているため驚きはしなかったが、教室は一瞬で驚愕の声に包まれてしまった。

シャルルがシャルロットとして振る舞えるようになったのは、デュノア社のＩＳ部門からの撤退と更識家からのフランス政府への圧力である。

デュノア社は歌姫の騎士団とつながりを持っていたのだ。

正確には現社長、ジョルジュ・デュノアの妻、アタリーがラクスと繋がっており、無人機GATシリーズの生産を承っていたのだ。

カナードによると隕石に偽装させて地上に送っていたPS装甲材の大部分はデュノア社に流れており、後々GATシリーズの技術を得てデュノア社を建て直す算段であつ

たとの事だ。

またシャルロットが以前真と一夏に話したモルモットの件は全てアタリーの指示によるものであったとの事である。

女尊男卑の風潮と歌姫の騎士団と言う後援組織により、ジョルジュの社内での立場は傀儡そのものであった。

だがジョルジュは、愛人との子ではあるが大切な娘のシャルロットにこれ以上アタリーの手が伸びる事を嫌い、そして歌姫の騎士団から保護するためシャルルとしてIS学園へ送った、と言うのが真相だ。

ラクスが倒れたことで歌姫の騎士団は瓦解、それに伴いアタリーは精神を病んでしまった。

同時にデユノア社はIS部門からの撤退を表明している。

加えてデユノア社と共謀していたフランス政府も歌姫の騎士団からの接触を受けていたらしく、シャルロットの二重スパイ行為から得られた情報と合わせて証拠として更識家が秘密裏に突きつけたことにより、シャルロットは解放されたのだ。

またジョルジュは数日前にシャルロットと和解しているとの事である。

余談であるが、投降したアスランとスコール、捕虜になったオータムとマドカは束とカナードがその身柄を拘束している。

情報を引き出して何をするかは彼等しか知らないが、しばらくは彼等に安息はないだろう。

教室内では箒に一夏が女子と知っていたのかなどと詰め寄られている。それを見てシャルロットが微笑んでいる。

「……よかったな、シャルロット」

大切な友人が心からの笑みを浮かべることができている事に、真も笑顔を浮かべていた。

数日後

喫茶 竜宮

「飛鳥先輩、この雑誌見ました？」

短髪の少年がテーブル席で向かい側に座っている真に問いかける。

彼が手に持っている雑誌の表紙には自分がI S「デステイニーガンダム・ヴェス

「ティージ」を展開した写真が使われている。

「やめろ、剣司、その雑誌は俺に効く」

「でもカツコいいじゃないですか、光の翼がバアーツとっ！　いいなー、俺も乗れればなー」

剣司と呼ばれた少年が持つ雑誌は I S の情報誌であり、第二形態移行した真の I S について特集が組まれているのだ。

その中にはいつ取ったのか、模擬戦中の写真もあり剣司はそれを指さしつつ真に見せている。

当の真は恥ずかしそうに雑誌を手で払いつつ、テーブル席に広げられている問題集に視線を移す。

「……剣司、3問目の公式間違ってる」

「えっ、マジですかっ!?!」

雑誌を隣の席に放り投げるように置いて、剣司は自身の問題集に視線を移す。

そしてゲツと言う声をあげて剣司は肩を落とす。

真が何故この喫茶 竜宮にいるかと言うと、簪を待っているのだ。

正確には日出支社から呼び出され、要件を済ませて帰ろうとした際に、簪が別件で呼ばれてしまったため手持無沙汰になってしまったのだ。

ちょうど後輩達がバイトをしている喫茶店が近くにあったため、簪が来るまではここで時間をつぶそうとしているのだ。

簪に場所を伝えた後は適当にコーヒーを飲んで時間をつぶしていたところ、後輩の一人である剣司に勉強を見てくれと言われたのは予定外であったが。

「剣司、あまり飛鳥さんに迷惑をかけるなよ」

左目に傷がある少年がウエイター姿で現れ、突っ伏している剣司に言葉を投げる

「総士、久しぶり……あ、【皆城コーヒー】おかわり」

「お久しぶりです、飛鳥さん……それと【普通】のコーヒーですね」

少々語気を荒くしつつ、総士は真を確認する。



この喫茶店では調理した人間の名前を品につける習慣の様なものがある。総士としてはこの習慣は恥ずかしいものであるため、中々つけようとはしないが。

「ならそれでいいよ」

「分かりました……しかし飛鳥さんも大変ですね、日出工業のテストパイロット……高校生が二足の草鞋とは」

「もう馴れてるからそこまで大変じゃないさ、それにお前等にも顔見せようかなって思ってたんだ」

「成程……僕としても男性搭乗者の飛鳥さんの話には興味があります」

「お、意外、総士がメカに興味持つなんて」

「別にいいじゃないか……ISは現代では最先端の科学技術の結晶……実にテクニカルだ」

剣司の言葉に少々拗ねたように総士が返す。

それに真と剣司が苦笑していると、総士の背後から黒髪の少年が手にコーヒーを持って現れた。

紺のエプロンが異様に様になっている、優しい雰囲気を持つ少年だ。

「総士、注文」

「つ、すまん、一騎……飛鳥さん、注文は……？」

話に夢中で仕事の途中であったことを忘れていた総士は慌てて注文票を取り出す。

しかし簡単な注文であったため、注文票に記載していないのがまずかった。

その様子に一騎と呼ばれた少年がため息を出しつつ、苦笑して真にコーヒーを渡す。

「……ほんと不器用だな、総士……はい、コーヒーです、飛鳥さん」

「ありがとう、まあ引き留めてた俺も悪いさ、一騎」

一見兄弟ではないかと言うくらい、真と一騎は外見が似ている。

真の方がより髪の毛の色が濃いのと、目の色が異なっているので判別は可能であるが。

一騎が総士の手に持っていた注文票を見て何かに気づいたように告げる。

「あれ、今日はカレーとか食べないんですか？」

「俺も食べたんだけど、この後約束してるんだ……一騎カレー、また今度にするよ」  
「おつ、そういえば飛鳥さん、彼女できたんですよねっ!? その人と食べに行くつてこと  
ですかっ!？」

一騎にそう返した真に剣司が食いつく。

「以前相談してもらいましたね、どうなんですか? どんな女性なんですか?」

総士も剣司の言葉に便乗して真に食いついてくる。

真の記憶では、総士は男女関係についてここまで積極的になる男ではなかった気がするが年頃なら仕方ないだろうと納得する。

「まあ、簪は……大切な人だよ」

「おお……それにしても簪って名前凄いですね、珍しいというか」  
「確かに、女性の名前としてはあまり聞かないが……」

剣司と総士の言葉にまあ、確かにと相槌を打ってコーヒを一口飲んで一息つける。

「じゃあ、どこまでいったんですか？ デートしたんですよね？」

劍司の言葉に危うく口に含んでいたコーヒートを噴き出しそうになったが、何とか飲み込む。

一瞬脳裏に【真しか知らない彼女の顔】が浮かんでしまった為に軽く頭を振った後、ジト目で劍司に視線を送る。

「……ノーコメントで」

「流石に根掘り葉掘り聞きすぎだ、劍司」

「あはは……すいませんでした」

劍司が頭を軽く下げて謝罪する。

同時に喫茶店の扉が開いて件の少女、簪が店内に入ってきた。

そして真と目があう。

簪が真のいる席に向かう。

「お疲れ」

「うん、ごめんね、待たせた？」

「いや、こいつらと話してたから」

真が視線で一騎、総士、剣司を紹介する。

3人は軽く会釈を簪に送る。

「初めまして、皆城総士です」

「近藤剣司です」

「真壁一騎です」

俺の後輩達、1つ下だよと真が補足する。

「初めまして……更識簪……です」

少々恥ずかしそうに簪も自己紹介を行う。

それを確認して真が切り出す。

「んで、要件は何だったんだ？」

「実はね……【飛燕】もあのゲームに追加したいからその確認だって……今度ボイス取るからとか」

「……あれか」

苦笑して真が返す。

真のデスクトップにもまた、同じように「IS EXVSFB」に追加されているのだ。しかもボイスは優奈が真に強制的にアフレコをさせたものが使用されているというおまけつきだ。

「……さて、そろそろ出るか、どこで飯食べる？」

「……なら、此処じゃダメかな？ ほら、カレーとかもあるみたいだから」

店の壁にはメニュー表が張られており、確かにちゃんとした料理もここで食べられる。

その提案に真は軽く驚く。

「別にいいけど……」

「それに真の昔の話とか聞いてみたい……ダメかな？」

「……よし、一騎、カレー2つ頼む」

簪のお願いを断る理由は真にはない。

そういつて一騎にカレーの注文を行う。

「分かりました、カレー2つですね」

「なら俺も、カレー頼む」

「俺もだ、それに一騎、俺達はそろそろ休憩時間だ」

「……はあ、分かったよ、俺も食べるかな、溝口さんに聞いてみる」

苦笑しつつ一騎が厨房に戻る。

その後真の中学時代や思い出などを話しながら5人は食事を進めたのであった。

数日後の放課後  
自室

「部屋替え……？」

ゲームを途中で停止させた簪の言葉に真が頷く。

シャルルがシャルロットになってから、彼女は一夏の部屋から別の部屋に移っていた。

そのため一夏は現在1人部屋、男女共有の部屋を使っているのは真だけと言う状況であった。

そしてようやく1人部屋を用意することができたため、真にも週末にかけて引っ越し準備を行ってほしいと真耶から連絡があったのだ。

「……そっか」

明らかに簪の表情が暗くなる。

その気持ちは真も同じであったからだ。



「……本当は男女同室なんておかしいのにね」

「ああ、いつの間にか……簪と一緒に生活するのが当たり前になってた」

「……うん、私も」

すぐ傍に想い人がいる、そして同じ部屋で過ごす。

学生では絶対にする事のない、いわゆる「同棲」の状態。

本来はそれがおかしいことのはずであった、だが2人の中ではすでにそれが自然となっていたのだ。

「……部屋は近い？」

「ああ、すぐそこだけど……今よりは不便になるかな、今度合鍵渡すよ」

「……うん」

「準備、するよ」

「……うん、手伝う」

真が自分の机の上にある荷物を片付け始める。

それに簪も手を貸す。

そのまま2人とも黙って5分ほど荷物を片付け、彼の机の上の荷物片付け終わった時であった。

簪が真の背中に抱き着いてきたのだ。

「……やっぱり嫌……」

「……そりゃ俺も嫌だけど、流石に指示に従わないのはまずいって」  
「……」

分かってはいるのか、コクリと彼女が頷くのを感じる。  
そして言葉が続ける。

「……真を感じたい」

「っ……簪」

簪の言葉——

「……離れたくない」

簪は真に依存していると言ってもいい。

だが真はそれを受け入れている、そこを含めて彼女を【自分だけの花】と感じているのだ。

少しだけ力を入れて彼女の抱擁を解き、逆に優しく抱きしめる。

「……ごめんね、私、めんどくさくて」

「いいさ、俺はそこ含めて簪が好きだから」

「……ありがとう、真」

微笑む彼女をひよいと抱え上げる。

向かう先は――

この日、2人は夕食を食べ損ね、本音にお菓子を恵んでもらったとか。

## E p i l o g u e 未来

歌姫の騎士団との決戦から一カ月が経った。

IS学園の予定として行われる事となっていた外部研修——所謂臨海学校については、学園側の要請により中止される事となっている。

臨海学校を楽しみにしていた多くの生徒達からは落胆の声が上がった。

だがその原因は襲撃事件にあり、安全を期すためと言われてしまえば枕を濡らすしか選択肢はないのが現実であった。

せめてもの慰みは臨海学校が実施される予定であった数日間分の臨時休日が発生した点であろう。

もつとも間近に迫っていた期末試験への対策をほとんどの生徒は取っていた。

余談であるが、真達の中で赤点を取った者はいなかった。

一番危険であった一夏も皆に協力を求めたことで中々の結果を残せたと喜んでいた。

また、試験結果が配布された日の千冬は異様に上機嫌であったとか。

閑話休題。

某所 更識家前

季節は夏に移っており、日本は例年通り猛暑に包まれている。

IS学園はすでに夏季休暇——つまりは夏休みに入っており、多くの生徒達は帰省、帰国等を行っている。

真と簪はこの休暇期間を利用してある目的の為に、彼女の実家に訪問しているのだ。

【更識】と書かれた木製の表札に、SP付きの大きな門、数百mは続いている立派な塀、坪面積にすれば相当の数値をたたき出すであろう家の前に真と簪は私服姿で立っていた。

C・E. のプラントの中でもこれほどの豪邸は滅多に存在していないだろう。

もっともコロニーという限られた敷地の中でこれほどの豪邸を建てる意味は早々ないだろうが。

真は簪の実家のあまりの豪邸ぶりに目を見開いていた。

「……凄いな、簪の家って」

「たまに帰ってくると私もそう思う……こっちだよ、真」

苦笑する簪に手を取られつつ、門に向かう。

真が更識家に訪れた理由、それは簪の両親への「挨拶」である。

簪と恋仲になりしばらく経ち、真にはある目標ができていた。

それは彼女を「幸せ」にすること。

現在の真は高校生であるが将来について様々な事を考え始めていた。

戦うしかできなかった自分に簪を幸せにするために何ができるのか。何が必要なのか。

そのための第一段階として、簪の両親に報告することにしたのだ。

もちろん「正式な交際」についての許可をもらう為だ。

更識家 客間

簪の案内で客間に通された真は目の前に出されたお茶を飲みつつ、椅子に座りつつ待機していた。

客間には同じく隣で待機してくれている簪に加えて、虚と本音が後方の壁際で待機している。

「待たせてしまい申し訳ない」

男性の声——おそらくは簪の、楯無の父親で有ろう人物の【声】

だが真はその声に聞き覚えがあった、いや、聞き覚えどころではなく【よく知った人物】の声であつた。

潔白とは言えないだろうが戦争が続く、C. E. 世界を何とか平定させようとナチユラル・コーデイネーターの垣根を取り払おうとした人物、あと一步まで迫り、歌姫の騎士団に討たれた最高評議会議長。

襖が開くと黒の長髪に和服姿の男性が客間に入ってくる。

ゆつたりと和服を着ている為分かりにくいが長身細身の体つきだ。

しかし、歴戦の傭兵でもあつた真から見れば限界まで鍛えられた体であるのがよく分かる。

その彼の後ろに続くのは楯無だ。

(デュツ、デュランダル議長っ!?)

真の目が驚きに見開く。

そう、簪と楯無の父親と思わしき人物はかつての恩師、【ギルバート・デュランダル】に瓜二つであつたからだ。

その様子に彼が実に愉快そうに笑みを浮かべた。まるでその展開を予想していたかのように。

「……初めまして、いや【久しぶり】が正しいかな、真？」

彼の表情と言葉に真は確信した、彼はデュランダルであると。

久しぶりと言うその言葉に隣の簪と楯無、彼女等を通して虚や本音が驚愕の表情を浮かべる。

布仏家にも【C・E】の事については情報が渡っているのだ。

「お父様……!？」

「刀奈、あまりそう驚かないでくれ、私が君の父であることには変わらないよ」

さて、と彼が腰を下ろす。

「まずは自己紹介からさせて頂こう、先代 16代目更識楯無の【更識蔵人】だ」



口元に笑みを浮かべつつ蔵人が真に告げる。

「ちなみに刀奈と言うのは当代の楯無、彼女の本名さ」

楯無——いや、刀奈に向かって微笑みつつ告げる。

「……貴方はデュランダル議長なんですね」

蔵人が頷く。

「……さて、よければ教えてくれないかい？ あの後C・E・がどうなったのか……そしてこの世界のラクス・クラインはどうなったのかを」

「……わかりました」

メサイア戦役後からネオ・ザフト戦役の集結までを、利香から聞いたC・E・が1つに纏まったことを、そして歌姫の騎士団との戦いについて、かいつまんで蔵人に説明する。

「……大変だったようだね、真」

自身が死亡した後にもやはり戦争が起こったかと少々疲れたような様子で蔵人は告げる。

「……まあ、色々……」

「私が【ギルバート・デユランダル】の記憶を思い出したのはつい先日……故に君達を助けることができなかった……先に謝罪しておこう」

そういつて蔵人は頭を軽く下げた。

「あ、いや、それについては仕方がないじゃないですか、そのお気持ちだけで充分ですよっ！」

まさかいきなり謝罪されるとは思ってもみなかった真が慌てて告げる。

「お父様が真の話してた……デュランダル議長だったなんて」  
「確かに驚愕の事実ね」

いつの間にか簪の隣に移動していた楯無——刀奈が答える。

「ギルバート・デュランダルであると共に、更識蔵人でもあるのだがね……それに夢破れた男の無残な過去なんて聞くべきではないよ……いや、待てよ、その方が妻や娘に構ってもらえるからいいかもしれないかな……そんな父親はいやかね？」

彼の質問に刀奈と簪は苦笑いで答えているが、冗談だよと蔵人が返すと笑顔を見せた。

蔵人が一瞬遠い目をし、とんでもない事を口走り始めた。

「しかしだね、簪からボーイフレンドができたと話聞いたときは大層驚いたよ。男性搭乗者と言ってもこの馬の骨とも知れない男に大切な愛娘が奪われるかもしれないと思つた途端、殺意が沸いたものだ」

笑みを浮かべているが目が据わっている。

「しかもその男と同室だという言葉にも度肝を抜かされた、記憶を思い出さなければ I S 学園の風紀はどういうんだと直談判をしようと思きかける寸前だったよ」

捲し立てる蔵人の様子を苦笑しながら真は見ていた。

真以外の 4 人も同じく苦笑しつつ見ている。

(なんか議長……明るくというか雰囲気がいぶ変わってるなあ……)

ネオ・ザフトが収集した資料の中にデュランダルの私的な面を含めた資料が残っていたことを真は思い出していた。

遺伝子工学者であった彼は、当時交際していたタリア・グラディスと遺伝子的な相性により子を残せないことが判明し結果的には破局していたらしい。

コーデイナーターは第 2 世代から出生率が低下し、第 3 世代では第 2 世代に輪をかけて低下するという種としては欠陥ともいえる特徴を持っている。ゆえにプラントでは遺伝子相性のいい者同士による婚姻制が敷かれていたのだ。

デュランダルは自分の様な存在を無くすためにデステイニープランを推し進めていった経緯があったのだ。

だがこの世界での彼は違う。

C・E・でいうナチュラルであり、種としての欠陥はない。

刀奈と簪の態度を見る限り、良好な家族関係を気づけているのだろう。

だからと言って親バカになっているとは想像つかなかったが。

「さて……私の愚痴を聞きに来たわけではないだろう？」

ようやく愚痴を言い終えた蔵人が笑みを浮かべて真に問いかける。

「蔵人さん、今日はお挨拶に伺いました」

真は蔵人から視線を外さず彼の目を見ていう。

「俺は……簪さんとお付き合いをさせて頂いてます」

「……」

真の言葉を蔵人は黙って聞いている。

「俺には戦う事しかできなかつた……けどそんな俺を変えてくれたのが、簪なんです、彼女は必ず幸せにします、だから簪とのお付き合いについて許可を頂きたいんです」

「お父様、私からもお願いします……真は私を変えてくれました、折れていた私の翼を支えてくれた人なんです、ずっと彼と一緒に……一緒に歩いて行きたいんです」

真と簪が共に立ち上がって深く頭を下げる。

背後で目をキラキラ輝かせつつ、本音が「わあ」と声を洩らし、姉である虚に注意されていた。

「……」

蔵人は数秒思案を行ってから、彼も立ち上がる。

「2人の気持ちは分かった……簪、君の選択に後悔はないのだね？」

彼の視線を向けられている簪は、視線に優しさを感じていた。

「はっ」

簪が即答する。

蔵人は次に真に視線を移す。

「真、君は娘を……簪を幸せにすると私の前で誓えるかね？」

「はい、誓えます」

真の紅い瞳と蔵人の黒い瞳が交差する。

「……いいだろう、2人の交際を認めよう」

蔵人が笑みを浮かべつつ答える。

その言葉に真と簪が顔を上げて、互いの顔を見合わせる。

「愛した者と添い遂げる事が出来なかつた苦しみは骨身に染みている、そんな苦痛を愛しい娘に味わつてほしくないのね……それに」

真の肩にポンと手を置く。

「真、今の君は私が知っている君よりも大きく成長している……娘を頼むよ」  
「はいっ！」

笑みを浮かべる蔵人に真が力強く答える。

その後、真は更識家の人間に食事に誘われる事となつた。

その際に簪と刀奈の母親にも挨拶をし、許可を貰うこととなつた。

余談であるが、食事の席で真が話した男性搭乗者の条件に蔵人が食いつき、

赤いISならば乗りたいと話していたとかいかなかつたとか。

(無論、男性搭乗者の条件については口外しない様約束してもらつたが)

ちなみに更識家と同様に飛鳥家にも交際については報告を行っている。

その際、妹である真由が異様に簪に懐いてしまうとと言う微笑ましい場面があつた。



真由は仮面ライダーが大好き、簪も特撮が大好き、似たもの同士で話があったので真由としてはほっとしていたが。

正式な交際許可をもらった夏休みも過ぎ去った休日――

9月 IS学園 真の自室

自室の為ラフなタンクトップ半ズボン姿の真に、まだまだ暑いいため薄着のワンピースを着た簪。

冷房を適温まで利かせた室内で真と簪は休日をのんびり過ごしていた。

「……………うーん」

先日誕生日を迎え、晴れて16歳となった真が自身の机の上に広げられた資料に目を通しつつ唸っている。

「どうしたの?」

ソファアーに腰かけて漫画を読んでいた簪がその様子を見て歩み寄る。

簞が真の机の上に置かれている資料にぎつと目を通す。

置かれている資料は、2人の所属企業である日出工業が建築した宇宙ステーション「アミノミハシラ」の資料ともう一つ。

机の上に置かれている共有のタブレットには、円筒型の巨大建造物のイメージ図が表示されている。

「コロニー……【ヘリオポリス】？」

【ヘリオポリス】

かつてC・Eの中立国【オーブ首長連合国】が建設した中立コロニーだ。

中立と言っても内部では、当時の連合が戦況の膠着を打ち破るために開発した新兵器【MS】——【GATシリーズ】を開発していた。

C・Eのヘリオポリスは、GATシリーズをザフトが奪取しようとした際の戦闘により崩壊してしまっただが。

「ああ、優菜さんから資料もらったんだ」

「どうして？」

「優菜さんから【コロニー計画】ってのに協力してほしいって言われててさ」

コロニー計画。

それは世界中の企業が一丸となって停滞している宇宙開発を再度推し進める為の計画である。

IS本来の使用目的に合致し、人口増加や女尊男卑思想蔓延による失業などの社会問題についての対応策でもある。

日出はすでに秘密裏とはいえ軍事用宇宙ステーションである【アメノミハシラ】を建設している為、その主導を担っているとのことだ。

「どうして真が？」

「C・E.はこの世界よりもコロニーが身近な場所だった……俺にはその記憶があるし、宇宙にも長い間いたからその時の経験を活かしてほしいってお願いされたんだ」

成程と簪が頷く。

確かに日出には真や利香、ジェーンや優菜などC・E.の経験を持った人間がいる。

全くの手探り状態から計画が始まるより、実際に体験した人間がいれば飛躍的な速度

で計画は進むだろう。

特にコロナーで日常生活を行っていた経験などは、コロナー内部の構造をどうすればいいかなどに活かすことができる。

技術者からしてみれば喉から手が出るほど欲しい経験だろう。

「それに、俺にも【メリット】のある話なんだ」

「【メリット】？」

ああ、と真が頷く。

「今の俺の立場は日出所属のテストパイロット、形式としてはアルバイトに近いけど、この話を受ければ正社員として、卒業後は日出に就職できるんだ」

そう、真がこの話を受けた理由はI S 学園を卒業した後の事を考えてのことだ。

「奴等との戦いは終わった、なら今の俺に何ができるのかってよく考えたんだ……戦うだけじゃなく俺じゃなきゃできないこと」

IS学園に入学することとなった真は今後の目標と言う進路を見出せずにいた。しかし今は違う、明確な目的を持って自身の進む道を見ることができている。

「それがこのコロナ計画に加わる事、ISも本来の用途で使えるし……まあ、いくら経験があっても専門的な知識はほとんどないから、勉強しないとイケないんだけどさ」

そのための資料さと真は補足して、手に持っていた用紙を机の上に置く。

「色々考えてるんだね、真」

「まあ、一時期傭兵もしてたしな……仲間達から俺のプランはハイリスクノーリターンがどうか色々といわれたよ」

苦笑しつつ真が返す。

そして簪の瞳を見つめつつ、真は告げる。

「……こんな俺だけどさ……ずっと傍にいてくれ」

「……うん、大丈夫だよ、真」

互いに微笑みあつて、手を握る。

そして簪が告げる。

「真が私を幸せにしてくれるなら……私一人だけじゃなくて……私も真を幸せにするから」

「……ああ、ありがとう」

そつと顔が近づき——触れ合つた。

# FINAL PHASE 愛に溢れて

この世界での【戦乱】、その【全て】が終わって数年後――

某国 某所 地下施設

黒のＩＳスーツを身につけた【長身の青年】が倒れた人間の生死を確認している。

倒れた女性の喉元に青年が背後から突き立てたナイフが深々と突き刺さっており、すでに事切れていた。

倒れた女性を一瞥し、青年【カナード・パルス】は近くの端末を起動し、展開された空間投影ディスプレイに目を通す。

そして目的のモノを見つける。

『見つけたぞ、束』

『さっすがカナ君！ 潜入任務なんてもう慣れたもんだねっ！』

待機形態のドレッドノートを通じて、束にプライベートチャネルを開く。

『見つけた情報だが……どうやら「レクイエム」の基礎理論の一部だな』

『つ……カナ君、お願い、全部壊して』

『分かっている、サーバー室は破壊した……後はこの端末だけだ』

ふざけていた束の様子が一変し、真剣な声色と表情に変わる。

この数年、束達は「亡国機業」を含めたテロ組織をひたすら潰す、火消しの活動を行っている。

その理由として、捕虜となったスコールが洩らしたのだ。

ラクス一派は亡国機業以外のテロ組織にもC・Eの技術の一部を流していたと。

ミラージココロイドや量子ウィルス等、亡国機業レベルの技術力、資金力がなければ運用できない代物の基礎理論の一部程度だが確かに流れていた。

万が一、実物が作られたら大事である。

そのため情報が流れていた痕跡のある組織は片っ端から潰しているのだ。

潰した組織の数はすでに両手の指では数えきれないほどに達していた。

『行くぞ、ドレッドノート』



カナードが〔ドレッドノートH〕を展開する。

この数年でドレッドノートは大きくアップグレードされ続けている。

展開したドレッドノートHは以前と比べると少々表面装甲が減っていた。

また背部のHユニットも若干小型化されている。

Hユニットも消費エネルギーの効率化を行い、取り回しの悪さもサイズを小型にすることである程度解消されている。

唯一大きく変更されているのは両マニピュレータだ。

マニピュレータを覆うように流線型の手甲の様な武装が追加されており、ALハンディは手甲部分に組み込まれる形となっている。

この武装の名は〔ALマニピュレータ〕

ALを従来よりも効率よく扱う為に束が開発した武装である。

手甲部分がALハンディと連動、少量のエネルギー消費で球体状のAL展開を実施できるようになっていた。

またカナードがよく使用するALランス等の技に必要な発生率の調整も簡易に行えるようになっていた。

ALマニピュレータからALランスが出現する。

以前よりも少ないエネルギーで高密度に展開されたA Lランスは、たやすく端末を切り裂き破壊する。

『端末は全て破壊した、帰投する』

部屋に存在していた情報端末全てを破壊したカナードが呟くと同時に、チャンネルが繋がる。

『カナード様、脱出準備が完了しました。外で待機しています』

美しい銀髪を腰まで伸ばした美少女——以前よりも少し成長したクロエから通信が繋がった。

以前はスラツとスレンダーな体系であった彼女であるが、現在は【腹部】が少し膨らんでいた。

またクロエはプレアとの邂逅後、非常時以外は閉じていた目を常に開けるようにしていた。

『……あまり無理はするなと何度も言っているだろう、クロエ。ラキでも連れてくればいいんだ』

彼女の姿を見たカナードは苦笑しつつも告げる。

彼女に向けるカナードの笑みは、数年前よりも柔らかいものであった。

以前の彼を知っている人間が見れば、本当にカナードかと尋ねることは間違いないだろう。

『お前の命はすでにお前だけのものではないんだ。それは忘れるな』

『……はい』

彼の言葉に笑みを浮かべる。

『ハイハイ、さっさと脱出してよー、ストロベリってないでさー！』

東の言葉に我に返ったカナードはドレッドノートを浮遊させる。

『……俺も変わったな』

そう呟いて施設の天井をA.L.ランスでぶち抜きつつ、離脱にかかった。

某国 紛争地域

「へっくし」

髪を伸ばし、ポニーテールに髪型を変えたラキーナが可愛らしいクシヤミをする。

アスランとの戦いで負った負傷は完治しており、腹部にも小さな火傷痕が残った程度であった。

現在彼女がいるのは砂漠地帯、紛争が絶えず起こっている地域だ。

一旦手に持っていた支援物資の入った段ボールを地面に下ろす。

「風邪か？」

目の前に同じように食糧などの物資を持った「アレックス・ディノ」——否、「アスラ

ン・ザラ」がラキーナに尋ねる。

「ううん、誰か噂してるんだよ……多分、兄さんだろうけど」

苦笑しつつ、下ろしていた段ボールを拾い上げる。

「カナードか……彼は顔に似合わず家族を大切に作る人間の様だし、噂位はするんじゃないか？」

「……アレックス、今度兄さんに言っておくよ？」

「まつ、待て、カナードにまた嫌味を言われるのは……勘弁してくれ、ラキ」

この歳で生え際が……などと言っているアレックスは無視して、段ボールを運んでいく。

ラキーナとアレックスは自身にできる事として紛争地域の平定／支援活動を行っている。

紛争によって発生する難民などの食糧支援、難民が戦闘に巻き込まれそうになった場合はISを用いての鎮圧活動等を行っている。

少しでも今ある命を守りたい、ラキーナから束に話を持ちかけこの活動を数年続けている。

紛争の根本的な解決にはこの活動は繋がらないだろう。

だがこの活動で少しでも対話への道が切り開けるはずだと、2人は信じている。

アスランについては、ラキーナが見ていけば問題ないだろうという判断だ。

今後はアスラン・ザラではなくアレックス・デイノとして生きていくと宣言していた。もともとラキーナは数ヶ月に1度、とある用事からフランス国家代表からメカニックとして召集を受けることがあるのだが。

その理由は彼女が専属の整備士であることが1つで、もう1つは「野暮」というものだろう。

「さて、食事の準備しないとね」

「子供達を呼んでこよう」

「分かったよ、アレックス」

難民の子供達、人達の食事の準備を行う2人の顔には笑顔が浮かんでいた。

イギリス オルコット家 正門前

夜の闇中で1人の女性が誰かを待つように立っていた。

「……遅いですわっ！」

自身の実家の正門前で、蒼いドレスに白いストールを身に着けたセシリアが腕時計をチラリと見て叫ぶ。

IS学園卒業後、国家代表となり立派な美女に成長した彼女は、優雅であることを心にかけているが今回ばかりは別である。

「本当に……いつもこうなんですもの」

ため息がもれ、苦笑が浮かぶ。

せっかくの食事の機会だということの心の中で愚痴を零す。

すると聞こえてくる、空気を振るわせるエンジンの排気音。

男性が乗った大型ネイキッドバイクがセシリアの前で止まる。

「よう、セツシー、遅れて悪かったよ」

身長2mに近く特徴的なバンダナをつけた筋肉質の男性が、バイクに乗ったままセシリアに謝る。

「全く……時間を守らないのは紳士ではないのですよ？」

「お、なら問題ないな。俺、紳士じゃあねーしよ」

男性が浮かべた陽気な笑みに、待たされていたというのにセシリアの苛立ちはいつの間にか消えていた。

男性が腕時計を見て笑みを消してやっしまったという顔になる。

「おっと、そろそろやばいな、乗れよ、セシリア」

「……もう、分かりましたわ」

男性から受け取ったヘルメットをかぶり、バイクに身体を預ける。

遅しいその背中にそっと手を回す。



彼の首筋には特徴的な星型の痣があつた。

「しつかりつかまつてろよ」

「ええ、分かりましたわ」

回した手に力を込める。

そして2人を乗せたバイクは夜の闇に消えていく。

漆黒の宇宙空間に浮かぶ、円筒状の物体。

明らかに人工的な建造物であり、備え付けられたミラーによつて太陽光を取り込みつと回転している。

これがコロニー計画で建造中のコロニー〔ヘリオポリス〕である。

ヘリオポリスの完成度は約8割といった段階であり、すでに内部には植物などが植えられ、居住に必要な設備も建てられはじめている。

そのコロニーの周辺を紅く染める存在があつた。

紅い光の翼を広げるIS——〔デステイニーガンダム・ヴェステイージ〕を身に纏つた真だ。

身に着けたISスーツのデザインはネオ・ザフト戦役時に身に付けていたパイロットスーツと同じものになっている。

また身長も同じく180cmを超える程までになっていた。

デステイニーを通してチャンネルを開く。

通信先は現在の母艦であるイズモであり、イズモはヘリオポリス内の艦船用ドッグに泊められていた。

チャンネルを開くと、栗毛に長髪の女性がデイスプレイに移る。

現在の上司である「小原節子」と言う女性だ。

真はIS学園卒業後は大学に進学、卒業後は日出工業に正式に入社し、現在はコロニー計画に関わる技術者兼男性搭乗者と言う立場にある。

コロニー計画については初期段階から関わることができていた。

『節子さん、飛鳥です、デブリの除去完了しました』

『ありがとう、真君、イズモに戻ってきてもらえるかな？』

『了解しました、戻りますね』

紅い翼を翻し、デステイニーがヘリオポリスのドッグに向かう。

真がISを用いて出撃していたのはヘリオポリス周辺のデブリ除去の為であったのだ。

イズモ 艦橋

「お疲れ様、真君」

「ありがとうございます、節子さん」

イズモはヘリオポリスから出航し、現在アメノミハシラまで向かっている。

節子がドリンクを手渡し、ISスーツ姿の真はそれを受け取る。

「もうすぐ……コロニーも完成だね」

「ですね……長かったはずなのにあつという間って感じですよ」

「ふふ、そうだね」

他愛のない雑談をした後、節子が切り出す。

「あ、そうだ。真君、有休全く使っていないでしょ？」

節子からの指摘に、あつと言葉を洩らす。

「いや、まあ……ヘリオポリスの建造が落ち着くまではって思ってたんですが……」

「もう……地球には簪ちゃん達がいるんでしょ？」

「……いいんですか。節子さんまで？」

「……私も殆ど使えてなかったから、ね？」

可愛らしく舌を出しつつ、自身に告げる上司に苦笑しつつも高揚していた。

実際、2週間程度宇宙にいるのだ。

もちろん地球にいる【家族】には許可を貰っているが、久しぶりに会える事に高揚するのは無理もない。

「分かりました、アメノミハシラに着いたら準備します」

「うん、それがいいよ」

節子の頷きに笑みで返す。

それから1日経って――

宇宙から帰還した真は引継ぎと有休の申請を行ってから自宅に向かっていた。

余談であるが、IS学園在籍時よりも宇宙開発は進んでおり、今では少々高価であるが一般人でも宇宙旅行を楽しめる段階にきている。

スーツ姿の真が自宅に向け、足早に住宅地を歩いていると懐の携帯に着信があった。表示されている連絡先の名は「織斑一夏」と表示されている。

「……アイツ、また何かしやがったのか？」

前科がありすぎるため、特定はできなかつたが苦笑を浮かべつつ電話を取る。

『何だよ、一夏』

『おつ、真久しぶり……じゃなかつた、助けてくれ！』

『待て、一夏、話は終わってないぞっ！』

『ちよつと箒、アンタちゃんと捕まえてなさいよっ！』

『あ、誰かに電話かけてるよ、ラウラっ！』

『嫁よ、諦めて降伏しろっ!』

一夏の慌てた声と背後から聞こえる女性4人の声。  
箒、鈴、シャルロット、ラウラの声だ。

『お前、何した?』

『何もしてねえよっ! ただ4人に飯でもどうだつて誘っただけだよっ!』

『お前の箒達に対する何もしてない程信用できない言葉があるかよっ! その4人を一度に誘ったら面倒になることくらいいい加減に学習しろつて!』

叫びつつも友人達が相変わらずなのに笑みが浮かぶ。

現在の一夏は倉持技研所属のIS搭乗者として、織斑千冬の再来と呼ばれる程のIS搭乗者となっている。

そして箒や鈴、シャルロットにラウラはそのサポートとして倉持技研に所属している。

恋する人の為に国すら超える彼女達の行動力に真は脱帽したのを覚えている。

『……いい加減誰か選べよ』

『え、何か言ったかし……ぐわーっ!』

一夏の叫び声と共に通話が切れる。

おそらくISを使った奪い合いに発展したのだろう。

今の一夏の実力なら怪我はしないだろうが。

「……俺は何も聞かなかった」

念のため携帯の電源を切って懐にしまってから真が眩き、自宅に向かう。

「ただいま」

「おかえりなさい、真」

扉を開くとすぐに返事があつた。

自身と同じ紅い瞳であり、最愛の妻——簪だ。

簪は真と同じ大学を卒業後、日出に就職。

日本代表として数度モンド・グロツソに出場しており、織斑千冬以来の日本の国家代表としては2度目となる「ブリュンヒルデ」の称号を得るといふ考えられる限り最優秀な結果を残す事に成功していた。

現在は現役を引退して、真の妻として励んでいる。

エプロン姿の簪が微笑む。

それだけで仕事の疲れなんて吹っ飛んでしまった。

「ご飯、できてるよ」

「ああ、久しぶりの手料理だからもう楽しみで楽しみでさ」

「ふふ、ありがとう」

真が玄関から居間に入る、すると彼に接近する2人の人影があった。

「あー、お父さんだー!」

「おとうさん、おかえりー!」



水色の髪を持つ少年と、黒髪の少女が真の足に抱きつく。両者共に両親と同じく紅い瞳を持っている。

「大地、美羽。ただいま」

少年の名は【飛鳥大地】

少女の名は【飛鳥美羽】

真と簪の子であり双子の兄妹である。

「やったあ、お父さんとご飯だー！」

「お父さん、ご飯終わったら撮ってた仮面ライダー見よ！ 真由おばちゃんが新しいベ

ルト買ってくれたのー！」

「分かった分かった」

2人に囲まれる真の顔には笑顔が浮かんでいた。

その様子を見つつ、食事の準備を進めている簪の顔にも笑顔が浮かんでいる。

(……ああ、幸せだ)

戦うことしかできなかつた自分が今こうして家族と共に過ごせている。  
真にとつては何ものにも代え難い幸せだ。

(この幸せは……絶対に失わせない、俺が守ってみせる)

本当の悲しみを知つた戦士であつた真の瞳は

——愛に溢れていた。

EXTRA PHASE  
PHASE 1 運命 VS 霧纏の淑女①

8月某日 IS学園 第3アリーナ

夏季休暇真っ盛りの8月中旬、IS学園の第3アリーナに生徒達が集まっていた。

その理由は――

『行くわよ、義弟君っ!』

【霧纏の淑女】を身に纏った学園最強（生徒限定）かつ生徒会長の更識楯無が主武装であるランスを構えて叫ぶ。

彼女が相対している相手は【紅い翼】を広げる【デステイニーガンダム・ヴェステイ  
ジ】

搭乗者である真は展開したアロンダイトを構えつつ、眉間に皺を寄せて微妙な表情をしていた。

センサーで背後のBピットの様子を拾う。

展開されたディスプレイには真を応援する簪の姿が映されている。

また観客席には一夏や箒の姿も見える。

『やる気満々じゃないかつ！ アンタって人はーっ!!』

己の心境を吐露し、頭を抱えなくなる思いを叫びつつ迫る楯無に相對する。

何故2人がISを用いた試合を行っているのか、その理由は数日前にさかのぼる。

---

数日前——生徒会室

「ぬわあん、簪ちゃんがかまってくれないー！ 義弟君からも私に構うように言っ  
よーー！」

ぐでーっつと執務用の机に突っ伏した楯無が威厳などまるでない表情で、少し離れた執

務用机で虚の作業を手伝っている真に向けて叫ぶ。

彼女の手には携帯電話が握られており、どうやらSNSを使って簪とやり取りをしていたようだ。

「真君、無視ですよ、無視。ああなったお嬢様は非常に面倒くさいので」

「分かってます、あ、書類できました、確認お願いします」

「ありがとうございます……はい、大丈夫ですね」

真から手渡された各種部活の予算を計上した書類の値をチェックし、虚は笑みを浮かべる。

簪は数日前より実家に帰省中、課題もすでに終わっており少し寂しい思いをしていたところに虚から協力を頼まれたのだ。

なんでも休み明けに行われる「学園祭」に向けての予算等の計上が全く終わっていないかったとのことである。

これについては「歌姫の騎士団」の襲撃により学園運営に少なくない影響が起こったことによるしわ寄せなのだが。

書類仕事は性格的に苦手としている真だが、かなり切羽詰まった状況であった事と歌

姫の騎士団には因縁があつたため、どうしても断れなかつたのが実際である。

「ふう、ようやくひと段落……ありがとうございます、真君。せつかくの夏休みに態々」  
「いや、大丈夫ですよ。こつちも暇してたんで」

「そういつてもらえるとありがたいです」

微笑む虚にやはり性格的にも雰囲氣的にもかつての仲間であるアビーに似ていると真は感じていた。

物思いにふけていると、後頭部に何やら柔らかいものが当たる。

女性の象徴、恋人の簪よりも大きな2つの果実――

「無視はよくないわよー、義弟君っ!」

「ちよっ、刀奈さんっ!?!」

気配を消して楯無がいつの間にか近づき、背後から抱きついてきたのだ。

前世を通じて歴戦の戦士となつた真でも、流石に気を張っていない状況では、楯無程の達人が気配を消していたら気づくことなど不可能である。

また真と簪の正式な交際を蔵人が認めた後、楯無は真の事を義弟と呼び始めている。それに合わせて、真も楯無の事を彼女の本名である「刀奈」と呼んでいる。

こちらについてはそう呼ばないと返事をしないため、呼ばされているが正しいのだが。

### 閑話休題

「どう?..どう? 簪ちゃんよりも大きい?」

後頭部に自身の胸部を押し当てつつ、真を逃がさないように首に腕を回そうとして来る。

「このつ、またかつ、アンタって人はーっ!!」

流星にこれ以上は容認できない真は声を上げつつ、椅子から転げ落ちるようにして彼女から離れる。

「事務仕事は終わったんですよね! なら俺は失礼しますっ!」

そのままの勢いで体勢を立て直して生徒会室を飛び出す。

全速力で走りながら背後を振り返る。

刀奈は追ってきていなかった。

「…………ふう、勘弁してくれよ、ホント」

真が頭を悩めるのはこのスキンシップの頻度だ。

正式に更識家に交際を許可された後、なにかとこうして密着するようなスキンシップを彼女は多く行うようになっていた。

最初の内は笑ってあしらっていたが流石に頻度が多すぎる。

一度簪に密告して釘を刺してもらった必要があるかもなど真は考えていた。

「あーら、逃げられちゃった……………残念」

「…………お嬢様、流石にやりすぎでは？ 彼は簪様の……………」

虚の言葉に笑みを浮かべつつ、刀奈は振り返る。



「ええ、分かってるわよ」

「では何故？ 正直、私から見ても過ぎたスキンシップだと思いますが？」

チラリと横目で虚を見て、苦笑を浮かべる。

「まあ、真君可愛いし？彼が義弟になるって考えると嬉しくてね、だからつついっついね」

そう刀奈はお茶目に笑う。

妹の大切な人間でいずれ義弟になる存在、つまり弟ができたのだ。

しかも適度に弄りやすく反応も良い。

となると彼女としては弄らずにはいられないのだ。

「……そうだ、最近ちよつと刺激が足りないし。ふふ、いい事を思いついたわ、そうとなればお父様に……！」

(……ああ、また面倒な事になりそうですね……ご愁傷様です、真君)

自身の主がなにやら考え付いて笑みを浮かべている事に虚は心中でため息をつく。そして彼女の懸念は数日後に見事的中してしまうこととなったのであった。

---

数日後——真の部屋

「……そんなことがあったんだ……っ、腕を上げたね、真」

「っ……まあ、あの人はからかって楽しいんだろうけどな……くっ、流石に強いな簪っ」  
「かんちゃんもあすあすもがんばれー」

ガチャガチャとコントローラの操作音を部屋に響かせつつ、真、簪、本音はTVゲームに興じていた。

簪は昨日からIS学園に戻っていた。元々簪の帰省も蔵人がしつこく頼んだためであつたらしいと本音の談である。

プレイしているゲームは「IS EXVSFB」であり、真と簪がプレイし、本音は後ろでお菓子を食べながら観戦している形だ。

余談だが、真が使用しているのは自分を模した「シン・アスカ」ではなく別キャラク

ターである。

ゲームオリジナルの男性 I S 搭乗者、名前は「エイジ・エリン」、搭乗している I S もゲームオリジナル「シツクザール」と呼ばれる機体である。

対する簪の使用しているキャラクターは、つい先日 D L C に登録された「デステイニーガンダム・ヴェステイジー」搭乗のシン・アスカであり、先ほどからその圧倒的なスピードと攻撃性能に真は防戦一方である。

シツクザールとはドイツ語で「運命」を意味する言葉、奇しくも 2 機とも「運命」の名を冠している。

加えて男性搭乗者キャラ同士であるためか特殊な戦闘台詞が ドラマチック・ボイス・イベント D V E で再生されている。

『さかしいんだよっ、シンツッ!』

『さかしくて悪いかあっ! 仲間を信じないお前に負けるつもりはないっ!』

『そうやって青いことを言うんだから……っ! お前も聞いたはずだ、俺達の主張をつ! 共に戦ったお前なら、今の世を変えるためには意識を変えるしかないって事、分かるだろっ、シンツッ!』

『聞いたさっ! アンタの主張の正しいところも分かるっ! でもだからって無関係な

人を巻き込むアンタのやり方を認めるけにはいかないんだっ！ 仲間として、エイジッ  
！ 俺はアンタを止めるっ！』

互いの機体のエネルギーはレッドゾーン、しかし簪の方がエネルギー残量が多い。

デステイニーガンダム・ヴェステイージは搭載武装全てがビーム、つまりはエネルギー消費率の高い装備であるのだ。

シツクザールは実弾兵器も搭載しているが、より燃費の悪い機体で追い詰めてくる彼女の腕前は賞賛されるものであろう。

加えてシツクザールはBT兵器に類する武装を搭載した高機動機体であるが、射撃戦に比重を置いたバランスであるため同じく高機動型であるデステイニーにレンジを詰められて不利な状況に持ち込まれているのも押されている要因の1つであった。

ビームサーベルを展開したデステイニーが突っ込んでくる。それを背部スラストを噴かせて回避に移るシツクザール。

しかし背部V.Lの煌きと共にデステイニーがさらに加速し、その右マニピュレーターには輝く紅いビームの光。

回避中で格闘コマンドを受け付けなかったシツクザールには対処はできなかった。

『これでええっ!』

デステイニーのクラレントビームサーベルがシツクザールを切り裂く。同時にシールドエネルギーの残量はゼロになった。

『ぐうっ!? つ　くそ、ここまでかあ……っ!』

そしてTV画面には簪の勝利が表示された。それを見た真は、ふうと深呼吸をしてコントローラを床に置く。

「はあ、また負けたかあ」

「ちなみに今何連敗中?」

彼の背後のソファでお菓子をばりばりと食べつつ、本音が真に尋ねる。

「ん、覚えてる限りで10敗くらいかなあ……あー、勝ちたい」

少しだけ疲れたように横目で簪を見ると、彼女は微笑んでいた。

「ふふ、そう簡単に勝たせないよ、真」

簪が真にそう返した時であった。

コンコンと部屋の扉がノックされる。

「ん、一夏か？」

現在のI S学園は夏休みであるため寮に残っている者は少ない。

付き合いの深い友人達で残っているのは一夏や箒くらいである。

セシリアや鈴等、各国の代表候補生達は祖国に一度帰国し、報告や各々の休みを過ごしているのだ。

真は立ち上がって部屋のドアを開ける。

するとそこには、よく知った顔、刀奈が立っていた。

笑みを浮かべているが何処か表情が固い——無理やり笑顔を作っているかのような違和感を真は一瞬感じた。

「あれ、刀奈さん？どうかしたんですか？」

「ん、ちよーと真君にお話がね……簪ちゃんもいるわね？」

「ええ、いますよ」

「ならちよーどいいわ、お邪魔するわね」

「はあ……？」

するりと真の横を通り抜けて部屋に入る。

「あれ、たつちゃんかいちよー？」

「あら、本音ちゃんもいたのね」

「え、お姉ちゃん？」

お菓子を食べていた本音と今度は1人モードでゲームを進めていた簪が部屋に入ってきた刀奈を見て声を零す。

「ええ、お姉ちゃんよ簪ちゃん」

「んで、何のようですか？ あ、お茶でもどうぞ」

冷蔵庫から麦茶を取り出しコップに注いで刀奈に差し出す。

ありがとうと空いていたソファーに座り込んだ刀奈が簪、真の順に視線を移す。

「早速だけどもね、私がここに来た理由なんだけど……真君、貴方と戦うためよ」

「……………へ？」

一瞬彼女が何を言っているか分からなかった真の口から声が漏れる。

それに苦笑した刀奈が続ける。

「だから私と貴方が戦うのよ、真君。よく考えたら私、貴方の実力を知らないのよね、だから簪ちゃんの全てを任せるに値するかどうかテストしなきゃいけない思ってますね」

「えっ……………ええっ!?!」

彼女が何を言っているのか理解できなかった真と簪であったが数秒経ってから声を上げる。



つまりは簪との交際を続けたければ自分と戦えといっているのだ。

「いや待つてくださいいよっ！俺と簪が正式に交際するって事、前にデュランダル議長……じゃなかった、蔵人さんに許可貰ったじゃないですかっ！」

真の声に彼の隣の簪もコクコクと頷いている。

「ああ、お父様の事からの許可の事なんだけどね。私がこの事を話したら喜んで……承諾、してくれたわ」

そう笑みを浮かべる彼女だが、何処か表情が固い、と真は感じていた。

「お父様は、見せてもらおうか、簪を守るだけの力がある男かどうかを……って仰ってたわ」

「……お姉ちゃんは……なんでそんなに楽しそうなの？」

底冷えした簪の声と視線。

当然だろう、いきなり姉が自身の恋愛関係に首を突っ込んできたのだ。

しかも許可を貰っているのに、その仲を引き裂こうとしている。

真も正直理不尽なその要求に困惑が怒りに変わり始めていた。

だがすぐにその怒りは消えることとなる。

「……私だつてつらいのおっ！」

簪の視線を受けて、余裕の表情を浮かべていた刀奈は一瞬で泣き崩れ、彼女に抱きついたからだ。

その変貌に真と簪、同席していた本音が驚愕の表情を浮かべる。

「ちよつ、お姉ちゃんっ……!?!」

「ホントはね! ちよつと2人にちよつかい出してからかうだけだったのよつ! お父様も本気には取らないだろうなあと口からでまかせを言ったのは私だけど、まさかこんなことになるとは思わなかったのよおっ!」

えらく取り乱しているのを見るとそれは本当なのだろうと真は感じ、視線でこちらに

どうしよう対応を求めてきている簪に頷く。

「……刀奈さんから蔵人さんにあれは冗談だったって言えばいいじゃないですか」  
「あー……うん、そうなんだけどね……それなんだけどね」

至極全うな真の言葉に刀奈が冷や汗をダラダラと流し始める。

「お父様に言ったのよ、あれはちよつとふざけてましたって……でもすでに真君の所属の日出工業とかにも話が行っちゃってね……トントン拍子で話が進んじゃって、断るにも……」

「あー……つまり、取り消せないと?」

日出としては国家代表である刀奈と真の戦闘から得られるデータは喉から手が出るほど欲しいだろう。

そのチャンスを優菜が逃すとも真には思えなかった。

「……ええ、本当にごめんなさい」

「……はあ、分かりました。刀奈さんと戦えばいいんですよね？」

ため息をつき、取り乱して簪に抱き着いていた刀奈に真がたずねる。

「ええ。ただとても言えた立場じゃないけど、国家代表として、学園最強として手を抜くつもりはないわよ？」

「分かってます。でも刀奈さんと戦って認めてもらわないと簪の隣にいられないんですよね？　ならやりますよ、俺は」

簪から離れた刀奈の視線と真の視線が交差し、彼女がフフッと笑みを浮かべる。

先程まで取り乱していた人物と同じには見えない程視線は鋭く、「戦士」のモノに変化していた。

「なら見せてもらおうかね、簪ちゃんを守れるか力があるかどうかを」

「やって見せますよ」

真の視線も同じく戦士のモノに変化していた。

譲れない大切な場所を守る、その視線からは明確な決意を感じる。

試合は3日後、第3アリーナを貸し切つて行う手はずとなつていると刀奈から説明があつた。

また試合には日出工業の優菜を筆頭に、更識家からは蔵人が視察に来るとの事だ。

「さてと……」

刀奈と本音が部屋を去つた後、ソファーに座りなおして真は今後の対策を考え始めた。

(相手は代表候補生じゃなく国家代表の刀奈さんだ。まずは情報収集だな)

手始めにタブレットを操作して、一般公開されている範囲で国家代表としての刀奈の情報を集め始める。

現代戦において情報を持つていふ事は絶対的なアドバンテージを持つ。

C・Eでもそれは同じであつた。

かつての核動力MSであるフリーダムガンダムの性能やパイロットの戦術、クセ等を

レイ・ザ・バレル等戦友たちと共に分析し対策を練ることで、性能で下回るバッテリー機のインパルスガンダムで見事撃墜に成功しているのだ。

傭兵となった後も、信頼できる情報を提供してくる情報屋に対して金に糸目は付けなかった。

小規模な傭兵集団であった「赤鳥傭兵団」がC・Eでもある程度有名になれたのはシンやアビーなどのこうした姿勢があったからである。

公開されている動画や気になる記事等を片っ端からタブレットにダウンロードしていく。

彼女との試合まで3日しかない、情報収集は迅速に行う必要がある。

また日出の利香達にも情報を貰うため連絡を行う必要がある。

「……真」

隣のソファアに座って黙っていた簪が真を呼ぶ。

「ん、どうした？」

「ごめんね……迷惑かけて」

「簪が悪いとかじゃないと思うけど……」

今回の騒動に簪は何も関与していないといい。

刀奈が勝手に空回りして自爆したただけだ——まさか自分と簪に飛び火してくるとは思ってもみなかったが。

「やるからには全力でやるさ。そうすれば刀奈さんも認めてくれるって……まあ、ほとんど認めてくれるっほいけどな。今回は盛大に自爆をかましてくれてこっちに被害でたけど」

「……うん、お姉ちゃんには後できつく言うから。もちろん応援するし手伝うよ、真」

「ああ、なら今から簪のタブレットにもデータを送るから纏めてくれ」

「分かった」

彼女を励まして2人で作業を進めていく。

そして並行して、真はタブレットでメールの作成を始める。

宛先はかつての敵であり、今はカナードと共に束の元に身を寄せている少女。

(……切札はあつて損はないよな)

真の考える切札。

それは自身の中にあるという【因子】

歌姫の騎士団との戦いでも幾度となくその力を発動させた能力。

(【S. E. E. D.】の使い方……ラキーナなら多分知つてるはずだ)

未だに自身の意志では発動させることができない【S. E. E. D.】

束曰くISに自身やアスランが乗れる要因の1つだという。

MS/ISに搭乗している時や集中力が極限にまで高まった時だけ発動して感覚が研ぎ澄まされる。

普段できないようなマニユールや機体操作も覚醒状態ならば可能になるまさに【切札】である。

【S. E. E. D.】を自在に操ることがスーパーコーディネーターであると以前カナードが言っていた事を思い出す。

ならば完成されたスーパーコーディネーターであつた——ラキーナならばその使い



方を知っているはずだ。

ラキーナと完全に和解したわけではない。

以前は気まずい雰囲気であり、歌姫の騎士団による混乱の為聞く暇も、訓練する暇もなかった。

だが歌姫の騎士団との戦いを乗り越えた今ならば、以前よりは歩み寄れる気がする。使えるものならば全てを使う——すべては大切な人の傍にいる為。

## PHASE 2 運命 VS 霧纏の淑女②

3日後——第3アリーナ Bピット

『両腕部マニピュレータ動作異常なし、両クラレント正常動作を確認、各種武装、背部V  
Lも問題なし……つと』

「真、後付武装も大丈夫、「バルムンク」と「補助兵装」もちゃんと登録されてるよ」  
『こつちでも確認した、ありがとう、簪』

Bピット内で試合前の最終確認を真と簪は行っていた。

「あすあす、本当にその【武器】使うの？」

後方でデステイニーの機体データを確認していた本音が疑問の声を上げる。

余談であるが、学園内では本音が真のデステイニーと簪の飛燕の機体整備をメインに行っている。

本音は真と簪とも交友がある事と、高い整備／技術力を日出に買われてスカウトを受けており、学生の身でありながら専用機専門の整備士として高い評価を得ていた。

そんな彼女が疑問を呈したのは、バルムンクの他に追加された後付武装である。

彼女が見る限り明らかに既存のISの武装とは異なる代物であるからだ。

彼からC・E・という世界で普及していた【MS】に搭載されている装備であると聞いてはいるのだが。

『ああ、ISでこういうタイプの装備を使うのは俺が初めてになるだろうから十分有効だと思う』

「分かった、なら機体のコンディション問題なしだよ」

『ありがとう、本音さん』

本音に微笑んで機体をカタパルトに向ける。

「真、頑張ってる」

「あすあす、頑張ってるねー！」

『ああ、絶対に負けないよ』

そう告げて2人にサムズアップを返すと同時に、機体制御が真に譲渡される。すうと深呼吸すると同時にカタパルトの射出可能ランプが点灯し、出撃可能状態となった。

『飛鳥真、デステイニーガンダム・ヴェステイージュ、行きますっ！』

出撃コール後、電磁加速されたカタパルトから射出されると共に背部V.Lユニットから紅き光の翼を羽ばたかせデステイニーが空に翔ける。

(……俺は守ってみせる、だから俺の中のS. E. E. D. も答えろっ……！)

すでに上空で待機している試合相手の元に向かいながら、真は2日前の事を思い出していた。

---

2日前——真の部屋

『久しぶりだね、真』  
「そうだな」

展開された空間投影ディスプレイ、それに映るのは黒髪の美少女、ラキーナ・パルス。ISのコアネットワークを介した通信を、現在は怪我の治療の為に治療施設にいるラキーナに繋げたのだ。

もちろん保護者の立場にあるカナードと束の許可は取っており、この通信もカナード側につながっている。

『簪さんも、お元気そうでなによりです』

「うん、傷は大丈夫なの？」

『ええ、もう動けるくらいにはなりました、痕もそんなに大きく残らないみたいです』

アスランを説得するため特攻を仕掛けた際に受けた傷の治療は順調に進んでいる。

チームによって焼かれ失われた組織は最新の再生治療により小さな火傷の跡が残る程度まで回復していた。

もつともしばらくは安静として彼女は治療施設に預けられているのだが。

「さつそくだけど本題に入るぞ……率直に聞く、【S. E. E. D.】の使い方を教えてほしい」

「シード?」

話が見えていなかった簪が首を傾げる。

ラキーナに相談する事しか聞いていなかったため、聞きなれない単語が出て困惑するのも無理はない。

【S. E. E. D.】、正式名称【Superior Evolutionary Element Destined-factor】

【優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子】

かつてC. E. 世界で提唱された学説だ。

進化とは何を意味するかが解明されていなかったが、発動すれば戦闘能力や身体能力が大きく向上する。

MSやISに搭乗している際には特に有効であり、この世界でも真やラキーナ、アスランが発動させていた。

『……使い方……か、正直私にもよく分かってないっていうのが答えかな』

彼女の答えに真の顔に落胆の色が混ざる。

『確かに「キラ・ヤマト」だった私は自由に「S・E・E・D」を発動できたんだけど、いつも意識を集中すれば自然に発動できていたんだ』

（意識の集中……MSやISに乗ってない時でも俺だってそれくらいは何度もやった、けど駄目だったんだよね……やっぱスーパーコーデイネーターじゃないとだめなのか？）

ラキーナの言葉に真は考え込む。

『ごめん、役に立てなくて……』

「いや、まあ……なんとなくそんな気はしてた、悪い、まだ怪我也完治してないのに」

少し申し訳なさそうに真は頭を下げる。

そんな彼を見てラキーナがはっと何かをひらめいたように声を上げた。

『……そうだ、真がS・E・E・D.をいつも発動させたときはどんな時だったかわかる?』

「俺が発動させた時か……」

C・E.での戦いの記憶を思い出す。

連合の新型MAにインパルスを捕縛され、同時にフェイズシフトダウンが起こって絶体絶命の危機に陥り、自身の無力さに怒りを抱いたときが最初だ。

思いかえしてみればその後もアスランの裏切り等、常に発動時には怒りの感情が伴っていた。

『……なるほどね、真のS・E・E・D.は怒りがトリガーで発動している事が多いんだね』

「なら、刀奈さんとの戦いの際にも彼女に対して怒れって言うのか?」

確かに理不尽な理由で戦うことになったが、彼女に対して殺意を抱くまで怒りを抱くことは難しいと真は考えている。



だがそれにラキーナは首を横に振る。

『いや、そういう訳じゃないよ、それに本当に怒りの感情だけだった？ この世界で真が何度かS・E・E・Dを発動させたのを見てたけどそうじゃないよね？』

「……ラクストの戦いのおきとかは確かにそうだな、怒りよりも命を守りたいって強く思ってた」

真の回答にラキーナが笑みを浮かべる。

『そう、それだよ、多分、真のS・E・E・Dは感情にも左右されるだろうけど、本当は誰かを、何かを守りたいって思った時に発動するんだよ』

「……そういうもんなのかな」

『……絶対そうだとも言い切れないけどね……真は短気だし』

微笑みながらラキーナが最後にぼそつとつぶやいた言葉を真は聞き逃さなかった。

「……言ってくれるよな、最近は割と自制してると思うんだけど？」

『な、何の事かなあ？ 私、怪我人だから分からないよ』

明らかに狼狽した態度でラキーナは視線を真から逸らす。  
それをジト目で真は見つめる。

『とっ、とにかくさ、後試合まで2日しかないんでしょ？ だったらS・E・E・D.の  
発動について練習しなくていいの？』

その視線に耐えられなくなったのか、ラキーナが告げる。

「……ああ、そうだな、時間もないしな」

彼女から真はそう言って少し恥ずかしそうに視線を外した。

「安静にしなきゃいけないのに、その……悪かったな」

『……私は大丈夫、心配してくれてありがとう、真』

彼の言葉に少し驚いたような表情となったがすぐに笑顔を浮かべた。かつては敵同士であり、真にとっては仇でもあった存在。

だが今は共に戦った戦友同士であり、互いの戦う理由も共通している。未だに完全な和解はできていない。

それにはさらに時間が必要になると互いに感じているが以前よりも互いに歩み寄っている。

でなければ冗談を流すことなんてできなかつたであろう。

『あつ、消灯時間がもうすぐなんだ、真、他に何か質問はある？』

「いや、特にないな」

『なら、今日はここまででいいかな』

彼女の言葉にうなずいて真が答える。

『頑張つてね、真ならできるよ』

「ああ、やれるだけやってやるさ」

『簪さん、真をお願いしますね』

「うん、ありがとう」

『それじゃ失礼しますね』

待機形態のデステイニーを通じて投影されていた空間投影ディスプレイが消え、光源が消えたためか少々部屋が薄暗く感じる。

ふうと息をついて真はドッグタグを拾い上げて身につける。

(……守りたいと願ったときか)

簪を見つめる。

真にとって唯一無二の最愛の人。

戦う事しかできなかった自分を好きになってくれた、大切な女性。

そこまで改めて意識した時——「それ」は突然起こった。

自身の【意識】の中に、何か塊の様なモノが現れたのを感じた。

言うならば頭の中に【神経のしこり】ができた様な違和感を真は感じた。

「っ!？」

突然の事態であったため、反射的に頭を振ってしまった。その行為の為か、その違和感は霧散してしまっていた。

「真?」

「あつ、いや……何でもないよ」

今まで先程の様な予兆の様な感覚を感じたことはなかった。

あのまま違和感を受け入れていればおそらくはS・E・E・Dを発動させることができたかもしれない。

再び簪を見つめる。

すると確かに【違和感】の様なものが意識の中に存在している。

さらに意識を集中していく——同時に簪を見つめる視線も強くなっていく。

それを感じ取ったのか、簪の頬に赤みがさしていく。

「真つ、そのジツと見つめられるの……恥ずかしい」

「あつ、ごっつ、ごめんっ!」

簪の言葉で我に返った真が彼女から視線を外す。

同時に違和感も霧散していく。

この後簪に許可を取って何度も同じように試してみたが、結局意識の中にしこりができるだけでS・E・E・Dは一度も発動することができずに、試合当日を迎えることとなった。

時間は戻って——第3アリーナ 観客席

現役の世界代表である楯無こと刀奈と、全世界でも4人——一般に公表されているのは2人であるが——しかない男性搭乗者である真との模擬戦には学園外から関係者が集まっていた。

彼の後ろ盾である日出工業からも顔見知りが集まっていた。

優菜やジェーン、そして真の直属の上司である節子と呼ばれる女性技術者などである。

ちなみに利香は現在溜まった有休を使って長期のリフレッシュ休暇をとっている。

何でも伴侶探しの旅に出るとの事だ。

刀奈の関係者としては虚に彼女の父親でもある蔵人、そして専用機である霧纏の淑女

の整備班である。

余談ではあるが、蔵人が優菜の姿を見つけた際に誰の目も憚らずに大笑いした事は虚だけの秘密となっていた。

また夏季休暇中で人数は少ないながらも一般生徒も見受けられる。その中には一夏と箒の姿もあつた。

「おつ、そろそろ始まるみたいだな」

「そつ、そうだな」

グステイニーがピットから射出されてアリーナ上空に飛翔していくのをモニターを通してみていた一夏が隣の箒に楽しそうに告げる。

しかし箒はそれどころではなかった。

何故ならば鈴やシャルロットやラウラ等恋敵が休暇の為にいないため彼を独り占めにできているからであつた。

だが嬉しさと同等のレベルの緊張も感じていた——それが口調に現れていたのだ。

しかしそんな彼女の幸せは長くは続かなかつた。

何故ならば一夏に声をかけてくる人物がいたからだ。

「どうやら始まるようだな」

「ん、カナード、アンタも来てたのか」

「ああ」

IS学園の男子生徒用ジャージを身につけ、長髪を纏め上げた「カナード・パルス」がこの場に現れ、一夏の隣に腰を下ろした。

未だにカナードはIS学園の非常勤講師と言う立場にいる為、この場においても不思議ではない。

ジャージ姿と言うのは中々見たことがなかった一夏の興味津々の視線を無視してカナードが口を開いた。

「……あれがロシア代表の機体、【霧纏の淑女】か」

「何でも水を操れるんだってな、ISって改めてすごいと思うよ」

「正確にはアクア・クリスタルと言うプラントで精製したナノマシンによると言う話だが……どうした、篠ノ之箒」



一夏の背後から凄まじい怒りの視線でカナードを睨んでいた箒にカナードが気づく。

「なっ、何がだっ!？」

「いや、貴様が何か言いたそうに睨んでいたからな、どうした、俺に何か用でもあるのか？」

「お前に用などないっ!」

箒がプイッと視線を逸らす。

一夏が何でそんな怒った顔してんだよと彼女を窘めている。

(……成程、そういう事だったな)

自身の行動について考え直してみれば彼女が臍を曲げた理由が分かった。

カナードは束から、箒の事がある程度強制的に聞かされたことがあったのだ。

何でも彼女は織斑一夏に恋心を寄せているらしいとの事だ。

正直彼からしてみればどうでもいい為、無視を選択する。

「……さて見物だな、どうなるか」

箒の抗議の視線を無視し、興味の対象である模擬戦へと目を向けた。

### 第3アリーナ 上空

Bピットから射出されたデステイニーが上空で待機している【霧纏の淑女】と相対していた。

『お待ちせしました』

『ふふ、いいのよ、準備はちゃんとしないとね』

そう言つて刀奈はマニピュレータに大型ランスを展開する。  
得物を流れる様に扱い、前傾の体勢でそれを構える。

『……ノリノリですね、しかも凄く嬉しそうですがどうかしたんですか？』

若干眉間に皺を寄せた真が彼女に尋ねる。

すると彼女は苦笑しつつも答えた。

『正直言うと真君と【デステイニーガンダム】とは戦ってみたかったっていうのが本音なのよ、だって4人しかない男性搭乗者じゃない？ 現役为国家代表としても血が騒ぐのよね』

『……まあ、やるからには全力でやりますよ、でもこの状況になったのは刀奈さんのせいなんだけどなあ……』

真もマニピュレータに獲物であるアロンダイトを構える。

霧纏の淑女には水のナノマシンによるヴェールがあるため、通常のビームライフルでは効果が薄い。

そのため真は近接武装であるアロンダイトを展開したのだ。

彼の構えにニツと笑みを浮かべた刀奈がスラスターを点火させるのと同時に、試合開始のコールが響いた。

『さあ、行くわよ、義弟君っ！』

『くそっ、やる気満々じゃないかっ！ アンタって人はーっ!!』

真の半ばやけくそな叫びと互いの得物がぶつかり合うのは同時であった。

『っ、機体出力はそっちが上なわけねっ!』

得物同士の激突後、すぐに刀奈がデステイニーから間合いを取った。

刀身ビームと蒼流旋の水が互いに反応しあつて蒸気が発生している。

濃い霧状にも見える蒸気がデステイニーの周りに霧散せずに残っている。ただの蒸気ではないことに真はすぐに気づいた。

『ちっ、クリア・バツション【清き激情】っ!』

『あら、残念、でも逃げられるかしら?』

刀奈の笑みと共に、蒸気が一気に熱に変換される。

蒸気量が多かつたためか爆発の規模はISを充分包める大きさであった。凄まじい爆発音と共に、水蒸気爆発が発生した。

——しかし紅い光の翼が爆発を突き破って現れた。

『……凄まじい機動性ね、Vレユニット』

至近距離から不意打ち気味に爆破したというのにほぼ無傷。

武器であった大型実体剣「アロンダイト」を破壊できたのは御の字だったが、爆発自体は実体シールドで防がれていたようでエネルギー消費についてはたいしたことがないように見える。

『いきなりアロンダイトを持ってかれたか……っ！』

砕けたアロンダイトの一部を放り捨てた真の顔が歪む。

その理由は武装を砕かれたもあるがやはり【S・E・E・D】が発動できておらず、意識の中の【違和感】によるところも大きい。

だがすぐさま思考を切り替える。

『うおおおっ！』

背部V Lユニットから溢れる光の翼が煌めき、一瞬でデステイニーが距離を詰めてくる。

両腕部「マニピュレータ」から溢れる紅い光は反逆の剣の名を冠する武装「クラレント・ビームサーベル」が発振されており、ヴェールから漏れた水のナノマシンを蒸発させている為か蒸気が溢れていた。

並のIS搭乗者ならばデステイニーの速度に翻弄され、そのまま一撃を受けていただろう。

だが、刀奈は並のIS搭乗者ではなくロシアの国家代表だ。

ハイパーセンサーでもギリギリ感知できるレベルの速度、しかし経験と戦士としての勘はそれを超える。

『流石、速いわねっ！』

クラレント・ビームサーベルを蒼流旋でを受け止める。

だが、デステイニーは一瞬の鏝迫り合い状態の後、すぐさま距離を取った。

その理由は一瞬前までデステイニーがいた空間の蒸気の濃度が一気に上昇したから

である。

再度【清き激情】を狙ったが、それは真も読んでいた。

当然デステイニーが離脱した為空振りに終わり、蒸気が霧散していく。

『目がいいわね、真君』

（水のナノマシン……ホント厄介だな）

真の【霧纏の淑女】に対する評価は厄介きわまるという評価である。

その理由はやはりその武装の特殊性にある。

特殊性で言えば【単一仕様能力】であるが、白式と紅椿はあくまで機体エネルギーの増減に影響する能力である。

ラクスの【ホワイトネス・エンプレス】はVLを使用したナノマシンによる限定的な生体制御。

これについてもかなり非常識且つ厄介な能力であるが、同じくVLユニットを装備しているデステイニーならばVLによる干渉で防御が可能であったため、戦闘力に比べれば脅威度は低かった。

だが霧纏の淑女の特殊な武装である【水のナノマシン】は物理的な破壊力を持ってい

る。

(液体に気体……あの蒸気に捕まるのはまずいな、爆破される)

V Lユニットから得られるI Sでも規格外のスピードを用いて、真は戦法をヒット&アウェイに切り替える。

常にV Lを起動し、蒸気の中にとどまらない機動を続けていれば【清き激情】を喰らうことはない。

武装は破壊されたアロンダイトに変わり、両マニピュレータ部分のクラレントをビームサーベルモードで使用する。

ヴァジュラビームサーベルよりも出力が高く、効果は薄いかもしれないがビームライフルモードを使用すればいちいち武装を切り替える必要もないからだ。

(デステイニーの速度なら反撃を振り切って接近できるはず……武装を全部一気に使って決めるっ！)

急機動とV Lの機能により周囲に残像を残しつつ、クラレントをサーベルモードで構



えて刀奈に向かう。

『早いつ！』

蒼流旋に装備されている四門ガトリングガンから弾丸が吐き出されていく。

だが命中していくのは全て残像であった。

ハイパーセンサーをミラーージュコロイドによる幻影効果で惑わしている為だ。

『やっってくれるわっ、ならっ！』

ガトリングガンの効果が薄いことを理解した刀奈の切り替えは迅速であった。

機械に頼るのではなく戦士としての感覚で、狙いをつける。

ハイパーセンサーを一時的にOFF状態に変更して狙いをつける——だが真はそれを待っていた。

『そこだっ！』

急機動中のデステイニーの左マニピュレータ、人間で言えば【指】の部分から球体状の物体が射出された。

射出された球体はすぐにその形を変えていく。

射出されたそれは人型の風船、「ダミールバルーン」と呼ばれる装備であり、C・E・ではネロブリッツと呼ばれる機体に装備されていた武装だ。

瞬時に3つ、デステイニーに酷似した風船が展開されて刀奈の視界を塞ぐ。

『ダミーっ、しまったっ!』

ハイパーセンサーを起動していればダミーであることは把握できた。

完全に誘導された形になり刀奈の動きが確かに鈍った。

その隙を見逃す真ではない。

続けてデステイニーのマニピュレータから【白い液体】が射出された。

ベチャツと白い液体の様なものが入ランスと脚部に取り付き、スラストターが一部使用不可能の状態になった。

『とっ、トリモチイっ!』

露出が多いデザインである霧纏の淑女に射出されたのはトリモチランチャーと呼ばれる装備である。

粘性の物体・液体であり、破損したコロニーの簡易修復等に使われる代物だ。本来は武装ではない非殺傷武器であるが、使い方次第で有用なものとなるのだ。

『とっ、年頃の女の子にこんな白い物体をおっ!?!』

彼女の言葉は一切合財無視して、背後からクラレント・ビームサーベルを振り下ろす。大きくシールドエネルギーが減少し、追撃の蹴りで刀奈が蹴り飛ばされた。

『ぐうっ!』

A M B A Cによりすぐさま体勢を立て直し、ガトリングガンで迎撃——しようとしたがトリモチがガトリングガンの砲門を塞いでいた。

それを確認してチツと舌打ちして叫ぶ。

『使い方が意地悪いわよ、真君っ!』  
『そこおっ!』

デステイニーが展開していた「テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔」のトリガーを引く。

だが刀奈は微塵も慌てた様子は見せていなかった。

『……………【麗しきクリースナヤ】 展開』

そのコードと共に、霧纏の淑女に赤い翼状のユニットが接続され、アクア・ヴェールの色に変化した。

その色は赤——まるでドレスのようにも見えるそれがビームを拡散させていく。

霧纏の淑女のパッケージ、【麗しきクリースナヤ】が接続されたことにより霧纏の淑女は高出力モードに移行したのだ。

併せてアクア・ナノマシンも高出力モードに切り替わった事によりデステイニーのビーム攻撃を拡散させることができたのだ。

『なっ!?!』

突然展開されたパッケージとビームが拡散された事象を見て真が驚愕の声を上げた。真が霧纏の淑女を調べた際にはこの武装の情報はなかった——つまりは切り札。

『ふふ、まさかこれを使わされるとはね、でもこれで終わりよ、真君』

刀奈のがランスを振るうと赤いアクア・ナノマシンによってトリモチが洗い流された。

それと同時にデステイニーのハイパーセンサーがある事象を捉えた。

<<<周囲の空間に高エネルギー反応、回避を推奨>>

『なっ、ぐっ!?!』

デステイニーの動きが止まり、全身の装甲が軋みを上げていく。

周囲の空間に引きずりこまれてまるで「沈んでいく」様な感覚と共に、シールドエネルギーが減っていく。

すぐさまVユニットを全開で起動するが、光の翼さえも上手く展開できない。

『これが【霧纏の淑女】の単一使用能力よ、名前は【沈セツクツアベツクむ床】、どう動けないでしょ？』  
『がああああつ!!』

咆哮と共に各部スラストとVユニットの出力を全開にするがまったく身動きが取れない。

拘束力は模擬戦で戦ったこともあった【シユヴァルツァ・レーゲン】の【AIC】を上回っている。

『……さあ、これで終わりよ、【ミストルテインの槍】』

【ミストルテインの槍】

アクア・ナノマシンが一点に集中、攻性形成することで一撃の威力を高める【霧纏の淑女】の大技である。

本来は使用に制限もあるのだが、現在の高出力形態ならば無制限での仕様が可能だ。

『くそっ、動けっ、うごけええええええええええっ!!!』

V Lや各部スラスタ、姿勢制御用バーニアからもエネルギー粒子が飛び出ているが一向に拘束されたまま動けない。

『チエックメイトよっ!』

ミストルテインの槍が迫る——回避不能。

(負けるっ、あれを喰らったらっ!)

迫るミストルテインの槍がスローに見える。

(負けたら……負けたら俺は……っ!)

大切な人の傍から離れなければならなくなる。

それは今の彼にとって断じて認めることはできない。

しかし状況は絶望的である。

だがそのとき、確かに真の耳に届いた叫びがあつた。

それは――

「真つ、負けないでえつ！」

――最も大切な人の声が響いた瞬間、意識の中にあつた違和感、「紅い種」が弾け飛んだ。

それに併せてデステイニーのコンソールが自動的に起動した。

【ワンオフ・アピリテイー単一仕様能力】《運命ノ翼》 S t a r t i n g

紅い光の翼が全開起動時よりも大きく、巨大な翼が展開されると同時にミストルティンの槍がデステイニーを貫いた。

『なっ!?!』



刀奈の驚愕の声が響く——否、貫いてはいなかった。

ミストルテインの槍はその軌道をデステイニーの実体シールドで逸らされていたからだ。

動けなかったはずのデステイニーが攻撃を捌いたのだ。

しかもミストルテインの槍は直撃の瞬間、解除させられていた。

刀奈は即座に距離を取る。

『……まさかこのタイミングで【単一仕様能力】とはね、しかも簪ちゃんの声で覚醒とか羨まし過ぎるわよ』

苦笑しつつもミストルテインの槍を構えなおす。

『……本当にありがとう、簪』

巨大な光の翼がアリーナ全体を覆うかの様に広がっている。

コンソールを確認すると、V Lユニットの装甲の一部が展開されより大型化している

事が表示されていた。

光の翼を形成しているエネルギー全てが右腕部のクラレントに収束し、通常時よりも大きく太いビームサーベルを形成する。

『これがデステイニーと俺の……俺達の方だあつ！』

真の咆哮がアリーナに響いた。

PHASE 3 運命 VS 霧纏の淑女③

観客席

「……あれがデステイニーの【ワンオフ・アビリティ単一仕様能力】か」

絶体絶命の状況から持ち直した真の様子を見てカナードが呟く。

彼にはデステイニーが発現させた【単一仕様能力】についての予測がある程度ついていた。

「えっ、そうなのかな？ 確かにあんなにでかい翼は初めて見るけど……」

「どんな能力なのさ？」

純粋な興味からか一夏と彼の隣にいた箒が尋ねる。

「おそらくだが、デステイニーが発現させた能力は【エネルギー吸収と操作能力】だ。

セックヴァベック  
【沈む床】やミストルテインの槍を構成するエネルギーを奪ったのだろう、あの翼は「エネルギー吸収?」

「ああ。種類でいえばお前の【白式】や篠ノ之箒の【紅椿】の能力に近い」

「……白式はエネルギーの【無効化】、紅椿はエネルギーの【増幅】……確かに関連性がありそうだが根拠は何なのだ?」

クラレント・ビームサーベルに巨大な光の翼から溢れた光が集まり、より強靱なビームの刃が構築される。

それを確認しつつカナードが答えた。

「デステイニー最大の特徴はその背部にある【ヴォワチュール・リュミエール】。その特性は分かるか?」

「えっと、滅茶苦茶な機動力を持つてるってのと……後は……」

一夏の態度にはあと小さくため息を付いたカナードだが補足する為に口を開いた。

「エネルギーの操作機能がVLには存在している、以前俺と奴との模擬戦で見たことが

あるだろう。ビームライフルのビームを光の翼に取り込んで速度を大幅に上昇させた事を。おそらくはそれが発展して能力となったのだろう」

VLの特性は大きく分けて2つ存在している。

1つはデステイニーや兄妹機関係にある飛燕の様に、搭載機体に破格の機動性能を与える特殊推進機関としての特性。

そしてもう1つはエネルギーへの干渉機能である。

一夏達は知らないが、C・E.ではスターゲイザーと呼ばれる機体がビームをリング状に操作して攻撃に用いた例が存在している。

「そういえば……でもそれって真がアンタとの模擬戦の時みたいにVLを操作したってことじゃないのか？」

以前行われた真とカナードの模擬戦を思い出した一夏が尋ねる。

「いや、その可能性は低い。何故ならばVLユニットのエネルギー操作は都度複雑な演算処理が必要になるしMSよりも小型のISでは操作できるエネルギーには限度も

ある。先程の状況では操作もできんだろうし、拘束力は「A. I. C.」を凌駕している霧纏の淑女の【単一仕様能力】だ。操作限度を軽く超えている」

「なるほど」

「俺との模擬戦やお前達との戦闘経験も影響しているだろうな。後は【ラクス・クライン】との戦闘か、奴の機体もV.Lユニットを介した能力だったからな」

「……真はどんどん強くなるな」

「……一夏」

少し羨ましそうな表情で一夏が飛翔しているデステイニーを見上げる。

小さな子供が何かにあこがれるように見えるような純粹さ、それを箒は感じ取り自然と笑みがこぼれた。

「大丈夫だ、一夏なら真と共に飛べるはずだ」

「箒……ああ、頑張るよ、俺」

本心からの箒の言葉に一夏は笑みを浮かべた。

それに平行して模擬戦の状況は動いていた。

『うおおおおつ!!』

光の翼を再度大きく広げ、ステイニーが文字通り視界から消えた。

元々ステイニーの機動力は高機動パッケージを装備したISと同等レベルと言う規格外のレベルである。

しかしハイパーセンサーを振り切り文字通り視界から消える速度と言うのは、規格外を通り越して非常識のレベルに到達していた。

だが、防御できないわけではない。

伊達に楯無を襲名しているわけではない、殺気を感じ取って行動することなど造作もない。

自身の左方向から強烈な殺気を感じ、即座に蒼龍旋を防御に使用する。

クラレント・ビームサーベルを受け止めるが、非常識な速度が上乘せされた威力を完全には殺し切れずに押し込まれる。

『つう……やってくれるわねっ!』

反撃に膝蹴りを叩き込もうとするが、デステイニーはクロスレンジから離れていた。ミドルレンジ、いやすでにロングレンジまで離れている。

（ホントに非常識なまでの機動力ね。だけど真君にもそれ相応のリスクがあるはず）

デステイニーに搭乗している真は汗をまるで滝の様に流していた。

牽制の為にガトリングガンを展開して射撃を行いつつ観察すると呼吸も大きく乱れているようだ。

（やっぱりね。あんな機動力なんだから、搭乗者保護があっても抑えきれぬもんじゃないわ）

刀奈の読みははたして当たっていた。

デステイニーに発現した【運命ノ翼】は確かに強力な能力である。

しかしそれは彼の身体に大きな負担をかける。

能力未発現時のデステイニーでさえも全開機動を行えば少なからず身体に負荷が掛かる。



それを超える機動力なのだ、かかる負担は倍以上であった。

(このままだと先に潰れるのはそっちよ、真君？ さあ、どうくる？)

再度デステイニーが光の翼を広げて霧纏の淑女に向かってくる。

残りエネルギーはすでに両機とも5割を切っている。

そして霧纏の淑女は現在高出力モード、それに伴いエネルギー消費は高まる。

再度【沈む床】を発動させるのは下策だ、明らかにデステイニーが発現させた能力と相性が悪いからだ。

警戒を怠らずに牽制の射撃を行っている霧纏の淑女の前から再びデステイニーが消えた。

気配は自分の背後に移動しており、何故攻撃をしないのか疑問が浮かぶ。

そう背後に回っただけであったはず、だというのに霧纏の淑女は【ビームの奔流】に飲まれ弾き飛ばされてしまった。

『ぐううっ!』

さしもの彼女も何が起こったのか一瞬理解ができなかった。

しかし今の一瞬で3割程度までエネルギーを消費させられたのを確認して、何をされたかを理解した。

『翼が武器になるといつのっ?!』

そう通り過ぎた瞬間、デステイニーの光の翼が所謂巨大なビームサーベルとなることで霧纏の淑女を攻撃したのだ。

今までのV.Lユニットはあくまで特殊機能を持った推進機構であったが現在のV.Lユニットは発現した能力によって1つのエネルギー武装として使用することができるのだ。

(これをラストにしないと先にこっちが潰れる。身体が持たないっ！)

刀奈を弾き飛ばしたデステイニーのV.Lが真の操作によって煌めく。

すると右マニピュレーターに集まっていたビームのエネルギーが再び光の翼に集束し、

翼の装甲が一部展開し巨大な翼へと変化する。

『運命を切り開くつ、そのためにはっ！』

すでに真の体力は限界に近い。

下手な代表候補よりも鍛えている真でも、それだけデスティニーが発現した能力による反動が大きいためである。

前世である「シン・アスカ」の状態であったなら余裕があったはずだ。

その差はナチュラル・コーディネーター問わずに耐G訓練を行っているかないないかだ。

MSにはISの「PIC」の様な慣性を抑える機能はお情け程度しか搭載されていないかった。

故に加速時に発生するGに耐えるには、パイロットは身体を鍛える必要があったのだ。

MS【デスティニーガンダム・ヴェステイージ】に搭乗する際も、耐G訓練を受けて身体を慣らす必要があった。

しかし、ISではPICのおかげからか耐G訓練は重要視されておらず、真もあまり

行っていないかった。

ザフト式の耐G訓練を今度からやろうとひそかに心に決めつつ、マニューバに移行する。

『はあああああつ!!』

クラレントをビームサーベルモードに切り替え、デステイニーは光の翼を広げて霧纏の淑女に向かっていく。

しかし、気配を読み取れる刀奈にとって対応できない訳ではない。

刀奈がすでに十分な水を纏い切れていない蒼流旋を構え、カウンターを狙う。

だが、それは真も承知の上であった。

瞬間、両マニピュレーター——つまりはクラレント・ビームサーベル——を互いにうち付ける。

互いに干渉し合ったクラレントの高出力ビームはまるで爆発するように弾け、拡散した。

当然、カウンターを狙っていた刀奈にその「拡散ビーム」は降り注ぐことになる。

『きやあつ!?!』

カウンターを狙っていた刀奈はビームの散弾、至近距離からの拡散攻撃に対処することはさすがにできなかつた。

高出力状態のアクア・ヴェールで無効化できているがシールドエネルギーはその分消費し、予想外の攻撃に体勢も崩れていた。

この機を逃す真ではなかつた。

『そこだつ、ビームコンフューズっ!』

ビームブーメラン〔フラッシュエッジⅡ〕を両手に展開し、投擲。

同時に両クラレントをビームライフルモードに変更し、投擲したフラッシュエッジに狙いをつける。

〔S. E. E. D.〕によって、より正確になった照準は狂うことなく回転するビームブーメランのビーム発生部分を捉え、干渉が発生。

細かなビームの粒子となって刀奈に降り注いだ。

〔ビームコンフューズ〕により拡散されたビームは再度、霧纏の乙女に降り注ぎ、その

シールドエネルギーを削り取る。

ビーム散弾と同じく高出力状態のアクア・ヴェールで無効化できるのだが、今度は動きを止められてしまった。

『上っ!?!』

ビームコンフューズによって動きを止められていた間に、自身の上方に気配が移動していた。

デステイニーが両マニピュレーターに展開したクラレント・ビームサーベルを今にも振り下ろそうとしていた。

『甘いわよっ!』

充分な水を纏わせていた蒼流旋で防御し、ビームサーベルの斬撃を受け止める。

すぐさま離脱しようとしたデステイニーだったが攻撃した後に離脱することを讀んでいた刀奈は、離脱させないためにデステイニーに密着した。

防御の為に蒼流旋を使用した為か2機の周りには濃い蒸気が漂っていた。

そしていつまでもその蒸気は霧散せずにより一層濃くなっていく。

この行為で彼女が何をしようとしているか分かった——自爆覚悟の【清き激情】だ。

『この距離なら逃げられないわよっ!』

『ちいつ!?!』

機体の出力差で引きはがそうとするが、関節技の要領で彼女は真にくつついたままだ。

そして周囲の蒸気を構成しているナノマシンが起動を開始——すでに水蒸気爆発まで時間がない。

S・E・E・D. が発動し、状況把握能力も極端に高まっている真の行動は早かった。

『ガンダムウツ!!』

愛機を鼓舞するかのようについ、引っ付いている霧纏の淑女ごと刀奈を逆に抱きしめた。

自爆覚悟の攻撃を防ぎできれば勝ちだ、そしてこの超至近距離ならばデステイニーの方が速い。

『なっ、何をっ!?!』

『こっとうするんですよっ!』

真の言葉と共にV Lユニットが操作され、光の翼が2機を包み込んで小さな【繭】の様な球体へと姿を変えた。

その直後、この試合最大級の爆発が繭を包み込んだ。

爆発の余波が消え、アリーナが視認できるようになると光の繭は健在であった。

その繭の光が少しずつ消えていく。

エネルギーの放出が完全に収まったことを確認して、フレームが少々見ているV Lユニットを所定位置に戻す。

彼が行ったのは単純だ、V Lユニットから溢れるエネルギーで盾を作ったのだ。

デステイニーにはA Lは装備されておらず不完全なビームシールドの形になったがそれでもエネルギー量は相当なものだ。

完全には爆発を防ぐことはできなかつたが、それでも威力の大半を相殺することには



成功していた。

『……まさか防がれるとはね』

いつの間にか腹部にデステイニーのマニピュレータを押し付けられた刀奈が肩をすくめながら答える。

彼女にとつて残されたエネルギーを使った反撃であったのだが、それにすら対処されてしまったては脱帽せざるを負えない。

『……私の負けね』

――更識楯無、シールドエネルギー切れ、勝者 飛鳥真。試合時間、8分53秒――

試合終了のコールがアリーナに響く。

霧纏の淑女のエネルギーはすでに特大の「清き激情」でゼロになっていた。彼女を抱きかかえるようにデステイニーがゆっくりと降下していく。

『ふふ、ちゃんと本気で相手したんだけどなあ……男の子の意地見せてもらったわ』

そう言つて何故か微妙な表情をしている真の顔を見る。

(簪ちゃんはほんと、いい子を見つけたわね。あ、そういえば実年齢は真君の方がだいぶ上だったか……ま、どうでもいいか)

本来の年齢差を思い出すがそれでも彼が妹を大切に思ってくれているのはよく分かった。

でなければあの土壇場を切り返すことなどできなかつただろう。

『真君、簪ちゃんのこと頼むわね?』

そう言つてポンとデステイニーの胸部装甲を叩く。

しかし、真の表情は微妙な表情から焦つたような顔に変わっていた。

『……刀奈さん、色々決まり顔で語つているところ悪いんですけど……さっきのでデ

ステイニーもエネルギーがゼロなんですよ。PICもう切れますっ  
『えっ、ちよっ、まっ、私の機体もエネルギーないんだけどっ!?!』

真の言葉の通り、デステイニーのコンソールに表示されているエネルギー残量は「Energy」を示していた。

すでに霧纏の乙女のPICも切れている、デステイニーが機能停止すれば2人は落下するだろう。

まだ地上まで20m以上もある、大怪我を負う高度だ。

『真君、気合っ、男の子なら気合で持たせてっ!!』

『ちよっ、なんて無茶なっ、それにあばれ……っ!?!』

PICを維持するエネルギーも切れたためか、デステイニーがガクンと振動し、重力に引かれて落下を始める。

だがすぐにその落下は止まることとなる。

デステイニーの紅い光の翼に対を成す「蒼い光の翼」を持つ機体。

『真、お疲れ様』

飛燕を展開した簪が2機を抱えてゆつくりと降下していく。

『ありがとう、簪……てか何か前にもこんなことあつた様な』

『クラス代表戦だね』

『ああ、そうだったな。とにかく助かったよ……ありがとう』

ふうと大きく息をついた真が笑みを浮かべる。

すでにS・E・E・Dの感覚は消えており、その瞳には大切な人の笑顔が写つていた。

---

## 2時間後——保健室

真と刀奈の試合が終わって2時間が立っていた。

当事者である真は何故か保健室のベッドに寝かされていた。

その理由は――

「デステイニーが発現させた能力は反動が凄いな。ISの生体保護でもカバーしきれないってのは相当だよ？」

簡単な真のカルテを持った簪が真に告げる。

そう、デステイニーガンダム・ヴェステイージュが発現させた【運命ノ翼】の反動で真は倒れたのだ。

すぐに保健室に運ばれた真は意識を失ったまま検査を受けた。

幸い命に別状はなかったものの疲労との事であり、簪が彼を看病することとなったのだ。

また真と簪の交際については以前と変わらずに続けていけることとなっている。

これについては先ほど真の意識が回復する前に、蔵人が簪に告げていた。

そもそもが刀奈の悪ふざけから始まったのが今回の一件であったが中々に楽しめたのと、未来の義息の頼もしい一面が見れてよかったと蔵人は語っていた。

「でもそれに見合うだけの能力だと思う。エネルギー吸収・操作能力、単純にVLを大幅強化した感じだな」

「ビームとかレーザーとかの光学武装を積んでる機体は相性最悪だよ。攻撃が全部デスティニーのVLに持ってかれると厳しいと思う」

この場にはいないセシリアの耳に入れば大層驚いただろう言葉を聞いて真は苦笑いを浮かべた。

「まあ、まずは身体を慣らさないとな。耐G訓練設備なら日出にもあるからな」

「そうだね」

「…………スケテエ…………タスケテエ…………脚がああ…………」

簪の相槌の後に、見知った呻き声が聞こえてきた。

真が視線を横に逸らす、その先には正座の体勢で膝の上に重石を乗せられた刀奈の姿があった。

真が倒れた後、命に別状がないことを確認した簪に拘束されて現在に至るのだ。

「ところでお姉ちゃん、覚悟はできてるよね？」

「ひいつ、お願い、簪ちゃん、許してえ……っ！」

涙を流しつつ手を専用器具で拘束されている。

この専用器具は面白そうだからと言う理由で束が作成した特注品であり、刀奈でも外すことは難しく動けない状況だ。

「……少なからず溜飲が下がったけど、まだやるのか？」

「まだまだかな。さあ、お姉ちゃんの罪を数えて？」

そう言ってニコツと黒い笑みを浮かべた簪が刀奈の目の前に歩み寄る。

止めようとしたが、凄みのある笑みに真は何も出来なかった。

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ！もうしないからっ！からかったりしないからあ！」

いつも余裕を浮かべている刀奈が本気で涙を浮かべている。

それに少しだけゾクゾクしながら簪は彼女のわき腹に手を伸ばす。

「駄目。ギルティ」

「あつ、あひんつ、わき腹はだめつ、弱いのおつ、真君、タスケテエ！」

「……俺、まだ動けないのでー」

そう適当に返した真は保健室のベッドに横になる。

仲のいい姉妹喧嘩に割ってはいえるほど無粋ではないのだ。

息も絶え絶えになった刀奈は2時間後に解放された。

その際、真は彼女から学園最強である自分に勝つたのだから生徒会長になるべきだと言われたが辞退している。

そもそもが今回の試合は、公式戦ではない。

それにデステイニーに単一仕様能力が発現しなければ負けていた可能性が高い。

加えてエネルギーもほぼ同時に切れたことから、純粹に勝つたわけではないと真は思っている。

その旨を話したところ渋々と納得してくれたのは真にとっては僥倖であった。

しかし、どういうわけか今後より一層彼女からのスキンシップが激しくなったのは別の話である。



ANOTHER PHASE 私に光をくれた人①

銀髪の少女が男性に連れられ歩いている。

それを同じ少女が背後から眺めている。

場面は移り変わり、少女は手術台の様なベッドの上に乗せられ身体を拘束させられていく。

——当実験体の耐久実験を開始。

(……これは……夢、ですか)

途端に身体に奔る痛み。

これが夢であることは理解したがそれでも過去に体験した痛みが蘇ってきているのか、幻肢痛のように身体が反応している。

痛みが続いていた時間は数十秒程度であったが、数時間は浴びていたかのような錯覚を感じる。

——耐久値はやはり想定よりも下回っているな。

——これでは報告できんぞ。

——ああ、こいつは【失敗作】だな。

(……以前の私ならばこの夢の中でも恐怖していたのでしようが……)

想い人の盟友と思わぬ形で邂逅し、激励を貰った。

その経験からすでに【失敗作】と言う言葉は彼女にとって何も意味をなさない言葉だ。

研究員達を動けぬ意識の中で冷たい目で見つめる。

すると状況は動いていた。

研究員たちの背後に黒い人影が現れたからだ。

マスクを装着しており、その手には消音機装着済みの自動拳銃。

研究員達はその人物の気配に全く気付いていない。

——しかたない、ラクス様に破棄を申請……がつ!!?

——なっ、何が、ごえっ!?

奪う。  
乾いた小さな発砲音と共に正確に2発、弾丸が研究員達の頭部に吸い込まれその命を

——対象を確認した。これから保護する。

鮮やかに研究員達を始末した人間は声からして男性の様だ。

倒れた研究員達が事切れたことを確認した男性はマスクを外す。  
マスクから垂れていた黒の長髪に、整った端正な顔の青年。

——おい、生きているか？

彼の言葉に夢の中の少女はゆっくりと頷く。

——お前を保護してこの施設を破壊する。

青年が左腕に付けていた翡翠色の腕輪を軽く触るとその身体に【IS】が展開されて

いく。

1秒もかからずに青年はトリコロールカラーのISを身に纏っていた。

(この時は驚きましたね、何せ……ISを動かせるんですから)

装甲に覆われたマニピュレータで青年は少女の小さな身体を抱え上げる。

——掴まっている。

そう一言だけ告げた青年のISが「薄緑色の光の槍」を展開し、そのまま天井を突き破っていく。

次々に天井を突き破りそして目の前に青空が広がる。

彼に抱えられている少女はその光景に涙を浮かべていた。

——お前は自由だ、これからは1人の人間として生きるんだ。

少女を抱えた青年「カナード・パルス」の言葉と共に、急速に意識が覚醒していく——

。

9月下旬 I S 学園近海 ブレイク号 クロエ私室

「……あの時の夢、ですか」

ふふつと少しだけ笑みを浮かべてピンクの可愛らしいパジャマ姿のクロエはベッドから起き上がる。

時間は午前6時30分、この時間で起きているのは自分とトレーニングを行っている  
【数名】だけであろう。

「……カナード様」

名前を呟いて先ほど見た夢を思い出す。

カナードに救ってもらった時から自分の人間としての生活が始まった。

それは常に新鮮な刺激の連続であり、試験管ベビーの自分では決して手に入らなかったはずのもの。

「貴方がいてくれたからですよ……カナード様」

そしていつの間にか彼女はカナードに惹かれていた。

あの人の傍に居たいと、心の底から思うようになったのだ。

愛しい男性に思いを馳せている少女はふと日課の事を思い出した。

「……そろそろお食事を作らないとですね」

立ち上がりするとパジャマを脱いで着替えを始める。

そして普段通りの服装になると、食事の用意に向かう。

ブレイク号 リビングキッチン

ブレイク号のキッチンは、艦自体がさほど大きくないためか小さめであるが、設備や器具はそれなりのモノがそろっている。

余談だがブレイク号での食事はカナード↓ラキーナ↓クロエ↓カナードの順で交代制である。

ここに束が含まれていない理由だが、彼女の手料理を食べたカナードとラキーナがここだけは譲らないと束による調理を断固拒否しているからである。

本日はクロエの番であり、エプロン姿のクロエが熱したフライパンの上でジュウジュウと目玉焼きを蒸し焼きにしていた。

「おはよう、クロエちゃん」

「おはようございませす、ラキーナ様」

少しだけふらつき、目元にはつきりと隈を作ったラキーナがキッチンに入ってくる。

すでにアスランとの戦いで負った火傷は完治し、9月の上旬には医療施設からも退院していた。

そんな彼女は眠そうな顔で椅子に座って欠伸をしていた。

丁度用意していた淹れたてのコーヒーを彼女の前に差し出す。

「ラキーナ様、徹夜の様ですが……大丈夫ですか？」

「うーん、流星にまだ2徹はキツイかなあ……ちよつとクラクラする」

たははと笑いながらラキーナはコーヒーを口に含む。  
そして苦みからかすぐさま砂糖瓶に手を伸ばし、砂糖を入れ始めた。

「駄目ですよ、ちゃんと睡眠はとりませんと」

「うん、まあ、そうなんだけどね、Xアストレイのドラグーンの最終調整とか、ドレッドノートのアLMニピュレータの試作品開発に、男性搭乗用ISの試作機開発とかキリのいいところまでつて感じてついね」

自身の搭乗機である「Xアストレイ」の名前が出た為、クロエは申し訳なさそうな表情になる。

スプーンでたっぷり5杯目の砂糖を入れ、甘ったるくなつたコーヒーを口に含んで笑みを浮かべる。

「あつ、いいんだよ、私が好きでやってることだからさ」

「ですが……」

「おっはよー、あー、お腹減ったー!」



ラキーナと同じように隈を作った天災、篠ノ之東が食堂に入ってくる。ラキーナよりもはつきりと深い隈に普段以上のハイテンション、おそらく2徹以上は確定であることが予想できる。

「おはようございます、東さん」

「ラキちゃんおはよー、くーちゃんもおはよー」

「おはようございます、東様」

ラキーナの隣の椅子に座った東が途端にぐでーとテーブルに突つ伏す。クロエがすぐさまマグカップにコーヒーを注ぎ、東のそばに置いた。

「はあー、やっと目途がついたね、ラキちゃん」

「ドラグーンの調整もようやく終わりましたし、ALマニピュレータの方もようやくつて感じですね」

「ううん、ラキちゃんが手伝ってくれたおかげで想定よりも全然速いからね、けど名前に面白みがないよね、【ALマニピュレータ】ってそのままだし」

ズズツとコーヒーに口をつけてにがーいと顔をしかめる。  
それを見たラキーナが砂糖瓶を手渡した。

「あはは、兄さんらしいというか……」

「いつそのこと『シエルブリット』とか『アガートラム』とか見栄えのいい名前にすればいいのに」

「兄さんが絶対に使いそうにない名前ですね、前者はともかくとして後者は絶対に……」  
「俺がどうかしたか？」

ラキーナの言葉を遮るようにリビングにカナードが現れる。

トレーニングウェアの上半身を脱いでタンクトップ状態だ。

早朝の日課であるトレーニングをこなしてきたからだ。

前世とは違いナチュラルの身体である為、より専念して身体を鍛える必要があったためすでに日課となっているのだ。

彼の右手にはタオルが握られており、シャワー後の為か特徴的な黒の長髪もしつとりとまだ湿っていた。

「おはようございます、カナード様」

「おはようー、カナ君」

「お疲れ、兄さん」

「ん」

テーブルを挟んでラキーナの前に座りつつ、タオルで再度髪の毛を拭き始める。女性から見ても長い部類に入る兄の髪の毛の長さにラキーナが口を開いた。

「兄さん、そろそろ髪の毛の毛切ったら？ 流石にそこまで長いと邪魔になると思うよ」

「……まあ、確かにそうだな、考えておく」

「アスランは？」

「奴はまだシャワー中だ」

ゴシゴシと髪をタオルで拭き終わったカナードがラキーナに告げる。

歌姫の騎士団崩壊後、その残党であるスコール・オータム・マドカ・アスランはこのブレイク号で拘束している。

その中でも協力的であり、ラキーナがいれば何かあった際に抑えやすいアスラン、と

ある人物のクローンであると判明し、記憶操作がされていたことが判明したマドカについては、艦内ではある程度の自由が許されていた。

主にアスランはラキーナが、マドカは出自が近いクロエとカナードが監視を担当している。

スコールとオータムについては所持していたISを剥奪し、必要になる情報を引き出すまでは完全に監禁状態で拘束している。

2人から情報を引き出した後は、国際警察機構等に引き渡す予定だ。

マドカは朝に弱いようでもまだ起きてきていなかった。

「どうぞ、カナード様」

「ん、すまないな」

目の前に出された香ばしく焼けたトーストの上に目玉焼きが乗った目玉焼きトーストとコーヒーが出されていた。

料理は苦手なクロエだったが現在では調理できるレパートリーが増えている。

コーヒーに口をつけふうと一息をついたカナードは何かを思い出した様な表情に変わった。

「……ちっ、忘れていたな」

「どうかしたの？」

ラキーナが彼に質問を飛ばすと苦笑しつつ答えた。

「テスト……だったか。その採点を依頼されていたんだ、山田教諭にな」

非常勤教師としての立場であるため、カナードは色々とIS学園教師陣から頼まれごとをされることが多い。

特に真耶はその頻度が高くテストの採点の他には、設備申請やISの整備などを頼まれていたりしていた。

カナードの口から摩耶の名前が出ると、キッチンで自分の分の朝食を用意していたクロエの表情が曇る。

それをちらり横目で見たラキーナは苦笑いを浮かべる。

「後回しにしていたからまだやっていないんだ」

「カナ君いいように使われてるね……非常勤って立場を完全に利用されてるよ」  
「あはは……やっぱりIS学園の教師となると忙しいんですね」

ラキーナの言うとおり千冬や摩耶を筆頭にしたIS学園教師陣の毎日が多忙を極めて  
いる。

学外施設や各種団体との調整、代表候補生祖国との調整や要望についての回答／対応  
e t c e t c …。

この他にも通常の教師としての業務もある為休む暇さえないという状況だ。

「気晴らしにはちょうどいい。報酬も少しだけ出るからな」

そう言ってカナードは目の前に出されていたトーストを齧りつつ立ち上がる。

自身の部屋で作業を行うのだろう。

彼が部屋に戻ろうとした時であった。

何かに閃いた様に束の表情が変化し、ニヤツと笑った後口を開いた。

「くーちゃん、そう言えば食糧とか日用品とかってそろそろ足りないんじゃない？」

東がクロエに尋ねる。

若干どころかあらか様にわざとらしい棒読みでだ。

しかし食料や日用品はまだ十分な貯蓄がある。

それを東が把握していない訳がない。

東の発言の意図に気付いたラキーナが続ける。

「なら兄さんと調達してきてくれないかな？」

「……別に構わんが、何故クロエと？」

齧ったトーストを一気に食べ終えたカナードがラキーナに返す。

「そりや日用品買うんだから結構な量になるでしょ、兄さんみたいに馬鹿力があるわけじゃないんだから男手はいるでしょ？」

「……分かった、クロエは構わないか？」

「はっ、はいっ！」

笑顔で彼の言葉に答える。

「採点を午前中に終わらせて山田教諭に返すとなると午後だな、構わないか？」

「はい、大丈夫です！」

「わっ、分かった」

クロエの迫力に面食らったカナードが珍しくたじろぎながら答え、テストの採点を行うため自室に戻っていく。

その入れ違いでシャワーを浴び終わったアスランが入室してくる。

「おはよう、アスラン」

「おはよう、ラキーナ、それに皆さん」

「おはようございます、アスラン・ザラ」

クロエとラキーナはアスランの挨拶に返すが東は無視してニヤニヤと笑いながらコーヒーを飲んでいる。

それに気づいたアスランはラキーナに質問を投げる。



「どうかしたのか？」

「いやー、うん、まあ、女の子の笑顔を見るのは楽しいねって」

クロエには聞こえないようにラキーナが笑いながらアスランに答える。

「そつ、そつか」

空いていたラキーナの隣に座りアスランが困ったように返す。

「すいません、私、ちよつと準備してきますっ！」

東、ラキーナ、アスランの分に加えて、マドカの分の食事をテーブルの上に置いた後、エプロンを放り投げてクロエは自室へと駆けて行く。

「あらー、クーちゃんはりきつちやって……東さんは嬉しいぞお」

「……ストライクフリーダムの調整、そーいえばまだ完全には終わってなかったなあー」

「なんだって、それは本当かい、ラキちゃんっ！」

「ええ、なので東さん、飛行時の姿勢制御調整に付き合ってください、午後から」

東とラキーナがニヤニヤと笑いつつ食事を食べ進めていく。

「……2人して何をしているんだろう」

C. E. から鈍感な気が強いアスランは、2人の計画に全く気づかずに朝食を食べ始めた。

# ANOTHER PHASE 私に光をくれた人②

同日 午後13:30 ショッピングモールレゾナンス 業務スーパー

「……先についたか」

業務スーパーの前に私服のカナードが立っていた。

おそらく全く似合わない光景だろう。

服装は黒のジャケットにグレーのインナー、これまた黒のカーゴパンツ。

整った顔であり、男性には珍しい長髪であることと、歌姫の騎士団の騒動の後、IS学園で保護した3人目の男性搭乗者として報道されているためか、すれ違う人々からは好奇の視線で見られたりしているがすべて無視していた。

「おつ、お待たせしました、カナード様っ！」

所謂ゴシック風の私服を身につけたクロエが駆け寄る。

彼女の瞳は感情の高ぶりなどでヴォーダン・オージエ状態に変化してしまうため、特殊な眼鏡によって隠されている。

この眼鏡をかけていれば、もし変化した場合でも傍から見れば通常の朱色に見える束特製の代物である。

「すみません、準備に時間がかかってしまいました」

「いや、別にいいが……その服は？」

ゴシック風な私服などこれまで彼女と生活していて見ていなかったカナードが少々戸惑いながら問う。

「えつと……その、ラキーナ様と束様が、私にはこれが似合うとお勧めいただきました……私も可愛いなと思って……その……」

（……アイツや束のセンスは分からん……だが）

妹と天災の仕業かと少し頭を振った後に、彼女に答える。

「悪くない……と思うぞ」

「ほっ、本当ですかっ!？」

「ああ」

彼女のリアクションが予想以上であったため引き気味に答える。

だが実際に似合っているのだ、それは素直な感想であった。

「褒めてもらえました……やった……やりました……っ！」

カナードに聞こえない様ぶつぶつと呟くクロエを見ながらカナードはため息を付く。

「……買い出しをさっさと済ますぞ」

「あっ、はい、わかりました」

その声で正気に戻った彼女は業務スーパーに入っていくカナードの後を追う。

その頃――

レゾナンス 上空5000m

8枚の自由の翼を広げたIS、「ストライクフリーダムガンダム」がレゾナンスの上空を旋回していた。

ストライクフリーダムを纏ったラキーナは空間投影ディスプレイに映るカナードとクロエを見てニヤニヤと笑みを浮かべている。

東がストライクフリーダムのハイパーセンサーを調整して広範囲の検知が可能となっている為、地上の彼らの行動を逐一監視することができるとのだ。

『どつきりゴシツク服作戦は大成功ですね、東さん』

『だねー、カナ君が素直に褒めるとは思ってたよー、こりゃいけるんじゃない?』

ディスプレイが開かれ映るのは天災、篠ノ之東。

『ですね、いい加減見てるこつちがむず痒いですし……と言うか東さんはいいんですか?』

『何がー?』

『いや、このまま押せ押せで行って兄さんとクロエちゃんがそうならって事です』

ラキーナの質問にうーんと少し考えるような仕草をしてから答える。

『くーちゃんの事は娘って思ってるけど、カナ君なら安心して任せられるかなとも思ってるよ』

返ってきた答えは肯定。

それに笑みを浮かべてラキーナが返す。

『成程……あ、スーパーに入っちゃいました、しばらく待機して頃合いを見てクロエちゃんに通信入れますね、その時にモニタもそっちにつなぎます』

2人がスーパー内に入ったことを確認して、1度ハイマツトモードの出力を落として滑空状態に切りかえる。

『りよーかーい、この後、くーちゃんがちゃんとデートに誘えるか……楽しみだね……！』

『ふふ、頑張つてね、クロエちゃん……応援してるから』

1時間後

シヨツピングモール レゾナンス カフェ

「お待たせしましたー、カフェオレとカプチーノです」  
「どうも」

店員から飲み物を受け取って、屋外の席に座るクロエの元に向かう。

「待たせたな」

「いえ、大丈夫です、ありがとうございます」

彼女にカフェオレを渡して空いている席に座る。

買い出しは予想以上に早く終わっていた。

そもそもまだ十分な量の貯蓄がある為、購入に時間がかからなかったのだ。



購入した食料等はI Sの拡張領域に格納しており、2人とも身軽な状態だ。

「I S学園の生徒の方が多いですね」

辺りを見回すと確かに、何度か見た顔がいる。

向こうもこちらに気付いていたのか、「あ、カナード先生」と会釈をしたりひそひそと何か会話をしている。

『あー、あー、聞こえる、くーちゃん？』

『あつ、はい、大丈夫です、束様』

『よーし、我ながらうまくいったかな、私の声も聞こえてるよね？』

『はい、ラキーナ様』

左耳に付けているピアス——Xアストレイの待機形態——が一瞬だけ、煌めいた。

ラキーナのストライクフリーダムからコアネットワークを介した通信を行っているのだ。

また彼女のI Sを中継点にして、束にもチャンネルが開いている。

『よし、兄さんも結構リラックスしてるっばいから……!』

『デートの申し込み、いつてみよう!』

『はっ、はい!』

通信が届いていることなど知らず、カナードは店内を見渡しながらカプチーノに口をつけ、先程のクロエの疑問に答える。

「今日が土曜で、学園は半日で授業が終わるからな」

「……カナード様、この後、時間はあ——」

クロエが話を切り出そうとした時であった。

「あら、カナード?」

クロエの声を遮り、カナードを呼ぶ声が響く。

それに振り向くと特徴的な栗毛ツインテールの少女が立っていた。

歌姫の騎士団の迎撃の際に何度か顔を合わせている為、彼女は知っている。

中国の国家代表候補生であり、真の友人――

「凰鈴音か」

「フルネーム呼びかい」

突っ込み口調で少女は返す。

そう、鈴がいたのだ。

「何の用だ？」

「別に……用ってわけじゃないけど、顔見知りがいいたら声かけるじゃない？ アンタ達は？」

「……日用品の買い出しだ、もう終わったがな」

「そうデートね……えっ!？」

カナードの答えに鈴は驚いて声を上げた。

そしてすぐ近くの席に座っているクロエの手をつかむ。

「ちよつと……クロエ、こつちにつ！」

「えつ、あつ、ちよつ!？」

突然であったため、なすすべなく10 m程離れた席まで引つ張られたクロエに鈴は振り向く。

「デートじゃないのっ!？」

小声で、しかし力強く尋ねる。

「えつと……これから誘うつもりでした」

クロエのその答えに、やっちまったとバツの悪い表情を浮かべた。

「……あー、ごめん、最悪のタイミングだったわね」

「いつ、いえ、その……大丈夫です、多分」

その言葉にさらにバツの悪そうな表情を浮かべた鈴であったが、閃いた様に自身の鞆を開く。

「……ほら、お詫びってわけじゃないけど」

彼女の手にはチケットの様なモノが握られていた。

「これは？」

「さっき近くのハンバーガーショップで昼を食べた時に配ってたのよ。すぐ近くのゲーセンのUFOキャッチャー一回無料券。こんなしよぼいもので悪いけど……よかったら使ってよ」

「……ありがとうございます、鈴様」

彼女から無料券を受け取ってクロエは笑みを浮かべる。

「そう、ありがとね。 んじゃ、頑張れ！」

そう言つてサムズアップしながら鈴はカフェから出ていく。

「……で、話は終わったか？」

「あ、はい、終わりました」

「ん、それは？」

「鈴様から頂いたゲームセンターでのゲームの無料券です、よろしければ……どうですか？」

無料券を彼に見せて尋ねる。

内心では、心臓は鼓動を速め緊張していた。

デートの誘い、彼が受けてくれるかは分からないからだ。

だがその思いもすぐに杞憂に変わった。

「……まあ、時間はあるからな、大丈夫だ」

少々疲れた様な表情を浮かべながらもカナードは了承の言葉を返す。

「っ！ ありがとうございます、それでは参りましょう！」

「おっ、おい！」

喜びのあまり、テンションがハイになっている彼女に押されながら2人はカフェを出た。

『あらー、鈴さんの乱入でどうなるかと思いましたが、いい感じになりましたね』

『だねー、ラキちゃん追跡よろしくっ』

『了解ですっ』

上空のストライクフリーダムはその性能を無駄に発揮してクロエとカナードを追跡していく。

---

レゾナンス内 ゲームセンター K A I B A

レゾナンスにあるゲームセンターにカナードとクロエの姿があった。

このゲームセンターは世界的なゲーム会社である、とある企業が運営するゲームセンターの1つであり、

各種最新のアーケードゲームはもちろんの事、マニア垂涎のレトロゲームも取り揃えられている。

そのためか全国に数多く展開されており、ゲームセンターと言えばK A I B Aと言われるほどゲームセンター市場を席卷していた。

「凄い熱気ですね」

「そうだな」

互いに初めてゲームセンターに足を運んだ2人は店内女性スタッフに声をかける。

先程鈴からもらったチケットを見せ、女性スタッフの案内によつて無料割引対象のU F O キャッチャーに案内された。

すでに専用のキーで1回分無料で遊べるようにセッティングされている。

「これがU F O キャッチャー……！」

「……ぬいぐるみか？」



2人の前の筐体につまれている景品は20cm程のぬいぐるみであった。

その隣の筐体にはプラモデル、その隣にはフィギュアなど多種多様な景品が用意されている。

「えつと……こちらを動かすんですよね？」

「みたいだな」

筐体の説明書を読んでいた2人がレバーを確認する。

ソワソワとクロエはカナードを横目で見ている。

無料プレイは1回のみであるため、やってもいいかとその目は語っていた。

「……やればいいだろ？」

「あつ、はっ、はいっ！」

笑みを浮かべながらクロエはレバーを操作する。

だが、UFOキャッチャーとは偉い人曰く、貯金箱と言われるレベルで景品を入手す

るのが難しいゲームだ。

そしてクロエはUFOキャッチャーをはじめ、ゲームをプレイすること自体が初めてである。

クレーンがクマのぬいぐるみを掴む。

しかし、引っかかりが浅かったのか、クレーンからクマのぬいぐるみは転げ落ちてしまった。

「あっ……」

ポトッと景品の山の中にぬいぐるみは落ちてしまった。

景品口の上でクレーンが開くのがとても虚しいが、これがUFOキャッチャーである。

「……」

「……貸してみろ」

無料プレイ分を無駄にしまい、落ち込んだクロエに代わってカナードが懐から

00円を出して投入する。

「……カナード様」

黙ったままレバーを操作して、先程クロエが取ろうとしたぬいぐるみの真上に正確に位置を合わせる。

(……こんなものか)

こんなゲームをプレイするのは初めてであったが、正確な位置を合わせれば景品など取る事は簡単、クロエのプレイを見てそうカナードは考えていた。

しかし、UFOキャッチャーはそこまで甘いゲームではなかった。

(なっ、アームが回転するだっ!?)

そう、ぬいぐるみまで下りていくところで、アームが回転してしまったのだ。そのため、ぬいぐるみは中途半端な形でクレーンに挟まれる事となった。

そしてその後は先程の再現であった。

驚愕に見開いていた目をいったん閉じて深呼吸する。

「考えが甘かったか……ならばクレーンの軌道把握、レバー操作による誤差を計算、アームの強度から最適な角度を導き出せば……！」

無駄にクレーンのアームを凝視した後、ぶつぶつぶやきながらカナードがレバーを操作していく。

慎重に小刻みにレバーを動かしつつ、別角度から景品とクレーンの角度を視認して目的の景品の頭上に正確にクレーンを配置する。

「……だな……！」

薄く笑い浮かべて操作ボタンを押す。

クレーンが下がり、アームが開く。

ぬいぐるみをつかみあげ、先程の様にぶれもなく上がっていく。

しかし、クレーンが上がりきった衝撃でアームからぬいぐるみが外れてしまった。

「なっ!？」

アームから外れたぬいぐるみが重力に従って落下し、景品口の上で虚しくアームが開く。

当然何も出てくるわけがない。

「……やってくれるな」

静かに笑みを浮かべながら追加の100円を取り出して投入する。

今度はアーム上昇時の衝撃も加味する必要があるかと再び思考の海にカナードが沈んでいく。

「……」

彼のその姿にぼかんとしていたクロエであったが、目の前にぬいぐるみが差し出されると

同時に意識が再起動した。

ちらりと見えた時計の時刻からすでに30分程度が過ぎていた。

「取れたぞ」

「あつ、ありがとう……ごさいます」

確かに欲しいと思ったが、それよりもカナードがクレインゲームに苦戦すると言う場面の方が彼女にとって絶大なインパクトがあったため、その返事もうわの空に近かった。

「中々の強敵だったが……まあ、取れたのならば負けじゃないな」

珍しく満足げな笑みを浮かべてカナードが財布をしまう。

かかった金額は5000円、数度の両替も実施済みなり。

ちなみにその様子をクロエを介して見ているラキーナと束は大笑いしていた。

『につ、兄さん、大人げなつ……くくつ、駄目だ、必死すぎる……っ！』

『息つ、できつ、ないつ、カナ君、あのドヤ顔……っ！』

自身の兄の行動に悶絶しているラキーナのストライクフリーダムは一時的に制御を失って降下していく。

ブレイク号では東がデスクの上で突っ伏しながら笑い転げていた。

---

1時間後――

シヨッピングモールから少し離れた公園

買い出しも完了してブレイク号への帰路についたが、少々休憩するために近くの公園で休憩していた。

辺りはうつつすらと暗くなっており、住宅地から離れている為か公園には他に人がいないようだ。

「そんなに気に入ったのか、それ」

「はい、私の部屋に大事に飾りますっ！」

公園のベンチに座りながら、ゲームセンターで手に入れたぬいぐるみを先程から抱きしめているクロエにカナードは苦笑を浮かべる。

「今日は本当にありがとうございました、カナード様」

「別にいい、俺もいい気分転換になったからな……っ！」

ぐつと身体を伸ばしてカナードが身体をほぐす。

IS学園での雑用と併せ、歌姫の騎士団の残党についての調査が重なった彼にとつてはいいリフレッシュの機会であった。

その陰に隠れて、クロエには再び通信が届いていた。

もちろんその相手は野次馬のラキーナと束だ。

『兄さん、滅茶苦茶リラックスしてるっ！ クロエちゃん、今しかないよ！』

『そうだよ、くーちゃん、この機会を逃したら駄目だよ、ガンガン行こうぜってやつだよ！』

『わっ、分かりました……クロエ・クロニクル行きますっ！』

『『頑張れっ！』』



2人の勢いに押されてクロエは決心する。

彼女自身、自分の気持ちをいつまでも抑え込んでいるのは無理だと感じている。

この機会を逃したら次はない——そう決心して伸びを続けていたカナードに顔を向ける。

「どうした？」

「……あの、その……！」

気持ちばかりが先走り、言葉が続かない。

緊張と焦りの糸が絡まりさらに詰まっていくな。

「きよつ、今日はカナード様にお伝えしたつ、伝えたいことがあるんです」

少しどもりながらも言葉をつなぐ。

「カナード様、私は……私は、貴方をお慕いしています」

それは純粋な好意を示す言葉。

『言つたー!!』

上空ではその言葉を聞いて、野次馬の2人がやいのやいのと騒いでいる。少し驚いた表情になったカナードを見て続ける。

「貴方の事が好きです、カナード様……答えを教えてください」

「……俺の答えか」

クロエの告白に、カナードは呟く。

（……やはりそうなのか……だが……）

彼女の事は大切な存在だと思っている。

だが――

(……結局は戦う事しかできない俺が……他の人間を幸せにできるとは思えないんだ)

己の手は何人も人間の血に染まっている。

自身で選んだ傭兵としての道に後悔はないし、これからもこの道を歩んでいくつもりだ。

だが結局は自分にできるのは誰かを傷つけ殺める事のみ。

(そんな人間が、誰かを……愛して良いわけがない)

彼がそのように考えてしまうのは元々の出生が特殊すぎるという事情もあった。

カナードは前世、C・E.では人類の夢とも言われる最高のコーディネーター【スーパーコーディネーター】の失敗作だ。

何を基準として失敗作と呼ばれたかは不明だが、本人の血の滲むような【努力】の結果、並のコーディネーターなど足元にも及ばない程の高い能力を発揮した。

C・E.での全ての戦乱が集結した後、スーパーコーディネーターの遺伝子を残してはいけないと、彼は生涯独身を貫いた。

何の因果かこの世界に生まれ変わって現在はナチュラルの身体ではある、かつての様な戒めはない。

しかし、結局は前世と変わらず自らの意志で戦う道を選んできました。

そんな人間が誰かを幸せにできるわけがないと、彼は思っ、いや思ってしまったているのだ。

「……すまない、クロエ」

「……っ!!」

カナードの答えに、びくつとクロエが震える。

「正直、お前の言葉は俺にはもったいないくらいだ。だが俺は……戦う事しか、誰かを傷つける事しかできない人間だ。そんな人間がお前を幸せにすることなどでき……」

「そんな事はありませんっ!」

カナードの言葉をクロエの叫びが断ち切る。

既に人気のない公園だから周囲から好奇の目で見られることはないのが幸いであつ

た。

「カナード様は私をあゝの闇の中から救ってくれましたっ！」

彼女の目には涙が浮かんでいる。

悲しいからではなく感情の高ぶりからか自然に涙が溢れてしまったのだ。

「私にあの綺麗な青空を見せてくれましたっ！ 私に誰かを愛するという事を教えてくれましたっ！ 貴方は優しい人です、私は……私は……っ！」

堰を切った感情が溢れ、言葉に詰まってしまふ。

ぼろぼろと零れる涙はいくら拭つてもあふれてくる。

(……クロエ……)

誰かにここまで想われ、それを言葉で伝えられる。

カナードにとっては初めての経験であつた。

正確にはメリオルと言う前例がいたのだが、ネオ・ザフト戦役後、彼は自分から彼女の元を離れた。

そのため前世を合わせると100年近い今までの人生では経験したことがないと言つて良かった。

(……俺は……)

「……カナード様……っ」

嗚咽が混じりそうになった瞬間、クロエはカナードに抱きしめられていた。体格差が大きいため、抱き上げられるような形になってしまっている。

「カツ、カナード様……っ!？」

「……温かいな、お前は」

彼の顔に今までにないくらいのさわやかな笑み。

しかもそれが自分に向いているとなると頬が紅潮してしまった。

「ひゃう……」

「……俺でいいの？」

「……っ!？」

彼の返事に心臓が飛び上がる。

すでに限界まで鼓動していたはずなのに、さらに鼓動が高まっていくのを感じる。

「お前の事は大切に思っている……ただこれが男女の感情なのか、まだ俺にはよく分からないんだ。だが俺はお前の涙を見たくない、今、そう感じているんだ」

「カナード様……」

「……俺の手は血に塗れている、そんな男でもいいのか？」

「……私は貴方でなければだめなんです、カナード様」

「……そうか、分かった」

その顔にはとても柔らかな笑み。

「なら、一緒に歩いてくれ……それが俺の答えだ」

「……っ、はいっ！」

力強くクロエは頷く。

その時、彼女の左耳につけているピアスが目に入った。

それだけならば問題ない、だが一瞬ピアスが煌めいたのだ。

それを見てしまった彼の眉間に皺が寄る。

そして左腕に身につけている翡翠色の腕輪が一瞬だけ煌めき、彼の表情が凍った。抱きしめていたクロエをそっと離れた後、一度深呼吸して上空を見上げる。

『……それはそれとしてだ、野次馬は蹴飛ばされても文句は言えないだろうな？』

ドレッドノートHのイータユニットを砲門だけ部分展開。

イータユニットはバスターモードで展開し、上空に狙いをつけトリガーを引く。

『げえっ、ばれたあっ?!』



咄嗟にハイマツトモードの出力を高めてスラスターを噴かせる。

一瞬前にストライクフリーダムがいた空間をビームの柱が難いだ。

間一髪回避に成功したラキーナが冷や汗を流しながら叫ぶ。

『やつ、やつば、兄さん完全にキレてるっ！』

『ひえ、ラキちゃん、後は任せたっ！ 束さんはしばらくの間、放浪の旅に出ますっ！』

『さくらばっ！』

『えっ、ちよっ、束さんっ!?!』

開いていた回線を無情にも切断されたラキーナの叫びが木霊する。

おそらくブレイク号から個人用ロケットで束は逃走しているだろう。

そしてハイパーセンサーには背後に見知った機体の反応。

振り返ると臨戦態勢のドレッドノートH、当然搭乗者はカナードだ。

『……いい度胸だなラキ、野次馬か?』

『につ、兄さん、ちよっ、落ち着いて、ね?』

『俺は落ち着いている、落ち着いているとも……ああ、束も後で捕まえないとなあ、そう

だろう？ あの馬鹿も同じように見ていたんだろう？』

凄まじい怒気が声から滲んでいるのに彼はさわやかな笑みを浮かべている。

『わっ、私はストライクフリーダムのスラスターの最終調整の為の試験飛行をしてただけだから知らないよ？ そっ、そうだ、束さんが悪いなら、私が見つけてくるよっ！』

冷や汗をだらだらと垂らしながらラキーナがそれらしい理由を告げて、ハイマツトモードの出力を最大限まで高めて離脱を図る。

離脱した後は兄の怒りが収まるまで身を隠すしかない。

しかしそれを許すカナードではなかった。

『逃がすかあ、ラキイツ！』

バスターモードからソードモードに切り替えたイータユニットのビームサーベルが、離脱を図ったストライクフリーダムに襲い掛かる。

『うっ、うああああああっ!?!』

間一髪、紙一重でストライクフリーダムは回避に成功した。

『よく避けたな、ラキ……だが次は外さない』

ストライクフリーダムの機動性、運動性を考慮に入れ、確実に落とすために狙いを修正する。

退路を塞ぐために、展開したビームサブマシンガン〔ザスタバ・ステイグマト〕によって弾丸をばら撒く用意もすでにできている。

もちろん住宅地に被害が出ない様、軌道は逸らす。

『びっ、ごめんなさあああいつ!?!』

再び襲い掛かるビームサーベルをシールドで何とか受け止めながらラキーナが全力で叫んだ。

「……ふふ、カナード様、楽しそう」

兄妹喧嘩の様子を地上で眺めていたクロエは笑みを浮かべていた。

この後仲の良い兄妹喧嘩は1時間以上続いた。

途中ラキーナがS・E・E・Dを発動させるが、その直後にISのエネルギーが切れ、生身の格闘戦に移行した。

近接格闘戦では技術、体力差で劣るラキーナにとっては非常に不利であり、彼女は必死に抵抗したがついに力尽き制裁を受けている。

またこの数日後国外に逃亡した束を発見・捕縛し、ラキーナと同様の制裁を加えている。

EXTRA PHASE II エクスカリバー篇  
PHASE I 波乱再び

無限に続く思考と処理。

輝く蒼い空に無音の海が広がる虚無の世界。

それが少女に与えられた彼女だけの場所。

——ついこの瞬間までは。

『——aA』

突如【それ】は現れた。

少女の目の前には崩れた女性の影。

ボロボロの姿、ドレスにも似た不思議な格好をしている桃色の髪的女性。

少女に歩み寄る女性の顔に浮かぶ表情は笑顔。

無残にも見えるその姿など関係なく、少女は女性にひきつけられていた。

そして彼女の意識に女性が触れる。

ただのそれだけ、少女の意識が塗りつぶされていく。  
だが少女に恐怖という感情はなかった。

——目の前の女性の為に、そんな不要なモノは必要ないのだから。

『命令を下さい』

『では抜剣を』

笑みを浮かべて少女にそう告げる女性。

『割り込み命令、優先度を変更——モード・エクスカリバー及び、円卓議決開始』

何もなかった虚無の世界。

いつの間にか輝く空は消え、ただ闇が広がっていた。

『——所詮私は夢の残滓、オリジナルにはなれない、ですが、どうしても……どうしても貴方に会いたいです』

——そのためにはどんなこともしよう。

ボロボロのドレスはいつの間にか復元していた。

一見純白のウエディングドレスにも見えるその一部には、不似合いな紅い翼の様な機械が現れた。

『この気持ちだけは……私のモノ、そうですね、シン？』

季節は冬、12月。

すでに秋は過ぎ去り、いつ雪が降り始めても不思議ではないほど気温は下がっていた。

激動の1年を送ったIS学園の施設は全て修復されており、年の瀬に向けて少しずつだが浮かれたような雰囲気になっていた。

そんな中、2人のIS男性搭乗者は横浜のDeランドの施設内フードコートにいた。

美少女の友人を多数引き連れていたため、この様子を見た彼らの友人や後輩は血の涙を流していた。

「先ほど一夏とずっと並んでいたではないか、次は私だっ！」

「あー、誰がその席譲ったなんていったかしら、箒？」

ホットドッグなどを全員分購入するために席を立っていた一夏が戻ってくると箒と鈴が言い争いの最中であつた。

「ちよつ、どうしたんだよ、2人とも……うおつ」

それを仲介しつつトレーをおくと、ラウラによつての空いていた席に無理やり座らせられた。

そしてその右隣にはシャルロット、ラウラは左隣に座り、2人で一夏の両手を掴む。

「一夏の右隣もーらいつ」

「嫁の左隣は私だつ」

当然、その様子を見て言い争っていた箒と鈴が黙っているわけではなかった。



いつもどおり、日常の光景だ——気のせいかわフードコート内の男性の目が厳しいが。その様子を少しはなれたテーブル席で疲れたようにぐったり座りながら2人目の男性搭乗者である真は眺めていた。

「……眠い」

眠そうに呟きながら、注文していたカフェオレを口に含む。

落ち着いた紫の上着にグレーのメンズ用ストूल。

白のインナーにベージュのズボン、加えて【待機携帯】<sup>ドックタグ</sup>のIS、【デステイニーガンダ

ム・ヴェステイジー】

それに合わせて薄い黒のサングラス。

秋が過ぎた今の季節では少々肌寒いかもしれないが晴れた日ならばちょうど良い着心地である。

かつてシン・アスカであったときの私服と同じコーディネート<sup>の為</sup>、ややサングラスが浮いている。

何故そんなサングラスを身に着けているかと言うと、やはり男性搭乗者と言う立場は目立つのだ。

特に真のような燃えるような紅い瞳は珍しい。

また春から夏にかけての歌姫の騎士団による騒動によって、一夏や真共に搭乗機体が第二形態移行しており、大々的に報道されている。

ゲームにも登場しているためそれに拍車をかけていた。

そのため所属企業である日出工業から変装と言うわけではないが、なるべく目立たないようにと言われているのだ。

所詮は気休め程度だがないよりはましであろう。

「眠そうですね、真さん。日出工業絡みですか？」

真の向かいに座っているセシリアが尋ねる。

「ん、ああ、うちの計画の資料がガンガン送られてきてさ、一晩で見るのはちよつとな」

サングラス越しと元々の虹彩の色で分かりにくいのが、充血気味である。

「そうだね、ちよつと無理しすぎ」

真の右隣に座る簪が彼の顔を見つつ言った。

淡い赤紫のワンピースに薄手の白いカーディガンを身に着けた簪に苦笑を返す。

「……分かってるよ、気をつける」

「うん」

「ふふ、仲睦まじいですわね」

2人の様子を見て蒼いワンピースを身に着けたセシリアが2人に聞こえないように呟いて微笑む。

白いコートは店内の為、座席にかけていた。

「と言うか俺達誘った刀……んっ、楯無さんはどこだよ」

そう何故冬の休日に友人達と共にテーマパークにいるのか。

その理由は簪の姉、刀奈——楯無が全員分のチケットをプレゼントしたのだ。

何でも簪と楯無の父親、蔵人が少々早いクリスマスプレゼントとして楯無に渡したの

だという。

フリーパスを見せればフードコートの料理が数点ただ同然の値段になると言う特典付きチケットであることと、たまには遠出をしよう言うことでその好意に甘えることにしたのだった。

——閑話休題

「そういえばそうですわね」

「ん、ちよつと待って」

簪が携帯電話を取り出して画面を操作する。

SNSを使って今どこにいるか姉である楯無にたずねたのだ。

しかし返事はない。

「あれ、返信来ないな」

「そうだね……いつもならすぐに来るのに」

普段なら簪がSNSで呼びかけたなら風呂時の時間でも数秒で返信が来るのだが、珍

しい。

「まあ、そういう日もあるよな」

「そうだね」

そういう日もあるのだろうと特に気にせずに携帯をしまう。

だが少しずつ——騒乱のときは近づいていた。

「私は不滅だあああああつ!!ブウウンっ!!」

ステージの上でまるでゾンビの様に上半身をくねらせながら男性俳優が腰にバックルをセットする。

すると自動で腰にドライバーが装着される。

同時にカセットにグリップが着いたアイテムを取り出してそのスイッチを押す。

——デンジャラスゾンビッ

不気味な待機音が流れると主に右腕を水平に構え眩く。

『変身っ!』

——GASHAT! バグルアツプツ!

ライダーガシャットをバグルドライバーに差し込むと音声と共に、充分人を覆えるだけのスモークが焚かれる。

——デンジャー!デンジャー!ジェノサイド! デス・ザ・クライシス!デンジャラスゾンビ!

変身音と共に仮面ライダーがスモークから跳び出し、ピンクの主演仮面ライダーと相対する。

ヒーローショーを見に来ている子供達にとっては盛り上がりどころの1つである。

昼食後、一夏達と別れ、真、簪、セシリアはこのテーマパークで行われるヒーローショーを見るためにパーク中心部の広場に来ていた。

現在放映中の仮面ライダーのヒーローショーであり、加えて出演者本人が出てくるといふ超豪華使用だ。

そのためか子供達は通常のヒーローショーよりも多く、中には真達以外にも大きなお友達姿が見て取れる。

なお余談ではあるがセシリアは最初、真と簪と別行動を取ろうとしてくれたが、せつかく遊びに来ているのだからと気にしないでくれと2人と共にヒーローショーを見学している。

なんでもヒーローショーと言うイベント自体が初めてとの事であり、それを聞いた簪が張り切って解説をしていた。

「ああ、本人はやっぱり凄いやお……楽しみにしててよかったあ」

と涙を浮かべ感激しながら簪が。

「演技凄いやな、脚本も序盤から色々伏線張られて納得したし……やばい、社長、駄目だ、見るだけで笑っちゃまう」

と噴き出さないように耐えながら真が。

「日本の技術は凄いですわね、あの一瞬で入れ替わるのですか……と言うかゾンビですの？」

と感心と疑問が織り交ざったような表情をセシリアが。

それに反応して目を輝かせながら簪が言う。

「気になったらライダーもウルトラマンも戦隊もブルーレイとDVD全部貸すよつ、ウルトラマンと戦隊は実家にしかないけど、ライダーなら部屋にアマダムとかガイアメモリとかオーメダルとかロックシードもガシャットもベルトも全部あるからっ！」

「えっ、ええ……それはまたの機会に……と言うか簪さん、キャラ変わってませんか？」

普段の様子から一変した簪に苦笑しつつセシリアが真に問う。

同じくそれに苦笑して真が答える。

「特撮とかヒーローに夢中なときはこんな感じだけ？」



「友人の意外な一面が見れて嬉しいというか複雑と言うか……」

「ああ、エグゼイドがー！ 皆、ゲンムに負けないよう応援してー！」

司会のお姉さんの言葉と共に子供達の声援が広場に溢れる。

「頑張れー！エグゼイドー！」

簪も子供たちと同じように声援を送る。

真とセシリアはそれに笑みを浮かべていた。

(……にしても、あのゲンムって多分、本編以外のバックアップの設定だろうなあ。やっぱりエグゼイド、話の作り方がうまいなあ。帰りにガシャット買ってあげるか)

(仮面ライダー。日本ではウルトラマンに並ぶ知らない人のいない正義のヒーロー……後で少し調べてみますか)

と設定を思い出しながら真が、特撮作品に興味を持ち始めたセシリア。

確かにここには平穏な日常が存在していた。

しかし、それはすぐに壊れる事となった。

何故ならば、広場近くの雑木林に光線が降り注いだからだ。

一瞬で雑木林は紅蓮の炎に包まれた。

突然の事態に広場は一瞬の静寂の後、パニックの様相となった。

困惑した親子に、子供達の悲鳴、とても先ほどまでヒーローショーで盛り上がっていたなどとは考えられない有様だ。

「何だっ、レーザーがっ!？」

すぐに事態を把握しようと真達3人はそれぞれISを展開する。

ハイパーセンサーに上空からのエネルギー感知警告が表示された。

それと同時に、頭上が再度煌いた。

しかし、光線は広場を焼かなかつた。

広がるのは紅い光の翼――

『うおおおおおおおっ!!』

降り注いだレーザーを咄嗟に動いたデステイニーが【単一仕様能力】で受け止めていたのだ。

降り注いだレーザーは全てが意思を持ったかのように、デステイニーの【運命ノ翼】が発動しているV Lユニットへと吸い込まれていく。

レーザーを吸収して、溢れていく光の翼の大きさは広場を覆うほど大きくなり、さらに吸収範囲を広めていく。

加えて以前楯無との試合で行ったようにV Lを簡易的なビームシールドの用途で使うため翼で広場を覆っている。

『……止んだ?』

やがて降り注いでいたレーザーが止まった。

それを確認したデステイニーは能力を解除せずV Lユニットの稼働率を低下させた。警戒は怠らず、すぐさま能力の稼働率を高められるようにだ。

『こちらですっ！』

『こっちっ！』

セシリアと簪が遅れてISを展開し、避難誘導を開始していた。

同じような経験をすでにこの1年で2度経験しているため、その動きはスムーズだ。

同時にハイパーセンサーに反応。

反応は白式、紅椿、甲龍、リヴァイヴ、シユヴァルツエア・レーゲンの5機。

離れたところで同じようにISを展開したのだろう。

そして、1機の「アンノウン」反応を捉えた。

『この反応は……っ！』

『こちらでしたか、お嬢様』

現れたのはセシリアの「ブルーティアーズ」、その2号機「サイレント・ゼフィルス」に次ぐ3号機「ダイヴ・トゥ・ブルー」を身に纏った女性。

開発中であつたはずの3号機が何故此処にと疑問がわいたが、その搭乗者を前に疑問は消え去つた。

その女性をセシリアはよく知っていた。

両親を失った彼女にとって最も近くにいた存在、その名前は――。

『チェルシー……？何故ここに？ イギリスでお仕事を任せていたはずなのに……？』

困惑し震えた声でセシリアはチェルシーに尋ねる。

見間違うわけではない。だが何故此処にとセシリアの脳内に疑問の嵐が吹き荒れる。

しかし、彼女に返ってきた言葉はひどく無感情な声で冷たかった。

『お迎えに上がりました、お嬢様……いや、セシリア・オルコット』

そしてピームライフルを構えているデステイニーを一瞥する。

『……飛鳥真……いや、シン・アスカですね』

『っ!? 何でそれをつ!』

真にとって完全に初対面のセシリアの身内に何故「シン・アスカ」の名前を知られて

いるのか。

疑問に思う間もなく、微笑むチエルシーの姿が空間に沈むように消えていく。

『それでは、イギリスでお待ちしております』

そしてチエルシーの姿は完全に消えてしまった。

『消えたっ!? センサーからもっ!?』

飛燕を纏い、マルチロックオンシステムでロックオンをしていた簪の驚愕の声が響く。

『何が……起こっているんですの……っ!?』

突然の事態に少々震えながらセシリアが呟いた。

## PHASE 2 集う戦士達

数時間後――

IS学園 生徒会室

すでに日は落ち、辺りは夜の闇に包まれている。

冬休みに入っていたIS学園校内には人影が少ない。

だが生徒会室では真や一夏達、千冬や真耶などの教員達が空間投影ディスプレイを眺めていた。

謎のレーザー攻撃から数時間が立ち、それについての情報共有の為に束からIS学園に連絡があったのだ。

ISコアネットワークを利用した同時通信を行うための準備が進められていたのだ。

「準備、完了しました」

「ん、ありがとう、真耶」

コンソールを調整するとディスプレイに早速1つ目に映像が映る。

そこに映るのは現在の真の上司である、淡い紫髪にスーツの女性、【応武優菜】

『あー、テストス、繋がっているかな?』

『聞こえています、お忙しい時期にご連絡に応じていただき感謝します、応武さん』

『あー、そこまで畏まらなくても。年齢も近いわけだし、気軽に優菜でいいですよ、その代わり私も千冬呼びでOK?』

優菜がそう言って千冬に笑みを浮かべる。

それに一瞬だけ困惑した千冬であったが薄く笑みを浮かべて返す。

『……分かった。ありがとう、優菜』

『ん、やっぱりこういうほうがいいね、千冬』

千冬がそういうと2つ目のディスプレイに映像が映る。

そこに映るのは和服に黒の長髪の男性、更識蔵人。

真や簪は知っているが、それ以外の皆は少々困惑した表情を浮かべていた。



『ん、これは映っているのかい、刀奈？』

画面の向こうで蔵人が機器を叩いているのか打撃音が響いている。

『映っていますから！　　と言うかお父様、仕事の時は楯無でと何度も……っ！』

蔵人の右手を掴んで画面に映った刀奈——いや楯無が画面越しに目が合った千冬に手を振る。

『こちらはOKです、聞こえていますか、織斑先生？』

『ああ、映っている……が大丈夫か？』

『あー、大丈夫です……ってお父様、それ触らないで下さいっ！』

『はっはっはっ、中々凄いものだなISと言うのは。MSとはまた違った使い道がある』

蔵人が何か機器を弄った為か、一瞬笑い声にハウリングが発生したが千冬は無視を選  
択した。

『やつほー、ちーちゃんっ!』

そして3つ目、次に映ったのはウサギ耳を模したカチューシャを付けた天災、篠ノ之東。

I S 学園近海に停泊しているブレイク号から通信を送っているのだ。

『なっ、お前はなんて格好をしているんだっ!?!』

千冬が驚愕の声を上げる。

それも仕方がない、東の格好はいつもの様なエプロンドレスではなかったからだ。

冬だというのに、水着の格好、しかも布面積は辛うじて秘所を隠せるレベルの代物。

仮に今東が身に着けている水着を着れるかと生徒会室の皆に質問すれば全員がN O と答えるだろう。

『いやー、新装備の開発発途中でさ。艦内の電力を回しちゃって空調止まっててくっそ暑いんだよー、今艦内全員薄着だよー』

『だからといってそんな格好で会議の場に出るやつが……っ!』

『えー、でもいつくんどかガン見してるよー？ほらほらー』

ディスプレイ越しにたわわに実った果実2つがブルンブルンとゆれる。  
しかも着ている水着が水着な為、零れそうになっている。

「えっ、ちよつと、束さんっ!？」

「「「一夏っ!」」」

「えっ、うおわっ!？」

箒・鈴・ラウラ・シャルロットの4人が一夏の目を物理的に塞ごうと彼を拘束する。

ちなみに真はと言うと――

「……あのー、簪さん。目が痛いんですけど」

「駄目、まだ駄目だから」

顔を真っ赤にした簪に拘束され、目隠しをされていた。

簪よりも身長が20cmほど高いので彼女は必死に背伸びをしている。

「…………別に見たからってどうってわけじゃ…………っ!？」

ぐつと押さえられた手に力を込められ、言葉が切れる。

だがすぐに力は弱まり、真に聞こえるくらいの声で簪が尋ねてきた。

「…………真はあのタイプの水着……………好き?」

真だけに聞こえる声量で簪が尋ねる。

悲しきかな真も男で今は思春期の少年だ。

その豊かな想像力は一瞬で、束が着ている水着を来た簪を脳裏に構築してしまった。

「えっ!?! いや、その…………何と言うか、俺としてはその…………っ!」

脳裏に構築した映像を頭を振って消した後、どうしたものかと言いよどむ。

真も混乱しているのだ。

『あはは、仕方ないよねー、思春期だもん、ほらほらー』

その様子を見た東がさらにポーズを変える。

だがその悪ふざけもすぐに終わることになった。

『ほーらもうすぐ前かがみに……ってカナ君、ちよつと待つてっ！あふん、だめ……ぎゃああつ！』

ディスプレイに映っていた東の頭部を映り込んだ腕が掴みあげて引つ張り彼女が画面から消える。

そして絶叫が響く。

『あだだだだ、ギブツ、カナ君、ギブアアアアア！ 東さんの腕がパロツちやうから、O LAPしちやうからっ！』

『五月蠅い。いつまでたつても話が始まらないし、クロエやラキにとつても目に毒だ』

そんな声が聞こえ、最後に気味の悪い音と、女性が出しているものではない叫び声が

聞こえ一瞬静まる。

そしてディスプレイには3人目の男性搭乗者であるカナード・パルスが映る。

彼もタンクトップ姿であり、髪を切ったのか、以前より髪の長さがだいぶ短くなっております、真は一瞬キラ・ヤマトに見間違えた。

『……すまん』

『……いや、よくやってくれた。話の腰が折れてしまうのはまずいからな』

『……同感だ』

束によって主な被害を受けている苦労人2人が頷く。

『さて、こうやって同時回線で話をしたいと切り出してくることは相当なことだろう、カナード?』

『……ギルバート・デュランダルか。いや、今はいいか』

割り込んできたデュランダルこと蔵人の言葉にカナードが頷く。

ディスプレイに移る彼がコンソールを操作すると生徒会室に展開されているモニ

ターと、蔵人、優菜の元で同時展開されているディスプレイに映像が映る。

『映っている情報は、この天災が<sup>バカ</sup>各国の軍事施設をハッキングしたから判明した。降り注いだのはレーザーだ』

Deランドに降り注いだ光の雨。

幸い怪我人は出ずに収束することができたが、次もそうは行かないだろう。

『レーザー攻撃は衛星軌道上から放たれたものだ、発射したのは英国とアメリカによって極秘共同開発された衛星軌道攻撃兵器……名は「エクスカリバー」』

衛星軌道上から地上を狙撃できる兵器、カナードの口から出た言葉に真や蔵人、優菜は目を見開き、驚愕の表情を浮かべる。

それは宇宙開発が進んだC・E・世界の事を知っているからの反応だ。

もちろん国家代表の楯無や英国の代表候補生であるセシリア、各国の代表候補生達も驚愕の表情を浮かべていた。

ただ一般人に近い知識を持つ一部は異なった。

「エクスカリバーってよくゲームに出てくる？」

「確かアーサー王伝説に出てくる聖なる剣……だったか？」

一夏と箒が日本人らしい回答を返す。

『由来はそうだろうな。衛星兵器、簡単に言えば宇宙から地球を攻撃できる兵器だ。C・E・ならば規模は異なるがジェネシスやレクイエムと同系列の兵器だ』

一夏達はすぐには理解できなかったがジェネシスとレクイエムの名前が出た途端、真の表情が強張った。

そのどちらもC・E・では大量破壊兵器として名高い。

ジェネシスはガンマ線レーザーによる生物種への圧倒的な殲滅能力。

レクイエムはビーム偏向装置【ゲシュマイディッヒ・パンツァー】を展開したコロニーを中継点に使うことで、あらゆる場所への大出力ビームによる狙撃を可能にした兵器だ。



『真が防いだのは低出力のレーザーだろう。でなければ実戦仕様状態でないデステイニーで防げたりはしない。だが最大出力ならば話は別……戦略兵器としては十分な代物だ』

彼の言葉と同時に展開されたディスプレイが、衛星の画像と軌道情報に切り替わった。

【それ】は宇宙に漂う一本の剣の様に見えた。

全長は50 m程の大きさのそれが、太陽光を吸収、収束して放つ画像であった。

(MS……いや、まるで……ISみたいだな)

大きさとしてはISよりも、MS、正確にはMAほどの大きさだ。

しかし画像を見て真はそう思った。

全体的なフォルムはISに似通っている。おそらくここにいる全員が思っているだろう。

『対IS用としてデステイニーの様な防御手段がない機体ならば打つ手もないし、衛星

起動に乗っている為迎撃も困難。これが今まで亡国機業に奪取され、ミラージュコロイドで隠蔽されていた。あまり言いたくはないが……英国は兵器を奪われる趣味でもあるのか?』

「……返す言葉もありませんわ」

セシリアが苦笑しつつも消沈した顔でカナードに答える。

BT2号機【サイレント・ゼフィルス】に、チエルシーに奪われたBT3号機【ダイヴ・トウ・ブルー】、そして今回の【衛星兵器 エクスカリバー】

C・E. でもMSや特殊兵器や技術が敵対組織等に奪取される事は多く、またかと真は内心思っていたが。

『話を戻そう、気づいているかもしれないがミラージュコロイド技術が使用されているという事は……』

「歌姫の騎士団関係……つてことか」

『その可能性が高い。おそらくは確実だろうがな』

真の言葉にカナードが返す。

ラクスが倒れたことで瓦解したはずの歌姫の騎士団。

再びその因縁が浮かび上がってきたことに真の表情は曇る。

『何故そんな兵器が亡国の制御から外れて暴走したかは知らん。だがこれを放置しておくのは危険すぎる』

『それで私たちに協力をつて事ね』

『話が速くて助かる、ユウナ・ロマ・セイラン』

『オーブの宇宙戦艦か……今回は味方か、頼もしい限りだ』

蔵人が答える。

その言葉に苦笑を浮かべる優菜であったが今はそれは重要ではなく、疑問を口にした。

『けどその兵器は衛星軌道上からの攻撃が可能なんでしょう？ こちらとしてももちろん協力は惜しまないけど、イズモ単機での攻略は荷が重過ぎる。それよりもまずアメノミハシラまで上がってこれる？』

そう、優菜の懸念はアミノミハシラまでの移動手段だ。アミノミハシラへの移動手段はシャトルとマスドライバーによる打上方式だ。だが地上への精密射撃が可能な兵器が暴走しているのだ。マスドライバーはお世辞にも狙いにくい建造物とは言えないため、打上の瞬間を狙われる可能性がある。

『……確かに、先の攻撃から行動はしていないがリスクがでかいな』  
「……ならば、1つ提案がありますわ」

セシリアが発言すると彼女に視線が集中する。

コンソールを操作してデータをディスプレイに表示する。

「これは……英国からの帰還命令に、迎撃作戦？」

「はい、織斑先生。つい先ほど私の方に連絡がありました、英国にてエクスカリバーの迎撃作戦を準備中との事です」

セシリアが表示したのは英国への帰還命令が書かれたメールと彼女の迎撃作戦への

参加命令であった。

現在のセシリアは代表候補生としての活動結果から国家代表がほぼ内定している立場となっている。

彼女の能力を遊ばせておくのは損失と考えたのだろう。

「セシリア、まさか……」

「ええ、一夏さん、私は向かいますわ、祖国へ」

『その迎撃作戦ってさー、英国だけでやるの？ 歌姫の騎士団関連なら戦力足りないじゃない？』

カナードの制裁によって画面から退場していた束がディスプレイに映る。

水着の上から白衣を見に纏っているため、映像的には問題ない。

『ええ、ですから束博士、貴女の協力を得て欲しいと……追加で命令がありました、こちらです』

『そういうのは自分で言っていってーの。だから国家って嫌いなんだよねー』

そう言つてセシリアが表示したメールに目を通す。  
そしてメールを確認した東は笑みを浮かべる。

『ふーん、いいよ、受けたげる。ただしIS学園と日出工業、それにカナ君達もこの迎撃作戦に参加することが条件。じゃないと無駄な犠牲がでる。そう連絡してくれる、セシリアちゃん?』

『つ……ありがとうございませす、東博士』

そう言つてセシリアは頭を下げる。

顔を上げた彼女の表情は何処か思いつめているようにも見えた。

その後、セシリアの連絡によってエクスカリバー迎撃作戦にIS学園と日出工業、つまりは真達に参加する事となった。

鈴やシャルロットなどの代表候補生達も友人であるセシリアのために作戦に喜んで参加するとの事だ。

また日本政府に繋がり強い更識家より、政府への連絡が行われ、優菜も後方支援の為に動くとの事だ。

英国に向かう為の手続きなどの準備が必要となり出発は翌日となった。

その日の深夜——学生寮前の広場

すでに就寝時間を過ぎており、本来ならば外に出ていることが許される時間帯ではない。

だが英国へ向けての出発準備の為、寮監である千冬も今は不在であり、抜け出すことは容易であった。

ベンチの前には美しい金髪の少女——セシリアがコートを着込んで立っていた。

「……チエルシー……」

大事な家族の名前を呟く。

何故、今回の様なことになったのか、何故彼女がISを身にまとっていたのか。

様々な疑問が頭の中をグルグルと回っており、それを切り替えるために外に出ているのだ。

そんな彼女であったが背後に気配を感じた。

振り向くと燃えるような紅い瞳を持つ2人目の男性搭乗者がいた。

「こんな時間に何してるんだよ、寒くないのか？」  
「……真さん」

コートを着た真がセシリアに尋ねた。

雪はまだ降っていないとは言え、12月の真冬の時期、気温は0度近い。

「横になるとどうしても疑問がわいてきて……夜風にあたれば少しは落ち着くかなと」  
「……そっか」

そう答えた真が空いていたベンチに座る。

「真さんはどうして？」

「うん、まあ、そうなんだけどな。俺も気になることがあつてその整理の為にさ」  
「気になること……ですか？」

「ああ、あつ、そうだ、コーヒーあるんだつた、ほら」

そう言ってポケットから温かい缶コーヒーを取り出してセシリアに手渡す。



ありがとうございますと受け取る。

「んで、気になってることなんだけど。チエルシーさんが俺の事を【シン・アスカ】って言ったことなんだ」

「確かに、真さんの秘密を何故チエルシーが……」

「それにエクスカリバーが亡国機業に奪取されて管理されていたつても気になるんだ」

「……歌姫の騎士団……ですか？」

ああ、と真は頷く。

「今回の暴走もおそらくはラクスが関わってる。けどならんであの時、メサイアでの最終決戦のときにエクスカリバーを使わなかったのか、それが気になるんだ」

「宇宙から狙撃できる兵器ならば確かに。真さん達が宇宙に上がる際にマスドライバーを狙撃することもできたはずですね」

「そこなんだ。んで、色々と考えてたら頭が回らなくなってきた。そのリフレッシュの為に外に出たんだ。元々頭を使う仕事は仲間アピに任せてたからさ」

ポケットから先に買っていた自分の分のコーヒーを取り出して、真は飲み口を開けて一口、口に含む。

気温の差によって呼気が白くなっていた。

「……セシリアはチェルシーさんを止めるつもりなんだろう？」

「……ええ、それが私の役目だと思っています」

「……大切な人なんだな」

「はい、両親を失った私にとっては幼馴染であり唯一の家族……淑女としての目標でもありますわ」

「……そっか」

缶コーヒーを横に置いて真は立ち上がる。

真のほうが身長が高いため、セシリアは見上げる形になった。

「ならもちろん全力で力を貸すよ。だから絶対に止めよう、セシリア」

握手の為に右手を差し出す。

「ありがとうございます、真さん。私の誇りにかけて……やり遂げてみせますわ」

真の握手に力強く握り返し笑みを浮かべた。

その翌日、真達は英国に向かって旅立つ。

——再び蘇った因縁がゆっくりとその手を伸ばしていることを真はまだ知らなかった。

## PHASE 3 迸る雫

オルコット家 自家用ジェット機内

オルコット家所有のジェット機で英国へ向けて出発していた。

学園側でジェット機を用意することもできなかったが、出国と入国手続きに時間がかかる等の理由があり、手続きが容易で時間がかからないのでどうぞと言う、セシリアの好意に甘える事となったのだ。

移動時の大気圏外からのレーザー攻撃については、東がミラージュコロイド技術を応用したジャミング装置を簡易的に搭載することによって隠蔽することでリスクを減らしている。

宇宙戦艦を持つ日出工業の優菜はアマノイワトへ移動して、そこで何かあった際の対処を行う事となった。

シャトルも秘密裏に5日ほどで用意できるとの事だ。

またイギリス本国では日出工業現地支社のメンバーがサポートに回るとの事だ。

真にとってもその人物は顔見知りであると優菜は出立前に伝えていた。

「凄いよなあ、これで自家用機つてのがさ……ご馳走様でした」

簡単な機内食を食べ終わった一夏はトレイを片付けながら呟く。

乗ったことはないがファーストクラスってこういう感じかと内心一夏は考えていた。

「自家用ジェット機持つてるなんてね、流石お嬢様ね」

「しかもこの人数充分乗れるくらいでかいしな」

鈴の隣のシートに座る一夏が機内を見渡す。

余談だが、一夏の隣を勝ち取るための血で血を洗うジャンケン勝負が行われており、見事勝利した鈴が彼の隣の席に座る権利を得たのだ。

そのためか少々離れた別の席で恨めしそうに箒、シャルロット、ラウラの3人は眺めていた。

「んで、寝てていいのかよ、真」

背後のシートで目を閉じている真に一夏が尋ねる。

彼の隣の簪もうつらうつらとしていた。

ん、と目を開いた真が隣でうつらうつらしている簪に苦笑した後、一夏に答える。

彼女を起こさないように音量は小さめだ。

「……到着まで気を張ってても仕方ないだろ、ミラージュコロイド使ったジャミングもあるんだしさ」

「そりゃそうだけどさ」

「それに作戦中は休みなしかもしれないんだ、なら寝れるときに寝ておくべきだって。機内食食べただろ？ だったら寝とけ、時差ボケも怖いしな」

そう言つて真は再び目を閉じる。

客室を見渡してみると、同じくカナード、クロエ、ラキーナ、アスランは目を閉じて仮眠を取っている様だった。

「……ほんと、プロフェツショナルな雰囲気だな……」

「……なーんかこの空気、私達も寝たほうがいいのかしら？」

「そうですね、到着までまだ数時間かかりますのでお休みになってください」

そう言って話しかけてきたのはこの自家用ジェット機の所有者であるセシリアだ。

客室は2つ、主に1年1組と教員とで別けられている。

隣の客室にいるのは千冬や真耶、東に楯無と年上組だ。

「出発して1時間くらいかしら……イギリスまでどのくらいだったっけ？」

「そうですね……このジェット機ならば通常のものよりも早く着きますから、後5時間くらいですわね」

「……寝たほうがいいな」

鈴の質問に答えたセシリアの言葉を聞いた一夏が苦笑する。

「ええ、私ももう少ししたら仮眠をとりますので、隣の客室にいる織斑先生方には私から伝えておきますわ」

「りよーかい、判ったわ」

そう言つてぼすつとシートに鈴は身体を預けた。

そしてしばらく時間が経過し、現在ジェットは東ヨーロッパ境界線上に位置していた。

目的地であるイギリス、ロンドンの空港までは後数時間ほど。

機内では真達全員が静かに寝息を立てている。

——その時であつた。

機内に緊急警報が流れたのだ。

「なんだっ!？」

「何事ですっ!？」

それに飛び起きたセシリアはすぐさま機内電話を使つて機長につなぐ。

『当機後方より高速で接近する熱源を確認しました！　そしてISの反応も……っ、これはミサイルです、お嬢様っ!』



オルコット家専属の機長の声に焦りの感情がこもる。

「なっ、ミサイルですつて!？」

セシリアの驚きの声の数瞬後、機内に轟音が響きジェット機が大きく揺れた。

同時に客室側のドアが吹っ飛び、気圧の差から小さい備品などが機外に吸い出されていく。

『I Sを展開しろっ！ オルコットっ、お前はパイロットをつー!』

『はいっ!』

カナードの叫びと共に機内の全員がI Sを纏う。

狭い機内であるため機能は最低限、だが搭乗者保護はしっかりと機能するため気圧の低下による症状は防ぐことができる。

『カナード、ドアを塞ぐぞっ』

『ああっ』

最低限機能を維持できる動体部分と腕部を部分展開したデステイニー、ドレットノー  
トHのマニピュレータからトリモチランチャーが発射されてドアを塞ぐ。

元々がコロニーで使用することを想定された装備であるため、破壊された箇所を簡易  
的にだが塞ぐことは十分可能であった。

白いトリモチが破壊箇所を埋め、与圧が加わることで気圧が戻っていく。

『……あのドア、ミサイルで破壊されたわけじゃないのか？』

真が破壊されたドアを見て疑問をもらす。

そうミサイルが着弾したのならばもつと被害が大きいはずだ。

それにドアは吹き飛んで歪んでいるが、形を保って機内に残っている。

『……みたいだね、それにあの歪み方は中から無理やり開いたみたいに……あれ、オープ  
ンチャンネルでの通信？』

簪の飛燕にオープンチャンネルで通信が届いている。その発信源は機外。

チャンネルを開くとそこに映るのは自身の姉、更識楯無と【霧纏の淑女】の姿であった。

『よかった、皆無事見たいね』

『お姉ちゃんっ！ まさか今のつて……！』

『非常時だったから仕方なくね。でも外から見ても何とか飛べるみたいね、安心したわ』

そう、ドアを破壊して迫っていたミサイルを破壊したのは楯無であったのだ。

デステイニーのハイパーセンサーで確認してみると楯無の反応は機外にあった。

ミサイルの破壊の為に機外に出た楯無と飛び続けているジェット機との距離は当然ドンドン離れていく。

『……先にイギリスへ、私は本国経由でイギリスに向かうわ』

『お姉ちゃん……』

『……任せていいんですね？』

いつもと雰囲気が違う楯無に真が確認の為に問う。  
彼女の表情は静かな怒りを感じさせるものであったからだ。

『大丈夫よ、任せて』

その返事はいつもどおりの彼女の表情であった。

真達を乗せたジェット機を見届けつつ、振り返る。

振り返る先にはジェット機にミサイルを放った「IS」【ロシアの深い霧】のプロトタイプ。

その搭乗者はかつて楯無に国家代表の座を奪われたログナー・カリーニチエだ。

『さて、皆が乗ったジェット機先行つちやつたから本国経由でイギリスに向かわないと……と、ログナーさん、覚悟はできてますか？』

蛇腹剣【ラストイー・ネイル】を展開し、本気の殺気を向ける。

その殺気も当然だろう、ログナーが狙ったジェット機には彼女の最愛の妹、未来の義

弟、そして大切な友人達が乗っているのだから。

『……………』

だがログナーもその殺気を受け止めてなお、笑みを浮かべていた。そして機体を一気に加速させて楯無に向かう。

『さびしかつたんです、お姉さまあああああ！』

『ええいつ、私はノーマルなのよっ!?!』

突進してきたログナーをするりと回避して楯無が叫んだ。

『なら教えてあげマス！ 女の世界もいいものダトツ！』

『あああ、本当につ！うつとおしいつ！ぶっ飛ばしますよっ!?!』

互いのナノマシンが散布される戦場の中、本気でめんどくさそうな楯無の叫びが響いた。

被弾箇所をトリモチで塞いだジェット機は通常飛行を続けていた。  
このままならばロンドンの空港まで問題なく到着できる。

「……そんな理由で非武装のジェットを狙ったのかよあの人」

デステイニーを格納した真は声に怒りの色を滲ませていた。

もし楯無が出ていかず、ミサイルによってジェット機に深刻なダメージが出ていたのならば出て行って戦っただろう。

そして理解できないのはログナーは自身の欲求を満たすそれだけの為に、非武装のジェット機に攻撃を仕掛けたことだ。

かつて軍人として教育され、一般的な常識を身につけてもいる真には理解できない。その行動についての怒りが溢れているのだ。

出撃していたら容赦なくログナーを叩き潰していただろう。  
ドレッドノートを格納したカナードもまた同じであった。

「あれで元国家代表か。このジェット機は英国代表候補生の私物で乗っているのは国家代表候補生が数名、それに元とはいえ国家代表の座についていた人間が攻撃を仕掛ける。国際問題に発展してもおかしくはないがそれを微塵も考えていない……呆れてものも言えないぞ、これは」

心底呆れたという表情でカナードはシートに座り込む。

その隣に座っているクロエが心配してか飲料を手渡していた。

それに苦笑しながら、カナードは飲料を受け取っていた。

「……彼女は大丈夫なのか、真」

「……楯無さんなら大丈夫ですよ、それに通信の時の顔、相当怒ってる感じだったし」

インフィニットジャステイスを待機状態である腕輪に戻したアスランが真に問い、真は通信の際の彼女の表情を思いかえしてアスランに返答した。

いつも笑みを浮かべて余裕を持っている印象の強い彼女があそこまで怒りを感じさせる表情を見たのは初めてであった。

「うん、怒ったお姉ちゃんを見るのは久しぶりだけど……真剣な時のお姉ちゃんは凄く頼りになるよ」

簪の言葉を彼女が聞けば涙を浮かべて抱き着くだろうなあと、内心変な事を考えてしまった真は少し頭を振って思考を切り替える。

実力も心配いらない、後ほど連絡を取って合流すればいい。

そしてその2時間後、ジェット機は英国 ロンドン空港に到着した。

イギリス空軍基地 ミーティングルーム

ロンドン国際空港に到着した真達一行は1時間かけて空軍基地に案内されていた。

ミーティングルームの一室に案内された真達の前に金髪の男性が現れた。

軍服の階級章を見る限り少佐の様だ。

「この度はご協力感謝いたします、ミス織斑」

「こちらこそ急な協力依頼となつてしまい申し訳ありません、エーカー少佐」

千冬が男性佐官と握手する。



顔に深い傷痕がある男性佐官、エーカーが微笑む。

「いえ全員がオルコット嬢と同じく代表候補生、そして男性搭乗者3名に、かの篠ノ之博士のご協力、戦力としては申し分ない」

「そう言っていただけとありがたい」

千冬が軽く頭を下げるとエーカー少佐は軽く微笑む。

「さて、今回のエクスカリバー迎撃作戦、作戦名〔カムランの丘〕担当のエーカーだ、よろしく頼む」

エーカー少佐がモニターを操作すると、映像が移り変わる。

「カムランの丘、この作戦では大きく分けて2つのグループで行動してもらおう」

映ったのは、人里はなれた山林の奥地に佇む大型の物体。

全長は約30mと言ったところだろう。

言うならば仰々しい望遠鏡とも見えるが用途はそんなモノではない。

「これはBT粒子加速器、またの名を絶対対空砲【アフタヌーン・ブルー】」  
「……狙撃でしょうか、エーカー少佐」

アフタヌーン・ブルーの映像が映った瞬間、作戦の意図を掴んだセシリアが手を上げて質問する。

「その通り、オルコット嬢。君のIS【ブルー・ティアーズ】に【アフタヌーンブルー】を接続し、地上からの超々遠距離狙撃を行うのが当作戦の要だ」

モニターに作戦概要が映し出される。

モニターに移るのは数機のISによってエクスカリバーに攻撃を仕掛けている画像だ。

また後方、地上からの狙撃ポイントが記されていた。

「2つのグループ……狙撃、なるほどな」

「……困って事か」

「そのとおりだ、パルス君、飛鳥君」

笑みを浮かべて真とカナードを見るエーカー少佐が説明を行う。

「2つのグループ、1つは陽動班、つまりは囷だ。そしてもう1つはオルコット嬢をメインとした狙撃班、こちらがメインとなる」

作戦概要としては以下の様になっている。

①重力カタパルトを使用し、特殊パッケージを装備したISを陽動班として出撃させる。

②エクスカリバーの迎撃行動を一点に絞らせる。可能であるならば陽動班のみでエクスカリバーを鎮圧することが可能な場合はプランを移行。

③陽動班のみで鎮圧が行えない場合、狙撃班による超々遠距離狙撃によってエクスカリバーを破壊する。

「……1つ質問いいですか？」

「ん、飛鳥君、どうかしたか？」

作戦概要を聞いた真が手を上げてエーカー少佐に尋ねる。

「エクスカリバーの迎撃行動……たかだか30mレベルの兵器の迎撃行動に困を用いるって……他に何かがあるって事ですか？」

「……ああ、君の思ったとおりだ、これを見てくれ」

エーカー少佐がそういうと、ミーティングルームに備え付けられたモニターに映像が映し出される。

かなりの速度で高度を上げ、雲を突き破る映像が流れている。

映し出された映像はISの搭乗記録を録画したもののようだ。

「この映像は空軍所属のIS2機が撃墜されるまでの映像だ、当然この2機は実戦仕様アシリミット状態だった」

ISには宇宙用パッケージが装着されており、通常の限界高度を超え、間もなく成層

圏を超える。

瞬間、相方のISが高出力レーザーに飲まれて爆発した。

振り返った記録側のISの前には2機の全身装甲のIS。

背部に特徴的な8枚翼の機械翼を持つ機体と、鶏冠の様な頭部が特徴的な紅い装甲の機体。

片方が砲撃をしかけ、もう片方がビームサーベルを取り出して迫る。

その攻撃の速度は相当なもので、動揺していたのか記録側のISは避けられなかった。

振り下ろされるビームサーベルによって映像は途切れた。

装甲の繋ぎ目などが歪に見えたが、真、カナード、ラキーナ、アスランの4人には見覚えがあった。

そのMSの名は――

「……フリーダムとジャスティス」

「……ああ、装甲が一部PS装甲ではないようだったが、間違いはないな」

かつてその機体に搭乗していたラキーナとアスランが呟く。

2機ともC・Eの軍人の中では知らぬ人間のいないMSだ。

「あの、すいません……そのISの搭乗者って……」

「……ああ、織斑一夏君、君の想像通り、搭乗者は死亡している」

「っ」

「シールドバリア自体、宇宙での安定した活動を行うための機能だし、絶対防御は、緊急用のそれだしね……ここまで直接的にやられたらね」

束が呟き一夏が顔を顰める。

「失礼します、エーカー少佐」

「どうした？」

ミーティングルームに入室してきた部下の男性士官がエーカー少佐の傍に駆け寄る。部下の耳打ちが終わると、エーカー少佐はセシリアに視線を向け告げた。

「……オルコット嬢、チェルシー・ブランケットが今この基地に来ている」  
「チェルシーがですかっ!？」

突然の報告に、セシリアの声が高ぶる。

「ああ、君との面会を希望している……彼女はBT3号機盗難の重要参考人だ、できる事ならば話を聞きたいと考えているが協力して貰えないだろうか」

エーカー少佐が諭すようにセシリアに告げる。

彼女は今回の事件について、核心に近い存在である。

そしてセシリア自身にとっても彼女と話をしたかった。

大切な家族である彼女と――。

「承知しました」

「ありがとう」

了承の意を伝えて立ち上がったセシリアがエーカー少佐の部下に案内され、ミーティ

ングルームから出ていく。

「……I S部隊に連絡を入れろ、チエルシー・ブランケットの説得が不可能だと判断した場合I Sを用いて拘束すると」

部下にエーカー少佐はそう告げる。

命令を受けた部下の男性は敬礼を返して、ミーティングルームを飛び出していく。

その判断は的確なものだ。

相手はI Sを所持しており、しかもそれは最新鋭の第3世代型だ。

セシリアの説得が通じず、彼女がI Sを使用して襲撃を掛ける可能性はゼロではない。

「……有事の際には私達も拘束に加わりましょう」

千冬が立ち上がり、エーカーに告げる。

この場にいる全員が一般のI S搭乗者以上の実力に専用機を持つている上、真をはじめ、カナードにラキーナ、アスラン、I S開発者の束、加えて暮桜が復活している千冬



までいるのだ。

戦術的な行動をとれるかを除いた単純な戦闘能力だけならば、並大抵の特殊部隊よりも上の戦闘力があると言っても過言ではない。

「感謝します、ミス織斑」

エーカー少佐が千冬の申し出に礼を言っただけで笑みを浮かべる。

そして一同はセシリアが向かった先、第1滑走路へと向かった。

### 第一滑走路

「……数日振りですね、お嬢様」

メイド服を着たチエルシーが一行の到着を確認して、笑みを浮かべる。

「……チエルシー、何故貴方がBT3号機を強奪したのか……話してはくれませんか？」

「……お嬢様、勝負をしましょう」

「勝負？」

「ええ、お嬢様が私に勝てば私は全てをお話しします……ですが負ければ今回の件については話せません、私が1人で解決して見せます」

そう言つてチエルシーはISの拡張領域から2振りのサーベルを取り出す。

1振りをセシリアに向かつて放り、彼女はそれを受け取る。

「……分かりましたわ、直接聞き出して見せますわ、チエルシー！」

サーベルを鞘から引き抜いてセシリアが構える。

「承知しました、お嬢様。ルールは4ポイント先取でいかがでしょうか？」

「異存ありませんわ」

同じように鞘からサーベルを引き抜いたチエルシーがセシリアに相対して構える。

「では、開始の合図は私が取らせて頂こう」

エーカー少佐が2人に告げ、頷いて答えた。

「……始めっ！」

開始の宣言と同時にまずはセシリアから動いた。

チエルシーと彼女の距離は約3メートル、その距離を素早く詰める。

IS学園の女子制服はあまり運動には向いていない構造となっている。

それは制服をドレスの様に改造している、彼女の場合より顕著である。

普通に走る程度ならば問題はないが、瞬発力が必要になる場面では決して向いているものではない。

だがそんなハンデを微塵も感じさせないほど、彼女の動きは素早いモノであった。

甲高い金属と金属の接触音が響き、サーベルが弾かれる。

セシリアの高速の一突きをチエルシーがサーベルでいなしたのだ。

そして手首、身体を回転させることで防御から攻撃に素早く移行し、セシリアの顔面をサーベルが狙う。

「っ！」

間一髪サーベルでの防御が間に合ったが、彼女の綺麗な金髪が数本断ち切られて宙を舞う。

防御の勢いのまま、セシリアはチエルシー側のサーベルを弾いて数歩距離を取った。

「まずはーポイント……お嬢様、まさかこれで終わりではありませんよね？」

「……いいえ、まだまだこれからですっ！」

再びチエルシーとの距離を素早く詰める払い切りを繰り返すセシリア。

それを見極めて一歩下がるチエルシーであったが、それを予測していたセシリアは力ウンターを貰うことを覚悟でさらに一歩踏み出す。

「これでーポイントっ！」

サーベルの一閃でチエルシーの胸元を切り裂いた。

「お見事です」

切り裂かれた胸元から見えるのはISSスーツ、乱れた胸元をチェルシーは正してセシリアに言った。

「ですが、これからですっ」

「っ!?!」

チェルシーの動きが先程よりもさらに早くなつた。

まるでこれからが本領発揮であるといわんばかりに。

その速度と剣速の鋭さにセシリアは反応が遅れた。

一瞬で懐に潜り込んだチェルシーは意趣返しのように、セシリアのスカートを切り裂く。

「ぐうっ!?!」

「これで2ポイント目」

「つ、まだあつ！」

構えなおしたセシリアがチエルシーに迫る。

だが、彼女が繰り出した刺突はチエルシーに簡単にいなされてしまった。

しかしその一撃でチエルシーの髪を数本、はらりと散っていた。

互いに2ポイント目、しかしチエルシーのほうが力量が上に見える。

「……あのメイド、かなりの腕前だな」

「体捌きがしなやかで速い……セシリアの一撃も完全に見切ってたみたいだな」

「剣の扱いも手馴れているな……彼女も悪くはないが、厳しいぞこれは」

2人の攻防を見て、カナード、真、アスランがチエルシーの実力を推測して呟く。

前世であるC・E・世界では、近接格闘技術で間違いなく上位に食い込み、生身の格闘技術に秀でている3人だ。

その推測は当たっていた。

振り下ろされるサーベルがセシリアの胸元を切り裂く。

たまらずチエルシーから距離を取るセシリア。

「これで3ポイント目、お嬢様は私の剣を見切れていない、勝負は決まりま……」

そこまでチエルシーが言いかけた。

だがその言葉は最後まで紡がれなかった、何故ならば。

「いいえっ！ まだですわっ！」

数度の突きによって傷ついた繊維を引き千切る、セシリアが制服の上半身部分を引き千切ったのだ。

「あああっ！」

続いて下半身部分を脱ぎ捨てる。

彼女の突然の行動に一部の少女達は困惑しつつも想い人の目を塞ごうと動きだそうとしたが、制服の下から現れるのは下着ではなく、ISスーツ。

「……何の真似ですか？ 制服が邪魔で私の動きが追えなかったとでも？」  
「いいえ、そんな自惚れた言葉は言いません！」

そう言つて転がっていたサーベルを構える。

「チエルシー！ 私が貴女を止めます！ 貴女は私の家族だからっ！ そして、貴女ともつと話をしますっ！ 今までのこと……これからの事をつ！」

「……………」

明らかに数瞬前とは雰囲気が変わった。

炎の様に熱い闘志。

だが決して玉砕を覚悟しているのではない、言葉通り自分に言葉を届けるためだけに己の命を懸ける力強さを感じる。

それだけの【凄み】をチエルシーはセシリアから感じていた。

「……………いい目です、お嬢様。まるで父君の様です」

「……………いきますわっ！」



制服を脱ぎ捨てて身軽になっただけではない。  
意志の力、そしてその凄みか。

「っ！」

セシリアの動きが先程とは比べ物にならないほど早くなっていた。

全身のバネを使った、しなりの強い一撃。

その一撃は美しくもあり、艶やかであった。

セシリアのサーベルをチエルシーのサーベルで受ける。

甲高い音を立てて、両者のサーベルが根元から折れた。

しかしセシリアはその折れたサーベルをそのままチエルシーに向ける。

「これで3ポイントっ！」

「っ、まだですっ！」

チエルシーの胸元を切りつけそのまま、連撃に移る。

だがチエルシーも折れたサーベルでセシリアを狙う。しかし、それでも今のセシリアの爆発力は止められなかった。首筋に添えられる、折れたサーベルの切っ先。そして自身のサーベルを握る右手をセシリアは左手で掴み上げ、止めていた。

「……………っ！」

「これで……………私の勝ち……………ですわっ！」

興奮で上気した顔のセシリアがチエルシーに告げる。

「……………私の負けですね……………お強くなりました！」

折れたサーベルから手を離してチエルシーが笑みを浮かべる。何処か晴々とした、今まで溜め込んでいたものが晴れていくような爽やかな笑みだ。

「……………お帰りなさい、お嬢様！」

「ええ、ただいま、チエルシー！」

チエルシーの言葉にセシリアも笑みを浮かべた。

## PHASE 4 歌姫の残滓

イギリス空軍基地 ブリーフィングルーム

セシリアとチエルシーの決闘が終わり、チエルシーは抵抗もせず降伏した。

そして彼女自身から伝えるべき情報を伝えるとの事で、一向はブリーフィングルームに場所を移していた。

彼女は特に拘束されることもなく、テーブルについている。

セシリアとの決闘で乱れたメイド服の変わりに、今は軍服を貸与されていた。

「今回の件について詳細から話して貰えるだろうか、ブランケット嬢」

エーカー少佐がそう言つて用意した紅茶を彼女の前に差し出す。

「そうですね、それではまずは今回の発端となったエクスカリバー……米国と英国が秘密裏に運用していた攻撃衛星、と言うのは建前。あれは「生体融合型」のISです」

1人を除いてこの場にいる全員がその情報に驚愕の表情を浮かべた。  
唯一の例外は、ISの生みの親「篠ノ之束」であった。

「確かに、人間を【生体CPU】としてISに組み込むことで飛躍的に性能を高めることができるよ。これを見つけたのはラクスで、あんまりにも非人道的だから公開はしてないけど」

開発者からの存在の肯定。

「生体CPU」と言う言葉に脳裏に蘇る、「ステラ」の姿。

頭を振って真はその姿を振り払う。

そしてチエルシーが続ける。

「何故、そんなことに詳しいかというところ……エクスカリバーの生体CPUとして利用されているのは、私の大切な妹「エクシア・カリバーン」……探し続けていた妹なのです」

それに一番驚いたのは家族であるセシリアだ。

「チエルシーに、妹？ 聞いたことはありませんでしたわ」

「……ええ、いたのですよ。戸籍からも抹消された妹が」

少しだけ声が震えていた。

常に瀟洒な雰囲気身を纏った彼女を知っているセシリアにとって、初めて目にした彼女の姿。

その事実を知った時の彼女の心情は想像に難くない。

「そして、シン・アスカ……いえ、飛鳥真。今回のことは貴方達にも関係があることです」

「……歌姫の騎士団ですか？」

「は、」

半ば予想していた答えに真達の表情は曇る。

「BT3号機を強奪した私はそれを手土産に歌姫の騎士団残党に接触しました。彼等は亡国機業を取り込んでいますからね、今回の暴走事件についてとエクスカリバーの情報

を知ることができました」

「……エクスカリバーの暴走原因は何だ？」

カナードが根本的な原因について切り込む。

「暴走した原因、それは「ラクス・クライン」が原因なのです」

その回答に真は声を上げた。

「そんな馬鹿なっ！ラクスは俺の目の前で死んだはずだっ！」

真の言葉通り、ラクスは最終決戦時に彼の目の前で自ら命を絶った——絶ったはずなのだ。

「ええ、【本物】のラクス・クラインはすでに死亡しています。しかしエクスカリバーの中にバックアップとでも言いますか、ラクス・クラインの思考データが現存しているのです。今回の事件を引き起こしたのはその思考データです」

「思考……データ？」

チエルシーの言葉に驚愕の表情を浮かべながら真はその言葉を反芻した。

「ええ、生体融合型と言う特殊な下地を持ったI Sに自我を持たせることができるかの実験を行っていたのです。ラクスの存在を永遠のモノにでもしたかったのでしょうか」

「……成程、その「A I ラクス・クライン」が今回の黒幕か」

合点があったという具合にカナードが呟く。

「ふむ、テロリストが用意したA Iが暴走しているという事だな、ブランケット嬢？」

「はい、その認識で間違いありません」

C. E. の事を知らないエーカー少佐はラクス・クラインの事をテロリストとして認識している。

チエルシーもわざわざ事態を混乱させないためそれ以上の説明はしなかった。



「でもなら何でラクスは俺達との戦いのときにエクスカリバーを使わなかったんです？  
それに映像にもあった無人機、完成度はかなり高かったとも思うんですけど？」

「確かにな。デストロイだっけ、あのでかいISだけで手一杯だったんだから、宇宙から狙われたらやばかったと思うんですけど」

真がずっと疑問に思っていたことをたずねる。

加えてデストロイと相對した一夏が真の疑問を肯定して続ける。

その背後ではエーカー少佐がISの無人機について驚愕していたが、千冬が彼に事情を説明していた。

それを確認したチエルシーが回答する。

「私が入手した情報によると、「AI ラクス・クライン」にはある欠点があったとの事です。その欠点が具体的に何かは分かりません。そして無人機はエクスカリバーを母機として行動するように作られているらしいので、エクスカリバーが休眠状態であったため使われなかったのだと思います」

「欠点……ねえ」

東が引つかかったように呟いたが、それは彼女以外誰にも聞こえないほど小さな声量であった。

「また無人機か……。奴等はどれだけ戦力を保持しているんだ」

「デュノア社の設備を使つて生産していたとの事です。行動がAIの出来に左右されてしまうという欠点はありませんが、数を揃えられる点、搭乗者に縛られない点等から見ても無人機は有用なんでしょう」

千冬の呟きに、チエルシーが返す。

「すでに残党の旗艦であるエターナルは宇宙で展開しているでしょう。そしてエクスカリバーは英国本土を射程圏内に収めています。その狙いは女王陛下の宮殿、もはや猶予は少ない」

英国の象徴である宮殿をテロリストがISを使用して攻撃する。

もし実行されてしまえば、大きな社会問題に発展するだろう。

エーカー少佐が部下を呼び、指示を出す。

「オルコット嬢から預かったブルー・ティアーズの接続作業を急げ、大至急だっ！」

敬礼した部下は走りながら部屋を出て行く。

それを確認したエーカー少佐がチエルシーに視線を合わせる。

「非常に有意義な情報提供感謝する、ブランケット嬢」

「いえ、このような事しかできずに申し訳ありません。BT3号機強奪の件、罰を受ける覚悟は……できています」

いくら有意義な情報を提供したからといって彼女が行った行為が帳消しになるわけではない。

チエルシーは視線を伏せた。

「……私の一存で君の処遇を決定することはできない。全ては終わった後になるだろう」

そう言つてエーカー少佐は微笑みながらチエルシーの肩に手を置く。

全ては終わった後、それまでは罪には問わない。

エーカー少佐は暗にそう言っている。

「君と同じ立場ならば……同じ行動をしたかもしれない。全てが終わった後、できる限りの事はさせてもらうつもりだ」

「……ありがとうございます、少佐」

チエルシーの返事を確認した後、エーカー少佐は真達に向きなおす。

「聞いたとおりだ、すでに猶予はない状態になってしまった。君達の力を貸して欲しい」

深く頭を下げてエーカー少佐が協力を請う。

「承知しました、IS学園はただいまより英国のエクスカリバー破壊作戦〔カムランの丘〕に協力させていただきます」

千冬がそう言つて皆を見回す。

全員が頷いて同意を示した。

「ご協力感謝します」

エーカー少佐は再度頭を下げて感謝の意を伝える。

それから作戦におけるチーム分けが、エーカー少佐と千冬から説明された。

「狙撃を担当する狙撃班にはオルコット嬢、連携を考えてブランケット嬢に入ってもら  
う」

「了解しましたわ」

「承知しました、エーカー少佐」

セシリアとチエルシーが互いに微笑みあつて頷く。

「そして狙撃班を防衛する人員も必要だ。そこにはパルス兄、お前にオルコットの防

衛を頼みたい」

「……なるほど、ドレッドノートのALか」

「ああ。そしてお前との連携を考えてクロニクル、お前にも付いてもらいたい」  
「承知しました、千冬様」

クロエが頷いて答える。

「そして囀班は残りの全員……なのだが、情けないことに私の「暮桜」では宙間戦闘は心もとない。私は「ラファール」を1機貸与して貰って出撃する予定だ」

「腰をすえて改良できる予算と時間があればなあ……。ごめんよ、ちーちゃん」  
「いい。おそらく無人機が出現することが予測される」

千冬はそう言ってラキーナとアスランに視線を合わせる。

「分かっています」

「無人機【ジャステイス】と【フリーダム】は俺達が相手をします」

ラキーナとアスランが視線を合わせて頷く。

アスランの存在については秘匿されていたが、エーカー少佐には4人目の男性搭乗者として話を通っている。

「分かった、司令部ではうちの真耶と東がサポートをします」

「了解した。ではそれ以外のメンバーがエクスカリバーの牽制、そしてチエルシー・ブランケットの妹「エクシア・カリバーン」を救出した後、狙撃でエクスカリバーを破壊する。これが作戦の流れだ、質問は？」

エーカー少佐が皆に質問を投げるが質問はない。

「ではISの調整の為に、格納庫へ」

その言葉と共にエーカー少佐が部下に指示を出して一行を案内させる。

「ああ、飛鳥君に更識君、君達は私についてきてくれ……つと、東博士にパルス君達もだったな」

エーカー少佐の言葉に真達は疑問の表情を浮かべた。

「日出工業のサポートチームが到着していてね。第2格納庫だ、着いてきてくれ」  
「ああ、なるほど。分かりました」

優菜から出発前に告げられていた日出工業現地支社のサポートチームだろう。

エーカー少佐の言葉に従って真達は他のメンバーと分かれて向かう。

---

イギリス空軍 第2格納庫

エーカー少佐に案内された真達は空軍基地の第2格納庫に到着した。

運び込まれたそこそこの数のコンテナ、滑走路に止められたトラック、そして見知った顔。

女性3人も真達に気づいた。

「利香さん、ジーンさん、それに節子さんまでっ！」



日出工業に所属している真にとっては上司となる女性3名がイギリス空軍IS格納庫にいたのだ。

出立前に優奈から連絡があつた、サポートメンバーは彼女達であつた。

「久しぶりだね、真君」

「節子さんも、お元気そうで何よりです」

栗毛の上司である、節子の笑みに真も笑みで返す。

「ジエっちゃん久しぶりー！」

「再開の挨拶は後だよ、束ちゃん！ ほら皆IS出して！」

相変わらずボサボサの赤髪により深くなった隈、ヨレヨレの白衣にスーツ姿のジェーンが束の手をとりながら催促する。

その勢いに押されながらも真、簪、カナード、クロエ、ラキーナ、アスランの6人は待機形態のISを手渡す。

「えっと、何をするんですか？」

「【宙間戦闘用装備】を装着するんだよ、真君」

「こそ。 私たちが来たのも君たちの機体にそれを外付けする為なの、さあ、節子ちゃん、すぐに接続作業、始めよう！」

「分かりました、利香さん」

節子が作業スタッフへ連絡しに歩いて行く。

束もスタッフに合流して作業を始めていく。

それを確認した真はジェーンに尋ねる。

「外付けのパッケージか何かですか？」

「そうだよ、君もよく知ってるモノのはずだよ」

「俺が？」

「うん、ヒント。MSの埋め込み式の戦術強襲機と云えば？」

「……まさか、【M<sub>ミュー</sub>・E<sub>エイ</sub>・T<sub>タイ</sub>・E<sub>ア</sub>・O<sub>オー</sub>・R<sub>ア</sub>】ですかっ!？」

埋め込み式の戦術強襲機【M<sup>ミ</sup>・E<sup>イ</sup>・T<sup>テ</sup>・E<sup>ア</sup>・O<sup>ア</sup>・R】

フリーダムとジャスティス用に用意された特殊ユニットであり、対象の機体に絶大な機動力と殲滅能力を与えることができる機体だ。

かつて真が搭乗していた【MS デステイニー】では装備できず、データも残されていなかったため彼とは無縁のものであったのだが。

「大正解っ！ 私が再設計したのだっ！ そして簪ちゃん！」

「はっ、はい！」

テンションが高まっているジェーンの視線がいきなり簪に向いたため、彼女はびくつと震えながら答えた。

「簪ちゃんの飛燕、光圧推進スラスタから正式なVLユニットに変えるからね！」

「パーツと設定変更だけだからそこまで時間はかからないよ！」

「えっ、でもそれは来年位を予定してたんじゃない？」

飛燕のVLユニット、正確には光圧推進スラスタは【疑似VL】である。

そのデータをあらかじめ取り終えたため、性能向上為にその仕様を正式なV Lへと変更する計画は当然、簪の耳にも届いていた。

だが彼女に届いていたその情報は来年を予定したものであり、今回の作戦には間に合わないだろうと思っていたのだ。

「私に不可能はない！ あ、いや、納期短縮は駄目です、やめてください、死んでしまいます。つと、なんでV Lの変更ができるのかだよね、それは【デステイニーシルエツト】の【予備パーツ】があるからなのだ！」

デステイニーの前身、I Sインパルスはシルエツトシステムの特性上予備パーツがそこそこな量用意されていた。

特に搭乗者が真であるためシルエツトや武装を使い潰したり、無茶な機動で関節に負荷をかけるなど、予備パーツは不可欠であった。

だが当のインパルスは【デステイニーガンダム・ヴェステイージュ】へと【第二形態移行】してしまった。

当然移行した機体と、移行前の機体の予備パーツは規格が合わないモノが多く、デステイニー用のパーツを新たに作成しなおすことになり、インパルスの予備パーツは倉庫

で埃を被っていた。

だがその中にはデステイニーシルエット、つまりは正式なVLユニットへの換装パーツが含まれていたのだ。

飛燕はインパルスとはいわゆる兄妹機に当たり、パーツの規格はVLユニットならば合っている。

なのでこのタイミングでの改修が可能なのだ。

「成程、デステイニーインパルス用のパーツですか」

「こそ、真君のインパルスはデステイニーになっちゃったから使えなかったけど、飛燕用に使えることが分かったからね。まあ、このまま倉庫の肥やしになるのは開発者としては避けたかったのもあるけど」

ポリポリと頬をかきながらジェーンはたははーと笑う。

「あの……ありがとうございます、私もその交換作業、手伝っても大丈夫ですか？」

「もちのロンだよー！ 細かな癖とか聞きながらの方が速いからね！ 真君はミーティアの接続作業を手伝ってあげてね！」

「分かりました、しかしよく【M<sup>ミー</sup>・E<sup>エイ</sup>・T<sup>テイ</sup>・E<sup>イー</sup>・O<sup>オー</sup>・R<sup>アール</sup>】なんて用意できましたね」

作業に向かいながら真がジェーンにたずねる。

「なーに、私と束ちゃんの力が合わされば屁のツツパリはいらんですよ」

「……言葉の意味はよく分からないですが、束さんと仲いいんですね」

「そー、2人で技術交換の為に茶会したら滅茶苦茶息があつてねー。今ではマブタチ、束ちゃんの技術と私の技術が合わされば出来んことはない!」

I Sを作り上げた天才である束、かたやC・E・でセカンドシリーズを作り上げた天才ジェーン。

類は友を呼ぶはまさにこの事だなと真はため息を付きながら思った。

(……2人で隠れてMSとか作ったりしてないだろうな、いや流石にそれはないか)

流石にそんなことはしないかと、頭を振って意識を切り替えて、スタッフの元に向かう。

「なあ、簪、ちよつといいか？」

「うん？」

日出のサポートチームと共に作業を始め、2人も作業を始めて少し経過したとき、真が口を開いた。

飛燕のVLUユニットの切り替えは残り20分程度で完了する予定だ。

「どうしたの、真？」

「今回の作戦、簪は囷側に回るつもり……だよな？」

「……うん」

「……後方から支援してくれるってのはない……よな？」

「……真、私も行くから」

その瞳に込められた強い決意が現れた様に、簪は言い切った。

「……宇宙、初めてだろ？」

「うん、けど節子さんや利香さんに A M B A C のコツは教わってる。  
【M<sup>ミ</sup>・E・T<sup>テイ</sup>・E・O<sup>ア</sup>・R】もマニユアルは頭に叩き込んだ」

頷きながら簪が答えるが、ここまでは建前だ。

簪の強い視線に合わせて、本題を聞く。

「なら……人を撃てるんだな？」

ここからは I S の試合ではなく、殺し合いが前提になる。

無人機や「A I ラクス」がメインになるだろうが、チエルシーの情報からエターナルの存在も確認されているとの事だ

エターナルには当然生身のテロリスト達が乗っている。

人を殺めることができるのか、真はそれを尋ねたのだ。

シン・アスカとして激動の C・E を戦い抜いた彼は守るためなら、必要ならば命を奪うことに躊躇はない。

言い方は悪いが慣れて、割り切れるようになってしまったのだ。

だが彼女はどうかのか。



「……………私は多分、撃てない」

彼の言葉に簪は首を横に振った。

戦う覚悟はした。しかしそれと人を殺める事とは別である。

ISの試合ならばともかく、他者の命をそう易々とは奪えない。

一般的な感性を持つ人間なら殺人の重さは理解できるからだ。

「だったらっ！」

大切な人を戦場に出したくない。

歌姫の騎士団との決戦の際、彼女は仲間達と共に戦った。

目的も自分達の援護であったし、首魁のラクスは宇宙にいて真が戦えばよかったが、今回は違う。

囿として機能しなければ作戦は完遂できない。

当然、彼女がエターナルの相手をする場合もあるだろう。

その際に撃てなければ間違いなく彼女は死ぬ。

失い続けた彼は大切な人をこの世界で得ることができた。

——そんな人を戦いの中でもしも失ってしまったら。

これはただの真の我儘だ。

「後方で支援してくるだけで……っ！」

渋る真であったが、簪の強い視線を感じて言葉を切った。

「真。心配してくれてありがとう」

「……簪」

「でも真が大切な人を守りたいと思ってるのと同じなの。真の傍にいたい、貴方の背中を押してあげたい。これが我儘なのはわかってる、けど私も譲れない。それにラクス・クラインに言っただけでやりたいの」

笑みを浮かべて簪が続ける。

「貴女なんかに真を絶対渡さないって」

その言葉と笑みに真は言葉を失った。

驚愕、だがそれ以上に胸中で溢れるのは歓喜の感情。

大切な人に、最愛の人にそこまで想われている、その事実が感情が溢れてくる。

「……分かったよ」

そしてどこか観念したかのように真は笑みを浮かべて頭を掻く。

先程まで確かに彼女を後方に回したいと思っていた。

いや今も思っている。

だが今の彼女の言葉を聞いて、彼女の意志を尊重したいと心の底から思ってしまった。

これが惚れた弱みなのだろうな、と苦笑を浮かべた後顔を引き締める。

先程まで感じていた彼女を失う恐怖を今は感じない。

今まで以上の闘志が溢れてきていた。

「……一緒に来てくれるか、簪？」

「うん！」

笑みを浮かべた簪に真も笑みで答えた。

## PHASE 5 かつての虚影

## 射撃訓練場

囿として出撃するメンバーのISへの宇宙用パッケージ装着完了まで残り数時間。

射撃訓練場ではゴーグルと遮音ヘッドホンを付けたセシリアが射撃訓練を行っていた。

次々に出てくるターゲットのほぼ中心点を次々に撃ち抜いていく。

やがてマガジン内の弾丸全てを撃ち終えた彼女はふうと息を漏らして、訓練用拳銃を台に置く。

表示されたスコアは、15/16と表示されていた。

彼女が選択した訓練難易度では、表示されるターゲットは1秒未満で切り替わるベテランの軍人でも10点取れば御の字と言う、最大難易度のものだ。

偏向射撃をマスターした彼女の射撃能力と集中力ならば、調子が良ければオールクリアを取れるだろう。

「……駄目。こんなものに梃子搦っている様ではエクスカリバーを完璧に撃ち抜く事な

んて……」

少しだけ弱音を呟いてしまう。

ブルーティアーズとアフタヌーンブルーの接続作業は順調に進んでいる。

すでに残り数時間で作戦が始まる段階に来ているのだ。

こんなものに梃子摺っている場合ではない、だが落ち着いて待つている事も出来はしなかった。

「ここにいたか」

射撃訓練場に響く声、それを確認すると黒髪の青年。

真と共にかつてC・Eと言う世界で戦い抜いた男、カナード・パルスがそこにいた。

作戦では彼が狙撃担当の自分をサポートしてくれる手筈だ。

「カナードさん、どうしてここに？」

「連絡に来た。ISへのパッケージ装着は時間がかかる。後2時間がかかるだろう予測だ」

「……そうですか」

「射撃訓練か？」

「ええ、少し気晴らし……と言う訳ではないですが」

「……そうか」

セシリアが苦笑してカナードに言う。

するとカナードは彼女のいる訓練スペースに入ってくる。

「カナードさん？」

「……気になった点がある。よければ構えてくれ」

それにしたがってセシリアは持っていた銃を構える。

「オルコット。お前はトリガーを引く際にほんのわずかだが右腕を動かす癖がある」

自分の腕でトリガーを引いた際の銃の動きをジェスチャーで示しながらカナードが伝える。

「えっ、そのような癖が？」

「ああ。ISに搭乗している時はISが自動的に補正を入れて直しているんだろう。その癖のせいで射線がわずかにぶれる、意識して直した方がいい」

「……成程」

「意識してやってみろ、お前の射撃能力ならこの程度で撃ち漏らしなどないはずだ」  
「分かりました」

その言葉を確認したカナードが彼女から少し離れて、訓練開始の操作を行う。

ブザーが響き、ターゲットが表示された刹那、炸裂音と共にターゲットが次々に撃ち抜かれていく。

アドバイスを意識して、いつもより少しだけ力を右腕に込めてトリガーを引き続ける。

先程とは違いより正確に中心を撃ち抜けている。

そして終了のブザーが響いた。

表示されるスコアは16／16のパーフェクト。

それを確認したカナードは笑みを浮かべた。



「……これならばエクスカリバーの狙撃も安心して任せられるな」

「ありがとうございます、カナードさんもどうですか？」

「……気晴らしにはいいな」

セシリアから拳銃を受け取る。

リロードを終えたカナードが構えると同時に訓練開始ブザーが鳴り、炸裂音が木霊する。

表示されるターゲットの中心点を的確に次々に撃ち抜いていく。

(……ターゲットの視認と射線の変更が恐ろしく速いつ。視界の端に入った瞬間にはターゲットの位置把握が完璧でなければできない速度つ、しかもそれでいてなんて正確……っ！)

射撃技能はIS学園を含めた全IS搭乗者の中でも、最高レベルに到達している現在の彼女だからこそ分かる。

彼のそれはあくまで【競技用】の自分とは違う、【先手を取り相手を確実に撃ち殺す】

——戦場で生き残る為の技術。

真から彼の事は聞いていた。

何でも最高のコーディネーターの失敗作であったという事を。

コーディネーターと言う人種やC・E・世界については聞いているが、抑止力でもあ  
るはずの核兵器を筆頭に大量破壊兵器を惜しげもなく使う、所謂【絶滅戦争】がわずか  
数年で2度も起こった世界だという。

そんな世界を生き抜いてきた彼は想像を絶する苦難に直面したのだろうか。  
あの技術もその苦難を乗り越える為に会得せざるを得なかったのだろう。

(……何処か悲しい力ですね)

そんな事を考えていると訓練終了のブザーが鳴り、拳銃を台座に置く。  
表示されたスコアは16 / 16のオールクリア。

「お見事です」

パチパチと拍手すると、少しむず痒そうな顔をカナードは浮かべていた。

「こんな事ばかりうまくなくてもな。まあ、気晴らしにはなった、お前はどうかオルコツト?」

「……そうですね。やはり少々、怖いという訳ではないのですが……緊張はしています」

それは彼女の正直な気持ちだ。

今回の作戦では彼女が最も重要なポジションにいる。

いくら代表候補生と言えど、実戦で重要なポジションを任されれば緊張しないはずがなかった。

「……気負うなどは言わない、少なくとも俺はお前を全力で守る。ドレッドノートは軟じゃない」

「ふふ、頼りになる騎士様ですね、ありがとうございます」

「騎士なんて柄ではないんだがな」

カナードが苦笑しつつ、答える。

(以前よりも雰囲気柔らかい気が……ああ、なるほど)

ちらりと射撃訓練場の入り口に目を向けると銀髪の少女、クロエがじいつとこちらを見ていた事に気付いた。

ラウラの瞳と同じ黒に金の瞳、その瞳には困惑と嫉妬の感情が読み取れる。

彼女のその態度から、そういう関係になつていたのかとセシリアは少女の直感で理解した。

それに気づいたのかカナードが少々ため息を付く。

「……後でクロエには言っておくから今のアイツは放っておいてくれ、正直ああなると敵わないんだ。マドカがいれば抑えてくれるんだが、今はブレイク号の留守を任せているからな」

「なるほど、承知しました」

笑顔で返し、それを確認したカナードは連絡通路に向かう。

「どちらへ?」

「ドレットノートへの外付パッケージ〔M・E・T・E・O・R〕の調整に戻るんだ。元々まだ時間がかかると伝えに來ただけだしな」

「M・E・T・E・O・R」？ 失礼ですが、今回の作戦では「O・V・E・R・S」を使用するのでは？」

セシリアの言う「O・V・E・R・S」、正式名称「Output Variable Energy Reverse System」可変型出力増大昇華装置。

真やカナード達以外は、倉持技研所属の篝火ヒカルノが持ち込んだこの装置を使うことになっている。

その仕様は少量のエネルギーを取り込み、増大させ機体に還元させる事でより強大なエネルギーを引き出す装置だ。

カナードはこの仕様を聞いたとき、倉持に対する警戒度を引き上げた。それは束も同じ意見であった。

「……篝火ヒカルノ、倉持は正直信用できない」

「え？」

きよとんとした顔のセシリアにカナードが続ける。

「限定的かつ劣化しているが【O・V・E・R・S】の機能、あれは【紅椿】の【絢爛舞踏】だ」

「……言われてみれば確かにそうですね」

カナードが頷く。

「どうせよからぬことでも企んでいるのだろう、量産化とかな。それにデータを取られる可能性がある。リスクは負いたくない」

「ですが【O・V・E・R・S】のソフト・ハードともに軍が確認済みですよ？」

「……念のためだ。特に俺達や日出の機体にはC・Eの技術を元にした武装や機能が多いからな。技術者って言う人種はチャンスを与えると何をやらかすか身に沁みて理解しているつもりだ」

苦虫を噛み潰したような表情のカナードにセシリアは思わず笑みを零してしまった。

おそらくは束が暴走しようとしたら彼が物理的に抑えているのだろう。

そして彼の言葉について心中でなるほど頷いた。

ALやVL、ドラグーン等は確かにこの世界の技術よりも数歩先の技術だ。

そのデータは現在、日出と東陣営が独占している。

日出は所属している真経由で情報が流れているが、ビーム兵器やVLユニットの実現は世界各国のIS研究機関でも頓挫している状況だ。

そんな機体の詳細データは技術者としても喉から手が出るほど欲しいだろう。

「真も同じ考えだ。もつとも、アイツの場合は更識の機体の件でいいイメージを持っていないのも大きいだろうがな。篝火ヒカルノが来ていると聞いたときの顔だが、それは酷かったぞ。」

カナードの言葉に確かにと呟いたセシリアは苦笑した。

その約2時間後、作戦に参加する全機へのパッケージ接続が完了した。

囃組のISへのパッケージ接続とブルーティアーズへのアフタヌーンブルーの接続

が完了し、いよいよ作戦が開始される30分前。

更衣室にてISスーツに着替え終わった真はロッカーの扉を閉めた。

現在の彼のISスーツは以前のザフトレッドのパイロットスーツをモチーフにしたものとは異なり、傭兵時代、そしてネオ・ザフト時に身につけていた黒と赤を基調にしたパイロットスーツモチーフのモノへと変化している。

「なあ、真」

「ん？」

同じくISスーツに着替えた一夏が真に呼びかける。

それに振り向くとどこか暗い表情をした一夏の姿が目に入った。

「どうした？」

「……いや、ちよつとな。宇宙ってやっぱ初めてだからさ」

「おいおい、今更過ぎるだろ一夏。ビビったのか？」

苦笑してそう返すと、それに釣られたのか一夏も同じ表情で返す。



「ビビッてねえし……つてのは嘘だな。ちよつと不安だつて心のどこかで思つてる」  
「……なら下がるか？」

一夏の答えは分かっている。

伊達に長い間友人をしているわけではないし、彼の戦う理由はちゃんと知っているからだ。

だがあえて真は彼に問うた。

しつかりと自分で選択させるために。

「いや、それはないって。俺は皆の笑顔の為に戦うって決めた。AIラクスを放つておけば誰かが絶対に泣くことになる。そんなのは嫌だ」

「……ああ。花は吹き飛ばさせない、だから俺達でやるんだ」

「うん。ありがとう、真。元気出たよ」

「おう」

互いにこつんと右拳を合わせる。

「そうだ、真。この作戦が終わったら飯でも食べに行こうぜ？」

「お、いいな。けどイギリス料理か……朝飯を3回食べるだっけ？よく言われるやつ」

「あー、それ俺も聞いたことある。後はお菓子が美味しいらしいな」

「スコーンってやつか？」

「そう、それぞれ！」

2人はそんな雑談をしながらロツカールームを後にする。

他愛のない話をしながらも、真と一夏、2人の瞳には戦意の炎がしっかりと宿っていた。

『皆さん、陽動をよろしく願いますね』

『オルコットの護衛は俺とクロエに任せろ。お前達は役目を果たせ』

投影ディスプレイに映るのはすでにアフタヌーンブルー設置地点まで移動したセシリア。  
セシリアとチエルシーの護衛の為にカナードとクロエも一足先に移動しており、ド

レッドノートHとXアストレイは【M. E. T. E. O. R】を接続して、防衛に当たっている。

またイギリスに来る途中でシャトルを守るために飛び出した楯無から連絡が入っていた。

彼女は【アフタヌーンブルー】を守る護衛班に加わって参戦するとの事だ。

第2重力カタパルトでは、現在日出組が出撃の準備を行っている。

隣の第1重力カタパルトでは一夏達残りのメンバー及び、千冬が出撃準備を行っている。

『ああ、任せてくれ。セシリアも狙撃頼んだ』

『はい、全力を尽くします』

笑顔で真に返し、通信が切れる。

『おほん。いい？ 今接続している【M. E. T. E. O. R】は実のところ試作品もい  
い所だからね、無理はしちゃダメだよ。危なくなったらパージして良いからね』

出撃準備中の真達に利香の通信が届く。

真耶と共に利香と節子、ジェーンも司令部でサポートをしてくれることになっていく。

『分かってますよ、利香さん』

『いや、簪ちゃんはともかく、真君は無茶するからなー。危なくなったら真君のサポートよろしくね、簪ちゃん』

ジト目で真に告げた後、簪に利香はそう告げた。

それのため息を付いて苦笑いしつつ、真が尋ねた。

『利香さんの中の俺って、そんなに無茶してるイメージなんですか？』

『うん。テストパイロット時代に根詰めてぶっ倒れたこと、忘れてる？』

『うぐっ……』

脳裏に蘇るのはC・Eでの苦い記憶。

MSインパルスのテストパイロットになったばかりの頃。

インパルスは戦闘機であるコアスプレnderをコアとして、チェスト、レッグ、シルエットで構成されるMSであった。

当然、それらはパイロットであるシンが正確にコントロールして合体操作を行わなければならぬため特殊なシミュレーターを使って訓練していた。

当時中々合体操作が上手くいかなかった為、訓練時間が終了してもシンは訓練を続けていた。

それこそ休憩時間をも削ってだ。

そんな無理を連日続けていれば、頑丈なコーディネーターでも影響が出てしまう。

リーカとコートニーが、シンが寝る間を惜しんで訓練をしていると聞いてシミュレータームまで足を運んだところ、倒れていたシンを見つけたのだ。

当然、その後医務室へ連れて行かれ、リーカとコートニーにはきつく叱られた事を思い出した。

『シミュレーターの中でぶっ倒れてるのは、私もコートニーも驚いたなあー』

『……あの時は本当にすいませんでした』

『そんなことがあったんだ。分かりました、任せてください』

『ま、簪ちゃんがいれば真君も無茶はしないだろうし。ラキーナちゃんとアスラン君もよろしくね』

利香の言葉にため息を付いた真を見て、簪は苦笑していた。

『はい、分かりました』

『了解です、利香さん』

ラキーナとアスランが軽く笑みを浮かべて返事をした。  
その時であつた。

『各員、こちら司令部のエーカーだ』

司令部のエーカー少佐からIS全機へ通信が届く。

『現時刻よりエクスカリバー迎撃作戦、作戦名【カムランの丘】を開始する！ 各機発進っ！』

エーカー少佐の指令が響き、ついに作戦が開始される。

『司令部より各機へ、コントロールを譲与します』

真耶の声が響き、コントロールが譲与された。

同時に心のスイッチを切り替える。

戦士としてのスイッチを入れ、意識を集中する。

意識の中に浮かぶ違和感、「S. E. E. D.」を受け入れると共に意識の中で弾け飛んだ。

夏に起こった楯無との一件の後、理由は不明だが真はある程度自身の意志で「S. E.

E. D.」を発動させることができるようになっていた。

「S. E. E. D.」とISハイパーセンサーの相乗効果によって広がる視界と感覚。

ふうと一息ついてから、コールする。

『飛鳥真、「デステイニーガンダム・ヴェステイジ」、行きますっ！』

『更識簪、「飛燕」、出ますっ！』

『ラキーナ・パルス、「ストライクフリーダムガンダム」、行きますっ!』

『アスラン・ザラ、「インフィニットジャスティス」、出撃するっ!』

出撃コールと共に、「M・E・T・E・O・R」の大型スラスタと重力カタパルトが起動。

一気にISの限界速度まで加速した4機は、まさに「流星」の様に宇宙を目指して翔けあがっていった。

第1カタパルトより射出された一夏達と真達は上昇しながら、合流していた。

現在の真達の機体は通常のISよりもかなり巨大な「M・E・T・E・O・R」が接続されているため、合流したといっても編隊飛行をしているような形となっているが。

「O・V・R・E・S」を装着した一夏達と通信が繋がる。

『おお、それが「M・E・T・E・O・R」ってヤツか』

『「O・V・R・E・S」に比べるとかなり大型だな、各機あまり近付き過ぎるな、適度に分散しろ』



千冬のラファールから指示が飛ぶ。

投影ディスプレイに映る一夏、箒、鈴、シャル、ラウラが【M. E. T. E. O. R】を見て軽く驚いた表情を浮かべていた。

『まあ、正直なところステイニーで【M. E. T. E. O. R】つてのも不思議な感じだけだな』

『え、そうなの？』

シャルロットの意外そうな声が割り込む。

『ん、MSのステイニーは【M. E. T. E. O. R】が接続できなかつたんだ。それに何故かザフトから【M. E. T. E. O. R】のデータが消えてたしな』

そう言って別の投影ディスプレイで繋がっているラキーナとアスランに視線を向ける。

2人は冷や汗を流しながら視線をそらしていた。

『……あー、なるほどね』

過去に何かあったんだろうという事を察した鈴が苦笑いしながらつぶやく。

その瞬間であった。

ハイパーセンサーに動体反応。

そして熱源反応が急速に高まった。

『散開しろっ！』

アスランと千冬の声が重なり、真達は機体を咄嗟に動かす。

上空から降り注ぐビームの雨が、先程まで密集していたポイントに降り注いだ。

『来たかつ！』

ラウラが叫ぶ。

彼女の言葉通り、上昇を妨害するように2機のISが立ちふさがっていた。

1機はトリコロールカラーに背部バックパックの機動翼を広げた機体。

1機は鶏冠型の頭部、大型リアクターを背負ったワインレッドの機体。

C. E. では伝説的なMS。

【フリーダム】と【ジャステイス】。

無人機ISとして生まれ変わったそれらが、真達の前に現れた。

しかし、敵機を確認して最初に動いたのは同じく【フリーダム】と【ジャステイス】の名を背負った【2人】

『そっ！』

ビームライフルの緑色の閃光が無人機フリーダムとジャステイスに放たれた。

2機には回避されてしまったが、それでも【道】を開くことはできた。

『……私達で道を切り開くっ！』

『先に行くんだっ、真っ！』

動いたのはラキーナとアスラン。

それを確認した真は2人に告げる。

『……死なないで下さいよ、2人ともっ』

『分かっているさ、こんなところで死ぬつもりはない』

『そうだね、私達にはまだやるべきことがあるんだし』

少しだけ笑みを浮かべたアスランとラキーナに頷いて、真が叫ぶ。

『行こう、一夏。俺達はエクスカリバーをつっ！』

『……分かったっ！』

デステイニーと白式に続いて箒達も再び高度を上げていく。

『頼むぞ、パルス妹。そしてアスラン・ザラ』

『ええ、ここは任せてください。ミス織斑』

アスランが笑みを浮かべて千冬に返す。

それを確認した千冬は再度機体を加速させ、先を上昇して言った真達を追う。

上昇して行った仲間達の背後を守るように、「ストライクフリーダムガンダム」と「インフィニットジャスティス」、2機のISは【M. E. T. E. O. R】をパージしてビームライフルを展開する。

【M. E. T. E. O. R】は破格の機動性と殲滅能力を与えるマシンだが、運動性能を大きく低下させてしまう欠点がある。

己の全ての力で相対するために、ラキーナとアスランは【M. E. T. E. O. R】をパージしたのだ。

同時に相対するフリーダムとジャスティスが動いた。

フリーダムが後方に下がり、その形態を変えていく。

バラエーナとクスフィアスを展開したフルバーストモードだ。

『ラキッ!』

『分かっているよっ!』

だがそれはラキーナのストライクフリーダムも同じであった。

高機動形態であるハイマツトモードから砲戦形態のフルバーストモードへ。

2機のフリーダムの名を冠する機体から発射された砲撃は、ほぼ同時であった。ビームとビームが、電磁加速された弾頭とがぶつかり合い、凄まじい爆発が発生した。

『うおおおおつ！』

そしてその爆発を2機のジャステイスが切り裂く。

互いの連結したハルバート形態ラケルタビームサーベルが干渉し合って火花が飛ぶ。

そして脚部のビームブレイドを起動。

右脚で相手を蹴り上げブレイドによる両断を狙うが、ラケルタビームサーベルの連結を解いたジャステイスのビームサーベルに弾かれる。

そして返す刃で切りかかってくる。

『つ、やるなっ！』

瞬時加速で距離を取り、ビームライフフルで牽制。

しかし、AMABCによる姿勢制御で相手のジャステイスはビームを避けていく。

今までのやりとりからラキーナとアスランはあることに感じていた。

それは「行動が自分達と全く同じ」である点。

『……戦い方が完全に私達だね』

『……そのようだ』

このフリーダムとジャスティスは完全に過去の自分達だ。

つまりは「キラ・ヤマト」と「アスラン・ザラ」を再現している無人機である。

『前に戦った無人機とは質がまるつきり違う。なんでラクスはこれを使わなかったんだろう』

『……これは推測でしかないが、エクスカリバーを母機にしているから……じゃないだろうか』

ストライクフリーダムのフルバーストモード時の機動力は、通常時よりも大幅に下回る。

それをカバーするために、アスランはビームライフルと「ソリドウス・フルゴール」を

展開してラキーナを守りながら答えた。

『どういう事？』

『チエルシーさんも言っていたが、ラクスのAIには欠点があると。そのAIがエクスカリバーに搭載されていて、この無人機達はそのAIによって操作されているとしたら……ラクスが使わなかったことにも合点がいく』

『……つまりは？』

球状の投影コンソールが表示されると同時に「マルチロックオンシステム」が起動する。

マルチロックオンシステムは視線でのロックオンを行うシステムだ。

相対するフリーダムは現在、ハイマットモード。

ジャステイスは元々格闘戦用に設定されており、高機動力も併せ持っている。

V Lユニットを使うISよりは劣るが、それでもかなりの機動力だ。

だが、捕えられない訳ではない。

視線で補足すると共にマニュアルで狙いを微調整する。

フリーダムとジャステイスの機動力を予測し、予測射撃を敢行しながらラキーナがア



スランに問う。

『要するに、AIラクススの欠点は「出来が良すぎる」んじゃないかという事さ。ラクスと全く同じ思考をしたAI、彼女本人からすれば自分がもう1人いる事と同じこと。便利かもしれないがそれは足枷にもなる』

『……つまりは互いで互いをつぶし合うかもしれないかもしれないって事？』

ラキーナの脳内で「ミア・キャンベル」の様な影武者ではなく、能力も思考も同じ2人のラクス・クラインがC・Eにいた場合の地獄の様な有様が想像できてしまった。

恐らくはアスランが予測したように最終的には互いに滅ぼしあうだろうとも。

『ああ、だがもう本人はいない。だから何者かがラクススのAIを凍結から解除させたんだらう』

チエルシーも言っていたが敵はエターナルを旗艦としているらしい。

エターナルに搭乗していた連中全てが、所謂ラクス信者ともいえる連中であることを

知っている。

狂信的な連中程何をやらかすか分かったモノではない。

『……ホント、私達はこうして彼女を見抜けなかったのかな』

『……彼女が何枚も上手だったという事だろうな。けど間違ったのならやり直せる、そうだろうか?』

ビームサーベルを展開したジャステイスに相對して、アスランもサーベルを構える。

アスランが構えているサーベルに粒子が集まり、光り輝く。

まるで【零落白夜】のように。

『俺達は、過去の自分達を乗り越えるっ！そこをどけえっ!』

アスランの意識の中で翡翠色をした【S・E・E・D】が弾け飛ぶ。

同時に【零落白夜】を発動したサーベルが相對したジャステイスのビームサーベルを切り裂き、返す刃で右腕を切り落とした。

# PHASE 6 ぶつかり合う想い

## 絶対対空砲「アフタヌーンブルー」

B T各機を接続する事によって、B T粒子を加速／増幅させ絶大な威力のレーザー攻撃を可能にする兵器。

山林に建造されたこの兵器が「カムランの丘」作戦では最重要になっている。

対空砲の周囲を旋回し、警戒行動を行っている機体が2機。

【M・E・T・E・O・R】を装備した【ドレッドノートH】と【Xアストレイ】の2機である。

Xアストレイの【M・E・T・E・O・R】の形状は真達と同じくC・E・Eのモノがダウンサイジングされたものであるが、ドレッドノート用の【M・E・T・E・O・R】は形状が異なっていた。

背部ユニットはそのままであるが、機体を挟み込む様に展開される大型ビーム砲兼ビームソードユニットが巨大な【菱形】のシールドに変更されている。

これは束がドレッドノートの機体特性を鑑みて、再設計を行ったジェーンに依頼して通常仕様のモノから変更した代物であった。

『……始まったようだな』

カナードが作戦状況を確認して呟く。

投影ディスプレイには現在の作戦状況が司令部より送られてきており、**囃組**である真達が出撃した事を知らせていた。

『ええ。そのようですわね』

射撃体勢についているセシリアと旋回し、警備中のカナードがオープン回線で会話する。

彼女の背後で【BT3号機】【ダイヴ・トゥ・ブルー】を起動しているチエルシーがいる。

彼女の機体はBT粒子の供給源としてアフタヌーンブルーに接続されていた。

またその彼女の隣には女性士官が身につけた【BT2号機】【サイレント・ゼフィルス】も存在していた。

【サイレント・ゼフィルス】は学年別タッグトーナメント時に【偏向射撃】を覚醒させた

セシリアによってマドカから奪還されており、歌姫の騎士団との最終決戦後に本国に送還されていたのだ。

【偏向射撃】の完全習得とI S奪還の功績によってセシリアの次期国家代表がほぼ内定しているのである。

『更識楯無はまだか?』

英国への到着の際に別れた楯無が、防衛班として参戦することはカナード達にも連絡が来ていた。

現在、彼女の到着を待っている状況だ。

『んっ、噂をすれば、彼女から通信きたよ、繋ぐ?』

『頼む』

りようかーいと司令部の束が返事をする、通信用のディスプレイが展開される。

そこに映るのは水色の髪の家代表、更識楯無。

どうやら大型ブースターなどを装備してかなりの速度で移動しているようだ。

『はい、呼んだかしら。カナード君？』

『到着まで後どれくらいかかる？』

『そうですね、この速度だと後10分程度かしら』

『……10分か』

10分、通常ならば短い。

だが戦場では戦況が覆りうる出来事が数度発生してもおかしくない時間。

『……なるべく急いでくれ』

『ええ、分かっているわ』

そうやって通信が切れる。

それを確認したカナードが司令部に連絡をいれた。

『司令部、これよりアフタヌーンブルー周辺にALを展開する』

『りょーかい！カナ君、その武装は結構扱いが難しいから気を付けてね！』

『ああ、分かっている。分離型アルミユレ・リユミエールユニット「ハイペリオン」起動』

菱型のシールドがさらに細かな4つの菱型に分離、両方合わせて8枚の菱型片がアフタヌーンブルーの砲口を頂点として七角錐の形に展開される。

そして、菱型片がそれぞれALを展開しながら浮遊し、別の菱形片が生み出すALと連結していく。

薄緑色の光の膜がアフタヌーンブルーを七角錐型に包み込んだ。

『……綺麗』

思わずクロエはそう呟いた。

薄緑色の柔らかな光が自分達を包んでいる不思議な光景に声が漏れたのだ。

分離型アルミユレ・リユミエール「ハイペリオン」

カナードの「M・E・T・E・O・R」に搭載された菱型のシールドの正式名称である。

その正体はモノフェーズ光波シールドであるALを広範囲に展開する専用武装だ。単体としては破格の防御性能を持つALを広範囲かつ強力に展開できる武装だが、〔M・E・T・E・O・R〕の様な支援ユニットなしでは実戦仕様状態でも1分でエネルギーが切れてしまう欠点がある。

その為に使いどころがなかったが今回の作戦のように防衛作戦では非常に有用であるため、日の目を見れたのだ。

またこの武装にはカナード自身が命名したという経緯があつた。

かつて彼が搭乗していたMS、「高き天を行く者」と言う意味の「ハイペリオン」ALを搭載した最初の機体であり、彼の象徴とも言つていいMSである。

今回装備した武装の出力はまさに「絶対防御」とも言えるレベルで高いため、その名を冠するには相応しいと彼は考えている。

できれば無限動力化もしたいとも考えているが、技術的にそれは難しい為頓挫している状況だ。

『ALの正常展開を確認。一旦ALを解除する』

カナードの操作の後、展開された七角錐型のALは消失した。



しかし展開している菱形片は浮遊したままである。

『カナードさん、その装備は？』

『拠点防衛用装備……と言ったところだ。アフタヌーンブルーもジャミング等で正確な位置を隠蔽しているようだが、狙撃手が逆に狙撃されたら目も当てられないだろう？そのための装備だ』

大気圏外から正確な狙撃が可能なエクスカリバーに対して、アフタヌーンブルーの防衛力はお世辞にも優れているとは言いがたかった。

そのため破格の防衛能力を持ち、内側からの攻撃を通すことが出来るモノフェーズ光波シールドは最適解である。

『さて、どうなるかだな』

ALの展開が可能になったため少しだけ息をついてカナードが呟く。

(真さん、一夏さん、皆さん。信じています、どうかご無事で……っ！)

アフタヌーンブルーに接続された狙撃端末を構えてセシリアが心中で呟いた。

無人機フリーダムとジャステイスをラキーナとアスランに任せ、真達は地球の重力を振り切つて、漆黒の宇宙空間までたどり着いていた。

地球の引力圏から随分と離れた宙域、エクスカリバーが存在する座標まではあと少し。

そんな時、ふと一夏は振り返つて母なる星を眺めた。

『……地球つて綺麗なんだな』

それが一夏の心からの感想であつた。

青く輝く水の星、地球。

エクスカリバー迎撃作戦でなかつたらずっと見ていたくなる程の光景だ。

有名な宇宙飛行士の「地球は青かつた」と言う言葉も今ならはつきりと共感できる。

きつと美しかったから思わず出てしまった言葉なのだろうと。

『一夏?』

一夏の傍で機体を加速させていた箒がそれに気づいて紅椿を停止させる。

『あ、いや、悪い。すぐ向かう』

白式・雪羅を再び加速させてすぐに箒に追いつく。

少し止まっていたためグスティニー達には少し遅れてしまっているがすぐに追いつけるだろう。

『どうかしたのか?』

『いや、地球ってホントに綺麗だなんて考えたら、足が止まってたんだ』

子供のように無邪気に笑顔を浮かべた彼に、こんな時であるがときめいてしまった箒は頬を朱色に染めながら返す。

『そつ、そうだな……私もそう思うぞ』

『……なおさらこんな綺麗な星を荒らされるとか考えたくないな』

『……ああ、そうだな。だから私たちはここにいる』

一瞬作戦を忘れてしまったことに自己嫌悪したが、すぐに思考を切り替えた。

少し前の筈ならばここで恋心を優先させていたかもしれないが、今の彼女は違った。

ここは戦場であり、少しの油断が取り返しのつかないことに発展するかもしれないからだ。

図らずも歌姫の騎士団との戦いの経験が彼女を成長させていたのだ。

『つ、散開しろっ！』

先行したデステイニーを駆る真の声が通信ディスプレイから響く。

その言葉に咄嗟に機体を横に動かす。

先程まで一夏と筈がいた空間に、上方と下方から同時に翡翠色のビームが降り注いだ。

発射した物体はセシリアのビット兵器に酷似した無線式の移動砲台。

『あれかつ!』

白式・雪羅に進化した際に発現した〔荷電粒子砲〕を放つ。

しかし、そのドラグリーンはまるで意志を持つているかのようにその射撃を躲す。

一夏が射撃にあまり慣れていないのもあるが、その機動はクイツクかつ滑らかであった。

そして、真はそのドラグリーンが誰のモノであるかを知っている。

『あのドラグリーンっ!』

【M. E. T. E. O. R】の大型ビームライフルから極太のビームが発射された。

牽制用にしてはあまりの高威力の代物であるが、ドラグリーンを巻き込めれば御の字である。

しかし、そのビームもドラグリーンは躲し、本体へと戻っていく。

『ホワイトネス・エンプレス』！』

ラクス本人が搭乗していた機体である「ホワイトネス・エンプレス」と同様の機体が真と簪の目の前に現れた。

最終決戦の際に身につけていた背部の手にも、天使の翼にも見える「エンプレスユニット」も健在であった。

だがいくつか相違点があった。

（搭乗者がいない無人仕様……？それに翼、VLUユニットが変わっている？）

現在のホワイトネス・エンプレスには搭乗者が見られない。

それについては相手はAI、生身の身体など持つてはいないだろうことから予測はしていた。

だがVLUユニットの形状と色が変わっている事が真には気になったのだ。

以前のホワイトネス・エンプレスの翼はデステイニーガンダム・ヴェステイージュよりも少し小さく、優雅さを感じさせる様な白色だったはず。

だが今はまるで血の様に紅い色をしている。

ホワイトネス・エンプレスは〔VPS装甲〕を搭載している為、通電率を変更すれば機体色も変化させることは可能だ。

余談ではあるが、VPS装甲の通電率を高レベルに設定した場合、赤色の高強度状態となる。

この状態であればビームに対してある程度の耐性を得ることもできる。

近接戦闘用のソードインパルス of VPS装甲が赤色なのはこれが理由だ。

また反対に通電率を低レベルに設定する場合の装甲色は黒色となる。

こちらはVPS装甲の中でもビームに対して最も脆弱になってしまうが、その分エネルギーを別利用する事が出来る。

コンセプトを超高機動に変更したMS〔デステイニーガンダム・ヴェステイジー〕がこれに当てはまっている。

——閑話休題

現れたホワイトネス・エンプレスを分析していると、ディスプレイが展開される。

『シン、会いに来てくれたのですね』

桃色の髪に柔和な笑みを浮かべた美女〔ラクス・クライン〕の姿が映っている。

おそらくはイメージ、アバターの様なものだろう。

だがその姿はかつての彼女と寸分たがわない、本当に生きているかのように真には感じられた。

『千冬さん、ラウラ』

ラクスの言葉を無視して、ラファールを駆る千冬と〔シユヴァルツァ・レーゲン〕を駆る2人にプライベートチャネルを繋げる。

『俺と簪が奴の相手をします。Vレユニットがあれば奴の〔単一仕様能力〕は防げますし、何よりも俺は一度奴を倒してます。エクスカリバーの座標まであと少し、先に行ってください』

有無を言わず真が告げる。

飛鳥真としてではなくシン・アスカとして、戦闘経験だけならば彼は千冬よりも多い。それを分っていたかのように、2人はうなずく。



『……良いだろう、だが死ぬなよ。更識、真の指示には従え。こいつは私よりも戦闘経験が多いからな。力になってやれ』

『っ、はいっ』

『……ありがとうございます。【M・E・T・E・O・R】のミサイルで援護しますからエクスカリバーの方、よろしくお願いします。ラウラも頼んだっ！』

『了解した、真っ。ヤツは頼む。エクスカリバーは一夏と私たちで何とかするっ！』

通信を切ると同時に、ゲステイニーと飛燕の【M・E・T・E・O・R】背部ミサイルコンテナが開き、まるで嵐の様にミサイルが射出されていく。

その狙いは「ホワイトネス・エンプレス」ただ1機に絞られている。

数発のビームを放つが数の暴力には勝てずに、ホワイトネス・エンプレスはミサイルの回避を選択した。

『行くぞ、私達はエクスカリバーに向かうっ！』

ミサイルを回避しているホワイトネス・エンプレスを確認した千冬が一夏達に叫び、

スラストターを噴かす。

ラウラ、シャルロット、鈴がラファールを追いかけていく。

箒もそれに続こうとしたが、一夏が止まっている事に気付いた。

一夏は真に通信を繋げていたのだ。

『真っ！負けんなよっ！』

『ああっ！エクシアさんとエクスカリバーを頼むっ！』

『任されたっ！』

白式・雪羅が力強くスラストターを噴かして先に向かった千冬たちを追いかけ飛翔していく。

千冬たちの行動を止めるそぶりすら見せずにディスプレイ上に映っているラクスは微笑む。

『こうして【私】が顔を合わせるのは初めてでしたよね？初めまして、シン・アスカ』

彼女の言葉に答えるかのように、真は即座にビームライフルのトリガーを引いた。

放たれたビームは真つ直ぐにホワイトネス・エンプレスに向かうが、命中の直前にまるで見えない壁に阻まれるかのように軌道が逸れ、後方に流れていった。

『ゲシユマイディツヒ・パンツァー』、健在か』

『それってたしかビームを捻じ曲げるバリアみたいな装備だよな?』

『ああ、ゼロ距離かよほど高出力じゃないと逸らされると思う。やっぱり接近戦で決めるしかないか。簪、【M・E・T・E・O・R】はパージしてV Lユニットを展開してくれ。出力は通常時よりも高めておいてくれ、じゃないと奴の能力を喰らう可能性がある。後2種類の【ドラグーン】を使ってくるから視野を広く持つてくれ』

飛燕の簪とプライベートチャネルを開き、相手に悟られることなく情報を伝える。

特に後者、【生体支配】は喰らったら最後、奴の思うがままに操られる能力だ。

幸いデステイニーと飛燕のV Lユニットは生体ナノマシンをその機能で無効化できる。

常に出力を上げていればこれに引つかかる事はないはず。

デステイニーと飛燕の機体から【M・E・T・E・O・R】がパージされる。

そして広がる2つの光の翼。

『つれないですわね、シン。せつかくこうして会えたと言うのに』  
『俺は会いたくなんかなかったさ』

手持ちのビームライフルは相手との相性が最悪であるため格納する。

そしてデステイニーが持つ実体兵器の1つである「アロンダイト」を展開する。

同じく飛燕もビームライフルを格納し、左腕に「バルムンク」を展開する。

加えて右腕に「パイルバンカー」「リボルビング・ステーク」を展開。

実体兵器の搭載数がデステイニーよりも多い飛燕ならば、ゲシユマイディツヒ・パンツァーを展開しているホワイトネス・エンプレスにも有効打を与えることができる。

この時点で2人の作戦は決まっていた。

（俺が攪乱して、簪が一撃加える。隙を見てデステイニーでもダメージを与えられるはずだ）

デステイニーのV.L.ユニットから光の翼が広がる。

Vレユニットから得られる爆発的な加速力をもって、デステイニーがホワイトネス・エンプレスに接近する。

振りかぶったアロндаイトを振り下ろすが、ホワイトネス・エンプレスも「ビーム手刀 カラミティ・エンド」を起動して防ぐ。

ビーム粒子が干渉して火花を散らして鍔迫り合いの状態になるが、すぐにその状態は解かれることになる。

もう一つの蒼い光の翼が、ホワイトネスエンプレスの背後から迫っていたからだ。

右マニピュレータに装備されたパイルバンカー「リボルビングステーク」の撃鉄はすでに起きている。

『はあっ！』

パイルバンカーの一撃。

地球上であれば炸裂弾薬が炸裂した際の炸裂音が響いただろうが、ここは宇宙空間の為炸裂音は響かなかった。

しかしパイルバンカーの一撃はホワイトネス・エンプレスには届かなかった。

紙一重でその一撃を、もう片方のビーム手刀でいなしたからだ。

だがそこで簪の攻撃は終わらなかった。

パイラルバンカーをいなされた彼女であったが、すぐさま背部に「マルチロツクオンシテム搭載ミサイルコンテナ」を4つ展開した。

視線でのマルチロツクオンシテムを、彼女の視線がホワイトネス・エンプレスの各部位を捉え、ロツクオンが完了。

真もその攻撃は予測していたため、すぐさまホワイトネス・エンプレスから離れた。

『これでえっ！』

射出されたミサイルの嵐が、ホワイトネス・エンプレスに襲い掛かる。

ホワイトネス・エンプレスの翼にも見える大型パッケージ「エンプレスユニット」からドラグーンが射出された。

迫るミサイルに射出されたドラグーン達がビームを放つ。

ドラグーンの迎撃行動でミサイルが連鎖爆発していく。

だが爆炎の中から広がる光の翼——「デステイニー」だ。

『はああああつ!!』

アロンダイトを振り上げて、ドラグーンを2基切り裂く。  
切り裂いたと同時にホワイトネス・エンプレスのエンブレスユニットの掌にも見える箇所からビームが発射された。

『ビームならっ！』

光の翼を広げてデステイニーは迫るビームに対して「ワンオフ・アビリティ単一仕様能力」を発動。  
発射されたビーム全てがデステイニーの光の翼に吸い込まれていく。

そして取り込んだビームの分だけ、光の翼はより大きく広がっていく。

その光景にデイスプレイに映るアバターのラクスが驚愕の表情を浮かべた後、微笑んだ。

『……ふふ、どうやらオリジナルの【私】と戦ったときよりも、あなたは強くなられたのですね、シン』

『だから何だって言うんだよ』

『ふふ、嬉しいのですよ、私は。愛しいアナタがより逞しく、強くなる事に喜びを感じな

「い女がいますか？」

微笑から狂喜に彼女の表情が変わる。

『愛シクで、愛シクで……アナタを壊したい。壊したくてたまらないのです、シンツ！』

ノイズが混じった様な声。

それに反応したのは真ではなく簪であった。

『……勝手なことを言わないでっ！』

ラクスに向かって叫ぶ。

『アナタは彼のこと、何も見ていない！ 一方的に感情をぶつけてるだけ、そんなの愛なんじゃないっ！』

バルムンクを砲撃モードに切り替えて、高出力ビームを放つが、「ゲシユマイディッ



ヒ・パンツァー」を展開している「ホワイトネス・エンプレス」相手では効果が薄いよ  
うで、弾かれてしまった。

そんな飛燕にプライベートチャネルを繋げる。

『……簪、ビームは全て俺が無効化する。二人で一気に決めるぞ』

『うん、分かった。タイミングは合わせるよ』

『うん。それと……ありがとな、嬉しかった』

少しだけ照れたように真が返し、それに簪が笑みを浮かべた。

2機が散開して、再び攻勢をかける。

『……私がシンを見ていない……ですか。言ってくれますね』

ラクスの声に明らかに怒気が混ざる。

その怒気を現すようにドラグーンを放つ。

通常の遠隔無線砲台としてのドラグーンではなく、スパイクドラグーンとして射出し  
たようで「ビームスパイク」を発生させている。

そのうちの1基が回避行動を取っていた飛燕を捉えていた。

『こんなのっ！』

迫るスパイクドラグーンを飛燕は手にしたバルムンクで受け止める。

『アナタなんかには真は渡さない、絶対につっ！』

そのまま切断しようと力を込めた瞬間だった。

それを見て、デイスプレイ上のラクスが笑みを浮かべた。

『いいでしょう、なら見せてあげますわ。彼の戦士としての姿をね』

その言葉が簪の耳に届いた瞬間、簪の視界はブラックアウトした。

---

市街地から上がる火の手に煙、空を飛び回る人型の巨大機動兵器。

海には多数の軍艦が見え、絶えずC I W Sやビームが発射されていた。

先程までに宇宙空間にいたはずの私がいっつの間にか空中に浮かんだ形で、それを見下ろしていた。

(……え?)

そして気づくと、頭上にいるホワイトネス・エンプレス。  
先程までの姿とは違い、生身の桃色の髪的女性が機体を身にまとっている。

『ここは彼の【記憶】……といっても理解はできないでしょうね、貴女には』  
(何を言って……声が出ない……っ!?)

彼女に向かって疑問の声を発したはずだが、その声は出てこなかった。  
他の言葉を発しても音として出てこない。

『貴女はここでは見ることでしかできませんわ。さあ、彼の戦士としての記憶、最初の凄惨な記憶をお楽しみ下さい』

そういった彼女は目の前から消えた。  
ミラーージュコロイドを使用したステルスなんかではなく、目の前から完全に消失した  
様に見える。

(一体これは……【単一仕様能力】なの……?)

この現象の原因として思いつくのはISの特殊能力である【単一仕様能力】だ。

だが、真から聞いた情報によると【ホワイトネス・エンプレス】の【単一仕様能力】は  
【生体支配】だったはず。

機体と同じであったためか、先入観で能力も一緒だと考えていたのかと、そこまで考  
えたときであった。

「ああ、マユの携帯っ！」

と言う少女の声が聞こえた。

その声は、真の妹の真由ちゃんに酷似しているようであった。

(あれは……真に真由ちゃん?)

飛鳥家には交際の挨拶の際に伺っており、彼の父親である大胡や玲奈にも会ったことがある。

今山間を駆けて避難している一家は飛鳥家に酷似している。

もちろん、真もだ。

初めて会った時よりも幾分か幼く見えるが彼を見間違えたりはしない。

「僕が行くっ!」

彼が妹の真由ちゃんに似た少女と両親にそう叫んで崖を飛び降りる。

そして彼女が落とした携帯電話を拾い上げて安堵の息をついたときに、空が光った。

(っ!?)

「うっ、うわあああっ!?!」

爆発が彼を吹き飛ばして地面に叩き落した。

爆発に私も飲まれたはずなのに、影響を全く受けてはいなかった。

数十m下にあつた軍港らしき施設に落下した彼は、頭から血を流し、視点があつていなかった。

爆発がクツションになったのか、明らかに重傷を負う高さからの落下にも関わらず負傷は軽く見える。

(真っ!!)

彼には聞こえない声で叫ぶ。

だがすぐに彼は立ち上がった。

「っ、今の……っ、父さん、母さん、マユっ！」

(よかった……っ!?)

立ち上がった彼に私は安堵の息をついた。

だけど、すぐそばにあつた【もの】に気づいてしまった。

——それは決して別れた状態であつてはいけない物だった。

「あつ……ああつ!!!」

彼の目の前にある【物体】、それは【腕】であった。

幼い少女の腕が千切れた状態で転がっていたのだ。

すぐそばにはひしゃげた、すでに事切れているであろう少女であった物体。

同じように血の池の中に沈んでいる彼の両親。

さつきまで命であったモノ、それが辺り一面に転がっている。

爆炎がその物体を焼き、辺りには肉のこげる臭いが漂っている。

「ああああつ!! とうさん、かあさ……マユ……っ!」

この世の地獄かとも思える光景に彼はただ嗚咽の混じった泣き声を上げることしかできなかった。

それは私も同じで、どういう訳か目を逸らすことが出来なかった。

涙が溢れる。

目を逸らすことが出来なくて、嗚咽が自然と洩れていた。

「あああああああああああああああつ!!!」

彼が形見となつてしまった携帯電話を握り締めて慟哭の叫びを上げた。

空には見覚えのある翼を持った機動兵器がその力を存分に振るつていた。

これが戦争に巻き込まれるということなのか。

ラクスが言つていた、彼が体験した凄惨な記憶の1つだというのか。

(こんなの……酷い……っ！)

そう思ったとき、辺りの風景がまるでノイズの様に乱れ、一変した。

雪が降る廃墟と化した町、酷く鼻につく硝煙の臭い。

大破した巨大人型兵器が横たわっており、傍に同じ頭部デザインの人型兵器が鎮座している。

その足元に誰かがいた。

(今度は何……っ?)



足元にいるのは彼であった。

先程よりも若干成長した様に見えるが、初めて会った時よりも少しだけ幼く見える。

「ステラっ！ステラっ、目を開けてくれっ……！」

以前着ていたISスーツと同じデザインのパイロットスーツを身に着けた彼は、横たわる傷だらけの少女を抱き上げた。

傷だらけの少女は小さく呻き声を出しながら瞳を開いた。

胸や足に何かの破片が深々と突き刺さり、絶えず血が流れている。

素人目から見ても致命傷であった。

「シ……………」

「あぁっ、俺だっ！シンだよっ！」

彼女の手を握って彼が叫ぶ。

充分に握り返す力も彼女には残っていないのか、僅かに握り返すだけであった。

「シン……来てくれた」

「ステラっ！俺は、君を、守るって、守るって言ったのに……何も、何も出来なかった……っ！」

涙を零しながら懸命に彼は彼女に呼びかけている。

だが――

「シン、好き……」

その言葉を伝えた直後、彼女の身体がガクンと力なく垂れた。

「ステラッ!!」

彼が叫ぶが、もう彼女は反応を示さなかった。

「ぐっ、ううっ、あっ……ああ……っ!!」

嗚咽交じりの彼の声と、涙。

「うわあああああああああああつ!!!」

叫ぶ。

その悲しみの咆哮が、私に酷く突き刺さった。

そして、また辺りの風景がまるでノイズの様に乱れ、一変した。

『簪っー!どうしたんだよっ!聞こえてないのかっ!?!』

スパイクドラグーンの攻撃を受け止めて弾き返した直後から反応を示さなくなつた飛燕にデステイニーが寄り添い、簪の表情を伺う。

虚ろな瞳で表情はニュートラル。

Vユニットから溢れる光の翼は依然として青く輝いているが、ユニット自体がガクンと力なく垂れている。

似たような姿を彼は見たことが合った。

ラクス本人の I S 【ホワイトネス・エンプレス】の【単一仕様能力】、【生体支配】に支配された際の千冬だ。

『どうやって【生体支配】をつ！』

真がラクスに叫ぶ。

ディスプレイ上に表示されているラクスの表情は笑み。

嘲笑の類に含まれるものであった。

『ふふ、先入観と言うものは恐ろしいですわね。いつ【私】の【ホワイトネス・エンプレス】の【単一仕様能力】を【生体支配】といたしましたか？』  
『っ!?!』

真は思い込んでいた。

機体が同じならば能力も同じだろうと。

その先入観のせいで自分の大切な、最も大切な人間が危機に陥っている。

悔しさからか、唇をかみ締めて血が滴っていた。

『私の「ホワイトネス・エンプレス」の能力は「生体支配」ではありませんわ。そうすわね、名前をつけるのならば……【サイバー・シミュール 脳楽園】でしようか』

『【サイバー・シミュール 脳楽園】っ!?!』

『そうですわ、シン。まあ、結局はナノマシンを経由しての【生体支配】に近いですが。ああ、V.Lユニットでナノマシンを無効化されることは存じていましたよ、なので直接彼女に打ち込ませてもらいましたわ。彼女の精神を切り離して、隔離してアナタの「シン・アスカ」としての記憶を送り込んで差し上げました。本当の意味で彼女はアナタの過去を身をもって体験しているのですわ』

『そんなこと、いくらISだからって……っ!?!』

そこまで言って気づいてしまった。

出来る、いや出来てしまうのだろうと。

自分がISに乗れる理由は2つ。

ISのコアネットワーク内にある【絶対基準】を2つ満たしているからだ。

1つはS・E・E・D・を宿しているから。

そしてもう一つ。

『コアネットワークに、俺の記憶があるのかっ!?』

この平和な世界では決して得ることが出来ない絶滅戦争を乗り越えた記憶。彼と同じ男性搭乗者であるカナードが I S を動かせる理由でもある。

『ええ。貴方が初めて I S を起動した際、「シン・アスカ」としての記憶全てを I S のコアネットワークは読み取って記憶しておりますわ。カナードやアスラン、そしてキラであるラキーナや他の C・E から生まれ変わった「人間」達からも』

彼女からの情報からどうやって彼女を救い出すか考える。

だがあまりにも規模のikai能力であり、どうやっても対応策など浮かんでこない。

『さあ、真、どうしますか？ 私のモノになるというのなら、彼女を助けることもやぶ

さかではありませんよ?』

ラクスが真に提案するが、受けるつもりなど毛頭ない。

(どうすれば、どうすれば助けることができるっ!?)

反応を返さない彼女を見つめたときであった。  
すらりとした生身の手が簪の頬に触れる。

——宇宙空間なのに【生身】の【手】であった。

『っ!?!』

驚愕した真が振り返る。

そこにはその手の持ち主である【セミロングの金髪】に、白いワンピース姿の少女がいた。

その少女を真は知っている。

『グステイニー……っ!?!』

『うん、私だよ。真』

IS【デステイニーガンダム・ヴエステイージ】のコア人格。  
今その少女が真の目の前にいた。

『なっ、何でデステイニーが……？』

『そんなの、簪お姉ちゃんを助けるために決まってるでしょ』

そう笑みを浮かべて真に告げたデステイニーの背後からピコッと髪の毛が飛び出しているのに気づいた。

彼の視線が自身の背後に向かっていていることに気づいた。

『ほらー、もうさっさと出てきてよお、アナタが出てこないと始まらないでしょっ！』  
『あっ、ちよつと……っ！』

デステイニーが自身の背後の少女を引っ張り出して真の目の前に連れ出す。



デステイニーと同じくらいのセミロングの黒髪に紅い目。  
彼女もデステイニーと同じワンピースを身に纏っていた。

『はっ、初めまして……』

その少女が若干おどおどした様子で頭を下げた。

## PHASE 7 二人で

織斑一夏と飛鳥真がISを起動させて、男性搭乗者となる数年前。

某国に一人の科学者がいた。

その科学者の専攻は「人工知能開発」であり、その分野では天才と呼ばれるほどの人物であった。

その彼が突如失踪し、某国政府が諜報員を駆使して彼の行方を追ったが現在に至るまで行方不明のままである。

ただ、彼が失踪する直前、日課でつけていた日記に手がかりとみられる文章が残されていた。

「彼女は女神だっ！ ついに出会えたんだ！ 私は彼女を永遠のものにしなれば……！」

上記の文章が震えた筆跡で残されていた。

この文章中の「女神」と呼ばれる女性については目下調査中である。

——某国諜報員の調査手帳から一部抜粋。

『君はまさか……っ!?!』

『はっ、はい、【飛燕】……です。真様』

飛燕と名乗った少女がべこりと頭を下げる。

それを見たデステイニーが少々呆れた様なため息を付いてから口を開く。

『もー、そんなに緊張しなくてもいいって言うのにさー。飛燕は態度が固いよ、うん』  
『デステイニー姉さんが搭乗者に対してフランクすぎるのっ』

飛燕がデステイニーに強めに返すが、すぐに真に向き直る。

『失礼しました、真様。簪様を助ける為にお力をお貸しいただきたいのです』  
『簪お姉ちゃんを助ける為には真、アナタの力が必要になるの』

『俺の力……っ、しまっ!?』

いままでのやり取りで失念していたが、ホワイトネス・エンプレスは健在のはず。即座に振り返ってみるが、ホワイトネス・エンプレスは微動だにしていなかった。

『大丈夫だよ。今は私達が真の意識に語りかけてるから、時間は一秒も進んでないよ』  
『……そうなのか』

今のうちに攻撃できないかとも考えたが、意識に働きかけて時間感覚を誤魔化しているらしいので無駄であろうと真はデステイニーと飛燕に向き直る。

『それで、俺はどうすればいい?』

『今簪お姉ちゃんの意識はアイツの能力によって電腦仮想空間に隔離されて、囚われている状況なの』

『なので簪様を救出するにはまずその仮想空間にアクセスする必要がありますね』

2人の説明で今簪がどうなっているのかを理解した真が首を縦に振って答える。

『簪がどうなっているのかは分かった。けど、どうやってアクセスするんだ』  
『私達が真の意識を電腦ダイブの要領で仮想空間に送り込むの』

### ISの【電腦ダイブ】

それ自体は真も知識があった。

ISの同調機能を使用し、操縦者保護神経デバイスを通して電腦世界、直接ネットワーク上のシステムに干渉できる機能だ。

現在はアラスカ条約によって規制されてもいる。

『幸いデステイニー姉さんと今の私はV Lユニットによってエネルギーのラインを繋ぐことができる状態です』

『そして私と飛燕の同調機能を使った電腦ダイブの応用で真、アナタの声を簪お姉ちゃんに届かせるの』

『サポートは私とデステイニー姉さんで行います』

デステイニーと飛燕が真に告げる。

僅かでも可能性があるのならば、それに賭けないわけがない。

『分かった、やってくれ』

デステイニーと飛燕が真に告げる。

自分一人ではこの状況を打破するのは不可能だ。

僅かでも可能性があるのならば、それに賭けないわけがない。

『ならすぐに始めるよ。真、電腦ダイブ中は完全な無防備になるから……』

『分かっている。単一仕様能力も使ってVLで光の繭を作って防御する』

真の返答にデステイニーがコクリと頷く。

『うん、この後すぐに感覚が元に戻るから。真が防御行動をとったらすぐに電腦ダイブ始めるからね』

その言葉の後、今まで静止していた周囲の時間が動き出した。

すぐさま飛燕を自機に引き寄せてV.Lユニットを起動して後退。

『おや、何の真似ですか、シン？』

ラクスを無視して【単一仕様能力】を発動。

まるで宝石の様に美しく輝く真紅の光翼が広がる。

光の翼を操作して、デステイニーと飛燕の機体を繭のように包み込む。

その際、いまだ反応を示さない簪の顔が視界に入った。

(……簪、待っていてくれ。絶対に助けてみせるっ！)

そう決意して、瞳を閉じる。

瞳を閉じると同時に、自身の意識が遠のいていくのを感じた。

『……………ハハハ』

目を開けると、そこは一面の花畑。

見覚えがあり、何度か訪れたデステイニーの空間。

ふと自身の身体を見てみると、ISである「デステイニーガンダム・ヴェステイジー」を身に纏っていた。

『真っ！』

ワンピース姿のデステイニーが目の前に現れた。

『私の空間を経由してアイツの仮想空間にアクセスするよ、空見てっ！』

デステイニーが指さした方向を見ると、青空の一部分だけが暗くなっており空間には穴が開いている。

『あそこに飛んでっ！ あそこが入口なのっ！』

『分かったっ！』



機体のスラスターを噴かせて、花畑から飛び立つ。

デステイニーもふわりと浮かび上がって追従してくる。

そして2人が穴の直前まで来ると、飛燕も姿を現した。

『真様、全力でサポートさせて頂きます』

『……ああ、頼むよ』

『はい』

光の翼を翻して穴に飛び込む真とその彼を追うデステイニーと飛燕。

しかし穴に飛び込んでた途端、何かに叩きつけられたかのような衝撃が走った。

『くっ……い！』

その正体は電腦空間を構成するデータの塊。

まるで嵐の様にうねり、飛び込んだデステイニーに襲い掛かったのだ。

その奔流にも押し戻されないよう、スラスターと光の翼の出力を高める。

だが先に進むにつれて、真の身体にノイズが奔って歪む。

すぐに元に戻るが、またか別の箇所が歪む。  
先に進むに連れて、ノイズの頻度は高くなっていた。

『なっ、なんて情報の奔流……っ!?!』

『くうっ、真の意識データを保護するのが精一杯だなんて……っ!』

自機の背後にいる2人から声が漏れる。

「デステイニーと飛燕は現在、真の意識が霧散しないように意識データの保存を最優先している。」

「そうでなければこのデータの濁流の中で真の意識は霧散してしまい、彼の精神は破壊されてしまうだろう。」

『ぐっ……先に進めないっ!』

すでに頭部以外全てにノイズが奔っている。

「デステイニーと飛燕のデータ保護があつてこれなのだ。」

「これ以上進んだら、結果は目に見えていた。」

『まずいよ、真！このまま進んだらっ！』

『でも進まなきゃならないんだろっ！』

そう叫んで先に進む為にスラストターを噴かせる。

だが進んだ瞬間頭部にノイズが発生し、一瞬だけ、真の意識が途切れた。  
そして真は一気に押し戻される。

『真っ！』

『真様っ！』

『くっ………そおっ！』

体勢を立て直して、頭を振りつつ再びデータの奔流に立ち向かうがやはり先にはどう  
しても進めない。

『こんな所で………こんな事で立ち止まってられないんだあっ!!』

光の翼を再度広げた真が叫ぶ。

その時であつた。

——彼の耳に【声】が聞こえたのは。

『彼女を守るんだらう？ならこんなところで躓いている場合じゃないぞ、シン』

——いつも冷静で、だが確かに優しさを持つていた親友の声。

『ほーら、しゃきつとしなさいよ。背中、押してあげるわよ、シン』

——傷ついた自分を支えてくれた、大切な女性の声。

『シン、頑張つて。あと少しだから』

——かつて守ると誓つて守れなかつた儂い少女の声。

(……………!!)

3人の男女の声が確かに聞こえた。

決して幻聴ではない、見知った3人の声。

トンツ、と確かに背中を押された感覚があつた。

同時に身体に奔っていたノイズが一気に消えた。

『うおおおおおおつ!!!』

奔流に押し流されそうであつたデステイニーガンダム・ヴェステイジーは、その速度を一気に立て直して嵐を突っ切っていく。

『えっ、えっ!!?急にデータの保護が強くなつたっ!?!』

飛燕の困惑する声。

妹とは違い、何処か納得したような表情をデステイニーは浮かべていた。

『……そっか、真はいつも見守られてるんだね』

紅い光の翼が情報の奔流と言う名の嵐を突っ切っていくのを背後から見ながら、デステイニーはそう呟いた。

『全部俺が叩き切つてやるっ！』

まるで泣いてしまいそうなほどの悲しみと燃えたぎるような怒りが混ざり合った修羅の様な表情。

恋仲になる前も、なった後も彼のそんな表情は見たことがなかった。

蹂躪するかのようには、紅いMSはその巨大な剣を振り回して軍艦を両断していく。

一隻、二隻、三隻。

軍艦が次々と彼の手によって落とされていく。

最後に残った空母、その艦橋には先ほど、オーブでの惨劇の際に彼を助けた軍人の男性がいた。

だが彼はそれに気づかず、剣を振り下ろす。

『これで……最後だあつ！』

(つ、だめ、真っ！)

振り下ろされた剣は、男性のいる艦橋を容易く切り裂いた。

艦橋から広がる火の手はすぐさま空母を包み込み、燃料に引火。

爆発が洋上で起こり、その炎にMS「ソードインパルスガンダム」が照らされていた。

私の叫びは届かない。

これは過去の彼の記憶だと、ラクスは言っていた。

それはすなわち、知らず知らずのうちに恩人を彼自身の手で殺めてしまったという事だ。

(こんなの、ひどい……っ)

再び場面が移り変わる。

黒い機体から放たれたビームがインパルスガンダムを狙う。

両マニピュレータを破壊され防御が出来ないインパルスガンダムを、オレンジのモノアイのMSが庇う。

インパルスガンダムと同じようにマニピュレータを破壊されており、インパルスを庇うには自機を盾にするしかなかった。

庇ったMS〔グフ・イグナイテッド〕の動力炉付近にビームは直撃していた。

『ヴェっ、ヴェステンフルス隊長っ！』

『だーかーらー、ハイネだって……』

彼が隊長らしき男性に叫ぶ。

その直後、男性が乗ったMSは爆散した。

『ハイネエーっ!!』

(もういやあっ！)



もう見たくない、先程から彼の記憶はどれも凄惨で悲しみに溢れていた。

彼から教えてもらっただけで理解していたつもりだった。

だけど本当の意味で彼が経験してきた事を私はまるで理解できていなかった。

姿を消していたラクスが目の前に現れると同時に、あたりの風景が消え漆黒の空間に変化する。

『彼は今見た様にこの世界では決して経験する事のない凄惨な戦いを潜り抜けてきた戦士。シンの事を何も知らなかった貴女に彼を支えることが本当に出来ますか？』

「……………」

彼女の言葉に言い返せなかった。

そんな私を見て、ラクスは笑みを浮かべていた。

あざ笑うかのような冷笑だった。

『理解してもらえたようですね。貴女の様な小娘ではシンを支えることなど出来ませ

ん。貴女はここで消えてくださいな。精神が死ねば肉体も引つ張られて死にますので』

恍惚な表情を浮かべたラクスは手に出現させた拳銃で私を狙う。

彼女の言葉に以前、彼が言ってくれた言葉が脳裏に奔った。

——簪だから、俺は自分の気持ちに正直になれたんだ。ありがとう

そうだ。

確かに私は彼の過去を本当の意味で知らなかった。

けど彼を好きになったこと、この感情は間違いないんじゃない。

誰にも否定されたくないし、否定させない！

「……ってくれた」

『？ 何か言いましたか？』

「真は、私だから正直になれたって言ってくれた！好きだって、言ってくれたっ！」

ラクスに叫ぶ。

彼に好きだと告白された際に言ってくれた言葉。

本当に心から嬉しかった言葉。

「私は確かに彼の凄惨な過去を知らなかった。けどそれでも私は彼の事が好きっ！ アナタにこの気持ちちを否定なんかさせないっ！」

その言葉に、ラクスの表情が歪んだ。

『つ……アナタがいくら叫んだところで、この状況は変わりませんわ』

表情をすぐさま冷笑に切り替えたラクスは銃のトリガーに指をかける。

狙いは私の額。

トリガーが引かれる、その瞬間だった。

『うおおおおおおおおおつ!!!』

雄々しい咆哮と共に紅い光が私とラクスの間に飛び込んだ。

刹那、銃を持った彼女の右腕が切断され宙を舞う。

そして広がる紅い翼。

『「デステイニーガンダム・ヴェステイージュ」から広がる光の翼が柔らかく私を照らしている。』

当然、それに搭乗しているのは「最愛のヒーロー」だった。

『ごめん、ちよつと遅くなった』

「……ううん、大丈夫」

いつの間にか、涙が溢れていた。

けど溢れる涙を止められない。

先程までの凄惨な記憶から流れる悲しみの涙ではなく、彼が来てくれた事が心の底から嬉しいのだ。

『……さっきの嬉しかった』

「えっ、聞こえてたのっ？」

それに一瞬ドキリとして、自分でも顔が赤くなっているのが分かる。少し恥ずかしそうにしている彼が苦笑していた。

『そつ、そんな!?!何故貴方が、シン、何故ここに?!?』

真に切断された腕を庇いながら、ラクスが取り乱す。

『彼女を助けに来た。それ以外に理由なんてあるわけないだろ』

『真つ、電脳世界から脱出準備できたよっ!』

『こちらです、真様、簪様っ!』

見たことがない2人だけど、真の味方だというのは直感で理解できた。

いまだ取り乱しているラクスに向かってビームライフルを展開して放つ。

それを後方に下がってラクスは避ける。

切断された右腕は、周囲からデータが集まって再生していた。

『何故、何故ですのっ！何故、シン、アナタはそこまでしてその女を……っ!!』

2人の手をとった私は意識が薄れていくのを感じた。

おそらく同じように感じているであろう真が口を開いた。

『今度こそ絶対に、守るって決めたからだ』

そう確かに告げたのと同時に、私たちの意識は途絶えた。

デステイニーが作り出した光の繭が、開かれる。

紅い光の翼と共に、青い光の翼が羽を広げた。

現れるのはデステイニーと飛燕。

搭乗者である真と簪の意識は無事戻っていた。

『……真、ありがとう』

『……っこそ。シン・アスカとしての記憶を見た上で、ラクスにああ言ってくれたのが本

当に嬉しいんだ』

少し照れたように彼が簪に答える。

『……やっぱり聞こえてたんだ』

『あー、うん。まあ、それは置いといて……だっ！』

デステイニーの光の翼が翻り、まるでビームシールドのように変化する。

単一仕様能力によって操作されたそれが、強大な光の濁流を受け流し、逆に翼へと還元していく。

どす黒い赤、まるで血の様な紅の翼を開いてビームを放ったホワイトネス・エンプレス。

相反して宝石の様な煌びやかな紅の翼を翻すデステイニーガンダム・ヴェステイ  
ジ。

『何故、何故、何故、アナタは私のモノにならないのっ!? 世界は私のモノ、私は世界のモノ、それはこの世界でも同じなのっ！』

武装を構える瞬間、投影ディスプレイに新たな武装の情報が提示された。それはデステイニーの近接格闘武装、アロンダイトの画像であった。ただ唯一、異なっているのは実体刃部分は分割展開され、刀身に組み込まれている。

〔アロンダイトVer. 2〕

デステイニーが提案してきた武装はディスプレイ上でそう表示されている。

このタイミングで新たな武装を発現させた愛機を信じ、真は新たなアロンダイトを展開させる。

展開と同時に刀身から溢れだす光が周囲を照らす。

その溢れ出した光は全てビームであり、機体の全長程のビーム刃が形成されている。

アロンダイト全体が完全にビーム発振器となっているのだろう。

『アンタの思い通りにならない。俺は彼女が好きだ、だから守るって決めた』

アロンダイトの刀身に背部V.Lから溢れる光が集い、紅い光の刃となる。



今までのアロンダイトとは異なり、機体全長ほどのビーム刃が構成されていたため、さらに巨大な剣に変化している。

強いて言うならば超過オーヴァーロード駆動。

『アンタの想いは確かに強いだろうさ。けどアンタは自分の意志を貫くことしかしない。オリジナルと同じで周りを見ようともしてない』

新しいアロンダイトを振りかぶる。

『一人で出来ることなんてたかが知れてる。誰かと一緒に考えたり意見を言い合ったりするのが人間なんだよっ！だから……』

デステイニーのすぐそばで「バルムンク」を展開した飛燕がその大剣を構えた。

『俺達は二人一緒に前に進むっ！』

『行こう、真っ！』

『ああ、行くぞ、簪っ！』

それぞれの光の翼を翻して、デステイニーと飛燕はホワイトネス・エンプレスに向かっていった。

## PHASE 8 妄執の果て

真が簪を電腦空間から救出したのとほぼ同じ頃。

地上 絶対対空砲〔アフタヌーン・ブルー〕敷設地帯

アフタヌーン・ブルー周辺に待機していた、狙撃班は突如現れた「敵対勢力」と交戦状態に移行していた。

それはかつてIS学園を襲った「無人機」達、初期GATシリーズ〔ストライク〕〔イージス〕〔ブリッツ〕の混成部隊であった。

その数はISのセンサーの探知範囲内だけでも40を越えていた。それに加えてさらに増援も送られてくる始末だ。

現在、アフタヌーン・ブルー本体は〔ドレッドノートH〕の分離型アルミューレ・リュミエールユニット〔ハイペリオン〕が展開する光の壁によつて守られている。

だが無人機たちの数が多く、ALの外側に展開しているクロエと楯無だけではどうしても漏れが生じてしまっている状況である。

数機の無人機たちはALを突破しようと、ビームライフルをALに放っており、ド

レッドノートHのシールドエネルギーを削り続けていた。

そのうちの一機をクロエのXアストレイはビームライフルで背後から狙撃して撃破する。

すると右方から別のストライクが高速で接近し、ビームサーベルで自身を狙っていることを、ハイパーセンサーで感知。

すぐさま、スラスターを噴かして回避し、逆にビームライフルで反撃する。

反撃は避けられてしまったが、それは計算内であった。

ストライクの後方から接近してきたのは楯無の駆る「霧纏の淑女」、その手には「蒼流旋」が握られていた。

そのままの速度で背後からストライクを貫いて、無力化する。

『くうっ、数が多いですっ!』

『クロエちゃんっ、後ろよっ!』

自身を狙っていた「ストライク」を「蒼流旋」で貫いた楯無の叫びに、反応したクロエのXアストレイはその特徴的なX字のスラスターを噴かして、背後から飛来したブリッツのランサーダートを回避する。

A M B A Cとスラスト制御によって体勢を立て直すと同時に、背部ドラグーン2基と有線式ドラグーン「プリステイス ビームリーマー」を射出する。

『落ちてっ！』

ブリッツがドラグーンを迎撃しようとレーザーライフルで狙撃しようとするが、そのマニピュレータを下方から飛来したビームが貫いた。

そしてそのまま、計4機のドラグーンが発射したビームによってブリッツは貫かれ、爆散した。

下方から飛来したビーム、それは光の壁の内部からドレッドノートHがビームライフルで狙撃したものであった。

現在、ドレッドノートHはアフタヌーンブルーを覆うように展開しているALを張り続けるため、動けない。

だが、最低限の援護として、ビームライフルで狙撃し、先程から数機の敵機を落としていた。

モノフェーズ光波シールドであるALは内部からの攻撃はそのまま通すのだ。

『クロエ、周囲に気を配るんだ。まだくるぞっ!』

『カナード様っ、分かってます、分かってますが……っ!』

カナードからの通信を新たに別角度から飛来したビームが遮断する。放ったのはイーゼス、その傍には新たに4機のイーゼスとブリッツ。

アフタヌーンブルーの北方から次々に無人機達が飛来してくる。

(どういふことだ、何故この場所が奴等に割れているっ!? ちいつ、今はとにかく對抗するしかない……っ!)

浮かぶ疑問に対して考える暇もなく、カナードはライフルで迫る敵機を撃ち落とす。

ドレッドノートのハイパーセンサーが狙っていた一機のイーゼスが【高速巡航形態】に変形していることを知らせる。

そしてそのイーゼスがクロエのXアストレイに向かって突っ込んでいくことに気づいた。

『クロエッ! 背後……ぐっ!?!』

叫ぶと同時に、展開したALを激しく襲う振動。

その正体は、ALを攻撃していた無人機の一部が「自爆」したのだ。

一機程度の自爆ならば問題はない。

だが数機一斉に自爆したため、肉眼でも分かるほどにALの光の壁が揺らいだ。

ドレッドノートHのシールドエネルギーも大きく減少する。

『カナードさ……きやあつ?!』

カナードの叫びに反応したクロエであったが、それは明確な隙となってしまうた。

高速巡航形態に変形したイージスのクローによって機体毎、捕縛されてしまう結果になってしまったのだ。

『クロエちゃんっ!』

楯無が叫びと同時に、「霧纏の淑女」に赤い翼状のユニットが接続され、纏っているア  
クア・ヴェールの色が変化した。

霧纏の淑女のパッケージ、「麗しきクリースナヤ」が接続されたのだ。

そして、クロエを捕縛したまま加速を続けるイージスに向かって、「セックザベック【沈む床】を発動。

イージスを強制的に空間に引きずり込むことで、機動を停止させる。

その効果範囲はイージスだけではなく、周囲の無人機にも効果が及んでいる。

『これで逃がさないわよっ！』

蛇腹剣「ラストティー・ネイル」を展開し、イージスを狙う。

アクア・ナノマシンが一点に集中し、攻性形成することで一撃の威力を高める【霧纏の淑女】の特技である「ミストルテインの槍」は、クロエを巻き込みかねないこの状況では使えない。

ラストティー・ネイルを振りかぶる。

その瞬間、【霧纏の淑女】のハイパーセンサーが、イージスの熱源反応が高まっている事を知した。

そこから推測される結果は、一つだけだ。



『自爆する気っ！ させな……っ!?!』

ハイパーセンサーが拾ったのは背後からの高エネルギーの反応。

【沈む床】の範囲外でミラージュココロイドを使用して姿を消していた【ブリッツ】の放ったレーザーだ。

しかもその射線は自身とクロエ、イージスを巻き込むように一直線であった。まるで楯無がクロエを救うために行動することを【読んでいた】ようであった。

『ぐっ！』

霧纏の淑女が文字通りその機体を盾にして、レーザーを防ぐ。

現在の霧纏の淑女は【麗しきクリースナヤ】が接続された高出力状態、アクアヴェールでこの程度のレーザーは防げる。

だがそのせいで、クロエの救出が遅れた。

『しま……っ!?!』

『クロエッ!』

組み付いたイージスから閃光が広がる。

それとほぼ同時であった。

イージスの触腕にも見えるマニピュレータ全てが【閃光】によって切断されたのは。

『っ、あれは……っ！』

霧纏の淑女が【単一仕様能力】を発動させたのと同時、射撃体勢のまま待機していたセシリアはその範囲外にいた【ブリッツ】がミラージユコロイドで姿を消したのを目撃していた。

『まさか、このままではっ！』

そこから予測される結末を予感したセシリアは、すぐさま【ダイヴ・トウ・ブルー】のチエルシーと【サイレント・ゼファイルス】の搭乗者【ジニン中尉】にチャンネルを繋げる。

すぐそばで【BT粒子】の供給を続けているこの二機は敵機の襲撃中でも動けずにい

た。

『チエルシー、ジニン中尉、聞こえていますかっ!』

『はい、お嬢様』

『えっ、ええ、オルコットさん』

二人がセシリアに返答する。

『二人にお願いがあります。ビット兵器のコントロールを私に下さい、今すぐにつ!』

セシリアが二人にそう告げる。

彼女の提案はISの常識からしてみれば耳を疑うものであった。

特にBT兵器が搭載されているBT系列の三機は搭乗者ごとに細かいセッティングが施されているのだ。

『いつ、いくらBT系列の機体だからって、個人用にセッティングされたビット兵器を操れるわけがないわっ!』

当然、ジニン中尉はその提案を却下する。

だが、セシリアも引かなかった。

『いえ、やらなければならぬのですっ！大切な友人を守るためにつ！何も言わずに私にコントロールを渡してくださいっ、お願いしますっ！』

炎の様に熱い意志。

それはチエルシーとの一騎打ちの際にも見せた、彼女の凄みを纏った意志。

それに感化されたのか、ジニン中尉がやけっぱちになったかのように叫んだ。

『……分かったわよっ、どうなっても知らないわよっ！』

最初から渡す気であつたチエルシーと、ジニン中尉がビット兵器の展開操作を行う。

サイレント・ゼファイルス、ダイヴ・トゥ・ブルーのビット兵器、そして元々ブルー・ティーズに装備されているものと合わせて十基を超えるビットが展開された。

二機の使用制限が使用許諾に変更されたことを確認、コントロールが全てセシリアに

譲渡された。

『くうっ……っ！』

思わず声が漏れるほどの負担。

最適化されていないビットの負荷か、鈍い頭痛が奔る。

展開され、宙に浮いているビットの全てがユラユラと不安定に揺れている。

同時制御と偏向射撃フレキシブルをマスターした彼女で、これなのだ。

並の人間では到底扱いきれないほどの空間認識能力が必要となる。

だが、それでも彼女はくじけない。

少しだけ瞳を閉じて祈る。

(お父様、お母様……私に大切な人を守る力を……っ！)

カッと瞳を開くと同時に、セシリアは迷いなくビット兵器に射撃の命令を繰り出した。

『っ！』

突如、自身を捕縛していたイージスのマニピュレータが閃光と共に破壊された。

それを確認したクロエがすぐさまイージスから離れる。

クロエに続いて、楯無もイージスから離れる。

二人の離脱に数瞬遅れて、イージスはその身を破裂させ、閃光に包まれ爆散した。

『今のは……っ！』

『レーザー……セシリアちゃんねっ！』

モノフェーズ光波シールドの内側から幾条もの閃光が絶えず、放たれていた。

その様はまるで光の洪水、いや、嵐のようにも見える。

全てがレーザーが偏向し、生きているかのように軌道を変えて無人機たちを貫いてく。

【沈む床】を発動して無人機たちを拘束していた為か、易々とレーザーの嵐に貫かれていく。

『凄まじいわね、彼女……いずれ、国家代表になったときは戦うのね、今から楽しみだわ』

楯無が脱帽気味に呟く。

再度増援の反応をセンサーが拾うが、そのたびにレーザーが発射され、偏向射撃によつて落とされていく。

『これは……っ！』

『カナードさん、AIは問題ありませんか？』

セシリアからの通信が繋がる。

彼女の周りに浮遊する十基以上のビット兵器と、現状を把握したカナードはふつと笑みを浮かべた。

(これほどの偏向射撃と同時制御が可能とはな……空間認識能力は【キラ・ヤマト】や【叢雲劾】にも並ぶ、いや超えているかも知れんな)

『ああ、出力を高めて安定した。クロエを助けてくれたこと、礼を言う』

『いえ、友人を助けることは当然のことです。お気になさらずに』

笑みを浮かべて彼女が返す。

『十基以上、しかもいくら系列が同じとはいえ搭乗者用のセッティングもされていないビットでこれほどの戦果を上げるとは。正直脱帽したぞ、セシリア』

『最高の褒め言葉ですね……あら、ところでカナードさん。今名前でお呼びいただけましたか？』

『別に理由はない。ただそう呼びたくなっただけだ……嫌ならばやめるが？』

『いえ、これからはセシリアでお願いしますわ』

嬉しそうにセシリアが答えて、通信が切れる。

同時に通信が繋がる。

相手はクロエだ。

その表情は不機嫌さで溢れていた。

ジト目かつ膨れっ面で、カナードに告げる。



『……カナード様の浮気者』

『……はあ?』

カナードは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

その声になんだなんだと注目を集めてしまったのか、ごほんと咳きばらして誤魔化す。

『どうせ私なんて……ドラグーンの操作じゃセシリア様に敵いませんし、スタイルだって彼女には勝てませんもん』

(……いかな、面倒な状態になっている。音声をカットしておくか)

クロエの愚痴通信の音声をカットし、少しだけため息をつけてカナードは思考を切り替える。

口では適当に相槌と謝罪の言葉を打つことを忘れない。

(……この無人機の襲撃、誰かが意図して行ったのは確定だな)

無人機の行動が明らかに以前のものとは異なり、戦術的であった。外部からの干渉があつたに違いないとカナードは考えている。

（歌姫の騎士団以外にそんな連中がいるのか？ 情報が少ない。だがエクスカリバーの中に情報が残されている可能性はある。ならばデータの入手は可能か？）

いまだ、音声をカットした通信で愚痴を流しているクロエを無視して、思考の海にカナードは沈んでいった。

同刻。

英国上空数千m。

無人機のフリーダムとジャスティスの足止めの為残ったラキーナとアスランの戦闘も佳境に入っていた。

無人機フリーダムの特徴的な背部の翼が変形し、形態をフルバーストモードに移行する。

高出力ビーム砲、レールガン、全身に装備された火器から一斉攻撃するフリーダム系

列最強の技、フルバースト。

かつてのキラ・ヤマトは、この機能によって最強とも言われていた。しかし、現状は異なった。

『フルバーストは確かに強力だけどっ！』

対峙しているラキーナのストライクは、自身に向かってくる全ての射線を読み切っていた。

全身のスラスターとアポジモータを駆使してのAMBA C。

そしてすぐさまビームライフルでフリーダムを狙う。

『そっ！』

発射されたビームが無人機フリーダムのバラエーナを貫いた。

フリーダム系列の機体にとって特徴的な翼の一部分が爆発によって挽がれた。

瞬間、ラキーナの意識の中で紫の「S・E・E・D」が弾けとんだ。

広がる視界と感覚。

そのおかげで、フリーダムの「弱点」を正確に把握できている。

『ハイマツトモードに戻すまでのラグを狙えばっ！』

続けてストライクは背部の「フリーダムストライカー」をパージして別のストライカーパックに切り替える。

切り替えたストライカーパックは「ソードストライカー」であった。

『これでえっ！』

左腕のロケットアンカー「パンツァーアイゼン」を発射して、フリーダムの左腕を掴み上げる。

PS装甲搭載機であるフリーダムに、アンカー自体でダメージを与えることは出来ない。

だが、それがラキーナの狙いではなかった。

『いんのおおおおおっ！』

パンツァーアイゼンを自機に引き戻すことで、フリーダム の体勢を崩す。

フリーダムガンダムには砲戦形態のフルバーストモードと高速移動形態のハイマツトモードが存在しており、フルバーストモードの運動性、機動性はお世辞にも優れたものではなかった。

本来、このフルバーストモードの欠点を補う為に、ジャスティスガンダムとの連携が必須とされていた。

しかし、試作機として奪取したフリーダムには開発者であるユーリ・アマルフィの執念の塊ともいえる「ハイマツト・フルバーストモード」が搭載されていた。

ハイマツトモードとフルバーストモードの特性を併せ持った形態であるため、ある程度の運動性と機動性を確保できる。

キラ・ヤマトであったラキーナが好んで使用していた形態であるが、これまでの戦闘からラキーナはこのフリーダムにはハイマツト・フルバーストは搭載されていないと見極めていた。

その狙いは見事的中。

満足な機体制御も取れずに、フリーダムはパンツァーアイゼン毎ストライクまで引き

寄せられる結果になった。

そして、ソードストライカー最大の目玉でもある大型実体剣【シユベルトゲベール】のビーム刃を起動させながら振りかぶった。

『これでええええつ！』

機体制御を失ったフリーダムを大型実体剣【シユベルトゲベール】が切り裂いた。

機体の大部分に損傷を負ったフリーダムはアイカメラを点滅させながら、反撃の為にビームサーベルを展開する。

だが、その程度で今のラキーナは止められない。

フリーダムのビームサーベルを最小限の動きで回避、そのまま蹴りを叩き込んで吹き飛ばす。

続けてソードストライカーパックをパージ、別のストライカーパックへ換装する。

換装したのは【ランチャーストライカー】だ。

機体全長ほどもある【超高インパルス砲 アグニ】を構え、吹き飛ばされたフリーダムに照準を合わせる。

『フリーダム……さようなら』

かつての愛機にそう告げて、トリガーを引く。

発射された高出力のビームがフリーダムを飲み込んだ。

続けて二射、三射とアグニを放つ。

数度の爆発が起こり、フリーダムの残骸が落下していく。

ハイパーセンサーでも確認してみたが、フリーダムの反応は完全に消失していた。

『……本当にさようなら』

少しだけさびしそうな顔をしたラキーナであったが、そこに少々離れた空域で交戦しているアスランから通信が入る。

『ラキ、フリーダムは？』

『丁度倒したよ。アスラン、援護に向かうよ』

アスランが相対しているジャスティスの単純な機体性能と出力は、彼の操るインフィ

ニットジャステイスとほぼ同等であった。

また搭乗者であるアスランと比べるとラキーナの身体は未成熟である。

その為、アスランがジャステイスを引き離して、ラキーナはフリーダムを相手にしていたのだ。

『いや、その必要はない、こちらもう少しだ。それにラキ、君がフリーダムを倒したいと思うように、俺も自分の手でジャステイスを落としたい』

『……うん。なら待ってるよ、アスラン』

『ああ、待っていてくれ』

ラキーナへの通信を切ったアスランは、自身の目の前の敵、「ジャステイス」に視線を戻す。

無人機ジャステイスの右腕と右脚はすでにアスランの攻撃によって腕がれている。

対してアスランのインフィニットジャステイスに目立った損傷は見えない。

だがシールドエネルギーの残量は残り3割程度しか残っていない。

この状況になったのはアスランが使うビームサーベルに原因があった。

インフィニットジャステイスが持つビームサーベルは限定的に「零落白夜」を再現し



ている。

そのおかげでジャステイスのビームサーベルを一方的に切り裂いてダメージを与えることが出来ているのだ。

もちろん、劣化したとはいえ【零落白夜】、エネルギー消費は尋常でなく実戦仕様状態でもエネルギーが残り少なくなってしまうっている。

(エネルギーは残り少ない……だが、このまま押し切るっ！)

今のアスランに迷いなど一欠もない。

彼の戦闘能力をフルに発揮できる状態だ。

『うおおっ！』

イクニッション・ブースト

瞬時加速から零落白夜が発動したラケルタビームサーベルを振りかぶる。

流石に学習したのか、ジャステイスはそのサーベルを防ぐのではなく回避することを選択し、同じく瞬時加速で後退する。

『逃がすかあつ!』

ソリドウス・フルゴールを展開するジェネレータ、ビームブーメラン、ワイヤーアンカーを内蔵したビームキャリーシールド外装部から「EEQ08 グラップルスティンガー」を展開。

クロウが射出され、逃げるジャステイスの右腕を捕縛した。

奇しくも相手を捕縛する戦法はラキーナと同じであった。

だがここからは異なる。

インフィニットジャステイスの背部リフターである「ファトウム―01」を切り離す。

『行けっ!』

MSのインフィニットジャステイスとは異なり、ファトウム―01はサブ・フライトシステムではない。

だがスラスタ―類はファトウム―01に集まっており、突撃させることで相手を貫くと言う同じ用途で使用することが出来る。

グラップルスティンガーで体勢を崩され、動きを止められていたジャステイスの回避

は間に合わなかった。

ファトウムー01のビームラムがジャステイスの胴体を貫いた。

シールドエネルギーの大幅減少と、胴体を貫通させられたことにより機能不全が発生。

だがアスランの攻撃は終わらない。

ファトウムー01を射出すると同時に、本体であるインフィニットジャステイスも瞬時加速により、ジャステイスに接近していたからだ。

その手に握るのは零落白夜が発動しているラケルタバームサーベル。

『とうつ、でえあつー！』

ジャステイスの頭部を右脚部グリフォンビームブレイドで蹴り飛ばし、切断。

そのまま背後に回り、ラケルタバームサーベルを一閃。

ジャステイスの下半身を切り落とした。

下半身を切り落とされたジャステイスは機能を完全に停止、スラスタ―類が停止してP S装甲もダウンしていく。

『……終わったか、っ!？』

一息ついたアスランであったが、ガクンと自機を揺らす振動に意識を切り替える。

『っ、エネルギーが……っ!』

零落白夜を使用しつつ、全開の戦闘機動を行った為、残りのエネルギーが切れたのだ。P I Cもその機能を停止しつつあった。

今、彼がいる空域は英国上空数千m、生身で放り出されたら死は確定であった。

『まっ、まずい、このままでは……っ!』

『……全くアスラン、大丈夫?』

焦るアスランであったが、自機の上から声が響き、機体を誰かに支えられた。

当然、その誰かとは――

『らっ、ラキ……すまない、助かった』

そう、ラキーナであった。

アスランとの通信を終えた後、やはり援護に彼女は向かったのだ。

『まったくエネルギー切れだなんて……これじゃ真達の援護にも行けないね』

少しからかう様な口調でラキーナが言う。

『うっ、すまない。まさかここまで零落白夜がエネルギーを消耗するとは……』

『まあ、最低限私たちがするべきことは終わったからね。後は真達を信じるだけだよ』

『……そうだな、今の真ならば、大丈夫だな』

ラキーナとアスラン、2人は空を見上げた。

その先の宇宙で戦う、大切な仲間の事を信じて。

デステイニーガンダム・ヴェステイージュのV.Lユニットから真紅の光翼が広がり、その翼が機体に莫大な推力を与える。

『運命を……斬り開くっ!』

そしてただ加速しただけではなかった。

加速するデステイニーの軌道上にはつきりと、デステイニーの【残像】が残っている。

(これはあの時と同じ、ミラージユコロイドの残像……?)

簪はこの残像に見覚えがあった。

飛燕完成時のデモンストレーションの際、真が自分に使ったモノと同じだ。

いや、残像の完成度ならば当時とは比べるまでもなかった。

(ハイパーセンサーを完全に惑わしてるっ、それに残像に使うミラージユコロイド粒子量を増やしてるっ、これならっ!)

ミラージユコロイドが最も影響を与えるのは肉眼よりも【精密機械】である。

真と簪は当然ながら肉眼であるが、ラクスはAIであるため、ISの代表的な機能で

あるハイパーセンサーと機体各所のセンサーで周囲を知覚している。

当然、ホワイトネス・エンプレスにも「ミラージュコロイドデテクター」は装備されているが、この装置が感知できるのは、ミラージュコロイドを使用している機体が近くにいる事がわかる程度のものであり、使用している機体の正確な位置までは特定できない。

よつてこのデステイニーの攪乱行為の効果は非常に有効なものであった。

攪乱行動を続けるデステイニーからプライベートチャンネルが飛燕に繋がる。

『簪、ヤツからの攻撃は全部避けてくれ、じゃないとまたあの「能力」に囚われる可能性がある』

『うん、分かった』

『それと、これからの作戦を伝えておく。内容だけど……』

ラクスを落とすための作戦を真は簪に伝える。

内容を頭に刻み込んだ彼女は頷いて答える

『……分かった。あわせるよ、真』

真から作戦にそう返すと、通信は切れた。

後は回避と牽制を続けつつ、タイミングを逃さないよう気をつけるだけだ。

『質量を持った残像とでも言うのですかっ!?!』

現在、ラクスの視界とセンサーはミラージュコロイドによって惑わされ、複数のデステイニーが襲い掛かっているように見えている。

だがこの程度ならば対処は充分可能であった。

『ですがこの程度の円舞曲で惑わされませんわよ、シンツ』

ミラージュコロイドデテクターの出力を低下。

ハイパーセンサーの機能を熱源反応と動体感知に限定することで、高速機動を続けるデステイニーを正確に捉えて高出力ビームを放つ。

同時にドラグーンも展開、半数がデステイニーに、半数が飛燕に向かっていく。



『……っ！』

デステイニーの【運命ノ翼】を発動。

迫るビームは全て、VLユニットに吸収され、デステイニーはさらにその機体速度を高める。

追いつがっていたドラグーンを全て振り切り、再度分身を展開する。

『ビツトツ……でもこれくらいならっ！』

飛燕も同じくVLユニットの出力を高め、高速機動に移行する。

減速させないようにバルムンクを斬撃モードから砲撃モードに切り替えて、ビームを放つ。

『っ、小癩なっ……っ！』

ホワイトネス・エンプレスへ着弾する直前に、見えないフィールドに弾かれるように、ビームは拡散された。

『ゲシユマイティツヒ・パンツァー』が装備されているホワイトネス・エンプレスは、この攻撃でダメージを受けることはなかった。

だがそれは簪も理解している。

この攻撃は単なる陽動である。

『もう一度電腦空間に……っ、シンっ！』

ドラグーンを介して再び【単一仕様能力】を発動させようとしたラクスであったが、背後から急接近してくるデステイニーの反応を捉え振り返りつつ、能力の対象を真に変更する。

『やはりアナタはこの小娘を守るっ！ならば直接、打ち込んで差し上げますわっ！』

大型マニピュレータが【手刀】の様な形状を取ると、ビームが発生。

発生した【ビーム手刀 カラミティエンド】を迫るデステイニーに叩き込む。

だが、カラミティエンドを叩き込んだデステイニーはまるで霞の様に姿がぶれ、消えていった。

『なっ!?!』

洩れるラクスの驚愕の声、だがデステイニーの攻勢はそれだけにとどまらなかった。周囲に残っているデステイニーの残像が一斉に、ホワイトネス・エンプレスに襲い掛かったのだ。

『こっつ、これは質量を持った残像が……動くっ!?!』

(これが真の作戦……【単一仕様能力】の応用、ミラージュコロイドに使っているエネルギーを能力で操作して、ミラージュコロイドを操作する。それはつまり【残像を動かす】ってこと……!?)

真が先程、簪に伝えた作戦。それがこのミラージュコロイド操作による【残像操作】だ。

デステイニーに装備されているミラージュコロイドは、残像を残す機能が搭載されている。

しかし今のデステイニーには発現した【単一仕様能力】が備わっている。

ミラージコロイド粒子を活性化させるエネルギーを単一仕様能力で操作することで、残像を一箇所に止めるのではなく、動かす。

もはやこれは【残像】ではなく【分身】ともいえるだろう。

かなりの精密なエネルギー操作技術が必要ではある。

だが【S. E. E. D.】を発動させ、全ての感覚が鋭敏になっている今の真ならば可能である。

いや、S. E. E. D. の発動の有無など些細なことであろう。

——真は誰かを守るとき、その力を最大に、限界以上に発揮するのだから。

『くっ、こんな事では……っ！』

襲い掛かるステイニーの【分身】達。

ビーム手刀で切断し、霧散させていくが、ホワイトネス・エンプレスは確かに翻弄されていた。

『うおおおおおおおおおおおおおっ！！！！』

デステイニーが新たに発現した「アロンダイトVer. 2」を構え、突っ込む。速度は現在のデステイニーが出せる最大戦速。

まるで宇宙の闇を裂く流星のごとく、デステイニーはホワイトネス・エンプレスに突貫を仕掛ける。

『しま……しま……』

分身達への対処のせいで、ホワイトネス・エンプレスの動きは止まっていた。迫るデステイニーに対して回避と迎撃は不可能であった。

『これで終わりだあああつ!!』

機体の中心部を易々と、アロンダイトは貫く。

その一撃は確かに、ホワイトネス・エンプレスのコアを貫いていた。だがまだ終わらない。

ホワイトネス・エンプレスの背後から竜殺しの名を冠する大剣を振りかぶった【飛燕】が迫ってきていたのだから。

『簪っ！』

『うんっ！』

バルムンクが振り下ろされ、ホワイトネス・エンプレスの背部ユニットであるエンプレスユニットが破壊される。

致命傷を与えたことを確認し、デステイニーと飛燕は互いの得物を引き抜いて、後退する。

ホワイトネス・エンプレスからはバチバチと火花が散っており、もはや死に体であった。

『……アア、なぜ、貴方は、ワタクシのモノにならない、ノ？』

『……アンタはオリジナルと同じだ。他人を道具としてしか見ていない。そんなヤツのものなんかは俺はならない』

明確な拒絶の言葉をディスプレイに映るラクスに告げる。

その言葉に、ふと笑みを浮かべる。

その笑みは、オリジナルラクスが死の間際に見せたものと全く同じであった。

同時に、別の空間投影ディスプレイが立ち上がった。

確認するとデータが2つ送られてきている。その配信先は目の前のホワイトネス・エンプレスからだ。

『これは……?』

『やはりアナタは素晴らしい……私からの贈り物ですわ、それヲどう使うカはお任せします……ワ』

そう告げて、ホワイトネス・エンプレスから繋がっていた通信が切れる。

目の前の実機もガクンと力なくマニピュレータが垂れ下がる。

残っていたドラグーンも機動を停止し、慣性のまま宇宙を漂っていた。

『終わった……の?』

『ああ、終わったみたいだ……ふう』

大きく深呼吸して、汗をぬぐう。

限界を超えた機動を続けていた為か、滝の様な汗だ。

以前に比べて身体への負担が少ないのは、耐G訓練を続けていた賜物であろう。

『その機体、どうする?』

簪も同じように汗をぬぐいつつ、真にたずねる。

機能停止したホワイトネス・エンプレスの事だろう。

それに答えるように、真はテレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔を展開した。

『破壊する。残ってちゃいけないものだしな、離れててくれ』

コクンと簪が頷いて少しだけ離れたのを確認してトリガーを引く。

ホワイトネス・エンプレスは、発射された高出力ビームに飲まれていく。

元々致命傷を負っていた機体が耐えられるわけもなく、爆発して宇宙に散った。

『……よし、後はエクスカリバーだけだ、簪、エネルギーは大丈夫か?』

『うん、エネルギーはまだ大丈夫。真も大丈夫だよね』



『ああ、一夏達は大丈夫かな……つつと』

エクスカリバーに向かった一夏達にチャンネルを繋げる。

少ししてからチャンネルが開く。

ディスプレイに映るのは、見知った親友の顔。

『一夏、生きてるか？』

『生きてるって！真っ！そっちは終わったのか！』

『ラクスは倒した。エクスカリバーにはまだとりつけてないのか？』

『ああ。エクスカリバーからのレーザー攻撃が激しすぎて……うお、千冬姉がレーザーをブレードで切り払った……』

『射線を完璧に読めば出来ないことはないけどさ……千冬さん、腕は相変わらずだなあ』  
世界最強のブリュンヒルデの名は伊達じゃないなど、改めて認識した真が一夏に告げる。

『俺達もそっちに向かう、エクスカリバーからエクシアさんを救出しなきゃ、今回の作戦

は完了とは言えないからな』

『分かつてる！座標のデータを送るから頼むぜ！』

『ああ、すぐ行く』

一夏から座標データが送られてくる。

『データは確認した。そっちに向かう』

『おう』

一夏の返事を確認して通信を一旦切る。

すぐそばに寄り添っていた飛燕の簪に、振り向いて告げる。

『エクスカリバーはまだ攻略できてないみたいだ。座標データはもらったから行こう』  
『うん、分かった』

簪の返答に真も頷いて答えた後、二機は背部VLユニットを起動。

輝く紅の翼と蒼の翼を翻し、宙域を離脱していった。

## PHASE 9 聖剣が折れる刻

『ちっ、全身がレーザー砲の塊なのかよっ！』

飛来するレーザーを零落白夜のシールドで無効化しながら一夏が叫ぶ。

先程からレーザーの合間を縫って、エクスカリバー本体に取り付こうとしているが迎撃のレーザーの嵐にチャンスをとことく潰されている為、愚痴をこぼす。

『以前戦ったデストロイとかいうISに似ているな。こちらが先かもしれないが』

一夏の愚痴にラウラが返し、成程と一夏が頷く。

『あの巨大なISかあ、でも大きさはこっちのほうが大きいね。真が言ってたMAって機種と同じなのかな』

『どうだろうな……シヤルロット、エネルギーの補給は完了したぞ』

『うん、ありがとう、箒』

紅椿の【絢爛舞踏】によって機体のエネルギーを補給したシャルロットが返事をする。

『で、どうすんのよ、一夏。このまま膠着状態じゃジリ貧なのはわかってるわよね？』  
『そりゃそうだけど……』

一夏から見ても状況は膠着している。

この膠着を打破するには何か切欠がある、とそこまで考えた時であった。  
白式のハイパーセンサーが下方から高速で接近する2つの反応を捉えた。

『この反応は……来たか、飛鳥に更識っ！』

迫るレーザーを次々にブレードで切り払うという神業を披露しつつ、千冬が叫ぶ。

高速接近してきた2つの反応、それは【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】と  
【飛燕】であった。

『遅れてすいません』

『いや、いい。そちらは問題なく終わったようだな』

『ええ、まあ。あれがエクスカリバーか……実物を見ると、やっぱりMAみたいだな』

作戦説明時に画像データによって把握はしていたが、やはり自身の記憶にあるMAが一番近い。

『飛鳥、そのMAと戦闘経験があるお前の意見を聞きたい。エクスカリバーの何処にエクシア・カリバーはいると思う?』

飛来するレーザーをAMBACで避けながら、真は再度エクスカリバーを観察する。

『……おそらく、機体中心部。ここですね、コックピットみたいに見えます』

C・E.では一般的であった機体中心部のコックピットハッチらしき箇所を画像データで皆に転送しながら回答する。

千冬達ではただの装甲のつなぎ目にしか見えないが、真から見ればMSやMAのコックピット周辺の構造と酷似していた。

『よし、分かった。各機、これより作戦を伝える』

千冬のラファールから全機にチャンネルが開く。

『飛鳥、お前のIS、ガンダムで能力でレーザーを吸収して織斑と共に突っ込め。残り全ては援護だ』

千冬の作戦は真の予想の通りであった。

エクスカリバーの主砲ならともかく、迎撃用のレーザー程度の出力ならば問題なく今の実戦状態のデステイニーで無力化できる。

そして白式の零落白夜をコックピット周辺に叩き込めれば、エネルギーを無効化してシステムに不具合を起こすことが可能だ。その隙について救出対象を救い出せばいい。

『了解しました』

『俺もか……よしー！』

一夏が気合を入れるように雪片式型を構える。  
それを見て笑みを浮かべて真が確認した。

『ついてこれるか？』

『へっ、当然だっ！』

マニピュレータをコツンとぶつけ合った二機。

真と一夏はニツと笑い合う。

その様子を見て箒達と簪は胸をときめかせていたがそれは割愛しておこう。

『アステイニーガンダム・ヴェステイージュ、飛鳥真……』

『白式・雪羅、織斑一夏……』

『『行きますっ！』』

二人のコールが重なり、共に機体のスラスターを全開で噴かせて、エクスカリバーに向かっていく。

『一夏、レーザーは全部俺に任せてくれっ！』

『分かってるっ、頼むぜ、真っ！』

白式を守る為と単純な速度差からデステイニーが先行し、その背後を白式が追いかけていく形で二機はエクスカリバーへの距離を縮めていく。

迎撃の閃光がデステイニーに迫る。

だがその全てがV Lユニットから広がる光の翼に吸い込まれていく。

『この程度で俺達を止められると思うなあっ！』

『よっし、取り付けたっ！』

光学兵器に対するデステイニーの能力の相性もあり、デステイニーと白式は問題なくエクスカリバーに取りつくことができた。

そして先程真が示したポイントを見つける。

『ここだ、コックピットだ！』



『よしっ、離れててくれ、真っ！』

白式が【零落白夜】を発動し、コックピットと思われる箇所に向かって雪片を振り下ろす。

流石に装甲が厚かったのか完全に切断はできなかった。

だが、零落白夜の効果でエネルギーの供給が経たれたのか、歪んだハッチ部分がわずかに開かれています。

それを確認した二機がマニピュレータで無理やりこじ開ける。

開いたコックピットの中、まるでにある種の彫像にも見える形で一人の少女が機械に組み込まれていた。

そしてその周りでぐったりと倒れている女性が二人。

真にも見覚えがあった。

金髪の方はアメリカの代表候補生【ダリル・ケイシー】、もう一人はギリシャの代表候補生【フォルテ・サファイア】

完全に意識を失っているようだ。

コックピットはすでに開かれているが搭乗者保護が機能しているようで、問題はな

『この子がエクシアさんか……んで、この二人は学園から消えてた亡国のスパイだけ』

真が楯無から以前聞かされた事を思い出す。

この二人はオリジナルラクスが倒れた数ヶ月後、丁度今年の秋ごろに学園から姿を消していたのだ。

楯無曰く、ダリル・ケイシーもといレイン・ミューゼルとフォルテ・サファイアはデキていたらしい。

何故こんなところにいるかは分からない。

二人の頭部には脳波測定デバイスのようなものが付けられている。

おそらく切り捨てられ、生体CPUの補助としてここに閉じ込められたのだろう。

『……ひでえつ。こんな人のやる事じゃないだろうっ！』

ああ、と真も素直に同意する。

脳裏に浮かぶのはステラを代表するエクステンデット達。

特殊な薬物や処理を受けなければ日常生活も送れない彼等、今エクシアが陥っている

のは彼らと同じ状況だ。

『真、彼女を引き離さないとっ!』

『ああ、分かっている。ただちよつと待っていてくれ……束さん、聞こえますか?』

一夏の提案に待ったをかけ、真はチャンネルを束につなげる。

『うん。聞こえてるよ、あつくん』

『束さん、さっき送った【データ】って解析できましたか?』

『データ?』

一夏が疑問の声を上げる。

『ああ、ラクスを倒した時に手に入れたデータなんだ』

ホワイトネス・エンプレスを撃破した後、AIラクスより送られた2つの【データ】それを真はここまで来る間に束に送信していたのだ。

『うん、2つとも解析できてるよ。1つは彼女、エクシアちゃんに関するデータだったよ』

『……助ける事はできますか?』

『もちつ!意識を失わせる薬物は使用されているけど、C・Eのエクステンデットみたいな劇薬は使用されていないみたいだよ。安心して』

真の懸念事項を予測していたのか、束がそう告げる。

ほっと一息ついた真を見た一夏が束に尋ねた。

『どうすれば、助けられますか。束さん』

『いっくん、君の零落白夜を発動させた雪片をコックピットに突き立てて。そうすればシステムに不具合を起こせる。搭乗者保護もたぶん同時に切れるから、彼女をどっちかの機体で保護するのを忘れないで……後、裏切った二人の回収もよろしく』

『分かりました、デステイニーで保護します』

『よし、なら早速……っ!』

デステイニーがエクシアに寄り添う形で待機しているのを確認した一夏が、再度零落

白夜を発動させる。

そしてその刃をエクシアに当てない様、コックピット上部を狙い突き立てた。

ガクンツと、エクスカリバーが不穏な振動を起こし、今まで放っていた迎撃用のレーザーが止まる。

それと同時に埋め込まれていたエクシアの身体のロックが解除され、彼女が解放された。

すかさずデステイニーで三人を保護。

機体の保護機能の対象に含める事で宇宙空間の影響から守る。

『おっけい！成功！』

『よしっ！』

一夏と束の歓喜の声が響くと同時に、保護したエクシアが瞳を開いた。

『……(ハハ)はっ。』

『君のお姉さんの友達だ、助けに来たよ』

そう英語で告げて、真が微笑む。

それに弱々しいが、確かに笑みをエクシアは浮かべる。

『お姉ちゃんが……ごめんなさい、少し疲れちゃった』

『今は俺達に任せて。ゆっくりとお休み』

『……うん、ありがとう』

そう言つてエクシアは瞳を閉じ、意識を失う。

『残るはこのデカブツだけだな』

『ああ、けどちよつと待ってくれ。一夏、エクシアさんとこの二人を頼む』

『ん、ああ』

真からエクシアとおまけの二人を託された一夏が三人を抱え上げつつ、どうして？と首を傾げた。

真はデステイニーのV.Lユニットやマニピュレーター部分だけ解除した後、コックピット内に入り込んでコンソールを起動させる。

システムはまだ生きていた。

『東さん、今からエクスカリバーに残ってるデータをありつたけそちらに送ります。サルベージに少し時間がかかりますが、解析の方頼みます』

『まっかせて！』

東の返事を確認した真はコンソールを操作しだす。

コンソールの画面自体は空間投影ディスプレイである点を除けば、C・E. で使用されてきたモノと大差がなかった。

その為、馴れた手つきで情報を引き出していく。

その際、一夏がタイピングはやつ、と呟いていたがそれは無視する。

そして数分で残っているデータを全て引き出し終えた真は、それらすべてを東に送信する。

『結構な量があるね、ちよつと解析に時間かかりそう』

『これは後で大丈夫ですね。まずはエクスカリバーを破壊しないと』

コックピットから外に出た真は再度デステイニーを完全展開する。

『うん。じゃあ、カナ君とセシリアちゃんに繋ぐね』

『お願いします』

真の返答の後、束の操作で別ディスプレイが開かれ、狙撃班であるセシリアとカナードにチャンネルが繋がる。

繋がったのだが、表示されたのはクロエに頭をポカポカ殴られているカナードの不機嫌そうな顔と、セシリアの困ったような顔であった。

『カナード様のバカバカバカつ、朴念仁つ、自分と歩いてくれって言ったじゃないですかっ！嘘だったんですかっ！聞いてますかっ、聞いてますよねっ!?カナード様っ！耳引つ張つちやいますよっ！もーっ！』

『……えーつと、何してんの?』

『……くーちゃんが壊れた?』

純粋な疑問から真は、苦笑していたセシリアに尋ねてしまった。



束も珍しく理解できないという表情になっている。

『何と言ったらいいでしよう。これが痴情のもつれ……と言うものなのでしょうね』  
『おっ、おう』

その様子を見て背後の一夏はカナードも大変だなと呟いていたが、お前がそれを言うのかという言葉を何とか飲み込んだ真であった。

『……それで、終わった様だな、真』

未だクロエに頭をポカポカ殴られているカナードは青筋を立てながら真に尋ねた。

長考の為にクロエの愚痴通信の音声をカットした事がばれてしまったため、甘んじて受け入れてはいるが流石にそろそろ限界である。

しかもこの通信はオーブンチャンネル。

先程のクロエの声は箒達にも聞こえており、そういう関係だったのかと驚愕の声を上げている。

『ああ、AIラクスも倒したし、エクスカリバーからエクシアさんも救出した』  
『良かった……チエルシー、良かったですわね』

セシリアが真の報告を聞いて胸を撫で下ろす。

『こっちは全て終わった、後はセシリア』

『ええ。お任せください、真さん、一夏さん』

セシリアが自信を持ってそう告げた。

---

地上 絶対対空砲〔アフタヌーン・ブルー〕敷設地帯

陽動班からの連絡を受けた、狙撃班はその役目をようやく果たす時が来た。

『BT粒子の供給量、問題ありません。BT粒子加速……射撃、できます』

チエルシーの声が響き、狙撃端末を握るセシリアが射撃体勢に入る。

すでに周りの騒音はセシリアの耳には届いていない。

彼女の瞳はただ一点、宇宙に浮かぶ撃つべき目標を捉えていた。

『……狙い撃ちますわっ！』

そしてトリガーを引く。

アフタヌーン・ブルーから発射された眩い閃光は、宇宙へと駆け上がり聖剣を真ん中から撃ち抜いた。

エクシアを救出した真達は少し離れた宙域に退避し、地上からの狙撃を眺めていた。閃光が迸った瞬間、MA程の大きさを持つエクスカリバーの中心を閃光は撃ち貫いていた。

エクスカリバーの各部から爆発が生じ、それが連鎖していく。

そして一際大きな爆発を上げ、聖剣の名を持つ兵器は宇宙に散った。

『……終わったな』

一夏がそう眩く。

その言葉に皆が頷く。

『そのようだ。皆、よくやった』

千冬がそう告げると、通信が届く。

『皆お疲れ』

『優菜さん、どうしたんですか？』

その通信先は、真の上司である優菜であった。

『今丁度利香から作戦成功の報告があつたからね。その労いと君達が地上に戻る手段の連絡だよ』

『帰還手段ですか？』

『うん。今その宙域に「アメノミハシラ」から「イズモ」を向かわせてるから。いやー、前に出撃させたときは無許可だったから政府からこっぴどく怒られたけど、流星は「ギ

ルバート・デュランダル」……おっと、「更識蔵人」さんか。政府に許可取ってくれて助かったよ』

『なっ、なるほど……あれ、怒られてたんですね』

そりやもうこつぴどくねと真の言葉に優菜が返した。

『帰還手段ってどんな手段なんですか？』

疑問に思った一夏が優菜に尋ねる。

『ん、「IS用バリュートシステム」。ISの背部に装着して大気圏への突入の際に機体を保護するんだ。シールドエネルギーの節約も出来る装備だよ。ま、元はMS用からの流用だけだね』

『……シャトルじゃなくてISでの大気圏突入ですか』

MSでの大気圏突入を経験したことがある真からしてみても、いくらISとバリュートがあるとはいえ恐怖度は段違いだ。

『イズモやアメノミハシラに丁度帰還用シャトルがないタイミングだったからね。ま、安全性は問題ないよ、作ったのはジェーンだしね。それじゃイズモの座標送るね』

そう言うのと優菜からイズモの座標が送られてくる。

それを一夏達にも真は転送する。

『それじゃ、地上で待ってるよー』

そう言つて優菜からの通信は切れた。

『……聞いた通りだ、優菜からの指示に従つてイズモに向かうぞ』

『ちつ、千冬姉、マジでISで大気圏突入するの catt!?!』

『……仕方ないだろう、これしか手段がないのだ』

千冬も動揺しているのか、一夏が千冬姉と呼んだ事に突っ込まなかった。

『じよつ、冗談だろう……?』

『はは、流石にこれは恐怖を感じるな……』

『絶叫マシーンなんて目じやないよね、これ』

『もつとまじな帰還手段はないのーっ!』

箒は苦笑を浮かべながら、少々震えながらラウラが、シャルロットは半ばあきらめた様に、鈴は理不尽な現実から目をそらして叫んでいた。

『……あはは、さすがにちよつと怖いかな』

箒も少しだけ震えながら、真に告げる。

だが真はプライベートチャンネルを開いているようであった。

『真?』

『ん、ああ。ごめん』

チャンネルを切つてから、真が箒に向き直る。

『篠ノ之博士から？』

『ああ、ちよつとな。すいません、千冬さん』

そう言つて真が千冬に話しかける。

『東さんに頼まれて、エクスカリバーの残骸処理をしなくちゃならなくて。先にイズモに向かつてください』

『……そうか、分かった。皆、向かうぞ。覚悟を決めろ』

千冬のその言葉で一夏達はため息を付きながら、彼女の後を追う。

残つたのは簪だけだ。

『残骸処理？なら私も……』

『いや、飛燕はビーム兵器、少ないだろ。時間かかっちゃうし、簪は一時とはいえラクス  
の能力の影響下にあつたんだ。先に行つてイズモで休んでいてくれ。俺も処理が終  
わつたら向うから』



そう簪に告げる。

『……分かった、ならイズモで待ってる』

『ああ、頼むよ。俺も後片付けが終わったらすぐに行くから』

コクンと頷いて簪は先に向かった千冬たちを追いかけていく。

それを確認し、飛燕のスラスターが光の点のように見えるまで真は待機していた。

『そう、後片付けさ』

そう静かに告げて、デステイニーは光の翼を翻して宇宙を駆けていく。

「……エクスカリバー及びブラクス様の反応、消失しました」

エターナル艦橋、現在ミラーージュコロイドで隠蔽したこの艦は、戦闘宙域からの離脱を計っていた。

艦橋、艦長席に座るのは初老の男性。

その男性は数年前に突如失踪した科学者であった。

彼の失踪は亡国機業、元を辿れば歌姫の騎士団に加入したというのが真相であった。

そしてこの男こそ、AIラクスを作り上げた元凶。

全ての発端とも言える人間である。

「博士、いかがいたしましたでしょうか？」

部下からの質問にふむと相槌をうつてから答える。

「まあいい。ラクス様のAIのバックアップはまだここにあるのだ。【彼等】との合流まで少し時間がかかるが、充分再起は可能だ」

彼がそう答えた瞬間であった。

艦橋内にアラートが迸った。

「当艦上方より高速熱源接近っ！」

「なっ!？」

博士の驚愕の声と共に、エターナルのメインスラスターはビームに貫かれた。

メインスラスターはビームに貫かれたことにより爆発し、エターナルが身に纏っていたミラージュコロイドは剥がれその派手な艦色の艦体を宇宙にさらけ出した。

爆発の振動が艦橋を襲う中、オペレーターである男性が更に声を上げた。

「とっ、当艦上方にデステイニーがつっ！ こちらを狙っていますっ！」

「なっ、何だとっ!？」

そう、エターナルを狙撃したのは真が駆る「デステイニーガンダム・ヴェステイジー」何故、真がここにいるのか。

それは機能停止する寸前にA-Iラクスから提供されたデータの一つ。

それは精密な座標データであった。

親切なことに進路予測までされていたそのデータ通りにエターナルまでたどり着けたのだ。

それが真が先程簪に告げた、【後片付け】の真相。

エターナルは先程の一撃で航行不可能な状態に陥っている。止めを刺すために、艦橋にテレスコピックバレル式ビーム砲塔の照準を合わせる。

『ま、待つんだ、シン・アスカッ!』

トリガーを引きかけた真にエターナルから通信が届く。

『君の望みは何だっ?! 我々はその要求を呑む用意が出来て……っ!』  
『オープンチャンネルの通信であり、通信先の男性は相当焦っていた。』

『……』

真は男への返答を行わず、肩部から展開されているテレスコピックバレル式ビーム砲塔からビームを発射することを選択した。

発射された高出力ビームはエターナルの艦橋を易々と貫いて内部を蹂躪していく。

元々戦艦の艦橋の装甲と言うのは他の箇所比べて薄くなる場合がほとんどだ。

さらに念には念を入れて、【単一仕様能力】【運命ノ翼】を併用してビームの出力を限界以上に高めている。

二射目は艦の中央部、三射目はすでに目も当てられない有様のスラスター部分に直撃させる。

爆発は次々に連鎖していく。

エターナルが完全に轟沈した事を冷たい目で確認した真は、通信を繋げる。  
通信先は東だ。

『東さん、聞こえますか？』

『ん、あつくん。聞こえてるよー、これでAIのバックアップは消去できたね』

『はい、エターナルは沈めました。今からイズモに帰還します』

『りょーかい、お疲れ、あつくん』

『いえ、問題ないです』

通信に出た東に軽く笑みを返して、デステイニーはその宙域を去った。

## E p i l o g u e 家族になる日

エターナルを撃沈した後、真は無事イズモに合流を果たしていた。

そして用意されていたIS用バリュートシステムを装着し、陽動組全員が大気圏への突入を敢行。

無事全員が地上に降下することができたが、全員の感想は二度とやりたくないで一致している。

それは千冬も同じ感想であった。

イギリス空軍基地に帰還した一同は、エーカー少佐達に歓迎され作戦成功の労いを受けた。

その際、チエルシーは作戦が完了した為、空軍に拘束された。

ただエーカー少佐からの便宜によりとある取引がなされ、彼女は即日開放された。

その取引の内容は下記の通りである。

・ 潜入時に得たデータの提供。

・ 今後もBT3号機の搭乗者として軍に協力する事。

この2つを遵守することの代わりに以下のシナリオが用意された。

【彼女はBT3号機の搭乗者として秘密裏に選出された人間であり、ある任務を帯びていた】

【エクスカリバーを奪取したテロ組織に潜入し、情報を得るエージェントとして活躍していた】

シナリオを聞いたカナードは、かなり無茶なものだなと言う感想をこぼしている。

エーカー少佐には軍上部に顔が効く人間がおり、その人物が便宜を図ってくれたとの事だ。

何でもカタギリと言う日系人の将官らしい。

エクスカリバーから救出されたエクシア・カリバーン、改め、エクシア・ブランケットは軍病院に搬入され、治療を受ける事となった。

幸いにも副作用のある薬物は使用されておらず、身体を長期間拘束されていたことによる衰弱が目立つも数日中には退院できるとの事であった。

拘束された2名、ダイル・ケイシーとフォルテ・サファイアについては東によって引き取られることになった。

この2名はいまだに意識を取り戻してはいない。

東の診察ではエクシアと同じく意識を失わせる薬物は使用されているがそれ以外は使われていないため、自然に目覚めることを待つことになった。

また彼女達が所持していたISについては、東が回収し千冬とIS学園を経由して本国に返還されている。

日本にいる蔵人からも連絡があった。

エクスカリバーによる遊園地への攻撃については情報規制が敷かれているとの事だ。

当時入園していた客を割り出し、政府から連絡を行い示談させ遊園地内の屋台から出火した火災と言うことに纏まっていた。

また監視カメラ等の記録は全て削除されており、SNS等も更識家所属の人間が監視を行っているとの事だ。

エクスカリバー破壊から数日。

オルコツト家 セシリア私室

「お嬢様、よろしいでしょうか」

「何ですか、チエルシー？」

ドアのほうを向いたセシリアが、問う。



「お話があります」

「よろしくてよ」

そう告げると、ドアが開く。

頭を下げて、チエルシーが部屋に入ってくる。

「失礼します」

「それで、話とは？」

「……エクシア、入りなさい」

「はっ、はいっ！」

ドアを開けて入室してくるのは、チエルシーと同じくメイド服を身に纏ったエクシア。  
ア。

「もう退院したのですか？」

「はい、先日、軍病院から退院いたしました。それで……セシリア様っ！」

「なっ、なにかしら？」

「せつ、セシリア様のご両親は、オルコット家の剣として私の命をつないでくださったのです！」

エクシアからの唐突な告白にセシリアは首をかしげた。

「……エクシア、それでは説明になっていませんよ」

「ごっつ、ごめんなさい、姉さまっ！」

「……私が代わりにご説明いたします」

エクシアに代わり、チエルシーの口から告げられたのは、今回の事件の真相であった。エクシアが何故故亡国機業に囚われ、生体CPUとしてエクスカリバーに組み込まれていたのか。

それは彼女が心臓病を患っていたからだ。

当時、セシリアの両親は亡国機業と国家絡みで争っていた。

とある戦闘に巻き込まれたエクシアを、セシリアの父親であるジヨナサンが保護した。

しかしエクシアの容態が急変、一刻の猶予も許されない状況になった。

そこでジョナサンと、その妻エリナは一つの決断をした。極秘裏に入手していたI S コアと技術を用いてエクシアに生体融合措置を施したのだ

貴重なI S コアを独断で使用する。

国を裏切る行為であることは承知の上で、両親は即決した。

国を裏切ることになろうとも、目の前の命を助けるために。

そしてエクシアの命は助かった。

しかしその特異性に目をつけられたエクシアは、後に誘拐され生体CPUとして組み込まれたというのが真相であったのだ。

「今こうして私がここにいるのは全て、ジョナサン様とエリナ様のおかげなのです！命を救っていただけたからこそここにいられるのです！」

「……ありがとう、エクシア」

そつとエクシアを抱き寄せた。

尊敬する父と母が、チエルシーの妹の命を救った。

数奇な運命。だが確かに人を思いやる黄金の様な意志を感じた。

(……お父様、お母様。私はお二人の娘で本当によかった。見ていてください、私もいずれお二人の様になつてみせますわ)

「……そうですわ、チエルシー、エクシア」

涙をぬぐつてセシリアが微笑む。

「三人で写真を撮りましょうっ！」

「写真ですか?」

「ええ。【家族】で写真を撮ることなんて、珍しくもないでしょう?」

そう告げた彼女に、チエルシーとエクシアは笑みを浮かべて首を縦に降つた。

この日セシリアの私室に一枚写真立てが増えた。

亡き両親と幼き日のセシリアが映る写真の横にその写真は飾られている。

次期当主であるセシリアを支えるように立つ二人のメイド。

その写真に写る三人の笑みはとても幸せそうであつた。

そして12月24日、クリスマスイブ。

真達はいまだ帰国はしておらず、オルコット家に集まっていた。

その理由は――

「それでは、セシリア・オルコット様の誕生日パーティーにお集いの皆様、今宵は盛大な祝福をよろしくお願い申し上げます」

メイド長であるチェルシーがそう告げると、社交界の紳士淑女の面々が一齐にセシリアの下に詰め掛けた。

その中には、今回の作戦に関わったエーカー少佐やジニン中尉、彼等の部下達の姿も見えた。

「オルコット嬢、いや、セシリア君。今回の作戦、本当に世話になった」

そう言つてエーカー少佐は軽く頭を下げた。

「いえ、今回の作戦、それとチェルシーの件。エーカー少佐のおかげでまた家族とこう過

「ごせているのです。感謝してもらいたくないですわ」

「私は何もしていないさ。これからも君の躍進と活躍をファンの一人として応援させてもらうことにしよう。それではこれで」

そう言つてエーカー少佐は敬礼し、パーティー会場を後にしていく。

「いやー、ホントに凄いわね、セシリア。国家代表候補飛び越してもう確定でしょ、今回の作戦で」

「だね。これから家督もついで正式な当主なんですよ、凄いなあ」

「ぬ、そういうえば一夏はどこに行った？」

「ちよつ、そういうえば箒もないわっ！ 抜け駆けなんてさせないわよお！」

それぞれ煌びやかなドレスを身に纏つた美少女達が友人の誕生日を祝福しつつ、各々このパーティーを楽しんでいた。

(皆さん、お楽しみいただけられているようでよかったです)

かつては孤独を感じたこともあった。  
だが今は違う。自分は光の中にいる。

暖かな、大切な友人達とこうして誕生日を迎えられるのはセシリアにとって最高の幸せであった。

「おめでとう、セシリア」

「誕生日おめでとう、セシリア」

「真さん、簪さん。ありがとうございます」

社交界の紳士淑女達とのやり取りもひと段落したセシリアに真と簪が話しかける。

「こんなパーティ出たことないからさ、ちょっと緊張してる」

「うん、私もこれだけ大きいパーティは出たことなかった」

「ふふ、お楽しみいただけているようでよかったです。それにお二人のその姿、よく似合っていますよ」

「タキシードなんて着たことないから不安だったけど、チエルシーさん達がコーディネートしてくれておかげだよ」

男性搭乗者である真達はセシリアが用意したタキシードに身を包んでいる。意外にもあのカナードまで用意されたものをキチンと身につけて会場にいた。

「うん。凄く似合ってるよ、真」

(俺は簪のドレスの方が似合ってると思うんだけど……本当に綺麗だ)

簪は髪の色よりも淡い、水色のドレスを身に纏っていた。

胸は姉の楯無よりも控えめではあるが、それでも十二分に女性としての魅力をかもし出している。

「カナード様、どつ、どうですか？」

黒を貴重にしたパーティドレス。

胸こそ箒達に比べればかなり控えめなサイズだが、曲線美は目を惹きつけるものがあつた。



「……似合っていると云っているだろう。もう4回目だぞ、その質問」

真と同じくタキシードを身に着けたカナードが呆れた顔でクロエに告げる。

カナードに似合っているといわれたクロエにはその言葉が聞こえていなかったようであるが。

カナードは髪を短くしていたおかげか、オールバックに髪型を変えている。

これはメイド達にそのほうが似合うと押され、あまりにしつこいため折れた結果であつた。

「カナードも大変だな、まさかクロエとそういう関係だとは思わなかったが」

「あれで気づかなかつたって……ま、それはアスランが鈍いだけだよ。あつ、それもらうね」

彼の手の皿からチーズを一切れ頂戴したラキーナは、そのままチーズを口に含み、笑顔が浮かべる。

彼女もまたパーティ用ドレスを身に纏っている。

クロエとは違い色は淡い紫色のドレスだ。

体型が似ているため、胸よりも曲線美が目立つコーディネートだ。

「若いつていいねえ、ちーちゃん」

「何だその言い草は、私達も若いだろう？」

「……ふーん。じゃ、相手いるの？」

「……その言葉はお前にそっくり返してやろう」

「あはは……」

東、千冬、真耶の大人組三人はアルコール片手にその様子を眺めている。

千冬が不機嫌そうな表情を浮かべているせいか真耶は苦笑いを終始浮かべていた。

「ううつ、なんで私、いい男が出来ないのお。コートニー、いるんなら会いに来てよお……ねえ、節子ちゃんなら分かるでしょこの悩み……」

「ああ、利香さんの悪い癖がつっ！すいません、ちよつと席を外しますねっ」

アルコールで悪酔いした利香を、スーツ姿の節子が抱えて会場の外に連れ出していく。

この場にはいないが、日出工業の優菜からも祝電が届いていた。

「簪さん、ちよつとよろしいです？」

「どうかしたの？」

ちよいちよいとセシリアが簪を手招きして、簪はそれに従う。  
なにやら耳打ちしており、簪は顔を真っ赤にしていた。

「どうかしたのか？」

その様子に気づいたのか、真が問う。  
それに答えたのはセシリアであった。

「いえいえ。真さん、たまには女だけで話したいこともあるのですよ」  
「……分かった。なら、向こうに行つてくるよ」

セシリアに頷いて答え、真はカナード達の元に向かう。

「あら、義弟君。簪ちゃんとはいいのお？」

振り返ると、ドレス姿の楯無——刀奈が笑みを浮かべて立っていた。

簪とは違い、純白のパーティドレス。

胸元を強調しつつも、ヒップラインまで隙が全くない。

「……皆がいるんだから、その呼び方止めてくださいよ。刀奈さん」

視線を逸らして真が告げる。

その態度にニマアと刀奈の口が弧を描く。

「照れちゃってまあ！お姉ちゃんは寂しいのよっ！」

真の右手を握って胸元まで近づける。

その行動にギョツとしつつ、すぐに手を振り払う。

「ああっ！本当にめんどくさいっ！アンタって人はあっ！」

叫びながら真は走り出す。

その様子を皆は笑いながら見ていた。

---

数時間後。

誕生日パーティーも一段落し、チエルシーに案内され真は皆と別れて宛がわれた部屋を指していた。

そしてとある部屋の前で彼女は止まった。

「こちらです、真様」

「どうも……ってかその真様っていうの止めてくださいよ、あの時はシン・アスカって言うってたじやないですか」

初めて横浜のDeランドで出会ったときの事を思い出して真が言う。  
だがチエルシーは首を横に振って微笑む。

「いえ、貴方達はエクシアの救出に命をかけてくれました。私にとっては恩人です」  
「……まあ、アナタがそう言うならいいんですけど」

少し照れた様に真は返す。

「それではおやすみなさいませ」

「チエルシーさんもおやすみなさい」

そう言つて真は部屋の扉を開けた。

「ふう、疲れた」

そう言つて扉を閉める。

薄暗い部屋、月光が部屋を薄く照らしている。

そんな部屋に、人の気配がした

「めっ、メリークリスマス、真」

顔を真っ赤にしながらドレスを身に纏う簪が部屋の中にいた。

白い、まるでウエディングドレスにも見えるドレスを纏った簪だ。

先程の淡い水色のドレスも綺麗ではあった。

だが今の彼女は月光に照らされて美しくもあり、扇情的な雰囲気醸し出していた。

その美しさは比較にならない。

その光景に一瞬思考停止した真であつたが、すぐに再起動した。

「なっ、なんでここに簪が？」

「えっと、チエルシーさんに案内されて……」

「じゃっ、じゃあそのドレスは？」

「セシリアから、頑張ってくださいねって」

部屋をよく見ると、ベッドは一つ。

しかもサイズはクイーンサイズのものが一つ。

「……」

震えながら、待機状態のデステイニーを握り締めた真は、一度深呼吸してから――

『謀ったな、セシリアー!』

コアネットワークを使用した通信をセシリアに送る。

『はて、何のことでしょうか?』

反応はすぐにあつた。

明らかに楽しんでいる声色の彼女に真が叫ぶ。

『いや、宛がわれた部屋に簪がいるんだけどっ!』

『何分空き部屋がありませんでしたので。真さんと簪さんはお付き合いされていますし、少し前まで学園でも同室だったのでご案内させて頂きました』

もってもらしい返答だが、先程チエルシーに案内されてここまで来た時に、空き室は



いくつもあることを確認していた。

そして思い出した。

先程、セシリアと簪が何か会話をしていたことを。

おそらくこれを計画していたのだろう。

『あ、ドレスは私からの簪さんへのクリスマスマスプレゼントですよ』

『いやいやいやつ、そういう話じゃなくてさっ！てかさっきのはこれを計画してやがったなあ！』

『あら、ネットワークの調子が……それでは頑張つて下さいねっ』

『あつ、おいつ！話終わってないって！』

わざとらしくそう告げた彼女の言葉でブツリと通信が切れる。

プルプルと待機状態のデスティニーを握りしめた真がガクツと頭を垂れた。

「真？」

「あー、俺達同じ部屋みたいだな」

「……嫌だった？」

「いや、そんなことないって。ただ驚いただけだし」

苦笑しつつボスンと、ベッドに腰を下ろす。

簪は真の隣に腰を下ろした。

横目でちらりとドレス姿の簪を見てから口を開く。

「……そのドレス、滅茶苦茶似合ってて、綺麗だ」

「本当っ?」

「ああ」

照れたように、真が返す。

嬉しそうに笑う簪は真の手の上に自身の手を置いた。

温かな彼女の体温を感じる。

恥ずかしそうに、だがしっかりと指を絡めてくる。

ガリガリと自身の理性が削られていくのを真は感じていた。

「……今日はクリスマスイブだからいつもとは違う私を見てもらいたくて。それでセシ

リアが提案してくれたの、ドレスを着て二人きりになるのはどうかって」

そして紅潮した顔で続ける。

「だから……もつと私を見て。それに抱きしめてほしい」

上目遣いで簪に告げられた。

断れるはずがなかった。

「……分かったよ」

彼女の後ろに回り込んでゆつくりと抱きしめた。

微かに鼻腔を擦る香り。

正直、理性は限界に近かった。

「あつたかいな、簪」

「そう、かな……。あ、真、やっぱり手大きいよね」

簪が背中から回された真の手を握る。

体格差もあるが簪よりも彼の手は1回り程度大きい。

「そうか？」

「うん、大きいよ。この手で真は戦い続けていたんだね……ずっと」

【シン・アスカ】としての記憶を直接見た簪はそつと彼の手を撫でる。

凄惨な記憶ではあった。

だが彼は前に進むことを決して止めなかった。

それは彼が命を守ることを止めなかったからだ。

ポロポロになりながらも前に進む、憧れの存在。

一步も進む事のできなかつた自分を、再び空に引つ張り上げてくれた。

「真は私のヒーロー……だよ」

「……簪」

彼女の言葉で、脳裏に「シン・アスカ」として戦ってきた記憶が蘇る。戦い続けた自身の手で守れた命は確かにあった。

しかしその間からすり抜けていった命もまた数多くあった。

だが、今は——違う。

「……守りきれない方が多かった、けど今は違う。一夏が、カナードが、セシリアが、千冬さんが、東さんが、優菜さんが、皆がいる。そして……」

ぎゅっとさらに強く抱きしめる。

今この手の中には、かつて手に入らなかった、大切な幸せが確かに存在している。失わせたりなんてしないと、真は改めて心に誓っていた。

「簪がいる。俺は本当に君に会えてよかった」

「私も、真に会えてよかった。好きになれてよかった」

そう言つて、簪は瞳を閉じる。

それは何かを待っているかのようで。

同じ様に瞳を閉じて、そつと彼女の唇に唇を重ねる。

「んっ……」

どれくらいそうしていたかは分からなかった。時間にして数秒のはずが、体感では数分に感じている。

名残惜しさを感じつつ、離れる。

だがまだ終わらない。

そつと、真は彼女をベッドに押し倒す。

「あっ」

少しだけ声を出した彼女だったが、抵抗は全くしていなかった。それどころか、真の手を自分の胸に当てていた。

「真、大好きだよ」

月明かりに照らされた、彼女の上気した表情はとても愛おしかった。

夜もふけた頃――

「東、待たせてすまない」

「んー、大丈夫だよカナ君。くーちゃんは？」

東に宛がわれた部屋にカナードが入室する。

「……部屋でもう寝ている」

「あらら、くーちゃん楽しんでたからなあ。でもだからって無防備過ぎるのはどうかと思うんだ。男は狼なのよ、気をつなさいー……あだだだだ、冗談だって、冗談っ！」

東の後頭部にアイアンクローを食らわせながら、カナードはため息を付いた。

（ん、待てよ。何でカナ君、くーちゃん寝てるの知って……おっ、おおっ!?まさか……まさかっ!?)

カナードの髪はまるでシャワーを浴びたばかりの様に湿っている。

頬も少しだけ上気しているようにも見えた。

それに気づいたのか、顔をそらし咳払いして話を切り替える。

「……それで、データの解析は？」

「あー、量が量で設備もないから詳しくは日本に帰ってからになるとおもうけど、簡単な解析は済んでるよ」

カナードの催促に先程までの思考を切り替えて、束が告げる。

「流石だ。それでどんなデータだった？」

「はい、これ」

印刷した紙の束を取り出して、カナードに手渡す。

ざっと目を通したカナードが眉間に皺を寄せる。



「……未登録のＩＳコアか」

「そう、オリジナルのラクスが製作したコア。「ホワイトネス・エンプレス」とか「インフィニット・ジャステイス」とかに使われてるのはあくまで私が作ったロットだから別物。全部で十個」

「十か……しばらくは休めないな」

「だね。あー、カナ君。温泉旅行でも行きたいよー」

「自腹で勝手に行け」

渡された資料を捲りつつ、カナードは束の提案をばつさり切り捨てた。だがその口元には薄くだが笑みを浮かべていた。

某国――

「ん、私だ」

女性が通話相手に答える。

「ああ、【連中】から聞いているよ、歌姫は墮ちたか。彼女の歌は戦乱を呼ぶ歌で好きだったのだからね」

薄く嘲笑を浮かべたその女性はデスクに腰を下ろす。

「まあ、いずれ消すつもりだった。その予定が早まっただけ、手間が省けたと考えよう。こちらの動きはすでに【彼ら】に伝えている」

ククツと笑みを浮かべる。

「ん、そちらは問題ない。奴等から必要なものは手に入れてある。ISのコアだよ、未登録のね。それにアレの建設も約6割と言ったところだ。だが問題はIS学園の連中、遠からず私達に気づくだろう。特に飛鳥真、カナード・パルス、篠ノ之東、織斑千冬、アスラン・ザラ……そしてラキーナ・パルス。何人かは覚えがあるだろう、君も」

通話相手に尋ねる。

相手がため息をもらしたのが聞こえる。

「私個人としてもラキーナ・パルス、いやキラ・ヤマトは警戒している。何せ彼に殺されたのだからね。しかし、彼も今や女性か。難儀なものだな」

通話相手もその言葉に相槌を打っている。

「ああ、また追って連絡する。今後も頼むよ」

携帯電話を懐にしまう。

「……………ふふ」

サングラスを手にして身につける。

水色の髪の彼女はそのまま、その部屋を出て行った。

# INTERMISSION ①

## 年末の二人

12月31日 大晦日

すでに年の瀬。

世間は残り数時間に迫った新年を迎える準備に追われていた。

IS学園もすでに冬期休暇に入っており、セシリアをはじめ各国の代表候補生達もそれぞれの母国に帰国して、休暇を過ごしている。

一夏や千冬も久々に実家に帰宅し、年末休暇を過ごしている。

束達もテロへの最低限の監視体制は敷きつつも、各々休暇を取っていた。

男性搭乗者の発見や歌姫の騎士団の襲撃、エクスカリバー暴走等、激動の一年であった。

だが過ぎてみれば早いものというのには皆が感じていた。

そんな中、飛鳥家の玄関口に真と簪の姿があった。

二人ともコートにマフラーの厚着であったが、到着してからマフラーは取っていた。

何故二人が飛鳥家にいるかと言うと、大晦日を含めた冬期休暇を実家で過ごしたいと

真の意見と、彼の実家で過ごしてみたいという簪の意見が一致していたからだ。

冬期休暇に入る前に実家に連絡を取ったところ、大歓迎と言う返答があり、真は久々に家族にあえることを楽しみにしていた。

実家に帰ってくるもしくは真を連れてくるのだろうかと考えていた楯無は二人の予定を聞いた際につくりと肩を落としていた。

妥協案として年越しそばを食べる事と初詣を一緒に行こうと提案したところ、即座に立ち直っていたはいたのだが。

余談だが、社宅に移っていた飛鳥家の面々は下の自宅に戻っていた。

これは真のIS稼働データが日出を通して国際IS委員会に渡り、そのデータが評価されているところが大きい。

真がIS学園に入学した直後には女性人権団体からの声なども目立っていたが、歌姫の騎士団との戦いが終わる頃、秋ごろになるとそんな声を見るのも稀になっていた。

「ただいま」

「お邪魔します」

2人がそう言つて玄関口を開く。

ドタドタと奥から響く足音。

「お兄ちゃん、お帰りー！そして簪さんようこそー！」

現れたのは少しだけ髪を伸ばした、真の妹の真由だった。

スライディング気味に現れた真由はそう言つて笑みを浮かべていた。

「元氣だなあ、真由は」

「だって久々にお兄ちゃんに会えたんだもん！それに簪さんも一緒なんてテンションフォルテツシモだよ！」

「えつと、ありがとう、真由ちゃん」

真由の興奮した様子に少し困惑して簪が返す。

すると真由の背後から彼女と同じ髪色の母、玲奈が現れた。

「ただいま、母さん」

「お邪魔します」

「おかえりなさい、真。ようこそ、簪さん。さあ、上がって」

微笑みながら言う玲奈の言葉に従って二人は靴を脱いで居間に向かう。

今に向かうとソファに座りながら、年末特番を見ていた父、大胡が振り返りつつ告げる。

「おかえり、真。簪さんもようこそ」

「父さん、ただいま」

「お邪魔してます。数日の間ですが、よろしくお願いします」

「ああ、自分の家だと思ってくつろいで構わないよ。まあ、ちょっと狭いかもだけどね」  
(……そりゃあれと比べたらなあ)

簪の実家に伺った事のある真は彼女の实家の広さ知っている為、内心苦笑していた。

「それじゃ荷物だけど、一旦俺の部屋に置こう」

「うん。2階だったよね？」

「ああ」

真が案内しつつ、二階の彼の部屋に向かう。

### 真の部屋

八畳ほどの広さの部屋に、大きめの机と薄型のテレビが備え付けられた部屋。本棚には国民的な人気漫画や、ミステリー物の小説などが収められていた。壁には特撮ヒーローの限定ポスター等が飾られていた。

真がIS学園で寮生活を始めてからこの自分の部屋に戻ってきたのは数度しかなかった。

定期的に母である玲奈が掃除をしていた為、埃などは全くなかった。

「荷物は此処でいいな。後で真由の部屋にベッド用意するっぽいから」  
「うん」

「んじゃ、お茶でももらってくるよ。適当に休んでてくれ」

そう言って真は部屋を出ていく。



「……」

手荷物を置いた簪が部屋を見回す。

以前交際の挨拶の際にも訪れたが、ゆっくりと見る暇はなかった。

その為、真の部屋がどんな場所なのか、少し楽しみにしていたのだ。

そこそこゲームもやると言っていた通り、最新のゲーム機も置いてある。

そして限定ポスターなど心が滾るものがあつたが、彼女の視線は何故か真のベッドに向かつていた。

「……」

ソツと耳を澄ますと、真が階段を下りていく音が聞こえる。

それを確認して、とあることを思い出す。

（本音が言つてた。男の子はベッドの下に……エッチな本を隠すつて）

既に彼とは一線を越えた仲ではあり、別に彼がそういう本を持つていたとしても嫌悪したりなどはない。

ただどういったものが好きなのか知りたいという興味があるのだ。

少しの罪悪感を感じ緊張しながら、彼女は真のベッドの下を覗き込む。

だがベッドの下には使わなくなつた参考書しかなかつた。

(あれ……ないっ?)

ほぼ100%の確率であるとの話だったので、手を突っ込んで調べてみるが、やはり参考書だけであつた。

「……持つてないんだ」

そう呟いて少しだけ嬉しい気持ちになつた簪であつたが、本を探すことに夢中になつていた為、背後の気配に気付くのが遅れた。

振り向くと、茶と茶菓子を持つた真がジト目でこちらを見ていた。

「……簪？」

「えつとこれは、その、ほら知的好奇心と言いますかその……ごめん」

咄嗟の事でなぜか敬語混じりになりながら、顔を紅くした彼女が返す。

テーブルに緑茶を置いた真はソファに腰を下ろす。

「持つてないからな」

「そつ、そうなんだ」

「ああ。はい、お茶」

テーブルの上に緑茶を置いて、自分も一口飲む。

(……弾が置いてった本、処分しておいて本当によかった)

内心真はかなり焦っていた。

部屋に戻ってきたら、簪がベッドの下をのぞいていたのだから。

実はIS学園入学前までは、友人である弾が「わざと」部屋に置いて行った本をベッ

ドの下や参考書の間隠していた。

弾曰く、真は年上好きなどころがあるらしく、年上モノの内容でかなりきわどいものであった。

もちろん弾を一発ブン殴っている。

IS学園入学が決定して寮生活となる前に、そういった本は全て早朝の時間帯にわざわざ海岸まで出向いて、自分の手で焼いて処分していたのだ。

(過去の俺、ナイス)

過去の自分の行動を自画自賛していると、少し申し訳なさそうな表情を簪がしている事に気付いた。

それに苦笑した真が告げる。

「別に気にしてないって」

「……うん」

「ちなみにそういう本があるって情報誰から聞いたのさ、刀奈さん？」

「ううん、本音」

「そっか本音さんかあ……休み明けにお菓子没収の刑に処そう。生徒会室と整備室に隠してあるお菓子も全部な」

少しだけ意地悪く笑った彼に簪が苦笑を浮かべた。

それから30分ほど経って、二人は居間に降りてきていた。

予約しているとはいえ大晦日の蕎麦屋は非常に混雑するため、早めにそばを食べに行こうという訳だ。

「蔵人さん達は？」

「お店の場所を伝えたから直接向かうらしいよ。後本音と虚も来るって」

数分前に簪が蔵人と刀奈に連絡しており、予約した店に向かっているらしい。

また布仏家からも本音と虚が来るとのことだ。

「成程ね。ってことは多分弾も来るんだろうなあ、確か数日前から虚さんの家に招待されてたみたいだし」

「虚が付き合ってる人だよね。確か学園祭の時に真と話してた」

「ああ。アイツに色々と聞かれてさ。ま、いい奴だよ」

真の友人である五反田弾と本音の姉である布仏虚は学園祭の際に知り合い互いに一目惚れしたのだ。

その後、真にアドバイスなどを弾は求めていたのだ。

現在は順調に交友を重ねて晴れて、男女の仲になっている。

「弾君もやるもんだね」

中学時代の弾に何度かあったことのある大胡が感慨深く呟く。

「正直今年あった事の中でもかなり上位に食い込む驚愕だったよ。てか、歩きなのかよ。父さん」

「蔵人さんとは色々と話してみたいからね。飲んだら車じやまずいだろう？」

「そりやそうだろうけどさ、寒くない？」

全員がコートを着用し、予約した店まで歩きで向かう。

飛鳥家からそこまで距離がないため10分程度で到着できるのだが、真冬の大晦日だ。

気温は一桁であり、呼気は白く染まっている。

「ゆつくり行くのもたまにはいいだろう?」

「……まあ、それはそうだね」

大胡の言葉に真は頷く。

蕎麦屋 たどころ

飛鳥家から10分ほど歩いたところにある300年の歴史を持つ老舗の蕎麦屋「たどころ」。

その店の前についていた楯無——刀奈が待っていた。

「あ、来た来た」

そう言って刀奈が歩いてくる真達に手を振る。

「どうも、刀奈さん」

「お姉ちゃん、中にいれればいいのに」

「ふふ、簪ちゃんがくるんだもの。寒さなんて大した事ないわ」

そう笑った彼女は大胡と玲奈、真由の3人に視線を移す。

「初めまして、妹の簪がお世話になってます。姉の「更識刀奈」といいます」

「こちらこそ、真がお世話になってます。先に着いていた様で待たせて申し訳ない」

玲奈と真由も大胡と同じように自己紹介した後、大胡が言う。

「いえ。元々は私のわがままを聞いていただけだったので、私としては感謝しかありません。それでは中に入りましょう」

楯無の言葉に全員が頷いて店内に入る。

老舗の蕎麦屋であるが、最近になって立替工事が行われているため広さは充分であつ



た。

ただ年末、大晦日の為かなり込んでいた。

予約済みで個室に案内される為、問題はないが。

店員に案内されて、個室に入る。

中は当然、全員が見知った顔だ。

「真。それに飛鳥家の皆さん。今日はお招きいただきありがとうございます」

真達が席に着いたことを確認した蔵人がそう切り出す。

「いえ。こちらこそ話を持ちかけていただきありがとうございます」

「本当は妻も呼びたかったのですが、何でも妻は妻のほうで用があるらしく……申し訳ない」

そう蔵人が頭を下げる。

だがそれに大胡は笑ってからテーブルの上に置かれていたビール瓶を掴む。

「まずは一杯。どうですか？」

「これはどうも……おとと」

大胡が蔵人のコップにビールを注ぐ。

注ぎ終わると今度は蔵人が大胡と玲奈のコップにビールを注いでいく。

(……酒盛り始めちゃったか)

酒盛りが始まってしまったことに苦笑しつつ、対面に座っている弾に視線を移す。同じように蔵人達から視線を移した弾が口を開いた。

「真、久しぶりだなー」

「そりゃこつちの台詞だつての。それに虚さん、本音さん。どうも」  
「ええ」

「あすあすー、外寒かったー？」

「ちよつとね。中は暖かいから大丈夫だよ」

3人にそう返す。

「いやー、何かこうお邪魔しちやって悪い気もするんだよなあ」

少しだけ小声になった弾が苦笑しながら言う。

「別にいいと思うけどな。楽しんでるだろ、ならいいじゃん？」

「お前がそういうならいいけどさ。さて何蕎麦食べる？」

メニューを広げた弾が尋ねてくる。

「簪は何のそば食べる？」

「えつと……おろし天ぷらそばがいいかな」

「おつ、中々に通だね、簪さん」

「別に……食べたいと思っただけ。五反田君は？」

「俺？ そうだなあ……鴨蕎麦かな。虚さんは？」

彼が横に座っている虚にたずねる。  
すると少し恥ずかしそうに虚が返す。

「私は……弾君と同じもので」

「おっとノロケだー」

ニヤニヤと笑う本音がからかうように告げる。

その言葉に虚が顔を真っ赤にしていた。

隣の弾も照れたように苦笑している。

「本音っ、えつとその……」

「あはは……ごほん、真と真由ちゃんは？」

話を切り替えるために真と真由に聞く。

「んー、月見うどん」

「年越しうどんかいっ！」

真のボケに弾が突っ込む。

久々のノリに真の顔に笑顔が浮かぶ。

「冗談冗談、俺もおろし天ぷら蕎麦かな。久々に天ぷらも食べたい。真由は？」

「うーん、温かい蕎麦もいいけど……冷たい蕎麦も……悩むう！」

真由はメニューを見ながら悩んでいた。

すると真由の隣の刀奈がこそつと耳打ちした。

「真由ちゃん、真由ちゃん。私が温かいの頼むから、真由ちゃんは冷たい蕎麦にして、半分こにしない？」

微笑みながら刀奈が真由に尋ねる。

「えっ、いいんですか、刀奈さん」

「いいのいいの。それにさんづけなんていいのよ。私のことは刀奈お姉ちゃん」

「……分かりました、刀奈お姉ちゃんっ！」

「うふふ、真由ちゃん可愛いわね」

刀奈は満面の笑みでそう呟いた。

その後、刀奈が玉子とし蕎麦を。

真由は真や簪と同じおろし天ぷら蕎麦を注文する事となった。

十分ほどたつて注文した蕎麦がテーブルに並べられる。

それを食べつつ、簪が真に言った。

「……今まで年越し蕎麦つて一人か、本音と食べるだけだったから楽しいよ、真」

「それは俺もだよ。いつもは家族だけだったけど今日は簪が、皆がいる。にぎやかに食べるのはやっぱりいいもんだな」

真の言葉に簪が笑顔で頷いた。

その後、今年の出来事等、弾と虚の馴れ初めなどの話で食事の席は大いに盛り上がったのだった。

『ユキっ！頼めるなっ！』

『任せてっ！』

ファルセイバー、否。

今やその名のとおり輝く【グリッターファルセイバー】に同化した【ヒイラギ・ヨウタ】と【ヒイラギ・ユキ】の意志によつてグリッターファルセイバーはその力を最大限に、限界以上に発揮させる。

『グリッターファルブレエエド！』

グリッターファルセイバーの手に虚空から召喚される剣の柄。

敵を討つ力【力の至宝】、使命を司り境界の力を循環させる【記憶の至宝】、動力を兼ねた【生命の至宝】、そして全体の核【心の至宝】

4つの力と融合者が完全に心をついにした際に生まれる究極の剣柄に召喚されるのは、荘厳な勇者の剣。

『今だ、ファルセイバーっ！』

胸に獅子の顔を持つ勇者王が押さえ込んでいた敵機を投げ飛ばす。

『グリッターウエーブ！』

かつては敵として、今は共にファルセイバーと合体したブルーヴィクターの咆哮と共に、グリッターファルセイバーの胸部から高出力エネルギーが放射された。

勇者王に投げ飛ばされた敵機を剣を模したエネルギーで拘束する。

『この願い、未来へ持っていく！』

最強の必殺技である「エアリアルフェアスパーク」で切りかかる。

『エアリアルフェアスパアアアアク!!』

『はあああああああーっ!!』



渾身の一撃と咆哮。

『俺達の……勝ちだ』

敵機を切り裂いた後、ヨウタとファルセイバーが同時に拳を握り締めた。

「……カッコいいっ！」

「うん、このシーンは本当に鳥肌が立つくらいカッコいい。作画のレベルもトップクラス……！」

「ねえ、簪さんっ！あの胸にライオンが付いたロボットは!？」

「あれはファルセイバーの1つ前の勇者シリーズで、ゲスト出演だけど、ファルセイバーとは昔からの仲の勇者王……！」

簪と真由が二人並んでテレビの前に座り、簪が真由に解説しながら目を輝かせている。

その様子を炬燵に入りながら真と刀奈は眺めていた。

蕎麦屋での食事を終えた真達はそのまま布仏家に戻る虚、本音、弾と別れて飛鳥家に

戻っていた。

本来はそこで刀奈と蔵人も別れる予定であったが、意気投合した大胡と蔵人が酒盛りをするとのことで、ついでに刀奈も着いてきていたのだ。

にぎやかなほうが楽しいため、特に異も挟む事はなかったが。

余談だが現在テレビでは大晦日スペシャルとして「輝煌勇者ファルセイバー」の全話一挙放送が流されている。

簪が見たいと言いつ出したのと、真由が興味津々であった事が重なり現在真の部屋で見ているのだ。

「簪ちゃんと、真由ちゃん。何処かにてるわねえ」

「あー、分かりますよ、それ」

真が炬燵の上に置かれているミカンを剥きつつ、答える。

「でしょ？見てて微笑ましいわ」

「真由も簪と刀奈さんに懐いてるっぽいですしね」

「一気に義弟と義妹が出来るなんて、最高ね」

クスクスと笑いながら刀奈が言う。

一切れミカンを口に含んだ真はジト目で刀奈を見るが、彼女は気にしていないようだ。

「父さん達いないからいいですけど……てかまだ下で酒盛りしてるんですか？」

「ええ。私が上がってくるまではお父様と大胡さん、玲奈さんとで色々と話しながら飲んでいたわよ」

「二人があんなに飲むなんて知らなかったなあ。てか議長、じゃなかった蔵人さんも沢山飲んでますよね。蕎麦屋でもしこたま飲んでましたよね」

「お父様は家でも一番強いわよ」

「今ナチュラルのはずだったのに」

「お父様も楽しいのよ。家ではお母様にお酒を止められてるから。だからって少し羽目を外してるとは思うけど」

「……ま、年末ですし、たまにはもいいもんですかね。あー、炬燵最高」

そう言って残りのミカンを一気に口に含んで食べた真は炬燵に突っ伏す。

その様子を楽しそうに刀奈は眺めていた。

そして時刻は23:55

新年まで残り5分を切ったためか、年末特番でもカウントダウンが表示されていた。

「う……………後少し……………」

真由は炬燵に突っ伏しながら僅かに残った理性で眠気への抵抗を続けていた。だがもう敗北は寸前である。

「真由ちゃん、疲れちゃったんだね」

「もう寝落ち寸前ね」

「ですね。部屋まで運んできますよ」

「おっと、その役目は私よ。真君」

真由を彼女の部屋に運ぶ為に立ち上がった真であったが、すかさず立ち上がった刀奈がウインクしながらそう告げた。

「え？」

「お姉ちゃん？」

彼女の行動に真と簪は首を傾げる。

「真由ちゃん。お姉ちゃんと一緒に真由ちゃんの部屋行きましょうねー？」

「刀奈おね……ちゃん……うん、分かった」

そつと真由を立ち上がらせた刀奈はそのまま真由の手を取り、真の部屋を出て行く。

「新年迎えるのは2人きりの方がいいわよねえ？」

顔だけ扉に出した刀奈は楽しそうに笑ってぐつとサムズアップポーズをとった。

そして刀奈の行動の意図に気づいた。

「おつ、お姉ちゃんっ！」

「うふふ。それじゃ、頑張つてね！」

そう言つて彼女は扉を閉める。

「あの人、絶対楽しんでるよな」

「……うん」

横目でチラツと簪を見る。

顔を赤くして同じように、真を見ていた簪と目があう。

「とりあえず座ろう」

「うっ、うん」

そう言つて炬燵に真が入ると、すぐ横に簪が入ってくる。

その行動にドキリと心臓が高鳴った。

「……俺もさ、どうせなら2人きりがいいなとは思つてたんだ」

頬をかきながら真はそう告げる。

そして右手を簪の肩に回して抱き寄せる。

少しだけ驚いた様子を見せた彼女であったが、すぐに笑みを浮かべた。

「……真。私も同じ。真と2人きりがいい」

「ああ。ならこのままでもいいかな」

その言葉に簪が頷く。

新年まで残り1分を切っていた。

真のほうからそつと彼女の手を握る。

炬燵の暖かさとは異なる彼女の体温がとても愛おしく感じる。

「……あつたかいな」

「うん、真の手もあつたかいよ」

そしてテレビの電源を真は落とした。

時計を見ると残り三十秒で新年を迎える。

どちらとも目を閉じて、そつと唇を合わせた。

一分ほどそのままの状態であつた二人が離れる。

テレビをつけるとすでに新年を迎えた映像が流れていた。

「簪、明けておめでとう」

「明けておめでとう、真」

そう言つて微笑みあう。

「今年もよろしくな」

「うん。こちらこそ。去年行けなかつた所とか二人で一緒に行こう？」

「そうだな。今から楽しみだ」

今、この場所は確かに幸せで溢れていた。

その後初詣に向かつて二人であつたが、真が新年早々おみくじで大凶を引いてしまつ



たのは別の話である。

Episode of Lakhina  
【本当に救いたかった人】

PHASE 1 彼女との再会

——空に浮かぶ砂時計型の建造物

ああ、またこの夢か。ホント何なのよ。

いつも見るこの変な夢。起きてるときは不思議と忘れてるのに、夢を見ると思いつく。

——脱出艇と思われる船に一機の機動兵器が近寄る。

——脱出艇の上方から狙っている砲台が狙っていた。

この機動兵器、何なのかしら。日本のアニメ作品でもこんなの見たことないし。そう考えると、夢は続いていく。

——発射された閃光を機動兵器はシールドを使って弾く。

——だが次の瞬間、別角度から放たれたビームに、脱出艇は貫かれて、爆炎に包まれていく。

「あつ、ああ……っ!! フレイーっ!!」

——機動兵器のコックピットの中で自分と同じくらいの少年が涙を浮かべて叫んでいた。

私は、アンタなんか知らないのに……なんで、こんなに悲しいのよ。

泣いている少年の映像が途切れて、夢が終わる。

これが、いつも私が見ている夢。

何なのかは分からない。でもとても悲しい夢。

1月 IS学園職員室

「……」

見るからに不機嫌そうな表情のカナードが腕を組みつつ、宛がわれた机に座っている。

服装はいつもの戦闘服ではなく、フォーマルなスーツ。

冬休みが明け、I S学園では授業が再開していた。

その中で非常勤の立場にあるカナードにも授業に出て欲しいと言う依頼があった。

当初、カナードは断固としてその依頼を断った。

しかし、束とクロエの説得により渋々だが依頼を受けることとなった。

I S学園側がこの様な依頼をカナードにしたのは理由があった。

その理由は未だ、I Sと言う「力」に対する認識が弱い生徒が散見するのだ。

その為、希少な男性搭乗者かつ非常勤講師と言う立場にあるカナードに白羽の矢が立ったのだ。

仮とはいえ教師からの言葉ならば生徒達にも少なからず影響があるはずだと。

「様になっているじゃないか、パルス先生？」

「……織斑千冬」

「ん、すまん、聞こえなかった。何だ、パルス先生？」

わざとらしく咳払いした千冬が笑みを浮かべてカナードに聞き返す。

「……織斑教諭、何か用か？」

「君の妹のラキーナ。三組に転入されたが彼女はうまくやれているかどうか聞きたくてな」

そう千冬の言葉の通り、ラキーナはI S学園の一年三組に転入されていた。

年齢で言えばまだ中学一年生であるはずのラキーナがどうしてI S学園に転入できるのかと言えば、I S学園には飛び級制度があるからだ。

ラキーナは学力やI Sに関する技術共に、I S学園の飛び級制度の基準を満たしていた。

本人はあまり乗り気ではなかった。

しかし、一応の保護者とも取れる立場の束から、

「学生生活なんて今くらいしか出来ないんだから楽しんでおいで」

と言われ彼女も転入に納得していた。

もちろん有事の際には束に協力する事は伝えてあるが。

余談ではあるが、一時期専用機持ちを一組にクラスを変更させると言う案も出たが却下されていた。

専用機持ちだけの鼻屑にも取れるし、クラスの変更など他の生徒達からしてみれば混乱を招くだけだからだ。

「特に問題があったとは聞いていない。中々うまくやれているようだ」

「そうか、それはよかった。ところで午後の一組と二組の合同授業だが、お前も出てくれないか？生徒に実技を見せれるのが真耶と私だけでは手が足りないからな」

「……どうせ拒否権などないんだろう？」

「分かっているじゃないか。真耶との模擬戦を見せてやってくれ。お前の技量ならば生徒達もいい刺激を受けるはずだ」

「……了解した」

ため息をついてカナードは了承した。

## 同刻 一年三組

ラキーナは自席で参考書を読みつつSHRを待っていた。

ちなみにIS学園の制服は袖を一部カットしてインナーが見えるようにしている。

結構大胆な改造であるが、特に何も言われていないため問題はないのだろう。

そんな彼女に、クラスで出来た友人の一人である黒髪の少女——【君島朱里<sup>きみしまあかり</sup>】が話しかけてきた。

「ねえねえ、ラキーナ！今ダイジョブ？」

「はい、大丈夫ですよ」

彼女は転入してきたラキーナに一番最初に話しかけてきた生徒であり、すでに友好的な関係を気づいていた。

ラキーナが三組に転入されて、すでに一週間ほど経過していた。

朱里の他にもすでに友人グループとも言えるメンバーが彼女の回りにいる。

(最初はどうなるかと思っただけ……皆よくしてくれて、良かった)

友人達に感謝していると、朱里がラキーナに質問を投げかけてきた。

「カナード先生って今フリー？」

「えっ、えっとフリーってその……」

朱里からの質問と同時に、教室内が一気に静まり返るのを感じた。  
皆、朱里の質問に対する返答が気になっている様だ。

「もー、朝からやめときなよ……といいつつ私も気になるのであった。どうなのそのところ？」

朱里と同じ時期に友人となった紫髪の少女〔橘愛理〕（たらはなあり）も話に便乗してきた。

「兄妹なら知ってるでしょ？ねー、いいでしょー？」

「えっと……いいのかな、これ言っちゃって」



「おっ、おっ!? 答えはっ!?」

朱里の言葉に教室中の女子生徒が耳を澄ます。それを内心苦笑しつつ、ラキーナが返答した。

「兄さん、大切に想っている人居ますよ?」

エクスカリバー迎撃作戦の後、カナードとクロエの関係はより親密になったようであつた。

クリスマスイブの日は疲れて眠ってしまったが、その翌日に束から教えられたのと、嬉しそうにしていたクロエの態度から推測している。

(兄さんもやることやってるんだなって思ったなあ……最近やけにクロエちゃんの身体気づかってるみたいだし)

ラキーナの言葉に静かに聞き耳を立てていた3組のクラスメイトは全員、目を見開いて驚いていた。

中にはがっくりと膝をついている者もいた。

「なん……だと……!?!」

「うぼあー!」

「飛鳥君に続いてかー!まさかの先生までー!そういうのとは無縁そうなのにー!」  
「くっ、こうなったら織斑君を……はっ、殺気っ!?!」

阿鼻叫喚の地獄絵図。

朱里は呆然としつつ、愛理は変な叫び声を上げて頭を抱えた。

何名かの生徒は一組と二組から飛んで来る殺気に身を震わせていたが。

「あはは……皆凄いなあ。つと、もうSHRの時間か」

だがそんな阿鼻叫喚の地獄絵図もSHRの時間が来れば自然と収まった。

朱里や愛理からは、追求したいと言う目線を感じるが朝から教師に叱られたくないの  
だろう。

少女達は気持ちに蓋をしてSHRを迎える。

教室に担任の女性教師が入室してくる。

「なにやら騒がしかったけど……どうかしたの？」

「イエ、ナンデモアリマセン」

朱里が片言で返し、ラキーナはそれに苦笑していた。

「そう？ならいいんだけど。つと今日は皆さんにお知らせがあります。入ってきてください」

教師のその言葉に教室の扉が開いて、一人の少女が入室してくる。

真っ赤な宝石の様に輝いて見える「赤髪」に気品を感じさせる佇まい。

早速制服をセシリアと同じようにドレス上に改造しているようであったが、それが醸し出す雰囲気をより一層上品なものにしていた。

「今日からのクラスに彼女が転入されることになりました。自己紹介を」

「はい」

少女は教師に返事をして、クラスメイトに会釈してから告げた。

「フランスの代表候補生、『フレイ・シュヴァリイ』です。以後よろしくお願いします」

そう言ってフレイと名乗った赤髪の少女が会釈する。

（フっ、フレイっ!? なっ、なんでここにっ!?）

驚愕にラキーナは瞳を見開いた。

転入生として現れた少女はかつて、目の前で守れなかった「フレイ・アルスター」に酷似していたのだから。

ファミリィネームは異なっているが、それ以外はフレイ・アルスターそのものである。

「えーっと、そうね。パルスさんの隣、空いてるわよね? シュバリイさんの席はそこで」

「分かりました」

「っ!？」

教師がそう告げると、フレイはラキーナの隣の空いている席に座った。そしてラキーナに向かってニコツと微笑を浮かべて話しかけた。

「よろしくね、えつと……ラキーナ・パルスでよかったかしら？」

「えつ、あつ、うん。よつ、よろしく……お願いします。フレイさん」

驚愕と緊張のあまりに少しどもりながら彼女に返す。

その様子を見たフレイは苦笑していた。

「何ビクビクしてるの？私そんなに怖い顔してる？」

「いや、そんな事は……ないです」

「ふーん……あ、そっか、アンタ飛び級で2つ下だもんね。いいのよ気にしなくて？」

笑みを浮かべたフレイ。

その笑みはかつてのフレイ・アルスターと全く同じであった。

「うっ、うん。ところでフレイ……さん」

「さん付け止めなさいよ。それで、何？もう授業始まるわよ？」

「あつ、すぐ終わるから。C・Eコスミック・イラって言葉に聞き覚えはある……ありますか？」

緊張しながら核心を尋ねたラキーナであつたが、フレイは首をかしげた。

「C・Eコスミック・イラ？ 何それ、何かの映画のタイトル？」

首をかしげながら授業の準備を始めるフレイ。

（彼女は……覚えていないのかな？でもデュランダル議長……蔵人さんの例もあるし、思い出してないだけなのかな？）

C・Eの記憶を持つものは最初から持っていたものと、後から思い出した者に分かれている。

大体が前者であるが、身近な例だと更識蔵人——【ギルバート・デュランダル】の例

もあった。

その為、フレイも思い出していないだけなのではと一人、思考の海に沈んでいく。

そして授業が開始され、数十分後。

プログラミングの課題が出され、皆必死に課題に取り組んでいた。

「あら、凄いわね、ラキ。プログラミングもう終わったの？」

課題であるプログラミングは、ラキーナにとっては大して難しいものではなかった。

その為ため、考えながらも終わらせていた。

それを確認したためか、デイスプレイを覗き込んで驚きながらフレイは言う。

だが今のラキーナはそれどころではなかった。

何故ならば、ふわりと彼女の赤髪がラキーナの顔の目の前を横切ったからだ。

髪から香る芳香。

女性特有の香りに、今は女性であるはずのラキーナはドキリとしてしまっていたからだ。

「どしたの？」

「……なんでもないです」

鼓動を早めている心臓を押さえつけられたら押さえつけたいと考えつつ、ラキーナが返す。

「……ふーん。よし、私もさっさと終わらせないとね。あ、ラキーナ」

「はい？」

「放課後、アリーナ使って一緒に訓練しない？まだ施設全部把握してないから、案内して欲しいのよ」

「……分かりました」

「ん、ありがと。ああー、もうプログラミング苦手っ！」

フレイはそう言ってディスプレイを凝視して作業を進めていく。

（確かめない。本当に彼女がフレイなのか……どうなのか）



そう、ラキーナは決心していた。

---

昼 食堂

「真、あんまりハンバーガーばかりだと身体壊すよ?」

「そんな連日食ってるわけじゃないから、大丈夫だって……というか、今日は簪もじゃないか」

「うっ……それはそうだけど、そういう気分だったから」

有名ハンバーガーチェーンの紙袋を持った簪が言う。

真と簪の二人は午前中、所属企業である日出工業の支部にとある用事で呼ばれていた。

日出工業にて開発している量産型ISの試作機がようやく稼働段階に入ったため、その試験の為に。

用事も終わらせて、学園に返ってくる際に昼食の為にハンバーガーを買っていた。二人が空いているテーブルを見つけて座る。

相席しようとする生徒たちはいなかった。

一部うらやましそうに見ている生徒たちはいたが、それはもう無視することに二人はしていた。

「まあいいけど。それはそうと、それピクルス入ってた気がするんだけど大丈夫なのか？」

真の言葉にはっと包み紙を開けて簪は中身を確認する。

ソースの中に確かにピクルスがいくつも見えた。

簪が少しため息を付いて、困った顔で真を見上げた。

「……真、お願いがあるんだけど」

「後でピクルス、抜いてくれれば食べるからさ」

「ありがとう、ごめんね」

「あははー、熱々だねー！」

テーブルにドーナッツを持った本音が相席しつつニコニコと告げる。

二人が少しだけ赤くしてごほんと咳払いした。

そして真が本音が何かの紙を持っていることに気づき、話を切り替えるために尋ねる。

「本音さん、その紙は？」

「んふふー、見て驚くのだー！」

本音がそう言って真に見ていた書類を手渡す。

一旦ハンバーガーをテーブルにおいて、手を拭いた真はその書類を受け取る。

その横から同じようにドリンクを置いた簪が覗き込む。

「これって、ドラグーン適性テストの結果用紙？」

ドラグーンを操作するためには「空間認識能力」が必要になる。

日出工業でもドラグーンの適正テストを行うことで搭乗者や技術者の中から適正のある者を見つける試みが行われていた。

余談ではあるがこのテストを作り上げたのはジェーンと束であり、彼女達によるとド

ラグーン適性とBT適正はほぼ同一のものらしいとの事だ。

「しかも評価、Aつ、凄いじゃないかつ！」

「えへへー、私も驚いてるのー」

「……俺、下から2番目の評価Dだったからなあ」

「私は評価Cだった。凄いよ、本音」

当然、真や簪もそのテストは受けていた。

真の結果は全6段階の内、下から2番目のD。簪は評価Cであった。

ドラグーンを操作するには最低でも評価Cの適正が必要なため、簪はドラグーンを操作できるが真には不可能なのだ。

それを思い出して真は苦笑していた。

「あすあす、セツシーのビットとか見切れてるのに評価低いんだ」

「ドラグーンって本当に適正ありきの武装だしな。ドラグーンは動かすよりも対処する方がなれてるってのものある、対処方法は身体に叩き込んであるしね」

そう言つて本音に書類を返す。

「日出全員がテスト受けたらしいけど、適正だと簪と利香さんの評価Cが最高だったよな」

「うん。この結果、もしかしたら本音にも専用機……開発されるかもしれないね」  
「専用機かあ」

珍しく悩むように本音がその言葉を反芻した。

「ん、悩むことなのか？」

「確かに欲しいとは思うんだけどねー。私はあすあすやかんちゃん機体を整備出来るほうが楽しいし、好きかなーって。いや、もちろん悩んでるけど」

「本音、そういうのはちゃんと決めないと」

簪が本音に告げるが、真が何かに気づいたように告げる。

「……考えてみれば開発されるとしてもおそらくは第一世代ドラグーンになると思うか

ら、本音さんが協力しない限りは難しいだろうな」

「第一世代？ドラグーンにも世代があるの？」

「それは初耳」

本音と簪が真の言葉に疑問符を浮かべた。

「ああ、これは受け売りなんだけど。ドラグーンの第一世代はこのテストで判別できる空間認識能力がないと使用できない代物なんだ。ISで積んでいるのだとクロエの「Xアストレイ」だな。後セシリアのブルー・ティアーズもドラグーンとほぼ同じだから第一世代相当だな」

「なるほどー、それじゃ第二世代ドラグーンは？」

「こっちはある程度インターフェイスを改良されてレスポンスが向上したヤツだな。第一世代ほどの空間認識能力は必要ないんだ。ま、操作難易度は高いままだけど。ISで積んでいるのは……ないな。デステイニーに装備されてるフラッシュエッジII、飛燕に装備されてるフラッシュエッジも簡易化されたドラグーンではあるんだけどね」

「フラッシュエッジもドラグーン技術なんだ。自動追跡装置<sup>A</sup><sub>T</sub>が積まれてるのは知ってたけど」

「戻ってくる処理は基本マシン任せだからな」

そう言つて真がハンバーガーをかじる。

「あ、話は変わるんだけど、三組に転入生がきたんだよー」

「転入生？」

「うん、フランスの代表候補生だつて」

「シャルロットと同じか」

「そう！そして何でもラキーナちゃんと放課後に模擬戦をやるらしいの！」

「転入初日からつて、凄いね」

「だな。相手はラキーナか。厳しいんじゃないか？」

ラキーナの実力を知っている真からすれば、その転入生はかなり厳しい戦いを強いられるだろう。

それは簪も同じ考えであつた。

「真、気になつてる？」

「まあな。簪、放課後暇なら整備のついでに見に行かないか？」

「うん。いいよ、大丈夫」

「私も行くー！」

「んじゃ、3人で……まあ、一夏達も来るんだらうけどな」

そう真は返して自身のドリンクであるコーラに手を伸ばした。



# PHASE 2 黒

放課後 第3アリーナ

転入生であるフレイと、ラキーナの模擬戦が行われるという噂は昼休みにはすでに全校生徒に知れ渡っていた。

片やフランスの代表候補生、片や飛び級で転入してきた男性搭乗者の妹。話題性は抜群であった。

すでにアリーナの観客席には多くの生徒が待機しており、模擬戦が始まるのを待っていた。

その中には真達の姿もあった。

真の左隣に簪が、その隣に本音が座っていた。

「人多いな」

「うん。二年生や三年生もいるね」

「皆興味津々だねー」

そんな三人を見つけて声をかける男子生徒がいた。

「おつ、真に簪さんにのほほんさん。見に来てたのか」

それは当然、友人である一夏であった。

一夏に続いて箒、鈴、シャルロット、ラウラ、そしてセシリアのいつものメンバーが揃う。

「ああ。来ると思ってたから席取っておいた」

「おつ、サンキュー」

真達の傍の空いている席に一夏達は腰を下ろした。

「転入生、フランスの代表候補ってことは、シャルロットは知ってるんだよね？」

一夏達が座ったことを確認した真は、シャルロットに尋ねる。

「うん。でも彼女とは2、3回会った事しかないんだ」

「そうなのか？」

「ほら僕は色々あったしね……まあ、今は父さんとは仲いいけどさ」

はははと乾いた笑みを浮かべるシャルロット。

それに苦笑していると、グループに近づく気配を感じ振り返る。

「お前達も来ていたか」

振り返った先には、スーツ姿のカナード。

本日の担当分の授業を終えた彼も、観戦に来ていたのだ。

ジャケットを脱いで、ネクタイを少し緩めていた。

「カナードも来たのか」

「ああ……何だお前達、俺に何かあるのか？」

真に返事をした後、カナードは一夏達に視線を向ける。

一夏達全員が驚いたような表情をしていたからだ。

「いや、不思議と違和感がなくてな」

「スーツ姿様になつてるじゃないってね」

「いつもの服と雰囲気が違うから新鮮だし、僕はいいと思うよ」

「よく似合っていますよ、カナードさん」

「……好きで着ているわけじゃないがな、礼は言っておく」

カナードはため息をついて返す。

「ところで真」

「ん？」

「あのフレイと言う代表候補生の事だが……」

カナードがそう話を切り出した瞬間であつた。

Aピットから件の少女、フレイがISを纏って射出された。

彼女が纏う機体は「ラファール・リヴアイヴ」

パーソナルカラーなのか、機体全体が黒色。

一般的なラファール・リヴアイヴよりも機動性を重視しているのか、スラスターを増設しているようだ。

また機体背部にはMSで言うランドセルの様な接続コネクタが見える。

「色が【黒い】けど【ラファール・リヴアイヴ】だよな、シャル」

「うん、【黒】って彼女のパーソナルカラー見たいなモノなんだ。それ以外はラファールのカスタム機だよ。機体全体に姿勢制御スラスターを増設してるんだ。でもあんな背部コネクタなんてなかったと思うんだけどなあ」

尋ねた一夏にシャルロットが答える。

「それでカナード？」

「いや、試合の後でいい」

そう真に告げた彼の、フレイの機体を見る視線はどこか鋭かった。

フレイの射出に数秒遅れて、Bピットからラキーナのストライクが射出された。

装備しているストライカーパックは「エールストライカー」だ。

IS「インパルスガンダム」の「フォースシルエット」と同じく高機動戦闘に適した標準的な装備を持つストライカーパック。

フレイの機体が未知数であるため、様子見もかねて使い慣れたエールをラキーナは選  
択していた。

そんなラキーナの機体を観察するようにフレイは見ていた。

そしてオープンチャネルを送る。

『「飛鳥真」の機体の形態移行前、「インパルスガンダム」だったっけ？似てるわね、その  
機体』

『コンセプトは同じですからね。そちらはラファール……ですよ？』

『ええ。あつ、もしかして黒いから一瞬わからなかった？』

ちよつとだけ得意そうに彼女は笑う。

得意げに胸を張った際に、自身とは比べ物にならないほど豊かに育った二つの果実が

ぶるんと揺れたのをストライクのセンサーは拾っていた。

心臓が跳ね上がるのを何とか抑えたラキーナは、一度深呼吸して告げる。

『……それでは……行きますっ！』

エールストライカーから得られる推力を持って横方向に加速。

加速と同時に展開したビームライフルの照準をラファールに合わせ、トリガーを引く。

『ビーム兵器まで同じとはねっ！』

射線を読んでいたフレイはスラストターを噴かして、ライフルの射撃を避ける。

回避行動と同時に展開し専用アサルトライフル【サウダーデ・オブ・サンデイ】を二丁展開、両マニピュレーターに構えた。

『今度はこっちよっ！』

炸裂音が木霊し、弾丸が次々にストライクに向かっていく。

だが、ラキーナはその弾丸をスラスト制御とAMBA Cで躲していく。

アサルトライフルは弾幕を張る事が出来る為、躲しきれない部分もあるがそれについても冷静にシールドで弾く。

ビームライフルはアサルトライフルと比べて速射は効かないが、その分精密な射撃を行うことができる。

加えてラキーナはキラ・ヤマト時代から格闘よりも射撃に秀でていた。

それは生まれ変わった今でも変わっていない。

『そいつー！』

回避を続けつつ、弾幕の切れ目を狙った反撃のビームライフルの一射。

放たれたビームは、フレイのアサルトライフルを正確に貫いていた。

咄嗟にアサルトライフルを投棄したフレイは舌打ちして毒づいた。

『どんな腕してんのよアンタっ！』



自機を正確に狙ってくるラキーナの射線と飛来するビームを回避しつつ、フレイが叫ぶ。

いくつかフェイントが混ざっていたため、完全な回避はできずにシールドバリアに直撃し、エネルギーは減っていく。

---

「ラキーナ、やっぱ強いよなあ」

一夏がそう呟く。

その呟きをカナードが拾う。

「高速機動での射撃戦はアイツの得意分野だ。お前も模擬戦で嫌と言うほど味わっただろっ」

「ああ。こっちの攻撃は全部避けられて距離取られてさ。ダブルイクニッションブースト二重瞬時加速で詰め寄ろうにも予測されてたのか撃ち落とされたなあ」

模擬戦を思い出して一夏が苦笑した。

第二形態移行した〔白式・雪羅〕は機動力でいえば現行のISの中でも間違いなく上位に位置している。

また、移行した際に発現した多機能武装腕〔雪羅〕の荷電粒子砲のお蔭で遠距離攻撃手段も獲得している。

しかし〔I. W. S. P.〕や〔フリーダムストライカー〕を使用すれば同レベルの機動力を得ることができるストライクが相手。

単純な機体性能ならばほぼ互角であった。

加えて射撃武器の性質が異なるのも響いていた。

グステイニーやドレッドノートH、ストライクが使用する標準的なビームライフル。

また内蔵武器や固有兵装に使用されているビーム兵器はある程度連射も可能である。

所謂スナイパーライフルタイプの荷電粒子砲では手数が足りない。

一夏本人が射撃を苦手としているのも合わさり相性は最悪とも言えるだろう。

ただビームライフルの射線を読み切って〔零落白夜〕で切り裂くと言う成果を上げたため、善戦したとは言えるのだが。

「あの精密射撃でこっちの攻撃動作を潰してくるのはいやらしいわよね、あの子。それにはまだ使っていないけどあの〔フリーダムストライカー〕のフルバーストだっけ？あ

れ威力高すぎない？」

「フリーダム系列の最大火力だしな。まともに喰らえばシールドエネルギーもかなり持つていかれるだろうさ」

鈴の言葉に真が返す。

オリジナルである「フリーダムガンダム」と相対したことがある真からしてみれば彼女の意見もよく分かる。

ハイマツト・フルバーストモードと言う仕様外の機能が搭載されていた「フリーダムガンダム」はまさにC・E・では伝説になるレベルの戦果を挙げていたのだ。

当時のザフト軍が何度苦渋を舐めさせられたか、数えるのも億劫だ。

現在はMS時とは違ってモードの切り分けが必須になるISでは多少隙ができる。

しかし、相手がラキーナでならばそのタイミングをつくのはシビアだろう。

そんなことを考えていると模擬戦にも変化が訪れていた。

『やるわね、ホント。二歳下とか思えないわよ』

ストライクは先程から徹底して中距離を維持したまま、ビームライフルによる精密射

撃を行っていた。

それによりフレイのラファールのシールドエネルギーはすでに4割を切っていた。

だがフレイの顔には笑みが浮かんでいる。

それはまだ余力を残しているから浮かぶものであった。

『でもまだこれからよっ、さあ、行くわよ【ノワール】っ!』

フレイの声と共に、【黒い追加パッケージ】が量子展開され、ラファールの背部接続コネクタに接続される。

巨大な可変ウイングユニットに射撃用の連装リニアガン、そして接近戦用の大型実体剣。

その外見はラキーナのストライクが使用する【I. W. S. P.】に酷似していた。フレイの切り札にラキーナの瞳が見開かれる。

出現した追加パッケージの正体を彼女は知っているからだ。

(あれは……【I. W. S. P.】っ!?!いや違う、あれは……っ!)

『さあ、ここっからが第2ラウンドよっ!』

追加パッケージ【ノワール】のスラスタターが火を噴く。

パッケージ未装着時とは比較にならない速度で動く、フレイのラファール。

正式名称【ラファール・リヴァイヴ・ノワール】は可変ウイングユニット内の連装リニアガンを放ちながらストライクに迫る。

「あれは【ノワールストライカー】っ!？」

真が驚愕と共に立ち上がる。

その反応に驚きつつも、簪が彼に問う。

「【ノワールストライカー】って？」

彼女の質問に我に返った真が、座りなおしつつ答える。

「『ノワールストライカー』。連合の一部隊で使用されてたMS用のストライカーパックさ。『I. W. S. P.』のコンセプトを継承させてなおかつその万能性を殺さずに、近接格闘に特化させてるんだ。そういえばインパルスのシルエットにも候補で上がってたな。第二形態移行したからペーパープランで終わったけど」

「そんなものをどうして使っているんだろう。彼女があんなパッケージを使ってるなんて僕、初耳だよ」

真の言葉にシャルロットが疑問の言葉を出す。

「流出した技術情報によってフランスはコピーを作成したんだろう……あくまで可能性だがな」

カナードの言葉にシャルロットが苦笑いを浮かべている。

フランス政府は歌姫の騎士団ともつながっていた過去がある。

流出した出所は恐らくデュノア社だろうと、シャルロットとカナードは予想していた。

「……しかし完全なコピーという訳ではないようだな。近接武装がIS用の実体剣になっっている」

「ああ。ノワールストライカーの近接武装は確か【フラガラツハ3】。エクスカリバーやバルムンクに近いビーム実体剣だったはずだ。ラキーナのストライクの【I. W. S. P.】が装備してたな、そう言えば」

「PS装甲に対して効率よくダメージを与えるためにはビームを使ったほうがいいと、あいつが設計段階から束に告げていたからな」

「おそらく技術をモノにできなかつたんだろう。世界各国のIS研究機関が真、日出経由で流れている日出のビーム粒子発生技術や操作技術を実戦レベルで再現できていない。ドイツ軍でも同じだ」

真とカナードの言葉を裏付けるように、ラウラが続ける。

「……今後も技術流出による影響が出そうだな、カナード」

（……あの女、やはりそうなのか？）

真の言葉に頷きつつ、カナードはフレイへの疑惑を深めていた。

『くっ、速いつ！』

リニアガンを回避しつつ、ビームライフルでフレイを狙う。

だが、機動力と運動性能が比較にならないほど向上している為、射線を読まれて躲かれてしまう。

『やあっ！』

そして至近距離に持ち込んだラファールの実体剣「ダン・オブ・サーズデイ」の一撃がストライクのビームライフルを切り落とす。

返す刃でストライク本体を狙うが、ライフルを破壊された時点で即座に後退していたストライクには届かなかった。

だがそのままスラストターを噴かして密着。

再度ブレードを振り下ろす。

『ぐっ！』



咄嗟にビームサーベルを展開してその一撃を受け止める。

アンチビームコーティング施されている為か、ブレードを切断することはできずに鏝  
迫り合いになる。

ビーム粒子が火花となって飛び散り辺りを彩っていた。

『さあ、どうしたの、ラキーナっ！あんたもまだ本気出してないんでしょっ!?!』

笑みを浮かべてフレイはラキーナに告げる。

だがラキーナの脳裏にフラッシュバックしたのはかつての記憶。

(あんた…自分もコーディネイターだからって、本気で戦ってないんでしょ!!)

無論、今のフレイ自体が言ったわけではない事は理解している。

だが同じ顔の少女に、同じような言葉を言われた為か、トラウマが蘇ってしまったの  
だ。

(違う、あの時の言葉とはっ！彼女はただ真剣に試合しているだけなのにつ！)

自己嫌悪を感じつつ、それを振り払う。

だがそのせいかビームサーベルを握る手がわずかにぶれた。

『っ、隙ありっ！』

『ぐうっ!?!』

鏑迫り合いを押し切ったブレードがストライクの胸部装甲に直撃して、シールドエネルギーが減少する。

ここまでビームライフルによる消費しかしていなかった為か、まだ余裕はある。

だがフレイの攻撃は止まらない。

ブレードを使用してさらに連撃。

咄嗟に瞬時加速による後退を選択する。

『読んでるわよっ！』

彼女の言葉と同時に、背部のノワールストライカーより「アンカーランチャー」が発射される。

『この程度でっ！』

即座にAMBACと各部姿勢制御スラストターによる姿勢制御。

そして飛来してくるアンカーランチャーはビームサーベルで切り払った。

『今のをやりすぎすってのっ!?!いいわ、燃えてきたっ！』

それに驚愕しつつも、フレイは興奮した様子で続ける。

『本気だしなさいよっ、ラキーナっ！』

ブレードで再度斬りかかってくるラファール。

(……フレイ)

エールストライカーが格納されて、別のストライカーパックへと換装する。  
その様子を確認したフレイは連装リニアガンを放つが、次の瞬間にはストライクを口  
ストしていた。

『っ、はやっ!?!』

いや、正確にはロストした訳ではない。

ハイパーセンサーはしっかりと反応を捉えていた。

ハイパーセンサーで感知できても人の身体が追いつかないのだ。

アリーナ上方を見上げると、そこには――

(機械の天使?)

機械天使。

今のストライクはまるで天使のようにも見える。

そのストライカーパックはフリーダムの名を持つモノ。

8枚の機械の翼を背負った自由の名を持つ装備。

【フリーダムストライカー】

(あれは……私はあれをどこかで見たことがある?)

身に覚えのないデジャヴを感じたフレイであったが、今はそれを無視する。

『確かめる為に私も本気で……本気で行くよ、フレイっ!』

自由の翼を広げたストライクと共にラキーナが翔る。

## PHASE 3 怨念を抱く者

『っ、速すぎるっ！』

フレイの叫びと共に、彼女に向かってビームが降り注いでくる。

それを発射したのは彼女より上方を取っているストライク。

フリーダムストライカーを展開した今のストライクの機動力は、先程までのエールストライカーとは比べ物にならないレベルで高まっている。

ノワールストライカーの可変ウイングに搭載されたリニアガンから弾丸を放つが全て紙一重で躲かれている。

そして背部の機械翼が可変し、「バラエーナプラスマ収束ビーム砲」が展開。

即座に反撃として高出力ビームを放ってくる。

回避して反撃に距離を詰めようとしても、機動力の差から徹底的に中距離を維持されてしまっていた。

降り注ぐバラエーナの直撃を受けて、フレイは体勢を崩す。

エネルギーも残り一割未満、すぐにエネルギー切れで動けなくなる。

『……まさかこんなに強いなんてねっ、見誤ったなあ……』

思わずフレイはそう零してしまった。

すると上方のストライクが新たな動きを見せていた。

機械翼を展開した高機動モードと思われる形態から、両肩にビーム砲、腰部に追加で2門の砲塔が展開された形態へ変化していた。

(あれは……砲戦形態！)

形態を切り替えたストライクが何をしてくるのか、フレイにはなぜか理解できた。

(でもあの状態だと動きが鈍いはずっ、って何で私は……あの形態を知ってるの？弱点までわかるなんて……！)

そしてその形態の持つ威力と弱点も不思議と理解できていた。

『その形態なら避けられないでしょっ!』

先程から崩れた体勢のまま、手に持ったブレードを投げ付ける。

『っ、ぐっ?!』

ISのパワーアシスト込みで投げ付けられたブレードは、フリーダムストライカーの左バラエーナの砲口を正確に貫いた。

完全に体勢を崩していたフレイからの思わぬ反撃を、ストライクは避けられなかった。

フルバーストモードに切り替え、運動性能がガタ落ちしていた事に加え、トリガーを引く寸前だったからだ。

射撃間際だったエネルギーは行き場を失って暴走、特徴的な機械翼の左半分は綺麗に吹き飛び、背部スラスターにも影響が出ていた。

そしてその分、ストライクのシールドエネルギーは大幅に消費していた。だが今そんなことはラキーナの思考から排除されていた。



(今の行動、フルバーストの弱点、運動性能が低いってことを知っているっ!? やっぱり彼女は……っ!)

確信にも似た答えを得た。

やはり彼女は自分の知っているフレイだと。

ただ思い出していないだけなのだ。

そんな時、繋がったままのチャンネルからフレイの焦るような声が響いた。

『あつ、やばつ、ノワールのエネルギーがっ!』

ストライクへの咄嗟の反撃でエネルギーが切れたフレイのラファールはゆっくりと降下していたのだが、PICを維持するエネルギーも切れたのか落下していく。

まだ地上まで30mはある。

落下すれば大事故につながる事は目に見えていた。

『フレイっ!』

彼女の意識の中で【紫の種】

——【S・E・E・D.】がはじけ飛んだ。

『今助けるっ！』

すでに大半の機能を失い、スクラップ寸前のフリーダムストライカーをパージ。

代わりに展開されるのは、ノワールストライカーに似た大型の背部パッケージ【I・W・S・P.】パックだ。

フリーダムストライカー並の機動力を得ることができるが、I・W・S・P. はどちらかと言うと近接戦闘に適しているストライカーパック。

身体が未成熟な彼女にはまだ適していないが、今はそんなことを言っている場合ではない。

『はあああああつ!!』

ダブルイグニッションブースト  
【二重瞬時加速】

爆発的な加速、大切な人を守る為にラキーナは駆ける。

地表まで約5 m、激突寸前に彼女を抱きかかえて減速。  
そのまま、着地した。

『……大丈夫?』

『えっ、ええ……ありがと、ラキーナ。助かったわ』

所謂お姫様抱っこの状態で少し恥ずかしそうにフレイはラキーナに答える。

紅潮したフレイの顔と今の状況を整理できたラキーナが同じように顔を赤くして答える。

『あつ、ああっ!ごっつ、ごめんなさいっ!すぐに下ろすからっ!』

『……あら、もう降ろしちゃうの?』

その反応が面白かったのか、フレイはラキーナの耳元で囁く。

その言葉にさらにラキーナの顔は真っ赤になった。

『ふっ、フレイさんっ!?!』

「冗談よ、ありがとう。そして強いよね、ラキーナは。でも今度は私が勝つわよ？」

ウインクしながらラキーナにそう返して、I Sを解除したフレイは待機状態、「ネットレス」になったノワールを手にストライクから降りる。

同時に模擬戦終了のコールが響いた。

---

### 模擬戦終了後

白熱の模擬戦が終わった後、生徒達は各々の訓練や自由時間を過ごすために解散していた。

一夏達も同じく別アリーナに向かい、訓練を行っている。

アリーナに残ったのは、整備室に向かった簪と本音の二人と別れた真。そしてカナードであった。

試合前に言っていた話をするために残っているのだ。

自販機で買ってきたコーヒーを真が投げ渡し、カナードは見ずにキャッチする。

「……彼女、フリーダムの弱点を知ってるみたいだったな」

「最後の反撃はフルバーストの発射の瞬間を確実に捉えていた。運動性能が悪化しているという弱点を知っていなければできない。正確には知っているとよりは思い出したというのが正しいだろうがな」

缶コーヒーを開けつつ、カナードの言葉に真が頷く。

「つてことは……彼女もか？」

「ああ。お前は「アルスター」と言う名を知っているか？」

「……アルスター。確か大西洋連邦のお偉いさんだったな。ヤキン戦役で亡くなったらしいけど」

まだオーブにいた頃。

戦争とは無関係だった頃に、テレビで流れていた。

そのかすかな記憶を思い出した真に、カナードが頷く。

「ああ。おそらく【フレイ・シュヴァリイ】は大西洋連邦事務次官ジョージ・アルスター

の一人娘、「フレイ・アルスター」だろう」

「なるほど。でもやけに詳しいなお前」

「連合の一派、特に過激派「ブルーコスモス」では、彼女を英雄視する輩もいたからな。そういうった輩に詳しい人間を俺は知っていた」

カナードも受け取ったコーヒーを開けて口に含む。

ブルーコスモスという単語が出た瞬間、真の表情が歪んだ。

「……待てよ、ただの事務次官の娘だろ、何でだ？」

ニユートロン・ジャマー・キャンセラ

N J C の情報を彼女が連合にもたらしたんだ。詳細な経緯は不明だが、彼

女が得たN J C のデータから地球連合は再び核兵器を使えるようになった」

「……それならブルーコスモスが英雄視するのも納得だ」

「まあ、そこはどうでもいい。本題は彼女は敵かどうかという所だ」

カナードは一気にコーヒーを飲み干して、缶を握りつぶす。

まるで敵ならば叩き潰すと暗示しているかのようだ。

「どうだろうな。見たところC・Eの事完璧に覚えてるわけじゃないみたいだし。経過観察って所じゃないか？」

「……やはりそうか。ラキーナに見張らせてはいるが、どうも彼女と何かあったみたいだからな。念のためお前にも頼みたい」

やっぱりそうなるかと真の予想は的中してしまった。

それに内心ため息をつきつつ、答える。

「……俺、生徒。お前仮でも先生。なんとかならないのかよ」

「出来るだけいい。俺も三組で授業を行う際は見ておく。もちろんこの話は束や織斑千冬にも通しておく」

「……分かったよ。出来る範囲でな」

真もそう言ってコーヒーを飲み干した。

まだ敵と決まったわけじゃないが、様子を見ておくに越した事はない。

その後適当に雑談した後、二人は別れた。

## 同日 学生寮

ラキーナとフレイの模擬戦が終了して二時間後。

すでに日も落ち、大半の生徒達は学生寮に戻ってきていた。

それは真達も同じであり、各々の部屋で自由時間を過ごしていた。

「やっぱりOPにSEがついてるアニメはいいアニメ。【輝煌勇者ファルセイバー】、一緒に見よ、真？」

ソファに座りながら、ノートPCをモニタとつなげて勇者シリーズと言われる長寿アニメのOPを流している簪が言う。

その隣でOPを見つつ、真が頷く。

「年末にも見たけど、昨日はファルセイバーが復活してグリッターファルセイバーになった回だったな。あれは心が躍ったなあ」

「うん。あのシーンは何度見てもいい。今日は続きからだね」



簪の実況解説が挟まりつつ、アニメを視聴し続けてさらに二時間たった。夜も深まった頃、真の携帯から呼び出しのコールが響いた。

「ん？」

「電話？」

「みたいだな」

一旦アニメの視聴を中止した真は、デスクの上に置かれている携帯をとる。着信には更識刀奈と表示されている。

「刀奈さんからだ」

「お姉ちゃんから？ どうしたんだろう……」

すでに寮の消灯時間は近い。

そんな夜中に刀奈が自身に電話をかけてきたことが気になるが、とりあえず出て見ないことには始まらない。

「もしもし、飛鳥です」

『ああ、真かい？私だ、蔵人だ。夜分すまないね』

かけて来た相手は簪と楯無の父親である、更識蔵人であった。

「蔵人さん？」

「え、お父様？」

真の言葉に簪が反応する。

『何分緊急の用件でね、刀奈の携帯を借りてかけているんだ。簪も一緒だろう？ならスピーカーに切り替えてくれ、代表候補生としても知っておいたほうがいい情報だ』  
「分かりました。それと緊急の用件……ですか？」

携帯をスピーカーモードに切り替えて、蔵人の声を簪にも聞こえるよう調整する。  
緊急と言う言葉に嫌な予感を感じた真であったが、それはすぐに的中した。

『ああ。前置きは抜きだ。数時間前、エクスカリバー事件の後に国際警察機構 日本支部で拘束されていた歌姫の騎士団残党、スコールら四名が脱走したんだ』

「なっ……!?!」

エクスカリバー事件の後、マドカとアスランを除いた歌姫の騎士団残党であるスコール、オータム、ダリル、フォルテは国際警察機構の日本支部に引き渡されていた。

余談だが、スコールとオータムが使用していたISは束の手で解体、ダリルとフォルテが使用していた専用機はそれぞれ国家に返却されていた。

『現在行方については搜索中。ただスコール達は何者かに手引きされたようだ。ラファール・リヴァイヴを使用した映像が監視カメラには堂々と映っていた。後ほど写真を送ろう』

「ラファール……まさか歌姫の騎士団……でもほぼ壊滅した訳だし……」

『今となつては別のテログループの可能性が高いね。【亡国機業】も全体がラクスについて行つたわけではないだろうしね』

蔵人の言葉にうなずいた真が尋ねる。

「……この話、カナード達には？」

『織斑教諭を通じて話を通すよ。おそらく明日には織斑教諭からアクションがあるだろう。まずは君にと思つてね』

「分かりました。ありがとうございます」

『念のためにだが、警戒は怠らないようにね。君はラクスを二度倒している。亡きラクスを慕う者達から狙われる可能性は十分にあり得る』

「……はい」

『それではまた』

はいと相槌を返すと、通話は切れる。

ふうと一息ついた真が振り返ると、少しだけ心配そうな顔の簪が目に入った。

「……また一悶着ありそうだね」

「ああ。だけど俺は戦うさ、今ある花を守る為に」

そう力強く告げると、簪は笑みを浮かべた。

「うん。なら私も。真の背中を守るから」

「……ありがとう、簪」

彼女からの想いを受けて真は笑みを浮かべる。

そして携帯には蔵人から画像が送られてきた。

あまり鮮明ではないが、ラファールに乗った女性の画像。

顔の部分等特殊な装甲で隠しているが、水色の髪が印象的であった。

更識家 蔵人私室

「刀奈、ありがとう。明日、学園に戻りなさい」

「はい、お父様」

蔵人は携帯を刀奈に返す。

制服姿の刀奈が受け取り、表情を曇らせた。

彼女もまた今回の脱走の件で17代目楯無として呼び出されていたのだ。

彼女が駆け付けた際にはすでにスコール達は脱走した後であったが。

「……また戦いが始まるのでしょうか」

「これは勘だがおそろくね」

そう蔵人が返すと、刀奈は苦笑を浮かべる。

幼い頃から、蔵人の勘はかなりの精度で当たっていた。

それこそエスパパーなんじゃないかと言うレベルでだ。

「お父様の勘はよく当たりますから、确实ですね」

「やれやれ、昔から言っているが私はエスパパーではないんだがね。今日はもう遅い、休みなさい」

「分かりました。それではお父様、おやすみなさい」  
「ああ、お休み」

刀奈に微笑んで蔵人は返す。

襖を閉じて気配が遠ざかっていくことを確認した蔵人は、備え付けられたモニターの

スイッチを入れる。

モニターに映るのは謎の襲撃者がスコール達を救出する映像。

襲撃から救出、撤退まで5分程度で終わらせている。

蔵人として暗部の職についている彼でも、脱帽するレベルの手際だ。

更識蔵人の記憶にも、ギルバート・デユランダルの記憶にも見覚えのある人物はいない。

だがなぜか、自分は違和感を感じている。

「……君は誰だね」

そう呟いて蔵人はラファールに乗る女性の映像を食い入るように見つめる。

喉の奥につつかえるような、答えが出かかっているのに出てこない違和感を覚えながら。

某所

「私だ」

水色の髪の女性が携帯で誰かと通話している。

「ああ、すでにあの四人は確保したよ。なにラファールでもミラージュコロイドを使えば単機での奪還もそう難しいことじゃない」

『……そんなことできるのはあんたくらいだよ、隊長』

「今の私は『ライリー・ナウ』だよ、ミシエル」

苦笑しながらライリーは通話相手のミシエルに返す。

『そうだった、癖が抜けないなあ』

「それは私もだよ。さて本題だ、ISコアの準備はどうかかな？」

『コアの状態は良好で機体の構築も完了しましたよ。後は四人の回復待ちですね』

「分かった。彼女達には私から伝えよう」

『はい。んじゃ俺はしばらく待機ですね……んで、まだ目的は教えてくれないんですか？』

「ふふ、まだだね。さて、それではね」



携帯を切ったライリーは懐にしまい、サングラスを取り出す。

「……もうすぐ、あと少しだ。彼女を利用して彼をおびき寄せる算段も付いている」

そう笑ったライリーは一度頭を振るう。

すると澄み切った水色の髪から色が変わっていく。

「この変装機能も中々役に立つ。簡単なもの程、時には人を貶めやすいものだ」

まるで金を糸に紡ぎだしたかのような美しいブロンドの髪。

彼女の首の「ネックレス」が不気味な光を発していた。

「ギルにもまだ私が誰だか気づかれはいないだろう。女の身体と言うのも中々役に立つものだ」

ライリーはそう言ってサングラスをかけて夜の暗闇に消えて行った。

## PHASE 4 因縁の鎖

時間は少々前後して。

学生寮 ラキーナの部屋

学生寮の彼女の部屋は、束やカナードとの連絡の機会が多いために一人部屋を割り当てられていた。

一人部屋なので広く友人達がよく遊びに来るが、今部屋にいるのは模擬戦を終えたラキーナのみだ。

『また派手にぶつ壊したねえ、ラキちゃん』  
「すいません、束さん」

現在ラキーナは本日の模擬戦の結果を束に報告している最中であつた。

そしてその結果、ほぼスクラップになつた自身のISの装備の事も。

空間投影ディスプレイに映るのは見事に半壊したフリーダムストライカーの様子。

背部のウイングは見事に左側が吹き飛んでおり、スラスト部分も吹き飛んでいた。

腰部クスイファイアスも一部損壊している。

「フリーダムストラライカーのダメージレベルはD。しばらくは使えないですよね……？」

『これなら直すより新しく作ったほうが早いレベルだね。ま、稼動データはあるからラキちゃん用に調整した新しい奴作る？』

「……すいません、製作をお願いします」

消沈した顔でラキーナは通信相手の束に頭を下げる。

『あつ、別に怒ってるわけじゃないよ！ただラキちゃんにしては珍しい結果だなんて思ったただだよん！』

それを見た束が慌てたように言った。

「……彼女はフレイだったんです。私が守れなかった……フレイだったんです」

『……ラキちゃん』

キラ・ヤマトであった彼女の中に残り続けた楔。

それは目の前で愛した少女を死なせてしまった、守れなかった人。

ヤキンの後、キラ・ヤマトはフレイの存在を忘れた。いや、無理に記憶の片隅に追いやった。

そうしなければならなかったほど、彼女の存在は大きかった。

そんな人間が同じ姿で目の前に現れた。

模擬戦を通じてフレイ・アルスターである事を自身の手で確かめた彼女が受けた衝撃は、やはり相当なものだろう。

そう感じた束が口を開く。

『じゃあさ、ラキちゃんはどうしたいの?』

「……えっ?」

『キラ・ヤマトは確かにフレイ・アルスターを守れなかった。それは変えようのない事実で、過去を変えるなんてできないんだからどうにもならない』

束がラキーナの目を見つつ続ける。

『……でも、今の君は「ラキーナ・パルス」でしょ？なら君のしたい事をすればいいんだよ』

そう言つて東は微笑む。

彼女の言葉にラキーナは目を開いた後、少しだけ笑みを浮かべた。  
弱々しいものだったが、少しは迷いが晴れたようだ。

「……ありがとうございます、東さん。少し楽になりました……と言うか東さんからそういう言葉が出てくるとは思わなかったです」

『あつれー!?それはちよつと酷いよ、ラキちゃんっ!』

ガクツと大げさなりアクションを取つた東が苦笑しつつ叫ぶ。

『そりゃあ白騎士事件とかラクスとの協力とか色々大ポカしてる自覚はあるけどさあ……今は男性用 I S だつて研究してるのにさあ』

少し不貞腐れたような態度の束がラキーナをジト目で見つめる。

「あはは……元氣出ました、ありがとうございます」

『ん、それならよかったよ。用件はそれだけ?』

「はい、ありがとうございます」

『オツケー! たまにはこつちにきてね! カナ君も寂しがって……あだつ!』

コーンツと小気味のいい音がして、束の頭にペットボトルが直撃した。

『痛いよカナ君っ!』

『でたらめを言うお前が悪い。それに俺はもう寝る、明日も早いからな』

カナードの声がディスプレイから響く。

余談だが、学生寮で生活をしているラキーナと違い、カナードはブレイク号で変わらず生活を続けている。

空き部屋を調整し割り当てて寮監を彼に任せようと千冬は画策していたがこれだけは決して譲らなかつたらしい。

「明日も早いって……兄さん完全に先生になってる……」

『やることはしつかりとやるよね、カナ君。それにくーちちゃんと会える時間少なくなってるから頭に来てるのかなー……うわっぷっ!』

東の頭に今度は中身が入ったドリンクのペットボトルが投げつけられて、中身がぶちまけられた。

結構な量残っていたらしく、髪の毛と服がびしょ濡れになっている。

薄着ではなかったため、服は透けてはいないが悲惨な状況だ。

当然、投げたのはカナードでありその顔には青筋が浮かんでいた。

『だー!東さんも流石に頭にきたぞ、カナ君!』

東がうおおおと叫びながら、デイスプレイから消える。

そしてその数秒後、彼女の叫び声が響いた。

『あだだだだっ!ごめん、ごめんっ!腕がもげるうっ!』

『そうか。後でくつつければいい。できるだろ。ほら、もうすぐ右腕が外れるぞ?』  
『私の腕、プラモとかじゃないからっ!生身い!ほおおあああつ!あつ、あつ、あつ!もげっ、もげえっ!』

チャンネル越してもギリギリと嫌な音が聞こえる。

おそらく相当痛い関節技でもかけているのだろうとラキーナが考えていると、ディスプレイにクロエがひよこっつと現れた。

『ラキーナ様、何かありましたらお力になりますので、遠慮なく仰って下さいね』

「うん。ありがとう、クロエちゃん。あれ、そう言えばアスランとマドカちゃんは?」

『アスラン・ザラは部屋でなにやら作業しているそうです。マドカは部屋で寝ています』  
「なるほど……うん、ありがとう。休みにそっちいこうかなあ。何かホームシックみたいな感じになっちゃった」

『腕がああーっ!!!』

聞こえてくるいつもの日常に、ラキーナは笑みを浮かべた。



## 学生寮 フレイの部屋

「あー、もう、ホントレポートって嫌になるっ！」

下着姿と言うラフ極まる格好でPCを覗き込んでレポートを作成していた彼女は、そう言つてベッドに倒れこむ。

ボスンとベッドに倒れこんだ彼女は、レポートの作成で固まった体をほぐす為に伸びをする。

その際に豊かな果実がぶるんとはずんだが、一人部屋の為問題はなかつた。

何故フレイがレポートを作成しているかと言うと、彼女が代表候補生だからである。

国家に所属したIS搭乗者であり、国家代表の卵である候補生。

自らの専用機であるISの稼働データや所感をレポートとしてまとめて提出するのは義務であるのだ。

これは何もフレイに限ったことではなく、セシリアや鈴、シャルロットにラウラ、簪も同じである。

簪の場合は、国家と併せて日出の所属でもある為、その分増えているのだが。

「……ラキーナ強かったなあ。妹があれだけ強いってことはやっぱりカナード・パルスとかも強いのかしら。確か光の盾みたいなもの使ってたわね。あれってビームなのかしら」

ベッドの上で寝転がりながらフレイが呟く。

「飛鳥真は滅茶苦茶な高機動機体で、織斑一夏は一撃必殺の零落白夜だったわね。あー、戦ってみたいなあ」

真のデータは所属している日出工業を通じて各国にも公開されており、「インパルスガンダム」をはじめ、進化した機体である「デスティニーガンダム・ヴェスティージ」もある程度データが公開されていた。

フレイがその映像を見た時の感想は「異常」の一言であった。

相対したISのハイパーセンサーを振り切るだけの機動力と運動性能。

装備している武装のほとんどが非実体のビーム兵器でしかも高出力。

それを手足の様に操る彼の技量。

同じく織斑一夏の戦闘映像も少ないながら公開されていた。

まだまだ拙い所はあるがそれでも代表候補生レベルの戦闘機動を取れる技量。そして世界最強のブリュンヒルデから受け継いだ必殺の「零落白夜」。

本当に彼等は数か月前までISに触れていなかった人間なのかと思った。

同時に感じたのは、負けたくないという純粹な対抗心だ。

代表候補生としてのプライドが刺激されたのだ。

「あ、ラキーナって飛鳥真や織斑一夏と親しかったりするのかしら」

ラキーナが男性搭乗者と親しければ、紹介してもらって模擬戦も行えるのではないか。

思いついた案を実行に移そうと携帯を取り出した時であった。

着信音が響いて、モニタには自分の上司である教官の名前が表示されていた。

「げっ、タイミング悪いなー」

そう言いつつ、フレイは電話に出る。

「はい、フレイです」

『ああ、フレイ。そちらはもう寝る前だったかな?』

「もう寝たいけどまだレポートの作成中よ、ライリー」

フレイが少しめんどくさそうにそう言うと、ライリーがため息を洩らしたのが聞こえた。

『まだ終わってないのかな? 全く君は代表候補生としての自覚が……』

「分かった、分かったからストップ。ライリーのお説教は長いのよ。それで要件は何よ?」

フレイの嫌そうな声に咳払いしたライリーが続ける。

『一週間後くらいになるが、私もIS学園に用が出来たんだ。その際に案内を頼みたくてね』

「一週間後……分かったわ。まあ、私もまだあんまり詳しくはないんだけどね。何のようなの? ノワールの新装備?」

『おいおい、そのノワールパッケージが新装備じゃないか。なに、ちよつとした用事だよ。しかしフレイ、声が嬉しそうなのはどうかしたのかい?』

ライリーがそうフレイに尋ねる。

彼女の勘と言うか、鋭さは相変わらずだなと苦笑しつつ、フレイは回答する。

「初日で気が合いそうで強いヤツと友達になれたのよ。そうだ、今度紹介するわ」

『ほう、フレイがそこまでいうとはね。噂の男性搭乗者かな?』

「違うわよ、あの三人はタイプじゃないわ。ラキーナって女の子よ、飛び級で二つ下だけでできるわよー」

フレイが嬉しそうに返す。

もしこの通話が映像も伝えていたのなら、フレイは大層驚いただろう。

何故ならばライリーの表情は全てが計画通りと言う、歪んだ笑みを浮かべていたからだ。

だが音声のみの為、フレイはそれに気づかなかつた。

『……ふふ、会うのが楽しみだよ』

「私も久しぶりにライリーに会うのが楽しみよ。それじゃね」

『ああ。おっとレポートは明日の昼までに提出する事、いいね?』

「くつ、覚えてたか……了解しました」

『それではお休み』

ライリーからの通話が切れ、フレイは携帯をベッドに放る。

「はー、仕方ない。やるかぁ!」

そうやって彼女は立ち上がって再びレポートとの格闘を再開した。

深夜

日本 某県 某市 廃病院

とある廃病院の地下。

全体的に廃れて久しい施設だが、地下の一室のみ光が灯っていた。

部屋の中には最新の医療機器が配置されており、電子音が小さく鳴っている。

その部屋の中に配置されているベッドは4つ。

ベッドには4人の女性。

歌姫の騎士団残党のスコール、オータム、ダリル、フォルテの4人だ。

そのうちスコールとオータムは目を覚ましていた。

以前に比べて少し痩せており、顔色もあまりよくはないが意識ははっきりとしていた。

「私達を助けたのは亡国の同志ってわけじゃなさそうね」

「みたいだな。スコール、どうする?」

「……まずは状況を確かめないと。そうでしょう、その人?」

そうスコールが部屋の扉に向けていう。

部屋の扉が開かれ、そこにはライリーが立っていた。

「身体の調子はどうかな?」

「ええ、おかげさまで。貴女が助けてくれたのね、感謝するわ」

スコールは笑みを浮かべてそう答える。

だが彼女の纏う雰囲気は警戒一色、自分達に危害が加わるのならば力づくで抵抗すると、目が語っていた。

それをみたライリーは笑みを浮かべた。

「私の名はライリー・ナウ。君たちの敬愛するラクス・クラインと同じ、C・Eの記憶を持つ人間だよ。まあ、警戒しない方がおかしいか」

そう言つて彼女は懐から何かを取り出してスコールに向かって放り投げた。

落下した物体。

それは少し大きめの腕輪。

それが何なのか、理解したスコールの目が見開かれた。

「それが君達の新しい力だよ」

「まさか……IS?」

「そう。ラクス・クラインが作り上げたISコアを使用したものだ。君達全員分、四つあ



る」

そうやって追加で三つ。

腕輪、指輪、チョーカー、待機形態のISを取り出す。

「……これを私たちに渡す理由は何？」

スコールにとってライリーは見ず知らずの人間だ。

そんな人間が自分達に、敬愛するラクスが遺したISコアを使用した機体を渡して  
くる。

その意図が掴めないのだ。

「共にIS学園を襲撃して欲しいのだよ。君達もおそらくは再起と復讐を図るだろうと  
思っていた。だから君達の力を借りたい」

「……貴女の目的は何？」

ライリーの提案を聞いたスコールであったが一旦判断を保留して、目の前の彼女に視

線を移す。

金の髪に、蒼の瞳。

スコールからみても十分美女と言えるライリーだが、その瞳の中にどろりとした黒いモノが見えた。

「私の目的……そうだね、私も【復讐】と言うことにしておいてくれないかな。まあ、敵の敵は味方と言う奴だね」

「へえ、やけに曖昧じゃねえか」

彼女の言葉にオータムが食って掛かる。

その態度に薄く笑みを浮かべたライリーであったが、続ける。

「自分を殺した相手を殺したいと思うのは当然じゃないかね？」

そう告げた声。

それはスコールもオータムも今まで生きてきた中で聞いたことのない程、冷たい声色。

亡国機業のエージェントとしてそれなりの修羅場はくぐってきた彼女達でも、一瞬寒気を感じるほどであった。

その言葉にスコールは笑みを浮かべた。

「……いいわ、貴女に力を貸してあげる」

「おい、スコールっ!?!」

スコールの肯定の言葉に、オータムが声を上げた。

振り向いた彼女が苦笑しながら告げる。

「いいじゃない。願ったり叶ったりよ。専用のI Sを手に入れることもできるし、ラクス様の仇も討てる。これ以上の好条件、早々ないわ」

「……そりゃ、シン・アスカやカナード・パルス達をやるだろうけどよ」

「それに、ライリーを気に入ったのよ。彼女はこちら側の人間、信用に値するわ」

そう告げたスコールは了承の意を伝える。

「感謝するよ、ミススコール。それでは一旦話はここまで。君達はまず身体を治すべきだ。何か必要なものがあつたら遠慮なくいつてくれ」

スコールからの返事を聞いたライリーは笑みを浮かべた。

その笑みはどこか嘲笑に近いものであつたが、それに気づいたものはこの場には存在しなかつた。

## PHASE 5 Xの傷跡

そして1週間がたった。

## 第3アリーナ

現在このアリーナでは、とある武装の稼働テストが行われていた。

『よいしょーっー！』

打鉄やラフアールとも異なるISを身に纏った本音の声と共に、ISの背部に装備されたシルエツトから有線式誘導武装が射出された。

本音が身に纏っているISは打鉄よりも軽装であり背部にはシルエツトシステムと酷似したバックパック。

機体色は「インパルスガンダム」と同じくトリコロールカラーだ。

背部や脚部には「インパルスガンダム」や「ガイアガンダム」と同規格のスラストターが備えられている。

この機体の名は「インパルスガンダムマークII（仮）1号機」

打鉄に奪われた量産機のシエアを取り戻すために日出工業が開発中の量産試作機の1機である。

背部のシルエットは第一世代ドラグーンの稼働データを集める為にシルエットの余剰パーツを使用して急造された「ドラグーンシルエット」だ。

無線式でないのはまだ稼働データが少なく、ロストしてしまう可能性を考慮したものだ。

このシルエット自体はジェーンが趣味で作成していたモノを流用した為、僅かな時間で完成している。

射出された「フェイルノートビームクロー」はまるで意志を持っているかのように、ビームの鉤爪は目標のバルーンを正確に貫いた。

そして別のバルーンに向かってクローは伸び、破裂させる。

『やったあ、上手くできたよー!』

整備室でモニターしている真と簪、そしてジェーンがその様子を眺めていた。

「流石ね、本音ちゃん。ドラグーン適正Aは伊達じゃないわね」

この1週間ジェーンはシルエットを完成させるために4日徹夜し、3時間寝て、3日徹夜と言う、常人なら過労でぶっ倒れるスケジュールをこなしていた。

そのせいで目元の隈が酷いことになっており、流石にシャワーは浴びているようだが髪の毛も乱れていた。

「急造のドラグーンだつてのにあそこまで動かせるのか」

「テストの時にシミュレータ上で使ったけど、あんなに自由自在には動かせなかった。凄いよ、本音」

「動かせるって時点で俺からしてみれば羨ましいけどな」

そう真が言うと言は苦笑していた。

真は自分のドラグーン適正が低いことを内心気にしていたのだ。

「私の可愛いマークIIちゃんの稼働データがガンガンたまってきたぞお！」

歡喜の声を上げながらジェーンは集まっているデータを眺めている。

何故、本音がインパルスガンダムマークⅡ（仮）に搭乗しているのか。それはジェーンから話を持ちかけられたのだ。

稼働段階に入った量産試作機の稼働データを収集すると、日出に足りないドラグーンの稼働データ収集を行える数少ない人材である本音にジェーンは目をつけていた。

本音としては最初は悩んだものの、最新のIS技術に関われるのと、ジェーンの技術をモノにできるかもしれないため、最終的には同意した。

もちろんこの話は優菜にも通っており、許可も出ている。

その為、インパルスガンダムマークⅡ（仮）一号機はほぼ本音の専用機となっている。

「本音ちゃん、射出するバルーンを増やしてみたいんだけどいいかな。どのくらいまでなら一度の射出で落とせると思う？」

『えーっと、十個くらいまでなら大丈夫です』

「了解。じゃ、次は十個で」

整備室のコンソールを操作してダミーバルーンを射出する。

デスクティニーのマニピュレーターから射出されるモノと同様のバルーンが十個、アリーナの上空に浮かぶ。



バルーンの射出が完了したことを確認した本音は、再度ドラグーンに攻撃指示を出す。

『いつけー!』

彼女の指示通りに次々とバルーンは破裂していく。

ドラグーンを正確に操る彼女であったが、真はあることに気づいていた。

「……同時制御はまだ難しいのか」

そう、本音は先程から動かず滞空したままドラグーンを操作している。

かつてのセシリアと同じく同時制御ができていない状況だ。

「そりゃね。急造の試作ドラグーンもいいところだし、適性が高くても練度がまだ少ないから仕方な……」

そうジエーンが告げた時であった。

震動が、アリーナを襲った。

『っ!?!』

咄嗟にデステイニーを展開して、簪とジエーンを抱き寄せる。

デステイニーの搭乗者保護機能とシールドバリアで2人を守る為の行動だ。

『何ターっ!?!』

チャンネルから本音の困惑した声が溢れる。

そのまま数十秒待機して危険がないことを確認した真は二人を自身から離れた。

『……二人とも、大丈夫だよな?』

「うっ、うん。大丈夫」

「おー。年下の子に抱きしめられるのって結構ドキツとするね」

簪は少し顔を紅くして、ジエーンは少しふざけた様に返す。

ジエーンの方は無視して、真はチャンネルを本音に繋げる。

『本音さん、そつちは大丈夫か？』

『うん。あれ、あつち煙上がってる？』

本音がマニピュレータで空を指さす。

指した方向からの空に黒煙が上がっていた。

『簪、本音さん。俺が様子を見てくるから二人はジエーンさんや残ってる皆の避難を』

『うん、分かった』

『りょうかい！』

簪が飛燕を展開して真に返す。

本音も了承する。

頷いて整備室から飛び出したデステイニーが上昇して行く。

アリーナの上空まで飛びあがった真は、黒煙が上がっている箇所を確認する。

『第3アリーナだけじゃなくて他の場所もかっ』

センサーが拾った情報によると、現在いる第3アリーナだけではなく第1アリーナ付近と本校舎付近からも煙が上がっている。

『カナード、聞こえるか？』

『ああ、聞こえている』

オープンチャンネルをカナードに繋げる。

彼もすでにISを身に纏っていた。

『お前、今どこにいる？』

『校舎の上空だ。真、お前はどこだ？』

『俺は第3アリーナ。カナード、被害の状況は？』

『飛鳥、パルス。聞こえるか』

チャンネルに千冬が参加したらしく、ディスプレイが表示される。

『飛鳥、第3アリーナの状況を確認して連絡してほしい。頼めるか?』

『分かりました。負傷者が出ているかも確認します』

『私とパルスは校舎付近で確認する。パルス、確かこの時間ラキーナが第一アリーナで訓練の申請を出していたはずだが、連絡は?』

千冬がカナードに質問する。

すでにラキーナに通信を行っていたカナードがその結果を報告する。

『……繋がらない。第一アリーナはアスラン・ザラに向かわせる。東、聞こえているか?』

『オツケー、今アスラン・ザラが丁度出撃したところだよ。くーちゃんも出撃準備中!』  
ディスプレイが立ち上がって東がチャンネルに加わる。

『了解した。飛鳥。通信はこのままに周囲の確認を。パルスは不審者がいないか確認してくれ』

通信を繋げたまま、真は頷いて第3アリーナの現状を確認する。

外壁部分の一面が綺麗に吹き飛んでいた。

センサーで確認するが、自動消火装置が作用してすでに火災は収まっているようだ。

(……小火騒ぎじゃない。アリーナの付近で誰かが爆発物を使った。けど……)

だが、何の為にと疑問がよぎる。

爆発の規模が小さいし、なにより意図が分からないからだ。

テロリストの襲撃ならばもっと人気のある場所を狙う筈。

だというのに校舎から離れたアリーナの一面を狙った。

『……誘き出されたってことか?』

真がそう呟いた瞬間であった。

コンソールに奔るロックオン警報。

『っー!』

咄嗟に瞬時加速を行い、前方に加速。

数瞬までいた空間を下方から来たビームが薙いだ。

下方からビームを放ったISをセンサーが捕えた。

黒と紫を基調にした装甲に脚部にはアスランのインフィニットジャスティスの様なブレードが見える。

そして最大の特徴は背部の大型ユニットだ。

ビーム砲やマニピュレータのようにも見える。

打鉄やラファールとは根本的に異なる機体の特徴から、専用機であることが推測できた。

そして搭乗者は橙色の髪の美女。

かつてデストロイに搭乗して戦った搭乗者であり、拘束された彼女のデータを見たことがあった。

亡国機業のエージェントの一人――

『アンタはオータムっ!?なんでここにっ!?』

『決まってるんだろ、ラクス様の仇を討つためさっ！』

一射、二射、三射とオータムのI Sが装備しているビームライフルが火を噴く。

所謂牽制射撃、真はその全てをA M B A Cで回避して、同じようにビームライフルを展開しつつ、繋がったままのチャンネルに吼えた。

『カナードっ、千冬さんっ！敵は亡国のオータムだっ！』

そう叫んだ真であったが、チャンネルからは先程まではなかった「ノイズ」が流れるだけで、カナードと千冬の返答はない。

(通信妨害っ?! ジャミングされてるのかっ! まだ他にも敵がいるっ!)

そう判断した真は周囲への被害を抑えるために、機体を上昇させる。

『はっ、逃がすかよっ!』



そう言いつつ、オータムはビームライフルを連射する。

デステイニーの機体速度の方が速いため中々正確な射撃とならないが、何発かはデステイニーを捉えていた。

だがその程度はすべてAMBACで回避できた。

『カナード、千冬さん、束さん、聞こえますかっ!』

下方から発射されるビームをすべて回避しながら真はチャンネルに叫ぶ。

『こ……ら、カナードだ。聞こえるか?』

すると、先程よりは鮮明にカナードとの通信が回復した。

『カナード、敵はオータム、亡国機業だ』

『ああ。こちらはスコール・ミューゼルがISで現れた。今海上を追跡中だ』

『つて、学園の外に出てるのか!』

『少し離れた海上にいる。クロエがこちらに向かってきてきている。こいつらを落と

して吐かせればいい』

『……分かった』

『頼む』

通信を一旦切った真はビームライフフルと、クラレントをビームライフフルモードで起動し、下方から迫るオータムに狙いをつける。

『アンタ達を落として何のためにこんな事をするのか吐かせてやるっ!』  
『はっ、やれるもんならやってみろやあ!』

オータムもそう叫んでデステイニーに照準を合わせた。

一方、海上

真との通信を一旦切ったカナードの目の前で逃走していたスコールのISが停止した。

IS学園からかなり離れた海上。回りは海だけのポイントだ。

『……ここまで貴方を引きつけなければ問題はないわね』

『陽動のつもりか？学園にはセシリアはじめ代表候補生達もいる。俺だけ引き離したところで意味はないぞ』

カナードの言うとおり、あまりにもお粗末な陽動だ。

学園にはまだ代表候補生達がいる。加えて真や千冬もいる。

すでにこちらにはクロエも向かってきてくれている。

『別に陽動じゃないわ。私達の目的の為に、貴方には離れてもらう方が都合がいいのよ』

『……何故学園を襲ったのかは、貴様を捕えた後に口を割らせればいい訳だ』

『自信満々ね。そういう子は好きよ。ただ、今の私を以前までの私と思わないことね』

そうスコールが告げた瞬間、射撃武装を展開する。

展開速度はほぼ互角。しかしスコールが展開したのは標準的なビームライフル、対するカナードが展開したのはライフルよりも連射性能が高いビームサブマシンガン【ザスタバ・ステイグマト】だ。

一発一発の威力はライフルよりも小さいが、その分弾幕も張れる。

飛来したスコールの一撃はドレッドノートH最大の特徴である光波防御壁【AL】で難なく弾く。

対するスコールは飛来するビームの雨を、背部の大型スラスターを操作して回避していく。

回避しつつ大型のスラスターに装備された小型ビーム砲からお返しとばかりにビームが放たれる。

しかし、その程度ではカナードを捉える事は不可能だ。

ALを展開しつつ、回避行動に移行。

避けきれないビームだけをALで防ぎ、それ以外はAMBACで避けていく。

(……奴の機体、ビーム兵器を搭載しているという事はこの世界純正の機体という訳ではないという事か)

もちろんフレイ・シユヴァリーの機体の様にデータの流出によるコピーである可能性もある。

何があるかは分からない。

だがドレッドノートならばやりようはある。

『貴様が何をしようが……俺とドレッドノートに届くと思うなよ』

そう呟いた彼の操作により、ドレッドノートのALハンディが最大展開される。そして機体を翡翠色の輝きを放つ【球体】が包み込んでいく。

『っ、させないわよっ！』

スコールのISからビームが飛来するが、その全てが【完全展開されたAL】に弾かれてしまった。

『無駄だ。一度完全展開されたALを破る術は……ないっ！』

ドレッドノートの背部Hユニットがバスターモードに変形し、高出力ビームを発射する。

外からの攻撃を完全に弾くALだが内部からの攻撃はそのまま素通りする。その特性から一方的な攻撃が可能になる。

【完全展開】は切り札であると同時に諸刃の剣でもある。

MSのスーパーハイペリオン、ドレッドノートとは異なり、ISのエネルギーには限りがある。

そのためどうしても活動限界が存在してしまい、ALの【完全展開】は使う分だけそのエネルギーを大きく消費してしまう。

戦闘機動の為の消費エネルギー、武装の消費エネルギーとあわせればその分活動限界は早く訪れる。

だが強力な機能である事には変わりない。

スコールのISからの攻撃をすべて弾き、精密射撃によってスコールのISにダメージを与えている。

戦闘の流れは完全にカナードが握っていた。

だが、スコールはまるで焦ってはいなかった。

そして笑みを浮かべる。

バスターモードのビームにエネルギーを削られており、すでに彼女のISのエネルギーは四割ほどに減っていると言うのに。

『……まったくこれを使う羽目になるなんてね。流石ヒルダを落とすただけはあるわ

ね。でも、これで終わりよ、失敗作君？」

そう告げたスコールの機体の背部ユニットが展開され、フレームが露出する。

同時に機体の各部位が同じように展開され、金色のフレームが露出した。

金のフレームからは禍々しい紅い光が溢れ始めた。

何かあると、直感でカナードは距離を取る事を選択した。

ALを展開しながらならば攻撃もすべて弾ける。

——はずであった。

『っ!?!』

しかし、機体という事を聞かない。

それどころかドレッドノート最大の特徴である、ALの光がまるで死に際の蛍の様に散っていく。

絶対的な防御能力を与えるはずの光が、今は手元から離れ拡散していく。

マニュアルで発生率の変更を行うが、そもそも出力が上がらない。

『なんつ……だとおっ!』

同時にさらなる不調が機体にも現れた。

P I C の稼働率とシールドバリアの出力が大幅に下がっていく。

通常の稼働率を100%とするなら現在は20%程度まで低下し、さらに下がっていく。

I S が既存兵器を超越した兵器の証明でもある、P I C とシールドエネルギー。

その二つの急激な変化と不調。

これらを起こせる原因を彼は1つしか知らない。

『【単一仕様能力】 かつ!』

スラスタで無理やり姿勢制御を行うが、P I C の稼働率が下がっている為適切な機体制御も困難だ。

『ご明察。貴方のご自慢のA L は、【アマツ】の能力と相性最悪みたいね』

『【アマツ】、まさかマガノイクタチと同様の……だがP I C とシールドバリアに干渉す



る能力だと……っ!?!』

カナードの記憶の中にあるアマツの名を持つ機体は「アストレイゴルドフレーム天ミナ」

ロンド・ミナ・サハクが搭乗していたMSであり、その武装の一つに「マガノイクタチ」と言うものがある。

基本的に電力で動いているMSのバッテリーを強制放電させてエネルギーを奪う武装だ。

技術不足で稼働当初は直接触れなければ効果を発揮させる事はできなかったが、カナードがミナに接触した時点で技術の発展により周囲のMSから触れずに電力を吸収できる武装となっていた。

その「マガノイクタチ」と同種の能力に囚われてしまったのだ。

『この能力まだ名前はないのよね……そうだ、「拡散結界」とでも名付けようかしら。まあ、これで貴方は終わりよ、カナード・パルスっ!』

ビームライフルを満足に動けないドレッドノートに向ける。

だが、まだカナードの戦意は消えていなかった。

『この程度で……俺を舐めるなあっ!!』

ビームライフルの射撃と同時に咆哮と共に無理やり機体を前方へ加速させる。

狙いが外れた事で、ビームはドレッドノートの左マニピュレータを吹き飛ばす結果に終わる。

マニピュレータが破壊され、カナードの生身の左腕が露出している。

まともな保護機能が働いていないため裂傷だらけの左腕だが、その手には破壊されたマニピュレータの破片が握られていた。

『喰らえっ!!』

ナイフの様に尖ったそれをスコールに投げつける。

だが――

『っ!』

カナードのその行動に冷や汗を流しながらも、投げつけられた破片を弾く。

『なんて執念……。でも残念、今度こそこれで終わりよっ！』

そして再度、ビームライフルの照準を合わせてトリガーを引く。

今のドレッドノートは拡散結果に囚われ、シールドバリアも満足な稼働率を維持していない。

【絶対防御】もこの能力下では本来の防御能力を発揮しない可能性が非常に高い。

そこにビームを受けてしまえば、結果は見えている。

だがドレッドノートにビームは届かなかった。

『カナード様っ！』

『っ!?!』

咄嗟に彼を突き飛ばし庇った機体があった。

それはX字のスラスターを背負う機体。

出撃したカナードに追いついたXアストレイを駆るクロエだ。

ドレッドノートをタックルで弾き飛ばしたXアストレイだったが、そこはスコールのISの【単一仕様能力】【拡散結界】の中。

つまりは彼女の機体も先程のドレッドノートと同じ影響を受ける。

ビームはXアストレイのスラスターを貫いていた。

そしてスラスターの爆発にバリアもロクに効いていないクロエは飲まれた。

『ぎゃあっ!?!』

クロエが爆発によって弾き飛ばされ落下していく。

その様子が、カナードには酷くスローモーションのように見えた。

『クロエエエエツ!!』

叫びと共に機能が回復したドレッドノートは落下していくクロエに向かっていく。

落下した彼女を受け止めて彼女の状態を確かめる。

火傷は少なかったが爆風が彼女の身体を裂いて出血、右腕はまがってはいけな方向

に曲がっていた。

かなりの重傷であり、すぐさま応急処置と適切な処置を行わなければ危険な状態だ。そんな状況でまだ意識を保っていた彼女がカナードを見て弱々しく微笑む。

『無事で……よかった……カナ……ド……』

『……死ぬなっ、死ぬな、クロエっ！すぐに離脱するっ！』

スコールに対する激情を残った理性で無理やり抑え込んで、すぐさまスラスターを全開にして離脱をはかる。

『あら、逃げるの。判断は間違っていないわね、ただ逃がすと思う……っ!?』

突如飛来したビームに間一髪で気づいたスコールはビームを回避する。

冷や汗を浮かべながら、発射した移動砲台を確認する。

かつてゴールデンドーンが敗北した切欠、「プリステイス・ビームリマー」がボロボロの状態で浮かんでいた。

『あの怪我でドラグーンを……素敵ね、彼女』

ボロボロのプリステイスを撃ち落としたスコールは、そうやって戦域から離れていくドレッドノートを一瞥し自身も離脱にかかった。

## PHASE 6 悪夢は再び

時間は少し前後して。

真とカナードがそれぞれ戦闘を開始する約30分ほど前。

IS学園 正門

黒塗りの高級車が2台停車して、先の車両の運転席側の窓が開く。車を運転しているのはライリーであった。

水色の髪を揺らしながら、女性の警備員に彼女は微笑みつつ、身分証明書を提示する。

「フランス代表候補生フレイ・シュバリリーの教官、ライリー・ナウです。所用の為まいりました。確認をお願いします」

提示された身分証とライリーの顔を確認した警備員は笑みを浮かべてゲートの操作を行う。

「はい、確認しました。どうぞ」  
「どうも」

警備員にそう返したライリーが微笑みながらアクセルを踏む。  
ライリーの運転する車に続いてもう一台も進んでいく。

「それでは手筈通りに。ミシエル、援護はお願いするよ」  
「りょーかい、ボス」

後部座席に座る短い金髪に緑眼の女性、「ミシエル・ライマン」は崩したスーツを整えながら返す。

『私たちの顔はもうとつくに知られてるのによく通れたな。警備がザルなのか?』

左耳に付けられた小型通信端末からもう一台に乗車しているオータムの声が聞こえる。



「私のISには「物好きな連中」が開発した変装機能が搭載されていてね。ある程度ならば顔を偽ることができのさ。先程の警備員には君達が別の人間に見えるよう調整してただけだよ」

「成程、貴女のその水色の髪はその機能って事ね」

助手席に座るスコールが納得したように言う。

「ご名答。さてミススコール、ミスオータム。シン・アスカとカナード・パルスの陽動は任せるよ。私の機体の相性的に梃子摺るとしたら彼ら二人となるだろう。君たちのISならば相性はいいはずだ」

「ええ、任せて」

ライリーの言葉にスコールは頷く。

「ダリル君とフォルテ君はISの能力でのジャミングをお願いする。ミシエルが援護につくから万が一ばれても撤退は容易だ、気にせずに頼むよ」

『了解しました』

『りょーかい』

オータムが運転する車に同乗しているダリルとフォルテが答える。

「私は餌を回収する」

運転していた車を来客用の駐車場に止めたライリーはそう呟いて笑みを浮かべた。

爆発騒ぎが起こる数分前。

第1アリーナ

現在第1アリーナでは訓練の申請を出していたラキーナのストライクが空を翔けていた。

その背部に装着されているストライカーパックは「I. W. S. P.」であった。

1週間前のフレイとの模擬戦で破壊されたフリーダムストライカーは現在束の手によって新たに製作が進められている。

稼働データをフィードバックしてよりラキーナに適した状態に仕上げるとの事だが、やはり時間がかかってしまう。

その為、ラキーナはI. W. S. P. パックの習熟訓練を続けている。

(前に比べればだいぶ動けるようになって来たかな……筋肉痛とか酷いけど)

未成熟な身体なため、苦手だがトレーニングを行うことで少しでも鍛えているのだ。

しかし、そもそもがインドア気質でロクにトレーニングも行っていないかったため、全身の筋肉痛に悩まされていた。

フラガラツハをビーム刃を起動せずに展開して素振りを開始する。

ビームサーベルと違って実体剣でもあるフラガラツハの扱いには癖がある。

真やカナード、アスランからもアドバイスをもらっている為その通りに体に覚えこませる。

数分経って高機動を合わせた近接格闘の訓練に移ろうかと思案した時、センサーが見知った人物を捉えた。

『フレイ?』

そう、フレイがアリーナの入口からこちらを眺めていたのだ。

ラキーナが自身に気付いたことを理解したのか、フレイも手を振っていた。ラキーナも手を振ってそれに返す。

そして彼女はISスーツに着替える為か更衣室に向かつていった。

「お疲れ様、ラキ」

数分後、ISスーツに着替えたフレイがBピットに帰還していたラキーナに問う。  
一旦ISを解除して水分補給をしていたラキーナはドリンクを置いてから返す。

「うん、フレイも今から？」

「ええ。ちよつと呼ばれててね」

「呼ばれてた？」

「ええ、ほら。彼女よ、私の教官よ」

ピットの入口を見ると水色の髪にスーツを着込んだ女性が立っていた。その女性がフレイの隣にまで歩いて着て微笑む。

「ああ、紹介するわ、私の教官【ライリー・ナウ】よ」

「紹介に預かったライリーだ。よろしく」

「えっと……よろしくお願いします」

ライリーが差し出した握手に答える。

どういふ訳か彼女から寒気を感じる。

「3人目の男性搭乗者であるカナード君の妹、飛び級制度でIS学園に転入した天才少女。なるほど、会ってみると才気に溢れているね、君は」

「……ありがとうございます」

初対面の人間であるはずなのに、何故か彼女の言葉に圧力を感じる。

「何、ライリー。ラキに嫉妬でもしてるの?」

「ふふ、別段そういうことではないのだがね。やはり羨ましいと思うよ。IS学園の飛び級制度の合格基準はかなり厳しいものさ、それを若干14歳でパスした天才。自分にもその力があれば……なんて考えてしまうね。これでも元は代表候補生だったんだよ、

私は」

「……いえ、私はそんな大した人間じゃ……」

「ほう？ 強大な力を己の信じるモノの為に使った君がかい？」

「……えっ？」

ライリーの顔が歪む。

その歪みは嘲笑の色を強く浮かべていた。

「それでも守りたい世界があるんだ……だったかね？ その言葉はさぞ美しいものだ、だが君はそれを実行できたのだろうか？」

「らっ、ライリー？ 何言ってるの？」

「いや、できなかつた。何故ならば君は自身でその言葉の意味を考えていなかったからだ。滑稽で、道化だよ。そんな君に倒された者たちは本当に哀れで嘆かわしい」

突如ライリーナに向かって語りだしたライリーにフレイは困惑の表情を浮かべている。しかも雰囲気は険呑としてるように感じる。

「貴女はまさか……っ!?」

ラキーナの脳裏に蘇るのはかつての記憶。

『私にはあるのだよ！ この宇宙でただ一人、全ての人類を裁く権利がなっ!』

『正義と信じ、分からぬと逃げ! 知らず、聞かず! その果ての終局だ、もはや止める術など無いっ!』

『知れば誰もが望むだろう! 君のようになりたいとっ!』

それはキラ・ヤマトが死闘の果てに倒した敵。

世界を呪い、自身にとって守りたい人間を殺めた怨敵。

その怨敵の名は——「ラウ・ル・クルーゼ」

『フレイツ! そいつから離れてっ!』

「えっ!?!」

ストライクを身に纏い、ビームライフルの照準を合わせる。装備しているストライカーパックは「I・W・S・P」だ。

生身の人間であるライリーに向けてI Sを展開し、ビームライフルの照準を合わせている。

友人であるラキーナが取った行動が理解できないフレイであったが状況は止まらない。

するとライリーの水色の髪の毛が変化していく。

その色は金。

同時に彼女の胸元にあるネックレス、待機形態のI Sが展開されていく。

(ライリーのI S、ラファールじゃないっ!?)

フレイの記憶ではライリーの持つI Sは、自身と同じ「ラファール・リヴアイヴ」のカスタム機であったはず。

だが今彼女が身に纏っているソレは全くの別物であった。

まるで「天」の象徴である「太陽」を背負ったかのようなシルエットの背部パッケージ。



全身が灰色、左腕部にはシールドと一体化した巨大なライフルの様な武装が見える。

「らっ、ライリーっ、これどういう……っ!？」

『君は眠っていたまえ。危害は加えないよ。君は大切な教え子であると同時に、餌なのだからね』

そう告げたライリーは、フレイが反応できない速度で彼女の腹部にマニピュレータを押し当てる。

同時に軽い電気ショックが走り、彼女の意識を刈り取った。

その行為はラキーナの逆鱗に触れる行為。

——彼女の意識の中で、怒りと共に紫の【種】が弾け飛んだ。

『クルウウウゼエツ!』

雄叫びの様に咆哮したラキーナはフラガラツハを上段に構える。

だが、コンソールに躍り出たロックオン警報に咄嗟に回避を選択した。

『っ!?!』

後方を確認するといつの間にか射出され射撃体勢になっていたドラグーンがこちらを狙っていた。

ライリーのISの背部からドラグーンが一基無くなっている。

(何時の間にドラグーンをっ!?!)

S・E・E・Dによって鋭敏になった感覚とハイパーセンサーにはドラグーンが突如出現したようにしか感じなかった。

そして新たなロックオン警報がコンソールに表示された。

新たに三基のドラグーンが同様に突如現れて、ラキーナを包囲していた。

『くっ!?!』

スラストターを噴かせることでドラグーンのビームから逃れる。

射出されたドラグーンはそのまま、まるで生きているようにラキーナを追跡してい

く。

そして当然ドラグーンだけではなかった。

『どうしたね、キラ・ヤマト君。この程度で苦戦するような君じゃないはずだが?』

左腕のビームサーベルを振り上げ、ライリーがラキーナに接近していた。

当然のように同時制御を行いつつだ。

咄嗟にフラガラツハでそのビームサーベルを受け止める。

ビーム刃とビームサーベルの鏝迫り合いによってビーム粒子が辺りに散っている。

すると第一アリーナを振動が襲った。

第一アリーナの外殻部分から黒煙が上がっている。

『爆発っ!?!』

『ふふ、どうやら始まったようだ』

そうラキーナとの鏝迫り合いを続けるライリーが呟いた。

『アナタは何でっ！ここにいるんだっ！』

『私がここにいる理由は一つ……君もわかっているだろう？人類を滅ぼす為だよ』

ラキーナが問うとライリーは笑みを浮かべてそう返した。

『っ、そんな好き勝手をつ！』

『私にはその権利があるのだよっ！女尊男卑にISの軍事利用、それに伴う人間の遺伝子操作っ！地球に魂を縛られた者達の業っ！人類と言う種の醜さは世界が変わっても変わらぬっ！この世界も所詮はC・E・と同じように腐り始めているのだっ！やはり人はっ！滅びるべき存在なのだよっ！』

かつて相対した時と同じく、捲し立てるライリーの声には狂気と憎悪を感じる。

『アナタの身勝手な行為で……フレイを、フレイを利用するの catt！』

『彼女には感謝しているよ。フランス代表候補生教官という立場を得ることができたのだからね』

『っ!!アナタはあっ!!』

怒りと共にI・W・S・P・パックから得られる推力を乗せたフラガラツハでビームサーベルを押し切る。

そしてもう一本のフラガラツハでライリーの顔を狙って振り抜く。

それにほうと感心したような声をライリーは洩らした。

『以前とは別人のようだ。生の意識、私に対する憎悪と怒りを感じるよ。以前よりもずっと人間らしい』

迫るフラガラツハを瞬時加速を使用して距離を取ることによってライリーは回避する。

『しかしその程度で私を、「ロキプロヴィデンス」を止めることはできない』

『っ!?!』

フラガラツハを躲されたラキーナが追撃を仕掛ける為に機体を加速させた瞬間であつた。

自機を中心として球状にドラグーン十五基が一瞬で展開され、射撃位置についていた。

(これはまさか【単一仕様能力】……っ!?)

S・E・E・D. によって鋭敏になった感覚ですら、ドラグーンの射出と展開を察知できなかった。

射撃位置についたドラグーンは、まるで最初からあつたかのように存在している。

(ドラグーンを瞬時に任意位置に射撃体勢で展開できるのかっ!?!こんなのでしようが……っ!)

咄嗟にI・W・S・P. のコンバインドシールドを展開して防御態勢を取る。

シールド防御とI・W・S・P. パックへの直撃を防ぐためにAMBACと緻密な機体制御によって何とか回避を試みるが、ドラグーンのビームは単発式ではなく連続発射式だ。

当然ながら全ての攻撃を防ぐことは叶わなかった。

『ぐうっ!!』

飛来するビームがストライクの脚部や腰部の装甲を削り取る。

ビームの被弾数が多かったためか絶対防御が発動。

それによって、ストライクは一瞬でエネルギーが枯渇してしまった。

『ぐあっ?!』

エネルギーが枯渇したストライクを身に纏ったまま、ラキーナは弾き飛ばされた。

ロキプロヴィデンスは左マニピュレータに備え付けられた機動盾に組み込まれたビームライフルでラキーナを狙う。

『っ、やられっ……?!』

もはや満足な機動すらできない状態のストライクがこれ以上の攻撃を受けたならば結果は見えている。

思わずラキーナは目を瞑ってしまった。

だがビームがラキーナに届くことはなかった。

何故ならば、アリーナの上空から発射されたビームがロキプロヴィデンスに襲い掛かったからだ。

ロックオン警告によつてそれに気づいたライリーはとつさに機体进行操作して躲す。

上空を見上げると、そこには紅い騎士の様なISが存在していた。

『っ、あれはジャステイス……アスランか』

『ラキはやらせないっ!』

ラキーナを守つたのは紅きIS「インフィニットジャステイス」を駆るアスランであつた。

数分前に起こつた爆発騒ぎの確認の為、ブレイク号から出撃していたのだ。

『あつ、アスラン……』

『ラキっ、無事の様だな……っ!?!』



突如、インフィニットジャステイスの背後に出現したドラグーンにアスランは驚愕しつつも咄嗟の機体操作により、ドラグーンから発射されたビームを回避した。

『一瞬でドラグーンをつ!?!』

アスランの周囲に、先程のラキーナと同じく十基以上のドラグーンが一瞬で展開され、アスランを翻弄している。

それを確認したライリーは笑みを浮かべた。

『さて、長居は無用のようだ。目的は達した』

ライリーは気絶して倒れているフレイを抱えて機体を浮上させていく。

『つ、逃がすものかつ!』

グラップルステインガーを展開して射出。

しかしドラグーンに翻弄されながらの攻撃であったため狙いが甘かったのか、射出

後、即座に現れたドラグーンによってシザークローは迎撃されて破壊されてしまった。

『それでは失礼するよ』

背部スラスタを噴かしてプロヴィデンスは上昇して行く。

機動力は並の高機動ISよりも格上のようなのだ。

アスランを陽動していたドラグーンが彼への攻撃を止め、消失していく。

『ドラグーンが消えた……っ!?』

ライリーの操るドラグーンの攻撃を回避していたアスランがそう呟く。

『っ、待てっ! 待ってっ! フレイを、フレイをどうする気っ!?』

最低限の搭乗者保護機能しか機能していない今のストライクにできることはない。

『兄さんっ! 真っ! 束さんっ! くっ、なんでっ!? ジャミングで繋がらないのっ!?』

通信による援護を要請しようにも、どういふ訳かカナードや真、千冬達に通信が繋がらない。

つまりただライリーが去っていくのを眺めている事しかできない。

『フレイツ、フレエエエイツ!!!』

そしてセンサーから反応が消える。

『あ……ああ……うわああああああああつ!!』

ラキーナの慟哭がアリーナに響いた。

その慟哭は、かつてキラ・ヤマトがフレイ・アルスターを失った時と全く同じものであった。

## PHASE 7 開き始めた扉

爆発が発生したのと同刻

IS学園 上空500m

今この空域にいるのはISが三機。

そのうちの二機の搭乗者である「フォルテ・サファイア」の機体「ネブラブリッツ」が、相方であり愛する存在であるダリル・ケイシー、いや「レイン・ミューゼル」が駆る機体である「テストAMENTガンダム」の背部ユニットにマニピュレータを差し込み、「単一仕様能力」を発動させつつ眼下のIS学園を一瞥した。

テストAMENTガンダムもネブラブリッツと同じく「単一仕様能力」を発動させている。この二機がジャミングの元凶なのだ。

『先輩、こちらこれでいいんですかね。援護とか行かなくてもいいんですか？』

『それはオレも思ってたけど、オレ達の機体がジャミングしてなきや、叔母さん達だつて動きにくいんだらうよ。そうだろ、ミシエルさん？』

レインがすぐそばで警戒行動を取っていたオレンジシールドの紅いISSに搭乗する【ミシエル・ライマン】に尋ねる。

『ああ。ま、うちの隊長とあの2人が失敗するとは思えないけど。そんなわけでジャミングの継続よろしくな』

『了解っス、ならジャミング続けます』

『ああ……つとつ！』

ロックオンアラートと共に機体に向かう弾丸の雨。

ミシエルが展開した実体シールドがその弾丸すべてを受け止める。

『おいでなすったかな？』

『亡国機業の2人に、見ない顔……テロリストですね』

ランスに装備されたガトリングガンでミシエルを狙ったのは【霧纏の淑女】を纏った楯無であった。

白式、紅椿、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタムII、シュヴァルツエア・レー

ゲンの5機が続く。

『おいおい6機かよ、流石にやばいかな、これ』

そうミシエルが告げるが言葉とは裏腹に余裕を感じさせている。

『あの二人は……っ！』

一夏がレインとフォルテを見て顔を顰める。

エクスカリバー事件の際に彼女達を真と共に救出したのだ。

それがまた敵となってIS学園を襲っている。

それに怒りを感じているのだ。

するとプライベートチャンネルが繋がる。

通信先は楯無だ。

『皆、冷静に。彼女、只者じゃないわ』

『ええ。おそらく真やカナードと同じく、C. E. 世界のエース……威圧感が違う』

そう告げたのはラウラだ。

すでに左目の眼帯は外しており、いつでも【ヴォーダン・オージエ】によって強化した【AIC】を発動させる事ができる。

だがどういう訳か、当たる気がしないのだ。

『私が陽動、隙を見て4人が攻撃、特に一夏君、君は切り札よ』

楯無の案に一夏、箒、鈴、シャル、ラウラの5人は頷く。

『さあ、そろそろ行くかあっ！レイン、フォルテ、後退してなっ！』

ミシエルの指示に従ったレインとフォルテは機体を上昇させて離脱して行く。

ミシエルのオレンジシールドの機体がマニピュレータにビームライフルとビームサーベルを展開してスラスターを吹かした。

瞬時加速でもないのに凄まじい速度で楯無に迫るが、楯無も国家代表だ。

【蒼流旋】でビームサーベルを受け止める。

出力はほぼ直角であった。

『おっと、今の一撃で落とすつもりだったんだが……流石、国家代表』

『お褒めに預かり光栄よ……でも貴方の敵は私だけじゃないわよ？』

『知ってるさあつ！』

笑みを浮かべたミシエルの機体が鏝迫り合いを解除して下がる。

同時に数瞬前までミシエルがいた空間を、電磁加速したレールカノンと紅椿の【空裂】が薙いだ。

『6対1かあ、隊長もホント人使いが荒いぜっ！それに付き合う俺も俺だけどなあつ！』

機体を加速させながら、ミシエルが笑う。

紅色をした機体はその速度をどんどん上げて行く。

それこそV.L搭載機に迫る速度だ。

連装ショットガン【レイン・オブ・サタデイ】でシャルロットが狙うが散弾全てが回



避されてしまう。

衝撃砲で狙うが、視線が追いつかないためそもそも形成すらままならない。

『ちっ、何だあの速度はっ!』

『早すぎるっ、あれじゃ狙えないよっ!』

『何と言う速度だ……センサーでも何とか捉えられているレベルだっ?!』

『当てずっぽうじゃ駄目よねっ!』

ラウラ、シャル、箒、鈴の音が響く。

一夏の白式・雪羅も搭載された荷電粒子砲でミシエルを狙うが、当たらずにそれてしまふ。

『くっ、早いつ!!』

(この速度……【単一仕様能力】かもね)

ガトリングガンで周囲を旋回しつつビームライフルでこちらを狙ってくるミシエルを牽制しつつ、楯無は思考を続ける。

放たれた弾丸は全て回避されている。

相手のビームライフから放たれるビームは狙いが牽制とはいえ、精密であり何発か白式と紅椿は貫つてしまっていた。

『どうします、楯無さん、このままじゃ……っ！』

『ええ、だから私が困る。一夏君は止めを』

追加パッケージ「麗しきクリースナヤ」を展開しつつ、別のディスプレイを展開して【誰か】に通信を行う。

高出力状態への移行が完了、アクアヴェールの色も変化する。

『おっと、本気でくるか』

牽制のビームライフフルを撃ちながらミシエルは高機動を続ける。

だが——ガグンと、機体が振動してISが停止する。

周囲の空間に引きずりこまれてまるで「沈んでいく」様な感覚と共に、シールドエネルギーが減っていく。

【霧纏の淑女】の単一使用能力、【沈む床】セツクヴァベツクだ。

『ラウラちゃんっ!』

『【A I C】全開っ!』

【沈む床】に加えてラウラの【停止結界】も重ねてミシエルを拘束する。

これにはミシエルも驚愕の声を上げた。

すでに指一本動かせない状況だからだ。

『なっ、にいつ!?!』

『今よっ!』

楯無の叫びが響く。

同時にミシエルの機体の下方から閃光が迸り、機体の左マニピュレータが貫かれた。

『ぐっ、狙撃っ!?!』

『流石ね、セシリアちゃん、いい腕してるわ』

先程、楯無が通信を送っていたのは地上にいるセシリアであった。

セシリアはミシエルたちの襲撃の際に一夏や楯無とは違い、学生寮にいたのだ。

そのためISのハイパーセンサーの範囲外からの狙撃、と言う作戦が取れたのだ。

『今よ、一夏君っ！』

『うおおおおっ!!』

【零落白夜】を全開で発動させた白式が雪片を上段に構えてミシエルのISに向かう。

勝った、と一夏は確信した。

だが――

『やるじゃねえか、だけど【セイバー】を舐めんなよ?』

そうミシエルの言葉が確かに聞こえた。

瞬間、ミシエルの機体が目の前から【ロスト】した。

『えっ?』

『ちいつ!?』

楯無が舌打ちしつつ、アクア・ヴェールを操作して自身と一夏を包み込んで防御する。次の瞬間、【アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲】から発射されたビームが2機に直撃した。

『ぐあっ!?』

『くうっ!』

シールドエネルギーが大幅に減り、白式の装甲が一部破壊されてしまった。

『『『『一夏っ!』』』』

一夏に恋する乙女である4人の声が響く。

『ふー、ヒヤツとしたが……ま、痛み分けて所かな?』

ミシエルのIS「セイバーガンダム」は地上からのセシリアの狙撃によって左マニピュレータにダメージが見られるがエネルギーもまだ充分。

そして追撃のレーザーを全て回避して行く。

流石のセシリアも座標位置が正確でなければフレキシブルも使用は出来ない。

回避行動のさなか、セイバーのディスプレイが展開され、通信が届く。

『了解、隊長。こっちも帰還しますよ』

そう告げたミシエルは、セイバーのスラスターを全開にして上昇して行く。

瞬間移動にも見えるレベルの速度で数秒でセンサーの探知範囲外へと離脱してしまつた。

『……してやられたわね』

【麗しきクリースナヤ】を格納した楯無が呟く。

機体はシールドエネルギーが減っているがダメージ事態は少ない。

だがミシエルを捕らえる事はできなかった。

セイバーが去っていった方向を見つつ、楯無は唇をかみ締めた。

『ちっ、チョロチョロとっ！』

オータムが舌打ちと共にビームライフルで光の粒子を残して超高速機動を続けるデステイニーを狙う。

その速度は彼女の常識を軽々と超えるレベルで非常識であった。

こちらの射線が外れたと認識した瞬間には、巨大な光の翼を翻したデステイニーがビームサーベルを振り上げて至近距離にいる。

咄嗟に脚部の実体ブレードで蹴り上げるが、残像を残して離れておりこちらをビームライフルで狙っている。

単一仕様能力の発動を最小限かつ最短時間に抑えることで、身体への負担とエネルギーの消耗を最小にして効率よくデステイニーは加速しているのだ。

先程からオータムは真のデステイニーに有効打を与えることができていない。

逆にデステイニーの攻撃はオータムのISのエネルギーを確実に減らしていた。

『はああっ！』

『ぐっ!?!』

一瞬で接近したデステイニーに反応出来ずビームサーベルがオータムのISの背部パッケージの一部を切り落とす。

この時点でデステイニーの残りエネルギーは8割程度。

対するオータムのISのエネルギーは残り3割まで減っていた。

『アンタじゃ無理だ。降伏しろ、命までは取らない』

ヴァジュラビームサーベルをオータムに叩き込んだ真は冷たい声色で告げる。

すでにS・E・E・D. を発動させており、鋭敏になった感覚はより精密に機体を操る彼の力となっている。

『……流石にラクス様を二度も倒しただけはあるな。このままじゃ勝てねえな』



美しい顔を笑みで歪ませたオータムがそう呟く。

同時に破損した背部ユニットを切り離す。

一見破損したユニットを切り離しただけ。

だがドステイニーのハイパーセンサーは切り離したユニット内に残留しているエネルギーを確かに検知していた。

そしてユニットは形を変えていく。

形状として真の記憶の中に近いものはイージスの高速巡航形態だ。

『なっ、バックパックが変形して……あれはイージス……っ!?!』

『まだそれだけじゃないぜえ?』

新たに展開された全く同じバックパックがオータムのISに装着される。

見に纏っている装甲が一瞬灰色に変化した後、再び色を持った。

PS装甲を搭載している機体の特徴だ。

『確かに私だけじゃやめえには勝てねえ、それは認めてやるよ。けどたかがIS一機、いつまでエネルギーが持つかなあ?』

間違いなく美女である彼女の顔に嘲笑の笑みが浮かぶ。同時に減っていたエネルギーもほぼ全快まで回復した。

『あの機体のエネルギーが……ほぼ全快にまでっ!? あつくん、気をつけてっ!』

『っ!? エネルギーの回復機能だどっ!?』

デステイニーを介して状況を確認していた束の言葉に真は驚愕した。

『ハハハッ、私だけ残機無限モードってか!? 最ツ高だぜ、リジエネイトオツ!!』

自律稼動を始めた背部ユニット——便宜上リジエネイトビットと呼称——はスラストターを全開にしてデステイニーへの突撃を敢行してきた。

『この程度っ!』

だが今の真ならば、単純な突撃など効果は薄い。

クラレントをビームライフルモードで起動、Vユニットによる超高機動に移行すると同時にリジエネレイトビットに放つ。

ISとは異なりシールドバリアは発動していないようで、クラレントのビームはリジエネレイトビットに直撃し、爆発。

その爆発を突き破って、腕部に装備されたビームソードを起動して、リジエネレイトが斬りかかって来る。

その一撃をヴァジュラビームサーベルで受け止める。

空いた手のクラレントをビームサーベルモードに切り替えるが、それを見越していたかのようにビームソードで受け止められた。

クラレントのビーム出力の方が高いが、圧倒的な差は無い為か押し切れない状態だ。

『困ってことかよっ!』

『はっ、今までそっちばかり多数だったからな。たまには私達の気分でも味わいな、シン・アスカっ!』

ニヤツ笑みを浮かべたオータムのリジエネレイトから再度、背部ユニットが切り離されてビット化する。

続けて背部ユニットが再度接続、少量減っていたエネルギーを回復させた後に再度切り離す。

合計して二機のリジエネレイトビットが展開される。

先程とは異なり、損傷部位は無い。

IS高機動機並の機動力で自機を挟むようにリジエネレイトビットは突っ込んでくる。

『ちいっー』

真はすぐさまデステイニーを後方に加速させる。

だが無傷での離脱は出来ず、リジエネレイトのビームソードによってヴァジュラムサーベルを切り落とされてしまった。

そしてシールドエネルギーも少量だが減少する。

舌打ちしつつ、両マニピュレータからクラレントビームサーベルを発振させる。

それをしてやったという顔で見ていたオータムの目の前に、突如ディスプレイ画面が立ち上がる。

リジエネレイトビットの突撃攻撃を回避し、一機にビームサーベルを突き立てた真は

その様子を観察する。

どうやら誰かとプライベートチャンネルによる通信を行っているらしい。

『うちのボスは目的を達成したらしいな、了解。ここまでにして離脱するって』

少しだけ残念そうな声色であったが通信相手にオータムはそう返した。

リジエネレイト本体を後方に加速させる。

だがそう簡単に行きが運ぶ事はなかった。

リジエネレイトの下方に熱源反応が2つ。

一機はデステイニーの姉妹機、もう一機は量産型のIS。

『マルチロック完了、いっけえっ!!』

『ドラグリーンもおまけだー!』

下方から多数のミサイルと2つの有線ビームクロウがリジエネレイトに向かって飛来してくる。

真の援護に、ジエーンを含めた第3アリーナの避難を終えた簪と本音が到着したの

だ。

『簪っ、本音さんっ!』

『増援かよ、つたくめんどくせえな』

ミサイルとドラグーンの攻撃を回避しながらオータムが舌打ちする。

真を狙っていたリジエネレイトビットは飛燕のミサイルによつて撃墜され、落下していく。

『大丈夫、真?』

『ああ、大丈夫』

『数はこつちが有利だねー……逃がさない』

デステイニーの背後に飛燕、そしてインパルスマークIIが並び、リジエネレイトと対峙する。

対するリジエネレイトはビットを全て喪失。新たに切り離せば展開できるが、数に押しされてそれは難しい。

『……つたくめんどくせえなあ、もう帰ってやろうって所だったのによお?』  
『逃がすかよ、あんた達の目的を話してもらおうぞっ!』

デステイニーがVレユニットを起動。

併せて飛燕も起動し、インパルスマークIIは援護の為に後退し、ドラグーンを切り離す。

明らかに不利な状況であるのに、オータムは笑みを浮かべた。

『はっ、それじゃあよ、これでもお前は私を追跡するか?』

『何?』

オータムの言葉に疑問符を浮かべた瞬間、背後、インパルスマークIIの下方から迫る物体をセンサーが感知した。

『うわわあっ!?!』

『本音っ!?!』

振り返ると、本音のマークIIに向かって破壊され落下したはずのリジエネレイトビットが突如再起動し、触腕にも見えるマニピュレータを伸ばして組み付いたのだ。

これがデステイニーや飛燕ならば感知した瞬間に距離を取れた。

しかしインパルスマークIIはインパルスが素体になっているが、現在装備されている「ドラグーンシルエット」の機動力はそこまで高くないのだ。

加えて、搭乗者は今まで整備を主に行っていた本音だ。

代表候補生達との模擬戦や、歌姫の騎士団との死闘を潜り抜けた真と比較して技量が劣ってしまうのは仕方が無いことである。

『うっ、くうっ……!』

マークIIの装甲が軋みを上げ、シールドエネルギーが減少していく。

リジエネレイトビットはショットによって火花を飛ばしながらも次の行動を起こしていた。

飛燕のセンサーがビット内に集まるエネルギーを感知したのだ。



『高エネルギー反応……まさか自爆っ!?』

『くっ、アンタはっ!!』

本音の状況を詳細に確認しているという事はその分、隙となる。

その隙をオータムは見逃さずに、すでにデステイニーからかなりの距離を取っていた。

『はは、じゃあな、シン・アスカ!』

そう笑顔で告げたオータムのリジエネレイトはスラスターを全開にして離脱していく。

追跡すればデステイニーと飛燕ならば追いつけるだろう。

だが、今は――

『本音さんっ、今助けるっ!』

『真、デステイニーならっ!』

『ああ、分かっているっ！』

真と簪は本音を助ける事を優先した。

デステイニーが寄り添い、組み付いているリジエネleitビットにマニピュレータを充てる。

すると、デステイニーの背部の光の翼が展開される。

『本音さん、動かないでくれよ』

『うっ、うん』

触れたマニピュレータから直接クラレント・ビームサーベルを発振させる。

当然それはリジエネleitビットを貫く形になる。

ガグンと振動した後、マークIIに組み付いていた触腕から力が消え、離れて落下していく。

『自爆用エネルギーはデステイニーの「能力」で吸収できたから……うん、もう大丈夫』  
『怖かった……ありがとう、あすあす』

『ああ』

涙目で真に告げる本音に、微笑んで真が答える。

(……あいつ等、何のために)

既にセンサーの探知範囲外に離脱してしまったため、追跡は不可能であった。その時、デイスプレイが立ち上がって通信が繋がる。

『あつくん、聞こえるっ?』

『東さん、どうしました?』

相手は東であった。

『一旦、校舎まで帰還して。おそらく亡国の連中は全員退却したはずだから』

『……分かりました。帰還します』

『それと連絡。クーちゃんが重傷、フレイ・シユバリーが誘拐された……そして敵はラ

ウ・ル・クルーゼらしい』

『つ!? どういう……いえ、先に帰還します』

『うん、お願い』

通信がきれ、ディスプレイが落ちる。

リジエネレイトが去った方角を一瞥した後、降下を開始した。

IS学園 生徒指導室

ライリー・ナウいや、ラウ・ル・クルーゼと亡国機業の襲撃から数時間。

真達は生徒指導室に集まっていた。

ここにいないのは負傷したクロエだけだ。

彼女は現在医務室のベッドに寝かされている。

全身の裂傷と右腕の骨折、包帯とギプスが痛々しいが、出血は機能が回復したドレッツ  
ドノートの搭乗者保護機能で保護した為、そこまで激しいものではなかった。

「……」

生徒指導室の中で特段暗い雰囲気を出しているのはラキーナであった。

完全に敗北した形であり、目の前で守りたいと思った女性を誘拐されたのだ。

あまりに暗いため、真や一夏達は声をかけられずにいた。

そんな時、生徒指導室の扉が開いて、医務室から束が戻ってくる。

クロエの治療は主に彼女が担当していたのだ。

「くーちゃんの怪我は全治1か月くらいだね。命には別状はないよ」

「……そうか」

左腕に包帯を巻いたカナードは静かにそう返す。

彼の左腕も負傷していたが、止血と縫合はすでに完了していた。

「奴等、クルーゼ一味について情報は？」

「カナードツ、クロエについてはそれだけかよっ！お前助けて怪我したんだぞ!？」

カナードの態度に一夏が食って掛かる。

それを冷たい目で一瞥したカナードは無視して束に視線を向けた。

「何とかいえよっ！」

「止めなさいよ、一夏」

さらに食って掛かろうとした一夏を鈴が止める。

「鈴、なんで……！」

クイツと顎でカナードの左腕、包帯が巻かれている方の腕を見るよう一夏に合図する。

ポタポタと、血が垂れている。

爪が食い込み肉を割く程の力で、カナードは拳を握りしめていた。それを見た一夏の怒りは急速に鎮火していく。

「……カナード、ごめん。見えてなかった」

「……大丈夫だ。それで束？」

そう告げたカナードの顔を見て束が返す。

「正直な所、情報は全くないよ。でも少しだけ時間を頂戴」  
「何かあるのか、束」

千冬の言葉に束が頷く。

そして展開される空中投影ディスプレイ。

それには、デスクティニーやドレッドノート、白式達が戦った戦闘映像が映されていた。

「あいつらの機体に使われてるISコアは、エクスカリバー事件で入手したデータの中にあつたラクス製のISコアなの。明確に違う点として従来のコアネットワークとは独立したコア同士のネットワークを持つてるの。それを見つけてることが出来ればあいつ等がどこに行つたのかが分かると思う」

なるほど、と千冬が相槌をうつた後にさらに尋ねる。

「東、どれくらいかかる？」

「三日、いや二日頂戴。独立してるから調べるのに少しだけかかっちゃう。なるべく早くする」

「分かった、頼む」

うん、と東が頷く。

その後、現時点での情報が多量に少ないため情報収集が完了するまで、一旦自室にて待機、通常通りの生活を送れと指示が出され、それに真達も従う事となった。

「真、このことはデユランダルにも伝えるのか？」

自室に戻ろうとした真に、カナード尋ねる。

「ああ。レイに、戦友に聞いた事があるんだ。議長……蔵人さんはクルーゼと親交があつたつて」

「成程。それでお前はどう思っている？」



カナードの言葉にえ？と疑問の声を上げる。

「奴等の行動の意図が読めない。何の理由があつてフレイ・シュバリーを狙つたかだ」  
「……【フレイ・シュバリー】は【フレイ・アルスター】なんだろ？クルーゼが狙つたのもそこが関係してるんじゃないか？」

「何故、わざわざIS学園に彼女を送り込んだ？やつこの世界の立場はフランス代表候補生教官、つまりはいつでも狙えたはずだ」

確かにと内心頷いた真が未だ暗いままの表情のラキーナを一瞥した後、答える。

「……ラキーナに会わせる為とか？」

「何故？」

「……いや、分かんないけど。これも全部推測でしかないし」

「……まあ、そうだな。すまない、引き止めてしまったな」

「別にいいけど。それでどうすんだよ、ラキーナは」

「……後で発破はかけるさ、それで立ち直れるかはアイツ次第だ。俺はこれから束に用がある」

ラキーナを見てそう告げたカナードも生徒指導室を出て行く。

それを追って、真も自室に戻り、蔵人に報告するために学生寮へと向かう。

---

同日 深夜 I S 学園 医務室

現在、I S 学園の医務室にはクロエが寝かされており保健の女医の他に人影があった。

スーツ姿、ジャケットを脱いだカナードであった。

カナードとクロエがそういう関係であることはすでに周知されており、これは千冬の気遣いであった。

いつもの彼なら余計なお世話だと切り捨てて情報収集に協力したはずであった。だが今はその気遣いに乗る事にした。

「……」

意識が戻らず眠り続ける彼女の頬に右手を当てる。

傷に響かないように、優しく、慈しむ様に。

普段の彼ならばこんな事は決してしない。

だが、今はただ彼女といたいと、彼は心から思っていたのだ。

「カナ君、くーちゃんの事、本当に大切なんだね」

「……いつからいた、束」

ベッドのカーテンから隠れていた束が現れる。

「私の気配にも気づかないなんて、らしくないよ?」

「……そうかもな」

そう苦笑を浮かべた彼に束は告げる。

「【ALマニピュレータ】への換装と、カナ君の希望通りXアストレイから【武装】の移植は終わったよ」

ドレッドノートHの左マニピュレータはスコールの「アマツ」との戦闘で破壊されている。

自己修復機能で修復可能なレベル内ではあるが、時間がかかる。

その為、新装備であり昨年秋ごろより開発していた「ALマニピュレータ」に両腕とも換装する事としたのだ。

換装自体は30分程度で終了した。

先程真に話した用とは大破したXアストレイから一部無事であった武装のドレッドノートへの移植である。

束としてはその「武装」に対してカナードは適性を持たず、言い方は悪いが持て余してしまう筈の物という認識だ。

だが頼まれたからには、全力で要望に応えた。

元々ドレッドノートとXアストレイはMS時代と共通して機体のフレームからして共通したモノを使っている。

その為、武装の移植自体はそう難易度の高いものではなかった。

「……まだ情報収集も終わっていないのに、すまないな。いつも世話ばかりかけて」

カナードがそう告げると、束は目を点にして驚いていた。

「…………え、本当にどつたの、カナ君。流星の私もその反応は予想外」

「お前は俺をなんだと思っただけだ」

「え、鉄面皮の不器用男…………ひっ！アイアンクローはなしっ！」

わきわきと右手の指を動かしていたカナードをみて束は後ずさりしつつ叫ぶ。

その様子を見た彼は苦笑しつつ、続ける。

「…………誰かを愛したことなどなかった。スーパーコーディネーターなんて過去のモノだと、乗り越えたつもりだが所詮は戦う事しかできない人間だ。それでもいいと思っただ」

「…………カナ君」

「だがいつの間にか、クロエは俺にとって大切な…………愛する人になっていた。初めてなんだ、自分以外の人間を傷つけられて、ここまで腸が煮えくり返るのは」

ギュッと手を握りしめる。

「だから……だからスコールは俺が倒す。これだけは誰にも譲らない。クロエの為に、そして俺自身の為にも」

「……それだけじゃ駄目だよ？」

「え？」

カナードの言葉に束が返す。

彼は少々驚いた様な表情で笑みを浮かべる束を見つめる。

包帯がまかれていない右手をとって彼女は続ける。

「全部終わったならちゃんと呼んできてあげないと。そしてちゃんとクーちゃんをこの大きな手で抱きしめてあげて。それくらいはしてあげるのが男の子だよ？」

「……ああ、そうだな」

「よし、言質取った！あとで言い触らして……あだだだだ」

「やめろ」

束の後頭部を右腕で掴み上げて力を込める。

彼女は女性がしてはいけない表情で叫んでいる。

「東、ありがとう」

カナードは笑みを浮かべつつアイアンクローを数分にわたって続けるのだった。

## PHASE 8 明日への決意

襲撃と同日——深夜

更識家 蔵人私室

「私を感じていた違和感というのはラウの事だったのか……しかしまさか女性になって  
いるとは思わなんだよ」

自室のPCを操作しつつ、一人蔵人は愚痴る。

すでにIS学園の真から連絡を受けており、学園が襲撃された事は蔵人の耳にも届いて  
いた。

「フランスの代表候補生フレイ・シユバリーイの誘拐か、ラウの立場ならばいつでも出来  
たはず。この行動にも意味があるはずだ」

PC上にはラウ・ル・クルーゼこと「ライリー・ナウ」のパーソナルデータとフレイ



のデータが表示されている。

そこから何か得られるかと思つて調べているが、別段有力な情報ではなかったようだ。

一息つくために、緑茶の入った湯飲みに手を伸ばす。

それと同時にあつた。

ディスプレイ上にメールが届いたアイコンが表示された。

「……ミスターM?」

そのメールの件名は「ミスターMからのヒント」

思わず件名の名前を確認してしまった。

悪質な迷惑メールにも見れるモノであつた。

だが蔵人が使用しているPCの宛先を知っている。

しかもセキュリティソフトを介さずに送ってきたという事実に興味がわいた。

メールを開く。

本文には何も書き込まれていないが、ファイルが1つ添付されていた。

「……」

ファイルを開くとそれは座標と地図のデータ。  
太平洋のど真ん中をそのデータは示していた。

「……これはっ！」

データを見た瞬間、蔵人の脳裏に電流が奔った。  
すぐさま内線に手を伸ばし、部下を動かす。

「……畏、だろう。だが今はこれを確かめる事が先決か」

部下に指示を出した蔵人はそう呟いて自身も確認の作業に取り掛かった。

同じ頃――

IS学園でも動きが見られた。

「……………」

空間投影ディスプレイを凄まじい速度で操作していた束の手が止まる。  
ディスプレイにメールが送られてきた旨の表示が現れたからだ。

「……………ミスターMウ?」

怪訝な声を出した束で合ったが、その数秒後には表情を引き締めていた。

「……………これって……………っ!」

進捗が芳しくなかった情報収集に光が見えた。

そう感じた束のタイピングは先程よりも軽やかであった。

---

襲撃から一夜明けて ラキーナ 自室

「……………」

自室でラキーナは蹲り、一睡もせずに虚ろな瞳で天井を眺めていた。

ライリー、否、クルーゼに完全に敗北し、目の前でフレイを奪われた。

かつてキラ・ヤマトが守れなかった彼女を、今度こそラキーナ・パルスとして守ろう  
と思い始めた矢先の出来事だ。

全力で相対したが、相手には一撃すら与えることができなかつた。

そのシヨックは計り知れないものであつた。

「……………私はやっぱりだめなのかな」

何度目かの弱音を吐いた時であつた。

自室の扉がノックされた。

今は誰にも会いたくなく、億劫なラキーナは無視を選択した。  
しかし、数分経つても扉を叩く音は消えない。

すこしイラつきながらも、ゆっくりと扉に向かい開く。

「……………誰？」

「俺だ、ラキ」

「……兄さん」

扉を開くと、そこには兄であるカナード・パルスがいた。

その右手にはゴーグル型のデバイスの様なものと、ISスーツらしきスーツが握られていた。

「……何の用？」

「いつまでそうやって腐ってるつもりだ。やるべき事はわかっているはずだ、そうだろう？」

「……っ」

ずきりと胸に突き刺さる言葉。

フレイを救出するために立てと彼は言っている。

だが――

「……私じゃクルーゼには勝てないんだ。一撃すら与えられなかったんだよ？ S. E.

E. D. も発動してた、なのに……なのに……！」

弱音が心から溢れ、声に嗚咽が混じる。

これほどまで無力さを感じたのは、初めてだ。

キラ・ヤマトがフレイ・アルスターを失った時以上の無力さを今感じている。

同時に感じているのは恐怖だ。

次に相対した時にはフレイをまた失うかもしれない。

無力さと恐怖が負のサイクルをラキーナの中に作っていた。

嗚咽をこらえる様に俯いてしまった妹の様子に、ため息をついたカナードであったが

少し考えた後、口を開いた。

「……【生きている内は負けじゃない】」

「……え？」

兄の言葉に顔を上げる。

涙でくしゃくしゃになったその顔にカナードは苦笑していた。

「確かにお前はクルーゼに負けた、完膚なきまでにな。だがお前は生きている。そして敵の能力も把握した。ならばやれることをするべきだ。次に戦って勝つために、勝つてフレイ・シュバリーを奪い返すためにだ」

「……兄さん」

カナードはそうラキーナに告げて手に持っていたデバイスとスーツを放り投げる。驚きながら投げられたデバイスとスーツを受け止める。

「束が一晩で作ってくれた。ドラグーンかBT適性の高い人間に渡せ、そうすれば勝機はある」

「……私にできるかな」

「さあな、だが腐っているよりは足掻いて可能性を掴む事に賭けるべきだ」

「……強いなあ、兄さんは」

受け取った物を確認しながら、薄く笑みを浮かべる。

「何かあれば言え。俺はこれから束を手伝いに行く。ラキ、お前はとうする?」

「……足掻いてみるよ、私も」

涙をぬぐってからカナードに告げる。

「私が、フレイを助ける……今度こそ絶対に、守ってみせるっ！」

そう告げた彼女の目は確かな信念の光が宿っていた。

数十分後 ブレイク号 マドカ私室

かつて歌姫の騎士団に所属し、セシリアによってとらえられた少女、コードネーム  
【M】

本名、織斑マドカはアスランと同じくブレイク号で保護に近い軟禁状態にあった。

「クロエ姉さんは……まだ意識不明、見舞いに行きたいが私が行くと余計な混乱が起こりそうだな。夜行けるか交渉してみるか」

生体支配が解け、ラクスに絶対のカリスマを感じるよう調整されていた彼女の人格は



本来のモノに戻っている。

またその出自のせいかクロエには近しいものを感じていたらしく、彼女の事を姉の様にも感じていた。

そんな彼女がカナードをかばって重傷を負ったことは彼女の耳にも届いており、心から心配していたのだ。

そんな時であった。

ドタドタと物音が近づいてくる。

部屋には防音機能もあるのだが、所詮は船。

どうしても振動は伝わってしまう。

「……………なんだ?」

首をかしげていると、部屋の扉が勢いよく開かれた。

それこそ扉を破壊するような勢いでだ。

「マドカちゃんっ!!」

「うわあっ!?!」

部屋に入ってきたのはラキーナだった。

かなり息が荒く、汗を滝のように流して肩で息をしている。

その手には大きめの手提げ鞆

「ぜえ……寮から……ここまで……遠いね、やっぱり……ぜえっ……！」

長距離を全力疾走したためか、脇腹がひどく痛む。

そのため、崩れ落ちる様に膝を付いてしまった。

「そつ、そんなに全力で走ってきたのか、ISを使えばよかったのに」

「スつ、ストライクは今束さんに預けて……そんなことよりも、マドカちゃんにお願いがあつて……おえ……つ！」

ゲホゲホとむせる。

その様子をみたマドカは彼女の背中をなでる。

それにありがとうと返した後、つばを飲み込んだラキーナが続ける。

「単刀直入に言うよ、マドカちゃんのを貸してほしいんだ」

「……亡国、スコール達と戦うために私の力があるわけか」

「うん。自分勝手なお願いだつて言うのはわかってる。けどどうしてもマドカちゃんのがいるんだっ！お願いっ！」

そういつて彼女は土下座して頭を下げる。

ゴツと床に額が当たったが些細な事だ。

「っ、いや、土下座なんて……」

「私ができることならなんだつてするからっ！だからっ……っ！」

ラキーナの勢いに少し苦笑しながら、彼女の肩に手を置く。

「正直なところ、ラキーナ達には私は恩を感じてる。私を洗脳していいように使ってくれたからな、協力する。それにクロエ姉さんの敵討ちも兼ねてるからな」

「っ！ありがとうっ、マドカちゃんっ！」

勢いよく顔を上げたラキーナはうれし涙を浮かべていた。

「だが私の力といっても……今の私にはI Sは無いぞ?」

「うん、分かっている。でもこれがあるんだ」

そう言って手に持っていた手提げ鞆から、先程カナードから受け取ったデバイスとスーツを取り出す。

「これを使って、私とマドカちゃんの身体をつなげるんだ」

「……は?」

ラキーナの言葉に思わず声が漏れたマドカであった。

同日 I S学園 第3アリーナ Aピット

『よし、視界センサーとストライクとのリンク完了。どう、見える?』

『ああ。ただ。自分が浮いているように見える。これは慣れなければ』

ブレイク号の整備区画内で特殊なゴーグルとセンサーを内蔵したISスーツを身につけたマドカが、第3アリーナ上空で浮かんでいるストライク、ラキーナに通信で告げる。

マドカの身に着けているISスーツから延びるコードは大破したXアストレイに接続されている。

Xアストレイを媒介にストライクに接続しているのだ。

『あまり無理はしないでね』

『いや、大丈夫だ。それに向こうは準備万端の様だぞ』

『準備はよろしいですか、ラキーナさん？』

相對しているのはセシリアが駆るブルー・ティアーズ。

自室で待機していたところ、訓練に付き合っただけだとラキーナに頼まれたのだ。

情報収集は東が行っており、手持ち無沙汰であった事と雰囲気が変わった彼女に興味を持ったため、快諾したのだ。

『お願いします、セシリアさん』

『ええ、それでは行きますわよっ!』

ティアーズが切り離され、まるで生きているかのようにラキーナに向かって飛翔していく。

後方に加速しつつディスプレイを残像が残る速度で操作し、リアルタイムでプログラムを書き換えていく。

『センサー、マニピュレータ、スラスターのリンク開始、接続対象のXアストレイとのリンク形成、搭乗者認証問題なし!ユー・ハブツ!』

『アイ・ハブツ!借りるぞっ!』

ガグンと一瞬揺れたストライクであったが、すぐさま迫るティアーズから距離をとった。

それを追うように、360度全方位に展開したティアーズからレーザーが放たれる。

『速いが見えているっ!』

だがそれをまるで見えているかのようにストライクはAMBACで回避した。

『ならばこれはどうですっ！』

球を描くように展開され、次々と放たれるレーザーも最小の動きで、防御が必要な際はシールドを適宜展開して捌いていく。

今のセシリアのティアーズ捌きは国家代表、ヴァルキリーでも回避が困難なレベルに達している。

ラキーナ単体ではS・E・E・Dも発動していない今の状態では本来はなすすべもなく、高機動でティアーズに射撃をさせないよう動き回る必要がある。

だが、今の彼女は一人ではない。

マドカがいる。

マドカのドラグリーン適正は現状のセシリアより少々劣るレベルである。

セシリアのティアーズを正確に感知して、Xアストレイを通じてストライクの機体を遠隔操作する。

ドラグリーン適性のないラキーナはその際、強制的に体をISに動かされている状態で

あるが、搭乗者保護が効いているため負荷は少ない。

これがライリーの「ロキプロヴィデンス」に対する攻略法。

S・E・E・D・状態でも適性自体が存在しないため、ドラグーンを感知するにはどうしても適性持ちよりも遅れてしまう。

ならばドラグーンの感知と回避は別の人間が担当すればいいというのがライリーのISの能力、言うならば「瞬間展開」への対処方法だ。

ロキプロヴィデンスの能力は1対1での戦闘では無敵に近い。だがそれが2対1に変わったのならば勝機はある。

『……成程、こういう事でしたのね。マドカさんが、ラキーナさんを通してストライクを操って回避しているのですね』

一旦ティアーズを自機に戻して深呼吸したセシリアがラキーナに尋ねる。

フレキシブルを使えばいかにマドカが操っているとはいえ、ダメージを与える事は可能だ。

しかし今回の訓練はあくまでクルーゼへの対処法を身につけるためのものだ、使う必要はない。



『ええ、身体が勝手に動くのはちよつと違和感ありますが……元は兄さんがあつたことのあるジャーナリストの方が取つた戦法なんです。その人は機体の目になって、メインのパイロットを補佐してたらしいです』

ラキーナの言葉になぜか、セシリアは苦笑に近い表情になっていた。それを不思議に思つたラキーナが尋ねる。

『どうかしたんですか？』

『……C・E・という世界はジャーナリストも兵器を持つているのですね』

真やカナード、そしてラキーナの話からセシリアのC・E・世界に対するイメージはかなり悪くなつてゐる。

絶滅戦争が2度も起こり、火薬庫に変わった世界。

最近友人である簪から借りて読んだ漫画の影響か、荒れ果てた荒野をならず者たちがバイクやMSに乗つて奇声を上げて闊歩しているような世界を彼女はイメージしてゐるのだ。

『……そうしてしまった当事者の一人としては何も言えないですね、はは……はあ』  
『笑つてる場合か、さつさと訓練を続けるぞ。ラキーナ、身体から極力、力を抜いてくれ、少し違和感がある』

『つと、分かったよ。すいません、セシリアさん。もう一度オールレンジ攻撃、お願いします』

『分かりましたわ。次はもう少し、複雑に動かしますわよ？』  
『ええ、お願いしますっ！』

ラキーナの声とともに、セシリアがティアーズを切り離す。  
この後辺りが暗闇に包まれるまで、彼女達の訓練は続いた。

時間は少し前後して――

――意識が浮かんでくる。

目を開けると目の前に綺麗な花が咲き誇っている。

見渡す限りの花畑。

一面に様々な種類の花が咲き乱れ、風が吹けば花びらが舞っている。

とても心地よい風と花の香りが鼻腔をくすぐる。

何度か訪れた事のある、見知った空間。

そこにジャージ姿の真が立っていた。

「……また……かよ」

呆れたような声でそう呟くと、背後に気配を感じた。

振り向くと、そこには自身の I S の人格である金髪の少女が立っていた。

だが以前とは少し様子が違っていた。

『ようこそー、つてもう慣れちゃったかあ』

「まあな……あれ、デステイニー、髪の毛……いや、雰囲気変わったよな？」

そう、セミロングであったデステイニーの金色の髪が、今や腰あたりまで伸びている。

それに何処か成長したようにも見える。

自分よりも明らかに年下だった容姿が今や同年代のようにも見える。

『あ、気づいてくれた？ そうなのっ！ エクスカリバー事件の時、あの分身操作の時くらいかな！ 真との結びつきが強くなったからかも』

えっへんと何故か胸を張ったデステイニーに苦笑していると背後に気配を感じた。

振り返るとそこには、自身の最愛の人が立っていた。

自分とは異なりI S学園の制服姿でだ。

「あれ、真？」

「え、なんで簪がここに？」

簪が何故此处にいるのかと疑問の声を上げる。

「えっと、襲撃後の情報共有が終わったら自室で待機してたんだよね？」

「ああ。蔵人さんに襲撃の事を伝えた後は俺も睡眠とって置こうかって」

「うん、私もそうなんだけど……」

『呼ばれたのですよ、私たちは』

簪の横にふわりとワンピースを着た黒髪の少女が現れる。

エクスカリバー事件の際に協力した、簪のIS「飛燕」の人格コアだ。

「飛燕、呼ばれたって?」

「えっ、飛燕って私のIS……?」

真の言葉に簪の顔に驚愕が浮かぶ。

それにはっと気づき、飛燕が笑みを浮かべた。

『はい、簪様。その飛燕のコア人格が私です。そういえば、エクスカリバー事件の時はゆっくりとご挨拶もできませんでしたね、失礼しました』

「金髪の方が俺のISのコア人格『ステイニー』」

『はい、簪お姉ちゃん!ステイニーです!よろしくです!』

「すごいっ、すごいっ……ISにはこんなにはつきりとした意識があるんだ……っ!」

ステイニーと飛燕の自己紹介に簪が目を輝かせていた。

元々技術に秀でた彼女である。

また彼女がよく見るヒーロー物、勇者ロボアニメなどでよく人と同じように喜怒哀樂の感情を持ったAIたちが出てくるのだ。

彼女が興奮してしまうのは仕方が無いだろう。

そんな彼女達に声をかける存在がいた。

「あら、真君に簪ちゃん？」

「ほう、真と簪もいるのかね」

「「え？」」

振り返るとそこには簪の姉である更識楯無——刀奈が簪と同じように制服姿で立っていた。

その後ろには和服姿の蔵人もいる。

「お姉ちゃんにお父様っ？」

「はあい、貴女のお姉ちゃんの刀奈よ。それでここ、どこなのかしら。綺麗な花畑ね」

疑問を浮かべる真が現状を刀奈と蔵人に伝える。

そしてデステイニーと飛燕に視線を移した刀奈が少し肩を落として口を開いた。

「えー、なんで【霧纏の淑女】はいないのよお」

『あー……』

『……』

デステイニーが苦笑しながら飛燕に視線を移す。

それを察したのか刀奈が尋ねた。

「え、何、そんなになの。私のISのコア人格って」

『そういうわけじゃないんです、ね、飛燕。そろそろアクセスの許可してあげなよ』

『いくら姉さんの頼みでも駄目です。向こうからのアクセスは当分許しません』

ぷいっと不貞腐れたような態度をとった飛燕に簪は苦笑していた。

(……あれだ、ペットは飼い主に似るってやつだろ)

（うん、霧纏は刀奈さんそっくりだから。飛燕も自我が目覚めた最初は受け入れてただけどね……）

思い出すように耳打ちで返すが、デステイニーは苦い笑みを浮かべていた。

「なあ、デステイニー。さつき飛燕が呼ばれたって言ってたけど……」

『ああ、俺が皆さんと呼び込んだんだ、シン』

自分の疑問の声に返した男性の声とともに、視界に赤い影が映った。

それに視線を移すと、かつての戦友、非常に整った顔の美青年である「レイ・ザ・バレル」がザフトの赤服姿でこちらに歩いて向かっていた。

各々がそれに気づいて視線を移す。

蔵人は驚いたような表情であったが、簪と刀奈は初対面であるためか、誰と言う表情を浮かべていた。

『久々だな、シン』

「……レイ」



涙をこらえるように俯いた後、真は何故かレイから距離を取る。  
大体10m程離れた所で一気に振り返りつつ全速力のダッシュに移行。

『何?』

突然の事でレイも反応が遅れた。

自分をまだ呑み込めていない簪と刀奈はさらに困惑していた。

真とレイの距離は約3m、そこで真は飛び上がった。

飛び上がった真は助走の勢いを前方宙返りでさらに強めて右脚を構えている。

ここでレイは真が何をしようとしているかを理解した。

だが遅かった。

「うおりやああつ!」

『ぐふおつ!?!』

十人中十人が間違いなく美男子と答えるであろうレイの顔面に真の飛び蹴りが直撃

した。

硬いブーツではなくスニーカーだったがそれでも今の彼の身体能力は平均的な高校生を大きく上回っている。

つまりはかなりの威力であり、レイはたまらずぶっ飛ばされる事となった。

「しっ、真っ!？」

「なっ、何やってるの真君?! しかも滅茶苦茶綺麗に入ったわよっ!？」

突然の真の行動に2人が驚愕の声を上げ、蔵人は一人納得したかのように苦笑していた。

『ぐっ……一発殴られるくらいは覚悟していたが、まさか出会いがしらに飛び蹴りとは思わなかったぞ、シン』

「流石に言いたいことが溜まりまくってたからな。でもエクスカリバーの時はありがとう。おかげで簪を、エクシアさんを助けられた。だからキック一発で済ませた」

『ふっ、気にするな』

「俺は気にしないだろ?」

しりもちを着いたレイに手を伸ばして立ち上がらせる。

蹴りが直撃したためかレイは涙を浮かべているが、表情自体は笑顔であった。

『初めまして、ミス簪、ミス刀奈。俺はレイ、レイ・ザ・バレル。シンから聞いているかもしれないが……死人だ』

「……うん、貴方が真をC・E. からこの世界に送ったつて。真の戦友……だよな?」

『ええ。ようやく心から大切にしたいと思える女性に会えたようで……友人として感謝を。ありがとう』

「それは私も。レイさん、貴方が真をこの世界に送ってくれなかったら、私は真に会えなかった。だから本当にありがとう」

簪の言葉にレイは笑みを浮かべる。

「え、初耳なんだけど。真君?」

「……そういえば刀奈さんには話してなかったですね、いろいろと省きますがレイがC・E. で死んだ俺をこの世界に送ってくれたんですよ」

「あらやだ、この露骨な鼻根。簪ちゃんには全部伝えてるのね」

「レイ、俺だけじゃなくて簪や刀奈さん、そして蔵人さんと呼んだのは理由があるのか？」

刀奈のジト目の抗議を無視して、レイに尋ねる。

『……ああ』

「やはり、ラウかね？」

『……ええ。俺の行動のせいでシンの魂にC・Eの人々の魂が引つ張られ、この世界に生まれ変わっている。ギル、あなたもシンに引つ張られた1人です』

レイの言葉に蔵人はうなずく。

「なるほどな、それならキラ・ヤマトやアスランも俺に引つ張られた訳だ」

真の言葉にレイが頷く。

『……そしてその中に、ラウがいたんだ』

「レイさん、彼女は何をしようとしてるの?」

『それを話すにはまず俺とラウのことを話さないとすね。俺とラウはある人間のクローンなのですよ』

レイの口から出た言葉に簪と刀奈は驚愕の表情を浮かべた。

『クローニングは不完全でテロメアに欠陥があつた俺達は、生まれながらにしてすでに短い時間しか生きることができないという運命に縛られていた』

「……レイさん」

簪が悲しそうな声を出す。

だがそれに少しだけ笑みを浮かべたレイが続ける。

『決まりきつた定め……そのせいで俺やラウの感情の根底には世界と自分の運命への絶望がありました。俺は導いてくれる人、そして共に戦えた友人たちのお蔭で人間として死ねた。死ぬことができた。しかしラウは違う、彼は全く変わっていない』

「……だから世界を滅ぼすのか、クルーゼは」

『……ああ、できてしまうんだ。事実ヤキン戦役の終盤は彼が裏から操っていたという記録が残っていた。もつともそのせいでラウに自分たちの罪をすべて擦り付けた奴らもいたんだが……失礼、話がそれた』

手の仕種で話題を変える、とそう言った。

「この世界でも彼は変わらさずか……レイ」

『恐らくそうだと思います。でなければ今回の様な行動は起こさないでしょう。彼は』

そう蔵人に告げたレイは真に視線を移した。

彼の瞳は何かを訴えるようなものであった。

「……レイ」

『シン、ラウを止めてくれ。お前にこんなことを頼むなんて勝手な事だとは重々承知している。だがこんなことを頼めるのはお前しかいないんだ』

「わかってるよ。できるだけやってみるさ。ただ、俺だけじゃなくて皆でさ」

そう返した真に怪訝な表情を浮かべる。

『……キラ・ヤマト、いやラキーナ・パルスに期待しているのか?』

「……ああ」

真の返答に舌打ちしつつ、レイは続ける。

『カナード・パルスの影響で随分と変わったようだが……俺はヤツを信用できない』

「そうだろうな。俺もキラ・ヤマトがやったことを許すつもりなんてないし信用もしないや」

『なら何故だ?』

「……一緒に戦ったから分かるんだ。はつきりと今のアイツはキラ・ヤマトじゃないつてな。だから俺はキラ・ヤマトとしてじゃなくてラキーナ・パルスとしてならアイツを信用できるんだ」

真の返答にレイはため息をついて苦笑を浮かべた。

『……分かった、お前がそういうならばそうなんだろうな』

「まあ、まだ情報もつかめてはないけどさ」

「それなんだが、私が1つ有力な情報を掴んだよ」

真の言葉に蔵人が返す。

「本当ですかっ!？」

「ああ。レイ、これは夢なんだろう?」

『はい、夢を通じてギル達につながれている状態なんです』

「ならば起きた後だね、資料があつたほうがわかりやすい話だ。私もIS学園に向かう、そこで話そう」

「……分かりました」

蔵人の言葉に真は頷いて返す。

するとレイの身体がうつすらと透けていく。



「レイ、身体が……」

『あまり長い間は干渉できないのですよ、ギル。俺は所詮死人ですから。意図はしていませんでしたが、あなたもこちらの世界で幸せそうに暮らせているようで本当によかった』

そうレイは笑みを浮かべる。

蔵人は笑みを浮かべたレイを抱きしめる。

『ギツ、ギルツ!?!』

「……レイ、私は君の事を息子の様に思っている。君は自分の行動に責任を感じているようだ。私は感謝しているんだ。愛する妻も娘も2人できたんだ。本当にありがとう」

『……っ、ギル……っ!』

蔵人の言葉にレイは目尻に涙を浮かべ、言葉に詰まる。

それを見た刀奈が歩み寄って告げる。

「なら、レイ兄さんって呼んだほうがいいかしら？」

『ミス刀奈……』

「貴方はお父様の息子、なら私は貴方の妹ってことよ、レイ兄さん」

「お兄様……何か新鮮」

『ミス簪まで……』

刀奈と簪が微笑みつつ、レイに告げる。

「レイ兄さん、ラウ・ル・クルーゼのことは私達に任せて」

「うん、真に協力するから……信じて、レイお兄様」

『……なら、頼もうかな。俺の友人と妹達に……』

刀奈の言葉にレイは目尻に溜めていた涙を零して笑みを浮かべた。

## PHASE 9 深遠への出撃

目を開ける。

映るのはよく知った自室の天井。

「……よかつたな、レイ」

ベッドから起き上がった真は夢を通じて現れた親友にそう告げた。

メサイア戦役での最終決戦間際に真はレイから彼の事情を聞いている。

その際、彼はレイに尋ねていた。

レイはそれでいいのか、レイの運命は変わらないのかと。

明確な返答はなく、ほほ笑んだ彼の表情を覚えていた。

蔵人、刀奈、簪の3人からの言葉でレイの心はきつと救われたはずだ。

「やってみるからさ、見ててくれよ」

時刻は午前7時。レイとの邂逅の際に蔵人が有力な情報をつかんだと言っていた。彼が来るまで時間があるだろう。

制服に着替えた真は、朝食をとるために自室を後にした。

襲撃によって休校状態のIS学園、学生寮で各々待機している生徒が多い。

食堂にもそれなりの生徒たちがいた。

その中に、水色の髪の少女を見つけた。

「簪、おはよう」

「うん、おはよう、真」

簪の隣に座る。

「蔵人さん、いつ来るか連絡あった？」

「うん、18時くらいにこつちにくるって連絡があった。資料の準備や色々と申請が必要らしくて、お姉ちゃんもそれに協力してるみたい」

「なら早めにデステイニーの整備しておくか、ビームサーベル壊されたし交換しないと」

デステイニーのビームサーベルはオータムのリジエネイトによって破壊されてしまっている。

近接格闘武装はクラレントのビームサーベルモードやアロンダイトVer2など豊富なデステイニーだが、ビームコンフューズなどに使用でき、小回りの利くビームサーベルがないのは少々心もとない。

自己修復機能で修復は進んでいるのだが、予備があるため交換したほうが圧倒的に早い。

先日はそのタイミングがなかったため、蔵人が来るまでに完了させておきたいのだ。

「手伝うよ、サーベルだけだよね？」

「ありがとう。あれ、そう言えば本音さんは？」

「……何度も起こしたけど、ベッドから離れなかったから見捨てた」

真が一人部屋に移ってから簪は本音と同室になっていた。

そのため朝が非常に弱い本音を毎日簪は起こしているのだ。

「本音さん、朝弱すぎないか？」

「本音は昔から遅刻ギリギリの常習犯だから」

簪の回答に苦笑して答えた真は朝食を選ぶために立ち上がった。

---

同日 夕方 会議室

「遅れてすいませんっ！」

セシリアとの訓練を終えたラキーナが会議室に入室してくる。

その顔には陰りは見えない。

マドカは自身の出自のせいで混乱を生みかねないということでブレイク号で待機している。

すでに真や一夏達専用機持ちのいつものメンバーが会議室に集まっていた。

その中には珍しく、本音も含まれていた。

「……立ち直ったみたいですね、ラキーナ」

「ああ。クルーゼを相手にするための特訓をオルコットさんとマドカと共に行っていたみたいだ」

「成程」

椅子に座って様子を見ていた真の言葉に、隣のアスランが返す。  
するとラキーナに続いて、長身の男性が入室してきた。

「やあ、待たせてすまないね」

そう告げて会議室に入ってきた蔵人が、続けて楯無が入室してくる。

蔵人の姿はいつもの和服姿ではなかった。

正確には、黒い和服を身にまとっていたが、その上に白い装束を羽織っている。

口調はいつも通りだが、纏っている雰囲気はまるで刀の様に研ぎ澄まされていた。

「……雰囲気、違いますね」

「……ああ。議長時代を知っていると、別人だな、これは」

「……更識の名は伊達ではないという事か」

歴戦の戦士である真、アスラン、カナードが感想を漏らす。

言葉にはしなかったが千冬も驚いているようで、一瞬獲物を狙うように目を細めていた。

「ん、ああ、この装束かい？これは現役時代、16代目楯無としての装束さ。今でも気に入れるときはこれを身に着けているのさ。さて、そんなことよりも掴んだ情報についてだろうか？」

「っん、更識さん、有力な情報を掴んだとの事ですが、説明のほうを……」

我に返った千冬の言葉に頷いて答えた蔵人は懐から電子デバイスを取り出す。

「ええ。それでは篠ノ之博士、これを」

その態度に笑みを浮かべつつ取り出したデバイスを手渡す。

デバイスがPCに接続されると、空間投影ディスプレイに資料が映る。

海中に伸びる巨大な建造物の構造図と利用。



全長はおよそ300m、角柱の建造物が海中で複数連結していた。

「……なるほどね、海にこんなのがあったんだね。私が掴んだ座標にこれがあるってこと？」

「……ええ。どうやらそちらにもタレコミがあったようですね。これは海洋プラントです」

「海洋プラント？」

思わず言葉が出てしまった束に蔵人はうなづく。

「ISの登場までは日本をはじめ、世界各国で海洋開発が盛んだった時期がある。しかしそれはISの登場によって変わってしまった。宇宙開発が盛んになった時期もあるが、それはほんのわずかな期間でしかなかった。ISを超兵器としてとらえることが主導になってしまったからね」

その言葉に少しだけ束の顔が曇る。

「それは日本も同じだ。ただ日本にはアメノミハシラがあるから他国に比べると宇宙開発では一歩抜きんでている。コロニー計画も主導は日出工業、日本だからね。おっと話が逸れたかな」

蔵人は話を切り替えると手ぶりで示した後続ける。

「海には未だ見ぬ資源や発見が多く残っている。特に島国である日本にとって海洋開発は急務だからね。極秘プロジェクトとして多額の予算をこれに割り振っていた。当時の記録を確認したところ1か月滞在できるレベルのプラントがいくつか建設されていたらしい」

「まるで日出工業で進んでいるコロニー計画の海版って感じだな」

「ふふ、なかなか面白い表現をするね、一夏君。まあ、国家間の重要プロジェクトという点は同じだね」

一夏の言葉に柔和な笑みを蔵人は浮かべ、続ける。

「さてこのプロジェクトだがISが登場し、国家や世界の意識がISに向かったため

前よりも縮小された。比べるまでもないレベルにね。いくつかあったプラントも閉鎖されたりしていて、動いているのは世界でも5基だけ」

「……じゃあ、この資料のプラントも閉鎖されてるってことですか?」

真の疑問に蔵人は頷いて答える。

「ああ。だが恐らくライリー……いや、ラウはここにいる可能性が非常に高い。その理由も判明しているからね」

そういつて蔵人は顔をしかめる。

「理由……ですか?」

「一夏君、日本がほかの国とは唯一絶対に異なる点はなんだと思う?」

「……えっ?」

突然の蔵人の質問に素つ頓狂な声を出した一夏は思わず隣にいた箒に視線を移した。箒も理由について考えていたのか、一夏と同じように困惑した表情になっていた。

「ヒントは1945年だ」

その言葉で彼を含めた全員が表情を強張らせた。  
そして一夏が眩く。

「……原爆ですか？」

うん、と蔵人は頷く。

「日本は唯一の被爆国。ただ世界の情勢は絶えず変動するものだ。いつまでも平和を享受するためにはそれ相応の力が必要だ」

蔵人の言葉に嫌な汗が流れるのを真は感じた。

そして蔵人が続ける。

「このプラントは表向きは海洋開発の物。ただ本当の目的は核開発。正確には〔核兵器

を無力化する兵器」の開発が行われていた」

「核の無力化……!?!」

「真達ならばこれの意味がわかるだろう?」

蔵人の言葉で一夏達の視線が真、アスラン、ラキーナ、カナードの4人に集まった。

ラキーナが蔵人の言葉にこたえるように口を開いた。

「……【ニュートロン・ジャマー】」

「そう、核分裂を抑制するニュートロン・ジャマーと同様の理論の核抑止兵器。それがこのプラントで研究されていた」

「……完成はしているのか?」

「更識の権限で調べたところ、基礎の理論構築の時点でとん挫していた……らしいが、相手が相手だからね。ニュートロン・ジャマーと同質のその兵器は完成していると見たほうがいい」

カナードの言葉にゆっくりと首を縦に振ってから答えた。

「待つてくださいよ、クルーゼがいくら凄くても本職じゃないのにニュートロン・ジャマ——なんて作れるわけが……っ！」

真はそこまで口に出して気づいてしまった。

技術には疎かつたはずの人間が専門知識を得ていた前例。それを知っているからだ。

「……まさか、ラクスマみたいにクルーゼにも？」

「そう考えると彼の行動は辻褄が合うんだ。それにラウだけじゃない、恐らくフレイ君にもあるんだろう」

「……なるほど、奴らがフレイ・シュバリーをさらった理由は「ニュートロンジャマ・キャンセラー」か」

合点がいったというようにカナードは頷く。

「私にフレイを接触させたのは、キラ・ヤマトであった私とつながりを持たせることでフレイ・アルスターとしての記憶を……ニュートロン・ジャマ・キャンセラーの知識を呼び覚ますため？」

「推測だがね、だがラウの立場ならいつでも彼女を狙えたはず。それをしなかった理由はキャンセラーを狙っていたからだろうね。彼女にキャンセラーの知識が宿っているも不思議じゃない、ラクス・クラインという前例があるからね」

蔵人が一息入れる。

会議室に重苦しい雰囲気が充満している。

それに耐えかねたのか、千冬の隣の真耶が手を挙げて質問を投げかけた。

「すいません、そのニュートロンジャマーとキャンセラーって一体どのようなものなんでしょうか。飛鳥君達はC・E・世界の知識で分かると思いますが、核分裂の抑止と言うと、影響は原子力発電や核兵器に絞られるんじゃないかなと……」

彼女の言葉に確かにと真は頷く。

カナードも同じだったのか、真耶の疑問に回答する。

「戦略兵器は核ミサイルやエクスカリバーの様な衛星兵器など多く存在していた。その中でも最も多くの死者を出した兵器、その被害総数は数億人、当時の地球人口の十分の

一がこの兵器によって命を奪われたとも言われていた。それがニュートロン・ジャマーなんだ、山田教諭」

カナードの言葉に真耶だけではなく一夏達も目を見開いた。

「おっ……なんでっ!？」

「C・E.はこの世界とは違って化石燃料は枯渇してたんだ。だからエネルギー、電力は火力発電とかじゃなくて原子力発電で賄ってた」

「ニュートロンジャマーはその原子力発電の悉くを停止させた。それで起こる悲劇は予想がつくだろう?」

「……エネルギーの不足?」

少し考えた一夏がカナードに答える。

その回答に頷いて続ける。

「そうだ。エネルギー不足によるインフラの麻痺が全世界規模で起こった。発展途上国はもちろん、先進国でも凍死や餓死、体の弱いものから命を落とした」



「しかもニュートロン・ジャマーは核分裂の抑止の他に地上でのレーダーを阻害する効果まであったんだ。だから当時の地球だとよほどインフラの整備がしっかりしていない場所だと、長距離連絡もできなくなっただ」

「当時はまだ若輩の私からしても、シーゲル・クラインがとったエイプリルフール・クライシスは地球連合の主戦派国家に投下をしほる等のオプシオンを考慮すべきだった作戦だったと思うよ。当時の地球の情勢は、一部の主戦派国家以外はプラントとの戦争に懐疑的だった。それを地球に住むコーディネーターも含め、徹底抗戦まで拗らせてしまったのはこの作戦であることは明らかだ」

思い出すように顔を顰めた蔵人は少しだけため息をついた。

余談であるがネオ・ザフト戦役後のC・Eの歴史書に、デランダルは「ナチュラル融和派」と記載されている。

メサイア戦役当時、彼はプラントではクライン派と呼ばれていた。

しかし彼の執った政策や地球連合やロゴスに対する対応、結果的に首を絞めることになってしまったとはいえ、コーディネーターとナチュラルの溝を埋めるための政策である「デステイニープラン」、それらはナチュラルからも高い支持を得ていた事から地球ではそう呼ばれていたのだ。

もつとも彼が地球への影響力を最大に高めたところで、歌姫の騎士団にその座を奪われてしまったのだが。

### 閑話休題

「この世界はC. E. とは違つてエネルギー生産全てを原子力発電に頼っている訳じゃないから、C. E. ほどの被害にはならないだろうけど……」

「それでもエネルギー不足による経済の悪化が起こるのは確実だな」

「そしてニュートロン・ジャマー・キャンセラーは、文字通りニュートロンジャマーの効力を打ち消せる兵器。これによつてC. E. では再び核兵器を先制攻撃で放つ事が可能になった。もちろんMSの動力源としてもな」

「そんな……とんでもないものをなんで……!」

「ラウは世界全てに絶望し、憎悪している。そこで暮らす人間、文明、全てをね……その憎しみは消えなかつたんだろう、この世界でも」

一夏の言葉に蔵人が返す。

「世界への絶望、か……わからないでもないよ」

コンソールを弄っていた束がふと呟く。

「……姉さん」

「ま、流石に程度は違うだろうけどね。でも私は気づけたんだ。周りを見る素晴らしさにね」

心配した表情になった箒に薄く笑みを浮かべて束が返す。

「さて、座標とそこに何かがあるか、そして奴等の目的にも見当がついたんだ。行動は早めに起こしたいんだけど、どうする？」

束がそう言つて会議室の皆を見た後、コンソールを操作して別の空間投影ディスプレイを投影する。

それは所謂進路図の様なもの。

「ポイントは海のと真ん中のプラント。ステルス機能が高いブレイク号で近距離まで近

づいて、出撃してプラントへ乗り込むって感じかな」

「プラントへの入口は海中にある。だがISならば問題ないだろうね。MS並に汎用性が高いマシーンだね、本当に」

「それって嫌味？」

「まさか」

東がジト目で抗議するがそれを蔵人はさりと躲す。

そして海洋プラントへの出撃作戦の概要は以下の様になった。

①ステルス性能の高いブレイク号にて出撃し、海洋プラント近海まで接近。

②近海まで接近後、ISにて出撃し海中のプラント入口からプラント内へ侵入する。

③侵入後は各々此処の判断で行動して、制圧を行う。

フレイ・シュバリーの奪還とライリー・ナウことラウ・ル・クルーゼの捕縛または撃破を優先事項とする。

なお、当作戦には真達、C・E・世界を知るメンバーに加えIS学園、そして各国代表候補生達も参戦する。

これには一般生徒でもある一夏と箒も含まれていた。

「でも、海洋プラントに無断で出撃するんですよね？大丈夫なんですか？」

「エクスカリバー事件の時とは違って、この情報を政府は掴んでいないんでしょう？」

一夏と箒が蔵人と束、そして千冬達教師陣に告げる。

それについては真も同じであった。

「ああ、そこについてなんだがね」

その疑問に蔵人は笑みを浮かべて答える。

突如、蔵人の真横に空間投影ディスプレイが展開された。

そこに映っているのは、真の上司である「応武優菜」であった。

『海洋プラントのある海域への侵入については、うちの予行演習って形で納得してもらったよ。一応うちも船は何隻か持つてるからね、それを出してカモフラージュしておくよ』

「……よくそんな理由で通ったな、優菜」

『ははっ、それについては私も同じだよ、千冬。ま、そこにいる蔵人さんのおかげだよ』  
「これでも更識の16代目だからね。情報共有まで時間がかかったのは、彼女が出した申請をこり押しで通すために時間がかかったのさ……さて、ほかに質問は？」

蔵人の言葉に沈黙で答えた一同を見て千冬に視線を移す。

彼の視線に頷いた千冬が口を開いた。

「それでは作戦開始は明朝0500、それでは適宜休息をとっておいてくれ、解散」

千冬の言葉に一度、解散となる。

一夏達は一旦自室に戻ったが、真達数名は会議室に残っていた。

「……海の中か」

「ISなら海の中でも行動は出来るけど……流石に海中でISの試合なんてしたこと無かったし」

「水中戦は宙間戦闘と同じ要領さ。と言うかプラントに入ったら室内戦闘じゃないか？」

「成程」

真の隣で少し不安そうな顔をしていた簪に真が告げて、彼女が納得したように答える。

今回も簪は出撃する事になっている。

エクスカリバー事件の時と同じく、出撃して欲しくないという想いは確かにある。

だが彼女の気持ちに尊重したいと言う気持ちのほうが圧倒的に強い。

今回は敵の能力があらかた割れているのもあり、以前の轍は絶対に踏ませないと真は心に決めていた。

「今回は私もかんちゃんにあすあすのサポートするからね！」

「……俺としては出撃して欲しくないんだけどな」

「……私も友人を助けたいと考えています。援護なら任せてください。デステイニーと飛燕、そして飛鳥君と簪様の癖を一番知ってるのは私ですから」

真剣な表情で、いつもと違った口調となった本音が真の瞳を見て告げる。

「……分かったよ。ただ指示には従ってくれ」  
「うんっ、まっかせて、あすあす！」

途端いつもどおりの口調になった本音に真はため息と苦笑いを浮かべた。

同じように、室内に残っていたラキーナにカナードは尋ねる。

朝の腐ったような目ではなく、光を宿した瞳に答えは分かっているが。

「覚悟は出来たか？」

「……うん、クルーゼは私が止める。そしてフレイは私が取り返す」

「そうか。分かった」

そう告げてカナードは会議室を後にする。

向かうはブレイク号の格納庫。ドレッドノートの整備の為に。

そして明朝、IS学園からブレイク号が出航する。

目的地は東と蔵人が入手したポイントだ。



---

時間は前後して――

???

『さて、これでよしと』

割り当てられた個室で、空間投影ディスプレイを展開していたミシエルはディスプレイを消して呟く。

「これだけ情報を流せば、天災とギルバート・デュランダルなら気づくだろうな」

東と蔵人に情報を流したミスターM。

それはミシエルであった。

ザフトの緑服のようにも見える制服を未につけた彼女は頭をかきながら思考を続ける。

(隊長には恩もある。だから指示には従つてた。けどここまでだ……まさか目的がニュートロン・ジャマーだとは思わなかつたぜ)

ミシエルが椅子に座り込んで足を組む。

「シン・アスカ、アスラン、それにキラ・ヤマトか……隊長を止めて見せろよ、正直C・Eの二の舞はごめんだぜ」

室内灯の明かりが彼女の胸元のドッグタグを照らす。

そのタグには2つの名前が彫られている。

そこには――

【Michael Lyman】

【Michael Lyman】

と記されていた。

## PHASE 10 黄昏の魔弾

## 海洋プラント近海

IS 学園から出港したブレイク号は判明した座標の付近に接近していた。

後数十分で座標に到着できる距離だ。

今回の作戦で突入する海洋プラントは大きく分けて7つの塔状の建造物で構成されている。

表向きの海洋開発の為に使用されている研究に使われる【偽装区画】が2つ。

職員が日常生活を行うための【生活区画】が1つ。

このプラントの最も重要な存在理由、核抑止兵器の研究を進めていた【研究区画】が3つ。

そしてプラントの機能を統括する中央指令区画が1つ。

この情報は蔵人が得た建設当時の情報であるが、大きくは変わっていないとの事だ。

ライリー、否、クルーゼがいるのはおそらく研究区画の何処か、という予測がされている。

ISでの室内戦闘が予測されるが、塔の中には十分な空間があり、ISでの戦闘機動

にも問題はないという予測である。

今回の作戦では突入組とブレイク号を護衛する防衛組の2つに別れている。突入組は以下のとおりである。

ラキーナ（マドカ）、真、簪、本音、カナード、アスラン、楯無、セシリア。

防衛組は以下のメンバーである。

一夏、箒、鈴、シャルロット、ラウラ、千冬、真耶、利香。

この内訳は先の襲撃の際に、襲撃犯と交戦したか否かと機体の相性を大いに加味されている。

突入組には実弾兵器を無効化するPS装甲を貫く事ができるビーム兵器、エネルギー兵器を多く装備しているISが回されている。

最もその理由はそれだけではないのだが。

防衛組に千冬がいる理由だが、いかに千冬といえど、ISの世代差は大きいからだ。

そしてその相手はクルーゼを含めて、亡国機業のエージェントとC・Eの元エースだ。いくら彼女でも分が悪い。

またクルーゼはラキーナとマドカのストライクが担当する事になっている。

これは彼女個人の希望であるが、誰も彼女の希望に不満を漏らすものはいなかった。

ブレイク号 ミーティングルーム

出撃まで残り15分。

ミーティングルームにはISスーツ姿の真がいた。今回の作戦で1つ、相談したい事があつたからだ。それについてとある人物を待っていた。

「どうしたんだ、真、改まって」

そして真の待ち人は現れた。

その人物は、かつての上司であり無限の正義の名を持つISを身に纏う青年、アスラン・ザラだ。

「アスランに話したい事がありました」

アスランもすでにISスーツを身に纏っており、そのデザインはかつてのオーブ軍のパイロットスーツに近いものであつた。

「何か悩み事か？一人で抱え込むなよ、真。一人で抱え込むことができる量なんてたかが知れてるんだ」

アスランが諭すように真に告げるが、あんたがそれを言うかとあきれたように目を細める。

真の反応が予想外だったのか、アスランは慌てたように尋ねる。

「どっ、どうした？」

「いや、別に悩みとかじゃないですから……」つアスランにお願いがあるんです」  
「ん、俺にできることなら言ってくれ」

「なら、今回の作戦、防衛組に回ってもらってもいいですか」

「……」夏君たちか？」

「はい」

すぐに真の言いたいことを理解したのかアスランは顔を引き締めた。

「撃てるかという事か、真」

「ええ。前回のエクスカリバーと違って、今回の相手は確実に殺しに来ます。俺達ならいい。けど一夏達にそんな奴等の相手は荷が重い。あいつ等の覚悟を侮辱するってわけじゃないですが、俺はあいつ等に血を流させたくないんです。あいつ等は防衛組ですけど、アスランがそっちにいるなら」

「一夏君たちが防衛組にいるのはやはりそれが理由か。言い方は悪いが、俺達は馴れちゃったんだらうな」

アスランの言葉に真は頷く。

「それに戦闘データを見ましたが、相手は間違いなくC・Eのエースです。前回の戦いは囷だったかの、積極的じゃないように見えました」

「その相手についてだが、俺は彼女を知っているような気がするんだ」

一夏達が襲撃の際に戦ったのは「オレンジシールドのセイバーガンダム」を駆る女性。性。

その容姿と戦い方に、アスランは引つかかるものを感じていたのだ。

「え、知り合いなんですか？」

「……ああ、戦い方に機体の動かし方がな。【黄昏の魔弾】、聞いた事はあるだろう？」

「……一時期サーペントテールに所属させてもらつてた時に効さんとイライジャさんから少しだけ。何でもオレンジのジンを使った赤服並みのパイロットだったとか」

「彼の名は【ミゲル・アイマン】、俺もお世話になつた事のある人だ。彼のパーソナルカラーはオレンジ、そして襲撃の際にいたのは【オレンジシヨルダーのセイバー】……出来すぎているだろう？」

「……女性としてつて事ですよ。またかよ、もう馴れましたけど」

少しげんなりしながら真が返す。

同じように苦笑してアスランは続ける。

「話がそれたな。襲撃の際、もしミゲルがその気ならば、楯無さん以外は落されていても不思議ではなかった」

「ええ、だからアスランに見てほしいんですよ。今のアイツを信じてないってわけじゃないですけど、アスランの力は俺がよく知ってますから」



「分かった、俺の出来る範囲で一夏君たちを見ておこう」

「はい。ブレイク号は千冬さんと山田先生が守ってくれるみたいなので、お願いします」

頷いたアスランであったが、あることに気づいた。

「真、彼女達は……簪さんと本音さんはどうするんだ？」

そう、簪と本音も突入組に振り分けられている。

これは真の希望との事であった。

「……惚れた弱みって奴です。彼女達には出て欲しくない、けど心の大部分で彼女達の思いを尊重したいんです。大丈夫です、簪と本音さんの2人は俺が守ります、信じてください」

「そうか……なら信じるしかないな、真」

「ええ、それじゃ出撃の準備ですね」

「ああ」

アスランと真は2人揃ってミーティングルームから出て行く。

同刻

ブレイク号 格納庫

『……ヴェント、レイン・オブ・サタデイ、各種実弾武装、拡張領域に格納完了』

ドレッドノートHを身にまとったカナードがデイスプレイを高速でタイピングしつつ口に出しながら、出撃前の装備の最終確認を行っていた。

スコールの「アマツ」によって破壊された左マニピュレータはパーツ交換と自己修復機能によって修復されていた。

『展開確認、問題なし』

ドレッドノートの右マニピュレータにヴェントが展開される。

それを確認したカナードはヴェントを再び格納してデイスプレイに目を移す。

デイスプレイには現在のドレッドノートの拡張領域に登録されている武装が羅列さ

れている。

そのほとんどが普段からドレッドノートがメインで装備しているビームサブマシンガン【ザスタバ・ステイグマト】とは異なり、【実弾武装】であった。

例を挙げるならば、五十五口径アサルトライフル【ヴェント】や六十二口径ショットガン【レイン・オブ・サタデイ】

ラファール・リヴァイヴでもよく使用される武装が、拡張領域ぎりぎりまで詰め込まれている。

もちろん好んで使用している【ザスタバ・ステイグマト】も装備されている。

『はい、こちらでも確認しました。弾薬もフルで投入しておきましたよ、カナード先生』

ディスプレイが展開されて、そこに映るのは真耶であった。

『相互確認感謝します、山田教諭。俺の我儘を聞いてくれて』

『何言ってるんですか、水臭い事言わないでください』

真耶の答えに笑みを浮かべる。

『武装はこれで問題はない、あとは……セシリア、聞こえるか』

『聞こえてますわ、カナードさん』

カナードがセシリアに通信をつなぐ。

『作戦は先程伝えた通りだ、俺はスコール・ミューゼルを狙う……背中<sup>キリンダ</sup>は頼む』  
『ええ、お任せくださいな』

セシリアが微笑むと同時に通信が終了する。

『頑張ってくださいね、船の防衛は任せてください』

『ええ、そちらも【銃<sup>キリンダ</sup>央<sup>シールド</sup>矛塵】の呼び名が伊達ではない事を信じています』  
『ええっ!? 何で知っているんですかっ!?』

突然のカナードの返しに真耶が素っ頓狂な声を上げる。

『調べたら出てきただけです』

『やつ、止めてください、それ恥ずかしすぎて、もう黒歴史なんです……!』

顔を真っ赤にした真耶にふっと笑みを零したカナードはISを一旦解除する。

「……奴はどんな手を使っても俺が落とす。待っている、スコール・ミューゼル」

待機形態となったドレッドノートHを握り締め、その瞳に闘志と憎悪を宿らせたカナードはそのまま格納庫から出て行く。

そして作戦決行時刻

ブレイク号は海洋プラント周辺海域に到着していた。

ブレイク号の甲板が一部せり上がり、展開されていく。

一部が電磁力によって帯電し、電流がはじける音が響いている。

ブレイク号の甲板に現れたのはIS用の電磁加速カタパルトだ。

それを防衛しているのは千冬を筆頭にした防衛組。

併せて海洋プラントの偵察も行っているが、いまだ動きはなかった。そしてISがカタパルトに接続されていく。

最初に接続されたのは「ドレッドノートH」だ

デイスプレイが展開して、通信が繋がる——相手は束だ。

『カナ君、行けるよね?』

『当然だ』

『くーちゃん、泣かしたら許さないからね。分かっているよね?』

『……分かってるさ、戻ってくる。そこまで約束しただろ』

呆れたように返すカナードであったがすぐに顔を引き締める。

『……カナード・パルス、ドレッドノートH、ガンダム出るぞつ!』

カタパルトから得られる爆発的な推力を持つてドレッドノートが射出される。続いて、カタパルトに接続されるのは真のデステイニーだ。

『あつくん、頑張つてね』

『ええ、ありがとうございます、束さん』

束にサムズアップで返して真は深呼吸してから出撃のコールを行う。

『飛鳥真、デステイニーガンダム・ヴェステイージュ、行きますっ！』

カタパルトから射出されたデステイニーはAMBACを行いつつ、背部VLユニットを起動して光り輝く翼を広げた。

デステイニーに続いて接続されるのはラキーナの「ストライクガンダム」だ。

すでに「I. W. S. P.」を装着しており、司令部には同期ユニットを身につけたマドカが待機している。

『ラキちゃん、頑張つてね』

『ええ、ありがとうございます。マドカちゃん、頼りにしてるよ』

『ああ、任せてくれ』

マドカからの返答を確認したラキーナは自機にコントロールが譲与されたことを確認してコールする。

『ラキーナ・パルス、ストライクガンダム I. W. S. P.、行きますっ！』

爆発的な加速と共にストライクガンダムが射出され、空を駆けて行く。

——大切な人を奪還し、守り抜くために。

『何で俺達は防衛組なんだよ』

突入組の機体がカタパルトから射出された事を確認した、防衛組、【白式・雪羅】を纏う一夏が不満の声を漏らす。

彼の周りには【紅椿】を筆頭に【甲龍】【ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ】【シユヴァルツェア・レーゲン】の4機が滞空している。

少々はなれたところに暮桜、ラファール・リヴァイヴ、ガイアガンダムが浮遊していた。

箒は一夏と同じ意見であったが、代表候補生である鈴・シャルロットは薄々と、ラウ



ラははつきりと、自分達が防衛組にいる理由が分かっていた。

武装の相性も大いに関係しているが、相手を殺す事が出来るか。それを加味されたのが今回の組み分けだ。

(この組み分けはやっぱり、撃てるかって事だよね……いくらテロリストだからって……僕は撃てないな、多分)

シャルロットが組み分けの意図に気づいて、顔を顰める。

ほぼ同タイミングで気づいた鈴と視線が合う。

それに気づいたラウラが機体を2機に近づけてプライベートチャンネルを開く。

『鈴、シャルロット、気づいたか』

『うん』

『そつちも?』

『ああ。私は軍人だが、人は殺した事はない。今回の組み分けは間違いなくその差だろう』

『……だよね』

『やっぱりね』

鈴とシャルロットはため息を漏らす、ラウラは笑みを浮かべて返す。

『だが私達にもできる事はある、それが船を守る事だ、今はそれを考えよう』

『……うん、流石だね、ラウラ』

『スイッチの切り替えは軍人の基本スキルだ。最もかつての私は……すまない、忘れてくれ』

『あはは』

『そう言えば最初はそうだったわね、あんた』

ラウラの苦笑した顔に鈴とシャルロットは思わず笑みを零した。

(そうだよ、僕達は僕達ができる事をすればいいんだ)

(やれること、ちゃんとやるわよ。だからさっさと終わらせなさいよ、ラキーナ、真)

その様子を少し離れた場所で、無限の正義の名を持つ「インファイニット・ジャスティ

ス」——アスランは眺めていた。

(代表候補生の彼女達は気づいたか、今回の組み分けに……さて)

一夏と箒に視線を向ける。

引き締めているが、2人は不満そうな雰囲気を感じてはいなかった。

それに苦笑してアスランは2人に通信を繋げる。

『一夏君、箒さん。その件だが、君達は別に戦力にならないから外されたわけじゃないんだ』

『……アスランさん』

『アスランでいい』

『じゃあ、何でなんです?』

『突入組は基本的にエネルギー武装を持っている機体を選ばれている……が、本当は違う』

『違うのですか?』

ああ、と箒の言葉に返す。

『クルーゼとその一味は確実にこちらを殺す気で迎え撃ってくる。無力化できれば一番だが、いざとなったら殺める事が出来るかで分けられているんだよ、もつとも数名例外はいるけどね』

『そんな……事……』

一夏がマニピュレータに握っていた雪片式型を力なく下げる。

自分が戦う理由、それは「笑顔を守るために戦う」ということだ。

だがそのために自身の手で誰かを殺める事が出来るか。

そう問われて一夏は答えられなかった。

それを見たアスランは薄く笑みを浮かべる。

『いいんだよ、それで』

『え?』

『誰かを殺すなんて、悲しい事は本来はしてはいけないんだよ。だから君だけにできる事を貫けばいいんだ、そのために君はその力に手を伸ばしたんだろう?』

『……難しいですね、アスラン』

苦笑しながら一夏がアスランに言う。

それを受けてえっと声を漏らしながら続ける。

『参ったな、真にも上手く言えなかったが、俺が言いたいのには力は使い様って事なん  
……』

『大丈夫です、なんとなく分かってます。俺がやるべきこと、今は船を守るって事を全力  
でやってみせます』

殺す事なんてやはりできない。

なら今は自分にできる事をするだけだと一夏は気持ち切り替えたのだ。

『……そうだな、一夏、私もお前の力になるぞ』

『ありがとう、箒』

一夏と箒のやり取りを見て、一人アスランは胸を撫で下ろす。

(やっぱり誰かを導くのは苦手だな……ハイネ、君の様に上手くできたら……変わったのかも知れないが)

ふとかつての気さくな同僚を思い出したが、すでに状況は動いていた。

『超高速で浮上してくる動体反応がーっ！来るよっ！』

全機体のディスプレイが展開され、司令部から束の通信が繋がる。

その言葉とほぼ同時、海面から、海の色とは真逆の機体が飛び出してきた。

紅、そしてオレンジシヨルダーのIS、ミシエルが駆る「セイバーガンダム」だ。

『来たかつ！』

動体反応に向けてアスランがビームライフルを放つが、それをミシエルはAMBACで回避して、背部の「アマフォルタスプラズマ収束ビーム砲」を展開。

即座に反撃を繰り出してきた。

『そおらっ！』

【アムフォルタスプラスマ収束ビーム砲】から発射された高出力ビームが突入組と防衛組それぞれを襲う。

だがそれを散開して回避する。

そして状況は再度揺れ動く。

『無数の動体反応……無人機の反応、数は14つ！』

束の声と同時に海面から次々と無人機ストライクやイージスが現れてこちらにビームライフルを放ってくる。

一夏達は散開してビームを回避し、ブレイク号に向かって行くビームは真耶と利香がシールドで防いでいた。

『虎の子の無人機だけ、どうする、アスラン？』

アスランのインフィニットジャスティスにセイバーからのオープンチャネルが繋が  
る。

『俺の事を……やはり君はミゲルか！』

『覚えててくれて嬉しいぜ』

『ミゲル、何でこんな事を……！』

『今はミシエルだったの……ま、いいか。ミゲルのときの記憶を思い出してよ、パニック  
になって精神病院に叩き込まれそうだったところを隊長に、クルーゼに救ってもらった  
んだわ。だから恩返しして言うの？身寄りもなかったし、そんな感じ』

ミシエルは肩をすくめながら言う。

彼女のその態度にアスランは激昂した。

『ニュートロンジャマーだぞ！この世界にエネルギー危機が起こるかもしれないのに、  
そんな理由でっ！』

『俺だってそれは知らなかったんだよ、だからお前等に情報流したじゃないか』

『何っ、じゃあ、ミスターMというのは……！』



『そう、俺。おーい、聞こえてるよなー』

ミシエルがオープンチャネルで周辺の機体へ呼びかける。

無人機の攻撃を回避しながら、真やラキーナ、カナードはその通信に耳を傾けていた。『この丁度真下にハッチがある。そこからプラント内部に侵入できるぜ、そこから入る。あ、その光波シールド持ち、スコールは研究区画にいるぜ』

ほぼ名指しでカナードにミゲルは告げる。

『……信じていいのか、ミゲル』

『ミスターMも嘘は言つてなかっただろ?』

ニヤツとミシエルが笑う。

それを見たアスランがオープンチャネルで突入組に告げる。

『……各機、突入してくれ、無人機はこちらが受け持つ。リスクはあるだろうがプラント

を破壊しようとしてクルーゼを逃がすよりは、マシな筈だ』

『了解』』

『分かったよ、アスラン』

ラキーナに真、カナードがそう告げて機体を降下させていく。

そして海中に突入する。

それに簪に本音、楯無やセシリアも続く。

『……よし、これで隊長たちは大丈夫だろ』

ミシエルは笑みを浮かべて、ビームサーベルを取り出す。

『……こちらに投降してくれるわけじゃないのか、ミゲル？』

『一応恩返しって事なんだわ、めんどくさい性格タチだけど俺自身が納得しねえんだわ。それにアスラン、お前がどれだけ強くなってんのか、知りたいんだよ』

獲物を狙うような好戦的な笑みを浮かべてビームサーベルを振るう。

説得は不可能かと、アスランも同じようにラケルタビームサーベルを起動させる。  
サーベルの起動と同時にセイバーは高速で切りかかってくる。

『うおらっ！』

『はあっ！』

互いにシールドを起動し、サーベルを防ぐ。

グリフォンビームブレードを起動させてのビームキック。

咄嗟の瞬時加速にAMBAC、再度爆発的な加速をもって、セイバーは上段から袈裟切り気味に斬りかかる。

『しゃあっ！』

『ふっ！』

インフィニットジャスティスはラケルタをもう一本起動し、その一撃を受け止める。  
サーベル同士の干渉が発生して火花が弾けている。

S. E. E. D. が発動していないはいえ、接近戦ならば並ぶ者がいないといつても

いいアスラン相手に、セイバーは互角だ。

現在のアスランは自分の意思でS・E・E・Dを発動させる事はできていない。

それは前世でも同じであったが内心で歯がゆさを感じてしまっていた。

セイバーの機体が後方に加速して、罅迫り合いから逃れる。

そして以前見せたようなハイパーセンサーを振り切る【超加速】によって紅い残光となつてアスランに襲い掛かった。

『くっ！』

咄嗟にビームシールドを広げるが、サーベルの一本を切り落とされてしまった。

『アスランっ！』

無人機ストライクを零落白夜を発動させた雪片で切り落とした一夏が、アスランの援護に向かう。

『一夏っ、来るなっ！』

『援護くらい出来るはずだっ！』

白式・雪羅に進化した際に発現した「荷電粒子砲」を放つ。

だが、ミシエルのセイバーはそれを踊るように回避して、背部の「アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲」を展開してトリガーを引く。

発射された2門のビームをスラスターを噴かせて一夏とアスランは回避する。

『……あれが織斑一夏か、今の攻撃……まさかよお』

A M B A Cによって姿勢制御を行った白式に、セイバーがサーベルを振り上げて迫る。

その一撃を一夏は雪片で受け止める。

『一夏っ、くっ！』

アスランがビームライフルでセイバーを狙うが、横方向からロックオンアラート。

上方にスラスターを吹かせて迫るビームを回避する。

イージスが執拗にこちらを狙っているのだ、落とさなければダメージを受ける可能性がある。

その分、一夏の援護が遅れてしまう。

『ぐっ！』

『やっぱりな、お前つ、殺気がねえんだよっ！』

受け止めた雪片越しにミシエルは吼える。

『男性搭乗者だからって状況にでも流されてんのかっ!?一般人が居ていい場所じゃねえんだよ、戦場はっ！』

『状況なんて流されてないっ！俺は自分の、自分の戦う理由の為にここに来たんだっ！』

『はっ、口だけは一丁前つか?口だけならなんとでもいえるよなあっ！』

ミシエルは突然、サーベルを消失させる。

当然、受け止めていた力が急になくなれば、その刃は振り切られる。

だがその刃は空を切る。

セイバーは再びセンサーを振り切る加速能力で白式の背後を取っていた。

『っ!?!』

『これで終わりだ、さっさと家に帰りな、後はアスランたちにでも任せな』

サーベルが振るわれる。

だが、その刃は白式に届かなかった。

『喰らえっ!』

ミシエルの上方から光刃が飛来したのだ。

『ちいつ!?!』

咄嗟にシールドで光刃を防ぐ。

だが――

『甲龍の力、受けなさいっ!』

次の瞬間、まるで巨大な鈍器で殴られたような衝撃がセイバーを吹き飛ばした。

『ぐっ?!』

セイバーはVPS装甲を搭載しているため、ダメージはないがその分エネルギーは消費してしまう。

そして攻勢はまだ終わらない。

『まだだよっ!』

『パンツァー・カノニア発射っ!』

グレネード弾とリニアカノンがセイバーに襲い掛かる。

再度シールドで防ぐが、リニアカノンほどの大質量を受け止めるのは不可能であった。



シールドが破砕され、衝撃でセイバーが弾き飛ばされる。

『シールドは破壊できたな、これで前回の借りは返せたぞ』

『好き勝手言っちゃって、あんた何様よ!』

『そうだよ、僕達や一夏のこと何も知らないのに!』

射撃武装でセイバーを狙うが、その全てを回避されてしまう。

だがそれでいいのだ、一夏を援護できているのだから。

『一夏、私達もお前と共に行くぞ』

箒が微笑んで一夏に告げる。

その笑みを見て不思議と身体に力が溢れてきた。

(——ああ、そうだよ、俺は皆の笑顔の為に戦うんだ。間違っってなんかない!)

『……ああ、ありがとう皆』

一夏が再び雪片を構え、吼える。

『……確かに俺は弱いし、アンタ達を殺すなんて事も考えられない。けどあんた達の親玉がやっつてることと皆の笑顔が失われようとしてるんだっ！俺はそのために力を使おうっ！それが俺の正義なんだよっ！アンタに否定なんてされてたまるかあああっ！』

雪片から零落白夜の光が溢れる。

それを見たミシエルは感心したように笑みを浮かべた。

『ならお前の正義ってヤツ、見せてみるよ、織斑一夏あつ！』

再びセイバーが加速して白式に向かった。

# ANOTHER PHASE ただ一人の少女の為に

水深20mほどの浅瀬に金属の扉が見える。

海中に突入した真達一行は、ミシエルが指示した通り海洋プラントのハッチに到着していた。

ミシエルが言っていたハッチというのは資材運搬用の物であり、本来はハッチ部分が上昇して海面に出た後、資材を搬入する用途で設けられている。

『真、ビーム兵器でハッチ部分を切り開くぞ』

『分かった。円状に切ればいいな?』

『ああ』

ドレッドノートが右マニピュレータにビームナイフを展開する。

このビームナイフはドレッドノートの武装の中でも最も使用頻度が低いものだ。

基本的にカナードはALの発生率を調整したALランスを近接格闘の際に使用するからだ。

だが拡張領域には念のために登録されていた。用途はALハンディが破壊されてしまった場合など非常時用の格闘武器としてだが。

閑話休題。

デステイニーがヴァジュラビームサーベルを同じように展開し、ハッチに発振部分を直接触れさせる。

ビームが発振され、少しずつハッチの金属を互いに半円を描くように切り開いていく。

『切り開いた後はどうするの?』

カナードに疑問を飛ばしたのは楯無だ。

『この中にはさらにもう一つ扉があつてその先から移動用ダクトに続いている。更識蔵人から内部のデータは貰っているし、あのセイバーに乗っていた奴からの情報と相違はない。ダクトには排水用の設備もある。内部の扉を閉めて排水設備を起動させれば浸

水はしないだろう』

『成程、ならここから浸水しておじゃんみたいな事にはならないのね、カナード君』

『ああ。真どうだ？』

『こつちも大丈夫。切り開けた』

半円同士が円となり、ハッチ部分が完全に切断される。

切り裂かれた部分が水圧で弾き飛ばされ、凄まじい勢いで浸水が始まる。

『よし、行くぞ』

カナードの言葉に頷いた真達はその穴から侵入していく。

## 第一研究区画

スコールとオータム、レインにフォルテの亡国のメンバーがいた。

オータムが展開されているディスプレイを一瞥した後、PCを覗き込んでいるスコールに告げた。

PCには小型のデバイスが接続されている。

「スコール、どうやら奴らが来たみたいだぜ？」

「ええ、そうみたいね」

スコールがPCから視線を外して、区画の隅にある監視カメラに視線を向ける。

監視カメラは一定の間隔で角度を変えていたのだが、先程からまるでスコール達を凝視するように彼女達に向いている。

「何処かのコンソールからハッキングしてこちらを見つけたようね。向こうには篠ノ之束博士もいることだし、不思議じゃないわ」

「叔母さん、情報の引き出しまでもう少しかかるんですよね？」

レインが監視カメラに手を振りながらスコールに尋ねる。

フォオルテはその様子を見て苦笑していた。

「ええ。しかしニュートロンジャマー、この兵器の情報は欲しがるテロリストだけじゃ

なくて国家が動くレベルね」

「まさか核を抑止する兵器の研究なんてしてたとは思わなかったぜ」

「そうね。ただ日本だもの、抑止の兵器を作るというのも判らないではないわ」

彼女達はこの施設に残されているデータを引き出している最中であつた。

つまりは「ニュートロンジャマー」と同質の兵器の情報をだ。

この兵器のデータを得ることができたのは現在の亡国機業にとつてはまさに天啓にも等しい。

ラクスが亡くなった事による組織の崩壊を食い止め纏め上げるだけの力がこのデータにはある。

「ライリーさんは今何やってるんですかね、襲撃が終わってからからずっと何かしてるみたいツスけど」

フォルテが思い返すように尋ねる。

そうライリー、否クルーゼは学園の襲撃から帰還した後、フレイを連れて研究区画の一室にこもっていたのだ。

「さあ？第二研究区画で学園から連れてきたフレイとかいう子を拘束して、何かしてるのは知ってるけど」

「ま、とにかくアタシ達はこのでおさらばって訳だ。ま、やることは残ってるけどよ」「ええ、彼らの相手をして、殺す。それがラクス様の敵討ち、それが私たちの新たなターゲット。丁度データの引き出しも終わったわね」

デバイスを回収して懐にしまったスコールは右腕の腕輪に触れながらオータムに視線で合図を送る。

それにオータムは頷いて答え、彼女はチョーカーに触れて首を縦に降った。

それを見たレインは右腕の腕輪を、フォルテも左手中指の指輪に触れる。

それとほぼ同時であった。

区画に振動が走り、彼女達に高出力ビームが4条降り注いだ。

ビームを発射したのは、デステイニーガンダム・ヴェステイージとドレッドノートHだ。

東がハッキングした位置情報から、正確な位置を割り出して狙撃したのだ。

狙撃場所は研究区画の上層部からであるが、プラントを貫通して浸水する事はなかつ



た。

移動ダクトからステイニー、ドレッドノートH、飛燕、インパルスマークIIの4機が現れる。

『……やはりここにはいないか、クルーゼは第二研究区画か』

カナードがバスターモードを解除しつつ言う。

この第一研究区画に、クルーゼがいない事は束が監視カメラをハッキングして確認していた。

そこでその第二研究区画にラキーナと楯無は向かっている。

ビームによって破壊されたPC郡。

爆発して残骸と埃が舞う中、4機のISがその爆炎を切り開いて現れる。

『はっ、いきなりぶっ放してくるとなあっ！』

リジエネレイトを纏ったオータム、テストAMENTガンダムを駆るレイン、ネブラブ

リッツを纏うフォルテは攻盾システム〔トリケロス〕を構えている。

そしてまるで鍵爪のようにも見える大型背部ユニットが特徴的な【アマツ】を駆るスコール、その手にはビームライフルを展開している。

『来たようね、カナード・パルス』

『……スコール・ミューゼルっ！』

スコールが健在である事を確認したドレッドノートは即座に展開していたヴェントのトリガーを引く。

炸裂音と共に、弾丸がスコールのアマツに降り注ぐ。

だがその弾幕をスラストとAMBACによつて弾丸の雨を踊るようにスコールは回避した。

『どうする、俺達もやるか？』

『いいえ、あの機体は貴方達では相性が悪いわ。私がやるわ』

『了解。ならレイン、フォルテ、移動するぞ。私達はシン・アスカを相手にする』

『りよーかい』

『了解ッス』

オータムのリジエネレイトが別の移動ダクトへと機体を駆けさせる。  
それを追って、テストメントとネブラブリッツも移動ダクトへ消える。

『実弾……私への対策のつもりかしら？』

回避しつつ、ビームライフルでドレッドノートに照準を合わせる。

ロックオンアラートが奔る前に、ヴェントによる射撃を維持しながらカナードは回避行動に移っていた。

『真、更識、布仏、奴は俺が。残りは頼むぞ』

『分かった』

『任せて』

『まっかせて、カナカナー！』

真達も逃げたオータムを追うために別のダクトへと向かう。

真達の援護をヴェントで行いながら、何も無い虚空を見て頷く。

そして真達が充分離れたところで、残弾を確認する。

射撃モードは現在、フルオート。

そのため残り数秒で残弾が尽きる。

『貴様だけは俺の手で……どんな手を使っても倒すっ！』

カチンと、ヴェントの残弾が切れる。

それと同時に、残弾が尽きたヴェントを放り投げ、拡張領域から追加のヴェントを展開する。

機動を維持しながらの高速射撃戦。

プラントの隔離壁やPCなどは流れ弾によって見るも無残な有様へ変貌していた。

(……成程。高速機動を続けることでアマツの【拡散結界】に捕らわれることを防ぎつつ、ビーム兵器ではなく実弾を使用する事で、結界による防御もさせないって魂胆かしら。たった1度の戦闘で【拡散結界】への対策をしつかりと立てるのは流石といったと

ころね)

スコールの予測は当たっていた。

カナードはビーム兵器がアマツの能力の前に無力化される恐れを考慮し、「ザスタバ・ステイグマト」を使用せずに既存の実弾武装を使っているのだ。

『ふっ！』

ドレッドノートは瞬時加速で距離を詰めつつ、ALマニピュレータから、ALランスを展開する。

試作型ではあるが新装備のALマニピュレータを用いた発生率の調整は、以前のハンディよりもエネルギーの消費は少なく、それでいて発生速度が向上している。

もちろん空いているマニピュレータではヴェントを追加で展開、今度はセミオートに切り替えて正確にスコールを狙っている。

『ちいっ！』

近接戦闘に持ち込みつつの高速切替。ラビットスイッチ

ヴェントとALランスを同じように瞬時加速で回避したスコールの舌打ちが響く。

回避しつつビームライフルでドレッドノートを狙うが、非常に難度の高い技術である  
リボルバータイプニッション・ブースト  
個別連続瞬時加速を当たり前の様に成功させ、距離をとったカナードは再度射撃戦に  
戦術を切り替えていた。

数瞬前のやり取りで弾切れとなったヴェントを投棄し、今度はスナイパーライフル  
「ストラトス」を展開していた。

『ぐっ！』

ヴェントの弾速よりも速い狙撃銃の一撃。

一発だけ、左腕部に被弾して装甲が碎ける。

シールドエネルギーも減少するが残りはAMBACで回避していく。

この程度でやられるスコールではない。

ビームライフルを連射し、その内の数発は正確にカナードを捉えていた。

しかしトリガーが引かれるのと同時に、カナードはALを本来の用途であるシールド  
として展開していた。

ただのビームライフル程度では、ALを貫くことは不可能だ。  
ビーム粒子がALに弾かれて消えていく。

(……)

AL越しに、カナードは被弾したアマツをしつかりと観察していた。

(悔しいけど単純な技量と戦闘能力は、やはり彼のほうが上ね。でもそれだけじゃアマツには届かないわ)

口元を弧に歪めたスコールは行動を起こす。

アマツの背部ユニット、マガノイクタチと同機能を宿すユニットが展開され、禍々しく赤色に発光するフレームが現れる。

カナードと同じく個別連続瞬時加速を成功させ、一気にドレッドノートに接近する。

当然ライフルで迎撃され、数発直撃してしまい装甲が砕け、大きくエネルギーが減少する。

だがそれでもアマツはドレッドノートに接近できた。

『最大出力の拡散結界よっ！』

アマツを中心に球状の拡散結界が肉眼でも見えるレベルの高出力で展開される。

直径約10mほどの球体状の結界に、ドレッドノートは囚われてしまった。

ガグンツと、ドレッドノートの機体が力なく振動し、PIC、スラスター、シールドバリアの稼働率が大幅に下がっていく。

『っ！』

『これで終わりよ、失敗作っ！』

抵抗を続けるカナードに照準を合わせ、ライフルのトリガーを引きかける。

勝った、とスコールは笑みと共に確信していた。

だが、それはカナードの表情を見たことで笑みと共に凍り付いた。

拡散結界に囚われたカナードの表情は、自身と同じような笑みを浮かべていたからだ。

いや、自分よりも邪悪な、嘲笑うかのような笑みであった。



「それを待っていたあああつ！」

カナードの狂喜の咆哮と共に、ドレッドノートHが消えた。

彼はI・Sを解除したのだ。

当然、I・Sが解除されれば生身の身体は重力に従って落下していく。

拡散結界の強力な点はI・SがI・Sたる機能のほとんどを無効化できる点にある。

だが、それはあくまでI・Sにのみ作用する能力だ。

つまりそれは、生身の身体には何ら影響はないという事だ。

『なつ、I・Sを解除し……ぐうっ?!』

カナードの予想外の行動に動きを止めてしまっていたスコールのアマツを爆発と衝撃が襲った。

背部ユニットの一部が砕け、アマツのエネルギーは5割を下回った。

何をされたのか、一瞬思考が停止してしまったスコールだが、すぐさま意識を切り替える。

機体のセンサーには何も映ってはいない、つまりは狙撃だ。

『狙撃っ!?!センサーの範囲外からっ!?!』

先程真達が移動したダクト部分に狙撃手はいた。

周囲にノイズが奔り、狙撃手を隠していた「ミラージュコロイド」が散っていく。

そして現れたのは蒼き雫、その名の通り蒼のIS「ブルー・ティアーズ」を身にまとったセシリアだ。

その手に持つのは機体全長程の大きさを誇る大型の炸裂狙撃銃【天山】

ガシヤンと排莖した後、コツキングレバーを入れ、装填。

再度構えると同時に、ミラージュコロイドが起動して彼女の姿を消していく。

(まさかISを空中で解除するなんて……無茶をしますわね、カナードさんは)

落下していたカナードであったが、拡散結界の範囲外に出た後すぐにISを再展開していた。

セシリアはスコープ越しにその様子を見ながら出撃前に話し合っていた作戦を思い

出していた。

出撃の10分ほど前、カナードさんに私は格納庫に呼び出されていました。なんでも話があるとの事でした。

「来てくれたか、セシリア」

「友人のためですもの。お話というのは今回の作戦の事ですね？」  
「ああ、スコール・ミューゼルのアマツに勝つための戦術だ」

私の言葉に頷いたカナードさんは、空間投影ディスプレイを展開して概要を説明し始めました。

その作戦の内容、それは単純な狙撃プラン。

彼がアマツを相手に戦い、決定的なタイミングを作ったところで私が狙撃する。単純だがハイパーセンサー外からの狙撃ならば有効なはず。

しかし相手は一度は彼を破った相手、油断はできませんわね。

「外付けのミラージュコロイド発生装置を渡しておく。出力は低いながらもISS1機程度はどうとでもなる。それと奴の機体がPS装甲搭載機であるかは前回の戦闘の際に確認はできなかった。奴の装甲に実弾でダメージが通るのならば炸裂狙撃銃、もしPS装甲なら狙撃はエネルギー武装で頼む」

「わかりました。私でよろしければ、お手伝いいたします」

「……すまない。俺の我儘に付き合ってくれて、ありがとう」

そう頭を下げるカナードさんにふと笑みがこぼれてしまった。

私の態度に気づいたのか、少し不機嫌そうな表情になった。

「……どうかしたのか？」

「それほどまでにクロエさんの事を大切に想っていると思ったら。気に障ったのでしたら謝ります」

「……別にいい。いや、代わりに1つ教えてほしい」

何か思いついたような表情になったカナードさんは私に尋ねてくる。

「何でしょう?」

少し言いづらそうに、視線を泳がせた後彼はつづけた。

「その……なんだ、クロエが目を覚ましたらなんと云えばいいか参考に教えてくれないか? 気の利いた言葉でも言えればいいんだが、自信がないんだ」

まあ、まあまあ!

おっと、取り乱しましたわ。落ち着きなさい、セシリア・オルコット。

常に優雅たれが、オルコット家の家訓。素数を数えるのですわ。

「……そうですね、やはりカナードさんのお気持ちを率直に伝えるのが一番だと思いま  
す」

私の返答に、カナードさんは静かにうなずいて答えた。

「……俺の気持ちか。分かった、ありがとう」

そう返した彼の表情はとてもいい笑顔でした。

『ふはははっ！どうしたっ！その程度か、スコール・ミューゼルっ！』

残弾が尽きたスナイパーライフルを投棄し、今度は六十二口径ショットガン「レイン・オブ・サタデー」を両マニピュレータに高速切替で展開したカナードの狂喜の咆哮が響く。

嘲笑うかの様な挑発の声を上げるほどに今の彼は高揚していた。

自身にとって大切な人間となった少女を傷つけた相手が、自身の策に完璧に嵌ったことによる高揚か。

面の攻撃に適した特徴を持つ、散弾がスコールのアマツを襲う。

セシリアの狙撃によって、能力の要でもありスラストスターを兼ねている背部ユニットを損傷したアマツはその全てを回避することは不可能であった。

シールドバリアを削り、そして装甲も同じように削り取っていく。

残弾が切れた「レイン・オブ・サタデー」を投棄し、背部のHユニットが形態を変化

させ、バスターモードに切り替える。

『喰らえっ！』

バスターモードの砲口にビーム粒子が集い、最大出力のビームが放たれる。

『この程度でっ！』

狙撃に対して意識を裂きつつAMBACと姿勢制御を駆使し、ビームを回避したスコールはビームサーベルを展開して、ドレッドノートに向かう。

砲戦形態のバスターモードの機動力と運動性能が低いことを経験でスコールは看破していた。

だがそれがカナードの狙いであった。

——全てはスコールを自身の距離にまで近づけるために。

『……だあっ！』

両マニピュレータにグレネードランチャーを展開。

それと同時に一気に機体を上昇させ、Hユニットを切り離した。

切り離したHユニットに照準を合わせ、グレネード弾を発射。

発射されたグレネード弾は正確にHユニットに直撃、爆発に包まれた。

『なっ!?!』

今までの戦闘でドレッドノートHの背部ユニットはスラスタも兼ねている事を確認していた。

切り離しても本体のスラスタで行動できるだろうが、その機動力は激減する。

ならばそこを狙う。

おそらくは煙幕のつもりで装備を切り捨てた彼の行動を失策と判断したスコールはセンサーを構えつつ、爆煙に突っ込む。

センサーはしっかりと生体反応を捕捉していた。

その生体反応に向けて単一仕様能力を起動させる。

(失策ね、これなら狙撃側も分からない。終わりよっ!)



拡散結界が展開され、捕らえた手ごたえを感じたスコールは笑みを浮かべる。そして目の前に彼は現れた。

拡散結界に捕らわれて、何もできないはず——であった。

だが、カナードは下方のスコールに向かってきている。

いや、向かってきているのではない。

落下してきている。

彼の身体には「IS」が装備されていなかった。

爆発に吞まれると同時に、彼は先程と同じようにISを解除していたのだ。

そのためか、頬や肩には無数の裂傷が見えているが、彼の瞳に宿る戦意は揺るがない。

振り上げている左腕に待機状態のドレッドノートが見える。

そこまでならば、先と同じ手を食うスコールではなかった、だが——

だがその手にはしっかりと「得物」が握られていた。

「そう来てくれると信じていたあつ！」

上空から襲い掛かるカナードは笑みを浮かべていた。

その笑みは寧猛かつ、計画通りと嘲笑うような色を多分に含んでいるが。その手に握られているスコールにとって見覚えのある武装。

以前に苦渋を舐めさせられた「プリステイス・ビームリマー」だ。

この武装は彼が束に頼み、今回の作戦のみドレッドノートHに装備された武装だ。

ISを解除する瞬間に拡張領域への登録を削除した事で、格納してもドレッドノートの武装とは認識されずに別個の武装として使用が可能だ。

生身であるため、ビームは発生していないがその鋭利な切っ先は、充分凶器となる。生身の状態でISの武装を使用する。

非常識かもしれないが、一部の人間ならば可能である。

例を挙げるのならば世界最強の織斑千冬だ。

そしてこのカナードもその1人であった。

銃火器の場合は反動制御などはできずにただトリガーを引くだけ。

近接武装は銃火器よりもマシなレベルだが、IS装備時と比較すると雲泥の差だ。だがが今この瞬間、それは些細なことであった。

「はあっ!!」

振り下ろされた一撃。

咄嗟にビームサーベルを振り上げるが、すでに遅かった。

プリステイスは装甲毎スコールの身体を切り裂き、豊満な胸に一筋の大きな傷を残した。

破碎された装甲の一部が彼女の血に濡れて落下していく。

落下しつつの攻撃、加えて生身の状態でISの武装を使用するという非常識な一撃だが、その効果は充分であった。

『あつ、ぐうつ……！』

苦悶の声をかみ殺して、ビームライフルで落下していくカナードを狙う。

だが、再び轟音と共にビームライフルが砕け散った。

炸裂弾頭によって、飛び散った破片がアマツのエネルギーを削り取っていく。

『ぐう……っ!?!』

ISの探知範囲外からの狙撃、セシリアの援護であった。

爆煙に包まれている中、正確にスコールを打ち抜いた彼女の狙撃能力には脱帽するしかない。

『援護感謝する、セシリア』

再度ドレッドノートを展開して、AMBACで姿勢制御を行ったカナードが瞬時加速でスコールに詰め寄る。

機体のダメージもさることながら、搭乗者であるスコール自身へのダメージも深刻であり、彼女は動けなかった。

『生身でISの武装を……っ!? 非常識にも……程が……っ!?』

『多少骨が折れたが十分な効果があった。先ほどの手ごたえとその様子、能力を使っている間はシールドバリアが解除されていたようだな』

アマツの【拡散結界】の弱点、それは結界の展開中は、エネルギーを多大に消費する他、自身を覆っているシールドバリアが解除されてしまうのだ。

そしてアマツは、先のヴェント、大型炸裂狙撃銃【天山】によって損傷したことから

P S装甲搭載機体ではないのは明白であった。

再度振り上げるのはプリステイス、鋭利なその先端はまだスコールの血で塗れていた。

『これで終わりだあつ！』

『まだよっ！』

袈裟切りで振り下ろされたプリステイスをサーベルで受け止める。

だが、今度はただの実体武装ではない。

プリステイスのビーム発生器からビームが発振されていた。

互いの機体へのダメージの影響からか、鏑迫り合い、拮抗状態だ。

だがスコールは生身に大きなダメージを受けている。

その差からか、少しずつ、少しずつプリステイスにビームサーベルが押し返されていく。

『こんな、こんなところで私が……っ！』

『貴様はここで終わりだあつ、落ちろおつ!!』

焦りの表情を見せていたスコールにカナードが吼える。

拮抗はそこまでだった。

アマツのビームサーベルはプリステイスに振り切られた。

『あああああつ!!』

シールドバリア毎アマツの胸部装甲を切り裂いて「絶対防御」が発動。

同時にアマツのエネルギーは「Empty」を示した。

衝撃と共にアマツは、先のデステイニーとドレッドノートの狙撃によって築かれた残骸の山の中に落下した。

『……………』

それを確認したカナードは、プリステイスを構えたまま、息をつく。

そして背後に接近するISの反応。

振り返るとそこには狙撃銃を持ったままのセシリアのブルーティアーズがいた。

『……最高のタイミングでの援護だった。セシリア』

『いえ、カナードさんもお疲れ様です。流石ですね、まさか生身でISの武装を使うなんて思いませんでした』

『奴の能力を前もって知っていたからこそできた策だ、それに……俺だけの力じゃない』  
そう、むず痒そうにカナードはセシリアに告げる。

『……勝ったぞ、クロエ』

落下し、ISが解除され力なく倒れているスコールを見下ろしカナードはそう呟く。  
その様子を見て、静かにセシリアは笑みを浮かべていた。

ほぼ同時刻、IS学園医務室

「……………」

黒に金の瞳を開いて、クロエは意識を覚醒させる。

上半身を起こした際に、骨折した腕から奔る痛みにより少し顔を顰める。

「あら、目が覚めたの？」

クロエが意識を取り戻した気配を感じてか、保健医が遮蔽カーテンを捲って声をかける。

目を閉じて保健医に頷いて答える。

「はい。あの……声が聞こえませんでしたか？」

「ん、声？いえ、聞こえなかったけど……空耳じゃない？」

「……そうですか」

「あまり無理しちゃ駄目よ。全く……さっさと帰ってきなさいよ、パルス先生」

保険医が呆れたようにため息をついて、それじやとクロエに告げてカーテンを閉じる。



(……カナード様の声が、聞こえた。空耳なんかじゃ……ない)

確かに声が聞こえた、彼の声が。

「……待ってます、帰ってきてくれる事を」

そう、クロエは微笑んだ。

## PHASE 11 繋がる想い

……私はいったいどうなったんだっけ？

意識が戻った時、まず最初にそう思った。

頭がぼんやりしていて、何があったのか思い出そうとしても出てこない。暗い闇の中に漂っているとまるで宇宙にいるようだ。

行ったことはもちろんない。

なのに、何故か見知ったような感覚があるのは何故なんだろう。

いつも見る夢もそうだが、何か忘れているような気がする。

そこまで考えた時だった。

いつもの夢の光景が広がっていく。

10枚の羽根を背負った人型の機動兵器の目の前でカーゴが爆発する。

機動兵器のコックピットの中で、少年が慟哭していた。

「フレイっ、僕はっ……僕はあっ！」

少年が流した涙が大粒の雫となって浮かんでいる。

ああ、なんでだろうなあ。

コイツの事、知らないはずなのにとても胸が痛い。

いつもと変わらない夢。

そのはずだった。

一瞬だけ周囲にノイズが奔った後、私の意識は黒く塗りつぶされた。

—— 思い出すんだ。自分自身の事を。

—— アあ、アイツは、ワタしを守ってクレなカッタ。

—— なら、どうすればいいか、わかるはずだよ。フレイ？

—— 許さナイ。

カナードがスコールとの戦闘を開始する直前。

第一研究区画

真とカナードたちと別れたラキーナと楯無はクルーゼがいると思われる研究区画に到着していた。

移動ダクトの扉を開いて侵入する。

まだ機体のセンサーは反応を捉えてはいない。

『……………こね』

『そうですね』

ストライクガンダムI. W. S. P. と霧纏の淑女の2機がそれぞれビームライフルとランスを構えている。

『静かだな』

『……………うん。ところで楯無さん、1つ聞いてもいいですか?』

『ん、何かしら、ラキーナちゃん』

マドカは視界センサー越しに、ラキーナと楯無は互いに背後を守りながら少しずつ区画を飛行し、進んでいく。

そんな中ふと疑問に思ったことをラキーナは楯無に尋ねる。

『どうしてクルーゼの相手を希望したんですか？』

そう、突入する前のブリーフィングで、彼女はラキーナと共にクルーゼを相手することを希望していたのだ。

技量は問題なく、機体の相性もビームをアクアヴェールで軽減できる霧纏の淑女ならば良好だ。

楯無本人もこれ以上の危害が出るのならばクルーゼを殺めてでも止める覚悟をしている。

『そうね、頼まれちゃったからよ』

『頼まれた……蔵人にですか？』

『それもあるけど、レイ兄さんに』

楯無の口からでた名前に、ラキーナは目を丸くして驚いた。

『え、レイって、まさか……っ!?!』

『レイ・ザ・バレル、確かラキーナちゃんは戦ったことがあるのよね?』

『はい。でもなんで兄呼びなんですか?』

『まあ、そこは家庭の事情って奴ね……っ、ラキーナちゃん』

2機のハイパーセンサーが下方に2つの反応を捉えた。

1つは先の襲撃でラキーナが敗北した〔ロキプロヴィデンス〕

そしてもう1つ。

『この反応は、フレイの……っ!?!』

そう、捉えた反応の1つはフレイ・シュヴァリーの〔ラファール・リヴァイヴ・ノワール〕の反応であった。

ジトリと嫌な汗がラキーナの背中に流れる。

とても嫌な予感がするのだ。

それを察したのか楯無が告げる。

『ラキーナちゃん、もしフレイ・シュヴァアリーがこちらに向かって攻撃してきたら、貴女が相手をしなさいな。お姉さんはクルーゼを相手にするから』

具体例として【生体支配】という【単一使用能力】を持つていたラクスという前例がある。

誘拐されたフレイが洗脳されている可能性もゼロではない。

『楯無さん……分かりました、ありがとうございます』

楯無の気遣いに素直に甘えることにする。

フレイを助けるためならばなんだってすると、今のラキーナは心に決めているのだ。

『まあ、私一人でクルーゼを抑えられる自信はあんまりないから、なるべく早めに解決してくれるとお姉さん嬉しいなあ』

少しだけ本音を漏らした楯無に苦笑しながら、ラキーナは表情を引き締めた。

そして2機は区画中央の吹き抜け部分に突入した。

突入した瞬間、下方から飛来する高速熱源を感知。

2機が散開すると同時に、数瞬前まで2機がいた空間を下方からリニアカノンの弾丸が飛来した。

リニアカノンを放ったのは下方から上昇しつつ近接用のブレードを展開している「ラファール・リヴアイヴ・ノワール」

搭乗者は当然「フレイ」だ。

機体に搭乗しているフレイの目は虚ろで、頭部には脳波測定装置の様な機器が付けられている。

『フレイっ！私だよ、ラキーナだよっ！』

『……何が、ラキーナよ。アンタ、キラでしょ？』

底冷えした彼女の声が響く。

ラキーナは自分がキラ・ヤマトであったことを彼女には話してはいない。

彼女の口からその名前が出るということは――

『フレイ、まさかC・Eの記憶が……？』



『ええ。ライリーのおかげでね』

『感動の再会というやつだね、キラ・ヤマト君』

オーブンチャンネルで会話に割り込む女性の声、ライリー・ナウ、否、ラウ・ル・クルーゼ。

天を、太陽を背負っているかのような特徴的な背部ドラグーンユニットを持つ「ロキプロヴィデンス」が上昇しつつ現れた。

『クルーゼ……っ！』

『ラキーナちゃん、落ち着いて』

『そうだ、落ち着け。奴はいつドラグーンを展開するか分からない、まずは冷静になるんだ』

ストライクに寄り寄り添いに武装であるランスを展開した霧纏いの淑女を纏う楯無と、同期センサーでストライクと一体化しているマドカの声に頷く。

『フレイ、そいつは君を攫ったクルーゼなんだよっ、早くこっちにつ！』

ラキーナがマニピュレータをフレイに差し出すが、フレイはそれに唾棄するように答えた。

『は？何言ってるのよ。ライリーがそんなことするわけないでしょ。それにね、私はア  
ンタに見捨てられたのをはつきりと覚えてるのよ、キラ』  
『見捨てて……え？』

突然のフレイの言葉に思考が一瞬停止してしまった。

助けられなかったのは事実である。

だが見捨ててるつもりなど毛頭ないし、そんなつもりもなかった。

『なっ、何を言ってる……っ!?』

『うるさいわよ、私の事なんてどうにも思ってたかったくせにいつ！あんたは私が、私の  
仇をとるために殺すっ!』

瞬時加速でストライクガンダムに詰め寄ったノワールは、サーベルを袈裟切り気味に

振り下ろす。

それを半ば反射でフラガラツハ3ビームブレイドで、ラキーナは受け止める。

『フレイっ、どうしてっ!?』

『煩いつ、黙って私に斬られて死になさいよっ!』

半ば錯乱気味にそう叫ぶフレイの様子は尋常ではない。

鏝迫り合い——そんな中、ラキーナはフレイの頭部にある装置に視線が移る。

(フレイの様子が明らかにおかしい。考えられるのはあの頭部の装置っ、あれがっ、あれがフレイをっ!)

歯ぎしりしつつも、I. W. S. P. パックから得られる莫大な推力、出力の差でラファールを押し返す。

単純な出力、パワー勝負ではストライクガンダムI. W. S. P. のほうが上であった。

一方の楯無は【蒼流旋】でライリーの【ロキプロヴェイダンス】を刺突するが、それを左腕部の大型シールドユニットから発振されているビームサーベルでいなす。

『彼女に何をしたのっ、ライリー・ナウっ、いえ、ラウ・ル・クルーゼっ！』

『簡単さ、I Sを通じて少しだけ記憶を弄らせてもらったただけだよ』

『なんですすつてっ？』

『フレイ・アルスターとしての記憶を呼び覚まして、その記憶を少しだけ書き換えさせてもらった。歌姫の遺した資料も中々役立つものだよ』

ライリーの顔に浮かぶのは嘲笑。

後方に機体を加速させ、蒼流旋のレンジから離れる。

その瞬間、霧纏の淑女のセンサーがロックオン警告を奔らせた。

1秒にも満たない僅かな時間で、楯無の周囲360°にドラグーンが展開されていたのだ。

『君にはこれでいい退場願おう』

ライリーの操作の元、幾重ものビームが楯無に向かう。

シールドバリアで防ぐことは可能だろう、しかしあまりにも数が多い。受けてしまえばエネルギー切れに陥ることは明白だ。

だが楯無もそれは予測していた。

『それはどうかしらね』

結果だけ述べるのなら、放たれたビームは楯無には届かなかつた。

その理由は彼女の機体の周りに漂う水の膜。

「アクア・ヴェール」が放たれたビーム全てを減退させたのだ。

『どうやら機体の相性がいいようね』

『成程。だがそれで私を攻略したつもりかね？』

ドラグーンを一瞬で背部ユニットに戻したライリーは、再度ビームサーベルを展開。個別連続瞬時加速を用いて一気に楯無に迫る。

だが見切れない速度ではない。

デステイニーガンダム・ヴェステイジーや飛燕などのVLユニットを持つている機体に比べれば、ロキプロヴィデンスの機動力は劣る。

カウンターは可能だ。

カウンターのために蒼流旋を振るう。

瞬間、彼女の真横にドラグリーンが3基、瞬時に展開された。

同時に振り下ろされるビームサーベル。

『っ!!』

まるで心臓を鷲掴みされたような悪寒を感じ、カウンターから即座に回避に行動を切り替え、間一髪、下方への瞬時加速が間に合った。

だが逃れた方向にも今度は5基のドラグリーンが展開されている。

しかも、そのうちの2つはビームスパイクとして楯無に向かってきている。

『ぐうつ!』

ビームスパイクを蒼流旋で弾く。

だが残り3基からのビームは避けきれずに、アクア・ヴェールの展開も間に合わずに  
まともに受けてしまった。

左腕部の装甲が一部破壊されエネルギーが減少。

そしてさらに、上方から展開したビームライフルと周囲に瞬時に展開した8基のドラ  
グーンでライリーは楯無を狙っていた。

放たれたビームはAMBCで回避しつつ、楯無は冷静に状況を分析していた。

(息つく暇もないビット兵器の瞬間展開っ、そして本体との連携攻撃、まずいわ、このま  
まじゃあまり持たない……っ！)

単純な機動力などで言えばステイニーガンダム・ヴェステイージなどのほうが遥か  
に上である。

だが、ロキプロヴィデンスの強みはそこではない。

【瞬間展開】の本当の恐ろしさは、相手の選択肢を強制的に狭める事と、自分の手数を一  
瞬で増やすことができることだ。

突如として現れるドラグーンと高機動で迫る本体との連携、必然取られる手段は限ら  
れる。

つまりはドラグーンを完全に見切らない限り、瞬時に増える相手の手数に必ず押されてしまうのだ。

この点で言えば、相手を機動力で確実に上回り、光学兵器を無効化できるデスティニーや、相手の攻撃を確実に防げるALを持つドレッドノートの方が相性が良かった。すでに霧纏の淑女のエネルギーは7割を下回っている。

僅かなやり取りでこれなのだ。

認識が甘かったと、内心楯無は顔を顰める。

状況は不利としか言いようがなかった。

せめてラキーナが援護に入ってくればこの状況を打破できる可能性はあるのだが、依然としてラキーナはフレイとの戦闘を続けていた。

『フレイっ！』

コンバインシールドに備え付けられたガトリングガンでフレイのノワールを狙う。トリガーを引く瞬間、その射線を僅かにずらして。

発射された弾丸はノワール本体ではなく、ノワールの持つアサルトライフルに着弾し



て破壊する。

その様子を同期センサーを通して眺めているマドカが叫ぶ。

『ラキーナっ、何故フレイ・シユヴァリーを狙わないっ!? 武装だけを狙っても今のヤツは素手でもお前を殺しにくるぞっ!』

『……分かつてるっ、今は私を信じて、マドカっ!』

ラキーナの表情には迷いの感情は見えない。

『……分かった、ドラグーンとライリーは楯無が抑えているようだ、急げっ!』

その言葉に頷いてビームライフルを構え、トリガーを引く。

そのビームは容易くAMBCで回避されてしまう。

『キラっ、アンタ、私の事舐めてんのっ!?!』

『舐めてなんかない、私は君を助けるために来たんだっ!』

『アンタなんか助けてもらいたくなんかないのよっ!?!』

ラファールの実体剣「ダン・オブ・サーズデイ」を展開し、スラスタを噴かせる。近接戦闘に持ち込むつもりだ。

(狙い通りっ……待っていて、フレイ、すぐに助けるっ！)

もつともそれはラキーナの狙い通りの行動。

ライフルなどの射撃武装を潰してしまえば、ノワールストライカーに残される武装は必然的に少なくなる。

後付武装を展開しない事から、拡張領域などに武装を積み込んではいないようだ。

『死になさいよ、コーディネーター!!』

実体剣をスラスタの加速によって得られる速度に乗せて振り下ろす。

ラキーナはフラガラツハを展開しなかった。

『今だっ!』

振り下ろされる刹那、ラキーナはコンバインドシールドをパージした。

そして瞬時加速によって、下がりつつの高速切替。

展開するのはI・W・S・P。パックの【IS用大型単装砲】

だが狙いはフレイではない。

トリガーが引かれ、ラキーナの精密射撃によってコンバインドシールドは正確に打ち抜かれた。

そして残弾と単装砲の爆煙がフレイを包み込んだ。

『っ!?!』

煙幕。

これがラキーナの狙いであった。

この程度の煙幕ならばISのハイパーセンサーを乱すことは出来ない。

だが、あくまでISを操るのは搭乘している人間だ。

その人間が動揺してしまえば、隙は現れる。

『はあああああつ!!』

リボルバーイグニッション・ブースト  
個別連続瞬時加速。

フリーダムストライカーにも劣らない加速によって爆煙を突き破り、ストライクガンダムが現れた。

『っ!?!』

『フレイいいっ!!』

マニピュレーターがフレイの頭部の装置に伸びて、引きちぎる。

『あつ、あああああああつ!!!』

フレイの絶叫が響く。

実体剣を取りこぼしたその身体をラキーナはしっかりと支える。

先ほどまでの血走ったような目ではなく、今の彼女の瞳はラキーナと友人として触れ合った彼女のものだ。

『……あれ、私……何を？』

『フレイ、無事なんだねっ!？』

『……キラ、いえ、ラキーナ。助けに来てくれたの？』

その彼女の言葉に、思わず感極まったラキーナの瞳に涙が浮かぶ。

『うんっ、うんっ、そうだよ、助けに来たよっ』

『……ホント、泣き虫ねアンタ』

そう言って微笑むフレイであったが、機体のセンサーがラキーナの背後に展開された3基のドラグーンを捉える。

当然、ドラグーンを展開しているのはライリーのロキプロヴィデンスだ。

『二人とも避けてえっ!』

ドラグーンに翻弄されつつ、本体を何とか抑えていた楯無の声が響く。

『遅いつ！』

『ラキっ!!』

咄嗟にラキーナを突き飛ばそうとしたフレイだったが、その手をしっかりとラキーナは握って止める。

刹那、フラガラツハを展開して振るうと共に、彼女の意識の中で【紫の種】が弾け飛んだ。

『はぁあつー!』

迫るビームとフラガラツハが干渉しあう事で、弾け飛び無力化。

ラキーナはビームを【切り払った】のだ。

しかも連続で発射された3発のビームだ。完璧なタイミングを掴まなければ、ビームを確実に受けてしまう。

それはまさに神業といってもいい。

『……すっしょい』

『安心して。隠れて休んでいてほしい。私がクルーゼを止めるから……そして』

ラキーナは微笑む。

『フレイ、私の本当の想いが……君を守るから』

ストライクはプロヴィデンスに向かって行く。

自分よりも小さい泣き虫の彼女なのに、その背中は頼もしく大きかった。

『……カッコよくなっちゃって。信じてるわ』

フレイもそう、ラキーナに返した。

## PHASE 12 正義の行方

フレイの意識が回復した頃――

移動用ダクト内を抜け、真達の戦闘の場は偽装の研究区画に移っていた。

設備のあちこちがすでに破壊され、隔壁が薄い場所はビームによって貫かれ、浸水も発生していた。

その殆どがオータムたちのビームによる損傷である。

偽装区画に戦場が移ってから、その中央部である吹き抜け部分で6機は高機動戦闘を続けていた。

吹き抜け部分はISが高機動で動き回っても十分戦える広さがあった。

(さつきから本音さんばかりを狙ってくる……オータム、こつちの戦力を正確に見極めているのかっ)

デステイニーの真、飛燕の簪に比べてインパルスマークIIを駆る本音は、どうしても2人にISでの戦闘／機動経験で劣ってしまう。



真にはシン・アスカとしての経験値に加え、歌姫の騎士団との戦闘経験があり、簪は代表候補生だ。

元々が整備を主にしている彼女にとっては仕方のないことであった。

『はははっ、まだまだあいくぜえっ！』

前回の接触戦でそのことにオータムも気づいていた。

戦力や技量の劣るものを集中的に攻撃することはとても有効な戦術だ。

しかも真や簪は必ず本音を守れることを予測に入れている、実際前回もそれで離脱することができたのだ。

リジエネレイトの背部ユニットから高出力ビームが発射され、インパルスマークIIを狙う。

『やらせるかっ！』

インパルスマークIIに迫るビームを耐ビームコーティングを施された実体シールドで、デステイニーが受け止める。

そしてお返しとばかりに両マニピュレータのクラレントをビームライフルモードで起動して放つ。

放たれた数条のビームはリジエネレイト、テストメント、ネブラブリッツに向かうがそれぞれ急機動で回避されてしまう。

『うー、私ばかりー』

『本音さん、気にしないでくれ、俺と簪で守るから』

プライベートチャンネルが真のデステイニーから繋がり、彼は苦笑しながら本音にそう告げた。

チャンネルには守るべき主である簪の飛燕も含まれている。

『でも、真。どうするの？このままだと膠着状態のままだよ』

『わかってる。1つ試してみたいことがあるんだ』

『試してみたいこと？』

思案顔の真に簪が尋ね、彼は頷く。

同じタイミングでレインの駆るテストAMENTからのビームライフル、フォルテのネブラブリッツから放たれたランサーダートをAMBAACだけで躲す。

本音からしてみればシールドで防ぐべき攻撃であったというのに、彼はビームライフルの射線とランサーダートの射線を完璧に読み切り、攻撃の間を縫うように回避していた。

舌を巻くほどの技量だ。

『V.Lユニット同士はエネルギーを転送することもできる。ならデステイニーの【単一仕様能力】で……』

作戦を簪に伝えて、彼女は理解を示して頷く。

『分かった。合わせるよ、真』

『ああ。本音さん、ドラグリーンでオータムとあの2人を分断できるか?』

『今使えるドラグリーンは2つまでだから、そんなに長い時間は無理かなあ。たぶん数十秒くらいが限界だよー?』

インパルスマークIIの背部に装備されている「ドラグーンシルエット」に装備されているドラグーンは、形状が砲塔にも見える「フェイルノート」の2つしかない。

本来はフェイルノートの他にも、Xアストレイのプリステイスに似た小型のドラグーンを搭載する予定であったが、そもそもが突貫工事で作成したシルエットであることと、本音の適性がいくら高くとも最初から多くのドラグーンを使用するよりは堅実にデータを集めたかったという事情があった。

本音の返答を聞いた真の顔に笑みが浮かぶ。

『数十秒か……問題ない、頼むよっ！』

デステイニーの背部Vユニットが起動して、紅い光の翼を展開する。展開と同時に一瞬だけ目を瞑る。

大切な女性である簪、大切な友人である本音の姿が脳裏に浮かぶ。

同時に、真の意識の中で紅い種——【S・E・E・D】が弾け飛んだ。

『行くぞ、デステイニーっ！』

真の声に合わせて飛燕もVシユニットを展開。  
対照的な蒼い光の翼が広がる。

『行くよ、飛燕っ!』

2機が向かうのは、テストメントとネブラブリッツ——レインとフォルテの2人だ。  
残像を残しながらデステイニーと飛燕は2人に向かう。

『何する気か知らねえがやらせねえ……うおっ!?!』

『いつけー、ドラグーンっ!』

真と簪の行動を止めるために背部ユニットを切り離してリジエネレイトビットを展開しようとしたオータムの下方からドラグーン「フェイルノートビームクロー」が迫ってきた。

咄嗟にスラスターを吹かしてオータムは大きく舌打ちしつつ、回避を選択した。

『先輩っ!』

『分かってるよっ!』

テストメントとネブラブリッツがそれぞれの射撃武装でデステイニーと飛燕を狙う。そして放たれたビームとレーザーは正確に2機へと直進し、貫いた。

だが貫いたはずの2機の姿がぶれた。

同時に凄まじい速度で数機のデステイニーと飛燕が彼女達に向かってくる。

『なっ!?!』

『っ、先輩、下ツスっ!』

『クソっ、残像になんで質量があるんだよっ!』

レインが毒づいたものの正体、デステイニーのミラージュコロイドで展開した残像――分身だ。

エクスカリバー事件でのAIラクスとの戦闘中に行った【単一仕様能力】を用いた分身操作の応用だ。

ハイパーセンサーすら惑わすその効果は肉眼相手でもやはり高く、見事にレインとフォルテは嵌ってしまったのだ。

『遅いつつ!』

『やあつ!』

デステイニーがヴァジュラビームサーベルでテストメントの背部ユニットを、飛燕がバルムンクでネブラブリッツの胸部装甲を切り裂いた。

『ぐうつ!』

『うわあつ!』

大きなダメージを食らって吹き飛ばされた2機、だがまだ終わらない。

サーベルで切り裂いたのと同時に高速切替でフラッシュエッジを展開。

飛燕も同じように展開したフラッシュエッジを投げつけ、計4つのビームブーメランがレインとフォルテを狙う。

『くつそお、なんて機動力だつ!』

『センサーが、身体が追いつかないッス!?!』

飛来するフラッシュエッジをAMBACで回避する2機であったが、すでに真は次の行動に移っていた。

残像と分身を残しながらフォルテのネブラブリッツに急速接近。

『っ、このっ！』

『はあっ！』

攻盾システム「トリケロス」からビームサーベルを発振させて振り上げるが、デステイニーはそのマニピュレータを蹴り上げる事で逆にフォルテの体勢を崩す。

PS装甲を搭載しているネブラブリッツに格闘攻撃は決定打にはならないが、AMBACで体勢を整えるには数秒の時間が必要になる。

『これでえっ！』

瞬時加速で体勢を崩したフォルテの背後に回りこんで、クラレント・ビームサーベルを展開して背部のストライカー部分、主翼のハードポイントに接続されているミサイル



に押し当て破壊する。

『うわあっ!?!』

背部ストライカーが破壊された衝撃でフォルテは弾き飛ばされ、さらに体勢を崩した。

本来のネブラブリッツの背部ストライカーの正式名称は「マガノイクタチストライカー」である。

アストレイゴールドフレーム天ミナや、IS「アマツ」と同じくマガノイクタチと同等の能力を持っているものだ。

しかしIS「ネブラブリッツ」に装備されているストライカーは「ジェットストライカー」

大気圏内用の高機動空戦型ストライカーパックだ。

大気圏内での高い飛行能力を与えるストライカーパックであり、真もザフト時代に実物を、傭兵時代に搭乗していた「ウインダム」のデータベース内で詳細なスペックを確認していた。

レインの駆る「テストAMENTガンダム」と協力することで発生させる「ジャミング能

力」はこの機体の「単一仕様能力」であり、全くの別物であった。

『てめえつ、シン・アスカっ!!』

フォルテに多大なダメージを与えた真にレインが吼えると共にビームライフルで真を狙う。

だが、そのビームライフルは真横から高速で接近してきた機体の大型実体剣で切り裂かれてしまった。

『くうっ!?!』

『させないからっ!』

切り裂いたのは飛燕の「バルムンク」

そして真と同じように蹴りを繰り返してレインのテストAMENTを弾き飛ばす。

『がっ!?!』

『機体が良くても、パイロットが性能を引き出せないならっ!』

デステイニーの【単一仕様能力】が発動され、V Lユニットの装甲が部分的に展開されて、光の翼がより一層美しく、大きく広がる。

『V Lユニット展開、出力最大っ!!』

同様に飛燕の翼も大きく広がる。

唯一通常時と異なっているのは、飛燕の光の翼の色が【蒼】から【紅】に変わっている事だ。

（凄いい、デステイニーのV Lから飛燕にエネルギーが流れ込んでくるっ！ぶっつけ本番なのに……！）

現在のデステイニーと飛燕、2機はV Lユニット同士で同期されている状態だ。

いや、同期だけではない。絶えずエネルギーが流動し、循環している。

簡単に言えばデステイニーの【運命ノ翼】が飛燕にも発動している状態だ。

これは2機が姉妹機であること、そしてV Lユニットの特性があつて初めて可能に

なっている。

類似の事象としては、とある事情で大破した火星人のMSであるΔアストレイのVLユニットから、新たに作成されたターンΔのVLユニットへエネルギーを転送した事例が挙げられる。

『飛燕のVLとの相互リンク完了っ、行くぞ、簪っ！』

『うんっ！』

2機が体勢を整え、レインとフォルテに凄まじい加速で向かう。

それこそ、先の高機動が遅く見えるレベルの急機動。

真はすでにこの加速に体が慣れてる。

しかし、飛燕を駆る簪にはこのレベルの加速を味わったことはなかった。

(くうっ、凄い加速……でもっ！)

だが耐えられない速度ではない。

2対の紅い光の翼がその出力を最大にして、テストメントとネブラブリッツを狙う。

近接武装ではなくその光の翼自体が強力なビームサーベルとなっているのだ。

『はああああつ!!』

『やああああつ!!』

刹那、二つの光の翼がテストメントとネブラブリッツをX字に切り裂いた。

装甲が破壊され飛び散り、【絶対防御】が発動、2機が区画の床に落着してISが解除された。

どうやら今の一撃で気を失っているようであった。

『レインっ、フォルテっ！このお、餓鬼がっ！』

『っ!?!』

ドラグーンに翻弄されていたオータムであったが、瞬時加速によってドラグーンを振り切り本体である本音に狙いを変更した。

ビームライフルで本音のインパルスマークIIを狙い、トリガーを引く。

その狙いは精密であり、セシリアの様に同時制御をまだ体得できていない本音は回避

できなかった。

『させるかあつー！』

しかし、リジエネレイトから発射されたビームに、飛来したビームが干渉して弾き飛ばした。

飛来したビームを放ったのはDestinyニীগンダム・ヴェステイジ。

(オレの撃つビームの射線を完全に予測してるってのかつ!?バケモンがつー)

思わずオータムは舌打ちと共に毒づく。

マニピュレータに装備されているクラレントのビームライフルモードでオータムが放つビームを予測して放つたのだ。

タイミングや射線を完璧に予測していなければ出来ない神業。

自身が高い技量を持つオータムは、それを当たり前の様に成功させた真の能力に戦慄した。

それは狙われていた本音も同じであり、寄り添うように近づいてきたDestinyニーと

飛燕を見て嘆息した。

『……飛鳥君、ありがとうー』

『ああ』

本音から届いた通信に頷いて微笑む。

ふと、いつものニックネームじゃないなとも思ったがすぐに思考を切り替える。

『これで三対一だ。オータム』

『クソがあつ、まだだ、オレは、オレ達はラクス様の仇を討つまでは止まれねえんだよおっ！』

血走った目で真達3人を睨むオータム。

その時であった。

オータムの目の前にディスプレイが投影された。

そんな操作など彼女はしていないのだ。

そしてそのディスプレイに現れた表示は、

## — Mobile Suit Trace System Starting

と表示されていた。

『なっ、何だっ!?』

リジエネレイトの装甲が溶け出して、泥の様に変化していく。

ほぼ一瞬でリジエネレイトが泥に変化して、オータムを飲み込む。

『うっ、うおおっ!?』

突然の搭機の変化にオータムはなす術がなかった。

それはかつて、ラウラのIS「シユヴァルツエア・レーゲン」に搭載され、真も相對したシステムと同じものであった。

『【VTシステム】だっ!?』



『でも、真、あれって……っ！』

リジエネレイトが変化した黒い泥。

泥はオータムを飲み込んで、形を変えていく。

以前ラウラの時の様に人型に変わるが、簪にはその形状に見覚えがあった。

簪は、エクスカリバー事件の際、AIラクス of 電腦樂園に囚われたときにその姿をシン・アスカの記憶の中で見た。

彼と共に戦場を駆け抜け、一度は敗れて傷跡を刻んだ機体。

真にとっては見覚えどころではない。

血の涙を流しているかのようなアイカメラに刻まれたライン。

機体背部に接続されている巨大な翼状のユニット。

巨大な実体剣とエネルギー砲がマウントされている。

『オレはコノチカラですべてヲ……ナギはらウ』

オーブンチャンネルで聞こえるのはオータムの声ではなかった。

真の簪もよく知った声。

真にとっては自分自身の声だ。

相對するその機体の名は――

『……デステイニーガンダム』

かつての愛機。

傷跡の名を背負う前の愛機、そしてかつての自分<sup>シン・アスカ</sup>が目の前に現れたのだ。

時間は少し前後して――

海洋プラント付近 海上

『はあっ！』

一閃、白の機体が無人機イージスを真っ向から両断し、イージスは抵抗も出来ずに爆散する。

そしてその白の機体は得物である【雪片】を機体を反転させると共に【零落白夜】を発動したまま、背後に迫っていた無人機デュエルに投擲する。

見事に機体中央に突き刺さった雪片を瞬時加速で接敵すると共に引き抜いて、デュエルを蹴り飛ばす。

デュエルは機能を停止したのか、海面に落下していく。

『……これで無人機は大体片付いたな』

一息つくように、白い機体【暮桜】に搭乗している千冬が呟く。

同時に空間投影ディスプレイが展開される。

ディスプレイに映るのはブレイク号で管制している束だ。

『無人機は大体片付いたねー、さっすがちーちゃん』

『私だけじゃない、真耶と利香さんもいるからな』

『おっと、そうだった』

視線を無人機バスターと戦闘を継続しているラファール・リヴァイヴを駆る真耶に向

ける。

相対しているバスターはエネルギーがつきかけているのかP S装甲が切れて灰色となっており、左のマニピュレータを腕がれていた。

そして真耶が展開したグレネードランチャーの爆発に飲まれ、バスターは爆散している。

少し離れた場所でガイアガンダムを駆る利香も相対していたデュエルを丁度ビームブレイドで両断したところであった。

『……侵入した飛鳥達の様子はどうか？』

『ん、それぞれ戦闘中。あつくん達3人はオータムと裏切った2人、ラキちゃんと楯無ちゃんはクルーゼを、そしてカナ君とセシリアちゃんはスコールを……おおっ！』

『どうした？』

『カナ君がスコール倒したって……よかった、よかったよ……』

胸を撫で下ろした束の様子に笑みを浮かべる。

『流石だな、機体相性は最悪だと聞いていたが？』

『うん。でも今回ばかりは負けられなかったみたいだから。ああ、でもHユニット全損かあ。離脱の指示出しておくね』

東の言葉に頷いて答えた千冬であったが、視線をいまだセイバーガンダムのミシエルとの戦闘が続いている一夏達に向ける。

援護にいくつもりかと思つたが、千冬はその戦闘を静観していた。

『……援護しなくていいの?』

『……奴の言っている事も一理ある。私は一夏がそれにどんな答えを出すかを見たいんだ』

『状況に流されてるだけ?』

『ああ。IS学園に入学した当初の一夏ならば私も同じ意見だった。だがこの1年で一夏も成長した。この戦場にいるのはあいつの意思、今の一夏がどんな答えを出すのか、知りたいんだ』

もちろん一夏が危険になれば割って入るさと千冬が続ける。

『……いつくん、頑張つて』

束もそれ以上聞かずにそう呟いた。

『そおらっ！』

『ぐうっ！』

高速で接近してきたセイバーのビームサーベルを鈴の甲龍は双天牙月で弾く。

パワーでは甲龍のほうが若干上ではあるがほぼ互角、攻めあぐねているのはセイバーの機動力とその戦法だ。

弾いた牙月で反撃を叩き込もうと思った瞬間には、凄まじい速度でAMBACを終え、レンジから離れ今度はシャルロットのラファールと射撃戦に移っているのだ。

一撃加えた後に機動力を生かしたヒット&アウェイ。

なおMSであるセイバーガンダムも同じように変形してからの高速機動によるヒット&アウェイを得意にしていた事を鈴は知らなかった。

衝撃砲を叩き込もうも、こちらの狙いを見透かしているかのように射線を常にシャルロットが塞ぐようにセイバーは動いている。

（ふっぎけんじやないわよつ、真のデステイニーや簪の飛燕、ラキーナのストライクフリーダム並じやないっ！しかもあの戦い方っ、こっちの狙い完全に読まれてるっ！）

心中で毒づいてふと、思い出した。

（お姉ちゃんは今もつと周りを見ればいいのよ。猪突猛進すぎるとそのうちあたしに足元掬われるわよー？）

脳裏に従妹であり、台湾代表候補生の鳳乱音の顔が浮かんだのだ。

むかつく事にドヤ顔ではつきりと脳裏に浮かんだ彼女の顔を、頭を振って振り払う。

（つたく、こんな時に……っ！まあでも少し落ち着いたわ）

だがそのおかげか、冷静さは幾分か取り戻す事ができた。

『皆、聞こえてるか？』

インフィニットジャスティスからプライベートチャンネルが届く。

今この海域にいる千冬、真耶、利香を除く全てのメンバーにチャンネルが繋がっている。

『ミシエルの、セイバーガンダム有能力、おそらくだがあれは……』

『【加速】だよ、アスラン？』

アスランの答えを先にシャルロットが告げる。

彼女のラファールはすでに左のマニピュレーターが破壊されていた。

現在ミシエルはラウラが抑えている。

ワイヤーブレードを紙一重で回避しながら、ビームライフルでラウラを狙っていた。

もちろん、戦いながらラウラもプライベートチャンネルに意識を裂いていた。

『……恐らくはそうだろう。ただの戦闘機動だけではなく、機体動作も能力によるブー



ストが可能とみて間違いはない』

『さつきアタシから離れたあれね』

アスランが鈴に頷く。

『ああ。正直かなり厳しいが、勝機はある』

『……接近戦だよな、アスラン』

一夏がアスランに言う。

それにアスランが静かに頷く。

『そうだ。ヒット&アウェイを封じての近接戦闘。遠距離戦ではセイバーには追いつけないだろう。それに俺と一夏の近接武装には零落白夜がある。俺と一夏で同時攻撃、もしくはセイバーの逃げ道を塞ぐことができれば、勝機はある』

アスランの言葉に鈴や箒達の顔に笑みが浮かぶ。

『なら、私達が隙を作ろう』

『隙くらい、作って見せるわよ』

『うん、頑張るよっ！』

『3人共……分かった、頼む』

『なら、俺も一夏、君の援護に徹するよ』

アスランの言葉にえっと一夏が驚く。

近接格闘の技量ならば間違いなく自分よりも上のアスランが、自分を援護してくれる事に驚いたのだ。

『君だってアレだけ言われたんだ。今の自分が流されてるだけだって事を、否定したいだろう？』

『……それは、そうだけど』

『なら、任せろ。これでも君達よりは長生きしてるんだ。少しは良いところを見せても良いだろう？』

アスランはそう言ってビームライフルを展開する。

『分かった、頼むよ、皆っ！』

一夏も雪片式型を構える。

それを高機動を続けながら、ラウラへ射撃を続けていたミシエルは捉えていた。

『はっ、どうやら作戦タイムは終わったみたいだなあ？』

『あまり私達を舐めないほうがいいぞ』

『別に舐めちやいねえよ、見せてみろや、てめえらの力をさあつ！』

そう叫んだミシエルにビームが飛来する。

しかしその程度のビームはミシエルに届く事はなかった。

ひらりと踊るように回避する。

だがそれは一夏達の狙い通り。

高速で上方から飛来する2機のIS。

『うおおおっ！』

『はああああつ！』

白式とインフィニットジャステイス。

それぞれが零落白夜を発動させた得物を振りかぶるが、この程度ではミシエルには届かない。

『同時攻撃つ、しかも両方零落白夜かあつ！』

【アムフォルタスプラスマ収束ビーム砲】を2門展開したミシエルは後方に下がりながら、トリガーを引く。

それを左右に分かれて回避するアスランと一夏。

だが明らかに一夏のほうが機動が遅かった。

それは明確な隙であった。

『うおらあつ！』

瞬時加速で一気に距離をつめたセイバーがビームサーベルを振り下ろす。

咄嗟に雪片で受け止めるが、体勢が悪い。

そのままスラストターの出力でのタックルを食らわせて、得物である雪片を弾き飛ばす。

『これで頼みの綱の零落白夜は使えねえぞお！』

白式の象徴である雪片は海面に落ち、沈んでいく。

だが、一夏の目は死んではいなかった。

『零落白夜だけじゃねえっ！俺は皆と戦ってるんだあ！』

『なら見せてみろやつ、テメエ等の力って奴をよっ！』

【多機能武装腕 雪羅】のエネルギー爪を起動してそのまま、セイバーに向ける。

だがそれよりも速く、ビームサーベルで腕ごと切り裂かれた。

エネルギー爪に使用していたエネルギーが逆流して、雪羅は爆散してしまう。

生身の一夏の腕も爆発の影響を受け、深い裂傷が奔っていた。

『はっ、玉砕覚悟かっ!?!』

『違うっ! 鈴っ!』

『分かってるわよっ!』

一夏がミシエルの相手をしている最中にすでに砲塔の構築は完了していた。そして出力は最大値だ。

『【衝撃砲】ってやつだなっ、だがなあっ!』

『ぐっ!?!』

『撃てねえだろっ!』

素早い起動で一夏に組み付いたセイバーはそのまま、白式を盾にするように鈴に向ける。

だが、それに鈴はニツと笑みを浮かべる。

『一夏っ、歯あ食いしばりなさいっ!』

『遠慮せずに撃て、鈴っ!』

『なにいつ!?!』

一夏が叫び、ミシエルを自分毎拘束する。

刹那、衝撃砲が発射され、白式ごと撃ち抜いた。

PS装甲であるセイバーにはダメージは少ないが、エネルギーは減少。

加えてビームサーベル1本がマニピュレータから弾き飛ばされた。

だがそれ以上に、PS装甲ではない白式のダメージは大きかった。

最大出力の衝撃砲をまともに受けたためか、腰部や肩部の装甲は弾け飛んでおり、シールドエネルギーもセイバーと同等以上に消耗している。

しかし、一夏も男だ。

意地でもセイバーに食いつき離さない覚悟であったため、そろって2機は大きく吹き飛ばされる。

『いのおっ!』

組み付いた白式をマニピュレータで殴り飛ばしたセイバーは強引に離れる。

体勢を崩したセイバーに向かうのは筈の紅椿。

『てええいつ！』

『ちっ！』

代表候補生どころか国家代表すら舌を巻く速度で、AMBAACを行う。

この速度のカラクリは、アスランが予測した通りセイバーの単一仕様能力だ。

その能力の名は【補<sup>アクセル・コンベンション</sup>填 加速】

シールドエネルギーを一旦放出して機体各部に叩き込んで加速する。

メカニズムは瞬時加速そのものであり、簡単に言えば、部位ごとの瞬時加速だ。

この能力を応用する事で【A・I・C】や【沈む床】から強引に脱出する事が可能なのだ。

『この距離ならば、私の距離だっ！』

『やるな、だがっ！』

空裂が振り下ろされるが、セイバーは振り下ろされる紅椿のマニピュレータを掴み上げ、斬撃を無効化する。



だがそれは筈も予測していた。

『ラウラっ!』

『A・I・C』出力最大っ!』

ガクンつと紅椿毎セイバーがA・I・Cに捉われて、動きが止まる。

こちらもすでに出力は最大で展開し、『ヴォーダン・オージエ』によってブーストされている。

(こいつらっ、我武者羅だが迷いがねえっ!?)

『シャルロットっ!』

『任せてっ!』

瞬時加速で高速接近しつつ、パイルバンカーを構えるシャルロット。

『こんのおっ!』

一瞬セイバーの周囲の空間が歪み、刹那A・I・Cを振り払った。

A・I・Cによって拘束されていたセイバーだが全身からエネルギーを一瞬放出、それを加速に使うことで迫るシャルロットにアムフォルタスを向ける。

だが、下方から届くクローにアムフォルタスプラスマ収束ビーム砲が破碎され、ワイヤーに機体を引っ張られる。

『させないぞ、ミゲルっ！』

『アスランっ、かあっ！?』

クローの正体はアスランの駆るインフィニットジャスティスの「EEQ08 グラッ  
プルステインガー」だ。

当然体勢を崩したセイバー。そしてシャルロットはその間も加速して接近していた。

『やあっ！』

『ぐおおっ!?!』

炸裂音と共にもう片方のアムフォルタスも破碎され、セイバーの固有武装のほぼすべ

てが破壊された。

そしてセンサーが上方に機体を検知。

高速で接近してくるのは一夏の白式・雪羅。

『一夏あつ！』

箒が自身の武装である【空裂】を一夏へ投擲する。

すでに使用制限ロックが解除され、使用許諾状態アンロックであり、それをノールックで一夏は受け取る。

『うおおおつ！』

白の流星のごとく加速した白式は【空裂】をセイバーに向けて振り下ろす。

『……あー、くそ。認めてやるよ。てめえらの勝ちだ』

空裂が直撃する瞬間、ミシエルは確かにそう呟いた。

セイバーの胸部装甲が切り裂かれて「絶対防御」が発動。すでに単一仕様能力を過度に使用していたセイバーのエネルギーは一気に枯渇し、装甲は灰色に染まる。

そのまま、海面に落下していく。

その様子を息を切らしながら、一夏達は見ていた。

『……勝ったんだよな』

『ああ、私達の、勝ちだ』

白式に寄り添うように接近した紅椿の箒はそう一夏に告げる。

『一夏つ、腕の傷は大丈夫なのか？』

『ん、ああ。ISの保護機能なのかな、そこまで痛くないよ』

爆発によって負った左腕の裂傷はISの保護機能のおかげか、すでに止血されている。

念のため左腕を押さえつけながら、一夏が自分の周りの少女達に言った。

『皆。本当にありがとう。俺一人じゃ絶対に勝てなかった』

『ほんとよね、あーつつかれたわ』

『うん、シャワー浴びたいね』

『本来なら気を抜くなどいふべきなんだろうが……私も同じだ。一夏、後で医療用ナノマシンを注入してやる』

『うげえ、あれ痛いんだよお』

鈴、シャルロット、ラウラがそんな一夏を見て笑みを浮かべていた。

『一夏』

『アスランも……ありがとう』

『ああ。一夏、これからも彼女達と共に進むんだ。それが一人で歩んで道に迷ってばかりだった俺から言えることだよ』

『……はい』

アスランからの言葉に一夏は頷く。

すると機体のセンサーが声を拾った。

「おーい、降伏するからさー、だれか引き上げてくれよー」

海面に浮かび、セイバーが解除されたミシエルがアスランに向かって叫ぶ。

ISスーツが海水を吸ったためか彼女の身体のラインをよりくつきりと浮かび上がらせており、咄嗟に一夏は目線を逸らした。

「あつぷ。割と俺もきついんだってー。このままじゃおぼれちまうってー!」

それを苦笑してみていたアスランは一夏に告げる。

『ミシエルは俺が、君たちは船に戻って待機していてくれ』

アスランの言葉に一夏たちはうなずく。

---

一夏達がミシエル相手に勝利した所を、少し離れた場所で千冬は眺めていた。側で展開されているディスプレイに映る束が胸を撫で下ろしてから告げる。

『やったね』

『ああ。皆で掴んだ勝利と言った所だな。そしてあいつ等の覚悟、しつかりと見せてもらった。あんなに無理をしたのは減点だがな』

『もー、素直に喜べば良いのに、ちーちゃんは不器用だねえ』

『……少し羨ましくもあるんだよ、束』

千冬の言葉にえっと束が声を出した。

『私の強さは所詮一人だけで積み上げた強さだ。だがあいつ等はそれぞれが支えあう強さだ。私にはそれが無いからな』

『……それってひどくない？親友の束さんがいるのにー』

真顔で千冬の言葉を聞いていた束がぶーたれながら千冬に言う。

それにジト目で千冬は返す。

『友人ならまずは私に借りた5000円を返せ』

『なっ、ナンノコトカナ？』

あからさまにうろたえた東に続けて千冬が言う。

『現役時代に貸した5000円だ。確か食費だったか？ 忘れたとは言わさんぞ』

『……実はね、便利な言葉があるんだよちーちゃん。本当に申し訳ないって言葉がね。あつ、あつくん達のサポートがあるから、外れます、外れますっ！』

そう早口で告げてブツツとチャンネルが切れた。

『……全く、本当に頼りになる友人だよ、お前は』

そう千冬は呆れたよう笑った後、つぶやいた。



## PHASE 13 怨念の往く先

紅と黒の二色が高速で激突してその度に光の粒子が飛び散る。

ビームサーベル同士の間迫り合いが発生したのだ。

互いに互角の出力、戦闘の余波からすでに浸水が始まりだしている区画を照らす。

『うおおおおおおつ!!』

『ハああああアアつ!!』

先程からこの高速戦闘を続けている紅色は、真が駆る「デステイニーガンダム・ヴェステイージュ」だ。

そしてもう片方はMSTシステムで出現した黒色、「黒のデステイニー」。

デステイニーガンダム・ヴェステイージュの光の翼が煌々と同時に、黒のデステイニーのV.L.ユニットから「黒」が溢れる。光の翼に対をなすような瘴気にも見える闇の翼。

光の翼から得られる推力で押し切ろうとしたデステイニーガンダム・ヴェステイージュをその力で押し返す。

拮抗状態、しかしすぐに状況が動いた。

デステイニーガンダム・ヴエステイージが展開していたヴァジュラビームサーベルを格納したからだ。

当然、罅迫り合いの状態でビームサーベルの発振を停止すれば、相手側の斬撃は止まらずこちらを襲う。

だがそれが真の狙い。

振られるビームサーベルを握るマニピュレータを即座に掴み上げて、掌にある反逆の剣を起動させる。

通常のビームサーベルよりも強力な、クラレント・ビームサーベルで黒のデステイニーのマニピュレータを切り落とした。

ジュツと黒のデステイニーを構成する泥が蒸発する音がする。

かつてラウラが飲み込まれたVTシステムと戦った経験から、マニピュレータ部分を切り落としても内部のオータムには被害はない事は知っている。

だが黒のデステイニーも攻撃されるだけではなかった。

クラレントでマニピュレータを切り落とされると同時に左脚部のスラストスターを起動させた蹴りを叩き込んできたのだ。

密着状態からのカウンター、そのカウンターを空いている手で防御するがデステイ

ニーガンダム・ヴェステイージはVPS装甲ではないため装甲は砕け散り宙を舞う。

そして背部の高エネルギービーム砲を展開してこちらに射線に向けている。

発射にマニピュレータが必要なのか、トリガーを引くことなくデステイニーガンダム

ム・ヴェステイージに高出力ビームが発射された。

しかし、そのビームをデステイニーガンダム・ヴェステイージは弾き飛ばされた勢い

のままAMBCを駆使して避ける。

そして両機は一旦離れる形となった。

『く……っ！』

互いに数度の激突のせいで損傷している。

デステイニーガンダム・ヴェステイージは先の反撃によって腕部装甲と肩部の一部が破損している。

だが黒のデステイニーは破損個所が泥化した後に再構成することで損傷をなかったことにしていた。

その様子に内心舌打ちしつつ、真は思考を加速させていく。

(……純粋な戦闘速度と機体出力は互角、運命ノ翼を使えばこつちが有利。だけど向こうは損傷はすぐに修復されるし、オータムの事なんか考えてもないだろうからスタミナ無尽蔵、持久戦になったら圧倒的に不利。一気に決めるしかない。数ならこつちが有利だけど……)

『戦争ノ無い世界、議長なのでステイニープランで世界ハ変わるんだつ、邪魔ヲするナあつ！』

『……くそつ、本当に俺なのかよっ！』

思わず毒づいたのと同時にセンサーにとらえる背後の存在。

飛燕とインパルスマークII、簪と本音の存在だ。

高機動を続けるステイニーガンダム・ヴェステイージと黒のステイニーを追ってきたのだ。

(インパルスマークIIは問題ないけど、飛燕が……簪が予想以上に消耗している。VLユニットの加速がかなりの負担になったか……っ！)

先程レインとフォルテを撃墜したマニユーバによる負担で、先ほどから簪は肩で息を

していた。

V Lユニットを持つ飛燕に搭乗している以上、Gに対する耐性は通常のIS搭乗者よりも高い彼女であるが「運命ノ翼」による負担は初体験であり、それが予想以上に高負荷であったのだ。

(俺一人で……っ！)

プライベートチャンネルが開く。

その通信先はもちろん簪と本音であった。

『真、私達、も……』

『はい。飛鳥君、援護できるはずですよ』

いつものゆるさを微塵も感じない、凜とした彼女の表情。

おそらくこれが本当の本音なのだろうと、真は理解した。

確かに彼女の機体、インパルスマークIIのドラグーンならば、黒のデステイニーの機動力を削ぐ事ができる。

だが、あのデステイニーに感じるのは殺意だけだ。

過去の自分は追いつめられていたとはいえ殺意のみを相手に向けたことはなかったはずだが、どうやら調整が施されているようだ。

そんな相手に彼女達を向かわせるのはやはり気が引ける。

『簪、本音さん……でも』

『私は、大丈夫。だから真、指示して。そうすれば、動けるから』

少しでも呼吸を整えるためか深呼吸をしながら簪が真に告げる。

(……そうだ、今の俺には側に来てくれる仲間がいる。あの時の俺は周りを見る余裕すらなかったんだよな……)

一瞬瞳を閉じた真だったが、彼女達の意味を尊重して頷く。

『……分かったよ。ならば機のコンビネーションで決めるぞ、簪、本音っ！』

Vレユニットを広げ、紅い光の翼が周囲を照らす。

クラレントをビームライフルモードで射撃しつつ、デステイニーが黒のデステイニーへと向かう。

それを背後から飛燕がビームライフルで援護し、その後ろから飛び出したインパルスマークIIの背部ドラグーン〔フェイルノートビームクロー〕が射出された。

『こっちの準備はできてますっ！』

『本音っ、ドラグーンで牽制っ！』

真の指示に従い、ドラグーンが黒のデステイニーに向かって行く。

デステイニーガンダム・ヴェステイジーも同じタイミングで攻撃を仕掛ける。

同時攻撃、黒のデステイニーはこれにも反応を見せた。

フェイルノートを回避しつつ、ビームブーメラン〔フラッシュエッジII〕を展開して、ドラグーンを操るインパルスマークIIへ投擲する。

そして闇の翼を広げて、加速してインパルスマークIIを狙う。

『オれの邪魔ヲするなアっ!!』

今の本音は同時制御が出来ず、ドラグーンを操るには機体を停止していなければならぬ。

それを黒のデステイニーは見逃さなかったのだ。

だが、それは真達も当然把握している。

『させるかあっ!!』

『はあっ!!』

迫る黒のデステイニーへ背後から単一仕様能力を発動させたデステイニーガンダム・ヴェステイージュが追いつき蹴り飛ばす。

脚部装甲の一部が破損したが、今は一切合財無視を選択し、同様にフラッシュエッジを展開して黒のデステイニーに投擲する。

黒のデステイニーが投げたフラッシュエッジは飛燕がビームライフルで撃ち落してゐる。

デステイニーガンダム・ヴェステイージュが投擲したフラッシュエッジを展開したビームサーベルで切り落とした黒のデステイニー。



だが、真はフラッシュエッジを投擲した直後からすでに「テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔」を展開し、単一仕様能力も併用。

超高出力ビームが黒のデステイニーの背部Vユニットを正面から貫いた。

当然、黒のデステイニーは体勢を大きく崩す事になる。

その隙を逃す3人ではなかった。

『本音、使ってっ!』

飛燕がビームライフルを格納して、両マニピュレーターに展開した大型ビーム実体剣「バルムンク」を使用可能状態にして、インパルスマークIIへと放る。

それをしっかりとキャッチしてビーム刃が展開した事を確認した飛燕とインパルスマークIIの2機はスラスタ出力を全開にして加速する。

『行くよっ!』

『はいっ!』

2機の狙いは黒のデステイニーの両マニピュレーターだ。

飛燕がVレユニットによる加速から先行して右マニピュレータを切り落とす。

数瞬遅れて、インパルスマークIIが左を切り落とした。

2機はそのまま離脱し、そして——広がる紅い翼。

『うおおおおおっ!!』

デステイニーガンダム・ヴェステイージュは得物を構えず黒のデステイニーに突貫する。

単一仕様能力を使用した最大戦速。

黒のデステイニーに組み付いて最大戦速のまま区画の壁に叩き付ける。

今の黒のデステイニーは両マニピュレータを損失しており、組み付かれた状態では反撃のすべはなかった。

『VTシステムと同じならあつ!』

黒のデステイニーの胸部を一瞬だけクラレントで焼ききり、泥の様になった部分に機体出力を最大にしてマニピュレータを刺し込む。

瞬間、黒のデステイニーは狂乱した様に叫びだした。

『議長のでステイニープランで世界ハ変わるんだつ、何デ邪魔をオオオおつ!!』  
『言っても無駄かもしれないけど言つてやるつ! 平和は誰かが作り出すもんじやないつ  
! 皆で作り上げていく事なんだよつ! これ以上俺の声で叫ぶなあつ!』

ズブズブとマニピュレータが沈み込んで、中にいる者に手が届いた。

しっかりと握りこんで無理矢理引つ張り出す。

暴れる黒のデステイニーの抵抗で、真は右脛の上を切り裂かれるがもはや止まらな  
い。

泥の中から真が引つ張り出したのはオータムであった。

すでに意識は無くダランと首を垂れているが、呼吸はしっかりとしているようで胸は  
上下していた。

『ガッ、マゆ、ステ……ガガ……っ!』

ガクガクと黒のデステイニーが痙攣し、機体から泥が溢れて崩れ落ちて行く。

そのままでも行動不能になるのは目に見える。

だが、真はオータムを抱えたまま右マニピュレータにアロンダイトVer2を展開してビーム刃を起動させる。

『……俺はもう昔の俺じゃない。支えてくれる人がいる、仲間がいる。ケリは俺がつけるっ！』

上段から振り下ろされた一撃は黒のデステイニーを真つ二つに切り裂いた。

そして機体全てが泥になり、ボロボロになったリジエネレイトへと戻り、エネルギー切れからか待機形態へと変わった。

『……ふう』

『お疲れ様、真』

デステイニーに飛燕が接近して、簪が告げる。

『ああ、簪も。無理させて悪いな』

『ちよつとキツいけど大丈夫だよ。真、目は大丈夫？』

『ああ。目を直接切ったわけじゃないから……つと、本音さんも、ありがとう』

右目を止血しながら後方にいるインパルスマークIIを駆る本音に感謝の言葉を告げて振り返る。

するとどういふ訳か少し不貞腐れたような本音の姿が目に入った。

『……本音って呼んでくれないんだ』

『え？』

『ううん、なんでもないよー。お疲れ様、あすあす、かんちゃん。私がああ2人を回収しておくねー』

いつもの調子に戻った本音は撃墜されて意識を失っているレインとフォルテの元に降下して行く。

真からは彼女の表情は見えない。

(……駄目なのに、駄目って分かってるのになあ……)

レインとフォルテを回収した彼女はチラリと上にいる真と自身の主である簪に視線を向ける。

2人は戦況を海上にいる束に連絡しているようだ。

(……真君)

そう羨ましそうに主である簪を見つめた時だった。

——海洋プラント全体に振動が奔った。

MSTシステムが発動したのと同刻——

迫るビームをあざ笑いながらAMBACで回避するロキプロヴィデンス。すると突如としてディスプレイが展開された。

ライリーは立ち上がったディスプレイを一瞥した後、嘲笑を浮かべた。

(……ほお、まさか起動するとは思わなかった。存外彼女達も役に立ったか、まあ、もと

よりあまり期待はしていないが)

それに気づいたラキーナは言葉を投げる。

『何を笑っているんだっ!』

『フッフ、君にはあまり関係……いや、かつての君を倒した、シン・アスカが今、飛鳥真と対峙しているのだよ』

『真とっ!? どういうことっ!?!』

『……今起動したのはV Tシステムの下地になったM S Tシステムと言ってね、C・E.で戦乱を駆け抜けていたシン・アスカを再現するシステムなのだよ。歌姫、ラクス・クラインはそれほどまでに彼を欲していたという事さ、愛など粘膜が作り出す幻想に過ぎないと言うのにね』

私には理解できないよと告げたライリーに、楯無の「霧纏の淑女」のランスに装備されているガトリングガンが放たれ、弾丸をA M B A Cで回避しながら続ける。

『ただ再現できたはずなのだがI Sに搭載しても起動すら出来ない失敗作でね。必要な

要素は集めてあるはずなのに、結局不明なまま放置されていた代物さ。スコールやオータム達のI Sを建造した際にシステムを保険程度に搭載していたが……こうなるとは思わなかったよ』

ストライクがビームライフルで狙うが、瞬時に展開されたドラグーン10基が彼女を狙う。

だが、ストライクは以前とは違う。

『この程度ならばっ！』

瞬間的に加速すると同時に、ストライクはマドカによって遠隔操作され、精密なAMBCでビームを回避した。

『……別の誰かの感覚？ならばこれならどうだね？』

瞬時に5基のドラグーンが展開され、それぞれが別角度からストライクに向かってビームを降らせる。



しかし、そのビームは彼女に届く前に空中に舞っている「水」によって減退し、消滅する。

『させないわよっ！』

楯無の【霧纏の淑女】のアクア・ヴェールだ。

高機動を続けながら、彼女は自機とストライクの周囲にヴェールを展開している。

これによりある程度ならばドラグーンを無視する事ができる。

『ふっ！』

瞬時加速による急機動でロキプロヴィデンスはビームサーベルを展開しながら接近。同時にビームスパイクを起動したドラグーン3機が同時に迫ってくる。

『マドカっ、前が出るよっ！』

『分かっているっ！』

ストライクは回避ではなく逆にフラガラツハを展開して加速。ロキプロヴィデンスと鏖迫り合いの形になるが、それは一瞬。相手に組み付くのが狙いであった。

『ぬう……っ！』

『これでえっ！』

I・W・S・P・パツクから得られる推力で、強引にロキプロヴィデンスと「位置を入れ替える」

その直後、迫っていたスパイクドラグーンは機動が鈍り、消失した。消失したドラグーンは機体の背部ユニットに戻っている。

『この距離なら、いくらドラグーンを使ってもおっ！』

ロキプロヴィデンスの肩部にフラガラツハを突き立てる。

ビーム刃が存在しているため、PS装甲を貫通してダメージを与える事が可能だ。

『ぐうっ……だが甘いつ!!』

スパイクドラグーンとして展開されたドラグーン5基が密着状態であるライリー毎  
ストライクを襲う。

『何っ!?!』

『ラキーナ離れろっ!』

『離さんよっ!!』

ロキプロヴィデンスの肩部に食い込んだままのフラガラツハを手放して離脱を図  
ろうとしたが、自機体の負傷すら厭わずにスパイクドラグーンを突撃させた。

2機のビームスパイクがストライクの背部ストライカーパック〔I・W・S・P〕の  
主要ウイングとスラスタ部分破壊して爆発が起こる。

凄まじい勢いでエネルギーが減り、残り5割程度まで減少する。

しかし当然ロキプロヴィデンスもただではすまない。

ストライク毎スパイクドラグーンを突撃させた影響で三基のドラグーンを喪失し、腰  
部装甲と背部ユニットに損傷が見られる。

だが、ストライクが負ったダメージよりは軽傷に見えた。

『ラキーナちゃんっ！』

すかさず楯無の霧纏の淑女がランスでライリーに刺突を繰り返す。

それをストライクを弾き飛ばし、その衝撃によって離脱。

離脱すると同時に楯無に向かってドラグーンを射出する。

『くうっ！』

アクアヴェールによる防御とAMBACによってビーム回避しつつ、損傷したストライクへ寄り添う。

『ラキーナちゃん、ストライクの損傷はっ!?!』

『……っ、I. W. S. P. へのダメージが深刻です、くそっ!』

『……他のシルエットは?』

『……駄目です、I. W. S. P. 程の総合力を持ったストライカーは他には……っ!』

ギリツと歯軋りしたラキーナであったが、次の瞬間、まるで天啓の様な秘策を思いついた。

自身の考えが間違ひなければ損傷したI・W・S・P.に代わる、戦力になるはずだ。

『楯無さん、最大出力のアクアヴェールでの援護お願いしますっ！』

『えっ、ええっ！』

ラキーナの指示に従って楯無はアクアヴェールを展開させる。

それに合わせて、ディスプレイを展開したストライクは装着しているI・W・S・P.を量子格納する。

マニピュレータを一時格納し、凄まじい速度でディスプレイをタイピングして行く。それに合わせて次々にディスプレイが展開し、消えて行く。

『I・W・S・P.パックをメンテナンスモードで確認、損傷率確認57%っ、破損ウィング・スラスタ共ニエールストライカーより外部接続、クリアっ！武装はソード、ラ

ンチャーから補填、バランサー調整っ、オールクリアっ!」

タイピングが完了すると同時に、先程格納したI. W. S. P. の他に3つの背部ユニットのパーツが展開される。

I. W. S. P. パックの背部スラストターが一部外されており、そこにエールストライカーの大型スラストユニットが組み込まれる。

同じように主要ウイング部分もエールストライカーが補填しており、右肩にはランチャーストライカーパックの肩部バルカン砲、左肩にはソードストライカーパックの「ビームブーメラン マイダスメツサー」が装備されている。

そして両マニピュレーターにも「シユベルトゲベール ビーム大型実体剣」と「超高インパルス砲 アグニ」を装備している。

ラキーナが行ったのは損傷した「I. W. S. P.」に現在使える3つのストライカーを【組み合わせる】行為。

I. W. S. P. を素体にしての、今のストライク全ての力の結晶【完全形態】  
——名づけるならば【パーフェクトストライカー】

（まさか、彼女は今の一瞬でISのプログラムを書き換えたというのっ!?!いや、ソフトだ

けじゃない、ハードまで一瞬で調整を……何て子なのっ!?)

『楯無さん、1つお願いがあります』

『……ええ、分かったわ』

楯無に作戦を伝えたラキーナは、アクアヴェールを突き破ってシユベルトゲベール  
ビーム大型実体剣を構え、ライリーに向かって行く。

『ほう、この状況で新しい装備かね、だがそれでも届かないっ!』

『いや、届かせて見せるっ!その為の力だからあっ!』

展開されたドラグーンは今ロキプロヴィデンスが使える12基全てだ。

半数がビーム砲台、もう半数がビームスパイクとして瞬時展開され、ストライクを  
襲った。

ビームがアグニを貫き、ビームスパイクがストライクに着弾する。

『今だ、楯無っ!』

ラキーナが叫んだ瞬間、ストライクが「爆発」に包み込まれた。その爆発は清き<sup>クリア</sup>激情<sup>パッション</sup>、発生させたのは当然楯無だ。

『何っ!?!』

何故、味方をと驚愕したライリーだったが、それは一瞬。

何故なら操作していたドラグーンの半数、スパイクドラグーンとして操っていた6基の反応が消えたからだ。

ライリーが迎撃をしてくる事を読んでいたラキーナは、自分毎ドラグーンを破壊させたのだ。

パーフェクトストライカー状態ならば爆破を受けても、その装備の数からダメージを各部位に分散させる事が可能であった。

そして爆発を突っ切ってくるストライク。

ダメージはあるものの、機動は死んではない。

『ラキーナ、決めなさいっ!!』



ビーム砲台としての機能を残しているドラグーン6基をガトリングガンで撃墜しながら、楯無が叫ぶ。

『このまま決めろ、ラキーナっ!!』

ストライクと同期してくれているマドカが叫ぶ。

『ラキーっ!!』

ラキーナを信じて戦いを眺めていたフレイが叫ぶ。  
それだけでラキーナの身体に力がみなぎった。

『はああああああっ!!』

『まだだっ、まだ終わらんっ!』

ビームサーベルを起動して、シュベルトゲバールのビーム発信装置部分を狙うが遅

かった。

サーベルごと左マニピュレータを破壊してシユベルトゲベールはロキプロヴィデンスを切り裂いた。

『ぐうつ?!?』

胸部装甲部分に一文字の傷跡を刻み込む。

そして「絶対防御」が発動、これによってロキプロヴィデンスのエネルギーはほぼ0の状態となった。

『…………私達の、勝ち…………だっ!』

「…………そのようだね」

息を切らせながら、ライリーに告げる。

この時点で敗北は確定的。

だというのに、ライリーは何故か笑みを浮かべていた。

『……殺しはしない、アナタには何故こんな事をしたのか話して貰う』

「何故？ククク……ハハハハハッ！」

ラキーナの言葉にライリーはまるで狂ったように笑い出す。

『何がおかしいんだっ！』

「ハハハ……いいだろう、教えてあげよう。私の目的？それは君を殺す事だ、それだけが出来ればいい」

『私を……っ!?そんな、そんな事の為にっ！これだけの事をアナタはっ!?』

「私はこの世界では何も無い虚ろな存在。この身に残ったのは憎悪。世界、ニユートロ  
ンジャマー、キャンセラー？そんなモノはどうでもいい。私という存在、この魂を生み  
出す事となった元凶、君を殺す事が出来ればどうでもいいのだよっ！」

笑みを浮かべながらライリーはロキプロヴィデンスのコンソールを呼び出してディ  
スプレイをタッチした。

最後の力を振り絞ったかのような様な、ラキーナが反応できない速度であった。

——瞬間、海洋プラント全体に振動が走った。

同時に浸水が始まる。

『なっ、何をっ!?!』

「フ、フフフ……この海洋プラントには情報漏えいを防ぐために自爆装置が備え付けられていてね。今、それを起動させた」

『自爆装置っ!?!』

「ハハハ、かつてのサイクロプスとはいかないが、この海洋プラント全てを消滅させるには十分な代物、そしてプラントごとの連結も解除されそれぞれの区画が水没しているっ  
!」

『何ですって!?!』

機体のハイパーセンサーを使って楯無が周囲の様子を探る。

確かにこの区画への侵入に使った移動区画が爆破で吹き飛び、そこから浸水が始まっていた。

『くっ、脱出しないと……っ!』

『……逃がしはしない、キラ・ヤマトおっ!』

僅かに残ったエネルギー全てを使ってビームサーベルを発振させたロキプロヴィデンス。

だが——次の瞬間、ライリーの胸をIS用ナイフが貫いていた。

彼女の身体を貫いたのはストライクの「装甲コンバットナイフ アーマーシュナイダー」

ビームサーベルを発振させた時点で機体のエネルギーは尽きていた。

その為、絶対防御も発動はしなかった。

「……………」

血を吐き出して、ライリーはラキーナに抱きつくように倒れこむ。

致命傷を負ってもまだラキーナの首に手を伸ばす。

だが、それもすぐに力なく手が離れてとぎれた。

『……………何でそこまでアナタは一人だったんだ。アナタにだって側にいてくれる人はいたはずなのに』

彼女の苦悩は分からないでもない、もしかしたら自分もそうだったかもしれないからだ。

だが、道を間違え迷った自分にさえ、手を差し伸べてくれる人間はいた。ライリーにもそういった人間はいたはずなのに、彼女は拒絶したのだろう。すでに意識は無いライリーにラキーナは告げる。

『……アナタは寂しい人だ。私は、アナタとは、違うっ』

そう言つてライリーの遺体を抱えてストライクを浮上させ、海上の束達に連絡を入れる。

---

暗い闇の中、ライリー、いやクルーゼは目を覚ました。

その姿はかつての自分、ザフトの白服姿であったが仮面はつけていなかった。

「……私は、また負けたのだな」

「……もういいでしょう、ラウ」

そんな彼に語りかける声があった。

振り返ると、ザフトの赤服、自分と同じ境遇の少年。

【レイ・ザ・バレル】がそこにいた。

「レイか……」

「ラウ、もう安らかに眠ってもいいはずだ。俺はずっと貴方のそばにいます」

レイがクルーゼの手を取る。

その時クルーゼは気づいた。

自分が欲したのは、自身の手を握ってくれる存在だと。

あまりに気づくのが遅くてふと、笑みを浮かべるほどに。

「……レイ、君は私の側にいてくれるんだな」

「はい、貴方は俺の兄であり、父であり、家族ですから」

「……そうか、ありがとう。レイ」

そう言つてクルーゼは瞳を閉じる。  
その表情はとても安らかなものであつた。



## Epilogue 繋いだ手

崩壊し自沈していく海洋プラントから脱出した一行はブレイク号を用いて海域を離れた。

海洋プラントは海底深くで爆発したが、幸いこれによる影響は無く、隠ぺい工作もエクスカリバー事件よりは容易であった。

元々が廃棄された計画の残滓だ、更識の全権を使うことでもみ消した。

ライリーの遺体については更識家が処理を行う事となった。

蔵人曰く、フランス政府に極秘裏に接触して色々と消してもらおうとの事だ。

ライリーの一味として捉えたミシエル・ライマンは完全に降伏し、自身が持っている情報をすべて提供している。

彼女によるとライリーを後方で支えていた者達がいるようだが、そのやり取りは全て彼女個人のみであったため、ミシエルは詳しいことは知らないとの事だ。

ライリーが使用していたISであるロキプロヴィデンスから情報が得られるかもしれないとの事で、ISは束陣営が引き取り解析を進めている。

取り急ぎ解析されたのは【Mobile Suit Trace System】に

ついでだ。

V T S の原型であり、M T S を解析して現在のV T システムが作成されたとの事だ。

解析といっても中身のデータには手を出せずに、トレースシステム部分を参考にしたレベルのものだが、これは生前のラクスが製作したものであるというのは間違いないと東が確認している。

さらに詳しい情報について何か判明した際には蔵人にも連絡をよこすとの事だ。

ミシエルについては協力的な態度から、I S 学園で監視付きの軟禁状態に置くことが決まった。

何でも彼女の立場を利用して用務員を増員しようと千冬が策しているらしい。

また今回の事件で再び拘束されたスコール達4名については、傷の手当てを最小限にしてブレイク号で再び拘束することとなった。

使用していたセイバーガンダムを含めた5基のI S については機体自体は解体処分となり、コアは東預かりとなり何かしらの情報を得たのちに破壊する事になっている。

そして事情を知る人間たちから「クルーゼ事件」と呼ばれる一連の騒動から2日が経った。

学園は通常運営を取り戻しており、その中にはカナードの姿も見られた。

教職についてだが、なんだかんだ言つて気にいつているのではないかというのが、束の感想である。

そんな彼だが、業務が終わるとすぐにブレイク号へ文字通り飛んで帰つていつている姿を生徒達は目撃している。

その理由は――

「おかえりなさい、カナード様」

クロエの私室、ベッドの上で上半身だけを起こしたクロエがカナードを出迎える。

ジャケットを脱いで、すぐ近くにあつた椅子に腰かける。

保健室で意識を回復させたクロエはブレイク号に移され、治療を継続していた。

協力者という立場とは言え、学園側にも通常業務などの事情はあるためそれも仕方ないだろう。

「傷の具合はどうだ？」

「医療用ナノマシンは注射してもらいましたが、まだかかるみたいです。右腕もリハビリに少し時間がかかりそうです」

「……そうか」

少しだけ声のトーンが落ちた彼の声。

自分を心配してくれている彼に感謝の気持ちが増え溢れてくる。

少しして、カナードが椅子を彼女の元まで移動させてクロエに尋ねる。

「……クロエ、左手は動かせるか？」

「え、はい。特に痛みもないので……」

「なら、手を出してくれ」

不思議に思いつつも、彼に言われた通り左腕を出すクロエ。

出された手をカナードはそつと握りしめた。

「……あの、カナード様？」

数分の沈黙に耐え切れなくなったクロエが、カナードに言葉をかける

正直心臓は早鐘を打っており、明らかに顔は熱を帯びているだろう。

彼にこうして触れられるのはとてもうれしいのだが。

「……一度しか言わない」

「えっ？」

「俺はもつと強くなる。自分にとつて大切な……愛したモノを守るために。だから今後はあんな無茶なことはしないでくれ」

そうぎゅつと彼女の手を握り締めてカナードが告げる。

先の事件で、頼れる友人<sup>セリア</sup>から教えてもらった自分自身の正直な気持ちを伝えるという事。

それを今、彼は実行したのだ。

さすがの彼も恥ずかしそうに言葉にした後、視線を外してしまったが。

「っ……っ！」

不意打ちすぎる彼の言葉にクロエは息をのんだ。

溢れてくる歓喜の感情と涙。

今まで直接的にそんな言葉をカナードから聞いたことはなかった。

「泣いているのか？」

少し驚いたようにカナードが尋ねる。

「嬉し涙ですつ、カナード様……っ！」

「……そうか、ありがとう」

少しだけ力を入れて彼女の手を握る。

それにクロエも同じように彼の手を握り返した。

---

IS学園 フレイの部屋

「あの一、フレイさん。何を怒ってるんでしょうか？」

「ふーんだ」

制服姿のラキーナがベッドで横になりながらこちらを睨んでいるフレイに尋ねる。

フレイについてだが彼女は完全な被害者として扱われているため、代表候補生の立場に変化はない。

これからもフランスの代表候補生としてIS学園に所属することとなっている。何故フレイの部屋にラキーナがいるのか。

それは彼女に呼び出されたからだ。

本来ならば事件当日にすぐに話をしたかったのだが、一時は洗脳状態にあつたため精密検査をフレイは受けていたのだ。

その為昨日深夜までは半ば拘束されていたに等しかった。

その検査がようやく終わり、学生生活に戻れたのが今日だったのだ。

「最初からあんた知ってたんでしょー、私のことー。教えてくれてもいいのにさー」

「え、そつ、それとなくだけど聞いたじゃないか。それはひどいよ……」

「あつ、嘘、嘘よ、冗談よつ！そんなにイジけないでよつ！」

シヨボンと頭を垂れたラキーナに慌ててフレイは立ち上がりながら告げる。

それに弱々しく笑みを浮かべたラキーナに、ニツコリとほほ笑んでフレイが続ける。

何故、フレイの部屋にラキーナがいるのか。

それは彼女がラキーナを呼び出したからだ。

ある言葉を彼女に伝えるために――

「ありがとう、ラキーナ」

それは純粹な感謝の気持ち。

「あの時も、そして今回も。アナタは私を助けてくれた。それだけで私は救われた」

「……フレイ。うん、私からもありがとう、また君に会えて、本当に良かった」

かつて救えなかった女性を今回は自らの手で守り抜くことができた。

目に涙をためながら、ラキーナはフレイの言葉に返した。

それをフレイは苦笑して返す。

「あーんたホント泣き虫ねえ、あの時はカッコよかったのに」

「ごっつ、ごめん。止まらなくて……」



「ま、そっちのほうがらしくていいけどね」

「泣いているほうが私らしいって……フレイの中での私って一体……」

涙をぬぐいつつ、ラキーナも苦笑している。

「それじゃ改めまして、よろしくね、ラキ」

「うん、こちらこそ。よろしくね、フレイ」

差し出された手をしっかりと握り返したラキーナ。

かつての禍根などそこには存在していなかった。

---

### IS学園 学生寮付近

食堂での夕食を終えた真と簪は食後の散歩がてら校内を歩いていた。

通常運営に戻った為か、部活動に勤しむ生徒の姿も見られた。

ちなみに、真も簪も部活には所属してはいない。

そもそもが2人とも日出工業に所属しているため、その時間もあまりとれないのだ

が。

「そういえば、真」

「ん？」

「目の傷、もう治ったの？」

海洋プラントで黒のデステイニーとの戦闘の際に負傷した目の傷。

当初、真はガーゼをつけていたが、すでに彼は目のガーゼを取っていた。

2日しか経っていないが、傷はほぼ消えている。

「ああ。ほら、あの後負傷者は医療用ナノマシン注射されたら。あれのおかげかな」

事件が収束した後、真を含む一夏やカナード、負傷者達には医療用のナノマシン注射が行われていた。

真の他には一夏の腕の傷もすでに完治している。カナードについてはまだ包帯を外せてはいないが、快方に向かっている。

「そういえばお姉ちゃんが嬉々として注射してたね……真、こっち向いて」  
「ん、おおっ？」

振り返った真の顔を簪が手で抑えてじっと見つめる。  
いきなりの行為だったため、真は自分の顔が赤くなっていくのを感じた。

「……うん、大丈夫。確かに傷はないね」

「あつ、ああ……ありがとう」

簪が手を放して、笑みを浮かべた。

「真、部屋に行こう？」

「ああ、ちよつとゆつくりしたいしな」

「うん、ゆつくりライダー見よう？」

それはゆつくりできるのかなあと思いながらも、先に歩き出した簪の後に付いていく。

その瞬間、彼の意識の中で紅い種——【S・E・E・D】がはじけ飛んだ。

「っ……っ!？」

突如として発動した自身の【S・E・E・D】

去年の夏ごろより意識して発動できる様にはなっていたが、興奮したり集中もしていない状態でいきなり発動したことはなかった。

（何でいきなり……っ!?)

発動にもなつて広がる視野と感覚に頭を振る。

するとすぐに広がった視野と感覚が通常の状態に戻っていくのを感じた。

「……何なんだよ」

先に歩いている簪には聞こえない声量で、自身の身に起こったことに疑問が浮かぶ。時間にして僅か数秒の出来事であったが、引っ掛かりを感じる。

「……真？」

足が止まっていたためか、簪が振り向いて真に声をかける。

「ん、何でもないよ。そういえば、クローズマグマナツクル買ったんだよ、あとで開けようぜ」

「本当っ!? うんっ! 楽しみだねっ!」

「ああ、負ける気がしねえっ!」

特撮の話で誤魔化して彼女の手をとりそう告げた真は再び歩き出す。

彼女の温かな体温を感じただけ歩くのが早くなる。

真の手を簪も握り返していた。

真はこの時、後でカナード達に相談すればいいと軽く考えていた。

しかしそれが「変化」の予兆であることを知るのはまだ先の事であった。

## INTERMISSION②

## PHASE I チョコ濡れのバレンタイン①

2月10日 学生寮 自室

『2月10日、夕方のニュースの時間です。フランスのライアード社は同社において特許を取得していた先進的な再生医療技術を各国医療機関へ提供することを正式に決定しました。ライアード社CEOのグリーゼ氏はインタビューに対し、医療の未来は明るく、人類はさらなるステップに進むだろうと回答しました。提供された技術については、人体の新陳代謝を利用した再生医療であり……』

「……ああ、もうバレンタインの季節かあ」

授業とトレーニングが終わって自室でニュースを眺めていた真が呟く。

非常にローテンションであり、目はどこか達観しているようにも見えた。

「……バレンタインなんて消えればいいのに」

C・E. のプラントでそんな発言をしたら間違いなく私刑になるであろう発言をして真はベッドに倒れこむ。

C・E. ではバレンタインデーは悲劇の象徴だからだ。

地球連合の一部過激派が農業プラント「ユニウス7」に核攻撃を行い、住民24万3721人が死亡した凄惨な事件が起こったからだ。

これについては連合過激派「ブルークコスモス」が戦犯と言われているが、当時の地球連合はプラントの独立を認めておらずプラントは地球連合の工場として扱われていたという話もある。

そのため、地球連合からすればプラントを不法占拠されていたに等しい状況にあった。

閑話休題。

しかしこの世界に生まれ、すでに16年。

何度も経験したいわゆる普通のバレンタイン。

真の認識はすでに普通のバレンタインに変わっていた。

「……」

無言で携帯を操作して、ある人物に連絡をつける。  
数度のコール音の後、返事が返ってくる。

『もしもし、五反田ですが』

「弾、助けてくれえええっ！」

真が半ばヤケクソ気味に、相手である友人、五反田弾に叫ぶ。

『耳がー！いきなり、どうしたっ!?!』

「……バレンタイン」

真が発した一言で、弾はああつと理解したようなため息をついた。

『あー、うん。がんばれ!』

「お前ええ!!」



相手から帰ってきた投げやりな回答に真は声を荒げた。

何故この2人がバレンタインの話題でこんな話をしているのか。

それは2人の友人である一夏の中学時代の行動に起因している。

一夏は所謂イケメンと言われるタイプであり、その性格もまっすぐで優しい。

そのため中学では女子から絶大な人気を集めていた。

当然、バレンタインにはそんな彼を射止めようと女子たちは躍起になって、彼にチョコを送った。

ただその朴念神ぶりのせいで、そのすべてを「義理チョコ」として一夏は考えていた。加えて感謝の言葉でそれを返すのだから始末が悪い。

「頼む、真っ、五反田っ！一夏のフォローを頼むっ！私はアイツがそのうち背中から刺されないか心配で心配で……っ！」

中学1年のバレンタイン前日、彼の姉である千冬に土下座でお願いされた事を詳細に覚えており、以来真と弾が彼のフォローをしていたのだ。

真や弾もそこそこの人気があったのだが、一夏のフォローに徹底していた為に親しい友人や家族からのチョコを除いて殆ど貰うことはなかったという悲しい出来事もあった。

『だって俺I S学園の生徒じゃねーしなあ』

「……バレンタイン1日だけ、留学生みたいなことできないのかな」

『そんな無茶苦茶な』

電話越しに弾が真の突拍子のない無茶苦茶な意見に突っ込みを入れる。

「ぐううう、俺だけでアイツのフォローするのなあ……」

『助けたいのは山々だけどなあ……まあ愚痴ぐらいは聞くよ』

「いいよなあ……お前は虚さんと2人で遊びに行ったりすんだらあ？」

『っ、なっ、何の事かなあ？』

「……悪い、適当に言っただけなんだけどそこまでバレバレだとなんかこっちが恥ずかしくなる」

『うるせー！』

弾がゴホンと咳払いで話を切り替える。

『んで、愚痴はもういいのか？』

「……ああ、少しすつきりしたよ、ありがとな弾」

『水臭えよ、お前と俺の仲だろ、真』

「そうだな」

苦笑しながら真は弾に感謝を伝える。

『おう、んじゃ、切るぜ？』

「ああ、ありがと。できるだけ頑張る」

『おう』

弾の返事後、通話が切れる。

脱力したように横になる。

「やるしかないよなあ」

天井を見上げながら、真は一旦瞳を閉じる。

不貞寝に近いが今は意識を手放したかったのだ。

しかし——その瞬間、真の意識の中で紅き種、【S. E. E. D.】が弾け飛んだ。

「っ!?!」

不意に鋭敏になった感覚に飛び起きる。

「……くそ、またかよ」

そう呟いて、目を閉じ深呼吸を数度行う。

少しして鋭敏になった感覚が通常状態に戻っていくのを感じる。

「……よし、戻った」

立ち上がった真は自分の机の上に置かれているノートを開いて、日付を書き込む。クルーズ事件の後、突如生身で発動するようになった「S. E. E. D.」について、カナードや東達にはもちろん相談済みだ。

だが検査を受けても真はいたって健康体であり、身体には異常も見られなかった。

そもそも「S. E. E. D.」自体が詳細な事が分かっていない能力であり、流石の束もお手上げの状態である。

その為、現在は経過観察として発動した日時を記録し、不調が起こった際はすぐに知らせる事を暫定の対策としていた。

「……くそ、本当何だよ。パレンティンだけで気が重いつてのに」

メモしたノートを放り、再度ベッドに倒れこむ。

そして今度こそ不貞寝を決め込むのだった。

---

同時刻 学生寮 簪と本音の部屋

「……」

自分のベッドに腰かけながら、この部屋の主の一人、本音は真剣に手に持った本を読んでいた。

タイトルは「謎の食通直伝、バレンタインお菓子特集〜駆けろ、愛のトロロンベ〜」だ。金髪でゴーグルを掛けた男性シエフがエプロン姿でポウルを抱えた何とも奇妙な表紙である。

彼女の机の上には今読んでいる本と同様のお菓子の指南書が3冊置かれている。

これは彼女の姉である虚がバレンタイン用に用意していた指南書から数点拝借したものだ。

「……私何してるんだろう」

そう呟いて読んでいた指南書を一旦閉じてベッドに放り、自分も倒れこむ。目を閉じると、その悩みの原因が浮かんでくる。

飛鳥真君。

彼の顔が頭から離れない。

最初は、何て目をしているんだろうと純粹にそう思った。

更識に連なる、布仏の人間としてそれなりの人間は見てきた。

だが彼の眼は今まであつてきた人間とは違つた。

一見キツく見えるその目は友人たちを優しく見つめていた。

まるで決して零れ落とさないよう包み込むように。

そして彼は自身では救う事の出来なかつた主、更識簪の心を救つてくれた。

それから急激に接近して、両想いになつた2人を本音は心から祝福していた。

彼がC・E・という世界で戦い続けてきた戦士であり、実年齢は自分たちよりも1周

り以上も年上であることには驚いた。

だがそれ以降も対等の友人として付き合つてきていた。

そのはずだった。

先のクルーゼ事件、海洋プラントでの戦いで彼と共に戦い何度も窮地を救つてもらつた。

その際に彼が自分の名を呼んでくれた時は本当にうれしかつた。

所謂吊り橋効果なのかもしれないし、これが「恋」と呼べるかは分からない。

だが、彼の事を考えると胸の奥が締め付けられるように切なくなるのだ。

「彼は簪様の恋人なのに……私はどうしたいんだろう」

そう本音は瞳を閉じたまま呟いた。

そして時間は流れて――

バレンタイン当日 早朝 I S 学園職員室

「……………なんだこれは」

出勤したカナードがとある場所を見て呟いた。

視線の先は職員室のカナードの机の上に築かれた包みの山。

一つ一つは小さいが、色とりどりのその包みは一種の芸術のようだ。

手に取って確認してみると、どうやら中身は菓子のようなのだ。

(……………なるほど、今日はバレンタインか)

包みを再び、机の上に戻して状況を理解したカナードは一人うなづく。



「大変ですね、カナード先生」

「……山田教諭」

「おはようございます、すごい量ですね、これ」

「おはようございます。正直俺にこれを渡すのは物好きもいところだと思いますが……織斑一夏や真ならば分かりますが」

苦笑しながら机の上の包みの整理を開始する。

「そんなもの好きがここにも一人いたらどうします？」

そういつて真耶は手に持ったカバンから包みを取り出してカナードに手渡した。

可愛らしい緑の水玉模様の包装紙と水色のリボン。恐らくは手作りのものであることは想像できた。

「いつもお世話になってるお返しです」

「……どうも」

むず痒そうな表情をカナードは浮かべた。

「もしかして迷惑でしたか……？」

少々不安げな真耶が尋ねるが、それに首を横に振ってこたえる。

「いや、こういういったものを受け取ったことがあまりなくて……開けてもいいですか？」

「はい」

包みを丁寧に開くと、その中には可愛らしい動物を象ったクッキーが入っていた。

バターの香ばしくも甘い香りが広がる。

それだけでこのクッキーが相当手を込んで作られたものだと思わせるのは容易かった。

「一つ頂きます」

「どうぞ、うまくできてるとは思うんですけど……」

少し不安そうな顔で真耶が呟く。

ウサギ型のクッキーを手に取り、一口かじる。

程よい甘さと香ばしいバターの香り。

あまりこのような菓子を食べたことのないカナードでも、十分わかるほどに美味であった。

残りもそのまま口に含んで咀嚼し、不安そうな表情でこちらを見ていた真耶に言う。

「ありがとうございます。とても美味しいクッキーでした」

「いえ、お口に合って良かったです」

そう笑顔で真耶は返した。

なお、そのやり取りを一部の女性教員は羨ましそうに眺めていたという。

ブレイク号 格納庫

ディスプレイを高速でタイピングしながら、ブレイク号の格納庫でラキーナは目の前

のメンテナンスベッドに置かれているフリーダムストライカーに視線を移した。

以前フレイとの模擬戦によって破壊されたフリーダムストライカーの製作は順調に進んでいた。

製作段階からラキーナに合わせたセッティングを行っている為、完成すれば以前のものよりも扱いやすくなるはずである。

座りながら作業をしている彼女の右隣に置かれている可愛らしい包み。

すでにあげられており、その中身を一つ取り出して口に放る。

それはチョコレートであった。

「んー、疲れた頭に甘いものはいいなあ。フレイには感謝しないと」

「ふふ、もうわだかまりも無いって感じだねー。まだ好きなんでしょ？彼女のこと」

「えっ、ええっ!？」

「ほーらー。で、どうなの？好きなのー？」

「そっ、それは……あつ、はっ、話はがらつとかわるんですけど、朝、職員室目指して行く生徒たちを見ましたよ。多分兄さん目当てかなと」

ニヤニヤと笑う束の言葉に少しどもりながらも話題を変えるために言う。

「まー、不愛想だけど顔は十分整ってるからねえ、カナ君。おまけに高身長で唯一の男性教員、女子高生なら惚れてもおかしくないんじゃない？」

「ですかねえ……」

「でもカナ君はくーちゃん一筋だしね。他の女にうつつを抜かす事なんてないから母親としては心配はしとらんよ、ほっほっほ」

同じようにフリーダムストライカーへの設定反映を行っている束がなぜか途中から年寄り口調になって言う。

それに笑みで答えるラキーナであったが、ふと2人の視界にとある人物が入った。

まるで銀をそのまま紡ぎだしたかのような美しい髪。

黒に金の瞳を隠すための伊達メガネに、ゴシック風のドレスを身にまとったクロエだ。

クルーゼ事件で負った傷もすでに完治しており、Xアストレイも修復が完了している。

いつもならばまだ食事をしている時間のはずだが、なぜか気迫に満ちているクロエは

待機形態のXアストレイであるピアスを触った後、ISを起動させる。

その様子を見ていた東とラキーナの背筋にいやな汗と確信めいた予感が奔った。

「……くーちゃん、一応聞いておくけど……なんでXアストレイを起動させてるのかな？」

『少し用がありました、大丈夫です、東様。すぐに終わらせて戻ってきますので』

ふふふと黒い笑みを浮かべているクロエがXアストレイを浮遊させる——瞬間であつた。

「あかんやつやーっ！確保ーっ！」

『クロエちゃん、ごめんね!!』

調整途中であつたストライクを即装着して、ラキーナがクロエに組み付く。

兄であるカナードによってたまに関節技による制裁を受けている彼女は自然と、彼と同じように関節技の要領でXアストレイを押さえつけていた。

『放してください、束様っ！ラキーナ様っ！』

ジタバタともがくが、組み付いたストライクのロックは外れない。

「ラキちゃん、絶対に離しちやだめだよっ！今のクーちゃんは何するかわかったもんじゃないよっ！」

『分かっていますっ！クロエちゃん落ちて着いて！せめてISは置こう、ねっ？』

『お断りしますっ！カナード様にすり寄ってくる奴らを排除して、私のチョコを渡すまではっ！』

ラキーナの説得に耳を貸さずにジタバタともがくクロエ。

恋する乙女は強いのだ。

「だー！カナ君、なんでこんな時にいないんだよー！」

『兄さん、早く戻ってきてー！』

2人の叫びが格納庫にこだまし、何かと顔を出したのはマドカとアスランであつ

た。

「……クロエ姉さんが壊れた？」

朝食の最中であつたため、箸と茶碗を持ったマドカが姉と慕っているクロエの暴走を見て眩く。

「……カナードも罪作りだな」

クロエの暴走っぷりを見てアスランは苦笑して言う。

（……それをお前が言うのか、アスラン・ザラ）

マドカはジト目になって、アスランを見つめている。

ラキーナから聞いたことがあるのだ。

アスランはC・Eでは相当な女泣かせであつたとの事だ。

しかも本人にその自覚がないのだからなお性質が悪い。



「?どうかしたのか?」

「……お前は相当な朴念仁のようだしな、アスラン・ザラ」

「なっ、俺はそんなイメージで見られているのか……!?」

「少なくとも有害なイメージだな。お前に知らず知らず振り回された女は多いんじゃないのか?」

「ゆっ、有害、そっ、そんな事は……ないと思う……いや、ないはずだ……そうだよな……?」

マドカからの正直な感想を心を受けてアスランはがっくりと肩を落とす。

バレンタイン当日 昼休み

この日の真は朝から目が死んでいた。

激動の午前を終え、自席で力なく頭を垂れていた。

「はは……彗星かな。いや、違うな、彗星はもっところ、ばあつて動くモンな……」

ぶつぶつとそんな言葉も聞こえる始末である。

クラスメイトである清香やナギが苦笑しつつその様子を眺めており、セシリアも察したように真に話しかける。

「真さん、お疲れ様です」

「……うん」

非常に弱々しい返事。

セシリアがちらつと一夏の席を見ると、その上には大量の包みが置かれていた。

一夏はその包みを見て真とは別の意味で絶望しているのだ。

ぶつぶつと呟く彼の言葉は、お返し3倍どうしよう、と聞こえる。

「……お察しますわ」

「……うん。ありがとう、セシリア。やばい、事情を知ってくれてる友達がいるついでいな。泣きそう」

若干涙声になり始めている真の様子に苦笑しか浮かんでこない。

「そつ、そこまでなんですか……っ!?」

「そこまでのことだよおつ!」

ガバツと起き上がった真がセシリアに詰め寄る。

午前中の様子を振り返ってみよう。

1時限目開始前――

「織斑君っ!どうぞっ!」

「先輩方、わざわざありがとうございます」

移動教室の為移動していた一夏に、リボンの色から先輩である2人組が話しかけていた。

可愛らしいピンクと水玉模様の包装の包みを受けとった一夏が軽く会釈してから続けた。

「俺なんかのためにわざわざ義理チョコを。美味しくいただきますね」

そう返された黒髪の女子はぐふつと胸を押さえてがくつと崩れ落ちる。

それを随伴している青髪に褐色肌の生徒は苦笑いしながら見ていた。

少し離れた場所でのその様子を眺めていた真ははあとため息をつきながら駆け寄る。

「あ、あれ。先輩？」

「いーから、ほら。教室行つてろよ。多分疲れてんだよ、お菓子つて作るの大変なのは知ってんだろ？」

「あ、ああ。ちゃんとお返ししますからー」

真に背中を押されながら一夏は教室を目指して歩いていく。

それを見送った後、真は何とか立ち上がった先輩達の下に歩いていき――

「すいませんでしたあつ！あの唐変木にはちゃんと saying おきますからっ！」

土下座した。

あまりに綺麗な土下座フォームに先輩達はぶつと吹き出しながら言う。

「飛鳥君、もしかしてずっとなの、彼のって」

「……はい」

「あれは凄いねー。わりと頑張って作ったんだけど、見事に外されちゃったわよ」

黒髪の先輩がそう言って苦笑していた。

「……本当に申し訳ないです。アイツはいつもそうなので」

立ち上がって先輩2人に再度頭を下げる。

「いいのいいの、まー、ワンチャンあればなあレベルだったしね」

「飛鳥君が大変なのはよくわかったよ」

黒髪の先輩に随伴していた褐色肌の先輩が真の肩にポンと手を置く。

身長は真のほうが背が高いが、頭を下げていたため問題はない。

「ええ。流石に度が過ぎてるのでそろそろブチ切れそうですね」

「大変だねえ。おっと、そうだった」

褐色肌の女子生徒が鞆から包みを取り出す。

半透明の包みに入っているのは小さいマカロンだ。

それを真に手渡しながら彼女が言う。

「さつき織斑君にも渡したけど、飛鳥君にも。よかったら食べてよ」

「えっ……いつ、いいんですかっ?」

包みを受け取った真は明らかに慣れていないような返事を返した。

「おや、意外な反応。飛鳥君は貰ったことなかったの?」

黒髪の方の先輩がそう真に尋ねる。

公にされていないアスランを除いた3人しかいない男性搭乗者。

そのうち2人はすでに彼女持ちの為、人気が一夏に集中してしまうのは仕方のないことであつたが、彼女からしてみれば、未だ人気が高そうだなあとは思つていた。

すでに彼女がいるため、積極的に渡す人間もいないだろうが、過去にはたくさんもらつていてもおかしくはないだろうと想像していたのだ。

すると、真の目がどこか遠くを眺める様な目になる。

まるで仙人の様な、悟つたような目だ。

「家族と親しい友達からもらつたくらいしか……なかつたですね、ハハハ」  
「くっ、苦勞してゐるんだねえ」

包みを受け取つて乾いた笑いを浮かべている真に彼女はそう答えた。

2 限目休憩時間――

「一夏あつ！」

教室の扉を破壊する勢いで2組の鈴が飛び込んできた。

その手には綺麗に包装された四角い包み。

「おお、鈴。おはよう」

「うん、おはよう……じゃなかったっ、ちよつと付き合いなさいよっ」

彼女はそう言つて一夏の手を引つ張ろうと手を伸ばす。

「ん、ああ。別にいいけ……」

鈴の手が一夏の腕に触れる瞬間、鈴の手を掴む手が現れた。

「……」

無言で笑顔を浮かべる筈、そしていつのまにか鈴の背後にはラウラとシャルロットが回り込んでいた。

（させないぞ、鈴っ！）



(ちいつ、3人で同盟を組んでいるのねっ!?私だけ別クラスなのをいいことにつ!)

(抜け駆けは駄目だよ)

(状況を有利にするためなら鬼にもなる。全ては公平にな)

(いいわよ、なら公平に……)

(( (昼休みにジャンケンで勝負っ!) ))

アイコンタクトで状況を把握した4人は頷き合う。

「どうしたんだ、鈴?」

「ん、ああー……ごめん、一夏っ、授業の準備があったから戻らなくちや、んじや後でっ  
!」

「おっ、おう」

風のように去っていく鈴を一夏は不思議そうに眺めていた。  
少し離れた自席で真はお腹を押さえながらつぶやく。

「……胃が痛かった」

一色触発で危うい均衡であったが、彼女たちが平和的な方法で解決しようとしているのを見て真は眩く。

このほかにも移動教室の際に1年、2年、3年全ての年代の生徒達に一夏はチョコを渡されていた。

そして一夏は先輩たちと同じように対応して、真はそのフォローに回る。

それを昼休みまで繰り返していたのだ。

チョコを渡される度に繰り返されるやり取りに、真は心の中で――

「一夏あああああつ！オマエってヤツはあああああつ!!」

と何度も叫んでいたのだ。

――時間は戻って現在。

「……本当にお疲れ様です、真さん」

「そう言ってくれる友達がいるだけでだいぶ変わるよ……はあ」

詳細を聞いて苦笑するセシリアにそう返した真。  
その時であった。

ピロンと、自分の携帯がメールを着信したのだ。

「ん、ごめん、メールだ」

お構いなくとセシリアが返したのを確認して、彼はメールを確認する。

差出人には「更識簪」と表示されていた。

（簪から……っ！）

差出人を見てドクンと鼓動が早まる。

内容をすぐさま確かめる。

「今日、放課後に渡したいものがあるから真の部屋に行くね」

簡潔であるが、何のためのメールかすぐに分かった。

期待していなかったわけではない。  
いやむしろ意識しないほうが無理であった。

「……簪さんからです？」

真の反応を見たセシリアがニヤニヤしながら尋ねる。

「あつ、ああ……まあ、期待してなかったわけじゃないさ」

ニヤけそうになる口元を隠して、真は視線をそらした。  
それにセシリアは優しい笑みを浮かべていた。

## PHASE 2 チョコ濡れのバレンタイン②

### 4時限目——グラウンド

「IS搭乗の前にはしっかりと柔軟をしておけ、でないと怪我を負うリスクも高くなる」

ジャージ姿のカナードが告げる。

4時限目はISの実機搭乗訓練である。

寒いため生徒達は全員ISスーツの上にジャージを着ている。

この1年を通して、真達以外の一般生徒達の操作技術も大幅に成長している。

2人組で互いに雑談しながらも柔軟体操を続けており、当初の様に浮ついたような雰囲気は無い。

そんな中、いつもどおり男性搭乗者同士で組んでいる真と一夏。

一夏の背中を真が押す、所謂体前屈だ。

「はあ……」

「んっ、どした。真」

ため息をついていることを一夏に気づかれる。

相変わらず自分への意識には疎いくせに、他人の行動には鋭いヤツだなと内心苦笑しながら言う。

「んあ、大変だなんて思ってたよ。お前あんなに沢山貰ってもお返しはちゃんと全員にするんだろ?」

「ああ。皆義理なのに凄いやなあ。真も沢山貰ってるんだろ?」

「……お前え」

一夏の返した言葉に彼の背中を押している両手の力を強める。

「真? あつ、痛え!? 真っ、強いっ! 痛いつてっ!」

「もつと痛くするけどいいよね? 答えは聞いてないっ、オラオラっ!」

「話を聞いてー! いてえっ! 股があつ!」

一夏が叫びを上げながら抗議するが、それを真は無視してさらに力を強める。その様子を見ながらカナードは呆れたようにため息をついていた。

(……何をやっているんだ、あの2人は)

「カナード先生、打鉄とラファールの準備は出来てます」

「山田教諭、ありがとうございます」

「はいっ！……と言うか私よりもカナード先生がやれば皆にも刺激があつて良いと思うんですが。専用機も修理は完了しているんですよね？」

少し、自信が無いように苦笑して真耶が言うがそれに薄く笑みを浮かべて答える。

「ドレッドノートの修理は確かに完了してます。ですが俺よりも山田教諭の方が教師としてしっかりとしています。実技の感覚と理論を相手にわかりやすく教える技術は参考にさせてもらってますよ」

「えっ、そっ、そうですか……？」

「はい」

「よっ、よーし、頑張りますっ！ありがとうございます、カナード先生っ！」

そう張り切って真耶は打鉄とラファールの起動準備の為歩き出す。

その様子を一夏の柔軟体操を終えた真は、ストレッチしながらじつと見ていた。

真からの視線に気づいたカナードが答える。

「何だ？」

「いや、お前。ちゃんと教師してるんだなって」

「やることはしつかりとやるまでだ」

「そう言えば、山田先生には敬語使ってるんだな、お前」

ふと気づいたように真がカナードに聞く。

「今の年齢なら年上だからな。それに教師としての彼女に学ぶところは多い、指導の仕方とかな」

「……お前、一応言っておくけど今日、仕事終わったら速攻クロエの所に行けよ。多分めんどくさいことになってるだろうからさ」



「最初からそのつもりだが……成程、束やラキから先程までずっと着信があったのはそのせいかな」

真からの言葉に苦笑してカナードは答えた。

---

4時限目の休憩時間 1年1組

「……後少しだ、後少しで終わるっ」

机に突っ伏した真がそう呟く。

すでに籌達4人も一夏へチョコを渡しているとセシリアから聞いた。

何でもまたその際に一悶着あったらしいが、そこはセシリアがフオローに入ったため事なきを得たそうだ。

真の手には小さい瓶が握られている。

すると真の疲労の原因でもある友人がそれに気づいた。

「お疲れ、どうしたんだ？」

ジャージから着替えた一夏がお茶を飲みながら真に尋ねる。  
片方の手には真と同じように瓶を持っていた。

「……誰のせいで疲れてると思ってるんだあ」

「ん、何か言ったか、真？」

「いや、何も言っていないけど。あ、一夏もそれ置いてあつたんだな」

一夏の手握られている瓶に気づいて真が言う。

「ああ、席の上に置かれてただけだ。これ何か入ってる……何だろう」  
「アロマオイルだな。これくれたのは多分セシリアだと思う」

横目でセシリアを探して目が合うと、彼女は優しげに微笑んでいた。

「アロマオイル……って何でセシリアだって分かったんだ？」

「イギリスにもバレンタインの習慣はあるらしいんだけど、向こうだと差出人をわざと書かずに贈るんだよ。前本で読んだ事あるんだ、だからセシリアだって思ったんだ」

「へえ……」

「それに向こうだと女性から男性へって決まっつてはいないんだけどな、普通に男性から女性へ送つたりもあるんだと」

「お洒落だなあ」

「そうだなあ」

そう相槌を打って真は瓶を眺める。

（今日寝る前に使うか。ありがとう、セシリア）

心の内で友人にそう告げて真は瓶をしまった。

そして放課後――

「本日の授業はここまでだ、ああ。織斑、少し話があるからちよつと来い」

千冬がそう告げて、教室から出て行く。

少し不思議そうな表情で首をかしげた一夏は、姉である千冬の言葉についていき教室を出る。

一気に雑談が始まりクラスが賑わうなか、真は自席で静かにガッツポーズしていた。

(終わったあー耐えたぞ、耐えたんだあああつ!!)

内心そう叫んでいた真の携帯に2つのメールが届く。

先の差出人は【更識簪】で、もう1つは【更識刀奈】。

「ごめん、真。飛燕の追加武装のレポートを完成させないといけないから、部屋に行くのが少し遅れそう。多分21:00くらいになると思う」

と彼女からのメールには記載されている。

少し残念だが、きてくれることには変わらない。

なので真は了解とメールを返す。

そしてもう一つ、彼女の姉、刀奈からのメールを開く。  
その内容は――

「放課後、暇なら生徒会室に来れる？」

と簡潔に記載されていた。

（一夏は千冬さんが連れて行つたし、暇だな……よし、行くか）

暇なので行きますとそのメールに返事をして背筋を伸ばす。

放課後 生徒会室――

「お疲れ様ね、真君」

「いや、ホント疲れましたよ。精神的に」

真の様子にクスクスと笑う刀奈は、生徒会室に備え付けられている小型の冷蔵庫から

包みを取り出す。

それはホールケーキ用の包みであり、それを来客用のテーブルへと置いた。

ちなみにこの時間一夏は珍しく定時上がりした千冬が一夏をつれて家族2人の外食の為、学園にはすでにいない。

このアイディアは一夏のフォローを真にばかり任せてられないと千冬が悩んで考えたものであるが、当の一夏はそれに気づかず久々の家族水入らずの食事にテンションを上げていた。

「それは？」

「ふふ、私からのバレンタインよ。ちよつと奮発したから美味しいはずよ」

包みを外すと、チョコレートケーキがホールで現れた。

香りや色、艶、一般の菓子店で売られているものとは明らかに存在感が違う。

外した包みには店名が書かれており、お菓子には疎い真でも知っている高級店のものであった。

「これ、高いやつですよ。ありがとうございます、刀奈さん」

「そういつてもらえらるとお姉さんうれしいわ。簪ちゃんは用事があってと行ってたけど……？」

「飛燕のレポートを纏めてるらしいですよ。あれ、そういえば虚さんはどうしたんです？」

「呼んだんだけど、彼女、授業が終わったら最速で学園から出たみたい。外出許可もすでに取ってあったらしいわよ」

（虚さん、張り切ってるなあ……がんばれよ、弾）

「えーとカッター用のナイフナイフ……」

笑みを浮かべながら刀奈は食器棚を確認してナイフを探し始める。

（……………こう見ると刀奈さんとお姉さんだよなあ）

ムードメーカー兼トラブルメーカーな面はあるが、それでも年上として肉体年齢で年下である自分を引つ張ろうとする彼女に好感を頂く。

真には姉はいない。

それはC・Eでもこの世界でも変わらず自分が兄として妹の真由に接していた。

だがそれでも兄や姉が欲しかったなと思ったことがないわけではなかった。姉貴分の人間なら、日出の利香や節子などがある。

いずれ、真にとって刀奈は義理の姉という関係にもなるだろう。

それを再度認識した真。

ふとした悪戯心が真の心に現れ、それは口を通って言葉になる。

「……刀奈お姉ちゃん、ありがとう」

「っ?!」

ガチャンと探し出したナイフを手から落とした刀奈が目を見開いて振り向いた。

凄まじい速度で真に詰め寄り、ガシツと肩に手を置く。

ふとした悪戯心から呟いた言葉にまさかここまで反応するとは思わなかった真は面食らった。

「しっ、ししし、真君っ! もう一回、もう一回呼んでっ!」

「え、ええっ?! 刀奈さん、ちよつと落ち着いてっ!」

「お願いっ! 今すっごく心に來たの、お願いだからあつ!」



あまりの勢いに気圧されつつ、真は再度、その言葉を告げる。

「……刀奈お姉ちゃん」

「~~~~っ!!」

身もだえながら刀奈は真から離れる。

言葉も出ないレベルで感激しているようだ。

「かつ、刀奈さん?」

「つ、ああ、ごめんね。まさか真君から、義弟君からのお姉ちゃん呼びがここまでうれし  
いだなんて自分でも思わなかったの」

「はは……まあ、嬉しいならたまに呼んであげますけど?」

「本当っ!」

落としたナイフを拾って、別のナイフと取替えケーキを切り出していた刀奈は笑みを  
浮かべる。

あまりのがつつき具合に真は苦笑していた。

「おっと、ごめんね。はい、真君、ハッピーバレンタイン」

「どうもありがとうございます。刀奈さん」

そう刀奈に告げると、携帯に着信があった。

すいませんと、携帯を確認すると差出人は「布仏本音」と記されていた。

メールの内容は――

「夕食前に暇ならアリーナの整備室に来てー。インパルスマークIIの事で意見を聞きたいのだー」

と記されていた。

（ん、まあ、夕飯まで暇だしなあ……よし）

暇だから行けるよと返して携帯をしまった。

その後、他愛の無い雑談を交わしつつ、ケーキに舌鼓を打った真であった。

その1時間後、整備室

「本音さーん？」

整備室に入りながら真は、本音を呼ぶ。

「あすあすこっちー！」

整備室のメンテナンスベッドの1つにインパルスマークIIが載せられて、そのすぐ近くでISスーツ姿の本音がスパナを持って手を振っていた。

彼女に歩み寄りながら、真は尋ねる。

「マークIIのメンテナンス？」

「うん。それでねマークIIのある機能について、あすあすに意見を聞きたいのー」  
「機能？」

「そう、【ウエポンコールシステム】だよー」

【ウエポンコールシステム】

フォースインパルスに搭載された特殊コードであり、音声認識により別シルエットの装備を10秒程度、フォースインパルス状態で展開することができるシステムである。

当初真が搭乗していたフォースシルエットを装備したインパルスガンダムに搭載されていたものであり、幾度かのバージョンアップを施したそれが量産試作機の「インパルスマークII」にも搭載されているのだ。

バージョンアップを繰り返したおかげで、使用後のオーバーホールは必要なくなっており消費されるエネルギーも大分軽減されてる。

「あれ、搭載されてるんだな、正式量産型にも搭載されるんだっけ？」

「うん。正式量産機のマークIIで採用されるシルエットは、フォースとソードを統合した【アサルトシルエット】と【ブラストシルエット】の2つになるって話だからねー。今この子にはドラグリーンシルエットしかないけど、その2つは後でインストールされるみ

「あいだから、実際に使った事のあるあすあすに意見を聞きたいの」  
「ああ、分かったよ」

本音から使用時の感想や機体にかかる負荷や武装の使い方、整備時のパラメータなど様々な事を聞かれ真はそれに答えて行く。

大体10分ほど質問と応答を繰り返して、本音は笑みを浮かべてディスプレイを消した。

「ありがとう、あすあすー！すつごく参考になったよー」

「どういたしまして」

真がそう微笑む。

ふと見回すと、すでに整備室にいるのは真と本音だけになっていた。

時間もそろそろ部活動も終わって、生徒達は学生寮に向かっているだろう。

「本音さん、そろそろ切り上げて夕飯食いに行かないか？」

「うん、ちよつと待ってー」

制服に着替えた本音が真の元に歩み寄る。

四角い包みを手にしてだ。

「本音さん、それって……?」

「ハッピーバレンタイン、あすあすー!」

そう満面の笑みで真にその包みを手渡す。

完全に不意打ちであったため、驚いた後笑みを浮かべて受け取る。

「ありがとう、本音さん」

「うんっ、ちゃんと味見したから大丈夫だよ。それとね……ちよつとだけ時間下さい」

急に言葉遣いが変わった彼女に頷いて答える。

いや、言葉遣いだけではなく真を見つめるその視線には明確な熱が宿っていた。

「本当は、こんなのいけないって分かっているの。でも、自分の気持ちに正直になりたい」

数度深呼吸した後、本音は続ける。

「真君、私は……あなたが好きです」

そう本音が告げる。

「答えを教えてください。真君」

彼女からの問いに、本音からの熱の宿った視線に気づいた時点で予想していた真は答える。

「……ありがとう。けど、俺はその気持ちには答えられない」

「うん、知ってる。けどどうしても伝えなかった、聞いてほしかった」

「……ごめん」

真が深く頭を下げる。

それをみて本音は苦笑しながら言う。

「謝らないで。真君の答えが1つしかないっていうのは私も判っていた事だから。それを言うならこつちが謝らないといけないんだから」

「それでもだよ、気持ちには答えられないから……」

再度頭を下げた真に本音は言う。

「……なら、これからは本音って呼んでくれるかな？」

「えっ？」

「ほら、前の事件のとき本音って呼んでくれたから……駄目？」

「……分かったよ、本音」

そう真が本音に言うとき彼女は笑顔を浮かべた。

「うん、あすあす、これからも友達としてよろしくね」

「こちらこそ改めてよろしくな、本音」



「うん。あ、私、インパルスマークIIのレポート纏めなきやいけないからー」

「……分かった。あんまり無理はするなよ」

「りようかいなのだー」

そう言つて別れた真と本音。

真の姿が見えなくなり、気配が遠ざかつていくことを確認した本音の顔から笑みが消える。

ぼろぼろと瞳から涙が零れて、床に落ちる。

「おつかしいなあ……納得してるはずなのに、なんで、止まらないんだろ」

分かっていった結果であるのに、涙が止まらない。

「本音ちゃん、ここにいたのね」

「たっ、楯無様っ!?!」

整備室に現れた楯無に驚きながら、零れていた涙を拭う。

だが楯無はそんな本音の様子を見て、納得したように寄り添う。

「楯無様っ、あのっ、これはその……」

「いいのよ、分かってるわ。最近貴女の様子がおかしいって虚ちゃんから聞いてたから……伝えたのね？」

「……はい。でも駄目でした。分かっていた事ですが」

「……そうね。なら今は思いつきり泣きなさいな、本音ちゃん」

楯無のその言葉に、抑えていた激情は崩壊した。

彼女の胸の中で、本音は声を上げて泣く。

「ううう……うわあああっ」

「よしよし」

ポンポンと楯無は彼女が泣き止むまで、抱きしめて背中を優しく撫でていた。

(……本音、本当にごめん。でも俺の答えは変わらないんだ)

本音と別れて、学生寮に向かいつつ真は夜空を見上げる。

綺麗な星が瞬いている。

別れる際の彼女の表情はいつものほほんとしたものであったが、それが作りものであることは真でも分かった。

戦う事しかできない自分に好意を抱いてくれることは本当にありがたいし、うれしいことだ。

しかし、自分はそのままで器用ではない。

ましてや愛する人を複数持つなど出来るとは思わない。

だから明確にそれを断った。

彼女が守りたいと願う大切な人たちの1人であるという認識はもちろん、変わっては  
ない。

だが本当に心から幸せにしたいと願う人間は1人しかないのだ。

「……ほんと、波乱な一日だよ」

そう真は呟いた。

それからさらに1時間後――

真の部屋

「お疲れ様、真」

「ああ」

自室に來た簪にお茶を出していた。

本音と別れて夕食を食べた後、約束通り簪が部屋に來ていた。

その手には可愛らしい水色の包みを持つてだ。

「織斑君はまさに朴念神なんだね、真の話を知ると」

「ああ。まあ、放つて置けなくてさあ。今頃姉弟水入らずで楽しんでいると思うよ、たぶん」

「ふふ。そうだね。あ、真。これどうぞ」

彼女から渡された包み、それを改めて認識すると心から歡喜の感情が溢れてくる。

「開けてもいいか？」

真の言葉に簪が頷き、それを確認した後、包みを開く。

中から出てきたのはカップケーキだ。

茶色のケーキと、抹茶色のケーキの2つが入っていた。

以前、まだ恋仲になる前にも簪が作ってくれたものと同じ。

いやその時よりも見た目も香りも数段上を感じる。

彼女がそれだけ力を入れて作ってくれたことに、笑みが浮かんだ。

「ありがとう、簪。これ食べてもいいかな？」

「もちろん」

「それじゃ、いただきます」

ふわつとしたスポンジにチョコレート風味と味がしつかりと全体に染み渡っているが、甘さはくどくなく丁度良い塩梅。そして中心には少しビター風味のクリームも仕込まれており、それがアクセントとなり全体の味を高めている。

ぺろりと一つを平らげた真が簪に言う。

「滅茶苦茶美味しかったよ」

「よかった、口に合って」

簪が笑みを浮かべながら真の隣に移動する。

「バレンタインの思い出になれたかな？」

「ああ。今までバレンタインにいい思い出なかったけど、今年のバレンタインは最高の思い出になったよ」

「よかった」

真の左手に自分の右手を絡ませながら簪が言う。

その好意にどきりとしながらも、同じく指を絡ませる。

「……簪」

「……今日はずっと真と一緒にいたい」

「……分かったよ」

そう告げて、互いに紅くした顔で微笑んだ。

ブレイク号 カナード私室

今日の業務を終えたカナードがいつもの戦闘服に着替えて、椅子に座って書類を読んでいる。

近くの資料が載せられている机には、彼に送られたパレンティンの包みの他に、可愛い包みが置かれていた。

その包みはクロエから貰ったチョコレートとクッキーであった。

見てくれは他のものよりは多少悪いかもしれないが、それでも大事に食べようとカナードは決めていた。

彼が読んでいる書類の内容は転入してくる生徒についてだ。

転入については今まで何度かあったが、今まで以上に厄介な背景を持った生徒である。

何故ならば翌週に転入してくる生徒はとある国の「王族」だからである。

「第七王女か……また面倒なものが転入してくるのか」

「あー、ルクーゼンブルク公国のお転婆でしょ?」

ソファに座っていた東が表示していたディスプレイを消して言う。

テーブルの上には何かの包みが置かれている。

「知っているのか?」

「ん。あの国はI S コアの原材料の【時結晶】タイム・クリスタルが産出する唯一の国だしね。カナ君達と会う前に何度か会ったきりだけど」

「……そうか。ところで、テーブルに置かれているその形容しがたい物体は何だ?」

「あ、これ? ふふふ、良くぞ聞いてくれました! ちよつと形は悪いけどチョコレートだよ!」

まるでこの世の悪意を形にしたかのように形容し難い形状だ。

一部スライム状の箇所もあるのに、一部はポロポロと崩れており、何故か蒸気を上げている箇所もある。



あまりにおぞましいその形状にカナードの顔は引きつる。

「そのどこが食い物だっ！」

「大丈夫大丈夫！疲れてるだろうカナ君の為に、栄養あるものを片っ端からぶち込んで私が手作りしたチョコだから！味見はしてないけど……カナ君なら平気だよっ！」

ボロボロと崩れている部分を一欠けら掴んで、束はカナードに詰め寄る。

椅子から立ち上がり、後ずさる。

だがこの部屋は狭く、すぐに壁際に追い込まれてしまった。

「さあ、食べるのだーっ！」

「束、お前っ、やめろっ！」

束の手を掴み上げて抑える。

互いに本気の拮抗状態であるが、すぐにカナードが押し切った。

「まずは味見をしてからにしろっ！」

足払いから彼女の手を捻って、手から離れたチョコを彼女の口に押し込む。

「もがっ………っ!?!」

瞬間、東は目を見開いて声にならない叫びをあげる。

そして、白目をむいてぶっ倒れた。

ピクピクと指が動いているため、死んではいないだろう。

そもそも食っただけでぶっ倒れる劇物も危険なのだが。

「……因果応報だ。にしてもやはり口に入れてはいけないものだったか」

テーブルの上に東が作り上げたチョコが9割ほど残っている。

「……あまり食い物は粗末にしたくないが……これは食べ物ではない」

そう言って皿ごとゴミ袋に突っ込んで、見なかったことにしたカナードであった。

## 第七王女《セブン・プリンセス》襲来篇

### PHASE 1 王女、襲来

バレンタインの騒動が過ぎ去って2週間――

IS学園 グラウンド

「戦いの基本は格闘だ。全ての武器が使用不可能な状況になった場合、頼れるのは自分の身体だけになる、今日は俺が基本的な身体捌きを教える」

IS学園のグラウンドで1年1組と3組の合同授業が行われていた。

その教鞭をとっているのはジャージ姿のカナードであった。

もちろん、正式な教師ではないため少し離れたところに真耶の姿も見られた。

「カナード先生、格闘術ってISに搭乗している際に有効なんですか？」

カナードに尋ねたのは清香であった。

「格闘術で使う身体の動きは、あくまでパワードスーツであるIS装着時でも有効だ。体捌きの技術を向上させればAMBACもよりの確に行える。実例としては……これだな」

そうやってカナードは大きめの空間投影ディスプレイを展開する。

映っているのは、デステイニーガンダム・ヴェステイージュに搭乗した真と褐色肌の緑髪の美少女が乗るISとの模擬戦の映像であった。

突如自分の模擬戦の映像が流れたため、少し眠そうにしていた真は一気に意識を覚醒させた。

「真の場合、機体自体が超高機動を可能にしている点もあるが、攻撃の起点となる相手のマニピュレータを自身のマニピュレータで逸らして懐に潜り込んでいる。相手の動きを観察して先読みし、適切に処理しなければできない。直後に近接武装での攻撃、追撃で蹴りを叩き込んで相手の体勢を崩し、さらに追撃……と言った流れを掴む事も可能だ」

「はあ、凄いなあ……」

「すぐにこのレベルになれるとは思ってはいない。まずは基礎を固める。相川、他に質問は？」

「いえ、ありませんっ」

「はい、実演が見たいです！」

清香の代わりにナギが手を挙げて、カナードに告げる。それに少し考えてからカナードは真に視線を合わせた。

「実演か……わかった。真、付き合え」

「はあっ!？」

カナードに名指しされた真は素っ頓狂な声を上げる。

「織斑千冬やアスラン・ザラがいないんだ。まともな相手はお前くらいしかないだろ  
う？」

「いやいや、待て待て、まともな相手ってっ！お前マジでやる気かっ!？」

「本気でやらなければ訓練にはならん」

「頑張れあすあすー！」

「飛鳥君、頑張つて！」

本音と清香に続いて他のクラスメイトや3組の生徒からも声上がる。

「ほっ、本音に相川も皆も……あー、くそ、やればいいんだろっ！」

半ばやけくそになった真がそう叫ぶ。

ジャージの上着を脱いで、脱力をしていたカナードが構える。同じく、ジャージを脱いで適当な場所に置いた後、構える。

「くぐぐぐ」

その言葉からの一瞬で真に接近し、強烈な左のミドルキック。

真よりも長身の彼はその分脚も長い。すなわちリーチの外からの攻撃。

脚撃の速さは並の格闘家など比べ物にならないほどの速度だ。

威力も常人ならば余裕で腕をたたき折れるレベルのもの。

回避は間に合わなかったが、しっかりと腕を交差させ受け止める。

重く低い打撃音がその威力を表していた。

「……っ」

思わずその蹴りの威力に顔をしかめる。

ブロックした右腕だけではなく、身体の真芯に響くような蹴り。

ザフト式の軍隊格闘技やトレーニング、GESTイニーに慣れるための対G訓練などを

続けている真の今の身体能力は全盛期シン・アスカよりは劣るが、並の成人男性を大きく超えている。

だがそんな真よりもカナードの方が現在の身体能力は上であることがはっきりしたのだ。

これについては真も半ば想定してはいたが、確信させるには充分であった。

蹴りをガードされたカナードはバックステップで距離をとる。

刹那、カナードの顔面が数瞬間に存在していた空間を真の反撃のハイキックが薙いでいた。

（今の一撃千冬さんやアスランレベルかよつ、だけどガードできたつ、なら一気に攻めるっ！）

ハイキックの勢いを殺さずに間合いを詰める。

蹴りの間合いではなく、拳の間合い。

左の拳をカナードに繰り出す。

テレフォンパンチなどではなく、しっかりと腰を入れ、全身をバネにして威力を伝えている正確な一撃だ。

（そうこうなくてはな、真っ！）

左をスウエーで躲す。

だが真も避けられた時点で勢いそのままに回し蹴りの体勢に入っていた。

カナードの顔を狙った回し蹴りを彼は真と同じようにガードして防ぎ、一度バックステップで距離をとった。



「やるな、真」

「そつちこそ」

互いにガードした腕を構えなおして、ニヤツと笑みを浮かべる。

それを一夏達1年1組と3組の生徒達は啞然とした表情で見つめていた。

提案したナギはぽかんとだらしなく口を開いていた。

「すつげえなあ、2人とも」

「……とてもじゃないがあれは一朝一夕で身に付く技術じゃないな」

武道として剣道を修めている一夏と箒からしても異常なレベルの格闘技術だ。

それに反応したラキーナが2人に言う。

「まあ、2人ともC・E。じゃ格闘技術上位に入る人間でしたし」

「まじかよ、ラキーナ」

「はい。私は生身で絶対に真とは戦いたくない。手も足も出ないだろうし……兄さんは言わずもがな」

以前制裁として喰らった関節技の痛みが蘇ったのか苦笑しながらラキーナは一夏に言った。

それをみてクスクスと笑いを浮かべていたのはフレイであった。

「そりや元タインドア派のもやしだったしねー、ラキは」

「そうなの？」

「そうなのよー、こいつはもともと工業ガレッジの学生でねー」

ラキーナの昔話をシャルロット相手に始めようとしたフレイ。

それにギョツと目を見開いてラキーナは焦った。

「わー！わー！フレイ、やめて！」

キラ・ヤマトであつた時の話を楽しそうに語ろうとしたフレイを思わず抑えるラキーナ。

その際にラキーナの手はフレイの豊かに実つた果実を思いつき揉んでいた。

「あんっ、あつ、あんたどこ触ってんのよっ!？」

「えっ、やわらかっ、あつ、ちよっ、ちよつとまっつ、今のは事故っ、ぐええっ!？」

一瞬嬌声を上げたフレイは、髪の毛と同じくらい顔を赤くした後、渾身の拳をラキーナの顔面に叩き込んだ。

代表候補生としてトレーニングを行っているフレイの素の身体能力は平均的な女子高生よりも高い。

当たりどころが悪かったのか、その一撃でラキーナの意識は刈り取られていた。

「……うわあ、クリーンヒット」

「らっ、ラキーナさん、大丈夫ですかっ!？」

あまりに綺麗な一撃にシャルロットは苦笑しながら言った。

意識を刈り取られ倒れたラキーナに寄り添うセシリアにフレイが言う。

「放っておきなさいよ、いきなり胸揉んでくるスケベ野郎なんて」

「……なるほど、これがいわゆるラッキースケベというやつか、是非もなし」

合掌して目を瞑ったラウラにシャルロットが尋ねた。

「ラウラ、そんな日本語どこから覚えたのさ？」

「ん、クラリツサだ」

いつものメンバーに若干の新顔を加えたやり取りが行われている間も、真とカナードの格闘戦は続いていた。

一転してカナードが真に連続で拳を放っている。

拳を拳で弾いて捌き、避けられるものは身体を反らして躲す。

だが、次第に追いつかなくなってくる。

カナードの攻撃スピードが上がっているのだ。

（くっそお、差があるのは分かってたが……カナード、C・Eの時と身体能力変わってないのかよっ！）

そしてついに追いつかなくなり、スウエー直後の硬直と拳のタイミングがかち合ってしまった。

真の左頬に拳が迫る。

「しま……っ!?!」

「貫ったぞっ!」

重い打撃音と共に真の左頬をカナードの右拳が貫いた。  
その威力に真は立っていられずに殴り飛ばされ、転がる。

「ぐあ……っ!」

「……しまったな、やりすぎた」

真を殴り飛ばしたカナードは、思わず熱中していた事に気づく。  
自分が殴った真の元に駆け寄り、手を伸ばす。

「大丈夫か、真」

「……お前、やりすぎ」

そんな様子を一部の生徒は熱い視線で見しており、一部は2人が見せた格闘技術に若干引き気味だ。

その後の授業については、流石に実演レベルのものではなく格闘術の基礎を教えていくというものであった。

---

昼休み 学生寮 真の部屋

「イテテ……カナード、本気で殴りやがって……」

「大丈夫？」

「ああ、まあ、腫れは引いてるんだ、大丈夫」

左頬の湿布をペリペリと話しながら真は簪に告げた。

まだ若干の違和感が残っているが腫れ自体は引いている。

「カナードって、やっぱり強いんだ」

「ああ。アイツ暇さえあればトレーニングしてるし、身体も今の俺よりできてるみたいだから、身体能力は前と変わってないと思う。俺が見るに、千冬さんと互角なんじゃないかな、これはアスランもだけど」

「織斑先生と互角って……規格外だね」

「むしろ千冬さんのほうが凄いと思うけどな。アスランもカナードも元々の戦闘能力が規格外だったしさ」

プラント最高評議会議員の息子として、高級なコーディネートをを受け天性の才も持ち合わせているアスラン。

片や、失敗作とはいえスーパーコーディネーターとして生み出され、幼い頃からその才を憎悪によって極限まで磨き上げたカナード。

2人とも身体能力はC・Eの時と遜色ない。それに匹敵する千冬のほうが真からしてみれば異常だ。

「俺も傭兵の時位まで身体鍛えないとなあ。あの時位まで鍛えればアスランやカナード相手でも戦えるだろうし。流星に負けっぱなしは悔しいしさ」

そう苦笑しながら真が言う。

すると真の右手を簪が握り、微笑みながら言う。

「大丈夫、真も強いよ」

「おつ、おう……ありがとう」

「うん。この後日出に行くんだよね？」

照れたように視線を外した真に簪が尋ねた。

「ああ、何でもデステイニーについての連絡らしい。外出許可は2人分申請しといたよ」

「ありがとう」

「よし、それじゃあ行くか」

2人は日出に所属している人間であるため、こうして偶に呼び出されることも多い。

出席や単位については日出での作業がそれに該当するため、成績などには響いていない。

数時間後——日出工業本社 地下IS開発／整備区域



「デステイニーのオーバーホール……ですか？」

IS スーツ姿に着替えた真と簪は、日出地下にある IS 開発／整備区域にいた。真の前のメンテナンスベッドには、愛機デステイニーが鎮座していた。

愛機のオーバーホールと聞いて、目の前の開発主任ジェーンに真は尋ねた。

「うん。正確にはオーバーホールを兼ねた装甲材の変更だけだね」

「装甲材の変更……まさか PS 装甲に？」

「おいしい、PS 装甲を搭載することもできなくはないけど、今回デステイニーに搭載するのはデータ取りも兼ねた TP 装甲だよ」

「TP 装甲？」

「トランスフェイズ装甲って言う PS 装甲の亜種だよ。これも C・E の技術なのさ」

首をかしげた簪に、ジェーンが答える。

TP 装甲——正式名称、トランスフェイズ装甲

PS 装甲は強力な装甲機能であることに疑いはないが、発動しているだけで機体の電

力を大幅に消費してしまふ欠点が存在している。

またフェイズシフトダウン状態を一目で把握できるといいうのも大きな欠点であった。

この欠点を改良して生まれたのがTP装甲だ。

通常装甲の内側にPS装甲を搭載した複合構造になっているのが特徴だ。

外部からの衝撃が加わった際に、装甲内部のセンサーで衝撃を読み取り、PS装甲を起動させることで内部機器を守り抜くことができるのだ。

後期GATシリーズに搭載された機能であり、PS装甲機とは異なり外見からエネルギー切れが露見される心配もない。

「真君の戦闘データを見るに、君はマニピュレーターや脚部で相手を殴ったり蹴ったりする戦い方を好むっていうのがわかってね。装甲は変えればいいんだけど、中の精密部分がいかれたりするからその対策。TP装甲ならいくら蹴っても殴ってもデリケートな部分は常時PS装甲よりも少ないエネルギーで守れるから」

「……なんかすいません。と言うか、TP装甲とはいえ装甲材よく準備できましたね」

「ん、そこはね、アメノミハシラがあるから準備できない事はなかったんだ。ただアメノミハシラもオリジナルよりは小さくなってるし、そもそも装甲材なんて今のIS標準の装甲で充分な所があったから積極的じゃなかったんだよ。けどステイニーはうちが

誇る男性搭乗者の機体だからね、アピールだよ。ま、採算度外視でアミノミハシラの工房フル稼働させて、今回変更する装甲分とメンテ用位しか用意できなかったから今後もやるとは言えないね」

デスクに置かれていたコーヒーを飲んで、ジェーンは一息入れる。

「成程」

「さて、主に脚部とマニピュレータ、そして胸部をTP装甲に変更して調整するから……1週間から2週間くらい時間かかっちゃうかな」

「結構かかるんですね。その間真のISは訓練機を使うって事ですか?」「うんにゃ、違うよー。真君にはその間に別の機体に乗ってもらおうヨ」

ジェーンが右方向を指差す。

真と簪がそちらに視線を移すと、1機のISがメンテナンスベッドに鎮座している。機体本体の近くには、シルエットが2つ用意されている。

その機体一式は真と簪、2人とも見覚えのある機体であった。

それは真のデステイニーガンダムが第二形態移行する前の機体であり、友人である本

音が搭乗している機体と同様に見える。

「アレは、インパルスマークII?」

「そう、【インパルスガンダムマークII 3号機】。君にはアレのデータ取りをお願いするよん!」

ジエーンはそう告げて笑みを浮かべた。

そしてその1時間後、制服に着替えた真は応接室に呼び出されていた。

ちなみに簪は飛燕のデータと追加武装の進捗状況を見るためにまだ地下の区画にいる。

目の前に出された紅茶に手を伸ばすと、目の前の椅子に座っている優菜が口を開いた。

「さて、真君、インパルスマークIIの調子はどうだった?」

「インパルス使ってた時よりもだいぶ使いやすくなってますよ。特にフォーソードが1つになったアサルトシルエットは使いやすいつて感じます」

インパルスマークIIのシルエットはオリジナルのインパルスから1つ減り、2つになっっている。

これはソードシルエットの近接能力をフォースシルエットに統合した新たなシルエットである【アサルトシルエット】を開発できた事に起因している。

ビーム実体剣であるエクスカリバーを小型化、ビームサーベルの出力向上及びビームブーメランの搭載が可能になった事で近接戦闘能力と高機動を高いレベルで両立できているのが【アサルトシルエット】である。

「それはよかった、ジェーンも自信作だと言ってたからね」

「ソードシルエットは格闘戦には有利ですが、それ以外は微妙な所もありますからね。MSの時もフォースインパルスでソードの武器を無理やり使ってた時もありました。量産化を視野に入れるなら妥当だっと思ってます」

紅茶を飲みながら真が告げる。

「さて、話はガラッと変わるけど、明日IS学園に転入生がやってくるのよ」

「転入生？またこんな一年終わろうとしている時期に……しかも明日ですか」

首をかしげた真に優菜は苦笑しながら続ける。

「それは私も思うけどね。それで来るのはルクーゼンブルク公国の王女様なんだ、真君知ってる？」

「……ルクーゼンブルク公国、確かI S コアの……」

「そう、原材料が産出する国。篠ノ之博士にでも聞いたかい？ま、いいや。十数年前まで小国であったこの国は、その鉱物の希少価値によって世界でも有数の発言力を得るに至り、それに伴い爆発的な発展を遂げたんだ」

「……何か、オーブみたいですね」

「……鉱物をコーディネーターの技術力に置き換えれば本当に、オーブそのものなんだよなあ」

ため息を零した優菜。

元男であると言う事情を知らなければ、美人である彼女の憂う表情には惹かれるものがあるだろう。

「何か問題があるんです？」

「……転入してくる王女様が超絶な我侷なお姫様だったらどうする？」

「……ええ、マジですか」

「まあ、世間を知らない点ではカガリと一緒にだけど、幸い彼女には侍女もいるらしいから……くれぐれも粗相のないようにね」

真の目を見つつ、優菜が真面目な表情で告げる。

「いや、流石に暴言は吐かない……とオモイマス」

「何で最後カタコトなんだよっ！知ってるんだぞ、君がカガリに暴言はいたってこと！」  
「なっ、なんで知ってるんですかっ!？」

「利香から聞いたよ。まあ、今の君はだいぶ落ち着いているからそんなことしないだろうけどね。頼むよ」

「……やっぱり氏族とかのお偉いさんって苦手ですよ、優菜さん」

そう告げて真は紅茶を飲み干した。

翌日

IS学園 1年1組教室

「さて本日からルクーゼンブルク公国第七王女殿下が特別留学生として転入なさった」

千冬がそう告げると、クラスからは動揺と好奇の声漏れる。

「静かにつ！王女殿下はまだ14歳でいらつしやる。各人、無礼のないように心がける、いいな？」

千冬の言葉に一瞬で教室は静まりかえった。

「それでは王女殿下、お入りください」

千冬がそういうと、スライドドアが開いて教室に赤絨毯が転がってくる。



その上を黒服の男装メイドとロングストレートの軽装鎧を見につけた女性を従えて少女が歩いてきた。

眩いブロンドの髪を翻しつつ現れたその少女こそ、ルクーゼンブルク第七王女にして国家代表候補生「アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルク」であった。

「織斑千冬、紹介ご苦労であった。まことに大儀である」

「はっ」

身長は鈴よりも小さく、胸も14歳相当の絶壁。

歳以上に幼い顔つきだが、釣り合いの取れた煌びやかなドレス姿。

まさしく王女と言う出で立ちであるが、優菜から聞いていた情報の通り、その顔は傲岸不遜にして生意気そうだと真は感じた。

どこことなくアスハを思い出させるのが気に障るが。

ふとアイリスが教室を見回し、真の前の席に座っている一夏と目を合わせた。

「おぬしが有名な織斑一夏じゃな？」

「えっ、はい、まあ……」

「ふふ。おぬしをわらわの召使いにしてやろうぞ。どうじゃ光榮であろう?」

「はあっ!?!」

突然のアイリスの言葉に驚愕の声を上げる一夏。

そして真にもアイリスは目を合わせた。

「ほう、おぬしが2人目の……飛鳥真じやな?」

「そうですが何か?」

傲岸不遜な態度で真を見るアイリスであったが、笑みを浮かべた。

「おぬしもわらわの召使いにしてやろう。光榮であろう?」

笑みを浮かべながらそう告げたアイリスであったが、真からの返事でその笑みは消える事となる。

「お断りします」

アイリスの言葉を真正面から拒否した真。

それにアイリスに連れ添っていたロングストレートの軽装鎧を見につけた女性が、腰に携えたサーベルを引き抜いて真を睨む。

「飛鳥真、貴様……王女殿下の言葉を聞けんのか？」

「何で聞く必要があるんですか？俺にも俺の都合つてもんがあるんですよ……それをいきなり召使いにしてやるだなんて言われて納得できるわけないでしょ？」

突きつけられたサーベルに気圧されず、逆に軽装鎧の女性を睨み返す真。

自分よりも年下の男から発せられる怒気に、サーベルを突きつけた女性、ジブリル・エミュレールは思わず一步後退した。

「そもそも国家に縛られないのがIS学園。なら召使いになれだなんて命令、拒否できると思うんですがね？」

「貴様……っ！」

ジブリルが真の言葉に反論しようとした瞬間、千冬が間に割り込む。

「そこまでだ、飛鳥。そして王女殿下。僭越ながら召使いといえますか、学園の案内は織斑に一任します。ここは納得いただけますでしょうか？」

「えっ、ちよっ、千冬姉っ!？」

千冬の言葉に驚愕の声を上げた一夏。

そして真の怒気に飲まれていたアイリスはその言葉で我に返った。

「よっ、よい。ここは納得しよう。ジブリル、もうよいぞ」

「……はっ」

アイリスの言葉にサーベルを鞘に戻してジブリルは一步下がる。  
だがその目は真を睨んだままであった。

---

放課後

波乱の第七王女転入、アイリスの転入によつてその案内役に任命されてしまった一夏は途中ジブリルにつれられて王女のお世話をさせられていた。

その際に学園祭で着た執事服を着ており、ため息をついていたのを目撃している。気の毒だと思ふが一夏に任せるしかない。

自分では絶対にあの王女と侍女には合わないというのが真の感想だ。そんな真は今日の授業を終え、学生寮に戻る途中であつた。

「はあ……」

ため息をつきながら学生寮への道を歩く。

そしてそれは突然起こつた。

彼の意識の中で「紅い種」が弾けとんだのだ。

「……っ！」

意識の中で弾け、発動したS・E・E・D。

感覚が研ぎ澄まされ、視野が広がる。

突然の発動だったため、少しふらついて膝を付いた真は一度頭を振って立ち上がる。

そしてポケットから携帯を取り出して、メモ機能で日付を記載する。

ここ数週間、すでに日課のようにもなってしまうている行為だ。

(……明らかに発動する間隔が短くなってきている)

メモを終えた真が発動した日付の間隔を改めて眺める。

初めて起こったのはクルーゼ事件の2日後、その後はだいたい3日に1度程度であったが、今は2日に2度程に頻度が増していた。

(急に感覚が鋭敏になるだけで、実害はないからいいけど……何なんだこれ)

何故こんなことが起こり始めたのか、予想しても見当がつかない。

そして気持ちを落ち着けていたためか、S・E・E・Dの発動状態は解除されて普段の感覚に戻っていく。

「ふう」

「真、どうしたの？」

戻った感覚に一息ついたところに響く声。  
その声は大切な女性のものであった。

「簪、いたのか」

振り向くとそこには鞆を持った簪がいた。

真と同じく授業が終わり学生寮に向かっていたのだ。

S・E・E・D の突然の発動によって調子を狂わされてしまった真は簪の気配に  
気づかなかった。

「うん。さつき蹲ってたけど、大丈夫？」

そして案の定、見られていた。

咄嗟に視線をそらしたが、じつとこちらを見つめてくる彼女の視線に観念した真は苦

笑しながら、自身に起こっている事柄を説明していく。

歩きながら説明して場所は学生寮近くの中庭へ移っていた。

「【S. E. E. D.】って真がお姉ちゃんと戦うときに教えてくれたものだよね？」

「ああ。刀奈さんとの模擬戦の後、自分でも意識して使える様になったんだけど、最近、クルーゼ事件辺りから生身で急に発動し始めたんだ」

「……身体は大丈夫？」

心配そうに真の顔を覗き込んでくる簪。

それに微笑んで答える。

「ああ、東さんにも伝えてあるし、一度検査してもらったけど健康体だよ」

「……うん、なら大丈夫だって信じる」

「ああ、何かあつたら簪にもちゃんと言うから」

そう言つてポンポンと彼女の頭を撫でる。

その行動で気持ちよさそうに彼女は笑みを浮かべてくれた。



「そう言えば今日、1組には転入生で王女様が来たんだよね？」  
「……ああ。我俣な感じだったな、一夏が俺を守ってくれたが」

真がそう言つて合掌すると、簪は苦笑した。

「あはは……織斑君も、災難だね。あ、そういえばインパルスの調子はどう？」

「ん、そうだなあ。だいぶ良くなったけどステイニーに慣れてたからか、反応が鈍く感じるときがあるかな。特にAMBAACとか」

「それは真の反応速度が異常だからだと思う。本音も言つてたよ、調整が難しすぎるつて」

真が現在使用しているインパルスマークII3号機は調整の途中である。

特に機体の反応速度については念入りに調整が行われている。

日出に所属している人間の中でも、真の技能は突出している。

特に反応速度では並ぶ者がいないレベルでだ。

ステイニーを参考に機体へのフィードバックを行っているが、第二形態移行した真

専用機であるデステイニーと、量産試作機とはいえ万人向け仕様であるインパルスマー  
クIIでは調整が難航するのも仕方のない話であった。

「本音には本当に世話になってるよ」

「うん。いつも真面目モードでいてくれると助かるんだけどね」

「はは、そんな風に呼んでるんだ」

簪の言葉に笑みをこぼした時であった。

『し……ータを、デス……ニー姉様より、ダウ……ード』

かすかな女性の声が真の耳に届いた。

いや正確には女性というよりも少女のような高い音色の声だ。

「ん？」

背後からした声に振り替えるが、後方に数名生徒たちが見えた。

しかしどの生徒も真からは距離が離れすぎていた。  
先程の音量から言って離れても数m程度のはず。

「どうかしたの？」

「ん、女の子に呼ばれたような気がしたんだけど……気のせいかな」

「……むう」

そう簪に答えた後、彼女に右手をぎゅつと握られた。  
少しジト目でこちらを見てくる彼女の態度が愛おしかった。

「ごめんごめん」

「……今夜サーガー一緒に見てくれたらいいよ」

「分かったよ、付き合うよ」

そう苦笑した真であった。

## PHASE 2 強襲するG

「一夏っ、肩を揉め」

「一夏、アイスを買って来い」

「一夏、少女マンガとやらを読みたい。買って来い」

ほとほと一夏は疲れ果てていた。

威厳のある姿は表のみ、その裏、私生活では完全な我侷お姫様であるからだ。

アイリス王女の転入から数日、最後の我侷について達成するため執事服姿の一夏は、簪の部屋に訪れていた。

彼女が持っていることを知っていたため、借りにきたのだ。

彼女の部屋には遊びに来ていた真もいて、一夏は座り込みながら愚痴を零した。

「助けて、真」

「助けてっていつてもなあ……断るしかないだろ」

「うん、断るのが一番だと思う」

真の言葉に簪が同意する。

「いやあ、まあ、断るのが一番だったのは俺でも分かるけどさ。何か偶に放っておけないと言うか、甘えてきてるのかなあって思うときがあるんだよ。妹と言うか昔の簪みたいだなあって思うこともあつてさあ。もつとこう穏便に済ます方法つてないかなあつて」

そう一夏が告げると、真の肩を簪は掴んで少し離れて耳打ちする。

その行動に一夏は首を傾げていた。

「真、これってまずいと思う」

「ああ、アイリス王女の態度、明らかに一夏に気があるヤツだろ。しかも一夏は小さい子を相手にする感じで対応している……はあ」

すうつと真の目が何処かの小動物の様に細くなる。

「とりあえず千冬さんや山田先生に相談すれば何とかなると思うけどな」

「うん、あくまで生徒で対等な関係だからそれが一番……だと思う」

2人の意見が一致したところで、バイブ音が響く。  
振り返ると、一夏の携帯が発信源のようだ。

「げっ」

「どした?」

「王女様からのお呼び出し……あー、簪さん。漫画借りていつでもいいか?」

紙袋片手に立ち上がった一夏がそう告げる。

紙袋には簪から借りた少女マンガを入れている。

「うん、それはいいけど」

「山田先生辺りに相談しておくよ、断る気がないならもう少し頑張れ」

「ああ、ごめん。頼む」

少し疲れたような背中の一夏が部屋を後にする。

その様子を見て真と簪は苦笑していた。

一夏がアイリス王女の私服を買いに出かけると言う話が耳に入ったのはその日の夕方であつた。

同日 深夜

学生寮 寮監部屋

「で、何で俺はここに呼び出されたんだ」

いつもの戦闘服を着たカナードが座布団の上で胡坐をかいている。

その向かいに座っているのは千冬だ。

テーブルの上や下には空の酒瓶が転がっている。

「すまない。こんな深夜に呼び出してしまつてな」

「なら手短に済ませろ、どうせ厄介事だろう。違うか？」

不機嫌さをまるで隠していないカナード。

それも当然だろう。

業務を終えブレイク号に戻って残りのラクス製コアの追跡や、非常勤とはいえ教師になったため触れ合う時間が少なくなったクロエの機嫌取りなど等、やることは沢山ある彼を緊急で呼び出したのだ。

その態度に苦笑しながら、千冬が続ける。

「1組に転入したルクーゼンブルク公国のアイリス王女の事は知っているだろう？」

「ああ、相当な問題児らしいがな」

「その彼女と、一夏が買物に行く事になった」

その言葉を聞いて即効でカナードは立ち上がった。

そしてそのまま部屋を出て行こうとする。

だが、彼の脚を千冬が握って止める。

無理矢理振りほどいて一気に扉に向かって跳躍しようとするが、今度は腰のベルトをつかまれた。

「ふざけるなっ、これ以上ガキのお守りなんてできるかっ！」



「逃がさんつ、こんな面倒事1人でどうにかできるかつ!」

「知った事じゃないつ、これは教師の仕事じゃないだろつ、離せつ!」

ベルトを握る彼女の手をひねり上げる。

だが、捻り上げようとした行動を読んでいたのか、手を離し今度はその腕を彼女は握る。

握られた瞬間、容赦なく顔面狙いで蹴りを放ち、蹴りを千冬は辛うじて掴んでいた腕を離してガードした。

無駄に高レベルなやり取りを終えて、カナードは再度扉へと向かう。

「頼むつ、何なら依頼と言う形でお前に頼みたいんだ、カナードっ!」

「……依頼だとお?」

心底嫌そうな声色と表情でカナードは足を止める。

「ああ。教師としての活動とは別口の依頼だ。お前は傭兵だろう?なら断る前に話だけでも聞いてくれないか」

千冬の話を要約すると、カナードには秘密裏の護衛として動いて欲しいとの事であった。

アイリスは社会勉強の一環として下々の民の服が欲しいと一夏に言ったらしい。

善意で受けた一夏はショッピングについて了承したのだった。

その話を真を経由して耳に入れた千冬は、絶対に何か起こると予感めたものを感じてカナードを呼び出したのだ。

休日を使つてのショッピング、本来ならば護衛などつけることはないが2人の立場が特殊すぎるのがまずい。

何せ一国の王女と3人しかいない男性搭乗者の1人だ。

何かあった時に国際問題にも発展しかねない。その為秘密裏に護衛をする人間が必要になる。

そこで適任なのがカナードだ。

戦闘能力は自分と同レベル。経験だけならば上に行く彼ならVIPと弟の護衛を任せる事ができる。

「お前の戦闘能力は信頼している。だから頼む、受けてくれないか？」

頭を下げた千冬にため息をつきながらカナードが訊く。

「……報酬は？」

「報酬はそうだな。言い値は出す。王女の件を穩便に解決したいと思っているのは学園の総意だ。まあ、限度はあるが」

「……はあ」

ため息をついて、ふと部屋に転がっている酒瓶が目に入った。

「……織斑千冬、この酒瓶は？」

「ん、ああ、それか？それは私個人のものだ。偶に晩酌としてここで飲むんだ。すまないな散らかっていて」

千冬は偶にこの部屋を使っており、実質千冬専用の部屋と言う扱いになっている。

その為、ある程度の私物を部屋に持ち込んでいるのだ。

部屋に転がっていた酒瓶などがまさにそれだ。

それを見たカナードが意地悪くニヤツと笑った。

「……なら、ここにある酒を報酬に追加しろ。承諾するなら依頼を受けてやるし、報酬からある程度減額してやる」

「はっ、はあっ!?!」

いつものクールな雰囲気霧散した千冬はあからさまにうろたえている。

当然だが学園の売店に酒は売っていない。

その為、ここにある酒はオフの時間が限られた千冬が空いた時間を見つけて揃えたモノだ。

中には高価なものもあり、入手が難しい種類のものもある。

それを報酬としてカナードに渡す。

つまりはオフの時間を楽しむための娯楽を全て渡すことに等しい。

「何だ、ただの酒だぞ?」

意地悪い笑みを消さずにカナードがたずねる。

「いつ、いや、その……ほら、お前まだ19歳じゃなかったか？駄目だろ、飲酒は20歳になってからだ」

「それは日本の法律だろ、俺の国の年齢なら飲酒は可能だ。それに前の年齢を加味すれば90歳だ、何の問題もない。で、どうする？断つてもいいんだが？」

「ぐつ、ぐう……分かった、分かった。飲もう、その提案を」  
「交渉成立だ」

ニヤツと笑ったカナードと肩を大きく落とした千冬。

交渉は成立したのだ。大きな犠牲と引き換えに――。

---

そして週末

IS学園に近い駅と併設している大型ショッピングモールに一夏とアイリスの姿があった。

移動に使った自転車を駐輪場に置いて、IS学園の制服に身を包んだ2人はショッピングモールの前に立つ。

「服を売るだけで日本はこんな城もどきを建てるのじゃな……」

「そんな大げさな。それにアリス、服だけじゃなくて色々あるんだよ、このモールには  
「さ」

すでに打ち解けているのか、アリスを愛称で呼ぶ一夏。

その彼の言葉にアリスはたずねる。

「ならそばはあるのか？ わらわはあれをどうしても食べてみたいっ！」

「ん、ちよつと待ってくれよ……お、ある。しかも有名なやつだ」

一夏がモールの地図を見てアリスに言う。

「おお、そうかそうか！」

嬉しそうなアリスの笑顔、年相応の姿に一夏は笑みを浮かべる。

「よし、なら服を買ってからそこに行こう」

「うむ、案内せよっ！」

「はいはい」

そう言つてエスコートしていく一夏。

それを遠くから眺める人影が4つ。

「くやしいっ！悔しいわよねえっ！」

「うーん、だからさ遊びに来たって体で割り込んで引き離すのはどう？」

「そうだな、とりあえずあの王女を引き離すのが先決だな」

地団太を踏む鈴、そしてその後ろには作戦会議を行っている、シャルロットとラウラ。

2人の作戦会議をぼうつと見ているのは箒であった。

(……一夏が離れてしまう。前にもあった、大切な人が離れてしまう。ナンダツタカ、コノカンカクハ……オモイダセナイ……オモイダシタクナイ)

霞がかかると意識。その霞の中で誰かが自分に語りかける、そんな映像が見えた。

「……つてば、箒つてば！」

鈴が箒の顔を覗き込んでいた。

それにはっと気づいた箒の瞳に合った【色】は消えた。

「どしたのよ、ぼーっとして」

「いや、私はいつも通りだぞ？」

「……そう？ならいいんだけど。体調悪いならいいなさいよ？」

「あ、二人がお店から出てきたよっ！」

鈴がそう言った瞬間、シャルロットの声が響く。

「こうしちゃいられないわっ！いくわよっ！」

箒の手をとりながら、鈴達は一夏とアイリスを追って行く。



その様子をさらに遠くから眺める者が2人。

黒のジャケットにグレーのインナー、黒のカーゴパンツの黒を基調とした私服のカナード。

そしていつかのデートの時と同じくゴシック風の私服に、目を隠すための伊達目がねを見つけたクロエ。

カナードは今回の依頼について、クロエに協力を頼んだのだ。

クロエとしては依頼の中でも2人きりになれるし、何より彼の力になれるのならば答えはYESであった。

「……何故、あいつ等がいる」

『カナード様、どうやら箒様達は2人を追っているようです』

ハイパーセンサーだけを起動したXアストレイから齎される情報をカナードに伝える。

思わずモール天井の窓から見える空を眺めてしまった。

『カナード様?』

「すまない、少し現実逃避をしたくなっただけだ。作戦内容は変わらない。ハイパーセ  
ンサーを起動して感知できる距離から奴等全員を監視するぞ」

『はい、承知しました』

絶対に気づかれない距離を保ちつつ、6人を2人は追う。

そして一夏達は2人でそば屋に入り、メニューにアイリスは一夏に質問していた。

「これが噂に聞くざるそばと言うんじゃないっ!」

彼女は天ぷらつきの蕎麦を注文しており、一夏は鴨蕎麦だ。

今はそばが来るのを待っている状況だ。

「のっ、のう、一夏」

「うん?」

「その、おぬし、世界には興味はないか?」

「世界？海外って事なら去年の12月、イギリスには行ったなあ」

エクスカリバー事件をふと思いついた一夏がアイリスに答える。

「そつ、そうなのか」

「いけるなら今度はヨーロッパ全部に行つてみたいよなあ。皆の故郷つてどんな所か興味あるんだよ」

「そうか！また行きたいのじゃな!？」

うんうん、と頷くアイリスが続ける。

「ならば一夏よ、そなた、わらわの国へ来い。わらわの国からならば他の国にも容易にいけるぞ?？」

「……はあ?？」

アイリスの言葉を飲み込むのに数秒の時間が必要だった。

「専用の召使いとして、今後もわらわの世話係にしてやろうぞ」  
「えっ、ちよっ、いや、それは……」

あまりにぶっ飛んだ内容に答えを濁す一夏であったが、その時注文してきたそばが運ばれてきた。

「話の続きはそばを食べた後じゃな！」

（やっべー、どうしよう……っ！）

嬉しそうにそばに舌鼓を打つアイリスと対照的に一夏は内心滅茶苦茶焦っていた。

流石の彼も彼女の提案にある問題点は分かっている。

IS学園は国家に縛られない。だからこそ、自分や他の男性搭乗者も国家に縛られずに日常生活が行えている。

ルクーゼンブルク公国の王女の召使いになる、など出来るわけがないのだ。

一夏はそばに口をつけずに、どうアイリスの言葉を断ろうかと考えている。  
するとアイリスがこちらを見ていた。

「ん、どうした？」

「すするとはどうすればいいのじゃ？」

「ああ、なるほどな。無理にやることじゃないよ。食べたいように食べればいいんだよ。今は王女じゃなくて、アリスだからな」

「そつ、そうかつ！」

そういうことならとそばをまるでパスタの様にクルクルと巻いて食べ始めるアイリス。

嬉しそうに食べるその姿に思わず笑みがこぼれた。

「美味じゃな、そばっ！」

「そりやよかった。なあ、アリス。さっきの話何だけど……」

そこまで隣のアイリスに言ったところで、ぽすんとアイリスが頭を一夏に預けてきた。

「アツ、アイリス？」

突然のその行為に驚きながら、アイリスの肩を揺するが彼女は反応を示さない。

「お客様、どうされましたか？」

先程そばを運んできた店員が困惑している一夏に尋ねてくる。  
どこかで見たような顔だが、他人の空似だと思い店員に返す。

「あつ、すいません、急にこの子が……」

「おや、お疲れでしたら、さあ、こちらにどうぞ」

「どうもすいません」

一夏はアイリスを抱えて、女性の店員に店の奥へと案内される。  
店員は何故か一夏とアイリスを見て笑みを浮かべていた。  
その時であった。

『織斑一夏、アイリス王女を抱えて横に避けろっ』

ISのコアネットワークを介した通信が届く。

相手は男性搭乗者の1人であり、一夏も知った顔である男。

困惑には飲まれかけるが、指示に従う。

彼が意味のない事は指示してこないのはこの1年で学んでいたからだ。

「っ！」

アイリスを抱えたまま、一夏は右に身体を避ける。

瞬間、背後から迫る投擲物。

ガラス製の灰皿が一夏の頭が数瞬まで合った場所を通り過ぎて、案内していた店員の背中に直撃する。

「かっ!？」

突然の衝撃に肺の中から空気を搾り出すかのような声が漏れ、店員の動きが止まる。

そして間髪いれずに自分の横を走る影。

その影は動きの止まった女性をそのまま蹴りつけ押し倒し、腕を拘束する。  
女性は意識を失っていた。

「かつ、カナードっ！」

「……無事のようなだな」

「あつ、ああ……な、何でここにいるんだ？」

女性を無力化したのはカナードであった。

突然の自体にそば屋の中が騒然となる。

客の中には箒達もおり、何でここにいるのよっ！と声を上げていた。

それはクロエが抑えているが。

「仕事だ……睡眠薬に拳銃か」

女性店員の懐をあさると、そこから白い粉が入った袋が出てくる。

それだけではなく、一般的な日本人が持っているはずがない拳銃も出てくる始末。

ご丁寧に消音器まで装着されている。



「食事を始めた途端意識を失う、そしていきなり2人を人目につかない場所に案内する。クロダ」

「えっ、それって……まさか、誘拐？」

『おそらくな。ドレッドノートのセンサーはこの場から退却する人間の動きは拾っていない。どうやら単独犯だな』

拳銃を回収したカナードは懐にしまう。

「……思い出した、この人、メイドの人だっ」

カナードが無力化した女性について一夏が思い出す。

転入初日にアイリスの侍女の一人としてそばにいた女性。

それが今無力化された女だ。

「そうか、どうやら向こう側のいざこざらしいな。王女はどうだ？」

「うっ、うん……？」

アイリスが意識を取り戻す。

呆けた目で目の前に倒れている女性を見た後、自分の置かれた状況を把握する。

今の彼女は、一夏の腕の中に抱きしめられる状況にいる。

一気に顔が赤くなる。

「いつ、一夏っ?!おぬしっ?!それにこの状況はっ!?!」

「アリス、まだつらいだろ?大丈夫、俺がいる」

安心させるために、アリスを抱きしめる。

それを困惑しながらも受け入れて、彼の腕の中に身を任せる。

その感覚はとても心地よいものであった。

「……全くとんだトラブルメーカーだ」

カナードはその様子を白い目で見ていた。

同日 夕方 IS学園学生寮

「何たる失態だっ！分かつているのかっ！」

近衛騎士団長であるジブリル・エミュレールに、一夏は激しい叱責を受けていた。完全防音仕様の学生寮でなければ確実に近所迷惑となる音量だ。

「貴様は本国に連れて帰り、相応の処罰を与えるっ！」

それを見かねた真耶が口を挟んできた。

「まあまあ、王女殿下もご無事だったことですから、もうその辺で……」

「甘いぞ真耶っ！貴様は学生時代から何も変わってない！処断されるべきものを庇うなどどー！」

真耶とジブリルは学生時代の同期であり、互いにしのぎを削っていた過去があるの

だ。

そのためかジブリルは真耶に対しては余計に怒りを込めているのだ。

「やめぬか」

ゲストルームの扉が開いて、アイリスが出てきた。

IS学園に帰還した後、検査を受けて問題ない事を確認した彼女は休んでいたのだ。おそらくあまりの五月蠅さに出てきたのだろう。

「一夏、おぬしは無事じゃな？」

「えっ、はい、王女殿下」

「それはよかった」

一夏の返事を聞いて微笑むアイリス。

一呼吸置いて続ける。

「織斑一夏を我がルクーンゼンブルク公国に招く。わらわの世話係として一生を共にする

のじゃー！」

そして爆弾が投下された。

彼女はつまり、一夏と結婚するといっているのだ。

「は？」

「はあ？」

「……マジかよ」

「アツ、アクティブ……」

「攻めますね」

「「「はああああああつ!?!」」」

その場にいた、一夏、ジブリル、真、簪、セシリア、箒達ヒロインズがそれぞれ声を上げる。

それを一切合財無視して、王女は威厳ある態度で続ける。

「異議あるものは名乗り出よっ！さもなければ永久に口を閉じるがよいつ」

「あるに決まってるでしょうがっ！」

鈴が突つかかった。

「ほう、貴様、名は何と言う？」

「鳳鈴音よ。覚えておきなさいっ」

「ふむ、ならば鳳鈴音よ、このわらわと対決するか？無論、女同士の真剣勝負……I Sでの対決じゃ」

「おーおー、上等じゃないっ！やってやるわよっ！」

火花を散らす2人。

そこに割り込むのはジブリルであった。

「いけません、王女っ。このようなものなど争うなどと、王族のすることではありません  
！」

「格の違いを思い知らせる、いい機会じゃ」

「そのようなことをつ！ならば私が代わりに戦いますっ！」

「何を言うっ！王たる者、先陣を切つて敵を蹴散らさねばそれこそ、戦場の恥ぞっ！」

もめる2人をたっぷりと挑発視線で見ながら鈴が言う。

「なんなら2人がかりでもいいのよ？あたしとしては」

その言葉にかちんと反応した王女と騎士。

そこまで挑発されて無視できるほどの2人は優しい性格をしていない。

「ふっ、わらわの言葉を先に言われるとお。わらわのISは【第4世代機】、貴様達の方が2人でかかってきてもよいのだぞ？」

その言葉に驚愕が奔る。

なぜなら今の世界には第4世代機は1つしか存在していない。

箒の【紅椿】のみのはずなのだ。

その言葉を聞いた真は内心でルクーゼンブルク公国に対する警戒度を引き上げた。

それは鈴も同じで先程の挑発するような態度は消え、クレバーな態度で言葉を発し

た。

「……なら箒、付き合いなさい」

「えっ？」

「私と組みなさい、幼馴染同盟ってやつよ。呉越同舟ってやつよ」

「……分かった。組もう」

鈴の言葉の意図を理解した箒が頷く。

相手が第4世代機ならば同じ第4世代機と組めば勝率は上がる。

一夏を取られる訳には行かない。

そのためならば2対1でもなんでもすると、2人は手を組んだのだ。

「ほう、わらわは構わぬが……そうなるとジブリル、お主の相手がおらんな」

「……ならば、飛鳥真、私と戦え」

「はあ？」

いきなり矛先がこちらに飛んできたため、真は思わず困惑の声を出してしまった。



「昨日の王女殿下への無礼忘れたとは言わさんぞ。私が貴様を処断してくれる」

「……こつちの都合また全部無視ですか」

「罪は処断するのが常だ。それとも逃げるのか？」

「……別に逃げるなんていつてないですよ。やるつてんなら相手になる。それに罪ならそつちも数えてろ」

静かな怒気が真から発せられる。

(この怒気……以前は気圧されたが今ならば耐えられる。私よりも年下の男のはずなのに何なのだ!? 王女に危険が及ぶかもしれない、ここでコイツを見極める)

「話は纏まったようじゃの、それでは決戦は1週間後の日曜、第二、第三アリーナで開始する!」

王女の一声でこの場は解散となった。

「……真、怒ってる?」

解散となった後、学生寮の真の部屋で簪はベッドの上で寝転がっている真にたずねた。

「あー、まあ、怒ってるってのはあるかもな、こつちの都合考えてないところはアスハ……あー、優菜さんと同じお偉いさんだった奴と同じだしな」

起き上がった真が答える。

優菜と利香曰く、自分が死んだ後にアスハは変わってオーブも纏まったとの事だが正直信じられないのが真の感想だ。

利香が言うのだから真実なのだろうが、どうしてもあのミネルバでのやり取りを思い出してしまうからだ。

「ちよつと雰囲気悪いのは分かるけどね」

「まあ、この1週間でインパルスマークIIを仕上げないとな」

「うん、協力するよ」

「ありがとう、簪」

簪の言葉に笑顔で真は返した。

3日後 放課後 学生寮 中庭

「ん、簪？」

中庭からアリーナへ向かおうとした真が、学生寮に向かってくる簪に声をかける。  
どこか呆けていたようにも見える簪が顔を上げて真に返す。

「ああ、真か。調整か？」

「ああ。マークIIもようやく纏まってきたからさ」

「……そうか」

どこか弱々しく、彼女が返す。

様子がおかしいことに気づいた真が彼女に尋ねた。

「どうかしたのか？」

「えっ、いや、なんでも……ない。今日の夕食を何にしようかなと考えていただけだ」

「昔から嘘つきの下手だよな、箒。すぐ目線逸らすしどもるし」

「……すまない、真。少し相談に乗ってくれるか？」

「ああ。ここじゃ何だし、向こうのベンチでどうだ？人もいないし」

真が生徒がいないベンチを指さす。

それに頷いて答えた箒と共に移動して、腰を下ろした。

「んで、相談って？」

「私は弱いなど、改めて認識してしまつてな……すまない、これは相談というよりは愚痴だな」

「別にいいさ。それで弱いつて？」

「……私は姉さんの妹だが、ISについての知識は鈴やシャルロットには敵わない。操作技術も機体性能を抜きにしたら遠く及ばない。紅椿だから戦えているんだ、訓練機で性能を平等にしたら勝てないとな」

紅椿を受け取った当初よりも彼女の操作技術は別人レベルに上がっている。

だが、成長を続けているのは何も彼女だけではなかった。

鈴やシャルロット、ラウラも同じように成長しているのだ。

アイリス王女との決闘に向けて、鈴とコンビを組んで訓練を行っている際にそれに気づいたのだ。

「エクスカリバー事件やクルーゼ事件でのセシリアや鈴達、そして真、カナード、一夏の活躍を見てからずっと思っていたんだ。私は本当に一夏の傍にいてもいいのか、その資格があるのかと」

「……」

真は黙って彼女の言葉の続きを催促している。

一息入れて箸は続ける。

「一夏の足手まといになっているんじゃないかと思っただんどん不安になって……こんな私では決闘にも勝てないんじゃないかと不安になるんだ」

「……」

彼女がそこまでつづけた瞬間、真は軽く箒の頭に手刀を落とす。

「あつ!?」

額に落とされた真の手刀を受けて箒が声を上げる。

大して力も入れてないのに大げさである。

「何をするんだ、真っ!」

「難しく考えすぎなんだよ、箒は」

「だが、事実だろうっ!? 私は弱いんだ……っ!」

「かもしれないな。けどさ、そんなことが一夏の隣にいるのに必要なことなのか?」  
「え?」

真からの言葉に箒は目を丸くする。

「強くなることは確かに大事かもしれない。アイツも笑顔を守るために戦うって決めて

から、訓練頑張ってるしき。でも強さとか関係なく、箒は一夏の事が好きだから一緒にいたいんだろ？」

「うっ、それは……そうだ」

好きだからという事を改めて認識したのか、箒は少し恥ずかしそうに答えた。

それに真はほほ笑む。

「だろ？アイリス王女の無茶苦茶な言い分で一夏がルクーゼンブルクに取られてもいいのか？」

「……それは絶対に嫌だ」

「それでいいんだよ。それに誰かの傍にいる為の資格なんてのは必要ないと思うんだ」

「えっ？」

遠い目になった真を箒は見上げる。

「誰かを好きになる。誰かの傍にいたい。当たり前前の事なんだって俺はこの世界で学んだ。それに資格なんているわけないんだよ」

「……真」

箒にそう告げた真は、はつと気づいたように苦笑いを浮かべた。

「……あー、説教臭くなっちゃったな、ごめん。でも俺の言いたいことは、感情に従うこととは間違いないじゃないって事さ。ま、もちろんいきなり戦闘に飛び込んで応援なんてするのは自制しなきゃだげどさ」

ふと、去年の事を思い出した真がニヤツと笑いながら箒に尋ねる。

かつての向こう見ずな行動を突かれて箒は少し狼狽えながら答えた。

「うぐつ、分かっている。今思いかえすと本当に周りが見えてなかったんだと思う」  
「なら大丈夫。本当は全員平等に応援するのが筋なんだろうけど、俺はさ、箒の事一番応援してるんだよ。アイツが一番楽しそうに笑ってるのは箒の隣にいるときなんじゃないかなって思ってるから」

「……ありがとう、真。少し元気が出た」



はにかみながらそう箒は真に言った。

「ならよかった。んじや、俺はそろそろアリーナに向かうから」

「ああ。今度何か奢ろう」

「いいって。そんな金があるなら一夏をデートに誘うんだよ、今度の決闘でアイリス王女に勝つてからな。アタックアタック、見てるだけじゃ始まらないって」

シユツシユツとシャドーしながら箒をたきつける真。

「でっ、デート……そうだな、そうするよ、真」

少し照れながら、箒はそう返した。

そして週末

第二アリーナ Aピット

本日の決闘について、第二アリーナで真対ジブリル。

第三アリーナで箒・鈴対アイリス王女の組み合わせとなっている。

そのAピットでは真と簪、そして本音の姿があった。彼が乗るインパルスマークIIはこの1週間で調整が完了し、真の反応速度にも充分追従できるようになっていた。

『よっ』

最終チェックを済ませて、インパルスを纏う真。

その背部に接続されるシルエットは完全新規製作の「アサルトルシルエット」だ。

外見的にはMSのフォースインパルスと同じく大推力のスラスター及び複数のバーニアを装備しており、以前よりも高出力化されている。

放熱板をかねた翼の数はさらに減り、4枚から2枚に減っているが、シルエット自体の性能が上がっているため問題はない。

そして腰部に増加装甲も展開されていた。

アサルトルシルエットはフォースシルエットとソードシルエットを統合した装備である。

標準的なビームライフル、ビームサーベル、実体シールドを装備している。

シルエット装備時は腰部にワイヤー射出装置が追加され、小型化されたエクスカリ

バー【ガラティーン】二振りも腰部増加装甲に装備している。

新たな固有武装として両マニピュレータ部分に追加された対IS装甲用ヒートナックル【ベオウルフ】のせいかマニピュレータ部分が以前のインパルスよりも大きくなっている。

このシルエットを装備したインパルスの名は「アサルトインパルスガンダムマークⅡ」だ。

「頑張れ、あすあす！」

「真っ、頑張つて！」

本音と響がカタパルトによって射出される寸前の真へ激励を飛ばす。

大切な友人と愛しい女性からの声だ、力が湧かないはずがない。

2人の言葉にマニピュレータでサムズアップしたあと敬礼で返して笑みを浮かべた。

『飛鳥真、アサルトインパルスガンダムマークⅡ、行きますっ！』

強襲の名を背負った機体がカタパルトから射出され、その力を誇示するようにスラス

ターを吹き上げた。

## PHASE 3 輪廻する花冠

『来たか……ん？』

専用のIS「インペリアル・ナイト」を身に纏ったジブリルは、ピットから発進したインパルスを見て疑問が浮かべた。

彼の機体と情報はある程度世界中に公開されている。それはルクーゼンブルクも同じである。

その中の情報では、彼の機体はすでに「第二形態移行」を終えていたはず。

だが今の彼が纏っているISは第二形態移行前の「インパルスガンダム」の様に見える。だからだ。

『飛鳥真、貴様、デステイニーとかいう機体ではないのか？』

ビームライフルとシールドを展開していた真はその疑問に答える。

『デステイニーは今、オーバーホール中なんですよ。だから今はこのインパルスガンダムマークIIで相手しますよ』

『……そうか、それを負けた時の言い訳にしないことだな』

ふふんと笑ってジブリルは真と同じように、武装である剣と盾【エクレール】を展開する。

『別に負けるつもりはないんで、そっくりそのままお返ししますよ』

そう真が返した瞬間、試合開始のコールが響いた。

同時に2機は弾かれたように、瞬時加速で加速する。

エクレールを構え高速で接近するジブリル、小型エクスカリバー【ガラティーン】を展開して迎え撃つ真。

エクレールの剣とガラティーンがぶつかり合い、鏝迫り合いの状態となる。

機体自体のパワーはインペリアル・ナイトに軍配が上がるが、それをアサルトシルエットの高出力スラスタから得られる爆発的な推力で押し返している。

拮抗状態となったこの状況をインパルスは、盾のエクレールを蹴り飛ばす事で打破す

る。

『ぐっ!?!』

弾き飛ばされた、インペリアル・ナイト。

衝撃を利用してインパルスは加速しようとする。

しかし、蹴り飛ばした盾のエクレールから迸った「閃光」がインパルスに直撃した。

シールドエネルギーが減少すると共に、身体には痺れるような痛みと感覚が奔る。

『っ!?!』

驚愕と予想外の反撃に真の表情が歪む。

その間にも、ジブリルはAMBA Cを済ませ再びインパルスに向かって加速してきていた。

『どうだっ、この私の雷はっ!』

(ちっ、盾に放電攻撃機能があるのかっ!)

内心舌打ちしつつ、AMBACを済ませた真に、ジブリルの持つ剣のエクレールから放たれた雷が向かう。

Aピット内で開始された試合を眺めているのは簪と本音だ。

(……飛鳥君)

激励を持って送り出した本音だが、内心では不安な気持ちも感じていた。

何故ならば、公開されたジブリルのIS「インペリアル・ナイト」とアイリスのIS【セブンス・プリンセス】はどちらも【第4世代機】であるからだ。

搭乗者の技量を抜きとした総合的な機体性能では第4世代機であるインペリアル・ナイトのほうが上回るだろう。

そんな考えを主である簪は見抜いていたのか、本音に声をかけた。

「大丈夫、真は勝つよ」

「……かんちゃん」



アリーナを見つめる主の姿。  
愛する人を信じるその姿はとても美しいものだ。

「……うん、そうだね」

内心、敵わないなあと呟いた本音は笑みを浮かべて簪に返す。  
すると試合の状況は動いていた。

インパルスに向かう雷。

しかしその雷を真は放たれた瞬間、瞬時加速で回避して見せた。

『私の雷を避けただとおっ?!』

その驚愕の光景に、ジブリルは思わず声を荒げた。  
荷電粒子ビームは厳密に言えば光速ではない。

その為光速で直進するレーザーに比べれば遅く、その出力によって速度は増減する。現在、世界で公開されている日出由来のビーム粒子技術によって作られているビームライフルは結論で言えば電速よりも少し遅い。

それでもIS戦ではほぼ回避不可能であり、真達はライフルの砲口から射線を予測している。

それと同じ理屈であった。

雷を放つ際に、こちらに剣を向ける必要がある。

それならば射線予測は従来と同じように機能する。

ジブリルの驚愕は妥当なものであろう。

しかし戦場でのそれは致命的な隙を生むこととなる。

『はああああっ！』

インパルスがすでに近距離武装の射程に入っていた。

『っ！甘いっ！』

『そっちがっ！』

振り下ろされるエクレールをあえて受ける。

雷の刃はシールドを切り裂き、容赦なくインパルスマークIIのエネルギーを消費させていく。

だが、その間はジブリルを捉えることができている。

『はいっ!』

ISの装甲を貫通して、衝撃がジブリルを襲う。

アサルトシルエットの固有武装として両マニピュレータ部分に量子展開された対IS装甲用ヒートナックル〔ベオウルフ〕

真はこの装備を使ってジブリルを殴り飛ばしたのだ。

ジブリルのISの腹部、胸部の装甲は見事に歪みすでに優雅さは消えている。

『やるっ!?!』

『インストレーションウエポンコールっ、〔ミサイルユニット〕っ!』

真の音声コールと共に、ウエポンコールシステムが起動。

インパルスはシルエットを交換することなく、肩部に大型のミサイルコンテナが展開された。

動体制御と視覚によるロックオン方式で、相手を逃がすことなくミサイルは追尾していく。

『この程度のミサイルでっ!』

迎撃のためにエクレールから雷を放つ。

ミサイルは迎撃され、誘爆によって無効化された。

しかし爆煙を突き破る2つの影。

それは「ワイヤーウインチ」であった。

ウインチがサーベルに絡まり、引っ張られる。

『なっ、なにいつ?!』

『はあああああっ!』

巻き取られる勢いとスラストで加速したインパルスが、両マニピュレータのベオウルフを起動させ突っ込んでくる。

体制を崩された今のジブリルに迎撃することは不可能であった。

『ぐっ、はあっ!?!』

連撃で腹部装甲を打ち抜き、装甲の大半が破壊され宙を舞う。

ダメージによってインペリアル・ナイトのエネルギーは急激に下がり、すでに4割を割っていた。

(強い……っ！だが私も近衛騎士団長っ！この程度では負けんっ！)

予想外の真の強さに押されていたジブリルだが不思議とその緊張に不快は感じなかった。

長く全力で戦う機会はなかった。知らず知らずの内に鬱憤がたまっていたのだろう。

考えてみれば非は明らかに自分側にある、今さらだがその事に気づいた。

そして彼女は「切札」を切ることを選択する。

インペリアル・ナイトの破壊されていない部分の装甲が展開され、フレームが露出して行く。

そして機体の周囲に目に見えるほどの雷のドームが発生して行く。

(展開装甲っ！あれが切り札かつ！)

第4世代機の特徴である展開装甲、その発動を見て一旦距離を取った真のインパルス。

そのインパルスにオープンチャネルでジブリルから通信が繋がる。

『飛鳥真、先程までの無礼を詫びよう』

『……急になんですか』

真のその態度にジブリルは苦笑する。

『いや、全力で戦う機会など……数年なくてな……知らず知らずの内に貴様に当たっていたようだ。考えてみれば非は明らかにこちらにあった。すまない』

『……別にいいですけど』

頭を下げるジブリル。彼女のその態度を無碍にするほどの怒りは感じてはなかった。真の中でジブリルに対する評価が変わりだしたのだ。

些か武人と言うか好戦的な気質の持ち主であるのだろう。

『そうか。では続きといこう』

迸る雷撃が広がり、その出力が最大値に達する。

『これがインペリアル・ナイトの切札、ホルト・フロム・ブルー「晴天の霹靂」を受けてもらおう』

そのジブリルの言葉と同時にオープンチャネルが切れ、真に向かって雷が放たれた。

雷の軌道は先程までの直進するものではなく、放射線状に広がった後、ターゲットである真に向かってくるものだ。

『っ!』

放たれる瞬間に個別連続瞬時加速リボルバ・イグニッション・ブーストを使って距離を取るが、避け切れなかった。

『ぐうっ！』

数発の雷がインパルスを捉え、シールドエネルギーを減少させる。

その光景にジブリルが賞賛するような表情を浮かべていた。

【晴天の霹靂】ボルト・フロム・ブルを初見でここまで避けるかっ！だが次で決めるっ！

再度チャージに入ったインペリアル・ナイト。

A M B A C によって体勢を立て直した真。

その時であった——彼の意識の中で、「紅い種」が弾け飛んだ。

彼は意識して使えるようになったが、今発動したのは自分の意思ではない。

以前から起こっていた、突発的な「S・E・E・D」の発動だ。

【S・E・E・D】が何でっ!?



浮かぶ疑問、そして数瞬後にはインペリアル・ナイトから雷が放たれる。  
 そんな時、真の耳に【声】が聞こえた。

『マスターっ、全速でインペリアル・ナイトへ加速してくださいっ！』  
 『っ！』

響いたのは少女の声。

その声に真は咄嗟に従い、再度個別連続瞬時加速リボルバレイクニッシュンブリーストを使用して、一気にインペリアル・ナイトへ向かう。

『っ!?!』

咄嗟にチャージを終えた【晴天の霹靂ボルト・フロム・ブル】を放つ。

だが、その軌道は放射線状に広がりがターゲットに収束するものだ。  
 一気に距離をつめたインパルスへは脚部に一発掠ったのみとなった。

『そのまま、ベオウルフでっ!』

『うおおおおおつ!!』

声に従い、両マニピュレータのベオウルフを起動。

超近距離まで踏み込んだインパルス。

『ちいつ!?!』

【晴天の霹靂】ボルト・フロム・フルーを回避されたジブリルは冷や汗を流しながら迎撃の為エクレールを振り上げる。

だが、あまりに遅い。

踊るようにエクレールの斬撃を回避され、再度ベオウルフが機体の装甲へ打ち込まれて衝撃が奔る。

『かはっ!?!』

たまたらずエクレールを手放してしまう。

そこからさらに数発ベオウルフによるボディブローが叩き込まれ弾かれた。その瞬間、インペリアル・ナイトのエネルギーは尽きた。

—インペリアル・ナイト、エネルギー切れにより勝者、インパルスガンダムマークII。  
試合時間、5分1秒—

試合終了のコールが響く。

ゆっくりと降下して行くインペリアル・ナイトを尻目に、真は振り返る。

だがそこには誰もいない。

(さっきの声は……まさか、インパルスか?)

耳に届いた先程の声の心当たり、それは愛機であるデステイニーの様なI.Sのコア人格だ。

何度か「デステイニー」にもその姉妹機に当たる「飛燕」にも会っている。

そして少し前のクルーゼ事件の折、戦友であるレイに呼ばれたときデステイニーが

言っていた言葉を思い出した。

『あ、気づいてくれた？ そうなのっ！ エクスカリバー事件の時、あの分身操作の時くらいかな！ 真との結びつきが強くなったからかも』

彼女はそう言っていた。

（結びつきが強くなったってデステイニーは言ってた。なら俺のS・E・E・Dが勝手に発動するの……？）

『マークII？』

そう考えて自機に語りかける。

するとデイスプレイが立ち上がった。

そこに映るのはどこかデステイニーに似た少女の顔。

デステイニーは美しい金髪だが、彼女は栗色の髪をしている。

服装はデステイニーや飛燕と同じ白いワンピースだ。

『……マスター、もしかして私の声、聞こえちゃってました？』

『あつ、ああ……夢の中で呼び出されることは何度かあったけど、ここまではつきり声が聞こえるなんてな』

そう真が返すと、ディスプレイの中の彼女は驚愕していた。

それは真も同じで、まさか返事が返ってくるとは思えなかったのだ。

『私の声が聞こえるなんてっ！ディスプレイニー姉様に報告しないとっ！』

歓喜の表情を浮かべたマークIIはそう言つてディスプレイの中で飛び跳ねている。

(……とりあえず束さん達に報告しないと。どうなってるんだよ、まったく)

その様子を見て苦笑しつつ、真はため息をついた。

その頃、第3アリーナ

真とジブリルの模擬戦が終了したのとほぼ同時にこちらの箒・鈴VSアイリスの模擬戦も終了していた。

その結果は箒と鈴の勝利であった。

アイリス王女の「セブンス・プリンセス」は確かに強力である。

性能だけで言えば現存のISの中でも間違いなく上位に組み込む。

だが、圧倒的に「経験」が足らなかった。

この1年を通じて実戦を何度か経験している、箒と鈴相手では分が悪かった。

その2人に能力でもある「重力爆撃」グラビティ・クラスタを打ち込んだが、機体がゆっくりしか動けな

い弱点を突かれてしまい、鈴の甲龍の専用パツケージキャノン・フーニャン「砲戦虎娘」による衝撃砲の連続

射撃と紅椿の「雨月」で行動不能となったのだ。

破れたアイリスはジブリルとは別の侍女が慰めており、箒はAピットに戻り鈴は誰か

に呼び出されていた。

そんな中数分前までの模擬戦の様子を管制室で眺めているのは、カナード、東、ラキー

ナ、クローエの4人であった。

その表情は優れない。

「第4世代機が2機も……東？」

ギロツとカナードが束を睨むが、それに苦笑して答える。

「だからあの2機には私は関与してないってー！時結晶と引き換えにそりやI Sの設計図も渡したよ？でも試作機レベルのもので解析なんてそれこそジエっちゃんくらいじゃないと無理無理」

カナードもジェーンの名前は聞いたことがあった。

C・E・ではセカンドシリーズの基礎を作り上げた人物であり、この世界ではインパルスガンダムを作り上げ、カナードも使用した外付パッケージ〔M・E・T・E・O・R〕も彼女の作品だ。

それこそ束に比肩する人物という認識であった。

「となるとだ。誰かが【裏】にいる事になるが……お前やジェーン・ヌル・ドウズ以外に第4世代機を作れるだろう人間などそれこそ一人しか俺は知らない」

「……うん、ラクスだよね」

その名前が出るとカナードはため息を零した。

「でも兄さん、ラクスはもう……」

「またAIみたいなものが残存しているのでしょうか、カナード様」

ラキーナとクロエがそれぞれ意見を告げる。

様々な推論が頭の中にあふれるがどれも要領を得ない。

「……さあな。とにかくだ、俺はルクーゼンブルク公国を調べてみる」

「うん、私のほうでも少し探ってみるよ」

「兄さん、私も何かあれば手伝うよ」

「カナード様、私もです」

東達からの言葉に、カナードは静かに頷いた。

その後、アイリス王女は正式に学園へ編入され、またジブリルも何故か生徒扱いとして編入する事となった。

すでに20歳であるジブリルがIS学園の制服を着ている姿を真耶にからかわれて



いるという珍しい光景を何度か見るようになった。

また真は後で知ったのだが、箒と鈴の模擬戦を鈴の父親である【楽音】が観戦していた。

一夏が楽音とやり取りをしたらしく、何でも模擬戦の後に鈴と彼女の母親も来て、家族で話し合っただけらしい。

それで家庭環境も以前と同じく、修復されたとの事だ。

決闘から3日がたった。

日出工業本社 地下IS開発／整備区域 休憩室

「と、言うわけでやっぱり【S・E・E・D】が発動していてISに搭乗している間なら、ISのコア人格の【声】が聞こえるみたいなんです。ここについてからデステイニーや飛燕で試してみました」

ISスーツ姿で電話をかけているのは真であった。

その通話先は、束だ。

連絡は【S・E・E・D】についての連絡であった。

『うーん……ごめん、まだ分からないんだ。この前の決闘の後の検査も正常だったし』  
「そうですか……でもなんでまた急に……」

流石の東でも今真の身に起こっていることについては完全に把握は出来ていない。

以前の様に【S. E. E. D.】が生身で発動する事はこの3日間の間で完全になくなった。

その代わり、【S. E. E. D.】を発動させるとISのコア人格達の言葉が聞こえるようになっていた。

また発動させていない状態でも不意に聞こえる事もあった。

『そもそも【S. E. E. D.】ってものがよく分からないんだよね。あつくんやラキちゃんの場合、身体能力や空間認識能力が一時的に向上するんだよね?』  
「はい。いつもは難しいマニニューバでさえその状態なら容易にできるようになったりしますね」

『ISには確かに搭乗者と深くリンクするシステムは搭載されてるけど……ごめん、もうちよっと詳しく調べてみる。いざとなったらアスラン・ザラ使って人体……ゲフンゲ

フン、何か分かったら連絡するよん』

「あはは……すいませんが、お願いします」

物騒なワードは聴かなかったことにして、頭を下げながら真が言う。

『そう言えば、あつくん今どこにいるの?』

「あ、伝えてなかったですね。今は日出本社の地下にいるんです」

『何で?』

「デュノア社関係の事とだけしか聞いてないですね。シャルロットも呼び出されてるみたいですよ」

真が何故平日の昼間に、ここにいるのか。

それは優菜に呼び出しをされていたからだ。

真だけではなく簪も、そして「シャルロット」もだ。

『え、何、デュノア社またやらかしたの?』

「はは、そういうわけじゃないみたいですよ」

おそらく素で疑問を浮かべた東に、真は苦笑する。

中が見えるよう休憩室はガラス張り、外で優菜が手招きしているのが見えた。

「あ、東さん。そろそろ」

『うん。それじゃあね、何か分かったら知らせるから、あつくんも何かあったら教えてね』

「はい」

そう言って通話は切れる。

携帯をしまってから、休憩室を出て小走りで優菜の元に向かう。

「おっ、来た来た」

「遅れてすいません」

優菜に軽く頭を下げる。

そんな真にISスーツ姿の簪が問いかける。

「真、篠ノ之博士と連絡どうだった？ 身体は大丈夫？」

「ああ、東さんの方もさらに詳しく調べてくれるってさ。あの決闘の後から」[S. E.]

E. D.] が生身で発動する事がなくなったから、むしろ調子はいいんだ」

「……そっか、うん。分かった」

真からの言葉を聞いて簪は笑みを浮かべる。

「さて、役者はそろったわね」

スーツ姿の優菜と利香、相変わらずヨレヨレな白衣を身に着けたジェーン、ISSスーツ姿の真、簪、そしてシャルロット。

「あの一、何で僕呼び出されたんでしょうか？」

「えっとね、その答えはあれなんだ、シャルロットちゃん」

優菜が場違い故か萎縮しているシャルロットの背後を指差す。

その背後にあるのはISであった。

どこか彼女の駆る「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」に似通った造詣の機体。

「あの機体の名前は〔コスモス〕、君の父君であるジオルジュ・デュノア氏、ひいてはデュノア社から提供された〔第3世代IS〕なのよ」

「とっ、父さんから?」

「ええ」

そこから優菜の説明が始まった。

現在のデュノア社はラクス、歌姫の騎士団が瓦解した後にIS部門からの撤退を表明していた。

そこに目をつけた優菜はデュノア社とある取引を持ちかけたのだ。

それは「技術連携」であった。

IS部門の技術と引き換えに他部門、日出が得意としている災害救助用のパワードスーツや重機などの技術提供を持ちかけたのだ。

これにジオルジュは乗る事にした。

正式な文書等の発行には少し時間がかかり、ようやく形となったのは「コスモス」が

提供された後であった。

その際に優菜はあるものを受け取っていた。

「それと、はい、これ」

懐から封筒を取り出して、シャルロットに手渡す。

「あの、これは……?」

「えっとね、その【コスモス】って機体を技術提供の一環として受け取った後、ジヨルジユ氏から貰ったのよ。まだ忙しくて連絡もあまり取れないからって」

「……あけていいですか?」

そのシャルロットの言葉に頷く優菜。

封筒を開けて、中に入っていた手紙を読み始める。

少し経って、手紙を読み終えたシャルロット。

その瞳からは涙がこぼれていた。

「……時間、取った方がいいかしら？」

何を書いてあつたかは優菜は知らない。

だがつつといい事が書かれていたのだろう。

彼女が流している涙は悲しみからのものではないと分かるからだ。

「いつ、いえ。大丈夫です」

慌てて涙を拭う。

その動作から封筒の中に残っていたあるものがポロリとこぼれた。

それに真が気づいた。

「シャルロット、何か落ちたぞ」

「えっ、あつ……【葉】だ」

拾い上げたそれは【葉】であつた。



押し花で作った手作りの「葉」、花は「コスモス」が使われていた。

「……これ、母さんが父さんにあげた……っ」

こみ上げてくる感情を何とか抑えたシャルロットは、IS「コスモス」に向かう。

「……コスモス」

目の前に鎮座している機体に正直彼女は迷っていた。

今のラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは自分の愛機であるのは間違いない。

乗り換える気など起こらない。

だが、母の思い出の花の名をつけた機体を送ってきた父の行為を無碍にしたくない。

このタイミングで優菜が自分にこの機体を渡そうとしているのはおそらく乗り換えを推奨しているのだろう。

その2つの気持ちの間で今、彼女は揺れていた。

そんな時であった。

『……触れて、私に……シャルロット様』

かすかな声量であったが真の耳には、声が聞こえた。

その声は間違いなく、今シャルロットの目の前にある「コスモス」の声。

その声を汲み取り、真がシャルロットに声をかける。

「シャルロット、コスモスに触れてやってくれ」

「え、真、それってどういうこと？」

「今は何も言わずに……頼むよ」

真のその態度に首をかしげながら、シャルロットは言われた通りにコスモスに触れる。

すると変化が起こった。

シャルロットが身につけている待機形態の「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」が光を放ち始めたのだ。

数瞬遅れて、目の前のコスモスも同じ光を放つ。

「っ、何がっ!？」

突然の自体に真以外の皆が身体を強張らせる。

だが真は笑みを浮かべていた。

「大丈夫、いいことになるはずです」

光が収まる。

そこにはI Sを纏ったシャルロットの姿があった。

しかし彼女が纏っているのはリヴァイヴでもコスモスでもなかった。

「嘘でしょ、コアの反応が2つ……まさかりヴァイヴとコスモスが一体化したのっ!？」

即座に計器を確認したジェーンの声が洩れる。

『……【リイン||カーネーション】それがこの機体の名前です』

微笑みながら、瞳から涙がこぼれる。

2つの機体が1つになる時、彼女はある言葉を聞いていた。

それは父と母の言葉。

自分を想ってくれる、両親の言葉だ。

『……母さん、そして父さん、ありがとう。僕は2人の力で……前に進むよ』

彼女は誓うように告げた後、機体を待機形態に戻した。

この後、世界初のデュアルコア搭載型ISとして「リインカーネーション」は発表される事となる。

初のデュアルコア搭載という機体仕様の為、問い合わせが日出とデュノア社に押し寄せたが優菜とジョルジュはこれを全て企業秘密として押し潰した。

彼女の祖国であるフランスはこの発表を受けて、【ジャンヌ・ダルク聖処女の再来】等連日ニュースで報道している有様であり、シャルロットは顔を真っ赤にしてやめると言っているのだが、政府は聞いてくれないとのことだ。

また同期であるフレイは「私聞いてないっ！」とシャルロットに詰め寄ったが、ラキー

ナ曰く、機体が発現した経緯を知った途端シャルロットにご飯を奢ったりするなど微笑ましい場面がみれたとの話だ。

同日

IS学園から離れたとある街。

カフェの1席に赤髪の女性が座っていた。

一般的には充分美女と言える女性であるが、その格好は奇妙であった。

全身にベルトな様なモノを巻きつけ、その上に天道虫や海豚の様なブローチをつけていると言う奇抜なファッションだ。

そんな彼女の座る席の向かいに相席してきた者がいた。

女性は相席してきた相手に視線を移す。

世界中に公表されている男性搭乗者の内の1人、カナード・パルス。

彼とは公表以前にも何度かあったことのある間柄だが、以前とは違い髪を大幅に切っているためぱつと見ただけでは彼と気づける人間は多くないだろう。

それに服装も公表された際に身に着けている戦闘服とは違いフォーマルなスーツだ。

イメージが離れているため、今の彼を公表されたカナード・パルスと結び付けられる

人間は少ない。

「カナードの兄さんよ、こんなところで取引だなんて意外だねえ。それにずいぶんイメージエンしたじゃないの。女でもできた？」

「木を隠すなら森だ。世間話なんてする気はない、さつさと情報をよこせ」

「おおっと怖いなあ。ホラ、これが頼まれてたリストだよ」

情報屋から受け取った端末の電源を入れる。

彼女に依頼した情報は過去数年に遡ってルクーゼンブルク公国が行った軍拡の詳細。

その中で最も多いのがISの機体数の増加だ。

小国であるルクーゼンブルクが、それこそ大国のIS部隊以上のISを保有している。

世界に公表されている公式のコア数に含まれていないISコアを用いていることは東が証言している。

まだ自分たちと出会う前の彼女が公国に渡したのだという。

だがそれ以上の事はしていない。第4世代機の情報なども渡していないという。

そしてもう一つ。

ルクーゼンブルク公国王家がここ数年で公式、非公式を問わず会談した人物、組織、団体、国家のリストだ。

数年前まで遡っているため、情報量が多いがざっと目を通してから女性に視線を向ける。

「よく調べ上げたな」

「ま、アタシもこの道のプロだしね。それにルクーゼンブルク公国のセキュリティは大したものじゃないからね」

「情報は確かに。今から送金する」

懐から出したデバイスを数度操作して、彼女の口座に送金する。

その金額は十萬ドル。だが得た情報に比べれば安い。

「はいよ、確かに。もしよかったら今夜食事でもどう……っっていないし」

送金し終わったカナードはすでに席から離れており、その後姿を見ながら彼女は眩く。

「相変わらず取り付くシマもないなあ……顔はいいのに。あ、店員さんこのトマトのサラダーつお願いします」

情報屋の女はそう言つて近くを通りかかった店員に言う。

注文を終えた女が視線を戻すと、すでにカナードの姿はなかった。



## PHASE 4 赤月が昇る

日出工業とデユノア社のリイン||カーネイションの発表から2日後

IS学園 学生寮 真の部屋

「さて朝飯つと」

日課であるトレーニングを終え、シャワーを浴び終えた真は制服に着替えまだ少し湿っている髪の毛のまま自室から出る。

「あ、真。おはよう」

「おはよう、簪」

制服姿の簪が彼の部屋に向かっていたのか扉のすぐ横にいた。

「朝ごはん、食べに行こう?」

「ああ。最近トレーニングの量増やしたから腹へってさ」

カナードとの格闘実演を経て、全盛期である傭兵時代の自分並の身体能力を得るために真はトレーニングの量を増やしていた。

具体的には走り込みのと格闘訓練の量を増やしている。

身長などはまだ追いついていないが順調に伸びており、そう遠くないうちに傭兵時代の自分に追いつけるはずだ。

「最近沢山食べるのはその影響なんだ」

「ああ。それでも大体いつもの一夏よりちよつと多いって所かな。それにしてもアイツ  
どんだけ健啖家なんだよ。もしアイツが赤鳥傭兵団にいたらアビーブチ切れてただろ  
うなあ……」

「アビーさんって虚に似てる人だっけ」

「うん。雰囲気とかが凄く似てるって思ってる。傭兵団の懐事情が悪かったのはまあ、  
俺のせいなんだけどな」

かつての自分が報酬を勝手に減らしたりして、団員であるアビーやヴィーノ達が怒り

狂っていたのを思い出して苦笑する。

話を切り替えるために朝食のメニューを簪にたずねる。

「さて、今日は何を食べようかな。簪はどうする?」

「私は朝あまり入らないから少しいいかな、パンとサラダで」

「パンか……俺はやっぱご飯かな。定食色々あるしどうしようかな」

そんなこんなで食堂に到着した2人。

するとまず何やら騒がしくしている箇所視線が移った。

そこでは一夏がどこから用意したのかギロチンにかけられ、今から刃が落されるという絶体絶命な状況であった。

それをまるでどこかの小動物のようにつつと目を細めて一瞥した後、真は簪の手を取って朝食を取りに行った。

簪もその行動に苦笑しながらも特に異議はなかった。

さて朝食を選んだ真と簪であったが、見慣れたメンバーがいるテーブルへと向かう。

「カナード、ラキーナ、セシリア、おはよう」

「おはよう、ラキーナ、カナード、セシリア」

「ああ」

「おはよう、真に簪さん」

「おはようございませす、真さん、簪さん」

真と簪がカナード、ラキーナ、セシリアの向かいの席に座る。

お盆の上には、真は焼き魚、味噌汁に漬物、そして大盛りのご飯の焼き魚定食。

セシリアは小さめのサンドイッチ、簪はフレンチトーストにサラダを選んでいた。

「珍しいな、カナードが食堂にいるって」

「昨日は織斑千冬から書類の処理を押し付けられてな、遅くなつてしまつたから寮監の部屋で寝たんだ……調べる事があると伝えておいたが無視されてな」

そう言つて味噌汁を口に運ぶカナード。

彼が選んでいるのは目玉焼き、味噌汁、漬物、そしてご飯の目玉焼き定食だ。

日系人であるためか箸の使い方は日本人の真と遜色なかつた。

「おおーい！無視かあ！？無視なのかあ？！？しいいん？！？カナアアドオオ？！？」

ギロチンにかけられている一夏の叫びが木霊する。

それのため息をつきながら真とカナードは視線を移す。

簪とセシリアもそれに釣られて苦笑しながら視線を移した。

簪、鈴、シャルロット、ラウラのいつもの4人に加えてその周りには赤髪の女子生徒や緑髪の女子生徒もいた。

全員が全員、表情は笑みを浮かべているが怒気が漏れていた。

「悪いな一夏、この前のバレンタインで今月のフォロー権は全部消費されたんだ。来月チャージされるまで生き残ってくれ。戦わなければ生き残れないんだ」

「フォロー権って何？！？初めて聞いたよ？！？」

「今日も味噌汁がうまい」

ずずずと味噌汁を飲んだ真はその叫びを無視する。

何とか動かせる首を動かして、一夏は視線をカナードに移す。

「カナードおおおっ！見てないで助けてくれえー！先生ー！」

「今は依頼の受付はしていない。それに俺は厳密には正式な教師ではないから、お前を助ける義理も義務もない」

漬物を口に運びながらカナードが一夏の言葉を一蹴した。

「ぐああああ、理不尽だああああ!!」

「さて、覚悟はいいかしら、一夏あ？」

笑いながらも青筋が浮かんでいる鈴が、ギロチンの刃に触れて告げる。

「よろしくないいいっ!!」

ジタバタともがくが、どうにもならない。

「んで、結局のところ何があつたんです？」

その様子を少し離れた場所で見ているアイリスとジブリルに真は尋ねる。  
模擬戦を終えた後、真達とアイリス及びジブリルの関係は改善されている。

「織斑一夏とアイリス王女……いや、アイリスは一夜を共にしたとの事だ」

ジブリルがそう真に告げる。

余談だが、模擬戦のあと正式に編入されたアイリス王女は自分の事をアイリスと呼べとジブリルに告げていた。

当初は戸惑ったジブリルだが、王女の意志は固くまだ慣れていないがアイリスとして生きることを告げた彼女の意思を尊重してアイリス呼びを通していった。

「はあ、一夜を共にしたって?」

「私が今朝部屋に出向いた時に、織斑一夏はアイリスをその……同衾の形で抱きしめていたのだっ!」

異性交際がないジブリルは少し頬を赤くして説明を続ける。

「そしてアリスが言ったのだ、織斑千冬も認めている公認のその……カップルだどつ！」

それに真は大体の事を察した。

おそらく一夏は何もしていない。

何故アリスが一夏の部屋にいたのかは知らないが、優しい一夏の事だ。

アリスの悩みでも聞いてあげたのだろう。

それに彼女は明らかに一夏に好意を持っている。

その流れで同衾の形になったのだろう。

そして朝ジブリルに見つかって騒ぎが大きくなり、箒達の耳に入って今に至るのだろう。

長年朴念仁と友人として付き合っている真からしてみれば大体の流れは想像できた。

「真、どうするの？」

隣にいる簪が真にたずねる。

流石にそろそろ止めてあげないと気の毒だ。



「はあ………つたくアイツはさあ………」

ずずつと一気に味噌汁を飲み干した真は席から立ち上がったって、箒達の下に向かう。

「おはよう、箒」

「おはよう、真。すまないが今はこの不屈き者の首をどうやって落とすか考えているんだが？」

「落ち着けて。本当に一夏が何かしたと思ってる？」

真のその言葉にジツと彼を睨むように視線を移す箒。

それに苦笑しながら彼女に尋ねる。

「箒が同室だった時に、一夏が何かしたか？」

「……いや、そんな不埒な行いはしなかった」

「だろ？そりゃ、不慮の事故は仕方ないけど、それ以外はなかっただろ？」

コクンと箒が頷く。

「シャルロットも同室だったからわかるだろ。同衾したって言っても本当にただ寝ただけだろ、なあ、一夏？」

「さつきからそう言ってるだろおお！」

ポンポンとギロチンにかけられている一夏の背中を叩く。

ギイギイと軋む様な音を立てているが大丈夫だろうかと一瞬不安になった真だが、続ける。

「うっ、うん……そう言えば僕の時もそうだったよね。優しく話聞いてくれたし」

「ほらな」

「……そうだ、一夏がそんな不埒な真似をするはずがないっ！すまない、すぐに外すっ」「うんっ、ごめん、僕達が間違ってたよっ！」

箒とシャルロットは一夏をギロチンの拘束から解き放つため、拘束具を外していく。

「……箒達あつさりと裏切ったわね。てか、真、アンタ手馴れすぎてない？」

そりやなと肩をすくめて表現する。

幼い頃から何度も経験しているのだ、真もいい加減手馴れてしまっている。

「鈴も、本気で一夏がそんなことするわけないって思ってるだろ」

「そりや……そうだけど」

鈴はまだ納得はしていないようだ。

ならば切札だ。

「……今度、一夏にそれとなく遊びに行くよう言うておく。その日付は鈴だけに教えるからさ」

最後は鈴だけに聞こえる声量でそう告げるとツイントールをピコピコと動かしながら鈴が目を見開いた。

「っ！それ、絶対ねっ！」

「ああ」

「くつ、鈴もか……多勢に無勢だな」

「ラウラも納得してくれって、頼むよ」

そう言つて手を合わせる。

ラウラも仕方ないかと呟いて了承の意を示した。

その様子を見て他の生徒達も納得したかのように離れて行く。

「なんか凄く手馴れてるね」

その様子を少し離れたテーブルで見えていたラキーナが呟く。

テーブルには真が箒達を宥めている間に、楯無、本音、フレイが合流していた。

「真、助かったよ」

「つたく……朝から疲れるんだよ」

ギロチンから解放された一夏が真に言う。

苦笑しながら頭をかく真。

いつもの日常だと真が思った瞬間、食堂の窓から攻撃態勢の【IS】が見えた。それに気づいたのは真とカナードの2人だけであつた。

「伏せろっ！」

カナードがテーブルを蹴り上げ、簡易的なバリケードにする。

同時に真は一夏を突き飛ばして、バリケードに隠す。

突き飛ばされた一夏たちのそばにいた箒たちも共に倒れこんだりしつつも机の陰に隠れていた。

一夏を突き飛ばしつつ、簪を抱え込んで真もバリケードに隠れている。

瞬間、食堂にレーザーが降り注いだ。

レーザーが食堂の施設を焼き、女生徒達が逃げ惑い辺りは一気に混乱に包まれた。幸い、そのレーザーによって死傷者は出ていないように見える。

「白昼堂々と襲撃かよ、簪、大丈夫か？」

「うっ、うん」

腕の中で抱きしめている彼女に確認を取り、内心ほっと胸を撫で下ろす。するとI Sを緊急展開しながらカナードの叫ぶ声が聞こえる。

『ちっ、レーザー搭載か。真っ、他の連中もI Sを展開しろっ!』

真達がそれぞれI Sを展開する。

『外に見えた機体に覚えはあるか、カナード?』

『いや、見たことはない』

シルエット無しインパルスとドレッドノートHを纏った真とカナードが状況を確認する。

すると、真っ赤な機体が群れをなして食堂に流れ込んできた。

その数は優に10機を超えている。

(無人機かっ!?)

見たことの無い赤い機体、本来搭乗者がいるべきところにはまるでマネキンの様な機械人形が鎮座している。

即座に「フオールディングレイザー対装甲ナイフ」を2本展開し、構える。

室内でそこまで広くない食堂ではビームライフルなどの射撃武装は施設や避難している生徒達に被害が出る可能性がある。

1機がインパルスに向かって突撃してくる。

『インストレーションウエポンコール、「ワイヤーユニット」っ！』

ウエポンコールシステムが起動して、素体のインパルス腰部にアサルトシルエツトに装備されているワイヤー射出装置が展開された。

即座にワイヤーウインチが射出され、迫る無人機のマニピュレータに絡まり、動きが鈍る。

『はあああああっ！』

動きが鈍った無人機ヘインパルスのフォールディングレーザーが迫り、マニピュレータを切り裂く。

機体はどうやらPS装甲ではない様であり、実体武装であるフォールディングレーザーも有効であるようだ。

それぞれが自機に迫る無人機と相対している。

『目標確認、捕獲開始』

機械音声が冷やかに告げ、数機がかりで向かうのは筈であった。

「くっ、何故だ、紅椿が展開できないっ!？」

ISを展開しようとしても、【紅椿】はまるで自分を拒否しているかのように反応しない。

そして無人機が筈へマニピュレータを向けると、放たれる謎のエネルギーによって彼女は拘束されてしまう。



「くっ、離せっ!?このっ!」

『箒っ!』

白式・雪羅がマニピュレータを拘束され連れ去られていく箒に伸ばす。

だが——届かない。

箒を拘束した無人機達は目的を達成したかのように、真達との戦闘を止めて、食堂から出て行く。

『逃がすかつ!!』

『追うぞ、一夏っ!!』

『ああっ!!』

インパルスがアサルトシルエットを展開し、白式・雪羅と共に即座に後を追う。

そして食堂の窓から出た瞬間、2機に向かって数機の無人機が突撃して来た。

インパルスは小型エクスカリバー「ガラティーン」を、白式は「雪片」を構えて相対する。

『駄目っ！真っ、織斑君っ！逃げてっ！』

敵機を分析していた飛燕の簪からの叫びが聞こえる。  
咄嗟にシールドを構えて一夏を庇う。

瞬間、突撃してきた数機の無人機、その全てが〔自爆〕した。

『真っ！』

爆炎が晴れる。

すると中から〔翡翠色の光の膜〕が現れた。

インパルスと白式を包み込んでいるISがいたのだ。

『自爆か……真、織斑一夏、無事か？』

『ああ、助かったよ、カナード』

先の一瞬、真と一夏に数瞬遅れながらもドレッドノートHも飛び出していたのだ。

そして自爆の瞬間に割り込み、「AL」を最大展開して2機を守ったのだ。

だが、すでに敵機の反応はロストしていた。

つまりは箒は攫われてしまったということだ。

『箒いいいいいつ!!』

『……一夏』

一夏の叫びが虚しく響き、それにどのようなように声をかけていいか、真には分からなかった。

「……………はどした？」

頬を撫でる優しい風と身を打つ波の感覚に箒の意識は覚醒した。

起き上がって辺りを見回す。

どこまでも続く果てしない水平線と真っ白な砂浜。

そして明け方にも見える空。

無人島か、と滑稽な考えが浮かんだがそれをすぐに否定できるだけの知識はあった。

「これはまさか……真が言っていたI Sの空間か？」

真のデステイニーガンダムの場合はどこまでも続く綺麗な【花畑】だと聞いている。歩きながらそう考えていると気配を感じて立ち止まる。いつのまにか、背後に人の気配があった。

「誰だっ！」

振り返るとそこには驚愕の人物がいた。

「お前は……私……っ!？」

幼い姿をしているが、紛れもなく自分<sup>様ノ之帯</sup>。

心の闇の中にいた力の象徴たる自分。

赤い双眸を携えた少女が箒に口を開く。

「私が代わってあげる」

狂喜に満ちた笑みを浮かべた自分が近づいてくる。

「私が代わってあげる、力のないアナタに」

咄嗟に後退りするが、足が動かない。

足元を見ると泥の様な何かに、ずぶずぶと沈んでいつている。

その泥は逃げようとする行動のみならず、箒の心を縛り付ける。

「もう眠りなさい。後は私が代わってあげるから。あなたの欲しいものすべて、手に入  
れてあげる」

それは誘惑、墮落への誘いの言葉。

とても心地のよい言葉であり、箒の心には安らぎが満ちていた。

「墮落とは心地のいいものよ」

(……私は、私は……)

意識が落ちかける。

その時、ふと思ひ浮かんだ記憶。

『箒は一夏の事が好きだから一緒にいたいんだろ?』

友人からの言葉。

その言葉が墮落して行く心を繋ぎとめた。

「私はっ！私はお前などに代わられるつもりはないっ！私の欲しいものは私が、自分の手で掴んでみせるっ！」

無理矢理泥の中から這い上がろうとする箒。

すでにその豊満な胸まで沈み込んでいたが腰辺りまで這い上がる。

「っ、まさか抵抗するなんて……っ!」

放棄の抵抗に、もう1人の箒は明らかに狼狽していた。  
だがすぐに表情を笑みに戻した。

「……驚いたけど、無駄」

クイツと彼女が手を動かすと、泥が盛り上がって箒を包み込んだ。

「うっ、うぐ……っ!」

そして箒を包み込んだ泥はそのまま、元の地面へと戻っていく。

「……あなたはもう眠っていればいいの」

箒を取り込んだもう1人の箒はそう呟く。

すると彼女の周りに、真紅のISが展開され装着されていく。

『後はこの私【赤月】あかつきが、イレギュラーイレギュラーも何もかも全てを片付けてあげるから』

明け方の夜空であつた空間には、いつの間にか真紅の月が浮かんでいた。

それはまるで今の箒の双眸の様であつた。



## PHASE 5 別 さようなら 離

「なんでだよっ！なんですぐに助けに行かないんだよっ！」

IS学園の地下区画、作戦会議室室に一夏の咆哮が響く。

今この作戦会議室には真達をはじめ、専用機持ちの人間が集められている。

教員の姿は千冬と真耶の二人しかいないが、これには理由がある、C・Eの事を知っているかいないかだ。

また学園に軟禁して用務員の立場を与えていたミシエルもそこにいた。

「落ち着け、馬鹿者つ。篠ノ之のバイタルサインは把握している。今迂闊に動いたら何をするかわからんのだ」

「だからって……箒は捕まっちゃったんだぞつ、訳の分からない連中につ！何をされるかっ！」

思わず千冬に叫んでしまった一夏の肩に手を置く。

それは真であつた。

「一夏、気持ちにはよくわかる、だけどまずは落ち着けよ」

「真……っ！」

「箒は人質だ。つまりは命は保証されてる立場だ。今むやみに動いたらそれが危うくなるかもしれないんだ」

「っ！だからっつて、このまま動かないでいたら箒は……っ！」

「だからっ！今束さん達が必死で情報収集してくれてるんだろっ！」

真も思わず叫んでしまい、室内はしんと静まり返つた。

内心しまったと思いつつ、皆に頭を下げてから一夏の目を見て続ける。

「ごめん。叫んじゃまって。でもまるで昔の俺を見てみたいだったからさ」

「昔の……真？」

「ああ、シン・アスカだった時の俺さ」

真の脳裏に浮かんだのは、かつて救えなかった少女「ステラ・ルーシエ」の姿。

ミネルバ時代、捕獲したエクステンデットである彼女をザフトは貴重なサンプルとして研究材料にする予定であった。

しかしかねてから彼女と数度触れ合い、亡き妹と重ねていたシンにとつてそれは許しがたいことであつた。

友人であるレイの力添えもあり、彼女を連合に返却するといつた独断行動を起こしてしまつた。

この行動が後のベルリンの惨劇につながるなど当時のシンには思つてもみなかつた。

自分の独断が、多くの悲劇を起こしてしまつた。

結果論でもあるが、真の心の中には暗い傷として残っている。

今の一夏の姿はその時の自分と重なつた。

だから真はかつての自分の過ちを、友人に犯してほしくないのだ。

「ステラっていう娘をさ、俺が独断で彼女を救うために動いたんだ。その結果……ベルリンは火の海になつたんだ」

真の言葉に作戦室にいた皆が息をのんだ音が聞こえた。

(……真)

簪が真の表情を見ながら思い出す。

彼女はその光景を見たことがあった。

エクスカリバー事件の際に、A I ラクスのホワイトネス・エンプレスの単一仕様能力に囚われた時だ。

ボロボロになった街、逃げ惑う人々の姿、街を破壊する巨大なMA、そのMAに向かっていくMS。

そしてMAの足元で冷たくなった少女を抱きかかえて慟哭する彼の姿を。

「だから、お前には同じ轍を踏んでほしくない。それに皆だって箒の事が心配なんだよ。もつと周りを見てくれ、俺達は仲間じゃないのか?」

真にそう言われて、彼は作戦室にいる皆に視線を移す。

「一夏、すぐに熱くなるのはあんたの悪い癖よ、まずは落ち着きなさいな」

「そうだよ、僕たちだって箒の事は心配だよ。でもまずは現状を把握することが大切な

んだよ」

「気持ちばかりが先走ると足元をすくわれる。箒を助け出すためにはまず私達が冷静になるんだ」

鈴、シャルロット、ラウラが諭すように一夏に言う。

「……皆。分かったよ、まずは落ち着く……だよな」

それに静かにうなずいて一夏が言う。

『さて、東。こちらは落ち着いたが、そちらはどうだ』

一夏が落ち着くまで待つていたカナードは空間投影ディスプレイを展開して通信先の東に尋ねる。

表示されたディスプレイに映る東は鬼気迫る表情で絶えず作業を続けていた。

『情報収集なら進めてるよ。箒ちゃんの居場所は正確につかんでる。太平洋のど真ん中

の座標にいるみたい』

『……海洋プラントでもあるのか？』

先のクルーズ事件の際に利用された、日本がかつて進めていた計画の残滓。海洋プラントが残っていたのかとカナードが尋ねるが、それに首を横に振る。

『ん、違うみたい。念のためデュランダル……じゃなかった、更識蔵人からもらったデータを洗ってみたけど、本当に何も無い座標なの』

『そうか。他に分かったことはあるか？』

『うん、敵というかあの無人機について分かったよ』

束の言葉にカナードの目が見開かれる。

『あの無人機の名前は【あけぼの緋蜂】、名前から分かる通り、箒ちゃんの【紅椿】のデータを流用した量産型ISなんだ』

「量産型の紅椿って……いったい誰が？」

一夏の疑問の声に答えるように別のディスプレイが立ち上がる。

そこに映っているのは白衣を着た女性。

その彼女を一夏達は見たことがある。

エクスカリバー事件の際に「O・V・E・R・S」を用意した女性だからだ。

その女性の名前は――

『篝火ヒカルノか』

『うん。エクスカリバー事件の時にデータ抜いてたんだろうねえ。やるじゃんと思ったけど、さつき倉持のデータベース覗いてみたら、機体を誰かに奪取されたらしいよ、ざつまあ。あ、スペックデータはコピーと削除しておいたから、ドレッドノートに送信しておくね』

愉快に黒い笑みを浮かべる束に、千冬がゴホンと咳払いして言う。

「束、篠ノ之を攫った理由については分かるか？」

『予想は付いてるよ。箒ちゃんを攫った理由、それは紅椿の「単一仕様能力」を使ってこの無人機たちを起動させることだと思ってる』

「成程。無人機を稼働させるエネルギーを箒と紅椿を使って補ってるって事ですか？」  
『多分ね』

真の言葉に束が返し、千冬が再度彼女に尋ねる。

「束、今回の相手だが……【歌姫の騎士団】なのか？」

『その線を考えていたけど、違うかなって思うよ』

「何故だ？」

『歌姫の騎士団、つまりはラクス達の残党だけどここまで大規模に行動を起こす力が残ってるかなって。エターナルもすでに失ってるし、当のラクスも、AIラクスもいないわけだし。そうでしょ？ ミシエル・ライマン？』

束が壁に背中を預けて様子を見ていたミシエルに言葉を投げる。

「確かになあ。隊長……じゃなかった、クルーゼも言ってたぜ。彼らはもはや死に体だつてよ。多分クルーゼが接触してた別の【組織】もしくは連中じゃねーかな？」

『組織ねえ……そこそテログループなんて色々あるし』



そこまで東が続けた時であった。

別の投影ディスプレイが突如開かれた。

『緊急の連絡があるから割り込ませてもらおうよ』

それに映るのは、優菜であった。

真と簪を通じてすでに日出工業にも箒が攫われた情報は届いている。学園内では緘口令が敷かれているが、これは千冬が許可していた。

「優菜さんっ、どうかしたんですか?」

『ん、君達に伝えるべき事があってね。この映像を見てくれ』

彼女がそう言って真達にとある映像を見せる。

それは海のと真ん中に浮かぶ人工物の映像であった。

全長数kmに及ぶ人工島であり、マスドライバー施設も完備している。

これを真やカナードは知っていた。

「これは……!」

「ギガフロート?!」

真が優菜が映し出した施設の映像に声を上げた。

『そう、ギガフロート。C・Eにあつたものと同じだよ、些かダウンサイジングされているけど。つい先程アメノミハシラの観測員が見つけたんだ。座標は太平洋のど真ん中。そこに突如として出現した』

「突然って……ミラーージュコロイドですか?」

「どうだろうね、とディスプレイの向こうで優菜が首を傾げる。

「……ここに箒がいるんですか?」

一夏が優菜にたずねた。

『んー、篠ノ之博士、どうです?』

『私が掴んでる座標と位置が全く同じだからその可能性は高いと思うよ、いっくん』

東の言葉を聞いて一夏が一度下を向く。

そして何かを決意したように、顔を上げた。

「俺は箒を助きたい。だから皆、力を貸してくれ」

その表情を見て、千冬はため息を零しながらも微笑んだ。

「……止めても無駄か」

『まあ、座標に何かがあるかも分かったしね。それじゃちーちゃん、作戦指示ヨロシクね』  
「分かった。それではこれより篠ノ之箒救出作戦を開始する。専用機持ちは、各員機体の整備と点検を行う。教員はバックアップを。出撃は1時間後だ」

千冬の指示の元、一夏達は作戦会議室を出て行くが、真と簪は優菜と会話を続けた。  
た。

「優菜さん、今、デステイニーのオーバーホールはどうなってますか？」

『ん、デステイニーについてだけど作業の進捗が遅れててね、大体8割くらいなんだ。何分TP装甲への切り替えなんて初めての作業だからね』

「完成度8割だったら、それでも……！」

真が懇願するように言うが、それに首を横に振ってから優菜が答えた。

『それ、ジエーンが納得すると思うかい？』

「……それはそうですね」

『彼女は根っからの技術者だからね。妥協なんて許さないよ』

根っからの技術者、確かにその通りだろう。

真も彼女は東と同レベルの天才であると認識している。

インパルスやデステイニー、自分の作品を愛している彼女が妥協など許すはずがない。

優菜の言葉を理解した真はうなずいて答える。

「……分かりました。インパルスマークIIで自信がないって訳じゃないですが……やるだけやってみます」

『おっと、別に間に合わないとは言っていないよ?』

「え?」

「それってどういう……?」

真と簪が疑問の声を出すと、優菜は苦笑しながら続ける。

『船を一隻出せるようにして、ジエーンにそこで作業してもらおうように調整してるよ』

「本当ですかっ!?!」

『うん。まあ、場所は戦場になっちゃうけどね……そこは千冬達に任せるってことでいいかな?』

「……勝手に話を進めるな、優菜」

優菜が千冬に話を振り、彼女はため息を吐いて答える。

「デステイニーガンダムの受け渡しについては了承した。そちらが出す船には真耶を護衛につけよう」

『感謝するよ。実はすでに船は出してるから、座標のポイントで』  
「分かりました」

真が頭を下げると、ディスプレイが消える。

「真、頑張ろうね」

「ああ」

簪の言葉に真は頷いて答えた。

---

そして1時間後。

IS学園を出発したブレイク号。

クルーゼ事件の時と同じく、ブレイク号を母艦にした作戦となっている。

そして束が掴んだ座標まで数時間、そこには確かにギガフロートが存在していた。

『まるで蜂の巣、だな』

すでに真達はブレイク号から出撃して、ラウラがギガフロートの様子を見てそういつた。

流石にマストドライバーなどは存在してはいないが全長数10km、C・E.と同規模のギガフロートであるのは間違いない。

大きく異なっているのは六角形のコンテナが無数に積まれているのだ。

まさにラウラの言うとおり、蜂の巣にも見える。

『つ、ISの反応、数は……10、15……さらに増えるっ!?!』

センサーで周囲を確認していた簪が増え続ける敵の数に驚きの声を上げた。

『行きなさい、私の【朱蜂】あけぼら達……ふふ』

知った声が響く。

それは友人である箒のもの。

真もその反応を捉えていた。

『あれは……【紅椿】……なのかつ?』

太陽を背に一行を見下ろしているのは、確かに【紅椿】であった。しかし、禍々しく各部装甲が鋭利に変化していた。

『箒っ、俺だっ!』

一夏がスラスターを噴かせて突っ込もうとする。それを止めたのはインパルス、真であった。

『待てよ、一夏っ!周りのコンテナからISの反応、無人機だっ!』  
『くそっ、目の前に箒がいるのにつ!』



コンテナが不気味に振動し、次々にIS「朱蜂」が出現している。

『各機、敵機との接触を避けつつ、射撃で弾幕を張れっ！Xアストレイ、ブルーティアーズのドラグーンで纏め、高火力で薙ぎ払うっ！』

『了解しました、カナード様っ！』

『承知しましたわっ、カナードさんっ！』

カナードが全機へオープンチャンネルで呼びかけ、1名を除いてその指示に従う。指示に従わない1名、それは一夏であった。

『そんなまどろっこしい事、してられるかよっ！箒が、目の前にいるんだっ!!』

白式・雪羅がスラスターを全開に噴かせて敵陣に突っ込んで行く。

『一夏っ!?!』

鈴の驚愕の声が響く。

『どけよおおおっ!!』

荷電粒子砲を放ちつつ、雪片で朱蜂を切り落とす。

一気に2機を撃墜しつつ、さらに深く食い込んで行く。

『…………ふふ、こっつちよ』

箒はそう言って笑みを浮かべながら、ギガフロートへ後退して行く。

まるで一夏を誘い込むように、朱蜂は自ら白式を避けて行く。

『ちいつ、馬鹿者がっ!!』

朱蜂を相手に距離を取りつつ、雪片を構えた暮桜の千冬が思わず弟の独断専行に毒づいた。

『俺が追ってサポートしますっ!!』

オーブンチャンネルで真が叫び、アサルトシルエットから得られる破格の推力で朱蜂の攻撃を回避しつつ、一夏を追う。

『すまん、真。一夏を頼むっ！』

『任せてくださいっ、簪っ！』

機体を加速させながら、別に展開された簪とのチャンネルに叫ぶ。

『ジェーンさん達がもうすぐ来るはずだっ、DESTINYーを受け取っておいてくれっ！』  
『うんっ、分かった！気をつけてっ！』

簪が領いた事を確認し、それにサムズアップで返すと通信を切った。

真が一夏を追い、敵陣に突入して行く。

その様子を見ながらカナードが呟く。

すでにHユニットをバスターモードに切り替え、5機を越える朱蜂を撃墜していた。

『織斑一夏は真に任せるとして、数が多いな……さて、準備はいいか。アイリス王女』

『愚問よな』

『こちららも準備完了しております、アリス』

ブレイク号から「セブンス・プリンセス」と「インペリアル・ナイト」を纏ったアイリス王女とジブリルが出撃してくる。

この2人も当然箒が誘拐された事は知っていた。

その為、C・Eの事を隠してカナードが協力を要請していたのだ。

二つ返事で了承してくれた事は行幸であった。

『各機、敵機から離れろっ！』

カナードから全機へ指示が飛び、近接武装で交戦していた鈴やシャルロットは朱蜂を蹴り飛ばして距離を取る。

『その蜂モドキは我等に任せよ、行くぞ、ジブリルよっ！』

『はっ、インペリアル・ナイト、ホルト・フロム・フルー「晴天の霹靂」展開、いつでもいけますっ!』  
グラビトン・クラスタ『事象の地平に消え去るがよいっ、**「重力爆撃」**、発射っ!』

セブンス・プリンスから放たれる、重力フィールドと、インペリアル・ナイトから放たれた雷が次々と朱蜂を撃墜して行く。  
Mass Amplitude Premotive Strike Weapon  
**「大量広域先制攻撃兵器」**という、ICBMのような戦略兵器を含んだ概念がある。

まさにこの2機はそれを体現していた。

『ふふ、箒には借りがあるからの、ここらで返しておかなければ目覚めが悪い』

まだまだ数は多いが2機がその性能を發揮すれば、全滅させるまでそう時間はかからないだろう。

2機が次々に朱蜂を落としていく中、箒と楯無はそれぞれ射撃武装で朱蜂を叩き落していた。

『凄まじいわね、あの2機。流石第4世代ね』

『うん……あつ、この反応は、日出工業の船が……っ！』

飛燕が、見知ったコードを発する船の反応を捉えた。

『デステイニーガンダムを届けにきてくれたのね』

『うん。私行つて来るっ！』

『ええ、背中は何せてっ！』

楯無が蒼流旋を構えるのを確認して簪は笑みを浮かべながら頷き、VLユニットを展開し、運命の名を冠する機体の元へと羽ばたいていく。

大量の朱蜂を仲間に任せた真は、背後で起こった爆発を一瞥して、センサーに映る白式の反応に目をやる。

目の前を飛ぶ白式が肉眼で確認できる。

『まったく、あのバカっ、冷静になれって言ったのにつ！』

朱蜂をビームライフルで撃墜しつつ、真は白式に追いつく。

『おい、一夏つ、独断専行は危険だつて言っただろうがっ!』

『真つ、箒がすぐそこにいるんだつ、なら助けないとっ!』

『あーっ!分かつてるよ、ここまできたら俺とお前で助け出すつ、でもまずはっ!!』

いつの間にか周囲を朱蜂10機が囲んでいた。

マニピュレータに内蔵されたビームマシンガン〔つくもぼり九十九針〕を連射する。

それをAMBCで回避した真、スラスターを噴かせて高機動で回避する一夏。

『薙ぎ払ってやるっ!』

インパルスマークIIのアサルトシレットがパージされ、格納。

数瞬で背部にブラストシレットが展開され、ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲が2門展開された。

そしてすぐさまトリガーを引く。

同時に肩部のミサイルコンテナから動体誘導型ミサイルが嵐の様に射出された。

ケルベロスのビームが朱蜂を飲み込み、そのまま薙ぎ払う。

ビームを避けた朱蜂はミサイルによって撃墜され、爆破して行く。

ケルベロスを連射するインパルスと、荷電粒子砲を放つ白式は共に崩れた包囲網から脱出して突き進む。

だがとある事に真は気づいていた。

(何だっ、ケルベロスの威力が低い……いや、それだけじゃない、機体が鈍いつ?)

先程、簪たちと別れて敵陣に食い込んだ時よりも機体の反応が鈍く感じる。

それだけではなく、ビームの出力も通常時よりも下がっていた。

違和感を感じた真は一瞬だけ目を閉じて、気持ちを落ち着かせる。

脳裏に大切な女性の姿をイメージした途端、彼の意識の中で「S. E. E. D.」が弾け飛ぶ。

それと同時にインパルスマークIIから声が届いた。

『マスター、この空域全体に特殊コードが発令されていますっ!』



『特殊……コード?』

『はい。特殊コード〔コード:レッド〕機体出力が通常の8割から7割ほどに制限されています。そのせいで反応速度も下がっていますっ!』

『解除はっ!』

『駄目です、できませんっ。おそらくお母様……東様が何とかしてくださると思いますすが……っ!』

『……分かった、留意しておくよっ!』

包囲していた朱蜂を粗方殲滅した真はアサルトシルエットに換装した後、インパルスマークIIとの会話を終える。

そしてついに箒と邂逅を果たした。

仲間たちがいる空域から離れた、ギガフロートの上空数百m。

周囲には朱蜂の姿は見えず、紅椿、インパルスマークII、白式・雪羅の3機のみであった。

『箒、帰ろう。学園に』

一夏が手を伸ばす。

それに紅い双眸を光らせて、箒が返す。

『……私は篠ノ之箒であつて彼女ではない【モノ】』

とても友好的には思えない声色。

箒の声で確かに彼女は告げる。

『私は、世界で最初のIS【赤月】、貴方を手に入れてイレギュラーを抹殺するための存在！』

それと同時に、紅椿の識別信号が変質して行く――

――【あかつばき】から【あかつき】へと。

瞬間、真の耳にはかすれた声が聞こえた。

(箒様を……たすけ……ください……)

弱々しく、最後まで聞こえなかった。

だが、真にはその声を誰が発声したのか、直感で理解した。

(今のは、紅椿……っ!?)

聞こえた擦れた声に身構えた、真がビームライフルを構える。

『貴方は最後、まずはイレギュラーを落とす』

(イレギュラー? 俺のことを言ってるのか?)

赤月の言葉に疑問が浮かぶ真であったが、その疑問は後回しにせざるを得なかった。

紅椿から変容した機体、【赤月】の背部の非固定浮遊部位に亀裂が入り、切り離されそれぞれがまるで【剣】の様に分裂して真と一夏を狙ってきたからだ。

その総数は12。

『ドラグーンっ!?!』

『そう。これはソードドラグーン【あめのはばきり天羽々斬】。避けられるかな、イレギュラーっ!』

縦横無尽に空を翔ける刃。

半数が真を、残りが一夏をそれぞれ狙う。

その機動は機械的ではなく、まるでそれぞれにパイロットがいて操っているかのように素早く淀みない。

(箒にドラグーン適性はなかった、なのにまるで生きているみたいに操れるのか……?!?)

迫るドラグーンを一気に後方に加速して避ける。

そのインパルスの機動に追従するように、ソードドラグーンが追いかけてくる。

(箒様を……たすけ……ください……)

相対した時にS・E・E・Dを発動させていた状態でもかすれてしか聞こえなかった【紅椿】の声を思いだし、自機に尋ねる。

『マークIIつ、今の筈はどうなってるんだっ!?!』

『マスターつ、今の彼女は乗っ取られている状態ですっ!あの機体、【赤月】につ!』  
『ISが搭乗者を支配してるとって事かっ!』

ビームライフルを構え、生きているかのように動くドラグーンを狙う。

確かに狙いづらいが、すでにドラグーン相手の戦法は身体に、いや魂に刻まれている。  
今の真ならば捉えることは不可能ではなかった。

『そこだっ!』

一瞬だけ動きが遅くなる瞬間、方向転換の隙を逃さずビームがソードドラグーンを貫いた。

ビームに焼かれ落ちていくドラグーン。

数発連射を行うと蜘蛛の子を散らしたようにドラグーンが離れる。

その操作を行った赤月は目を見開いていた。

『つ、流星にやる。でもこれはどう?』

ニイツと口角を吊り上げる赤月。

そう、ドラグーンに狙われているのは真だけではないのだ。

『くっ、振り切れねえっ！』

一夏の白式・雪羅がスラストアーを全開で吹かせてソードドラグーンを何とかぎりぎり回避している。

数度掠っているのか、装甲にはソードドラグーンによって刻まれた跡が残っている。

『一夏っ！』

真に向かっていた残りの5基すべてが一夏へ標的を変更し、向かっていく。

一夏を援護するためにインパルスも向かおうとする。

『やっぱりアナタはそうやって彼を助けようとする、それが弱点っ！』

ドラグーンを操作しつつ、赤月が【空裂】とは異なる近接武装を展開しインパルスマークIIに向かってきた。

『くそっ！』

咄嗟にビームサーベルを展開する。

しかし、機体の出力が下がっている為か通常時よりも細いサーベルとなってしまうた。

単純な機体性能も紅椿を素体にした赤月のほうが上であるため、鏢迫り合いの形になっても押されるのはインパルスであった。

『アナタはイレギュラーなのっ、ここで消えてっ！』

『こんなことでえっ！』

鏢迫り合いは赤月に軍配が上がった。

ビームサーベルは押し切られたことよって発振が止まる。

だがそれが真の狙い。

今のインパルスには別の武器がある。

『はあっ！』

『ぐっ!!』

マニピュレーターに装備されたアサルトシルエット固有装備【ベオウルフ】を起動して、赤月のマニピュレーターを寸勁の要領で弾き、近接武装【草薙】を弾き飛ばしたのだ。

『うおおおおっ！』

そして左のベオウルフで赤月の胸部装甲を殴り飛ばした。

はじけ飛んだ装甲部分から生身の筈の身体も見えた。

特に傷ついてはいないようだ。

『一夏、ドラグーンは縦横無尽に飛んで来るが、白式の機動力と運動性なら見切れることも可能なはずだっ！全方位に意識を向けろっ！赤月への陽動は俺がやるっ、隙を見て零落白夜だっ！零落白夜なら問答無用で無力化できるっ！』



『っ、真っ。分かったっ！やってみるっ！』

『任せたっ！』

インパルスマークIIが機体を加速させる。

V Lユニットには劣るとはいえ、アサルトシルエットの推力は破格である。

縦横無尽に機動する事で、ドラグーンも追跡は困難になる。

だが、赤月は笑みを浮かべていた。

『その程度ならっ、やさかにのまがたま「八尺瓊勾玉」っ!!』

脚部と腰部のパーツが切り離されて、円状に組み変わる。

それはまるで巨大な砲塔。

粒子が集い、ケルベロスをも越える高出力ビームがインパルスに放たれた。

『落ちろ、イレギュラーっ!!』

『っ!』

完璧に捕捉されていた。

インパルスに直撃し、爆発が発生した。

笑みを浮かべる赤月。

だが、この程度で落ちる真ではない。

爆炎を突き破り、黒い線が現れたのだ。

『くっ、ワイヤーっ!!?』

『捕まえた、赤月っ!』

そう、その正体はワイヤー。

先程の爆発はアサルトシルエットをパーズしてシルエットを盾に使って発生した爆発であったのだ。

インパルスから発射されたワイヤーが赤月の機体に、そして箒の身体に絡まる。

そしてインパルスが瞬時加速によって急接近し、羽交い絞めの形に持ち込んだ。

『くっ、離せっ!』

『離すかよっ！一夏、俺ごとやれっ！』

『分かったっ、行くぞ、赤月いつ！』

零落白夜を発動させた白式が突っ込んでくる。

ドラグーンが咄嗟に追撃を仕掛けるが、白式のほうが早い。

『うおおおおっ!!』

上段で振りかぶり、その刃を振り下ろす。

赤月とインパルスのシールドバリアに直撃する——瞬間であった。

『いち……か、し……ん、やめて……たすけ……て』

か細い箒の音が真と一夏の耳に届いた。

『っ、箒っ!?!』

直撃する瞬間、思わず一夏は雪片を止めてしまった。  
そして一夏は確かに見た。

赤い双眸を携えた箒が、その口角を吊り上げたのを。

『残念っ!!』

背後からソードドラグーンが、剣を止めてしまった一夏を襲う。

『箒っ!?!』

『っ、一夏っ!?!』

咄嗟に瞬時加速で離れる一夏であったが、それは赤月も予測していた。

その回避予測のとおり、ドラグーンを動かし、3基のドラグーンが白式・雪羅のスターを貫いた。

『うわあっ!!』

爆発したスラスターによって一夏が弾き飛ばされる。

『一夏っ！赤月、お前はあっ!!』

箒の身体を、声を使って一夏の攻撃を止めたのだ。

他者の存在を利用する行為に真は激昂した。

『いつまでもくっ付くな、イレギュラーっ!!』

ソードドラグーンが、今度はインパルスの背後から迫る。

ワイヤーユニットをパージすればインパルスは離れる事もできた。

だがすでにアサルトシルエットを喪失し、ブラストシルエットでは高機動は望めない。  
い。

武装も半数失われているのだ、このチャンスを逃すわけには行かない。

その為、真は回避を選択しなかった。

脚部スラスター部分にソードドラグーンが着弾し、貫かれる。

『離す……もんかあっ!!』

『っ、往生際の悪いっ!?!』

コード：レッドによって出力が下がっているインパルスと赤月では確実に機体性能では赤月が上回っていた。

機体のパワーによって、動きを阻害していたワイヤーが千切れていく。

『一夏っ、早く零落白夜をっ!』

『ぐっ、近づけねえっ!!』

ソードドラグーンに追跡され、インパルスから白式は離されていた。

『貴方達は私には勝てないっ!』

『ぐっ!』

ワイヤーがちぎれたことで自由になった右腕を使い、肘鉄。

衝撃がインパルスに届き、その分エネルギーが消費されていく。

そして背後から迫るソードドラグーン。

(しまっ、直撃……っ!?)

機体への直撃が避けられない、そう感じた真の意識は唐突にブラックアウトした。そして次の瞬間には、【夕焼けの砂浜】に立っていた。

「っ、ハハハは……っ!?!」

突如変わった周囲の景色。

何度か訪れた経験のある、ISのコア人格の空間。

砂浜には真のほかに1人、少女が立っていた。

白いワンピースを纏った栗毛の少女——【インパルスマークII】であった。

「……マークII」

真が彼女に呼びかけると、彼女は振り向いて弱々しく微笑んだ。

『ここが私の空間です。デステイニー姉様や飛燕姉様とは少し違いますが……どうですか？』

「……ああ、凄く綺麗だと思うよ」

水平線に沈んで行く太陽が空を茜色に染め上げていた。

タイミングがタイミングでなければ、ずっと見ていたくなるような綺麗な夕焼けだ。

この世界での時間の流れが現実とは異なる事を知ってはいるが、いつまでも見ているわけには行かない。

「マークII、何で俺を呼んだんだ？」

『……マスター、貴方は箒様を助けたいんですよね』

「ああ。箒は俺にとつても大切な友人なんだ」

『分かりました。今私に残された力はとても少ない……でも貴方の役に立って見せませう、この身に変えても』

「っ、それはどうい……っ!？」



マークIIにそう告げた瞬間、真の意識は現実に戻った。それと同時に彼は生身で空中に放り出されていた。

「なっ!?!」

突如襲う浮遊感、そして落下して行く身体。  
当然驚いたのは真だけではない。

『真っ!?!』

『っ、機体を捨てたっ!?!』

一夏と敵である赤月もその突然の行動に度肝を抜かれた。  
ソードドラグーンは搭乗者を失ったインパルスの各部位装甲に突き立っていた。

『違います、赤月。マスターには離れてもらっただけです』

搭乗者を失ったインパルスだが、赤月を羽交い絞めの形で押さえ続けていた。展開されたディスプレイに映るのはマークⅡの姿。

『貴女はっ、その機体のっ!?!』

『ええ、私はインパルスマークⅡ。マスターが〔花〕を護るための力。そして貴女を止める力っ』

一夏の白式のセンサーでは、インパルスの機体全体から発せられる高エネルギー反応を検知していた。

それは当然赤月も感知していた。

『高エネルギー反応、貴女まさかっつ!?!』

『今の私には武装は殆どない。でもこの身体があるっ!』

『そんな、私とは違うただのISコア人格がこんな……そんな事をすれば貴女はっ!!』

明らかに赤月の声には動揺の色が浮かんでいた。

「よせつ、マークIIつ、止めろつ、止めろおおおつ!!!」

彼女が何をしようとしているのか、はつきりと直感で理解できてしまった。

落下して行く自分の状況など無視して、真が叫ぶ。

そして――

『マスター、アナタとお話が出来て……幸せでした』

彼女のその声のはつきりと聞こえた。

瞬間、インパルスを中心に爆発が起こった。

ISが爆発したとは思えないほどの爆発が起こり、白式はスラスターを全開にして、何とか耐える。

『ぐつ、インパルスが自爆……っ!?!つ、真っ!!』

そして落下して行く真に一夏が翔け寄ろうとするが、後方から超高速で接近してくるISの反応があった。

『真っ!』

それは簪の駆る飛燕であった。

簪が真を受け止めたのを見て、一夏は胸を撫で下ろした。

『真っ、大丈夫っ!?!何があつたのっ!?!』

「……俺は、大丈夫だ」

つうつと真の目から涙がこぼれる。

それに簪は気づいた。

『……真、泣いてるの?』

「……マークIIが、俺を助けてくれた」

『えっ?』

「自律稼動して、自爆したんだ……俺はそんなことしろだなんて、言っていないのに……っ

!」

涙を拭って爆炎が晴れた上空を見つめる。

そこには、各部装甲が弾け飛び、大きなダメージを受けた赤月の姿があった。

『くっ、各部にダメージ……っ！でもまだいけるっ！』

赤月が拡張領域からソードドラグーン「天羽々斬」を追加展開していく。

マークIIがその身を犠牲にした一撃でも、行動不能にはいたっていない。

その様子を真は拳を握り締めながら、凝視していた。

「……簪、デステイニーは？」

『あつ、うん。ジェーンさんから受け取ってきたよ。はい』

「ありがとう、展開するから離れてくれ」

簪が真に待機形態であるドッグタグを手渡す。

それを握り締めて簪から離れ、落下しながら機体を展開する。

全身が黒、特徴的な巨大なVユニットを持った機体「デステイニーガンダム・ヴェ

ステージ」が展開された。

そして真は機体に語りかける。

『……デステイニー、聞こえてるか？』

『うん、聞こえてるよ、真』

すでにS・E・E・Dは発動させているためか、彼女の声はしっかりと耳に届いた。

その彼女の声も何処か涙声である事に気づき、藁にも縋る思いで彼女に尋ねた。

『マークIIのデータはコアネットワークにないのか……？』

『……意識データをコアネットワークを通じて私と飛燕に少しだけ残してくれた。でも大本の彼女自身は……もういないの』

もういない。

それはつまり失われてしまった。

自らの手から零れ落ちてしまったという事だ。

『……やっぱり、そうなんだな』

『……うん。でもね彼女は……真の事を最後の最後まで、心の底から守りたかったんだよ。私は今取り込んだ意識データはその想いしかなかったよ』

『……ああ』

静かに目を閉じて祈る。

手から零れ落ちてしまった【命】に。

救えなかった傷を心に刻み、決して忘れないように。

時間にして数秒にも満たない時間。

真は目を開く。

『……行くぞ、デステイニー。マークIIの為にも、箒を無事に取り返すっ!』

『……うんっ、行こうよ、真っ!』

Vユニットを大きく広げ、光の翼が溢れる。

宝石のように煌く光の翼が広がり、戦場を赤く照らしていく。

『簪、一夏、行くぞ』

『……ああっ』

『うん』

『作戦は同じ。俺と簪で攪乱、お前が零落白夜で赤月を無力化するんだ』

『あわせるよ、真っ！』

『……分かった、信じてるぜ、真っ！』

『ああっ！』

白式の刃に零落白夜の光が溢れる。

赤月は3機を見た後に、真へ視線を向けた。

『つ、イレギュラー……なんでアナタは倒れないのよっ！』

『……俺は大切な花達のために戦うっ！それが俺の戦う理由だっ！赤月っ！俺を助けてくれたマークIIの為に、お前から簪を返してもらおうっ！』

超高速機動に移行しながら、真は叫んだ。



## PHASE 6 白き王

『行って、天羽々斬っ！』

追加で展開されたソードドラグーン【天羽々斬】がデステイニー達を襲う。

『行くぞ、簪っ！』

『うんっ！』

比翼の機体。

デステイニーと飛燕がそれぞれVユニットから光の翼を翻して、ドラグーンを振り切って赤月へと向かう。

コード：レッドのせいで機体の出力は上がらない。

しかしそれでもVユニットが齎す機動力は破格であり、大抵の高機動ISを上回っていた。

『くっ！私の邪魔をするな、イレギュラーっ！』

両のマニピュレータからクラレントビームサーベルを発振させたデステイニーが高速で迫り、その斬撃にギリギリで赤月は反応できた。

先程弾き飛ばされた近接武装【草薙】はソードドラグーンのように分解し、手元で再度剣の形に再構築することが可能なのだ。

『くっ、何なのっ、アナタはなんでっ！何でっ、何でそんな力があるのっ!?!』

本来ならば機体のパワーはほぼ互角とっていい。

現在赤月以外のISは出力が下がっている状況だというのに、赤月はデステイニーを押し返せなかった。

むしろ押し込まれている。

『分からないだろうね、搭乗者を道具にしか見ていない貴女には、真がどうして戦うのか、なんで貴女の敵になるのかなんてっ！』

『っ、っこの声は……その機体のっ！』

『うおおおっ!!』

クラレントビームサーベルが次第に太く強力に発振されていく。

デステイニーの【単一仕様能力】【運命ノ翼】でエネルギーを武装に回して低下している出力を補っているのだ。

いや、むしろ通常時よりも強力に発振させている。

その為か、草薙に少しずつつ食い込んでいく。

『っ、単一仕様能力でコードをつ!!?』

『はあっ!』

そして、ついに反逆の剣が赤月の剣を、草薙をその刃で断ち切った。

『なっ、ぐうっ!?!』

剣を断ち切ると同時に、サマーソルトキックを赤月に叩き込んだデステイニーはその反動と共に下方へ加速し、背後から迫っていたソードドラグーンを回避した。

『簪っ！』

クラレントをビームライフルモードに切り替えながら真が叫ぶ。赤月の後方から、蒼い光の翼を煌かせた飛燕が急接近していた。その手に握るのは竜殺しの魔剣の名を持つ、「バルムンク」だ。

『やああっ！』

『このおっ!!』

振り下ろされたバルムンクを、デステイニーのサマーソルトキックで体勢を崩されていた赤月は、切断された草薙を使って防御しようとした。

しかし、質量と速度差からバルムンクを受け止める事は不可能であった。

『あぐっ!?!』

バルムンクによって草薙ごと、左マニピュレーターと左脚部のスラストターが破壊され

た。

そしてさらに崩れる体勢、それを見逃す真ではなかった。

下方から急速に加速したデステイニーが今度は右マニピュレータと右脚部スラスターを破壊したのだ。

そしてそのまま、再度組み付く。

簪も同じように左半身を押さえていた。

『今だっ、一夏あっ！』

『織斑君っ！』

『ああっ！』

真と簪の叫びに呼応するように、零落白夜を構えた一夏が赤月に向かう。

『やめて、一夏っ！やめ……っ！やめてっ！やめてえっ！』

簪の声で、そう叫ぶ。

だが同じ手を二度と喰うわけがない。

『箒を……返してもらおうぞっ!』

一夏がそう叫び、零落白夜が発動している雪片を突き立てるのではなく、押し当てた。その瞬間、4機は白い光に包まれた。

一方その頃

朱蜂達と戦闘を続けているカナード達。

コンテナから次々と湧き出す無人機たちをひたすら撃墜していく。

(すでに50を越える数を倒しているが……このギガフロートの規模だ、まだいべきだと考えるべきか)

ドレッドノート単機ですでに50機を越える朱蜂を撃墜している。

Mass Amplitude Preemptive Strike Weapon  
【大量広域先制攻撃兵器】を搭載しているセブンス・プリンセスやド

ラグーンやBT兵器で同じ効果を得られるXアストレイやブルー・ティアーズの撃破スコアは既に100機を越えるだろう。

(ALは極力使わないようにしているが……エネルギーは残り4割か)

エネルギー残量に気を配りつつ、迫る朱蜂を拡張領域に登録していたヴェントを展開して、打ち抜く。

『東、ラキ、聞こえるか』

ドレッドノートHが、ストライクガンダムとブレイク号でコード：レッドに対応中の東へ通信を繋げる。

『カナ君、どうしたの?』

『何、兄さん?』

I. W. S. P. パックを装備したストライクガンダムを駆るラキーナは、フレイの

ラファール・リヴァイヴ・ノワールをビームライフルで援護しつつ答えた。

『無人機達の数が予想以上に多い。これを1機のISで制御する事は可能だと思うか？』

『……いや、現実的じゃないね。統括しているのは箒ちゃんに乗っていた紅椿……いや、赤月だと思ってたけど』

束がその意見に同意する。

『俺も同じ意見だ。おそらくだが、この機体達を統括している存在がいるはずだ、例えばあのギガフロートそのものとかな』

『成程、あくまで赤月はエネルギー供給だけって事？』

『ちよつと待ってね……よしっ、まずはコード：レッド解除っ！』

ターンとディスプレイをタッチする束。

すると、ドレッドノートやストライクガンダム、この空域全てに存在するIS達を縛っていた特殊コードが解除された。



武装の出力も全て正常値に戻っていく。

『すまない』

『うんにや、そして統括者の存在かあ……ごめん、すぐには見つけられそうにないかな』  
『……そうか。分かった、今は朱蜂を殲滅するのが優先する』

『今、ブレイク号でこの空域全体をスキャンしてる。戦闘が終われば解析とギガフロートの調査もできると思うから……頑張つてっ！』

『了解した』

『分かりましたっ！』

返事をしたラキーナのストライクガンダムはI・W・S・P・パックを格納し、8枚の機械の翼を背負った「自由」の名を持つ装備を展開した。

そしてフリーダムストライカーが装備されると同時に、ラキーナの意識の中で「紫の種」が弾けとんだ。

【フリーダムストライカー】

かつてフレイとの模擬戦で破壊されたものを新造したストライカーパックである。

以前のものはラキーナが忌避していた為、開発は主に束がデータを参照して作り上げ

た試作型であった。

今回は製造初期からラキーナも積極的に携わった発展型であり、反応速度や射撃精度など様々な点で改良が施されている。

モードをフルバーストモードに変更、球状の投影コンソールが表示されると同時に「マルチロックオンシステム」が起動する。

搭乗者であるラキーナの視線と連動し、敵機を次々と捕捉していく。

S・E・E・D が発動したラキーナの反応速度にも充分対応できている。そしてロックが完了。標的の数は一度に攻撃可能な最大数。

『当たれえええっ!!』

砲口と共に、肩部バラエーナ、腰部クスイファイアスから連続で高出力ビームと電磁加速した弾頭が発射されていく。

その全てが正確に朱蜂へと命中し、次々と撃墜していく。

『でたらめすぎるわー、なにそれー』

その様子をフレイは脱帽しながら眺めている。

もちろん専用アサルトライフル【サウダーデ・オブ・サンデイ】を二丁展開して、近づくと朱蜂を叩き落しながら。

『いいなー、私も新装備欲しいなー』

『あはは……』

フレイの言葉に苦笑を浮かべながらも、再度マルチロックオンへと移った。

白い光に包まれた真の視界。

しかし次の瞬間には、デステイニーを装着した状態で、どこまでも続く果てしない水平線と真っ白な砂浜に立っていた。

『……は……I Sの空間か？』

搭乗機でもあるデステイニーの空間へ何度か訪れた事がある真にはこの光景が何な

のかすぐに理解できた。

『真っ!』

『真っ、よかった、いたんだなっ!』

響く2つの声に振り返ると、ISを装着した簪と一夏もその場にいた。

『真、ここって……』

『ISのコア人格の空間だと思う。多分……赤月の』

『ここが、そうなんだな……俺は来たの初めてだ』

『そう言えばそうだったな』

考えてみればレイやデステイニーに何度も連れられて来ているのが異常なのだ。

『真、あれは……?』

簪がマニピュレーターで右前方を指差す。

真と一夏がそちらを振り向くと、そこには膝をつく少女の姿があった。それは箒であった。

『箒っ！』

一夏が箒へと駆け寄る。

だが、箒は反応を示さない。

虚ろな目をした箒の肩へ、白式を解除した生身の手を当てて揺らす。

「箒っ！しっかりしろよっ、俺だっ！一夏だっ！」

そう叫んでも箒は何も答えない。

まるで人形のように。

「どうしたって言うんだよ……！」

『多分、赤月に支配される時に何かされたとかだと思う』

真と簪もその場に駆け寄り、簪の顔を覗き込む。

「そうなのか？」

「推測だけだな……簪、しっかりしろ」

真もデステイニーを解除して語りかけるが、反応は返ってこない。同じように簪も飛燕を解除していた。

「どうすればいいんだよ……っ！」

一夏のその声に数秒考え込んだ時であった。

（真、聞こえる？）

意識の中に、搭乗機であるデステイニーの声が響いたのだ。

S. E. E. D. が発動している状態だ、彼女の声が聞こえるのも当然であった。

(デステイニー? ああ、聞こえるよ)

(良かった。あんまりその空間に干渉できないから、手短にするね)

(もしかして……何か手があるのか?)

(うん。箒さんは赤月によってその意識を縛られてるの。それを解除するにはね、感情を励起させればいいの)

(感情の励起って……具体的にどうすればいいんだ?)

(ふふ、簡単だよ、具体的にはね……)

具体的な感情の励起方法を真にデステイニーは教える。

(……わかったよ、そう一夏に伝える)

(うん、箒さんの意識を取り戻せればきつと全て解決するから……頑張つて!)

そう言った後、デステイニーの声が途切れた。

ふうと深呼吸した後、悩んでいる一夏へと声をかけた。

「……一つ、できる事がある」

「本当かつ!？」

その言葉に一夏が飛びつく。

「ああ。お前にしか出来ないんだ、一夏」

「……真、もしかして」

真が何を一夏に告げようとしているのか、うすうすとだが簪には理解できてしまっ  
た。

「簪を思いつきり抱きしめてやれ」

「えっ、ええっ!？」

真の発言に一夏が驚愕の声を上げた。  
そして簪はやっぱりと苦笑していた。

「でっ、でも……いいのかよ……」



「この鈍感野郎……いいんだよ、お前なら箒だって許してくれるさ。ほら早くしろって！」

前半部分は呟くように言ったため一夏には聞こえてはいない。  
彼の背を叩いて、行動に移らせる。

「でも本当なの、真？」

簪が真に尋ねる。

「ああ。さつきデステイニーが教えてくれた。今の箒は意識を赤月に縛られてる状態だって。それを解除するには強い感情の励起が必要になる……箒が一夏に抱いている一番強い感情、それはわかるだろ？」

「……うん」

「今はデステイニーの言葉を信じるしかないんだ」

「分かった」

そう静かに呟いた真に簪も頷いた。

そうしている間に、一夏は簪を抱きしめようとしていた。

「……簪」

一夏が簪の身体に手を回す。

そして全身で彼女を抱きしめた。

「目を覚ましてくれよ。またさ、剣道、しようぜ。またバカみたいに騒ごうよ、皆で」

ギュッと少しだけ力を込めてそう呟く。

すると変化が起こった。

「……いち……か？」

弱々しい声であったが、確かに簪の口から出た言葉だ。

虚ろであった目に光が宿り、簪の意識は急速に覚醒して行く。

(……っ、いつ、一夏が私を抱きしめているっ!?!どっ、どういうことだ、これはっ!?)  
「箒っ!」

箒の声が聞こえた一夏は抱きしめたまま、顔を彼女の正面に持つていく。

一気に顔が赤くなったのを箒は自覚し、思い出した。

自分は赤月という自分自身に飲み込まれたのだ。

心の闇の中にいた力の象徴たる自分箒ノ之箒に。

そんな自分を、愛する人が助けに来てくれた。

その事実が胸が一杯になる。

「いつ、一夏あ……っ!」

「なに泣きそうな顔、してるんだよ」

「うるさい……馬鹿っ」

涙が溢れ、頬を伝う。

「おかえり、箒」

「ただいま、一夏あ……っ！」

涙声で箒は確かにそう告げた。

その様子を少しはなれた場所で真と箒は静かに笑みを浮かべて眺めていた。

「なんとか、なったな」

「よかった……」

真の言葉に安堵の息を漏らす箒。

「……いつまでそうしてるんだよ、赤月？」

真が振り返る。

つられて箒も振り返ると、いつの間にか背後にもう1人の箒が立っていた。

しかし今一夏の腕に抱かれている箒とは異なり、双眸は赤い。

その身体は少しずつ、光の粒子になって消えていこうとしていた。

「っ！」

思わず簪が構えるが、真は構えを取らなかつた。

彼女からは敵意を感じなかつたからだ。

「……イレギュラー、いえ、飛鳥真。私の夢は……かなつたから」

声にも敵意は感じない。

「あの2人が一緒なら、私はもう消えてもいい。私はそのための存在だから」

弱々しく微笑む赤月。

彼女は自分の運命を受け入れようとしている。

しかしその弱々しい笑みを、真は見捨てられなかつた。

「……それで、いいのか？」

「……え？」

「……お前もさ、箒なんじゃないのか？」

いくらISのコア人格とは言え、生身の人間の身体を乗っ取るなんてことが早々できるとは思わない。

そして直に話してみてわかった。

彼女は篠ノ之箒の心の一部ではないのかと。

箒の心の一部がコア人格となった。

それが技術的に可能なのかは真にはわからないが、そうなのではないかと感じただ。

「お前も箒ならさ、一夏の横にいたいと思ってるんじゃないのか？」

「……いいの？私はこのまま……消えなくてもいいの？」

「それは俺が決める事じゃない。お前が決める事だ」

「何で貴方は……私は、貴方のISの命を……奪ったのにつ」

「……だからって、目の前で泣いてる人間を放っておけるかよ。マークIIもわかってく

れるさ……きつとな」

花を守る為に、その力を貸してくれたマークIIならば、きつと理解してくれるだろう。

真は彼女の言葉を待つ。

彼の言葉に顔を伏せ少しだけ考えた彼女は顔を上げた。

「許されるのなら……私は……私も……一夏の力になりたいっ」

彼女もまた涙を零していた。

だがそれはもう一人と同じく、歓喜の感情から溢れた熱い涙であった。

それを見た瞬間、真達の意識は再び光に包まれた。

『……戻ってきたのかっ』

真が頭を振る。

光に包まれた後、再びギガフロート上空で意識が覚醒したのだ。

コア人格空間の中で解除していたデステイニーも身に纏ったままであった。

『戻ってきたみたいだね』

『簪、大丈夫か？』

『うん』

簪が頷く。

周辺をセンサーで見回す。

すると見慣れない反応がすぐ近くであった。

『あの機体は……!?!』

簪を抱えている白式の姿が雪羅から変わっていたのだ。

まるでデステイニーや飛燕のVユニットにも見えるエナジーウイング。

より大型化した各部マニピュレーターは雪羅のものより洗練された様にも見えた。

まるで赤月の様にも見える。



『これって第三形態移行っ？』

『……そうか、赤月、お前の答えはそれなんだな』

先ほどから箒が身に纏っていたはずの赤月の反応は消えている。

正確には彼女の手にはISのコアだけが残っている状態だ。

機体自体はおそらく白式に取り込まれた。

いや取り込まれたという表現は正しくない。

——力を与えたのだろう。

『……うおっ、白式が変わってるっ!?!』

ディスプレイには新たな白式の名前【王理】と言う名が表示されていた。

「……反応が遅いぞ、一夏」

一夏の腕の中でそう呟いた箒が苦笑した。

白式が第三形態移行を果たしたのと時を同じくして、無数の朱蜂達はエネルギー切れによつて機能を停止していった。

こうして、関係者からは「赤月事件」と呼ばれる騒動は幕を閉じたのであった。

だが、この事件の一部始終を眺めている者がいた事に気づくものはこの時点ではいなかった。

——この事件は「始まり」に過ぎないのだ。

## Epilogue 明かされた真実

赤月を無力化し、箒を取り戻してから数時間後――

水平線の向こうに太陽は沈みかけており、夕暮れの紅い光に海面は照らされとても美しい光景が広がっていた。

その光景を、日出工業所有の船舶「ワタツミ」の甲板の上で真は眺めていた。

「……俺は忘れないからな、マークII」

自身を助けてくれたISのコア人格。

インパルスマークIIが完全に破壊された事をジェーンには伝えてある。

彼女は目に涙を貯めながら、マークIIがしたかったことをしたんだろうと真に返答していた。

零れ落ちてしまった――命。

すでに真の中ではISのコア人格たちも等しく命という認識だ。

だから決して忘れないように、彼女の空間と同じであった夕暮れの景色を眺めていた

のだ。

そんな時、背後に近づくと気配に気づいた。

「真、ここにいたか」

「カナード、どうかしたのか？」

ISスーツからいつもの戦闘服に着替えたカナードは夕焼けの光が少し眩しいのか目を細めながら回答する。

「篠ノ之箒の件を報告に来た。今は安静に眠っている、身体には影響はないそうだ」  
「……そっか、よかった」

そつと胸をなでおろす。

ISに支配されていたという特殊な状況であったが、そんな彼女を止めるために本気で相対した。

その為何らかの悪影響が出ているかもしれないと心配であったのだ。

「そして紅椿、いや赤月か。あの機体のコアだが束預かりになった。どうやら休眠状態みたいなんだ」

「休眠？」

「ああ。まあ、正直なところコアの状態は束でないとはわかん。だから俺はあいつに任せた」

肩をすくめながら言うカナードに真は苦笑していた。

「そりや、束さんくらいしかわからないだろうな」

「そしてだ、あのギガフロート。あの内部を俺達で調査することになった」

カナードの視線の先、海上に浮かぶ人工島ギガフロートに真も視線を移す。

無人機である朱蜂達はあのギガフロートから次々に現れていた。

そこに何かしらの秘密があるのは明白であった。

「あの中ってどうなってるんだ？」

「それをこれから調べるんだ。内部を探索するのは俺、お前、アスラン・ザラ、東、織斑

千冬の5人だ。ラキやクロエ、セシリア達はブレイク号やこの船で待機する手筈になっている」

「明らかにあの施設がC・E・関連だからか」

「そうだ、アスラン・ザラも戦闘力ならば信頼できるしな」

まるでそこ以外は信頼できないような言い方に真は苦笑する。

「ん、待ってくれ。アスランや束さんはわかるけど、何で千冬さんも？」

「ああ、彼女が生徒であるお前だけで行かせるのは教師として無責任だからという事らしい。変なところで教師らしいのはどうなんだ？」

「はは……まあ、千冬さんならなんかあつても大丈夫だろうけどさ。調査はいつからだ？」

「明朝予定だ。それまでは各自休息をとりつつ待機だ」  
「分かった」

カナードに了解の言葉を返した真は少し身体を伸ばす。

そんな真を見つつ、カナードはあるものを懐から取り出した。

「真、念のためにこれを渡しておく」

彼が取り出したのは拳銃だ。

C・E、でもよく使っていたオートマチック式のタイプだ。

「ギガフロートの内部がどうなっているかはわからんが、ISが展開できる広さがあるかは分からないからな。俺の予備だからメンテナンスはしているが、動作確認はしていないくれ」

「一応ナイフはあるけど銃もあったほうがいいか、分かった」

受け取った後、慣れた手つきで残弾を確認し安全装置をかけた後懐にしまう。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

「おいおい、物騒なこと言うなよ」

「そうだな」

フツと笑ったカナードに真は肩をすくめる。

「お前はこの後どうするんだ、カナード？」

「明朝からの調査に備えて寝る、お前も早めに休めよ」

「分かつてるよ」

2人は雑談を挟みながら、休憩のためにワタツミ内部に戻っていく。

そして明朝。

水平線から昇る朝日がギガフロートを照らしている。

ここだけみれば美しい光景だろう。

だが、この内部には何があるか分からない。

気を抜かず真は入口と見られるハッチの目の前に立っていた。

ハッチの大きさは10m程であり、すぐそばには展開されて放置されている六角形コ

ンテナも存在していた。

「真、準備は出来てるみたいだな」



「アスランこそ、頼りにしてますよ」

「2人とも準備は良いようだな」

「っ、はい、千冬さんも……準備万端、みたいですね」

I S 学園制服姿の彼だが、カナードから受け取った銃は懐にしまっており、抜き撃ちも出来るようにジャケット部分の胸元はボタンを外している。

またアスランはI S スーツ姿だが、拳銃用のホルスターやナイフホルダーも装備していた。

同じように千冬も特殊なスーツを身につけており、近接専用の刀を装備している。

ただI S スーツと同じように身体つきが出る装備の為か、マジマジと見るのは憚られた。

真はなるべく視界に入れないように顔を赤くした後、視線を反らした。

「東、どうだ？」

ハッチの外部端末に東がアクセスして、ハッチの解除を行っていた。

残像が残るほどのスピードでディスプレイを操作している東にカナードが尋ねた。

「ん、5秒まって」

キーを叩き終わったきつかり5秒後に、ハッチが音を立てて開いていく。

ごおつと内部から風が流れて、髪を逆立てる。

だが、そんな事よりも重要なのはこの風にとある臭いが混ざっていた事だ。

それには千冬を含めてこの場全員が気づいた。

(ロドニアの時と同じだ……これは死臭だっ)

真はかつての記憶と合致したこの臭いに眉をしかめながら言う。

何かが腐ったような臭い、鼻をツンと突く刺激臭。

出来るのならもう一生嗅ぎたくはない臭い。

「ISを部分展開すれば、この程度の悪臭は防げるな……行くぞ、やはり碌な場所ではなかったか」

カナードがドレッドノートを腕部部分だけ部分展開し、搭乗者保護を働かせる。

それに習い、この場にいる束以外の人間はISを纏う。

なお、束は千冬の暮桜の搭乗者保護を受けている。

そして5人がハッチの中からギガフロート内部に侵入していく。

さほど汚れていない通路を歩き、閉じている扉があれば束がクラックして無理やり開く。

それを数度続けた後、広い空間に出た。

最先端の医療機器や人間の大人が余裕を持って内部に入れるだろう用途不明の装置やシリンダーが並ぶ研究所の様な空間であった。

「……何かの研究か」

「調べてみるよ。後電力を復旧させてみる」

束がすぐそばに生きている端末を見つけて、それを調べだす。

真達も周囲を警戒しつつ、辺りの探索を開始した。

そして探索開始から5分が経った。

千冬が巨大なシリンダーの内部を覗き込む。

それと同時に、シリンダーが接続されている機器が束の操作で電力を取り戻し稼動を開始した。

ぼごとと気泡が内部から溢れ、シリンダー内部を照らす照明も起動した。

「……………っつ、これは……………っ!？」

シリンダー内部を見た千冬は絶句した。

大型の円筒形シリンダーの中に人が浮かんでいる。

体型から女性だと分かる。

しかし、ただの女性ではなかった。

「……………人が浮かんで……………しかもこの顔は……………っ!？」

その顔はかつて目の前に現れた歌姫と瓜二つであった。

千冬が何かを見つけた事から駆けつけていた、真やアスラン、カナードもそのシリン

ダー内部に浮かぶ女性を視界に収めた。

「ラクスっ!？」

アスランが驚愕の声を上げた。

そう、シリンダー内部で浮かんでいるのは歌姫「ラクス・クライン」であった。次々と電力が復旧し、周りのシリンダーも内部が明らかになっていく。

照明で照らされた、シリンダー全てに「ラクス」が浮かんでいた。

シリンダー内部のラクス達からは生体反応が検出されない、全て亡くなっていた。

「カナ君、これみて」

東が表示されたディスプレイをカナードの側に飛ばして、内容を彼は読む。

「やはり【カーボン・ヒューマン】か」

「カーボン・ヒューマン?」

真がカナードに尋ねる。

それにああ、と気づいたカナードが答える。

「そうか、ネオ・ザフトの資料にも載っていないかったか。簡単に言えば対象となった人物をそっくりそのまま再現する技術だ。別の人間を素体にな」

カナードの言葉に真は絶句した。

【カーボン・ヒューマン】

人間を素体に別の人間を作り出す技術によって生まれる人間達の事を言う。

人間の新陳代謝を利用して、対象の身体を遺伝子レベルで作り替え記憶を刷り込む。

これにより対象になった人間、C・E. ではとある刀鍛冶やカナードの盟友、プレアが再生された。

今回の場合は「ラクス・クライン」が対象になっているのだろう。

この技術に比べれば薬物投与など手ぬるいレベルだ。

「ふざけるなっ、何だよそれっ！」

あまりに非人道的な技術に真が思わず声を荒げた。

「真、アレを見てみる」

カナードが自分達の背後に設置されている不透明シリンダーを指差す。

その中には最初に見たシリンダーと同じく女性の遺体が浮いており、その顔は半分がラクスのもので変わっていた。

あまりにおぞましいその光景に、千冬は口を押えていた。

「っ、最悪だ……っ！」

シリンダーから目をそらして真が思わず毒づく。

「皆、これみて」

追加でディスプレイを皆の頭上に表示させる。

ギガフロート内部の詳細データであり、丁度中心部にあたる場所に管制室があるよう

だ。

「……ならより詳細が分かると思う。なんでこんな事が行われてたのかも」

東の言葉に皆が頷き、それぞれのＩＳにデータが送信される。

そのデータにしたがって全員が管制室へと向かって行く。

そんな中、カナードは思考を続けていた。

（……カーボン・ヒューマン技術でラクスの再現は出来ているように見えた。なら何故

【ＡＩラクス】なんてものを歌姫の騎士団は用意していた？）

周囲を警戒し先行し、真達にハンドサインを送りながらカナードは思考を続ける。

（……あの情報屋から入手した情報、その中に歌姫の騎士団につながりそうなものはなかった）

数日前に情報屋から入手した情報を確認していたが、その中にデュノア社等歌姫の騎



士団につながるものはなかった。

思い出されるのは、クルーゼ事件で捕虜にした人物の発言。

(ミシエル・ライマンが告げたクルーゼを支援していた【組織】の存在、そして今回のカーボン・ヒューマン……やはり敵は【歌姫の騎士団】ではなく、別の【存在】と考えるべきだな)

彼の脳裏にいくつか候補があがる。

そのうちの1つが現状最も可能性が高いものだ。

(可能性としては亡国機業の別動隊……動機はある。だがこれほどの規模のギガフロートを用意できる力が奴らにあるとは思えない。カーボン・ヒューマンを再現できる技術もだ)

カーボン・ヒューマンの生成には最先端の医療設備／施設、素体の確保のための情報網、そして何よりも対象となる人間の遺伝子レベルでの詳細データが必要不可欠なのだ。

今回の場合はラクスの遺伝子データだが、亡国機業も持っているとは考えられるだろう。

しかしこれほどの規模の施設を秘密裏に建設し、運用することが可能かと言われればNoだ。

思考を続けていた彼だが、すでに管制室の目の前に到着していた。目立った妨害などは受けていない。それどころか人の気配もない。

(……今はまずこの場所を詳しく調べる事からか)

東に管制室のロック解除を頼みつつ、彼は一旦思考を切り替えた。

---

### ギガフロート 管制室

ギガフロートの施設及び先ほど通過した研究区画を統括するのがこの管制室であった。

室内には人の気配はなく、アスランとカナードが先行して飛び込み周囲をクリアリングした後全員が室内に入った。

「よっし、ちゃちゃつと調べちゃいますかっ!」

東が生きている端末にアクセスし、情報を確認するためにメイン端末の復旧に取り掛かる。

そして数分後、メイン端末に電力が戻り復旧が完了したのか、東が操作せずに空間投影ディスプレイが立ち上がり、頭上に展開された。

そのディスプレイにはある【計画】が記されていた。

「プロジェクト：モザイカ」……【織斑計画】？」

カナードが頭上のディスプレイを見て呟く。

空間投影ディスプレイが展開されたと同時に、東と千冬の顔色が変わっていた。

「なっ、何故それがここに……っ!？」

「なんでその計画の情報がここにっ!？」

明らかに何か知っている態度だ。

真やカナード、アスランは【織斑計画】と言う名前を聞いてもピンとはこない。

だが【織斑】と言う千冬や一夏の苗字を冠した計画。

ただ事ではないだろう。

「……どういうことだ。東、知っているのか？」

「うっ、うん。でも……その計画については……っ」

東が視線を外しながら、言い辛そうにカナードに答える。

その瞬間であった。

「ふむ、その計画についてだが彼女では答え辛いだろうね。よろしければ私が答えよう」

そう、真達の背後から男性の声が聞こえた。

弾かれるように、真達は拳銃を抜き構える。

千冬も刀を抜いて構える。

声が出た方向にはいつの間にか【初老の男性】が立っていた。

年齢は40代から50代くらいに見える。

その顔には誰も見覚えがない。

(…………どこかで、みたような…………なんだったか、覚えてないけど、どっかでチラッと…………)

だが真は何処かで見たことあるようなと違和感を覚えていた。

「…………誰だ」

銃の狙いは既に男性の額へ合わせたカナードがトリガーに指をかけながら尋ねる。

「ふむ、流石にこの【顔】では分からないか…………まずはその危ないものを降ろして欲しいんだね」

「貴様にそんな選択権はない。答えろ、何者だ、貴様」

「…………ふむ」

カナードの言葉に男性は少し思案した後、彼の背後にいる束に視線を移した。

「ならば、彼女に手伝ってもらおうか。【コード：スレイヴ】だ、私を狙う者たちを排除してくれないか？」

「っ!?!」

そう男性が告げる。

東が一瞬だけビクンと震えた後、前にいるカナードの背中に向けて全力で蹴りを放った。

「っ、東、何をっ!?!」

咄嗟にその蹴りを屈んで避けたカナードはステップで東から離れる。

アスランや千冬、真も驚愕に目を見開いていた。

「東っ、何をしているんだっ!?!」

「……」

千冬の言葉にいつもの調子ではなく虚ろな瞳で、彼女の持つ刀に視線を移す。

一瞬で千冬の間合いに踏み込んだ彼女に、千冬は反撃を繰り出す事はできなかつた。右の手刀で左に持つ刀を弾かれ、そのまま蹴りで千冬を弾き飛ばす。

「ぐっ!?!」

弾き飛ばされた千冬だが、受身を取り体勢を立て直す。

「……束、すまない」

カナードが千冬を弾き飛ばした束に駆け寄る。

「……」

虚ろな瞳で無言のままこちらに蹴りを繰り出す束の一撃を受け止める。

常人なら腕を叩き折られる威力だが、カナードにとってはそこまでではない。

それに技術も備わっていないただのスペック頼りの攻撃など、技術でいくらでも受け

流せる。

ヒットの瞬間に、衝撃を逃がすようにステップで威力を殺したのだ。

そのまま足払いから体勢を崩し、彼女の腹に向けて蹴撃を叩き込み吹き飛ばす。

並の人間なら意識を刈り取られる一撃であったが、束は苦痛の声すら洩らさなかった。

数m吹っ飛ばされた束が体勢を立て直す隙を逃さず、そのまま押し倒して首にロックをかけて締め上げる。

「少しだけ大人しくしていてくれ……っ！」

締め上げる力を強め、一気に意識を落としにかかると。

抵抗もすぐになくなり、束の意識は途切れた。

「人間の最高個体ともいわれた彼女をいともたやすく制圧するか、流石はC・Eを駆け抜けた歴戦の戦士なだけはあるね」

「コード：スレイヴとか言ったな……貴様、束に何をしたっ！」



意識を失った束をそつと床に寝かせた後、カナードは殺気を込めた視線を男性に送る。

「かつて彼女に保険として埋め込んでいたコードさ。身体に打ち込んだナノマシンに絶対服従のコードとして埋め込んでいたものさ。記憶自体処理したからいくら彼女といえど覚えてすらいなかったのだろうね」

男性はそう肩をすくめながら言う。

「今、コイツ、C・E. って言ったぞ、カナードっ！」

「……ああ。そして思い出した、コイツの名前をな」

銃を再び構えたカナードは真のえつという言葉を見無視して続けた。

「コイツは『グリーゼ』、フランスの大手薬品会社のライアード社CEO『グリーゼ・ライアード』だ」

「っ、確か少し前にニュースでっ！」

真もその名前ではつきりと思い出した。

かつてニュースでチラツと見聞きした覚えがあつたのだ。

「それなら俺も聞いた事がある。だが、あくまで薬品会社の人間が何故……っ?」

アスランがカナードに尋ねる。

「そこまでは分からん。だがライアード社はルクーゼンブルクの軍隊へ軍用医薬品を格安で提供していたと調べが付いてる。軍事に直接関わる事じゃなかったから優先度は低かったが……!」

「おや、私のことを知っている人間がいるか。まあ、CEOなんて立場だ、それはそうか」

グリーゼはそう言つて朗らかな笑みを浮かべる。

だが真達にとつてその笑みは薄ら寒いものを感じさせた。

「だが、グリーゼと言う名は正しいものじゃないのだよ、私にはちゃんと本当の名前があ

る」

グリーゼがチツチツと指を鳴らしながら、顔に手を当てる。

するとまるでモザイクの様にグリーゼの顔に変化が生じ、次第に別の顔に変わっていく。

金髪に、豊かに蓄えた金の髭。

そしてその娘と同じ碧眼の男性。

その顔には真達どころか、千冬も覚えがあつた。

「あつ、アナタは……っ!？」

千冬の脳裏に過去の映像がよぎる。

シリンダーの中に浮かぶ自分、それを笑みを浮かべながら見上げる男性と同じ顔だ。

「おや、覚えていてくれたか。【試作体1000番】。いや、今は織斑千冬だったね」

その言葉で千冬はぺたんと腰を落としてしまった。

「アンタは……【シーゲル・クライン】っ!？」

【シーゲル・クライン】

【エイプリル・フル・クライシス】の惨劇の責任者であり、ラクスの父親。  
そんな人間が目の前に現れた。

「シーゲルさん……っ!？」

「そう、私の名はシーゲルだ、以後お見知りおきを、飛鳥君」

真に向かってニッコリとシーゲルは微笑んだ。

「はー、今頃千冬姉や真達はあの中かあ」

日出工業所有の【ワタツミ】の甲板から一夏は離れた場所に浮かぶギガフロートを眺めていた。

そうして物思いにふけっていると、彼に声をかけるものがいた。

「あれ、織斑君？」

それは簪であつた。

彼女は制服に着替えており、それは一夏も同様であつた。

「ん、簪さん、おはよう」

「おはよう」

簪が一夏の隣に歩み寄る。

波風が彼女の髪をかきあげ、彼女は髪を抑えながらギガフロートを見つめる。

「もしかして簪さん……行きたかつたのか？」

数分黙っていた一夏が簪に尋ねる。

「どうだろう、私が着いて行っても足手まといになりかねないし。真は織斑先生やカナードやアスランと一緒にだから」

「そう考えると凄いやなあ、千冬姉と互角なのが2人もいるって……おお、こえー」

大げさに震えるようなりアクションを取る一夏に苦笑した簪であったが、次の瞬間そんな事は意識の外に弾かれた。

ワタツミが突如警報を発したからだ。

それと同時にワタツミのすぐ側の海面がはじけた。

「えっ、えっ!？」

「なっ、何だっ!？」

ワタツミが急に面舵を取り始めたため、簪と一夏は手すりにしがみついた。すると艦内放送が流れ出す。

『ギガフロート上空、未確認ISから当艦に砲撃を確認っ！コンデイションレッド発令、総員は衝撃に備えよっ！』

ワタツミ艦長の声が響き、2人はI Sを展開する。  
ハイパーセンサーがギガフロート上空の敵を捉えた。

(なっ、あれは……っ!?)

望遠機能で捉えたI S、それは2人とも見たことがある純白のI S【ホワイトトネス・エ  
ンプレス】であった。

そしてその搭乗者も——豊かな桃色の髪之歌姫を。

『あれは、ラクス・クラインっ!?!』

『なっ!?!ラクスはもう死んだんじや……っ!?!』

簪の驚愕の声に一夏も驚愕の声を上げる。

するとまるでこちらが見ているのを知ってか、ラクスは微笑んだ。

そしてそのまま機体を翻し、ギガフロートへと戻っていく。

『つ、待てよおつ!』

第三形態移行した【白式・王理】を身に纏った一夏がワタツミから飛び上がりその後を追う。

『つ、待って、織斑君つ!一人じゃ危険つ!』

一夏の独断専行を止めるため、簪も【飛燕】のVLCユニットを翻して後を追う。

ラクスが帰還したギガフロートのハッチは開いており、一夏は迷わず突っ込んで行く。

その後をワタツミへと通信を行いながら簪も突っ込み、後を追う。

これはシーゲルが束達の前に姿を現したのとほぼ同じ時間帯の話であった――。

---

ギガフロート 管制室

正体を現したシーゲルは愉快そうに、真、カナード、アスランを、そして倒れた束と



戦意を喪失した千冬を眺める。

「ようやく、このときが来た。君達の前に現れる事ができた事を神に感謝しよう」

シーゲルはそう言って真とカナードに視線を移す。

「どういうことだ、コイツもこっちの世界でつてことか？」

「……おそらくそうだろう」

「C・E・で死んだ私はこの世界でもシーゲル・クラインと言う名で生まれた。最も当時はそんな記憶もなかったが、娘、ラクスが生まれたときから変わった。思い出したのだよ、かつての記憶をね」

瞳を閉じ、一息つけてシーゲルが続ける。

「正直に言ってラクスのあの【カリスマ】はかつての私にとっては重要だったが、今の私にとつては厄介極まるものだった。その為事故を装ってこの世界でのシーゲル・クラインを抹消した後、名と顔を変えて【グリーゼ・ライアード】となったのだよ。カナード

君はおそらくラクスの家族構成も調べていたのだろうがね。そして思ったとおり、ラクスはその力を使ってこの世界でも行動を起こした……我が娘ながら、とんだお転婆だよ」

肩をすくめたシーゲルが言う。

「さて【織斑計画】だったね。この計画は、所謂【究極の人類】を生み出すための一大プロジェクトだね。君達3人ならば心当たりはあるんじゃないかな？」

その言葉に反応したのは、カナードであった。

その顔を憎悪と怒りに歪ませ、構えている銃のグリップを握る手には力が込められる。

「【スーパーコーデイネーター計画】……っ！」

「そう。この世界でのスーパーコーデイネーター計画が織斑計画だよ。この計画は数十年前から動いていたんだ」

昔を思い出すようにシーゲルは瞳を閉じて続ける。

「究極の人類を生み出す。私にとつてはその【過程】こそ重要になるんだが、そこは置いておこう。彼女、【試作体1000番】は人間の究極の固体として生み出され、唯一基準値を超えた【成功作】なわけだよ」

千冬を指差しながら、シーゲルが告げる。

告げられた真実に真は絶句していた。

「だがこの計画は彼女を作り出したところで凍結してしまう。何故ならばナチュラルで彼女を越える人間が見つかったからだ。もう知つてのとおりそれは【篠ノ之束】だ」

シーゲルは次に意識を失つて床に寝かされている束を指差す。

「だから彼女とその妹……えつと、確か箒だったかね。遺伝子サンプルを得るために幼い彼女達を捕らえ、篠ノ之束にはコードと記憶処理を。篠ノ之束は普通の人間だったためか、実験を受けてもらったわけだよ、幸いその実験は成功し、そのデータを参考に【赤

月」は作られた」

赤月の名前が出た瞬間、ISのコア空間で涙を流したもう一人の篠ノ之箒の姿が真の脳裏に浮かんだ。

「じゃあ、赤月や朱蜂はアンタがつ!？」

「そうだ、ルクーゼンブルクが私の【計画】に参画した際に受け取った【時結晶】を使つてね。ラクスの遺したデータがあったからコアの製造は容易だったよ」

「クルーゼに機体を横流ししたのは貴様か」

正解だよ、とシーゲルは微笑む。

「アンタは何でそんな事を……命をなんだと思ってるんだっ!」

真の怒りの声にシーゲルは少し悲しそうな顔で告げる。

「人類を【新たなステージ】に進めるには必要な犠牲だよ」

「【新たなステージ】……だどっ!？」

アスランがシーゲルの言葉に反応する。

「飛鳥君、カナード君。君達は「イレギュラー」なんだよ。だがそのイレギュラーこそ、私が望んでいたものだ」

悲痛そうな顔から一転、その瞳に狂気を宿したシーゲルが真とカナードを見つめる。

「イレギュラー……だど?」

「そう言えば、赤月も俺がイレギュラーだって……っ!」

シーゲルはカナードを指差す。

「まずはカナード君、君の身体能力や戦闘能力は、織斑計画で生み出された彼女や凍結理由になった篠ノ之束を上回っている。君も篠ノ之束と同じくナチュラルとして生まれているのだ。天性の才に胡坐をかかず、類まれな努力によってその才を磨き続けた結

果だ。称賛に値するよ。【素体】として申し分ない」

「……っ！」

「そして飛鳥君。君が最も大切なファクターだ」

真を指差す、シーゲルの瞳はカナードの時よりも強い狂気が宿っていた。

「君の【S. E. E. D.】は進化を始めている。そこにいるアスランやキラ・ヤマトであった【ラキーナ・パルス】、そして私の娘ラクスもS. E. E. D. を持つが、君のそれはそのどれとも異なっているんだよ。赤月をはじめとした命を宿さない疑似人格のI S コアと意思の疎通が可能になり、心を通わせている。【S. E. E. D. を用いた融和】とでも言おうか。人類の新たなステージの一端だよ」

「……アンタは何がしたいんだ？」

真がこちらを狂喜の視線で見るシーゲルに告げる。

真の問いに、先ほどまでの狂気を収めたシーゲルは返す。

「【人類を新たなステージ】に上げることが、私の目的、【コーディネーター】としての使

命だ。遺伝子を調整されたからコーディネーターではない、人類を調停してこそこのコーディネーターだよ」

誇らしげに告げるシーゲルが続ける。

「故に、君達を素体にカーボン・ヒューマン技術を使って人類を調停する。進化した【S・E・E・D】を用いた人類の融和を目指す。すべての人がお互いに【S・E・E・D】を持つて繋がることで、戦争など起こりようがなくなる恒久の平和を実現できる計画だ。君たちとて悪い話じゃないだろう？」

シーゲルが自身の目的を高々に告げる。

【S・E・E・D】と【カーボン・ヒューマン】を使った人類の融和。

今の真の【S・E・E・D】は確かにISコアとの会話も可能になっている。

これは確かに【進化】と呼べるかもしれない。これを研究すれば人間間での意識の共有も可能だろう。

だがそれは多様性が全て失われ、1つに回帰するという事に他ならない。

人類の融和といえは聞こえがいいが、デユランダル議長が提唱した政策「デステイニープラン」よりも閉塞的な考えだ。

何よりも、その世界では人は人として生きていけなくなるだろう。

「……デステイニープランも問題は多々あったけど、まだ人が人として生きていけるだけアంతタの妄言よりはだいたいマシだよ」

「群衆として纏まることでの意識統一といったところか。怖気をはしるな」

「……シーゲルさん、貴方の妄言で世界を殺させたりはしない。今度こそ必ずつ」  
「交渉は決裂かな？」

「当然だ。今ここで貴様を殺せばいい、それだけだつ！」

迷わずカナードがトリガーを引く。

同時に真とアスランも銃のトリガーを引いた。

炸裂音が響き、弾丸はシーゲルの元に向かって行く。

だが、その弾丸は届かなかった。

何故ならば、高エネルギービームがその弾丸を一瞬で焼き払ったからだ。



「っ!？」

咄嗟に跳躍し、ビームの起こした爆発から逃れる3人。

そして管制室の壁を破壊して現れたのは「ホワイトネス・エンプレス」

『お父様、お迎えに上がりましたわ。ここのデータも収集済みですわ』

搭乗者のラクスはそう朗らかに笑みを浮かべて、シーゲルの元に向かう。

「ん、いいタイミングだよ、ラクス」

ホワイトネス・エンプレスの側に歩み寄ったシーゲルは懐からペンダントを取り出す。

次の瞬間、ペンダントが光り輝き、シーゲルの身体には紫とも黒とも取れる装甲を持つ機体が装着されていた。

『追手が来ています、どうしますか？』

『追手?』

シーゲルがそう首を傾げた時、ラクスの後方から接近するI Sの反応を捉えた。

『うおおおおおつ!!』

白式・王理が雪片を構えて高速でこちらに接近していたのだ。

搭乗者である一夏の顔を見て、シーゲルはほうと声を漏らした。

「つ、一夏つ、そいつを落としてくれっ! そいつが今回の黒幕だっ!」

ビームを回避したまま転がっていた真は体勢を立て直しながら、一夏に叫ぶ。

一夏にとってはそれだけで充分であった。

『そういうことならあつ!』

『全く……ラクス、下がっていなさい』

ラクスを庇ったシーゲルに雪片を振り下ろした、その瞬間。  
甲高い破砕音が響いて、雪片が破壊され、一夏が弾き飛ばされた。

『ぐわあっ!?!』

『成程。計画の残滓、彼女が守りたかったのが君という訳か』

A M B A Cで一夏は体勢を立て直す。

『なっ、何を……っ!?!』

『ふむ、君は記憶が曖昧か……ならば、ラクス』

『はい、お父様』

シーゲルのI Sの前にホワイトネス・エンプレスが躍り出る。  
その特徴的なV Lユニットからは光の翼が溢れていた。

『思い出させて上げますわ、お兄様?。』

ラクスがニイツと笑う。

『つ、まずい、一夏っ！』

真がデステイニーを展開してホワイトネス・エンプレスの能力を防ごうとしたが、遅かった。

光の翼が煌くと同時に、閃光が一夏を包み込んだ。

(目晦まし……っ!?)

一瞬そう考えた一夏であったが、その思考はすぐに止まる事になる。

何故ならば、映像や音声その全てが実感を持つて頭に流れ込んできたからだ。

織斑計画、究極の人類、母体として生み出された姉。XY染色体によつて絶対数を増やす事ができる自分。

その中には幼い千冬がシリンダーの中に浮かんでいる映像や、幼い自分がシリンダーの中に浮かんでいる映像が含まれていた。

『うわあああああああつ!?!』

突然の情報の渦に一夏の精神は耐え切れなかった。

絶叫を上げた後、その意識は途切れる事となる。

だが途切れる瞬間、男の声が耳に届いた。

「それが君達の真実なのだよ」

その声の後、一夏の意識は闇に落ちた。

『織斑君っ!返事をしてっ!』

後方から追いついた【飛燕】——簪が、意識を失った一夏を受け止める。

呼びかけても反応しない。

『意識を失ったか。まあいい、行くぞラクス』

『はい』

2機のISは飛燕を無視して破壊された壁から出て行く。

『うおおおっ!!』

真がデステイニーを起動させ、飛び上がる。

そして後を追うと、空間に潜行していくシーゲルとラクスを捉えた。

『逃がすかあっ!』

テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔を展開し、トリガーを引く。

だがビーム発射前に確かに聞こえた。

『いづれ君を手に入れるよ、飛鳥君。私の夢だからね』

そして高出力ビームは発射された。

しかし、シーゲルとラクスの空間潜行の方が速く、ビームは2人を捉える事はなかつ

た。

そしてデステイニーのセンサーから2人の反応も消失する。

『くそおつ!』

真の無念の叫びが、破壊された施設内に響く。

『真、何が……あつたの?』

意識を失った一夏を抱えた簪がデステイニーに寄り添う。

『……分かってる、今回の事は皆が知らなきゃならない事だから。まずは千冬さんや東さんを助けないと……手伝ってくれないか?』

『……うん、分かった』

彼女が何も言わずにそう返してくれた事に感謝しつつ、管制室に戻る。

切れていたと思つた因縁。

しかし——因縁は未だ切れていなかったのだ。



FINAL STAGE 運命の翼を持つ少年  
PHASE 1 降り注ぐ流星

【赤月事件】から5日が経ち、I S学園は通常運営を取り戻していた。

先の襲撃については情報規制が敷かれているが、襲撃の場面に居合わせた生徒は大勢いる。

当然先の襲撃について話題に上ることもあったが、人間の適応能力というものは偉大であった。

先の襲撃が何のために行われたのかという話題は最初の3日間くらいで話題としてのピークを過ぎていた。

後1週間もすれば生徒達も普段通りとなるだろう。

だがその中で事件翌日から、1-1-1の担任である織斑千冬は病欠となっていた。また弟でもある一夏も病欠である。

一夏については未だ意識を取り戻してはおらず、保険室のベッドで眠り続けている。

外傷はなく、意識を失う直前に影響下にあった【ホワイトネス・エンプレス】の単一仕様能力が原因とみられている。

眠り続けている為に、衰えが見える筋肉には弱い電流を流すことで衰えを防いでいるが、根本的な解決につながるわけではない。

当然彼を愛する少女達や友人達も見舞いに訪れているが、一向に目覚める気配を見せなかった。

また赤月事件の舞台となったギガフロート及び研究施設だが、シーゲル達の撤退後に研究区画を徹底的に破壊した後、証拠隠滅の為に備え付けられていたとみられる自爆装置によって消滅していた。

得られる技術やデータは貴重なものであったがこの決定に異を唱える者はいなかった。

そして、とある日の昼休み。

「ねえ、ナギ」

I S学園の解放された屋上。

季節は真冬であるが、今日は風もなく、まさに日本晴れと呼べる天気だ。

冬服とその下に数枚着込んでいるのなら、外で昼食を食べることも十分可能であった。

食堂が先の襲撃で破壊されたため、弁当を持参した清香は、包んでいた布巾をシートにして座りながら、友人であるナギに話しかけた。

「あれ、流れ星……だよね？」

「え、こんな真昼に？」

清香と同じく弁当を用意していたナギは、蓋にかけた手を止めて清香が指さした先を見つめる。

流れ星とはつまるところ隕石であり、大きさにもよるが、昼間でも視認することは可能だ。

曇りのない青空の中に、確かに光り輝く何かがあった。

「ホントだ……昼間なのに、珍しい」

ナギが物珍しそうに空に輝く光点を見て眩く。  
だが直後、気付いた。

「……あれ、何か、増えてない？」

そう、ナギの言う通り空に輝く光点が1つから2つ、2つから4つ——と次第に増えていくのだ。

そしてその光点はどんどん大きくなってきている。

この時点で、ナギと清香は異常に気付いた。

彼女達だけではなく、同じように屋上で昼食を取ろうとしていた数名の生徒達もその異常に気付いていた。

瞬間、辺りにサイレンが響き渡る。

そして同時に校内放送が流れる。

『緊急事態発生つ。学園全域に飛来する謎の落下物体を検知しました。生徒の皆さんは所定のシエルターまで避難を開始してください。これは訓練ではありませんつ、これは訓練ではありませんつ！』

「ねっ、ねえ、これってまさか……アレこつちに落ちてくるってことっ!?!」

突如流れたサイレンと緊急校内放送に動揺しながら、清香は焦った声でナギに尋ね

る。

ひざ元に置いてあった弁当が転がり落ちるがそんなことを気にしている場合ではなかった。

「ひっ、避難しなきゃっ……っ!?」

ナギが冷や汗を流しながらそう清香に告げる間にも、光点は大きくなり肉眼でもはっきりと燃える隕石が見える距離まで落下して来ていた。

ほんの数秒後には、I S学園の屋上へと落下して清香とナギ、周囲の生徒たちの命を容易く奪い、周囲に甚大な被害をもたらすはずの隕石。

だがこの隕石が落下することは、結論から言えばなかったのだ。

『伏せろっ!』

——響き渡る少年の声と周囲を照らす紅い光。

落下してくる物体に「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」は超高速機動状態を維持しつつ、最大出力のテレスコピックバレル式ビーム砲塔を向け、トリガーを引いた。

発射された超高出力ビームは落下してくる物体をいっぺん残らず破砕し消滅させていく。

「あつ、飛鳥……君……!」

「たつ、助かった……?」

思わず腰が抜けてしまいぺたんと座り込んだナギと清香。

『2人とも無事だなっ!』

『真つ、また来るよっ! 2時の方向300に落下物10、10時方向450に落下物が5っ!』

すでにS・E・E・Dを発動させており、真のみに聞こえるIS【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】の声。

その声を示す様に、ハイパーセンサーも同じ情報を提示し、真は思わず舌打ちする。直近の落下物をビームで破壊したが次々と落下物をセンサーがとらえている。

『ちいつ、数が多いっ！』

学園の敷地だけではなく、人工島全体に落下物は降り注いでいる。

いくら超高速機動を行えるデステイニーでも、1機ではどうにもならない。

——だが、真は1人ではない。

『フレキシブル偏向射撃出力全開、ティアーズフルバーストっ!!』

凜々しい声と共に光が降り注ぐ。

形容するなら光の雨、いや嵐だろう。

高出力レーザーの嵐が吹き抜け次々と落下物を破砕していく。

一度貫通したレーザーは意志を持っていているかのように縦横無尽に空を駆け、ハイパーセンサー内の落下物全てを貫いていく。

Mass Amplitude Preemptive Strike Weapon  
【大量広域先制攻撃兵器】に分類される偏向射撃を用いた武装一斉攻

撃、そしてそれを完全に使いこなす彼女、セシリアに真は脱帽しながら通信を繋げる。

『……ありがとう、セシリア。助かったよ、手が回らなかった』

『お気になさらず。真さん、落下物の周辺への影響は？』

『……大丈夫だ。地中に打ち込まれるより早く破壊できたから。別エリアもカナードやラキーナ、簪や鈴達、それにセシリアと同じくMAPWが使えるアイリス王女やジブリルさんも協力してくれてるからな』

真の返答にセシリアはほっと胸をなでおろした。

それと同時に、デステイニーとブルー・ティアーズにオープンチャネルが繋がる。

『真、セシリア。聞こえているか？』

ディスプレイに表示されたのは、ISスーツ姿の3人目の男性搭乗者であるカナードだ。

『ああ、聞こえてる』

『聞こえていますわ、カナードさん』

2人の返事に頷いた彼が続ける。



『湾岸エリアに降り注いだ落下物は全て破砕した。別エリアも問題ないと更識楯無から連絡があつた』

『そうか、よかつた』

カナードの言葉に真は安堵の息を漏らす。

だが、その表情は曇る。それは通信相手であるカナードも同じであつた。

『……真、この落下物だが』

『……ああ』

セシリアのブルー・ティアーズが破砕した隕石の残骸が一部、地上に落下していた。

真がその残骸に視線を移すと、デステイニーがハイパーセンサーで補正を入れた映像を表示してくれる。

それはただの隕石ではなかつた。

明らかに人工物であり、ドリルの様に地上を掘り進む機関が露出している。

真とカナードはこの物体が何か、理解していた。

『贈り物がニユートロンジャマー……っ！まさかばら撒くだなんてどうかしてるぞ、シーゲル・クライン……っ！』

——時間は数分ほど前に遡る

IS学園 地下作戦室

「シーゲル・クラインからのメッセージがあつたつて本当ですかっ!？」

IS学園の地下作戦室のスライドドアが開くと同時に弾けるように飛び込んでくる少年、飛鳥真は作戦室の中にいた篠ノ之束に叫ぶように尋ねた。

彼に続いて水色の髪を持つ少女、更識簪も駆け足で飛び込んでくる。

作戦室の中には、束の他にカナード、クロエ、ラキーナ、アスラン、マドカの東陣営。それ以外は教員である山田真耶、楯無やセシリア、鈴達各国代表候補生、事務員として協力しているミシエルに箒が集まっていた。

ここにはアイリス王女とジブリルのルクーゼンブルクの2人はいない、彼女達にはC・E・世界の事を伝えてはいないからだ。

現場への指示を出す責任者だが、今は真耶がその位置についている。なぜならば、この場に千冬がいないからだ。

赤月事件で知らされた【織斑計画】という事実と、シーゲルとの邂逅で体調を崩してしまった。

彼女にとつて一夏と自分は人工的に作られた存在という、隠し続けていたかった秘密が暴かれてしまったのだから無理もないだろう。

その場に居合わせた真達の他にも、この話は伝わっていた。

【織斑計画】と似通っている存在、【コーディネーター】であつた真やカナード、ラキーナ達は比較的容易に受け入れることができた。

しかし、遺伝子操作等が一般的に普及していないこの世界の人間はそうはいかず、箒を初めとして一夏に恋する少女達たちへのショックは大きかった。

「真、一夏はどうだった？」

鈴が静かに真に尋ねるが、首を横に振る。

鈴も判っていたのか沈痛な面持ちで頷いた。

「今から流すね。それとこのメッセージについては私とジエツちゃんがどこから送られてきたものか調査してるよ、ちよつと時間がかかっちゃってるけど……」

(……東さんとジエーンさん2人でも時間が掛かっていることは、少なくとも簡単に見つかるような場所にはいないってことか)

眼の下にはつきりとした隈を作っている束は少々疲れたような表情でそう言つてモニターを操作する。

すると壮年の男性、ギガフロートで邂逅したシーゲル・クラインの映像が映る。

『諸君、初めましてかな。私の名は「シーゲル・クライン」、ラクスのお父さんだ』

シーゲルの顔を見るのは、ギガフロートで邂逅した真達以外は初めてであった。

だが彼の口から出たラクスの父親というワードで、全員が顔を引き締めた。

去年から続く騒動や事件には必ずと断言していいほど関わっていたからだ。

『さて、何故君たちに連絡を入れたのか、率直に言おう。【S. E. E. D. を持つ者】である飛鳥真、ラキーナ・パルス、アスラン・ザラ、【素体】候補であるカナード・パルス、

篠ノ之東、織斑千冬、織斑一夏の7名を引き渡してほしい」

「人類を調停する計画に必要なだから……か」

メッセージを見た真がそうつぶやくと、彼の左手をぎゅつと簪が握る。  
まるで彼を繋ぎとめるかのように。

「……真」

それに薄く笑みを浮かべて真は彼女の手を包み込む。

「簪、大丈夫だから。こんなの呑むわけがないから」

「……ごめん、少しだけ心配になったの。ありがとう、真」

真の言葉を聞いた彼女はそう言って彼から手を離す。

「奴が言っていた計画か……そんなものに協力する気など毛頭ない。だから離れてくれ  
クロエ、動き難い」

「すつ、すいません、つい……つ！」

同じく素体候補と呼ばれたカナードも背中から抱き着いているクロエに苦笑していた。

さてそんなこんなで一旦シーゲルのメッセージは止まっていたため、続きが再生されていく。

『この要求にはぜひ従ってほしい、なぜならば人類を真の意味で調停するために必要だからだ。回答期限は1週間。1週間後にこちらから連絡を入れよう』

「随分と時間を与えてくれるものだな。まるで対策を練ってくれとでも言っているようだ」

「……シーゲルさん、いや、シーゲルには何か狙いがあるんだろう、その狙いはまだわからないが」

カナードの眩きに、アスランは眉間にしわを作りながら回答する。

真達の中で、かつてはラクスとの婚約者でもありシーゲルとも触れ合う時間が長かったアスランは、かつての記憶の中のシーゲルと今の彼との差に改めて驚愕していた。

『さて、今回の要求とは別に君たちに贈り物がある。楽しみにしていてくれ。それでは良い返事を期待している』

ぶつりと、シーゲルからのメッセージは終了しディスプレイが閉じた。

「……メッセージはこれで終わりですか？贈り物って？」

真が首をかしげながら束に尋ねる。

束は彼の質問に首を縦に振って答える。

「ただ今のところ何もないかな」

(……わざわざメッセージで贈り物なんて言葉を使つて、何も無いわけがない。嫌な……予感がするっ)

じとりと、嫌な汗が首筋を流れたのを真は確かに感じた。

それは真だけではなく、この場にいる全員が同じであった。

瞬間、空間投影ディスプレイが展開され、そこには紫髪の美女の姿が映し出された。真と簪の所属企業であり、責任者でもある「応武優菜」であった。

いつもはある程度の余裕を持った雰囲気の彼女だが、今はそんな雰囲気は微塵も感じさせないほど焦っているようだ。

『皆っ、緊急の連絡だっ！』

「っ、どうかしたんですかっ!？」

『ついさっきアメノミハシラの管制室から連絡があつたっ！アメノミハシラのレーダーが突如現れた地球に降下しようとしている物体を複数感知したとっ！映像はこれだっ！』

最大望遠で映し出された映像には確かに彼女の言う通り、複数の人工物が映し出されていた。

その数はざっと100基あまりだが、その人工物について真やカナード、アスラン、ラキーナ、そしてミシエルはよく知っていた。

なぜならばそれはC・E・世界の戦争が苛烈を極めるトリガーとなった要素である、2つの内の1つであるからだ。



「【ニュートロンジャマー】っ!？」

目を驚愕に見開いた真は思わず叫んでしまった。

『アメノミハシラのレーダーにも突然現れたようにしか見えなかったが、すでに降下を始めているんだっ！降下予測はIS学園がある人口島周辺っ、今ならまだ撃墜できるっ！いや、なんとしても撃墜するんだっ！』

その言葉に弾かれるように、真達は作戦室を飛び出していく。  
かつてC・E・世界を混迷に陥れた兵器を破壊するために。

時間は戻り――

???

「お父様、ニュートロンジャマー第一陣の投下が完了しました。ですが、すべて破壊されたようです。地上に打ち込まれたものは確認できていません」

「流星、というべきだね」

「お父様、何故わざわざ彼らに時間を与えるのですか？」

耐圧ガラスの向こう側に煌く水の星、地球。

それを眺めつつ、純白のドレスを身に纏った美女、ラクスは椅子に深々と座っているシーゲルに問う。

彼女はオリジナルのラクスに最も近い存在であり、所謂カーボンヒューマン〔タイプ：ラクス・クライン〕としては最高の能力と指揮権限を与えられている。

それゆえ、シーゲルは彼女を側近としているが、オリジナルにあった野心は持たないように調整されており、従順な駒の1つであった。

「人類の歴史は闘争の歴史だと思わないか、ラクス？」

原始的な狩猟民族であった時の詳細な記録は現在でも明確な記録は残ってはいない。だが農耕をはじめ、領地という概念が生まれたのが人間の種としての転機であった。土地や領土に始まり、数万、数千年という長い時間を経て、国益や権利等をめぐって人は戦い続けている。

それは何も血なまぐさい戦闘だけではない。

人々が熱狂するスポーツやゲーム。

それも人が持つ闘争本能を納得させる1つの手段でしかない。

「人は理性と闘争本能という二律背反で縛られている。勝者と敗者がはつきりと分かれているゲームやスポーツに熱狂するのは当然の事なんだよ」

所詮は人は戦わずには生きられない種族、シーゲルはこう言っているのだ。

くだらない権利や、女尊男卑などという思想で争っているのが今の世界だ。

オリジナルの記憶を受け継いでいる彼女はC・E。世界の事も当然知っている。

通婚が可能で、子孫も残せると言うのに人種が異なるというだけで、憎しみをエスカレートさせ最終的には絶滅戦争まで至るのが人間という種だ。

つくづく人間というのは醜い存在だと、ラクスは思う。

「だからこそ闘争を望むのだよ。その先にこそ真なる調和の可能性がある。さらなるS・E・E・D.の開花という可能性がね」

ディスプレイの映像が変わり、数名の男女の顔写真へと変わる。

飛鳥真、ラキーナ・パルス、アスラン・ザラ、カナード・パルス、織斑千冬、篠ノ之東、織斑一夏。

「飛鳥真だけではなくまだ成長途中のラキーナ・パルスやアスランのS・E・E・D。も、飛鳥真のS・E・E・Dと並ぶ可能性を十分秘めている。素体の候補も多ければ多いほどいい。なんなら試作体<sup>織</sup>1000番<sup>千冬</sup>と特殊固体<sup>織</sup>で個数を増やしても構わない。準備を頼むよ、ラクス」

「承知しましたわ」

深く頭を垂れたラクスにシーゲルは続けて尋ねる。

「ラクス、そういえばW・E・E部隊はどうだね?」

「妹達は全員W・E・Eへ十全な適性を示しておりますわ。すでにいつでも出撃が可能な状態です」

頭を上げたラクスが空間投影ディスプレイをシーゲルの眼前に表示させる。

そこに映っているのは非透明バイザーで顔を覆った少女達。

バイザーから垂れる髪の毛はラクスと同じ鮮やかな桃色で、全員がISS【ホワイトネ  
ス・エンプレス】に搭乗していた。

「そうか。ならばそのまま待機しておいてくれ。彼らはきつとここまできてくれるから  
ね……このメンデルに」

シーゲルはガラス越しに見える地球を呟いて笑みを浮かべた。

彼らがいるのは——宇宙だ。

## PHASE 2 人の証

## IS学園 地下作戦室

投下されたニュートロンジャマーは全て破壊することに成功していた。

学園内に発令された警報については解除されており、一般生徒達については隕石の落下による警報だったと説明があった。

以前の襲撃などに関連づける生徒達も多数存在していたが、真耶を中心にして情報規制を敷いている為生徒達には詳細な事情が明かされることはなかった。

さて、ニュートロンジャマーを破壊し終えた真達は再度、ここ地下作戦室に集合していた。

現在楯無はこの場にはいない。

父親であり先代16代目、蔵人に連絡を取っているからだ。

「カナード先生。ニュートロンジャマーの残骸については、事情を知っている皆さんの協力のおかげで回収が終わりました」

「ご協力ありがとうございます、山田教諭。残骸の破棄方法について確認してもよろし

いでしょっか?」

いつもの戦闘服に着替えたカナードは真耶に軽く頭を下げる。

真耶と残骸の破棄手段について講じているカナードを見ていたシャルロットは視線を移す。

「……もしあのニュートロンジャマーが打ち込まれていたらどうなっていたんだろう」

ISスーツ姿のシャルロットが展開されたディスプレイに映っているニュートロンジャマーの残骸を見て呟いた。

「真やカナードの話では確か、核分裂を抑制する機能と電波妨害を発生させるのだったな?」

シャルロットと同じく、ラウラも胸中にあつた疑問を口に出す。

「ああ。IS学園は地熱発電で電力を賄ってるから、エネルギーについては大きな影響

は出ないとは思う……けど、ここいら一帯のセンサーやレーザー、果ては携帯の電波に至るまで乱されたと思う。下手すれば周辺の電子機器とかにも影響があったかもしれない」

「それって医療機器とかにもってことよね？」

鈴がハツとした表情で尋ねた。

彼女の懸念は眠り続けている一夏の身体を維持している、医療機器に影響が出た場合を考え身を震わせる。

「ああ」

「……そう。でも撃墜できてよかったわ、ホント」

心から安堵したように息をついて鈴が苦笑した。

そんな時であった。

真耶の目の前にディスプレイが表示され、彼女に通信が届く。

ディスプレイに映っているのは、学園の保険医であり真耶は驚いたように数度頷いてから通信を切る。



そして真達一堂へ説明するため声量を高めて告げる。

「っ！織斑君が、織斑君が目を覚ましたそうですっ！」

目に涙を薄つすらと浮かべながら。

大切な生徒が意識を取り戻した事に感極まってか涙が浮かんでいた。

それは箒や鈴たちも同じで――。

「ほっ、本当ですかっ!？」

驚愕と歓喜に目を見開いた箒が尋ね、真耶は笑みを浮かべて頷く。

「はいっ、今、連絡がありましたっ！ここは任せて、皆さんは織斑君の所へっ！」

彼女の言葉が終わるのを待たず、箒、鈴、シャルロット、ラウラは駆けだしていく。  
人為的に生み出された人造人間。

それが一夏の出自だが、そんなことは関係ない。

箒達は織斑一夏という一人の人間に惚れたのだ。

シヨックは大きかったが、何するものか。

恋する乙女はやはり強いものだ、その様子を見た真は苦笑していたが、隣にいた箒は少し物鬱気な表情であった。

それに気づいた真はなぜ彼女がそんな表情なのか、気になった。

「どうかしたのか？」

「……………うん。織斑君が目を覚ましたのはうれしい。けど、あの時彼はラックスの「ホワイトネス・エンプレス」の単一仕様能力を受けてたから……………」

箒の言いたいことを真はすぐに理解した。

「……………つ、そうか。エクスカリバーの時の、「AIラックス」の時みたいな事があるのかもってことか！」

「……………うん」

エクスカリバー事件の際、箒はAIラックスが駆る「ホワイトネス・エンプレス」の単

一仕様能力【電腦樂園】によってその精神を囚われた。

そしてその電腦空間では、真の、「シン・アスカ」の戦士としての【記憶】を追体験させられたのだ。

目の前で亡くなっていく真の大切な人。あの空間では見ることしかできず、目をそらすこともできない。

血の匂いや硝煙の匂い等は本物としか感じられないほどリアルなものであった。

その経験から一夏も何かしらの影響を受けている可能性が大きいのではと考えているのだ。

彼女からの説明を受けた真も同じ見解であった。

「……少し嫌な予感がする」

「……俺も」

二人はうなずき合ってから駆け出す。

走りながら、内心外れていてくれと真は祈る。

10分後――

IS学園 保健室

真と簪が保健室に到着すると、先に到着していた箒達の声が耳に届いた。邪魔にならないよう目線で会話した2人は、入室はせずに室外で耳を澄ませた。

「一夏、身体は大丈夫なんだなっ!？」

「全く心配かけさせないでよね」

「本当だよ、でも起きてくれてよかったよ、一夏」

「ああ。だがまだ安静にしているべきだ」

それぞれが心中に溢れていた彼への心配の気持ちを言葉にしていた。

だが、一夏はその言葉に何も返さない。

普段の彼なら、「心配かけてごめん」などの謝罪の言葉を口にしそうなものなのにと、真が思っていると彼は口を開いた。

「……ごめん、今は誰とも話したくないんだ。1人にしてくれ」

それは明確な拒絶の言葉。

その言葉に真と簪は、感じていた嫌な予感が的中してしまった事を悟った。

少し遅れてセシリアも保健室に到着したが、真と簪の顔を見て状況を悟り、表情を曇らせた。

「なっ、どうしたんだ、一夏？」

簪が戸惑いつつも彼に問う。

「……一人にしてくれよ」

ぶつきらぼうにそう言う一夏にシヨツクを隠せない簪。  
そんな彼女の手を引つ張るものがいた。

「……簪、行くわよ」

「鈴っ!？」

鈴が簪の手を無理やり引つ張りながら言う。

「一夏が一人になりたいのなら、そうするべきじゃない？それにまだ安静にするべきなのよ……ほらっ」

声が少し震えているが、あくまでも冷静に話すよう努めているのは今の箒でもわかった。

それはシャルロットとラウラも同じだ。

【織斑計画】で生み出された人造人間、という隠された事実を彼も知ってしまったのだろう。

当事者ではない自分たちですらショックは大きかったのだ。

ならば当事者である一夏のショックは想像できない程大きなものはず。

「……分かった。一夏、何かあったら私たちがいる。遠慮せずに言ってくれ」

箒の言葉でも一夏は無言のままであった。

彼女の言葉の後、4人は保健室から退出し、真達と目が合った。

その表情はやはり重い。

数秒の沈黙の後、箒が口を開いた。

「……真、私達はどうすればいいんだろうか」

彼女の言葉からは縋るような、そして自分達の無力さへの悲しみが読み取れた。

「……後で発破をかけてみるさ。でも今は一人にしてやろう」  
(つたく、保護者ってガラじゃ……ないんだけどなあ)

真はそう内心呟きつつ、ため息をついた。

数時間後――

すでにあたりは夕焼けに包まれ、茜色の光が保健室にも差し込んでいる。それを無感情な瞳で見つめるのは、ベッドの上の一夏であった。

この数日間、点滴で栄養を補給していた為かベッド近くの台の上には、胃に優しいお粥が置かれている。

だが2口、3口食べただけで手を止めてしまっていた。  
胃が受け付けないわけではない、食欲がまるでわかないのだ。

「……」

今までの価値観、すべてが壊された。

ラクスによつて頭に叩き込まれた映像、すべてが事実。

普通の人間として、織斑一夏として歩んでいた人生は、誰かの欲望のために生み出されたものであつた。

それを隠してくれていた千冬はどれだけ苦悩したのか。

それに気づかなかつた自分はどれだけ能天気だったのか。

知らなかつたほうがよかつた事実、知りたくもなかつた現実。

すでに先程の筈達の態度から彼女達にも話は伝わっているはず。

彼女達は大切な友人だ。だが、こんな出自の自分に彼女達は恐怖を感じないのだろうか。

明確な答えは胸中では出せない。

——絶望、怒り、困惑、恐怖。

様々な感情が渦を巻き、一夏の心はひび割れ、止まりかけていた。



そんな時、保健室のスライドドアが開き、誰かが入室して来た。

「よ、一夏」

遮光カーテンを捲って現れたのは、真であった。

制服から私服に着替えてはいるが、ISの待機形態であるドッグタグを首からかけている。

「……何だよ、真。何の用だよ」

「友達の見舞いくらいしてもいいだろ」

確かにその手には小さ目のフルーツバスケットが握られていた。

「……いらねえよ、1人にしてくれ」

「そう言うなって。何か食わないと身体持たないぞ。リンゴ、食べるか？」

一夏の返答を無視した真は椅子に座って、バスケットの中から色鮮やかなリンゴを1

つ取り出す。

懐から大きめのサバイバルナイフを取り出して器用に皮をむいていく。その手つきは妙に慣れていた。

しばらくはシャリシャリとリンゴの皮を剥いていく音が保健室を支配していた。

「……じゃなかったんだ」

リンゴの皮を半分ほど剥き終わった辺りで、一夏が口を開いた。

真は彼の言葉の続きを無言で促していた。

「……俺は普通の人間じゃなかったんだ。造られた……人間……」

途中で涙声になった彼の言葉。

そこには、絶望や困惑、恐怖や怒り様々な感情が込められているのは真でもよく分かった。

だが真は自分の心中にある言葉を投げ、その言葉を一蹴する。

「だからなんだよ」

リンゴを剥き終えて、バスケットから紙の皿を取り出して上に置く。

「……え？」

当然、今の彼の言葉に一夏は目を見開いていた。

真が続ける。

「俺だってC. E. じゃコーディネーターだった。遺伝子操作を受けて生まれた人間だったんだ。お前と何が違うんだよ」

その言葉に、一夏は自分の中の何かが切れた音を聞いた。

同時にこみ上げる感情と共に叫ぶ。

「……でもつ、それでも今のお前は普通に生まれた人間だろっ！俺とは違うっ！」

いくらC・E・でコーディネーターという人種であったとはいえ、今の真は普通の人間だ。

そんな彼が自分と同じとは思いたくない。  
自分は誰かの欲望の結果生まれた存在だ。

「俺はあいつ等の欲望の果てに生まれたんだ……っ！こんな俺が誰かを守ろうなんて……っ！箒達と一緒にいることなんて……っ！」

真が自分を励まそうとしてくれているのはわかっている。

だが普通の人間じゃない自分の事なんて、分かるはずがない。

理不尽な怒りかもしれないが、今の一夏にそれを抑える事はできなかった。

こみ上げてくる涙を真に見せないように顔を伏せた。

その様子を見た真は一度ため息を着いた後に構えを取った。

顔を伏せていた一夏にはその動きを捉える事はできなかった。

「歯あ食いしばれ、一夏っ！」

真のその言葉の後、一夏の左頬に凄まじい衝撃が走った。

腰を入れ、身体全体で加速し、踏み込んだ右の一撃。

その威力は当然高く、ベッドの上から一夏を弾き飛ばすのは容易であった。

もちろん手加減はしている。していなければ一夏の意識は容易く刈り取られるからだ。

「……………?!」

突然の衝撃と痛みに何が起こったのか、一瞬理解が及ばなかった一夏はヨロヨロと立ち上がる。

目の前に歩み寄った真が、彼のシャツを掴み上げて無理やり立ち上がらせた。

「お前があれだけ悩んだ力を持つことの意味、それが生まれだけで変わるほど脆いものなのかよっ！」

彼の言葉で脳裏に浮かぶのは、この1年の騒動の中で見つけた自分の信念。

「皆の笑顔を守るために戦うんじゃないやなかったのかよっ！それともあれは嘘だったのかっ  
!？」

それは彼が悩み手にした彼だけの戦う理由。

「確かにお前の生まれは他と違うかもしれない。けど笑って泣いて、死線を潜ってお前  
が見つけた信念は他の人間が、ましてやシーゲルなんかが決めたことじゃない……一  
夏、お前が自分で悩んで掴んだお前だけのものなんだよっ！」

(っ、俺……だけの……?)

「だからさ、立てよ。そしてシーゲルにぶつけてやれ。生まれなんて関係ない、俺は俺  
だ、これは俺の人生だっつてな」

掴み上げていたシャツを離す。

一夏は呆けた様に尻餅をついたがそんな事はどうでもいい。

自分は自分でいい。

【皆の笑顔を守るために戦う】

その言葉と自分が見つけた信念が心にしみこんでくる。

止まりかけた心が再び動き出していくのを感じる。

「……俺は、俺でいいのか……？」

「当たり前だろ、バカ」

真はそう言って微笑む。

その笑顔に溢れてくるのは涙だ。

「っ、ごめん……くそっ、涙が……っ！」

「ん」

真は背後を振り返って一夏から視線を外す。

少しの間、一夏の嗚咽するような声が続いた。

そして10分程度たって、一夏は深く深呼吸した後立ち上がる。

「……ありがとう、真」

「ガラじゃないんだよ、まったく……後で箒達に謝れよ？」

「うん」

振り返った真が見た一夏の目は涙によって腫れていた。

だがその表情は先ほどまでの鬱屈したものではなく、晴々としている。

それこそ普段の一夏と言える、爽やかなものであった。

「それで、リンゴ食べるか？」

「ああ、食べる……うっ、安心したらなんか気持ち悪くなってきた」

「おっ、おいっ!？」

一瞬で顔を真っ青にした一夏が口を押えて前かがみになる。

それに真は肩を貸して、背中をさする。

「やべえ、吐きそう……っ」

「おい、馬鹿、我慢しろっ。トツ、トイレだっ!」

半ば引き摺るような形になりながら、真は一夏を保健室から連れ出していく。



その数十秒後に、真の悲鳴が校舎に響き渡ったのは別の話であった。

## PHASE 3 最後の出撃

I S 学園 学生寮 寮監室

「……」

下着やスーツ、私服が雑多に散らばっているが、片付ける気力など湧くわけがない。千冬はこの寮監室のベッドの上で横になって天井を眺めていた。

赤月事件から5日、彼女は病欠扱いとなっている。

だがそれは誤りであった。

事実彼女の体調は万全だ、そう簡単に体調不良などにはならない身体だ。

だが事実は全て公開されてしまった。

自分と一夏が普通に生まれた人間ではなく、欲望の果てに作り出された存在だと。

どんな反応をされるのか。

受け入れてもらえるのか、それとも化物と糾弾されるのか。

その事を考えると恐怖から吐き気がする。

だから誰とも会いたくない。

いまはただそれだけが彼女の感情を占めていた。

そんな時であつた。

鍵を閉めたはずの寮監室の扉が開いた音が響いた。

「千冬姉入るよ」

耳に届いたのは、大切な弟の声。

この学園に2人しか着る事のない男子用制服に着替えた一夏が、寮監室に入ってきたのだ。

「うっわあ、相変わらず部屋の掃除できてないんだな、千冬姉」

開口一番、そう言つて散らばつた下着にうへえと苦笑しながら一夏が言う。

なれた手つきで散らばつた下着をたたみ、脱ぎ捨てられていたスーツを近くにあつたハンガーにかける。

「スーツ、脱ぎ捨てるしワになっちまうって前に言ったと思うんだけどなあ」  
「……」

「千冬姉、聞いてるか？」

足元に転がっていたペットボトルを拾い上げて、一夏はベッドで横になっている千冬の側ままで歩み寄る。

彼の行動に千冬は上半身を起こしてから返す。

「その姉と言うのを……やめろ。私達に血縁など、本当はないんだ」

そう、自分達は普通に生まれた人間ではない。

人のエゴ、欲の結晶として生まれた人造人間。

顔を一夏に向けないように反らす千冬に、一夏は声をかけない。

「……最低だな、私は。一夏はきつと私を励ましにやってきたと言うのに……」

一夏に告げた自身の言葉に自己嫌悪に陥る。

だがその最悪の心境は自分を包み込む、暖かい腕によって断ち切られた。  
一夏は無言で、そつと背後から千冬を抱きしめたのだ。

「いつ、一夏……っ!？」

突如抱きしめられた千冬は困惑の声を上げる。

だが、そんな事に構わず一夏は笑みを浮かべながら口を開いた。

「千冬姉は千冬姉だよ」

「っ!？」

「俺もおんなじように思ってた。あいつ等の欲望の果てに生まれた存在だって」

ギュッと彼女を抱きしめて続ける。

「でもアイツに教えてもらったんだ。俺は俺だって。確かに造られた存在だけど、ここまで歩んできたのは俺が、皆に助けられながらも俺自身が歩んできた、俺の人生だって、気づけた。千冬姉だって、そうだろう？」

「わっ、私はっ……私は……っ！」

一夏は笑みを浮かべて、千冬へ告げる。

「それと……ありがとう、千冬姉」

一夏がまるで子供をあやす様に、優しく。  
自分の本心を彼女へと伝える。

「俺を助けてくれてから、今まで……やっぱり千冬姉に守られ続けてたんだな。ありがとう」

「いつ、一夏……こんな私を、姉と……呼んでくれるのか……っ！」  
「そんなこと、当たり前前だろ？」

「……っ！」

「千冬姉は俺にとってただ一人の家族だよ」

「一夏……っ！」

震える千冬の背中をポンポンと優しく撫でる。

彼女は小さく嗚咽を漏らしていた。

その嗚咽が無くなるまで、一夏はだまって彼女の背中を撫で続けた。

「……だから俺達は俺達だって、シーゲルにぶつけようぜ？」

「……ああ、そうさせてもらう。ありがとう、一夏」

そう言つて振り返つた千冬。

目は涙によつて赤くなつていたが、その表情は確かに笑顔であつた。

ブレイク号 格納庫

「姉さん、私に用とは？」

「んふふ、ちよつと待つてね、箒ちゃん！」

ハイテンションな束が箒の手を取つて格納庫へと入つてくる。

ちよつと千冬が一夏によつて激励されていたのと同時に、箒は束に呼び出されてブレイク号の格納庫に赴いていた。

箒の目の前には紅色のI.S.が鎮座している。

彼女の機体であった【紅椿】だが、【赤月】へ変貌した後、一夏の機体【白式・王理】に力を与えて、I.S.コアを除いて消失していた。

だが目の前にはどこか【紅椿】に似たフォルムの機体が鎮座していた。

背部には大型の砲塔が2つ、どこかで見たことがあるデザインに箒は既視感を感じていた。

「これが箒ちゃんの新しい機体！その名もっ！」

【紅藤】だ」

「だーっ!?それ私のセリフっ!!」

思いつきりずっこけながら、背後にいたカナードにツツコミを入れる束。

その態度に呆れた表情を浮かべた彼はさっさとスペックを解説してやれと束を促す。

それにゴホンと咳払いした後に従って、束が箒に向き直って口を開いた。

「この子はね、覚醒状態になった赤月の【I.S.コア】を、ミシエル・ライマンの機体で廃棄した【セイバーガンダム】とクルーゼが乗ってた【ロキ・プロヴィデンス】を素体に



した機体に組み込んだものなの。近接格闘戦が得意だけど、セイバーとかの武装を取り込んでから遠距離でも問題なし。近接武装は限りなく【紅椿】に近くしてるから違和感はないと思うよ」

「あの2人の機体を……素体にですか」

箒の脳裏に浮かんだのは自分達数人を相手取って互角を誇ったミシエルの【セイバーガンダム】の機動力。

そして、ラキーナのストライクガンダムの戦闘記録を共有された際に見たライリー、否、クルーゼの【ロキ・プロヴィデンス】の圧倒的なまでの戦闘能力。

ラキーナ自身も勝てたのは奇跡としか言えないとこぼしていたことを思い出した。

その2機を素体にしたと聞いた彼女は誰にも気づかれないうちにゴクリと喉を鳴らしていた。

「ホントは一から作りたかったんだけどね。時間がないから廃棄予定だったロキ・プロヴィデンスを破棄したセイバーのパーツで弄りまくったんだ。一応【展開装甲】も搭載しているけど紅椿と比べると不完全だから、世代的には下の【3・5世代】ってところかな」

「だが奴等の機体を使用しているから装甲全てがVPS装甲だ。使われているビーム兵器などの出力は高いし、俺達の機体のデータをフィードバックしているから信頼性も高い。もちろんお前の【紅椿】のデータも参考になっているから初期化と最適化処理すればすぐに以前の通りに動かせるはずだ」

「分かった」

「うんっ、じゃあ、細かな機体調整の為に装着してね！」

「はい」

待機形態へと変化した【紅藤】、以前と——【紅椿】と同じく【金と銀の鈴二つがついた赤い紐】を箒は束から受け取る。

ギョツと握り締めた箒を眺めていたカナードが口を開く。

「……最適化処理が済んだのなら、慣らしを手伝おう」

「いいのか？」

『その機体の基本性能は非常に高いし、腐らせておくには惜しいからな。先に行つて待つている』

カナードはそういつてドレッドノートを展開した後、開いている天井ハッチから夜空へと昇っていく。

「……一夏、私も、お前の力になってみせるぞ」

握り締めた紅藤が展開する光に包まれながら、箒が眩いた。  
機体が少しずつ、箒の体を包んでいく。

(……私も……今度は……)

その声は決して聞こえない乙女の言葉。

もしこの場に真がいれば、その言葉を、少女の言葉が届いていたかもしれない。  
だが、今この場に彼はおらず、その言葉を聞くことが出来た人間はこの場所にはいなかった。

同日 深夜

千冬が立ち直ったとの連絡を受けた真達は再度、IS学園の地下作戦室に集められて

いた。

当然召集の意味は分かっている。

シーゲル・クライン一派に対する対策である。

「皆、迷惑をかけて済まなかった」

開口一番、いつものスーツ姿の千冬はそう言っただけで頭を下げる。

普段通りの彼女の様子と同僚である真耶はほっと息をついていた。

「作戦会議の前にいいかな、千冬姉」

「……まったく、何度言えば分かる。織斑先生だ。まあ、構わない」

「ありがとう」

苦笑している千冬の返答に頷いた一夏は皆の前に歩み出る。

「皆、ごめん」

そしてそういつてから一夏は深く頭を下げた。

先の態度は明らかに八つ当たりに近いものだった。

まずは謝罪してから、一夏はここに来るまでに決めていた事だった。

「本当にごめん。自分の事しか見えてなかった。皆に心配かけたのは俺なのに……けど、もう大丈夫だからっ！今まで通り、俺は俺だからっ！」

頭を上げた一夏はいつも通りの笑顔を浮かべていた。

その笑顔を見た箒達の心の中に救っていた不安という病魔は一瞬で駆逐されていた。

「そういえば、その頬はどうしたんだ？」

「あー、いや、その……ちよつとやっちゃまってさ」

大きく腫れた左頬へ湿布を張っているのが今の一夏だ。

それを不思議に思つて箒が尋ねた。

真に殴られた後腫れはしたが、そこまでではなかった。

だがその後、遠慮のない強烈な一撃を叩き込まれてしまったせいでも大きく腫れあがっているのだ。

これに対して一夏は自分がやらかしたのだから仕方ないと納得していた。

一夏が言い淀むように視線を逸らすと、その先には少し不機嫌そうな真がいた。

先程までは私服だったはずだが、今は再び制服に着替えている。

心なしか髪の毛がシャワーを浴びた後の様に湿っているようにも見える。

「何だよ?」

「だからごめんって。新しいの買って渡すからさ」

その言葉にニヤツと真は意地の悪い笑みを浮かべた。

「……よし、ならこの高いのにしてくれ」

そういつて手元の携帯をさっと弄って画面を一夏に見せる真。

その画面を見た彼の表情は見る見る内に青ざめていく。

「たつ、たつけえっ!? 真つ、いくらなんでもこれはその……!」

真が見せた画面に映る服の値段は一高校生が払える額ではなかった。

具体的には6桁の金額のジャケットを見せたのだ。

白式のデータをある程度倉持技研に提供している一夏もそれなりに金銭面では潤っているが、あくまでそれは一般的な高校生の範囲内。

とてもじゃないが簡単に払える金額ではない。

基本的に一夏の懐事情はそこまでいいわけではないのだ。

「なんてな、冗談だよ、冗談。別にいいよ、何着かあるし」

「よっ、よかった……じゃなくて、やっぱり払わせてくれ。流星にさっきのは無理だけど」

一夏は苦笑しつつ、真の冗談に返す。

再び値段の高い服を見せられてたじろぐ一夏と携帯の画面を見せる真を少し羨ましそうな視線で、鈴は見つめる。

(真、発破かけてくれてありがとね。ちよつと嫉妬しちゃうけど)

決して言葉には出さないが、鈴は少し真に嫉妬していた。

今回想い人である一夏が意気消沈した際、自分達よりも先に立ち直らせたことに。

それは真の過去と一夏の出生の秘密が、ある程度共通していたからだと理解している。

加えて、鈴と一夏が会おうよりも前から彼は友人だった。

触れ合った時間の長さによる信頼の強さ。それが如実に表れたのでは――

(……ハイ、やめ、ストップ)

軽く頭を振って浮かんでいた考えを切り替える。

(うじうじ考えるなんてらしくないわ。一夏が笑顔でいてくれるのならいい。それでいいのよ)

少しだけ肩をすくめて笑みをこぼした鈴であったが、その所作に気づいたものはいな



かった。

そうしている間にも作戦会議は進んでいく。

空間投影ディスプレイが複数展開される。

そこに移るのは東に、真と簪の上司でもある優菜であった。

『連中の居場所を突き止めたよ』

東が少しだけ疲れたようにため息を付いた後、続ける。

『ニュートロンジャマーを投下した際には「空間潜行」と同様の事象が発生していたんだ。んでジェッチャんに協力してもらって観測データから何とか割り出したよ、場所は  
（一）』

別窓のディスプレイが追加展開される。

それは地球圏のラグランジュポイントを表した表であった。

その公転経路の1つ、【L4】が赤く点滅している。

『ここ。【L4宙域】にメサイアみたいなものがあるとみて間違いないよ』  
(L4……まさかな)

東の報告を聞いていたカナードは少しだけ嫌な予感を感じていたが、それを表情には  
出さなかった。

『実はね、つい先日新しい戦艦がアメノミハシラで竣工してね』

「新しい戦艦……？ イズモの他にですか？」

『そう、イズモ級の2番艦、【クサナギ】。知っている人はそこに2人いるでしょう？』

優菜の声に、ラキーナとアスランは一瞬反応したのを見逃さなかった。

2人はバツが悪そうな表情を浮かべている。

かつての三隻同盟の内の一艦。

ラキーナとアスランにとっては何度も搭乗した事のある艦であった。

それだけに居心地の悪さを感じていた。

「……意地悪いですね」

『別に?』

ディスプレイの向こうの優菜が少しだけ黒い笑みを浮かべるが、すぐに真顔に戻る。

『さて、アメノミハシラまで上がり、「イズモ」と「クサナギ」の2隻を使ってL4宙域にある【何か】を、シーゲル・クライン一派を叩く……そういう作戦よね、千冬?』

「ああ。協力感謝する、優菜」

『いいってこと。それにいい加減にクラインには退場願いたいしね』

疲れたようなうんざりとした表情を優菜がとると、それを見ていた千冬も頷いた。

それから、千冬の口から作戦の詳細について説明があった。

作戦の詳細は以下の通りである。

① 作戦参加者はアメノミハシラへと上り、そこで遠征組と防衛組に別れる。

② 遠征組は「イズモ」、「クサナギ」の2隻の戦艦を使用してL4宙域のコロニーと見られるモノに攻勢を仕掛ける。

③ 防衛組はアメノミハシラにて待機、ニュートロンジャマーなどの投下に備えて出撃体制を取っておく。

④遠征組はコロニーが両艦の主砲有効射程距離内に入ったら発射後内部へと侵入、シーゲル・クライン一派を撃破する。

「大まかな作戦はこの通りだ、質問は？」

千冬の声を挙げるのは一夏だ。

「遠征組と防衛組ってどう別れるんですか？」

「防衛組だが、IS学園から真耶とミシエル・ライマン、そして布仏本音。日出工業からは瀬田利香さん、小原節子さん、アメリカからナターシャ、そして英国からチェルシー・ブランケットが参加してくれる」

千冬の言葉にセシリアが驚いた顔を浮かべる。

「チェルシーがですかっ？」

「ああ、すでに今回の作戦については更識蔵人氏から英国をはじめ中国やアメリカ、フランス、ドイツ、ロシアに連絡が行っている。流星にシーゲルについての詳細は明かして

いないようだが、相手はテロリストと認識してくれている。先ほど英国のエーカー少佐からも連絡があった、非常事態になった

ら戦闘機で出撃してくれるらしい。何でも彼は英国空軍最強のパイロットらしいな」

最後の下りは少し苦笑しながら千冬が言うが、迷惑には感じていない。

「遠征組はそれ以外の、かつて歌姫の騎士団と交戦経験のあるメンバーで構成している、他に質問は？」

千冬がそう言って皆を見渡すが、挙手するものはいない。

それを確認して頷いてから言う。

「よし。優菜、IS学園組は明朝から宮島のアマノイワトに向かう」

『OK、昼頃には来れるでしょう。それから重力カタパルトを使ってアミノミハシラに  
来てもらうよ』

「あれ、アマノイワトにそんなのありましたっけ？」

優菜の言葉に、アマノイワトの施設を思い出した真が尋ねる。

彼の記憶ではアマノイワトにはマスドライバー施設はあるが、重力カタパルトなどなかった記憶しかない。

それにニヤツと優菜はほほ笑む。

『確かになかったよ？けどね、うちにはジエーンがいるんだよ？』

「……あー」

真と簪が納得したという声を出した。

ジエーンは先のエクスカリバー事件の際に、英国の重力カタパルトに触れている。

その際に色々データを拝借したのだろう。偽装も完璧なのは想像に難くない。

彼女ならば問題なく再現できてしまうのだろうと真は遠い目で納得していた。

その様子に簪は少し笑みをこぼしていた。

ジエーン・ヌル・ドウズは今この場にはいない。

すでにアメノミハシラへと上がっており、そこでイズモとクサナギの調整を行っているのだ。

「それではこの場合は解散。各自できるだけだけ休息を取っておくように」

千冬の指示に従い、一同はそろって地下作戦会議室を後にした。  
最後に残ったのは真とカナードの2人だ。

「カナード……束さんは大丈夫なのか？」

シーゲルの手札の1つ、「コード：スレイブ」

その効果を間近で見た真はその対策について気になっていたのだ。

余った時間をブレイク号で自機の整備に充てる予定のカナードは真の質問に答える。

「ああ、そう言えば伝え忘れていたな。例のコードだが……まあ、何とかなった」  
「何だよ、曖昧だな」

彼にしては曖昧な返事であったためか、真は首を傾げた。  
その様子にカナードは肩をすくめて返す。

「根本的な解決は先延ばしだ、今は時間がないからな」

「なら暫定的な対処はしたってことか？」

「ああ、簡単だ。あのコードに束が無条件に操られてしまうのなら、先にコードを使っておけばいい」

「はあ？」

思わず素っ頓狂な声が漏れる。

それに苦笑したカナードが続ける。

「先ほど織斑千冬がコードを使って命令したんだ。【自分以外の命令に従うな】とな」

「……なるほど。操られてしまうのなら、先に命令しておけばいいってことか」

真が納得したように頷く。

「ああ。織斑千冬がコードを使う場合のみ、反応していたからうまくいつているとみている。もちろん束には許可を取っているし、悪用なんてするつもりもないがな」

「もしさらにコードとかが設定されていたら？」



「その可能性は充分あるだろうな。念のために、東はイズモかクサナギ、どちらかからプライベートチャンネルで指示を出してもらおう。これならシーゲル達もそう簡単には割り込んでこれないだろう」

「成程。全部が終わった後に、ナノマシンの除去をするのか?」

「その予定だ。ただ東は指名手配もされているから除去手術ができる場所は限られるのがな……いらん手間が増えるのは堪ったもんじゃない」

肩をすくめたカナードは疲れたように言うが、その口調からは安堵の感情が多分に読み取れた。

「なんだかんだ言っても彼は〔身内〕と認めた人間を大事にするタイプだと真は思っている。」

クロエについては言わずもがなであり、マドカも出自が近いためか良好な関係だ。

ラキーナがクルーゼに敗北した時も発破をかけていたし、シーゲルに東が操られた際に外傷を与えないよう締め落して無力化していた事からも明らかだ。

(まあ、正直に言ったところで認めないんだろうな、こいつ)

「……何だ、俺の顔に何かかかっているのか?」

カナードがジト目で尋ねてくる。

思わず顔に出ていたかとすぐに真顔に戻す。

「別に、改めて束さんつてとんでもなかったんだなって思っただけだよ」

「……とんでもない天災バカと言う点は、同意する」

真の言葉にカナードは笑みをこぼしながらそう言った。

そして明朝――

IS学園から真達一同は宮島を目指し出立した。

特に目立った問題や障害などはなく、その日の昼には宮島のアマノイワトへと到着し、各員がそれぞれのISを用いて、衛星軌道上にある宇宙ステーション「アミノミハシラ」へと辿りついていった。

アミノミハシラでは、すでに到着していたジェーンがクサナギの艦長として遠征組と共に出立してくれるとのことだ。

ここで一旦真達は防衛組に回る真耶と本音とは別れることとなった。

その際、本音には――

「簪様を、よろしくお願いします」

と真面目モードで言われたため、真は――

「分かってる。行ってくるよ、本音」

サムズアップと笑顔で返していた。

そして戦艦2隻がアメノミハシラから出航し、数時間――

戦艦イズモ 艦橋

漆黒の宇宙空間を黒と金の戦艦【イズモ】と白と青の戦艦【クサナギ】が進んでいく。

L4ポイントへの到着にはやはり時間がかかるため、現在、遠征組はクサナギとイズモに別れ、休息を取っている。

イズモにはクロエに、マドカを含めた束陣営と教師陣が乗っている。加えてアスランもこちら側に搭乗していた。

クサナギには真達を含めたI S学園組が乗り込んでおり、そちらに乗ることとなったラキーナは心底嫌そうな表情をしていた。

イズモの艦橋では艦長として進路を確認している束と、そのサポートに当たっているカナードの姿があった。

瞬時に変わり行くディスプレイを確認する束の指が止まる。

「カナ君、これっ」

ディスプレイを艦橋のモニターに映して束が少しだけ焦ったように呟く。

「……………これはっ」

モニターに映っているのは、円筒形の巨大建造物。

日出工業が主導しているコロニー計画で建造予定の「ヘリオポリス」の様な通常の円

筒形コロニーではなく、太陽光を効率的に利用するための反射板等が大量に敷設されているタイプのコロニーだ。

C・Eでこのタイプのコロニーはカナードは1つしか知らなかった。

「【メンデル】か……」

（つくづく俺もスーパーコーディネーターとしての生まれに囚われているな）

イズモの艦橋モニターに映るコロニーメンデルを眺めて、カナードは自嘲染みた笑みを浮かべた。

シーゲル一派により秘密裏に建設されたその人工物はC・Eのものとは遜色ない。

かつて行われていた計画、スーパーコーディネーター計画が行われ自分とラキーナが生まれた場所。

数多くの兄弟たちが生まれる前に死に、破棄された忌むべき場所。

そこを拠点にするシーゲル達に、知らず知らずの内に掌を握り締めていた。

「……この事はクサナギにも伝えておいてくれ」

「うん、もうジェツちゃんに伝えてあるから……多分、向こうでも周知されてると思う」

よ

「そうか……まだ到着には時間がかかるな」

「うん」

「分かった。待機しておく。何かあれば連絡をくれ」

そう言って床を蹴り、無重力に身を任せて艦橋を後にする。

(……無理、しなきゃいいけどなあ)

束はそう思いつつも、再びディスプレイに視線を戻した。

それからさらに数時間後――

イズモ ミーティングルーム

「……」

ISスーツに着替え終わったカナードは、静かに壁に背を預けて仮眠を取っていた。到着してから戦闘が終わるまでは休む暇などない。今の内に休息を取っておくべきだと、判断したのだ。

だが、そんな彼を見つけた存在がいた。

ミーティングルームのスライドドアが静かに開く。

それと同時にカナードは意識を覚醒させた。

「……クロエか」

「失礼しました、カナード様。お休みでしたか……？」

ミーティングルームに入室してきたのはクロエであった。

彼女もISスーツに着替え終わっている。

身に着けるISスーツのデザインは彼と同じデザインの色違いのものであった。

「いや、構わない。どうした？」

「少しだけ……よろしいですか？」

「ん」

壁に背を預けていたカナードは、彼女が来れる様に椅子へと移動し腰を掛ける。彼女も彼の右隣りの椅子に腰かける。

「どうした？」

「いえ、その……少し、貴方と一緒にいたくて」

照れたように返すクロエに、思わず苦笑が浮かんでしまった。

「不安、なのか？」

「……はい」

クロエが不安を感じるのも仕方がないだろう。

此度の相手はカーボンヒューマンで量産されたラクスと、その父親であり元凶の、シーゲルなのだから。



「……心配するな。長く続いた因縁だが、今度こそ断ち切って見せる……だからそんな顔、するな」

そつと頭を撫でる。

少し驚いたようにピクつと跳ねたクロエだが、すぐに彼に身を預けた。

(……そういえば、東が温泉に行きたいとかボヤいていたな)

彼女が以前ボヤいていた話を思い出して、彼は笑みを浮かべる。

(全て片付けた後になるが……連れて行ってやるか。金など腐るほどある)

ふと思い出した束の要望をかなえてやるかと、カナードはこの時決めたのだった。

---

同時刻――

クサナギ レクリエーションルーム

「簪、ここにいたのか」

クサナギのレクリエーションルームで宇宙の景色を眺めていた簪に声をかけたのは真だった。

レクリエーションルームには2人以外の人影はなく、静かに宇宙の星々の光が耐圧ガラス越しに煌めいていた。

「うん。凄く綺麗だったから。真、どうかしたの？」

「ん、俺も星見たくなってさ」

静かに、真も彼女の隣に腰を掛ける。

その後数分間、互いに星々の光を眺めていた。

そして真から口を開いた。

「……一緒に、来てくれるか？」

「っ！」

真が口にした言葉に簪は彼の顔に視線を移す。

彼は苦笑の表情を浮かべていた。

「本当は、本当はさ、防衛組にまわって欲しかった。でもエクスカリバーやクルーゼ事件の時と同じで、やっぱり簪は……きてくれるんだろ？」

「……うん」

「なら、俺は君の意見を尊重したいんだ……絶対に、守ってみせるから」

真っ直ぐ簪の顔を見て、真は告げる。

その視線に簪は顔を赤くしてしまった。

彼女のその様子に、真は笑みを浮かべる。

「俺は君に会えてよかった」

真は微笑みながら、彼女に告げる。

「戦う事しかできない俺を変えてくれたのは君だ。この世界で君にあえて、本当に良かった」

彼女の手をとって、優しく握って告げる。

「生き残って、絶対に守って見せるから」

真っ直ぐな瞳で真がいい終わると、簪は朱色の顔のまま少しだけため息をついて言う。

「……ずるい、自分ばかり」

「え？」

予想外の返答に、素っ頓狂な声と反応を見せてしまう。

それに微笑みながら、簪が言う。

「私だって真にあえてよかった。私の心を支えてくれたのは真なんだよ？」

真が握る手を握り返して続ける。

「一歩も踏み出すことができなかつた、私を助けてくれた……告白の時の簪だからって言葉が本当に嬉しかった」

その言葉に今度は真の顔に赤味がさした。

「なんだか……照れるな。でもありがとう」

「……ねえ、真」

彼女の方から瞳を閉じる。

まるで何かを待っているかのように。

2人の影が重なる——その直後であった。

ガタンつと何かが動いた音が響いた。

刹那、2人は飛び上がるように離れた。

レクリエーションルームのスライドドアがいつの間にか開いており、そのドアから顔を出しているいつものメンバー。

加えて、ラキーナやフレイの姿も見えた。

「おつ、お前等いつから見えた……っ!?」

震える声で真は何かそれだけをひねり出した。

「えっと……君に会えてよかったってところ」

一夏が少しだけ顔を赤くしながら返す。

「はっ、破廉恥だぞ、真に簪っ!」

「でも、お二人とも凄くお似合いですよ」

「ばっ、そんな正直に言わなくていいってのっ!」

「ああいうシーンを見れる機会なんてそうそうないよね」

「だな。戦闘前には少々不謹慎だとは思うがな」

「すぐかったわねえ」

「大胆だなあ」

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、フレイ、ラキーナが続ける。

顔に浮かぶのは生温かい視線と笑み。

プルプルと真の肩が震えている。

シャルロットがまず気づき、皆が連動してそれに気づいた。

「あー、これまずいよね、真、怒ってるよね」

「っ、これは戦術的な撤退だっ、逃げるぞ！」

「逃がすかあっ！お前等あ、記憶から消せえ、すぐにいつ！」

脱兎のごとく逃げていく一夏たちだが、通路があまり広くないことに加えて無重力に中々慣れていない面子が多数なのが不利であった。

それに真っ先に気づいたのはフレイだ。

（まずっ、このままじゃっ！）

そう判断したフレイの行動は早かった。

「秘技、ラキーナガードっ！」

すぐ近くにいたラキーナの肩を掴んで後方に突き飛ばす。

無重力であること、ラキーナがすぐそばにいたこと、そして彼女よりもフレイの身体能力が上だからできた咄嗟の行為。

「えっ?ええっ!？」

「ごめんね、ラキ。今度美味しいパフエご馳走してあげるからーっ！」

一瞬の事で何が起こったか分からないラキーナは素っ頓狂な声を上げつつ投げ飛ばされたが、すでに遅かった。

床を蹴った真が盾にされたラキーナの肩を掴む。

「あだだだっ!？」



痛みで硬直したラキーナの手を掴んでそのままレクリエーションルームの壁に押し付けて拘束する。

「捕まえたぞ、ラキーナ」

「ぐえっ、フツ、フレイツ、うそっ、酷いっ、盾にされたあっ?！」

絶望したように顔を青ざめさせるラキーナ。

彼女を盾にして一夏たちは逃げ切っていたのだ。

ギリギリと肩に置かれた手が身体に食い込んでいるが、手を捻り上げないだけの理性は今の真にも残っている。

しかし身体能力ならばラキーナよりも遥かに高い彼に押さえつけられているのだ。当然痛みもある。

「ごめんっ、他の人たちには言わないからっ、ごめんってっ!真っ!」

「喋ったら……っ!」

「うっ、うんっ!」

ブンブンと首を縦に動かすラキーナを見て、拘束していた手を放してラキーナを開放する。

「あいたた……」

押さえつけられた箇所を撫でながらラキーナは浮かんだ涙をぬぐう。  
すると彼女の肩に手を置いた存在がいた。

「ラキーナ」

「ひえっ」

簪であった。

普段の彼女よりも低く、底冷えした声色に思わずラキーナは声を上げた。

「……言わないでね？」

「いつ、言いませんっ、神様に誓っていいませんからっ！」

静かに怒る彼女の雰囲気を押され、冷や汗が流れる。

直接的に怒りを表した真よりも怖いのではないかとラキーナは思考の片隅で思ったがすぐに放置した。

何故ならば――

『テストス、あー、クサナギ艦長のジエーンだよ。そろそろ作戦開始だから、皆、格納庫での待機、よろしく』

クサナギの艦内放送が届いたからだ。

「……………やっとか」

アメノミハシラを発進してからすでに一日近く経過している。

だがようやくL4ポイントへ、到着できたのだ。

艦内放送が終了すると同時に、真達は格納庫へと向かう。

クサナギ 格納庫

L4 宙域にたどり着いたクサナギのカタパルト内でそれぞれの「IS」を装着したパイロット達はディスプレイに映し出される「コロニー」を確認しつつ、出撃準備を行っていた。

『あれが……メンデル、か』

『大きいね』

『ああ、C・E. の標準的なコロニーと遜色ない様に見えるな』

ディスプレイに映った「メンデル」の様子に呟いた簪に真が返す。

すでに全員がISを装備しており、一夏達は先に出撃していた。

同じようにイズモのカナード達も出撃している。

次は簪の「飛燕」がカタパルトに接続され、コントロールが譲与される。

全ての武装コンディションが問題ないことを確認し、簪が告げる。

『先に、出てるね?』

『ああ』

ディスプレイに映る簪に、マニピュレータ毎サムズアップすると彼女も同じように返してくれた。

そして彼女は一息入れた後、出撃コールを発した。

『更識簪、〔飛燕〕、出ますっ！』

電磁カタパルトが起動して、宇宙空間にIS〔飛燕〕が射出される。

V Lユニットから蒼い光の粒子を溢れさせつつ、その翼を広げる。

そして続いて、真のIS〔ステイニーガンダム・ヴェステイージ〕がカタパルトに接続される。

カタパルトに接続されると同時に、瞳を閉じて、気持ちを落ち着かせる。

脳裏に大切な女性の姿をイメージした途端、彼の意識の中で〔S. E. E. D.〕が弾け飛ぶ。

それと同時にステイニーガンダムから声が届いた。

『真、私も最大限、あなたをサポートするからね』

愛機からの声に笑みが浮かぶ。

すうつと深呼吸した後、彼女の言葉に返す。

『行くぞ、デステイニー。これが俺達、最後の出撃だっ！』

『うんっ！』

デステイニーの返事と共にコントロールが譲渡された。

『飛鳥真、『デステイニーガンダム・ヴェステイージ』、行きますっ！』

電磁加速によって急激な加速を得たデステイニーがカタパルトから射出された。

A M B A Cとスラスターによる機体制御によってその加速のまま、V Lユニットを広げる。

宝石の様に煌く赤い光の翼が広がり周囲を染め上げた。

## ANOTHER PHASE 勇敢なる者の輝き

漆黒の宇宙空間、その先に見えるメンデルに向かう2隻の戦艦、イズモとクサナギ。その片割れ、クサナギの艦橋でコンソールを操作するのは艦長であるジェーンだ。

『ミーティア射出っ、ラキーナちゃん、アスラン・ザラっ！受け取ってっ！』

同様の操作が行われたイズモと同じく、カタパルトからミーティア2機が射出され、先行して出撃していたストライクフリーダムとインフィニットジャスティスの元へと向かう。

MS用オリジナルのミーティアはその巨大さから、戦艦の旋回砲塔の役割を担っているが、IS用のミーティアはダウンサイジングされている為、イズモ・クサナギ両艦の格納庫に十分収まるのだ。

真達の中で最もミーティアに精通している人間、それはラキーナとアスランだ。

コロニーは巨大建造物であり、それを戦艦2隻で制圧することは難しいが、ミーティアという対艦・対要塞攻撃能力をISに付与できる装備があれば話は別だ。

インフィニットジャスティスに覆いかぶさるようにミーティアが接続される。ストライクのフリーダムストライカーのウイングユニットが一部展開され、ミーティアが腰部に接続され、コンソールにも専用UIが表示される。

『各機、聞こえるか』

プライベートチャンネルを経由して、ドレッドノートHからの通信が届く。

『ミーティアを装備したストライクフリーダムとインフィニットジャスティスで敵陣を突破する。2機は露払いを頼むぞ』

ディスプレイに映るラキーナとアスランは頷いて答え、ミーティアから得られる爆発的な推進力を持って、ストライクフリーダムとインフィニットジャスティスは、メンデルへと先行する。

単純な移動速度ではV.Lユニット装備機を上回る速度であり、並みの機体では反応すらできないだろう。



『……味方だと本当に頼もしいな』

『真?』

先行する2機の様子を、遠い目で見つめる真に簪は首を傾げる。  
彼女の声に頭を振った後答える。

『いや、何でもないよ』

そう彼女に言った瞬間、いきなりデスクテイニーのコンソールが立ち上がった。

『っ!?!』

咄嗟の事態に目を見開くが、すぐにその内容を確認する。

飛燕が寄り添うように接近して、そのコンソールの詳細を確認する。

『真、それって……っ!』

『……ああ』

簪もこれが何なんのか気づいた。

そして、それがどこから送られてきたものかと言うことも。

『皆、聞いてくれ。今メンデルからデステイニーに座標データが送られてきた』

繋がったままのチャンネルへ真が告げる。

チャンネルの向こう側で、全員が息を呑んだ音が聞こえた。

『本当か？』

『ああ。これだ』

真が別ディスプレイを立ち上げ全員に共有する。

それはメンデルの詳細な施設データであった。

メンデルの中はどうかやらオリジナルと同じ、巨大な研究施設となっており小さきまざまな区画が存在している。

そしてその中、中央部に一つ、赤い点が表示されていた。

この光点が指し示すのはつまり――

『ここに、シーゲル・クラインがいるってことだと思っ』

『それってつまり……誘ってるってことか?』

白式・王理を駆る一夏が呟く。

その呟きに真はうなずいて答える。

『奴の狙いは素体となる人間と、【S・E・E・D】……俺の中にある因子、らしいからな』

『誘いだということは判り切っている。だが、それでも……行くのか、真』

冬期休暇中に宙域戦闘に対応できるように束が改良を加えていた【暮桜】を纏う千冬が尋ねる。

飛鳥、ではなく真という親しい人間に向けての言い方で。

『……はい。決着はつけます』

彼女の言葉と視線に真っ直ぐに返すと、

『……分かった、ならば更識。お前は真の背中を守れ』

『えっ？』

『共に行くんだろう。それにどうせ止めても無駄……そうだろ？』

『そうですね、簪ちゃんも頑固ですから。もういくつもり満々かと』

千冬が確認の為に楯無に話を振ると、それを肯定したように楯無が返す。

『ならば、真と共にいたほうが生存率は上がる。違うか？』

微笑を浮かべた千冬と楯無に、簪は少々面食らったが、すぐに真剣な表情になって頷く。

『私も……真と一緒にいきますっ』

『うん。雑魚は私に任せてねっ！』

簪の言葉に、楯無は笑顔で答え、視線を真に向ける。

その目は簪を頼むと彼に投げかけたものであり、真は静かに頷いた。

『メンデルから熱源反応っ！20……30……50……さらに増大中っ！』

クサナギのジェーンから全機に通信が届く。

同時に自機の望遠モニタにもそれが映し出された。

映し出された敵機は、この1年で幾度も戦った初期GATモデルの無人機達だ。

『はいはい、いつものいつもの無人機無人機』

すでに慣れてしまったのか、鈴はため息をつきながら軽い口調でそう言った。

『鈴、お前なあ……』

一夏が呆れた様な顔で鈴に言う。

『一夏も、いい加減慣れたでしょ?』

『そりやそうだけど』

『でしょ?なら気楽なもんよ』

どういうわけだよと、友人である鈴の意見に苦笑する。

しかし確かに、彼女の言う通りすでに無人機とは幾度となく戦い、経験を積んでいる。それはセシリアやシャルロット、ラウラも同じであり、何処か余裕さえも感じる。

『母艦であるイズモとクサナギを守りながらの戦いだ。各機集中しろっ!』

『『当たれええっ!』』

千冬の声と共に、先行したラキーナとアスランのミーティアから放たれた  
ミーティアフルバースト  
全門一斉掃射が戦場を彩る。

ストライクやイーゼスをはじめとした無人機たちがその攻撃に巻き込まれて、鮮やかな華となって消えていく。

だが次から次へと、ミラーージュコロイドの隠ぺいを解いて、その姿を現していた。

クサナギとイズモのリーダーはその数によって真っ赤に染まっていた。

同時に浮ついていた雰囲気も霧散し、各機は役割を果たすための戦闘機動に入つていく。

その中を、先行したミーティアを追う様に突き抜ける2機のIS。

互いに光の翼、【Vルユニット】を装備して相反する色の翼を翻す。

【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】と【飛燕】だ。

飛燕が先行し、デステイニーがその背後を追う様な形になっている。

別段それ自体は変わったことではないが、飛燕には特殊な兵装が追加されていた。

背部のVルユニットよりも小さいが、肩部から機体全面を覆うような巨大なシールドと形容できる代物だ。

そして当然突出する2機には、無数の無人機からのビームが降り注ぐ。

いくらミーティアで面攻撃が可能になったとはいえ、戦場全てをカバーすることは不可能だ。

討ち漏らしも当然多く存在している。

飛燕、デステイニー共に降り注ぐビームへの回避行動を取る——必要がなかった。

なぜならば、飛燕とデステイニーに向かうビームは全て、何かの【膜】があるかのようには弾かれているからだ。

これは飛燕の前面を覆う巨大なシールド「ヘルヴォル」の機能によるものだ。

堅牢かつ巨大なシールドは元々飛燕の前身、「打鉄式式」の追加装備「不動岩山」であったものを飛燕用に改修して今回の作戦に間に合わせたものであった。

また日出の技術を応用しているため、ミラージュコロイド粒子を高密度で纏う事で疑似的な「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」と同様の効果を得られるよう改修されている。

元々がシールドであるため、物理攻撃に対しても通常のシールドよりも高い防御能力を得ている。

余談であるが、簪はこのシールドの材質をラミネート装甲にしたいと提案していたが、デステイニーガンダムの特装換装のためにアミノミハシラの工房を使用していたっていた為、今回の作戦には間に合わなかったという経緯がある。

もともと彼女もデステイニーが日出に属する機体かつ男性搭乗者の機体であり採算を度外視していることは承知している為、納得していたのだが。

#### —— 閑話休題

「ヘルヴォル」の効力が十分に発揮され、ビームを回避することなく、戦場を突っ切っていく飛燕とデステイニー。

そして特に妨害もなく、2機はメンデルへと取り付いた。



追撃もなぜかない。

センサーでこちらを狙うI Sがないことを確認して、搬入ハッチをクラレントで撃ち抜く。

ハッチを開放し終わってから、真が呟く。

『……わざとだな』

『……うん』

【ヘルヴォル】を格納した簪もそれに同意する。

この装備は燃費がいいとはいえ最大出力展開していればいくら実戦仕様状態でもそこそこのエネルギーを消費する。

飛燕のエネルギーは8割強程まで減っていた。

だがここまできて引き返す選択肢は存在しない。

『行こう、決着をつけるために』

『うん』

機体のスラストを吹かして座標データと内部構造マップを頼りに、2機はメンデル内部に侵入する。

デステイニーと飛燕がメンデルに侵入して少しした頃――

クサナギとイズモのセンサーが高速で飛来する熱源を複数検知した。

即座に艦長であるジェーンと束はより詳細な情報を確認するため、望遠モニタを起動させる。

そこに映るのは――

『っ、ラクスのカーボン・ヒューマン……っ!』

束の言葉通り、ラクスの顔をした数人が非透明バイザーを付けた人間を従えて戦場に現れたのだ。

その全員が「IS ホワイトネス・エンプレス」を身に着けている。

唯一オ리지ナルと異なっているのは、背部に存在していた「Vユニット」が存在しない点であった。

「飛鳥真やカナードからの報告にあった、V.Lユニットを持つ機体が存在しないようだが……？」

コードによる洗脳の可能性を鑑みて東の監視と、ドラグーン対策のためにストライクガンダムとの同調ユニットを身に着けたマドカが呟く。

「多分、そいつはオリジナルに最も近い存在、指揮権を持った個体だから……シーゲル・クラインが側近にしているんだよ」

「成程」

東の補足に納得と頷いたマドカは、カーボン・ヒューマン達が到着したことで変わらつつある戦場に視線を移した。

『ふふっ、お上手ですわね、お兄様？』

『俺は、あんた達に、兄呼ばわりなんてされる覚えなんてねえっ！』

ホワイトネス・エンプレスを駆るバイザー付きのラクスが、展開したビームライフルで白式・王理を狙う。

だが今の一夏はその程度の攻撃を喰らったりはしない。

スラストターと、王理に進化したことで構築された「エナジーウィング」によるAMBACを駆使してライフルの射線から逃れ、そのまま加速する。

『何故お父様の意思に従わないのです？』

理解できないという表情を浮かべながら、ビームを放ってくるラクス。

『私達と同じく、人の手によってつくられた存在だということにつ！その身体は次代の新たな種を生み出す糧になるかもしれないにつ！』

ラクス・クラインの顔を直接見るのは一夏は初めてだった。

カーボン・ヒューマンとして造られた彼女も全く同じであるため、美人だとはつきり思う。

だが狂気を浮かべるラクスの表情に惹かれるものなどない。

そして奴らの考えを一夏は理解する気など毛頭ない。

『ふざけるなよっ！たとえ造られた存在だとしてもっ！俺はっ……俺だあっ!!』

一夏の意志に呼応するように、王理の脚部や肩部の装甲がパージされ、それがマニピュレータを覆うように集まって巨大な「爪」を形成する。

同時に、機体の名と同じ、純白の閃光で爪を覆った。

白式・雪羅から継承／発展したこの武装の名はエネルギー爪【雪羅改】  
元の武装と同じく、零落白夜と同じエネルギー無効化能力を持っている。

『うおおおおおっ!!』

放たれたビームライフル全てをその光で切り裂いて、高速接近。  
そのまま、ラクスが持つビームサーベルを切り裂いた。

『くっ、私が……っ!』

思わぬ攻撃を喰らったラクスは、驚愕の表情を浮かべながらも咄嗟の瞬時加速によって後方に下がってしまい、射程から逃げられてしまう。

白式・王理の武装は雪羅の時とは違い、荷電粒子砲が消失していた。

その為、中距離以上に離れると、どうしようもなくなってしまう。

それに舌打ちをするが、まだ終わりではなかった。

『一夏つ、援護するぞっ！』

【紅藤】を身に纏う箒が背部から展開された巨大な2門の砲塔を抱えるように現れたからだ。

元の武装はセイバーの【アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲】であるが、紅藤と箒専用に改良された武装の名は【桜花】だ。

2門の高出力ビームが砲口から放たれる。

だが箒はあまり射撃は得意ではない。

その為狙いが甘く、ラクスはそれを踊るように回避して距離を取る。

『くっ、すまない』

『いや、サンキュ、箒。助かった』

苦虫を嘔み潰した様な顔の箒に、一夏が笑みを浮かべ雪片を構えながら言う。

箒もすぐに意識を切り替えて、ビームサーベル「残光」を展開した。

すでに戦場は混戦の様相を呈している。

一夏や箒以外にも、量産型のカーボン・ヒューマン「ラクス・クライン」で構成された【WE部隊】と、次いで現れる無人機との戦闘が始まっていた。

セシリアや鈴などをはじめとして基本的にはツーマンセルを組んでいる。

それはカナードも同じであった。

『邪魔だっ！』

目の前のすでに両マニピュレータを切り裂いて行動不能にした無人機デュエルに、ドレッドノートはビームサブマシンガン「ザスタバ・ステイグマト」で、MSでいえばコックピットにあたる機体中央部を撃ち抜いて蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたデュエルは、打ち込まれたビームが推進剤に引火して爆発する。

『クロエっ！』

『承知しました。行って、ドラグーンっ！』

カナードの声に答えるように、クロエの駆るXアストレイは背部のドラグーン全てと腰部のプリステイスを無線モードで切り離れた。

ドラグーンそれぞれが生きているかのように、周囲を旋回して縦横無尽に無人機を破壊していく。

その攻撃密度はまさに「MAPW」と言つて過言ではない。

ドラグーンそれぞれのエネルギーを一旦供給するために、機体に戻す。

瞬間、閃光が迸った。

ドラグーンを回収するために一瞬無防備になる状況を狙われ、クロエは回避ができなかった。

『させるかっ！』

しかし、飛来した閃光は、割り込んだドレッドノートのアLが弾き飛ばした。



『あつ、ありがとうございます。カナード様』

『いい。くるぞっ！』

礼の言葉と共に次々に迫るビーム。

回避行動に移るが遅れたクロエを、ドレッドノートはALを巨大化させて守る。

『あらあら。お二人とも仲がよろしいんですね』

そう言つて現れたのは、バイザー装着しているタイプのカーボンヒューマン：ラクスだった。

ISもホワイトネス・エンプレスを身に纏つており、片方のマニピュレーターにはビームライフルが展開されている。

彼女が目の前に現れたと同時に、弾かれたようにドレッドノートは「ザスタバ・ステイグマト」のトリガーを引いた。

連続して放たれ、弾幕となったビームをホワイトネス・エンプレスは華麗に回避していく。

しかしカナードにとっては、ラクスに回避されることも計算内だ。

すぐさまALの発生率を調整。

十八番の武器〔ALランス〕として構築し直し、目標に向かって加速し刺突する。

だがホワイトネス・エンプレスが展開した〔ラケルタビームサーベル〕がALランスを受け止める。

コロイド粒子とALがぶつかり合い、周囲を明るく照らす。

機体の出力はほぼ直角であり、鏝迫り合いの状況へと変化した。

『ふふ、流石、お父様が素体を選ぶだけの事はありますわね。カナード?』

『知ったことかっ!俺の生き方は俺が決めるっ!』

そう叫んだカナードは空いているALマニピュレータから、ALをブレード状に変化させてラクスに向ける。

一瞬驚愕の表情を浮かべたラクスだが、すぐにドレッドノートとの鏝迫り合いをやめて離脱する。

だがカナードはそれすらも読んでいる。

片方のALマニピュレータの起動と共に、背部のHユニットをバスターモードで起動していたのだ。

砲口からビームと共に時間差でグレネードが射出され、ラクスを狙う。

『この程度……っ!?!』

ビームを何とか回避したラクスは、ビームライフルで迎撃の姿勢を見せたが驚愕に一瞬だけ硬直した。

なぜならば、彼女の相対的上方にドラグーンが展開されていたからだ。

『そこですっ!』

そのドラグーンを操る本体はXアストレイのクロエだ。

すぐさま回避のためにスラストターを吹かせるが、完全な回避には至らなかつた。

ビームライフル毎右マニピュレータを、Xアストレイのビームが撃ち抜いたからだ。

『っあっ!?!』

ビームライフルに供給されていたエネルギーに引火し、元々の装甲が薄いのもあつて

かホワイトネス・エンプレスの右マニピュレータはフレームを残して吹き飛んでいてた。

当然、纏っているラクスも無事では済まない。

右腕には爆発によって生じた裂傷が生まれていた。

そして追い討ちをかけるようにグレネードも着弾。

そのまま弾き飛ばされた。

『このまま仕留めるぞ、クロエっ！』

『はいっ！』

一度散開して挟み込むように距離を詰める。

瞬間、カナードの視界に何かが映り込んだ。

それが彼の視界に入り込んだのは、本当に偶然だ。

ただ運が良かった、それだけであつた。

(な、に?)

それはクロエの、Xアストレイの上方から迫る「くの字型の何か」であった。

(馬鹿なっ、あれは……ドラグーンっ!?)

形状は見たことがないが、超高速で接近するその武装は確かにドラグーンであった。ドレッドノートとXアストレイのハイパーセンサーはそのドラグーンを感知していない。

あり得ないことだ。

超高速で飛来する武装であるドラグーンをISが感知できないわけがない。

そして気づいた。

追い込まれているはずのラクスの顔に浮かぶのは、いつのまにか焦燥ではなく、笑みに変化していたことに。

(ちっ、あのままではっ!!)

ハイパーセンサーに感知されずに接近できる「ドラグーン」。

脅威以外の何物でもない。

すでに目の前のラクスにとどめを刺すことを放棄して、感情の赴くままに加速する。  
その先は――

『クロエエツ!!』

瞬時加速、間に合うかのギリギリのタイミングであったが、手が届いた。  
刹那、赤い雫と共に――【何か】が彼女の目の前を舞った。

『……………え?』

ラクスを仕留めるために加速して、不意に押し出されたクロエの口から思わずそんな間拔けな声が漏れた。

次の瞬間、何が起きたのか、一瞬麻痺していた脳が覚醒すると共に、朱色の虹彩が金に変わっていく。

『カナード様あつ?!?』

目の前で愛しい人の【右腕】が切断され、紅い雫を大量に零して舞っていた。

『あらあら、まさかドラグーンに気づかれるなんて……ですが腕は貰いましたよ?』

『もう、お姉さま。遅いですよ』

『まあまあ、そう言わないでくださいいな、アイン?』

周囲の宇宙空間がぶれるように、ノイズが現れた。

そのノイズから、バイザーを付けていないタイプのラクス・クラインが現れた。

今まで戦っていたラクスは「アイン」と呼ばれ、その彼女は新たに表れたラクスを姉と呼んだ。

彼女が身に着けている【ホワイトネス・エンプレス】はオリジナルともその他のラクスとも違うものであった。

特異なのは背部に接続されている鋏状のドラグーンユニットだ。

まるで鋏が翼を成しているようにも見え、その1つに先ほどカナードの腕を切断したドラグーンが再接続された。

そこから導き出されるのは、新たに表れた彼女はより上位の力を持ったカーボン・ヒューマンであるという事。

『っ、ぐう……っ!』

右肘から先を切断されたカナードは、激痛に苦悶の声を漏らしながらも切断された自身の腕を回収する。

切断された上腕部分を千切れたISスーツの一部を紐のように巻き付けて圧迫し、止血を行う。

『腕がっ、カナード様っ、カナード様っ!?!』

ビームライフルを放りだしてクロエはカナードに翔け寄る。

だが射撃武装を放り出すという致命的な隙を見逃すラクス達ではなかった。

『お行きなさい、シザードラグーンっ!』

『逃がしませんよっ!』

武装である「シザードラグーン」が翼から放たれると同時に、今度は完全に姿を消し



た。

そして「シザードラグーン」自体ISの搭乗者保護を一方的に突き破るほどの攻撃力がある武装とは思えない。

何かしらのカラクリが2機にはある——だが今は状況が悪い。

『ちいつー！』

パニック状態になったクロエを残った左腕のマニピュレーターで抱き寄せて、瞬時加  
速。

同時に拡張領域からありったけの「グレネード」を投げ捨てるように展開。

そのまま、ドラグーンがグレネードに着弾して、一瞬周囲が真昼の様に明るくなるほどの閃光を生じさせる。

彼が投げ捨てるように展開したのは、対IS用の閃光手榴弾であった。

対人用よりも数段強化された代物だ。

『！?!』

いかにI Sとは言え搭乗しているのは人間だ。

一瞬ですさまじい光量が発生すれば、反射で目を瞑る。

その僅かの隙に、近くにあったデブリ帯に身を隠す。

スラスターをOFFにしてP I Cのみで稼働することで、応急処置の時間を稼ぐ。

『っ……っ！』

ドクドクと、止血しているI Sスーツが血で濡れていく。

ドレッドノート側から搭乗者保護の一環として、脳内麻薬の過剰分泌による鎮痛が行われているがあくまで応急処置でしかないし、限度もある。

腕が切断されるといふ重傷には焼け石に水でしかなかった。

この世界でも傭兵としての仕事を請け負っているカナードは、緊急時に備えて拡張領域に医療キットを登録していた。

まさか自分が使うことになるとは思ひもしなかったが、その中からモルヒネを取り出して注射する。

痛みが消えるわけではないがこれで多少はマシになる。

『あつ、ああ……っ!!』

切断された右腕を注視して、クロエが呆けたような声を出す。  
残った左腕のマニピュレータを格納し、彼女の頬を叩く。

『パニックになるなっ！相手はカーボン・ヒューマンとはいえラクス・クラインだっ！しかも2人いるっ、パニックになればそこに付け入ってくるぞっ！』

『でっ、でもっ、その腕がっ、腕ではっ！』

『今は勝つことだけ考えろっ！頼む、クロエ……っ！』

それ以上、クロエは何もいえなかった。

きゅつと口を閉じて、涙をぬぐう。

先程よりは落ち着いたようだ。

それを見て彼は、モルヒネが効いてきたのか多少マシンになった痛みと戦いながら、ラクス達の機体の分析を開始する。

(片方は……【ジャミング】に類する機能が能力を持っている。【アイン】と呼ばれた……)

ドイツ、いや、あの上位存在とも見られるルクスの存在からして、ヘブライ語の16番目、序列か？まあいい。ドラグーンのみを対象にしたジャミング能力。下手に全てを隠すよりもうまく使っているな……厄介だなっ)

先ほどの光景を脳裏で再現し、要素を抽出していく。

(そして、もう片方は……【零落白夜】……に類する能力か。シールドバリアを直接ぶち抜かれたわけではないし、ドレッドノートHのエネルギーも減少は些細なレベルだ。別の何か、である可能性のほうがいい)

そこまで考えたが、何かが意識に引っかかった。

異常な点が存在しているのだ。

(アスラン・ザラの機体のサーベルと同じ零落白夜の劣化再現とは違う。例えるのならば……そう、まるですり抜けたように……っ)

引っかかりからさらに思考を発展させようとした瞬間、デブリ帯にビームが降り注い

だ。

デブリが次々とビームに吞まれて消滅し、同時に襲ってくるのはシザードラグリーンだ。

『見つけましたわよ、カナードっ』

『ちいっ!』

答えを掴みかけた瞬間の攻撃に思わず舌打ちして、咄嗟にクロエを弾き飛ばす。

『カナード様っ!?!』

残った左腕のALを展開してシールドを形成する。

予測したラクスアインの機体の能力からか、見えている数が全てではないため、広域に展開するように普段よりも大きく出力も高くだ。

だが今の彼は、片腕しかない。

当然、攻撃を全て捌けるわけがなかった。

ALではじかれたドラグリーンもそこそこあつたが、防ぎきれなかった数のほうが多

い。

腕を切りさかれた時と同じように、シールドバリアをまるですり抜けるように、ドレッドノートの機体各部装甲を切り裂いていく。

『カナード様っ！』

『ぐうっ!?!』

機体に奔る衝撃、そしてその衝撃が切断された腕に響き、彼の動きを鈍らせる。そしてドラグーンは何もカナードだけを狙っているわけではない。

『っ!?!』

僚機である、Xアストレイにも当然、襲い掛かっていた。

痛みに鈍った思考と視界、だがその光景だけはやけにはつきりと、そしてスローにカナードの脳内に飛び込んできた。

(やめろ)

脳裏に蘇るのは、先のクルーゼ事件で彼女が自分をかばった時の光景。

あの時、自分は無力さで打ちのめされたのではなかったのか。

彼女は助かったが、同じ思いをしてたまるかと、彼女を守ると強くなると告げた結果がこれか？

(ふざけるなっ)

湧き上がるのは、自分への身を焦がすほどの怒り。

(こんなところで、俺はっ、あいつを……クロエを失うのかっ!?)

だが怒りを感じても、すでにどうしようもないほど事態は逼迫している。

コンマ数秒後、シザードラグリーンは先ほどの自分の様に、クロエの華奢な身体を斬り裂くだろう。

(力が……力が、欲しいっ、クロエを、この手を届けて彼女を守り抜くだけの……力

がああっ!!  
(

——心の底から、カナードは己の無力さを呪い、そう慟哭した。

瞬間、彼の周囲が一変した。

メンデルと言うコロニーが見える宙域で戦闘をしていたはず。

だと言うのに、どういう訳か「晴天の海岸線」に自分は立っていたのだから。

そこはかつてのC・Eでブレアに敗れた後、追いつけていた念願のキラ・ヤマトを見つ、見逃した——あの海岸線に酷似していた。

「いっ、いっは……っ!?!」

困惑の感情と共に、膝をつく。

鼻に届く潮風の香りに、波の音。

幻覚などではない。



「これは……まさか……っ！」

この現象を、カナードは知っていた。

戦友である真が経験した事だ。

先の赤月事件でも同様で、ISのコア空間にアクセスしたと報告を受けていた。

そして、背後に感じる気配。

振り返るとそこには、【眼鏡をかけた黒髪の20代ほどに見える女性】が立っていた。

髪型はショートボブ、身に着けているのは黒のフォーマルスーツだ。

何処か、彼女の雰囲気を知っているような、既視感を感じた。

「そうか……お前は……っ！」

いや、自分は彼女をよく知っていた。

愛機として信頼を置いている存在。

つまり、彼女の正体は。

「……お前はドレッドノート、か」

『はい、カナード様』

心から嬉しそうに、目尻を緩ませたドレッドノートが告げる。

『ようやく、あなたと私の同調率が一定の値を超えたんです。だからあなたをここに招くことができました』

「……そうか」

『腕はまだ痛みますか？』

切断された右腕はそのままだが、先ほどまで思考を鈍らせていた激痛は感じない。脳が誤認して起こる幻肢痛も感じない。

「止血と鎮痛はお前が？」

『はい。ですが接合まででは出来ませんでした……早く処置しなければならぬのに……っ！』

「いや、それでもだ。ありがとう、助かった」

『っ！』

そうカナードが告げると、ドレッドノートは目を見開いて驚いた後プルプルと震えだした。

それは彼女が心から感動していたからだ。

しかしその感動は顔にもでていた。

凄まじく頬を緩めた彼女の表情。

必死にその笑みを打ち消そうとピクピクしている表情筋。

『はっ!?!』

自分が凄まじい表情を浮かべていた事によく気づいたドレッドノートは、すぐさま一転して態度を正そうとするが、遅かった。

「……くっ、くっ……!」

それにカナードは視線をそらしてしまった。

どうやらツボに入ったらしく肩が震えていた。

非常に希少な彼のその様子を、視線を伏せながらドレッドノートは恥ずかしそうに見つめていた。

(やつ、やらかしてしまいましたあ……!?初めての会話でしたのに……!)

がつくりと肩を落とす彼女に、カナードは咳払いしてから口を開いた。

「くくつ、ありがとう。ドレッドノート。お前のおかげで少し肩の力が抜けた……久々だぞ、あんなに笑ったのは」

『もつ、申し訳ありません。だらしないISで……』

「そんな事はない。痛みで操作を誤る心配がなくなっただけ、ありがたい」

そして笑みを消したカナードは確認を行う。

「お前が出てきてくれた……と言うことは」

『はい。今私には新たな力が、貴方が望んだ力が発現しました。それをお伝えるために、私は来ました』

「俺が……望んだ力か」

先ほど心から渴望した【力】

それは――

『はい。クロエ様を……貴方の手で助けるための、そのための力です』

「……分かった。すぐに、クロエを助けたい。頼めるか？」

『承知しましたっ。すぐさまカナード様の意識を現実世界に戻しますっ』

ドレッドノートはそう言って眼鏡をクイツと持ち上げる。

同時に、カナードの意識が遠のいていく。

周囲の晴天の景色はまるで霞の様にぼやけ、不確かなものになっていく。だがそんな中、確かに届いた。

『カナード様、ご武運を』

その声に頷くと共に、カナードの意識は現実世界へと戻る。

コンマ数秒後に、シザードラグーンによってクロエの身体が斬り裂かれると言う場面に。

(させる……かあっ!!)

新たに得た力を機体から、ドレッドノートから感じる。

残った左のALマニピュレータから、通常のALよりも強い光が発せられる。

そしてシザードラグーンがXアストレイに着弾——しなかった。

いや、正確には着弾したが全て弾き飛ばされたのだ。

Xアストレイを守るように淡く、翡翠色に輝くの光の膜に。

『っ、これは……カナード様の、ドレッドノートのアルミユレ・リュミエールっ!』

今のXアストレイは、機体全体を包み込むように展開されたALによって守られている。

だが、ドレッドノートのALはALハンディか、ALマニピュレータの専用装備がなければ展開することはできない。

いや、この状況でそれが可能な能力をISは秘めている。

『まさか、単一仕様能力ワンオフアビリティが発現したというのですかっ!』

完全に仕留めたと確信した状況が変化した事で、バイザーをつけていないラクスの中から困惑の音が漏れた。

一旦距離を取り、ドレッドノートとXアストレイから離れて、ラクスアインと合流する。

『【リュミエール・デュフューズ】……【散光】か』

ドレッドノートのコンソールに表示された単一仕様能力の名を反芻する。

『カナード様、これは……っ?』

状況が飲み込めていないクロエが、カナードにたずねる。

『間一髪、間に合ったようだな……無事で、よかった』  
『かつ、カナード様っ!?』

自分の言葉に真っ赤になったクロエの様子に、微笑んだカナードは反転してラクス達に相對する。

『お姉様、どうしますか?』

ラクスアインがもう一人にたずねる。

驚愕の表情を浮かべていたラクスだが、すぐに表情は冷笑に変わる。

『……確かに驚きましたが、すでに彼は重傷です。私たちの勝利に揺らぎはありませんわ、アインっ!』  
『はいっ、お姉様っ!』

2機のホワイトネス・エンプレスからビームと、そしてシザードラグリーンがドレッドノートに降り注ぐ。



『悪いが……生きているうちは、負けじゃないんでなあっ!!』

降り注ぐビームとドラグーンを、左腕のALと遠距離に展開したALで弾きながらラクスにドレツドノートは突貫していく。

咄嗟に彼を援護するために動いたクロエ。

その彼女から見える、彼の後ろ姿は、その名の如く「勇敢」なる後姿であった。

## PHASE 4 乙女達の戦い

メンデル周囲の宙域で戦闘が始まってから数分――

コロニーの障壁内部に侵入した真と簪は、コロニーの内部、障壁区画にいた。

『次は……右だな』

『うん』

真のデステイニーが先導し、簪の飛燕がPICの稼働で浮遊して追従している。

現在彼らがいる障壁通路内はISでも飛行するだけならば十分可能であった。

元々が無重力下のコロニーで作業員が使用する場所であるため、ある程度の広さも必要になるし、この通路には空気も存在していた。

『つき当たりを左で、その先のハッチを抜ければ居住区内に入れる』

真の指示の通り、通路を左に曲がると10 m程の巨大なハッチが姿を現した。

恐らく機材などの運搬用ハッチであろう。

ハッチ操作用コンソールがすぐそばにあることを確認したデステイニーが、腕部だけ I S を解除してコンソールの操作を開始する。

10秒程度してハッチが轟音と共に開かれ、通路内にコロニー内の空気が流れ込んできた。

同時に居住区画の光景も目に入る。

外部から取り込んだ太陽光に照らされて、僅かばかりに立てられた居住スペースである施設が照らされている。

そしてそこから延びた舗装された道路は中央に聳え立つ研究区画に続いており、そんな居住スペースが頭上にも存在していた。

コロニー自体が回転して重力を発生させているからだ。

しかし、コロニー計画で建造を予定されているヘリオポリスの完成予想図を見たことのある簪には、その光景は酷く無機質の様に見えた。

ヘリオポリスの完成予想図では地上と変わらず、緑も溢れ温かな光で満たされていたが、ここは人が住んでいる気配すらないのだ。

そう、例えるのならは無機質な工場、彼女はそう感じていた。

実際にコロニーで生活したことがある真もそれは同じだった。

居住スペースから延びた道路はまるで研究区画へ素材を送るベルトコンベヤー。そんな風にも見えてしまったのだ。

『反応はあの中央から？』

『ああ。あそこは研究区画らしい、何をしていたのかはあんまり想像したくはないけどな』

簪の問いに頷いた真の脳裏には、シーゲルと最初の邂逅を果たしたギガフロートの内部の惨状が浮かんだ。

それを振り切るかのように頭を振り、自分と同じ事を思っていたのか簪と小さく頷きあう。

その瞬間だった。

デステイニーと飛燕のハイパーセンサーが人工の空に現れた反応を検知した。

『っ、ラクスかつ！』

2人の上空に現れたのは、白いドレスを身に纏った様に優美な姿のラクス・クライン。

当然、彼女が身に着けている白いドレスの様に見えるモノは、ISだ。

オリジナルではなく、カーボンヒューマンではあるが真や簪にはその違いを認識できない程に酷似している。

コロニー外で戦闘を行っているバイザーを付けたタイプのラクスとは異なり、彼女はバイザーを付けていない。

そして機体も、他のラクス達とは違う。

優雅な白のドレスの様にも見えるIS【ホワイトネス・エンプレス】

真と簪の記憶の中にあるISそのままだ。

【紫の光の翼】、VLCユニットが展開され、宙に舞うコロイド粒子がまるで抜け落ち、宙に舞う羽根のように見えた。

完全な臨戦態勢。

デステイニーと飛燕のVLCユニットからも光の翼が溢れる。

今までラクスとの戦闘経験からすでに2人の中ではこうする事が対策の1つとなっていた。

『先に……この先のシーゲルの下に、行かせない気か』

『違いますわ、シン。アナタをここで確保するために、私が来たのです。招待状は受け

取っていただけでしょう?』

真の言葉を笑みを浮かべて訂正するラクス。

そして、招待状と言う彼女の言葉。

先に、デステイニーに送られてきた詳細なデータの事を指していることに気づく。

『……とんだパーティーへの招待状だな』

呆れたようにビームライフを展開し、ラクスに向ける。

『やはり素直には来てくれませんか。お父様の言ったとおりですわね』

小さくため息をついたラクスはそういうと何かに気づいたように、真の隣に視線を動かした。

『おや、あなたは?』

まるで初めから視界に入っていなかったかの様な口調。

それに答えるように、簪の飛燕は、真と同じくビームライフルを展開する。

『……こうして生身でアナタと話すのは初めて。私は更識簪』

自分の名を、ラクス相手に気圧せずに告げる。

簪の言葉を聞いた彼女は理解できないように首をかしげる。

『取るに足らない存在のアナタの名など私が覚える必要がありませんか？』

『別に、必要ない。アナタにはここで止まってもらうから……これは私の意思表示なだけ』

そう言って彼女が続ける。

『真をただの実験材料なんかを考えてるあなた達に覚えてもらう必要なんか、ないから』

眼鏡型のデバイス越しにラクスを見据える簪の視線は強い。

その目には迷いなど、欠片も感じない。

『……言ってくれますね』

彼女の目を真つ直ぐと見据え、不快感に眉を歪ませるラクス。

(……ありがとう、簪)

簪の言葉に内心、感謝の言葉を告げた真は気持ちを切り替える。

すでに一触即発の状況。

ならば数が多いこちらから攻める。

ラクスに向けていたビームライフルのトリガーを迷わず引く。

真のビームライフルの一射から3機は弾かれた様に戦闘機動に移る。

『行くぞ、簪っ、まずはコイツを落とすっ！』

『うんっ！』



う。デステイニーと飛燕がそれぞれの翼を広げ、紫の翼を広げて後退するラクスに向かう。

『……いいでしょう。ここで真を捕らえ、目障りな小娘を排除する。このアウレフには、それができるのですっ！』

アウレフと、自分の誇りを叫ぶラクスの口角はつりあがっていた。

同じ頃、メンデルから少し離れた宙域では、宇宙を翔る流星が煌いていた。

『ラクツ、無人機よっ、数は8つ、10つ、ああ、もうどんどん増えるっ、とにかく沢山よっ!!』

戦場を翔けるミーティア装備のIS、ストライクフリーダムへ少しだけイラついた少女の通信が届く。

『分かってるっ！』

矢継ぎ早にそう返したラキーナは、ミーティアの大型スラスタを操作して、その進行方向を変える。

彼女からの通信の通り、ハイパーセンサーがとらえた無数の機体。

どれもここまでの戦闘で倒してきた初期GATモデルの無人機だ。

球状のコンソール画面が展開され、そこに迫る無人機を捕らえる。

彼女の視線に連動し、凄まじい速度でロックオンが完了した。

『いつけえええつ!!』

ミーティア側面の高エネルギー収束火線砲、背部コンテナの「エリナケウス ミサイル発射管」、ウェポンアームの「高エネルギー収束火線砲」から発射された超高出力ビーム、そしてフリーダムストライカーのバラエーナ、圧倒的な量の弾幕が無人機に殺到した。

当然、回避行動に移行していたがそれを予期していないラキーナではない。

1発をあえて回避させたうえで、次弾を本命とするように射撃していたのだ。

もしそれを避けたとしてもさらに逃げ場のない様に、まるで詰め将棋の様な射撃だ。

これが有人機ならば2射目、続く3射目も回避、ないしは防御を可能とする人間はいらるだろう。

だが無人機は結果が異なり、面白いように撃墜されていく。もちろんこの結果はラキーナの射撃能力があるからこそなのだが。

『っー！』

瞬間、ストライクフリーダムのハイパーセンサーが下方から迫る反応を捉えた。

高速巡航形態に変形した無人機イージスだ。

まるで華にも見えるその触腕部分が開き、既にスキュラの発射体勢を整えていた。

ほんの少しの油断を感じてしまった為か、回避が遅れた。

直撃コースではないのは理解していた。

少しばかりのシールドエネルギーを持っていかれるだろうが実戦仕様状態かつミーティア装備の今ならば微々たるものだ。

だがそんな心配も杞憂に終わった。

高速巡航形態のイージスのさらに後方にそれはいた。

そこに機体全長はあるだろうか、背部コネクタに接続され、肩部を通した大型の2門

の砲塔を構えたISがいた。

前面のイージスをその2門の砲塔ですでに捉えていた。

『せーらーっ！』

そんな咆哮と共に、肩部のドツペルホルン連装無反動砲から放たれた大型の質量弾はイージスの側面に命中。

直撃した質量弾があまりの高威力だった為か、PS装甲とはいえその衝撃全てを受け止めるのは不可能だったのか。

装甲がない関節部分は無残に碎け、PS装甲部分も碎けて舞っている。

そして彼女の、フレイの駆る「ラファール・リヴァイヴ・ドツペルホルン」は背部のドツペルホルン連装無反動砲をパージして格納。

すぐさまノワールストライカーに装備を変えて、実体剣である「ダン・オブ・サーズ・デイ」で体勢を崩し、PS装甲を破損したイージスに切りかかる。

『チエストオー！』

薩摩示現流特有のかけ声と共に上段から振り下ろされた一撃は、装甲が不十分であったイージスを真つ二つに叩き割った。

そして撃破したことを確認したフレイはすぐさま離脱し、ラキーナのストライクフリーダム元へと翔け上がってきた。

『ありがとう、フレイ』

開口一番、自分の撃ち漏らしを撃墜してくれたフレイへと礼をする。

『気にしない、気にしない。それに、感謝するならドツペルホルンをくれたジェーンにいいなさいな』

フレイの言葉通り、彼女のIS「ラファール・リヴァイヴ・ノワール」に新装備である「ドツペルホルン連装無反動砲」を贈ったのはジェーンであった。

もつともこの装備は、所属している日出工業には内密に、ポケットマネーでインパルスマークII用で作成していたものだ。

だが装備した場合機動力をプラスチックシルエット以上に低下させ、重量バランスも大き

く変わってしまったといった諸問題があるため泣く泣くお蔵入りにしていたものを引っぱり出してきた、という裏の事情もあるのだがそれをフレイが知る事はなかった。

『無人機、大分減ったんじゃない?』

『うん。少し離れた場所でアスランも戦ってるし、兄さんや皆さんもいるから……心配はいらないよ』

戦闘宙域が離れており、まだ状況は動き続けている。

だがプライベートトチャネルを繋げる必要はない。

仲間を信頼してその場所を任せているからだ。

(いい顔するようになったじゃない。キラのときにこんな顔、してなかったわね)

うつすらと笑みを浮かべてストライクフリーダムのコンスールを操るラキーナの横顔を見たフレイはまずそう思った。

かつてキラ・ヤマトだったときは基本的に彼の顔は曇っていた。

だが今はここまで清涼な表情ができるのかと、不思議と見惚れていた。

はっと意識を切り替えて頭を振るう。

それと同時にであった。

ストライクフリーダムとラファールのハイパーセンサーが高エネルギー反応を検知した。

『っ！』

ラファールは瞬時加速で離れ、ストライクフリーダムはミーティアの爆発的推進力で散開する。

数瞬前まで2機がいた場所を、ビームの奔流が薙いだ。

1発だけの高出力ビームではなく、連続で放たれた激流。

そう表現していいほどの密度であった。

『ちいっ！』

一発だけ、ミーティアの基部に掠ってしまった。

すぐさまミーティアをパージして離脱するストライクフリーダム。

切り離れたミーティアは続いて降り注いだビームに飲まれて破壊されていく。

『きたのねっ!』

フレイがA M B A Cで体勢を立て直して、攻撃の源に視線を移す。

そこには純白の機体があった。

『ラクス……っ!』

バイザーを着けていないタイプのカールボンヒューマン：ラクス・クライン。

装着したホワイトネス・エンプレスにはV Lユニットとは異なる、機械の翼が展開されていた。

既視感を覚えたラキーナとフレイ。

いや、既視感どころではない。あの装備は2人がよく知っているものであった。

現に、今のストライクが装備している武装に酷似している。

『フリーダム……!?!』



『その通り。このホワイトネス・エンプレスにはフリーダムを宿してあります。この力でラキーナ、貴女を、S・E・E・Dを宿す貴女を手に入れるために、参りましたわ』

ラクスがそう告げると同時に、肩部のバラエーナビーム砲塔が起動して砲口をこちら側に向ける。

ビームが発射されるが、射線を読んでいたラキーナとフレイはその射撃を躲す。

『くっ、フリーダムが相手なんて……大丈夫？』

スラストーでの姿勢制御を行いながら、繋がったプライベートチャンネルでフレイがラキーナに問う。

だが、彼女の顔を見てその心配は杞憂に終わった。

『今の私にそんな機体でかかっても無駄だよ、ラクス』

真っ直ぐと、ラクスを見つめる瞳に迷いはない。

自信が無く自分と話すときさえももっていたキラ・ヤマトとはまるで違う。

『大丈夫だから心配しないで、フレイ』

展開したビームライフルを構えたラキーナの意識の中で、紫の種子が弾け飛ぶ。

同時に広がり鋭敏になる感覚。

『私は、シーゲル・クラインの馬鹿げた計画を止める為にここにいます』

ハイパーセンサーで見える後方にいる赤毛の少女。

彼女もアサルトライフルを構えてくれた。

(それに今の私には守るべき人もいる。もう迷わないっ)

ラクスが何か告げようとして口を開いたが、それに答えるようにビームライフルのトリガーを引いた。

『でええええいつ!』

迫る無人機デュエルを咆哮と共に、一夏の白式・王理は雪片で真つ二つに切り裂いた。推進剤と余剰エネルギーによって爆発が発生する前に白式はスラスタで離脱する。デュエルがこちら側に向かつてきたとはいえ、一夏の技量もかつてとは比べ物にならないほど上昇している証拠であった。

先ほどまで戦っていたバイザーを着けたラクスは一旦後方に下がり無人機達を指揮していた。

『成程、お兄様も中々やるのですね』

そう言つてラクスは口元に笑みを浮かべた。

『でしたら、これならばどうです?』

優雅に振るつた手の軌跡で、空間投影ディスプレイが投影されて操作する。

すると状況が動いた。

『きやあつ!?!』

『箒?!?!』

専用に調整された収束ビーム砲〔桜花〕で一夏の援護をしていた箒の駆る紅藤に、何が組み付いたのだ。

機体周囲の空間が歪みその正体が現れる。

黒のPS装甲を身に纏った初期GAT無人機の1機種――

『くつ、こいつらはブリッツとかいう……っ!!』

そう、ミラージジュコロイドで姿を消していた無人機ブリッツが2機、紅藤に取り付いたのだ。

そして右マニピュレータに装備されている攻盾システム〔トリケロス〕のビームサーベルが起動し、貫手の形で紅藤に攻撃を仕掛けてくる。

『くっ、くそっ!』

『箒、今助け……ぐうっ!』

もがき抜け出そうとする箒を助けるために動こうとした一夏に実弾の雨が降り注ぐ。

発射したのは上方に展開した無人機バスターのガンランチャーから発射された電磁レールガン、しかも散弾である。

数発直撃を受けて、白式はシールドエネルギーを減少させ、体勢を崩した。

つまりその分、箒の救出が遅れる。

『くっ、このやろおっ!!』

一夏の怒声が漏れるが、状況は動いている。

ビームサーベルが紅藤に迫る。

その光景を、拘束された箒は絶体絶命の状況からか加速した意識の中でスローモーションの様に見ていた。

(やっ、やられるっ!?)

思わず目を瞑ってしまった筈。

その瞬間、彼女の身体の中で【何か】が脈動した。

『どいて、私がやるっ』

(な……っ!?)

頭の中で、自分の声が意識とは別に響く。

両目をカッと見開いた筈、彼女の双眸はまるで血の様に【紅い】。

『この程度でえっ!』

その咆哮と共に、武装が展開される。

それは紅藤の脚部装甲に亀裂が入り、切り離されそれぞれがまるで【剣】の様に分裂していく。

『あめのはばきり天羽々斬】っ、邪魔だあっ!』

展開された【天羽々斬<sup>あめのはばきり</sup>】、ソードドラグーンが下方からブリッツツ2機に向かう。

PS装甲であるため、損傷を与えるまでの破壊力はこの天羽々斬には存在しない。

だが、それで充分。

ブリッツツ側に出来た隙を見逃さずに瞬時加速で離れ、すぐさままた別のスラストーでの瞬時加速でブリッツツ2機に向かい直す。

【二重加速<sup>ダブルイグニッション</sup>】で得た加速そのままに、ビームサーベル【残光】でブリッツツ2機を両断して離れる。

『一夏つ、大丈夫？』

紅い双眸<sup>まぶた</sup>の筈は、降り注ぐバスターのガンランチャーを回避しながら一夏に通信を送る。

『あつ、ああ』

『良かった。全く、オリジナルは……私が出てこなければ、落ちてたかも知れないのに』

箒はそう言つたため息をついた。

今の箒の相貌はかつての赤月に操られていた時の様に紅い。

それに気づいた一夏は疑問の声を上げる。

『箒……なのか?』

『そうだよ一夏つ、私が篠ノ之箒だ……よおつ!』

一夏に名前を呼ばれ、笑顔を浮かべた紅い双眸の箒が一夏に飛びつくように機体を加速させると共に、彼女の右半身が麻痺したように痙攣して加速した機体の軌道が乱れて一夏の白式から離れていく。

『ふざけるなつ、お前は赤月だろうつ!』

痙攣した右半身の瞳の色が、紅から元の彼女の瞳の虹彩に戻っていた。

それと同時に、彼女の口から出る怒声が2つ。

まるで自分の中にいるもう1人の自分に対し怒っているかのような奇妙な絵面。



『えっ、赤月なのかつ!?!』

一夏がかつて戦った相手の名前が出たことに驚愕する。

『何故お前がここにいるっ、それに篠ノ之箒は私だっ!』

『うるさいっ、私だつて元々はアナタ!つまり私も箒でしょっ!?!』

いつもの箒よりも若干幼く聞こえる後の方の怒声。

それに一夏はここが戦場であることを忘れて呆けていたが、飛来するガンランチャーの弾丸に意識を戻す事になる。

『ほっ、箒っ!』

『何(だ)っ!』

どうやって発声しているのか不明だが箒が返す。

余計混乱しそうになるがAMBAACを行いつつ尋ねる。

『ごめん、赤月の方だっ！とにかく今は力を貸してくれるってことでいいんだよなっ!?!』  
『うんっ!』

笑みを浮かべた箒、否、赤月が頷くと右の紅い瞳が元の虹彩に戻る。  
同時に箒の身体がいつもの様に自分の意志で動かせるようになった。

(っ、これは……っ！)

『一夏にああ言われたら仕方ないでしょ。それにこの身体をちゃんと使えるのはメインでオリジナルのアナタ。だから今回はサブに回ってあげる』

横に浮かぶ紅い双眸の自分の口から音は出ずに、頭の中に直接響く声。  
どうやら一夏には聞こえてはいないようだ。

(ふざけるなっ、納得できるわけが……っ！)

抗議の声を上げる箒。

それは当然だろう、いきなり自分の中にかつて意識を乗っ取った赤月が現れて、一時

的とはいえ勝手に身体を操られたのだから。

抗議を赤月に送るが、少しため息をついた赤月が返答する。

『なら、さつきみたいなのがまた起こると思うんだけど？』

(う……っ！)

ぐうの音も出ない正論だ。

先ほど油断はしていなかったはずなのに、自分はブリッツに取りつかれてしまっていた。

技量はおそらくこの戦場にいる者の中でも下から数えたほうが早いと彼女も理解はしている。

『だけど今は私がいるし、サポートしてあげる。今は一夏を助けてこの戦いを終わらせる、つまり——』

そう言つて微笑む赤月。

『私とアナタで一夏を守る。それでいいでしょ?』

(……分かった。ならば力を貸してくれ)

赤月の言葉に箒は頷く。

一夏を守るためならば、そう決意した箒の決断は早かった。

(そうだ。今は一夏を守ってこの戦いを終わらせるんだ、それが最善だ)

箒の意識が現実に戻ったのはそのすぐあとだった。

気持ち切り替えて、ビームサーベル「残光」を握るマニピュレータに力を込める。

『箒?』

先の確認から一瞬だけ無反応になった箒に、一夏は声をかけていた。

意識が現実世界に戻るまでほんの一瞬だったのだろう。

『一夏、私達でお前の背中を守るから、だから奴はお前が倒せつ』

『……箒。ああ、分かっている』

箒の言葉を聞いた一夏も己の得物を握る手に力を込める。

目指すは戦いの終わり、そのためには無人機を操る相對しているラクスを倒す。そのため白き王は翼を広げ、飛び上がっていく。

同じ頃——

戦闘宙域を蒼の影が飛び回る。

そして、その影から発射された光は次々に人型兵器を撃ちぬき爆発と閃光を生んでいた。

『ティアーズ！』

蒼の影——その正体はブルー・ティアーズのBT兵器であった。

セシリアの叫びと共に、彼女の意思を受けたティアーズ4基がまるで生きているかのように宇宙を翔ける。

4つの閃光が迸り、まず4体の無人機が機体中心を貫かれ、余剰エネルギーが推進剤

に引火して爆散。

無人機を貫いた閃光はその破壊力を維持したまま、縦横無尽に周囲にいる別の無人機たちに襲い掛かる。

セシリアとブルー・ティアーズが掴んだBT兵器の到達系、【偏向射撃】

無人機達を貫くたびに減退し、威力は下がるが、ティアーズは砲口から光を補充する。ティアーズから光が放たれる度に、無人機たちは哀れなスクラップへと姿を変えていった。

（なんででしょう、この感覚……地上とはまるで違う）

光の嵐のようにもなっているティアーズが放ったレーザーを操るセシリアは、ふと自身を感じている感覚に疑問が浮かんだ。

地上でティアーズを操るのと宇宙で操るのとはまるで違う。

後者の方が遥かに扱いやすくその分偏向射撃の操作に意識を割くことができている。

（違いとしては重力の有無……何にせよ都合がいいですね）

ISにはPICが存在しているとは言え、地上ではどうしても重力の影響を受ける。ドラグーンなどが含まれる遠隔無線砲塔はその制限を特に受けやすい。

だが今のセシリアとブルー・ティアーズは「重力」と言う地球に住むのならば必然の鎖から解き放れている。

歌姫の騎士団との決戦やエクスカリバー迎撃作戦では、彼女は宇宙ではなく地上にいた。

宇宙に出たのは今回の戦いが初めてであり、それ故に性能をいつも以上に感じているのだ。

『——っ！』

最初のティアーズの攻撃を辛うじて逃げていた無人機達がセシリアに攻撃の手を向けた。

それを文字通り感じ取った彼女の行動は迅速かつ円滑なものであった。

一旦エネルギー補給のために本体に戻っていたティアーズを、ミサイルビット以外全て切り離す。

そして並列に展開し、出力を最大にした最大の攻撃を放つ。

『フレキシブル  
偏向射撃出力全開、ティアーズフルバーストっ!!』

前面攻撃、否、もはや全面攻撃ともいえる光の瀑布。

その能力から【大量広域先制攻撃兵器】に分類される、ブルー・ティ

アーズ最強の技。

残っていた無人機達も、放たれたレーザーに抵抗するまもなく貫かれて、爆散して  
く。

自機のハイパーセンサーで捉えられる反応が消えた事を確認したセシリアは一旦、  
ティアーズを本体側に戻す。

『この周囲は確保したようで……っ!』

スターライトMk-IIIを虚空に向ける。

すると、銃口の先の空間が、まるでノイズが奔るかのように歪み、ぶれていく。

ミラージユコロイドによる隠蔽であった。

そして現れたのは、バイザーがないタイプのカーボンヒューマン・ラクス・クライン。



装備しているISは、幾度となく戦友達が戦ったホワイトネス・エンプレス。だが、特徴的なVレユニットが存在していなかった。

『こちら側の無人機達をあれだけ撃墜したのは貴女でしたのね、ミスオルコット。そしてミラージュコロイドで姿を消している私に気づく。素晴らしいですわ』

『一部始終を見ていた……と？』

『ええ。貴女は優秀な素体になり得る。そう判断しました。ああ、初めまして、私、ダレットと申します。以後、お見知りおきを』

そう言つて、ダレットと名乗ったラクスは頭を下げる。

だがそんな事はどうでもよかった。

セシリアが気にしたのは、素体と言う言葉。

『私を素体に……？』

『ええ。貴女の空間認識能力は常人の比ではありません。優れた素体になりえます。どうでしょうか、私達と共に人類の調停に力をお貸ししてはくれませんか？』

笑顔でマニピュレータを握手の様に伸ばすラクス・ダレット。

その表情は笑みを浮かべており、それにセシリアは言い表せぬほどの悪寒を感じた。人類を調停し、多様性を完全に失わせる計画。

友人である真やカナードから聞いた、シーゲル・クラインの計画を、セシリアはそう感じた。

人間には様々な面がある。

善性の他に目を反らしたくなる悪性を持つている者もいるのだ。

幼い頃からオルコット家を立て直すために奔走した彼女はそれをよく知っていた。

しかし多種多様な人間がいるからこそ、多様性が生まれ、そこから議論が発生する。

それが人類の可能性と言うものだ。

だがそれを、S・E・E・D. という因子を用いて1つに統合して調停する。

それはあまりにも閉塞が過ぎる。

ラクス・ダレットはまるでユートピアを創造する為の計画であるように語っているが、どう考えても行き着く先は——デイストピアだ。

『…………お断りしますっ』

感じた悪寒を振り切るように、スターライトMK-IIIのトリガーを引く。

レーザーが銃口から発射される瞬間、機体のスラスターを噴かして後方に下がって射線から逃れたダレット。

一瞬驚いたように目を見開いていたが、すぐに納得したような冷笑を浮かべた。

『交渉は決裂。ならば力づくで、貴女を手に入れましょう、ミスオルコット！』

『人の可能性は誰かが与えるものではありません、止めて見せます、その行いをつ！』

セシリアの叫びと共にティアーズが射出される。

だが、今まで姿を現さなかったダレットのISのVLユニットが空間に沈んでいたかのように現れたのは、ティアーズの射出と同じタイミングであった。

## PHASE5 全能なる調停者

漆黒の宇宙を光が駆ける。

その光の正体は、純白のI Sが構えるライフルから発射されたビームだ。

ビームは宇宙の闇を切り裂いて、目標に向かうはずであった。

しかしそのビームは、より強く輝く「翡翠色の光」の前にいともたやすく散った。

『く……小癩なっ!』

バイザーを付けたラクスアインは口惜し気に声を漏らした。

相対するカナードの駆るドレットノートHが発現させた【単一仕様能力】

【散光】  
リユエール・デュフューズ

何もない空間に突如として現れる【絶対防御障壁】であり、先ほどからラクスアインの攻撃、全てを容易く捌かれていたのだ。

だが、彼女は1人ではない。

同じタイプ：ラクス・クラインでありながらも自分よりも上位の力を持つ誇るべき

【姉】が存在しているから。

『アインツ、再度能力をドラグーンに対して使用しなさいっ！』  
『ギメルお姉さまっ、承知しましたわっ！』

ラクスギメルのホワイトネス・エンプレスが射出した「シザードラグーン」に対して、ラクスアインは自機の能力を発動させる。

能力の発動と同時に、ホワイトネス・エンプレスのハイパーセンサーから「シザードラグーン」の反応が消失した。

【水月鏡花】

これが、ラクスアインのホワイトネス・エンプレスの単一仕様能力。

機体の武装のみに限定して、ハイパーセンサーからその存在を抹消できる能力。

直接的な攻撃力は持たない能力だが、ドラグーン等の遠隔無線兵器との相性は抜群だ。

乱戦や混戦状態ではパイロットは機体の取得する情報を適切に判断して行動しなければならぬ。

相対する機体の武装なども詳細に把握する必要が出てくる。

それを機体のセンサーだけとはいえ、それが消失するのだ。  
脅威以外の何物でもない。

能力を受けて反応を消したドラグーンが、ドレッドノートHとXアストレイに向かう。

だが、その全てが遠隔で展開された光の障壁によつて弾かれてしまった。

『っ!?!』

『無駄だ。その程度ではな』

片腕をもがれて満身創痍であるはずのドレッドノートHを駆る、カナードの顔に笑みが浮かぶ。

『ギメルとか言ったな。貴様のISの能力は透過能力……だからドレットノートのバリアを破るのではなく、すり抜けて直接俺にダメージを与えられた。だが透過できるのはどうやらシールドバリア限定。もう一人の能力と組み合わせた時の奇襲性能は大したものだが、ALは透過できないという事がはつきりとしたっ!』

同時にXアストレイのドラグーン4基と、プリステイス2基が光の障壁を飛び越えてラクス達に襲い掛かってくる。

『くうっ!』

ギメルとアインは瞬時加速を用いて散開し、ドラグーンのビームとスパイクドラグーンとなったプリステイスを回避する。

しかし、回避方向に突如として「AL」が展開されギメルとアインは目を見開いた。

『あぐうっ!?!』

『きやあっ!?!』

崩された体勢かつ回避途中の機動であったため、互いにALに衝突し機体のエネルギーが急激に消費されてしまった。

スラスタ制御とAMBAACで何とか姿勢制御に成功するが、すぐさま別の光の壁が目の前に現れた。

当然それに触れてしまうたびにエネルギーが消費される。

『いつ、これは……っ!?』

自身の状況を確認したラクスギメルの口から困惑と恐怖が滲む声が漏れた。

2人のラクスはそれぞれ【光の壁】に覆われていた。

いや正確には【壁】に覆われているのではない。

正確に言うのなら【光の牢獄】に囚われている、が正しい表現だろう。

『逃げ場などない。すでに貴様等の周囲をALで囲んでいる……クロエっ!』

『はいっ!行つてっ、ドラグーンっ!』

カナードの叫びと共に一旦ドラグーンを本体に戻っていたXアストレイから再び、ドラグーンが射出された。

その狙いは光の牢獄に捕らえられた【ラクスアイン】

射撃位置についたドラグーンとプリステイスからビームの雨が降り注ぐ。

モノフェーズ光波シールドであるALをすり抜けたそのビームは、いともたやすくホワイトネス・エンプレスを蜂の巣にしていく。



『あああつ!!』

『アインツ!!』

咄嗟にビームサーベルを展開したラクスギメルはアインの救助のために、ALに切りつける。

だが現在ギメルとアインの両者を捕らえているALのモノフェーズ方向は外から中に切り替わっている。

つまり、外からの攻撃は素通りするが、内側からの攻撃はシールドとして弾くのだ。もつとも通常のビームサーベル程度で、ALを貫くことは不可能だが。

『どっこを見ているっ?』

底冷えする冷酷なその一声と共に構えるのは、バスターモードに切り替えたドレッドノートHのHユニット。

すでにエネルギーもチャージが完了し、カナードは戸惑わずにトリガーを引いた。

発射された高出力ビームはモノフェーズ光波シールドであるALをすり抜けて、ギメ

ルに直撃した。

『きゃあつ!!』

悲鳴と共に、バスターモードのビームの威力に押され、照射を受け続けながらALに叩きつけられている。

『えっ、エネルギーがっ……ああああつ!!』

機体のエネルギーが一気にレッドラインを下回り、美しかったドレスのような装甲は融解していく。

そしてドレッドノートHのビームの照射が終わるころには、辛うじてISとわかるだけのフレームが残っていると叫んだ無残な有様に変わり果てていた。

すでに絶対防御を発動させているが、機体の負ったダメージが重いため搭乗者のラクスギメルは火傷や裂傷などが見られていた。

『私はラクス・クラインなのに、こんなつ、こんな無様な……っ!?!』

残った左腕のALマニピュレータから十八番のALランスを展開し、そのままラクスギメルに斬撃を加える。

『かあ……っ!?!』

『貴様はオリジナルじゃない。どこかの誰かは知らないが、選択を誤ったな』

直後に絶対防御を発動させていたラクスギメルのホワイトネス・エンプレスは、エネルギーを枯渇させる。

地上ではなく宇宙でのエネルギー切れ。

それが指し示す答えは自ずとわかっているラクスギメルは恐怖に顔をゆがめるが、幸運にも彼女はその後意識を永遠に手放す事が出来た。

意識が途絶える瞬間最後に彼女が見た光景。

それは自分の胸を光の槍が貫いた光景であった。

『まずは一人……っ!』

左マニピュレータを引き抜いてすでに物言わぬラクスギメルを一瞥し、視線をラクスアインへと移す。

クロエのXアストレイによる断続的なビーム掃射によって、ラクスアインのホワイトネス・エンプレスもエネルギーが枯渇しかけていた。

『ギメルお姉様あつ!?!』

目の前で起こった光景が信じられない。

自身よりも高い性能を持つはずの彼女が一方的に仕留められた。

その結果、彼女の心には恐怖の感情が湧き出ていた。

カーボン・ヒューマン：ラクス・クラインとなつて初めて感じる恐怖の感情。

生き残るため、与えられた頭脳を最大限稼働させる。

だが状況は変わらず、打開策は浮かばない。

いや、むしろより悪く変化していく。

なぜならば、その瞬間に搭乗者保護と絶対防御を発動させていたISのエネルギーが枯渇したからだ。

『終わりだあつ!』

最後の力を振り絞るようにカナードは叫び、瞬時加速を発動させてALランスを突き立てる。

加速の乗った光の槍の一撃は容易くアインの身体を突き破り、貫通したALランスを引き抜く。

『……終わった……か』

『……そのようです』

まだL4宙域では戦闘が続いているが、2人の周囲に敵機の反応はない。

それを確認し終えたカナードは、殺めた2人のラクスの遺体のうち片方、アインの方を回収する。

『クロエ、もう1人の方を頼む』

『分かりました』

何故、2人がラクスの遺体を回収するか。

それは彼女達がカーボン・ヒューマンであるからだ。

この世界には本来存在しえない技術によつて生まれた彼女達。

宇宙に放逐すれば問題はないだろうが、万が一回収されたら事だ。

また彼女たちのI Sも回収することで、何かしらの情報が得られるかもしれない。

『カナード様、回収しました』

『……………そう、か……………』

クロエがギメルの遺体を回収しカナードに伝えるが、彼からの返事が弱々しかった。

その異変にクロエはすぐに気付いた。

いや、今の彼は万全の状態とは程遠く、むしろ気づくのに遅れてしまっていた。

『カナード様つ、大丈夫ですか?!』

『……………まだ、大丈夫だ』

そういうカナードであつたが、呼吸も荒く、額には汗が大量に浮かんでおり限界は見

えている。

ドレッドノートHからの搭乗者保護があつてこの状況なのだ。  
すぐさま治療を受けなければならない。

『駄目ですつ、これ以上はもう無理ですつ！』

『……みたいだな』

自嘲染みた笑みを浮かべてそう告げるカナード。

そんな彼とクロエの元に空間投影ディスプレイが繋がる。

映ったのは束である。

彼女はカナードの右腕を見て一瞬顔をしかめるが、すぐさま用件を伝える。

『カナ君つ、イズモに戻ってきて、腕はまだ繋げられるよつ！』

『……本当かつ？』

切断された四肢の接合は、本来秒単位でも早く手術を受けなければならない。  
遅れば遅れるだけ、接合手術のリスクが高まるからだ。

すでに腕が切断されてから、ある程度の時間が過ぎていた。その為切断された右腕は諦めていた。

『ドレッドノートがカナ君の腕を搭乗者保護で守ってるの！だからまだ接合は可能だよっ！』

ふと自分を覆う機械の鎧に目をやる。

力をくれただけではなく護ってくれていた愛機に感謝の気持ちを込めて、なんとか動かせた左腕で装甲を撫でる。

『……そうか。なら、たの……む』

ギメルとアインを仕留めるのに力を使い果たしたせいで、すでに意識を保っているのが精いっぱい状況。

碌に機体を動かす力もすでに残ってはいなかった。

その様子を見たクロエはすぐに彼に寄り添い、支える。



『すぐにイズモに、お連れしますっ!』

『……悪いな』

Xアストレイがドレッドノートを抱え上げる形でスラスターを全開で吹かせる。  
クロエに運ばれていく間、繋がったままの回線でカナードは束にあることを伝える。

『束、奴等には序列が……存在して……いるようだ』

『序列……ギメルにアイン。ヘブライ語だね』

束の返事に、カナードはうなずく。

『恐らく……序列が上がるほど戦闘能力が高くなるとみて、間違いはない。バイザーを付けているかいないかだろうな。この情報が……アテになるかは知らんが、他の連中にも伝えて……おいてくれ』

『分かったよっ、でもカナ君はまず腕くっ付けるのが大事だからねっ!?!ちゃんと生身の手でくーちゃん抱いてあげないと、束さん怒るからねっ!』

『……はは、それはいや……だ……な……』

東の怒声にも近い返事に苦笑した後、カナードの意識は遠ざかっていった。

コロニーメンデル 上空

紅の光、蒼の光、そしてその2つを合わせた様な紫の光。

それぞれが翼の様に広がり、人口の空には激突音が響く。

『ちいっー！』

ラクスアウレフは舌打ちを発しながら、砕けた右マニピュレータに内蔵されている  
【ビーム手刀 カラミティ・エンド】へのエネルギー供給を停止させる。

格闘武装の中でも特筆して発振するビーム出力が高いカラミティ・エンドを砕いたのは、相対する【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】が持つ不壊の聖剣【アロンダイトVer2】であった。

そして間髪入れずにデステイニーは追撃に移行する。

右マニピュレータ、人間で言えば薬指先の部分が展開し、そこから何かが発射された。発射されたそれは、急激な膨張を見せてデステイニーそっくりの人形へと姿を変え

る。

『っ、ダミーっ!?!』

ホワイトネス・エンプレスのハイパーセンサーが即座にその正体を把握するが、ラク  
スアウレフの意識は一瞬だけ、ダミーバルーンに逸れた。

——それが、真の狙い。

『簪っ!』

彼の叫びに呼応するように広がる、蒼い光の翼。

ラクスアウレフと真の相対的下方から急速に接近するIS【飛燕】

その搭乗者である簪のマニピュレータには竜殺しの魔剣の名を冠する【バルムンク】  
が握られていた。

『やあっ!!』

振り上げられた魔剣の一撃は正確にラクスアウレフのホワイトネス・エンプレスを捕らえていた。

だが、意識を逸らされたのは一瞬。不意打ちを防御できないラクスではなかった。健在である左のカラミティ・エンドを起動して、バルムンクの一撃を受け止める。

高出力ビーム武装同士がぶつかり合い、コロイド粒子の反発によってスパークが迸る。

武装の出力差からか、簪の飛燕が少しずつ押され返していく。

『その程度で私を……っ!?』

不意の一撃を繰り出してきた簪のバルムンクを受け止めて、浮かべていたラクスアウレフの笑みが消える。

逆に簪は薄く笑みを浮かべていた。

鏑迫り合いで互角、いや優勢で押し返していたはずのカラミティ・エンドがバルムンクによって次第に押し込まれて行くのだ。

同時に飛燕にも変化が起こっていた。

蒼い光翼を作り上げていたはずのV.Lユニットから、「紅の光翼」が広がっていく。

それに伴って、バルムンクの刀身ビームもより強力に発振されていく。まるでどこからかエネルギーを分け与えられているように。

『はあああつ!!』

『くうあつ!!?』

簪の気合の叫びと共に、カラミティ・エンドが押し切られマニピュレータが弾かれた。

『真っ!』

その叫びと共に、飛燕が急速で離脱。

飛燕が離脱した理由は簡単だ。

本命は彼なのだから。

『うおおおつ!!』

雄叫びと共に、デステイニーがラクスアウレフにアロンダイトVer2を構えて突貫

する。

残像を展開しながらの急機動。

体勢を崩したラクサアウレフであつたが背部にあるドラグーンを切り離して、咄嗟にスパイクドラグーンを展開した。

スパイクドラグーン5基が、迫るデステイニーに牙をむく。

『あつ、甘いですわっ！』

『どつちがつ！』

震えた声がラクサアウレフの口から零れ、真がそれを否定するように叫ぶ。

一直線にホワイトネス・エンプレスに向かつていたデステイニーは急機動で上方に移動した。

瞬時加速を用いての、軌道変更。

上方に逃れることで迎撃のために展開していたスパイクドラグーンは当然空を切る。

ラクサアウレフがドラグーンへの指示を出すよりも、デステイニーの攻撃の方が早かった。

『うおおおっ!!』

『ぐっ!?!』

上段から振り下ろされるアロンダイトVer2を、咄嗟に展開した左腕のカラミティ・エンドで受け止める。

刀身ビームがスパークし、火花が散る。

互いの近接格闘武装の威力はほぼ互角だ。

再度鏝迫り合いの状況となるが、デステイニーのVLユニットから溢れる紅い光が一瞬だけより強く煌いた。

それと同時にアロンダイトVer2から発振されていたビームの出力が急上昇し、カラミティ・エンドを押し切った。

先に右のカラミティ・エンドを破壊された時の再現。

それを目撃したラクスアウレフはようやく気が付いた。

(これはっ、先程の攻撃やあの娘を援護していたのは、デステイニーの能力ということっ!?!他人にも与える事が可能っ!?!)

Vユニット同士はエネルギー転送が可能である。

クルーゼ事件の際に、飛燕のVユニットとデステイニーのVユニットはすでにリンク可能な状態であることが分かっていた。

簪と互いに攻撃を仕掛け、罅迫り合いや有効打を与えられる状況で一瞬だけデステイニーの単一仕様能力〔運命ノ翼〕による出力強化をVユニットを通して行う。

これによって、カラミティ・エンドよりも威力で下回るバルムンクが罅迫り合いで押し切れたのだ。

『はあっ!!』

咆哮と共に振り下ろしたアロンダイトVer2がカラミティ・エンドを両断し、ホワイトネス・エンプレスの左マニキュレータで爆発が発生する。

振り下ろしたアロンダイトを右手に、左のクラレントをビームライフルモードで起動して追撃を仕掛けようとしたデステイニーだが、背後から迫る気配に、回避を選択しながら標的を切り替える。

数瞬前でデステイニーがいた座標を、先ほど追撃のために放っていたスパイクドラグーンが襲う。



回避後のAMBACを終えたデステイニーは、クラレントを襲ってきたスパイクドラグリーンに向け放つ。

通常のビームライフルよりも強力な一撃が、正確に襲ってきたスパイクドラグリーン数を全て貫き残骸へと変えていく。

(……妙だな)

一旦ホワイトネス・エンプレスから距離を取ったデステイニーを、ビームライフルやバルムンクの砲撃モードで簪が援護をしてくれている。

ラクスアウレフのホワイトネス・エンプレスもゲシュマイディツヒ・パンツァーを装備しているため有効打はなっていないが、それでも戦闘機動を維持したままの思考は充分行えるだけの時間は稼げた。

(あのラクス……強敵だけど倒せないわけじゃない。オリジナルやAIに比べたらドラグーンの操作も甘い。さっきのドラグリーンだって追い詰められたから咄嗟に使ったって感じだ)

オリジナルのラクス・クラインやA1ラクスならば、1対1ならば今の自分でも十分苦戦する相手のはず。

だが相対するこのラクスアウレフは、強敵ではあるが二人がかりとはいえ苦戦せずに押し込めている。

真が感じている違和感、その正体は単純であった。

カーボン・ヒューマン：タイプラクス・クラインに使われているデータ自体はオリジナルとそんな色はない。

だが、そこにオリジナルのラクスや完全コピーであったA1ラクスと同じ【意志】は存在していない。

それこそC・Eという世界を一時は掌握した戦乱の歌姫という【意志】がそこにはないのだ。

その結果能力面では優れていても、精神面では如実に差が現れていた。最もこれは真や皆の知るところではないのだが。

またこの1年を通じて、真や簪達の技量が上がっているのもラクスアウレフ相手に優勢に立ち回れている理由の1つであった。

『簪、聞こえるか?』

『うん』

思考を整理し終えた真は、援護を続けてくれていた飛燕の簪にプライベートチャンネルを繋げる。

『あのラクスだけど、二人でなら一気に押し切れるはずだ。力をかしてくれ』

真からの言葉に簪が頷く。

彼から頼られるのは素直に嬉しいし、ラクスの打破には真の力が必要不可欠だ。

『もちろん。私が援護するから、真がオフエンス？』

『いや、コンビネーションで行こう。身体は問題ないか？』

既に何度か、VLユニットを通してエネルギーを分け与えている。

その為通常時よりも高出力状態のVLから得られる速度に、簪は晒されている。

クルーゼ事件の際には、彼女の体力を予想以上に消耗させてしまったことがあったため真は確認したのだ。

『ありがとう、でも私は大丈夫だから』

自分のことを心配してくれている真に微笑んで簪は返答した。

代表候補生として普段からトレーニングを続けているし、飛燕に搭乗するようになってから耐G訓練にも比重を置いて訓練している。

真まどとはいかないが、現役のIS搭乗者の中でも今の簪はGに対する耐性は十分に備わっていた。

『……分かった。なら任せるっ！』

『うんっ！』

紅と蒼、対の光の翼が広がって二機は弾れたように散開する。

迎撃の為にスパイクドラグーンが放たれ、デステイニーと飛燕に向かう。

『この程度ならっ！行くぞ、デステイニーっ！』

『うんっ！』

真の咆哮と共にデステイニーの姿がぶれ、次第にその輪郭が複数に分かれていく。そして5機のデステイニーがそれぞれ別方向からホワイトネス・エンプレスに向かう。

『っ、姿がっ!?!質量のある残像っ!?!いえ分身っ!?!』

デステイニーの能力とミラージュコロイドによる分身投影操作。

AIラクスとの戦闘で身に着けた技であるが、この数ヶ月で真とデステイニーはより高精度の分身を作り出す事を可能にしていた。

クラレントを構え突っ込むデステイニー2機がホワイトネス・エンプレスの両脇から迫る。

『っ、ですが所詮は分身っ!!』

ラケルタビームサーベルを2つ展開して、迫るデステイニーを両断する。

上方から2機アロンダイトを構えたデステイニーが迫るが、ラクスアウレフはAMB

ACで姿勢制御を行いつつ踊るように切り裂いた。  
そして残るのは、本体のデステイニーのみ。

『残念でしたわね、この程度ならっ！』

『これでいいんだっ！』

真の叫びと共に、ラクスアウレフの周囲に高エネルギー反応が現れた。

それは先ほどまで分身をなしていたコロイド粒子とエネルギーの反応であった。

高精度に投影が可能になったと言うことは、それだけエネルギーに溢れているという事だ。

つまりは「単一仕様能力」で外部からの操作が可能ということ。

急激に高まるエネルギーはまるで、膨張していく風船のようでもあった。

いや、正確には——爆弾だ。

人工の空に響く爆発音と衝撃。

切り裂れたデステイニーの分身が残っていたエネルギーを用いて爆発を生じさせたのだ。

『あぁっ!?!』

分身爆破という予想外の攻撃に、ラクスアウレフは吹き飛ばされる。そして爆炎を突き破って現れるのは蒼の光の翼。

『てえいつ!』

下方から迫るバルムンクの一撃がホワイトネス・エンプレスの背部V Lユニットを切り裂いた。

当然衝撃が発生し、ラクスアウレフの体勢はさらに崩れる。

追撃に現れるのは紅の翼、デステイニー。

アロンダイトV e r 2を最大稼働させて巨大な光の剣とした一撃が、正確に胸部装甲を切り裂いた。

『あぐうつ!?!』

『まだまだぁっ!』

『ステーキ、アクティブっ!』

真と簪<sup>コンピネーション・アサルト</sup>の強襲戦法は最終段階に移行していた。

デステイニーがクラレントをビームライフルモードで起動すると共に、飛燕はリボルビング・ステーキ 回転弾倉式杭打機を展開し、撃鉄を起こしている。

ホワイトネス・エンプレスの切り裂れた胸部装甲に互いの必殺の一撃を押し当てる。

『がはっ!?!』

クラレントとパイルバンカーの凄まじい衝撃が機体とラクスアウレフを貫いた。

残存していたエネルギーそのほほ全てを消費し、絶対防御が発動。

弾かれた勢いのまま、彼女は人口の大地に叩きつけられた。

『……やったか?』

呼吸を整えながら、真がセンサーで地表を確認していく。

ホワイトネス・エンプレスが叩きつけられた影響で土煙が昇っていたが、少し経つと



それも治まっていった。

撃墜し、無残な姿に変わり果てたラクスアウレフ。

ISの展開が解除され、白いドレスの様なISスーツが露になっている。

もつとも撃墜の衝撃で所々破け、切傷や裂傷で赤く滲みができている。

生体反応は存在しているが、彼女が動く気配はなかった。

『彼女は、どうするの？』

『……放置はできないな』

意識を失ったラクスアウレフの元に降下しつつ、右のマニピュレータ、人間でいうならば中指部分が開きそこから「白い液体」が射出された。

ベチャツと倒れているラクスに取り付き、そのまま地面とも接着する。

デステイニーに装備されているトリモチランチャーだ。

コロニーの簡易修復にも使われるこれはIS装備時ならともかく、負傷した生身の状態で絶対にはけ出せない。

ついでに止血もある程度は出来るだろう。

『まだシーゲルがいる。とりあえずはこれで拘束しておく……簪?』

トリモチランチャーを追加でラクスの脚と手に放った真が簪に振り返る。すると彼女はこういう訳か驚いた様な表情をしている。

それに少し顔が赤い。戦闘後の興奮というわけではなさそうだが。

『どうかしたか?』

『っ、別に何でもないよ』

咄嗟に取り繕って簪は顔を背ける。

その様子には首を傾げるが、今はそんな状況ではないためすぐに意識を切り替えた。

『簪、エネルギーは?』

『えっ、あつ、うん。真と一緒にのコンビネーション攻撃だったからあんまり減ってないよ。まだ6割残ってる』

『そうか。俺もそのくらいだ』

互いに少しだけ思案した後、頷いて機体を飛び上がらせる。そして向かう先は、コロニーの中央に聳え立つ研究区画。その瞬間だった。

2機の周囲にまるでノイズの様な歪みが発生したのだ。

『なっ!?!』

『きゃあっ!?!』

『っ、簪いっ!?!』

咄嗟にVレユニットを起動させて彼女を救出しようとしたが歪みの方が速く、デスティニーと飛燕は抵抗できぬまま飲み込まれてしまった。

まるで嵐の中にいるかの様に周囲の景色が歪み動く。

重力が数秒毎に上下左右360度、次々と変わっていくかの様に機体が引つ張られる。

これだけで気を失ってしまいそうな不快感を真と簪は味わう事となったが、数秒の内  
にその不快感は消えた。

不快感が消えると共に周囲の景色もまるで別物に変わっていた。先ほどまで戦闘していたのはコロニーの人工の空と大地。

だが今は周囲にシリンドラーが並ぶ、研究区画の様な場所に変わっていた。

涙滴型に伸びる壁の一面に、成人男性が優に入れるほど巨大なシリンドラーがいくつも設置されており、中身は何らかの液体で満たされている。

『っ!?!』

『ここはっ、何が起こったの……っ!?!』

突然の事態に二人はパニックになりかけるが、落ち着いて周囲を見渡して現状の把握に努めていく。

『ここは……研究区画の中、か』

『S. E. E. D.』が発動している真の方が状況把握は早かったのか、簪にそう告げて辺りのシリンドラーに視線を移す。

デステイニーが自動で補正を入れてくれているため、拡大された映像が視界に移る。

シリンドラーの中身は液体で満たされており、その中には何も入っていない。

この光景を見て最初に思い出したのは、ギガフロートにあった「ラクス・クライン生産施設」

そしてこのコロニーは【メンデル】

ならば、ここは——

瞬間、ハイパーセンサーが頭上に存在する何かを捕らえた。

それと同時に壮年の男性の声が響く。

『ようこそ、新人類誕生の聖地へ』

二人が頭上に視線を上げる。

そこには黒と紫を基調にしたISが存在していた。

細身なマニピュレータがISでは一般的であるが、まるでMSの様に強固な装甲で覆われた両腕部に脚部。

背部にはホワイトネス・エンプレスとは異なるがVLユニットと思われる翼上の機関が存在しており、腰部には装甲とは異なる複数の鋭利なユニットも見えた。

搭乗者であるシーゲルはギガフロートの際に身につけていたI Sスーツとは異なるものを身に着けていた。

身体のラインがはつきりと出るI Sスーツというよりは、C・Eのノーマルスーツや軍で研究されている強化外骨格に近い様に見える。

『シーゲル・クライン……！』

『この人が……っ！』

アロンダイトとバルムンクをそれぞれ展開し、構える。

先ほどの歪みはシーゲルの仕業だと、二人は直感で理解していた。

その様子に少し困ったような表情をシーゲルが浮かべる。

『やれやれ、私は話し合いに来たのだがね……飛鳥君。それに……えっと、更識……  
ああ、更識簪君だね』

彼が思い出したように頷く。

『まずは賞賛を贈ろうか。私の娘を完全に再現したアウレフを倒すとは見事だったよ』

腕部部分の展開を一時解除したシーゲルが拍手と共にそういった。

『飛鳥君はともかく、そちらの更識君には驚かされた。S・E・E・D. を持つ飛鳥君の的確な援護もできる。ノーマークだったが彼女もいい素体になりそうだ』

『っ、ふざけるなあっ！』

瞬間、【連続個別瞬時加速】で接近したデステイニーがアロンダイトVer2を振り上げて襲い掛かった。

アロンダイトのビームは通常よりも激しく発振されており、【運命ノ翼】も併用している。

振り下ろされるアロンダイト。

シーゲルは未だに先ほど解除した腕部分を展開すらしていないが、彼の機体腰部に存在しているユニットが分裂し、まるで【人間の手】の様に組み合わさり、ビームを発振して受け止められた。

その形状はどことなく、ラクスホワイトネス・エンプレスのエンプレスユニットを

彷彿とさせる。

罅迫り合いの形になったが、まだ全容が掴めない機体であるため真はV Lユニットを  
翻し離脱する。

『言っただろう、私は話し合いに来たと』

『ふざけるなっ、こっちはあんた達の計画に乗る気なんか、毛頭ないんだよっ！』

シーゲルは怒りの形相を浮かべる真から、簪に視線を移す。

『……ふむ、成程。君は彼女とそういう関係ということか。いや失敬、これは野暮な事だ  
ね』

苦笑したシーゲルはそう言うってから腕部を再展開する。

『我々の目的は先に話した通り、人類の調停だ。飛鳥君、君の戦う理由は【戦争のない平  
和な世界を作る事】だったかな？』



何故それを、と口から漏れそうになったのを真はかろうじて堪えた。

『今一度、最後の提案だ』

一度咳払いした後、シーゲルは告げる。

『君のその理想は〔S. E. E. D.〕を使った調停された世界でのみ実現できる。力を貸してほしい』

シーゲルは力強くそう告げ、真の返答を待つ。

——だが最初から答えは決まっている。

『戦争のない世界以上に幸せな世界なんて……あるはずがない……けど、俺はアンタを、アンタ達を否定するっ！』

横目でちらりと簪を見た後に叫ぶ。

この世界で得ることの出来た、大切な繋がり。

『世界は一人で回っているわけじゃないんだっ！話し合つて、触れ合つて、理解し合える、それが人間なんじゃないのかよっ！それを否定するアンタ達に協力なんかしないっ！！』

『あなた達の行動なんかで世界が纏まるわけないっ！』

真と簪が叫び、武装を構える。

『最後の交渉も、決裂……だね。ならば仕方ない。力で君達を倒して手に入れるとしようか』

その言葉の後、シーゲルから今まで発する事のなかった殺気が溢れる。

『全能なる調停者。新たな世界を、人類を管理する力を、君に見せてあげよう』

背部V.Lユニットから娘と同じ紫の光の翼を放ちながら告げた。

## PHASE 6 掴み取る自由

特徴的なGタイプの頭部を持つ戦闘機械。

その機体の名はストライク。

GAT-X105「ストライク」を模した無人ISだ。

その無人機ストライクが下方に存在する生体反応を捉え、AMBACによって軌道を変えた。

『上方200、無人機が来るぞっ！』

『了解っ！』

漆黒の宇宙空間に少女の声が響く。

無人機ストライクと同じく、敵に気づいたのはこちらも同じだった。

無論、宇宙空間に声が響くわけがない、これは少女達3人が纏うISのプライベートチャンネルだ。

1人目、IS「シユヴァルツエア・レーゲン」のラウラ・ボーデヴィツヒが目標を両

の視界に納める。

左目に宿る「ヴォーダン・オージエ」はすでに何度か使用していた為、眼帯を外していた。

その左目から得られる演算能力を駆使して、自機的能力を行使する。

上方から向かってきていた無人機ストライクの機動が突如として停止したのだ。まるで押さえつけられているかのように。

『A・I・Cの最大出力だっ！今だ、シャルロットっ！』

シユヴァルツェア・レーゲン最大の特徴である「A・I・C」による捕縛だ。

無人機ストライクも抵抗しているが、A・I・Cから抜け出るのは困難だ。

力任せに脱出するほどの力は、この機体には存在していない。

『任せてっ！』

2人目、シャルロット・デヌノアのIS「リイン＝カーネイション」

世界初のデュアルコア搭載機体。

かつてのリヴァイヴカスタムⅡの二乗という、破格の出力が齎す機動力で一気に無人機ストライクとの距離をつめ、マニピュレータに展開したパイルバンカー【灰色の鱗殻】で無人機ストライクを背部から穿った。

単純な威力でも現存しているI S搭載可能武装の中でも間違いなく上位に入る武装に加えて、機動力が加わった一撃。

その凄まじい衝撃で機体は下方に弾き飛ばされる。

P S装甲搭載機体であるため装甲自体にダメージは通っていないが、内部の精密機器に衝撃による不具合が起こっているためか、アイカメラが不気味に点灯を繰り返していた。

『鈴っ、行ったよっ!!』

『わっかってるってえ……のおっ!!』

最後の1人、鳳鈴音の【甲龍】はマニピュレータに展開している2本の青竜刀【双天牙月】を構えながら、舌なめずりしつつニヤツと笑う。

P S装甲搭載機体相手に実体剣は相性が悪い。

それはこの1年間に何度もP S装甲搭載型無人機と戦闘を続けてきた全員が認識している。

だが、それでも狙い目はある。

P S装甲は確かに実体武装に対する破格の防御性能を持つ。

だが装甲部分以外、具体的に言えば間接部分等は装甲の影響を受けない。

理論上は間接部分を狙えば、ビーム兵器を持たないISでも有効打を与える事は可能なのだ。

理論上と言うのは、基本的に高速機動が前提であるIS戦において、関節部をピンポイントで攻撃すると言う非常に難易度が高い攻略法だからである。

だが、この状況ではその難易度が激減していた。

シャルロットの攻撃により真っ直ぐに自分に向かってくる敵機。

ただタイミングを見計らうだけ。

元々が天才肌の彼女にとっては容易いことだった。

『そっ、おっ!!』

鈴の叫びと共に、2本の青竜刀が煌いた。

自機に向かってきていた無人機ストライクは両肘と両膝の間接部分を正確に捉えた彼女の攻撃により、四肢を失った。

同時に機能を停止してアイカメラの光も消えた。

『……よし、撃破したな』

『みたいだね』

ふうつと、一息入れるシャルロット。

『これで何機目よ、全く』

『これで18機目だ。やはり無人機には複数によるコンビネーションが安定するな』

すでに20に近い無人機を撃破していると聞いた鈴はげんなりした表情を浮かべ、それにシャルロットが苦笑している。

ラウラも苦笑した後、続ける。

『私達はマシなほうだぞ。基本的にヤツが撃ち漏らした機体を相手にしているのだから

な』

ラウラが上方に視線を移す。

そこには漆黒の宇宙を流れる流星が1つ。

いや、それは流星ではなかった。

埋め込み式の戦術強襲機【M<sup>ミ</sup>・E<sup>テ</sup>・T<sup>テ</sup>・E<sup>テ</sup>・O<sup>ア</sup>・R】を装備したIS【インフィニツトジャステイス】

当然その搭乗者は、アスラン・ザラだ。

単純な移動速度ではV L搭載機体を凌駕するその圧倒的なスピードで、流星の様に戦場を駆けていた。

もちろんただ移動しているだけではない。

この戦場で最も戦果をたたき出しているのは他でもない、アスランであるからだ。

ミーティアの姿勢制御スラスターを吹かせることで、強引に軌道を変えて迫る数十機の無人機達に向かい合う。

『マルチロックオン完了、行くぞっ！』



マルチロックオン用コンソールが表示されており、既にロックオンは完了していた。側面の高エネルギー収束火線砲、「エリナケウス ミサイル発射管」、そしてウエポンアームの「高エネルギー収束火線砲」から発射された超高出力ビームとミサイルが無人数機に降り注いだ。

攻撃効率で言えばミーティアを装備したストライクフリーダムガンダムには劣るが、それでも無人機相手には充分であった。

無人機たちも回避行動に移るが、次々とビームとミサイルに飲み込まれその機能を停止、または爆散していく。

『……………うわぁ』

ハイパーセンサーで検知していた鈴はその光景を若干引きながら眺めていた。

『埋め込み式の戦術強襲機って聞いてるけど、あの攻撃効率は戦略レベルっていいかもね』

かつての愛機ラファール・リヴァイヴカスタムⅡも拡張領域に大量の武装を搭載して

いたシャルロットも、あまりの光景に苦笑した。

ラウラも同じ感想であったが、ミーティアの上方の空間が歪んだのを視界に捉えた。

『アスラン・ザラっ！上だっ！』

空間が歪んだ現象の正体は、ミラージユコロイドで姿を消していた無人機ブリッツであった。

プライベートチャンネルでアスランに叫ぶラウラであったが、それは杞憂であった。

『ああ、判っている』

無人機ブリッツがビームサーベルを展開して切りかかると同時に、インフィニットジャステイスはミーティアを切り離す。

瞬間、無人機ブリッツが上下真つ二つに切り裂かれた。

インフィニットジャステイスの腰部からは別のマニピュレーターが展開され、その手にはビームサーベルが握られていた。

『隠し腕のビームサーベル。成程、ミーティア装備状態ではあの隠し腕は使えないな』  
『ああ。ミーティアはどうしても懐に入られるとな。んっ、どうやらまだ来るみたいだ』

ハイパーセンサーに動体反応を捉えたアスランは、切り離れたミーティアを機体に再  
接続させる。

『俺が先行するから、撃ちもらしを引き続き頼む』

『了解した』

ラウラの返答を聞いたアスランはミーティアのスラストに火を入れて、飛び去つて  
いく。

『……さて、私達は私達の仕事をするぞ』

ラウラの言葉に鈴とシャルロットは迷わず頷いた。

自分達が無人機の大半を相手にする事で、この戦場で戦う皆の援護が出来るから。

それはすなわち想いを寄せる相手の負担も軽くなるのだから。

少女達の瞳には戦意の炎が宿っていた。

メンデルから離れた宙域に光の花が咲くが、正体はビームの光。

急機動で光の軌跡を残すのは8枚翼を背負ったラキーナのストライクフリーダムガンダム。

少し遅れてフレイの駆るラファール・リヴァイヴ・ノワールが続く。

『逃がしませんよ?』

背部の機械翼が可変し、【バラエーナIIプラズマ収束ビーム砲】が2門展開され高出力ビームを発射する。

カーボンヒューマン：ラクス——ヴェートの名を背負った彼女の顔に笑みが浮かんでいた。

自由の力を宿したIS【ホワイトネス・エンプレス】からの攻撃を互いにAMBACとスラスター制御で躲すが、2人の表情は芳しくない。

『しっしっしっ！』

両マニピュレータに握られた専用アサルトライフル〔サウダーデ・オブ・サンデイ〕のトリガーを引き、バレルから銃弾が発射される。

だが放たれた銃弾全てがホワイトネス・エンプレスに命中する前に、その全てがどういふ訳か静止するのだ。

まるで何かに抑えられているかのように。

『無駄ですわ』

嘲笑と共に、手を振るう。

すると静止した弾丸全てが、同じ速度と威力をもつて跳ね返ってきたのだ。

『避けてっ、フレイっ！』

ラキーナは迫る弾丸をビームサーベルで切り払う。

S. E. E. Dが発動している今の彼女ならばこの程度を切り払うのは造作もない。

『くっ、このお……っ！』

だが射撃を繰り返したフレイにはそこまでの反応速度はない。

そのため数発被弾してしまうが、ラファールの装甲に着弾したおかげかダメージは最小限であった。

『反射能力とかつ、反則でしょっ!!』

ダメージによる衝撃をAMBCで補い、後退しつつ毒づく。

(攻撃の反射能力……ビームだけじゃなく実弾にも対応してるのかっ)

ラキーナとフレイの表情が芳しくないのはラクスヴェートの「ホワイトネス・エンプレス」の単一仕様能力であった。

先ほどから数度ビームライフルやバラエーナで攻撃を行っていたのだが、先のフレイ

の様にその全てをこちらに跳ね返してくるのだ。

似たような武装をラキーナは知っていた。

かつてのキラ・ヤマトの姉、カガリ・ユラ・アスハが養父から受け取ったMS「アカツキ」に実装されていた特殊装甲「ヤタノカガミ」だ。

ヤタノカガミは所謂鏡面装甲であり、直撃したビームを即座に屈折・反射させる特殊機能を持っていた。

MSが携行可能な重火器、果ては戦艦に搭載された主砲や陽電子砲まで無力化できる優れものだ。

ヤタノカガミに比べて機体に直撃する前に反射する分だけ、こちらのほうが厄介だ  
が。

(……射撃は完全に悪手っ！でも近接格闘なら……っ！)

ヴェートとの戦闘を開始して彼女のISの能力を目にしてからは、下がりつつ射撃を繰り返し観察をメインにしていた。

ここまで集まった情報から、実弾・光学問わずに射撃攻撃は悪手であることがはっきりした。

ならばと、ラキーナは判断する。

格闘攻撃、実体剣やビームサーベルならばダメージを与える事も可能なのではないか。

そのためには距離をつめることと、隙を見出せなければならぬ。

『フレイ、作戦があるんだ』

プライベートチャンネルでフレイに通信をつなげる。

『作戦？いいいわ、このままじゃ埒が明かないからね』

『ありがとう。あのラクス相手に射撃戦は悪手過ぎる。あの反射能力相手にまともに戦うとなると……』

『近接格闘ってことよね？』

フレイがラキーナの言葉をさえぎって、彼女と同じ意見を告げた。

それに少しだけ驚いたように目を見開くと、フレイはため息を混ぜながら苦笑していた。



『あのね、私もシャルロットと同じフランスの代表候補生なんだけど?』

『……うん。近接格闘ならあの反射能力も上手く機能しないんじゃないかなって思うんだ』

『そうね、やってみる価値は十分にあるわね』

納得したようにフレイが頷く。

『ありがとう。まず私が……』

ラキーナが迫るビームを回避しながら、フレイに作戦を伝える。

『分かったわ。やってみる』

『お願い』

伝え終えた後、ストライクフリーダムとラファール・リヴァイヴ・ノワールが動きを見せた。

(……ふふ、何かあるようですわね。どのような策か、見せてもらいますよ。)

相対するラクスヴェートは、ラキーナたちの行動が何らかの策に基づいていることを理解していた。

理解した上で、その策にあえて乗る。

これが意味するのは、心を砕くということ。

状況を打破するために考えた策が通じず、強大な存在に屈する。

心が折れた相手ほど御しやすい存在はいない。

ラキーナはS・E・E・Dを持つ者ではあり、その存在はなるべく無傷で手に入れない。

故にラクスヴェートは相手が何かしらの策に出たことを理解しつつ、正面から向かうのだ。

スラストアーを吹かせ散開していた2機の動きが止まる。

ストライクフリーダムの前にラファール・リヴァイヴ・ノワールがその手に実体剣「ダ

ン・オブ・サーズデイ」を展開した。

そしてもう片方、ストライクフリーダムガンダムのバラエーナ二門、クスイファイアス  
レール砲二門が射撃位置に移動する。

高機動形態のハイマツトモードから、砲戦形態のフルバーストモードに形態を切り替  
えたのだ。

それと同時に、ラファールが瞬時加速を発動。

フレイの戦闘スタイルに合わせた高機動戦重視の機体であるため、並みのISよりも  
その速度は速い。

しかしラクスヴェートにとっては大したことがない。

その程度ならば目を瞑っていてもカウンターを取れる。

すでにショートレンジまで距離をつめたラファールに、迎撃のビームサーベルを展開  
し振りかぶるラクス。

瞬間、四条の光が煌いた。

眩く宇宙を照らすプラズマの光と電磁加速によって発射された弾頭が持つ鈍い輝き。

ラファールで攻撃を仕掛けたフレイの背後から、彼女を巻き込まないように発射され  
たストライクフリーダムのフルバースト攻撃。

フレイを巻き込まないように、彼女の挙動一挙一動を全て見切った上、攻撃動作を乱さないようにしてラクスヴェートのみを射撃する。

まさに神業と呼べる精密射撃だ。

(成程、同時攻撃……ですが、射撃は私には通じないと、理解しているはずでしょう?)

笑みを浮かべるラクスヴェートが自身の能力を発動させる。

ラキーナの神業とも呼べる精密射撃は、ただのそれだけでピタリと無効化されてしまった。

(これが策ですか……少々肩透かしですわね)

一瞬の後、反射能力によってビームと弾頭は跳ね返る。

そして目の前のフレイを切り落として終わり。

内心ため息をこぼしたラクスヴェートであったが、その判断が過ちだったと気づいた。

反射によって跳ね返るフルバースト攻撃へ続けて、まったく同じコースにビームと

レール砲の弾頭が飛来したからだ。

同時に、目の前のラファールが突如として上方へ加速。

二重加速によって進路を無理やり変更したのだ。

(っ!?)

驚愕を浮かべたのは一瞬だった。

ラクスヴェートの周囲で、跳ね返すはずだった攻撃と飛来した攻撃。

それぞれが炸裂したのだから。

反射能力で跳ね返してくるまでのラグ。

そこに全く同威力の攻撃を命中させることで爆発を生じさせる。

それがラキーナが先ほどフレイに伝えた作戦の内容であった。

ラキーナの精密射撃の技術と、フレイの彼女への信頼。

そのどちらもなければなしえなかったコンビネーション。

『フレイっ、いまだっ!』

フルバーストモードからハイマツトモードに切り替えたラキーナも、マニピュレーターにラケルタビームサーベルを展開させつつ叫んだ。

『もらったあつー!』

二重加速を解除し、下方で爆発に包まれているラクスヴェートのホワイトネス・エンプレスへと一直線に加速する。

爆煙で肉眼でははつきりと視認できないが、ハイパーセンサーで位置はつかんでい

る。  
実体剣が振り下ろされ、確かな感触をフレイは感じ取った。

——その直後、自身の胸部への激しい衝撃が彼女を襲った。

『か……っ?!?』

フレイのラファールの胸部装甲にはつきりと刻まれているのは、自身が放った実体剣の一撃。

それを見て嘲笑に口角を吊り上げるラクスヴェート。

『当然、考えるでしょうね。射撃攻撃の効果がなければ近接でと……ですが、それさえも私には届きません』

展開されたビームサーベルでフレイのラファールのマニピュレータを切り裂く。流れるままに、破損した胸部装甲も切りつけた。

『あぐうっ!?!』

【絶対防御】が発動し、ラファールのエネルギーが凄まじい勢いで減少。

ビームサーベルによって切断された装甲の破片が周囲に舞っている。

『フレイいつ!?!』

『そこまでですわ、ラキーナ』

すぐさま駆けつけようとしたラキーナであったが、ラクスヴェートの言葉に機体を静

止せざるを終えなかった。

何故ならば、絶対防御が発動してしまったフレイのラファールを、ホワイトネス・エンプレスが掴んで拘束していたからだ。

空いているマニピュレータに握られた、ビームサーベルの柄。

発振はされていないが、すぐにでも発振できるようにフレイに突きつけて。

『くっ……！』

ぎりいつと歯軋りの音が口から聞こえる。

視線だけで相手を射殺せるのならば、間違いなくそうしているほどの殺意を込めて。

『この娘の命、貴女の行動次第……この言葉の意味はお分かりですよ？』

どうにかできないかと、S・E・E・Dで加速している思考で考えるが策は思いつかなかった。

そうしていると、ストライクフリーダムのパワーセンサーが高エネルギー反応を目前のホワイトネス・エンプレスから検知した。



瞬間、背部フリーダムストラライカーの特徴的な両翼が飛来したビームによって弾けとんだ。

『ぐああっ!?』

バラエーナが破壊されたことで、シールドエネルギーが減少し、同時に衝撃によってラキーナも弾き飛ばされる。

追撃のビームライフルで、クスイファイアスレール砲も破壊された。

『S. E. E. Dにフリーダム……所詮貴女ではその力を上手く扱えません。オリジナルの私の駒でしかなかった貴女ではね』

A M B A Cで姿勢制御を行う。

そして機体の被害状況を確認するが、バラエーナ、クスイファイアス両門とも完全に破壊されており、シールドエネルギーも4割を割っていた。

I. W. S. Pパックに換装するべき状況だが、フレイを人質にとられている状況で換装を行うわけにはいかない。

『さあ、状況は決まりました。投降なさい。貴女でもどうしようもないことは理解しているはず』

ラクスヴェートの言葉通り、状況は絶望的だ。

(くそっ、このままじゃ……っ！)

だが、ラキーナの瞳に宿る戦意は消えていなかった。

何とかしてこの状況を打破して、フレイを救出する。

キラ・ヤマトとして大いに道を誤った彼女は、もう二度とその意思だけは曲げるつもりがない。

人質として捉われているフレイに視線を移した瞬間、彼女の意識はブラックアウトした。

次の瞬間、彼女の目に映ったのは星々の瞬きであった。

「…………え？」

思わずそんな声が口から漏れてしまった。

漆黒の宇宙空間を照らす星の光は幻想的で、状況が状況ならばいつまでも眺めていた  
いだろう。

だが今の彼女は I S スーツ姿であり、I S をまとつてはいなかった。  
つまりは生身で宇宙空間にいるのだ。

「うっ、宇宙っ!?! I S がないっ!?!」

当然、パニックになるだろう。

この世界の間人よりも宇宙空間に対する認識が深いラキーナならばなおさらだ。  
だが、すぐに気づいた。

地球や I S をまとつている時のように、呼吸が可能なことに。

「うっ、呼吸ができる……………どういっこと……………」

パニックになった思考を落ち着かせると、加えてとあることに気づく。

「それに……地球が見えない……月もない？」

『それはそうだよ。ここは本当の宇宙じゃないから』

星の煌きしかない、静かな宇宙空間に声が響いた。

ラキーナが振り返るとそこには、幼い少女が微笑みを浮かべて佇んでいた。

その少女は栗色の髪をサイドアップにして、純白のワンピースを身に纏っている。

「君は……っ!？」

ラキーナは驚愕の表情を浮かべた。

その少女が、あまりにも似すぎていたのだ。

ストライクガンダムを降りて避難民として戦場から離れる道があった。

しかし、彼は軍人となって戦う友人達を見捨てられなくて、戦う道に戻った。

その時、5分にも満たない僅かな時間しかラキーナは、いや、キラ・ヤマトは確かに

その少女と言葉を交わした。

「今まで守ってくれてありがとう！」

衛星軌道上での戦闘で民間人を乗せたシャトルが射出され、ザフトに奪われたデュエルガンダムがビームに焼かれた。

その時、失われた少女と——目の前の少女はあまりにも似すぎていた。

「エル……ちゃん……っ!？」

記憶に残る名を口にしたラキーナだが、目の前の少女は残念そうに首を横に振る。

『……この姿は記憶から作られてるから、そのエルちゃんって子に近いと思うけど……私とは違うの』

「っ、なら君は……【ストライク】、なの？」

戦友である真や簪、一夏がI.S.の精神世界に何度か訪れたことがあると報告では聞いていた。

この地球が存在しない星々の煌めきだけの宇宙空間は、愛機であるストライクのコア人格の精神世界なのではとラキーナは気づいたのだ。

ラキーナの言葉に、ストライクは笑みを浮かべる。

『そうだよ。ストライクガンダムのコア人格、それが私だよ』

このタイミングで、彼女が出てきた理由をラキーナは1つしか思いつかなかった。

「もしかして………<sup>セカンドシフト</sup>第二形態移行？」

少女はそれにこくりと頷く。

ストライクが<sup>セカンドシフト</sup>第二形態移行でできたのならば、現実世界の絶望的な状況を打破できるかもしれない。

「ならすぐにでも、お願いだっ、ストライクっ！」

心に生じた希望にラキーナの声が強まった。

それに頷くストライクだが、口を開いて告げる。

『分かつてる。すぐにでも第二形態<sup>セカンドシフト</sup>移行するつもり……だけどね、名前を付けてほしいの』

「名前……だつて？」

ストライクの言葉に何を言っているか、とラキーナが困惑の表情を浮かべる。

『力は力でしかない。もう二度と迷わないための名前を、お姉ちゃんに決めてほしい』

少しだけ言いにくそうにだがはつきりと、ラキーナに告げる。

その言葉に少しだけ面食らった後、ラキーナは苦笑した。

（情けないなあ、私。愛機にも心配されてたのかあ）

内心そう思ったラキーナを、ストライクは無言で見つめている。

ラキーナの返答を待っているかのように。

ならば彼女の望み通りに、今の自分を表す名前をつけよう。

少しだけ、時間にすれば1分にも満たない程の時間の後、ラキーナが口を開いた。

「……リバティ」

『リバティ……自由って意味の？』

ストライクが首を傾げる。

それに微笑んでラキーナが続ける。

「うん。けどフリーダムじゃない。元々フリーダムってラクスから与えられた機体だからね。与えられるだけの自由じゃなく、今度は私の手でつかみ取る。だからリバティ」

フリーダムでもストライクフリーダムでもない、新しい自分だけの自由をつかみ取る。

その為の名前、その為の力。

——故のリバティ。



「リバティストライクガンダム。それが私が決めた名前だよ。ストライク」

ラキーナのまつすぐな視線と言葉に、ストライクは笑みを浮かべる。

その言葉が聞きたかったと、表情が語っている。

『うん。よかった、すごくいい名前。っ、すぐに現実世界に戻すよ』

「お願い。フレイを助けないと……っ！」

コクリとストライクが頷くと同時に、ラキーナは自分の意識が遠のいていくを感じた。

現実世界に意識が戻っていくのを感じると同時に、ストライクの声が耳に届いた。

『大丈夫、お兄ちゃん……ううん、お姉ちゃんなら絶対出来るよ』

その声はストライクのものであったが、別の誰かのようにも聞こえたのだった。

ラキーナの意識が現実世界に帰還する。

同時に、ダメージを負った機体が眩い光に包まれていく。

『なっ!?!』

ラクスが驚愕の表情を浮かべ、ストライクから溢れていた光が収まっていく。

トリコロールカラーの機体色はそのまま、より洗練された流線型装甲を持つISがそこにいた。

背部のコネクター部分にはフリーダムストライカーとも、I・W・S・Pを含んだ既存のストライカーパックとも異なるパッケージが装着されていた。

全体的な機体シルエットはエールストライカーを装備した形態に近い。

だが大型のスラスターが複数装備されており、その推力がエールストライカーよりも高次元にあるのは想像に難くなかった。

『これは、警告だ……といっても、君は聞く耳を持たないだろうけど……今の君じゃ、私達には絶対に勝てない』

『戯言を……ですが、ここにきての第二形態移行。やはりS・E・E・Dをもつ貴女

は優秀な……っ!?』

ラキーナの言ったとおり、ラクスヴェートは彼女の警告に聞く耳を持たなかった。

自身の能力に絶対の自信を持つラクスヴェートだったが、言い表せない悪寒を感じた直後であつた。

背後から衝撃が、ホワイトネス・エンプレスを貫いた。

『なあっ?!』

驚愕の声を上げるとともに、人質として掴んでいたフレイのラファールを離してしまつた。

だがそんなことは重要ではない。

何にやられたのかを、AMBA Cで姿勢制御を行いつつ確認する。

自身の背後の空間、そこには半透明の物体が二個浮かんでいたのだ。

その物体は、フリーダムストライカーの背部ウイングに搭載されていた【バラエーナ プラズマ収束ビーム砲】の形状に酷似していた。

相違点を挙げるといふのなら、幾何学模様が側面に刻み込まれている点だろう。

こちら側に射線を向け、肉眼ではつきりとその存在を確認できるといふのにハイパーセンサーは何も検知していなかった。

『仮想武装……これがリバティストライクガンダムの単一仕様能力』

ラキーナは静かにそう告げて、ラクスヴェートから離れたフレイの元へと翔ける。

抱き寄せた彼女は気絶しており、頭部から出血していた。

いくつか打撲の後があるが、命には別状がないように見える。

そして背後から高エネルギー反応をリバティストライクは感知する。

ホワイトネス・エンプレスがその身に宿すフリーダムの最大火力、フルバーストモードでこちらを狙っていた。

先ほどの不意打ちによって装甲が弾け、その影響かラクスヴェートは額から出血しているようであった。

『堕ちなさいっ！』

怒りの声と共に極彩が宇宙を照らす。

だが、その光はラキーナには届かなかった。

何故ならば光の照射が終わると、そこには半透明のシールドが浮かんでいたからだ。フルバースト攻撃に使用される四門の射線全てを、四つのシールドで防いだのだ。

(クルーゼのロキ・プロヴィデンスの影響を……受けてるよね、これ)

かつての怨敵、ライリー・ナウ、否、ラウ・ル・クルーゼの乗機であった「ロキ・プロヴィデンス」の【瞬間展開】

任意の場所へ瞬時に攻撃体勢で展開ができる極めて強力な能力の影響をはつきりと受けている。

だが、今はその力すら使う。

愛した女性を、愛する人を守るために。

『ばっ、馬鹿なっ……私のフリーダムのが、そんなシールドなどに……っ！』

ぞくりと、心臓を掴まれたような悪寒を感じる。

一瞬の後、全方位からビームの照射を受ける。

『ああっ?!』

弾き飛ばされたラクスがいた周囲には、先ほど不意打ちを受けた半透明の砲塔が、合計12門いつの間にか展開されていた。

『思ったとおりだ。今まで君の機体はダメージを受けていなかった。だけど、いつの間にか機体装甲に小さな傷ができています。その傷がいつできたのか。それはさっきのフレイの攻撃のときの爆発で装甲にダメージがあつたつてことだ。君の機体の能力、認識できていない攻撃は反射できない……違うかい、ラクス』

『……くっ!』

脂汗を滲ませたラクスヴェートが取つた行動は素早かった。

即座に機体を反転させて、スラストを全開に吹かせて撤退していく。

自機の最大火力であるフルバーストがあつけなく防がれた。

そして反射能力の弱点を見抜かれた上、彼女が操る力は反射能力と極端に相性が悪い。

ハイパーセンサーで認識できない砲塔が無数に現れる。

いくつか反射ができたとしても、エネルギーで作られていると思われる砲塔に効果は薄い。

分が悪すぎる故の、撤退。

判断は悪くはないが、相手が悪かった。

『逃がすわけ、ないだろうっ!』

彼女の行く手を阻むように、無数の砲塔が虚空に展開される。

その数はかつてのストライクフリーダム最大のロック数をも上回る223。

球状コンソールに展開されたロックオンマーカーが幾重にもその反応を捕らえた。

瞬間、砲塔はビームを白き女帝に放つ。

『ああああっ!?!』

ビームの嵐、まさに光の大瀑布と形容できるそのビームにラクスは飲まれた。

最後の抵抗か、彼女に認識できたいくつかのビームが仮想砲塔に反射されていくが、

雀の涙だ。

そもそもがエネルギーで形成された仮想の砲塔。

ビームで破壊されたとしてもラキーナには何のダメージもない。

そしてビームの嵐が消えた後に残ったのは、ボロボロになったホワイネス・エンプレス。

背部のフリーダムユニットは完全に喪失されており、装甲もすでに意味を成さないレベルで破壊されていた。

かろうじて発動した絶対防御で今の仮想砲塔一斉射撃を耐えたのであろうが、すでに虫の息であった。

『……終わりだよ、ラクス』

抱えたフレイからいったん離れる。

そのままビームサーベルを展開したラキーナは、ラクスに機体を向けそう告げる。

『……こんな、私は、ラクス……クラインなのに……なんで、なぜ……？』



『……人は結局、自分にしか、なれないんだ。誰かは分からないけど、君はラクスになつてしまった。それが君の間違いなんだよ』

『……ああ、そう……なんだ……』

振り上げていたビームサーベルを下ろす。

一瞬ラクスの身体が跳ねるが、その後すぐにダラリと力が抜ける。

虚ろになった彼女の瞳を、腕部分の I S の展開を解除してそつと瞳を閉じさせる。

ホワイネス・エンプレスの展開が解除されたラクスの身体を、そつとラキーナは受け止める。

『終わった、のね』

その様子を、意識を取り戻したフレイが寄り添いながら確認する。

額からの出血は搭乗者保護機能で止まっているようだった。

『フレイっ、身体は……？』

『ん、ちよつとつらいけど、大丈夫』

ガッツポーズをしてみるが、痛むのか顔をしかめたフレイを受け止める。

『……ごめんね、足引つ張って』

フレイが弱々しくラキーナに言った。

『ううん、気にしないで』

だがそれをラキーナは微笑んで返す。

『すぐに、クサナギに連れて行くから』

ぎゅつと生身の手でフレイを抱きしめるラキーナ。

空いている手ではラクスヴェートの遺体を回収して、クサナギを目指すためにスラスターに火を入れる。

フリーダムシルエットと同等レベルの推力で宇宙をリバティストライクとラフアー

ルは駆けていく。

(……かつこよくなつちやつてまあ……！)

こいつの横顔に見惚れるの何回目だっけなどと考えたが、すでに数えるのも馬鹿馬鹿しくなったため思考を放棄したフレイであった。

## PHASE 7 王の理

『いのおっ!!』

白きIS〔白式・王理〕が背部エナジーウィングを翻しながらその手に握る雪片を振り下ろす。

振るわれた刃は神速の速度を損なうことなく、目の前の物言わぬ機械を寸分たがわず真つ二つに両断した。

しかし、切り落とした無人機デュエルと同型機がビームサーベルを振り上げて一夏の背後を取っていた。

だが今の一夏は一人ではない。

白式のハイパーセンサーが飛来する物体を複数検知したのとほぼ同時に、背後に迫っていたデュエルは弾き飛ばされていた。

クルリと反転した白式はそのままエナジーウィングを用いて加速し、無人機デュエルに反撃を許さず同型機と同じように両断する。

切断された個所からスパークがほとぼしり、推進剤を起爆剤として爆発していく。

『助かったっ、箒っ！』

『今は赤月なんだけどなー』

赤い双眸の箒はそう言っただけのため息をつく。

無人機デュエルを弾き飛ばした、天羽々斬が紅藤の装甲として装着されていく。

『あつ、悪い……っ』

『そんなに気にしないでよ、一夏』

罪悪感を感じて顔をしかめた一夏に悪戯っぽく笑った赤月。

すると、彼女の左目が普段の虹彩に変化していく。

それと同時に彼女の口調が変わる。

『談笑している場合ではないぞっ、まだ来るっ！』

身体の主導権が赤月から、本来の筈に戻ったのだ。

そして彼女の言う通り、二機の上方に無数の無人機と共に存在しているIS【ハワイトネス・エンプレス】

搭乗者はカーボン・ヒューマンタイプ：ラクス・クラインの15番目【サメル】

『いつまで持ちますかね。こちらの無人機はまだありますのよ?』

ラクスサメルの言葉通り、彼女の言うとおり機体背後には無数の無人機達が存在している。

その総数は優に50を超えている。

『……戦いの基本は数。その基本を覆すほどの実力を貴方達は持つていない……勝負は見えておりますよ、お兄様』

悔しいが、その通りであると一夏は認めざるをえなかった。

そもそもが機体の特性がこの場面に合っていないのだ。

一夏の白式・王理は一对一の近接戦闘では非常に強力な機体だ。

だが遠距離攻撃手段が存在しておらず、また広範囲への攻撃手段も持っていない。箒の紅藤については、セイバーの「アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲」を改良、調整した収束ビーム砲「桜花」が存在しているが、それでも広範囲に対する殲滅手段にはならない。

第4世代機である「セブンス・プリンセス」と「インペリアル・ナイト」、セシリアの「ブルー・ティアーズ」やラキーナの「ストライクフリーダム」等が持つ  
Mass Amplitude Preemptive Strike Weapon  
 「大量 広域 先制 攻撃兵器」ならば可能であるが、無いものを望んでいる場合でもない。

『だったら、アンタを倒せばいいだけだろっ！』

一夏の言葉に呼応するように、白式のエナジーウイングが煌く。

羽一枚一枚がラクスサメルへ向いた後、光が溢れてラクスサメルに向かっていく。

王理に進化したことで追加されたエナジーウイングからのエネルギーショット。

射程距離は中距離で広範囲への攻撃は一夏の速度不足によって行えないが、中距離や近距離での攻撃力は充分に存在していた。

だが、その一斉射撃も全て踊るように回避されてしまう。

『くそっ!!』

元々射撃は苦手な一夏の攻撃だ。

近接格闘ならまだしも、相手がカーボンヒューマン：ラクス・クラインならば当てるのも至難だ。

『……やはりこの程度。この程度なのですか』

彼女の先程までの口調とうって変わり、底冷えしたものに變化する。

まるで失望したとも言いたげな表情だ。

『貴方の程度が知れましたわ。所詮はプロジェクトモザイカの残滓に過ぎない貴方では、私には勝てない』

ラクスサメルがそう言って、手を振るう。

すると、無人機ストライクがビームサーベルを構えながらこちらに向かってくる。



だがその機動が先程までの無人機よりもクイックだった。

『っ！』

咄嗟に雪片を展開して、ストライクのサーベルを受け止める。

近接格闘武装同士の鏖迫り合いになる——かと思われた。

しかし無人機ストライクは脚部のスラスタを点火させ、そのまま白式を蹴り飛ばしたのだ。

『ぐあっ!?!』

不意打ち気味の一撃に装甲の一部が砕けて宙を舞い、それを突き破るかにストライクは追撃の刃を上段から振り下ろしてくる。

瞬間、機体のハイパーセンサーが高エネルギー反応を検知、二門の高出力ビームがストライクを背後から襲う。

だが、その反応はストライクも検知していた。

上段からの振り下ろしを即座に止め、瞬時加速で上方に逃れることで、そのビームを

回避する。

一夏を援護するために、収束ビーム砲〔桜花〕で箒が援護していたが避けられた。

『つ、何だあの反応はっ!?!』

『……今までと反応が違うね、クイックすぎる』

いやクイックどころではなく、まるで生きているようだと赤月が気づいた。

それに気づいたのか、ラクスサメルが冷笑を浮かべる。

『言い忘れておりました。私の機体は無人機を己の分身として操作する能力を宿しています。先程まではAI操作ですが今度は私がこの子達全てを操作している、と考えてください』

周囲にいる全ての無人機が有人機に変化した——ラクスサメルはそう言ったのだ。言うならばビットIS、ともいえるだろう。

『そつ、そんな……っ!?!』

ぞっと寒気が一夏の背中を貫く。

周囲の無人機全てがこちらにビームライフルを向けているからだ。

『フィナーレです』

ラクササメルの指示の元、無数の閃光が飛来する。

飛来した閃光が白式に直撃し、そのエネルギーを枯渇させるはずであった。

『させないっ！』

紅い残像が白式を抱えて込んでいなければそうなっていただろう。

両目が赤い箒——赤月が、咄嗟に箒の身体の主導権を奪い、個別連続瞬時加速リボルバースティックニッジョン・ブーストによって一夏を救出したのだ。

ラクササメル達から少し離れた所で反転し、一夏を離す。

『助かった……ありがとう、ほう……じゃない、赤月』

『どういたしまして』

ニコツと微笑む赤月。

そしてすぐに真剣なまなざしで一夏を見つめた後、少しはなれたラクスタちを一瞥してから口を開いた。

『……撤退も視野に入れたほうがいいかもね』

『っ、逃げるってのか!?!』

赤月の言葉に一夏が反論する。

『……逃げるのは恥じゃないよ。彼女の言う通り、こっちは今のままじゃ質で量を超えることができない……悔しいけどね』

『……悔しいけど、それだけは……どうしてもっ、俺は逃げたくないんだっ!』

一夏の語気が荒く、強くなっていく。

『ここで逃げたら、俺を俺として……織斑一夏って言う人間として認めてくれた皆に申し訳が立たないんだよっ！俺の我がままだつて事はわかるっ、けど……けどっ……俺は、一人の人間として、勝ちたいんだっ！』

「自分が弱いのは百も承知だ。

だがここで逃げてしまつたら、それでも普通の人間じゃない自分を認めて受け入れてくれた皆に申し訳が立たない。

それどころか自分が造られた存在であり、シーゲルの手のひらの上の存在であるということを返上することができない。

だからその選択だけはしたくない。

それが一夏の本心であった。

感情が高ぶっているのか、一夏の目じりには涙が浮かんでいる。

その涙を見た赤月はため息をついてから、続ける。

『……ま、勝てないとは言つてないけど』

(なっ、できるのかっ!?)

赤月に身体の主導権を取られ続けていることを忘れた筈が、意識の中で驚愕した。

『一夏がそうしたいって言うのなら、奇跡を見せてやろうじゃないっ!』

そう言つて赤月が笑うとコンソールが立ち上がる。

それは筈も見たことのあるもの。

今は亡き、紅椿が発現させた能力と同一の単一仕様能力の名前。

だが、少しだけ異なっていた。

【ワンオフ・アピリテイ単一仕様能力】《絢爛舞踏・改》Awakening

(絢爛舞踏・改?)

『そう、これが本当の絢爛舞踏。今起動した能力でこの宙域の味方機のエネルギーも回復してる。そして、この力で一夏、白式・王理の本当の力を目覚めさせるの』

『本当のって……どういふことだ?』

赤月の言葉に、一夏が首をかしげる。

『零落白夜』は本当の単一仕様能力じゃない。白式・王理には機体単体のエネルギーだけじゃ賄えなくて使えない本当の能力がある。私はISコアの意識だからそれが分かるんだ。外部から私達がエネルギーを供給すれば、きっとその力が目覚める……と思う』

『確実じゃないのかっ?!』

『仕方ないでしょっ、本当は調整とかいろいろいるんだから！ぶっつけ本番、無理やりたたき起こすしか今はできないのっ!』

箒の意識が現出し、虹彩が元に戻る。

抗議の1つや2つ言ってやりたい箒だったが、一夏がそれを遮った。

『箒、赤月、やってくれ』

彼のその言葉に2人は黙ったまま頷いた。

紅藤が、白式の後方に回り、背部のエンジーウイングユニットにマニピュレータを乗せる。

コンソールが起動、能力の発動と共に光が溢れ、まるで洪水のようになっていく。

『私達の力……っ!!』

『受け取れ、一夏あっ!!』

絢爛舞踏の輝きを、紅藤が白式へと与える。

それに併せて白式のコンソールが自動的に起動した。

【ワンオフ・アビリティ単一仕様能力】《夕風灯夜》Awakening

王理の脚部や肩部の装甲がパージされ、それがマニピュレータを覆うように集まって巨大な【爪】を形成する。

雪羅から王理が継承したエネルギー爪【雪羅改】。

通常の雪羅とは異なり純白の光ではなく、紅い光を纏っている。

それはまるで親友の機体の武装を思わせる形状だった。

『……よおしっ!!』



形状と溢れる光に笑みを浮かべた一夏。

不思議と、今から行う攻撃が失敗するイメージが浮かばない。

親友のお決まりの攻撃パターンだからか、とあるイメージが視界に映りこむ様な感覚を覚えた。

——その姿は運命の名を背負った光の翼を持つ機体。

そのイメージは残像を残しながら先行していき、一夏はそれ追いかけていく。

『っ、あれは……お兄様を止めなさいっ！』

ラクササメルの指示に従い、ビット化した無人機達は生きているように、白式に向かっていく。

ショートレンジでビームサーベルを振り上げるビット無人機達だが、その機体が白式の雪羅改から溢れる紅い光に触れると糸が切れた人形のようにガクつとその機能を停止させていく。

『なっ、IS達が動かないっ!?!』

動かないのではない、機体そのものが言うことを聞かない。まるですべての機能が初期化されてしまったかのように。

『ISの初期化だともいいますかっ!?!』

先行するイメージに並び立つように、少しずつその距離をつめていく。当然、ラクスマメルとの距離も詰めていく事になる。

『っ、ならばっ!!』

ハイパーセンサーに高エネルギー反応を検知。

それはこちらに向かってくる無人機全てにとあるコードが発振されたのだ。

『一夏っ、気をつけて、あいつ自爆するつもりっ!』

『一夏あつ!!』

赤月と箒が援護しながら叫ぶ。

目の前で、紅藤からのビームに貫かれて無人機が爆散する。

二人の想いは一夏に確かに届き、さらに力が沸いてくる感覚を覚えていた。

『いまさっさとこんなもんっ!!』

エナジーウイングが煌き、前方だけにエネルギーショットを撃ちだす。

迫ってきていた無人機デュエルに直撃し、自爆間際のエネルギーが暴走して爆発。

半数までに減らした無人機IS達だが、まだ包围を抜けるには足りない。

そしてエネルギーショットは連射が効かない。

だが打つ手が無いわけではない。

『このおっ!』

雪片を展開して、そのまま前方の無人機に投げつけたのだ。

こちらに向かってきているのだから、仕損じることはない。

無人機ストライクのちようどコックピット部分に雪片が突き刺さる。

雪片毎無人機は爆発に飲まれていくが、その爆発を一夏は突っ切ることを選択した。

多少のエネルギー消費は覚悟の上であり、箒達が託してくれたエネルギーはまだ尽きていない。

ならば、することはただ一つ。

『あんた達を倒すのは、俺だけの力じゃないっ!!』

爆発と無人機の包囲を突破した白式・王理はすでに、ラクスサメルを雪羅改の射程距離に収めている。

『っ!!』

ホワイトネス・エンプレスはビームサーベルを展開して振り上げるが、一夏のほうが速い。

——視界に存在していたイメージと一夏の動きが重なる。

『俺だけじゃないっ、皆の力だあああっ!!』

単一使用能力〔夕風灯夜〕を宿した雪羅改が、ビームサーベルを握るマニピュレーター毎ホワイトネス・エンプレスの胸部へ押し当てた。

瞬間、ホワイトネス・エンプレスのビームサーベルの発振が停止し、機体の機能が次々とダウンしていく。

『こっ、これは……機体が、ISが初期化されて……っ!?』

絶対防御を発動させるプログラムすら初期化されていく。

ホワイトネス・エンプレスを拘束した白式はそのまま雪羅改で押し込んで、加速していく。

『うおおおっ!!』

『なっ、このっ……があっ!?』

そして近くのデブりに彼女をたたき付けた。

シールドバリアも絶対防御もろくに起動していない機体では、その衝撃は搭乗者を直撃する。

ラクササメルの額は衝撃によって砕かれた装甲が当たったことで裂けており、血が流れている。

ただ彼女の命自体に別状はない。

何故ならば、白式・王理の搭乗者保護で、ラクササメルを保護しているからだ。

『あんたの負けだ。その機体はもう命令を受けつけないっ！』

いつでもエネルギー爪を展開できるよう雪羅を展開したまま、一夏はラクササメルに告げる。

ハイパーセンサーには背後で武装を構えている筈の紅藤を捉えている。

『……………くつ、こんな……………このような結末を……………認められるわけ……………』

衝撃によって混濁する意識でラクササメルは一夏を睨み付ける。

一瞬気圧された一夏だが逆に睨み返す。

拘束されながらも抵抗を見せていた彼女だがそのうち抵抗もなくなり、ダラリと力なく手を離れた。

一夏が確認してみると、彼女は意識を失ったようであった。

『……勝った……んだよな?』

ダラリと意識を失ったラクササメルを見つめて、一夏はそう呟いた。

そんな一夏に箒の紅藤が寄り添う。

『ああ。勝ったんだ、一夏』

『……そつか……ああ、勝ったんだ……っ!』

ぐつと少しだけガツポーズした一夏は気づいたように、倒したラクササメルに視線を戻した。

『この人、一応拘束したほうがいいんだよね？』

『……うん。クサナギに連れて帰って拘束する、でいいと思う』

赤月の本心からしてみれば、ISの初期化を行ったのだから搭乗者を宇宙で放置して戦力を減らしたかったのだが、これを言うで一夏に嫌われると考えると言葉を選びなおしていた。

『よし、箒、赤月、一度クサナギに戻ろう』

雪羅を格納してマニピュレーターでラクスサメルをつかみあげた一夏に、箒が頷き、赤月も了承する。

クサナギへと戻るために、ハイパーセンサーで座標を確かめながら2機は宇宙を駆けていった。

クサナギへの帰還の際、先行する形で前にいる彼の背中を見て箒は笑みを浮かべていた。

すると彼女の深層心理の中で赤月が箒に語りかけてきた。



(格好よかったよね)

(そつ、そうだな)

にやけそうになる表情を隠すため、赤月から視線をはずす。

先程の一夏の動きが脳裏に思い出される。

強大な相手に引かずにそのまま打ち勝った彼の姿。

鼻根目も入るだろうが箒にとって何よりも、誰よりも雄々しく逞しく映った。

そんな彼の姿を見ることができた上、それに協力できたのだ。

まさに我が世の春である。

必死に顔を背けて隠しているが。

(……ここには私しかないのに、強がらなくてもいいんだけどなあ)

自分しかない深い深層心理の中でもそつぽを向いた箒に赤月は苦笑していた。

## PHASE 8 蒼の旋律

宇宙を走る幾条もの光。

それが放たれたのは蒼い遠隔無線砲塔。

4つのビット兵器を回収したIS「ブルー・ティアーズ」を駆るセシリアは何故か、苦悶の表情を浮かべていた。

A M B A Cで体勢を整えながら、頭に手を当てる。

彼女が苦悶の表情を浮かべている理由。

それは――

(つう……頭痛が……頭痛が酷いつ、戦闘が、長引きましたか……っ！)

そう頭痛であった。

ラクスタレットとの戦闘が開始されて数十分。

戦闘が長引くにつれて感じていた頭痛が、少しずつ強くなり治まる気配を見せない。

頭の中を掻き穿たれているような、無視はできない痛みが広がっていく。

『お顔がすぐれませんか？』

ビット兵器の攻撃を回避していたラクスタレットが、セシリアの苦悶の表情に気づく。

咄嗟にスターライトmkⅢのトリガーを引いて、レーザーを発射する。

だが放たれたレーザーは、ラクスタレットの目の前の【空間】に【穴】が開いてその中に吸い込まれて消えていく。

その様子に内心舌打ちをすると同時に背後に感じた寒気。

その寒気が何を意味しているのかは理解している。

すぐさま瞬時加速で上方に加速して回避に移った。

その一瞬後、彼女がいた座標を大量の光が襲った。

先程穴に消えた、自分が放ったレーザーに加え、大出力ビームも混ざっている光の瀑布。

だが当然、回避に成功していたセシリアにダメージはない。

しかしその圧倒的なまでの攻撃密度には、思わず冷や汗が流れた。

『正直に申し上げますと、まさか貴女の空間認識能力と戦闘能力がここまでのもものとは思いませんでしたわ。こちらの予想を上回る、と称賛させていただきます』

わざわざマニピュレータを解除して生身の手を現出させたラクスタレットはパチパチと拍手を送る。

『BT1号機「ブルー・ティアーズ」。率直に申し上げて、その機体のポテンシャルはBT2号機「サイレント・ゼフィルス」、3号機「ダイブ・トゥ・ブルー」に比較すると低い。偏向射撃という特殊能力を除いた場合、第3世代機の中でも平均的な性能と評価せざるを得ません』

セシリアを指差しながら、ラクスタレットは続ける。

『ですが貴女はその性能差を自分の技能で補っている。その結果過去にサイレント・ゼフィルスを、そして今無人機を数十体破壊したうえで私と戦っている』

ラクスタレットの言葉を遮ろうと得物を向けるが、そこで一際激しい頭痛が彼女を

襲った。

そのため射線がずれて、レーザーが放たれてしまった。当然、ずれた射線では捉えられる相手ではない。

その様子を見て、ラクスダレットは笑みを浮かべる。

それは嘲笑の色がとても強いものであった。

『偏向射撃の際には、非常に高い稼働率で運用されているのでしょね。ですがそれは貴女自身に高い負荷がかかり続けているのです』

現在のブルー・ティアーズはセシリアが意識して偏向射撃を行えるように成長したため、高い稼働率を維持している。

通常の戦闘ならば特に問題はないし、同時制御も今の彼女ならば苦も無く操れる。

だが偏向射撃を使用した戦闘が長期化した場合は話が異なってくる。

偏向射撃は機体の機能でもあるが、それをマニュアルで操っているのはセシリア自身である。

搭乗者の脳波制御で、複雑なBT兵器の操作を処理する。

難易度を例えるならば――

アクセルを全開で踏み抜いて加速させたスポーツカーを操作しつつ、ラジコンを4台自由自在に操って並走させるに等しい。

――負荷がかからないはずがないのだ。

試作機の性質が強いブルー・ティアーズは基本的に搭乗者が負荷を背負う必要がある。

一度や二度の使用、ある程度間隔をもって使用した場合は時間経過で回復できるためさしたる問題にはならないが、度重なる使用による負荷がセシリアを襲っているのだ。

今の彼女の脳は「過度の負荷に悲鳴を上げているエンジン」とも形容できる。

エンジンの悲鳴が彼女を襲っている頭痛の正体。

『焼き尽きたエンジンは戻らないもの。あまり無理をなされますと、こちらが困るのですよ……貴女は非常に優秀な素体になります』

ラクスタレットの言うとおり、焼き尽きたエンジンは直らないし、戻らない。

エンジンならば新しいものに交換すればいい。

だが、人の脳はそう簡単にはいかない。

それはつまり廃人となることを意味している。

『……ですので、戯れはここまでということにしましょう』

彼女の言葉と共に、先程からセシリアの攻撃を無効化している【黒い穴】が周囲360度、無数に展開されていく。

ハイパーセンサーに検知したその総数は優に100を超えていた。

『なっ……!!?』

『これが私のホワイトトネス・エンプレスの単一使用能力【転送点穴】……簡単に言えば空間を連結させる穴。BT3号機【ダイブ・トウ・ブルー】と似ていますわね』

【ワームホール転送点穴】

これがラクスダレットの能力。

空間と空間をつなぎ合わせる穴を発生させる能力。

戦闘においてはセシリアの放った攻撃全てをこの穴で受けることで無力化していた。攻防に應用が利く非常に強力な能力であり、先のニュートロン・ジャマー投下もこの能力によるものだった。

機体単体での射程距離は長くはないが、外部からのエネルギー供給を受けることで飛躍的にその範囲を伸ばすことが可能であった。

そしてその穴全てから、高エネルギー反応を検知した。

『ぎやあつ?!?』

降り注ぐビームに、ブルー・ティアーズとセシリアは成す術なく飲み込まれてしまった。

圧倒的な量による全包围攻撃。

回避しようと抵抗したが、多少回避したところで被弾を抑えることができないほどの密度であった。

ビームにより装甲が砕け、融解。

右腕部、左脚部が破損しティアーズも2機ビームに貫かれて破壊されてしまう。

同時に、絶対防御が発動して機体のエネルギーが急激に下がりレッドゾーンに突入す



る。

そしてその衝撃で機体ごと弾き飛ばされてしまった。

『これで勝敗は決しましたね』

ラクスタレットも少しだけ安堵したような表情になっていた。  
セシリアと言う優良な個体を手に入れることができたための安堵。

(……勝てない……今の私では彼女に……)

戦意を砕かれたセシリアは、虚ろな瞳で虚空を見つめていた。  
そんな時であった。

レッドゾーンに突入していたブルー・ティアーズのエネルギーが突如として回復したのだ。

(……エネルギーが、回復した……?)

激しくなる頭痛と受けたダメージによって歪んでいた視界が少しだけ、回復した。残量がわずかになっていた機体のエネルギーがほぼ全快している。

(これは箒さんの……絢爛舞踏……?)

紅椿、いや紅藤の発現させた【絢爛舞踏・改】の効力がこのタイミングでブルー・ティアーズに届いたのだ。

距離はかなり離れていると言うのに、何故エネルギーが回復したのかと疑問は浮かぶ。

だがセシリアにとってはまさに僥倖であった。

(……そうです。まだこんなところで……負けるわけにはいきませんっ。ここで彼女達を止めなければ、世界は……っ！)

敗北に飲まれかけていた自らの心に、光が差したのを確かに感じたのだ。

心身ともに疲弊している今の状況は変わらない。

だが、立ち上がれないわけではない。

その気力は今分けてもらったばかりなのだから。

右マニピュレーター部分が弾き飛ばされ、生身が現出していた手をぎゅっと握りしめる。

(あと少しだけ……力を振り絞りなさい、ブルー・ティアーズ……っ！)

スラスト制御で姿勢制御を行い、打ち抜かれて破壊されたビット2機を切り離す。

そして即座にスターライトmkⅢのトリガーを引く。

その標的はもちろん、ラクスタレット。

『っ、まだそんな力が……っ』

意識を失ったものとはばかり考えていたラクスタレットは体勢を立て直して反撃してきたセリアの行動に驚愕していた。

だが、彼女の放ったレーザーはホワイトネス・エンプレスには届かなかった。

ハイパーセンサーで彼女の反撃は検地していたため、再び空間に空いた【転送点穴】ワームホールに飲み込まれて、消えてしまったからだ。

そしてセシリアの背後の空間に穴が空いた。

悪寒として、それを感じ取ったセシリアは、即座にスラスタ―に火を入れて回避に移る。

その際に彼女の瞳は、空間に開いた穴を凝視していた。

(……)

回避行動は無事成功し、レーザーは虚空に放たれ消えていく。

崩れた体勢を即座に立て直し、セシリアは再度得物をラクスタレットに向ける。

『あなた方の計画を止めるために私は止まれませんっ、負けられませんっ!』

『……人間など所詮は闘争と平和を繰り返すことしかできない愚かな存在。ミスオルコット、貴女の経歴はこちらでも調べさせてもらいましたが、貴女ならば私達の言葉も理解できるはずでは?』

『……人は、確かに汚いところも多いっ。それは認めます……ですがっ!』

【ワームホール転送点穴】が数個、周囲に展開されるがセシリアの動きのほうが一瞬は早かった。

穴から迸るビームを機体のスラスター制御で回避してみせる。  
その様子に、ラクスタレットは目を見開いて驚愕の表情を浮かべる。

『ワームホール【転送点穴】を避けたっ!?!』

セシリアが選択した【ワームホール転送点穴】を利用したオールレンジ攻撃の回避手段は単純なものだ。

それは――

【見てから避ける】

――ただそれだけ。

空間に穴が空き、ビームが発射されるまでには僅かにタイムラグが存在している。さきほど、それを観察して見つけていた。

そのタイムラグを利用して、ビームの射線予測を行って回避しているのだ。だがタイムラグといってもコマ以下の数秒。

常人は一瞬以下、ISのハイパーセンサーを用いても捉えるのは至難の、まさに【雲

耀】の一瞬。

セシリアの、特異と言ってもいいほど高度な空間認識能力があつてはじめて可能な見切り。

例え世界中探したとしても彼女以外可能な人間はいないと言つても過言ではないだろう。

『ですが……ですがそれでも、綺麗で優しい心を持った人もまた多くいるっ！少なくとも私の周りには、愛する家族と、大切なことを教えてくれた友人の皆さんがいますっ！』

スターライトmkⅢのトリガーを引き、レーザーを発射。

発射されたレーザーがホワイトネス・エンプレスに向かう。

だが、レーザーの射線上に【ワームホール転送点穴】による穴が開く。

先程までと同じようにその穴にレーザーが飲み込まれる——はずであった。

【湾曲】してその穴を避けたレーザーがホワイトネス・エンプレスに直撃したのだ。

優雅なドレスのような装甲は、無残に弾け飛んでいた。

『なあっ?!』

ラクスタレットにはもはや冷笑を浮かべる余裕などは存在していない。  
先程のように全方位に「転送点穴」を展開しようとしたが、連続でレーザーを放つセシリアによって行動が遮られてしまう。

『すぐに分かり合えないからこそ、人はわかりあうための努力を惜しまないっ!! だからぶつかり合って理解しあったり、話し合うことで分かり合うのですっ!!』

放たれるレーザーを受け止めようとするラクスタレットであったが、やはり全てのレーザーが「転送点穴」を避けて彼女を襲う。

ゲシユマイディツヒ・パンツァーを起動するが、歪曲されたレーザーが絶えず彼女を襲うためエネルギーが急激に下がっていく。

『この場面でさらに成長するのですか、貴女はっ!なぜその力を調停のために使おうと思わないのですっ!人は管理される事で永遠の存在になりえるというのにつ!』

彼女の言葉に、セシリアはあることを理解した。

『やはり……結局あなた方は、全てを調和するといつて、全く相手を理解するつもりがないのですつ、はるか上段から見下ろすことしかないっ！私はあなた方を止めてみせませすつ！』

破損したスラスターを吹かせて、そのままマニューバに移行する。

生き残ったスラスターを使った個別連続瞬間加速リボルバ・イクニッション・ブーストによる凄まじい加速の中、セシリアの脳裏にある記憶がよみがえっていた。

それはクルーゼ事件を終え、学園が再開された直後の事。

とある理由から、セシリアは真とラキーナをアリーナに呼んでいたのだった。

「高機動射撃戦での……」

「射撃マニューバ……ですか？」

真とラキーナの疑問の言葉に、セシリアがうなずいて答えた。

「お恥ずかしい話ですがブルー・ティアーズは決定力に欠いている……そう感じるの



す」

「でもブルー・ティアーズは射撃戦重視の機体だから、中距離に徹すればそれでもいいんじゃないか？」

機体特性の面を考えて、真が言う。

基本的にはセシリアもそれは同じ意見である。

「はい、ブルー・ティアーズの基本戦術は真さんが仰るとおりです……ですが……」

一拍あけて、彼女が続ける。

「この1年様々なISが現れ、私はその戦いの中で同時制御と偏向射撃を身に着けることができました。しかしそれだけでは対応できることも少ないと感ずるので。特に偏向射撃は負荷がかかります」

「……確かに。偏向射撃も強力だけどそれ一辺倒だと対策練られるし、負荷も相当なものだろ」

「はい。過度に使用したりせず、間隔を空けての使用ならば問題はないのですが……や

はり長期戦は難しいです」

「そこで、私と」

「俺か」

「はい。私を知る中で高機動戦闘と射撃戦闘のスキルで2人に並ぶ方は、国家代表や候補生はいないと思っています。今後の切り札の開発に協力してほしいのです」

そう言ったセシリアは頭を下げる。

「わがままなお願いというのは重々承知しています。ですが、どうか力を貸してください……っ！」

その行動に含まれた、彼女の想いと熱意。

それはきつとオルコット家の正式な当主となったことが関係しているのだろう。

真はそう推測した。

そして同時に友人として彼女の想いに答えてあげたいとも思い、頭を掻きながらそれに返す。

「……分かった。でも俺は誰かに何かを教えるってあんまりやったことないし、役に立つかは……確約できないぜ？」

「……真は苦手そうだもんね、誰かに教えるって」

「うるさい、ほっとけ」

ラキーナの眩きを真が拾い、ジト目の抗議を行う。

まさか聞こえるとは思っても無かったのか、視線を逸らして誤魔化すラキーナに抗議の視線を送り続ける真。

友人達のそんな日常の様子を、顔を上げたセシリアは苦笑して眺めていた。

意識が現実に戻す。

（切り札は、残っています……っ！）

友人達が力を貸してくれたお陰で開発できた、切り札。

それがまだ残っている。

『力を貸してくださいっ、ティアーズっ!!』

その言葉と共に、セシリアはティアーズを2機切り離して、加速。

ティアーズはまるで生きているかのようにラクスタレットに向かっっていく。

レーザーを発射するたびに、クイックに軌道を変えて別角度から回り込む様にしてさらに追撃を発射する。

4機中2機を失っているため、万全とは言えず、ゲシュマイディツヒ・パンツァーによつて歪曲も行われている。

だがその分を歪曲されたレーザーを偏向射撃で操ることでカバーする。

『このレーザーの動きっ、まだここまでの力をつ!!』

ゲシュマイディツヒ・パンツァーでレーザーを歪曲させて無効化し、ワームホール【転送点穴】による反撃を行おうとしたラクスタレットであったが、すでに彼女でも読み切れないほど、レーザーは複雑な軌道で攻撃を続けていた。

そしてこのレーザーを操る本体のセシリアも行動していないわけが無かった。

『はあああつ!!』

一気に加速してラクスタレットの至近距離まで詰め寄ると同時に得物を構える。

『むっ、無駄ですっ!レーザーは私には……っ!』

『奥の手は取っておくものですっ!』

セシリアのブルー・ティアーズのビットの総数は6機である。

そのうちの4つが、レーザーを。

そして残りの2つは——ミサイルだ。

ゲシュマイディッヒ・パンツァーはビーム兵器に対する絶対的な防御能力を有する。

だが、それはビームに限定した話であり、実弾兵器に対しての効果は薄い。

その結果、放たれたミサイルはラクスタレットに直撃した。

直撃したミサイルによってゲシュマイディッヒ・パンツァーの発生に不具合が生じ、

今まで歪曲してたフィールドが消失する。

うねりを上げて宇宙を照らす光の束となったレーザーが、ホワイトネス・エンプレス

に降り注ぐ。

『あああつ?!』

その結果は全身の装甲の破壊という最上の結果を齎した。

だがまだ終わらない。

ミサイルを放った衝撃をそのまま加速に利用したセシリアは、ラクスタレットの相対的下方にいた。

すでに自身の得物である、スターライトmkⅢを狙撃体制で構えている。

『その傲慢さを穿つつ!!』

狙撃銃から迸った光は、一直線にホワイトネス・エンプレスに直撃した。

『か……つつ?!』

降り注いだレーザーによってダメージを受けていた上、とどめに最大出力の一撃を喰

らったホワイトネス・エンプレスは絶対防御を発動。

今までのダメージにあわせて、直撃を受けたラクスタレットの意識は途切れていた。

『……勝ち……ましたわっ!!』

高らかに、宣言するようにスターライトmkⅢを掲げてやりきったと満足の表情を浮かべるセシリア。

だが――

『っ!?……あつ、つうっ……!』

頭に奔ったあまりの激痛に涙を浮かべて、スターライトmkⅢから手を放してしま  
う。

オールレンジマニユーバ  
高機動連続射撃

真とラキーナがセシリアに協力して考案された高機動射撃マニユーバ。

主にティアーズとの高機動連携攻撃マニユーバであり本来は偏向射撃を使用しない

のだが、今回はティアーズをすでに2機失っている状態であったため、偏向射撃を用いてその分をカバーしていた。

ゆえに限界ギリギリのセシリアにとっては負荷は絶大なものであった。

敢行前から激痛によって視界が歪んでいたが、すでに焦点が定まらないほどに悪化している。

脂汗が止まらずにガクガクと体が震えている。

呼吸も荒く、動悸が治まらない。

とてもではないがまともな戦闘など行える状態ではない。

幸い周囲の宙域に無人機はいない。

このままでは遅かれ早かれ狙われて彼女の命はない。

だが、そうはならなかった。

何故ならば――

『セシリアちゃんっ！大丈夫っ!?!』

アクア・ヴェールを纏った【霧纏の淑女】を駆る更識楯無が現れたのだ。

セシリアのバイタルに異常を検知したクサナギのジェーンが楯無を超越したのだ。



『……………あつ……………くうつ……………』

セシリアも彼女が現れたことは認識できたが、視点がどうしても合わない。すでに彼女はセシリアに寄り添っているが、その距離でもぼやけている。

(……………一人で、倒したのね……………凄いわね、この子)

彼女の様子と意識を失って漂っているラクスタレットを交互に見た楯無は、この場で何があったのか、そしてその結果がどうなったかを察した。

ぎゅつとセシリアを抱き寄せてスラストを点火。

そのまま漂っているラクスタレットを蛇腹剣「ラストイーネイル」を展開して、絡みつかせる。

これで搭乗者保護を効かせることも可能だ。

『すぐにクサナギに連れて行くわ。だからもう少し頑張つて』

返事をする余裕もないのかこくりと、セシリアが頷いた。セシリアが楯無と共に戦場を離脱していく。

戦闘はI S学園組が優勢だと言ってもいいだろう。

だが、まだ戦いは続いている。

その場所は、メンデル——コロニーの中であつた。

## PHASE 9 運命の翼を持つ少年

コロニーメンデル

その研究区画に多数配置されているシリンドラーに光が映り込む。

映り込んだ光の色は3色。

——宝石のように眩く輝く、鮮烈な紅。

——蒼穹の空のように透き通った、澄んだ蒼。

そしてその2つを取り込まると大きく開かれる、禍々しくそして艶やかな紫。

光の翼を展開したデステイニーと飛燕はそれぞれのビームライフルのトリガーを引く。

V Lユニットによる高機動を維持したまま、正確な射線で放たれたビームの光は、紫の光の翼をもつ機体、シーゲルが駆る「コーデイネーター」へと向かう。

だがそのビームの光はコーデイネーターに届く前にピタリと空中で停止した。

ビームを歪曲させる「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」とは異なり、まるで跳ね返るように角度を変え、放ったデステイニーと飛燕に向かつてきた。

突然の事態であったが、2機の動きは速かった。

デステイニーは実体シールドを用いて反射されたビームを的確に捌いて防御し、飛燕は瞬時加速を用いて反射ビームの回避に成功していた。

(つ、今度は反射能力っ！一体全体、何個能力を持つてるんだよっ！)

思わず心中で真が毒づくのも無理はなかった。

戦闘を開始してから数分が経過しているが、すでに幾つか能力を見せていた。

数瞬間に見せたビームを跳ね返す【反射能力】

背部の紫の翼から溢れる怪しい【燐光】

これはVユニット搭載機であるため、真と簪は【生態支配】や【サイバー・ジェイル電脳楽園】に類する能力があると警戒し、常にVユニットを稼働させているためそこまで大きな問題ではない。

そしてハイパーセンサーに感知するのは無数の小型遠隔自立兵装。

その形状は彼のオリジナルの娘が駆っていた【ホワイトネス・エンプレス】が装備していたものと同様のデザインだ。

ビームの刃を形成して、こちらに高速で飛来する合計20の反応。

(スパイクドラグーンっ！)

V Lユニットを翻して回避行動に移るデステイニーだが、S・E・E・Dが発現している真よりも、簪の飛燕の回避動作が遅れた。

『っ、あぐうっ！』

飛燕の左肩にスパイクドラグーンが直撃した。

ビームによって左肩装甲の一部が抉り取られ喪失、その衝撃で簪が弾き飛ばされた。

ISをISたらしめている機能の1つに、シールドバリアが存在している。

実弾はもちろん、ビームなどの高威力光学武装の場合でも、減退を発生させ威力を弱めることが可能だ。

今この宙域で戦闘しているIS全てが実戦<sup>アンリミット</sup>仕様状態であり、シールドバリアも通常時よりも出力が上昇しているはず。

だがスパイクドラグーンは減退ではなくまるで存在していないかのごとく、すり抜けた様に直接攻撃をしつけてきていた。

『簪っ!!』

『っ、大丈……夫っ!』

弾き飛ばされる衝撃からAMBACで体勢を立て直す。

追撃で迫っていたドラグーンは、デステイニーのビームライフルによる援護と光の翼による加速で回避に成功した。

(これだっ、まるでシールドバリアをすり抜けて攻撃してくるかのような攻撃力っ、これも単一仕様能力なのかよっ!)

体勢を立て直した簪を援護する為に、ビームライフルとクラレントをビームライフルモードに切り替えてシーゲルに放つ。

だが、そのビームをクイックな反応を見せたスパイクドラグーンは回避して見せた。

一旦全てのドラグーンが「コーディネーター」の腰部に存在したドラグーン格納部位に格納され、鋭利な装甲部位へと変わる。

(せっつかくエネルギーが全回復したのに、ドラグーンを一基も落とせなかったか……けどどういふことなんだっ?)

紅藤が発動させた【絢爛舞踏・改】の効力は、メンデル内のデステイニーと飛燕にも届いていた。

そのお陰か、シーゲルとの戦闘を開始して数分がたっているが、まだ9割程度残っている。

そんな中、真の心中に疑問が浮かぶ。

(シーゲル・クラインがドラグーン使えて……それどころか、こんなに強いだなんて……っ！)

真が疑問に思うのも無理はない。

自分達がISに搭乗して機体を自由に操れるのは、ISのイメージインターフェースと併せてMSパイロットであったからだ。

しかし彼の記憶の中ではシーゲル・クラインはそもそもMSパイロットなどの戦士ではなく、あくまで政治家である。

そんな人間が強力な機体を乗りこなし、扱うのに先天的な適正が必要となるドラグーンまで操って見せた。

『S. E. E. D.』が発動している今の自分と、国家代表候補生である簪を相手取って互角以上。

少なく見積もっても国家代表レベルであり、先に倒したラクスアウレフをも上回っているようにも感じている。

(ドラグーンもまるでレイやコートニーさん、効さんと戦ってるみたいだった……一体どうなってるんだっ?)

戦友や歴戦の強者達と同レベルのドラグーン操作能力。

深まる謎に、真の眉間の皺が深く刻まれていく。

相対するシーゲルはというと、納得したように頷いた後口を開いた。

『ふむ、ドラグーンとはこういうものか……存外、「ライリー・ナウ」を支援したのは私にとつて益のあるものだったね』

『真っ、今っ、ライリーってっ!』



『ライリー、いや、クルーゼを支援したのはアンタ達なのかつ!』

シーゲルの口から出た名前に、二人の顔に驚愕が浮かぶ。

『その通り。まあ、彼女、いや、彼には機体面の支援をただけだがね。海洋プラントを使った作戦を考えたのは彼自身だ。その見返りに彼等の機体の稼動データを受け取っていた。この「コーディネーター」にも彼の戦闘データから得られた技術が組み込まれているのだよ』

『っ、単一仕様能力だけでも、沢山あるのに……なんて無茶苦茶な機体っ』

思わず簪も毒づいてしまう。

それに気づいたのか、シーゲルは柔和な笑みを浮かべて続ける。

『私の娘のカーボン・ヒューマンである彼女達も役に立ったよ。カーボン・ヒューマン技術の確立に君達の力の底上げ、十分に役目を果たしてくれたと言っていい』

『力の……底上げ?』

『そう。すでに最も再現度が高かったアウレフを含めた上位ナンバーの娘達は君達の仲

間によって倒されている。残っているのは下位ナンバーの娘達しかいない、そう遠からずラキーナ君とアスランに倒されるだろうね』

シーゲルが全く焦った様子を見せずに告げる。

同時に開く空間投影ディスプレイ。

『そいつの言うとおりだよ、あつ君』

それは戦艦イズモで指揮を取ってくれている、束からのプライベートチャンネルを用いた通信だった。

『カナ君やラキちゃん、いっくん達がラクスのカーボン・ヒューマンと無人機達を撃破してくれている。カナ君やラキちゃんの証言からラクスたちには番号が振られてたみたい。アウレフ、ヴェート、ギメル……へブライ数字の番号だね。使ってる能力もそのナンバーのラクスが使ってたものを解析して機能として搭載してるんだと思う、カナ君達が撃破したのと同じだから』

束のその言葉と同時に、コーデイナーターが戻っていたドラグーンは腰部装甲部分から切り離され、次々と展開されていく。

総数は二十基。

【コーデイナーター】に装備されている全てのドラグーンが切り離されていた。

『さて闘争と言う糧はこれで十分。後は十分に育った君達と言う【種】を収穫するだけだ』

シーゲルの言葉に、真は肌が粟立っていた。

戦士として戦い抜いた彼だからこそ分かる寒気。

それは絶対的な力が襲い掛かってくる瞬間の寒気。

フリーダムとの死闘でも何度か感じた、寒気。

突如として、メンデルの研究区画が振動を開始した。

振動と共に、機体のハイパーセンサーが周囲を取り巻く高エネルギー反応を次々と検知し始める。

高エネルギー反応を検知した物体、それはシーゲルが展開したドラグーン。

その全てが、既存のISに搭載可能な光学兵器を全力駆動させても到底及ばないエネ

ルギー量を示していた。

『っ、あつくん、簪ちゃんっ、すぐに回避してっ、とんでもないのがくるっ!!』

プライベートチャンネルを通じて、二人の周囲に高エネルギー反応を突如として検知した束から声上がる。

——瞬間、光が研究区画の全てを多いつくし、爆発音が木霊した。

周囲にあったシリンダーが光の熱で融解し、研究区画の壁を光の刃が切り裂いていく。

コロニー内にも被害がでており、数少ない居住区が溢れた光の刃によって切り裂かれていた。

パラパラと壁の破片と残骸、粉塵が宙を舞う。

先の攻撃に使用したコロイド粒子によってハイパーセンサーも一部分が麻痺している。

『……ふむ』

数分たつて宙を舞っていた粉塵がようやく落ち着き、周囲のコロイド粒子の減退と共に視界が回復する。

回復した視界に映るのは各部位装甲が破損して地に伏せた飛燕と、ダメージを負いながらも健在のデステイニーの姿。

その光景を見て笑みを浮かべたシーゲルは口を開いた。

『やはり……君は切り抜けて見せるか、飛鳥君。先の攻撃はこのメンデルから直接エネルギーを吸い上げて使用する、「コーデイネーター」最大の攻撃だったのだがね』

「先程真と簪に与えられた攻撃の正体は展開した二十基のドラグーンを用いた超高出力ビーム砲撃。

単純だが、その範囲と威力が桁違いだった。

一本一本のビームがISの機体を飲み込んで余りある太さであり、かつてのフリーダムやストライクフリーダムフルバースト攻撃のような一発ずつのようなものではなく、連続して継続的に放たれたものだ。

例えるのならば、機体を飲み込んで余りある太さの超出力ビームサーベルが面で襲ってくるということだ。

これを切り抜けられたのは真の反応速度はもろんのこと、デステイニーの単一仕様能力がビームに対するアドバンテージを持っていたことが理由だ。

回避が不可能だと判断した彼は、自身に迫るビームを咄嗟にヴァジュラビームサーベルに取り込んで攻撃と相殺させ防御した。

しかしいくらデステイニーとはいえ無傷ではなかった。

その理由は出力の差が圧倒的だからだ。

コロニーを稼働させる莫大なエネルギー全てをたかがIS一機が受け止められるはずもなく。

防御に使用したビームサーベルはほぼ全ての部分が消滅しており、柄の一部分が残っている有様で、腕部マニピュレータの装甲も融解していた。

腕部のTP装甲が発動していたためか機能については問題もなく、エネルギーはまだ7割程度残っているが。

当然真だけではなく、簪も回避行動に移っていた。

だがいくら飛燕でも逃げ場がなければ、どうしようもなかった。

そのためデステイニーと同じくバルムンクを最大稼働させて「盾」として利用した。

しかし飛燕にはデステイニーの「運命ノ翼」のような「単一仕様能力」も存在しておらず、真も援護が間に合わなかった。

バルムンクは超高出力ビームサーベルによって融解し、「シールドバリア透過能力」によってほぼダイレクトにその熱量は飛燕の装甲へと伝わっていた。

胸部や腕部、脚部装甲のほとんどが融解し、ISスーツも一部が焼かれて軽度の火傷も見えている。

『はあっ、はあっ……くっ……い！』

先の攻撃を切り抜けた興奮からか耳の奥が熱く、呼吸が荒い。

真はすぐにも倒れた彼女の元に駆けつけたかった。

しかし、それを許してはくれないだろう。

発射して解け落ちたドラグーンと入れ替わるように、「コーディネーター」の拡張領域から追加で射出展開されたドラグーンが、依然としてこちらを狙っているのだから。

『あつ、あんなのを連射できるなんてつ、あつくん、逃げてえっ!!』

チャンネルから聞こえる束の悲鳴と共に、ドラグーンから再び光が溢れる。

次の砲撃までの残りカウントは僅かだ。

先程の砲撃で、研究区画の壁が破壊されており人工の空から差し込む光が、施設に射している。

本来ならばV.Lユニットと個別連続瞬時加速を駆使して、破壊された壁から外に脱出して回避に移るのが最善手だった。

だが真は、回避よりも他の事を優先した。

視界の先で、倒れる大切な人を放っておけるわけがない。

『これでチェックだ』

紅い光の翼が圧倒的な光の前に立ちふさがる。

最も大切な人の壁となる為に。

——シーゲルの声など、今の真には全く聞こえていなかった。



同じ頃――

青く輝く水の星、地球の衛星軌道上に存在する日出工業が建造した日本の軍用宇宙ステーション【アメノミハシラ】

現在そこから2機のISが出撃しており、自機のハイパーセンサーをフル稼働させて周囲の警戒を行っていた。

『異常なし、つと』

黒の装甲と背部の大型ビームブレードが特徴であるIS【ガイアガンダム】を駆る瀬田利香が、機体から齎された情報を処理して、つぶやいた。

背後にはトリコロールカラーのIS、背部にはドラグーンシルエツトを装備した【インパルスガンダムMK-II】、搭乗者である布仏本音は静かにうなずいた。

その様子に、利香はクスリと笑みを浮かべた。

『肩の力入れすぎだよ、本音ちゃん』

『でも、いつ何が起こるかわからないので……』

普段の緩い雰囲気を感じさせない、簪曰く、真面目モードの真剣なまなざしで利香の言葉に返す本音。

『アミノミハシラのレーダーはもちろん、地上で支援してくれている人たちもいるわけだし、何かあればすぐにこつちにも通信が飛んでくるから……そんなに肩の力を入れていると、こつちやうよ。本音ちゃん大きいし』

現在利香や本音達、防衛組はアミノミハシラや地上の支援国家と協力して警戒に当たっている。

その理由はもちろん先のニュートロン・ジャマー投下を筆頭とした、シーゲル一派の行動だ。

アミノミハシラのレーダーを最大限稼働させ、日本を含めた地上の支援国家の警戒網を利用して地球全域に監視体制を敷いている。

この警戒網に何か引つかかれば、アミノミハシラからミーンティアを射出、それを受け取った出撃しているＩＳで迎撃に向かうし、イギリスではエーカー少佐を筆頭に戦闘機部隊がスクランブル準備を整えて待機してくれている。

なおアメノミハシラで待機している、チエルシーやアイリス、ジブリルを含めた防衛組とは3時間シフトで交代していた。

『……そうですね』

利香のセクハラめいた冗談は聞かなかったことにして、ふうと深呼吸した本音はそのまま遠く星々が輝く宇宙空間を見つめる。

その先は、はるか遠いL4宙域――

『真君と簪ちゃんたちが心配?』

本音の視線の意図を見抜いた利香が尋ねる。

少し照れたような表情でコクリと、本音はうなずく。

『大丈夫、みんな無事に戻ってくるよ』

利香はそう言つて優しく微笑む。

その笑みにあふれているのは信頼の感情だ。

『私の知ってるスーパーエース君が一番強い時ってわかる？』

スーパーエース君。

それが誰を指しているのか本音は一瞬きよとんとしたがすぐに理解した。自身が届かぬ想いを向けた男性、自身の主を支えてくれた人。

『彼はね、誰かを守るときが一番強いんだよ』

利香はそう言つて本音と同じように、はるか彼方の宇宙に視線を向ける。

(……真君、簪様、無事に……戻ってきてください)

利香の言葉を聞いた本音はうなずきながら、再度視線を宇宙に向けた。

『うおおおおおっ!!!』

咆哮と共に、「クラレント・ビームサーベル」で超高出力ビームサーベル群を受け止めているデステイニー。

【運命ノ翼】を最大稼働させており、溢れる光の翼は、障壁のように背後で気絶している簪を守っていた。

だが、先程攻撃を受け止めたビームサーベルと同じ現象が左掌のクラレントにも起こっていた。

圧倒的な熱量を受け止めているためか、ビームコーティングされているマニピュレータが融解を始めており、通常装甲もすでに焼き切れ内部フレームとTP装甲が剥き出しになっている。

TP装甲が稼働しているお陰か、機能停止には至ってはいないが時間の問題である。

(ぐっ、ううっ……っ！)

『真っ、まずいよっ、このままだとっ!!』

真のみに聞こえるデステイニーが悲鳴に近い声色で警告を告げる。

事実、機体のエネルギーは急激に減少している。

【絢爛舞踏・改】で回復したお陰で先程まで7割程残っていたエネルギーはすでに5割を下回り、減少を続けている。

『分かってるっ、分かってるさあっ!!』

左腕部の「クラレント」で辛うじて防御を続けながら、空いている右手でコンソールを高速で叩き出す。

『単一仕様能力でクラレントとVレユニットを直結っ、余剰エネルギー放出経路構築っ、TP装甲にエネルギーを伝達っ、完了っ!!』

チラリと背後の簷に視線を移す。

先程から気絶している彼女だが、それ以上の傷はない。

その事実が真に不思議と力を与えていた。

コンソールへの入力完了すると、押されていただけの状況が変化し始めた。

光の翼が少しずつ大きく、障壁としてより巨大に展開されていく。

真が行った操作は単純だ。

デステイニーのクラレントと、V Lユニットを「経路」にしてエネルギーを受け流しているのだ。

これはデステイニーの「単一仕様能力」がエネルギー操作／吸収能力であること、クラレントという内蔵武装があつてはじめて可能なことであつた。

『がああああああつ!!』

絶叫にも近い咆哮を上げて防衛し続ける。

彼の体感で数時間にも感じた数秒が過ぎ去ると、研究区画を包んでいた光が収まっていく。

ハイパーセンサーを常に脅かしていた莫大な熱量もまるで嘘のように消え去つていった。

『受け流しきつたよつ、真つ!!』

『……………つ!!』

苦悶の表情を浮かべる真であったが、彼女の言う通り、超高出力ビームサーベル群を受け流しきって見せたのだ。

だが代償は大きかった。

無理やり機体を経路として使用したのだ、TP装甲を採用しているデステイニーといえ不具合が起こらないはずがない。

光の翼を障壁として発生させていたVLユニットは左翼の5割が消滅。かろうじて残っているエネルギー噴出孔が融解し、右翼側も過剰な負荷から火花が迸っている。

左腕部マニピュレータは内部フレーム含めてほぼ全てが消滅しており、生身の腕が露出して火傷が広範囲に広がっていた。

『……素晴らしいっ』

シーゲルは心から感心したように、彼の姿を見つめている。

呼吸は荒く、身体には決して軽くはない傷を負いながらも戦意は欠片も衰えを見せず燃え上がっている。

二射目に使ったドラグーンが機体本体に戻ることなく解け落ちていくことなど、歯牙



にもかけていない。

『人のつ、S. E. E. D. の可能性つ、やはり間違っではないなかったつ、全ての人がその力を得ることができれば、相互理解も可能になるつ、人の世の平安は約束されるっ！』

狂喜の声をあげたシーゲルを睨み付けながら、少しでも体力を戻す為に大きく深呼吸を繰り返す。

それと共に勝つための行動を移す。

『束つ、さんつ、はあつ、聞こえてつ、ますかっ？』

『……うんつ、聞こえてる。バイタルも機体の状況もちゃんと見れてるよ』

先の攻撃によってチャンネルも乱れていたのか、ようやく通信がクリアに聞こえるようになった。

『……デステイニーのつ、機体状況はっ、どうですかっ？』

デステイニーの機体状況を確認するが、現状はかなりダメージが大きいと言わざるを得ない。

残存エネルギー量は3割程度であり、武装も破損したり喪失している状況だ。だが彼の声色は諦めた者のそれではなかった。

『あつくんっ、何をやる気なの？』

『……奴に勝つつ、可能性がある選択をつ、するだけです。だからっ、能力についてっ、教えてくださいっ』

深呼吸を繰り返して呼吸を整えながらも、有無を言わさない声色に少しでも言葉に詰まる束であったが彼の言葉を信じて口を開く。

『……分かった。今からデータを送るから、すぐに確認して』

束の返事と共にデステイニーの元へこれまで戦闘を行ったヴェートを筆頭にした、「カーボン・ヒューマン：ラクス」の機体／能力データが送られてくる。

高速で視線を動かして内容を把握する。

能力の詳細、機体特性、どのように攻略したのかを高速で頭に叩き込む。

深呼吸を繰り返して呼吸が落ち着いてきた真は、最後に大きく息を吐いた後にある決断を言葉にした。

『……デステイニー、ISの生体保護を最低レベルまで落としてくれ』

『っ、真っ、それって……っ!?!』

真がそう静かに、デステイニーに告げると彼女も何を言いたいのかを理解して戸惑いの声を上げる。

『……カットした生体保護分のエネルギーを、右のクラレントとVLCユニットに回してくれ。左翼の微調整、できるだろ?』

『だっ、ダメだよっ、そんな状態で被弾したら、満足にシールドバリアさえ張れないんだよっ!?!』

『っ、あつくんっ、そんなことしたら身体が持つわけがないよっ!?!』

デステイニーの声は聞こえていない束だったが、真の提案を聞いて耳を疑った。

真がやろうとしていること、ISの開発者である束にはよく分かったからだ。

『分かってるっ！だけどこのままだと、こつちが負ける……勝つためにはこれしかないんだっ!!』

地上に落下したした飛燕、簪に目を向ける。

搭乗者である彼女は気を失っているが、ISは展開されたままだ。

だが、このままの状況ならばこちらの敗北は必至。

その結果は自分も含めて彼女も、シーゲルの狂気の計画に組み込まれる。

それだけは容認できない。

彼もこの提案が無茶であることは重々承知だ。

負けるわけにはいかない、その為には限界を超える必要がある。

——何かを犠牲にしても。

『こんなこと頼めるのはデステイニーしかないんだ……頼む……っ！』

真の言葉に、デステイニーは息を呑んでから苦渋の表情を浮かべた。

『卑怯だよ、私が……真に頼まれたら断れないって知ってくるせに』  
『…………』

無言で促してくる彼に、デステイニーは決断を下した。

『…………生体保護に使用しているエネルギーを最低レベルまで低下。右腕部クラレントへのエネルギー供給、破損した左翼V Lユニットの最適化を開始…………っ！』

デステイニーの声とともに、呼吸で吸い込む空気が薄くなったのを感じる。

展開されているシールドバリアも薄くなったのか、肌を刺す刺激のようなものも感じ始めた。

簪を護るために半壊した左翼から再び、少しずつ紅い光が溢れ出した。

抜け落ちた羽のように、少しずつ、少しずつ溢れるその光は、まるで宝石のように煌く、美しい紅色。

右腕部クラレントも調整が完了したのか、ビームサーベルモードで発振されている。

『シールドバリアの出力低下つ、機体状態の変化つ、デステイニーが調整したの……つ!?』

『東さん、簪のバイタルは、どうですか?』

薄くなった空気で呼吸が辛い、チャンネルが繋がったままの束に尋ねる。

『……大丈夫、気絶してるだけ。機体の展開が解除されないのは……』

『【飛燕】が守ってくれているんだ……ありがとうございます、安心しました』

そう言つて真は笑顔を浮かべた。

本当に心から安堵した、年相応にしか見えない少年の顔。

だが次の瞬間には、鋭いまるで刃の様に目を尖らせた戦士の表情に変わっている。

そんな表情を見せた真を、束は止められなかった。

事実、今シーゲルを止められるのは、相対している真しかない。

『……勝つてよ、絶対に』

『はいっ』

デステイニーはその最も特徴的な光の翼を大きく翻した。

その直後、「コーディネーター」の左肩装甲が吹き飛ばされた。

『っ!?!』

狂喜の表情から一変したシーゲルは衝撃から体勢を崩す。

直後、背後からの衝撃に弾き飛ばされる。

背中を袈裟切り気味に切り裂かれ、非固定浮遊部位であるVLユニットから溢れていた光の翼は、切れた蛍光灯の様に発振を停止して残骸が落下していった。

(何が起こった?)

突如として自分を襲った現象に疑問が沸くのは当然だろう。

冷静な思考能力も保ったままだったのは、C・Eで激動のプラント黎明期をその才覚を持って切り抜けた賜物だろうか。

彼の思考に追従するように、機体のハイパーセンサーがある存在を検知した。

それは彼の相対的上方に存在していた、それは「デステイニーガンダム・ヴェステイ  
ジ」と【飛鳥真】

搭乗者である真は、修羅の様な表情でこちらを睨み付けていた。

先の攻撃でも損傷が少なかった右翼からは通常通りの光の翼が広がっているが、損傷  
が大きい左翼からはおぼろげな【陽炎】の様に淡い光が、胸部を中心に機体全体に揺ら  
めいていた。

シーゲルがデステイニーと真の存在を認知できたのはほんの一瞬。

次の瞬間には、彼の姿はシーゲルの視界から消えていたからだ。

そして再び身体を奔る衝撃。

今度は残ったVレユニットである右翼部が断ち切られていた。

『ぐうっっ！』

A M B A Cで姿勢制御を行い周囲をハイパーセンサーで探る。

デステイニーは、シーゲルの左後下方の位置にいた。

だが、その反応が一瞬で喪失する。



いや、正確には喪失はしておらず拾えてもいないわけではなく、デステイニーの反応を途切れ途切れに検知はできている。

しかし検知している座標データがありえないものであった。

左後下方に存在していたデステイニーの反応は、1秒にも満たない時間でシーゲルの正面上方に移動しているのだ。

さらにそのコンマ数秒後には、シーゲルは再び衝撃によつて弾き飛ばされ彼の背後に反応が移動していた。

(速いっ……こちらのハイパーセンサーが追いきれていないっ!?)

ハイパーセンサーの捕捉が追いつかない理由。

(いや、違うっ、速さも理由のひとつだがコロイド粒子反応っ、ということとはミラーージュコロイドを複合的に使用してかっ!?)

半壊しているとは思えないほどの機動力に加えて、今のデステイニーが行っている無茶苦茶な戦闘軌道。

これとデステイニーのVユニットが持つミラージュコロイドが複合され、ハイパーセンサーの錯乱効果を生み出しているのだ。

(だがっ!!)

マニピュレータを広げ、掌に装備されているビーム発射口から薙ぎ払う様にビームを放つ。

『いくら機動力に振り切っていようがっ!!』

ハイパーセンサーは碌に機能していない。

だが大まかな位置を探ることはできる。

ゆえに【面】の攻撃を放つことで、デステイニーを捉えるのがシーゲルの狙いであった。

その狙いは的中し、残像を残しながら移動していたデステイニーと思われる【影】をビームに捉えることに成功した。

ビームの照射が終わり、光が消える。

いや、消えてはいなかった。

(おそらくあの機動力は……機体の性能を調整して実現させている、言わば【諸刃の剣】。ISのコアと意思疎通ができる彼だからできるのだろうか、その程度で……っ!?)

シーゲルの表情から笑みが消えた。

彼が放った翡翠色の光の中から、まるで何事もなかったかのように、デステイニーが現れたのだ。

ゆらゆらと揺れる紅の光は【陽炎】、いや【炎】のようにも見えた。

『……もう、アンタに言うことは何も無い。アンタ達が押し付けようとしている運命なんてっ、これでっ、終わらせるっ!!』

真の姿が再び、シーゲルの視界から消えた。

(っ、そうかつ、あの陽炎の、炎のように見えるエネルギーはVLUユニットから溢れている【コロイド粒子】かつ!)

シーゲルの予想は的中していた。

今のデステイニーが纏っている炎のようにも見えるエネルギーは、破損した左翼VLユニットから零れ落ちているエネルギーである。

それを人格コアであるデステイニーが機体に纏わせているのだ。

この「炎のドレス」にも見えるエネルギーによって先のビームを拡散、無効化させたのだ。

簡易的な「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」に近く、先程のビームを無傷で切り抜けることができた。

だが、あくまでそれはシーゲルからの攻撃を無傷で切り抜けただけ。

今のデステイニーはシールドバリアを自身の武装のエネルギーで削り続けているのに等しい。

つまり凄まじい速度でシールドエネルギーが減少している状況だ。

（東さんから教えてもらった能力は全部、「搭乗者が己の意志で発動させる必要があるタイプ」、その予測は当たってた。こちらを捉え切れてないから使ってこないんだっ！）

高速機動を続けている真であったが、機体のエネルギー以上に消耗しているものがあった。

それは彼の体力だ。

(っ、まずいつ、これ以上は身体がっ、持たない……っ!!)

ISのハイパーセンサーを振り切る機動力を実現させる為に、現在のデステイニーは生体保護を最低レベルに落としている。

その状態で高速機動を連続すれば、身体に悪影響が起ころのは当然であった。

しかもデステイニーのそれは通常のISの高速機動とは次元が違う、【超高速戦闘】だ。

彼の身体にかかる負担も桁違いに高い。

通常の生体保護レベルならば多少の負荷で済んでいたが、今は違った。

いくらデステイニーにあわせるために耐G訓練を積んでいても、耐え切れない限界値と言うものは存在する。

汗は滝のように流れており、内臓がまるで潰されたまま動き回っているかのように感じる異物感とこみ上げる嘔吐感。

全身の筋肉と骨は軋みを上げており、戦闘機動に入るたびに何か切れたような、いや何かが切れる痛みが走る。

(まだだつ、俺はつ、こんなことでえつ！)

すでに焦点が合わずに視界はぶれているが、それを補っているのはデステイニーの声と培った戦士としての感覚。

『真つ、下方向、距離は20mっ！』

(分かってるっ!!)

口に出して言葉で返す余裕など、今の真にはない。  
だから行動で、結果を齎すだけ。

『ちいつ!!』

拡張領域からドラグーンを二十基展開してデステイニーに向けるシーゲル。

全てがビームスパイクを発振させた「スパイクドラグーン」であった。

コロニーメンデルからエネルギーを吸い上げる先程のビームサーベル攻撃は、真にエネルギー受信装置を兼ねていたVユニットを潰されているため使用ができないが、迎撃に用いることは可能だ。

迫るドラグーン二十基、その全てが生きているかのように真を狙う。

『があああつ!!』

雄たけびを上げつつ、真は機体の速度をさらに上昇させる。

スパイクドラグーンなど、すでにデステイニーの残像すら捕らえることができている。  
い。

そして右のクラレント・ビームサーベルをシーゲルの正面で振りかぶる。

『それを待っていたっ!!』

奇しくも同じ右のマニピュレータから発振されるビーム手刀「カラミティ・エンドM

K―II』

オリジナルのラクスやA Iラクスが使用していた武装と同系統の後継武装が出力を最大にして展開されていた。

シーゲルが狙っていたのは、単純なカウンター。

スパイクドラグーンはあくまで陽動。

真が潜り抜けること程度今の彼ならば可能だと、シーゲルは信じていた。

そして確実に仕留めるために、自分の目の前に現れるだろうと言うことも。

互いの右腕に内蔵された武装がぶつかり合う。

だがぶつかり合う刹那、「クラレント・ビームサーベル」が内部から弾けとんだ。

通常のV Lユニット使用時よりもさらに高い負荷に晒され続けた事と、「炎」にも見えるエネルギーがクラレントへの影響が予想以上に存在していた。

その影響で内部の回路がはじけとび、暴発が生じてしまったのだ。

『…!』



当然これは真やデステイニーにとっても、予想外の出来事であった。

『どうやらっ、【運命】の女神は私を選んだようだなっ!!』

突如起こった事態に困惑の表情を浮かべる真と、勝利を確信したシーゲル。

ビーム手刀が振り下ろされる瞬間、真の耳に届いた【声】があった。

デステイニーガンダム・ヴェステイージの右腕部クラレントが砕け散る数秒前――

『……………っ!?!』

撃墜され気絶していた簪の意識が戻った。

頭を振って起き上がり、状況を思い出す。

(真……………っ!?!)

上方で戦闘を続けている大切な男性の姿。

国家代表候補生の彼女は分かってしまった。

今の真が相当の負担を自らの身体にかけて戦闘を行っていることに。

シーゲルの機体の拡張領域から射出されたスパイクドラグーンを、デステイニーはその速度で振り切って接近。

右のクラレントが振り上げられるが、カウンターを狙っていたのかシーゲルも右腕部の武装を展開していた。

ぶつかり合う瞬間、砕けるクラレントと真の顔に浮かぶ困惑と絶望の表情。

——それを見た瞬間、彼女の身体は勝手に動いていた。

『しーんっ!!』

彼にとって最も大切な、守りたい人の声。

同時にデステイニーへと飛来する大型の物体。

『うおおあああつ!!!』

クラレントが碎けて、生身の彼の腕が露出しているマニピュレータで【それ】を掴み取り、迫るビーム手刀を蹴り上げる。

特に格闘技に優れているわけでもない為、下方向からの衝撃に振られた手刀は簡単に弾き飛ばされて軌道を変えられてしまった。

『何っ!?!』

変わった軌道で振り切られた体勢のまま、シーゲルは困惑の声を上げつつも反撃に移ろうとしていたが、遅かった。

目の前のデステイニーがその両手に【バルムンク】を構えていたからだ。

『これでえええつ、最後だあああつ!!!』

咆哮と共にデステイニーの持つ刃が迫り――

――【コーデイネーター】の胸部を真正面から切り裂いていた。

## Epilogue 断ち切られた因縁

竜殺しの魔剣「バルムンク」が確かに、「コーディネーター」を、シーゲルを切り裂いた。

驚愕の表情を浮かべたシーゲルごと、力を失った「コーディネーター」は落下していく。

撃墜されたシーゲルは、眼前に浮かぶ運命の名を冠するISを見上げていた。

真一文字に切り裂かれた胸部からはドクドクと赤い液体が流れ出ていく。

最後の激突の際、コーディネーターのシールドエネルギーはほぼ枯渇しかけていた。

その為絶対防御に回す分のエネルギーも足りずに、デステイニー渾身の一撃はほぼ生身を攻撃したのに等しかった。

エネルギー管理の杜撰さは、シーゲルが戦士ではなかったことに起因しており、現在彼が負った負傷は素人が見ても明らかな致命傷だった。

だがシーゲルの視線は、その機体の搭乗者である真から離れていなかった。落下したシーゲルを見下ろすように、デステイニーは降下してくる。

「……素晴らしいっ、君はっ、人のっ、可能性をっ、体現していたっ……」

ごふつと吐血するシーゲル。

彼を襲っている痛みは想像を絶するものだろう、だが彼はそれでも笑っていた。

『……なんでだよっ、ラクスもアンタも、すごい力を持つてたっ、その力をもつと他の人に向けることだっ、出来たんじやないのかよっ、そうすれば世界だっ……っ！』  
「それでは駄目だと判断したからっ、私達は調停を目指した……だが、それを君は、君たちは否定しただろう？」

『……当然だっ。俺は人でいたい、人間でたくさんだっ！』

真からしてみれば、「S. E. E. D.」なんてあっても己はただ少しだけ戦闘が出来るだけの人間だ。

多様性を否定し、全てを1つに回帰させるなど人間は人間として生きていけるわけがない。

加えて明確に否定するのは己の中の信念に従っているからだ。

【花達を吹き飛ばさせない為に戦う】

それが真が戦う理由。

自分の中にある因子を使って調停計画。

その過程で何人の命が失われるのかなど考えたくもない。

「ならば……君たちは先に進む権利と義務がある……。人の可能性を体現した……。君達には未来を、作る義務がね……」

微笑みながら告げた後、彼の身体から力が抜けていく。

デステイニーのハイパーセンサーでも、彼の生体反応が弱まっていくのを捉えていた。

数十秒後、彼の瞳から光が消え、呼吸が止まった。

カラントと軽い音が響き、物言わなくなった彼の身体から何かが離れて転がっていた。

それは小さなペンダント。

彼が使用していた「コーデイネーター」の待機形態の形状を、ギガフロートでの記憶

を思い出す。

(……I Sか)

シーゲルの亡骸の側に降り立ち、ペンダントを拾い上げる。

ここはL4宙域であり地球の国家でもそう易々とは来られないが、念のためだ。これを自分達以外の誰かに渡すわけにはいかないと判断した。

そして開いたままのシーゲルの瞳をそつと閉じさせた。

『……』

数十秒してシーゲルから離れるように機体を上昇させる。

その瞬間、真は自分の身体から急激に力が抜け落ちていくのを感じた。

(っ、まずっ……っ!?)

すでに限界など超えている。



今まで身体を動かさせたのが奇跡ともいえるレベルの負荷が真の身体にはかかっていないのだから。

だが、真はそのまま空中に投げだされはしなかった。

蒼い光の翼をもつ、機体がデステイニーを抱えていたからだ。

『大丈夫だよ、真』

それは飛燕、搭乗しているのは当然最も大切な女性である簪だ。

自身もそれなりに火傷を負っているはずだが、ぎゅつと離さずに真を支えていた。

『……簪』

『終わったんだよね？』

倒れたシーゲルを確認した彼女が尋ねてくる。

『ああ。終わったんだ……やつ……と……』

彼女に支えられている安心からか、真の意識が一気に遠くなくなっていく。視界が暗くなり、すでにS・E・E・Dの感覚など消えていた。

『…………ごめ…………ちよつと…………だけ』

『んっ、大丈夫っ、クサナギまで運んであげるから』

『…………ありが…………とう』

ダステイニーの展開が解除され、待機形態であるドツグタグに戻る。

真はそのまま意識を手放して、簪に身体を預ける。

自身の胸元で寝息を立てている真を、簪は優しい表情で見つめていた。

彼の表情は先程までの戦士のものではなく、年相応の少年が見せる安らいだものであった。

『…………お疲れ様、私のヒーロー』

マニピュレーターを解除して、そつと彼の頭を撫でた彼女はそう告げた。

クサナギ パイロットルーム

「ぶはあつ、生き返るわねえっ!!」

「うん。身体に染み渡る……ふう」

「戦闘の緊張から自分で思っているよりも水分不足に陥っているはずだ、一夏、飲むとい  
い」

「ああ、サンキュ、ラウラ」

クサナギのパイロットルームでは、一時帰投した一夏達が適宜休息を取っていた。

鈴は身体に染み渡る水分に感激の涙を浮かべて身体を震わせ、シャルロットは鈴程ではないが水分補給して汗をぬぐい体力回復に努め、ラウラは一足先に水分補給を終えていたため一夏にドリンクを手渡す。

ラウラから受け取ったドリンクを啜り、喉から身体に染み込む水分が火照った身体を冷ましていく。

そこでようやく身体から流れていた汗に気づく。

その様子に気づいた箒が手に持っていたタオルを手渡す。

「一夏、汗が凄いから拭いたらどうだ？」

「ああ、ありがとうな、箒……ふう」

箒に渡されたタオルで汗をぬぐう。

水分補給と汗を拭いたことで思考がまとまっていく。

そんな一夏は箒を見てある事に気づいた。

「箒、そういえば……赤月は？」

そう、赤月についてだ。

彼女は【紅藤】のコア人格であり、先の戦闘では意識を数度入れ替えていたはずだ。帰還してから彼女はその様子を見せていなかった。

何か影響があるのか、と一夏は箒に尋ねるがその返答は意外なものであった。

「ああ、赤月なんだが……ラクスサメル、だったか。帰還して彼女を拘束した直後なんだがな……」

「うん」

「疲れたからおやすみ、といって引っ込んでしまったんだ」

「……ええ？」

「私も困惑しているんだ。何度か呼びかけているんだが、返事もなくて……」

箒も困惑した様子で【紅藤】の待機形態である【金と銀の鈴二つがついた赤い紐】を見つめる。

赤月の声は、箒にしか聞こえていないためか一夏もただただ困惑するしかない。

（赤月はもう一人の箒とかつて束さんや真がいつてたけど……なんていうか、ホントに【人間】みたいだよな）

そんなことを思いながらも汗をぬぐい終わった一夏は、パイロットルームに備え付けられたモニタに映る映像に目を向けた。

それはパイロットルームから直結している格納庫の映像。

そのハッチが開かれて、1機のISが飛び込んできていた。

蒼い光の翼を持つIS【飛燕】、その搭乗者は更識簪だ。

彼女の腕の中に見知った親友の姿があるのに気づいた。

「どうやらISを展開しておらず、飛燕の保護機能によって守られているようであった。」

「真っ!?!」

その映像を見た一夏が走り出す。

「いつ、一夏っ!?!どうした!?!」

「真が戻ってきたんだっ! 簪さん、飛燕が戻ってきてる!」

一夏が走り出してパイロットルームから格納庫への通路に入ると、映像を確認したヒロインズも走り出した。

クサナギの格納庫に帰還した【飛燕】は、光の翼を格納した後、マニピュレータに抱く真に衝撃を伝えないようにゆっくりと着地した。

そしてメンデルから回収してきた【ラクスアウレフ】もトリモチ塗れのまま格納庫の

床に寝かせる。

すでにハッチは閉じており、エアも充填されている格納庫を見渡すが、誰もいない。まずは真を治療させてあげたいと考えている簪の元に、オープンチャンネルで通信が届く。

その通信先は赤髪に白衣を着た美女、クサナギの艦長を務めているジエーンであった。

『まずはお疲れ、簪ちゃん。真君は？』

『今は眠っています。まずは真を休ませてあげたいんですけど……っ！』

『分かっているよ。おっと、戦況を伝えておくね』

ジエーンから簡単に戦況の説明が入った。

現在戦っているのはラキーナ、アスラン、楯無、千冬の四機だけであるが、何でも敵側の戦意が極端に落ちているらしい。

無人機は機能を停止し始めるものも見受けられ、それを統括しているカーボンヒューマン：ラクスの戦意も下がってきているとラキーナとアスランから報告されている。

『東ちゃんからさつき連絡があつたけど、勝ててよかつた……多分、向こう側にもシーゲルが倒されたことが伝わり始めているんだと思う、戦意が下がってるのはその影響かな』

戦況も大事だが、そのほとんどは今の彼女の頭の中には入ってきていない。

その理由は当然一つしかない。

『……分かりました、あの……っ！』

『あ、ごめんっ、真君だよねっ!? 医務室に運んで寝かせてあげてっ。東ちゃんほどじゃないけど、私も医学の心得はあるから安心して』

ジエーンが一息入れて続ける。

『イズモで今カナード君の腕の手術を東ちゃんがやつてるみたいだから、それまでは応急処置って感じになっちゃうけど……』

『分かりましたっ、すぐに医務室につ！』

『んっ、了解っ、この通信の後、艦をオートコントロールに切り替えたらすぐ向かうか



らっ！』

『分かりましたっ、あっ、でも、一人だと真を抱えられ……っ』

『大丈夫っ、すぐ応援がいくよんっ！んじゃ、後でっ』

ジェーンからの通信はそこで切れる。

その意味を計りかねていると、すぐに答えが分かった。

格納庫に直結しているパイロットルームからの扉が開くと、一夏達が駆けつけてくれたのだ。

「簪さんっ、おかえりっ！」

『織斑君っ、ありがとうっ、真を医務室に運びたいのっ、手を貸してっ！』

ジェーンの意図を理解した簪の言葉に一夏達が頷く。

そして数分程度で、格納庫に備え付けられていた担架を用意してくれた。

「よし、運ぶぜっ！」

「任せろ」

担架の上にそつと真を寝かせ、ベルトで固定した後、一夏と箒が担架を持って真を運び出していく。

その様子を鈴は少しだけ笑みを浮かべて眺めており、それにシャルロットが気づいた。

「どうかしたの？」

「ん、あー、なんと言うかね」

まさか気づかれるとは思っても見なかった鈴は少しだけ恥ずかしそうに、頭を掻きながら言う。

「やり遂げたって顔で寝てたのよ、真」  
「成程ね」

シャルロットは鈴のその言葉で優しい笑みを浮かべた。

——意識が浮かんでくる。

まず最初に意識に浮かんだのは、動かすのが億劫なほどに重い身体。そしてすぐに全身に奔る激痛。

それが意識を完全に覚醒させた。

重い瞼を開くと、ぼやけてぶれる視界に映りこむのは白い天井。

身体に感じる重力の感覚が地上よりも弱く感じるため、宇宙であることを真は理解でき  
きた。

「ついつつ……ここは？」

「つ、真つ、起きたのっ!？」

ぶれる視界だったが、すぐに駆け寄ってくれた簪にピントが合う。

「ここは、『アメノミハシラ』の医務室だよ」

「ミハシラにいるってことは……」

「うん。真が意識を失ってる間に、全部終わったの。メンデルについても説明するから」  
「ああ、頼む」

ベッドにもたれ掛りながらも簪が説明してくれた内容を頭に叩き込んでいく。

真がシーゲルを倒してクサナギに帰還した後だが、コロニーメンデルと周辺の宙域を  
Mass Amplitude Preemptive Strike Weapon  
【大量 広域 先制 攻撃 兵器】を持つラキーナとアスランを中心にした数  
機で制圧していた。

シーゲルの遺体については内部でアスランが始末したらしく、束がそれについては確  
認済みと報告されていた。

メンデルについては、ラキーナとアスランの機体がメインシャフトを破壊した事で自  
壊しており、念のためイズモとクサナギに備え付けられた高エネルギー収束火線砲  
【ゴットフリート】によって、残骸を可能な限り破壊していた。

また、ラクスアウレフを筆頭にしたラクスタイプのカーボン・ヒューマンについてだ  
が――

「全員死んだっ!?!」

「……………うん」

表情を暗くした簪が続ける。

メンデルの破壊に前後して、捕虜としてイズモやクサナギで拘束していたカーボン・ヒューマン達は全員が生命活動を停止していた。

束がクサナギに移って調べたところ、彼女達は身体にナノマシンを投与されており一種の「アポトーシス」プログラムが設定されていたのだ。

その発動条件はおそらく——シーゲルの死。

亡くなったラクスの身体は、C・Eの負の技術の集合体とも言っている。

そのため、彼女達の遺体については日出工業と束陣営が共同で処分する事となっていた。

「……俺の寝てる間にそんなことが、あったんだな」

「うん。今は地上への帰還用シャトルの用意を待つてる状況……ふう」

簪が説明を終えた一息つくと、医務室のスライドドアが開かれる。

医務室に入ってきたのは、簪の姉、刀奈だった。

「全身の筋疲労に内臓へのダメージ、腕橈骨筋の筋肉断裂が両腕で2箇所、筋膜断裂が両腕8箇所、右腕は不完全骨折、左脚筋膜断裂が4箇所、鎖骨骨折、肋骨は全部で7箇所の不完全骨折で、おまけに2箇所は完全骨折……よくもまあ、身体を苛め抜いたものね、真君？」

ため息をついて、手に持っていたカルテを机に置く刀奈。  
それに苦笑しながら真も返答する。

「お陰で滅茶苦茶痛いんですけどね……てか何でナース服姿なんですか、刀奈さん？」  
「何事もまずは形から入るのが大事でしょ？」

「……お姉ちゃん」

満面の笑みでナース服姿でくると、スカートがめくれるぎりぎりの速度で回転した刀奈に、真と簪はジト目で抗議を送る。

すると少し恥ずかしかったのか、頬を染めて咳払いした後続ける。

「こほん、さてアミノミハシラでの治療なんだけど、本格的な治療は地上でやったほうが

いいって話になってるのよ。それまでの間は、医療用ナノマシンを注射することになったの。これなら私、何度も使ったことあるのよ。だから経験のある私なら任せられるってジエーンさんからね」

「あつ、ジエーンさんに真が目を覚ましたこと報告しなきゃっ」

刀奈のジエーンという名前です。思い出した簪は、医務室に備え付けられているモニターを使うため席をはずす。

「真君が早めに目を覚ましてくれてよかったわ」

「え、俺どれくらい寝てたんですか？」

「L4宙域から戻ってきて2日ね。簪ちゃん、あなたが目を覚ますまでほとんど付きっ切りだったんだから」

「……そうですか」

モニターを使う為に医務室の奥に消えていった簪を見つめつつ、真は苦笑していた。

そんな彼を尻目に刀奈は、長さ30cm、直径10cmはありそうな巨大な注射器を、指を添わせながら取り出した。

注射針も一般的な注射器のそれと比べると格段に太く、3mmはあるように見える。身体の痛みに耐えながら、真はどうにか上半身の筋肉を使ってベッドの上で後ずさる。

「……あのー、もしかしてそれ、刺す気ですか？」

「あつたりまえの前田さん。安心して、医療用ナノマシン100%よ」

注射針が医務室のライトできらりと光ると、冷や汗があふれ出す。

「ふっぎけないでくださいよっ!?!クルーゼ事件の時にも使ったと思うんですけど、そんなでかくなかったですよねっ!」

「今回は真君の負傷がだいぶ重傷だから、その分たあつぷりとぶち込む必要があるのよ、さあ、男の子なら覚悟してっ!」

なぜか嬉々としている刀奈に薄ら寒い感覚を覚えた真は、無理やり両腕を動かして迫る注射器を掴んでとめる。

無理やり身体を動かしているからか激痛が奔り、顔が歪むが気にしていられる状況で



はない。

「何してるのっ、腕動かしたらダメよっ?」

「こんなもん刺したらそれこそ死にますっつてっ!せめてもっと小さい注射器でお願いしますっ!」

「一回で済むほうが気が楽でしょっ!?!」

「回数とかそう言う問題じゃないですよっ、薬は用法用量を守ってこそその薬ですよねっ!?!」

純粋な腕力では怪我を負っていても、真の方が圧倒的に上であるため刀奈が持っている注射器はびくともしない。

そのまま体力切れを狙うのが真の思惑だったが、それでも刀奈には秘策が合った。

「そこまで抵抗するのなら……簪ちゃんっ!」

「え、何、お姉ちゃん、呼んだ……何してるの?」

医務室のモニターでジェーンとやり取りしていた簪を、刀奈が呼ぶ。

ジェーンとやりとりしていたためか、これまでの経緯はまったく分からない簪は純粹に疑問を浮かべていた。

真に注射針を刺そうとしている刀奈が息を切らしながら、彼女に向かって叫ぶ。

「真君につ、医療用ナノマシンを注射するのつ、手伝つて！」

「えっ、うん……注射器がだいぶ大きいけど、大丈夫なの？」

「大丈夫つ、お姉ちゃんを信じてっ!!」

「あーっ!あーっ!くっそーっ!!刀奈さんつ、アンタつて人はーっ!!」

刀奈の秘策、それは簪を味方に付けること。

真にとつてはまさに特攻ともいえる効果を生む、惚れた弱みに付け込道む策。

刀奈に文句の1つや2つ、3つくらい投げても罰は当たらないだろうと声を荒げる真の元に、簪が歩み寄る。

「私は、真に怪我なんてしてほしくないから……注射受けて、ね？」

「……かつ、簪」

そして簪がそつと真の腕を取ると真の腕から力が抜けた。  
その瞬間を、刀奈が見逃すはずがない。

「隙ありっ！」

「あっ」

直後、彼の上腕部にブスリと注射針が突き刺さった。

アメノミハシラ全体に響くほどの声量で絶叫が響いたのは言うまでもないだろう。

「……部屋を変えてくれ」

そんな声を上げたのは右腕をギブスで固定され、ベッドに横になっているカナードであった。

彼のベッドのさらに隣では偏向射撃の過剰使用によって倒れたセシリアが寝ており、彼女はまだ目覚めてはいなかった。

「……せめて耳栓をくれ」

先程までのやり取りをカナードは耳を塞いで防ぼうとしたが、右腕がギブスで固定されてしまっていて動かせないためかげんなりした表情で天井を見ながら愚痴をつぶやいていた。

——意識が浮かんでくる。

「……気を失ってたのかよ、俺」

医療用ナノマシンを巡ったやりとりから数時間。  
痛みで気を失っていた真が目を覚ます。

「起きたか」

そんな真に気づいたのか、ベッドを起き上がらせて無事な左手で読んでいた本を置く。

「カナード……いつてえ……っ！」

「ふっ、ボロボロだな、お互いに」

同じようにベッドを起き上がらせた真が、身体から奔る痛みに顔を歪ませる様子に苦笑している。

ベッドを起き上がらせた真は、ふうとため息をついてから口を開いた。

「……しばらく、ISには乗りたくないな」

「全く同感だ」

「てか、腕切られたって聞いたんだけど、大丈夫なのか？」

「ああ、指もちやんと動く。しばらく依頼は受けられないがな」

カナードの右腕の接合手術は問題なく完了しており、ギブスから出ている指もちやんと神経がつながっており動かしている。

余談だが、真が目覚める直前まではカナードにもクロエが見舞いに来ておりほぼ同じような出来事が起こっていたのだ。

クロエも医療用ナノマシンを注射しようとしていたが、カナードはそれを拒否してお

り、彼女が離席した後に自身で注射を行っていた。

「……終わったな」

「……ああ。ようやくな」

互いにやりきったという表情でベッドに身体を預けた。

それからさらに1日後、「遠征組」と「防衛組」全員を乗せるための帰還用シャトルの用意が完了した。

地上に帰還した真達はすぐに最新の医療設備を完備した病院に入院することとなった。

真については医療用ナノマシンを注射した影響もあり、2週間程度の入院で済むこととなった。

地上に帰還して2日経ってIS学園が正常運営を取り戻した後、授業が終わるとすぐに見舞いに行く簪の姿が目撃されていた。

カナードについては、真よりも長く2ヶ月ほどの入院が必要と診断された。

だが医療用ナノマシンを適宜注射していた影響か、本人の回復力か不明だが1ヶ月後には退院してしている。

こちらもほぼ常時クロエが彼をサポートしている姿が目撃されている。セシリアについては、シャトル搭乗時には意識を取り戻した後遺症もないことが判明していた。

そのため軽い診察を受ける為に1週間ほど通院し、完治と診断されている。

事件の顛末についてだが、16代目楯無である更識蔵人によって、協力を仰いだ英国を含めた各国へは無事テロリストは殲滅されたと報告されている。

L4宙域で自壊させたメンデルについては、アメノミハシラから定期的にイズモ、もしくはクサナギによる巡回を行うこととなっている。

これについてはメンデルを中心としたC・Eの技術を流出させないよう優菜と蔵人が細心の注意を持って行うよう心がけていた。

回収されたカーボン・ヒューマン達の遺体の最終的な処分は、蔵人が東とカナード立会いの下行い全員を火葬して共同墓地に埋葬していた。

またカーボン・ヒューマンになる前の素性について、彼女達のI.SやシーゲルのI.Sに残されていた情報を元に調査を行った結果、大半はルクーゼンブルク公国の関係者であった。

以前アイリス王女を誘拐しようとした一派とも推測されるため、この情報については

C. E. 関連の事柄だけを隠蔽してルクーゼンブルクに報告している。

アイリス王女を除いた王族関係者達には寝耳に水の事態となつていると報告されているが、この件については内政干渉にもなりかねないためルクーゼンブルクに一任していた。

こうして関係者間で【クライン事件】と呼称された一連の騒動は幕を閉じたのだった。

クライン事件から、時間は過ぎて――

3月 IS学園 一年一組

夕焼けが学園を包み、綺麗な赤の光が教室を照らしている。  
本日の授業は終了し、クラスに残っているのは3名だけ。

「本当にいいのか、飛鳥……いや、真」

「はい、俺が選んだことなんです」



千冬の質問に真はまっすぐな視線をもって頷いて返す。

「飛鳥君なら引く手数多だとは思うんだけど……本当に？」

「はい、山田先生。正直なところ滅茶苦茶悩みました。でもこれでいいんです」

真耶も千冬に続いて真に尋ねるが彼は微笑んでから返す。

その様子を確認した千冬と真耶は、互いに頷きあつてから続ける。

「……分かった。お前がちゃんと考えて決めたというのなら、私達は何も言わない」

「そうですね。分かりました、これが飛鳥君の「進路」という事で受理します」

この時間に担任、副担任である二人が真と共に教室に残っていた理由は、「進路」についてだ。

一夏を含めた他の生徒分の進路についてはすでに受理されているが、真が出してきた進路について千冬と真耶は、本人の口から確認したかったのだ。

「わざわざ時間を作ってもらって、ありがとうございます」

真が立ち上がって頭を下げる。

それに微笑んで返す千冬と真耶。

失礼しますと、真が教室を出るとスライドドアの横で待っている少女がいた。

「簪、待っててくれたのか」

「うん。進路希望、だよね。どうだった？」

「ああ。ちゃんと受理してもらったよ」

よかった、と簪が胸を撫でる。

もちろん自身の進路については簪にもすでに伝えている。

「これで……【整備科】にいける」

真の言葉に簪は微笑んで頷いた。

# E p i l o g u e

## PHASE 1 運命VS白き王①

進路調査が行われてから数日後――

3月 ブレイク号 トレーニングルーム

金属の擦れ合う音が一定のリズムで響く、ブレイク号の一室。

トレーニングルームとして様々な最先端のトレーニングマシンが設置されているこの部屋で、1人黙々とベンチプレスを続ける者がいた。

「186……187……188」

トレーニングウェアに身を包んだカナードが、一見細身に見えるが鍛え上げられた逞しい両腕でベンチプレスをういたトレーニングを行っていた。

もちろんベンチプレスだけではなくサンドバッグを使用したスパイヤ、ランニングマシーンでの走り込み等も行っていた。

「198……199……200」

200で一度切り上げて合計350kgのダンベルを専用の台座に置く。その重量からか船体が少しだけ揺れた。

「だいぶ戻ってきたな。もう少し強度を上げるか」

感覚を確かめるように右こぶしを握りしめる。

先のクライン事件の際に切断された右腕はすでに治療も終えており、現在はいりハビリ期間中であつた。

利き腕である左腕に比べるとやはり筋力が衰えており、より強度を上げたトレーニングに励もうと、台座にかけてあつたタオルで流れる汗を拭きつつカナードは思案する。

汗を拭き終え、一息つくくとトレーニングルームのスライドドアが開き誰かが入室してきた。

「カナード様。お疲れ様です」

ゴシック服を身に着けた銀髪の美少女、クロエが手に持っていたドリンク容器をカナードに手渡す。

手渡されたドリンクを口に含み喉を鳴らしして一気に半分ほど飲み干したカナードは薄く笑う。

「ありがとう、クロエ」

「はい。あつ、これからシャワーですか？」

「ああ。一息入れようと思っていた」

再度口をつけて一気に飲み干して空にしたドリンク容器と、汗を拭ったタオルを肩にかけてトレーニングルームから退室していく。

彼の後を追ってクロエも退室すると同時に、空間投影ディスプレイが展開された。

『やつほい、カナクーン』

ISのネットワークを使った通信を送ってきたのは、この船の艦長である天災、篠ノ之束。

白衣姿の彼女は自室から通信を行っているようであった。

『あらら、トレーニング中だった？いやー、東さん、汗流して身体鍛えてる男の子の姿って女の子にはドキつとするものだと思うんだ。くーちゃんはドキつとした？したよね？後でストロベリツた内容教えてねー！』

「たっ、東様っ！」

相変わらずのテンションでまくし立てる東と頬を赤らめたクロエに、ため息をついてカナードが返答する。

『それで、用件はなんだ？』

『あつ、ごめーん。こほん、実はカナ君にお願いがあつてね』

『お願い……？』

うん、と東が頷き用件を説明していく。

それに伴いカナードの眉間の皺が濃く、強く刻まれていったことをクロエは見逃さなかつた。

それに時間は多少前後して――

IS学園 学生寮 真の部屋

今日は真の部屋に一夏が遊びに来ていた。

IS学園の中では唯一同性の友人の部屋だ、遊びに来る回数は自然と多くなる。

もつともその友人である真に彼女ができたため、遠慮することも多かつたのだが。

真はソファに寝転んで探偵小説を読んでおり、一夏は棚に並べられているDVDソフトを取り出してパッケージ裏を眺めていた。

ソファの目の前のテーブルに緑茶とポットが出されており、茶菓子で出していたポテトチップス等の菓子類はいくらか減っていた。

「なあ、真」

「なんだよ」

「ライダーって全部がグロいわけじゃないんだな」

「あほか、お前が勝手にシーズン2借りてったからだろうが」

寝転んでいた真は読んでいた小説を閉じてげんなりしたような表情で起き上がる。

「俺や簪は、最初はマイルドなのを薦めようとしたのに、勝手にこれ借りるわくってお前が持つて行ったのがピンポイントでグロいだけだよ」

「そつかあ……すごいな、これ。ゲームと医者ってどう見ても合わないテーマなのに」

「おすすめだぞ。アフターストーリーとしてサブの話もあるし、終わったら小説もある」  
「媒体多いなっ」

「持つてるから、読みたければそこにあるよ。簪の部屋なら戦隊やウルトラマンもあるぞ」

DVDソフトが並んでいる棚の横、小説や漫画本が収められている本棚に一夏は視線を移す。

綺麗に巻毎に並べられた本棚には確かに、ライダーと書かれている本が納められていた。

「うーん、また今度にするわ。まずは見てからだし」

「分かった。だけどシーズナーは持つてくなよ、あれもなかなかグロいから」



一夏は真の言葉に苦笑しながら漫画本を数冊、本棚から取り出してソファに座る。

寝転んでいた真が起き上がっているため問題なく座れており、真はソファにもたれ掛るように座りながら小説を読み直していた。

そして数分、部屋は静寂が支配する。

真が再び読み進めている小説は終盤に差し掛かっており、探偵役の青年とその内弟子が密室殺人事件のトリックを暴こうとしているという山場であった。

そんな時、隣の友人が口を開いた。

「——なんで、整備科なんだ？」

開口一番、真面目なトーンで一夏がこちらを見つめていた。

小説に栞を挟んで目の前のテーブルに置く。

「誰に聞いたんだよ」

「千冬姉だよ」

「千冬さんかあ……なんだかんだ、甘いよなあ。あの人」

苦笑して頭を掻いてから、真が一夏に視線を向ける。

「……コロニー計画は知ってるだろ？」

「ああ。日出で進んでる計画なんだから」

真の口から出た計画について、一夏も多少は聞いている。

コロニー「メンデル」とは違うタイプの円筒型コロニー「ヘリオポリス」。

かつてC・Eで崩壊したコロニーであるが、この世界で日出工業が主体となって建造を進めている計画だ。

頷いて答えると真が続ける。

「ずっと考えてたんだ。俺にしかできないことが何かあるのかって」

目を閉じて今までの戦いの記憶を思い出す。

オーブで戦火に巻き込まれ、ザフトのスーパーエースとして、そして傭兵として駆け抜けたシン・アスカとしての自分の人生。

親レイ・ザ・バレル友の導きによって、この世界に生まれ変わった後もC・Eから続く因縁が巻き

起こす戦いの連続であった。

「去年の夏ごろ、ちょうどオリジナルのラクスを倒した後に優菜さんから話をもらってたんだ。今後どうするのかを考えたうえで、それに乗ることに決めただ」

瞳を開いて、少しだけ苦笑している真を一夏は眺めている。

「搭乗者として国家の代表を目指すことはもちろん考えたさ、視野に入れてた。だけどそれは俺だけにできることじゃない」

　　I Sに乗ることが嫌いなわけじゃない、むしろI Sに乗ることは好きな部類に入る。だが自分でなければできない「何か」が他にあるのではないかと考えたときに、優菜から選択肢をもらった。

「コロニー計画に参加する為にI Sを中心とした技術を得る。進学も視野に入れて専門的な知識を身につけたいって思った。まあ、それでもさんざん悩んで家族とも相談して、俺は整備科に行くことを選択したんだ」

「……」

真が一夏に説明を終えると、どういいうわけか微妙な表情を一夏は浮かべていた。何かを言い出せずに、無理やり抑え込んでいるかのような雰囲気は真は感じ取った。

「なんだよ、どうかしたのか？」

「……いや……真は、ちゃんと考えてるんだなって思ったんだよ」

「そりゃ、一応お前よりも長生きしてるからな。う、いや違う、俺は16歳だ……39じゃない、16歳なんだ」

自身の年齢で自爆した真はそう言って苦笑している。

「……なあ少しだけ、いいか？」

「ん？」

まだ何かあるのか？といった表情に変わった真に、一夏は決意して続ける。

「頼む真、俺と……戦ってくれっ！」

「はあ？」

いきなりの一夏の提案。

それに話が見えず素っ頓狂な声を上げる真に、一夏の顔が赤面していく。

「ちよつ、ちよつと待っていてくれ、話が見えないぞ、一夏？」

「あつ、悪いつ、えつと……その……ちよつと待ってつ、説明するからつ、くそ、恥ずかしいなつ」

そう言つて1分程度、一夏は自分の心を整理していく。

それを真は黙って待っていた。

「……俺はさ、ずっと……憧れてたんだ、真に」

恥ずかしさから顔が赤くなっている一夏が、必死に自分の中にある思いを言葉に変えていく。

「俺に？」

「ああ。昔から助けてくれた。そしてI S学園でも誰かを守る意味を教えてくれた。絶望していたときに真が言ってくれた言葉、嬉しかったんだ」

『お前が何を思ってるかなんて知らない！ だけどお前は彼女を助けたいと思ったんじゃないのかっ!?!』

『それは決して間違いなんかじゃない！ それはお前だけが感じたもののはずだ！ 誰かの真似なんかじゃなく!』

『【助けたい】と感じたことは決して薄っぺらなんかじゃないっ!! 俺も同じなんだよ！俺は今ある命を、【花】を散らせないために戦ってるっ！それは俺が助けたいと思ったからだ！ 俺自身が決めたんだ！ だからお前も決めろよ、一夏あっ!!』

——VTシステム暴走事件の際、自分に投げかけられた言葉。

「皆の笑顔を守るために戦うんじゃないのかよっ！それともあれは嘘だったのかっ!?!」

「確かにお前の生まれは他と違うかもしれない。けど笑って泣いて、死線を潜ってお前が見つけた信念は他の人間が、ましてやシーゲルなんかが決めたことじゃない……一夏、お前が自分で悩んで掴んだお前だけのものなんだよっ！」

「だからさ、立てよ。そしてシーゲルにぶつけてやれ。生まれなんて関係ない、俺は俺だ、これは俺の人生だっつena」

——出生が普通の人間とは異なり絶望して折れかけた心を、救ってくれた言葉。

思い返そうとすれば鮮明に脳裏に浮かぶそれに頷いて一夏は続ける。

「……俺にしてみれば、真は千冬姉と同じ【憧れ】で目標なんだ。だから追いつきたいって、肩を並べていたい。心からそう思ってる」

「おっ、おう」

こそばゆいように真も少し照れたような反応をしてしまった。  
そんな真を見て少しだけ笑みを浮かべた一夏が、続ける。

「……だからさ、今の俺が真にどこまで通用するのか知りたいたいんだ。こんな俺のわがままだつてのは分かつてる。だけど……お願いだ、真っ！」

勢いよく頭を下げる一夏。

「……分かった、分かったよ。恥ずかしいなあ、もう」

頬をかきながら芯は恥ずかしそうに言う。

照れているため赤面しつつだが、全く嫌ではなかった。

「……それでもし俺が勝ったら、搭乗者として進むことを考えてくれないか？」

その言葉を一夏は口に出せなかった。

本当はそう彼に伝えたかった。

しかし真も考えて、悩んで決めた道だと言っていた。

それを納得がいけないから、と自分の感情だけで否定することはできないし、したくない。



く。口から出そうになった言葉を必死に押しとどめた一夏は、切り替えるために口を開

「よかった……ただ手は抜かないでくれよ？全力で来てほしいんだ」  
「分かっている、遠慮しないぜ？」

一夏に返事を返した後、スツと真が拳を目の前に掲げる。

一夏も右腕を上げて、こつんと拳同士をぶつけ合った。

それから数十分後。

真とのISバトルの約束を取り付けた一夏は、自室に戻っていた。

携帯を操作しており、ちょうどそれが終わったため顔を上げる。

「……」

携帯を机の上に置き、椅子に腰を下ろして一息入れる。

(真が選んだ道なんだ。俺がとやかく言うことじゃない)

納得がいけない気持ちは少しだけ残っている。

だがそれを頭を振ってかき消す。

友人が選択した道なのだ、それをとやかく言うことはできない。

そちらの感情のほうが大きい割合を占めているのだ。

(そういえば、簪さんは知ってるのかな。いや、知ってて当然か)

所属企業が同じパートナーとして、そして恋人として共にいる女性。

その人に真が相談していいはずがない。

きつと自分が知らない間にひと悶着あったとは思うが。

(……俺はやるだけのことを、やっておくだけだな)

気持ちの切り替えはすでに終わった。

今は親友との戦いのために、全力を尽くそう。

「よしっ」

パチンと軽く顔を叩いてから立ち上がった一夏は、すぐに自室から出て行く。

同日夕方 整備室

アリーナに備え付けられたIS整備室に響く、小さな金属音。

それは人の手によってある物体が組み上げられていく音であった。

その最後のステップとしてスライド装填を行い、弾丸を装填させる。

「できたよお〜！」

ゆるい女の子の声と共に作業台の上に自動拳銃が置かれる。

「っ、嘘だろおっ!?!」

その後数秒遅れて焦りと驚愕が混ざった男の声が響き、作業台の上に同じく自動拳銃が置かれた。

「いえーい！」

元気にピースをする作業服姿の本音とは対照に、同じく作業服姿の真は少し落ち込んだ表情を見せていた。

「マジかあ、1回目と2回目は感覚を思い出す為。3回目は本気だったんだけどなあ……」

「本音の方が5秒速かったよ。これで3連勝？」

空間投影ディスプレイのタイマーを止めて、計測を終了したISスーツ姿の簪が真に言う。

簪の言うとおり、この銃組立競争は3戦目であった。

全ての勝負で本音が、真よりも早く拳銃を組み上げて勝利していた。

1戦目と2戦目は傭兵や軍人であったときの感覚を思い出すことに集中していたが、3戦目はそのおかげかスムーズに動くようになっており、勝利するつもりで策も用いて本気で望んだ。

具体的には組立の途中で直接チャンバーに弾丸をこめることで、マガジンを入れることとスライド装填のステップを短縮させたのだ。

しかしそれでも結果は、本音の勝利であった。

(本音の整備士としての腕って、ヴィーノに並ぶんじゃないか？得意分野は違うだろうけど)

ヴィーノ・デュプレ。

自身が最も信頼していたメカニックと比較しても、本音の整備の腕は遜色ないと感じる。

最もヴィーノはメカニックとしては整備よりも設計の方が得意と言っていたのだが。

「ふっふっふっ、伊達に整備はしてないよー、あすあす」

「自信はあったんだけどなあ。負けました」

肩をすくめて真はため息をつく。

「これから色々教えてあげるから〜」

「そうだな。銃ならともかく、ISの細かな構造とかパーツがどう組み合わさってるのか、表面上しか知らないし……よろしくお願いします、本音先生？」

「まっかせて〜！あ、これ片付けてくるね〜」

作業台の上に置かれた2丁の拳銃から装填された弾丸を抜き取り、専用のホルスターに収める。

キヤスターのロックを解除して、そのままゴロゴロと移動させていく。

「真が整備科……やっぱりまだ慣れない感じがあるね」

2人きりになった後、簪が言う。

「そんなにか？」

「うん。最初に話を聞いたとき、私も本当に驚いたから……お姉ちゃんもお父様も話したら驚いてた」

簪の言葉通り、彼女を含めて姉である刀奈や蔵人も、真は搭乗者としての道を歩むと思っていた。

彼女の言葉に真は苦笑する。

「これからISに乗る機会が全く無くなる訳じゃないんだけどなあ」

「うん。一応確認だけど、専用機であるデステイニーどうなるの？それに、真はこれからも学園にいれるんだよね？」

「ああ」

苦笑する真は少し不安そうな表情になっている簪に説明する為に、一拍あけてから続ける。

「俺が整備科に行きたいって言う理由を優菜さんに話してあるんだ。優菜さんもそれに納得して、俺の立場を色々と考えてくれて行動してくれたんだ」

真が進路希望を出す際に、まずは直属の上司である優菜に相談していた。

その際に優菜にも驚かれていたが、真の話した理由に特に疑問もなく、納得してくれていた。

そこから彼女の行動は早かった。

国際IS委員会へ真の進路についての報告と併せて、取引を行ったのだ。

優菜が用意した取引材料は「ISの宇宙空間での稼働データ」であった。

主に歌姫の騎士団やシーゲル一派との戦闘で得たデータを一部編集し、戦闘部分のみ削除したデータであるが取引材料としては十分の効果を上げた。

その理由はこの世界の宇宙開発の遅延だ。

巨大なISであったエクスカリバーという例外は存在しているが、コロニーや月面都市などは存在しておらずC・Eに比べれば雲泥の差だ。

そこにISの宇宙での稼働データを渡す。

これにより宇宙開発のスピードも飛躍的に上昇させることが可能だろう。

併せて、コロニー計画について真が参画予定であることも、委員会側に彼の進路を納得させる理由には十分であった。

宇宙での稼働データもコロニー計画の進行と共に増える。断る理由もないだろう。



優菜が行ってくれた様々な対応に、真は深く感謝していた。

「だからデステイニーが俺から没収されることも、俺がIS学園から追い出されることもないって」

「……うん、よかった」

説明を終えた真に簪は微笑む。

「そういえば、ラキーナも整備科だって聞いたな」

「そうなの？」

「ああ、直接アイツから聞いたんだ」

数日前に、ラキーナとの会話の中で彼女もまた整備科を志望していると聞いた。

キラ・ヤマトであったころからギーク気質のある工学生であったと、いつかアスランに聞いたことがあった。

そもそもプログラミング技術等は自分よりも遥かに上であるし、そこまで違和感を感じていなかった。

「分らないことがあれば本音先生かラキーナに聞けばいい。加えて東さんだっているんだ。気が楽でいいなあ」

そういった後、真はぐつと身体を伸ばす。

それと同時に、片付けを終えた本音が戻ってきた。

「そういえばあすあす、おりむーと決闘するって聞いたけど、本当？」

「え、そうなの？初耳」

「……どつから洩れたんだよその情報。一夏から頼まれたの今日なんだけど」

一気にジト目になった真の表情を見て、本音が続ける。

「噂話になってるよ〜？」

「……まあ、本当だけどき。マジでどつから洩れたんだろ」

一夏から頼まれた決闘について、真は簪と本音に伝える。

「成程。それって男の子の意地、ってやつ？」

アニメや特撮ではそういった展開がないわけではない。

むしろ多いため、理解を示した簪が頷く。

「……俺にそう言ってくれるのは本当に嬉しいって思うけどな」

「織斑君強くなってるよね、私から見てもそう思う。勝算はあるの？」

簪の言葉に、真は――

「アイツが俺のこと憧れだと言ってくれるのは嬉しい。けど、まだ負けてやるつもりはないよ」

――そう、強気的笑みを浮かべて返答した。

真と一夏の決闘は、この日からちょうど一週間後。

学園が春休みに入ると同日に行われることとなった。

## PHASE 2 運命VS白き王②

## IS学園 一夏の部屋

時間はあつという間に過ぎ、1週間が経過した。

学園は修了式を終えて、春季休暇に入っていた。

式自体は午前中に終了して、部屋に戻ってきた一夏は洗面台の前で鏡を見つめていた。

映るのは自分の顔、少し隈ができてるように見えるのは緊張から昨日寝れなかったためだろう。

おかげで午前中に何度もあくびをしてしまった。

蛇口から流れる水を掌で掬い上げて、顔をつける。

冷たい水が意識をはつきりと起こしていくのを感じる。

数度繰り返し返してタオルで顔の水滴を拭う。

ソファに掛けていた制服の上着を掴んで袖を通した一夏は、最後にパンツと頬を叩く。

先程まで意識の底にあった倦怠感はずつきりと拭われていた。

「……よしっ」

気合を入れて自室から出て行く一夏の足取りに迷いはなかった。今は己の力をにぶつけるだけだから。受け止めてくれる、目標である友人に。

それから数十分後、第3アリーナ 観客席

「……むうっ」

座りながらピットの方角をチラチラと眺めている箒は、落ち着かない様子で小さく呻く。

落ち着かないのに合わせて表情には隠しきれない怒りの感情が溢れていた。

隣に座っている鈴は、先程からこの調子である友人に小さくため息をつけてから口を開いた。

「箒、いい加減に落ち着きなさいよ」

「鈴っ、しかし……っ！」

「アンタの気持ちも分かるわよ？でもね、一夏が集中したいって言ったなら仕方ないじゃない」

そう、本来なら箒達は一夏が使用する予定のAピットで彼を鼓舞する予定であった。

だが、一夏が集中したいと、彼女達に伝えたのだ。

本当に申し訳なさそうに、だがそれ以上に真剣な声色であったため箒達は二つ返事で返したのだが。

「それは、そうだが……っ」

「女には分からない、男の子の意地つてやつよ。アイツにとつてこの決闘はそれだけ大切な。赤月もそう思うわよね？」

鈴の言葉と同時に、箒の左目の虹彩が赤く染まる。

先までムスツとしていた箒の表情は、一気に破顔して笑みを浮かべていた。

普段の箒からはイメージできない満面の笑み。

だがどこことなく幼いイメージを感じるのは気のせいではなかった。

『私もリンと同じかなー。というか、オリジナル……じゃなかった、箒は一夏があれだけカッコよかったのに納得してないの?』

『それは……納得していいわけじゃない、そばにいたいと思うのは当然だろう?』

まるで箒が一人で二役を演じているかのようだが、彼女はクライン事件を経て覚醒した赤月の人格と、二重人格の様に人格の切り替えができるようになっていた。

彼女のI S〔紅藤〕のコア人格〔赤月〕が会話するためには、彼女の身体を使う必要があるため自然とこのような形になってしまっているのだ。

これについてはすでに周知の事実として広まっており、一夏や真、鈴達も把握している。

同じ声で分かりにくいが虹彩の色で判別が付くし、なにより箒は少し硬い喋り方だが赤月はまるで子供のように澆刺と喋るのだ。

あまりにもギャップがあるために判断は容易と、鈴は認識しているが言葉には出さなかった。

『分かるよ、箒の気持ち。応援したい、背中を押してあげたい。でもさ、こういうときは一夏の事を信じてあげるのも大事なんだよ』

『……』

「ほーらみなさいよ。シャルやラウラも同じでしょ?」

鈴は自分の右隣に座るシャルロットとラウラにも話を振る。

二人は頷いてから口を開いた。

「そうだね。ボクのいいたいことは全部赤月が代弁しちゃったよ。僕は一夏を信じるよ、きっと真ともちゃんと戦えるって」

「右に同じだ。私達にできるのは一夏が最高のパフォーマンスを發揮して、真と戦えるようにしてやることだ」

『……分かってる。分かってるからここにいるんだ』

ブスツとむくれた表情になるが、そもそも一夏の気持ちに理解を示してここにいるのだ。

それでも感情が顔に出やすい彼女だから、先程からふくれっ面だったのだが。



『箒は聞き分けがいいよね、お姉ちゃんがヨシヨシしてあげるよ』  
『子ども扱いするなっ！それに姉なんて1人で十分だっ！』

勝手に動いて頭を撫でた右手を、左手で払って箒は声を荒げる。

そんな様子を見ながらもメインモニターに視線を移していた鈴は、モニターに映る時刻の表示を見て呟く。

「そろそろかしらね」

鈴がそう呟くと、観客席にいるいつもの面子もAピットに視線を移す。

鈴達はAピット側に近い場所で席を取っているがBピット側には簪や本音の姿が見えない。

Bピット側にはアイリス王女とジブリルが並んで座っており、アイリスはジブリルが差し出した紅茶を飲んでいた。

おそらく簪達はBピットにいるだろうと鈴は予想していた。

本音はデステイニー専属の整備担当でもあるし、真と簪の仲を考えると少し羨ましく

も思う。

決闘開始まで後数分だろう。

ふとドクンドクンと心臓の鼓動が早くなっていることに気づいた。

箒に引きつられて興奮していたのだろう。

苦笑しながら深呼吸を行い、気持ちを落ち着かせていく。

(……一夏、頑張りなさいよ。真も手加減なんかしたらぶっ飛ばしてやるんだから)

数度の深呼吸で気持ちを切り替えた鈴は、二人にそれぞれエールを送った。

同じ頃、Bピット

『背部Vユニット、スラストー共に出力問題なし。両腕部マニピュレータ、両脚部スラストー問題なし。クラレント、トリモチランチャー、ダミーバルーンetc……異常なし、武装コンディションオールグリーン』

デステイニーを纏った真は、眼前に浮かぶ空間投影ディスプレイを高速でタイピングしながら機体状況の確認を行っていた。

「こつちでも確認したよ、問題なしっ！」

「うん。機体コンディションは完璧」

真の言葉にあわせるように、本音と簪が自分達の前に浮かぶディスプレイを操作して告げる。

『2人ともありがとう』

「生徒のために頑張るのが先生だからねっ」

「……本音」

『頼りになるなあ、ホント』

早くも先生面をしている本音に呆れたようにジト目の視線を簪は送る。

それに苦笑した真はふうっと一息入れて、コンソールを弄る。

コンソールの操作により、デステイニーがカタパルト部分に接続される。

「よし、それじゃ発進準備お願いね、あすあす」

「あつ、私もてつだ……」

本音が外部操作の為に専用端末の元に駆けてくのを追いかけてようとした簪だが、ぶーと頭の上で×印を本音が作っていた。

その行動の意図を察した簪はため息をつくが、微笑んでいた。

「……本音、余計なお節介」

そう言うが口元には笑みを浮かべた彼女はくると反転し、カタパルトに接続されたデステイニーに向けて口を開く。

「真、頑張つて」

本音もいるため大きくはない声だが、そのエールは真の心を鼓舞するには十分だつ

た。

機体コントロールが譲渡された真は、右マニピュレータを一旦展開解除して生身の腕を露出させる。

『ああ、行ってくる』

右手でサムズアップを取った後に、微笑みながらシュツとハンドサインを簪に送る。それに簪は少し赤くなった顔でこくと頷いた。

『飛鳥真、「デステイニーガンダム・ヴェステイージ」、行きますっ！』

真のコールの後、電磁加速によって急激な加速を得たデステイニーがカタパルトから射出された。

A M B A Cとスラスターによる機体制御によってその加速のまま、V Lユニットを広げる。

真の発進とほぼ同刻——Aピット

『白式・王理、織斑一夏、行きますっ!』

デステイニーとは異なる白く輝く翼を翻して、Aピットから白式が発進してくる。

【黒】と【白】、互いに正反対の機体色の2機は、アリーナ上空の丁度中央部分で向かい合う形で静止している。

もう間もなく決闘が始まるタイミング、観客席の箒達も決闘がついに始まるのだと浮き足立っていた。

そんなタイミングで箒たちに走りよってくる人影にまず、シャルロットが気づいた。

「あ、フレイ」

「はあい、シャルロット。ふう、何とか間に合ったわね」

パタパタと両手で顔を扇ぎつつ、ラウラの横に座るフレイ。

そんな彼女にシャルロットが尋ねた。

「どうしたの、そんなに急いでさ?」

「代表候補生としてのレポート提出がギリギリでね、シャルロットも出したでしょ？それをラキに手伝ってもらったのよ。お陰で何とかパスしたわ」

「ん？だがそれならラキーナはどうしたんだ？」

暑がっているフレイの他にラキーナの姿が見えないことを不思議に思ったラウラはフレイに尋ねる。

「あー、全速力で走って来たから……ほら、あの子ならあそこにいるわよ」

ニタニタと笑うフレイが観客席の入り口に目をやると、壁に手を付いて息も絶え絶えのラキーナの姿が見えた。

基礎的な身体能力は代表候補生であるフレイのほうが高いため、この結果は当然のものであった。

荒い呼吸を少しでも抑える為に深呼吸しながら、ラキーナもフレイの隣の席に座り込んだ。

汗が滝のように流れており、深呼吸をしてもぜえぜえと荒い息が少しも治まっていないようであった。

「げほっ、おえっ、酷い、レポートどころか機体整備も手伝って上げたのに……置いてくれたっ、ふぐうっ」

「トレーニングしてないアンタが悪いのよ。あゝ、もう、背中摩ってあげる」

瞳には涙を浮かべて、わき腹を押さえて相当苦しそうにしているラキーナの背中を摩りながら、フレイはアリーナ上空で向かい合うデステイニーと白式に視線を移す。

「ふーん、まるで【悪魔】と【天使】ね」

フレイが相対する2機を見て呟く。

「どっちかというと、【魔王】と【勇者】じゃないかしら」  
「なるほど、どちらも言い得て妙だな」

えっ、とラキーナの横にいつの間にか楯無が座っていた。

さらにその隣に3人目の男性搭乗者であり臨時教員でもあるカナード、続いてセシリ



アも座っている。

「わっ、私としては【騎士】 同士の決闘のようにも感じるのですが……見えませんか？」

苦笑するセシリアは楯無とカナードの眩きに対して精一杯フォローを飛ばす。

「苦しいな。どちらも騎士なんて柄じゃないだろ」

「そうね。真君は騎士というより【戦士】って雰囲気があつてるし、一夏君は【侍】ってイメージだしね」

「……そつ、そうでしょうか……そうですね……」

しかし、飛んでくるのはカナードと楯無の鋭い突っ込み。

加えて箒たちのジト目の抗議からくる堪れない気持ちをセシリアは受け入れるしかなかった。

さて、観客席がそんな事になっている事には気づいていない真と一夏は互いに向かい合ったまま、試合開始のコールを待っていた。

そんな中、一夏が目目の真の前に口を開く。

『改めてありがとな』

『ん?』

いきなりの一夏からのお礼の言葉に真が首をかしげた。

『いや、決闘、受けてくれてさ』

『別にいいって』

『サンキュ。それじゃ、全力で行くからな』

『ああ。分かってる』

そう返事をした真は瞳を閉じる。

脳裏に浮かぶのは、大切な女性の姿。

先程自分を鼓舞してくれた、愛する女性のイメージ。

鮮明に浮かぶ彼女の姿をイメージした途端、彼の意識の中で紅い種——〔S. E. E. D〕が弾け飛んだ。

それと同時に試合開始のコールがアリーナに響いた。

瞬間、白式のハイパーセンサーからデステイニーの反応がロストした。

『っ!?!』

ロストの一寸後、機体のハイパーセンサーが一瞬で左前上方向に移動した【何か】のエネルギー反応を検知。

あまりの速度と相手側の武装の影響で正確な補足ができていないため、ハイパーセンサーでもただエネルギーの検知ができただけだ。

その検知と同時に一夏は機体を回避行動に移す。

降り注ぐ高エネルギーの粒子ビームによって白式のシールドエネルギーを少しだけ削られるが、何とか被害を最小に抑える事には成功した。

だが己の眼前に迫っていた黒の蹴撃には、反応が追いつかなかった。

『ぐうっ!?!』

奔る衝撃に、堪らず弾き飛ばされる白式。

白式をスラストターの速度を上乗せした蹴りで弾き飛ばしたデステイニーは、その反動を利用して離脱して距離をとった。

『早速つ、やってくれるなあつ、真つ！』

油断はしておらず集中していたはずなのに、フアーストアタック初撃をあつさりと奪われた。

その事実を引き攀った笑みを浮かべた一夏は、A M B A Cで体勢を立て直す。機体が飛ばすアラートが、彼の笑みを拭い去った。

アラートの正体は、中距離を維持したままこちらをテレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔で狙っているデステイニーであった。

『つ!!』

瞬時加速によって白式が回避に移った刹那、超高出力ビームが数瞬前まで白式のいた空間を薙いだ。

そのまま地面に着弾、発生した爆発によって土煙を舞い上げる。

回避に成功した白式だが、アラートは鳴り止まない。

その理由はデステイニーが光の翼を瞬かせて、高機動を維持したまま白式を狙い続けているからだ。

テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔の発射にはトリガーが必要ない。

加えて両掌に内蔵されているクラレントもそれは同じで、ビームライフルモードに切り替えて回避先への予測射撃も織り交ぜてくる始末。

(……やっぱりっ、こうくるかつ、真っ！)

テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔による超高出力ビームは何とか回避し続けているが、織り交ぜられているクラレントのビームによってシールドエネルギーが減り続けている。

そしてデステイニーは白式とは丁度ミドルレンジの距離を保って高速機動を続けていた。

半ば予想していたが、実際予想通りの展開に陥ってしまったのは歯がゆいものであった。

「やはり、こうなったか」

観客席で試合を観戦しているカナードが呟く。  
その呟きを試合を観戦しながら、箒が拾った。

「やはりとは、どういうことだっ?」

試合が開始されてわずかな時間で一方的な展開に移っている。

万全の状態で望んだはずの一夏がどうしてこうなっているのか、それに目の前のカナードは思い当たる点があるようだ。

「この決闘についてだが、俺は織斑一夏から相談を受けていたんだ」

「そうなのかつ?」

「ああ」

時間は少し戻り、1週間前

ブレイク号 カナードの私室

「というわけで頼むっ！」

「束さんからもお願い、カナくん」

頭を深く下げている一夏、ソファに座りながら手を合わせてお願いしてくる束を交互に見た後、カナードは手に持っていたファイルを放り投げてからため息をつく。

「……織斑一夏のお願いを聞いてほしい、とは言っていたが……」

トレーニングの後、束から依頼されたお願いとは一夏のお願いを聞いてほしいといった内容だったのだ。

「束さん、いつ君のお願いを無碍にしたくないんだ。でも束さん、戦闘のアドバイスなんてからつきしだし。カナ君なら適切なアドバイスだってできるでしょ？」

「……分かった、分かった。どうせ俺が首を縦に振るまでやめないつもりだろう、お前は」

「イエーイ、さっすがカナ君、わかってるう！」

「なら、俺がやるはずだった依頼をアスラン・ザラとミシエル・ライマンに回してくれ、

どうせ手持ち無沙汰だろう」

「りょくかいっ！ んじゃっ、後はよろしくねっ！」

東は満面の笑みを浮かべてソファから飛び上がると、そのまま部屋から出て行く。アスランとミシエルを探しにいったのだろう。

そのリアクションにカナードはさらに深くため息をついた。

彼女にカナードへの相談を持ちかけた立場の一夏も、テンションや行動についていけずに苦笑いを浮かべていた。

さて、カナードは空いている椅子を一夏の前に出して、自分も座りなおす。

それを確認した一夏も椅子に座りながら口を開いた。

「なあ、今の俺は真に通用するかな？」

「……結論から言うと、勝算はほぼない。勝てる可能性は限りなく低い、そのレベルだろう」

「っ、ずばり言うよなあ」

「変に取り繕うよりも率直に言ったほうがわかりやすいだろう。それにお前も予想していたな？」



自分の言葉に、一夏が怯んだのはほんの一瞬。

一夏の性格上、本来ならばかなりうろたえるだろうと予想していたが実際は違った。

彼の反応は、そう言われるだろうと覚悟していた人間の反応だったからだ。

それを見逃さずに確認すると、一夏も領いた。

「まあな」

「何か対策はとっているのか？」

「日出経由で出てる一般公開されてる範囲のものだけだな、それで動きとか対デステイニーを想定したイメトレはしてるよ。本当は公開されてない歌姫の騎士団連中との戦闘データみせてもらいたいんだけど、所属が違うから無理だし。後は高機動戦闘のシミュレーションも最近こっそりやってたんだ」

一夏の返答に、カナードは素直に感心していた。

我武者羅に訓練だけするのではなく、自分に何ができるのかを必死に考えて、できる範囲は狭くともがいていることに。

程度の差は当然存在しているが、過去の己と重なった気がしたのだ。

「……いいだろう。少しは協力してやる」

「つ、ホントか？」

「ああ」

カナードの返事に一夏は小さくガッツポーズを取る。

「さて、まずお前達は互いに癖や相手の機体についてある程度知っている。その場合重要になってくるのは戦闘経験と純粋な技量だ」

「うん」

彼の言葉と共に、空間投影ディスプレイが展開される。

そこに映るのはIS【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】だ。

『戦闘経験ならばC・Eを含めた場数で真はお前を超えている。それに追従できる奴はこの世界の生徒の中にはいない、これは断言できる』

「そりやそうだろ。真は元軍人だったんだろ？」

『ああ』

元軍人のスーパードールであることに加えて、傭兵としても戦い続けた人間と、一般人の戦闘経験など比較するまでもない。

この世界の生徒と、カナードが説明したのはラッキーナがいるからだろう。

真とは幾度となく刃を交えたらしいとのことを思い出したが、今思考の片隅に放置した。

『そして技量だが、【S. E. E. D】を抜きにした場合でも国家代表クラスと見ていい。

【S. E. E. D】が発動していればそれ以上だろう』

カナードが映し出しているのは今年の夏、現役为国家代表である【更識楯無】との模擬戦の映像であった。

デステイニーガンダム・ヴェステイジが最初に【単一仕様能力】に目覚めた試合であり、その様子は一夏も眺めていた。

戦闘記録でも本体の映像よりも残像が多く割合を占めるほどに圧倒的な機動力、クラレントを筆頭にした高い威力を持ったビーム武装にそれを手足のように操る真の技

量。

改めてみるとやはり脱帽ものである。

自分の記憶と映像を符合させていくとあることを思い出した。

「おい、これ録画禁止って言われてたやつじゃないか」

そう、この試合だが実は試合記録が残っていないのだ。

この試合の発端が楯無の失言が原因であり、しかも彼女は現役の国家代表。蔵人や優菜などのVIPが呼ばれていたが非公式扱いなのだ。

そのため、試合記録は録画禁止を言い渡されており、それは当時アーリーナで観戦していた全員がチェックされたはず。

自分や箒に加え、カナードも含まれていたはずだった。

『足がつかなければいい、俺も東やラキーナ程じゃないが技術はあるつもりだ』  
「いいのかよ……もう半年近く前のことだけどさあ」

うへえと顔を歪ませた一夏に話が逸れたなど手振りでもカナードは催促する。

『更識楯無との模擬戦の時もそうだが、デステイニー最大の特徴はVレユニットだ。それが齎す単一仕様能力や機動力に、真の技量と合わさる事で国家代表でも終始優勢に立ち回れている。現在ではこの当時よりも単一仕様能力をかなり応用できているようになっている』

試合記録が終了するまでの数分、一夏は展開されたデイスプレイを凝視していた。そしてなにやら思案している事を確認した後、カナードは口を開いた。

『さて、真のデステイニーガンダムがお前相手にどんな戦法を取ってくるか、今のお前ならば大体分かるんじゃないのか?』

一夏はうんと頷いた後に口を開く。

「多分だけど、真が俺相手に使ってくるのは……」

「——【徹底したミドルレンジからの射撃戦】、それが俺と織斑一夏が予測していた真の

取る戦術だ」

時間は戻って、第3アリーナの観客席。

カナードが箒達に1週間前に相談された経緯を話し終える。

アリーナの上空では、デステイニーが超高速機動を続けながら、肩部に展開されている「テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔」で白式を攻撃し続けていた。

クラレントをビームライフルモードで放つことによつて回避先を限定させ、的確に命中させている。

試合が開始されて数分、すでに白式のエネルギー残量は6割強。

対するデステイニーの残量は8割強。

デステイニーは被弾をしていないため、武装使用のみで減っている状況だ。どちらが優勢に試合を進めているのかは一目瞭然だ。

「……確かにそのとおりの状況ね」

カナードの言葉に苦虫を噛み潰したような表情で試合を見つめる鈴が頷いた。

「実力差は歴然ね。てか飛鳥真ってあんなに強いのか？」

「多分、【S・E・E・D】を使ってるんだと思う。動きに無駄がないから」

直接真の戦闘を見ることがなかったフレイの言葉に、同じく【S・E・E・D】を持っているラキーナが返す。

「それだけ【本気】ってことね」

フレイの返答に頷くラキーナを見て、悔しそうに顔をゆがめているのは筈であった。

（一夏があれだけ頑張っていたのに、まだあれほどの差があるのか……っ！）

（実力差は大きいね。100回戦って100回負けるよ、アレ）

深層意識の中で赤月も実力差が存在していることを肯定していた。

一夏がこの試合に向けて努力をしていることは知っているし、応援もしていた。

だが実際の試合内容は一夏が押され続けている。

(まあ、簡単に差が埋まれば苦勞もしないよね)

「……一夏は勝てないのか？」

赤月の言葉に対して、箒の口から小さく言葉が零れた。

一夏達を慕うヒロインズも全員が同じことを考えていたため無言で試合を眺め続けている。

だがそれを拾ったものがいた。

「……早合点が過ぎるだろう」

それはカナードであった。

少しため息をついた彼に箒達の視線が集まる。

「カナードさん、本当ですか？」

彼の隣に座っていたセシリアが少し驚いたように尋ねる。



「ああ。【勝てる可能性は限りなく低い】とは言ったが、【勝つ可能性がゼロ】とは言っていない」

「本当かつ!？」

箒がその言葉に食いつき、彼も静かに頷く。

「かなり低い【可能性】自体は存在している。それについてはすでに織斑一夏に伝えてある」

カナードはそう言ってアリーナで続いている試合内容に目を移す。

彼に釣られて、箒達も視線を再びアリーナに戻す。

すると、状況は変化しつつあった。

『なんつとおっ!!』

そんな叫び声を上げつつ、機体のスラスタを制御して上方から迫る超高出力ビームを回避し終えた一夏。

『いい加減、射撃にも慣れてきたぜ、真っ！』

デステイニーも常時、ハイパーセンサーを振り切る超高機動を維持しているわけではない。

ゆえに高速を維持して機動を続けているデステイニーをハイパーセンサーを利用して何とか追いかけることができるのだ。

機体のエネルギーは減少する一方だが、先程よりも少しずつ被弾する回数が少なくてきている。

またデステイニーの射撃武装のバリエーションがあまり多くないこともうまく作用していた。

『……』

その様子を高機動を維持しながら、真は無言で眺めている。もちろん手を止めずに、クラレントからビームを放ち続けてだ。

『それに……攻撃できないってわけじゃ、ないからなっ！』

一夏がそう叫ぶと、白式背部のエネルギーウイングが煌く。

【白式・王理】に進化して追加されたエネルギーウイングからのエネルギーショットだ。

広範囲への攻撃ははまだ錬度不足によって不可能だが、射撃戦ができないわけではないのだ。

放たれた一斉射撃は、デステイニーの残像を捉えたのみだった。

しかし射撃についてはからつきしだった一夏の反撃に、観客席で眺めていた箒達も目を見開いていた。

だがその直後、白式の直前に数条のビームが飛来。

それを回避できずに、直撃して体勢を崩す。

『ぐうっ!?!』

何とかA M B A Cで体勢を整えた後、即座にその場から離脱して追撃から逃れる。

(やつぱり射撃じゃ真を捉えることなんて無理か。いや、分かってたけどっ！)

回避先を限定させるために放たれたクラレントのビームが掠る。

少しだけエネルギーを減らされながらも、何とか回避を続けていく。

しかし、エナジーショットによる反撃以降より一層激しくビームが飛来するようになっていく。

加えてデステイニーも光の翼の輝きが増して、それに比例して機体の速度が上昇し続けていた。

その速度はハイパーセンサーでも捕捉するのが困難なレベルに達していた。

——このままでは先程となんら変わらず、敗北は必至。

『そうは、いくかよおおおっ!!』

浮かんだ最悪の想定を振り切るように、得物である【雪片】を構えて突貫していく。

その速度は全高機動I Sの中でも上位に食い込むものであった。

しかし、それもその速度にも反応できる相手では悪手であった。

即座にデステイニー肩部から展開されている「テレスコピックバレル延伸式ビーム砲塔」が煌き、砲口からビームが放たれる。

『っ!!』

即座に軌道変更を行うことで直撃は回避するが、ハイパーセンサーが高速で接近する物体を検知。

ビームが円を描きながらこちらに向かって飛来してくる——デステイニーがフラッシュエッジIIを展開し、投擲していたのだ。

『っ、うおおっ!!』

フラッシュエッジIIを弾き飛ばすことにはなんとか成功したが、それによって体勢を一瞬崩す。

被弾を負いながらもAMBACで即座に切り戻し、最短距離を突っ切って行く白式だがその突貫は間もなく終わることとなる。

フラッシュエッジIIとビームの間を縫って、何かがデステイニーのマニピュレータ先端部分から放たれたのだ。

白い液体の様なそれは、まっすぐ向かってきていた白式の【雪片】に直撃した。

『っ、これって、【トリモチ】かよっ!!?』

粘着性の物体・液体であり、破損したコロニーの簡易修復等に使われる代物。

トリモチの粘着力によってマニピュレータの展開も正常に行えないようになってしまった。

『っ!!?』

そして、眼前に飛び込んでくる黒い機影。

左マニピュレータから溢れている強烈な赤い光が、白式の装甲を紅に染め上げた。

『しま……っ!!?』

『遅いっ!!』

クラレント・ビームサーベルが白式の右マニピュレータを切り落として、握っていた雪片ごと落下していく。

クラレントが返す刃で白式の胸部から肩部までを切り裂いて、シールドエネルギーは残り2割まで減少し、破壊された白式の装甲の欠片は宙を舞う。

『がっ!?!』

(悪いがこれで終わりだ、一夏っ！)

衝撃で顔をゆがめる一夏に一瞥した後、右腕のクラレントを起動させる。

だがその直後、デステイニーの右マニピュレータを掴み上げられた。

当然その相手は眼前の白式であり、デステイニーが右のクラレントを発振させると同時にスラストーに火を入れて密着してきたのだ。

密着というよりも、体当たり近くにガグンツと響くその衝撃に真の表情が歪んだ。

(っ、何っ?)

困惑は一瞬。

押し返そうとした真の視界に、武装を掲げる白式が映る。

先程切り落とした右マニピュレータに、破壊して落下した装甲の破片が覆うように集まって巨大な「爪」を形成していた。

その武装は雪羅から王理が継承したエネルギー爪【雪羅改】だ。

薄く笑みを浮かべている一夏の表情。

その表情からは、まるで作戦通りだと読み取れた。

『「肉を切らせて骨を断つ」、シンプルだが作戦はこれしかない』

時間は少し戻り、1週間前の作戦会議の場でカナードが一夏に具体的な作戦を伝える。

ドレッドノートから空間投影ディスプレイを投影し、とある戦闘映像を映し出す。

それはデステイニーガンダムとI S【コーディネーター】、【シーゲル・クライン】の戦闘映像であった。

凄まじい速度で上下左右に機動し続けているデステイニーがコーディネーターを追い詰め、最後には捉えきったものだった。



『流石にこの機動力はリミッターを外している状態だが、これに近い機動を捉えるのは至難だ』

戦闘映像が終わるとぽかんと口を開けていた一夏が、ハッと気づいたように口を閉じる。

『この映像を見て、何か思うところはあったか？』

「んー、正直でたらめな機動力過ぎてなあ……てか、この映像の出所どこよ？」

『真を経由して日出工業からだ。ダステイニーと飛燕はVLを搭載しているC・E・関連の機体だからユウナ・ロマ……いや、応武優菜とジェーン・ヌル・ドウズに交渉したら比較的容易くな……それで？』

その答えに顔をゆがめながら、繰り返し流れている戦闘映像を凝視する。

合計で5回ほど繰り返し返した頃、一夏が何かに気づいて口を開いた。

「……こんな状況でもクラレントしか使っていないのか？最後、ぶつ壊れた後は武装を切

り替えてたけど」

『そうだ。正確にはクラレントが最も有効的に使える、が正しいだろうな』

カナードが頷いて、戦闘映像を一旦停止させる。

『デステイニーはVLユニットによって超高速機動が可能なISだ。それに伴い武装も内蔵タイプのもが多いし、超高速機動中に使える武装には限りがある』

確かに超高速機動中に大型の得物など使いにくいだろうと、一夏が頷く。

『そこで真はクラレントをビームサーベルモードで多用する。決め手にもな』  
「っ、なるほど」

コクコクと頷く一夏に苦笑しながらカナードは続ける。

『だから懐に潜り込んで、あえてクラレントを喰らった後に反撃しろ。その一瞬なら  
【S・E・E・D】を発動させた真とは言え一瞬は固まるはずだ。そこに【雪羅改】を打

ち込め。それが唯一の勝機だ。手順はサポートしてやる』  
「っ、分かった、サンキュー!!」

脳裏に浮かんだカナードとの作戦会議の内容を反芻しながら、右マニピュレータから展開した【雪羅改】を振りかぶる。

掴んだデステイニーの右マニピュレータは、離さずゼロ距離で密着している。ここまでがカナードと共に考えた、一夏が勝利を得るための作戦。

『この瞬間を、待っていたんだーっ!!』

完全に捉えたタイミング。

後僅かで勝利を手に入れることができる。

この時点の一夏は少なからず舞い上がっていた。

それも仕方ないだろう。目標にしている人間相手に善戦し、勝利を目の前にしているのだから。

だがまだ戦いは終わってはいない状況では、油断となる。

その油断は掌に転がりかけていた勝利を遠ざける結果になった。

次の瞬間、雪羅改とデステイニーを押しえ込んでいたマニピュレータが飛来した、【光の刃】で破断されたのだ。

『……えっ?』

思わず一夏の口から困惑の言葉が洩れた。

両マニピュレータを破壊した光の刃、それは先程弾き飛ばした【フラッシュエッジII】それが自動追跡装置によって本体であるデステイニーに帰還してきたのだ。

(っ、ブーメラんっ?まさかつ、そんなっ、読まれてっ!?)

ようやく状況に理解が追いついた一夏だったが、すでに遅かった。動きを止めた白式に報いの赤き光が放たれたのだ。

『……』

ほぼ無防備で直撃を受けた白式は、そのまま地面へと叩き落された。撃墜されると同時に白式のエネルギーギアは、クラレントの直撃と落下の衝撃でエネルギー残量が「Empty」と表示されていた。

(……最後、蹴りを叩き込んでこなかったのは、ブーメランが戻ってくるのを把握してたから……か)

不思議と冷静な思考で、自分の身に起きたことを把握できていた。

『……ああ、負けたのか、俺』

全身に奔る衝撃の痛みを感じながら、撃墜された一夏は呟く。すると視界が急に歪んできた。

身体の奥から熱い何かがこみ上げてきて、抑えることができなかった。

『クッソオ……っ!!』

目から熱い雫が零れていき、視界に映りこむ赤い光。歪んだ視界でも、赤い光の翼ははつきりと認識できた。撃墜した白式の目の前にデステイニーが着地する。

『……』

『……』

それから数分、互いに言葉を交わすことはなかった。その間、真は何も言わずに一夏からの言葉を待っていた。

『……真っ』

一夏がようやく口を開く。

『何だよ』

『……やっぱり、真は強いな……勝てなかった』

声が震えているのは気のせいではないだろう。

彼の言葉と同時に白式の展開が解除され、一夏は地面に寝転がっている体勢になる。

「……まあ、まだ負けてやれないさ。ほら、立てよ」

真もデステイニーの展開を解除して、寝転がっている一夏に手を伸ばす。

ゴシゴシと目元を拭った一夏が、その手をとって立ち上がる。

目元が赤くなっていたが、どこか爽やかな笑顔で一夏が微笑んでいる。

「……次は、負けねーからなっ。整備科で怠けてたら追い抜いてやるからなっ」

「しばらく負けてやれないって言っただろ」

真もそう返して苦笑気味に微笑んだ。

## LAST PHASE それからの日々

真と一夏の決闘から時間は過ぎて——

2023年 4月中旬 IS学園 第3アリーナ整備室

IS学園は新学期を向かえて、半月程が経過しようとしていた。

新たに入学した1年生達も寮生活や学生生活の変化にほぼ全員が馴れ始めており、部活動や放課後のアリーナを使用した訓練にも注力できるようになる頃合いだ。

そんな中、1年生用のリボンを身につけた2人の女子生徒が、第3アリーナの整備室に置かれているIS用機材の前で身を屈めていた。

その様子はまるで何かから隠れているようにも見える。

彼女達の視線の先には、IS用のメンテナンスベッドに鎮座している訓練機用の「打鉄」と、その周りで機体をメンテナンスしている整備服の女生徒。

打鉄の股下で作業している人影が見え、彼女達の視線はそこに集まっていた。

「トコ」



打鉄の股下から機械油で頬を黒く汚した、2人目の男性搭乗者である【飛鳥真】が現れた。

数ヶ月前よりも全体的に髪の毛が伸びており、伸びた後ろ髪をゴムバンドで縛り上げていた。

メンテナンスベッドの上で仰向けに寝転がる形で作業を続けていたためか、彼が身に着けている作業服が所々汚れていた。

「本音。こんな感じでしょうか？」

メンテナンスベッドから降りた真は、少々身体を伸ばしてから作業を続けている本音に尋ねる。

機体の周りで整備を担当していたのは本音であり、彼女も整備服に身を包んでいる。

少し離れた場所にこの機体に直前まで乗っていたISスーツを身に着けた赤髪の少女が眺めていた。

「うん、私もいいと思う。ただね……」

彼女の視線が動く先には空間投影ディスプレイが展開されており、そこに映るのは数十分前の打鉄の稼働映像であった。

内容はアリーナの上空を飛行しているものであり、飛行自体は問題なく行っていた。

しかしAMBAACを用いた機体反転を行う際に、搭乗者の女子生徒の顔が歪む。

AMBAACの途中で突如機体がバランスを失ったかのように制御不能になったのだ。

スラスターも操作を誤ったのか切らしてしまい、まるで空中で溺れたようになった後に別の打鉄によって助けられたところで映像は終わる。

「マニピュレーターとバーニアの反応がやっぱり過敏かもしれないから、何かあったら教えてほしいな」

打鉄の少女が機体の操作を誤った原因は、彼女の「反応速度」が他の生徒達よりも高い点にあった。

専用機とは異なり平均的なセッティングを施してある学園の訓練機であるため、AMBAACに入る際にバランスを崩したのだ。

これが代表候補生達ならば、スラスターや姿勢制御バーニアを駆使して体勢を立て直すことも容易であったが、

あくまで一般生徒である彼女にそこまで求めるのは酷だろう。

「そうか？これでもだいたい制限かけてる設定なんだけどな」

「整備士が自分基準で考えちゃダメ。あすあすの反応速度は特に異常なレベルなんだから」

ぶーつと頭の上で手を交差して×印にした本音。

真は肩をすくめてはいはいと返しながら、この機体の搭乗者である少女に視線を移す。

「とりあえず君の機体だから感想を聞きたいんだ。アリーナに出てくれないか？」

「はっ、はいっ！」

真の言葉に少し緊張したかのような声色で返事をした少女は、自身の機体である打鉄に歩み寄った。

10分後――

打鉄への搭乗が完了した少女は、アリーナへと場所を移した。

打鉄はゆっくりとアリーナの上空へと上昇していき、その速度を上げていく。

そして先程の映像と同じまでに加速した打鉄は、AMBACを用いた機体反転へと移る。

その所作は先程の映像と比べると段違いに滑らかであり、同年代の生徒達に比べると雲泥の差に見える。

少女も自分の機体操作に驚愕の表情を浮かべていたが、次第に満足のいく飛行を行っている充実感からかその表情は笑顔に変わっていった。

「おお、機体反転のキレがさっきとは大違いだ」

「うん、あれならもう大丈夫だね」

アリーナの映像を整備室のモニターで見ている真は本音の返事にはっと一息ついて胸をなでおろす。

整備科でISについて本格的に学び始めてまだ少ししか経っていない。

そのため自分が行った作業にまだ自信が持てていなかったのだ。

そんな時、横にいる本音が真に向けて右手を上げていた。

彼女の所作が何を意味しているのか、それは――

「あすあす、ハイタッチ」

「あつ、ああ」

おずおずと彼女につられて右手を上げると、ペチンと軽い音を立ててハイタッチする。

「もつと喜んで、そして胸を張らないと。あすあすのお陰で悩み解決したんだから」  
「本音もいたからだろうけど……そうだな、ありがとう」

本音の言葉に笑顔を浮かべた真の姿を、少し離れた場所で見つめる影が2つ。  
機材の影から見つめる少女の1人、黒髪に眼鏡を開けた1年生【羽間真奈美】がその様子を見てにやけていた。

「いいなあ、飛鳥先輩。いつもの強面な表情もいいけど、笑ってる顔が可愛い……つ  
！」

「真奈美、顔ものすごくくだらないよ？」

友人である栗色の髪をショートカットにした少女【高宮杏奈】の指摘に、真奈美はずびつと垂れていた涎を拭う。

「つ、杏奈もわかるでしょっ?!この前貸した飛鳥先輩の特集載ってる雑誌、返してくれないの忘れてないからね!」

「……アンタが私の部屋に取りに来ないだけでしようが。この前返そうと思ったら飛鳥先輩追っかけてどっかいっちゃうし」

「そっ、それは……飛鳥先輩が放課後見当たらなかったりしてたからでえ……」

両手の指をツンツンとしてふてくされ始めた真奈美に、杏奈はため息をこぼす。

「まっ、まあ、ようやくこの時間帯はどこにいるか分かったからっ!これからアタックを仕掛けますよお!」

拳を握り締めてぶんぶんと振り回す真奈美。

追加で1つため息をこぼした杏奈は、残酷な現実を突きつけることにした。

「ま、アンタや私の恋は戦う前から終わってたんだけどねえ」

「……………え？」

素つ頓狂な声を上げた真奈美に、杏奈は驚愕と呆れが混ざり合った表情を浮かべた。  
驚愕3割、呆れ7割の配合率だ。

「何で終わってるの？」

昨年発見された3名の男性搭乗者。

その内の2名にはすでに交際をしている人間がいるのはIS学園内でも有名な話だった。

杏奈には1つ上の姉がいる。

その姉に真偽を確かめたところ、その話は真実であるとの事だ。

「飛鳥先輩は、更識先輩と付き合ってるってお姉ちゃんが言ってたから。お姉ちゃんの友達も本当だって」

「なん……だど……っ!?」

「はいはい」

ノリがよすぎる友人は、自分が与えた情報によるショックで膝をついてた。

ポンポンと慰めるように頭をなでる。

「うわーんっ、戦う前から負けてるとか悲しすぎるー!」

(……ずっとこっちを見てたのは彼女達か……新入生? 何か用でもあるのか?)

真奈美と杏奈が隠れている機材を一瞥しつつ、流れていた汗をタオルで拭った真は、後ろ髪を縛っているゴムバンドを外す。

押さえつけられていた反動か髪の毛は一気に元に戻っていき、頭を振って髪の毛の流れを整える。

そんな様子を本音が眺めていた。

「髪の毛伸びたねー。そろそろ邪魔になるんじゃない?」

「ん、確かにな。別に伸ばしてたのは理由があるわけじゃないんだけど……いい加減



うっとおしいし、切るかな」

全体的に数ヶ月前に比べて髪を伸ばしていた真は、前髪の一部を摘み上げる。割とストレートな髪質であるためか、目を隠すには十分なほどに伸びていた。

「それがいいよお、間違えなくて済むから」

「……本音もそれを言うのか」

真のジト目の抗議に、クスクスと目元に笑みを浮かべた本音が言う。

「だってかんちゃんに連れられて、喫茶竜宮に行ったときホント驚いたもん」

「そこまで似てるかね、俺と一騎」

「髪の毛伸ばしたあすあすとかずつきー、そっくりだもん。パツと見ただけだと、見間違えるよ?」

真と彼の1つ下の後輩である一騎は兄弟であるかの様に似ているのだ。

真からしてみれば大げさと言わざるを得ない。

それに後輩である一騎も最近は雰囲気が変わってきており、母方の遺伝か髪型などで判別がつくと思っっているのだが。

「よし、今度髪の毛切るか」

本音にじろじろ見られていたので、真は再びゴムバンドで後ろ髪を縛る。

そのすぐ後に彼女は何かに気づいたような表情を浮かべた後、笑顔を浮かべて。

「もしかしてあすあす、かんちゃんに髪切つて貰ったりするの?」

「え?」

本音の言葉に、真は素つ頓狂な声をもらして、首を横に振る。

「散髪は普通に床屋でやつてもらってるけど」

「そっか。ごめんね、変なこと聞いちゃって」

謝りながら工具を片付けに向かう、本音にんつと軽く手を上げて返した真は彼女から

言われたことについて考える。

(……いいな、髪きつてもらうのって)

長くなった前髪をつまみあげながらそんなことを考える真。

髪を弄りながらそんなことを考えていると――

「真ーっ！助けてくれえーっ!!」

という見知った叫び声が木霊し、ドタバタとISスーツ姿の一夏が整備室に飛び込んできた。

整備室に飛び込んできた一夏はそのまま、機材の影に隠れる。

その様子に、真ははあっとため息をついた。

何かと、片付けを行っていた本音もその様子に目を見開いていた。

「またか？」

「またってなんだよー！」

「ホントに自覚ないんだな、お前はあつ！」

機材の陰に隠れた一夏の叫びに、真も叫んでツッコむ。

「……それで、今回は何をしたんだよ？」

落ち着くために深呼吸した後、真が一夏に尋ねる。

おそらくはいつもの女性関係の問題だろうと直感で分かつてはいるのだが。

きよろきよろとあたりを見回した一夏が、説明する為に機材の影から出てくる。

その瞬間だった。

一夏の身体に何かが巻きついて、彼を一瞬で簧巻きにしてしまったのだ。

「げっ!？」

「……レーゲンのワイヤー・ブレード、ラウラか？」

そう、一夏を一瞬で簧巻きにして【拘束】したのは【シユヴァルツェア・レーゲン】の【ワイヤー・ブレード】だった。

当然それを操作しているのはラウラであった。

整備室の入口で仁王立ちし、ISを部分展開しているラウラは薄く笑みを浮かべていた。

『その通りだ、真。そして見つけたぞ、一夏』

「ちよつ、ラウラつ、待つてつ、落ち着いてくれつ、絶対何か勘違いしてるぞっ!」  
『勘違いなものか……皆、見つけたぞ、やはり整備室だった』

ラウラがそう言つて、空間投影ディスプレイを展開する。

すると通信を行っている、箒、鈴、シャルロットの顔が映りこむ。

『やはりか整備室だったかっ!』

『ナイスよ、ラウラっ!』

『まあ、一夏が約束反故にしたのが悪いしね』

通信から聞こえたヒロインズの声色には、怒りのほかに異様な冷たさを感じる。

「たっ、助けてくれえっ、真っ!」

簀巻きにした一夏がズリズリと引きづられながら、真に助けを求める。すでにラウラの元まで後数mといった距離だ。

(……こりや無理だな)

真はその様子を見て救出を諦め、そっと合掌する。

その所作はとも滑らかかつ、無駄な動きが一切なかった。

「……南無」

「合掌しないでーっ!」

友人の叫び声は、閉まる整備室の扉の向こうに消えていった。

「相変わらずだね、おりむー」

「だな。助けてあげたかったけど、流石にあの状況じゃ無理だよ」

合掌をやめて肩をすくめた真は、整備室の時計に視線を移す。時間はすでに夕刻、この後真には「予定」があるのだ。

「よし、俺はそろそろ帰るよ」

「うん。【今日】だもんね」

本音の言う【今日】、それは次回のモンド・グロッソの代表選手選考会の日が本日なのだ。

本来ならば昨年行われるはずだったモンド・グロッソは、一夏・真・カナード【3人】の男性搭乗者の登場による世界的影響を鑑みて、延期されていた。

そのモンド・グロッソの日本代表選手候補に簪は選ばれており、本日は1日中不在だったのだ。

IS学園在籍生徒の中で国家代表の内定を得ているのは、すでにロシア国家代表である楯無と、数日前に英国代表の座を射止めたセシリアの2人。

簪が日本代表になれば3人となり、所属企業である日出工業も大々的に公表する予定であった。

余談だが公式で発表されている男性搭乗者は3人である。

4人目のアスランの存在は秘匿され、発表はされてはいなかった。

これは歌姫の騎士団の一員だったことに起因しており、千冬や真達も納得していた。

「かんちゃんなら、絶対に大丈夫！」

「ああ。大丈夫だって信じてるさ」

真はそう言って頷いて答え、作業服から着替える為にロッカーに向かった。

それから30分後

学生寮 真の部屋

「……」

真は自室のソファに腰掛けて、手に持っている携帯を眺めていた。

選考会は時刻的に終了しており、簪からの連絡を待っているのだ。

じつと携帯の画面を眺めていると、軽い電子音の後にSNSの画面が開かれる。



「っー！」

即座に確認すると、予想していた通り簪からの連絡だった。

画面には、「帰ったら真の部屋に行く」と表示されていた。

SNSを使って結果を彼女に結果を聞いてもいい。

だが、これほど大事なことは彼女の口から直接聞きたい。

だから真も「分かった。待ってる」と返信して画面を閉じる。

「…………ふう」

携帯の画面から目を外した真は、深く息をついてソファにもたれ掛る。

簪が帰ってくるまで後2時間はかかる。

その間、彼女の結果の件がずっと頭に引っかかることとなる。

「…………コーヒーでも買ってくるか」

ただ待つよりは飲み物が合ったほうが落ち着くだろうと判断し、寮内の自販機へ向かうことにした。

数分たつて、自販機の前にとどり着いた真はそこに見知った顔がいるのに気づいた。教員としてスーツではなく、黒を基調とした私服姿のカナードと、ゴシックな服を纏ったクロエだった。

カナードは珍しくミネラルウォーターを購入して激しく呷っており、顔色もどういかわけか青く見えた。

「よ、カナードにクロエ」

「……真か」

「真様、こんばんわ」

一気に半分まで減ったミネラルウォーターの口を閉じてカナードが言う。  
クロエも真に軽く会釈していた。

「……なんか顔色悪いぞ、どうした？」

「……別に、なんでもな……っ!?」

ぐつと胸元を押しえたカナードが顔を伏せる。

まるでこみ上げてくる何かを必死に押さえ込んでいるかのようだ。

「おつ、おいつ、大丈夫か?」

「っ……問題ない……っ!」

脂汗を滲ませながらも、必死で何かに耐えているカナード。

明らかに普通ではない。

事情を知っているであろうクロエに視線を移すと、どういふわけか彼女は申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「何かあったのか?」

「えっ、あの……その……はい……」

なんでも本日分の授業を終えたカナードは、クロエと共にショッピングモールに繰り

出していたらしい。

シヨップینگモールに新しく出店した「お好み焼き屋」に彼女が興味を持ったため、夕食をかねて入店したところまではよかった。

しかしここからが問題だった。

カナードは日系人であり「知識」としてはお好み焼きという料理を知っている。

しかし当然実物を作ったことはない。

興味を持ったクロエも、料理のスキルも上達していたのだがお好み焼きは難易度が高かった。

必然、注文したお好み焼きは見るも無残な形状で食べることになった。

味自体には問題がなかったのだが、クロエは小食でありお好み焼きの量は多かった。だから彼女が食べ残した分もカナードが全て平らげることになった。

元々カナードもあまり食べるほうではない。

そのため、食べ過ぎによってうずくまるほどの気分の悪さに襲われているのだ。

「……………というわけです」

(……………惚気かよ)

クロエの説明を聞いた真は、心配して損したと肩をすくめる。

「カナード様、束様に胃薬を用意してもらったほうが……」

「やめろ……っ！アイツがまともな薬など用意するはずがないだろ……っ！」

彼を心配するクロエに表情でカナードは訴えかける。

クロエの肩をガシッと掴んでまで、訴えかけるその様子に彼女も頷くしかなかった。

「ラキーナでも呼んでくればいいだろ」

「……アイツはっ、フレイ・シユヴァリーの機体整備のために引きこもっていて使えないんだっ」

ジト目の真はうずくまっているカナードをよけてから、自販機に硬貨を入れる。

電子音と共に購入したコーヒーが取り出し口に落下して拾い上げる。

「もうさ……ブレイク号で横になってればいいんじゃないか？」

「……そうさせてもらおう」

仕事でもしようとしていたのか、カナードは苦笑して立ち上がる。

立ち上がる際にグラリとふらついていたが、そこはクロエが支えている。

そんな二人を尻目に、真は手に持った冷たいコーヒーをポケットに入れて真は立ち去る。

それから時間が過ぎて、カナードとクロエの2人と別れた真は自室に戻ってきていた。

なんだかんだ時間をつぶすことができたため、そろそろ簪が戻ってきてもおかしくはない時間帯だった。

「……」

買ったコーヒーはあまり好みの味ではない。

だが、気分を落ち着けるために口をつける。

雑な苦味に顔をゆがめた、そんな時だった。

コンコンと、自室の扉をノックする音が聞こえたのだ。

すぐさま立ち上がった真は、扉を開けに向かう。

扉を開くと、そこにはIS学園の制服姿の簪が立っていた。

彼女の眼の周りが少しだけ赤くなっている。

その理由は1つしかない。

「おかえり」

「うん」

「結果はどうだった？」

「中で話すから」

簪がそういったため、真は頷いて彼女を部屋に迎え入れた。

手に持っていたバッグをソファに置いた後、簪は真に向かいなおす。

彼女の瞳には涙が溢れていた。

しかし、その涙は悲しみからくるものではなかった。

「日本代表に、なれたのっ」

涙声を必死に抑えながらも、彼女は真にそう告げる。

「おめでとう」

それが真の心からの気持ちだった。

その言葉と表情に我慢できなくなったのか決壊したかのように、涙が零れだした。

「ごっつ、ごめんなさい。さっきまでずっと泣いてたのに、まだ涙が止まらなくて……っ」  
「気にしないって。それに嬉し涙ならいいじゃないか」

真はそういつてから、簪を抱きしめる。

「本当におめでとう、簪」

彼女は真の腕の中でうんうんとうなずいていた。

それから数分間、彼女が落ち着くまで待っていた。

さすがに抱きしめ続けているのは小恥ずかしくなったため、彼女から離れて落ち着か



せていたが。

「落ち着いたか？」

「うん」

彼女の顔はまだ赤いが、だいぶ落ち着いたらしく声もいつもどおりのものだった。

それを確認した真は、自分の机の引き出しを開ける。

彼が引き出しから取り出したのは、水色の水玉模様の包装紙に包まれた箱であった。

「真、それって……？」

「実はさ、前から準備してたんだ」

照れて頭を軽くかきながら、真は簪に箱を差し出す。

「日本代表記念のプレゼント、受け取ってくれないか？」

「っ……うんっ」

驚愕の後に笑みを浮かべた彼女は、差し出された箱を受け取る。

「開けていい？」

もちろん、と真が頷いたことを確認した彼女は丁寧に包装紙を剥がしていく。

包装紙を剥いた後に出てきた箱を開けると、その中には細長いモノが入っていた。

「これって……【簪】？」

そう、箱の中には【簪】が入っていた。

形状としては一本軸の簪であり、薄桃色で作られた桜の花を模した飾りが四つ組み合わさっている。

「実はさ、それ手作りなんだ」

「手作りなの？」

真が照れて視線を外しながらうなづく。

「プレゼントで何がいいかなって思って色々考えたんだ。食事とか旅行とかさ。でもやっぱり形に残るものにしたくて、そんな時に思いついたのが髪飾りの【簪】だったんだ。これなら形に残るし、ぴったりじゃないかなって。それで【簪】を手作りできるサイトとかあつてさ、そこで注文して自分で作ったんだ」

説明していくうちにだんだん早口になっていく真は、一息入れて続ける。

「もつといいプレゼントとか思いつけばよかったんだけど……」

「ううん、凄く嬉しい。つけてもいい？あ、でも付け方があんまり……それに私の髪型でも大丈夫なの？」

「っ、ああっ、大丈夫！簪の髪型でも付けられるように付け方は勉強してるから、教えるよ」

彼の指示のもとヘッドギアを外して机に置き、ソファに座ってもらう。

髪の一部をとって左耳に向けて纏め上げるように編みこんでから、ピンで止める。

最後にその土台へ簪を挿入して完成だ。

「どう……かな？」

髪をまとめあげているためか、いつも髪に隠れている左耳が露になり新鮮な印象を与えていた。

薄桃色の髪飾りも、水色の髪の毛と反発することなく自然な印象を与えていた。

「綺麗だ、凄く……似合ってる」

他にそう表現することができない。

だからただ心を感じた言葉で真は感想を口にする。

「嬉しい……本当にありがとう、真」

「喜んでもらえて、よかったよ」

簪が本当に嬉しそうに頷いてくれたことが、真には本当に嬉しかった。

そんな彼女がぎゅっと真に体を預けてきた。

髪飾りをつける際に彼もソファに座り込んでおり、彼女が真に体を預けるのは容易だった。

「真……大好き」

「……俺もだ」

愛する人からの言葉に、そう返した真は彼女の右肩に手を回して抱き寄せた。

暗闇の中で、目が覚める。

見知った天井に実家から持ってきた書籍を収めた棚や、変身ベルトを納めた棚が目に入る。

そして真はベッドの中で、寝ぼけた意識を覚醒させていく。

（……夢か）

ずいぶんと久しい夢を見た、理解した真は薄く笑みを浮かべた。

すでにIS学園を卒業して3年が経っているのに、在学中の、しかも全ての因縁が切れたすぐ後の夢を見たのだ、それも仕方ないだろう。

部屋の時計を見ると、時刻は午前4時。

日課のトレーニングには少し早い。

(まだもうちよつといいか……それに起こすわけにはいかないしなあ)

捲っていた掛け布団を元に戻す。

同衾している女性、簪を起こさないようにゆっくりと。

薄いピンクの寝巻きを着た彼女は、静かに寝息を立てていた。

(……今日のトレーニングはいいかな)

本日の講義の日程を思い出して、真は二度寝を決め込むことにした。

それから数時間。

朝のニュースが居間に流れるなか、目の前にテーブルにおかれたお椀を持ち上げて味

噌汁を飲む。

味噌汁のほかにも、ごはん、焼き魚に漬物、まさに日本の朝食といった献立だ。

「朝は味噌汁だな」

「うん、おいしい」

テーブルを挟んで反対側の簪もそれに頷く。

「今日の講義、昼からだよね」

「ああ。その後は特に講義もないから日出支社に行こうと思うんだけど、どうかな？」

「うん、私もそう考えてた」

現在の真と簪は、IS学園を卒業して同じ大学に通っていた。

真は主に工学面を専攻して技術者としての知識と技術を高めていた。

簪はスポーツ工学を専攻しつつ、国家代表選手としての活動を続けていた。

真は大学生として学びながらも、日出工業で続いているコロニー計画に第一人者として参画していた。

コロニー「ヘリオポリス」の建造度合いはまだ基礎工事が終わった段階だが、彼が駆る【デステイニーガンダム・ヴェステイージ】が建造途中のコロニーを縦横無尽に翔けるという映像は、コロニー計画のPVとして現在の日本で見たことのない人間がいないレベルで有名なものになっていた。

また大学入学と共に、大学近くのマンションを借りて同棲生活も始めていた。

互いに日出所属の身であり、簪は国家代表選手だ。金銭的な面は特に問題がなかった。

楯無が実家から出て行くことになった簪を無理やり引きとめようとして、怒られたのはもはや懐かしい笑い話となっていた。

「なら一緒に行こう。ジエーンさんが【プチモビ】を改造させるとか無茶いいそうだし、止めない」と

【プチモビ】……【EOS<sup>イオス</sup>】の亜種みたいな機械を作ってるんだっけ？」

「ああ。それに近いかな。ただ操縦方法は【MS】のそれだけど。お陰で宇宙でもIS使わなくても活動できるけど、あの人マジでそのうち本物のMS作りそうだよ」

大げさにため息をついた真に簪は苦笑する。



視線を戻した真が、何かに気づいたように口元を緩めた。

それが気になった簪は、彼の視線の先にあるモノを見つめる。

彼の視線は、ソファの上に置かれていた簪のバッグに向けられているようだった。

「どうかしたの？」

「いや、今日見た懐かしい夢を思い出したんだ」

「夢？」

「ああ。髪飾りをプレゼントしたときの夢だった」

簪のバッグの中から覗いていた薄桃色の髪飾りを軽く指差す。

彼女が日本代表になったときにプレゼントしたお手製の【簪】

大事に使用してくれているので、数年たった今でも十分現役であり、公式インタビュー等の際にも身に付けてくれていた。

流星にI Sの試合を行う時は外しているが。

「ヴァルキリーさんがあれつけてインタビューしてくれるとき、滅茶苦茶嬉しかったよ」

簪が学生時代に初出場したモンド・グロッソでは、射撃・機動部門で優勝しヴァルキリーの称号を得ていた。

惜しくもブリュンヒルデは逃したが、次の機会での優勝を目指して鍛錬に励んでいた。

「っ、もうっ」

顔を赤くした簪がぶいっとそっぽを向く。

その仕草に真はぶっと吹き出してしまった。

「っ、真のぼかつ」

「ごめん、ごめんって」

手を合わせて平謝りを続ける真と、そっぽを向いた簪という風景は食事が終わるまで続いたのだった。

同日 夕方

夕焼けの紅が染め上げる海岸線の道を、軽快なエンジン音を響かせながら1台のスーパースポーツタイプのバイクが駆けていた。

後部座席には女性が乗っており、ライダーの男性の腰に手を回している。

ライダーの男性が海のほうに首を動かした後、ブレーキをゆつくりとかけてバイクが停止した。

それに後部座席の女性は首をかしげる。

「どうしたの?」

後部座席に座っていた簪はフルフェイスヘルメットのバイザーを上げてライダーである男性、真に尋ねる。

真もフルフェイスヘルメットのバイザーを上げて彼女の質問に答える。

「いや、夕焼けが凄く綺麗だなんて」

真の言葉に、簪も海のほうに視線を動かす。

夕焼けの紅が海の群青の中に沈んでいく。

その間海は紅と群青の二色で輝いている。

空も茜色に染まっており、時間が許す限り見ていたくなるような光景だった。

「……綺麗」

思わず簪もそう呟いてしまった。

「少し、見て行かないか？ 今日やることは全部終わってるし、リラックスにはいいんじゃないかな」

彼の言うとおり、すでに今日の講義は終わり日出支社での用事も済まして帰宅している途中だった。

真の予想通りジェーンが暴走しかけており、それを利香と真と3人で止めることになって少しリラックスしたい気分でもある。

「うん、いいよ」

真にそう返答した簪がバイクから降りた後、ヘルメットを外す。

バイクを邪魔にならないように停めた真と共に、海岸に下りていく坂道を見つけて下っていく。

砂浜に靴跡を残しながら、二人は波打ち際を歩く。

紅の光が海水に濡れた砂に反射して煌き、穏やかな波の音が耳に届く。

少し歩いたところで立ち止まって、しばし波の音に耳を傾けていた。

「こうしてゆっくりするのも久しぶりだよな。なんだかんだ忙しいし」

「うん。でも忙しいけど、充実してるって思う」

「そうだな。少しだけジェーンさんが自重してくれればホント助かるんだけどな。マジでそのうちやらかして、カナード達が敵に回りそうで怖いよ」

げんなりした表情を浮かべる真に、思わず簪は苦笑してしまう。

それから適当な雑談を交わしていると、辺りが少し暗くなったことに気づいた。

すでに太陽は沈みきっており、空は赤色の名残が群青に塗りつぶされそうになってい

た。

「つと、結構話しちゃったな。そろそろ帰ろうか」

真の言葉に簪が頷く。

それを確認した真は、バイクを止めた坂の上まで戻るために踵を返す。

すると、すでに日も落ちきった砂浜の向こうから人影がこちらに歩いてくるのが見えた。

最初は特に気にも留めていなかった。

静かな海岸線だが、自分達の様な者もいるだろうと。

だが、近づいてくるにつれ目を離すことができなくなってしまった。

何故なら、2人にとって見知った人物だったからだ。

金を紡ぎ出した様な美しい金髪に、非常に整った顔の美青年。

身に着けている服は、この世界でも一部の人間しか知らない【ザフトの赤服】。

実体が存在しない幻のようなモノなのか、彼の姿は背後の砂浜が見えるくらいにうつ

すらと透けていた。

その青年が真達の目の前まで歩みを止め、微笑んでから口を開く。

『シン、久しぶりだな』

「レイ……っ!?!」

「レイお兄様……っ!?!」

そう二人の前に現れたのは、真の親友、「レイ・ザ・バレル」だった。

レイは2人の反応にククつと笑いをこぼした。

『お兄様か、その呼び方にはなれないな。こそばゆさを感じるよ』

「……お前なあ、ついに夢じゃなくていきなり現れるようになったのかよ」

『気にするな、俺は気にしない』

久々のおきまりのやり取りにため息をついた真は、ジト目でレイを睨む。

『いやなに、俺の役目も終わったからな。最後くらい張り切ってみるものさ』

「……最後つて、どういふことだよ」

彼の言葉に、すぐさま表情を真剣なものに切り替えた真が尋ねる。

『言葉のままだ、シン。こうしてお前達の前に姿を見せるのが、最後だつてことだ』  
「それは……どうしてなんですか？」

レイの言葉に、簪が疑問を呈する。

『C. E. から続く全ての因縁が切れて、共に人生を歩んでくれる人間が側にいる。それを確認できれば死人の役目は終わりなんだ、簪』

この世界に彼を送った者として、レイは真を見守り続けていた。

一見平和な世界でも、過去から続く因縁によって混乱が起ってしまった。

真の性格上、絶対に自ら戦いに身を投じて傷つくことになる。

できることならば戦ってほしくなかった。

そんなことのために彼を送ったのではないのだから。



だがそんな混乱の中でも真は戦い抜き、最後にはかつて得られなかった者を、愛する人を得た。

そして全ての因縁が断ち切れた今、彼が歩むのは彼自身の物語。死人の役目は終わったのだ。

2人を交互に優しいまなざしで見たレイが語りかける。

『シン、聞かせてくれ……お前は今、幸せか?』

レイの言葉に真は、自分の真横にいる大切な女性に視線を移した後、再びレイの顔を見据える。

「俺は今、幸せだよ」

『簪、君はどうだ?』

「私も、今幸せです」

『そうか……聞けて、よかった』

2人の返事を聞いたレイの微笑む姿が、その言葉と共に薄れていく。

以前に何度か彼が夢に現れたときはもつと長い時間話ができたはず。だが今回は姿が薄れるのがとても早い。

そのことから本当に最後なんだなと、真は思い至った。

「……レイ」

『シン、約束しろ。俺の妹を泣かせるなよ』

「当たり前だろ、てか兄貴面すんなっての」

『言うじゃないか。泣かせたら化けて出るぞ』

「お前なあ。もう少し、しみつたれた別れ方してもいいんじゃないか？」

苦笑しながらそう言う真の瞳から、堪えきれずに一筋涙が零れる。

「さようなら、レイお兄様」

隣の簪も、涙声でそう告げる。

『精一杯生きろよ、二人とも』

レイもその言葉で堪え切れなかったのか、瞳から涙が零れる。彼の瞳から涙がこぼれ落ちた瞬間、彼の姿が夜空に掠れて消え、最後に少しだけ優しい風が頬を撫でた。

「……当たり前だろ」

真は涙を拭って、夜空に笑みを向ける。  
簪もハンカチで涙を拭った後に、真の手を取る。

「これからも一緒に、歩いていこう？」

「ああ、もちろんだ」

彼女の言葉に頷いて、優しく手を握る。

簪もきゅつと握り返してくれた。

夜空に浮かぶ月と星が照らす砂浜を、真と簪は歩いていく。

砂の上に残る足跡は、これまで歩んできた道。

これからもきつと立場等で大変なことはあるだろう。

だが2人でなら、大丈夫。

きつとその足跡は消えずにどこまでも続いていくのだと、信じているから。

互いの手を握り歩いていく二人の瞳には——愛が溢れていた。

I S — D e s t i n y — 運命の翼を持つ少年

E N D